

守りたいもの

行方不明者X

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、とある少女がテンプレ通り転生した。

転生した先で少女は、未来を掴むために奔走する。

—— 『愛してるよ、Frisk』

—— これは、居たかもしれない、誰かのお話。

初めてお目にかかります、行方不明者Xという者です。

ふっと思ひ浮かんだ小説のため、粗悪な部分があると思われまふ。

誤字脱字などがございましたらご報告よろしくお願ひします

※10／15追記 現在、書き溜め中の為更新を一時停止してあります。書き上がり次第投稿させていただきますので、気長にお待ちいただけると幸いです

※10／20追記 書き溜めが終了いたしましたので、予約投稿をして参りました。
10／21 00:00に公開します

※10／23追記 皆様からいただいたイラストを紹介している話には後ろに「*」
↑このマークを付けさせていただきました

※2019／5／15追記 本編完結いたしました。アンケートを行っておりますので、ご参加いただけると幸いです

※2019／7／26追記 Genocideルート始動しました。こちらからど

う
ぞ

h
t
t
p
s
:
/
s
y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
n
o
v
e
l
/
1
9
6
1
5
3
/

目次

前日譚

Prologue	2
1. 産まれてきた妹	6
2. ぼくのお姉ちゃん	11
3. 観察結果と考察	17
4. 俺の友人	21
5. 物語の始まり	25
Neutral route	
1. 幕開け	32
2. 邂逅	37
3. Ruins探索①	42
4. Ruins探索②	48

5. ダミー戦	52
6. Ruins探索③	55
7. Ruins探索④	58
8. Ruins探索⑤	62
9. Ruins探索⑥	70
10. ナップスタブルック戦	77
11. Ruins探索⑦	86
12. 顔の良く似た	93
13. 考察と狂愛	100
14. 会話と過去	107
15. トリエル戦前	115
16. トリエル戦	122
17. Ruins脱出	134

371	4 6.	Waterfall 探索①	360
	4 5.	妹への愛と気付かれていた恐れ	355
		r)	
		Darker yet Darker	
	4 4.	より暗く、暗い場所で(Darker)	
	4 3.	デートと扉	350
	4 2.	Snowdin 通過	341
	4 1.	デート実況	327
	4 0.	パピルスとデート	323
	3 9.	仲直り	312
	3 8.	パピルス戦	288

5 4.	426	Waterfall 探索⑦	
5 3.	420	Waterfall 探索⑥	
5 2.		Waterfall 探索⑤	
5 1.		逃走	411
5 0.	404	Waterfall 探索④	
4 9.	395	Waterfall 探索③	
4 8.	383	Waterfall 探索②	
4 7.		アンダインとの邂逅	377

488	6 1.	Waterfall	探索⑪	478
	6 0.	幻影		474
	5 9.	橋の上での逃走		
467	5 8.	Waterfall	探索⑩	
458	5 7.	Waterfall	探索⑨	
452	5 6.	Waterfall	探索⑧	
	5 5.	Let's singing!		441

6 9.	アンダイン戦		573
6 8.	アンダイン戦前		549
537	6 7.	Waterfall	探索⑮
531	6 6.	Waterfall	探索⑭
526	6 5.	Waterfall	探索⑬
519	6 4.	ナップスタブルックとデート	
	6 3.	マッドダミー戦	
493	6 2.	Waterfall	探索⑫
			502

101.	審判	1022
100.	地下で起こった物語	999
99.	CORE閉幕	987
98.	気付いたモノ	977
97.	メタトNEX戦	945
96.	メタトN戦前	923
95.	CORE探索	905
nt	【告白】	883
94.	Lily's judgement	867
93.	約束(ノロイ)	867
92.	Hotland探索⑩	856
837		
91.	虚構だらけのミュージカル	

102.	吊い	1030
103.	対面	1040
104.	アズゴア王戦	1055
105.	罪の重さ	1076
106.	訣別	1086
107.	フォトショップフラウイー戦	1105
108.	闇を打ち消す光	1137
109.	判決	1164
Neutral Ending: Epilogue		1186
True Pacifist route		

9.	A m a l g a m a t e s :	1343
索③		
8.	T r u e L a b o r a t o r y 探	1319
索②	*	
7.	T r u e L a b o r a t o r y 探	1303
■		
6.	A m a l g a m a t e s :	1284
索①		
5.	T r u e L a b o r a t o r y 探	1275
4.	『知る権利』	1249
3.	アルフィスとデート	1226
2.	手紙(ラブレター)	1216
1.	R e : s t a r t	

15.	A m a l g a m a t e s :	1455
■		
探索⑥		
14.	T r u e L a b o r a t o r y	1443
■		
13.	A m a l g a m a t e s :	1429
■		
探索⑤		
12.	T r u e L a b o r a t o r y	1403
■		
11.	A m a l g a m a t e s :	1382
■		
探索④	*	
10.	T r u e L a b o r a t o r y	1365
■		
1.		1352

望まれなかつた救済	子守唄	After The 『GAME』	ing	True Pacifist End	託された願いと、最後の交流	20. SAVE the World	1584	19. アズリエル・ドリマー戦	18. 前哨戦	17. 旅路を省みて	16. True (真実)
1847	1793	1750		1687	1620			1521	1500	1471	

Epilogue of Undyn	s	Epilogue of Alphay	ton	Epilogue of Metta	e	Epilogue of Asgor	l	Epilogue of Torie	BAD END Epilogues	1892	th DETERMINATION.	*She is filled wi
2049		2013		1970		1931						

後	E	前	E	1	E	2136	E	u	E	e
	p		p		p		p		p	
	i		i		i		i		i	
	l		l		l		l		l	
	o		o		o		o		o	
	g		g		g		g		g	
	u		u		u		u		u	
	e		e		e		e		e	
	o		o		o		o		o	
	f		f		f		f		f	
	F		F		C		A		P	
	r		r		h		s		a	
	i		i		a		r		p	
	s		s		r		i		p	
	k		k		a		e		y	
2242		2227		2196		2172		2111		2081

対話	姉妹喧嘩	姉妹喧嘩	後日談	あどがき・解説	その決意の果ては	N	A
	下	上				G	f
							t
							e
							r
							T
							h
							e
							B
							A
							D
							D
							E
							N
							D
							I
2384	2348	2319		2308	2284		

前日譚

Prologue

目が覚めたら知らない天井見上げてました。うん、どういふことなの誰か説明して。

私がパニックになっていると、ふととある記憶が甦ってきた。

誰かと話したのか……？誰と？何故？

……駄目だろう覚えだ、なんかもやがかかって思い出せない……

……ん？これまさかあれか？一時期流行ってた『神様の事故で転生しちやつたぜ☆』ってやつか？

でもそう仮定して考えるとちよつとおかしくね？私、事故で死んだ記憶とかないぞ？普通に一日過ごして寝た記憶あるし。なんなら昨日の夕飯だった大好物のアジの開きの蒲焼きの感想言つてやろうか。旨かった、以上。あ、駄目だ思考が迷走してきた。

現実逃避し始めた思考を一度止め、まあ考えていても仕方ないかという結論を出し、身体を起こし部屋を見渡す。うむ、結構私好みの部屋だな。

そして、体を適当に動かしてみる。あー……体つきからして5歳か6歳かな？若返ってんのか。日本では小学生に上がるぐらいの年齢だけ……

そこまで考えてはたと気づいた。『そもそも此処は日本なのか？』と。

今のところなんとも言えないが、もし外国だとしたら生憎と私は外国に行ったことなんてないからほとんどの言語は話せない。分かるとしても高校までの簡単な英語くらいだ。それだつて流暢に話せる自信なんてないし、そもそも意味がちゃん伝わるのかさえ怪しい。

でもさつき見た時にランドセルは見当たらなかったし小学校にあがる前って可能性も……待てよ、外国の学校って確かランドセル使わないんじゃないかな？

前に外国に留学経験がある友人が話していたのを思い出し、思わず頭を抱える。

もしかしなくても、詰んでないか私。

「はー……」

若干甲高くなった声がため息に混じって洩れる。あまり違和感はない。

改めて辺りを見渡す。今度は一つ一つ丁寧に。やっぱりランドセルらしきものはなかった。嫌な予感しかしい……

勉強机らしきものの近くにある窓を開ければ分かるだろうと思つた私は座つていたベッドから降り、窓のカーテンをそつと開けた。そして恐る恐る窓の外を見て、絶望した。

歩く人達はどうみても日本人には見えない。どう考えても外国の街並みだ、これは。

今私超絶望した顔してんだろなあ……と出来るだけの現実逃避をしながらふと机の上に目を向けると鏡があつた。

これでどんな顔になつてるのかみてみ……………

手に取つた手鏡を覗き込んで私はビシリと固まつた。どちらかといえは凍りついた。そして、嫌な汗がだらだらと流れ始めた。

ぱつちりと開かれた眼。

ピンク色の頬。

本来微笑んでいるはずの口元は怯えるように少し開いていて、恐怖と驚愕に染まっているし、髪と眼の色が違うが、間違いない。

「どろして……」

——私この子はC h a r aにそっくりだった。

1. 産まれてきた妹

はいい皆。私様だ。

いやー、時が過ぎるのは早いね、あつという間に小学校にあがつちやつたよ。え、あの後の事を説明しろって？あー、はいはい、分かりましたよ……

あの後マジで混乱した私は鏡をベッドに投げつけ、情けないながらも部屋の隅で震えたよね。部屋にあった携帯で『絶対に登ってはいけない山』って震える指で検索かけたら『エボツト山』がヒットしやがったしね!!

まあとにかく、此処が『Undertale』の世界だつて分かった事より、『私がCharaちゃんの代わりになつちやつたのか？それじゃあCharaちゃんは何処へ？私はモンスター殺しをしなきゃいけないの？』って凄く怖くてさ。もしかしてCharaちゃんの命を奪つちやつたのかって考えただけで怖くて怖くて……

で、そんな感じで震えてたら女の人が入ってきて、「どうしたの!」って話しかけて抱きしめてくれた。この女の人が母さん。で、その時に『Chara』じゃなくて『リリー』って呼ばれたから、あ、私はCharaちゃんじゃないんだなあって凄く安心して

て泣いちゃってさあ……まあ悪い夢見ちゃってつつつてなんとか誤魔化して、父さん（まさかの日本人だった）とご対面して、その後は、母さんと公園行ったりとか、まあ子供らしく過ごしてきたよ、うん。あと、この顔は母さん譲りで髪の色は父さん譲りだった。……これはあれかな、母さんがCharaちゃんの親族パターンかな？

あと気づいたことが一つ、なんか自動翻訳みたいのがトリップ（？）特典でついたのかわかんないんだけど文字とか全部日本語になった。友達に「ちゃんと英語で書ける？」って聞いてみた結果大丈夫と返ってきたから多分皆には英語に見える。

閑話休題。

今日、家族がもう一人増える予定です。

犬とか飼うんじゃないなくて、マジな奴ね。だから明日は学校休むつもりで深夜まで起きてます。ぶつちやけ今深夜テンション入って変な感じになってる。

父さんは寝てていいよって言ってたけど、さすがにこれは起きてなきやいけない気がするからね。

それにしても家族が増えるのってこんなにドキドキするんだなー、前世では一人っ子だったからこういう感覚は新鮮でちよつとわくわくする。……母さんが無理してないか心配もしてるけど。父さんなんか俯いちやつてるしね。

手術室みたいなどころの前で待ち続けて数時間後。もう日付は変わってるし、大丈夫かなと心配し始めたとき、ドアが開いて、先生と助産師さんが出て来た。

父さんに手を引かれて中に入ると、そこには疲れきった母さんと、助産師さんに抱えられた、小さな命。

助産師さんが父さんにその子を抱かせた。女の子らしい。

父さんは感極まったのか泣きはじめてしまつて「産まれて来てくれてありがとう」と言っていた。

……私の時もこうだったんだよと母さんに耳打ちされて、ちよつとくすぐったい気持ちになつた。

その次の瞬間を、私は一生忘れられない。

「この子名前、決めてあるんだ。……この子は、『フリスック Frisk』にしようと思うんだけど、

「どうかな？」

……え、まさかのフリスクの姉に転生したの、私。

一気に大混乱に陥った私の頭の中で、そんなことを呑気に考えてる自分を殴りたい。顔がCharaちゃん似な上にフリスクの姉とかこれ大丈夫なの？

もしかしたら名前が同じなだけで、あの子とは違う子なのかもしれない、だが、私の直感が『この子はフリスクだ』と理解してしまっている以上、確定とまではいかないが暫定でこの子はフリスクだ。

……彼女は、天使だ。ゲーム画面の向こうの憧れだった。聖人でもないのに、小さいながらも皆を救えてしまう凄い子なんだ。その子の姉に、私はなれるのか？

周りが盛り上がるなか、私だけ凄く混乱していて、上手く周りに合わせられたか分からなかった。

その後追い討ちをかけるかのように父さんが屈んで「リリーも、ほら、手を握ってあげて？」と言われたもんだから、私が彼女に触っていいのか凄く迷ったけど、結局は断りきれなくてそっと人差し指を差し出した。

きゅつ、と、小さいのに、確かな力で。

彼女は、私の人差し指を握って

確かに彼女は笑ったような気がした。

それが、確かに彼女がそこにいるという証明で。

紛れもなく生きているという奇跡で。

ふと、昔読んだ漫画のセリフを思い出してしまって。

確か、『兄や姉が先に産まれて来るのは、後に産まれて来る妹や弟を守るためだ』ってやつだったっけ。

確かにそうだと笑って、それを実行すると決めた。

それが、私が彼女愛しい妹を守ると決意きめした時ただった。

2. ぼくのお姉ちゃん

ぼくには9こ上のお姉ちゃんがいる。

いそがしいお父さんとお母さんの代わりに、ずっとそばにいてくれるやさしいお姉ちゃん。

「F r i s k?どした、そんなに見つめて」

「おねーちゃん……」

「……もしかして遊びたい?」

「うん」

「いーよ、何して遊ぼつか」

ぼくが思っていることなんでもおみとおしで、おべんきようしてもぼくとあそんでくれる。

「お姉ちゃん、おべんきようしてるの?」

「あー、うん。ちよつと待っててくれる?直ぐに終わらせるから」

「うんっ」

たまにあそべなくても、すぐにおわらせてあそんでくれる、だいすきなお姉ちゃん。

「F r i s k」

ふとした時になでてくれたり。

「ねえ、こんなの作ってみただけど、いる？」

いろんなものを作ってくれたり。

「ご飯できたよー、今日はハンバーグ！」

ぼくの大好きなハンバーグを作ってくれたり。

それから、

「……………おとうさん、おかあさあん……………!!!」

……………お父さんとお母さんがとくに行ってしまったときも、何もいわないでそばに

いてくれた。

ねえ、お姉ちゃん。

「だいすきだよ、お姉ちゃん」

今日、父さんと母さんの葬式が終わった。フリスクには両親が居なくて、トリエルさんに引き取られたという仮説もあったけど、まさか、こんな風に別れが来るなんて

……………

で、まあ今親族の大人達が話し合って私とフリスクを誰が引き取るかを話し合っ

るっぽいけど、なんか雲行きが怪しい。……『孤児院』とかいうワードが出てきてる時点で覚悟はしてるけど、大丈夫かな、これ。

ふと、きゅつと服の裾を引つ張られる感覚がした。目を向けると、フリスクが震えながら私の服の裾を強く握っていた。

「……………どした?」

「……………」

聞いても黙ってるってことは……………なんか我慢してるのかな?

実際側について分かったことだけど、悲しいときフリスクは周りに気を遣いすぎて感情をあんまり出さない。その所為で周りからちよつと誤解を受ける所がある。……………これ悪い癖だな。多分母さんとかに心配かけたくないために我慢するようになったんだろうね。それで癖になっちゃったんだろうな。くっそ、そんな癖つけない為に側に居たのにな……………

「……………大丈夫。どんなところでも、私が——「ううん」

気休め程度になるかなと思つて言おうとした言葉は、他でもないフリスクによつて遮られた。

「大丈夫、お姉ちゃん。ぼく、がんばる。天国のお父さんとお母さんに心配かけないように、自分でがんばる。」

涙を流しながら私を見上げたフリスクの目は、決意で満たされていた。

「だめ。」

「えっ」

それを、私は即座に否定した。

「それはダメ。絶対にダメ。」

多分、ここでこれを認めてしまつたら、この子は凄く無理をする。それが主人公というものだから。

漫画とかの主人公はこういう経験を得て、こういう決意をするけど、そういう奴に限って早死にする。そういう奴はろくな目に合わない。

「でも……」

「ああ、全部を否定する訳じゃないよ？その決意は素晴らしいものだと思う。でもな
フリスク、君、私に迷惑かけたくないからそんなこと言つてるだろ」

「それは……」

ほらやっぱり。

「だとしたらとんだ思い違いだぞ？あのな、君みたいな子はまだ私みたいな年上に甘えて許される歳なんだよ。だからそんなこと言うな。頑張るなら——」

私はそこで言葉を切つて、フリスクと視線を合わせる。

「私も頑張るから、二人でがんばろうぜ、相棒」

私は妹に死んでほしくない。辛い思いをさせたくない。だからせめて、こうやって言葉で妹を縛る。

「甘えたいときは甘えて、辛いことがあつたら半分こ。楽しいことは二人で楽しんで2倍にしよう。その方が、父さんと母さんも喜んでくれると思うんだわ。」

そうじゃない？と問い掛けてみれば、フリスクはちよつと考えてから小さく頷いた。

「じゃあ約束ね、小指出して？」

「……うん」

「ゆーびきーりげーんまん、うそつーいたーらくすぐりの刑に処す」

「ええっ!？」

私が唐突に歌詞を変えた事に驚いてフリスクは目を見開いた。

「ハリセンボンじゃないの……？」

「だって針千本飲ませるとか絶対痛いじゃん……」

「そうだけどね……ええ……？」

いいの……？と不思議そうに首をひねるフリスクにちよつと癒された。

「まあ、されたくなければ嘘吐かなければいいのさ。そうでしょ？」

「う、うん、そうだね……」

それから、と私は言葉を続ける。

「約束追加。辛い時は絶対に話すこと。いいね？」

そう笑顔で言つて、私はフリスクの手をとつて立ち上がる。

「ま、この後どうなるかわかんないけどさ、がんばろうぜ、相棒」

「……うん！」

につこり笑つたフリスクを撫で、私はフリスクを連れてどつか空いてる所がないか探すために歩きだした。

……つか葬式で笑うとか超不謹慎だな…父さん母さん、ごめん、許して。

3. 観察結果と考察

やあ、私だ。

あの後結局誰にも引き取られなかった私たちは孤児院に入る事になった。…いや、引き取ろうとしてくれた人は居ただけだね……その人も子供がいるらしくて手一杯だったらしい。泣きながら謝られたよ…

まあ仕方ない事だと割りきって孤児院に荷物持って入った。

で、そのなかでいじめとかそんなのではない。フリスクも楽しそうにしてるし、穴に落ちる理由になりそうなものはない。じゃあ一体何が……？

……それから、これはフリスクを観察して思ったこと。

葬式以来、フリスクに凄く細い糸のようなものが巻き付いているのが見えるようになった。例えるならマリオネットの人形みたいな感じで。

……これ多分、『Player』に繋がってる糸じゃないかと私は睨んでるんだけど、

どうなんだろうこれ。

ふとした拍子に見えるんだが、気のせいじゃなければ日に日に薄くしか見えなかったのがちよつとずつはつきりと見えるようになってきてる。……これ、まずいんじゃないか……？

この孤児院では毎日交代で上の子が下の子に読み聞かせやつてるんだけど、今日私が当番だし、ちよつと試したいことがあるからやつてみるか……

試してみたのは、

- 1, この糸は切れるのか
 - 2, 切れなかった場合、何で切れるのか
 - 3, 数本同時に切れた場合はどうなるのか
 - 4, 逆に切れた場合、フリスクに何か影響は出るのか
 - 5, 糸はその後どうなるのか
- という5つのこと。これの結果によって計画が結構変わるからね

で、結果、『糸は切れた』。

手では切れなかったけど、一応もってきた刃物（持ち出せて尚且つ手に入りやすいも

の)を試したら、鋏では切れなかったけど、カッターと(まさかの)そこら辺にあった玩具のナイフで切ることが出来た。

多分、これはRuinsに落ちてる2番目の子の玩具のナイフで切れるって事だと思っう。でもカッターでも可ってことはニューホームのCharaちゃんのナイフでも切れるのか……?まあとにかくなんか刃物を持つといた方が良いと結論付ける。

3番と5番目の結果、『糸は直る。ただし、数本まとめて切った場合、直るのが遅くなる』。

切った直後、一本ならまた直ぐに繋がって切っても意味がないみたい。ただし、さっき言ったように数本まとめて切った場合、繋がるのがべらぼうに遅い。

RPGとか漫画とかで見たことあるなら分かると思うけど、『一本足を削ったと思ったらすぐに回復する敵の弱点は一気に全部切り落とすこと』だったりするじゃない?多分それ。

だから、『全部まとめて切り落とせばもしかしたらこの糸を完全に断ち切れる可能性がある』かもしれない。

ただ、フリスクにどんな影響が出るかわからなかった為、むやみやたらに切り離すのは危険だと判断して断念した。

それから、4番目の『フリスクに出る影響について』は、フリスクに特に影響はない

と推測。朝起きてきた時普通に挨拶もしてくれだし、言葉が話せなくなるとかそういうのはなさそう。動かしにくい所がないか当たり障りなく聞いてみたら、「別に何ともないよ、逆に今日なんか動きやすいんだ!」ととびきり可愛い笑顔で返ってきた。天使か。糸を切った事によって体が動きやすくなったのか、それとも単によく眠れたからか分からないため糸を全て切るのは危険と判断。ここで終わりにする。

結論としてまとめると、『糸は切ることができ、切った際にフリスクに出る影響は特に見当たらない。そして断ち切ることが出来る可能性がある』ということになった。

この結果を参考に、計画に組み込む事は可能か考察した結果、可能と判断。組み込む事とする

とりあえずここまでを研究ノートに書き込んで、ノートを閉じる。

「リリー、行くよー」

「はいよー、ちよい待ってー」

誰にも気づかれぬ場所にノートを隠して、私は集合場所に急ぎ足で向かった。

4. 俺の友人

あいつは突然やって来た。

俺の誕生日の翌日、院長が皆を集めて「新しい家族が増えます」と言った。

院長に呼ばれて入ってきたのは、俺と同じ年だというポニーテールの女の子と9歳下の女の子の姉妹だった。

正直な話、俺は最初そんなにあいつに興味はなかった。

別に誰が増えたって俺には関係ないし、どうでもいいと思っていた。

「初めまして、私はLily。この子は妹のFrisk。よろしくしてくれると嬉しいかな」

「よろしくおねがいます!」

にっこりという表現が当てはまるような笑顔であいつは簡潔にそういった。

「Lily、ちよつとこの所がわかんないからちよつと教えてくれない?」

「ん、いいよー。どい?」

あいつはあつという間に馴染んだ。今じゃ勉強教えてもらう奴もいるぐらいに。

「あー、これか……ここ私も苦手だったんだよねー」

「えー？ そうなの？」

「うん、最近になってようやく解き方が分かってさー」

あいつは所々ジョークをいれて場を盛り上げながら勉強を進めていく。……俺も実際に教わった事があるが、本当にあいつの授業は覚えやすい。本人曰く、「勉強でも面白かったりする事は結構覚えられるじゃない？ だからちよつとひねってジョークとかにしちやうと面白いし覚えやすいよ」とのこと。

あとあいつはよくふざけている。たまにあいつが持ち込んだジャパニーズマンガのネタを使ったり、他の奴がボケたらツツコミいれたり。多分これがウケたんじゃないかと俺は思う。

それに、あいつは結構博識だ。星座の神話の話をしてくれた時は凄く引き込まれた。もつと知りたいと思った。

そう言ったら星座関連の本を何冊かくれた。

「君、将来天文学者か考古学者になれそうだね」

と笑いながらいった。

天文学者はともかく、考古学者か……悪くはない。

実際俺は無難な職に就こうかと考えていたから、そのアイディアは新鮮だった。

あとあいつは妹のFriskに甘い。めちやくちや甘い。

見るからに溺愛してますって分かる。

Friskは下のクラスに入っているが、わざわざ時間まで作って会いにいつてる。そのせいで下のクラスの子に顔覚えられてるらしい。一緒に遊んだりしたと聞いた時はこいつコミュニケーションがバクないかと思った。先生、何故止めないんですか……

前に7色のハートがついたお揃いの腕輪プレゼントしてた時は驚いた。手作りらしい。

その日以来ずっと着けているが、ちよつと依存しすぎじゃないかと俺は思う。

今年で19歳になった。あいつが言った通り、俺は考古学者になるために大学に入った。結局、歴史や神話を知る事が楽しくなってしまったのだ。

あいつは、妹が心配だからと孤児院のボランティアになった。最後まで妹離れ出来なかったらしい。いつでも顔を出せと言われた。

それから俺は大学で全力で学んだ。時には教授の発掘調査についていたりした。

ふと、部屋に置いてあったあいつからもらった本を見つけて、顔を出してみようかと思いたって孤児院に行つて、愕然とした。

あいつが、エボット山に妹を探しに行ったつきり帰ってこないと聞いた時、俺は膝から崩れ落ちた。

5. 物語の始まり

〔G i r l〕

その日、先生にナイシヨでみんなでエボット山にきもだめしに行こうとだれかがいいだした。

むかしからわたしたちはエボット山には行つちやだめと言われてるし、夏ももう終わつちやうし何か思い出づくりをしたかつたんだ。

きもだめしのルールはこのちかくにあるエボット山の森のなかにはいつてすぐにもどつてくること。

おくまでいつたらおこられちやうから、すぐにもどつてくることになった。

〔F r i s k ー〕

みんなでナイシヨ話をしてっていると、F r i s k ちゃんのお姉ちゃんのお姉ちゃんのお姉ちゃんが来た。

「おつ、何々、ナイシヨ話？私にも教えてー」

「だめー！！」

「えー」

べつにおこったりせずにはわらってLiiyちゃんは「仲間はずれにしないでよう」と言った。

「仲間はずれじゃないもん！」

「これはみんなのナイショだから話せないだけだよ！」

「あらら、そっかー、じゃあいいや」

でもなんかやるなら怪我したりしないようにしてね、とわたしたちに言つて、Friskちゃんの頭をそつとなでた。

「Friskも関わってるなら怪我しないようにね」

「うん」

そういつてLiiyちゃんは出ていった。

ここでLiiyちゃんに話しておけばよかったのに、とだれかが言ったような気がした

【Liiy】

なんかいつの間にか孤児院に馴染みまくってた件について。

あれか、とある子に勉強教えたからか？なんかそれ以来めっちゃ人が集まるように

なったんだけど。まあ私は前世で高校行ってたしズルしてたようなもんだけどな……

それともあの少年に星座の神話の話したからかな？彼、結局考古学者になるつつつて頑張ってたな。

まあそんなこんなで私も19歳。院長さんに無理言つてここで雇ってもらえることになった。周りにはボランティアって言つたけど、まあマジでボランティアみたいなもんだしね。

それから、フリスクのクラスでちよつと怪しい動きがあつた。なんか企んでるっぽいんだけど……これまさかエボツト山に行くフラグじゃないのか？

……マジで外れてることを願うけど、一応準備しとくか。

【G i r l】

どうしてこうなっちゃったの？

わたしたちは孤児院にむかつて走る。ヒミツの抜け口をくぐつて走る。どうしよう、先生になんて言おう。L i l yちゃんになんて言おう。

F r i s kちゃんが帰つてこないなんて。

あのあと、みんなでくじをつくって二人組を作ろうということになって、Friskちゃんはくじで一番最後、それにひとりだけ余ってしまった。

「一人でも大丈夫だよ」

とFriskちゃんは言っていて、そのまま決定してしまった。

その結果がこれだ。

最後にFriskちゃんが行って、何十分たつても帰ってこない。

慌ててゴールのところまで見に行っても、そこにFriskちゃんはいなかった。

それで、今先生に正直に話して探してもらおうとして走っているのだ。

「……あれ、何してんの君ら、こんな遅い時間に」

ふと、よく聞きなれた声が聞こえた。

振り替えてみると、そこには懐中電灯を持ったLilyちゃんがいた。

そこで、わたしは泣き出してしまった。

「Lilyちゃん……」

「うおっ、どした？何があつた!？」

わたしはと目を合わせるためにしゃがんでくれたLilyちゃんにだきつく。

「ごめんなさいい…Friskちゃんがあ……」

「……………Friskがどうかしたの？」

Lilyちゃんは怖い顔をしながらわたしたちの話を全部聞いてくれた。

「そっか、なるほどね。朝話してたのはそういうことだったのか」

「うん」

「……………それは、自分たちで院長さんに話さないといけないって分かってる？」

「うん……」

「うん、それならよし」

Lilyちゃんは立ち上がって頭をなでてくれた。それから、どこかにいったと思っ
たらリュックを背負って帰って来た。

そして、わたしたちを真っ直ぐに見て、指示をだした。

「君たちは今すぐ院長先生を叩き起こしてでもいいからこの事を話すこと。それから、
Friskは私が捜しにいくと話すこと。あと、この事は公……孤児院の子以外に誰に
も話さないでほしいことを伝えること。いいね？」

「え、でも……」

それって、Lilyちゃんも帰ってこれなくなるんじゃないや、とわたしは思った。

「大丈夫だよ、絶対に帰ってくるさ」

そういった後にボソツと何かを言ったような気がしたけど、聞こえなかった。そして、安心するいつものえがおでわらった。

「さ、院長先生に言いに行きなさい」

そういつてLilyちゃんは背負っていたリュックを背負いなおした。

「それじゃ、いつてくるね」

そういうとLilyちゃんは孤児院を抜け出していった。

わたしたちも、言いにいかないよ。

例え重いバツが待ってても、仕方ないと覚悟して。

【Lily】

嫌な予感が見事に当たった。誰だ肝試しとか考えたやつ。おい少年よお前か、殴りはしないけど。

一応準備しといてよかったよ、本当に。別に入れるものなかったけどな。ノートと一応カッターとあとはポーチだけ。

取り敢えずなだめて自分たちで言いに行かせた。自分たちで言わないとだめだからねこれは。

さてと、行きますか。

うちの可愛い妹を『Player』になんざやるかよ

私は決意で満たされた。……ような気がした。

Neutral route

1. 幕開け

〔Lily〕

ざくり、ざくりと私の足が落ち葉と土を踏みしめる。

懐中電灯で照らされていると言えど、正直滅茶苦茶心許ない。めっちゃ怖い。今なら幽霊が出て私信じられるよ、うん。

「……………か」

そうして、やっと私はエボット山の麓についた。

…そういうえば、私、あの穴がある場所知らんな……………どうしよ……………

……………まあ、なんとかなるか

私は一つ深呼吸をして、森に足を踏み入れた。

「フリスクー？」

声をかけながら進む。ここで見つければいいんだけどねー、まああり得ないだろうけどさ。

「居たら返事してー」

さく、さく

……うっわ無言って辛い。デカイ独り言いつてるみたいで超はずい。なんていう風に冷静に考えてるけど、実は凄く焦ってる。

フリスクは無事なのか？

穴にたどり着けてなかったら？

辿り着けても穴から落ちた時に怪我してないか？

そもそも、本来あんな高さから落ちて無事なのか？

凄く、怖い。今すぐに会いたい。早くあの可愛い笑顔がみたい。

怖い、怖い怖い怖い。

……だから、行かなくちや

彼女の身を案じるなら、なおのこと。

彼女を守りたいならもつと。

「フリスクー！」

私は歩みを止めず進んだ。

どれくらい歩いたのだろうか。

歩みを進めながらふと思った。

時計がないから分かんないけど、多分小一時間ぐらい歩いたと思う。まだフリスクは見当たらない。空を見て方角を確かめようとしても葉に遮られて見つからない。

「これはまずいな……」

もしかしたら、私があゝの穴に辿り着けないかもしれない。

ちよつと考えたら分かる事のはずなのに、すっかり頭から抜け落ちていた。いくら私があゝの子の姉であろうと、本来私はゲームには登場しないその他大勢。穴に辿り着けなくても当然なのに、何故私も行けると過信していたのか。頭を抱え込みたくなる。

しかも、私は食料はおろか、水も持って来ていない。フリスクは帰れたとしても、私は最悪餓死だ。

こればかりは、神頼みだな

そう思った私は立ち止まり、目を閉じて祈る。

……—神様、もしいらっしやるのなら、どうか私を愛しい妹のもとへ導いて下さ

い……

そう祈って目を開けた私は、また歩きだした。

すると、祈りが通じたのか、それとも近くへ来ていたのか、見たことのある洞窟を見つけた。

もちろん、実際に見たのではなく、ゲームだった時の *Undertale* のオープニングムービーでだったけど。

でも、確かにそこは、フリスクや *Chara* ちゃん達が飛び降りた（もしくは落ちた）穴が空いている洞窟だった。

取り敢えず神に感謝を捧げ、洞窟内部に入った私は、予想通りあった穴の近くにフリ

スクが使っていたであろう懐中電灯を見つけた。……うん、孤児院の名前が書いてある。間違いないな、これは。

穴を覗きこんでみると、先が真っ暗になって見えなかった。ここから紐なしバンジーして怪我一つなかったってどういうことなの。……やべえ二次創作で見かけた体がマツチヨのフリスク思い出した、あれは笑う

ずっと頭を過つていった前世の思い出で笑いそうになりながら、私は穴の縁に立つ。「待っててね、フリスク。今いくよ」

あ、これなんかヤンデレっぽいなどか思いながら、私は重力に身を委ねて、穴に落ちた。

その瞬間、意識がブラックアウトした。

2. 邂逅

[??]

そこは、ただただ闇だった。

何も感じない。

何もない。

目を開けているのか分からない。

手足が動いているのかも分からない。

怖い。

怖い怖い怖い怖い。

……
——
やあ、こんにちは

そのなかで、声が聞こえた。

【Lily】

……………なんだ今の。

穴に落ちたと思った瞬間意識が暗転して、見たのがこれって……………幸先悪すぎじゃなからうか。

誰かに体を揺さぶられる感覚を覚えて、私は目を覚ました。

目を開けて一番最初に入ってきたのは涙を目に溜めながらこちらを覗きこむフリスクだった。

「……………フリスク？フリスクだよね？」

首を縦にふったフリスクをぎゅうつと抱きしめる。

「ああ、よかった……………怪我とかしてない？大丈夫？」

「うん、大丈夫……………お姉ちゃんも、怪我不い？」

「ちと体が痛いけど平気」

取り敢えず一安心して、体を起こして辺りを見渡す。

……………現実でみるスタート地点ってこうなってるんだ、と思った。

ふと、白くて山羊のような人が立っていることに気がついた。

……え、この人って、まさか。

「……えつと…貴女は…?」

「初めまして、お姉さん? 私はトリエル。このルインズを管理しているの。」

「あ、はい、初めまして。私はこの子の姉のリリーといいます」

「あら、しつかりしてるわね」

やっぱりトリエルさんだったか…ゲームでもそうだったけど、やっぱりこうしてみると母性に溢れた女性って感じなんだな、声もなんか聞いてて心地いいし。

………声も聞こえるし、私の言葉にちゃんと答えてくれる。やっぱりここはゲームじゃないんだと改めて理解した。

フリスクが立ち上がったので私も立ち上がる。

そこでリュックがないことに気がついた。

「あ、ねえ、これ部屋の隅っこに落ちてたんだけど、お姉ちゃんのだよね?」

「おー、そうだよ」

フリスクが見つけてくれました。なかったら結構ヤバかった。特にノートはフラウィーとかに見られてたら超ヤバかった。絶対に取り返しがつかないことになる。

中身を確認して何もなくなっていないことを確認し、私はトリエルさんに向き直った。

「改めまして、リリーです。よろしくお願ひします。」

「よろしくね。……あら、リリーって確かお花の名前じゃなかったかしら？」

「はい、そうなんですよ」

「ふふふ、可愛いお名前ね」

「……………ありがとうございます……………」

うわ何コレ超恥ずかしい。微笑みながら言うのはずるい。これが大人の女性の包容力か。……ちくしょう、私もう19なのにこんな包容力ねえよ……

ところで、と気を取り直して私は話を変える。

「あの、何故私を見つけられたのですか？」

そう、さつきからそれが気になっていた。

ここにトリエルさんが居る、ということとは、フラウイーとはもう戦闘済み。本来、ここに戻ってくることはないはず。なのに、何故私を見つけてきたのだろうか？

「……………？ どういうことかしら？」

「ああ、いえ、えーつと……」

あ、まずい、質問の仕方が悪かったか……………？

「……………ああ！ そういうことね？ さつき、あなたの妹さんが怖いモンスターに襲われていてね。その子を保護しようと思って、ルインズを案内をしようとしたのだけれど、部屋

から出ようとしたら何かが落ちたような音がしたの。それで、気になって見に来てみたら、あなたが倒れていたのを見つけたのよ」

「どうやら質問を正しく理解してもらえたらしい。」

「……確かに花がクツションになっているとはいえ、重いものが落ちれば音がするわな。そりやそうだ。」

「なるほど、そうでしたか。ありがとうございます」

「いえいえ、お姉さんに会えて良かったわね」

「フリスクがトリエルさんの言葉に大きく頷いてくれた。やだ、超可愛い。」

「うふふ、仲がいいのね。さて、お喋りはここまでにして、ルインズを見て周りましょうか」

「はい、よろしく願います」

「ついてきてね、と朗らかに笑ってくるりと背を向け、歩きだしたトリエルさんを私達は追いかける。」

「……こうして、私の『Undertale』は始まった。」

3. Ruins探索①

〔Lily〕

トリエルさんの後についてフリスクと一緒に部屋を移動した私は、部屋に入ったところのところでフリスクが立ち止まっている事に気がついて振り返った。

「どしたフリスク、急に立ち止まって」

「……………ねえお姉ちゃん、あれなんだろう？」

「え、何かあるの？」

「うん、あそこの落ち葉の前」

「？」

私何も見えないんだけど……

目を擦ってから目を凝らしてみると、薄くぼんやりと光っているものがフリスクの視線の高さぐらいのところに浮かんでいるのが見えた。ゲームで丁度セーブポイントがあつたあたりに。

……………あれってまさかセーブポイントか？なんで私にも（凄いぼんやりとだけ）見えるようになってんの？

「あー、あの光？私超ぼんやりとしか見えないんだけど……」

「え？ぼく結構はつきり見えるよ？」

「そうなの？」

首を縦にふるフリスク。どうやらフリスクにははつきりと見えているもよう。

……やっぱり主人公だからか？それともPlayerに影響されて見えるようになってんのか？

「……えいつ」

「ちよっ!？」

いつの間に近づいたのか、セーブポイントの近くにいたフリスクがちよん、とセーブポイントを突つついた。

「何やってんの……」

「ごめんなさい、ちよっと気になっちゃって……でも、なんか画面みたいなのが出てきたよっ」

そういつたフリスクが指差す先には何もなかった。

……多分、『空っぽ』って書いてあるセーブデータがあるんだろうな。

「……………ごめん、私には何も見えないや」

「そっか……………」

ちよつとしゅんとした後、フリスクは画面があるであろう空間に手を伸ばし、何かを押した。

……セーブをしたんだろうか。

「なんかセーブって書いてあるところ押したんだけど……何も起こらないね」
「何も起こらないほうがいいよ」

まるでゲームみたいだね、とフリスクはちよつと笑って言った。

……その通りだからなんも言えないんだよなあ

「二人とも、どうしたの？」

私達がついてきていないことに気づいたトリエルさんが奥から顔を出した。

「あ、ママ、あの「いえ、なんでもありませんよ、トリエルさん。今行きます」

フリスクがセーブポイントについて話そうとしたのを遮って笑みを作る。

「そう？ならいいのだけれど……早くいらっしやい」

「はい」

不満そうに頬をふくらますフリスクの手を繋いで、私は奥の部屋に向かった。

部屋を移動すると、そこにはゲームでも見たことのあるあの仕掛けがあった。

……確かその壁画に『賢い奴もバカな奴も真ん中は通らない（意訳）』みたいなこと

が書いてあって、それがヒントになってるんだっけか。

「新しい家にようこそ、我が子たち。ルインズの歩き方を教えてあげるわね」

そういうとトリエルさんはゲームであったように周りのボタンを押してレバーを下げた。

「ルインズにはパズルがたくさんあるの。昔ながらの気晴らしと鍵の合わせ技ね。」

部屋を進むには、パズルを解かないといけないの。よく見て慣れていってね。」

はーい、とフリスクと一緒に返事をする。その返事につこりと微笑んでからトリエルさんは次の部屋に移動した。

次の部屋は、確かレバーの部屋だったはず。

そう考えていると、トリエルさんが説明を始めた。

「ここを進んでいくには、いくつかスイッチを押すのよ。……心配しないで、私がスイッチに印をつけておいたわ」

一瞬フリスクの顔が不安そうに崩れたからか、トリエルさんは安心させるようにそういった。

……フリスクの表情はゲームの時は分からなかったけど、ゲームだったときも不安そうにしていたのかな？

トリエルさんが部屋の奥に行ってしまったのをみて、フリスクは謎解きを始めた。

「……………ねえお姉ちゃん、『Zキー』って何？」

おつとメタワードが来た。そっか、看板に書いてあるんだっけか。

「さあ……………？私もわかんないや」

取り敢えずすつとぼけておく。いやあ、孤児院にパソコンなくてよかったよ。

そっかと言つてフリスクは他のレバーを調べに行く。私はその隙にリュックをおろしてトリエルさんに見えないように気をつけてカッターを取り出してポケットに滑り込ませる。

何かあったときにリュック入ってたら意味ないからね。

リュックを改めて背負った時、がこんと音がした。音がした方を見ると、フリスクがちよつと誇らしそうに胸を張っていた。どうやら私がカッターを取り出そうとしているうちに解いてしまったらしい。

「もしかしなくても私の助け要らなかつた系？」

「うん、一人で解けたよ！」

「おー、そっかー」

褒めて褒めてと抱きついてくるフリスクの頭を撫でておく。めっちゃ可愛い。

「よくできました！お利口さんね、我が子よ」

にっこりとまた微笑むトリエルさん。私が含まれてないのはしゃーない。何もしてないしね。

「さあ、次の部屋に行きましょうか」

4. Ruins 探索②

次の部屋は、確かダミー戦だったか。記憶を探って私はそう思案する。

「モンスターたちは人間を見つけると、襲ってくることもあるわ。その時のために準備しておかなくちゃね。でも心配しないで！やり方は簡単よ」

ビング。

ダミーにはウォーターフォールで登場するマッドダミーのいとこさんが憑依している。……つまり、彼（彼女？）も一応モンスターに入るんじゃないか、と私は考えている。

だから、彼を殺すことは、グルートに入る一步目になる可能性があるという事にこの世界に来てから気づいた。

「モンスターに遭遇すると戦闘が始まるの。戦闘が始まったら仲良くお話すればいいのよ」

……そういえば、ここはゲームじゃなくてリアルなんだけども、戦闘ってどうなっているのだろうか。白黒になるのかな？ソウルはどんな風になるんだ？

ふと疑問が過った私は、フリスクに小声で話しかける。

「さつきモンスターに襲われたって言ってたけど、どんな風に戦ったの?」

「え? えーつとね、なんか急に周りが白黒になって、ぼくのここ辺りに真っ赤なハート……『ソウル』っていうやつが出てきたよ。ソウルっていうのはね、自分の心や体の変化を現しているんだって。」

ここ辺り、と言った時、フリスクは心臓がある辺りを指した。なるほど、大方予想通りなのね。

……つか待って、今フリスク『ソウル』って言った?

「……ソウル? 魂じゃなくて、ソウル?」

「? うん、そうだよ?」

「……そっか、ありがとう」

……Under taleには二つのバージョンがある。

一つは本家の英語版。でも、日本では有志の人達が非公式の日本語強化パッチをつくっていたから、ここでは非公式日本語版としよう。

二つ目は私がこの世界に来る少し前に発売された公式日本語版。

この二つはやっぱりというか、少しセリフが違ったりする。例えば結構騒がれてたサングズの一人称とかね。

……で、さつきフリスクが言った『ソウル』という呼び方は非公式日本語版の呼び

方。つまり、この世界は非公式日本語版（もしくは英語版）の世界という事になる。

「お話は終わったかしら？」

「あ、はい、ごめんなさい」

トリエルさんが呼び掛ける声で思考を一時停止させる。

しまった、説明中断させちゃってたか。

「いいのよ、知らない事は聞いたほうがいいものね」

でも次は説明が終わってからにしてね、とにっこり笑って許してくれた。

「はい、分かりました」

「説明を続けるわね。時間を稼いでくれたら、私が仲裁するわ。このダミーで練習して

みましょうか。」

いや、トリエルさん、あれ（Froggit 初遭遇イベ）は仲裁するっていうより睨

み付けるもしくは威圧してるというのでは……

内心でツツコミを入れつつ私はフリスクとともにダミーの前に立つ。

その瞬間、風景が白黒に切り替わった。

* You encountered the Dummy.

切り替わった瞬間、そう頭の中でアナウンスが流れた。

……なるほど、戦闘が始まると流れるようになってるのか。…そういうえば、MERCYボタンとかはどうなっているんだらう？

そう思ってフリスクのほうをちらりと見ると、4つのボタンがフリスクの前にあった。

『FIGHT』、『ACT』、『ITEM』、『MERCY』。

ゲームでよく見慣れたあの4つが。

私はイラつきを少し覚えた。

あの子をあの子の意思に関係なく動かす『Player』に。

その『Player』側に居た自分に。

「フリスク、殺し『FIGHT』は押すなよちやダメだよ。」

イラつきを隠して彼女に話しかけた。

急に話しかけた事に少し驚きながら、でも確かに彼女は了承の意思を示した。

5. ダミー戦

〔Lily〕

ピツ、という音がして、フリスクが『ACT』ボタンを押したのを見た。

話す事を選択したのを見て、私も行動を起こす。

「えーっと、初めまして、ダミー君。一方的に話すけど許してね？ 私はリリー、この子の姉なの。よろしくね。ほら、自己紹介して？」

一応しやがんで目を合わせて、ポフィン、と出来るだけ優しい言葉と優しい力でダミーの頭を撫でる。そして、フリスクに自己紹介するように促した。……つか、こうやってみると結構愛嬌ある顔してるなこの子。

「……………」

何かを言ったのだろうか、フリスクはパクパクと口を動かした。

……どうやらフリスクが誰かに何かアクションするときには、私には声が聞こえなくなるらしい。確かに、ゲームではフリスク喋ってはいてもテキストボックスにフリスクが言ったことは一言も書いてなかったしね。

…『Player』はフリスクの声がどんなのかを知らないと思うと、少し心が落

ち着いた。

* You talk to Dummy.

* ……

* It doesn't seem much for conversation.

うるせえほつとけ。こちららぬいぐるみに話しかけてるようなもんだぞ。フリスク

はいいけど私は端からみたらヤベエ奴だよ。

* TORIEL seems happy with you.

トリエルさんを見してみる。

……あ、本当だ、嬉しそうにしてる。ゲームでは見れない貴重なシーンだな、これは。

* YOU WON!

あなたは勝利した!

* You earned XP and gold.

そうアナウンスが流れた瞬間、白黒から切り替わって色が戻ってくる。私も撫でつば

なしだった手をダミーの頭から降ろした。

「わあ、いいわね!よくできました。」

トリエルさんにはつこりと笑いながらそう言つて、部屋の奥に進む。

「……それじゃあ、いつかまたね、ダミー君」

そう笑いかけてから立ち上がる。すると、フリスクが抱きついてきた。ちよつとよろ

けそうになりつつ受け止める。

「うおっと、どうした？」

「お姉ちゃん、ぼくもなでて」

「ん？ いやよ、頑張ったなー」

要望通り撫でてあげると、えへへ、とフリスクはいいながら破顔した。やだ、うちの妹天使……

……この顔も『Player』は知らないのだと思うと、結構嬉しかった。

「さて、トリエルさん待たすといけないし、行こっか」

「うんっ」

手を繋いで二人でトリエルさんの後を追った。

6. Ruins 探索③

[Lily]

次は、あの針山の床のやつだったことを思い出す。

トリエルさんがさすがに危ないと思つて連れてつてくれるからフリスクは危なくな
いとは思うけど、私はやれつて言われる可能性はあるし一応注意はせんとな。

確か道が針山が引つ込むところになってるんだっけ、とトリエルさんが話すのを聞
き流しながら道を注視する。

「お姉ちゃん？何やつてるの？」

「……いや、何でもないよ、いこうか。」

……後でやれつて言われた時に覚えよう。フリスクに不審がられる。

覚えるのを中斷してトリエルさんについていくと、急に何かが飛び出してきて、背景
が白黒に切り替わつた。

*F r o g g i t a t t a c k s y o u !
F r o g g i t a t t a c k s y o u !
F r o g g i t a t t a c k s y o u !

……ああ、フロギー戦か。いきなり飛び出してきたからマジでビビつた。

フリスクに殺すなよ、とまた言おうとしたところで、フリスクは『ACT』ボタンを

押していた。……『Player』は殺しを選ばなかった。良かった。

* FROGGIT-ATK 4 DEF 5

* Life is difficult for this enemy. 《この敵にとつて、人生とは難しいものようだ。》

調べるを押したのか、そういうアナウンスが頭のなかで流れる。

んー、確かに人生は難しいものだよな。人によって価値観とかが全然違うし。まあそういう意味じゃないかもしれないけどさ。

そういう風に考えていると、トリエルさんがフロギーに『仲裁』をして、フロギーはすぐ退散していった。

……やっぱり威圧してるように見えるのは私だけなのだろうか。

* YOU WON!

あなたは勝利した!

* You earned OXP and gold.

を得た。

戦闘終了アナウンスとともにまた色が戻ってくる。何事もなかったかのようにトリエルさんは歩きだし、少ししたら止まった。

あ、フリスクが針山の道見て真っ青になってる。

「これもパズルね、だけど……さあ、少しの間私の手を握っていてね。お姉さんについてきてくれるかしら?」

「はい、分かりました。」

……良かった、言わないとは思ってたけどやれって言われなくて。フリスクもほつとしたように息を吐いた。

トリエルさんはフリスクと手を繋いで歩き、その後を私が追う、という構図になった。まあ、三人横並びでできる大ききじやなかったしね。仕方ない。

しばらく歩いて対岸につくと、トリエルさんはフリスクの手を放した。

「お姉さんはいいいけれど、これは今のあなたには少し危険すぎるわ。」

せやな、と私は深く頷いた。もうすぐ成人する私はともかく、フリスクはさすがにまだ危ない。

少し心配しそうにしながらトリエルさんは進む。

……次はあの滅茶苦茶長い廊下だっけ、と思いながら、フリスクと一緒に私は奥へ進んだ。

7. Ruins 探索④

〔Lily〕

「ここまで本当によくやってきたわ、我が子よ。」

と、部屋を移動して最初にトリエルさんは言った。

「けれど……ちよつと辛いことをしないとイケないの。」

トリエルさんの言葉に、辛いこと？と言いたげにフリスクは首を傾げる。

「この部屋は二人で進んでほしいの。……許してね」

そう言つてトリエルさんはさつきと奥に進んでいつてしまった。

「……そこまで辛いこともないね？」

「そうだね」

何を許せばいいんだろう？、とフリスクはまた首を傾げる。激かわ。

「行こう、お姉ちゃん」

そう言つてフリスクは歩きだした。その後ろをちよつと間隔を開けて私も歩く。

……結構長いし、少し考え事でもするか。

さつきの戦闘で気づいたことが一つ。それは疑問に思つていた『Player』に私

の姿は見えているのか、ということ。それに結論が出そうなことに気づいた。

ダミーの時もフロギーの時も、アナウンスは『You』、単数形で話していた。私が見えているのなら、複数形でもいいはず。なのに一貫として『You』だったことからして、「私の姿はあっちには見えていない」と一応結論を出す。でも、トリエルさんが見えていることからして、「見えていても手を出していないように見えている」という可能性もある。

それから、「この糸の先のPlayerは始めたばかり」という可能性も見えてきた。

実はダミーの時、ボタンのところのハートが迷ったように行ったり来たりして、結局『ACT』を押ししていた。グルート経験者なら、迷わず『FIGHT』を押しでもいいはず。なのに迷ったということは、完全には言い切れないが、初心者であるという可能性が見え——「お姉ちゃんっ!!」

はっとして声が出た方を見る。そこには膨れっ面をしたフリスクがいた。

「もうっ、さつきから呼んでるのに返事もしないし！」

「あはは、ごめん。ちよつとぼーつとしてた」

「どうやら考えているうちについたようである。これにはトリエルさんも苦笑いしていた。」

「ここ待ってほしいの、お願いできるかしら？」

「はい。大丈夫ですよ」

「良かった、じゃあ、これを妹さんに渡しておくわね」

そう言つてトリエルさんはフリスクに携帯電話を手渡す。

「もし何かあったら、いつでも電話してね。…いい子にしているのよ、わかった?」

一瞬間が空いたが、フリスクは小さく頷いた。あ、これはいい子にしてないパターンだな?」

その返事に安心したのか、トリエルさんは去つていった。

さて、フリスクが動くまで座つてましようかね、と私は柱に背中を預けた。

……数十分後、フリスクに揺り起こされて私は目を開ける。いつの間にか寝てたらしい。

「お姉ちゃん」

「……………んー、どうした……………」

「ぼく、先を見に行きたい」

「……………そっか、じゃあ行こっか」

頬を叩いて眠気を覚まし、立ち上がった。その様子を見てフリスクは驚いた顔をした。

「……止めないの？」

「…私もここを見て周りたかったし。…まあ、利害の一致、つてことで。」

笑いながらそう言えば、フリスクは嬉しそうに頷いた。

「……さて、行きましようかねえ」

「うん」

手を繋いで、私達は歩きだした。

8. Ruins 探索⑤

〔Lily〕

奥に進むと、一番最初に目に入ってくるのは木の葉の絨毯。そして、横に目をやると、フロギーが一匹（一体？）ちよこんと座っていた。

プルルル……

ふと、フリスクが持っていた携帯がなる。フリスクはちよつと迷ってから電話に出た。

「もしもし？トリエルよ。部屋から出たりしてないわよね？」

電話の相手はトリエルさんだった。というか流石皆のママ、鋭い。

ギクリとしたフリスク。

「その先にはまだあなたに説明してないパズルがあるの。二人で解こうとするのは危険よ。……いい子でいるのよ、いいわね？」

念を押すようにトリエルさんはそう言って電話を切った。

フリスクはそつとポケットの中に携帯を入れると、ちよつと考えてからフロギーと会話をしにいった。

いい子にしないでいいの?、と言えば、

「……前にお姉ちゃんが言ってたでしょ?自分がやりはじめたことにはちゃんと責任をもちなさいって。それに、お姉ちゃんがいるから怖くないもん!」

……マジか、前になんとも言ったこと覚えてたか。嬉しいな。

「ケロツ、かわいい子だねケロツ」

フリスクがセーブポイントに向かったのを見送っていると、フロギーが話しかけてきた。というよりも、戦闘みたいにアナウンスが流れる感じで翻訳してくれた。

「でしょ?私の自慢の妹だもの」

そう言つてセーブし終わったであろうフリスクを連れてマモノのアメがある部屋にはいる。

「お姉ちゃん、なんだろうあれ。持つてついでいいのかな?」

「……飴みたいだよ、リコリス味じゃないといいな」

「絶対違うと思うよ」

「とうかりコリス味だったら置いた人(?)恨むよ、私」

ゲームでも言っていたけど、こつちにはリコリス味の飴が一応ある。一回どんな味か気になって買って食べてみたけど、アレはやバイ。もの凄くヤバイ。

リコリス味の恐怖を思いだして顔の血の気が引くのを感じながら、私は飴を十数個

リュックの中に詰め込んだ。小さいから結構入る。

「…………お姉ちゃん、取りすぎじゃない?」

「えっ、だってあんまり持ってかないのでは書いてないし、持ってて損はないと思うんだけど……」

「まあそうだけどき……」

しまった、大人気なかったか。…でも、フリスクの命には変えられないしさ。

そう思いながら飴を一個取って味見に口に含んだ。

…………あ、結構美味しい。

「何してるの?」

「飴の味見。食べる?」

「うん、一個ちようだい」

また飴を一個取ってフリスクに渡した。フリスクは包みをどけて口の中どころどころ飴を転がした。

「…美味しいね、このアメ」

「そうだね、何個か取つといて正解だったでしょ?」

「うん」

二人で飴を舐めながら部屋を出て進む。すると、いきなり前から飛び出してくるもの

が。

「うわっ!」

背景が白黒に切り替わる。……なんだ、戦闘か。ビックリした。

* Froggit hopped close!

うん、知ってる。

アナウンスにリアクションを返しながら、私はフリスクを見た。

これがトリエルさんの居ない初戦闘だけど、『Player』は何を選ぶのか。

しばらく迷ったあと、彼女は『ACT』を押し、そしてパクパクと口を動かした。

* Froggit didn't understand what you

aid, but was flattered anyway. 《Froggitは言

葉の意味を理解出来なかったが、それでもお世辞に照れている。》

……お世辞を押ししたのか。じゃあさつき口を動かしていたのはお世辞言ってたから

か。何て言っただらう?

『(感慨深く) ゲコツ……』

フロギーがそう言った瞬間、フリスクに向かって小さい虫のような追尾弾幕が展開される。

攻撃されると思わなかったのか、フリスクは立ち竦んでしまった。

「!？」

「フリスク避けろ!!」

私の声に我に反ったフリスクは、なんとか避けていたけど、そのうちの 하나가当たりそうになる。

「あつ……」

「!」

ガキン、という音が響いた。私が思わずカッターで弾幕を弾き飛ばした音だ。

……なるほど、ある程度の固さがあれば弾き飛ばせるのか。これはいいことを知った。

私はそのままフロギーから守るようにフリスクの前に立った。

*—Froggit seems reluctant to fight you.

《Froggitはあなたと闘うことに抵抗を感じている。》

後ろを見ると、彼女は『ACT』ボタンを押し、名前が黄色になったのを確認したのか、『MERCY』ボタンに手を伸ばした。

*YOU WON!
あなたは勝利した!

*You earned XP and 2 gold.
を 得 た。

見逃したらしい。戦闘終了アナウンスが流れた。

私はカッターをパーカーのポケットにしまい直ししやがんでフリスクと目線を合わせる。

「大丈夫だった？怪我不い？」

「うん、お姉ちゃんが守ってくれたからぼくは大丈夫。お姉ちゃんは？」

「私も大丈夫だよ。」

怪我はないらしい。良かった。

「……次からは気をつけてね？」

「うん」

頷いたフリスクの頭を撫でてから、私は立ち上がり、そのまま次の部屋に移った。

次の部屋なんだっけ、と歩きながら考えていると、フリスクが前に出て進み始めた。

「あ、気をつけろよフリス——……『ずぼっ』ファッ!!」

あ、ありのまま今起こったことを説明するぜ!!

私がフリスクに注意を呼び掛けようとした瞬間……フリスクが消えていた……何を言ってるか分からねーと思うが「いったー……」いやそれ所じゃねえ妹の安否を確認せねば。

そう言えばこの部屋落ちるギミックの部屋だったっけと私は思い出しながら、フリス

クが落ちた穴を覗き込む。

「フリスクー！無事ー!？」

「……大丈夫ー！通る所あるからそっち通って戻るね！」

頼もしい返事が返ってきた。どうやらダメージとかは受けてないらしい。少しすると、向こうの壁に空いた穴からフリスクが抜け出してきた。

「あー、良かった、無事だったか……」

「うん、お姉ちゃんもあの穴通れそうだったし、落ちてきたら？」

「いや、それには及ばないよ」

「え？」

そう言って私は部屋の隅まで行き、

助走をつけて、

タツタツタツタツ

思いつきり地面を蹴った。

ダンツ

そして、華麗に着地する。

スタツ

前から考えていたここで落ちなくてもすむ方法。結局、走り幅跳びの要領で飛び越えればいいんじゃないかと思つて実践してみた。……飛び越えられる距離じゃなかったらヤバかつたなこれ。あと私が走り幅跳び得意じゃなかったりしたらもつとヤバかつた。

「お姉ちゃんすごい!!」

「そんな事ないよ、私よりちゃんとした選手とかのほうがもつと飛べるさ」

「そうなの?」

結論：ゴリ押し戦法とか思いながら、私は興奮するフリスクにそう言った。かわいい。

「行くうか」

リュックを背負い直し、私は歩き出した。

9. Ruins 探索⑥

〔Lily〕

次の部屋に進むと、また携帯がなった。

「出たほうがいいよ?」

そう促すと、フリスクは携帯を取り出して通話ボタンを押し、耳に当てる。

まあ十中八九トリエルさんだろうな、と思いながら電話が終わるのを壁にある石板を読みながら待っていると、

「ねえお姉ちゃん、ママがバタースコッチとシナモンどっちが好きか聞いてるよ」

「え、私も?」

一度携帯を耳から離し、フリスクはそう私に聞いた。

「んーと……シナモンかな?」

「わかった」

そう言えばこれバタースコッチシナモンパイのイベントかと思い出し、私はとりあえずシナモンを選んだ。

……つーか、今トリエルさんのことサラッと『ママ』って言ったなこの子。

「……………終わったよ、行こう」

「おー、わか『プルルルル……………』……………」

「……………ドンマイ、お姉ちゃん」

トリエルさんエ……………人の台詞遮らないで下さいよ…

ちよつと悲しくなりながら、フリスクが電話に出るのを見届ける。

「…お姉ちゃん、バタースコッチも大丈夫?」

「うん、平気だよ」

そう答えればフリスクはまた電話に戻る。しばらくすると、フリスクは電話を切った。

「終わったよ」

「そっか、じゃあパズル解きますか」

つつてもこの岩動かすだけけど。

力を込めて岩を動かせば、岩はすーつと動き、ガチャンと音を立ててスイッチに嵌まり、針山が下がった。

次の部屋に進む。

次の部屋は……………あー、そっか、落ち葉の上踏んだら落ちる道か。

どうするかな、と考えていると、またフリスクが前に出て、ずぼっと勢いよく落ちていった。

「フリスク!？」

まあ、しばらくすれば戻ってくるだろうと検討をつけ、待つておくことにした。

……来ない。もう数分立ったぞ？

「……フリスクー? 何やってんのー?」

落ちて空いた穴を膝をついて覗き込んでみると、後ろから肩を叩かれた。

「何さ、『ぶにつ』……おい……」

「引つかかったー!」

振り返れば、私の頬に指を当ててくすくすと楽しそうに笑うフリスクが。つか超古典

的なイタズラだなこれ。

「こっちは心配してたつつのに……」

「ごめんなさい、下にヒントがあつたから覚えてたんだ」

…ああ、なんだ、覚えてただけか。モンスターに襲われたかと思つた。

「…せつかく覚えてくれたんだし、忘れないうちに行くか。先導してくれる？」

「うんっ」

元氣よく返事したフリスクは私の手を取つて落ちないように慎重に進む。真剣な表情だつた。

無事に渡ることが出来た私は、頑張つてくれたフリスクをなでる。

「ありがとう、フリスク」

「えへへ……」

照れたように、尚且つ嬉しそうに笑うフリスク。やだ、ぐうかわ。

「行こう、お姉ちゃん！」

フリスクに手を引かれ、私は進む。

次は……喋る岩の部屋か。

ただ解けばいいと思っただけでいたさっきまでの自分を殴りたい。モンスターとの戦闘を全ツ然忘れてた。

「流石につ、二体同時は、キツイなっ!!」

ガキン、ガキンと私のカッターが弾幕を弾き飛ばす音が響く。

Player
フリスクもなんとか避けている状況だ。

ザシユツ

「……って……!」

「お姉ちゃん!」

「私はいいから避ける事に専念して!!」

服と肉が切れて私の血が滲む。

油断した。まさか私に当たるとは……しかも結構痛いぞこれ。ゲームだった時、フリスクはこの痛みに耐えてたのか?……マジで聖人君子だな、この子は。

弾幕が止む。どうやらこちらにターンを譲ったらしい。すぐさまフリスクは『MER

CY』ボタンを押した。

*YOU WON!
あなたは勝利した

*You earned XP and gold.
を 得 た

戦闘終了アナウンスが流れた。私はカッターをしまい直す。

「お姉ちゃん！大丈夫……？」

「ん、平気だよ、こんなん。フリスクは大丈夫？」

駆け寄ってきたフリスクが怪我してないことを確認し、ほっとする。

「うん……でも、お姉ちゃんが……」

「こんなの飴でも舐めとけば治るよ、心配しないで」

にっこりと安心させるように笑っておけば、フリスクは強張っていた顔を緩ませる。

「……無理、しないでね？」

「うん。大丈夫さ」

……まあ無理しないってのはちよつと守れないかもだけど。

そう思いながら岩を動かしていく。ちよつと傷に響くけど、まあ大丈夫かな。

二つ石を動かし、最後の石を動かそうとすると、

「おおっと！俺を押そうってのはどこのどいつだい？」

「エボット山近くの孤児院出身、そしてこの子の姉のリリーですけど」

「おお、いいねえ、礼儀正しい奴は嫌いじゃないぜ」

なんだこの石、ゲームだった時もあったけど中々饒舌だな。

意思のある石ってか。やかましいわ。

「つて、孤児？親御さんはどうした？」

「……………」

「……………あー、すまねえ、悪い事聞いちまったな」

「いえ……」

しかも氣遣いが出来るときた。人間だったら惚れてた（友人として）。

「まあ、嫌な事聞いちまった代わりと言っちゃあなんだが、あのスイッチの上で大人しくしといてやるよ。早くとおっちまいな」

本当は言葉遊びでもする予定だったんだが、と言つて彼（？）は大人しくスイッチに嵌まった。

まさかのプチ原作改変。……………これで『Player』に私の存在バレたりしないよな？つか、あれやっぱり悪意あつてやってたんかいな。

まあその時はその時だと覚悟を決め、私は石にお礼を言う。

「ありがとうございませす、別に気にしなくてもよかつたのに……………」

「いや、こういう礼儀は通したいのさ。さ、行きな」

……………やだ、コイツマジでイケメン、もといイケ石だわ。

石にトウシクしながら、私はフリスクを連れて次の部屋に進んだ。

10. ナツプスタブルツク戦

〔Lily〕

frisスクがMoldsmarに躓いて見事にスツ転んだりしつつ（即刻見逃した）、セーブポイント部屋に進んだ。

「あつ、チーズだ！」

おいfrisスクよ、反応するのはそこか。

机の上にあつたチーズに向かっていくfrisスク。

「……とれない……」

……置いときすぎてへばりついてんだっけ。そりやネズミも取れないわな。

「…それ取つてどうするの？」

「そのネズミさんにあげたい……」

んんん、理由が激かわだった。

ふと、ポケットに手を突っ込んだときに当たったカッターで、私は妙案を思い付いた。

……カッターで削ぎ落とせばいいんじゃないやね？

「frisスク、ちよつとどいて？ いいこと思い付いた」

フリスクにどいてもらうと、私はカッターでチーズに机と並行な切れ込みを入れていく。あ、中々切れやすい。

「おー……」

フリスクはそれを私の後ろからじっと見ているみたいだ。しばらく横に動かしていると、チーズが机から剥がれた。

「うし、取れたー！」

「おー!!」

パチパチと拍手するフリスク。かわいい。

カッターの刃を拭いて、フリスクにチーズを手渡すと、ネズミの穴のそばにチーズを置いた。

「ネズミさん、どうぞー！」

……ちよつとしてから、ネズミが穴から顔を出した。

そして、フリスクを見やりお礼を言うように頭をさげ、チーズを持って穴の中に引っ込んでいった。……引っ込もうとした。チーズが大きすぎて入らないらしい。穴に引っかかっている。

「あー……ちよつと借りていい？」

ネズミからチーズを借りると、私は穴に入る大きさにそれを切った。

「これで入る？」

小さくしたチーズを渡すと、ネズミは嬉しそうに引っ込んでいった。……え、余った
これどうしよう。

「……………持つてくか、仕方ない」

なんか包むもの見つけないとな、と思いながらリュックの中にチーズをしまった。

「……………そう言えば、お姉ちゃん」

「ん？」

「さっき、何でママにこの光の事言わせてくれなかったの？」

セーブをしたであろうフリスクが振り返ってそう言った。

……あー、来ると思ってた質問がきたか。

「いやね、さっき見たとき、トリエルさんその光の事無視してたじゃない？だからもしか
したら見えてないのかなって。だったら、私達の秘密にしちやおうと思つてさ。ダメ
？」

適当に言い訳を並べ立てる。

「……………そっか、じゃあぼく達のナイショね！」

信じてくれた。純粹かわいい。

「うん。……………行こうか」

奥に進む。

次は……ナプスタ戦だったか。

そう思いながら、次の部屋に足を踏み入れる。

一番に目に入ってきたのは、寝たフリをするシートオバケ。

「……？オバケ？」

「多分ね。……お昼寝中かな？」

「というか、グーグーで……寝たフリ下手すぎにも程があるだろ……目思いつきり開いてるし……」

「お願いしたらどいてくれるかな？」

「……どうだろ、起こしてみる？」

「うん」

その瞬間、背景が白黒に切り替わった。どうやら戦闘らしい。

*Here comes Napstablook^だ.

アナウンスが流れるとともに、体を起こし、目をうるうるさせたナプスタ君がふよふよ浮き始めた。

「初めまして、私リリースって言うんだ。よろしくね！」

「ああ……うん……よろしく……」

うおつ、可愛い声だな。声量が小さいからちよつと聞きづらかったけど、可愛いわ。

*NAPSTABLOOK|ATK 10 DEF 10

*This monster doesn't seem to have a sense of humor: 《このモンスターにユーモアのセンスはないようだ》

『Player』は調べるを押したのか、アナウンスが流れる。

『ああ、ぼくって本当に面白い…』

彼がそう言った瞬間、彼の目から涙がこぼれる。

……まずい、確か彼の涙って酸じゃなかったっけ。

「フリスク!!」

壁を這い上った涙が、フリスクに雨のように降り始める。

………よかった、なんとか避けれたか。

*
N a p s t a b l o o k i s w i s h i n g t h e y w e r e n t h e r e .

アナウンスが流れ、フリスクの手が『ACT』ボタンに伸びる。私はフリスクの傍

に移動し、いつでも守れるように刃を出さずにカッターを構えた。

* You gave Napsstablook a patient smile.
 あなたはNapsstablookに辛抱強く笑みを作った。
 につこりと笑うフリスク。…今一瞬とある刀剣思い出した。(オバケ+笑顔っていつ
 たらもう……ねえ?)

『へっ……』

嘲笑ったような笑いかたするな、と思いつつ構える。

……攻撃が来なかった。ちよつと拍子抜け。

*
 N N a p s t a b l o o k l o o k s j u s t a l i t t l e b i t b e t t e r .

……これで『FIGHT』は使わないかな?
 少し胸を撫で下ろしながら、ナップスタ君を見据える。

「……あの……そんなに見つめられると……」

「えっ」

ナップスタ君は顔辺りを少し赤くして私から目を反らした。…ひよつとして照れてる?
 かわいすぎかよ。

ふとフリスクに目をやると、口をパクパクと動かしていた。

* You told Napsstablook a little joke. 《あな
 たはNapsstablookにちよつとしたジョークをかました》

『やってみるね……』

彼が流した涙が頭上に集まっていき、シルクハットのような帽子を形作っていった。

……リアルで見るとマジックみたいで結構迫力あるな。フリスクなんか目え輝かせてるし。

『おしやれblook、つていう芸なんです…気に入ってくれたかなあ……』

*
N

apstabl ooke agerly a wait s your resp onse .

フリスクは『ACT』を押しして精一杯拍手を彼に送った。

私も一緒に拍手を送る。

『わあ……』

ナップスタ君が嬉しそうになると、周りの色が戻ってきた。戦闘が終わったらしい。

「RUINSには誰もいないからよく来てたんだ……」

「そうなの？」

語り始めたナップスタ君の隣にしゃがんで話に相槌をうつ。

「でも今日はいい人達に出会えた……」

嬉しそうに口角をあげたナップスタ君。かわいい。

「……うん、そろそろ散歩に戻ろうかな。すぐにどくよ。」

そう言ってナプスタ君はすーっと消えてしまった。

「消えちゃった……」

ちよつと残念そうにするフリスク。その頭を撫でておく。

「まあ、またどつかで会えるさ。へこまないへこまない」

「……うん、そうだね！」

元氣を取り戻したフリスクはにこにこしながらまた会えるといいなー、と呟いた。

……まあ割りとすぐ会えるけどね…。

「先に進もうか」

「うん」

探索は続く。

11. Ruins 探索⑦

〔Lily〕

ちよつと迷つて左の道（ゲームだと上の道）に進んだ私達は、一つの看板を見つけた。……あ、ベイクセルのやつか。

「……スパイダー・ベイク・セルだって、行つてみようよ！」
「ん、わかつた」

25ゴールドあるしな、一個づつは買えるだろ。……ゴールドが多くないかって？ カットしたけど何回か戦闘あつたんだよ。フリスクに傷つけさせなかつたから安心してくれ。

「お邪魔しまーす……」

前の部屋に戻つてベーカーリーに入った。……というか、よく見たら壁に文字書いてあつたな。ゲームではなかつたぞ、これ。……そういえば、クモのドーナツ、どんな味なんだろうか。

フリスクがゴールドを蜘蛛の巣に置いた。するするする、と糸を下ろした蜘蛛達が二個ドーナツを手渡した。……え、二個？

「はい、お姉ちゃん！」

「……………。ありがとう、フリスク」

につこり笑いながらドーナツを私に差し出すフリスク。どうやら私の分を買ってくれたらしい。心が暖まった。

「…でも、ちよつともつたないから後で食べていい？」

「うん、いいよ！」

フリスクにOKをもらってドーナツをリュックにしまった。

……………『Player』はサイダーを買わずにドーナツ二個買ったのか。ふーん……

さっきの部屋に戻り、今度は看板を無視してフロギー達に話しかけにいったフリスク。

……確かこのフロギー達の最後の一匹が、トリエルさんと戦う時のヒントになってるんだっけ。さて、『Player』はその事に気づくのかな？

フリスクが歩き出したことに気づき、私も後を追う。

ブルルル……………

出口付近で、携帯がなった。…あ、電話イベか。

携帯を耳に当てて、たまに頷くフリスクを見ながら、私は壁に寄りかかって待つてお

く。

しばらくすると、フリスクは携帯をしまつてこちらに走りよつてきた。

「ママが余計な物は拾わないでねつて言つてたよ」

「そつか…伝言ありがとう、フリスク。」

「ううん」

……余計な物、ねえ……ないと思うけどなあ。

そう考えながら先を進んだ。

*YOU WON!

あなたは勝利した!

*You earned OXP and 10 gold.

部屋を移動した途端に現れたベジトイド達の弾幕を切り裂き、しのいでいると、条件を満たして『MERCY』を押したのか、戦闘が終了した。

……弾幕、切り裂けるのか。これは一考する必要があるな。

さて、次は……ああ、二人目の子の装備があるところか。あとナプスタ君がいるんだっけな。

そう思いながら、石板を読み終わったフリスクに話しかける。

「流石に穴の数が多いから、ここからは二手に別れよう。私は左側を調べるから、フリス

クは右側を頼んでいい？」

「うんっ、いいよー！」

「それから、何かあつたら拾つて来ること。いいね？」

「……うん」

フリスクにはナプスタ君とリボンがある右側を任せ、私はリュックを下ろして一番端の穴に飛び込む。一瞬の浮遊感の後、木の葉の上に着地する。……なるほど、コレがクツシヨンになつてて下手に降りても怪我しないようになってんのか。

ふと左に目を向けると、ベジトイドが地面に埋まるようにして隠れていた。

……ちよつと試したいことがあるんだよな…

「ねえ、ベジトイド君。ちよつと話があるんだけど」

私はその声をかけながら彼の緑色のところをもつて引っこ抜く。

「…野菜が話す訳ないだろ」

「あるでしょ、君はモンスターなんだから。それとも何、マンドラゴラのこと知らないの？」

「……なんだそれ」

ぶらぶらと揺れながら興味を露にするベジトイド君。

「地上ではね、マンドラゴラっていう植物があるの。成分は植物なんだけど、ちよつと人

間っばい……私みたいな形をしてるの。で、引っこ抜くとキーキー大音量で泣くついで……まあ、多分君の種族がモデルなんだろうね。そういうのが一応あるよ」

「…俺たちは引っこ抜かれても泣かないぞ」

ちよつと呆れながらそういうベジトイド君。

「まあそうだね、現に引っこ抜かれてるし。……さて、これで植物は泣く……もとい話すということが証明された訳だけど、話を聞いてくれるかな？」

そういうと、彼はじつと私を見てから頷いた。

「ありがとう。じゃあさ、ちよつと頼みたいんだけど……」

「お姉ちゃん！」

「おー、おかえり。何かあった？」

ベジトイド君と別れ、壁の穴（無事通れた）を通って上に戻ると、すでにフリスクが戻ってきていた。手には色褪せたリボンを持って。

「……それ、どした？」

「これ？落ちてたの」

その穴に、と言いながらフリスクは私が落ちた穴と反対側の穴を指差す。

「そっか。……それ、むすんであげよっか？」

「いいの？ やって！」

私にリボンを手渡し、後ろを向くフリスク。どうやら髪に結んで欲しいらしい。かわいいなと思いつながら、私はじっとリボンを見つめる。

……どんな経緯で落としたか知らないけど、持ち主に返してあげたいな……

「……？ お姉ちゃん？」

「あ、ごめん、なんでもないよ」

……ごめんね、ちよつと借りるね

心の中で持ち主に謝ってから、私はフリスクの髪にリボンをほどけないようにキツく結んだ。

「出来たよ」

「ありがとう！」

嬉しそうに笑うフリスク。激かわ。

さてと、心も癒されたことだし、スイッチ押しに行きますかね。

「じゃあ私はこっち行くから、そっちよろしくね」

「まっかせて！」

フリスクがサムズアップしたのを見てから、私は落ちた。

ゲーム通り、そこはスイッチ部屋になっていた。

……これを下ろせばいいんだよね？

「よいせつ」

ガコン

何かが作動する音がした。十中八九、次の部屋に進めるようになったんだろう。

そう思いながら穴を通って上に戻る。今度は私のほうが先だったらしく、誰もいなかった。

「お姉ちゃん！オバケさんに会えたよ！」

しばらくすると、フリスクが興奮しながらかけてきた。

「なー？また会えるっていったろー？」

「うん！」

可愛いなと思いつつフリスクの手を取り、先へ進んだ。

12. 顔の良く似た

〔Flowe y〕

ドサツ

ああ、また誰かが落ちてきた。

そう思いながら僕は口角を歪める。

次はどんな奴だろう？

何処までも優しい偽善者ぶった奴？

それとも最初つから殺しにきてる奴？

それとも……ゼーんぶ知ってて楽しんでる奴？

まあ、どれでもいつかと思考の隅に押し込んで、僕はやって来たソイツに笑みを作つた。

「Howdy! 僕はFlowe y、お花のFlowe yさー!」

いつも通り、アイツはママに助けられ、僕は部屋の隅に吹き飛ばされた。さて、コイツはどんな風に進むか見極めてやろうと考えていた、その時だった。

ドサツ

「……………え？」

何かが落ちてきた音がした。

どうして？なんで？

だって、今まで……………

九人目が落ちてくることなんて、なかったのに

僕が知ってるのは、アイツ一人が落ちてきて、そこから何回も、何回も繰り返すはずだったのに。

なんで……？

ママと一緒に出来た九人目が、Charaにそっくりなのさ……？

ガコン

仕掛けを作動させる音が響く。

Charaに似てるあの子はアイツと協力しながらパズルを解いていく。

黒く長い髪を揺らし、あの服の柄のパーカーに片手を突っ込んで。

時には笑って。

時には守って。

……時には、優しい笑顔でアイツの頭を撫でて。

……もし、あのままCharaが生きていたら、あんな風に背の高い人になっていたのかな、と思うと、何も感じなくなったはずの心の何処かがズキリと痛んだ。

「××これじゃない?!」

××どういいながらあの子は支柱の裏にあったスイッチを押す。また音がして針山が下がる。

「すごいね!」

「いいや、そんな事ないよ。さ、行こう」

素晴らしいながら、純粹に尊敬するアイツの手を取って先に進んでいく。

……ますますCharacterにそっくりだ。本当にCharacterなんじゃないかと勘違いしそうになる。

……でも、疑問が出てくる。

どうしてアイツの傍にいる?

どうしてアイツを守っている?

どうして生きている?

どうして、なんで。

なんで

なんで

……今頃、やってきたの？

ねえ、わからないよ。

どうして君がCharraの生き写しで。どうして君がその子の姉で。

何を望んでいるのか。

「どうして、君は……」

自分が傷ついてても、その子を守ろうとするの？

僕が混乱していると、ふと、彼女は、振り向いて、

僕と、目が合った。

〔Lily〕

なんか視線感じて振り返ったらフラウイーがいた件について。……あー、そう言えばフラウイーストーキングしてるんだっけか？こええよ。

……あ、引っ込んだ。

「お姉ちゃん？どうしたの？」

「あー……いや、なんでもないさ」

まあ、怖がらせる訳にもいかないし、フリスクには黙っとくとして。

……次でやっとHomeにつくんだっけ。で、その道を真っ直ぐ行くと玩具のナイフが見つかるんだったか。……フリスクが寝てる間に回収してくるか。

部屋を移動し、すぐに左に曲がってまた進む。

「ああ、思っていたより時間がかかったわ。」

ゲームと同じ台詞が聞こえてきた。トリエルさんが来たのだ知って安心する。

電話をかけようとして、トリエルさんはこっちに気づいた。

「どうやってここまで来たの、我が子よ？怪我はない？」

フリスクは首を横に降る。その後、私を指差してパクパクと口を動かした。

「……お姉さん、怪我をしたの？見せて頂戴」

「ああ、こんな程度大したことじゃ……」

「見せなさい」

「………はい」

トリエルさんが怖い顔で言うもんだから逆らえなかった。袖を捲って傷口を見せる

と、傷口を見たトリエルさんは消毒液と包帯を取りだし、さつと応急措置をしてくれた。
「……この程度の傷に包帯って、ちよつと大袈裟じゃないか？」

「これで大丈夫ね」

安心したように笑うトリエルさん。……ああ、なるほど。そういうことか。

「……こんな長い時間放っておくべきじゃなかったわ。こうやって驚かそうとするなんて無責任だったわね。」

何を？と言わんばかりにフリスクは首を傾げた。

「……もう隠しきれないわね。おいでなさい、我が子達よ！」

そう言つてトリエルさんは家のなかに入っていく。

「……ママは何を用意してくれたんだろう？」

「さあね？……でも、少なからずいいものではあると思うよ」

「そつかあ……お姉ちゃん、早く行こう！」

「はいはい」

『いいもの』という単語に目を輝かせ、フリスクは興奮して私の手を取つて走り出した。その足がセーブポイントで止まり、フリスクはぼんやり浮かぶ光に触れる。

……これもよく分かつてないんだよな。何で私にも見えるのか。

しばらくすると、フリスクはまた走つて家の中に飛び込んだ。

13. 考察と狂愛

〔Lily〕

あの後、ゲーム通りにCharaちゃん（もしくはアズリエル君）が使ってたのであろう部屋に案内され、フリスクはキョロキョロ部屋を見渡し、少し周りを調べてからベッドの上でうとうとしはじめた。

「……眠いなら寝たほうがいいよ」

「……うえ？うん……」

めっちゃ眠そうだな可愛いすぎか。

靴を脱いで本格的に眠る体勢に入ったフリスクの傍にいき、頭を撫でてやる。

「寝るまでこうしてようか？」

「うん……おやすみ……」

「おやすみフリスク。いい夢を」

布団を被ってフリスクは目を閉じた。……ちよつとすると、すぐに寝息が聞こえ始めた。

…慣れない戦闘とかで疲れたんだろな。ゆっくり休んで欲しいものだな。

フリスクの頭から手を退かし、部屋の電気を消して私は部屋から起こさないようにそつと出た。

「……おやすみ、フリスク」

そう言い残し、後ろ手でドアを閉める。

……さて、ここからは探索の続きだ。

私はトリエルさんに気付かれないように忍び足で外に出る。

無事外に出ると、私はセーブポイントの前に立った。

フリスクがしていたように、私もセーブポイントに触れる。

「……表示はされるのね」

ゲームと同じように、黒い画面が表示された。名前のところが白で塗り潰されたようになっていて、プレイ時間やセーブ場所なんかは見えるようになっていた。

「……プレイ時間少ないな」

これで『Player』が初心者であることは証明されたな。

……そして、肝心のセーブボタンはなくなっていた。

「私はセーブ出来ないのか」

まあ、それはそうだ。このゲームはフリスクに繋がってる『Player』が遊んでいるものなんだし。私がセーブ出来ちゃったら上書きしちゃうもんな。フラウイーが

セーブロード出来なくなったのもその理屈か？

………だとしたら、なんで私にも見えるのだろうか。

ゲームだった時、フラウイーにこの光が見えている描写はなかった。だから多分彼にはこれが見えてない。……元々セーブロードが使えた彼が見えないって事は、本来なら私にも見えるはずがない。なのに見えているということとは……【私が元々Player側の人間だったから】、ということか？

一番可能性が高い仮説を一つ出し、取り敢えずリュックから引つ張り出したノートに書き込んでいく。

……もう一つ、忘れないうちに書き込んでおこう。

ベジトイド君に協力してもらった実験の結果についてだ。

あの時、私は一つの仮定を立てていた。それは、【弾幕は物質・物体の法則を無視していない】んじゃないかというものだ。

だから、ちようどいい弾幕を持っていた彼にいくつか弾幕を出してもらい、実際に切ったりしてみた。

…概ね予想は当たっていたようで、玉ねぎ型の弾幕は切ると目に沁みる液が出るし、とうもろこし型の弾幕はカッターが刺さって抜けなくなった。まあ、なんとか抜けたが。

……この事から考えると、トリエルさんのあの炎の弾幕は、当たり所が悪ければ最悪火だるまになる可能性がある。それだけは絶対に阻止しなければ。

ゲームとはやはり違う、ということまでを書き込んで胸が痛くなる。……frisはこの痛みに耐えていたのかと思うと、本当に辛かった。

ノートとペンをしまい、リュックを背負いなおして私は部屋を移動した。

「……………あつた」

玩具のナイフは、ぽつんと忘れ去られたように部屋の隅に落ちていた。

拾い上げ、ついていた汚れを払う。……やっぱ材質はプラスチックだ。軽い。

「……………ごめん、借りるね」

そう誰に言うでもなく呟いて、私はポケットに玩具のナイフをしまった。

「……………Character?」

ぼつ、と声が出た方に振り向く。……あるかなとは思ってたけど、まさかここで会うとは思わなかったよ。まあ、一人だし、接触はあるかなと思っただけ。

「……………どちら様かな、喋るお花君?」

フラウイー。

【Fl o w e y】

「……………どちら様かな、喋るお花君？」

振り返った彼女はにっこりと笑いながらそう言った。

……………ああ、なーんだ、やっぱりCh a r aだ。

「覚えてないの？僕だよ！A s r i e lだよ！忘れたフリなんて酷いじゃないか！」

僕がそう言うのと、Ch a r aは笑顔を苦しそうに歪めた。

「……………私は君の言うCh a r aって子じゃないよ」

そう言った。

「ねえ、ここにアイツはいないよ？何で嘘つくの？」

「嘘じゃないよ」

「嘘だよ」

ねえ、何で？何でそんな事言うのさ？

「ねえどうして僕の傍にいてくれないの何でアイツの傍にいるのねえ僕をみてよ僕だけを見てよねえその笑顔を僕だけにちようだいよ僕だけに向けてよ僕を抱きしめてよ僕を撫でてよ僕を僕だけを僕だけを僕だけを愛してよ」

僕が近づくと、Ch a r aはその分だけ後退りした。心なしか顔が青い。

「……………どうして逃げるの？」

「……お前、そんなに狂ってたっけ……？」

何でそんな事言うのChara。僕は狂ってなんかいないよ？

「ねえ、また世界を壊してよChara。そうすれば……」

「……………ごめん、お花君。私には君が何言ってるのかさっぱり分からない」

そう言つてCharaは呆然とする僕の横を通りすぎていった。

【Lily】

何あのフラウイー怖い。

全速力でHomeに戻ってきた私は息を整えながらそう思った。

何でアイツあんなに狂ってるの？ゲームではもうちよつと大人しかったっつーか生意気だったけどあそこまでCharaちゃんに執着してなかったよね？何であんなになつたし。こええよ。

……………つか気になる言葉言つてなかったか。『また世界を壊して』って……『Player』は初心者じゃないのか？いや、それだとさつき見たプレイ時間との矛盾が産まれる。…………『Player』が裏技使つた可能性？でも、プレイ時間は弄れなかつたはず…………

とんでもない爆弾が落とされ、混乱する頭を深呼吸して落ち着かせる。

……それは取り敢えず置いておこう。まだ試していない事がある。まずはそっちだ。矛盾について凄く違和感を覚えつつ、それを後回しにして、私はホームの探索を続けた。

14. 会話と過去

〔Torrie〕

これは夢だ、と思った。どうして、とも思つたわ。

〔Chara…?〕

さつき襲われていた我が子の姉と言うその子は、Charaにそっくりだったのだから。

ぱつちりと開かれた瞳。

ピンク色の頬。

にっこりと笑う口元。

この地下にあの子が帰つて来たときまで勘違いするぐらい、そっくりだった。

あの子があのまま大人になつていたらこんな美人さんになつていたのかしら、と思つた。

「初めまして、私はこの子の姉のLilyと言います。よろしくお願いします」
礼儀正しく自己紹介をしたあの子とそっくりな彼女は、Lilyと名乗った。

「Torrieさん」

本を読んでいると、ひよっこりと彼女が顔を出した。服の破れた所からチラリと見えた包帯が少し痛々しかった。

「あら、どうしたの我が子よ?……あら……?」

「ああ、妹なら疲れてしまったみたいで。ベッドちよつとお借りして眠ってます」

「そうなのね」

妹さんの姿が見えないと思ったら眠っていたのね。後でパイを持って行かないと。

「……あの、Torrieさん」

「何かしら?」

少し顔を伏せてから、彼女は私にこう問いかけた。

「…私って、誰かに似てますか?」

【Lily】

トリエルさんの目が少し見開かれた。……やっぱりつつーかなんつつーか、Charaちゃん似なんだなこの顔。

「…どうしてそう思ったのかしら？」

「いえ、なんとなくなんですけど……もしかして合っていました？」

「ええ、昔此所にいた子に……。もしかしたら親戚だったのかもね？」

「そうですねー」

まあ、これでこの顔はCharaちゃん似ということに確信が持てた。……でも、それだけだとフラウイーがあそこまでご執心（というよりも狂ってた？）だった理由が分からないんだよね……。どういうことだ？

……つーか、Charaちゃん似ってことは、私、もしかしたらサンズに警戒される可能性が出て来たな……。どうするかな……。……

「……あ、すみません、空き瓶ってありますか？」

「あるわ、それがどうかしたの？」

「いえ、もしよろしければ一つ頂けないかと思ひまして」

「ああ、それなら台所にあるから持って行っていいわよ」

「ありがとうございます」

よっしゃ、空き瓶ゲットだぜ！……ネタはおいといて何に使うかって言うのと、トリエルさんの炎弾幕対策だ。火には水ぶっかければいいんじゃないかと。それに、もし弾幕が被弾してもすぐにかければ火だるまは防げるし火傷をすぐ冷やせる。……まあ無い

よりマシかなと。

……あ、あつたあつた。

流し台の傍にあつた空き瓶に水をいれ、蓋を締める。水が入って結構重くなつたけど、振り回す分には問題なしと判断する。……振り回すで思い付いたけどこれ鈍器にもなるじゃん。こつわ。

水ぶっかけること以外に乱用しないことを肝に銘じ、水入り瓶を持って部屋に戻る。フリスクはまだ眠つていた。

リュックの中のドーナツとかを潰さないように水入り瓶をいれる。……あ、そうだ。トリエルさんの部屋探索してねえや。

改めて部屋を出て廊下を歩く。……あ、ガマだ。前世（そもそも死んだっけ？）ではよく用水路とかに生えてるの見かけたけど、今世では生では初めてみたな。確かウォーターソーセージとか言われてるんだっけ？

カチャリ、とドアを開けて中に入る。ゲームとほとんど同じように、部屋は水色で統一されていた。

………棚の上に飾つてあるキンポウゲの花が結構目立つ。

棚から目を放し日記を覗きこむ。……これプライバシーの侵害だよな。トリエルさんごめんさい、許して。

ゲーム通り丸が着けてあるところには寒いギャグが書いてあった。……これ一応サ
ンズのこと書いてあるんだったつけと思しながらページを捲って目を遡る。あ、あつ
た。……ふうん、そんなギャグ言ったんだ。相変わらず寒いなオイ。でもトリエルさん
には結構嬉しい出来事だったみたいで、読んでいるこっちにも伝わるぐらい嬉しそうに
書いてあった。

それから遡ると、七人目の子の事が書いてあった。

……ああ、あの子はアズゴア王に怒って出ていっちゃったのか。話すんじゃないか
という後悔が書いてある。

……まさかゲームでは見れなかった他の子達の事が書いてあるのか？

気になって遡ると、六人目の子の事が書いてあった。ビンゴらしい。

……その子は自らアズゴア王にソウルを渡しにいったらしい。ああ、確かその子のソ
ウルは緑色（優しさ）だったつけか。止めたけど出ていってしまったと書いてあった。

また遡る。次は五人目の子の事だ。

……Ruins中を探索しつくして、新しい知恵を求めて抜け出してしまったら
しい。寝てる間に抜け出してしまったと書いてある。涙を溢したのか、ページが
少しよれていた。

ページを捲る。四人目。

……今度は堂々とトリエルさんに頼み込んで出ていってしまったらしい。止められなかったとまた後悔している文が書いてある。

またページを捲る。三人目。

……大丈夫だと勇んで出ていってしまったと書いてある。もつと強く引き留めれば良かったとまた後悔している。

捲る。二人目。

……何日か一緒にいたが、我慢の限界で出ていってしまったとある。……また、後悔している。

ページをもつと遡ると、とあるページが目に残る。……Charaちゃんとアズリエル君が死んだ日の事が書いてあるページだ。

そこには、さつきみたページの倍以上に気持ちが伝わってくる。

どうして気づけなかったのか。

どうして止められなかったのか。

もつと、私がしつかりしていれば。

……こちらまで、辛くなるような日記だった。

そして、その最後の一行には。

次に落ちてきた子達を絶対を守るという固い決意が記されていた。

……この決意を抱き続けていたからトリエルさんは今まで壊れられずにいたのかと、何処かで妙に納得する。そして、改めて彼女を尊敬した。

母であり続けるという事は辛い事だ。時には人を狂わせてしまうことだつてあると私は思う。それをトリエルさんはずっと続けてきたんだ、凄い事じゃないか。

日記を赤丸がついているページまで戻し、私は部屋から抜け出した。後ろ手でドアを閉め、次の部屋に向かう。

「……私だ」

途中であつた鏡を覗き、私の顔を確認する。本当にC h a r aちゃん似だなこの顔。鏡から離れ、ゲームでは開かずの扉だったドアをノックする。

コン、コン、コン

………返事はない。

ドアノブに手をかけて開けようとしても開かない。まあ、ここはやっぱりゲーム通りだよな。

諦めて部屋に戻ってくる。まだフリスクは寝ていた。……これ寝すぎじゃね？大丈夫？

ノートに二人目から七人目の子の脱出理由とフラウイーが狂っていて、そして気になる事を言っていた事を書き込む。

リュックの中にノートとペンをしまい、私はベッドに寄りかかって目を閉じる。……
色々ありすぎてちよつと疲れた。休もう……
私の意識は黒に落ちた。

15. トリエル戦前

[???)

……聞こえてるよね

何処からか聞こえる声に頷く。頷こうとする。意思は示せただろうか。

……伝わってるから大丈夫だよ

……驚いた。心が読めるのだろうか。

……うん、そうだよ

まるでエスパーだと思う。一体何者なのだろう。

……エスパー？あははっ、面白いね

笑い声が響く。…そうだろうか。自分はずまらない者だと思うのだが。

……自分？自分ってなんだ？

……ああ、やっぱり混乱するよね

……知っているような口振りだ。何か知っているなら、よければ教えてくれないだろうか。

うか。

……いいよ、落ち着いて聞いてね。君は……

【Lily】

揺さぶられる感覚で目が覚める。……つかまたなんか変な夢みたな。なんだあれ。めっちゃ気になる所で終わったな。

「お姉ちゃん？」

「……ん、おはようフリスク。よく眠れた？」

「うん」

頷いたフリスクの顔色を確認する。……暗い、よくわからん。

立ち上がって電気をつけ、今度こそ確認する。……うん、健康的な色だ。

「ねえ、パイが置いてあったんだけど、これって……」

「ん？……ああ、カタツムリパイじゃないよ」

シナモンのいい匂いがするし、と付け足せば、ほっと安心したような顔をするフリスク。……バタースコッチシナモンパイか。そう言えば水入り瓶回収に行ったとき、切られてないパイがあつたな。これか。

「二切れあつたから多分お姉ちゃんのじゃないかな？」

私のもあるのか。ちよつと目を丸くする。……まあトリエルさん優しいし、差別するような事はしないわな。つかカタツムリパイで思い出したけどどうやって作って

るのか疑問な件について。エスカルゴの要領で作ってるのか……？だとしたら美味し
そうではあるけど結構ゲテモノだよな、それ。

そんな余計なことを考えながら台所から失敬してきた袋にパイを入れる。取り敢え
ず紙見つけてくるんだチーズは……一緒にこの中突っ込んだくか。

「あれ、このチョココどうしたの？」

「……ああ、トリエルさんにもらったんだ」

「そうなの？」

嘘です。失敬してきました。……なんか必要な気がしたんだよ。

食料をしまつてリュックを背負う。……あ、ちよつと重くなつた。

「行く？」

「うん、行くこう」

フリスクはドアを開けていった。多分、トリエルさんのところだろうか。

廊下を歩いて居間に顔を出す。フリスクがトリエルさんを質問攻めにしていた。

……あー、これあれか、トリエルさんに地上に行きたいって言うやつか。

最後まで問答をしたのだろう、トリエルさんが怖い顔をして立ち上がり、そのまま無
言で私の横を通りすぎていった。

「……ママどこ行っちゃったの？」

「さあ……？」

知ってるけどすつとぼけておく。フリスクは私が探索したトリエルさんの部屋を見に行った。

しばらくすると、フリスクがドアを開けて戻ってきた。

「居た？」

「ううん……」

「じゃあ、ここにしかないね」

地下に続く階段をみる。……ここから先はトリエルさんはきつと容赦をしない。『P layer』は正しい道を選んでくれるだろうか。

「……行くこう」

フリスクは覚悟を決めたのか、階段を降り始めた。私も後を追って階段を降りた。

階段を降りた先にはトリエルさんが居た。

「……お家へ帰る方法が知りたいのね、我が子達よ？」

こくり、とフリスクは頷いた。

「この先に遺跡の出口があるの。外の地下世界に繋がる一方通行の出口」

静かに語るトリエルさん。

「私はそれを取り壊そうと思うの」

ぎよつと驚いたような顔をしたフリスク。……実際に聞くと絶望するなこれ。結構心にくる。

「ここからまた誰かがいなくなってしまう事のないように。だからいい子にして上の階に戻ってちょうだい」

先へと進んでしまったトリエルさんを追いかける。

「……………ここに落ちた人間はみんな同じ運命を辿っていくわ。私はそれを何度も何度も見てきたの」

追い付いた先でトリエルさんは私達に背を向けたまま冷たい声でそう言った。

「やってきて。去って行って。死ぬ」

冷たい声のままそう吐き捨てたトリエルさん。……こええな、さつきまで優しくかったから尚更だ。フリスクは顔を強張らせた。

「何も知らないのね……………もしルインズから出たりしたら……………」

憐れむような声でトリエルさんは続ける。

「あいつが……………アズゴアが……………あなたを殺すわ」

アズゴア王の名前を言った瞬間、これ以上なく憎々しげだった。……彼に対する情はちよつと残っているようだけど。

「私はあなたを守っているだけなの、わかっただけなの……部屋に戻りなさい」

最後はまた冷たい声でトリエルさんはそう言った。フリスクはちよつと戸惑ってから、またトリエルさんを追いかける。私も後を追った。

「私を止めないで。これが最後の警告よ」

曲がり角で追いついたトリエルさんはそう言って早歩きで奥へと進む。

「……フリスク、ここから先はきつとこれ以上なく辛い戦いになる。でも、絶対に殺さないでね」
『F I G H T』は使うなよ

「……え？」

廊下を進むフリスクにそう言っておく。

「……ここまで誰も殺さずに来れたのはトリエルさんのおかげでしょう？ だったら、トリエルさんを殺さず『見逃す』のは当たり前じゃない？」

振り向いたフリスクは少し考えてから、そうだねと頷き、また歩きます。

……さて、ヒントはあげた。あとは『Player』にこれが伝わっていればいいんだだけ。伝わるかわからないが。……まあ最悪私が身を呈してでも止めるけどね。

……遺跡の最深处。トリエルさんはこちらに背を向けたまま言葉を紡ぐ。

「そんなに……から出たいの？……まったく。あなた達も他の人間と変わらないのね」
 呆れたようにトリエルさんは言う。

「一つだけ方法があるわ。私に証明してみなさい……生き残れるだけの強さがあると」
ふと、

『お願い、もう誰も喪いたくないの!』

そう言いながら泣き叫ぶトリエルさんを幻視したような気がした。

世界が、白黒に切り替わった。

16. トリエル戦

* Toriel block the way!

戦闘が始まった。私はフリスクの前に立って玩具のナイフとカッターを両手に持つて構える。ピクリとトリエルさんの眉がかすかに動く。……この玩具のナイフをみて思う所があつたんだらうな。

* TORIEL ATK 80 DEF 80

* Knows best for you.

調べるを押したのかアナウンスが流れた。……フリスクにとっての一番、ね。

トリエルさんの手から炎の弾幕が放たれる。一直線にこつちに飛んできたそれをナイフを振り回して消す。フリスクに一発でも被弾させるものか。

「あつっ!」

「お姉ちゃん!?!」

「おー、大丈夫よ、かすっただけ」

じゅっ、と嫌な音を立てて服にかすった所が焦げた。……まあ、そりゃ熱いだろうと覚悟してたけどね。

*Toriel prepares a magical attack.

…あくまでも冷徹に振る舞うつもりらしいと見当をつける。動くのに邪魔なりユツクを降ろし、水入り瓶を取り出す。

* You couldn't think of any conversation to pi

「フリスク、これ持ってて」

「え？分かった。」

……話すを押したのか。そう思いつつ両手の武器に水をかけ、水入り瓶をフリスクに預ける。そして、武器を構え直した。

交差する炎の弾幕が放たれる。フリスクを引き寄せて回避し、当たりそうになった炎をカッターでかき消した。……心なしか水かけとけばそこまで熱くないことに気がついた。

「あちっ」

消しきれなかった炎が頬を掠めていった。火傷したのか、少しピリピリする。

* You tried to think of something to say again

また『ACT』を押したらしい。ナイフをフリスクに預け、水入り瓶に持ち替える。

炎の弾幕が一直線に向かってくる。それを水をかけて消火した。……これやめよ、水がめっちゃ減る

そんなことを考えていたら、一発炎が私に向かつて真っ直ぐ飛んでくる。咄嗟に左腕を盾にしてダメージを減らす。

ジュツ

「お姉ちゃん!!」

「あち……」

直ぐ様水をかけて服についた火を消す。すぐに水をかけたのが幸をなしたのか、火傷はそこまで酷くなかった。

* Toriel looks は目を反らして through you.

さっきの一発がトリエルさんの心にダイレクトアタックをかましたのか、アナウンスがそう流れる。

* Ironicaly, talking does not seem to be the solution to this situation. 《皮肉なこと
に、この状況ではどんな言葉も意味を成さないようだ》

……さて、そろそろか。そう思つて水が滴るカッターとナイフを構えた。

周りを逃げられないように囲まれ、そこから私達に向かつて炎が飛んでくる。

守りきれないかもと一瞬弱気になるが直ぐに持ち直して両手を振るう。……今度は二発着弾した。水をかけて消火する。

*Toriel looks thorough you.

目を反らしていながらも、私達を守るために冷徹に振る舞おうとする彼女に尊敬の意を抱いた。

……でも、なら今までどうして背後にあるドアを壊してしまわなかったのだろうか。ふと、そんな疑問が頭を掠めた。

そこまで落ちてくる人間達の事を考えているのなら、七人目の時に壊しておけばよかつたんじゃないか、と思いながらトリエルさんを見据える。

アナウンスは考えているうちに流れたらしく、また炎が飛んでくる。……今度は私達に当たらないように。

あれ、と思いフリスクを見ても怪我はしていない。ダメージそんなに受けてたか？と思つて体を見る。…あ、これ重症だわ。

のんきに考えていると弾幕が止む。

*Toriel is T. R. i. e. l. i. s. は 冷 徹 に 振 る 舞 っ て い る acting aloof.

……当てないようにしてるの分かつてるからいまいち説得力ないなと思いつつも警戒してナイフを構えた。

何回炎を見ただろうか。少しブーツとする頭で考えた。

『Player』はどうやら気がついていないらしい。どうするか……

フリスクを見ると、涙目になってもうどうしたらいいのか分からなくなっている様子だった。

もう自棄になったのか、P l a y e rフリスクは『M E R C Y』を押しした。

『……?』

会話が進んだ。フリスクははつとしてトリエルさんと『M E R C Y』ボタンを交互に見た。……ああ、本当に良かった。『Player』は正しい道を選んでくれた。

また炎が飛ぶ。私はそれを見ながら武器を床に落とした。からん、とナイフとカッターが床に落ちた音がした。

……トリエルさんと戦いたくないというせめてもの意思表示だ。

*T o r i e l l o o k s t h r o u g h y o u .

ピツ、と背後でボタンを押し音がした。

『何をしているの?』

少し驚きを顔に滲ませながら、トリエルさんは威圧するような顔でそう言う。

炎が飛ぶ。私は両手を下ろし、トリエルさんをじつと見つめた。

*Torriel is acting a loof.

また背後で音がなった。

『攻撃するか逃げなさい!』

「嫌ですよ」

私はそこで口を開いた。

「一番最初に貴方が教えてくれたんでしよう、仲良くお話すればいいのよ、つて。私達はそれを守っているだけですよ」

そう言つてまたじつとトリエルさんを見つめる。……言葉に詰まったのか、トリエルさんは驚いたような顔をしてからそつと目を反らした。

*Torriel i——『ピッ』

アナウンスが流れきらないうちにfrisくが『MERCY』を押したらしく、アナウンスがぶつたぎられた。

『そんなことをして何になるの?』

「貴女を傷つけないですみますし、あとそうですね、貴女との約束を破らないですみます」

「……!」

即言い返すと、トリエルさんは驚いたような顔をし、辛そうに顔を歪めた。……心が

動いてきてるな、ここらで畳み掛けるか？

* Toriel lo——『ピッ』

またアナウンスが切られる。フリスクを見ると、確信した顔で『MERCY』のところに手を置いていた。

『私と戦うか去りなさい！』

「だから嫌だつて言ってるじゃないですか！」

私は声を張り上げる。

「確かに外には出たいですよ。でも、貴女はここに落ちてきて一番最初に私達に優しくしてくれた。危ないと判断して手を引いてくれたり、美味しそうなパイを焼いてくれたり。……そんな貴女を、傷つけることなんて、出来ませんよ……」

……あ、言つててちよつと恥ずかしくなってきた。というか臭いなこの台詞。映画かっつーの。

トリエルさんは動揺を顔に表し始める。

*……Toriel is——『ピッ』

また遮られる。……なんか今のアナウンス、妙な間が出来なかつたか？気のせいか？『やめなさい』

炎が飛んでくる。でも、最初に比べると大分数が少ない。……確かモンスターは心情

によつて攻撃力と防御力が下がるんだっけ。それかな？

*Toriel is——『ピッ』

また間髪いれず『MERCY』が押される。もう体の緊張は解けていた。

『そんな目で見ないで』

トリエルさんの顔がどんどん悲しそうに歪んでいく。……彼女の気持ちを考えると目をそらしたくなるが、その気持ちを振り払つてトリエルさんの目を見つめ続ける。

*Torie——『ピッ』

ついに名前まで最後まで言わせてもらえなくなつたぞ。余計な事を考えて笑いそうになるのを噛み殺し、私はトリエルさんを見つめた。

『あっちへ行つて！』

トリエルさんの突き放すような言葉を無視し、私は炎の中を一步づつゆつくりと近づいていった。

*Tori——『ピッ』

歩きながら頭の中で流れたアナウンスを聞き流し、また一步進む。

『……』

トリエルさんは私から目を反らす。また一步。

*Tori——『ピッ』

『……………』

顔がまた悲しそうに歪む。止まりそうになる足を無理やり動かしてまた一歩近づいた。

*T o r——『ピッ』

あと、数歩。

『あなた達がお家に帰りたいのはわかるわ、でも……』

トリエルさんが目を反らさずに話し始める。

*……………

ピッ、とまたボタンを押す音がした。

『でもお願い……上に戻ってちょうだい』

冷徹に振る舞おうという雰囲気はもうなく、彼女は悲しそうにそう言った。

*……………

ボタンを押す音がする。

『ちゃんとお世話するって約束するわ』

炎の雨ももう降る様子はない。ただ、悲しそうに微笑みながらトリエルさんは言う。

*……………

ボタンを押す音がした。

『あまり豊かな場所ではないけれど、それでも……』
あと、もうちよつと。

*……………

ピツ、という音がした。

『……でならきつといい暮らしが出来るのよ』

……トリエルさんは、本当に私達の事を考えて言ってくれている。でも……

*……………

また音がした。

『どうしてそう話を難しくするの？』

本当に悲しそうに顔を歪めるトリエルさん。

*……………

ピツ

『お願いだから、上に戻って』

トリエルさんの前に立った。

*……………

ピツ

『……………』

悲しそうに彼女は俯いた。私はそれを覗き混む。

「お母さん」

「……………」

「お願い、行かせて」

私がお母さんと呼ぶと、彼女は驚いたようにしてから、また顔を伏せる。

ピッ、と音がした。

『はは…………』

彼女の口から乾いた笑みがこぼれた。

ピッ

『情けないわ…………子供のふたりも守れないなんて』

「ううん、お母さん。あなたはちゃんと守ってくれてたよ」

貴女の約束がなかったら多分、フリスクは今頃…………そう考えるとゾツとする。

ピッ

『…………』

「ねえ、お母さん」

また目を反らしてしまったトリエルさんに笑いかけ、

「ありがとう」

そう言った。

ピッ

『……………いいえ、もう分かったわ』

俯いていたトリエルさんが声を出した。

『ここに囚われていても、あなたは不幸なだけかもしれない。ルインズはあなたにとつてはあまりにも小さいもの。こんな場所で育つのは間違っているのかもしれない』

トリエルさんは覚悟した顔でこつちを見る。……………いつの間にか、フリスクが私の横に立っていた。

『私の期待……………私の孤独……………私の不安……………』

そこで、トリエルさんの目から涙が落ちる。

『あなたのために全て忘れるわ、我が子よ……………』

につこりと彼女が笑った瞬間、彼女が私達を思つて溢した涙が地面に落ちる。

世界に、色が戻ってきた。

17. Ruins 脱出

「あなたが本当にルインズを去りたいのなら……私は止めないわ」

トリエルさんは私達に背を向けて話し始める。

「でも、あなたが去るときは……どうかここに戻ってこないで欲しいの。分かってくれるかしら」

フリスクは何故？と言いたげに首を傾げ、それから頷いた。……多分、またここに閉じ込めてしまいそうになるからだろうか。

その瞬間、目の前が藍色に染まる。

「わっ」

キンポウゲのいい匂いがして、抱きしめられたのだと気がついた。……安心するけど、すげえ照れるなこれ。

しばらくすると、トリエルさんは名残惜しそうにしながら

「……さようなら、我が子達」

「さよならじゃないよ、お母さん。……『またいつか』、です」

トリエルさんの言葉を訂正する。トリエルさんは驚いたように目を丸くしてから、

ふっと笑って「そうね」と言った。

「またいつか会いましょう、我が子達よ」

初めて会ったときと同じ優しい笑顔を浮かべ、トリエルさんは去っていった。

去っていったのを見送って、私は床に落とした玩具のナイフとカッターを拾ってポケットにしまいなおした。

「お姉ちゃん……」

「ん？どうした？」

「やけど……」

リュックを持ってきてくれたフリスクが心配そうに見上げてくる。……あ、そう言えば私火傷してるんだっけか。そう自覚するとあちこちがピリピリと痛み始めた。

「あー、こんくらい大丈夫だよ」

「でも……」

「それよりフリスクは火傷してない？」

「あ、うん、ぼくは大丈夫」

ざっとフリスクを見て何処も怪我してない事を確認して安心する。

「じゃなくて、お姉ちゃんのことだよ！」

珍しくフリスクが声を張り上げる。誤魔化せなかったか。

「もう、昔っからそうなんだから……これ食べて」

ぷりぷりと怒りながらフリスクはリュックを漁ってバタースコッチシナモンパイを出す。ああ、回復しろってことか？

「……別にお腹空いてないよ？」

「違うよ！いいから食べて」

すつとぼけても無駄でした。大人しく受け取って食べる。……あ、美味しい。優しい味だ。

食べ終わってしばらくすると、みるみる傷が治っていった。……あー、でも微妙に傷痕が残るのか。まあいつか。

フリスクは私の横辺りを見つめてほつと息をついた。……私のHPが表示されているのだろうか。

「うわ、何これ凄い。傷があつという間に治った」

知識では知っていても、通常ではありえないことに驚く。……まあ、セーブとかも通常じゃありえないことだけどね。

リュックをフリスクから受け取って背負う。瓶の中身が大分減ったのと、パイが一切れなくなっただけから結構軽いな。

「……さて、行くっ！」

「うん」

フリスクが頷いたのを確認し、私はドアを開けた。

ただひたすら長い色の変わる廊下を歩いて抜けると、日差しが当たる場所が。そこで待っていたのは大きな黄色い花。皆大好きクソ花君ことフラウイー君である。……つか日が当たるとってことは今昼間？

「賢いねえ。とつつつつつても賢いねえ」

うっわムカつく言い方。つか前会ったときは気にしなかったけど生意気な子供みたいな声してんなおい。

「ホントにおりこうさんだと自分でも思ってるんでしょ？」

「うちの可愛い妹がそんなナルシストみたいな事するわけないだろう!!」

「Charaはちよつと静かにしてて!？」

思わず真顔で言った。反省も後悔もしていない。

すさまじく空気読まない発言したとか呑気に思いつつ話を聞く。

コホン、とフラウイーが一つ咳をして話を続ける。

「この世界は殺るか殺られるかだ。でも君達はそんな世界で信念を貫いて」

そこでフラウイーは一旦言葉を切り、あの凶悪な笑顔を見せる。

「見事、一つの命を救ってみせたんだ」

……あ、やっぱりコイツ顔芸要員だなとか思いながら話を聞く。

「へへへ……さぞかし気分がいいだろうね？」

「だからうちの妹がそんな事思いうわけないだろ!!」

「Chara!?! 話の腰を折らないで!?!」

「ごめん、フリスクのことになるとつい言いたい事を言いたくなるの。そういう病気なの」

「どんな……?」

「病名：シスターコンプレックス」

「ただのシスコンじゃん!?!」

上から交互にフラウイーと私が話している。これもうただのコントや。

ぜえぜえと吐いていた息を整え、フラウイーは話を続けた。

「今回は誰も殺さずに済んだけど、もしこの先冷酷な殺人鬼に出会ったら?」

お前のようなか?と問いかけるがなんとか我慢する。ここで口を滑らしたら真面目な話収集が付かなくなる。

「きみは死んで死んで死にまくっちゃう、だろうね。きみが死に飽きちゃうほどに!」

純粹に見えるような笑顔でフラウイーはそう言った。

「そんなときみはどうするんだろうね？ 憂さ晴らしに殺しちゃうのかな？ それともこの世界から逃げて……」

ニタツ、とあの凶悪な笑顔をまた浮かべる。

「……世界を意のままにするその力を僕にくれるのかな？」

……。

「僕はこの世界の未来の王子様だ。」

え、自称しちゃう？ 自称しちゃうの？

言うわけにもいかないから頭の中でフラウイーを茶化しておく。

「ご心配なく、小さな陛下、僕の目的は国王殺しじゃない。もつともつと面白いことさ。」

そう言つてフラウイーはゲーム通り凶悪な顔で高笑いをあげる。

「そして……」

あれ、続きあつたつけ？ と思ひながら、フラウイーがうつとりとした表情で私を見る。

「Chara、君と今度こそ一緒に……」

……まだ勘違いしてんのかコイツ。ヤンデレも大概にしてほしいんだが。

そう言い残してフラウイーは地面に引つ込んだ。

横のフリスクを見ると、顔を真っ青にしてフラウイーがいたところを見ていた。

「……フリスク？」

私が声をかけると、フリスクはビクツと肩を揺らして反応する。

……めっちゃ怯えとるやんけ。何をしてくれてんのかなアイツは。次会ったとき（多分オメガフラウイー戦）あのアンテナへし曲げてやろうか。

「……フリスク、よく聞いて」

フリスクの前に回り、しゃがんで目線を合わせる。

「死に飽きちゃうほど死ぬ、なんてあの花野郎は言ってたけど、そんなことはおきないよ」

「……どうして？」

確信めいた私の言葉に疑問を持ったのか、フリスクはやっと私と目を合わせてくれた。

「私が君を守るからさ」

につ、と笑いかける。

「それにさ、きつと殺人鬼なんていないよ。ルインズをみて回ってた時、確かに攻撃はしてきたけど、皆友達になれたでしょ？だから、きつと大丈夫さ」

「……でも、もし、居たら……？」

あー、ここで食い下がってくるか。

「そのときはその時さ！行動不能になるまで殴って警察に突き出す!!」

「ええー、なにそれ……」

警察ないけどねこの地下！でもロイヤルガードさん達はいから大丈夫だろ！

サムズアツプするとくすくすとフリスクは笑ってくれた。

「おー、やっと笑った。やっぱフリスクは笑顔が一番だよ」

「そう？」

「そうさー！」

首を傾げるフリスクも可愛いな。頭を撫でながら立ち上がった。

「じゃ、行こうか！新たな新天地へ！」

「うんー！」

安心するように手を繋いで、私達は扉を開いた。

18. Shake my hand

〔Lily〕

扉を開けて最初に思つて口にした一言。

「ざつっつむ!!」

いや雪あるし一応覚悟してたけどさつむくない? 何これ。

「フリスクは寒くない?」

「うん、大丈夫」

フリスクが平気そうならいいけどさ……あー、パーカーの中を半袖にしてくるんじゃない? なかった……

私が寒さで少し震えていると、キョロキョロしていたフリスクが茂みの中を覗いて固まった。

「……? どうした?」

「……お姉ちゃん、この中にカメラがあつただけど……」

「え、マジ?」

……ああ、そう言えばスノーデインには所々カメラが仕掛けられてたな。記憶を探つ

て思い出した。

……あ、いいこと思い付いた。

「フリスク、そのカメラ茂みから出せる？」

「え？……うん、多分」

「あー、じゃあ出してちよつと私に向けてくれない？」

「いいよ」

フリスクはがさがさと茂みを漁ってカメラを引つ張り出すと、私の指示通りカメラを向けてくる。

私はカメラに背を向け、そしてぱつと振り返ってこういった。

「きさま！見ているなツ！」

シュゴオオーツという効果音がつきそうなポーズでいい放つ。……ここ砂漠とは真反対の場所だけだね。

「……………何やってるの？」

「気にしないでフリスク。ちよつとやってみたかっただけ」

怪訝そうな顔でこつちを見るフリスクに動機を話す。……監視とかされたことな

かったからちよつとテンション上がってやった。反省なんかしてないよ？

…というかこのネタアルフィスに通じるだろうか。通じたらいいな

「ありがとう、もう大丈夫だよ」

「そう？じゃあ元に戻すね」

そう言うのとフリスクはまたがさがさと茂みにカメラを隠した。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

【Sans】

ああ、……。ああ、……。そう思いながら俺は林の中から出る。

次はどんな奴だ？この最初のルートだけを繰り返す奴？一番いい結果を生み出すルートを繰り返す奴？それとも……俺の兄弟を、皆を殺すルートを繰り返す奴か？

その思考は足跡を見て止まった。

「足跡が二つ……？」

一つは十中八九あのクソガキのだろう。じゃあ、その隣を歩くコイツは誰だ？

ばつと顔を上げて去っていった奴らを見る。……確かに、二つ人影が、あの木のところでしゃがんでいるのが見えた。人影が立ち上がる。

遠目でみたそいつは、クソガキより背が高く、黄緑の地に黄色の線が一本入った服を着ていた。

パキツ

「うおっ!? え、折れた!」

木を越えて少ししたところで木が折れたことに驚いてそいつは振り向いた。気づかれないように林の中に近道を使って移動する。

「嘘だろオイ……さっき調べた絶対折れないような感じだったじゃん……」

ブツブツと何か言いながらそいつは前に向き直ってまた歩き出す。

「……ん? 大丈夫だよ、オバケなんかいないよ。……いや、いたわ。しかも普通に話してたわ」

隣にいるクソガキにからからと笑ったそいつは、クソガキが審判の時に浮かべる顔をしていた。

一瞬で思考回路が塗り替えられる。

アイツはなんだ?

何で今此処にいる？

誰だ？

何がしたい？

どういうつもりだ？

アイツらが橋の前に立つ。俺は足音を立ててソイツらに近づいた。

「人間。ここでの挨拶のしかたを知ってるか？……ここつちを向いて、俺と握手しろ」

ゆつくりとソイツらは振り向き、俺の目の前にいたクソガキが俺の手を握った。その瞬間、

ブオオオオオ

ブーブークツションの音が静かな林に響いた。

「……………くっ」

手を握ったクソガキが啞然としてる間に、ソイツは吹き出した。

「あはははははっ!!」

そして腹を抱えて笑い始める。

「マジかよ、ふふふっ、なんでブーブクツションなのさっ、あははははっ！」
今度はこつちが啞然とする番だった。……その顔でそんなに笑う奴を、俺は知らない。

「ひー、ひー……ごめん、笑いすぎちゃったね。私はLily、この子の姉さ」
笑いすぎて出た涙を拭い、黒く長いポニーテールを揺らしてそいつは名乗った。

19. 疑心と愛

〔Lily〕

リアルブルーブックツションがなんでかツボに來ました、どうもリリーです。

笑いすぎでサンズもポカーンとしてるしね！ただの変人だよこれ。……身長はフリスクよりちよつと背が高いくらいか。

「ひー、ひー……ごめん、笑いすぎちゃったね。私はリリー、この子の姉さ」

悪いヒューマンじゃないよ！という意味を込めて息を整えてから笑顔で握手を求め
る。

はつとした様子で我に返ったサンズは私の事を疑心を込めた目線で見ながら私の手を握った。

「とうかブーブークツションって……懐かしいネタ知ってるね君」

「……知ってるのか？」

「昔仲良かった子にやられた事があるんだよ。うわ、懐かしいなー」

小学生ぐらいの時に一回ね。いやー、あの時は今より爆笑した記憶があるよ。

「……とにかく、お前等、人間だろ？そりやまた愉快だ」

あ、話が本筋に戻った。というか結構いい声してんな。

愉快だ、と言った時に一瞬目が反らされた気がした。

「俺はサンズ、スケルトンのサンズさ。」

……今俺って言ったな。という事はこの世界は非公式日本語版、もしくは英語版だつてことは確定だな。

「よろしくね。……あ、呼び捨てで呼んでいい?」

「ん?別に構わないぜ」

一応許可を取っておく。……私を警戒するって事は、少なくとも一回はあのルートを通ってるってことだ。……でもさっきフリスクが振り向いた時、握手しろって言われた後に振り返ったこともあるからやっぱり矛盾が起きるんだよな……

「ところで、サンズはどうして此処に?」

「ああ、俺はここで人間を見張ることになってるんだ。でも……まあ……捕まえようとまでは本気で思っっちゃいないさ」

ゲームと同じようにニヤニヤというような笑み(?)を口元(スケルトンだから歯か?)に浮かべながらサンズはそこで言葉を切る。

捕まえる気はないと分かった瞬間、フリスクはほっとしたように肩の力を抜いた。

「だが、俺にはパピルスっていう兄弟がいてな……あいつは熱狂的な人間ハンターなの

「や。」

サンズがそう続けると、フリスクの肩にまた力が入る。……画面越しのじやなくて現実のパピルスか、どんなモンスターなんだろう？

「多分、今も向こうにいると思うんだ」

「え？隠れないとヤバいんじゃないのか？」

「ああ、だからいい考えがある。その門みたいなのを通り抜けるんだ」

思わず声を出すと、サンズはそう言った。

「これはパピルスが作ったんだが、足止めにはどうも大きすぎてな」

そう言っつて私達を先導する。……あ、マジで都合のいい形してんなあのランプ。フリ

スクの身長びったりってどういうことなの……。

「急げ、あのちようど良さそうなランプの影に隠れるんだ」

「私は？」

「……お前はあの小屋に隠れてろ」

「はーい」

フリスクがランプの影に隠れたのを見届け、私も見張り小屋の中に滑り込み、カウンターの影に隠れて様子を伺う。……あ、そういやこの裏にカメラあったつけ、と思っつて振り返ってみると、あった。こちらを見るカメラが一台。取り敢えず手を振っておい

た。

ざくざくざく、と誰かが歩いてくる音がして前を向くと、赤いスカーフを巻いた背の高いスケルトンが現れた。

……あれが、現実のパピルスなんだ。

「よお、兄弟」

「なーにが『よお、兄弟』だつて?」

……へえ、こんな声してるんだ。

画面越しではなく、現実で彼に会えた事に少し感慨深くなる。

「あれからもう八日も経つてるといふのに……お前のパズルは、未完成じゃないか!」

呆れたような、怒っているような声でパピルスは続ける。

「様子を見に来れば持ち場を離れてほつき歩いてて! 一体何をしてたんだ?!」

生真面目だなあ、と思いつながら会話に耳を傾ける。

「ランプを眺めてたんだ。最高にクールだぜ? お前も見たいか?」

「なわけあるか!! そんな事に時間を使う暇はない!!」

おい、拒否したからいいものの下手したらフリスクが居ることバレる発言すんじゃねーヨと思いつながらジト目でサンズを見ておく。

「もし人間がここを通ったらどうするつもりだ?!」

ここに居ますけど、と心のなかでツツコミを入れておく。

「俺様は準備がしたいのだ!!俺様は!絶対に!人間を捕まえるのだ!」

地団駄を踏みながらパピルスはそう言いきった。……『殺す』じゃなくて本当に良かった。

「そして!このグレートなパピルス様は……」

キリツとポーズを決めながら彼は自分の野望を口にする。

「全てを手に入れてやる!!」

……あれ、風吹いてないのにスカーフが靡いてるんだけどどうということ?

余計なことを考えながら様子を伺う。

「尊敬の眼差し……賞賛の嵐……ついには王国騎士団の一員となるのだ!」

チラリとサンズのことを盗み見ると、私に向ける疑心の籠った眼差しではなく、暖かい眼差しをパピルスに向けていた。

……ああ、やっぱり彼はパピルスが大好きなんだな、と思わされた。

「みんなからは、友達になってくれと、頼まれ?毎朝の目覚めにはキスのシャワーを浴びるのだ」

「へえ……」

美女に囲まれてハーレム状態になっているパピルスを思い浮かべて苦笑する。ゲー

ムの時から見てる私からすれば真っ赤になって照れている彼しか思い浮かばなかったからだ。

「じゃあこのランプが助けになってくれるだろうな」

この骨一発殴ってやろうか。さつきからフリスクが見つかりそうな発言しやがって。

「サンス!! さつきから何を言ってるんだ! このぐうたら骨!」

……ぐうたらではないぞ、パピルス。その発言だけは心の中で訂正させてもらう。

確かに君が生きている今はぐうたらに過ごしているけれど、本当は誰よりも君を愛しているんだ、と言いたかった。

「座って油売ってばかりで! どんどん怠け者になってるじゃないか!!!」

……怠け者になったのは第三者Playerのせいなんだけどね。

「おいおい、俺だって骨身を削って仕事してるんだぜ? 骨だけにな」

「サンス!!!」

ツクテーン、とマジで効果音が鳴ったのに驚きつつ、リアル骨ギャグにちよつと吹き出しそうになる。

「おいおい。お前笑ってるじゃねえか」

「だが、そのギャグは嫌いなのだ!」

矛盾エ……と思いつつ笑いながら笑いを噛み殺した。

「ハア……なぜこんな素晴らしい俺様が……名声を手に入れる為にこんな苦勞しているのだ……」

「まあ、お前も働いてばっかいないで、そろそろ…骨を休めた方がいいぜ？」

またツクテーンとなった。どっから流れてんだコレ。

「んぐっ!!!……俺様はパズルの作業に戻るが……お前も怠けてばっかいないで、自分の仕事にもう少し、「コツコツ」取り組めよ!!!」

骨だけについてか。やかましいわ。

「ニエツヘツヘツヘツヘツヘツ!!!」

そう高笑いをあげてパピルスは来た道を戻っていった。

「ヘッ!!」

と思ったらわざわざ戻ってきて鼻で笑って行った。

「………よし、もう出て来てもいいぞ」

パピルスが遠くに行つたのを見計らつて、サンズはそう声をかけてきた。

カウンターを越えて雪の上に立った。

「行きな。あいつが戻ってくるぜ……それともまた俺のイケてるジョークを聞きたいか？」

フリスクは首を横に振つて、それからサンズに頭を下げた。サンズは少し目を丸くし

て、それから私を見る。

「ジヨークは遠慮するよ。誤魔化してくれてありがとうね。……あ、そうだ。フリスク、ちよつと先行つてて?」

「?うん」

フリスクが先に行つたのを見送つてから、私はリュックを漁つて研究ノートを出した。

「これ、目を通してくれないかな」

「……?これは?」

「まあ、読んでくれれば解るよ。お願いしていい?」

サンズはノートと私を交互に見て、少し考える素振りをしてからノートを受け取つてくれた。

「ありがとう。それじゃ、またね」

私はそう言つてサンズに背を向け、先に行つたフリスクを追いかけた。

「……なあ、俺の頼みもちよつと聞いてくれないか?」

追いかけてようとしたところに声をかけられる。……あ、これ原作のセリフか。

「いいよ、何?」

振り返つてサンズを見る。

「最近……兄弟の元気が無いようだな。あいつは人間を見たことがなくてな。お前さんを見ればはしゃぐかもしれない」

まあ、そんな簡単に人間落ちてこないしね、と思いつながら話を聞く。

「心配するな。あいつは危険なやつじゃない。……本人はそう思っていないだろうけどなよ」

「あはは……」

苦笑を浮かべておく。

「分かった、妹にも伝えておくよ」

「感謝するぜ。俺は先に行ってる」

「はいよ、またね」

今度こそ振り返ってプリスクを追いかけた。

20. Snowdin探索①

「Lily」

「待たせてごめん、フリスク」

「大丈夫だよ」

セーブポイントのすぐ傍の木に寄りかかってフリスクは待っていた。

「お姉ちゃん、何してたの？」

「んー？……ナイショ！」

「えー！」

教えてよー、と笑いながらくつついてくるフリスクの頭を撫でる。キラツと雪が反射した光で糸が煌めいた。

……さつき私が彼に研究ノートを渡した理由。それは彼の誤解を解くためだ。私を警戒するってことは、少なくとも一回はCharacterちゃんの顔を見る。だから、操られていたとは言え、実行犯となつてしまったフリスクの事を嫌っている可能性がある。ならば、この子を操る第三者の存在を教えなければならぬと考えたためだ。

……ノートには一応彼に宛てた手紙と、『Player』とこの子を繋ぐ『糸』の事を

書いてある。これで、少しでもこの子と彼が本当の友達になれる可能性が上がるというんだけど。

「……お姉ちゃん？大丈夫？寒い？」

「…大丈夫だよ、気にしないで」

いけない、また考えすぎそうになっただらしい。

「というか、お姉ちゃんのパーカー、ボロボロになっちゃったね……」

「あー……そうだね、父さんと母さんに顔向け出来ないわこれ」

実は、私が着ているパーカーとフリスクが着ている上着は事故に合う前に父さんと母さんが買ってくれたもの。実質、これが父さんと母さんの形見だ。……それをいくらフリスクを守るためとはいえボロボロにした私って……とんだ親不孝者だな……

父さんと母さんに向けて申し訳ない気持ちになりながら、私はフリスクから離れ、ぼんやりと見えるセーブポイントを見た。これの事も書いて大丈夫だったかな…？次会った時質問攻めにされそうだな

「……あれ、あの箱……」

ふと、看板とその隣にあつた箱が目に入る。…あれアイテムボックスだよな。そういえば、アイテムボックスって何個かあるけど、中身が一緒ってどういうことなの？次元歪んでない？

「あ、あれ？あれはね、なんかグローブが入ってたよ」

「え、ごめんフリスク、それちよつと見せて」

「いいよ、はい」

どうやらもう中身を見てたらしい。フリスクはズボンのポケットから丈夫そうなグローブを一組取り出した。それを受け取る。

……私の記憶が間違つてなければこれ三番目の子のやつだよな……ごめん、借りるね

そう心のなかで謝罪してフリスクにグローブを渡す。

「霜焼けになるといけないから手袋がわりにつけときなよ」

「あ、そうだね」

私からグローブを受け取ったフリスクは、じつとグローブを見つめてから、片方だけ左手につけて、もう片方を私に差し出した。

「お姉ちゃん、寒そうだから。かたつぽだけでもつけて？」

「……ありがとう、フリスク。そうするよ」

フリスクの優しさに心が暖まった。頬が緩むのを感じながら右手にグローブをつけた。

「あれ、そういえばフリスク、リボンは？」

「リボンは箱にしまったよ」

ふといつの間にか頭から消えていたリボンの事を聞くと、そう返事が帰って来た。……捨てたとかじゃなくてよかった。

「じゃあ、行こうか」

フリスクの右手を握り、雪の上を歩きだした。

ざく、ざく、と音をたてながら左の道（ゲームだと上の道）に曲がると、ふとフリスクが足を止めた。

「……どしたフリスク？」

「……なんか曲が聞こえない？」

「え？」

耳を澄ましてみるけど、何も聞こえない。あるのはゲームとそっくりの釣竿が地面にささっている風景と、風の音。曲は聞こえない。

……おい、まさかこれfunイベントか？

funイベントはゲームが進行していくうちにいつの間にかたまっていく『fun』という数値が一定以上溜まると起こるイベントだ。確か非公式日本語版だとファイルを弄ったりしてその『fun』の数値を弄れたはずだけど……

「……あ、終わった」

フリスクがポツリと呟いて、私の手を放して釣竿へと近づいていった。……f u n i ベントか、覚えておこう。

ざぼつ、と水から何かが出て来たのをフリスクは取り、中身をみる。……あれ写真だったっけか。ちよつと違うけど魚に手紙書くやつでどつかの松を思い出したんだけど。

「……お姉ちゃん」

「どうした？」

「この釣竿の人、魚に電話番号書いてる……」

……フリスク、そんな憐れむような目を写真に向けてやるな。

21. パピルスとの邂逅

〔Lily〕

来た道を引き返し、ボックスを素通りして奥へと進む。ゲーム通り、視線の先にはサングラスと話し込むパピルスがいた。

「……あ、そうだフリスク」

「？」

「サングスが言ってたんだけどね……」

パピルスは悪いモンスターじゃないこと、人間を初めてみるからはしゃぐかもしれないことをフリスクに話した。

「そうなんだ……」

「うん、だからさ、そこまで警戒しないで大丈夫だと思うよ」

「……そうだね！」

私の言葉に、にっこりと笑ってフリスクは頷いた。かわいい。

さて、パピルスへの警戒心を解いたところで、私は一歩大きく踏み出す。

「それで、アンダインの話なんだが」

ざくつ

私の足が雪を踏みしめた音がして、その音が聞こえたのかパピルスとサンズがこつちをみた。

「やあ」

手を上げて挨拶しておいた。

二人は何回も顔を見合わせたり私達をみたりした。……最終的に高速回転になった時は目を見張った。

「サンズ…なんてこつた!!あれはまさか……人間?!?!?!?!」

ぱつと私達に背を向けてこそこそと会話をする二人。……いや、筒抜けなんですけど……つかパピルス凄じ嬉しいそうだな

そしてこちらをまた見る。

「あー……あれは、ただの岩だと思っぜ」

「そっか」

さつき素通りした岩を見てサンズはそう言った。パピルス超落胆してんな、声のトーンが一気に下がったぞ。

「おい、あの岩の前にあるのはなんだろうな?」

落として上げんなよ、と思ひながらはつとこちらに気づいた様子のパピルスに手を振

る。

「そ……そんな!!」

嬉しそうに言つてパピルスはサンズとこそこそと話し始める。今度は距離があるから聞こえない。

「なんてこつた!!!」

パンナコツタ?と言いかけたがここで言つたらグダグダになると思つて言葉を飲み込む。

「サンズ! ついにやったぞ!! アンダインをきつと……」

そこで思わず顔を歪めかけて顔を少し伏せる。……本当に何も知らないんだな、この子は。

「俺様は……ついに……人気者!! 人気者!! 人気者になれるぞ!!!」

嬉しそうにはしゃぐ彼には悪いが、私の心中は複雑だった。……アンダインの前に連れて行かれる、と言うことは即ち私の死だ。私はソウルを差し出す覚悟は出来ているけど、彼はその事を知つたらどうなるのだろうか?

心中複雑になりながら、彼が咳をしたのを聞いて顔をあげる。

「やい人間!……ここは通さないぞ!……このグレートなパピルス様が、お前を止めてみせる!!!」

そして、と彼は言葉を続ける。

「お前を捕まえれば!! お前は都に送り飛ばされ! そして……そして!!」

一瞬貯めたあと、彼は言葉を続ける。

「その後どうなるのか俺様も知らない」

「知らないんかい!」

思わず口からツツコミが出た。

「し、仕方ないだろう!! 聞いても教えてくれないのだ!」

「あ、それは仕方ないわ。ごめん」

「いいぞー!」

……私今パピルスと会話した? マジかよ。

ちよつと嬉しくなりながら下げた頭をあげる。

「まあいい! ついて来い……その勇気があるならな!!」

そう言うと彼は彼特有の

「ニエツヘツヘツヘツヘツヘツヘツヘ!!」

という高笑いをあげながら奥へと消えていった。

「ふう……上手くいったな」

「なんに対してだ? 誤魔化したことに対してか!」

思わずサンズにツツコミを入れながらサンズに近づくと、

「そんな悩むなって。ちゃんと目ん玉ひん剥いて見といてやるからよ」

「スケルトンに目玉つてないよね!? つまりやる気ねーな!？」

ゲームだった時からツツコミたかったことにツツコミを入れると、彼は笑いながら奥へと消えていった。

「お姉ちゃん……」

パークの裾を引っ張られ、不安そうに見上げてくるフリスクに気づく。

「……大丈夫、サンズがさつき言ってたろ? 兄弟の彼が言うんだからきつと悪い子じゃないよ。それに、何かあつたら私が守るよ」

……都に送られて何をされるのか不安になったのだらうと検討をつけ、そう言葉をかける。

「さ、行こう」

「……うん」

リュックを背負いなおし、フリスクの右手を握って雪が積もった道を進んだ。

22. ワンボー戦前

〔Lily〕

無人の見張り小屋を通りすぎる時、この見張り小屋の裏辺りにカメラが仕掛けられているんだっけ、と思つてちらりと林を見ると、キラリと何か光を反射したのが見えた。……あれか。

カメラから視線を外したと同時に、世界が白黒に切り替わる。

戦闘か、スノーデインに来て初戦闘だな。

*Icecap struts into view^た。

ヒョー坊か。……確か見逃す条件は帽子を褒めつづけるもしくは帽子を取っちゃうんだっけか？

*ICECAP | ATK 11 DEF 4

*This teen wonders why it isn't named

Ice Hat. 《この若者は自分が、Ice Hat、と呼ばれないことに疑問を持っている》

調べるを押したのか、アナウンスがそう流れた。カッターとナイフを出して構え、フ

リスクの前に立つ。

『帽子がめっちゃ好きだ。オーケー?』

帽子型の砲台のようなものを召喚すると、そこから氷柱が飛び出した。

バキンッ

当たりそうになる氷柱をカッターとナイフを振るって弾く。……これは弾くよりちよつと当てる軌道反らしたほうがいいな。

そう思つて沿わせるようにすると、あまり力を使わずに避けられるようになった。

* It's snowing dandruff.

きつたね。

ちよつと慄きつつ、いつ氷柱が来てもいいように構える。

*

You inform Ice Cap that his hat is great!

リスクはお世辞を押しづらい。

『羨ましいって? 残念でした!』

いやいらんわ。あれ全部氷でしょ? 被ったら私とリスクじゃ重すぎて首が折れる。

心の中で思いつき否定しながら、また飛んできた氷柱をカッターで軌道を反らす。

一発捌ききれずに掠めていったけどかすり傷だから無視する。

*It's snowing dangerously.

だから汚えよと思いつつ、ヒョー坊を見据える。

「あ」

「待つてフリスク、何今の『あ』って」

後ろから聞こえた声に振り向くと、フリスクの手には溶け始めているヒョー坊の帽子が握られていた。……選択ミスったのかよ……

前に向き直ると氷の塊になってしまったヒョー坊がいた。

「……………」

「……………」

フリスクが『MERCY』を無言で押した。

*YOU WON!
あなたは勝利した

*You earned XP and 13 gold.
とXPを得た

……結構耐久戦になるかなと思っただけで一瞬で終わったわ。
周りの色が戻ってきた所で、私達はまた歩き出す。

「……………次は気をつけような」

「……………うん」

次はD o g g o……もといワンボー戦だったつけ、と思いながら看板を読む。

『動くなよ！絶対に動くなよ！』

ダ○ヨウ倶楽部かな？と思いながらも看板から視線を外し、ざくざくと雪を踏みしめて小屋に近づく。すると、音に反応したのか、にゅっと見張り小屋から口に赤い骨みたいなのをくわえた犬が顔を出した。

「何か動いたか？気のせいかな？」

キヨロキヨロと辺りを見渡すように目線を動かすワンボー。フリスクが身を強ばらせる。

「おれは動くものしか見えないからな」

それもそれで不自由だよなあ、と思いながらフリスクの手をワンボーに気づかれないように握る。

「もし何かが動いてたら……もしそれが人間だったら……」

ポケットのなかでカッターを握りしめた。

「そいつを二度と動かないようにしてやる！」

そうワンボーが宣言した瞬間、世界が白黒に切り替わった。

23. ワンボー戦

〔Lily〕

*Doggo brocksthe way!

頭の中でアナウンスが流れる。……そういえばこのアナウンスについても一考しなきゃだな、と思いながらカッターとナイフを逆手に構える。

*DOGGO | ATK 13 DEF 7

*Easily excited by movement.

*Hobbies include: squirrels.

趣味がリスってどういうことなの。……あ、チヨロチヨロ動くからか!?!というか地下にいるんだね!!

アナウンスにちよつと混乱しながらもワンボーを見据える。

『「ミミも動くなよ!」』

わざわざこうやって警告してくれるのは何故なんだろうな、と余計な事を考えながら彼が引き抜いた青色の刃の双剣を受ける。微動だにしないでいると、刃はすーっと私の体を貫通していった。……なるほど、こんな風になるのね。覚えとかなきゃ。

*Doggo can't seem to find anything.

私達微動だにしてないしね、と思いながらカッターとナイフをしまった。このターンで確か終わりだったはず。すると、私の後ろからフリスクが出て、ワンボーの頭をなでた。

*You pet Doggo.

そのアナウンスが流れた瞬間、ワンボーがゲーム通りの狂ったような動きをし始めた。つかこええ。狂人みたいでこええ。

『うわ!!撫でられたぞ!!』

私がそう思っていると、ワンボーは双剣を振り回してきた。あー、また動かなければいいのかな、と思っていたその瞬間、風が吹いて私の髪が風に靡いた。

シヤキツ

ぼすつ、という何かが雪の上に落ちた音がして、私の頭が急に軽くなる。

「……………え?」

嫌な予感がする。フリスクの顔を見ると青くなっていた。

「……………フリスク、私今どうなってる?」

「……髪の毛……」

私の髪を指差してフリスクは私の問いにそう答えた。……髪の毛?と思つて髪を触つてみるとポニーテールにしているはずの長い髪がなく、フリスクと同じ長さぐらいの辺りで指が髪から抜ける。

恐る恐る振り返つてみると、私の髪だったものが落ちていた。

「……………うつそだろお前?!」

嘘でしょ待つて、あれ動いた判定に入るの!!?

頭の中が大混乱に陥つた。髪を拾い上げて呆然とする。

まさかマジで戦闘に巻き込まれて髪が切れるなんてあるんだ……と呑気に思った。

「……………その、すまん……………」

いつの間にかフリスクが『M E R C Y』を押しして戦闘を終わらせたらしく、まずいことをしたと感じ取つたらしいワンボーが近づいてきて謝つた。しゅん、と垂れた耳と尻尾が可愛かった。……つかマジで見えてないのか、距離が近いんだが。

「……………いいよ、そうやって謝つてくれるだけマシさ。それに、いつか切る予定だったしね」

謝られちゃ怒れないと思つてワンボーを許して撫でる。気持ち良さそうに目を細めるワンボーがちよつと可愛かった。

……しかし、マジか。Charaちゃんに間違われないようにせめてもの足掻きで髪伸ばしてたのに切られるとか……へこむわ……

ワンボーを撫でるのをやめ、髪を捨てる訳にもいかず、リュツクの前ポケットに入れて背負いなおす。

「それじゃ、通らせてもらおうよ」

「ああ、通っていつてくれ」

ワンボーに手を振るフリスクの手を取ってざくざくと雪を踏みしめた。吹いた風に短くなった髪が揺れた。

24. Snowdin探索②

〔Lily〕

一服した後の犬用おやつが残骸を通りすぎると、道端にサンズが立っていた。

「よう、覚えておいてほしいことがあるんだ、が……お前さんその髪どうした？」

私の髪型に気づいたのかサンズが驚いた様子で聞いてくる。

まあ今までポニーテールだった奴が急に短髪になってたらそりや突っ込まれますわな。

「あー……ワンボーに切られた」

「……嘘だろ？」

「マジです」

なんならフリスクに証言してもらおうか、と付け加える。

「いや、いい。災難だったな。……ところで、覚えておいて欲しいことがあるんだが」

あ、話が戻った。

「俺の兄弟は凄いい必殺技を持っているんだ」

え、と言わんばかりにフリスクが小さく口を開けた。

「もし青色の攻撃だったら動かなければ当たらない。」

青色というか水色に近いけどね。

そう思いながらさつき見たワンボアの剣を思い出す。確かに動かなければ当たり判定がなかった。

「いい覚えかたがあるんだ」

そう言ったサンズにフリスクはどんな？、と言わんばかりに首を傾げる。

「止まればって標識。あれが見えたらお前さんも止まる、だろ？」

「そりゃな」

フリスクもコクリと頷いた。

「普通赤が止まれだが青の止まれ があると思像してくれ」

……分かりやすくもいいけど、何で止まれの標識知ってるんだろう。確か地下になかったよね？……ああ、外に出た記憶があるからか？

そう思いながら頷いておいた。

「簡単だろ？戦う時は、青い止まれの標識と覚えておけばいい」

「なるほど」

フリスクは少し考える素振りをした後、コクリと頷き、口をパクパクと動かした。

「へっ、礼には及ばないさ」

ああ、お礼を言ったのかと思いつながらサンズに手を振って通りすぎる。
つるっ

「うおっ!？」

「お姉ちゃん!？」

足元を見ていなかったのが悪かったのか、滑って転んだ。いつてえ。

「つてー……これ氷か」

ゲームと一緒にだなど思いながら立ち上がる。氷は鏡のように私の姿を写し出していった。

「転ばないように気をつけてね。さもないと私みたいに無様な姿を晒す羽目になるから」

「う、うん」

「へっ……」

おいサンズ、笑ってんじゃねーぞ。

キレそうになりながらスケートの要領で氷の上を滑る。

「おー……」

ついでと滑りながら看板を盗み見る。

『北…氷』

南：氷

西：氷

東：Snowdinの町……と氷』

……ああ、もう町か。つか氷しつこいわと思いつながらも今度は無事に雪の上に立つ。ちゃんと雪の上に立っているか確認したのち、フリスクに手を振って合図を送る。その合図を確認したフリスクも私に手を振り返した後、すーっと氷の上を滑ってくる。

「うわっ」

「おっと!？」

最後の最後でバランスを崩したのかフリスクが倒れ込んでくるのを受け止める。

「大丈夫?」

「うん、ありがとうお姉ちゃん」

そのまま抱きついてくるフリスクの頭をなでる。かわいい。

………つかサングスの驚愕の視線が痛い。こんなに甘えるフリスク見たことないのか？

ふとした疑問が頭を掠めた。………というか、見たことがないと仮定したら、フリスクのただけ無茶してんのって話だよなあ……

甘えて頭をぐりぐりと擦り付けてくるフリスクを見て苦笑する。

「あつちの道には行かなくていいの？」

「んー……いく」

「そっか、じゃあ行こうか」

フリスクの意思を確認して離れる。すると今度は手を握ってきたから握り返す。

「それじゃあね、サンズ。忠告ありがとう」

「……ああ」

こつちを見ていたサンズに手を振って歩きだした。

25. 雪の欠片と最初のパズル

〔Lily〕

サンズと別れて氷を滑って左の道に行く。……確か雪だるまの所だったか？

そう考えながら顔をあげると、につこりと笑った顔の雪だるまが鎮座していた。それにフリスクが話しかけにいった。

「こんにちは。雪だるまです」

「あ、どうも、この子の姉のリリーです」

なかなか礼儀正しい雪だるま君に挨拶を返しておく。フリスクもペコリと頭を下げた。

「僕はこの世界を見て回りたいんです、ただどこの通り僕は動けない。親切な旅人さんたち、お願いです……僕の欠片を持って旅をしてくれませんか？」

「……だつてさ、どうする？」

フリスクは腕を組んで少し考えたあと、コクリと頷いた。すると、フリスクの手のひらに雪の欠片が現れた。

「ありがとう……お達者でね！」

そう言つて別れを告げた。……………とうかこれ溶けたりしない？大丈夫か？
一抹の不安を感じつつ雪の欠片を見つめた。……………これどうしまおうかな……………

あのあとなんとか雪の欠片をしまい、元の道を抜けて次の道に進む。すると、その先ではパピルスがサンズに怒鳴っていた。

「お前は本当に怠け者だな!!!一晩中昼寝してたんだろう!!!」

「それは普通さ……………睡眠つて言わないか？」

あ、サンズがツツコミたかったこと代弁してくれた。

「言い訳、無用だ!」

いや、昼に寝るから昼寝なのでしてね……………?と思ひながらパピルスがこつちに気づいた素振りを見せたので手を振っておく。

「オーホー!人間が来たぞ!……………つてニエエエエツ!?その髪はどうした大きい方の人間!」

「あ……………これはワンボーにちよつと……………」

「そうか……………それは災難だったな……………」

やべえ、リアルオーホーが聞けた。超嬉しい。つかかわい。

心が癒されるのを感じながら驚くパピルスの問いに答える。……………確かパズルは壁に

触れたら電流が流れるパズルになってるんだっけ、と思ひ出す。

「とにかく、お前を止めるべく、俺様たちはいくつかパズルを作ったのだ！」

おお、と言わんばかりにフリスクは口を開く。

「このパズルを見ればお前は、シヨックを受けることだろう！」

物理的にも精神的にもな、と思ひながら話を聞く。

「なぜならな、このパズルはなんと見えない……ビリビリ迷路なのだ!!!」

「なんだと!?!」

取り敢えずリアクションを取っておく。

「お前たちが迷路の壁に触れば……このオーブがお前たちにポリウム満点の電撃をお見舞いする！楽しそうだろう??!」

ビンゴ。

記憶違いがなかったことに安心しながらピルスがどこからか出したオーブに注目する。

……人が死ぬレベルの電撃だったりしないだろうな？

「しかし！お前たちが得るであろう楽しみの量はおそらく、小さいだろうな。よし、進んでもいいぞ！」

「え」

「なんだ？」

「いや……」

思わず声が出た。……だって今オーブ持ってるのパピルスだよ？このままだと電撃くらうのパピルスだけどいいの？

ゲーム通りの展開だけどさすがに戸惑ってしまった。

「……えいつ」

ここが道だと思ったのか、少し考えていたフリスクが一步踏み出そうとした。……そのとたん、何か見えないものに邪魔された。

瞬間、パピルスに電撃が流れて真っ黒焦げになる。

……つか骨が真っ黒焦げになるレベルって真剣に考えたらヤバいじゃん。

「サンズ!!何やってんだ?!」

瞬時に回復したパピルスが地団駄を踏みながらサンズに怒鳴る。正直言つて理不尽である。

「オーブを人間に持たせなきゃいけないんじゃないか」

「ああ、そっか」

すぐに気がついてこつちに向かってパズルを解きながら歩いてくる。もう一度言う。パズルを解きながらである。……もうこれヒントどころの話じゃねえよ……丸つきり答

えだよ……

「これ持つてちようだい！」

「ん、分かった」

さすがにフリスクにあの電流を浴びさせる訳にもいかず、私がパピルスからオーブを受け取った（あ、あの空中受け渡しじゃないよ？）。そのままオーブを覗き込んでみる。

……あ、中で電流みたいなのがパチパチ弾けてて綺麗だなこれ。

オーブを抱え直して前に向き直る。

「よし、やってみる！」

パピルスから許可が出たからフリスクの前に立って迷路を通る。……ぶっちゃけパピルスの足跡辿ってるだけけどね……

慎重に迷路を抜けると、パピルスが驚きの声をあげた。

「信じられん！カタツムリのようにつると！！いとも簡単に解いたな……すこぶる簡単！」

いや、カタツムリはそこまで早くないけどねと心の中でツツコミをいれながらパピルスにオーブを返す。

「しかしだな！！次のパズルはそう簡単じゃないぞ！」

え、と言うようにフリスクは口を少し開く。

「俺様の兄弟、サンズが考えたのだ!!お前はきつと混乱するだろうな!!」

あー、あの言葉探しかとサンズが考えたパズルを思い出す。……あれパズルっていうよりもクロスワードだよな、うん。

「覚えとけよ!ニエーツヘツヘツヘツへ!!」

そう考えていると、彼特有の高笑いをあげてパピルスは奥に進んでいった。

「ありがとな……パピルスは楽しんでるみたいだ」

ふと、サンズが話しかけてくる。そう話す目は、確かに弟を愛する兄の目をしていて。

「ところで、あいつの妙な服装に気付いたか?」

「あー、あの服……っていうよりも鎧みたいなやつ?」

「そうだ」

妙つて言われても思い当たりがああの服装しかねえよと思いつながらサンズを見る。

「数週間前に仮装パーティー用で作ったんだ」

「え、あれマジで自作?」

「おう」

「マジか……」

現実でみたパピルスのあのバトルボディは、ちゃんと金属光沢があった。……あれを作ったとか凄すぎない?どんだけ手先器用なんだパピルスは……

「そっからもう着っぱなしでさ……あれを『バトルボデイ』って呼んでるんだ」

「……ん？着っぱなし？」

「おう」

「……洗ってないの？」

「いや、洗って乾かしてまた着てる」

「ああ、なんだびつくりした」

ゲームだった時もツツコミたかったことにそう答えてくれたサンズ。着っぱなしはさすがに汚い。

「なあ」

フリスクがサンズの呼び掛けに首を傾げる。

「俺の兄弟ってクールだろ？」

……ああ、伝説の質問きたな。

その質問に、私とフリスクは笑って頷いた。

「そんなじゃ、行こうか」

「うん」

「じゃあね、サンズ」

「おう」

サングズに手を振って道を進んだ。

25. Snowdin探索③

〔Lily〕

道を抜けると、鮮やかな傘とそれに負けないくらい鮮やかな水色の兎の青年が沈んだ表情で車輪付きの箱に寄りかかっていた。……ああ、この人ナイスクリームさんか。案外身長高いな。

「なんで売れないんだろ……アイスを食べるには最高の気候なのに……」
「もっしもし、そのイケてるお兄さん？」

興味が湧いたから絡みに行く。……つかこれだとただのナンパやな。私の声に気付いたのかナイスクリームさんがこつちを見る。

「暗い顔してたらお客さんも逃げてつちやうよ？いつだってスマイルスマイル！」

キラツと言わんばかりの笑顔で話しかける。ナイスクリームさんは一瞬きよとんとした顔をしたが、すぐに顔をぱあつと明るくする。……あ、耳も立った。

「ああつ!!お客さんだー!!」

現実で見る笑顔かわい。と内心和みながら彼を見つめる。

「いらつしやいませ！ナイスクリームはいかがですか？」

につこりと0円の笑顔で接客するナイスクリーム君。……そういえば、ナイスクリームって確か実際にあるんだっけな？

「君の心をあつたためのアイスクリーム！」

体は？とツツコミをいれてはいけない。

「今ならたつたの15G！」

「んー……15Gかあ……どうするよフリस्क。買う？」

多分一個は買えるだろうな。この後レッサードッグとかと遭遇するし、そこまで金に困るわけじゃないからフリスクに判断を任せる。

フリスクは少し考えた後、ポケットから金貨を取り出した。その動作にまた顔を明るくしてからナイスクリーム君は箱からアイスを取り出した。……あ、良かった、包みがあるやつだ。リュックにしまうときどうしようかと思つた。

「はいどうぞ！ナイスな日を送ってね！」

「おー、ありがとう。じゃあねー」

「あ、お姉さん待つて！」

「ん？どしたのお兄さん」

フリスクの代わりにアイスを受け取り、別れようとした所に彼に声をかけられる。

「はい、おまけ！」

「え」

振り返ると、先程見た0円の笑顔でもう一本アイスを彼が差し出していた。

「さつき、励ましてくれたでしょ？」

「……？」

励ました、という言葉に記憶を探る。……ああ、さつきのナンパみたいなやつか？スルーされたかと思ってたけど、ちゃんと聞いてくれたのね。

「あー、いや、元気になってくれて良かったよ。というか、これ売り物じゃ……もらっていいの？」

ちよつと恥ずかしくなりながら笑っておく。

「うん、どうぞー！」

「……まあ、くれるって言うならもらうよ。ありがとう」

好意を無下にはできないと判断し、彼の手からアイスを受け取る。ふわふわとした毛並みが少し触れた。

「それじゃあね」

彼に手を振り、フリスクの分のアイスをフリスクに手渡して歩きだした。

さて、と気を取り直して目の前のボール（というよりも雪玉）とその向こうにいるサ

ンズを見つめる。

……正直言つてこの雪玉はスルーしても大丈夫なんだよね。それより向こうの道のほうが大事なんだよな。どうしようか……

そう考えていると、アイスをポケットにしまったフリスクが興味を示したらしく雪玉に近づいていった。……ポケットにアイス入れてなんで溶けないの？

「お姉ちゃん、このボール転がせるー!」

雪玉を蹴り飛ばして転がすフリスク。…あ、ちよつとずつ小さくなつてる。

きやつきやつと楽しそうに笑いながら転がしていくフリスクを止める訳にもいかず、後を追いかけていく。

「……あ」

ふと雪が盛つてあるところに目がいき、カメラを見つけた。そういえばここにもあつたな、と思ひながらカメラから目をそらした。

目をそらした先で、フリスクが穴に雪玉をシュートしていた。……あ、旗たつた。紫か……

「お姉ちゃん!入れられたよ!」

「おー、よくやつたな」

嬉しそうに駆けてくるフリスクの頭をなでる。かわいい。

「ところで、さつきサンズが居たけど、声かけなくていいの?」

「あーそうだった」

思い出したような動作をしてからフリスクはサンズに向かって駆けていった。その後を歩いて追いかける。……確か雪フライ売ってるんだっけ。雪ってパン粉つけて揚げたっけ……?」

心のなかで雪フライについてツツコミつつサンズと話しているフリスクに追い付く。『いらない』を押しのかフリスクは首を横に振っていた。

「よう。雪フライ、お前さんはいらさないか?」

「遠慮するよ。……というか雪って揚げられたっけ?」

勧められたのを断り、ついでにツツコミをいれておいた。サンズは少し笑うと、もう用はないと口を閉ざした。

「行こうか」

フリスクに声をかけて道を抜けた。

26. ヒントと二つ目のパズル

〔Lily〕

さて、このエリアは確かあの夫妻の見逃し条件が分かるんだっけな、と思いながら2つ並んだ見張り小屋の真ん中にある看板に近づく。

『匂い危険度ランク』

- ・雪の匂い―雪だるま

白ランク

場合によつては黄色ランク

- ・疑わしくない匂い―子イヌ

青ランク

辺りを転がったあとの匂い。

- ・怪しい匂い―人間

みどりランク

何としてでも排除！』

緑ランクなのに赤で書いてあるのはなんでですかねえ……と思ひながら横にいるフ

リスクを見る。『排除』という言葉で嫌な想像をしてしまったのか、顔が少し青くなっていた。

「……そんな風に青くならなくても大丈夫だよ。いざとなったら雪の上を転がればいいじゃない？」

私がそう言えば、その手があったかと言わんばかりにフリスクはこっちを見る。

「……まあ、とにかくこれでこの見張り小屋の二人の対策は分かったし、行く？」

「うん」

フリスクが頷いたのを確認し、来た道を戻り始めた。

ざくざくと雪を踏み締めながら次のエリアはサンズのクロスワードだったかと思いついた。……個人的にはあの氷のやつとナイトメアちよつと怖いから苦手なんだよな……

フリスクが立ち止まったのに気づいて顔をあげると、ちょうどこっちに気づいたパピルスと目が合った。

「人間!!!心の準備はいいか……」

そこまで言って、パピルスはパズルらしきものが何処にもない事に気づいて、顔をしかめる。

「サンズ!!パズルはどこだ!!!」

「そこにあるだろ。地面の上に。」

声を張り上げた。パピルスにサンズは飄々と返した。

「まあ見てな。これを使い越えるなんて不可能だぜ」

そんなことはないですよねえ……とうっかり口に出しそうになるのを飲み込み、地面の上にあつた紙を拾ってフリスクに渡して一緒に見る。そこにはゲームと同じように『良い子の言葉探し』と書いてあつた。……やっぱコイツこええよ。

「……お姉ちゃん」

「ん?」

「……これ、パズルじゃなくてクロスワードだよね……?」

「……クロスワードじゃなくてサーチワードパズルじゃない?」

「あ……えへへ……」

フリスクが不思議そうにしながら小声でそう聞いてくるのを苦笑しながら訂正する。……やっだかわいい。

フリスクはしばらく紙を眺めたあと、そつと地面に紙を置き、パピルスのもとへと歩いていった。

「サンズ!!!何も起きないじゃないか!」

「おっと。やっぱり今日のクロスワードを用意した方が良かったかな」

「はあ？クロスワード!？」

サンズが言ったクロスワードという言葉に反応してパピルスはまた顔をしかめる。

「何でそんなもの出すのだ!!!俺様が思うに……ジュニアジャンブルの方が難しいに決まってる。」

ちよつとテンションを落としながらパピルスはそう言った。

「え？マジかよお前。あの超簡単なパズルだろ？あれ赤んぼン向けだぜ」

パピルスの言葉にサンズがそう反論する。……つかそれもやっぱり言うんだな。赤ん坊とボーンをかけてるのか。やかましいわ。

「んな、あほな。……人間!!!お前はどよう思うー」

急にこつちに話を振られて驚いたような素振りをしてから、フリスクは腕を組んで考え始める。……そして、少ししてからパクパクと口を動かした。

「おかしいだろ二人とも!クロスワードは簡単すぎる。問題の解き方がいつつも同じじゃないか。全部の欄に『Z』って書いて埋めるだけ……だつて俺様はクロスワードをやっているといつも……つまなくて寝てしまうからな!!ニエーツヘツヘ!!」

あ、その反応ってことはクロスワードって答えたのね……つか待って。それ解いたつて言うのか……?」

「大きい人間!!お前はどうか!!」

「……………え?私?」

「そっただぞ!」

ちよつと疑問に思っていると、私に話が振られた。……………まさか声をかけられるとは思わず聞き返しちやつたよ……………なんて答えようかなー

「ん……………難易度にもよるけど、ジャンブルかな?」

「そっだろっ!」

私がそう答えるとパピルスは嬉しそうに顔を綻ばせた。……………かわいいなあ

「人間たちはとても頭がいいんだろっ!奴らもジュニアジャンブルが難しいと思うなら!!ニエー!ヘッ!ヘッ!ヘッ!」

いや、それは個人差だな。と心の中で反論した。

そう言つて上機嫌でパピルスは奥へと引つ込んでいった。それを手を振つて見送る。……………今のセリフ、ゲームで『ジャンブル』つて答えた時と一緒だったな…

そんな風に考えていると、ぐいつと手が引つ張られた。

「おつと……………どうしたフリスク」

引つ張られた方の手を見ると、フリスクが手を握っていた。そして、近くに來ていたサンズを指差した。

「兄弟の機嫌をとるためにジャンブルって言うてくれてありがとうな」

サンズがそう口を開いた。

「昨日は星占いを『解く』のに苦戦してたな」

「星占いを？」

「そうだ。パピルスは妙なところに問題を見出だすんだ」

「へえ……まあ、『知りたい』って思うことは良いことじゃないか？」

『知らない』ってのは怖い事だからなあ、と付け加えれば、サンズは少し驚いたような顔をした。

「へっ……そうだな」

少し笑ってサンズは口を閉ざす。……もうこれ以上話すことはないっぽいな。

「行こう、お姉ちゃん」

「そうだね。……じゃあな、サンズ」

サンズに背を向け、フリスクに手を引かれながら次のエリアに移動した。

27. Snowdin探索④

「Lily」

道なりに進むと、テーブルの上に置いてあるパスタとその奥にある電子レンジが目にと留まった。……ああ、これパピルスが用意したパスタか。ということはここはセーブエリアか。

そう思ってゲームでセーブポイントがあった辺りを目を凝らして見つめる。……あった。

「……あれ？パスタだ……」

フリスクはパスタに先に気付いたのか、不思議そうな声をあげ、私の手を離してパスタへと近づいていった。……というか、電源コードが入ってなければ意味ないよな、このレンジ……

「……お姉ちゃん、このパスタ凍ってる……」

「まあ、こんな寒いところであればそりゃな……」

つつん、と指でパスタを触ってからフリスクは私にそう言った。そして、地面に紙が置いてあることに気付き、紙を拾い上げて読み始めた。

「……」

読み始めて少しすると、フリスクが少し口元を綻ばせた。

「なんて書いてあったの？」

「読んでみて」

フリスクが渡してきた紙を受け取って読む。

『人間!!このパスタを召し上がれ!（なんと、このパスタは罠なのだ……パスタがお前をおびき寄せ!お前はすっかりパスタに夢中……先に進むことすら忘れてしまう寸法だ!!お前はグレートなパピルス様に完全にハメられるのだ!!!）ニエツヘツヘツ、パピルスより』

紙には、ゲーム通りパピルスからの手紙が書いてあった。……自動翻訳が効いているらしく、大文字で『PAPYRUS』と書いてあるはずのところ『パピルス』になっていたことを除けば。

「……このパスタ、罠なんだ……」

「ねー。……でも、敵とはいえ、ぼく達の為に作ってくれたんだよ。嬉しいよ」

嬉しそうに言うフリスクに少し驚く。……ああ、この子、ちゃんと人の思いやりを汲み取れる子になってたんだな、と気づいて、私も嬉しくなる。

「そうだねー」

紙を元にあつた場所に戻し、ふとテーブルの後ろの壁見ると、ルインズで見たような小さな穴が空いていた。……あ、ここでチーズ使えるんじゃないか？

思い立った私は、リュックからチーズを引つ張り出してカッターで切り出す。……あ、寒いところに居たからか切りにくくなつて……かてえ……

「何してるの？」

「ん？ここにネズミの穴が空いてたからさ、チーズお裾分けしようかなつて思ったんだけど……」

「！ いいねー！」

私がおかしているのに気がついて、セーブを終えたらしいフリスクが話しかけてきた。それに返答をすると、フリスクは顔を明るくして賛成した。……かわいい。

「……うし、切れた。これ、穴に置いてきてくれないかな？」

「いいよー！」

やつと切れたチーズをフリスクに渡し、駆けていくのを見届ける。……フリスクが穴の傍に置いて少しすると、ネズミがひよっこり顔を出した。

「ネズミさん、良かったらどうぞ！」

フリスクとチーズを交互に見比べてから、ネズミはチーズを持って穴に引つ込んでいった。

「受け取ってくれたよー！」

「おー、良かったね」

嬉しそうに駆けてくるフリスク。うん、めっちゃ可愛い。

「さて、行こうか」

萌え死しそうになりながらフリスクの小さい手を取って進み始めた。

次はあの犬夫婦戦だったかと思いだし、ふと目に入ってきた看板の文字を読む。

『警告：犬結婚』

「いやそれだけかよ」

ツツコミを入れた。……いや、ゲームだった時も思ったけど、もうちよつと何か書こうぜ……？

「……あ、お姉ちゃん。またカメラあつたよ」

「え、マジか」

そういやこの木の所にあつたなと思いつつながらフリスクが指差した辺りを見る。……キラリと何かが光を反射したのを見つけ、あれかと見当をつけた。……これもはや盗撮じゃね？

「何かする？」

「んー、ネタ思い付かないしいいや」

前にネタをやったのを思い出したのかフリスクがそう言ってくるのを断る。結構高い所にあるし、取りに行つて怪我したらやだしね。

「……どつちから行くかうか」

「じゃあ右から行くー」

「ん、了解」

フリスクに判断を委ね、右側（ゲームだと下の道）に進む。…確か次のエリアに進む所に針山が生えてて、それを解くためのヒントが雪に埋もれてるんだっけかな？

そう考えていると、周りが白黒に切り替わる。

*Lessser Dog appears.

……ああ、レッサードッグ戦か。

これも確か撫でまくれれば終わるんだっけと思いつながら攻撃に備えてカッターと玩具のナイフを取り出す。

*LESSSER DOG | ATK 12 DEF 2

*

Wilds a stone dogger made of pomergrante

頑丈そうな鎧着て尚且つ盾持つてる割にディフェンス低いなコイツ。あと『短犬』つ

て何さ……

頭の中で流れたアナウンスにツツコミを入れながら、カッターとナイフを構えた。

『(ハツハツ)』

息を吐く音が聞こえると、ドドドドドドという効果音が聞こえそうなレベルでレッサードッグは突撃してくる。

「あつぶね!」

それをフリスクを抱き寄せて回避した。

*

Lesser Dog cocks its head to one side.

レッサードッグを見れば、アナウンス通りかわいく首を傾げていた。……愛嬌のある顔だからなおのことかわいいんだけど、コイツ犬版ろくろ首だから……

*—You barely lifted your hand and Lesser Dog got excited. 《ちよつとだけ手を上げてみた。Lesser Dogは興奮した》

そんな事を考えていると、フリスクがちよつとだけ手を上げ、アナウンスが流れる。レッサードッグを見ると、首が少し伸びていた。……かわいさ半減である。

『(小さいひと鳴き)』

わん、と小さく鳴いたあと、レッサードッグは手に持っている短犬を振り回してくる。
ガキーン

青色から白色に変わった刃を咄嗟にナイフの方で受け流し、はつとする。……これ傷ついてないよな？こつちの方で受け流すんじゃないやなかったな……

ちよつと後悔しながらナイフを確認する。当たり処が良かったらしく、傷はなかった。……よかった。借り物だからな、傷つけたらアカン。

*Lesser Dog is barking excitedly.
……確かこれでもう大丈夫だったはずだ。

そう思いながらフリスクを見ると、『MERCY』に手を伸ばしていた。

「……あつ、ちよつと待ってフリスク」

「？」

『MERCY』に伸ばされた手が止まる。……良いこと思い付いた。

レッサードッグに向き直り、私は近づいていく。

「ハッハッ……」

「……ほーらよしよしよし！いい子だねー」

「お姉ちゃん!？」

そしてレッサードッグを撫でてみる。……いやだつて、首どこまで伸びるのか気にな

るじゃん……？

フリスクの静止を無視して、レッサードッグを撫でる。

ぎゅんっ

……しばらく撫でていると、そんな音がしそうなぐらいに首が思いつき伸びた。

「うおっ?!」

「!?!」

そして、

ゴッ

と上の方で鈍い音がした。

「……………何今の音……………」

「……………多分、首が伸びすぎて天井に当たったんじゃない……………」

「あ……………」

それが案外当たったらしく、するすると伸びた首が引っ込んできた。……大きなたん

こぶをつけて。

「あ……………大丈夫……………」

さすがに罪悪感を感じ、雪を掴んで少し固め、背伸びしてたんこぶに当てて冷やし、首元をそつと撫でる。

「……………わんっ」

満足したのか、満面の笑顔でレッサードッグは鳴いた。

それを見て、フリスクはほっとしたように一つ息をついて『MERCY』に手を伸ばした。

*YOUあなたは勝利した WON!

*Youと earnedを XP得 and gold.

……あれ、レッサードッグから金貨もらえなかつたっけか。うっかりしてた。

周りに色が戻ってくるのを見ながら、私は去っていくレッサードッグを見送った。

「あ、お姉ちゃん、見てこれ……」

「ん？」

さつきレッサードッグが突っ込んできたときに雪が吹っ飛ばされたのか、ヒントの一部が顔を出していた。

「なんかあるのかな……」

「どけてみる？」

「うん」

フリスクと雪をどけていく。少しすると、ゲームで見た通りのヒントが出てきた。

「あっちの方にこれどかさ仕掛けがあるっぽいね。……行ってくるからちよつと待って

てくれないかな？」

「うん、分かった」

フリスクに待ってもらい、仕掛けを動かしていく。バツ印がついている辺りにつくと、地面の色が変わっている場所があった。……これか。

そのまま足で地面を探ると、何か固いものが当たる。それを思いつき踏み抜いた。
カチツ

という音がして、スイッチが嵌まる。……これで大丈夫かな？

雪を踏み締めてフリスクのもとへ戻る。

「針山引っ込んだー？」

「引っ込んだよー！」

歩きながらフリスクに聞けば、そう返事が返ってくる。……大丈夫そうだな。

「お待たせ、行こうか」

「うん！」

一列に並んで道を歩く。……さて、そろそろくるかな？

ざく、ざく、ざく

黒いフードを被った二人組がちょうどこつちに歩いてくる。ピング、と思いながらポケットに手をつ込んでナイフとカッターを握りしめる。

「何のにおいだ？」

「どこのにおいかしら？」

あ、二人一緒に喋るのかなと思っただけ、二人連続で喋ってる感じなのね、これ。……
というか二人とも結構綺麗な声してんな……いいなー

「においの元が居るなら……」

「……私たちの元へおいで！」

行かないよ……と思いつながらぐるぐると周り始める二人を見つめる。……というか、この人達は目が見えてないのか……？

「ふうむ……ここから怪しいにおいがするな……」

あ、もうそろそろかと気を引き締める。

「なんだかとても排除したくなるにおいだ。」

「……排除するわ！」

そう言った瞬間、世界が白黒に切り替わった。

28. 犬夫婦戦

〔Lily〕

*Dog^Di^gassaultⁱyou!^g
夫妻が襲ってきた

フードを取った夫妻が鼻擦りをしている。……ラブラブだねえ。

*DOGAMY|ATK14DEF5

*Husband^Dof^gDoggeressa^r.
彼の知っているの Doggeressa 夫*Know^彼only^がwhat^知hesmells^っ.
の 嗅い だも の だけ

……知ってるのは『嗅いだもの』だけ、ねえ。ということは、この人達は『人間の匂いを嗅いだことがある』のか……?へえ。

ちよつと興味を引かれながらカッターとナイフを引つ張り出す。

『妻のノミをくらえ。』

『やめて、本当に……』

そう言いながら二人は手に持った斧を振り回してくる。……ヤベエ、受け止めきれぬかな。

ちよつと不安になりながらカッターとナイフで受け流す。

ヒュッ

「っ!!」

受け流しきれなかった斧がフリスクに向かう。それを止めるために腕を伸ばす。

ザクツ

「……………いつて!!」

「お姉ちゃん!!」

服と一緒に肉が切られる。血が滴って雪に落ちた。……………あー、腕絶ちきられなくてよかった…運がよかったな

「フリスク、無事?」

「お姉ちゃん、腕が……………!」

「大丈夫だよ、気にすんな」

……………痛みからしてそこまで傷は深くないと判断し、犬夫妻を見据える。

*The Dogs are 犬 夫 婦 は あ な の 匂 い を 嗅 ぎ 直 し て い る 。
re-evaluating your smell.

まあ、結果は黒だろうな、と思いながら鼻をすんすんと動かす二人を見る。

*DOGGERESEA—ATK 14 DEF 5

*—This puppy finds her hubby lovely. S

MELLS ONLY? 《この犬は夫を魅力的だと思っている。匂いだけ》

ドガレサさん酷くないすか。……まあ、目が見えてないみたいし仕方ないけどな、と苦笑しながら痛む腕を動かしてナイフを握る。

『人間と馴れ馴れしくするな』

『あれはあなたの夫じゃないのよ?』

そう声が聞こえると、二人が素早く私とフリスクを挟み、ドガミーさんが私達を挟んで反対側にいるドガレサさんに向かってハートの弾幕を飛ばし始めた。

「愛してるよ、ドガレサ!」

「まあ……!」

あ、ゲームだった時は分かんなかったけどこれこんな感じの弾幕なのね。

なかなか情熱的な弾幕だなと思いつつながら青色のハートの弾幕の部分に潜り込んでやり過ぎす。

*The Dogs are reevaluating your smell.

私達を挟んだまま鼻をすんすんと動かす二人。それを見ながらフリスクは『ACT』を押して地面の上を転がった。……よかった、覚えてたのね。私も直ぐ様地面を転がる。……うわ傷口いつてえ。

*—You roll around in the dirt and snow.

《あなたは土と雪の上を縦横無尽に転がり回った》

* You smell like a wild puppy.

転がったことよって雪の上を血が赤く模様を作っていた。……まあ冷えて痛みをあんま感じなくなつたから気にしないでもいいかな？

『人間の尻尾を蹴ってやろう』

『……え、人間って尻尾があるの？』

ないよ。とドガレサさんの疑問に心の中で返す。あるのは某サ○ヤ人だけです。

余計な事を考えていると、またハート弾幕が飛んでくる。それをまた青色のハートに潜り込んでやり過ぎた。

* The Dogs may want to | smell you.

もう少しか、と油断しないように気を引き締めてナイフとカッターを握る。

* The Dogs sniff you again……

* After rolling in the dirt, you smell a
ll right! 《地面をゴロゴロした後なので、あなたの匂いは良くなっていた》

『何！この匂いはまるで……』

『あなたって本当は子犬だったの!?!』

二人の顔が驚愕に染まる。……子犬ではないけどな、と思うと、少し罪悪感が心をつついた。

多少弱くなった弾幕が飛んでくる。それをまた青色のハートに潜り込んでやり過ぎす。

* The Dogs think that you may be a lost puppy. 《犬夫婦はあなたのことを迷子の子犬だと思っている》

迷子……まあ間違つてはないな。と思いながらカッターをおろす。

『ACT』を押ししたフリスクがドガミーさんに近づいて、頭を少しなでた。

* You pet Dogamy.
あなたはドガミーをなでた

『わお!!!他のわんこからのなでだ!!!』

『ねえ。私をおいてどういうつもり!』

かなり加減されたハート弾幕が飛んでくる。当たりそうになったやつを弾き返す。

……あともう一押しかな?

* The Dogs think that you may be a lost puppy.

「フリスク、ドガレサさんも撫でたげて」

「うん」

フリスクにそう伝えると、『ACT』を押ししてドガレサさんをなでにいった。

* You pet Dogressa.
あなたはドグレスアをなでた

『犬が犬をなでる……ステキ!』

『僕がここに居るのに……』

ドガミーさんの方をみると、しゅんとしたように顔を項垂れさせていた。嫉妬してら。

またかなり加減された弾幕が飛んでくる。それをフリスクを引き寄せて回避した。

*The Dogs' minds have been expanded.

これでもう大丈夫だと安心してカッターとナイフをしまった。

*YOU WON!

あなたは勝利した

*You earned OXP and 40 gold.

そうアナウンスが流れた途端、世界に色が戻ってきた。

「犬が犬をなでる???」

「新しい世界が開けたわね……」

感慨深そうに頷く二人を尻目に、私はまた痛みだした腕の傷をみる。……あゝ、血、めっちゃ流れてんな……大丈夫かなこれ……頭が微妙にぼーつとすんだけど……

「ありがとう、怪しい子犬たちよ!」

「あ、待って。……ねえ、血を流している方の子犬さん」

「……?はい……?」

去つていこうとしたドガミーさん呼び止めてから、ドガレサさんが私に近づいてくる。……というか何で血が流れてるの知って……ああ、血の匂いか。

「これ、受け取つてくれないかしら」

そう言つて差し出されたのは少し大きめの綺麗な包帯。

「……さつき、あなたを切つたのは私なの。ごめんなさい」

「え、あ、いいえ……怪しい匂いがあったら誰だつて警戒しますし、気にしないでください。貴女は貴女の仕事をしただけですよ」

深々と頭を下げるドガレサさんに、フオローを入れる。

「……ありがとう、そう言つてくれて嬉しいわ。でも、私が気になるから、もらつてくれないかしら」

そう言つてまた包帯を差し出してくる。

「……分かりました。有り難く使わせていただきます」

彼女の優しきに対して強情になる訳にもいかず、ドガレサさんの手から包帯を受け取る。

「ふふ、ありがとう。……それじゃあね」

少し微笑んで、彼女はドガミーさんと一緒に去つていった。

「…………お姉ちゃん!!」

二人の背が見えなくなった辺りで、流石に限界がきてぼすつと雪の上に尻餅をつく。すると、フリスクがこつちに向かつて駆けてくる。

「お姉ちゃん、リュック降ろして!!」

「あー……分かったからちよつと落ち着きなさい」

「……うん」

肩に引つ掛けておいたリュックを渡しながらそう言えば、フリスクは涙目で頷いた。

がさがさとフリスクがリュックを漁り、しまつておいた私の分のアイスを引つ張り出し、包装を剥いて私に渡してくる。

「食べてー!」

ずいっと差し出されたそれを受け取り、アイスにかじりつく。すつ、と頭が冷えて思考がクリアになる。……あ、美味しい。結構濃厚な味だな。

しばらく食べていると、徐々に腕の痛みが引いていき、体が怠かつたのが消えた。腕の傷を見ると、薄い傷痕を残してほとんど治っていた。

「……おー、なんかやっぱ魔法みたいだな」

「そうだね……」

また何もない所をみて、フリスクはほつ、としたように息をついた。

「あとはこの包帯を巻いておけば……」

服の袖をまくり、ドガレサさんからもらった包帯を少し使ってぐるぐると傷痕を隠すように巻き付ける。……あー、あんま上手く巻けなかった。ま、いっか。

「これで、よし、と」

包帯を止め、服の袖を元に戻して立ち上がる。

「お姉ちゃん、大丈夫……？」

「うん、立ち眩みもないし、大丈夫だよ」

そう受け答えしながら、ドガレサさんからもらった包帯の残りを見る。……あれはゲームだった時にはなかった行動だ。やっぱり、あの人達も生きているんだと再認識する。

「はい、リュック」

「ん、ありがとう」

リュックをフリスクから受け取り、残りをしまつてまた背負う。

「行こうか」

「うん」

また私達は雪の上を歩き始めた。

29. Snowdin探索⑤

〔Lily〕

腕の調子を確かめるために、腕を動かしながら歩く。

……うん、違和感はないな。大丈夫そうだ。

さて、次のエリアは……ああ、パズルか。

雪を踏み締めて次のエリアに踏みいる。……確か仕組みはバツ印を丸印に変えて、スイッチを押すんだっけな？

「お姉ちゃん、このパズル、このバツを丸に変えてスイッチを押せばいいんだって」

「あ、そういう仕組みなんだね」

看板に近づいていったフリスクが、看板の内容を教えてください。……解き方間違えてなくてよかったよ。

そう思いながら私はフリスクと反対側のバツ印の前に移動する。……乗ったら丸に変わるって、どういう仕組みなんだろうか。重量が感知できる仕組みになってるのか？

「……あ」

移動する途中、針山の向こうでパピルスがこちらに背を向けて立っているのを見つけ

た。……身長高いなあと思ひながら、足元にあるバツ印を踏む。バツ印が一瞬で赤い丸印に変わった。

「おー……こんな風に変わるのね……」

「面白いね！」

フリスクはそう笑顔で言つて足元のバツ印を踏み、スイッチを踏んだ。

カチツ

という音がして、丸印が緑色に変わった。後ろを振り返ると、針山が引つ込んで通れるようになっていた。

音が聞こえたのか、パズルを解いた事に気付いたパピルスが振り返り、驚いた顔を見せる。

「何!?! 俺様の罠を避けたのか!?!」

「うん、ちゃんと解いたよ」

パピルスの言葉に頷く。

「まあいい、一つ聞きたいことがあるのだが……」

何?と言わんばかりにフリスクが首を傾げる。

「俺様のスパゲッティは残したのか??!」

アツ、超答え辛い質問がキターと思ひながらフリスクと顔を見合わせる。……マジで

どう答えようかこれ……

フリスクは少し考えた後、小さく首を縦に振った。

「ホントか!？」

「ぱあつと顔を明るくするパピルスに胸が罪悪感でいっぱいになる。……ごめんよパピルス……」

「うわーお……今まで俺様の料理を味わった者はいなかった……」

まあそりや今まで会った人間私達だけだしね……と思いつながら黙って話を聞く。

「だが!!心配するな人間!俺様、マスターシエフのパピルスが……お前たちのためにどんなパスタでも作ってやるぞ!!ヘッヘッヘッヘッヘッヘッニエツ!!」

そう言ってパピルスは背を向けて去っていった。…バリエーション豊富やなその笑い方。

フリスクを見ると、少しきよんとした顔でパピルスを見送り、彼の姿が見えなくなった辺りで、私の方を見て嬉しそうににっこりと微笑んだ。

『ぼくたちのために』、だって。嬉しい!」

「…そうだね」

フリスクはルンルンと鼻歌を歌いそうなくらい上機嫌で先に進む。私はその姿に和みつつ、フリスクが優しい性格に育った事に安堵する。……頑張つて愛した甲斐があつ

たよ。

「お姉ちゃーん！行こう！」

満面の笑顔のフリスクに急かされ、私はフリスクを追いかけた。

30. 三つ目のパズルとカラータイル

【Lily】

次は……確か、あのパピルスの顔のパズルだったっけ、と思い出す。

「……あれっ」

「どした？」

「道の先にパピルスがいる……」

道を抜けた先にパピルスがいるのに気がつき、フリスクは驚いたような声をあげてから近づいていった。私もフリスクの後に続く。

「サンズが最近靴下コレクションを始めたんだ。まったく……悲しいもんだ……」

「色々ツツコミたいことはあるけど、待って。なにそれ」

呆れたような顔でそう言ったパピルスに思わずツツコミを入れた。なんやねん靴下コレクションで。そんなを艦〇れ始めたみたいと言われても困るんだけど……

「面倒を見てくれるクールな骨がいなくなったら……サンズのヤツ、どうなっちゃうんだらうな???!」

「……」

……まあ、一人立ちとかならまだしも、もし殺されたりだったとしたら、愛しい弟の幸せを願ってる彼のことだ、キレるだろうな。……あのルートで見せた顔のように。

彼特有の高笑いを聞き流しながらそう考える。

話は切り上げられたらしく、フリスクが動いたのに気付き、私も歩きだす。

少し歩いてスイッチの前辺りまでくると、ついてきていたパピルスが勢いよく話しかけてくる。

「人間!!……んん……あー……なんと言えばいいか……」

「……どしたよ、口ごもって」

話しかけてきたはいいものの、パピルスは言いにくそうに口ごもる。

「お前が来るのが遅くて……凄く時間が余ったんでな……」

「……おう……?」

フリスクは不安そうに手を握ってくる。かわいい。……てかそんなに時間かかったっけ?

「パズルを俺様の顔っぽく改造したのだ!……運悪く、雪が地面に凍りついて固まっちゃったけどな」

「ああ……そういうこと……」

そこまで恐ろしい事ではなかったことに安心したのか、フリスクはほっと息をつく。

「というわけで解き方が変わるのだ！そして、今回も、あのぐうたら兄弟がいないと来た！」

最後は怒ったように顔をしかめながらパピルスはそう説明する。……こうやってわざわざ説明してくれるのも彼のいい所だよなあ

「何が言いたいかっていうとな……」

一呼吸置いてパピルスは決めポーズを取る。

「心配するな、人間！このグレートな、パピルス様が難問を解いてやろうー！」

パピルスが言ったことにフリスクはきよんとする。……風がないのにスカーフが靡くってどうなってるの？

「さすれば俺様もお前も先に進める！」

フリスクは顔を少し綻ばせながら話を聞く。……多分だけど、彼の優しさが嬉しいんだろうな。

「しかしだな、もし二人で挑戦する気があるなら……答えは教えないでにおいてやるからな！」

パピルスが話し終わると、フリスクはパクパクと口を動かして彼に何か言った。

「む、そうか？なら頑張るのだぞー！」

……二人で頑張ってみる、と言ったのかな？

話し終わると、フリスクはにこにこしながらパズルに向かう。

「お姉ちゃん、頑張ろう！」

気合い充分なフリスクが言う。かわいい。その言葉に頷き、私もパズルに向かう。

「……どうやって解くんだろ……」

「んー……」

……答えは知ってるけど、フリスクのためにならないと判断して、考えるふりをする。
……時間かかるかなー、これ。

数十分はたっただろうか。

一歩踏み出してバツを丸に変えてはその丸を三角に変えたりと試行錯誤していると、フリスクがはっと思いついたように顔をあげた。

「お姉ちゃん、分かったかも！」

「え、マジか」

「うん！一回リセットしてくるから待ってて！」

そう言つてフリスクは駆け足でスイッチを押し、すぐに戻ってくる。……一瞬、『リセット』つて言葉に肩が強張った。

「あのね、お姉ちゃんはそこのバツ印の所に立ってほしいの」

「いいよ」

フリスクに指定された左側で一番上（多分左目にあたるところ）のバツの上に立つ。
「で、あとはね……これをこうして……」

残りのバツをフリスクは丸に変えていく。全てを丸に変えようと、フリスクはスイッチを自信満々でスイッチを押した。

カチッ

という音がして、丸が黄緑になって答えが固定される。

「やった！解けた！」

「良かったね、フリスク」

「うん！」

余程嬉しいのか、抱きついてくるフリスクの頭をなでる。正直言ってもかわいすぎ。

「うわ!!!俺様の助けなしで解いちゃったぞ……信じられん！」

「凄いでしょ、私の妹」

驚く。パピルスにフリスクを自慢しておく。

「さてはお前たちもパズル好きだな？」

「まあ嫌いじゃないよ」

フリスクと一緒にやる時もあるし、解いてて楽しいしな。

「なら、次のパズルもきつと気にいるぞ！お前には簡単すぎるかもな！！ニエツ！ヘツ！ヘツヘツヘツヘツ！！」

まあどんなのかにもよるけどな、と思いつながら、去っていくパピルスを見送る。

「……………あ」

見送って目線をずらした先にサンズがいるのに気付いた。

「フリスク、あそこにサンズがいるよ」

「え？……………あ、本当だ」

気がついていなかったフリスクに声をかけ、二人でサンズに近づいていく。

「おい、なぜ俺に助けを頼まなかった？俺はずつとここにいたんだが」

「嘘つけおい」

つかいつの間そこにいたの？と疑問をぶつけると、笑って誤魔化された。……………十中八九彼の能力であるショートカット……………つまりは瞬間移動を使ったんだろうと見当をつける。

「そんじゃあね」

話を切り上げ、フリスクの手を引いて次のエリアに進む。

次のエリアは……………あのカラータイルか。

そう考えつつ道を抜けると、橋と灰色の床を挟んで向こう側にサンズとパピルスが話し合っているのが見えた。パピルスの近くには機械もある。……合ってるっばいな橋の近くまで行くと、こちらに気がついたらしい二人がこつちをみる。

「おい！人間よ！」

「なんじゃらほい」

このネタ古いなと思いつつながらパピルスに返事をする。

「このパズルはきつと気に入るはずだぞ！偉大なるアルフィス博士が作ったのだからな！」

……ここでアルフィスの名前が出てくるんだっけ。失念してたな。

実を言うと、これを覚えておけば後に出てくるメタトンのカラータイルパズルの時もアルフィスが関係してると気付いたりする。よく見ると機械の形も変形前のメタトンそっくりだしね。

「この床が見えるだろう！俺様がこのスイッチを入れたら……色が変わり始めるぞ！色によってそれぞれ効果は異なる！」

「へえ、どんな？」

「それを今から説明するのだ！」

私がそう聞くと、パピルスは説明を始める。

「赤い床は通行禁止！その上を歩くことは出来ないぞ！」

黄色の床は電撃だ！踏んだらお前をビリビリさせるぞ！

緑の床は警報が鳴る！もし踏んだら……モンスターとの戦闘が始まっちゃうのだ

!!

オレンジの床はオレンジの匂いがするぞ。踏んだら爽やかな香りが体に染みつく

!

青の床には水が入っている。進みたいなら泳いで通れる。だが……お前からオレンジの匂いがしたら！ピラニアがお前に噛みつくぞ！

そして、もし青い床の隣が黄色だったら、青のタイルもビリビリするようになるぞ

!

紫色の床は滑る！次の床までつるーつと滑っちゃうぞ！だが、滑るだけではなく……レモンの匂いがつく!!ピラニアはレモンの匂いが嫌いだ！レモンの匂いなら、紫と青の床は通ることが出来る！

最後に、ピンクの床だ。これは……何も起きない！どんな時に通っても大丈夫だ！相槌を打ちながら私は忘れられないようにそれを反芻する。ここで忘れたら洒落にならん。……というか、床に水入ってるのってどういう原理になってんの？

「どうだ!?わかったか??！」

その質問に、『Player』はもちろんと答えたらしく、フリスクは頷いた。
「よし！それじゃあ最後に言っておく事がある」

パピルスの言葉に、なあと、と言わんばかりにフリスクは首を傾げる。

「このパズルはな……完全なランダムに組み上がる!!」

「マジかよ……」

パピルスの言葉にフリスクは衝撃を受けたらしく、握っていた手に力がこもる。

「俺様がこのスイッチを引つ張れば……まったく見たことのないパズルができあがるのだ！俺様ですら解き方はわからない！」

……まあ答え知ってるけど、バタフライエフェクトがないとは言い切れないためじつと床を見つめておく。

「ニエツヘツへーいくぞ……!」

そう言うとパピルスは機械を操作し始める。すると、床が鮮やかな色のタイルに変色していく。そして、変色していくのが早くなる。……さて、どうなる……？

ガシャン!!

という音がして、変色が止まる。……ゲーム通りに赤とピンクのタイルで。

「……………」

「……………」

私達が呆然としてしていると、パピルスはくるくると回りながら退場していった。……あれどうやって進んでるんだ……？

「……えっと、通りやすいやつで良かったな……」

「せやな」

なんとか言葉を見つけたフリスクがそう言った。

タイルの上を変わらないうちに渡ってしまふ。途中、好奇心で赤色のタイルを踏もうとしたが、マジで通れなくなっていた。……どうなってるの？

「実は、あのスパゲッティは大分前からあつたんだ……」

「あ、そうなの？」

無事タイルの上を渡り終わると、サンズがそう話しかけてくる。

「俺の兄弟が作ったにしちやいい出来だったと思うぜ」

「……その言い方、パピルスってもしかしてメシマズなの？」

「おう。あいつは料理の練習を初めてから、かなり成長したんだ」

「マジか」

うん、まあ知ってたけどな。

「あの調子なら来年には食えるものが出来るだろうよ」

「へえ、楽しみだね」

……まあ、サンズにとって『来年^来』なんて有って無いようなものなんだろうけどな。そう思いながら話を切り上げる。

「じゃあね」

サンズに別れを告げ、先に歩きだすフリスクの後を追った。

31. Snowdin探索⑥

[Lily]

次は……あ、レッサードッグの見張り小屋の所だっけ。

そう思いながら道を抜けると、どれも異様に首が長い犬の雪像が作られていた。

「……え、なにこの地獄絵図」

思わずツツコミながら頭を回転させる。……確かこれってなでまくってないとならなかったはずだ。私そこまでなでたっけ？でもお金もらってないよな……？

「……ああ、いたいた」

「？」

声をかけられて前をみると、もう少し奥の方で話しかけるはずだった牛のモンスターが立っていた。

「あんた、さつきこの担当の犬の頭なでなかったかい？」

「はい、撫でましたが……」

「そっか、じゃああんたなのね。……これ、あの犬からだよ」

そう言つて手のひらに金貨をどっさり乗せられる。

「!？」

「あの犬が、あんたに渡してほしいって預けてきたの」

「え、でもこんなにたくさん……」

「ざっと60枚はあるぞこれ……まさか、あの頭ぶつめたやつで境地に辿り着いたのか？」

「いいから、もらっておきな」

「……じゃあ、いただきます」

「この先必要になるし、彼の好意を無駄にするのはいけないと判断してありがたく受け取る。」

「……これどうしまおうか……」

「そう考えているうちに、牛のモンスターはどこかに行ってしまった。」

「……………」

「どこに行ったのかキョロキョロ見渡していると、小屋の裏の林のなかで何かが光を反射したのに気づく。」

「……カメラか。そういえばあといくつあるんだっけ？」

「そう考えながら空いていたリュックのポケットに金貨を入れた。」

「……………お姉ちゃん、この中、ポメレーズンの箱でいっぱいだ……」

「GONZかな？」

金貨をどこにしまうか四苦八苦しているうちにセーブを終えたらしいフリスクが小屋の中を覗いてそう言った。

次は……あー、あの氷のパズルか？

「あ、またパズルだ……お姉ちゃん、これ、どうやって解こう？」

「んー……取り敢えず、こっち行ってみない？」

「そうだね」

先に坂になっている道から攻略する。……確かパピルスとサンズの雪像があるんだっけな。

「……あつ、お姉ちゃん！パピルスの像だ！」

「おー、ホントだ」

フリスクが道の先にパピルスの像があるのを見つけ、近づいていく。……結構作り込まれて凄く良い出来だと思っけどき、スケルトンに筋肉あっただろうか。

「……サンズはもうちよつと本気だそうぜ？」

「あはは……」

パピルスの雪像の隣には、もはや雪像というより雪の塊といった方が正しいようなサ

ンズの雪像があった。……マーカーで文字書けるレベルってどんだけ硬いんだろうかこの雪。

「他には何もなさそうだし、上に戻る？」

「うん」

ざくざくと来た道を戻り、またパズルの前に来る。

……んー、ここ、別に落ちても怪我しないけど、万が一怪我したらやだし、解いちやうか。

「……フリスク、私これ分かったかも」

「えー！本当!?!」

「うん、ちよつと見せて」

フリスクを待たせ、スケートの要領でまた氷の上を滑ってバツを丸に変えていく。……ちなみにこれ、上のバツからだ螺旋を描くように解けるけど、下のバツからでもパズルが解けたりする。

全てのバツを丸に変えて、私は滑った勢いでスイッチを踏む。

カチツ

ゴゴゴゴ

スイッチを踏むと、道が現れ、切れて通れなくなっていた道と繋がる。

「よっしや、解けた」

振り返ってフリスクを手招きして呼ぶ。すると、フリスクは一直線に滑ってきてそのまま私に抱きついてくる。……うおっ、あつたかいな。子供体温って素晴らしい。

「お姉ちゃん凄いい！」

「あはは、ありがとー」

フリスクが顔を輝かせ、私を見上げながらそう言った。かわいい。

「行こうか」

フリスクから離れ、手を引いて一直線の道を滑る。

ぼすっ

「つめたっ」

「!？」

何今の音。驚いて滑り終わったあとにフリスクを見れば、頭の上に雪が被さっていた。……雪まみれになつてら。

「あーあ、大丈夫？」

「だいじよ……へくちっ」

「……大丈夫じゃないなこれは」

雪で冷えてしまったらしく、フリスクがくしゃみをする。かわいいな。

雪をフリスクの頭から払い、自分のパーカーを脱いでフリスクに着せる。……うわさむ。

「着てな」

「えっ!?で、でもお姉ちゃんが寒いんじゃないよ……」

「だーいじよぶだよ、バカは風邪引かないさ」

「……お姉ちゃんバカじゃないもん」

ぶくつと頬をふくらませて不満そうにしながら、それでも私の心配をしてくれるフリスクに和みながら頭をなでる。言葉に言い表せないほどかわいい。

「あはは、まあ、体があったまったら返してくれればいいからさ。今は着てな」

「……うん……」

渋々頷くフリスクを見て、私は脱ぐために一度降ろしたりリュックをまた背負う。

「先にどっち行く?右?それとも真っ直ぐ進む?」

「んー……右いく」

フリスクに判断を任せ、右の道(ゲームだと下の道だったはず)を進む。前を歩くフリスクには流石に私のパーカーは大きいようで、袖が大分余ってフリスクが動くごとに揺れていた。

「……お前さん、その薄着で寒くないのか?」

「あ、サンズ」

道を抜けると、サンズが壁に寄りかかりながら話しかけてくる。

「寒くないわけがないわな」

「だろーよ。だったらなんで……」

「いやー、フリスクが風邪引いたら嫌じゃん？」

「……」

一瞬驚いたような顔をしてから、サンズはまた疑念の籠った目線を送ってくる。そしてフリスクからも視線がくる。……視線がいてえよ。

「……もう行っていい？」

「おう。じゃあな」

サンズと別れた瞬間、背景が白黒に切り替わった。……どうやら戦闘らしいな

* Gy f t r o t c o n f r o n t s y o u !

……あー、そういうえばここギフトロットとエンカウントすんだっけな。忘れてた。

ふと彼の頭を見ると、額に写真が貼ってあった。……飾られてるやつってランダムだからどうなるかと思っただけ……まさかあるとは。……せつかくだし使わせてもらおう。

* G Y F T R O T | A T K 1 6 D E F 8

*—Some teens” decorated” it as a prank.

《若者たちにイタズラで「デコレーション」されている》

「誰だそんなことしたの」

流れたアナウンスに思わず声に出して突っ込む。……まあスノードレイク君は確定だろうけど。

『これをどかしてくれ……』

「いよいよ」

悲痛な声でそう言ったギフトロットは、プレゼントの箱のようなものを召喚し、こっちに飛ばしてくる。青い色に変色した箱の所にフリスクと一緒に転がり込んで避けた。

*—Gyftrot distrusts your youthful demeanor
 anor 《Gyftrotはあなたの若者らしい品行を信用していない》。

フリスクがすかさず『ACT』を押し、ギフトロットに近づいて角に引つ掛かっていた靴下をぱつと取つてもつてくる。……なぜ靴下の中にナゲットを入れたし。

*—You remove a stocking filled with chicken nuggets. 《あなたはチキンナゲットが溢れそうな靴下を取り除いた》

『マシにはなったかな』

少し声のトーンが穏やかになったギフトロットは、小さい雪片を召喚して飛ばして行く。その一発が私に飛んで来た。

「つめてっ」

弾幕が掠つたところが一気に冷える。……パーカーがないから尚更冷えるな……

* Gyft trot seems slightly less irritated.

……よし、このまま行けば大丈夫かな？

そう考えながらフリスクに近づいてパーカーからカッターとナイフを出す。

出し終えると、フリスクは背中にあつた箱を取る。

* You remove the box of non-dog-related

draisins. 《あなたは遺犬子組み換えでないレーズンの箱を取り除いた》

なんだよ遺犬子って。遺伝子とかけてるのか？……つかレーズンって今のところ

レッサードッグしか心当たりがないんだけど。

『マシにはなつたかな』

また少しだけ穏やかなトーンになったギフトロットの攻撃を弾いて飛ばす。……弾幕が弱くなつてきてるな。もうちよいか。

* Gyft trot seems slightly less irritated.

「フリスク、頭に貼ってあるあの写真、取ったら持ってきてくれない?」
「? いいよ!」

フリスクにそう頼むと、笑顔で了承して取りにいつてくれた。ペリ、という音がして写真がギフトロットの頭から剥がれる。

*—You remove a childhood photograph of Snowdrake and his parent. 《あなたは子供の頃のSnowdrakeとその家族の写真を取り除いた》
『肩の荷が降りたよ』

穏やかなトーンでギフトロットはそう言った。……これでもう大丈夫か。

*
Gyftrot's programs have been taken away.
『ACT』を押しして名前が黄色に変わった事を確認し、フリスクは『MERCY』を押しした。

*YOU WON!

*You earned XP and 20 gold.

そのアナウンスと共に背景に色が戻ってくる。

ギフトロットは嬉しそうな顔で去っていった。

「はい、お姉ちゃん。写真」

「ありがとう」

ギフトロットが去っていくのを見送り、フリスクは私に写真を渡して来る。失礼して写真を覗き込むと、小さいスノードレイク君とゲームで見た彼のお父さん、そして、その隣には、微笑む美しい鳥のモンスターが写っていた。

……大事な物なんだろうに。なんでこんなことしちゃうのかな。

「…………お姉ちゃん、大丈夫?」

「ん?何で?」

「凄く悲しそうだったから…………」

フリスクが心配そうに見上げてくる。…………そこまで悲しそうな顔してたか、私。というかそんな顔してたのか。

「大丈夫だよ、行こうか」

取り敢えず誤魔化して先を促す。さっきの場所から瞬間移動したらしいサンズが、じいっと私を見つめていた。

「…………なあ…………尾けてきてるのか?」

「な訳なからうて」

近づくと、ニヤニヤとしながらサンズはそう言った。…………内心穏やかじゃないんだろ

うけどな。

「じゃね」

彼と別れて先を歩く。……確かこの先って、あれだよな。開かない扉のところだっただけ。スペシャルサンクスの弾幕を全部避けきれば開くんだっけ？

考えながら進むと、案の定洞窟が口を開いていた。

「……？　なんだろうこ」……」

興味津々でフリスクは洞窟の中に入っていく。それに続いて私も入る。

「うわ、綺麗」

洞窟の中は薄ぼんやりと青色の光で明るくなっていて、ラ○ユタの洞窟のシーンにそっくりで綺麗だった。

「……お姉ちゃん、この扉開かない……」

奥まで進んだフリスクが呼び掛けてくるのを聞き、私は止まっていた足を動かしてフリスクの傍に行く。……あ、光るキノコ綺麗だな。緑とかなら地上でも見るけど、これ青色だしな……どうという原理なんだろう？

「開かないの？」

「うん。この光るキノコとかも触ったりしたんだけど、何にも起きなくて……」

困った顔でこちらを見るフリスク。光るキノコを見れて若干テンションが上がっている私はゲームで見た通りの青紫色の扉に近づき、扉をよく観察する。

……扉にノブはなく、上の方にはトリエルさんが着ていた服についていた紋章のようなものを書いてある。鍵穴もないし、開きそうにないかな。

そう思いながら諦められずに一発扉に蹴りを入れてみる。……扉はびくともしなかつた。

「うーん……開きそうにないなあ、これは。鍵穴でもあれば良かったんだけどねえ」

「だよー……」

二人で息をつき、扉に背を向ける。

「諦めて奥の道行くか」

「そうだねー」

二人でそう決めて、私達は来た道に戻り始めた。

32. グレータータードツグ戦

「Liily」

来た道に戻ってきた私達は、そのまま奥の道へと進む。……確か次はグレータータードツグ戦か。

「うわ、なんだろうこれ？」

フリスクが点々とある雪まんじゅうに興味を示し、一番近くにあったやつに近づいていく。

……確かどれか一個お金が入ってなかったっけ。

「……雪まんじゅうだって。食べれるのかな？」

「流石に無理があると思うよ。……雪だよ？」

「あー、そっか……」

しゅんとするフリスク。……ちよつと言い過ぎちやつたかな？

「……まんじゅうが食べたいなら地上に戻ったら作ってあげるから我慢なさいな」

「！ 本当!？」

「おー。私がフリスクとの約束破ったことあるか？」

「ないー！」

マジである。私はフリスクとした約束は絶対に破ってない。あの日した指切りもだ。……ちなみになんでもまんじゅうの作り方知ってるかというところ、父さんから教わったから。父さんと菓子とか作るの好きだったんだよな。

「よし、じゃあ早く帰らなきゃね！」

「あはは、そこまで急がなくても……」

急いで怪我したらやだし。

そう思いながら雪まんじゅうを片っ端から調べるフリスクについていく。

あつという間にフリスクは奥まで進んでいき、奥にある雪まんじゅうを調べて、ぼすつと中に手をつ突っ込むという奇行に走った。

「……何やってんの……？」

「この中なんかあるっぼくて……」

若干驚きながら聞けば、そう返事が返ってくる。……ああ、これだったか、お金入ってたやつ。

「お姉ちゃん、この中お金入ってたー」

「マジか、いいことあったな。……つか冷たくない？大丈夫？」

「大丈夫、一瞬だったからそこまで冷たくなかったよ」

フリスクが手をまんじゅうの中から抜き出すと、案の定手には金貨が握られていた。フリスクは金貨をポケットにしまうと、最後になった道にある雪まんじゅうに近づいていく。それを見て私はズボンのポケットにしまっておいたカッターと玩具のナイフを気づかれないようにそつと取り出す。

「わんっ！」

「あ、わんちゃんだ！」

フリスクが嬉しそうな顔を浮かべた次の瞬間、その顔は驚愕に染まった。

ゲーム通り、雪の中からゴツイ鎧が出てきたからだ。……これどうやって埋まったんだよ……

呑気にそんなことを思っていると、世界が白黒に切り替わる。

*It's the Greater Dog^だ.

……うお、籠手つぼい所についてる犬の顔と目があった。顔はかわいいのに鎧についてるから若干こええよ。

若干慄きつつカッターとナイフを構え、フリスクの前に立つ。

*GREATER DOG | ATTACK 15 DEF 8

*—It's so excited that it thinks fighting is just play. 《戦いを遊びだと思いとでも興奮しているよう

だ》

「感性捻曲がってませんかねえ」

戦いを遊びだと思ってるってどんな教育してんの。

ツツコミを入れてみると、彼が槍を横風ぎに振るってくる。

ブオンツ

「うおっ!?!」

青と白に変わりながら振るわれたその槍を青に切り替わった瞬間を狙って体を滑り込ませる。……フリスクに怪我なかつたからいいけど、あれ当たったら絶対痣残るだろ

……

* Greater Dog is watching you intently.

……じろじろ見られんの嫌だからやめてほしいんだが。

そう思いながらフリスクを見ると、手を空中に伸ばしていた。

* Greater Dog is too far away to pet.

* You just pet the air.

まあそりやそうだ。この距離じゃ届かないわな。

そう考えていると、今度は『BARK』という文字の弾幕が飛んでくる。

飛んで来たそれをナイフを使って弾き、グレータードッグを見ると、立ちながら眠っていた。……器用だなおい。

* Greater Dog is waiting for your command.

パチ、と目を開けたグレータードッグは尻尾を振りながらかわい顔でこちらを見つめている。……槍とも目が合う。こつちみんな。

槍から目を反らし、そのままフリスクを見ると、グレータードッグを手招きしながら口をパクパクと動かしていた。

* You call the Greater Dog.

* It bounds towards you, flecking slobber into your face. 《あなたに向かって飛びつき、顔をよだれでベトにした》

それに反応してグレータードッグがダッシュで近づいてきてフリスクに飛び付いて顔を舐める。……あーあ、ベトベトになってやがんの。パーカーもちよつと汚れたなー

グレータードッグがそのまま目を閉じ、弾幕を打つ体勢に入る。手が出せずにどうなるかひやひやしたが、何も起きなかった。……あれ？

「フリスク、無事か!？」

「大丈夫!」

アナウンスを無視してフリスクに聞くと、間髪入れず返事が返ってきた。そのことに安堵しながら、フリスクがグレータードッグの頭に手を伸ばすのを見届ける。

*—Greater Dog curls up in your lap as

it is pet by you. 《Greater Dogはあなたがなでると膝の上で丸くなった》

* It gets so comfortable it falls asleep
 ……

アナウンスとは異なり、フリスクの膝に頭を乗せ、膝枕状態でグレータードッグは目を閉じる。フリスクが優しい顔で彼をなでる。

……そこかわれ。

Z z z z z ……

……

* Then it wakes up!

* It, so excited!

目を開き、グレータードッグはぱっとフリスクから距離を取る。その隙に私はフリス

クの前に立った。

その瞬間、槍が突き出され、不意をつかれ避けきれなかった私の肩を掠めていく。T
シャツの袖と肌を槍の先が切り、血が流れる。

「いってっ」

「!!」

「……あー、大丈夫だからそんな顔すんな」

一気に心配そうな顔になったフリスクを嗜め、アナウンスを無視して傷を改めて確認する。……そこまで深くない傷だと判断し、放置してグレータードッグを見据える。

フリスクは息をつき、雪を集めてボールにすると、思いつきり投げた。

*—You make snowball and throw it for t

he dog fetch. 《あなたは雪玉を投げて犬に取ってこさせようとした》

*It ^雪 ^玉 ^は ^地 ^面 ^に ^落 ^ち ^て ^は ^じ ^け ^た .

はじけた瞬間フリスクが「あつ」って言ったのは聞き逃さなかった。

*—Greater Dog picks up all the snow in

the area and bring it to you. 《Greater

Dogはそのあたり全ての雪をかき集めて持ってきた》

予想の遙かなナメ上をいく量をかき集めて持ってきたグレータードッグ。ドサツと

いう音を立てて目の前に落とされたそれは、小さく山を作っていた。……いや多過ぎだろ。

*Now dog is very tired…

*It rests its head on you…

フリスクがまた膝枕をしてやると、グレータードッグは静かに目を閉じる。……あ、そういやこの寝る弾幕動かなければいいんだっけ。忘れてた。

「フリスク、この攻撃の時は動かないで！そうすれば攻撃されないっほい！」
「そうなの!?わかった！」

フリスクにそう伝えると、フリスクは小さく頷いた。

*Greater Dog wants some TLC.

……この言葉は結構考えさせられる。ただ甘えたいだけなのか、それとも何か暗い過去があつてそれを癒してほしいのか。

まあ、ただなでてほしいんだろうけどなど結論づけ、行き先を見守る。

*As you pet the dog, it sinks its entire weight into you 《あなたがなでると、犬はあなたに体重を預けてくる》……

……これゲームでも思ったけど、フリスク潰れない？大丈夫？

* You remove slow.
 * But, you still have, pet enough……!

またグレートードッグが目を閉じて文字弾幕の攻撃をする。フリスクと私が微動だにせずにいると、弾幕は発射されることなく過ぎた。

* Pet capacity 40 | percent.

なでなで度つてなんやねん。

苦笑しながら心の中でツツコミをいれ、グレートードッグとフリスクを見る。フリスクは目を閉じたままのグレートードッグに手を伸ばし、なでていく。

* You pet decisively.

* Pet capacity reaches 100 | percent.

* The dog flops over with its legs hanging in the air. 《犬は高く飛び上がりあなたの上に覆い被さった》

ぱつと飛び上がったグレートードッグに反応が遅れ、フリスクは地面に縫い付けられてしまう。……ぐりぐりと頭を擦りつけているだけでよかったよ。

そのまままた動かないでいると、弾幕は来ないままターンが過ぎる。

* Greater Dog is contented.

……これで大丈夫か。

安心してカッターとナイフをしまい、フリスクが『MERCY』を押すのを見届けた。

*YOUあなたは勝利した WON!

*Youと earned40 XP and 40 goldを得た.

そうアナウンスが流れ、世界に色が戻ってくる。

「わんわんっ」

鎧から抜け出てきた一匹が、フリスクの鼻の頭を舐める。

そして、鎧に逆向きで入ると、そのまま歩いていった。……もう一度言う、逆向きでだ。

「……あれ一匹で動かしてたの……?」

「……………さあなあ……………」

フリスクがぎよつとしたながらもらした呟きに返答する。……魔法ツテスゴイナー。

「ん、あ、そう言えば……………ほら、これで顔拭きな?」

「あ、ありがとう」

顔をよだれでベトベトにされていたことを思い出し、ハンカチを渡す。顔を拭いた後、フリスクはハンカチをポケットにしまい、パーカーを脱いで返してくる。

「もう暖まったから大丈夫」

「そう?じゃあ返してもらおうわ」

パーカーに袖を通し、ジツパーを上げる。……あ、あつたかいわ。子供体温凄すぎか。
「……さて、行こうか」

「うん」

頷いたフリスクの手を握り、奥へと進んだ。

3.3. 砲弾と槍と犬と橋

〔Lily〕

道なりに進んでいくと、ゲームでも見た長い一本橋が現れる。……あ、この橋の下にカメラ仕掛けられてるんだっけ。

カメラの存在を思い出し、橋の下に目線を向けると、こちらにレンズを向けているカメラを見つける。……やっぱあったな。

「お姉ちゃん？なんかあったのー？」

「何でもない、今行くよー」

カメラから視線を反らし、橋を渡り始めていたフリスクが続いて橋を渡る。……あ、すげえ眺めいいわここ。あと全く揺れない。魔法で補強してあるのか？

「……あ、パピルスとサンズだ」

橋からの眺めを楽しみながら歩いていると、フリスクが橋の終わりにいるパピルスとサンズに気が付き声をあげた。パピルスもこちらに気づいた素振りを見せる。

「人間……これが最後の一番危険なチャレンジだ!!見よ！命にかかわる恐怖の一本橋！」

パピルスがそう言うと、上からモーニングスターの砲弾と槍と犬が吊るされ、下から

は火炎放射機と槍と砲台がセットされる。……下からは分かるけど上はどうやって吊るしてんだ？機械とかなんもないぞ？あと何で犬が居るんだよ。

取り敢えずツツコミたいことは多々あるがそれを飲み込み話を聞く。

「そして俺様が合言葉を言うのと、起動するのだ!!砲弾が襲い！トゲは激しく揺れ！刃がお前を切り刻む！全てが暴力的にまで動くぞ！」

想像しただけだけど軽くスプラッタだわそれ。R—18Gやん。

「生き残る術はほとんど無い!!！」

だろうよ。殺しに来てるもんこれ。誰だこんな残虐トラップ作ったヤツ。

「準備はいいか!？」

「あ、心の準備がちよつと……」

「しかし！今！から！ヤバイ事！始めちゃうぞ！」

「無視?!」

私の声が小さくて対岸には聞こえなかったのか、パピルスはトラップを作動させようとする。

……しかし、トラップはいつまで経っても作動しなかった。

「……………で？なんだよこの間は」

仕掛けが動かさず不思議そうにしているフリスクと一緒に首を傾げていると、サンズが

パピルスに声をかける。

「間!?なんだって!?今からやる所だ!!い…いま起動しているところなのだ!!」

パピルスがそう言うので待つてみる。……が、また妙な間が空いただけで何も起きなかつた。

「……………んー、つと、動いていないように見えるんだが」

またサンズがパピルスに声をかける。

「えーつと!!!このチャレンジは!!!うーんと……………ちよつと……………人間を倒すには簡単すぎたかなつて」

パピルスは観念してそう言った。……本当優しいなあ、パピルスは。

「そうだなーやっぱりやめるぞ!!!」

パピルスは大きな声でそう宣言する。

「俺様は良識のあるスケルトンだからな!!!俺様のパズルはみんな公平なんだ!俺様のトランプは巧妙に作られてるのだ!だけどこのやり方は物理的すぎるよな!」

うんうんと頷いておく。……よかつたよスプラッタにならなくて。

「下がつてよーし!」

そうパピルスが声をかけると、するするとトランプは引つ込んでいった。

「フウー!」

後ろを向いて大きな声で息を吐くパピルス。……傷つけなくてすんだことに安堵しているんだろうか。……それともトラップが故障してただけなのか？

ちらりとフリスクを見ると、きよとんとしてパピルスを見つめていた。

「何を見ている!!これもまた俺様の決定的な勝利なのだ!!ニエツ!!ヘツ!!……ヘツ???」

……最後なんかイントネーション違くなかったか。というかいつの間に勝負してたっけ私ら。

余計な事を考えながら去っていくパピルスを見送り、姿が見えなくなった所で橋を渡りきる。渡り終えると、フリスクはサンズに話しかけにいった。

「あいつが何をしようとしているのかさっぱり分からん。俺だったら、とりあえずブルー攻撃の対策を考えておくな」

なかなか上手い言い回しだなと私は思った。この言い回しならサンズが言っていた『止まっていれば当たらない攻撃』のことだと勘違いしやすい。だが、実際は『ソウルを青くする攻撃』のことを言っている。……流石としか言いようがない。

「忠告ありがとう。じゃあね」

話は終わりだと言わんばかりに口を閉ざしたサンズに手を振り、雪を踏みしめて先に進む。

……ようやくスノーデインの町についたのかと、少し安堵した。

34. Snowdinの街①

〔Lily〕

街に入ると、空気がほつとするような物に変わる。……やっぱ非戦闘区域だからかな？空気が穏やかだわー……

戦闘でちよつと荒んだ心を癒されつつ、『ようこそスノーデインの街へ』と書いてある掲示を通りすぎる。……やっぱ自動翻訳かかってんな。

「……さて、まず何処から見に行く？」

「んー………このお店！」

そういつてフリスクは一番近くにあつた店に入っていく。それに続いて私も入る。……あ、ここでバンダナ売つてたっけ？買わないとな。

「ようこそ、旅人さん。いらつしやい」

「どうも」

店に入ると、兎のモンスターが出迎えてくれる。……へえ、中はこうなってるんだ。中をキョロキョロ見渡していると、彼女は驚いたように目を丸くさせる。

「あらースノーデインへようこそ！新顔がここに来た、なんて何年ぶりかしらね。どこ

から来たのさ？首都？観光客っぽくはないわね。二人で来たのかい？」
「はい」

あ、案外マシンガントークやなこの人……

若干頬が引き吊るのを感じながら、頷いておく。

「あの、売り物、どんなものがありますか？」

「ああ、何が欲しいのかしら？」

彼女からの追及を避けるため、話を逸らして商品を見せてもらう。……一つだけ、腹筋のマークが書いてあるバンダナが置いてあった。

「……………あの、これいただいていいですか？」

「ん？これかしら？50ゴールドだよ」

「えーつと……………これでいいですか？」

レッサードッグからもらった60ゴールドから代金を出して彼女に手渡す。彼女は金貨を数え、数え終わるとにつこりと満面の笑顔でバンダナを差し出してくる。

「お買い上げありがとうございます。はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

それを受け取り、思わず見つめる。……これで三番目の子の装備は揃ったな。ごめんね、借りるね。

「お買い上げありがとうございます。またおいでなさいな！」

「あ、フリスクちよつといい？」

「買い物が終わったらしいフリスクを呼び止める。バンダナを広げて柄が見えないように裏返し、フリスクの首に苦しくならないぐらいに巻き付けて後ろで縛る。……というかシナモンバニー本当に美味しそうだな。」

「はいよ、マフラー代わりに巻いておけばそこまで寒くないでしょ？」

「……うん、ありがとうお姉ちゃん」

フリスクはにつこりと笑ってそう言ってくれた。……パピルスとお揃いの巻き方っぽくなったのは気にしない方向でいこう、うん。

店を出て買ったシナモンバニーとバイシツクルをリュックにしまい（またちよつと重くなった）、背負い直してフリスクに訪ねる。

「次何処行く？」

「んー……さっきの兎の人が言ってたんだけど、隣は宿屋さんなんだって。それは後にして……うん、先に図書館に行こう！」

そう言つてフリスクは箱の隣の光に触れ、空中で何も無いところに手をさ迷わせ、目についたらしいかまくらっぽいのもの看板を読み始める。……やっぱり触れた人にかセーブ画面は見えないようになってるのか。

光から目を逸らし、フリスクに近づいて私も看板を見る。

『町外れまで歩くのは面倒？そんな時は雪下トンネル！効率的な設計になってるよ』

なんだろうこの雑なテレフォンショッピングみたいな書き方……

私が思わず顔をしかめながらそう思っていると、フリスクが私のパーカーの裾を引っ張る。興味を示したらしいフリスクがうずうずしながらこつちを見ていた。

「……入ってみてもいい？」

「いいよ」

「やったー！」

まあ可愛すぎる妹の頼みを断れるはずがなかったよネ！

快くOKを出すと、フリスクは穴の中に入っていく。確かパピルスとサンズの家辺りに出口があったはずと思い、出口の方を見ると、さっき入ったばかりのフリスクがもう穴を抜け出てきていた。はええなおい。

ぶんぶんと嬉しそうに私に手を振るフリスクに手を振り返すと、向こうの穴に入り、すぐにこつちの穴から顔を出す。……だからはええよ。

「どうだった？」

「あつという間で楽しかったよ！お姉ちゃんもやったら？」

「あー……私は遠慮するわ」

「そっかー」

嬉しそうに話すフリスクの誘いを断っておく。……いや、やってみたいけどここで遊んでたら先に進めないじゃん……？

一回ちらりとかまくらを見て、フリスクは立っている住人達に話しかけに行く。それを横目で見ながら、私も町を探索しはじめた。

35. Snowdinの街②

[Lily]

すれ違った黄緑色っぽい体毛の兔のお姉さんに会釈し、私は目立っていたツリーへと近づいていく。……これ、確かギフトロットへの謝罪の為に始まったんだっけな。

そう思い出しながらプレゼントの箱を置こうとしている水色の熊のようなモンスターに話しかける。

「……あの、すみません」

「なんだい？……おや、見かけない顔だね。新入りさんかな？」

「あはは、はい、そんなものです。よろしくお願いします」

「(ちら)そ」

あ、このモンスター結構おっとりした喋り方だ。あと優しい声だな。

話して若干心がほっこりしたところで、本題に入る。

「ところで、一つお聞きしたいんですけど、この木とプレゼントは一体何ですか？」

「ああ、これかい？昔ね、心ない若者たちが地元の木のような角を持つモンスターに飾りをつけて嫌がらせしてたんだ。そのモンスターの機嫌を直すために、皆が贈り物を渡し

始めた。今じゃそれが伝統になって、飾られた木の下にプレゼントを置いてあるんだよ」

「へえ、そうなんですね……」

本題を問うと、ゲームで聞いた時と同じ内容の答えが返ってくる。……嫌がらせした下手人取っ捕まえて謝らせた方が手っ取り早いと思うのは私だけだろうか。

「ありがとうございます、ではまた」

「うん、じゃあね」

彼とお礼を言っただけ、木をじつと見る。……すげえ丹精込めて飾り付けられてんな。あ、マジで『サンタ』からのプレゼントもあるわ。……『サタン』じゃないだろうなと一瞬疑ったのは内緒。

木から離れ、前を見ると、フリスクがモンスターキッドに話しかけていた。……あ、リアルで見ると目がくりくりしてて可愛いな、あの子。

「……あ、お姉ちゃん」

私が近づいたのに気がついたのか、フリスクが手を振りながら駆けてきて、そのまま抱きついてくる。

「熊さんのお話終わった?」

「終わったよー」

見上げてくるフリスキの頬に指を押し当てる。……あつ、もっちもちだ可愛い。「なあ、お前のねえちゃんなのか？」

興味を持ったらしいモンスタークィッドが同じく駆けて来てフリスキに問いかけてくる。その問いかけにフリスキは私から離れてコクリと頷いた。……身長はフリスキよりちよつと小さいくらいか。

「初めまして、私はこの子の姉のリリー。よろしくね少年」

一言そう言つて彼の頭を撫でる。彼はきよとんとしてから、目を気持ち良さそうに細めた。可愛いなおい。

「……オマエも子供、なんだよな？」

撫でるのをやめると、モンスタークィッド君は私を見てそう言った。……まあこの身長だしストライプ着てても子供には見えないわな……

「んー、ギリギリ成人してないからまだ子供だね！」

「そうなのか……？」

え、外国の法律では普通に成人だろつて？日本の法律では成人してないからセーフ。……そこ、屁理屈とか言うな。私は前世から日本人だからそつちの法律を優先したいんだよ。

「……それに、中にはシマシマをお洒落で着るやつもいるかもしれないよ？」

「えー？」

まあ地上じやマジでそうだからね、うん。

「……お姉ちゃん、行こう」

ちよつと頬を膨れさせながらフリスクが私の手を引つ張る。……あ、もしかして私がモンスターキッド君に構つてたから嫉妬したのかな？かわいいなあもう！

「うん、そうだね。……じゃあね」

「お、おう……」

手を振つてモンスターキッド君と別れ、グリルビーズの前に立っている茶色い熊のモンスターと話しかけに行く。……結構お洒落な雰囲気だな、この店。

「この町に町長は居ない。だが何か問題が発生すると、スケルトンが魚の女性に報告するのだよ。なあああああんて政治的！」

……あ、そういえばここでも寿司ネキフラグ立ってたか。

魚の女性と聞いてフリスクは首を傾げていたが、私はアンダインの事だと理解する。というかなんだその叫び声。

話はそれだけだと分かる、フリスクはグリルビーズの扉を開ける。……あれ、これもしかして目的が図書館だつてこと忘れてる？

まあいつかと思考を切り替え、フリスクの後に続いて私も中に入った。

36. Lily's judgement 【問答】

【Sans】

「Grillby's、いいところだったねー」

「ねー!」

そう話しながらアイツらはGrillby'sから出てくる。そのまま住人達に話しかけ、話し終わるとすぐに歩き出す。俺は気付かれないように林の中を移動し、アイツらの後を追う。

「……」

ふと、何かに気付いたらしいアイツがこちらを見る。まずい、気づかれたか…?

少しこちらを見た後、アイツは目線を逸らしてクソガキの後を追う。……なんだっただんだけ?

しばらくアイツらは町を探索すると（途中で間違い電話がかかってきて驚いていた）、宿に入っていく。……休むつもりか?

しばらく様子を伺っていると、また宿の扉が開く。出て来たのは紛れもないアイツ

だった。その傍にあのクソガキは居ない。

「……………」

アイツはキヨロキヨロと周りを見渡した後、歩いて移動していく。……一人で何処へ行く？

俺はアイツに気付かれないようにまた追跡する。ぐるりとアイツは町を一周すると、Grillyby'sの角を曲がって真つ直ぐに進んでいく。……あの先は崖しかない。どういうつもりだ……？

俺がアイツを追って町外れの崖についた時、アイツは電話をじつと見ていた。

「……………んー、やっぱ違うよなあ」

「何がだ？」

ぼつりと独り言のように呟かれた言葉を追及すれば、ソイツは振り返った。

「………Sansか。何してんだいこんなどこで」

「それはこつちの台詞だな？」

振り返ったソイツに疑問を返す。

「私はちよつと試したかった事があっただけさね。……で、君はなんでここに？」

「俺もちよつと試したい事があつてな」

にっこりと笑ったソイツに渡されたノートを投げ返す。

「ちよつ、大事なノートなんだから粗末に扱わないでくんない!」

「黙れよ」

いつもはこんな町中で呼ぶことのない G a s t e r B l a s t e r を呼び出し、その発射口を向けると、ソイツは警戒するようにぴたりと動きを止めた。そして、じつと此方を見つめ、ふつと笑う。

「……そつか、私を試しに来たのか、君は。……何をするつもりなんだい?ここで戦ったりしたら騒ぎになるよ?」

「ああ、だから問答だけさ」

「問答?」

……俺がコイツに近づいた理由。それはコイツが何者なのか知る為だ。コイツが怪しい返答をした瞬間、ここでコイツを焼き殺す。

「……そつか。じゃあさ、問答には答えるからさ、私も一つ質問いい?」

「はあ。」

「じゃなきや答えてやらん」

にやり、と笑いながらコイツは言った。……こつちが質問した時に答えないのはまずい。答えないわけにもいかないと判断し、俺は許可をする。

「……………いいぜ」

「じゃあさつそく質問ね。これ返すつて事は、読み終わったつて事でいいんだよね？い
つ読み終わったの？」

「……………お前らが雪フライを買おうとしてた辺りにはもう読み終わつてたさ」

「そう……………」

投げ返されたノートを指差して問うコイツの質問に返答すると、

「ありがとう、妹の前では知らないフリしててくれて」

と俺の目を見て優しく笑い、そう言った。…………俺の知つてるその顔の奴は、そんな風
には言わない。

「…………次はこつちが質問するが、いいな？」

俺がそう言えば、アイツは素直に首を縦に振る。

「いいよ、何？」

…………言質は取つた。なら、容赦なく質問させてもらう。

「お前は一体何を知つてる？…………そのノートには、とてもじゃあないが信じられない事
が書いてあつた。『私の妹は第三者に操られているだけ』？『その第三者と繋がる糸』？
『決意の光』？何だそれは」

その質問に、少し顔をしかめてからアイツは答える。

「何を知ってる、か……うん、大体の事は一応知ってるよ。例えるならばLOVEの意味とかね」

「ほう、それじゃ意味はなんだ？」

「えつと確か……『Level Of Violence』だったっけ」

……合ってるな。

「正解だ」

「あ、良かった」

少しほっとしたように肩の力を抜くアイツ。……『良かった』ってなんだ？

「で、『糸』の事なんだけど」

回り始めた思考を切り替え、答えを一字一句聞き逃すかと集中する。

「……君たちには見えてないだろうけど、あの子には糸が巻き付いてるんだ」

少し目を伏せながらアイツは語る。

「例えるならマリオネット人形かな？……数年前から、日に日に増えていって、今じゃ何本もの糸があの子に巻き付いてる。……ふざけんなって思ってた切ってみたりしたんだけどね、直ぐに直っちゃうんだよ。……で、私はその糸があの子を操る『誰かさん』に繋がってるって確信してる」

「何故だ？」

「それは……秘密」

キレそうになるが、ぐっと抑える。言った本人は空なんて見えやしないのに空を仰ぐ。

「……この話あんまりしたくないから次の質問に移るね。『決意の光』の事だけど、これは君が知っているであろう『セーブ』、『ロード』を行う為の言わば中間地点のようなものだ」

「……何故俺が『セーブ』と『ロード』について知ってるような口振りなんだ？」

俺が問うと、返答者は余裕の顔を崩さずに答える。

「……言っただろう、大体は知ってるよって。……ん？」

そこまで言っただけで返答者はふと気がついた様な顔をして俺を見た。

「……君、セーブとロードとリセットについて何処まで知ってる？ 知識量によっちゃ説明が要るんだけど……」

「……あのクソガキがゲームみたいにこの世界をセーブしたり、ロードしたり、全部0にリセット出来るって事ぐらいだが？」

「あー、その認識ならまあ間違いはないな」

納得したようにアイツは頷き、あと、と続ける。

「……私の妹を、『クソガキ』呼ばわりは、辞めて欲しいかなあ」

何処までも悲しそうな、寂しそうな顔をしながら、そう言った。

「……話を戻すよ。聞かれてないけど、『セーブ』と『ロード』についてもついでに話させてもらうね。その認識に、まあさつきも言ったけど、間違いはない。でも少し誤解がある」

返答者はそう指摘する。

「それは何だ？」

俺が問う。

「君が『セーブ』と『ロード』と『リセット』をあの子の力だと思っている所だね」

返答者は迷いもなく即答する。

「……あの子が産まれて10年間、あの子の傍にずっといたけれど、あの子があんな力を使っている所なんて見たことがない。周りの人間だってもちろん使えない。あれは『この世界に来てから擬似的にあの子が使用しているだけで、本来使えるはずのなかったモノ』だ」

何処か忌々しげに、憎むような声で返答者は答える。

「……さつきの『糸』の話にも繋がるけど、その『決意の光』が見えているのはあの子が世界に『第三者の代役』として扱われて居るからだ。……私はそれが物凄く腹立たしい」
最後は遠くからでも分かるほど燃え上がるような強い憎悪を目に籠らせながら、返答

者は吐き捨てた。

「質問はそれだけ？それともまだある？あるならあんまし込み入った質問はしない方がいいと思うんだけど……」

目に籠った憎悪を消散させ、少し周囲を気にしながら返答者は言う。

「何故だ？」

「だって、ここにもし誰か来たらどうすんの？君みたいに世界の真理に気付いてしまいかもしれないじゃん？」

……それもそうだ。コイツの言うことも一理ある。

「そうだな」

「でしょ？……で、質問ある？」

「……ああ、あと一つだけな」

「そっか。何？」

少し首を傾げて俺の問いを待つ返答者。それに俺はこう問いかけた。

「………お前さんは、一体何者だ？」

その問いに、返答者は

「………私はLily、あの子の姉さ。世界の真理を知って、それでもただ大切なものを守りたいだけの、ただのシスコンだよ」

につこりと笑いながら、返答者はそう答えた。

「……h e h、そうかよ」

俺はいつでも光線を発射出来るようにしていたB r a s t e rを消し、左手をポケットに突っ込み、通れるように道を譲る。

「……また込み入った話は今度二人でしよう。……それじゃあね、S a n s」

ソイツは俺が譲った道を通り、帰って行こうとする。

「……ああ、そうだ」

ふとソイツの足が止まり、振り返って俺に優しい、誰よりもアイツを愛している姉の笑顔で言った。

「ありがとうね、このタイムラインの^XXと友達になってくれて！」

その笑顔と言葉に、今度こそ俺はただ言葉をなくして、帰っていくL i l yの背を見つめることしか出来なかった。

【L i l y】

サンズがブチギレてた怖い。

今頃になってどっと出て来た冷や汗を拭い、問答中ずっと早鐘を打っていた心臓を深呼吸してなんとか落ち着かせる。

いやまさか f u n i ベとかのこと考察しようと思つて崖まで行つたらサンズと遭遇するとか思わないじゃん？ 気付いたらもう後ろいたしさあ……あれか瞬間移動使つたんか!?!……もう後半から取り調べみたいになつてて怖くて殆んど何喋つたか覚えてねえよ……いや、サンズから見たら私超不審人物だしね？ 尚且つ弟の命かかつてる訳だしね？ 気持ちは分かるけど勘弁してよ……

生まれたたての子鹿のように足をぶるぶるさせながらなんとか宿まで着き、扉を開く。

「おかえりなさい……つてどうしたのおねえさん!?!」

「お客様!?!」

「あはは……ちよつと冷えちゃつてね……すぐ休むから大丈夫だよ。ありがとう、心配してくれて」

兎のモンスターとカウンターで隠れるようにしていた兎の女の子（結構持つてきたキャンディーお裾分けしたら仲良くなった）が心配そうに声をかけてくれる。荒ぶつてた心が一気に落ち着いた。

「そう?……ならばやくやすんでね!」

「ゆつくり休んで下さい」

兎さん達がほつと安心したような顔をしたのを見届け、私は階段を上つて割り当てられた部屋に入る。二人だから160Gかなーと思つてたけど、80Gですんで良かった

よ。

音を立てないように注意を払って静かに扉を開閉する。……フリスクはまだ寝てたか。良かった。

「あー、疲れた……」

返されたノートをリユックにしまう前に、サンズについてノートに記入しておく。

極度の人間不信になっていると考察。タイムラインを何度も繰り返し返した結果か？
セーブ、ロードについては原作通り……と。

ペンを置いてノートを最初まで遡ると、手紙を書いておいた部分が乱暴に千切られていた。……あの野郎……その裏に何も書いてなかったから良かったけど、書いてあったらどうするつもりだったんだおい。

腹が立ったが、此処に居ない人物に言っても仕方ないと結論付け、ノートをしまい、靴を脱いでベッドに寝転がる。割りとすぐに睡魔が襲ってきて、そのまま私は布団を被って眠りについた。

37. パピルス戦前

[??]

……成る程、『私』は死んでいるんですね。

そう説明されて、府に落ちた。

……嫌に冷静だね

少し驚いたような声だった。此処に居る以上否定は出来ませんから、と答えようとする。

……そっか

沈黙が流れ、また闇に支配される。ぼーつとその闇を眺めながら、私は考える。……さつき聞いた説明によれば此処は『生命の終着点』らしいが、正直言つて実感が湧かない。さつきは怖いと思つたけれど、今はそこまででもない。これから消える、と明言されて逆に覚悟が決まつてしまったのだろうか。

……ねえ、君にお願いがあるんだ

ぼーつと眺めていると、沈黙が破られ、声が聞こえた。……お願い、とは言うが、もう死んでいる私に何を頼むつもりなんだろうか。

……僕と契約を結んで欲しいんだ

〔Lily〕

……なんだ今の夢。つか最後某QBっぽかったなおい。

今度は誰に起こされる事なく、私は目が覚めた。体を起こし、一つ伸びをする。……体が軽いな、よく眠れたからだろうか。

ベッドから降りて靴を履き、布団を出来るだけ整える。整えながら、さっきの夢について軽く考察する。……本当に何なんだろうか、あの夢は、『生命の終着点』って言うってたよな……じゃああの闇は『死』その物か？……なんか型月世界の根源みたいだな。

「……ん、あ、お姉ちゃん……」

「お、起きた。おはようフリスク」

声がして隣のベッドを見ると、フリスクが起き上がって目を擦っていた。

「疲れは取れた？」

「うん！あのね、なんかね、凄く調子いいの！」

元気満タンですと言わんばかりにフリスクはベッドから飛び降り、肩をグルグル回す。……あ、そう言えば宿屋に泊まるとHPが上限越えて30にまでなるんだっけか。その影響か？

「そっかー、良かったね。……それじゃあ、あのお姉さんにお礼言つて行こうか」
「うん」

サイドテーブルに置いておいたバンダナを結び直してやり、私は床に下ろしていたリュックを背負い直し、部屋から出る。……さて、次はパピルス戦だ。

お姉さんにお礼を言い、チップ代わりに女の子に飴をあげてから宿屋を出て、真つ直ぐにパピルスの待つ一本道に向かう。途中で、パピルスとサンズの家を通りすぎる。……うわあ、マジでポストが歪んでる……どんな力で手紙振じ込もうとすればこうなるんですかねえ……

若干引きつつ、雪を踏みしめて進む。しばらく歩いていると、霧がかかりはじめた。……これパピルスが出してる霧なんだろうか。

「なんだろうこの霧……」

「分からない。……フリスク、はぐれないように手を繋いでおこう」

「！ うん！」

一度姿がちやんと確認出来るくらいの所で立ち止まり、手を繋ぐ。フリスクの手の温度が伝わってきた。……あつたかいな。

しつかりと離さないように握り返しながら進む。……霧が濃くなってきたな。そろ

そろか？

「……………人間」

前方の霧の中でパピルスの声がして足を止める。……しばらく見ていると、霧の中にパピルスのシルエットが現れた。

「この複雑な気持ちを聞いてくれ」

「いいよ」

パピルスの言葉に頷くと、パピルスは小さくありがとう、と呟くと、話し始める。…ゲームでは聞こえなかったけど、言ってたんだ。

「例えるなら……………パスタ愛好家に出会って喜ぶ気持ち。パズルを解いた相手を褒めたい気持ち。クールでスマートなやつと、一緒に居たいと願う気持ち。これこそが……………お前が今まさに抱いている気持ちだろう!!!」

それは君が抱いている気持ちなんじゃないかと思わず出かかった言葉を飲み込む。……………此処で言ったら、多分ダメだ。

「そんなに複雑な気持ちなんてまるで想像もつかない。俺様は最高にグレートだからな。友達がたくさん欲しいなんて考えたこともないぞ」

……………私には何故か、その言葉がパピルスが自分に言い聞かせているように聞こえた。「二人だけの……………かわいそうな人間よ……………案ずるな!!!お前たちはもう二人きりじゃない

ぞー！」

え、と小さくフリスクが呟いたのが聞こえた。

「この、グレートなパピルス様が、お前たちの……………」

そこで、パピルスははっとしたように言葉を切った。…………アンダインとかの他のモンスターに言われた事を思い出しているのだろうか。

「…………いや…………ダメだダメだ、何言ってるんだ、俺様は！友達になんてなれんのだ!!!」
向かい合ったシルエットは一瞬揺らぎ、考えを振り払うかのように頭を振った。…………
やっぱり、私には彼が自分に言い聞かせているように聞こえた。

シルエットが一瞬揺らいだ。きつと振り返ったんだらうなと見当をつける。

「お前たちは人間だ！俺様はお前たちを捕まえなきゃならん!!!そして、俺様は長年の夢を叶えるんだ!!!」

こちらに聞かせるというより、パピルスは自分に言い聞かせるように言葉を続ける。
「パワフルで！人気者で！超一流！それがパピルス様だ!!!」

…………彼は、自分の夢が犠牲の上で成り立つと知ったらどうなってしまうのだろうか。
壊れて、しまわないだろうか。…………そう考えながら玩具のナイフを取り出して、構える。

「王国騎士団の新メンバーは…………この俺様だ！」

一際明るく振る舞うような声が聞こえ、世界が白黒に切り替わろうとする。…………彼の

ためにも、負けられない。そう覚悟を決めたその瞬間、

『…………人間…………すまない…………』

一気に霧が晴れた向こう側でパピルスが苦痛に歪めた顔をしていたような気がした。

38. パピルス戦

〔Lily〕

*P a p y r u s b r o c k s t h e w a y !
が行く手を阻んで

世界がモノクロに完全に切り替わった瞬間、アナウンスが流れた。そのアナウンズにはっとして目を擦って。パピルスを見る。が、パピルスは私がさつき見たような顔はしていなかった。……さつきのは気のせいか？

「フリスク、どうする?」

「?」

私は首を傾げるフリスクに問いかける。

「彼と友達になりたいかい?」

「!」

私の問いに驚いた様子を見せ、考える素振りをする。そしてしばらくすると、フリスクは深く頷いた。……うん、そう返答すると思った。

「ん、分かったよ。じゃあフリスク、出来ることを出来るだけやりな。それから、庇いきれないかもしれないから自分でも避けれるようにしておいて」

「分かった」

フリスクに回避準備をしてもらい、私はリュックを木の近くに投げる。ぼすつと雪の上に落ちる音がしたのを聞き、私は片手に持ったナイフを構え直した。……これで存分に攻撃阻止に集中出来るな。

*PAPYRUS | ATK 20 DEF 20

*He likes to say: ニエーツ he he!

フリスクは調べるを押したらしく、アナウンスが流れる。……うん、まあ知ってる。

『ニエーツヘッヘ!』

先程流れたアナウンス通りにパピルスが高笑いをあげて、自身の背面に骨の弾幕を召喚した。

「いくぞ人間!」

その声と共に弾幕がこちらに向かって進んで来る。

私はフリスクを引き寄せて横に避けた。……最初は楽なだけだな。

*Papyrus is cackling.

……悩んでいる、か……

彼の優しさに思わず苦笑する。……今日初めて会ったばかりの私達にも情を抱いてくれているのか、と少し自惚れた。

ピツ、と何かを押す音が聞こえ、フリスクはパピルスに向かってパクパクと口を動かす。

『なっ何?!俺様をナンパしているのか?!』

パピルスの動揺が混ざった言葉にコクリとフリスクは頷く。ああ、ナンパしたのか。『ついにお前は俺様に究極の気持ち伝えようとしているのだな!』

まあ究極の気持ちの中に『友達になりたい』がカテゴライズされるならそうやな。そう思いながら頷いておく。

『だ、だが!俺様は凄く高い基準を求めるスケルトンだぞ!!』

「えっ……?」

友達になるのに基準要るっけと言わんばかりの戸惑いを表した顔でこちらを見るフリスク。取り敢えず首を傾げておいた。

フリスクは空中に手をさ迷わせる。そして、口をパクパクと動かした。

『なんてことだ!!お前は俺様の基準をすべて満たしているのか!!』

スパゲッティ作れますを選んだらしく、パピルスは嬉しそうにしながらそう言った。

「あ、私も作れるよ」

「本当か?!」

私も便乗して自己申告すると、ぱあっと目(?)を輝かせるパピルス。かわいい。

『つまり俺様はお前たちとデートしないといけないのか……う?』

少し頬（の部分の骨）を赤くしながらパピルスは呟いた。……これでデートイベントのフラグは立ったかな?

『デ、デートの事はまた後でな!お前を捕まえたらだ!!』

まだ少し頬を赤くしながらパピルスは骨を召喚する。……捕まったら、元も子もないんだけどね。そう思いながらまたこちらに向かつて来る骨を避けた。

*—Papyrus is thinking about what to wear for his date. 《Papyrusはデートに何を着ていこうか悩んでいる》

思わず少し口元が綻ぶ。……さっきまで友達になれないなんて言ってたのに、デートについてちゃんと考えているのか。そう思うと、心が少し暖かくなる。

ピツ、と音がして、パピルスがまた顔を赤くする。……フリスクまたナンパしたんかい。

『なんてことだ!!!デートはまたあ、後でな!お前を捕まえたらだ!!!』

そう言いながら骨を召喚するパピルス。また避けようとして、

「あっ」

ぼすっ

雪に足をとられ、体勢を崩してしまった。

「ヤバッ」

「お姉ちゃん!？」

急いでフリスクを骨の軌道から突き飛ばし、私も避けようとする。

ゴツ

「つて……」

一本、間に合わずに腕でガードして受け止める。……骨だからって油断してたけど結構痛いなこれ。次からは受け流さないと。

「お姉ちゃん!大丈夫!？」

「おー、大丈夫大丈夫。……というか、フリスクこそ大丈夫だった?結構強く突き飛ばしたけど」

「ぼくは、平気だけど……」

突き飛ばしたフリスクが駆け寄って来て心配そうに私を見る。パーカーの袖を捲つて当たった部分を見てみると、少し赤く腫れていた。……あー、これは痣になるな。

「……!」

袖を元に戻して立ち上がり、パピルスを見ると、心配そうな顔をしていた。……本当に、優しいな彼は。

「あー、えつとパピルスさん？ 私は平気だからそんな心配そうな顔しなくて大丈夫だぜ？」

「そ、そうか……じゃない、何を心配してるんだ俺様は!？」

そう言つて彼はブンブンと頭を振つた。

*—Papyrus is thinking about what to cook for his date. 《Papyrusはデートで何を料理しようか悩んでいる》

……まあパスタだろうけどな、とアナウンスに返し、雪を掴んで痛む腕に押しつける。……冷たいけど、これでしばらくは麻痺して痛みが分からなくなるはず。我ながら雑な応急措置に苦笑した。

フリスクを見ると、少し戸惑いながら『ACT』を押し、口を動かしていた。

『なんたる自己犠牲……お前と戦う罪悪感を消そうとしてくれているのか……』

……ああ、侮辱を選択したのね。そう呑気に考えながらパピルスを見ると、こちらが驚くほど暗い顔をしていた。

『俺様はお前にそんな気づかいされる価値はない……』

ちようど、私が幻視したようなあの苦しそうな顔で、パピルスはそう言った。……ああ、やつぱり、彼にあんな顔は似合わないな。

暗い顔をしながら、パピルスはまた骨を召喚し、こちらに向かって攻撃してくる。今度は当たらなかった。

*
P

a p p y r u s d a b s m a r i n a r a s a u c e b e h i n d h i s e a r .

……マリナーソースって食べ物だよな……？なんて塗ってんの……？

アナウンスにツッコミを入れつつ、パピルスを見ると、確かに何かを耳がある辺りに塗っていた。どういふことやねん。

パピルスから視線を外してフリスクを見ると、今の反応でもう『ACT』は意味がない事に気付いたのか、『MERCY』に手を伸ばしていた。……『Player』はトリエルさんと戦った時みたいによければいい、ということに気付いたらしい。良かった。

『戦うつもりはないのか……？』

私とフリスクは驚くパピルスの言葉に頷く。

『ならば、俺様の「ブルーアタック」に耐えられるか見せてもらおう！』

来たか。私は下ろしていたナイフを構え直してフリスクをまた突き飛ばして骨の軌道から外した。

「フリスク、ちよつとそつち行つて!!」

「えっ!?!」

直後にパピルスが召喚した青い骨の弾幕が次々と向かってくる。それを微動だにせずにもやり過ごすと、

「うおっ……!?!」

急に体が重くなった。今までより速いスピードで向かってきた骨を避けようとするが体が追いつかずに諸に食らってしまう。

「うっ……」

一瞬意識が飛びかけたが直ぐに唇を思いつきり噛んでなんとか踏みとどまる。……予想通り重力変化か……!」

『青ざめたな……これが俺様の攻撃だ!』

口の中に血の味が広がるが無視し、パピルスの高笑いを聞きながらなんとか立ち上がる。……予想以上に重いけど、これならなんとか動けそうだ。

*You, re blue now.

「お姉ちゃん!!」

「おー、今怒らないでくれ。後でちゃんと聞くからさ」

怒ったような、今にも泣きそうな顔でfrisスクが駆け寄ってくる。frisスクの心臓がある辺りを見て、ソウルが赤いままなことに安堵した。

「さて、と……」

前を向いて、また心配そうな顔をしているパピルスに安心させる意味で小さく笑顔を作る。すると、ほっとしたようにパピルスは息をついた。

「フリスク、私の後ろに居てね」

「……………」

「…………フリスク？」

フリスクの前に立って呼び掛けるが返事がない。驚いて振り返ると、フリスクは今にも泣きそうな顔で頷いた。

「いい子」

頭を撫でてからまた前に向き直る。

ピツ、と背後でまたボタンを押す音がした。

『ウーム…………なにを着て行こうか…………』

まだ考えてたんかい。若干ぼーっとする頭の中でツツコミを入れる。…………まあそれだけちゃんと考えてくれてるってことだけだね。

そう考えながらパピルスが召喚した骨を受け流す。…………重力がかかっているからか重心が安定して受け流しやすいな。

*—Papyrus dabs MTT—Brand Bishie behind
Cream his ear. 《PapyrusはMTTブランドの美容クリームを

耳の裏に塗った》

何故耳の裏だけ……？

入れ物を取り出してクリームを塗る。ピピルスに思わず心の中でツツコミを入れる。……とうるかMTTブランドスパンコールつけたハンバーガーとか売ってる割には中々にまともな物も売ってんな。

『なに!? デートのことなど……考えてないぞ!!!』

その間はなんだその間は。

慌てるピピルスにツツコミを入れそうになるが、なんとか飲み込んで攻撃に備える。

召喚した骨を受け流していく。

「あつヤベツ」

ゴツ

一本受け流せなかった骨を両腕で受け止める。……いつて。

*—P a p y r u s d a b s M T T — B r a n d A n i m e P o w d e r
b e h i n d h i s e a r. 《P a p y r u s は M T T ブ ラ ン ド の ア ニ メ パ ウ ダ ー
を耳の裏にかけた》

何かの入れ物を取り出して耳辺りにかけるピピルス。……アニメパウダーって何
……？

『はっ！俺様に必殺技を使わせる気か？』

いやそのつもりはないけどね。

そう思いながら向かってくる骨をナイフで受け流す。：今度は一つ残らず受け流せた。

*—Papyrus dabs MTT—Brand Cute Juice behind his ear. 《PapyrusはMTTブランドのキュートなジュースを耳の裏にかけた》

「ジュース!？」

思わず声に出た。……えっ、ジュースって耳の裏にかけるものじゃないよね……？

ピッ、と背後で音がする。

『人気者になるのが楽しみだな!!』

パピルスのその言葉に顔を歪めそうになる。

……それが犠牲の上で成り立つと知ったら……ううん、絶対に知られちゃいけない。

骨を弾き、ナイフを握り直す。

*—Papyrus dabs MTT—Brand Attraction Slide behind his ear. 《PapyrusはMTTブランドの引力ヘドロを耳の裏に塗った》

ヘドロ!?

流れたアノウンスに思わず顔をしかめる。今パピルスは何か塗ってるわけなんだが……えっ、パピルスヘドロ塗ってんの……？

『パピルス：王国騎士団の頭である!』

ヘドロにちよつと衝撃を受けながら、私は誇らしそうに声高々に言うパピルスが召喚した骨をナイフで受け流す。……三つ普通の弾幕が続いた後に青い骨が向かってきた。

「……………」

……最後に青い骨が来るってことはまさか後ろからか!?

「フリスク!!」

ガキン!

フリスクを引き寄せてなんとか骨を弾き飛ばす。……間に合って、良かった。

*—Papyrus dabs MT—Brand Beauty Yogurt behind his ear. 《PapyrusはMTTブランドのビューティ

「……ヨーグルトを耳の裏に塗った》

「違うと思う」

「だよね」

流れたアナウンスにツツコミを入れると、後ろに居るフリスクから同意が返ってきた。

ピツ、とまた音がする。

『パピルス：前代未聞の名パスタシエフである！』

また誇らしく声高々に言うパピルスの攻撃を弾き飛ばす。……また、彼が言うことが自分に言い聞かせているように聞こえ始めた。

「お姉ちゃん!!」

「!!」

ゴツ

余計な事考えていた所為か、諸に攻撃を三発食らってしまった。……痛いけど、さつき頭に当たったほどじゃない。

*P a p y r u s r e a l i z e s h e d o e s n ' t h a v e e a r s .
は 自 分 に 耳 が な い 事 に 気 付 いた
 今更かおい。パピルスに対するツツコミを心の中でしつ、なんとかナイフを構える。

……正直、さっきの諸に攻撃で食らったダメージが響いてきてる。……でも此処で倒れる訳にはいかない。

『アンダインも誇りに思うだろうな!!』

それはどうなんだろうか。骨を弾き返しながら思う。…そんなことになったら、彼女は多分複雑だろうなあ。

ダメージが響いてきている上に重力がかかっているおかげで、足元がふらついてきている。

ガツ

また弾き返せずに骨が当たる。…一本だけでよかった。

*
P

P a p y r u s i s t r y i n g h a r d t o p l a y i t c o o l .

そのアナウンスに、私はパピルスを見た。…辛そうな、顔をしていた。ああ、頼むよ、そんな顔をしないで。

そう願いながらナイフを構える。

「お姉ちゃん…!!」

背後で心配そうなフリスクの声がある。…また心配かけちゃったなあ

『王様もパピルス型の生垣を作ってくれる!!』

…そう言えば、アズゴア王は生垣作れるんだっけな。思い出しながらナイフを振るう。今度は上手く受け流せた。

* P a p y r u s i s r a t t l i n g h i s b o n e s .

アナウンズが流れると同時に、ガタガタと音が聞こえた。……どうやって鳴らしてんの？

そんな事を考えていると、痛覚が麻痺してきた。これならなんとかいける。

ピツ、と背後で音がした。

『俺様の兄弟は……えっと、今までと変わらないだろうな』

まあ、だろうね。確かパピルス王エンドでもあんま変わんなかったし。

そう思いながらナイフを振るってスピードの速い骨を受け流す。……もうそろそろキツイ攻撃が来るはず。

流れるアナウンズを聞き流しながら、私は出さずにおいたカッターをポケットから取り出す。……そろそろ二つで受け流さないとキツイ。

『俺様は多くのファンを獲得するだろう!! しかし……』

最後は沈んだ声でパピルスが言う。また向かってくる骨を受け流す。二つでやった方が断然楽だった。

*Smell like bone.

そのアナウンズに思わず吹き出しかけた。……骨の匂いってなんだ。

『誰でもお前と同じぐらい俺様をスキになるのだろうか?』

「……さあね」

思ったより冷たい返答になってしまった。：彼が傷ついてないといいなと思いが
ら攻撃を受け流す。

*P a p y r u s w h i s p e r s 「ニエー」^{ハッ}「ヘッ!」^と言っ^てい^いる^る”

そのアナウンスの直後、彼特有の高笑いが辺りに響く。それを聞き流しながら傷を確
認する。……うん、この調子ならなんとか耐えきれそうだ。

ピッ、とまた背後で音がした。

『お前のようなやつは本当に珍しい……』

だろうな、と私は心の中で同意する。いや、普通骨にナンパする奴いないし……

骨を弾きながらそう考える。一本、受け流しきれなかった骨が掠った。

*P a p y r u s i s c o n s i d e r i n g h i s o p t i o n s .
作戦を考えて

ぼんやりする頭でアナウンスを聞く。……作戦か、どんななんだろうか。少し気にな
る。

ピッ、という音がした。

『そしてデートも難しくなってしまうだろう……』

……そりゃあ、そうだ。

そんなことを考えながら青と白で交互にくる骨をなんとかやり過ごす。

*P a p y r u s i s c o n s i d e r i n g h i s o p t i o n s .

「お姉ちゃん……」

背後で今にも泣きそうなフリスクの声が聞こえた。聞こえないフリをして弾幕を弾く事に専念する。

ピッ

『お前たちが都に送られた後ではな』

そう言いながらパピルスが少し顔を苦痛に歪める。だから、そんな顔しないでよ。攻撃を受け流しながらそう願う。また一本、骨が被弾した。

* P a p y r u s i s t r y i n g h a r d t o p l a y i t c o o
l.

……あと、もう少し。もう少しで彼と友達になれる。

そう考えながらナイフとカッターを構える。

ピッ

『ぐぬぬ……もういいだろう!! 諦めろ!!』

「やだね」

ぐぬぬって、かわいいなおい。思わず口元が綻びそうになる。……まあ彼は私の事も心配して言ってくれてるんだらうけどさ。

激しくなってくる骨の弾幕を弾き返す。そうしていると

バキツ

「いつて…」

カッターの刃が折れ、皮膚を掠めて血が流れる。……まあ本来戦闘用じゃないしね。いつか折れるとは思ってたよ。今まで折れないのが逆におかしかったんだ。

* Papyrus is preparing a non-bone attack
k then spends minute fixing his mistake
e. 《Papyrusは骨を使わない攻撃をくり出そうとしたが、間違いに気付いた》

幸運にも近くに落ちた折れた刃を拾い上げ、ポケットにしまう。…なんかに使えるかもしれないしね。

前に向き直ると、パピルスが顔を青くしていた。……自分の攻撃で血が流れたと思っているんだろうか。違うから安心してほしいところだな、と呑気に思う。

パピルスは手をこちらに伸ばそうとして、はつとして頭を振り、また骨を召喚する。
『諦めないなら……俺様の必殺技を味わうんだな!!』

向かってきた骨を受け流す。……確かパピルスの必殺技はあの謎の犬に阻止されて終わってしまうはず。その後の攻撃が必ず一発は被弾しなきゃなんだよな。

* Papyrus is trying hard to play it cool
1.

……うん、あと少しだ。頑張らなきゃ。

気を引き締め、カッターとナイフを構え直す。

ピッ

『そうだ!!もうすぐ必殺技を使うぞ!!』

召喚しながらパピルスは言う。……普通の攻撃の時にそう言うのは、諦めて欲しいからだろうか。それとも私達が心配なんだろうか。……彼のことだからどつちもだろうけど。

なんとか骨を受け流しきる。

*Papyrus is rattling his bones.

刃が掠めた所から流れた血が、皮膚を伝って雪の上に落ちる。白地に赤い染みが出来た。私はカッターを握り直す。

ピッ

『もう少して必殺技を使うからな!!』

パピルスの声が少し震えている事に気づいた。……ごめんよ、こんな事させて。

骨を弾き、受け流す。

Smell like bone.

匂いを嗅ごうとしてみるが、私には血の匂いしかなかった。……むせそう。

ピッ

『これがお前たちの最後のチャンスだ……必殺技を食らう前なの!!』

また普通の骨の弾幕が向かってきた。弾き返す。……あと少し。

* P a p y r u s i s t r y i n g h a r d t o p l a y i t c o o

l.

パピルスを見ると、かすかにだけでも震えているように見えた。……そりや、『必ず殺す技』だもんな。怖いよな。

……一応、備えておこう。バタフライエフェクトが起こらないとは限らない。私はナイフを握り直した。

ピッ

『見よ……これが俺様の必殺技だ!!』

一瞬躊躇いを見せてから、パピルスは声高々にそう言った。……が。

……。

「……？」

召喚したはずの骨が向かわないことに気付き、パピルスは後ろを振り返る。すると、がしがしがしが……

皆大好きToby犬が骨を夢中でかじっていた。

「ふっ……」

不意を突かれて思わず笑いそうになる。……いや、だって、ねえ？構えてたらこれだぜ……？

『なんてこった!!!俺様の必殺技が!!!』

しばらくフリーズしていたパピルスがはっとして叫ぶ。

『おい…このバカ犬！聞いているのか貴様!!骨をしゃぶるんじゃない!!』

パピルスにそう言われてギクツとしたように犬は骨をくわえたまま目を見開く。

顔をあげた犬はパピルスを凝視すると、さっさと後退していった。

『あ!!!こら!!どこへ行くんだ!!!俺様の必殺技を返してー!!』

パピルスの声も聞かず、犬は颯爽と何処かに行ってしまった。

『……』

『……』

『……』

場に気まずい沈黙が流れる。……どうすんだこの空気。一気に微妙な空気になったぞ。どうしてくれんだ。

『……まあいっ』

誰も何も言い出せずにいると、パピルスが一番最初に沈黙を破った。

『お次は超クールな通常攻撃だ』

*

P a p y r u s i s g e t t i n g r e a d y f o r a r e g u l a r a t t a c k
は 通 常 攻 撃 を 出 せ る と し て
 ターンがこちらに移り、アナウンスが流れる。……これを使い切れば、パピルス戦は
 終わりだ。……絶対耐えきれないや。

ピッ

『ハア……至って普通の通常攻撃だ』

肩で息をしながら言う。パピルスにどこがだよと言いたくなかったが飲み込んで攻撃阻
 止に専念する。

さすがにキツイなと思っていると、目の前に大量の骨と大きな骨が現れた。……まず
 いな、これは、

「フリスク!!」

捌けない。

そう判断してフリスクを庇う形で抱き締める。

ガンッ

「が、あつ……」

背中一気に打撃が襲ってくる。痛い。痛い痛い痛い痛い!!!

「……………ッ!!」

歯を思いつきり噛んで耐え、腕の中のフリスクが傷を追っていないことに安堵した。
……ああ、この痛みをこの子が知らなくて良かった。

「お姉ちゃん!!」

「…だい、じょうぶ」

フリスクから離れ、若干ふらつくけど立ち上がってパピルスに向き直る。

『どうだ……！ゼエ……わかつただろ……お前に!!ハア……俺様は倒せない!!!そうだ！
恐怖にガタガタと震えているんだらう!!ならば、この偉大なるパピルス様が……』

「……違う、よ……」

パピルスの言葉を遮って、私は言う。

手に力が入らず、私は雪の上にカッターとナイフを落としてしまう。……もうちよつとだけだ、耐えろ、私。

「……私は……君を倒す、つもりも……傷つけるつもりも……最初からないよ……」

「……な、に？」

私は驚いた声を出すパピルスに、頑張って笑顔を作る。

「……ただ、この子の……友達に、なつてほしかっただけなん、だ……」

そこで、私の体は限界を迎え、雪の中に倒れこんだ。

「お姉ちゃん!!!」

「人間!!!」

悲鳴にも似た声をあげたフリスクと顔を青くしたパピルスがこつちに駆け寄ってくる。

それをぼーっとする頭で見ながら、私の意識はゆっくりと暗闇に溶けていった。

39. 仲直り

[P a p y r u s]

「お姉ちゃん!!お姉ちゃん!!!」

雪の上に倒れた人間を揺さぶる小さい人間。その光景に俺様はただ呆然とするだけだった。

……今、倒れている人間はさっきなんて言った？

『倒すつもりも、傷つけるつもりもないよ』

『この子の友達に……なってほしかっただけなんだ』

何回も俺様の攻撃を受けて。

血を流してでも、攻撃を弾いて。

………俺様を、真っ直ぐに見つめて、

優しい笑顔でそう言った。

「いやだよお姉ちゃん!!しんじやだあ!!」

泣き叫ぶ人間の言葉にはっとした。

………死ぬのか?俺様を傷つける気もなかった人間が?

死、ぬ?

そう理解した瞬間俺様は大きな人間を小さい人間ごと抱き上げて家に走り出していった。

【???

契約、という言葉に私は疑問を抱く。……随分急な話だ。死んでいる私に何が出来る
と言うのだろうか?

……ちやんと理由はあるよ

声が届こえる。……どんな理由なんだろうか、想像がつかない。

……単純な話だよ。とにかく、契約の内容を説明するね

聞くだけならただだと判断して耳を傾ける。

……君は、『×』って知ってるよね

……あの大人気ゲームのことだろうか。その名前にはそのゲームしか思い浮かばない。私が、大好きだったゲームだ。

……君にその世界に行って、『彼女』を救ってほしいんだ

その言葉に驚愕する。……私が、救う…？

そんな都合のいいおとぎ話の主人公のような存在に、私になれというのか？

貴方が何を考えているのかさっぱりわからない、と伝えようとする。……そもそも、ここから出られないはずなのではないのか。

……此処から出るために契約を結んで欲しいんだよ

此処から出るため？

私は彼(?)の言葉を反芻する。

……契約を結んで、その契約を達成させるために転生させるといふ手段を使えば、此処から出れるんだ。僕だって曲がりなりにもだからね

そうなのか、と何処かで納得した。……だが

……理由、知りたいよね

思考を読んだらしく、彼が続ける。……話してくれるなら、どうか教えて欲しい。何故、出会ったばかりの私に契約を持ちかけるのか

……いいよ、それはね——

【Lily】

ふと、身体に至る所に冷たい物が当たっている感覚で目が覚めた。見上げているのは見慣れない天井。もやがかかったかのようにぼんやりする頭で考える。……此処何処だ？

「……………い”っづ!!!」

身体を起こそうとして走った激痛に思わず声をあげた。その痛みで頭のもやが晴れる。……ああ、体が限界迎えちゃって倒れたんだっけか。

痛みを何とか堪えて身体を起こし、身体をペタペタと触ったりしてみる。きちつと包帯が巻かれているところと少し緩いところがあった。……二人で巻いてくれたのだろうか。痣を発見して一瞬間が淡くなったのはナイショ。

次に部屋を見回す。見回して目についた物は本棚、パソコン、そして男の子が好きそ

うなフィギュアに海賊旗。……あ、この部屋って……

バンッ

この部屋の主が誰か分かったその瞬間、大きな音を立てて扉が開いた。

「…………お姉ちゃん？」

部屋に入ってきたのは、エプロンをしたフリスクだった。

「…………おはよ、フリスク。怪我不い？」

そう笑って言ってみれば、フリスクは直ぐに目に涙を溜めて駆け寄ってきて、私に抱きついた。

「おねえちゃん…………よかったあ…………」

「あはは、心配かけてごめんね」

痛みを我慢して腕を動かし、フリスクの頭を撫でる。…………結構いてえ。

回復アイテム食べればいいのかと思案した所ではたと気付く。…………そういえばリュック投げっぱなしじゃなかったっけ？

「お姉ちゃん？どうしたの？」

私が固まったことに疑問を持ったフリスクが見上げてくる。かわいいけどそれどころじゃない。

「…………フリスク、私のリュックってどうした？」

「? ……あ」

フリスクも気付いたらしく、忘れてたと言わんばかりに口を小さく開ける。

「ぼく、取ってくるよ!」

「あー、じゃあお願い」

「うん、行ってくるね!」

少々不安だがフリスクに任せると、フリスクは私から離れ、部屋から出て行った。

しばらくどうしていいようか思索していると、

コンコンコン

ノックが三つ、フリスクが閉めていった扉から聞こえた。……フリスクはついさつき

出ていったはずだし、サンズは多分私に必要以上近付こうとしないだろうしな。という

ことは……

誰だか見当をつけ、入るぞ、といって部屋に入ってきた彼に私は笑顔を作る。

「おはよう、パピルス。ごめんね、ベッド借りちゃって」

「気にしなくていい!」

入ってきたのは、案の定パピルスだった。

「起きたならこれを食べるといいぞ!!人間と一緒に作ったのだ!!」

そう言ってパピルスは持ってきたトレーをベッドの傍に出してあった机の上に置き、

置いてあった包帯の残りを片付ける。……テキパキ動いてんな、と何処かズレた感心をする。

「そっか、ちようどお腹空いてたし、いただこうかな」

「！ 召し上がれ!!」

食べると言えば、ぱあつとパピルスは笑顔を見せた。

パピルスはパソコンの前にあつた椅子を持ってきて傍に座る。……じーつと見られるからちよつとはずい。

痛む腕を使ってなんとかフォークを持ち、パスタを絡めとる。……匂いと見た目は美味しそうだけど、どうなんだろうか。

パスタを口に運んで咀嚼する。……フリスクが一緒に手伝つたからだろうか、そこまで味は酷くなかつた（少なくとも思わず渋い顔をするレベルではない）。ちよつとまずいけど、でも……

「……………うん、美味しいよ」

「!!! そうか!!!」

確かに籠っている『愛情』に、自然と頬が緩んだ。

私のだらしないう顔を見て安心したように笑うパピルス。……かわいいなあ。フォークでパスタを絡めとっては食べ、絡めとっては食べを繰り返す。その間もパピ

ルスはにこにこしながら私を見つめていた。

カラン

パスタを完食し、フォークを皿の上に置いて手を合わせる。

「ごちそうさまでした、美味しかったよ」

「それは良かった!!」

お礼を言えばパピルスはまた笑った。……そしてそのまま、気まずい沈黙が流れ始める。

「……………」

「……………」

……何を言い出そうか迷っているんだろうな、とパピルスの心情をなんとなく察する。優しい彼のことだから、きっとこの怪我のこと気にしてるんだろうし。

「……………なあ」

「うん？」

最初に沈黙を破ったのはパピルスだった。パピルスの呼び掛けに私は答える。パピルスの顔を見ると、迷っているような顔をしていた。

「……………『ごちそうさま』って、なんだ？」

少し間を開けてから彼は疑問を口にする。

「ああ、それね。私と妹の父さんは日本って国の出身でね。その国では食事をする前に『いただきます』、した後に『ごちそうさま』って言うんだ。確か、その食事を作ってくれたり、その料理に使われてる野菜とかを作ってくれた人達に対する感謝の気持ちと、野菜とかの命をもらうから……じゃなかったかな?」

「オーホー!! そうなのか!!」

彼の疑問に自分が知っている限りの事を答える。……これで大丈夫だったつけ、戻ったら調べないと……

そう考えていると、また会話が途切れて沈黙が流れる。……気まずい。どうしよう、超気まずい。

「……………地上には、色んな国があるのか?」

またパピルスが質問を投げ掛けてくる。

「うん、そうだよ。いくつあったっけな……結構あったと思っただけで、その国とかなよって話す言葉が違うことがあったりするんだ」

「そうなのか……」

質問に答えると、また沈黙が流れてしまった。……仕方ない、私から行くか。

「……………ねえ、パピルス」

声をかけるとビクッとパピルスは肩を揺らし、俯いていた顔をあげて私を見る。

「……………そんなにき、気にしなくて大丈夫だよ?」

きつと彼が気にしているであろう問題に触れる。

「とうかあれは、避けきれなかったりした私が悪いし。ごめんね、急に倒れてビックリしちやったよね」

「……………ちが、う……………」

私が頭をかきながらそう言えば、パピルスは小さく否定の言葉を口にする。

「……………俺様は……………傷つけるつもりもなかった……………お前を傷つけた……………友達になれるはずだった……………お前を、傷つけ、た……………!!」

……………ああ、やっぱそう思ってたのか、と目に涙を溜め始めたパピルスの顔を見て冷静に思った。

「……………おれさまは……………!おまえより……………おれさま自身の夢を優先した……………!」

ぼろぼろとパピルスの目から大粒の涙が流れては落ちる。……………ああ、やめて、そんな顔しないで。

「おれさまは……………おれさまは……………!!」

「パピルス」

布団をどけ、泣きじゃくるパピルスに近付いて彼の涙を拭う。

「……………仲直りの、ハグをしよう」

「……なかなおり……？」

私が笑って提案すると、パピルスは目に涙を溜めながら首を傾げる。

「うん。……私と妹はね、喧嘩しても、どんなに傷つけてしまっても、最後はハグして仲直りしてるんだ。だからさ、ハグして仲直りしようよ」

「……でも……おれさまは……おまえの友達じゃない……」

私の言葉にパピルスは戸惑いを見せる。私は彼の目から溢れてしまつて流れた涙をまた拭つて彼に笑いかける。

「友達だよ、とつくのとうにさ。傷だつて大丈夫、直ぐ治るよ。……私はね、君とこのままの関係でいる方が、もつと辛い。だからさ、私と仲直り、してくれないかなあ？」

そう言えば、パピルスはまた涙をこぼして、それから私を抱きしめる。私も彼を抱き締め返し、ゆつくりと彼の頭を撫でる。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……!!」

「……いいよ、パピルス。だからもう泣かないで、ね？」

「うん……!!」

Tシャツの肩辺りが彼の涙で濡れる。それを気にせず、私は彼が泣き止むまで彼を抱き締めつづけた。

40. パピルスとデート

[Lily]

しばらくすると、パピルスは私をもう一度ぎゅーつと抱き締めてから、もう大丈夫だ、と言って離れていった。

「ん、もう平気?」

「ああ、大丈夫だ!! ありがとうな、人間!!」

さつきとは見違えるほど明るい笑顔でパピルスは言う。……花が咲いて見えるような笑顔ってこんな感じの笑顔のことを言うんだらうか。さすがリアルスター。

心の中で考えながら、私はパピルスの頭をもう一度撫でる。

「にえ〜……」

幸せそうに目を細め、パピルスは頬を緩ませる。激かわか。

心がびよんびよんするのを感じながら、私はパピルスの頭から手を退け、布団を整える。

「そういえば、あの小さい人間は何処に行ったんだ?」

「ああ、ほら、私リユック投げっぱなしだったでしょ? それ取りに行ってもらったんだ

よ。もうそろそろ帰ってくるんじゃないかな？」

そんな風に談笑していると、今度は普通に扉が開いた。

「ただいまー」

「おー、おかえりー。ありがとね、取ってきてくれて」

「どういたしまして！」

部屋に入ってきたのはリュックを持ったフリスクだった。お礼を言えばフリスクはにつこり笑い、そして持つてきたリュックを私に渡すと、口をパクパクと動かしてパピルスに何かを言う。

「……ああ、ちゃんと仲直りできたぞ!!」

……仲直りできたか聞いたのか。……ん？まさかこの子……

ふとフリスクに視線を向けると、グーサインをパピルスに気付かれないようにしながらこちらに向けて出していた。……やっぱ取り持つてくれたのフリスクだったか。ということは、この子扉の外で会話聞いてたな？

フリスクの頭を撫でてお礼の気持ちを伝える。先程のパピルスと同じように幸せそうに目を細めながらフリスクはそのまま動かなかった。かわいい。

「……………あ、そういえば」

「? なんだ？」

ふと、疑問に思った事をパピルスに聞く。

「この子とデートするんじゃないかったの？」

「……………そうだったな!!」

デートの約束を思い出したらしく、少し顔を赤くしながらパピルスは言う。

「え、でもお姉ちゃん……………」

「あー、私はここで飴でも舐めながら見てるよ」

戸惑うように私を見るフリスクに飴の包みを剥がしながら言う。

「……………二人一緒じゃないのか？」

「パピルス……………デートってさ、一対一でするもんなんだぜ……………」

「そうなのか!？」

パピルスの疑問にツツコミを入れてから私はフリスクを引き寄せてこそつと耳打ちする。

「……………友達になりたいんでしょ？チャンスじゃない？」

そう言えば、フリスクははつとしたような顔をしてから少し考えこむ。しばらくすると、フリスクはこくりと深く頷き、パピルスに向き直る。そして、パクパクと口を動かした。

「……………!!! そうだな!!」

どうやらデートフラグは成立したらしく、パピルスが頷く。

二人を見守りながら、私は包みを退けた餡を口の中に放りこむ。……ん、うま。

「それじゃあ……デート、スタートだ!!!」

パピルスの掛け声とともに、世界が白黒に切り替わった。

41. デート実況

〔Lily〕

DATE START!!!

いつものアナウンスでデートが始まったことが告げられる。……なんか心なしかアナウンスさん楽しそうに感じる。あ、実況そして解説は僭越ながら私リリーが務めさせていただきます。

『よし!!デートを始めるぞ!!』

明るい声でパピルスが言う。

『実は俺様、こういうのは初めてなんだ』

安心しろ、フリスクも私もデートしたことない。

パピルスの発言に心の中でツツコミを入れる。

『だが心配するな!!俺様の辞書に「準備不足」の文字はない!!!』

そう言ってパピルスはシュバツと一冊の本を取り出す。……おう待て、その本どっから出した。

『図書館からデートマニュアルを借りてきたのだ!!!きつと最高の時間になるぞ!』

「なんで図書館にそんな本があんの……………?」

思わず真顔でツッコむ。……………普通ないよね?

デートに熱中しているらしいパピルスには私の発言は聞こえなかったらしく(まあ小声だったしね)、パピルスはそのままデートを続けて本を開く。

『なにになに……………ステップ1……………Cキーを押して「デートパワー」を集めてくれ』

メタ発言キター。思わず心の中でツッコミを入れる。……………つかゲームの時も思っただけどデートパワーってなんや。

口の中で餡を転がしながら見ていると、『Player』は言われた通りCキーを押したらしく、ゲームだった時のように色々なメーターが表示される。……………うん待って、犯罪って何?つかリアルあったっけ?あと人口関係ないよな?……………ちなみに日付と時間によって変わる所は何故か見えない。……………まあ、そりやそうか。

『ワーオ!!分かったような気がするぞ!!』

分かんなくていいわ。

本を持ちながら言ったパピルスにツッコミを入れかけたのを飲み込む。……………黙つとかないとぐだぐだになるよね、うん。

『ステップ2に進んでも良さそうだな!!!』

「せやな……………」

若干遠い目になりながらパピルスに同意すると、パピルスはまた本を読み始める。

『ステツプ2……相手をデートに誘おう』

……マジでなんで図書館にデートマニュアルがあるのか管理人に問い詰めた。思わずそう思う。何故あるし。

『コホンー！』

本を一回しまい（何処にしまったのが気になるが置いていて）、パピルスは小さく咳払いをして顔をキリツとさせる。……ちよつとかわいいと思つたのはナイショ。

『人間!!このグレートなパピルス様は……お前と親密なデートをしたいぞ!!』

フリスクはパピルスのその言葉にこくりと頷く。

『ほ、ほんと???キヤー!!』

目をキラキラさせながらパピルスは頬に手をあてて嬉しそうに笑う。……なかなかかわいいな、うん。

『じゃあパート3に進むぞ!!』

その言葉にフリスクはまた頷く。

『ステツプ3……素敵なファツションを披露しよう』

そこまで読んでパピルスははつとしたように本から顔をあげてフリスクを見る。

『……ちよつと待てよ。「素敵なファツション」か……お前のその今装備しているバンダ

ナ……もう既に素敵なファツションをしていたというのか?」

パピルスの言葉にフリスクはこれ?と言わんばかりに首に巻いてあるバンドナを指差す。

『待てよ……そのファツション、今日はずっと装備していたな?』

フリスクは頷いてからそれがどうしたか聞くように首を傾げる。すると、パピルスは頬を赤くして手をまた頬に当てる。

『もしかして……お前は最初っからデートする気満々だったのか?!?』

え、と言わんばかりにフリスクの動きが一瞬固まったが、フリスクは直ぐに頷く。すると、世界が雷を受けたかのように一瞬明るくなつた。……うわまぶしっ

『そんな!!!全部計画通りだったなんて!!!』

衝撃を受けたかのようにパピルスは目を見開く。……待った、スケルトンに目玉ないはずなのになんであんの?』

『俺様よりデートの達人じゃないか!!!』

「いやそんなことはな『ぐわー!!凄まじいデートパワー……!!』聞いて!!!」

思わずフリスクと一緒に首を横に振るが、パピルスは気付かなかつたらしく私の発言が食いぎみに遮られる。……あれ、前にもこんな事なかつた……?』

遮られてショックを受けていると、パピルスの頭上に『DATE POWER』とか

かれたゲージに青いものが貯まっていくな。

「…あ、ちなみにパピルスとおんなじ巻き方だぞー」

「そ、そこまでか!?!」

遮られたショックから直ぐに立ち直って、外野から補足（という名の野次）を入れてみると、パピルスは一層驚いた顔を見せた。……あ、ちよつとデートパワーが増えた。

『ニエツ!』

はつとしたようにパピルスは我に返る。

『ニエーツヘツヘツ!!』

そして一瞬焦ったようにしてから彼特有の高笑いをあげた。

『これで勝ったと思ったら大間違いだぞ!!』

いや別に思っていないけど……

思わずツツコミを入れる。彼がそう言っているうちに横からすすーつと『テンション』とかかれた折れ線グラフがフェードインしてくる。……うわつ、上がり下がりが激しいなおい。

『俺様、偉大なるパピルス様は……今までデートで負けたことはないし、これからも無敵だ!!』

まあ一回もデートしたことがないならそうだろうな。思わず出かかったツツコミを

飲み込み、状況を見つめる。……というかいつの間にかデートって勝負になったんだろ
う。あれか、『惚れた方が負け』的な感じか？

『お前のペースに合わせるなんて簡単だ!!』

そう言ってパピルスはカッコつけるように顔をキリツとさせる。

『見てろよ、俺様も、服くらい、着れるからな!! 実際……普段着の下にはいつも勝負服を
着ているからな!! いつデートになってもいいようにな!!』

いやそんな勝負下着みたいに言われても……と思わず思った。……というか動き辛
くないのかそれは。

『見よ!!』

そう言って今度はパピルスがフェードアウトしていき、すぐにまたフェードインして
くる。……例の肩がバスケットボールになってる服に着替えて。……いや、脱ぐだけ
にしても着替えんの速すぎない？ 瞬間早着替えかなんかか？

『ニヤハー！ どうだ、このとつておきファッションは!!』

心の中でツツコミを入れてみると、パピルスはそう言って胸を張る。『Player』
は『好きだ』って答えたらしく、フリスクは直ぐ様グーサインを出す。それを見てパピ
ルスはまた目を見開いた。……だからその目玉は何処にあったんだよ。

『なんと……!! 真剣に褒めてくれたぞ……!!』

そう言うときまたフラッシュが走り、『DATE POWER』のゲージがまた貯まってくる。その直ぐ後にテンションゲージがフェードアウトしていった。

『だがな……』

若干目をそらしながらパピルスが続けた言葉にフリスクは首を傾げる。

『この服の真の力をお前は知らない!!!』

そんなRPGの装備の効果みたいに言われてもな……と遠い目をしながら思う。

私は口の中で小さくなった飴を噛み砕き、もう一つ飴をリュックから取り出す。

『よって……今のはノーカンだ!!!』

パピルスがそう言うとき、『DATE POWER』のゲージが巻き戻っていく。そんなのありなのか……?』

『これ以上ゲージは伸びないぞ!!!……俺様の秘密に気付けば話は別だがな!!!』

秘密?と言わんばかりにフリスクは戻した首をまた傾げる。……うん、かわいい。

『まあ無理だろうな!!!』

パピルスがそう言うとき、フリスクはムツとしたような顔をしてパピルスに近付いて体をペタペタと触り始める。……探しだしてやろうとムキになつてら。あとパピルスちよつと恥ずかしがってね?』

飴を口の中に放りこみ、状況を見守る。フリスクが上半身の方を調べようとすると、

パピルスがそれに応じてしゃがんだりしているのを見て心が暖まった。……ゲームではなかったからね、そういう描写。

しばらくすると、『Player』は帽子を調べたらしく、フリスクは帽子を指差した。『俺様の帽子……？俺様の帽子……俺様の帽子！』

正解だと言わんばかりにパピルスは彼特有の高笑いをあげる。すると、パピルスが被っていた帽子が上に浮いた。……もう一度言う、上に浮いた。……え、マジック？いや魔法か……？

『そ、その……遂に俺様の秘密を見つけたようだな!! こうなつては仕方があるまい!!』
少し恥ずかしそうにしながらパピルスは帽子の下から出て来た箱を持つ。……よく潰れなかったな。

『このプレゼントは、お前へのプレゼントだ!!』

その言葉にフリスクは一瞬固まり、それから自分の事を指差す。そしてちよつと照れ臭そうにしながらパピルスから箱を受け取り、リボンをほどく。……中には、パスタが入っていた。

『これが何だか分かるか?』

いやーちよつとワカラナイデスネーと言わんばかりにフリスクは首を横に振る。

『ニエツヘツヘ！残念でした！騙されたる！』

え、と言わんばかりにフリスクは固まる。……微妙に顔が見えない位置だから感情が分かり辛い。

『これは一見パスタのように見えるけども……ただのパスタじゃないぞ!!』

結局パスタやん、と言いかけるのを飲み込む。……あ、また『DATE POWER』ゲージがフェードインしてきた。

『このパスタはもはや芸術! オーク樽でじっくり熟成させた贅沢パスタ……』

パスタって熟成させるものだったのだろうかと思案する。……あれ、するもんだったわけ?!

『そしてマスターシェフ、パピルスによる調理!』

ただしアンダイン式である。と脳内でパピルスの発言に補足を加える。

『人間!! とうとうクライマックスだな!! これがとどめだぞ!!』

フリスクはパピルスとパスタを交互に見比べる。そして、手を合わせて口を少し動かすと、フォークでパスタを絡めとって口に運んだ。……あ、顔が渋くなった。

その（パピルスから見て）迷いない動作にパピルスは目を見開く。

『なんとという情熱的な表情だ!!』

どこがだ……という目線をパピルスに送る。するとこちらの目線に気付いたのか、パピルスは小さく手を振った。……うんまあそういう意味じゃないけど取り敢えず手を

振り返しておく。

『気に入ってくれたのだな！嬉しいぞ！』

そう言ってパピルスはフリスクに向き直り、頬を赤くする。

『そして料理だけではなく!!!俺様の事まで好きだなんて!!!』

パピルスがそう言うのと、またフラツシユが走ってゲージがあがっていく。……あ、これ自滅？

『うわああ!!』

またフラツシユが走る。……目がいてえ。

『おっおお!!』

事前にフラツシユが走る前に瞼を閉じた。……あ、眩しくない。

『んのおおおお!!』

パピルスが叫び声をあげると、ゲージはMAXを越えて伸びていった。……お、もうそろそろかな？

『……人間。これではつきりしたぞ』

だんだん白くなった部屋の中で、パピルスの声がする。

『お前はもう俺様に夢中なんだ。』

……フリスクの今超困惑した顔してんだらうなとなんとなく見当をつける。……結

構すれ違つてるもんな……

『お前のやること。お前の言うこと何もかも。全部俺様のためだったのだな。』

それはどうなんだろうか……と心の中でツツコミを入れる。

『人間。お前にも幸せになつてほしいんだ。……俺様の気持ちを打ち明けるぞ。』

決心したような声でパピルスは言う。

『聞いてくれ。人間。俺様は、パピルス様は……』

そこで、また白黒の世界に戻る。

『俺様は……ん……なあ、ここら辺熱くないか？俺様だけか??』

一瞬戸惑つたようにしてから、パピルスは話を逸らすかのように違う話題を口にした。

『……………ああ、もう……………』

そして、気まずそうにパピルスはフリスクから目を逸らす。

『人間、その……すまん』

そして、本当に申し訳なさそうに断りの返事を返した。

『お前が俺様を愛しているほど、俺様はお前を愛していない。恋愛対象として見てはいないのだ』

え、何この空気……と言わんばかりにフリスクはキョロキョロと辺りを見回す。……

というか、今日会ったばっかで好きになれる奴なんて早々居ないわな……初対面で口説く奴も早々居ないけど。

『でも、ものすごく頑張ったんだぞ！お前が口説いてきたということは……お前とデートしなくてはならないということだと思ってる。』

目をキョロキョロと動かしながらパピルスは言う。

『そして、デートの中で恋の花が咲くと思っ込んでいた!!!そうすればお前の情熱に応えられるとな!』

また顔を赤くしながらパピルスは続ける。

『だがしかし……この、偉大なるパピルス様も……失敗してしまった。今までと全く同じ気持ちだ。』

パピルスはまたフリスクから目を逸らながら言う。……一瞬とある漫画思い出したのは内緒な。

『そして、お前とデートしてしまったせいで……さらに深くお前を……俺様への愛の中へ引き込んでしまった!!!』

申し訳なさそうな声でパピルスは続ける。

『逃れられない情熱の牢獄の、奥深くへ』

なんかカッコいい例えだなというズレた感心を抱く。……いや普通そんなこと言え

る奴いないぜ……？

『大切な友達に俺様はなんてことを……？』

そこでパピルスはふと何かに気付いたかのように考えこむ。

『いいや！待て！それはおかしい！』

そして大きな声で叫ぶ。

『俺様は何も間違えないのだ!!!人間!!!この苦境を乗り越える助けになつてやろう!!!』

困惑したらしいフリスクが助けを求めるように私を見る。………私もこのカオスをどうしたらいいか分からないという意味を込めて首を横に振ると、フリスクは諦めてパピルスに向き直った。

『俺様はクールな友達として……このことは全部なかったことにする。』

フリスクに気を遣うような声音でパピルスは続ける。

『何と言つても、お前は最高にグレートだからな。お前の友情を失うことこそが悲劇なのだ。だからどうか……キスをしてやれないからといって泣かないでくれ。』

別に泣かんとするけど………と口にしかけるのを何とか飲み込み、そのまま話を聞く。

『だって、そもそも俺様唇ないし。』

「せやな」

パピルスの言葉に同意する。……いやあつたらこええよ。もう殆ど別のクリーチャーじゃねえか。

『それにな、いつか俺様と同じ位グレートな誰かが見つかるぞ』

あー、だろうな……と私は密かに思う。フリスクかわいいし。絶対にその魅力が分かってくれる奴がきつというと思は思う。……遊びで手え出そうとしたら容赦しないけどな。

『ん、いや、それは違うか……だが二番目として、お前を支えてやることは出来る!!!』
そう言つてパピルスは彼特有の高笑いをあげ、またフェードアウトしていく。そして、何か忘れたように直ぐ様戻ってきた。

『あ、俺様と連絡が取りたかつたら……』

パピルスはフリスクに何かの紙を渡す。

『これが俺様の番号だから……いつでも電話してくるといいぞ!!……友人的なお付き合いでな。よし、この辺にしといてやる!!!』

最後は困つたような顔で付け加え、パピルスはにかつと笑つて高笑いをあげた。

そこで、世界に色が戻ってきた。

42. Snowdin通過

「Lily」

「お姉ちゃん、怪我はもう大丈夫？」

「デートを終えた後、パピルスの電話番号を手を持ったままフリスクが尋ねてくる。

「おー、大丈夫だよ。念のため飴二個食べたしな」

「そう言っつてすっかり痛みを引いた体を動かし、パピルスのベッドから降りる。……うん、違和感とかはないな。」

「……そう言えば、私のパーカーは？」

「ふと、いつも着ている私のパーカーが何処にもないことに今更気付いた。」

「ああ、それなら……」

「フリスクが何かを言いかけたところで、パンツと勢いよく扉が開く。」

「パーカーならここぞぞ!!」

「入ってきたのは、私のパーカーを持ったパピルスだった。……あ、服元に戻った。」

「切れていたりと場所があったからな、縫っておいたぞー!」

「え、ごめん、わざわざありがとう……」

パピルスが掲げたパーカーは、私が気絶している間に縫ってくれたらしく、殆どの所の切り口が縫われてあった。

パピルスからパーカーを受け取り、袖に腕を通す。……おお、綺麗に縫われてら。ホント器用だな……

チャリ、と袖に手を通す時にずっと着けていた腕輪が擦れて音を立てる。

「あー……これ無くすと嫌だし外しとくか……」

腕輪を外し、パーカーのジップパーをあげる。

「……その腕輪、どうしたのだ？」

「ん、これ？」

パピルスが腕輪に興味を持ったらしく、声をかけてくる。

「自分で作ったんだよ。……ちよつとしたお守り代わりにつけてるのさ」

「そうなのか……」

水色、橙色、紫色、赤色、青色、緑色、黄色のそれぞれのハートが揺れる。……これは、私が作ったものだ。私の決意を示すためと、フリスクが幸せであるようにという祈りを込めただけの、ただの腕輪。……私の、決意。

リュックに腕輪をしまい、リュックを背負う。

「よーいしょっしょ」

……あ、ちよつと軽くなった。

「……あ、フリスク、携帯とメモちよつと貸して」

「? はい」

フリスクから電話とメモを借り、パピルスの電話番号を登録する。……あ、これこうすれば登録できるやつだ。

ピッ

「!」

携帯を好き勝手に弄っていると、トリエルさんの携帯番号が表示された。

「……よし、登録出来たよ!」

「ありがとうお姉ちゃん」

何事もなかったかのように表示を消し、さっさと番号を登録してフリスクに携帯を返す。……そう言えば、トリエルさんの電話イベ、どうなったんだろう。

「……取り敢えず、間違っていないか確認の電話してみて」

「うん」

「パピルス、電話出しといて」

「分かったぞ!」

パピルスは返事をして電話を取り出す。……今どつから出した……?」

プルルルル……

フリスクが電話をかけると、

プルルルル……

パピルスの手の中にあつた携帯が振動する。

『「繋がったぞー！」』

パピルスが出て、電話が繋がる。……電話からと真正面からの声がハモつて変な感じに聞こえんな。

「うし、大丈夫そうだな。しまつときな」

フリスクは私の言葉に頷くと、電話を切つてポケットのの中に突つ込む。

「さて。……じゃあ、そろそろお暇しましうかね」

私がそう言うと、パピルスは少し顔を曇らせる。それを気付かなかつたフリをして、私は部屋のドアを開けようとする。

「……………待て」

ノブに手をかけた瞬間、パピルスが声をかけてきた。

「……………途中まで、送るぞ」

【P a p y r u s】

「これでしばらく雪ともお別れかー」

ざくざくと、感触を楽しむかのように雪を踏みながら笑う人間。……もう少しで、この人間達は王様の所までいくのだろう。

「……………待つてくれ」

Waterfallに続く一本道で、俺様は声をかける。

「ん、どうしたのPapyrus?」

俺様の声に応えて、人間は振り返る。

「……………地上への道を教えてやろう!」

「え、ホントに?」

俺様がなんとかそう告げると、人間は驚いたように目を瞬かせる。

「洞窟の終わりにたどり着くまで進み続けるのだ。そして……………首都に到着したら、結界を通るのだ。」

「結界……………?」

小さな人間が不思議そうに俺様の言葉を繰り返す。

「そうだ。それが俺様たちを地下に封じ込めている魔法のカベだ。」

「壁か……………」

少し考えこむように腕を組む大きい方の人間。

「結界に入るのは簡単だが、決して出ることにはできない……ただし、強いソウルを持つ者だけは例外だ。……そう、お前たちのような!!」

そこで大きな人間が顔を少し下に向けて雪を見つめる。

「だから王様は人間のソウルを欲しがっているのだ。」

「そうなんだ……」

顔をあげた大きな人間と、小さな人間が揃って納得したような顔をする。

「彼はソウルの力で結界を破ろうとしている。そうすれば俺様たちモンスターも地上に帰ることができる!」

俺様は思わず大きな声で言つて、いい忘れたことがあつたことに気付いた。

「……そうだ、言い忘れるところだったが……出口に辿り着くには、お前たち、は……」
ふと、そこまで言いかけて、目を逸らして忘れようとしていた恐ろしい事も思い出し、俺様は言葉を続けられなくなった。

「……どうしたの?」

大きな人間が、俺様が言葉に詰まったのに気付いて心配そうな顔をする。その顔から、俺様は目を逸らしてしまう。

……この人間たちが、また、傷付いてしまわないか、俺様は気付いてしまっていたのだ。

さつき、大きな人間を抱えた時、思わず無い背筋が寒くなるほど、冷たかった。顔は青ざめて、目は硬く閉じられて。

……また、あんな風に、人間たちがならないのかと、俺様は

「Papyrus」

ふと、大きな人間の声が近くで聞こえる。そして、俺様の顔を下から見上げるようにして、傍に居た人間が、

「……………大丈夫だよ」

俺様を元気付けるかのように、にっこりと笑った。

その笑顔に、俺様はとても安心した。……人間は凄いな、モンスターの気持ちがかつちやうなんて。

「……………ゴホンツ、話の続きをするぞ人間！」

俺様は気を取り直し、人間たちに説明する。

「出口に辿り着くには、お前たちは王様の城を通り抜けなきゃならない。全てのモンスターを統べる王……………彼は……………その……………」

人間たちが真面目な顔になり、俺様を見つめる。

「彼はデカくてぼんやりしたお人好しだ!!!」

俺様の言葉に何故かガクツと躓いた人間たち。……………石でもあったのか？

「そ、そう……」

「そうだぞ!!みんな彼のことが大好きなんだ。」

俺様は王様のことを想って誇らしい気持ちになる。……そうだ、あの王様が人間たちを傷つける訳ないのだ。

「お前たちはこう言うだけでいい。『すみません、DREEMURRさん……おうちに帰ってもいいですか?』」

そうすればすぐに彼は自らお前を結界に案内してくれるだろう!」

「そう……」

相槌を打つかのように頷く人間。

「とにかく!!!話は以上だ!!!」

「そっか、ありがとうPapyrus、教えてくれて」

にっこりと、そっくりの笑顔で笑う人間たち。その顔に、俺様も思わず笑顔になる。

「俺様はいつでもクールなお前たちの友達だからな!!!いつでも戻ってきていいぞ!!!」

「あはは、ありがとう」

ボソッと小さく、大きな人間が笑った後に何か言ったような気がした。……きつと気のせいだな!!!

「じゃあね、Papyrus」

「またねー!!」

「ああ、またな!!」

俺様に手を振って、人間たちは Waterfallへと歩いていった。……途中、小さな人間が一度振り向いて、また俺様に手を振った。

「……………さて。」

…人間たちが見えなくなったところで俺様は振っていた手を降ろし、スカーフを巻き直す。

大きな人間の笑顔を思い出しながら、俺様は決意を抱く。

「Undyneに、お願い報告しにいかなきやな」

……この先にはUndyneが待っている。彼女はきつと、人間を捕まえようとするだろう。だから、俺様は……

弱気になりそうになるのを頭を振って振り払い、俺様も歩きだす。

……………ニエツヘツへ、俺様は、クールな友を守るのだ。

43. デートと扉

〔Lily〕

パピルスと別れ、歩を進めていくと、次第に空気の温度があがっていき、肌を刺すような寒さから丁度いいぐらいの涼しさになる。

「お、丁度いいぐらいの気温になった」

そのまま横の川を流れる氷を横目で見ながら進んでいくと、大きな穴がぼつかりと口をあけていた。……ここから先がウォーターフォール、つまり、皆大好き正義のヒーロー寿司ネキことアンダイン姐さんとのリアル鬼ごっこである。……頑張らんと。

「お姉ちゃん？」

いきなり立ち止まったことを不思議に思ったのか、フリスクが振り向いて私に声をかけてくる。

「なんでもないよ、行くっか」

私はフリスクに笑顔を向けて誤魔化し、ウォーターフォールに足を踏み入れた。

「……………おお」

中に入って、洞窟の中の美しさに思わず感嘆の声が出る。……ゲームでも見た時綺麗だなと思っただけど、現実で見ると何時間でも見てられる程綺麗だわ。くそつ、カメラを持って来なかったんだ私は!!かわいいフリスクとこの美しい風景がマッチして素晴らしい一枚になっただろうに……!!

心の中で血涙を流しつつ、私はモンスターキッド君に話しかけるフリスクの後をついでいく。

「よっ!アンダインにこっさり会いに行くんだろ?」

いや会ったら殺されるわと出かかった言葉を飲み込み、モンスターキッド君に笑顔を作る。

「君も?」

「そうだぜ!カッキーよな……アンダインが一番だよな!」

誰と比べてるかにもよるけどな……と思いつながら、肯定の意味を込めて頷くと、モンスターキッド君は嬉しそうに目を輝かせる。かわいいな。

「だよな!!はあ……おつきくなったらアンダインみたいになりたいよ……」

うつとりしながらモンスターキッド君はそう言った。……慕われてんな寿司ネキ。

ふと、はっと何かに気づいたようにして慌ててモンスターキッド君は私たちに小さな声で囁く。

「なあ、母ちゃんたちにはおいらが言ったことヒミツな」

「おー、わかったよ」

私が返事をする、フリスクもいいよと言わんばかりに頷いた。

話が終わると、フリスクは次に魚人のモンスターに話しかけに行く。

「花を信用するな……それがこの世界の真理の一つさ……」

それは身に染みるほど知ってるよ……

とあるヤンデレクソ花を思い出して遠い目になる。……多分今も着いてきてんだらうな……

『この人生に価値を与えてくれるのはエコーフラワーを説明することだけなんて……絶
対誰にも知られたくない……』

思いっきり知られてますがな。隣のエコーフラワーから聞こえてきた声に思わず心
の中で突っ込みをいれる。……あ、ほんやりと光って綺麗だなこの花。

「……この花、花の傍で話した事を録音出来るみたいだね!」

フリスクがエコーフラワーの美しい水色の花卉を触りながら言う。

「そうだね、じゃあ今話してるこの会話も録音されてんのかな?」

「どうなんだろうねー」

フリスクはニコニコ笑いながら花卉から手を離し、隣にあつたセーブポイントに触れ

る。しばらくすると、セーブが終わったらしく、頬杖をついているサンズに話しかけにいく。

「よお。……………何？仕事を掛け持ちしてる奴に会うのは初めてか？ラッキーなことに、二つ仕事があるつてことは休み時間も二倍つてことだ。」

いやその理論はおかしくね……………？と心の中でツツコミを入れる。……………普通減らない？

「グリルビーズにでも行くか。お前も来るか？」

「！」

サンズの誘いにフリスクは思いっきり首を縦に振る。

「お前さんも来るか？」

サンズが私に目をやりながら言う。一瞬瞳孔が消えたような気がする……………怖いよ……………

「あー……………私はいいいよ。此処で待つてるから二人で行つてきな」

「そうか。じゃあ、行くか」

顔が引き吊りそうになるのをなんとか耐え、サンズに笑顔を向けて誘いを断り、此処に残る事を告げる。

「ついてこい。こつちに近道があるんだ。」

サンズを見てからフリスクがちらりと気がかりそうに私を見る。

「……………先行ったりしないよ。楽しんでおいで」

その言葉に一応安心したのか、フリスクはまだ少し不安そうな顔をしながらサンズに着いていった。一度、私が居るかを確認するためにか振り向いた。ちゃんと居るよという意味を込めて手を振ると、フリスクはまた前を向いてサンズに着いていった。

「……………行つたかな？」

姿が見えなくなつたのを確認し、振っていた手を降ろす。

……………さて。これで調べられるかな？

私は、さつきから視界の端に見えていた本来此処にあるはずのない灰色の扉をノックした。

44. より暗く、暗い場所で(Dark Darker yet Darker)

〔Gaster〕

……………——コン、コン、コン

間の空いたノックが空間に響く。音が聞こえた方を見れば、あるはずのない灰色の扉が現れていた。

ギィ

扉が軋む音を立てて、扉が開く。そして、近付いてくるこの空間に入り込んだ人物は、よく見覚えのある顔の少女だった。

『……………Chara王女?』

「ちげえよ」

溢した疑問に即答されて思わず目を見開く。呆れたようにこちらを見る少女は、一瞬見間違う程に似ていたが、確かにChara王女ではなかった。

そして彼女は、私の言葉がどうやら理解する事が出来るらしいと遅れて気付き、再度目を見開いた。

『君は私の言葉が解るのかい?』

「まあな。……この空間のせいかな雑音みたいなのが混じって聞こえにくいけど」

理解出来ない訳ではないよ、と彼女は付け足す。……彼女は誰だろうか。今更ながら、そんな疑問が湧く。

「……………ああ、そう言えば自己紹介がまだだったね。私はLiilyだよ」

私の心の中を読んだかのように、彼女……Liilyは名を名乗った。

『そうか、私の名は……』

「知ってるよ、Gasterだろ?」

Liilyの口から私の名が出た事に驚愕する。……これまでのTi^今me^まli^でne^で

彼女に会った事など一度も無い筈。なのに何故、彼女は私の名を知っているのか。あの少女^{Friisk}になら、何度か会った事があるが……何故?

「……………何で私が貴方の名前を知ってるか不思議?」

思案しようとした私の事を見透かしたかのように彼女は言う。

『ああ、不思議だとも。君とは初対面のはずだし、何故私の言葉が理解出来るのかも分からない。それに、君は本来此処に来れないはずだろう？それも分からない。』

質問を肯定し、つらつらと次々湧いてくる疑問を並べる私を、彼女は只真つ直ぐに見つめる。

『……………君は一体何者なんだ？』

私は土のような色をした瞳を見つめ返す。すると、彼女は少し目を伏せ、

『……………さあね、何者なんだろうね、私は』

と、私の質問に答えた。

『……………ふむ、自分でも分からない、か。実に興味深いな。』

「はは、やっぱりアンタはそういう奴かよ」

私が純粹に興味を示せば、彼女は頬を引き吊らせながら乾いた笑い声をあげる。そして、真剣な顔をして私を見る。

「そんなアンタだからこそ、協力してほしいことがあるんだけど」

『……………ほう。』

彼女は私に取引を持ち掛けてくる。

「協力してくれたら……………そうだな、私が知ってる範囲であれば何でも教える」

『例えば？』

「例えば? …… そうだな、この世界についてとかどう?」

……………この世界について?

私はその言葉に興味を抱く。

「……………あはは、気になる?」

『ああ、とてもね。』

「そう。じゃあ、取引する?」

私はニヤリと笑って手を差し出してきた彼女を暫し見詰め、思案する。

……………彼女と取引を結んだとして。彼女が話す情報はどれぐらいだ? そのメリットは? デメリットは?

そうしばらく悩み、私は……………

『……………よろしく頼むよ、協力者君』

彼女の手を取った。

「あはは、こちらこそよろしく、博士」

手を握り返した彼女が言った『博士』という言葉に思わず目を丸くする。……………ああ、博士なんて呼ばれたのはいつ以来だっただろうか。ふと、遺してきてしまった二人を思い出す。彼らは元気にしているだろうか。

「さて、まずは情報交換しようか。じゃあまず最初に……」
彼女は胡座をかいて座り込み、私に情報を与え始めた。

45. 妹への愛と気付かれていた恐れ

〔Sans〕

Shortcutを使い、いつも通り騒がしいGrillbysの中に移動する。
「すごい近道だったろ、な？」

俺がそう言いながら振り向けば、人間は驚いた顔をして頷いた。

「よう、みんな」

前に向き直って進みながら、いつも通りの面々に挨拶をする。

「おう、Sans」

「ハアイ、Sans」

「こんにちは、Sans」

「やあ、Sansy」

いつも通りの面々が、いつも通りの挨拶を返してくれる。

「なあSans、ついさつき朝ごはん食べに来てなかったか？」

空いていた席に座ろうとすると、一人が話しかけてくる。

「いや、朝ごはんはついさつきじゃないぜ。お前さんが言ってるのはブランチのことだ

な」

俺がジョークを言うのと、ドツと店内で笑い声があがった。人間も、少し笑っていた。

「さ、くつろいでくれ」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

俺が席を薦めると、人間は疑いもせず椅子の上に座る。

ブオオオオー

人間が座った瞬間、椅子に仕掛けたブーブークツシヨンの音が盛大に響く。

「おっと、座る場所には気を付けな。いつ誰がブーブークツシヨンを仕掛けてるかわからないだろ」

啞然としていた人間からの責めるような視線を無視し、俺は飄々とした態度を装って人間に言う。

「よし、何か注文するとしよう。何を頼む……?」

俺がそう言えば、人間は俺を睨み付けるのをやめ、少し考えるような素振りをして俺に、

「…………ポテトってある?」

と訊ねてくる。

「ああ、あるぜ。それにするか?」

「うん、あとはいいや」

人間は俺の問いに頷き、それ以上はいらないと告げる。

「grillyby、ポテト二つだ。」

俺が注文を入れると、Grillybyは拭いていたグラスを置き、奥の厨房へと引っ込んでいく。その間に俺は櫛を取りだし、無い髪を整える。

「……なにしてるの？」

その行動を疑問に思ったのか、人間は俺を不思議そうに見る。

「なにつて、髪を整えているんだが……それがどうした？」

「Sans髪無いよね……？」

「まあ、スケルトンだからな」

俺がすつとぼければ、人間は鋭いツツコミを入れた。……この掛け合いは初めてだな。

「で、俺の兄弟のこと……お前さんはどう思う？」

「え？それ前にも聞かれたよ？」

「そうだったか？じゃあ改めてお前さんの意見を教えてくれ」

櫛をしまい、Papyrusの事を訊ねれば、人間は怪訝そうな顔をした。質問を少し変えてまた訊ねれば、人間は少し考えるように目を伏せ、そして、笑顔で俺にこう言っ

た。

「誰よりもクールで、誰よりも優しい友達想いなモンスターだと思う」

一瞬、目を見開く。……………今までの人間は、こんな顔で、こんなまともな返答をした
だろうか。

「……………そうだな、その通りあいつはクールだ」

「ふふ、SansはPyrusが大好きなんだね」

そう言つて人間は微笑む。

「お前さんもあの格好をすればクールになれるぜ」

「作れないから無理」

俺がそう言えば、人間は真顔で首を横に振つた。

「あいつは余程のことがないとアレを脱がないんだ。前にも言つたが、洗濯する時だけは別だけだな。シャワーに行く時も着たままだからな」

「どんだけ気に入つてるの？」

思わずといった様子で人間がツッコミを入れると、頼んだポテトをGrillyが
持つて来る。

「きたきた。ケチャップは使うか？」

マイケチャップを取り出して人間に差し出す。

「うん、借りていい?」

「もちろんだ。さ、使いな」

人間は俺の質問に頷いて俺の手からケチャップを受け取り、ポテトにケチャップをかけようとしてケチャップをひっくり返す。すると、

ドバツ

「!?」

「おっと」

蓋が取れて中身が全部ポテトにかかってしまった。

「……………めん、Sans……………中身が全部…」

直ぐに本当に申し訳なさそうな顔をして、人間は俺に謝る。

「あー……………気にするな。俺のを食えよ。たいして腹は減ってないからさ」

「ありがとう……………でも、作ってくれたGrillbyに申し訳ないし、勿体無いからちゃんと食べるよ」

俺の分のポテトには手を出さず、人間は真っ赤になったポテトに手を伸ばす。その行動に思わず俺は目を見開いた。

「……………」

「流石にそのままは手が汚れるから使え、って言ってるぜ」

状況を見て、心意気には感心したが流石に見かねたらしい Grilby がフォークを人間に差し出す。

「ありがとう」

人間は笑顔でフォークを受け取り、フォークを使つてポテトを口まで運び、咀嚼する。

「……………うん、美味しい」

……………今ままで、こんな事はなかったはずだ。混乱しそうになる頭でそう考える。

コイツは、俺の分のポテトを受け取つて、そのままこのケチャップのかかったポテトは放置する筈だ。なのに、何故……………？

「…S a n s ? ? どうしたの?」

固まった俺の事を不思議に思つたらしく、人間は俺を見て首を傾げる。

「……………なんでもない。で、クールかどうかはおいといて、p a p y r u s は本当によくやつてるぜ」

俺は自分の分のポテトに手を伸ばしながら語る。

「王国騎士団に入ろうと必死でな。ある日、あいつは騎士団長の家に行ったんだ…」

フォークでポテトを刺して口に運びながら、人間は俺の話に相槌を打つ。

「で、入団させてくれと頼み込んだ。しかし団長はドアを開けなかった」

「……………何で?」

「真夜中だったからな」

「……P a p y r u s ってちよつと天然だよね」

真顔でポテトを咀嚼しながら人間は言う。

「ところが翌朝、まだ粘っているあいつを見て。その情熱に免じて、稽古をつけてやることにしたのさ。……まあ、まだ、それも発展途上つてとこだけだな」

「団長さんも情に熱い人、もとい情に熱いモンスターなの？」

「まあな」

U n d y n e に興味を持ったのか、人間が訊ねてくる。俺ははぐらかしながら肯定しておく。

「……そうだ、聞いときたいことがあつてな」

「? なに？」

俺がそう言えば、人間は首を傾げた。

「……言葉を話す花つて、知ってるか？」

俺の問いに、人間は、咀嚼していたポテトを飲み込み、

「……うん、知ってるよ」

俺の目を真つ直ぐ見てそう答える。

「……そうか、知ってるんだな。」

「うん。……なんの花のこと？」

「エコーフラワーだ」

「……ああ………やっぱりそつちか………」

『そつち』という言葉を聞き流し、俺は続ける。

「沼地の至るところに生えてるんだが。その花はかけられた言葉を、こだまみたいに繰り返すんだ………」

「ああ、だからエコーフラワーなんだ………」

俺の話に納得したように頷く人間。

「で、それがどうかしたの？」

「ん？まあ、先日 P a p y r u s が興味深い会話をしててな。時々、誰もいないところで……花が現れて何か言うんだ。お世辞に……アドバイス………応援、それに………予言。妙な話だろ？」

「………へえ………」

一瞬間人間が遠い目になる。……アイツになんかトラウマでもあんのか？

「誰かがエコーフラワーでいたずらしたんだらうなあ」

俺がそう言えば、人間は苦笑いを浮かべる。

「気を付けろよ？」

「うん、ありがとう」

心配するフリをすれば、人間は微笑んで頷いた。

「……………なあ、もう一ついいか？」

「？」

俺は、従来の Timeline じゃ打ち切っていた会話を続ける。

「お前さんの姉の Lily のことなんだが……」

「お姉ちゃん？お姉ちゃんがどうかしたの？」

俺の口から Lily のことが出たのが不思議だったのか、人間は首を傾げる。

「……………お前さんのこと、随分溺愛してないか？」

俺の心の中の何処かで引つ掛かっていた疑問を投げかける。すると、

「……………そうだね、してるね」

人間は俺の疑問を肯定し、ポテトを咀嚼して、飲み込む。

「……………お姉ちゃんはね、ぼくが産まれた時からなんだかんだですつと一緒に居てくれるんだ。……………お父さんとお母さんが、死んじゃってからも、ずっと」

人間はそう言いながらフォークをカウンターに置き、頬杖をつく。

「正直ぼくも、なんでこんなに愛してくれるのか、よく分かんない。理由を聞こうとしても、誤魔化して教えてくれないし」

「そうか」

「うん。……でも、ちよつとだけ、分かることがあつてね」

「なんだ？」

俺が訊ねれば、人間は一呼吸置いてから答える。

「……『何か』を、怖がつてるみたいなんだ」

「………怖がつてる？」

「うん」

思わぬ解答に思わず聞き返すと、人間は頷いた。

「その『何か』が何なのか、ぼくにはわかんないけど、そんな気がする」

「………そうか」

「……『怖がつてる』、か。」

Lilyが問答の際に一瞬見せた強い憎悪の籠もった目を思い出し、思案する。

『私はそれが物凄く腹立たしい』

「………『恐れている』、という意味では、案外人間は正しいのかもしれないと、ふと思つた。」

「………おつと、長居しすぎたな」

そうやって話を切り上げ、椅子から降りる。

「まさかこんなに長いことお前さんに引き留められちまうとはな」

「最後の質問は君でしょ？」

苦笑いしながら人間は言う。

「ところで、今持ち合わせがなくなつてな。払つといてくれないか。お代は100000Gだ」

「えっ!？」

「冗談だ」

冗談だと言えば、人間はほっと息をついて胸をなで下ろす。

「grillby、つけといてくれ」

いつも通りそう言つて俺は、Grillbysをあとにした。

46. Waterfall探索①

〔Lily〕

博士と計画について最終調整をし、空間を抜け出す。すると、丁度サンズがショートカットを使ったのか、目の前に現れた。

「うおっ!?……………ああ、なんだ、サンズか……………」

「へへ、驚いたか?」

「そりやね……………」

知っているのと実際やられるのじゃ話が違うしな……………」

ふと、フリスクが居ないことに気づき、辺りを見回す。

「あれ、妹は?」

「……………ああ、すまん、置いてきた」

「おい。……………そこまで遠い距離じゃないから良いけどさ……………」

飄々とした様子で言い放ったサンズを思わずジト目で見ると、

「まあ、待つてれば来るだろうし、ここで大人しく待つてるかな」

そう言うて私はエコーフラワーの隣にリュックを置き、壁に寄りかかる。そして、目

を閉じてこの後の事を思案する。

……確か、次の部屋は滝の裏にチュチュが置いてある部屋があった筈。まずはそこに行つて回収して……あー、滝で思い出したけど水で濡れるな。一応持つてきた大きいビニール袋被つてけば濡れないか……？そもそも、川の深さがどれくらいかにもよるんだよな……ゲームではフリスクの足元ぐらいな感じだったんだけど……どうなるんだ……？

「……お姉ちゃん！」

フリスクの声が聞こえ、目を開ける。すると、フリスクが私を見上げていた。

「おお、お帰りフリスク。デートはどうだった？」

「それ本人がいる前で聞く……？」

私が訊ねると、フリスクは怪訝そうな顔をする。……ごめんて、悪気はなかったんだよ。

「……楽しかったよ」

「ん、そつか。なら良かった」

返答してくれたフリスクの頭をなで、リュックを持つ。

「さてと、行くか」

「うん」

フリスクの横に並び、サンズの前を通りすぎる。……一瞬、彼の目が『監視してるぜ』と言わんばかりに光ったような気がした。

「おお……」

ドドドドドド、と滝の水が流れていく音がする。…結構迫力あんな。

「ボックス嫌いがボックスの説明を書くんだ……」

私が滝に圧巻されている内にフリスクはボックスの隣の看板を読んだらしく、独り言のように呟く。その呟きで我に返った私は、リュックからビニール袋を取り出す。

「…お姉ちゃん、何それ?」

「ん? 見ての通りビニール袋さ。これ被っておけば、水飛沫がかからないでしょ?」

「なるほど……」

私の説明に納得したように頷くフリスク。それを見てから、私はリュックを背負い直し、ビニール袋を頭から被る。……靴とタイツはもうしようがない、諦めよう。

「さて、どっちからいく?」

「んー……下は何もなさそうだし……そのまま行っちゃおう」

「分かった」

フリスクの決定に従い、私は川に足を突っ込む。……あ、案外冷たくない。あと浅い。

「どう?」

「浅いしあんま冷たくないよ、丁度いい感じ」

フリスクに感じたことを話すと、フリスクも恐る恐る川の足を踏み入れる。冷たくないことに安心したのか、ちやぶちやぶと水を蹴って遊びだす。かわいい。

「……………」

ふと、穴が空いている辺りに違和感を感じて見つめると、微妙に色が違うことに気付く。……………此処で合ってたか。よかった。

「フリスク、あそこ、なんかあるみたいだよ?」

「え? 何処?」

フリスクに指差して教えると、じっと見つめてからぼつりと、

「……………穴、かな?」

と、呟いた。

「多分ね。……………行ってみる?」

「うん」

フリスクが頷くのを確認し、私はフリスクの手を引いて、流れてくる岩から守りながら穴の元へと進む。……………そこまで進みにくくはないな。

水の中にいる感触を確かめながら進み、穴の元へと辿り着く。……………あ、やっぱり色が

違う。

「えいつ」

ビニールから腕を出し、滝の中に腕を突っ込む。すると、そこだけ水が勝手に別れて、ぽつかりと空いた穴が姿を見せた。……ビニール、要らなかったな。

「……入るか」

「うん」

フリスクの手を引いたまま、中に入り込む。入ってすぐが地面になっていて、そこで水からあがる。……あー、気持ち悪い感触が……

ビニールを取って、地面におろしたリュックにしまう。……なんか使い時が来るとい
いんだけど。

「……お姉ちゃん」

「ん？どした？」

「これ……」

リュックにビニール袋をしまっている内に探索を終えたらしいフリスクが、古くなって若干色が褪せているチュチュを身につけていた。……あ、ちゃんとズボンは穿いてるよ？

「………とつても似合うしかわいいんだけど、どしたそれ」

「奥に落ちてたよ」

取り敢えず素直な感想を述べてから聞くと、フリスクはゲームでチュチュが落ちていた辺りを指差す。

「そっか……」

……ごめんね、借りるよ

そう心の中で四人目の子に謝り、私はフリスクに笑顔を向ける。

「あとは何にもなさそう？」

「うん」

「じゃあ、行こっか」

再びフリスクの手を引いて、私達は先に進み始めた。

47. アンダインとの邂逅

〔Lily〕

滝の裏の部屋から戻り、反対側の陸地にあがる。

……さて、次は彼女との初邂逅か。

そう思つて、自然と肩に力が入るのを感じた。……思つたよりも私は彼女を警戒しているらしい。

彼女——アンダインは、とても素敵な人、もといモンスターだ。

シャーレンちゃんに歌を教えてあげたり、パピルスに料理を教えてあげたり。友達になれば、豪快な笑顔で笑つてくれる。

……でも、それは友達になればの話だ。

パピルスの仲介で友達になるまでは、彼女は私たちのソウルを必ず狙いにくるだろう。つまり……本気で殺しに来る。

そこで、水から上がったフリスクの手を握る。

……正直に言えば、守りきれぬ自信がない。けど……守らなきゃ。

いざという時は私のソウル差し出せばいいしね、と結論付け、私はフリスクに笑顔を

向ける。

「行くう」

洞窟の中を歩いていくと、急に空気が張りつめる。……ああ、エリア移動したのか。
「……………フリスク、隠れるぞ。音を立てないようにこつそりな」

「……………うん」

そう思いながら、空気が変わったのを感じていたらしいフリスクを急かし、目の前の私の身長より少し高い草の中に、音を立てないように隠れて息を潜める。

ザツ、ザツ、ザツ

しばらく息を潜めていると、崖の上から音がした。……………パピルスの足音だろうか。私は見当をつけた。

「や……………やあ、アンダイン！今日の報告をしにきたぞ……………」

どうやら合っていたらしく、少し震えているパピルスの声が聞こえた。

「えつと……………例の人間達についてだが……………」

そこで、ボソボソと少しハスキーな女性の声が聞こえる。アンダインの声だろうか。……………ゲーム補正がかかってんのか、あまり聞こえない。……………いや、パピルスの声がデカいから聞こえるだけか。結構崖の高さあったしな。

「……………えっ？戦ったのかだつて？……………あ、ああ！もちろんだとも!!」

結論：物理的距離の問題とか内心どうでもいいことを考えていると、言い淀んでいたパピルスが口を開き、話が進む。

「それはもう果敢に……………」

そこでまた、女性らしい声がした。

「……………えっ？捕まえたのかだつて……………？え、ええつと……………」

またパピルスが言い淀む。……………嘘は、吐かないでほしいと、身勝手な願いを思った。

「……………いや」

しばらく黙っていたパピルスが、否定の言葉を口にする。

「頑張ったけど、アンダイン、結局……………失敗、しちゃつて……………」

最後は、小さい声になりながらパピルスが言うと、痺れを切らしたかのように、女性らしい声が何かを言う。

「……………えっ？……………ソウルを自ら取りに行くだつて……………」

絶望が滲んだ声で、パピルスが言った。

「でもアンダイン、そこまでしなくても！何も……………だつて……………」

そこで、ガチャンという金属音がする。……………アンダインがパピルスに向き直ったんだろうか。

「……………わかった。俺様もできる限り協力する。」

パピルスの苦しそうな声がした後、足音が遠ざかっていく。……………庇おうとしてくれた彼の優しさに、少しだけ緊張が解けた。

ガサリ

!!!

隣で草の擦れる音がして、思わず隣を見ると、顔を青ざめさせたフリスクが尻餅をうついていた。

ガチャン、ガチャン

崖の上から射抜くような殺気が飛んでくる。それを、私はフリスクを抱き締めて睨み返した。

……………ガチャン、ガチャン

しばらくして、金属音が遠ざかっていった。……………もう、行っただろうか。

そう判断してフリスクを立ち上がらせ、草むらの中から出て、息をつく。すると、がさがさと草が揺れ、

「よっ……………アンダインのあの目みたか……………?」

凄く興奮した様子の子のモンスターキッド君が現れた。……………いや待って、居たの?マジで心配を感じなかったんだけど。隠密スキルでも持つてるのか君……………

ゲーム通りの行動に思わず心の中でツツコミながら、口を開くモンスターキッド君を見つめる。

「あれって……サイツコーだよな！おまえらすつつつごくうらやましいぜ！どうやったらそんなに気に入ってもらえるんだ……？ハハ」

お前あの射抜くような目線をどうやったら熱視線だと勘違い出来るんだと思わず言いかけるのを飲み込み、口を真一文字にする。……今の私ゲームのフリスクみたいな顔してんだろうな……

「来いよー彼女がワルモノをやつつけるのを見に行こうぜ！」

そう言つて彼は興奮冷めきれぬまま走り出して、顔からスツ転んだ。……おう待て、痛くないのか。思いつき顔からいったぞ。

直ぐ様立ち上がり、転んだのを気にせずに元気に走り去っていったモンスターキッド君を見送り、私は顔を青ざめさせたままのフリスクの目を覗き込む。

「……大丈夫？フリスク。顔、真っ青だよ？」

そう声をかけると、フリスクはふるふると力なく首を横に振った。……大丈夫じゃないらしいな。

「……何がそんなに心配なの？そこまで心配することはないと思うよ？」

「……………だって」

私が疑問をぶつければ、フリスクは小さい声で返答し、私を見た。

「……………また、お姉ちゃんが……………」

……………そこで、私は自分の失態に気付いた。

パピルス戦の最後倒れたのが、フリスク的にはトラウマ案件だったらしいという事に気が付き、私は内心頭を抱えた。

「……………大丈夫だよ、フリスク。今度は上手くやるさ」

「……………本当に？」

「ああ、二度と君の前で倒れたりしないよ。飴とか持つとく」

そう言えば、やっと安心したのか、フリスクの顔色が良くなってくる。……………心配かけちゃったなど、少し後悔した。

「さて、じゃ、行こっか」

「……………あ、ちよつと待って」

そう言つてフリスクはセーブポイントに近寄り、手を伸ばす。しばらくすると、私に手を振つて大丈夫だということを知らせる。

……………私は、密かにこの子を守る決意を抱き、フリスクの手をとった。

48. Waterfall 探索②

〔Lily〕

……次のエリアは、花の橋のところだっけ？

記憶を探り、予想する。確か四つ並べると花が開いて通れるようになるんだっけかな。

そう考えながら歩いてみると、開けた場所に出る。次のエリアに着いたらしい。

「……………四つの橋の種が水の中で一列に並ぶと、一斉に芽吹くだろう……………」
「種？」

私の手を離し、壁にあったヒントをフリスクが読み上げる。

私はそれを横目で見て花が置いてある窪みに入り込む。中には、四つ蕾が固く閉じられていて花が咲いて……………いや、自生して(？)いた。これか。……………結構デカいな、ギリギリ持てるか？

一つ持ち上げて、フリスクの元へと戻る。

「……………それが種なのかな？」

「多分ね。まだ中に三つあったし。……………これ、種一つか蕾のほうか正しいような気が

するけど」

興味を持ったらしいフリスクにそう返し、私は川に花を浮かべ、対岸に流す。花はすーっと水の上を滑っていき、無事対岸に流れ着く。……あと三つか。

「はい、お姉ちゃん」

「ん、ありがと。……かわいい持ち運び方してるね」

「流石に大きくて持てなくて」

「あー、成る程」

私が流している間に持つてきてくれたらしく、フリスクが頭に寄せた花を下ろし、私に手渡す。素直に可愛いといえば、少し嬉しそうにしながらフリスクは私にそう返答した。

受け取った花を流し、持つてきてくれた花をまた受け取って流しを繰り返し、最後の花を浮かべると、固く閉じられていた蕾が開き、花の橋が出来上がる。……うお、綺麗だな。

「わー……綺麗だね……」

「そうだね……行こうか」

「えー……なんか踏むのもつたいない……」

「気持ちは分かる」

私は花を踏むのを渋るフリスクに同意する。……………うん、凄く気持ちは分かるんだけど踏まないと先に進めないんだよな……

「……………うん、行こう」

自分の中で妥協したらしく、フリスクは花を傷付けないようにそつと花の橋を渡っていく。かわいい。私も後に続いて橋を渡る。……………うん、沈まないか心配だったけど大丈夫そうだ。

私は内心安堵しながら、次のエリアに移動した。

えつと次のエリアは……………あー、確か先に進もうとするとパピルスから電話がかかってくるところだっけ。

そう考えながら橋を渡って奥へと行こうとする。すると、

ザバツ

「!?!」

突如前にあつた川から水飛沫があがり、周りが白黒に変わる。私は顔をあげ、水中から現れた敵を見る。そして、

*Aaron Aaronが筋肉を見せつけながら現れた flexes in!

うわあ、ネキの次に会いたくなかった奴が来たよ……………と思ひながら私は顔をしかめ

る。なんか個人的に苦手なのである。……あ、嫌いではないよ？ただ汗臭いのがちよつとな……

「やあ、可愛らしいお嬢さんたち？」

「お、おう……よお……」

バチーンとウインクをしながらボディビルダーのようなポーズを決めるアロン。……いや、フリスクが可愛いのは分かるけど、私を『可愛い』で括らないでほしい。恥ずかしいしどうせなら『かつこいい』の方が個人的には嬉しいです。

内心に抗議の思いを抱きつつ、私はフリスクの前に出てカッターと玩具のナイフを構える。

* A A R O N — A T K 24 D E F 12

* — T h i s s e a h o r s e h a s a l o t o f H P (H o r s e p o w e r) . 《このシー・ホースはHP（ホース・パワー）が高い》

* — A l l o f h i s a t t a c k s a r e h a r d e r t o d o d g e a t t h e b o t t o m o f t h e b o x . 《彼の攻撃は箱の底へ行くほど避けにくくなる》

「ホース・パワーってなにさ」

「知りたいのかい？」

「いえ結構です」

『ACT』が押されて流れたアナウンスに思わずツツコミを入れると、アーロンが反応してにっこりと笑った。私は直ぐ様断りを入れ、カッターを構え直す。

『いくらでも調べてくれよ』

「だが断る」

水に尻尾を打ち付け、水の弾幕が飛んでくる。それをフリスクの腕を引いて避ける。……汗も混じってるからかくせえ。

思わず顔をしかめ、アナウンスを聞き流して思考を別のものに切り替えようとする。ふと、フリスクが私の影から出て、アーロンに筋肉を見せるように腕を曲げたのを見て、

私は玩具のナイフを構える。……くせえ。

*You あなたは腕を曲げ力を入れた flex.

*Aaron A flexes r twice n as も hard た.

*ATTACK お increases 互 for の you 攻 two 撃 力 が 上 が た.

汗の匂いにむせそうになっていると、アナウンスが流れた。……フリスクは攻撃力上がっても意味ないんちやう……？

『筋肉対決？よし、もつと来い』

アーロンは腕の弾幕を召喚し、発射する。私はまたフリスクを引き寄せて回避する。

……なんで弾幕も汗臭いんだ……

*Aaron is ready for your next flex.

ワールドに充満する汗臭さそろそろ頭痛がし始めると、アナウンズが流れる。

……あ、ホントだ。超見てる。こっち見んな。

『ACT』を押し、フリスクはまた力こぶを作る。

*You flex harder.

*Aaron flexes three times as hard.

*ATTACK increases for you too.

『いいね！負けてられないよ』

私はまだしもフリスクは攻撃力が上がっても意味ないよね、と疑問に思いながら、私はフリスクを抱えて飛んできた汗と水の弾幕を避ける。……なんでナイフ使わないの

かって？汗の匂いがつくからだよ。

*Aaron is ready for your next flex.

……ああ、やっと終わりかと安堵しながら、私はカッターとナイフをしまふ。

ピツと音がして、フリスクはまた力こぶを作る。

*You flex.

あなたは力こぶを作った。

*Aaron flexes very hard……

アナウンス通り、アロンが思いつきり腕に力を込めると……

*He flexes himself out of the room!

すいーっとアロンは上昇していった。……もう突っ込まないぞ。

*YOU WON!

あなたは勝利した

*You earned OXP and 30 gold.

そのアナウンスが流れると、周りに色が戻ってくる。……あー、なんかどつと疲れ

た……

「フリスク、怪我不い?」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんも大丈夫そうだね」

一応フリスクに怪我の有無を確認しておく。……うん、大丈夫そうだ。

前に向き直り、今度こそ橋を渡る。渡り切ったタイミングで、私は水辺の向こうに棧

橋がある事に気付いた。……そういえば、サンズのキッシュが手に入るのって此処

だったか。忘れてた。

「フリスク、あそこ、橋があるよ」

「え?どこ?」

棧橋を指差して教えれば、フリスクは小さくほんとだ、と呟く。

「行ってみる?」

そう聞けば、フリスクは少し考えてから頷いた。それを見て、私は橋の花を回収して水の上に浮かべて流す。……えっと、ここから並べれば良かったんだっけ。

フリスクの助けを借りながら花を一行に並べると、花が開いて橋が出来上がった。その上をまた傷付けないように渡り、栈橋の上に降り立つ。そして、空いていた空間を覗き込んだ。

「……………? あれ、ベンチとエコーフラワーだ……………」

フリスクはエコーフラワーを先に調べに行く。その間に、私はベンチの下を覗き込んでみる。すると、そこには皿の上にパイのようなものが一切れ置いてあった。……………やっぱりあったよ、キツシユ……………

「……………なんでこんな所にキツシユがあんだよ……………」

「え……………?」

皿ごとキツシユをベンチの下から引つ張り出し、腐っていないか匂いを嗅いでみる。……………別段変わった匂いはしないけど……………これフリスクに食わせて大丈夫か……………?

「……………それ、パピルスが言ってたサンズが作ってたキツシユかなあ?」

「そんな話してたのか。うーん、どうだろう?」

デートイベ中の会話を思い出したらしいフリスクが疑問を呟いた。それに私は首を

傾げておいた。……まだ『Player』側の人間だった時は、扉の向こうのご婦人トリエルさんに教わったバタースコッチシナモンパイ作ってたんじゃないかと思ってたけど、どうなんだろう……？

私はリュックをベンチに置いて、パーカーのポケットからカッターを出し、刃を押し出す。

「何するの？」

「ちよつと試食」

「え!？」

カッターでキツシユの先に切れ目を入れ、味見してみる。……普通に美味しい。味とかには問題はなさそう。腐ってないみたいで安心した。……やっぱり、食べ物にも魔法がかかっているんだろうか。……それとも使っているものが魔法で出来てるから腐ってないのか……？

考察を頭の中ですっていると、心配そうにフリスクが見上げてくる。

「……………大丈夫……？」

「うん、問題なさそう。普通に美味しいけど、セーフかどうかわからないからフリスクは食べないでね」

「分かった」

一応フリスクにストツプをかけておく。……いや、ゲームだった時は結構回復するアイテムだったし、いざって時は食べさせるけど。

リュックから大きなビニール袋を取りだし、余分な部分を切る。小さくしたビニール袋にキツシユを入れて口をさっきの切り離れたビニールで縛り、リュックの中に入れる。……結構アイテムがたまってきたな、今度ボックス見かけたらなんか置いていくか。

リュックを背負い直し(またちよつと重くなつた)、栈橋と花の橋を渡つてエリアを移動する。すると、フリスクは壁にあるベルに近づいていく。

「……………これ、何だろう?」

「さあ……………何だろうねこれ」

フリスクがベルに触れると、ちりん、という軽やかな音がする。……………確かこの花を復活させるためのベルだったっけ?

ベルから離れて対岸に渡るためにまた橋をかけ、次のエリアに移動しようとすると、プルルル……………

着信音が流れた。……………来たか、電話。

フリスクは直ぐに携帯をポケットから引つ張り出し、電話に出る。

『もしもし……こちらパピルス!!』

電話の向こうから突如として大きな声が出て驚いたのか、フリスクが携帯を耳から離す。……………パピルス、私にも聞こえてんぞ。どんだけデカイ声で話してんだ。

フリスクが電話を耳に近付け、口を動かす。

『俺様がどうやってこの番号を知ったか……………？そりや簡単だ!!お前の番号に繋がるまで総当たりしたまでだ!!!ニエーツヘツヘツヘツ!!!』

根気良すぎだろお前と言いかけてふと思う。……………なんでさつき電話した番号をメモらなかつたのかと。あとあの間違い電話の歌歌つたの……………？

『……………その……………今お前たち、どんな服を着てるんだ?』

心の中で突っ込みを入れてみると、先程の明るい声から一転して、とても辛そうな声でパピルスはフリスクに本題を振る。質問の意図が分からなかつたのか、フリスクは首を傾げて口を動かす。

『えつと……………友達に聞かれたんだ』

パピルスの返答に、フリスクは納得したように頷いた。

『それで……………なんでも、お前が身につけているとか、バンダナを。本当に身につけているのか?バンダナを?』

彼らしくないしどろもどろな喋り方で、パピルスはフリスクにそう聞いた。……………何故パピルスがそんな質問をしたのか察したらしく、フリスクは少し目を見開いた。そし

て、少し考えてから、フリスクは頷いた。

『着けてるんだな、バンダナを……大きい人間は、黒いリュックを背負っているんだよな?』

フリスクの容姿について聞き終わると、私のことに話が移る。フリスクが心配そうに私を見上げる。……その質問に私は、迷わず首を縦に振った。それを見てフリスクは少し悲しそうな顔をしてから、電話に戻って、また頷いた。

『……そうか……わかった!!!じゃあまたな!』

ガチャリ、と電話が切れ、フリスクは携帯をポケットにしまい込む。そして、そのまま歩き出そうとする。

「……言って、よかったの?バンダナのこと」

疑問に思った私は、フリスクにそう聞いた。すると、フリスクは頷いた。

「だって、友達に嘘ついちゃいけないでしょ?」

まるで至極当たり前の事を言うかのように言われたその言葉に、私は一瞬目が丸くなる。……それと同時に、フリスクがいい子に育ってくれて、凄く安心した。

「……そうだね」

「うん。……行こう、お姉ちゃん!」

私が同意すると、フリスクは嬉しそうに笑って私の手を取り、先へと歩き始めた。

49. Waterfall探索③

[Lily]

「……………次は、願いの間だったっけ？」

「記憶を探り、そう仮定する。」

「……………!!!お姉ちゃん、天井みて!!」

「?」

ふと、前を歩いていたフリスクが大きな声をあげる。指示に従って天井を見ると、……………うわぁ……………」

「思わず感嘆の声が出る。天井には、地上の星と見紛う程に美しい星が出ていた。」

「綺麗だねえ……………」

「ね……………」

しばらく、二人揃って天井を見上げる。……………あ、駄目だ、首がいてえ。フリスクより先に首を元に戻した。」

「……………首いたい……………」

「大丈夫か……………」

流石に辛くなったらしく、そう呟いてフリスクも首を元に戻す。次に、丁度目に映ったらしい壁にあつた看板に近付いていく。

「……願いの間、だつて。お願い事すれば叶うのかな?」

「どうだろうね……お願い事にもよるけど、その人次第じゃないかな?」

「そっか」

願い事が叶うか叶わないかはその人の努力次第だしな。

そう思いながらフリスクに返答すれば、エコーフラワーに近付いていった。

『遠い昔、モンスターは夜空のお星さまに願い事を囁いていたのよ。心からお願ひすれば、きつとホントに叶うつてね。……今はもう、あの天井にきらめく石たちにお願ひするしかないのだけど……』

姉妹か何かの会話だろうか、子供に語るような女性の声のエコーフラワーから聞こえた。……なんでだろうか、一瞬母さんを思い出した。

少しセンチメンタルになっていると、フリスクは次のエコーフラワーに近付いていく。私も後を追ってエコーフラワーに近付く。

『みんなの願ひが間違つてるわけない! きつと王様が証明してくれるよ』

さっきの姉妹の会話の続きなのだろうか、子供の声が聞こえる。……確かに、地上に出たい、という願ひは間違つてはいないと思うけどね……

フリスクが調べたエコーフラワーを見て複雑な気持ちになる。

……ガシャ、ガシャ

「……………」

ふと、背後から音がすることに気付いた。……あ、これまさか。

そう思つて振り向くと、周りが白黒に切り替わる。

*W o s h u a がぎこちない足取りでやってきた
W o s h u a s h u f f l e s u p .

ああ、やつぱりウオシユアか。私は振り向いた先に W o s h u a 一体だけが居て安心した。……アーンが一緒になるときがあるから油断ならないんだよ……

内心安堵しながら、私はカッターとオモチャのナイフを構える。……あれ、確かウオシユアの見逃す条件つて回復弾幕を取ればいいんだっけ？

見逃す条件を思い出しながら二つとも構えると、背後でピツという音がした。

* W O S H U A | A T K 18 D E F 5

*— T h i s h u m b l e g e r m o p h o b e s e e k s t o c l e a n s e t h e w h o l e w o r l d .
《この卑屈な潔癖症は世界を浄化する方

法を探している》

……『世界の浄化』と聞いてノアの方舟しか思い浮かばなかったんだけど……

一瞬思い浮かんだ恐ろしい事態をウオシユアの設定を思い出してやるわけねーだろ

と直ぐ様打ち消す。皆を殺したら塵になって掃除が面倒みたいなこと言ってたはずだし。……皆を殺したくない的な意味もあるんだろうけどね。ツンデレかわいい。

『ピヨピヨ』

『キレイなさえずり』

ウオシユアのドラム缶の中のひよこ（だろうか？）が鳴いたことに気付き、思考を切り替える。確かにかわいいけどな。……つかウオシユアの声がかわいいな。

ウオシユアは魔法陣を展開し、その魔法陣飛んできた水の弾幕を避けていく。手に水が一発被弾し、握っていたナイフを弾き飛ばされた。

「いつて……」

……水が圧縮されて発射しているらしく、結構痛い。飴舐めなきやな。

*Smells like detergent.

……え、する？

アノウンスに疑問を持ち、匂いを嗅いでみる。……あ、ホントだ。石鹸のいい匂いがするわ。

「いい匂いだね」

「……ありがとう」

思わず感想を溢すと、ウオシユアが照れたように目を逸らしながらお礼を言った。

……え、やだ、きゅんときた。かわいいなおい。

ウオシユアのかわいさに内心悶えていると、背後でピツと音がした。

* You ask Woshua to clean you.
あなたは Washua に洗ってほしいと頼んだ。

* It hops around excitedly.
嬉しめて飛んで跳ねて。

アナウンス通り、ウオシユアはびよんびよん嬉しそうに飛び跳ねる。かわいい。

ふと、ウオシユアの笑顔を見て思いつ出した。……そう言えばウオシユアって確か使われてない立ち絵なかったっけ。それそっくりだな。

『ジョジョ』

『グリーンでグリーンに』

ウオシユアの笑顔に荒んだ心を癒やされると、また弾幕が飛んでくる。私は弾幕をカッターで受け止め、その後に飛んできた緑色の弾幕を掴んだ。

「……あ、治った」

緑色の水が手を伝って先程被弾して痣になっていた傷に触れる。すると、傷がみるみるうちに治ってしまった。……魔法って凄い。

*
 Woshua wonders if tears are sanitary.
 Washua は涙が衛生的かどうかで悩んでいる。

先程弾き飛ばされたナイフを拾いに移動しながらアナウンスに耳を傾ける。……

涙の成分って血も入ってるらしいし、衛生的かどうかって言われたら……どうなんだ
……？

私もウオシユアと一緒に悩みそうになっていると、フリスクが『ACT』を押しして名前が黄色になったのを確認したらしく、ピツと背後で音がした。

*YOU あなたは勝利した WON!

*You と earned 25 XP を and 25 gold た.

周りに色が戻ってくるのを確認し、フリスクは私に近付いてくる。

「お姉ちゃん！怪我、大丈夫……？」

「うん、大丈夫だよ。さっきの緑色の水で治ったから」

心配そうに私を見上げるフリスクの頭をなで、安心させる。その言葉に安堵したのか、フリスクはほっと息をついた。

「ならいいんだけど……無理、しないでね？」

「分かってるよ、大丈夫」

念を押すように言われた言葉に頷くと、フリスクは次のエコーフラワーに近付いていった。……まだこれくらい無理の範疇じゃないしね

『さあ！お願いしましよ！』

フリスクがエコーフラワーを調べると、明るいトーンの女性の声が聞こえる。そし

て、次のエコーフラワーからは……

『いつか本物のお星さまをおねえちゃんともれますように……』

……未来を信じる、無垢な子供の願い事がエコーフラワーに録音されていた。

……ちよつと、複雑だなあ。

「あれ、出口がない……？」

奥の道になっているはずの所を覗き見てフリスクがそう言った。……あそこの壁をぶつ壊せばなんとかなるんだけどね。

「んー……この部屋にヒントがあるはずだし、調べてみようよ」

「……そうだね」

エコーフラワーを横目に流し見て、私は望遠鏡を覗き込んでいるフリスクの後ろにあるエコーフラワーに近付く。

『あーあ……星占い、また先週と同じ結果だ……』

そりゃ星が変わわないんだからそうだろうよ……

「お姉ちゃん!!ちよつと来て!!」

思わず心の中でツツコミを入れてみると、フリスクが声をかけてきた。

「ん?何かあった?」

「これ、覗いてみて!」

手招きして呼ぶフリスクの指示のままに、少し腰を落として望遠鏡を覗き込む。その途端、満天の星空が広がった。……………うお、綺麗だな。

「左上の所を見てみて」

「左上？」

望遠鏡を動かし、左上の方を見てみる。そこには、ゲーム通り『壁を調べろ』と書いてあった。……………こんなところにも自動翻訳かかってんのか。

「…………『壁を調べろ』？」

「そうなんだよ。どこの壁だろう…………？」

そういったフリスクはペタペタと壁を叩いて調べだす。……………これって確かあそこの隠し扉のやつだよ……………？

「……………」

私は壁がある奥の道へと足を動かす。

「……………？ お姉ちゃん？」

「危ないから下がってて」

私の行動に疑問を持ったらしいフリスクが近付いて来るのを制し、私は壁に蹴りを一発いれた。

ガコン!!

大きな音がして、仕掛けが作動する。そして、そこには次のエリアに続く道が出来ていた。

「お姉ちゃん凄い!!」

先程のウオシユアみたいにぴよんぴよんと飛び跳ねるフリスク。かわいすぎか。

「このくらいなんてことはないよ。……さ、行こうか」

私を尊敬の目で見上げるフリスクの頭を撫で、私はフリスクの前に立って歩き出した。

50. Waterfall探索④

〔Lily〕

通路を抜けると、棧橋のかかった部屋に出る。……ああ、ここは歴史が書いてあるところか。記憶を探ってそう思い出した。

「……？ お姉ちゃん、壁になんか書いてあるよう？」

フリスクが何か書かれている事に気付き、近付いていく。私も後についてフリスクの後ろから覗き込む。……うっわ、予想以上に風化しちやって掠れてんな。なんとか読めるレベルだぞこれ。

「大分古いやつだなこの石板……」

「でも、所々は読めそうだよ？」

そう言つてフリスクが、読める所を探してキョロキョロ視線を動かし、そして「……『人間と、モンスター』の戦争』……？」

一部、風化せずに残っていた文字を読み上げる。……その顔は、驚愕に染まっていた。「……どうも明るい内容じゃなさそうだね。大丈夫か、フリスク。読める？」

フリスクに確認を取る。私の問いにフリスクは……ちやんと、頷いた。

「……大丈夫、読めるよ」

「そつか。……じゃあ、続き読もうか」

二人で次の石板の前まで移動して、石板に目を通す。……あ、今度は割り綺麗に残ってる。

『なぜ人間は戦いをしかけて来たか？ 恐れるものなど、何も無いはずなのに。』

人間は恐ろしく強い。モンスターのほとんどが殺されてしまった……』

……やっぱりゲーム通り、先に仕掛けて来たのは人間側だったか。石板を読みながら、思案する。

モンスター側から仕掛けて、石板には人間側がやったって書いたという可能性もなきにしもあらずだ。けど、オープニングで出てきたモンスター側の王の影……あれは十中八九アズゴア王の筈。例えばアズゴア王の父親かどちらかだったとしても、彼の性格を交えて考えると、人間との戦いは極力避けるようにしているはずだろう。よってこの可能性は低い。

そう考えながら、私は次の文に目を通す。

『犠牲になったソウルの総計に等しいくらい人間のソウルは強い……』

……。

その文字を記憶に再び刻み込みながら、次の石板の前に移動する。……また綺麗に

残ってるな。

『しかし人間にも弱点がある。皮肉なことに、そのソウルの強さだ。人間のソウルはあまりにも強く、肉体が死んでも消滅しないのだ。』

ソウルの残留……人間で言う所謂『死後の念』、もしくは『残留思念』という物だろうか、と検討をつける。……そういえば何故、この石板にはソウルが強い事を知っているのだろう。ふと、疑問が浮かんだ。

……もしかして、博士か？

とある推測が思い浮かんだ。……モンスターの一人が人間のソウルを持って帰り、博士が研究したのだとしたら……一応合点がいく。

そう推測しながら、次の石板の前に移動する。

『もしモンスターが人間を倒せたら、そのソウルを奪うことができる。』

人間のソウルを得たモンスター……それは想像を絶する力を得るだろう。』

その次の石板には、奇妙なモンスターの絵が描かれていた。……どこか、このルート^{Neutral}のボスであるオメガフラウイーの姿に似たような姿だった。……そりゃ、心もざわつくわな。

……アズリエル君のように、だろうか。

石板に書かれていた内容で、ゲームだった時の彼を思い出す。……やっぱり、Cha

r aちゃんと彼は此処に來た事があるのだろうか。

もしC h a r aちゃんとアズリエル君がニューホームの方で暮らしていたとしたら、此処にも來れるはず。そして、この石板を見て、あの計画殺を企てたのだとしたら。……納得が、いく。

「……………人間が、モンスターを地下に閉じ込めたんだね」

そんな推測をしていると、フリスクがふと、ぽつりと呟く。

「……………そうだね」

「……………納得したよ。ぼく達を狙ってくるのは、そういう理由もあつたんだね」

罪悪感を感じているような口ぶりで、フリスクは言う。

「……………でも、おかしいと思うけどね、その理由は」

「……………どうして？」

私がそう返答すれば、フリスクは驚いたように私を見る。私はフリスクに、持論を話す。

「確かに私達は『人間』だ。だけどね、『その時戦った人間』ではないでしょ？ 私達がモンスターを殺したわけでも、傷付けたわけでもない。だから、おかしいな、って私は思うのよ」

「……………」

「ま、だからと言ってモンスターを傷付けちゃダメだけどね」

「え?」

「何でだと思おう?」

付け加えれば、フリスクはまた驚いたような声をあげる。それに重ねて問えば、考えるように腕を組んだ。

「……………生きている、から?」

「うーん、まあそれも間違いないとは思うけどね!」

しばらくした後に、フリスクがそう答えた。流石大天使フリスク様である。まあ、私の考えとはちつと違うけど。

「……………私は、『会話が出来るから』だと思おうよ」

「……………会話?」

フリスクが不思議そうに首を傾げる。

「だって、『モンスター』は『モンスター』でも、ちゃんと会話が出来るでしょ? だったら、解り合うことも出来るはずじゃないか。だから傷付ける理由にはならないよ」

そう言えば、フリスクはまた黙り込む。

「……………結局は、この戦争が起きてしまったのは、『会話不足』か、『解り合おうとする意志』がなかったから」だったんじゃないかな。……………だからね、フリスク。解り合おうとす

る事を諦めちや駄目だよ。……どうしても戦わないといけない、もしくは逃げないといけないって時は、最後に慈悲「MERCY」を与えればすればいい。いいね？」

私が考えている結論を言った後に、そう念を押すように言えば、フリスクは私の目を見て力強く頷いた。

「よし、じゃ、行こうか」

フリスクが頷いたのを見て、私は先に進む。……あー、この板か……

「フリスク、先に乗って？」

「うん」

私が先に乗るよう促すと、フリスクは頷いて板に乗る。

すると、すーっと水の上を滑ってあっという間に対岸についた。……はええな。

フリスクが対岸に降りて、戻って来た板に乗る。

「うおっ……」

すいーっと、板に乗って水の上を滑る。動き出した板に驚いて水に落ちそうになるのをなんとか耐え、バランスを保つ。……立ってるのに結構バランスいるなこれ。

なんとかバランスを保って対岸にまで辿り着き、板から降りる。すると、フリスクが駆け寄ってきた。

「お姉ちゃん板から落ちそうになってなかった？大丈夫？」

「大丈夫」

心配して駆け寄ってきてくれた妹の優しさに感動しながら、私は先に進んだ。

51. 逃走

〔Lily〕

次のエリアに出て、いきなり張り詰めた空気になった事に気付き、私は気を引き締める。

……………このエリアでは、崖の上からアンダインが槍を投げてくるはず。しかも、被弾したらほとんど避けられずにゴツソリHP持つてかれるという鬼畜仕様である。

「……………お姉ちゃん……………」

「ん？」

「なんか……………怖い……………」

空気が変わった事に気付いたらしいフリスクが不安そうな顔をする。……………私はフリスクの手を繋ぎ、笑いかける。

「大丈夫だよ、私が守るから。ね？」

「……………うん」

私がそう言えば、フリスクは小さく頷き、私の手を握り返す。……………その行動に、私はこの子を守る決意を抱いた。

そのまま手を繋いで橋を渡っていく。しばらく進んでいくと、

ヒュンツ

頭上で、何かが飛来してくる音がした。

「ツ!! フリスク!!」

「え!？」

槍が飛んでくる音だと判断し、咄嗟にフリスクの手を引いて後ろに下がる。すると、ドンツ

大きな音を立てて、淡く発光する水色の槍がさつきまで居た場所の少し先に突き刺さった。……あと少しでも進んでいたら串刺しになっていたのかと想像して、ぞつとした。

そして、槍が投げられた崖の上を見ると、鎧姿の騎士が此方を見下ろし、槍を召喚していた。

「逃げるぞ!!!」

「うん!!」

フリスクに声をかけ、フリスクを先頭にして走り出す。その間にも、槍は飛来し続ける。

ヒュンツ ヒュンツ

雨のように飛来する槍を避け、長い栈橋を走る。走る。走る。息が切れる事を気にしている時間はない。ただ、逃げる為に走る。

「……あつ!!」

その途中、栈橋の板が古くなって欠けている所があつたらしく、窪みに躓いたフリスクが転倒する。

「フリスク!!」

「いった……」

私がフリスクに駆け寄ると周りが白黒に切り替わった。フリスクが転んだ事を好機と見たのか、アンダインは大量の槍を召喚し、飛ばす。

私はフリスクを背に庇い、カッターとナイフを取り出して飛んできた槍を受け流す。

シュツ

「……………!!!」

一本、受け流しきれずに槍が左肩を掠めていった。やはり先端が鋭利なせいか、掠めただけでもかなり痛い。歯を食い縛り、痛みを耐える。血が、掠めた箇所を起点にパーカーに広がっていく。充滿する血の匂いに思わず顔をしかめた。……………いつてえ。直撃しなかっただけマシだけどさ。

「お姉ちゃん!!!」

背後から悲鳴のようなフリスクの声が聞こえた。

「……大丈夫だよ。だから、立って」

振り向いて笑いながらそう言えば、フリスクは顔を強張らせて、立ち上がった。

「走るぞ」

「……………うん」

フリスクと一緒に、また槍の雨を避けながら走り出す。走る毎に肩に衝撃がきて呻き声をあげそうになるのを堪えて、私達は走った。

しばらく走ると、ようやく背の高い草原が見えてくる。……ああ、ようやくか。

「フリスク、隠れるぞ!!!」

そう言ってフリスクと一緒に草原の中に身を潜め、息を殺す。………しばらくそのままじっとしていると、

ガチャリ ガチャリ

金属の擦れる音が

ガサ ガサ ガサ

草を掻き分けて近付いてくる。

「……………」

私は震えるフリスクを右手で抱き締める。……………こんな所で、この子を死なせてたまるか。

ガサリ

音が、すぐ近くで止まった。そして、

ガサッ

……………
銀の籠手がついた腕が、すぐ横に降り下ろされた。そして、ゆっくり引き上げられ

………その手の中にはなかなか変な顔をしたモンスターキッド君がぶら下がって
いた。……いつから居たんだ、君………

妙な沈黙が流れ、アンダインはしばらくモンスターキッド君と見つめ合った後、そつ
と地面に彼を降ろし、去っていった。………どうやら危機は去ったみたいだと判断し、
殺していた息を深くついた。

「……………大丈夫そうだよ、フリスク。出ようか」

「……………うん」

フリスクに声をかけ、草原から出る。すると、後に続くように興奮した様子のモンスターキッド君が草原から出てきた。

「よっ……………今の見た!?!アンダーンがおいらを……………触ってくれた!」

どっちかかって言ったら『間違えて捕まった』の方が正しいけどな……………

モンスターキッド君の発言に心の中でツツコミを入れておく。

「もう二度とぜったい顔を洗えないね……………!」

「ウオシユアに嫌われんぞお前」

思わず口が滑ってツツコミを入れてしまう。流石にそれは汚えよ。……………というか、

普段どうやって顔洗ってんだ君……………

「なあ、オマエたちは運が悪かったな。もうちよつと左に立ってれば良かったのにな

……………!」

そんな事になってたら私死ぬんですけど……………

思わず遠い目になりながら心の中でツツコミを入れる。……………いや、真面目な話、本当

に助かってよかったよ、うん。

「よっ、くよくよすんな、また会えるって!」

まあそりゃ狙われてる訳だしな……………とモンスターキッド君の元氣付けるような言

葉に心の中で同意しておく。

それだけ言うと、モンスターキッド君は走りだし、また顔から派手にすつ転ぶ。そして立ち上がり、ダッシュで奥へと進んでいった。……これで顔洗わなかったら結構汚いと思うんだけど……

「…………お姉ちゃん、大丈夫…?」

モンスターキッド君を見送っていると、フリスクが心配そうに声をかけてくる。

「大丈夫だよ。掠り傷だしね」

「でも……」

顔を伏せて言い淀むフリスクの顔を見て、私はふと気付く。……この子、もしかして自分のせいだとか思っていないか?

「…………フリスクの所為じゃないよ?」

そう言ってみれば、フリスクはピクリと反応する。……ああ、やつぱりか。

「この怪我はフリスクの所為じゃないからね? 受け流しきれなかった私の責任だから、気にしないこと」

「え、で、でも……」

まだ言い淀むフリスクに、私は内心頭を抱えながら、リュックを降ろしてフリスクに渡す。

「……じゃあさ、左肩痛いから飴の包み剥いてよ」

笑ってそう言えば、フリスクは驚いたような顔をして私を見上げ、それから、リュックを受け取って飴を引っ張り出す。

ピリピリ

「……はい、どうぞ」

「ありがとう」

包みを剥いて、フリスクが私に飴を差し出す。私はそれを右手で受け取り、口の中に放り込んで噛み砕く。甘い味が口の中に広がると共に、左肩の痛みが引いていった。左肩を回し、痛みがないか確認してみる。……うん、大丈夫そうだ。

「……もう、大丈夫?」

「うん、もう痛くないよ。だからフリスクも気にしないこと。いいね?」

「……うん」

念を押すように言えば、安心したような顔でフリスクは頷く。フリスクの頭を撫で、私は渡されたリュックを背負い直す。

「いっつか」

フリスクの手を握り、私達は歩き出した。

52. Waterfall探索⑤

〔Lily〕

フリスクと一緒に次のエリアに進む。……ここセーブ部屋だったっけ。

此処が何の部屋か思いだし、左に曲がって机の上に置いてあるクリスタルと化したチーズ、壁に空いた小さな穴、そしてエコーフラワーを見る。……ネズミの穴、此処だったかと思うとともに、やっぱり、この地下世界の食べ物って魔法で出来ているのかと疑問を抱いた。

「……凄い、チーズからクリスタルが出てる……」

驚いたような声でフリスクは言いながらクリスタルをつつく。

「本来チーズからクリスタルなんて出来るはずないんだけどナー」

そうフリスクに返ししながら、私はリュックからチーズを取りだし、カッターで今まであげて来た分と同じぐらいの大きさにカットする。そして、それを穴の前にそつと置き、カッターとチーズをしまう。

『チュー』

フリスクがエコーフラワーを調べたと同時に、エコーフラワーに録音された声の主で

あろうネズミが穴から顔を出し、チーズの匂いを嗅ぐ。……そして、危険がないと判断したのか、こちらを見て一礼すると、チーズを持って穴の中に引っ込んだ。

「ネズミさん、受け取ってくれたね」

「そうだね」

フリスクは嬉しそうにそう言いながら、光に手を伸ばして、触れる。そして空中に手を彷徨わせると、セーブが終わったらしく、私に向かって振り向いた。

「行こう、お姉ちゃん」

「うん」

フリスクの呼び掛けに頷き、私達はまた進みだした。

次のエリアは……ああ、道か。

道の先にボックスとモンスターの影が見えたのを切っ掛けに、私は此処が何の部屋だったか思い出した。……サンズの望遠鏡って確か……

「望遠鏡の商売を始めようかと考えてる」

なんだったかと思考を巡らせていると、フリスクがサンズに話しかけたらしく、サンズの声が聞こえた。それに顔をあげ、私もサンズを見て、それから望遠鏡を見る。……うお、結構古い型の望遠鏡だな。アンティークマニアとかに高く売れそう。

「この特別高価な望遠鏡はいつもなら使用料50000ゴールド……」

「待て待て高すぎんだろ」

サンズが言った値段に思わずツツコミを入れる。いくら歴史的に価値がありそうな物だとしても誰が使うんだそんなもの。

「なんだが……お前たちとは『知り合い』だからタダでいいぜ」

……友達とは言ってくれないのな。

サンズが言った一言に少し悲しくなる。まあ、人間不信そうだし、言ってくれないのは分かってたけど、せめてフリスクとは友達になってほしかったな。

「お姉ちゃん、見てみてもいい？」

「うん、サンズもいって言ってるし、タダより高いものはないしね」

望遠鏡に興味を持ったらしいフリスクが私に聞く。それに頷くと、フリスクは嬉しそうにしながら望遠鏡を覗く。私はそれを見ながら、リュックを降ろしてボックスを開ける。……あ、リボンあった。

リボンがあるのを確認し、それからリュックにあったアイテムを移していく。……うーん、どうしようか。取り敢えず飴はポケットに入っすぐ取り出せるし除外か……あ、バタースコッチシナモンパイは置いといた方がいい……でも回復量がなあ……

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

ボックスとリュックをにらめっこしていると、フリスクから声がかかる。

「ん？どうした……ふっ」

振り返って思わず吹き出した。ゲームの時と同じように、目の辺りに丸い印がついていたからだ。

「……………どうしたよ、目のそれ」

「？ なんかついてる？」

どうやら気がついていなかったらしく、フリスクは不思議そうに目の周りを触る。そして指に塗料がついたのを見て、サンズに向かって振り返った。

「お前か」

「そうだ俺だ」

一応追及すると、サンズは頷いた。潔いなおい。

「はあ……………フリスク、目、閉じてて。動かないでね」

「うん」

ハンカチを取りだし、フリスクの目元の塗料を拭いながらサンズに聞く。

「目に接する辺りには塗ってないよね？」

「安心しろ、塗ってないさ」

「良かった」

ゲームだった時はなんとも思わなかったけど、現実で考えたら下手したら失明だからな、それ。

「よし、取れたよ」

「ありがとう」

目元の塗料を綺麗に拭い去り、ハンカチを畳む。……うお、もうちよつと赤黒かったら血に見えるぞこれ。

余計な事を考えつつ、ハンカチをしまい、いくつかボックスの中にアイテムを移して軽くなったリュックを背負い直す。……あ、軽い。

「ここお店らしいんだ、行ってみようよ」

サンズにでも聞いたのか、フリスクがガーソンさんの店がある部屋を指差す。……あ、違う、ここガーソンさんじゃないわ。ナイスクリームさんや。

ふと、思い違いをしていた事に気付いた。……ヤベエ、五番目の子の装備のことしか考えてなかった。お金足りるか……？

「あー、そうだね、行ってみようか」

……まあ、フリスクがいききたいって思ってるなら、いつか。

そう思ってる私は頷いた。そして、サンズに手を振る。

「じゃあね、サンズ」

「……………ああ、じゃあな」

一瞬眼孔が消えた気がするが、サングラスは手を振り返してくれた。

53. Waterfall探索⑥

〔Lily〕

ナイスクリームさんに会ってまた一本アイスを買ひ、元の道に戻ってくる。……さて、どこから行こうか。次のエリア広いんだよな……

私がアイス片手に思案していると、フリスクが立っていたかざんちゃんに話しかけにいく。

「星ってなに？」

可愛い声でゲーム通りの台詞が口にされる。

「さわれるの？ たべられるの？ ころせるの？」

そして、最後にかざんちゃんはフリスクをじつと見て、

「きみは星なの？」

と、純粹な瞳で訊ねた。

「………違うよ。この子は、星じゃない」

私はフリスクの傍に行つて、かざんちゃんに笑いながらそう返した。

「………ふうん。じゃあ、きみは？」

「私？ 私も違うよ」

「そっか」

私が笑顔のまま答えれば、かざんちゃんも納得したように頷き、口を閉ざした。……この子を、星になんかしてたまるか。

「……さて、どっちから行く？」

「うーん……こっち！」

芽吹きそうになった思いを振り払って私が問えば、フリスクは橋がかかっている方を指差す。……あー、先に行く方を選んだか。

「オーケイ、行こうか」

「うん！」

橋を渡って、私達はまた進みだした。

次のエリアには……確か、エコーフラワーがあるんだっけな？

思い出しながら、淡く発光する川の流れを目で追う。……綺麗だけど、どうやって光ってんだらうこれ。

そう考えながらまた橋を渡って対岸に着くと、フリスクは視界に入ったらしいエコーフラワーに近付いていく。

『…………えっ? 願い事何もないの?』

私も近付いて耳を澄ますと、子供の声が聞こえてきた。

『…………うーん、ひとつある、けど…………ちよっと馬鹿らしいから』

次のエコーフラワーから、会話の続きであろう声が聞こえた。…………お願い、か…………

少しセンチメンタルになりつつ、右に曲がって歩いていくフリスクの後に続く。…………

あ、この道って、確か…………

「…? お姉ちゃん、草むらがあるよ」

「本当だ。…………なんであんなここにぼつんと…………」

道を進むと、光るキノコと草むらが見えてきた。…………ここ、四番目の子の武器のエリ

アか。

草むらに興味を持ったらしいフリスクが、近付いていつてガサガサと中を掻き分け、

何かを持って戻ってくる。

「お姉ちゃん、これ、トウシューズだね?」

「せやな。…………どうする? 履く?」

「ううん、やめとく」

持ってきて見せてくれたのは、所々汚れているトウシューズだった。…………あーあ、土

汚れがついてら。

「私が持つとくよ。貸して?」

「うん。……あと、これもいい?」

「ん?もちろん」

私がフリスクからトウシューズを受け取って土汚れを払っていると、フリスクは履いていたチュチュを渡してきた。

「履いてなくていいの?」

「うん。これだけでいい」

そう言ってフリスクは首に巻いたままだったバンドナに触れた。……大方、パピルスに言った事を嘘にしちやいけない、と『Player』は考えたんだろうな、と予想をつける。『Player』には見えていなくても、フリスクはバンドナ着けるのにな。

どうやらゲームとは違い、フリスクが装備を着けても、先に着けていた装備は外れないらしい。……『Player』には外してるように表示されているんだろうけど。

「……わかった、じゃあしまつとくね」

リュックを降ろし、チュチュとトウシューズをセットにして入れる。そして、また背負い直す。……ごめんね、ちょっと借りるね。

心の中で謝りつつ、来た道に戻る。そして、また右に曲がって進み、曲がり角で、

プルルルル……

電話がかかってきた。……ああ、電話イベか。

フリスクはすぐにポケットから携帯を引っ張り出し、電話に出る。すると、

『もしもし！こちらパピルス!!』

明るいパピルスの声が聞こえた。今度は加減したらしく、フリスクは耳から携帯を離さなかった。そして、フリスクはどうしたの、と言わんばかりに少し首を傾げる。

『服装のこと聞いたの覚えているよな?』

パピルスの言葉に、フリスクはコクリと頷いた。そして、どうしてと言わんばかりにまた首を傾げる。

『いや、友達がお前たちのこと知ってたがってな……』

『友達』という言葉に、私はアンダインのことだと理解する。分かってたけどね。

『彼女のお前たちへの印象は……最悪なんだ』

まあそうだろうな、とパピルスの言葉に内心頷く。……ゲームだった時の彼女の言葉を解釈させてもらうなら、『人間は自分たちの夢を邪魔する悪役』だもんな。

『けどお前たちだつてとつくに知ってるよな!』

その言葉でフリスクもアンダインのことだと察したらしく、深く頷いた。

『そして分かつてると思うが……さつき俺様は彼女にお前の服装を話した!例のバンダ

ナを！」

パピルスは少し罪悪感を滲ませた声でそこまで言う。

『わかっている、わかっている……あんなわざとらしい質問をしたんだから……お前たちはもうきつと服装を着替えているよな!!おりこうさんだ友よ!』

電話越しに聞こえた言葉に、フリスクは顔に少し罪悪感を滲ませた。……着替えてないしな。

『これでお前たちは安全だし俺様は嘘をついてない!!誰も何もだましていない!!』

最後の言葉が自分に言い聞かせるような言葉に私には聞こえた。……きつと、アンダインに服装のこと話してから気が気でなかったんだろうな、と思った。

『みんなと友達になるぐらい簡単だ!!』

何故か、また私には自分に言い聞かせているように聞こえた。……思い詰めないでほしいと、言いたかった。

『………すまない、人間。大きな人間に代わってくれないか?』

ふと、そこで切れるはずだった会話が続く。パピルスの言葉に頷いたフリスクが私に携帯を差し出してくる。……私か。なんだろう?

「………もしもし?」

『おお!!出たな人間!!』

「いやそんな怪人が出たみたいに言われても……」

携帯を受け取り、話しかけてみると、パピルスの声が近くでした。

「それで、どうしたの？」

『……あー……えつと……』

私がパピルスに本題を聞くと、パピルスは話し辛そうに言い淀む。

『……怪我とか、してないか……？』

しばらくして携帯から聞こえたのは、こちらを心配する声だった。

『……実はな、彼女にお前たちのことを話してから、気が気でなかったんだ』

ぼつりと、パピルスは言う。

『……また傷つかないかって。……怖かったんだ』

正直に、パピルスは話す。

『俺様は、また……友達を傷つけたのかって』

そこまで聞いて、私は内心で頭を抱えた。……どうやらというか、やつぱりというか、

私がつつ倒れたのはパピルスにとってもかなりのショックだったらしい。

『……怪我、してないよな……？』

らしくない沈んだ声で、パピルスは訊ねてくる。……その優しさに

「うん、大丈夫。怪我してないよ」

私は嘘を吐いた。

『そうか!!それを聞いて安心したぞ!!』

そう答えると、電話の向こうの声が、いつも通りの明るい声になる。

『小さい方の人間にも言っておいてくれ!!すまないと!!』

「分かったよ、パピルス。……じゃあね」

『ああ、またな!!』

そう言つて、電話を切る。……心配させちゃつてたなあ……

「貸してくれてありがとう」

「ううん、どういたしまして。それで、なんの話だったの?」

「うーんとね、怪我とかしてないかって話。あと、フリスクにごめんねつて謝つてたよ」

携帯を返しながらそう言つと、フリスクは少し悲しそうな顔をした。

「……謝るのはいいんだけど、怪我のこと、ホントのこと言わなくて良かったの?」

「うん、これ以上心配させたくないしね」

笑いながらそう言えば、フリスクは少し間を開けてからそっか、と言つて頷いた。

54. Waterfall探索⑦

〔Lily〕

電話のすぐ後に出てきたアロンは手早く『ACT』と『MERCY』して追っ払い、橋を渡ってエコーフラワーの前に立つ。そして、耳を澄ませた。

『そんなこと言うなよー！ねえねえ、絶対に笑わないって約束するからさ』

エコーフラワーから、子供の無邪気な声が聞こえた。……何でだろう、どつかで聞いたことがあるような気がするんだけどな、この声……

「お姉ちゃん？ どうしたの？」

「……………ん、なんでもないよ、行こうか」

思わず首を捻って思い出そうとしていると、先に進もうとしたフリスクが、不思議そうに首を傾げる。なんでもないと伝え、私もフリスクのあとについて歩く。……あ、チビカビだ。

「待てフリスク」

「わっ！ どうしたの？」

「足元、ほら」

「え？……あ、ごめんね？」

フリスクを引つ張って止め、足元にチビカビがいることを教えれば、フリスクはチビカビに謝罪し、チビカビを避けて通る。……よっしゃ、戦闘回避した。

「……あ、石板だ」

そのまま歩いていくと、壁にあつた石板に気付いたらしいフリスクが、石板に近付いていく。私もフリスクの横に立って石板を読む。……さっきのに比べればそこまで風化していないな。これさっきの歴史の続きだったつけ？

『人間のソウルを奪う力。それこそが人間が恐れた力だ』

……さっきの石板の続きで間違いないなこれは。

目の前の石板を見ながらそう思う。……さっきの石板の疑問の究明かな？

「……モンスターにそんな力があるんだ……」

フリスクが何でもないようにそう呟く。

「そうだね」

「……お姉ちゃんのソウル、取られちゃったりしないよね……？」

心配になったのか、涙ぐんだ瞳で私を見上げながらフリスクが言う。

「あはは、ここから出るまでそんな簡単に取られたりしないよ。大丈夫」

「……本当に……？」

「うん、約束」

笑いながら頭を撫で、フリスクに約束をする。…………『Player』からフリスクを奪い返すまでは、絶対に、ね。

「ほら、行こう？」

「……………うん」

フリスクの手を握り、先に進みだした。

次のエリア、は……………あ……………オニオンサン遭遇イベか……………

次のエリアが何か思い出そうとした矢先に水面から現れた黄色っぽい触手らしきもので、私は全てを察した。

「……………なんだろうあれ……………」

「さあ……………」

さっきの泣きそうな顔が真顔になるレベルで驚いたらしいフリスクが触手を見ながら呟いた。……………私もゲームだった時は思いっきり警戒したな、この腕……………

進むごとに次々現れる腕を横目で見ながら、一本道を歩いていく。……………しばらく歩いてみると、

ザバツ

という大きな音がして、水面からまるで玉葱のような形をした顔のモンスターが現れた。……………うおつ、でけえな。

「やあ……………どうも……………いらつしやい……………」

「ああ、どうも……………」

ゲーム通りなんか煮え切らない挨拶だったが、挨拶されたのでフリスクの手を離し、一応挨拶を返しておく。……………フリスクの手前、礼儀を怠る訳にもいかないしな。

「そう……………わたしオニオンサン！オニオンサン、つていいますー！」

「ああ、これはどうもご丁寧に……………私はリリーです」

リリーさん、とオニオンサンは私の名前を復唱する。……………つか、オニオンサンに敬称つけたら『オニオンサンさん』になつて玉葱が空からさんさんと降り注いでいるような感じになるんだけど……………どうやって呼んだらいいんだろう。普通に呼び捨てか？

割りとどうでもいいことで頭を悩ませていると、なんか気まずい雰囲気を感じたらしいフリスクが先に進みだしたのを見て、私も先に進み出す。しばらく歩くと、着いてきていたオニオンサンが話しかけてきた。

「ウオーターフォール、どうですか！よくない、ですか！わたし、大好き！そう！わたしも！とつてもお気に入り！」

「良いところだと思おうよ？」

オニオンサンの質問に素直に答えれば、オニオンサンは嬉しそうに頬を綻ばせた。
……あ、かわいいな。

また会話が途切れたのを見計らって、フリスクと一緒に歩き出す。またしばらく歩くと、オニオンサンが話しかけてくる。

「でもこの辺り、水が浅くなってきた……」

「あ、そうなの？」

私が相槌を打てば、オニオンサンは頷く。

「わたし、ずっと座ってなきや、いけない……」

「うわ、それは辛いな……」

椅子とかに座りっぱなしだときつくなってくるもんな……気持ちには分かる。

「で、でも……いいんです！ 都会よりはマシです！ ぎゅうぎゅうの水族館に住むよりいいんです！」

まあ、だろうな……と思いつながら頷いておく。……この子の体の大きさがよく分かんないけど、水槽を用意するとしたら、現実的に考えて滅茶苦茶デカイのが必要になるよな……

「友達はそうしちゃいました……」

ちよつとしよげたような顔でオニオンサンはそう言った。会話が途切れ、またフリス

……いい子だなあ。

「……さてと、いこっか」

「……うん」

オニオンサンが沈んでいくのを見送り、フリスクに声をかけると、フリスクはそっぽを向きながら返事をする。

「……。どうした？」

「……お姉ちゃんがあの子とぼっかお話ししてたからやきもちやいてるのー」

思わず聞けば、フリスクはそっぽを向きながらそう返答する。……かわいいなあもう!!

可愛さのあまりぎゅーっとフリスクを抱き締めると、フリスクもぎゅーっと抱き締め返してくれる。かわいすぎか。知ってた。

フリスクから離れ、もう一度手を繋ぐ。

「……じゃ、いこっか」

「うんー」

機嫌を直したらしいフリスクが笑顔で頷いてくれる。……さてと、次のエリアも頑張らないとな。

私たちはまた先に進みだした。

55. Let's singing!

〔Lily〕

次のエリアに来て、私ははつとする。……ここシャイレーンちゃんの部屋や。

そう気付いて、私は隣のフリスクを見やる。……何歌うんだろう？

「？ なぁに？」

「何でもないよ、気にしないで」

私の視線に気付いたらしいフリスクが私を見上げる。かわいい。……まあ、あんまり気にしなくて大丈夫か。結構何でも歌えるしな、この子。

「……あれ、お姉ちゃん、あれ……」

「？」

フリスクが指差した先を見ると、曲がり角から、水色の尾びれのようなものが見えていた。……あれ、もしかしてシャイレーンちゃんの尾びれか……？……頭隠してひれ隠さずってか？ やかましいわ。

「なんだろう……」

超くだらないことを考えていると、フリスクは私から離れて曲がり角に近付いてい

き、手を伸ばす。指が尾びれに触れた瞬間、背景が白黒に切り替わった。

*—Shyren hides in the corner but some how encounters you anyway. 《Shyrenは隅に隠れていたがぼったりあなたと鉢合わせてしまった》

その言い方だとあれだよな、少女漫画でよくある転校生と曲がり角でぼったりみたいな感じだよな……

アナウンスに対してそんなことを思いながら、隅からおずおずと出てきたシャイレーンちゃんを見る。……顔がみえねえ……

*SHYREN—ATK 19 DEF 0

*Tone deaf.

She's too ashamed to sing her deadly songs.

調べるを押したらしく、解説のアナウンスが流れる。……恥ずかしい、か……

そんなことを思っていると、小さな歌声が聞こえ、そちらに意識を向ける。

『……………ファンファン』

シャイレーンちゃんの声だったらしく、髪らしきものの隙間から出てきた透けている音符の弾幕をフリスクの手を引いて避ける。……聞いた感じ、そこまで悪くないと思うんだけどな……うーん、恥ずかしくて力みすぎちゃってるのか……？

*

Shyren taps a little beat with her fins.
 シャイレンちゃんがヒレを揺らし始めると、それに合わせてアナウンスが流れる。
 ……うーん……

「フリスク」

「なあに？」

私はフリスクに呼び掛け、耳元に口を寄せる。

「しばらく一緒に歌の練習してあげない？」

「！　そうだね！」

フリスクに『MERCY』条件でもあるハミングを選ぶように薦める。……これで大丈夫かな？

そう思いつつ、フリスクが『ACT』を選ぶのを横目で見ながら、私はシャイレンちゃんに近付いて声をかける。

「ねえ！　これから歌の練習するんだけど、よければ一緒に練習しない？」

私が声をかけると、シャイレンちゃんはピクリと一瞬震えてから、小さいヒレで髪らしきものを掻き分け、私の目をじつと見る。……ようやく視線が合った。

「……………わたし？」

「うん、君」

かわいい声だなど思いながら頷くと、シャイレーンちゃんは恥ずかしそうにもじもじとする。

「……いいの？わたし、あんまり上手じゃないよ……？」

「大丈夫だよ！こういうのは楽しんだもの勝ちだからさ！」

「そう言い切った瞬間、背後で音がする。」

* You あなたは hum は a ジャズ jazz バードを ballad ロザさんだ.

アナウンスが流れると、シャイレーンちゃんが掻き分けていた髪らしきものを後ろにかけ、息を深く吸い、歌いだした。

* Shyren shyren follows も your 緒に melody. ハモッタ

シャイレーンちゃんの声が洞窟に響くなか、頭の中でそうアナウンスが流れた。

『シレシレ、シミシミ』

シャイレーンちゃんの歌に合わせて口から飛び出る音符を当たりそうになつたらナイフで弾き飛ばし、フリスクの隣に立つ。

* Shyren shyren seems は much 緒 more に comfortable が singing 気が

そうアナウンスが流れると、フリスクは迷わずまた『ACT』を押しした。

* You あな な た は さ ら に 口 ず さ ん だ some more.
 * Monsters モ ン ス タ ー are た ち drawn は 曲 to に the 惹 music. か れ て

アナウンズが流れると、その通りに私達の周りにモンスター達が集まりだした。
 ……うお、結構いるな……

* Suddenly, 突 然 コ ン サ ー it's ト a ガ concert... 始 ま っ た

『シ ファ シ ファ ソ ファ ソ ミレレ』

集まりだしたモンスターを見て一瞬驚いたように目を見開いた後、シャイレーンちゃん嬉しそうに口元を一瞬緩め、それからまた歌い出す。飛んできた音符を、当たり前になつたものだけ弾き、またナイフをしまった。

*— Sans is selling tickets made of toilet paper. 《Sansがトイレトペーパーで作ったチケットを捌いている》
 「いやサンズ何やってんの……？」

思わずツツコミを入れる。つかあつたんだねトイレトペーパー……

気を取り直して、私はモンスター達を見て、それからシャイレーンちゃんを見る。
 ……よし、盛り上げるか。

「レディースアンドジェントルメン!!!皆様、ようこそお越しいただきました!!!今宵行われるのは美しさと愛らしさを兼ね備えた歌姫達によるコンサート!!!どうか楽しんで

大盛り上がりだなー

そんなことを思いながら、フリスクが『ACT』を押すのを見届ける。

「…………お姉ちゃん！」

「ん？どうした？」

ふと、フリスクが私に呼び掛ける。

「お姉ちゃんも歌ってよ！」

「…………え、私も？」

予期せぬ誘いに思わず聞き返せば、フリスクは深く頷いた。

「お姉ちゃん全然歌わないんだもん。歌ってよ！」

「えーつと…………シャイレーンちゃん、いい？」

取り敢えず主演歌手であるシャイレーンちゃんに確認を取ると、シャイレーンちゃん

は笑顔で頷いた。

「…………じゃあ、フリスク、一緒に歌ってくれる？」

「！ もちろん！」

流石に一人で歌うのは気が引けて、フリスクを誘う。

「…………じゃあ、あの歌にしようか。お願いね、フリスク」

「うん、まっかせて！」

フリスクが頷いたのを見て、私は息を深く吸い込んだ。……人前で歌うとか高校以来やな、上手く歌える自信ないわ……

「……………」

「……………」

私が歌い出すと、昔練習した通りにフリスクが合いの手を入れてくれる。

「……………」

* You あ な た は も っ と 口 ず さ ん だ
some more.

二番のサビに入ったぐらいで、アナウンスが流れ出す。

* But だ が 浴 び る ほ ど の 注 目
the constant attention……

* The ッ ア
tour……

* The 親 衛 隊
groupies……

* It, 全 て
s all……

……ああ、もうすぐ終わるんだな、と歌いきりながら思う。なんとなく寂しいような、もつと続けていたいような気分になった。……つかこの短時間で親衛隊出来るとかシャイレーンちゃんとフリスクすげえな。

『(激しい歌声)』

私達が歌いきると、それに応えるかのようにシャイレーンちゃんは激しく歌い出す。

数が増えた音符を弾き、ナイフをしまふ。

*Shyren thinks about her future.

そのアナウンスが流れたところで、私はシャイレーンちゃんに話しかける。

「シャイレーンちゃん」

「なあに?…あれ、そう言えば、名前……」

私が話しかけると、シャイレーンちゃんは私の名前を呼ぼうとして、聞いていないことに気付いたらしく、困ったような顔をした。

「あはは、そう言えば名前教えてなかったね。私はリリーだよ。改めてよろしくね」「リリー……うん、よろしく……」

改めて自己紹介をして、本題に入る。

「……シャイレーンちゃん、独立して歌手かアイドル目指したら?」

私がそういうと、シャイレーンちゃんはピクリと体を揺らす。

「……でも、せつかく二人に会えたのに……」

「大丈夫だよ!」

不安そうな顔をするシャイレーンちゃんの瞳を覗き込み、私は笑った。

「私達は仲間なんだぞ?どんな遠い所にしても、ソウルは繋がってるさ!ね、フリスク

?」

……なんか青春漫画みたいな台詞だなと思いつながら背後のフリスクに確認すると、フリスクも頷く。それを見て感極まったのか、シャイレーンちゃんは目を潤ませた。

「……………ふたりとも……………ありがとう……………」

シャイレーンちゃんが泣きながら笑顔で言うのと、背後で音がした。

* You and Shyren have come so far, but it's time……

* You both have your own journey to embark on. シャイレーンちゃんから離れ、フリスクの隣に立つ。そして、私は観客に向かって振り返った。

「お集まりになった皆様、これにてラストナンバーとなります。どうぞ彼女達の別れを、そして旅立ちを、お見送り下さい……………」

そう言つてまた大袈裟にお辞儀すると、アナウンスの続きが流れた。

* You hum a farewell song.

アナウンス通りにフリスクが動かしていた口を閉ざすと、シャイレーンちゃんが目から大粒の涙を溢し、それでも笑顔を浮かべながら、優しいメロディーの歌を歌い出す。

『(最後の歌声)』

優しい歌とともに飛んできた音符を避け、シャイレーンちゃんを見る。

「~~~~、~~~~:~~~~」

観客の前で堂々と歌うその美しい姿は、まさに歌姫と呼ぶに相応しい姿だった。

彼女が歌い終わると、盛大な拍手が彼女を包んだ。私が見ている事に気付いた彼女は、涙を拭って此方に微笑みかけ、丁寧にお辞儀をして去っていった。

*YOU WON!

あなたは勝利した

*You earned OXP and 30 gold.

彼女が去るとともに背景に色が戻ってくる。ふと周りを見渡すと、あれだけ大勢いたモンスター達も居なくなっていた。……うん、まあ、大成功で終わって良かったけどな。

「久しぶりにお姉ちゃんが歌ってるところみたな」

「そうだね、孤児院では迷惑になるかと思って歌ってなかったし」

フリスクがぼつりと溢した言葉に返す。……というか頭が冷えてる今だから言えるけど、青春漫画みたいな空気に吞まれて変な行動してたな……

「……………さてと、次、どっち行こうか？」

まあいいかと気を取り直し、フリスクに訊くと、フリスクは二つの道を見比べて悩み始めた。

56. Waterfall探索⑧

〔Lily〕

結局壁にあつた看板の『お宝』という単語に興味を持ったのか、フリスクはシャーレンちゃんが隠れていた左の道を選んだ。……この部屋、確か犬に横取りされるアーティファクトの部屋の仕掛けがあるところだったつけ…？

「あれ、ピアノだ……」

道を抜けた先に、小さめのピアノがある事に気付いたフリスクが、ピアノに駆け寄っていく。……シャーレンちゃん、アンダインが居ないとき、これ使つて練習してたりしたんだらうか。

そんな事を思いながら私はそのピアノの上を見上げてみて、壁に記号がないか探す。……ないな。あれは『Player』からしか見えないみたいだと結論付けて良さそうだ。

ポーン、ポーン

ピアノの柔らかい音が部屋に響く。音源であるピアノを見ると、フリスクが適当に指を動かしていた。

「……………うーん、このピアノと宝物になんの関係があるんだろ……………」

「……………この壁がへこんでるし、正解すれば多分ここが開く仕掛けなんじゃないかな？」
ある程度弾いてからフリスクは首を傾げた。……………まあ、これはあの石像からのやつ
じゃないと開かないだろうしな。私もそこまで覚えてないし。

「……………ねえ、フリスク。こっちの看板に『思いの歌が通路に響く』って書いてあるんだ
けどさ、何処かにヒントがあるんじゃないかな？最初の八音だけ弾けばいいみたいだ
し、探しに行ってみない？」

「……………うーん、そうだね」

看板を指差してフリスクに言ってみれば、フリスクは少し考えてから頷いた。

「じゃあ、探しに行こうか」

「うん」

フリスクと話をまとめ、来た道に戻り始めた。

来た道に戻り、奥の道へと進むと、古びた石板が壁に埋め込まれていた。

『この力に対抗手段はない。その代わり、人間はモンスターからソウルを奪えない。』

……………さつき見た石板の続きで間違いなさそうだな、と思いつながら石板の続きを読む。

『モンスターが死ぬと、そのソウルは消滅する。』

また生きているモンスターからソウルを奪うのは非常に困難だ』

……これは、どういった原理なんだろう。そう思いつつ考察する。

モンスターの体って魔法で出来てるらしいし、殆どが水で出来てる人間の体と違ってソウルとの結び付きが強いのか？だから死んだら一緒に消えてしまうのか……？

そんな事を思いながら次の石板に目を通す。

『ただし、一つだけ例外がある。ボスモンスターと呼ばれる特殊な種のソウルだ。

ボスモンスターのソウルの力は強く死後も残留する力を持っている……ほんの僅かな間だけ。

もし人間がこのソウルを吸収することができたら。だがそれは一度も叶わなかった。

そして今後も決して起こらないだろう。』

人間への失望と怒りが滲み出ている文を最後に、石板は途切れていた。

「……ボスモンスター？」

フリスクが不思議そうに首を傾げる。

「……ママとかパピルスとかのことかな？」

「さあ……どうなんだろうね」

中々の的を得ているフリスクの発言に首を傾げ、私は石板から目を離れた。

道なりに歩いていくと、

ピチャン、ピチャン

と、小さく水の垂れる音が聞こえ始める。……あの石像が近いのか。

そのまま進むと、光に照らされて座り込んでいるモンスターが石像が見えてきた。

……想像してたよりは小さいな。

「なんだろう、あれ……」

そう言っ、石像に興味を持ったらしいフリスクは近付いていく。そして、

「……この子の上だけ雨が降ってるみたいだ」

と石像の上から差す光と落ち続ける水滴を見ながら呟いた。

「うーん、傘でもあれば差してあげたかっただけ……流石に持っていないよね？」

「そりゃね」

私に確認を取るフリスクに頷いておく。……持つてくれば良かったな。失敗した。

若干後悔しながら石像を見る。目を固く閉じて壁に背を預ける姿は、ただ眠っているだけにも見えた。……この石像、もともとはモンスターだったとかないよな……？

石像の精巧な出来に思わずそんなことを思いつつ、石像に近付いてみる。

………

「……………」

ふと、水滴が石像に当たる音に混じって、聞いた覚えのあるメロディーが聞こえたような気がした。

「? どうしたの、お姉ちゃん」

「……………」いや、なんか音が聞こえたような気がして……………」

「え? ほんと?」

首を傾げた私にフリスクが不思議そうに聞いてくる。それに返答し、石像の前に膝をついて、抱きつくようにして生きていたら心臓がある辺りに耳をあててみる。

……………」

……………」やっぱり、聞こえた。水が跳ねる音が邪魔で聴きづらいけど、ゲーム通りの優しい音が。

「……………」どう?」

傍に来ていたフリスクが訊ねてくる。

「……………」うん、やっぱり聞こえる。でも水の跳ねる音で聞こえにくい」

「そっか……………」

傘でもあればなあ、とフリスクが小さく呟いた。……………」この先に確かあったはずだし、それ使うかな。

「ま、気にしてても仕方ないし、行こうか」

「……………うん」

どうも後ろ髪引かれる思いらしく、フリスクは一度石像を振り返つてから、私の前を
進んでいった。

道なりに進んでいくと、傘立てが道に置いてあつた。…………良かつた、あつた。

「！ お姉ちゃん、傘！」

「おお、ほんとだ」

同じく傘立てを見つけて嬉しそうにフリスクは傘立てに駆け寄つていく。そして、傘
を持つていこうと傘に手をかけ、ふと気付いたように私を見た。

「……………これ、持つていつていいのかなあ」

「うーん…………『おひとつどうぞ』って書いてあるし、大丈夫だと思うよ」

私が看板に近付いて読むと、フリスクは安心したようにほつと息をついてから傘を一
本引つ張り出す。

「あの子に差しにいつていい？」

「うん、いいよ。じゃあちよつと戻ろうか」

傘を一本腕に提げたフリスクの手を引いて、来た道に戻り始めた。

57. Waterfall探索⑨

〔Lily〕

来た道に戻って石像の前まで来ると、フリスクは赤い傘を開いて石像に駆け寄っている。

「はい、どーぞー！」

フリスクは笑顔でそう言いながら、石像の肩に傘をかけた。すると、石像に当たっていた水滴が跳ねる音が消え、石像から聞き覚えのある音楽が流れ出す。……ゲーム以来だな、これ聴くの。

「……お姉ちゃん」

「ん？」

そのまま音楽を聞いていると、ふと気付いたようにフリスクが虚空を見上げながら私に呼び掛ける。フリスクが見上げている辺りを私も見てみるが、何もなし。……あの辺りにゲーム通りの記号があるんだろうか。

「……さっきの部屋のヒントってこれかなあ？」

「多分そうだと思うよ」

「そっか……」

そう言つてフリスクはしばらくぼーっと空を見上げ、それから視線を私に合わせた。

「八個、全部覚えたからいいこう」

「……おお」

……今、『個』つて言ったな。やつぱり見えてんのか……？

そんなことを思いつつ、私は歩き出したフリスクの後を追つた。

さっきのピアノの部屋まで戻つてくると、フリスクは真つ先にピアノの前に立ち、先程覚えた音を迷わず打ち込んでいく。

ポーン　ポーン　ポーン　ポーン

ポーン　ポーン　ポーン　ポーン

八つ、ピアノの音が部屋に響くと、ガコンと大きな音がして、目の前の壁に人が通れる程の大きな穴が開いた。

「やった、開いた！」

「おお、やったね、フリスク」

「えへへえ」

やだ、うちの妹超かわいい。

嬉しそうに頬を緩めるフリスクの頭をなでて、穴の中を覗き込んでみる。すると、そのまま部屋に直結していたらしく、割りとすぐ近くに台座とその上にある赤い玉が見えた。……あれか、アーティファクト。

「フリスク、あれが宝物じゃない?」

「!、そうかも!」

私が奥を指差しながら言うと、フリスクはぐいっと私を引つ張って部屋へと入り、赤い玉へと近付いた。それに伴って、私も近付いていく。……あ、すげえ。めっちゃ綺麗だなこれ。

そんな事を思いながら上の看板を見上げる。ゲーム補正がかかっているのか、黒のクレヨンでぐちゃぐちゃに塗り潰されたかのように文字が見えなくなっていた。……これ、フリスクには見えてるんだろうか。

「フリスク、ク……?」

呼び掛けようとしてフリスクを見て、私はぎよつとした。

「……? どうしたの、お姉ちゃん」

「……いや、フリスク、その犬はどうした……? 何処から拾ってきた……?」

「え?」

フリスクの腕の中には、いつの間にか白い毛並みの犬が丸くなって収まっていた。
……え、いつから居たん？

「わん！」

「!？」

自身の腕の中にいた犬の存在に気付き、フリスクもぎよつとしたような顔をする。そして犬を少し撫でると、そつと地面の上に降ろした。

「わんわん！」

元気よく犬はフリスクの周りを駆け回ると、アーティファクトに体当たりした。すると、アーティファクトと犬は元からそこに何もなかったかのように消滅した。……もう一度言おう、消滅した。どういふことなの……

あまりの出来事にしばらく唾然としてしまう。

「………なんだったんだろう、今の……」

「………さあ………？」

私より先にフリーズから戻ってきたフリスクがぼつりと呟き、私はそれに首を傾げておいた。

「………うん、まあ………行こうか」

「うん………」

一連の出来事に微妙な気持ちになりつつ、私達は部屋を後にした。

次の部屋は……ああ、雨の部屋か。

そう考えていると、鼻の頭に水滴がぽつりと当たった。さつきの部屋にあった傘を開き、差す。横にいるフリスクを見ると、先程の傘と似たような赤色の傘を差していた。……ちなみに私の傘は黄色にしてみた。

「すごい、地下なのに雨だ！」

「そうだねー」

いや、ガチでどうなってるんだろうね、これ。

水溜まりをばしやばしやと足で踏みながら言うフリスクに癒されつつ、手を伸ばして水滴を何粒か受け止めてみる。……うーん、川の水でも落ちてきてるのか……？

伸ばした手を引っ込め、足下の水溜まりを見つめる。……確かどつちかのバージョンでデバッグモードに切り替えると映る姿がCharaちゃんになるんだよな、と遠い記憶を思い出し、水溜まりの中の自分と目を合わせる。

「………うん、私だ」

「？ お姉ちゃん、どうかしたの？」

「何でもない。今行くよ」

少し先のフリスクが不思議そうな顔をしながら振り返る。私は水溜まりから目を離し、フリスクの傍に駆け寄った。

「おっ、傘持ってるのか？」

しばらく歩いていくと、壁の方から知っている声があった。首を回して見てみると、ゲーム通りモンスターキッド君が壁の穴の中で雨宿りをしていた。それを見て、一緒に入らないかと言わんばかりにフリスクが少し傘を傾げて手招きした。

「やういー！」

その誘いに乗って、モンスターキッド君はフリスクの傘に入る。

「行こうぜー！」

モンスターキッド君の呼び掛けに頷き、フリスクは歩を進め始めた。二つに増えたばしゃばしゃと水溜まりを踏む音が部屋に響く。

「……なあ、アンダインってすっげーカッケーんだぜ」

しばらく歩いた所で、ふとフリスクにモンスターキッド君は話題を振った。

「悪者をやつつけるムテキのセンシなんだ。おいらが人間なら、怖すぎて夜も眠れないね……いつアンダインがやつつけに来るかかってな！」

「そうなんだ……」

いや、目の前の人間そこまで怯えてませんけど……と微妙な気持ちになりながら笑う

モンスターキッド君に相槌を打っておく。……どっちかって言えば警戒だしな、これは。……それにしても、

「悪者、ねえ……」

「? なんだ?」

「ああ、何でもないよ、気にしないで。行こうか」

思わず苦笑したのが聞こえたらしく、モンスターキッド君が不思議そうに私を見上げてくる。それを誤魔化して、先に進むように促す。……それにしても、悪者かあ……

悪者の定義って何なんだろうな、と哲学っぽい事を思いながら二人の後を歩いていく。しばらく歩いていくと、エコーフラワーが見える場所に差し掛かったところでモンスターキッド君が歩きながらまた口を開いた。

「じつは、昔な。学校で花の世話をする事になったんだよ」

徐に口を開いたモンスターキッド君の話に相槌を打つようにフリスクは頷く。

「王様の、『ドリーマー先生』が自分の花を贈ってくれて」

「へえ、王様って花育てるの好きなんだね」

「そうだけ!」

……アズゴア王の花と言えばバターカップの花しか思い浮かばないがそれだろうか。

「ついでに授業でセキニンの大事さとかを教えてくださいましたんだ」

ついでじゃなくてそっちが目的だと思うけどナーと思いつながら相槌を打つ。……責任、ねえ。

「で、思ってたんだ……ほら！アンダインが来たらどんだけすげーかなって!?先生みんなやつつけてくれるかなとか!!……なーんて、そんなことしないでだろうけど……悪者を倒してこそアンダインはカッケーんだしな!!」

まあ、そうだろうね。心の中でモンスターキッド君に同意しておく。……悪を倒す事が本当に正しいのかは別として。

そんなことを思っていると、ふと、視界が拓けた。

「……おお」

傘を少し傾げて天井を見上げて、思わず口から言葉が溢れた。

視界に広がるのは地上の星空と変わらぬ満天の星空。願いの間とはスケールの違うその空は、本当に綺麗だった。

視線を元の位地に戻し、前を歩く二人と開いてしまった距離を戻すためにまた歩き出す。しばらくそうして歩いていくと、ふとフリスクが立ち止まって、遠くに見える大きな影を見つめた。

「……あれが……お城……」

フリスクがそう呟くのを聞きながら、私も向こうに見える城の影を見つめる。

……彼処が、『^{Undertale}この物語』の終着点。私達が、目指す場所。

また歩き出したフリスクとモンスターキッド君の後を追いかける。その背中を見ながら、私は絶対にフリスクを守りきるという決意を抱いた。

58. Waterfall 探索⑩

〔Lily〕

次は………あ、モンスターキッド君が壁の上に押し上げてくれるところか。

歩いた先にあつた洞窟に入りながらそう思い出し、目の前の崖をよく観察する。
………私ならなんとか登れそうだけど………フリスクにはちよつと無理がありそうだな………

そんな事を思いながら、傘を畳んで二人にかからないように振つて水滴を飛ばし、傘立ての中に傘を戻す。……さて、どうすつかな。

「おい、このガケ、すげー険しいな……」

「そうだね……」

私と同じく傘を傘立てに戻したフリスクがモンスターキッド君に話しかけると、崖を見ながらモンスターキッド君がそう言った。

「……なあ、アンダーインに会いたいんじゃないか……？」

モンスターキッド君は崖を見てからフリスクにそう訊ねた。その質問に、フリスクは少し間を開けてから頷く。

「そっか、じゃあ肩に乗れよ」

そう言つてモンスターキッド君がしゃがもうとするのを慌てたようにしながらフリスクは止める。そして、パクパクと口を動かした。

「……。服ぐらいいいよ。おいらしよっちゅう転んで汚しちゃうしさ。ほら、乗れよ」
フリスクにそう言つてモンスターキッド君はしゃがむ。それを見てフリスクは困つたのか、助けを求めるように私を見る。

「……うーん、じゃあさ、一回退いてくれないかな？ 私はその崖登れそうだし、上から引つ張り上げるからさ、そうすれば君の負担も少ないでしょ？」

「おう、いいぜー」

モンスターキッド君の優しさを踏みにじる訳にもいかず、私は負担を減らす案を口にし、一旦モンスターキッド君を崖の前から退かす。そして崖の岩に手をかけ、一気に登る。……うん、ロッククライミング（公園とかによくあるやつな）、やつといて良かったわ。

「いいよー」

崖を登りきり、フリスクを引つ張りあげられるようにかがみ、手を伸ばす。フリスクは戸惑つたような顔をしてから、モンスターキッド君の肩に乗り、私に手を伸ばした。

「よいせつ……とー」

こちらに伸ばされたフリスクの腕を掴み、最後は抱き締めるようにして引つ張りあげ、崖の上にそつと降ろす。すると、フリスクは心配そうに崖の下に残されたモンスターキッド君を見た。

「まつ、先にいけよ。気にすんな、抜け道探しはトクイなんだ！」

フリスクの心配を笑い飛ばすようにモンスターキッド君はフリスクに笑いかけ、走つていこうとする。そして案の定ぬかるみに足をとられてスツ転んだ。今のは痛い。だがすぐに立ち上がり、今度はちゃんと走つていく。……あの子、大人になったら絶対モテるよな……

「……………さてと、行こうか」

モンスターキッド君が見えなくなるまで見送り、私はフリスクにそう呼び掛ける。

「……………うん」

フリスクは私を見上げて頷いた。それを見て、私はフリスクの手を繋いで奥に歩を進めた。

次は……………セーブ部屋か。

道なりに進んで行った先に薄く光が見え、そう判断する。フリスクも決意の光が見えたらしく、光に駆け寄っていった。

フリスクが光に手を翳してセーブしている間に、私は壁にあった石板に目を通す。
 ……まだ新しい方だな、これも。

『人間はモンスターを恐れて、宣戦布告した。』

奇襲を仕掛けてきたのだ。慈悲など無かった。』

私が石板を読み終わると、今度はフリスクが石板を読み始める。フリスクに場所を譲り、私は次の石板の前に移動して目を通す。

『もはや戦争とも呼べない状態だった。』

人間たちはあまりに強く、我々はあまりに弱い。

ひとつもソウルを奪えないまま、数えきれないモンスターが塵と化していった

……』

……博士がソウルを解析した訳じゃなさそうだな。

石板の終わりまで読み、私はさつき立てた仮説を取り消した。……じゃあ、推論を立ててそれで判断したのか…？

「………ひどい」

隣に来ていたフリスクの呟きで思考の海から自我を引き戻す。横目で見たフリスクの顔は、本当に悲しそうな顔をしていた。

「………そうだね。これが当時の人間がモンスターに対してやった事だ」

「……………どうして、こんな事が出来たんだろう……」

私が肯定すると、悲しそうな顔のまま、フリスクはそう言った。

「……………この石板にも書いてある通り、怖かったんじゃないかな？自分たちよりも強い魔法の力を持つモンスターが」

「でも、だからって……………やっぱり殺していい理由にはならないよ!!!」

泣きそうなフリスクの声が部屋に響く。……………ああ、いい子だなあ、本当に。

私は感情的になって目に溜まった涙を拭うフリスクの頭を撫でる。

「うん、そうだね、フリスク。……………その気持ちを、絶対に忘れないでね」

「……………うん……………」

私の言葉にしつかり頷いたフリスクの頭から手を離し、今度は手を繋ぐ。

「……………いこっか」

「うん」

フリスクの確認を取って、私とフリスクは橋の上を歩き始める。……………さて、此処からが正念場なんだよな。

橋の上をしばらく歩いていくと、ふと、空気がガラリと冷たく張り詰めたモノに変わる。……………来たか。

「……………リスク、いつでも走れるようにしておいて。嫌な予感がする」

「！ うん、分かった」

フリスクに準備を呼び掛け、周りを注意深く観察しながら進んでいく。……………今私の視点はゲームのように俯瞰じゃなくて正常。なら、探せば道がちやんと見つかる筈だ。そう判断し、より一層注意深く観察すると……………あつた。あの広い広場が。

そこに行くまでのルートを目で計算し、最短はどれかを導き出す。……………このルートが一番速いな。

そんな風に思索していると、

ぼうっ

「!!」

直ぐ目の前の橋が円形に青白く光り始める。警戒を一層強め、フリスクの手を強く繋ぎ直す。

「フリスク、準備はいい?」

「うん!」

私達の周りを囲むように青白く橋が光り始める。

そして、青白い光の中から、槍が勢い良く突き出した。

足元から、ビリビリと射抜かれるような殺気を感じながら、私は、

「走るぞ!!」

フリスクに呼び掛け、槍が消えた瞬間を狙って走り出した。

59. 橋の上での逃走

〔Lily〕

橋から突き出される無数の槍を避けながら、私はフリスクを連れて橋の上を走る。

さつき計算したルートに狂いがなければ、右に向かえばいい筈だ。そう判断し、右に進む道を選ぶほうとする。

ほうっ

「チッ」

……やっぱりそう簡単には通してくんないよなあ。

それを阻むかのように道の上に現れた青白い円を周り道して回避し、ペースを落とさないように走り抜ける。

現れる。左の道を選んで回避する。

現れる。軌道修正しながら回避する。

現れる。回避する。

それを繰り返して、やっと広場に辿り着く。結局、計算した最短ルートを通らせてはくれなかった。

ぼうっ

中々仕留められない事に対して苛ついたのか、広場に出た途端、出現する槍の量が増え、足元から感じる殺気がより強いものになる。…………ラストスパートだ。気張れよ、私。

「走り抜けるぞ、フリスク！」

「うん!!」

息が切れていないかという確認の意味も込めてフリスクに呼び掛けると、間髪入れずに返事が返ってきて安心する。そして動かす足のスピードを速め、出現する槍と槍の間を縫って真っ直ぐに、橋の上を駆け抜けた。

ようやく見えた一本道に飛び込み、しばらく一本道を走っていく。…………すると、少し

前の所で橋が途切れてしまっていた事に気付いた。

「うそ……………!!!行き止まり……………」

「……………はは、マジかあ」

……………知つてたとは言え、本当に絶望的だな、これ。

暗くて底が見えないぐらいの高さにある事にぞつとしながら、私は思わず笑つてしまふ。

ガシヤリ、ガシヤリ

金属が擦れる音に振り返ると、此方に対する殺意を籠めた鋭い眼光の鎧騎手が、特徴的な赤い髪を揺らしながら此方に近付いて来ていた。

私は鎧騎手に笑顔を浮かべながらフリスクを私の後ろに隠し、ポケットからカッターと玩具のナイフを取り出した。

「……………やあ、正義のヒーローさん？」

寒気がするほど冷酷な殺気を放つ彼女を威嚇代わりに睨み返し、笑みを浮かべてナイフをズボンのポケットに移しながらそう言ってみる。……………彼女からの返答はなかった。ただ此方を見据えたまま、彼女は腕を振り上げ、

ヒュンツ

勢い良く、振り降ろした。

その瞬間、

ドガンツ

彼女がいる側と此方側を別けるかのように無数の槍が刺さった大きな音が響くとともに、一瞬大きな揺れが私達を襲う。

ぐらっ

そして、直ぐ様浮遊感がやってきた。

「あっ……」

「!! フリスク!!」

私はカッターを放り投げ、振り返って私に手を伸ばすfrisスクの腕を掴んで引き寄せ、せめてfrisスクに痛みがいかないようにと、祈りを籠めて強く抱き締めた。

落ちていく浮遊感の中、ゆっくりと意識が消えていった。

60. 幻影

「??」

『……………ふふ、ふふふふ』

真つ暗な闇の中で誰かの笑い声が聞こえる。どちらかといえば少女の様な声をしたその声は、笑いを堪えるかのような声だった。

『……………』

闇の中、本来なら見えない筈の姿が浮き出てくる。笑いを堪えるかのように肩を揺らしながら立つ少女のその姿に、何処か既視感を覚えた。

『……………ぜーんぶ、殺しちゃった』

手に持っていたナイフを翳すと、塵と血にまみれて真つ赤になったナイフが赤く、紅

く、輝く。

『……………ふふっ、ふふふふふふふふ』

少女の周りの闇が少し消え、様々なモノが浮かび上がってくる。

紫を主調とした紋様の入った服

青の骨と赤いスカーフ

青白く光る、鋭い槍

派手な色をした壊れた機械

塵にまみれた水色のパーカー

赤く燃えるような、三ツ又の槍

そして……………

散ってしまった金色の花

共通点が見つかりそうにないそれらは、どれもこれも、塵にまみれていた。

『……………くっそお……………
!!!!』

嗚咽へと、変わっていく。

『また、また駄目だった……………!!』

後悔に濡れた、声が響く。からんと、ナイフが少女の手から滑り落ちて音を立てる。

『ごめんなさい、ごめんなさい……………!!』

今にも罪に押し潰されそうな、泣き声がする。

『また、駄目だった……!!私は、また、皆を殺してしまった……!!』

少女の頬に、大粒の涙が伝っていく。

『あ、あああ………うわあああああん………』

嗚咽は泣き声へと変わり、やがて咽び泣く声に変わっていく。

『もう、いやだ……!!! もう、大切な人達を殺したくないよ……!!!』

顔を抑え、踞った少女の手の隙間から、涙とともに切なる思いが溢れていく。

『もつと母さんのパイを食べたいよ、もつとパズルで遊んでいたいよ、もつと笑っていたよ、もつとシヨーを続けていたいよ、もつとジョークを言い合いたいよ、もつとお茶会を続けていたいよ、もつと、もつと……!!親友とずっと一緒に居たいよ……!!!』

ぼろぼろと涙を溢れさせていく彼女には、何本もの糸が絡んでいた。

例えるならば、そう、憐れなマリオネット人形のように。

『……………だれか、おねがい……………』

彼女の口から、たった一つの願いが口にされる。

『……………
SたAすVすEけ
mてe……………』

61. Waterfall 探索①

〔Lily〕

優しい花の香りに鼻腔をくすぐられて目を覚ます。腕の中にはさつきまでの私と同じように眠るフリスクが居た。

「……………いつて」

フリスクから離れて体を起こそうとすると、どうやら落ちた際に身体を打ち付けたらしく痛みが走る。……………まあ、花がクツションになつてくれるとはいえ、衝撃を殺される訳がないわな。

なんとか身体を起こし、辺りを見渡す。ゲームが立体化した風景と水の音が此処が現実なのだと教えてくれていた。

「……………ねえ」

「? ……あ、やあ」

ふと後ろから声をかけられて振り返つてみると、先程対戦したウオシユア君がそこに居た。……………あれ、本来此処に居たっけ?

「……………結構な高さから落ちてきたみたいだけど、無事だったの?」

その言葉を聞いて、どうやら心配してくれているらしいと判断し、私はウオシユア君に笑顔を向ける。

「私は大丈夫さ。この子が怪我してないか心配だけどね」

「ふうん……」

フリスクの頭を撫でながらそう言えば、ウオシユア君は興味を無くしたのか、ドラム缶から直接生えたような腕を器用に使って持っていた雑巾で床を拭きはじめる。……
そうやってたんだ……

「……………ん……」

「あ、起きた」

ウオシユア君の掃除を見ながらしばらく頭を撫でていると、フリスクが目を覚ました。フリスクは寝惚けた様子で私を見上げて、そのまましばらく私を見上げた後、目を見開いてぱつと勢いよく飛び起きて私に抱き付いてくる。

「お姉ちゃんっ!」

「うおつとと」

若干痛む身体で飛び付いてきたフリスクをなんとか受け止める。

「お姉ちゃん大丈夫!?怪我とかしてない!?!」

「私は大丈夫だよ。フリスクこそ大丈夫?」

「大丈夫だけど……あれ……？」

フリスクは少し戸惑っているような顔で私を見上げる。

「どしたよ」

「……お姉ちゃん、ちよつと雰囲気変わった……？」

不思議に思つて訊いてみれば、そんな返答が返ってくる。

「……ああ、ちよつと忘れてた事を思い出ただけだよ。気にすんな」

「そうなの？」

「うん」

私がそう答えて頷けば、フリスクはそつか、と言つて私から離れ、先程の私と同じように辺りをキョロキョロと見渡した。

「……」

「あの橋の下みたいだよ。……あの高さから落ちて無事だったのが本当に奇跡だけだね」

そこまで言つて、私はふと思ひ出してナイフをしまったポケットを探る。コツンと固いプラスチックの感触が指に触れ、無くしてない事に安堵する。そして先程まで握つていたカッターがない事に気付いた。

「……ああ、そうだ……」

「?」

「いや、何でもない」

さつき思わず放り投げちゃったな……と思いついて遠い目になる。……うわ、どうしよ、孤児院の備品無くしたとかヤバいな……

そんな事を考えながら立ち上がり、土汚れを払う。徐に伸ばされたフリスクの手を掴んで立ち上がらせ、掃除中のウオシユア君に声をかける。

「……ごめんウオシユア君、ちょっとお願いしていい?」

「……なに?」

掃除を中断して振り向いてくれたウオシユア君に手を合わせて頼み込む。

「多分だけどここら一体掃除するんだよね?」

「うん、そのつもりだけ」

「じゃあさ、もし掃除しててカッター見つけたら届けてくれないかな?」

「……………いいけど、どんなの?」

引き受けてくれたウオシユア君にカッターの特徴を教えておく。

「ごめんね、ありがとう。えっと、持ち手が黄色で、黒い星のマークが描いてあるやつ。

……あとは、確かナンバー2って書いてあった筈」

「分かった」

そう言いながらウオシユア君は頷いて、掃除に戻る。私はそれを見てからフリスクに声をかける。

「さてと、行くこうか」

「うん」

フリスクが頷いたのを確認し、水の中に足を踏み入れた。

62. Waterfall 探索⑫

〔Lily〕

人間が捨てたゴミが山になっているのを横目で見ながら通りすぎ、薄く見える決意の光があるエリアまで辿り着く。……こんな山になるレベルであるって、どんだけ不法投棄してんだよ。

「……ゴミがいつばいだね」

ふと、着いて来ているフリスクがそう言った。

「そうだね。……多分、これ全部人間が捨てたやつだよ」

「………やつぱり?」

ぎば、という音を立てながら水からあがる。………うわ、また気持ち悪い感触が………
「見たことがあるブランド物がいくつかあったし、そうじゃないかとは思ってたけど………こんなにあるんだね」

フリスクは水からあがりながら辺りを見渡し、少しショックを受けているような声でそう言った。

「………そうだね」

フリスクにそう返答しつつ、私は目の前に広がる穴を見つめる。ここから落ちたら絶対に死ぬよな、とか思いながら、目を逸らして決意の光に手を当ててセーブを行うフリスクを見つめる。

「……終わったよ、行こう」

フリスクが私にそう言うて水に入り、前を進んでいく。その後を私は追っていった。

……次は、マッドダミー戦か。

そう思いながらポケットの玩具のナイフを触る。……攻撃手段確か綿だったはずだけど……これで防ぎきれるか？

不安を感じつつ、ゴミの山を避け、川の中を進んでいく。

「……あれ、自転車だ」

そう呟いたフリスクの声に顔をあげると、確かに少し先にゲーム通りの錆びた自転車があった。……うわ、めっちゃ錆びてやがる。

自転車に興味を持ったのか、フリスクは自転車に近付いていく。私も近付いていて、よく観察してみる。……うん、遠目で見て分かるレベルだから酷いんだろうなとは思ってたけど、やっぱり凄い錆びてんな……形も結構変形しちゃってるし……

キィ……

フリスクがハンドルの部分を押すと、結構掠れた音がする。……うん、これは確かに悲痛な音だわ。

触ったら変な音になった事に驚いたのか、フリスクは一瞬ビクツとして手を離す。

「……………びつくりしたか、フリスク」

「……………うん」

恐々とした様子で自転車の横を通り抜けるフリスクを怯えた猫みたいだなとか一瞬思ったのはナイシヨ。

「……………お姉ちゃん、あれ何？」

「ん？」

ゴミの山の先にあるデスクトップ・コンピューターの部品に興味を示したのか、フリスクは指しながら訊いてくる。……うわ、ぼこぼこになっとな。

「あー……………これも一応コンピューターだよ。結構古い型だけどね」

「ふーん……………」

近付いてコンピューターを観察して、フリスクにそう言う。……………うん、大分古い型だな。ゲームだと中身はないってなっただけど……………博士かアルフィスが使ったのか？

そんな風に思いながらコンピューターから離れ、次はクーラーボックスに近付いていく。確か宇宙食が入ってんだっけ。……………そういえば宇宙食ってバーみたいなのやっしか

見たことないんだけどどんななんだ？

「……………？ クーラーボックスだ」

そう疑問に思っていると、フリスクが近付いていってクーラーボックスをペタペタと触る。開けられると分かったのか、ボックスの蓋に手をかけて開けると、ギィ、と軋む音が響いた。

「なんかあつたー？」

「……………うん、バーみたいなのが二個あるー！」

あ、やっぱりバーみたいなのやつなんだなとか思いつつ、ボックスの中に手を突っ込むフリスクの傍に行く。

「……………これ、なんだろう？」

「あー……………宇宙食じゃない？」

「え？ そうなの？」

「ほら、前テレビでやってたじゃん、宇宙特集。あれでこんなの出てなかった？」

「あ！ 確かに！」

興味深々といった様子で宇宙食を見るフリスクに答えてやり、私もよく見てみる。

……………味とかどっかに書いてないかな？

「どうするよ、持っていく？」

「うん、一つだけ」

「分かった。じゃあ入れとくから貸して」

フリスクから宇宙食を受け取り、リュックを前に持つてくる。……あ、良かった、中身のアイテム潰れてねえ。

これで潰れてたらヤバかったな、と思いつつ、宇宙食をしまい、リュックを背負い直す。

それを見てフリスクは今度は浮いているDVDケースへと近付いていく。……確かアニメのDVDケースだったはずだけど、なんのアニメだろう？

ざば、という音を立てながらフリスクがケースを自分の目線の高さへと持つていく。

「……………なんのアニメだろう、これ」

「んー？ちよつと見せてみ？」

フリスクからケースを借り、タイトルを見てみる。大分掠れてしまっているタイトルから辛うじて『ミュージューキヤット』と読む事が出来た。……あ、じゃあこの引つ掻き傷はまさかアルフィスの……？

なんとなくそう察しながら開けてみようとする。……あ、駄目だ、開かないわ。

どうやら固く閉じられているらしく、全く開かなかった。

「『ミュージューキヤット』だつてさ」

「ふーん……開かないっぽい？」

「うん、ビクともしない」

私がそう答えると、フリスクはちよつと残念そうな顔をしながらそっか、と言つて頷いた。

ケースを水面に戻し、視線を元に戻して右斜め前に持つていく。すると、ルインズで相手になってくれたダミーがあつた。……居たよ、やっぱり可愛い顔してんな。

「あれ？ダミーだ」

フリスクもマッドダミー君に気付いたらしく、マッドダミー君に近付いていく。私もマッドダミー君に近付いて、少ししやがんでマッドダミー君に目線を合わせて微笑み、ルインズでしたように頭をそつと撫でておく。

「こんにちは、ダミー君」

「こんにちはー！」

フリスクもにつこりと笑つて私に続いて挨拶をする。その間、私はマッドダミー君の足元をしてみる。……よく見たら若干浮いてんじやねーか。

そんな風に思いながら五秒ほど撫でたあと、頭から手を外してマッドダミー君にさよならの意味を込めて手を振る。

「行くうか」

「うん！」

マッドダミー君の前を通り抜け、フリスクと一緒にゴミ捨て場から去ろうとする。すると背後で、

ざぼり

と、水の音がした。

「……お姉ちゃん、今の音聞こえた？」

「…聞こえたよ」

フリスクにも聞こえたらしく、私に確認してくる。それに是の返事を返し、フリスクと一緒に後ろを振り返ってみる。すると、先程まで肌色のような色だったマッドダミー君の色が橙色へと変わり、水面へと潜り、水中を移動しざぼりと大きな音を立てて私達の前に再び姿を現した。

「馬鹿め！このオレを傷つけられるとでも思ったか??」

先程までの静かだったマッドダミー君は個人的には結構好きな声でそう言った。……一瞬どつかの聖剣の妖精思い出したやつは拳手な。

ヴァカめ！という幻聴が一瞬間こえて笑いそうになるのを押し殺し、マッドダミー君を見上げる。

「……これは驚いた。生きてたんだね、君」

……というか、この台詞ってことはマッドダミー君を殴った事になるんだけど、あれは傷付けた判定に入るのか？

と思い、マッドダミー君を見上げながら思索する。……『Player』が『ぶちのめす?』で『はい』を選んだのか？そのせいで私のなでるが攻撃だつて認識されたのか？

そんな事を思索していると、マッドダミー君は律儀に私と目をあわせてくれる。

「……まあ、生きてるとは言い難いんだが……オレはダミーに取り憑いてるゴーストだ」

……あ、いい子だ、この子。

律儀に答えてくれたマッドダミー君にそんな事を思う。

「オレのいともこれに取り憑いてたんだ。お前達が……」

ゴーストいとも関係多すぎない？

そんな事をのんきに思いつつ、マッドダミー君の言葉を待つ。

「お前達がやってくるまではな！」

やっぱりルインズの彼のことかと思いつつ話聞く。

「いとこは楽しいお喋りを期待していたのに……お前達が言ったことと言えば……！恐ろしく。ショッキング！とんでもないものだった！いとこが怯えてダミーの体を捨て

て逃げる程にな！」

「え、そんなこと言ったっけ私。ただ普通に挨拶しただけなんだけど……」

「ぼくも……」

マツドダミー君の言葉にフリスクと揃って困ったように言ってみれば、マツドダミー君は驚いた顔をした。

「は？ そうなのか？」

「うん。さっきやったように撫でながら挨拶しただけなんだけど……」

「それだよ!!!」

「ええ!!?」

理不尽な理由に思わず声をあげてしまう。うっそだろおい。

「人間！ お前達のソウルも恐怖で引きずり出してやる！」

マツドダミー君がそう言った瞬間白黒に切り替わった世界を見ながら、私は切実に思った。

テラ理不尽である、と。

63. マッドダミー戦

〔Lily〕

*Mad dumdumy brocky the way!

ふわふわと同じ目線くらいの高さに浮いたままのマッドダミー君を見据えながら、玩具のナイフをポケットから取り出して構える。……ちなみにマッドダミー君とナプスタ君の曲は私の中でも結構上位の曲だったりする。

フリスクが『ACT』に手を伸ばすのを見ながら、私は戦闘終了条件を思い出す。……あー、ナプスタ君が来るまで耐久か……うん、しまうか、これ。

*MAD DUMMY-ATK 30 DEF YES

*
Because they're a ghost, physical attacks will
『哀れだな。哀れだな！哀れだな！』
「何が？」

何言ってるのコイツと一瞬思いながらナイフをしまい直し、周りに現れた小さいダミー君達から発射される綿っぽい物をフリスクを抱き上げて回避し続ける。ゲーム通

りにマッドダミー君に当たるように立ち回ると、

ドストロス

という綿が出しちやいけない音がして、マッドダミー君に上手く弾幕が当たる。……よっしゃ。

『うぐううう、ダミーども!!その魔法攻撃はちゃんと狙え!』

マッドダミー君は苦しみながらちびダミー君達に大きな声で指示を出し、はっと気付いたように私を見る。

『……おい!お前!今言った魔法については忘れろよ!!!』

だが断る。

焦っているような顔をするマッドダミー君に心の中でそう返す。

*Mad Dummy is looking nervous.

魔法攻撃は効く事がバレたんだしそりや心配するわな。……まあそこを容赦なく突いていくんですけどネー。

内心悪い笑みを浮かべながらフリスクが『ACT』を押すのを見る。……俗に言う

お姫様抱っこってやつだから顔が近い。かわいい。

*You talk to the DUMY:

アナウンスに合わせてフリスクがパクパクと口を動かす。

*……………

*It doesn't seem much for conversation.
 *None is happy with this.

会話は成立しなかつた模様。……まあ相手が興奮してたらそりやあね……。

『お前を倒してソウルを奪つてやる!』

「……………ああ、そう」

マッドダミー君に向かつて思った以上に冷たい声が出たのに自分でも驚きながら、ちびだミー達から飛んできた綿を避け、また当たるように立ち回る。

*Mad Dummy glares into a mirror, then turns to you with the same expression 《Mad dummyは鏡を食い入って見つめていたが、そのままこつちを振り向いた》。

アナウンス通り、ゴミの山の中腹辺りを見つめていたマッドダミー君がギロリと此方を睨んでくる。……元々が可愛い顔だからかそんなに怖くねーな。

そんな風に見いつつ、フリスクがマッドダミー君を見逃そうと『MERCY』を押しそうとするのを見て、再び動けるようにしっかりと抱き直す。

『お前のソウルで結界を通り抜けるぞ!』

「……………へえ」

私の中で一瞬殺意が膨らみかける。それをなんとか抑え込みながらまたマッドダミー君に当たるように立ち回り、着実にダメージを与えていく。……あ、一発外した。

*—Mad Dummy is doing an armless skadance 《Mad dummyは腕が無いのにスカダンスを踊っている》。

……スカダンスつてなんぞ。

そう思いながらアナウンス通りダンスを躍りながら飛び回るマッドダミー君の動きを出来る限り予測する。……軌道はゲームと大体一緒らしいな。なら見ながら避ければ当たるか？

腕の中でピツと音がした。

『そして高級店のショーウィンドウに並ぶのだ!!』

一瞬近くのブランドの店のショーウィンドウにマッドダミー君が混じっている風景が浮かんで笑いそうになるのを堪え、動き回るマッドダミー君に当たるようにまた立ち回る。やはり見ながら避けるというのは難しく、上手く当たらない。……あ、当たった。よっしや。

*Smells like a clothing store.

するか……？

疑問に思いながら嗅いでみる。……あー、うん、独特な匂いがするわ。

ピツと音がして、会話が進む。

『オレは欲しいものを全部手に入れる!』

……はは、やれるもんならやってみるよ。

心の中でそんな事を思いながら綿を避けてマッドダミー君に当たるようにする。
……お、よし、当たった。

*—Mad dummy is getting cotton all over the dialogue box 《テキストボックスはコットンまみれになっている》。

いや何処だよテキストボックス……

アナウンスに思わずツツコミを入れ、さらに動き回るマッドダミー君を見据える。

ふと、『MERCY』を押しながらフリスクが口をパクパクと動かした。

『ん? あーそうそう、ついでにいとこの仇もとるぞ』

……『ついで』? おい、コイツまさか、ソウル狙う口実にいとこ利用したのか? ……
うわ。

一瞬にしてマッドダミー君の評価が下がる。……うわダミーズが飛んできた。あぶね。

当たらないように立ち回り、マッドダミー君に当たるように仕向ける。

*Mad dummy is getting cotton all over the dialogue box.

ピツと、また腕の中で音がする。

『なんて名前だっけな……?』

名前さえ覚えてないんかい。

「……………うわあ、どんだけだよ。ソウルを狙う口実にいいところを利用した挙げ句、名前まで忘れるとか……ないわー」

「うぐつ、う、うるせえ!!」

「あ、口に出てた?めんごめんご」

「お、お姉ちゃん……?」

煽るつもりで思っていた事を言いつつ、飛んで来るちびダミーを避け、綿の弾幕をマッドダミー君に当たるように立ち回る。……………正直言つて、腹が立つ。

*Smells like a clothing store.

驚いたように私を見るフリスクに笑みを返すと、安心したかのようにフリスクはマッドダミー君に視線を戻し、『MERCY』に触れる。

『とにかく。とにかく!』

話を逸らすかのようにそう叫ぶマッドダミー君に冷たい視線を送りつつ、また避けて

マッドダミー君に当たるように仕向ける。……うし、上手く当たった。

*Mad dummy is getting cotton all over the dialogue box.

だから何処だよ、テキストボックス……

ピツと音がして、ターンが進む。

『無駄だ。無駄だ！無駄だ！』

おい、奇妙な冒険を思い出して笑いそうになるじゃないか。どうしてくれる。

一瞬間の中でラツシュが再生されて笑いそうになるのを堪え、飛んできたちびダミーを避け、また当たるようにする。……あと何ターンだ？

『おいお前達!!』

マッドダミー君がちびダミー達に怒鳴り声で呼び掛けると、ちびダミー達がひよっこりと顔を出す。……正直言って可愛い。撫でたい。

『バカ。間抜け！木偶の坊！オレに撃つなって言っただろ?』

ちびダミー達に荒んだ心をちよつと癒されていると、マッドダミーがちびダミー達に怒鳴り出す。

『うぬぬ……失敗作どもが！全員クビだ！選手交代!!』

そうマッドダミー君が怒鳴ると、しょんぼりした様子でちびダミー達は下がっていつ

た。……失敗作は言い過ぎだと思っぜ……？

『ハハハ。ハハハ！ハハハ！オレの本当の力を見せてやろう！クズどもとは格が違うぞ!!』

勝利を確信したかのように笑うマッドダミー君を見ながら、私は次の弾幕の対処を思案する。……次は確かミサイル（ロケットっぽかったけど）型の追尾弾幕だったはず。だったらその対処は……

*Mechanical 機械 whirrs 音 fill 聞 the こ room. え

そうアナウンスが流れた通り、機械の作動音が聞こえてくる。

ピツ、と腕の中で音がした。

『ダミーロボ!!マジックミサイル!!』

マッドダミー君がそう呼び掛けると、今度は機械で出来たダミーが現れ、腹の辺りを開いてミサイルを発射してくる。

「おおっと!!追尾か!」

予測通り、追尾弾幕だったミサイルを連れてぐるりと円を描くように大きく走り回り、マッドダミー君の前で突然しゃがんで、偶然当たったかのように立ち回る。ボンツ、という何かが破裂する音が背後で聞こえ、弾幕が上手く当たった事を確信し内心ガッツポーズをする。……よし。

*
 M^Ma^d D^du^mm^y i^s b^os^siⁿg a^ro^un^d i^ts b^ul^le^ts.
 聞こえてくるアナウンスを聞き流しつつ、私はフリスクを抱え直す。……落したりしたくないし。
 ピツという音がした。

『ダミーロボ!!もう一度だ!!』

マッドダミー君がそう指示すると、またダミーロボが現れ、ミサイルを発射する。それをまた走って避け、当たるように立ち回る。……よし、当たった!

* M^Ma^d d^du^mm^y i^s h^op^piⁿg m^ad.
 は狂ったように跳ねている。

アナウンス通り、マッドダミー君は狂っているかのように跳ねながら少し焦っている様な顔をしていた。……ここまですればもう少しだった筈。頑張らなきゃな

ピツという音がした。

『ダミーロボ!お前らまで??』

マッドダミー君は焦ったような声でそう言うのを聞き流しながら飛んできたミサイルを避け、走り回り、当たるように仕向ける。ボン、とミサイルが破裂する音が響いた。

* M^Ma^d D^du^mm^y g^la^re^s iⁿt^o a^mi^rr^or, t^heⁿ t^urⁿs t^o y^ou wⁱt^h t^he s^am^e e^xp^re^ssⁱoⁿ.

これで何ターン目かと思案しつつ、周囲に目を光らせる。
ピツ、と音が聞こえた。

『ダミーロボ！これが最後だ!!』

やつとかかと思いつながら飛んできたちびダミー達を避ける。

「!! お姉ちゃん後ろ!!」

「えっ」

切羽詰まったフリスクの声で後ろを振り返ると、ミサイルが直ぐそこまで飛んできていた。これは不味いと咄嗟に身を捻り、フリスクに当たらないように背中を向けてミサイルを受ける。ボン、という破裂音が聞こえ、腰から背中に激痛が走った。………いつてえ。忘れてたな、これ。

痛みをぐつと堪え、尚も飛んで来るちびダミーを避け、ダミーロボから発射された無数のミサイルを大きく立ち回って避け、マッドダミー君に当たるようにまたしやがんだ。ボン、という破裂音が幾つも聞こえ、何発か当たった事に安堵する。

ゆつくりと立ち上がってマッドダミー君を見上げると、焦ったような顔をしていた。………まずいでも思っているだろうか。

心配そうな、泣きそうな顔で私を見るフリスクを水の上に降ろし、心配かけてごめんねという意味を込めて頭を撫でてあげる。すると、

『知ったことか。知ったことか！知ったことか!!』

マッドダミー君の声が聞こえ、私はマッドダミー君を見ながらポケットから玩具のナイフを取り出して、出来るだけ刃に近い部分を持つ。

『友達なんていらぬ!!』

強がり言いながらマッドダミー君は何処からともなく本物のナイフを取り出した。

……錆び付いていない。当たったら絶対痛いな、あれ。

『このナイフさえあれば!!』

そう叫ぶ声と共に、ナイフが飛んで来る。私はフリスクを後ろに庇い、玩具のナイフの柄でナイフを足元に叩き落とした。

『あー……ナイフ無くなった。』

焦ったような顔をするマッドダミー君を、私達はじつと見つめた。

『でもそれが何だって言うんだ!!』

もう殆ど自棄になっているマッドダミー君が叫ぶ。

『お前はオレを倒せないしオレはお前を倒せない!』

まあ物理攻撃無効だもんなお前……と思いつながらすげえ動きをしているマッドダ

ミー君を見つめる。

『お前はここでオレと共に大ハマリとなるのだ!!』

今後の展開を知っている私からすれば、それは違うよと論破したくなる発言だがスルーする。

『永遠に。』

……違うよ。

『永遠に！』

違うよ。

『永遠に!!!』

ふと、フリスクを見てみると、出られないという事に顔を真っ青にしていた。……大丈夫だという意味を込めて撫でてやると、フリスクは私に抱き付いてくる。……うぐ、背中いてえ。

『アハハハハハハハハハ!!!』

自暴自棄になって狂ったように笑い続けるマッドダミー君の声を聞きながら、フリスクの頭を撫でる。あの子程じゃないな、と呑気にそんな事を思っていると、マッドダミー君の上から雫がぼたりぼたりと落ちてきた。……来てくれたか。

『な……なんだこれ!?!』

無数の雫がマッドダミー君の上に降り注ぎ、着実にダメージを与えていく。それに気付いたマッドダミー君は慌てだし、やがてその正体に気付いた。

『ゲエツ!? 酸性雨だ?!』

慌ててマッドダミー君は酸性雨を避けようとする。……まあ、体が溶けたら不味いもんな。強酸性だし……

『うっわ、もういい、撤収だ!!』

流星に体が溶ける事より野望を優先出来なかったのか、マッドダミー君は逃げていった。よっしゃ。

『……………ごめんなさい、邪魔しちゃった、かな?』

マッドダミー君が逃げていくと、すうーつと上からナプスタ君が現れた。

『ぼくがやってきた途端、お友達が行っちゃったね……………ああ……………三人とも楽しそうにしてたのに……………ああ……………ただ挨拶したかっただけなのに……………』

どこがだと思いつつ、少し不安そうにそう訊いてくる彼に、私は笑顔で首を横に振る。

「ううん、迷惑じゃないよ。寧ろ助かったよ。ありがとうね」

「そう……………?なら、良かった……………ああ……………」

すうーつと彼が消えていくと同時に、背景が白黒から切り替わり、色が着いていく。……戦闘が終わったんだな、と思うと、力が抜けたのか背中痛みが急に強くなった。

……………いつてえ……………

「ええつと……………ぼくは家に帰るけど……………」

ふよふよも浮かびながら、ナプスタ君は私達にしどろもどろに呼び掛ける。

「あの……………んーと……………来たかったら一緒に来てもいいよ……………」

無理強いはいしないから、と、忙しいなら来なくてもいいよ、ともだんだん小さくなる声で付け加えながら、ナプスタ君はそう言った。……………可愛い。

「気にしなくていいよ……………ただ誘ってみただけだから……………」

そう言つてふよふよとナプスタ君は廊下の奥へと進んで行つた。それを見送りながら、私はリュックを前に持つてくる。……………良かった、リュックには被弾してなかったみたいだ。まあ痛むの腰辺りだしな、心配はしてなかったけど……………

中からナイスクリームを引つ張りだし、袋を破つて退け、ナイスクリームにかじりつく。……………甘い。美味しい。

アイスを夢中になつて食べていくと、腰のジンジンとした痛みがすつと消えていった。恐る恐る怪我したであろう部分を触つてみて、痛みが無い事を確認する。……………うん、大丈夫そうだ。

「大丈夫……………?」

「うん、もう平気。心配しなくて大丈夫だよ」

心配そうに私を見るフリスクに笑いかけ、くるくると回つてみせる。すると、ようやく安心したのか、フリスクはほつと息をついた。

「……で、どうするよ。ナプスタ君の家、行く?」

話を逸らす意味も兼ねて、どうするかをフリスクに訊く。フリスクは少し考えて、笑顔で頷いた。

「うん!! せっかく誘ってくれたんだもん、行かなきゃ損だよね!」

「あはは、そうだね」

うん、まあそう言うだろうとは思ってたけどな。……あ、そうだ。

「じゃあ、行こうお姉ちゃん!」

「あー、ちよつと待って」

「?」

意気込むフリスクに待ったをかけ、パーカーの袖を捲って水の中に手を突っ込む。

「……何してるの……?」

私の行動に疑問を持ったのか、フリスクが不思議そうな顔で訊いてくる。それを一旦聞き流し、水の中を探る。……あれ、ここら辺だったはず……有った有った。

叩き落とした辺りを探り、掴んだ物を水の中から引つ張り出す。ざば、という音を立てて現れたそれを、私は振るって水気を払った。

「これ探してたんだよ」

「それって、さっきの……?」

フリスクは驚いたように私の手の中にある物を見る。……まあ、そりや驚くよね。

「持ってきたカッターなくしちゃったからさ。何時までもこれ使ってる訳にもいかないし、代わりになりそうじゃない？」

「そうだけど……」

言い訳のようにそう理由をフリスクに並べ立て、ハンカチを取り出し、刃の部分を見るのでポケットにしまう。……うん、サイズも軽さも大丈夫そうだ。

「さてと、行こうか」

「……うん」

フリスクに笑いかけ、手を繋いで先に進む。……これで、いざというときは大丈夫だな。

私はナイフを手に入れた。

64. ナップスタブルツクとデート

〔Lily〕

水からあがり、道なりに進むと、やがて薄く光が見えてくる。……次のエリアはセーブ部屋と分岐も兼ねてるんだっけな？

そう思いながら進んでいくと、視界が開けた。辺りをキョロキョロと見渡し、道を確認する。……うん、間違いはないっぽい。

「ねえ……」

「ん？」

こちらに背を向けて浮遊していたナップスタ君が振り向いて、呼び掛けてくる。それに反応し、ナップスタ君と目を合わせる。

「この上に家があるんだ……もし見たいなら……それとも……見たくないなら……」

少し坂になつている真ん中の道の上でナップスタ君はそう言つて道の奥へとすーっと滑るように奥へと消えていった。

「……………どうする？先にナップスタ君の家行くか？」

「そうだね、先に行こう！……あ、でもちよつと待つて」

私がそう訊くと、フリスクは迷わずに頷いた。そして直ぐ目の前にあつた光に触れ、手を空中にさ迷わせる。

「よし、これで大丈夫！行こう！」

たたたと真ん中の道の坂道を駆け上がって行くフリスクの後を、私も追つた。

緩やかな坂道を上がって行くと、二つ仲良く並んだ控えめな青が基調な家と鮮やかなピンクが基調の家が見えた。

「おお、凄い家だね！」

「そうだね……」

鏡写しのようなその家に目を輝かせるフリスクに頷きながら、私はピンクの家の方を見る。……こつちが、メタトンのゴーストだった時の家なんだよな。ここの鍵、確かにキャシーちゃんとブラッティーちゃんの店で手に入るんだっけか。……お金足りるかなあ。

コン コン コン

そんな事を考えながら、青いナップスタ君の家のドアの前に立って、ノックを三回する。……ノック二回はトイレだからね。

「お邪魔しまーす」

「お邪魔しまーす！」

ドアノブに手をかけ、扉を開けて中に入る。ざっと見た所、中はゲームで見た通りの造りになっていて、やっぱり此所はゲームの世界なのだと思い知らされた。

「ああ……本当に来たんだ……」

家の中に入ると、黒いヘッドフォンをしたナプスタ君が驚いたようにそう言いながら出迎えてくれた。その言葉に驚いたような顔でfrisスクは口をパクパクと動かす。

「ごめん、ぼく……それは想定してなくて」

本当に来るとは思ってなかったのか、ナプスタ君は申し訳なさそうにそう言った。frisスクはそれを知るとふるふるとして首を横に振った。

「何も無いけど、くつろいでいってね」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

私はそう言って部屋の端にリュックを降ろし、その隣に座って家の中を今度はゆっくりと見渡す。……ボロいにはボロいけど、ある程度と掃除はされてるみたいだ。そこまで汚くないな。……あ、CD発見。

そんな事を思いながら壁に寄りかかってぼーっとしていると、ふと立っていたfrisスクがテレビへと近付いていった。

「あ……それぼくのテレビ………お気に入りショールを見てるんだ……ときどきね

……」

「へえ……」

……メタトンのシヨーだろうか？

なんとなくそう察しながら頷いておく。……メタトンの正体が行方不明になった従兄弟だつて知つたら、どうなるんだろうな。

そう思いながら冷蔵庫の前に立つたフリスクを見る。

「あつ……お腹空いてるの……何か食べ物持つてくるね……」

そう言つてナップスタ君はすーっと冷蔵庫の前まで移動し、ガチャリと冷蔵庫を開けて、半透明なサンドイッチを取り出した。……あれがゴーストサンドイッチか？

「ゴーストサンドイッチだよ……食べてみる……？」

サンドイッチを差し出すナップスタ君にフリスクは頷き、サンドイッチを取ろうとする。すると、するつと手が通り抜けてしまった。

「あつ……気にしないで……」

そう言つてナップスタ君はサンドイッチを冷蔵庫にしまった。

「お腹いっぱい食べた後は床に寝転んでゴミのような気分になるのが好きなんだ……」

話し出したナップスタ君にゴミのような気分つてなんだと思わず心の中でツツコミを入れる。……一瞬「人がゴミのようだ！」って脳内再生されて笑いそうになったのは

ナイシヨ。

「我が家の伝統なんだけど……一緒に……やってみるかい……」

ナプスタ君にそう訊かれると、フリスクは迷わず頷いて私を見る。

「お姉ちゃんもやる？」

「……………んー、そうだね。やるよ」

私が頷きながらそう言うと、ナプスタ君とフリスクは嬉しそうに顔を綻ばせる。……めっちゃ可愛い。

「わかった……ぼくに続いて……」

そう言ってナプスタ君はフリスクと一緒に部屋の真ん中辺りにまで移動し、床に寝転んだ。フリスクもそれに習い床に寝転び、楽な体勢になる。私も習って床に寝転び、天井を見る。

「いくよ……君が動かないかぎりずっと寝転び続けるよ。だから……起き上がりたいた時は動くといい、と思うよ」

そんな声を聞きながら、高い天井をぼーっと見つめる。……これ、ゲームだと宇宙空間になってたけど、あれどうなってるんだ……？宇宙の塵的な意味なの……？

どうでもいい事で頭を動かしながら、天井を見つめ続ける。しばらくすると、無限大の宇宙の景色が見えてきた。……これマジでどうなってるの？

若干混乱しながら宇宙を見つめることしばらく。ふと、フリスクが立ち上がった。

「ああ、楽しかった……ありがとう……」

フリスクが立ち上がったのを見て、ナップスタ君もそう言いながら体を起こした。私も体を起こし、立ち上がってフリスクを見る。

「……行く?」

「うん、行かないきゃ」

フリスクが頷いたのを見て、リュックを背負い直し、ナップスタ君に笑顔を向ける。

「じゃあ、お暇させてもらうね。ありがとう、誘ってくれて」

「ううん……こっちこそ……」

私がお礼を言うと、ナップスタ君は頭をふるふると振る。

「あ……隣で……牧場やってるから……良かったら見ていつてね……」

「うん、ありがとう。じゃあね!」

お邪魔しましたー、とフリスクと一緒に言っただけで、扉を閉める。

「……さしてと。」

少しソワソワしているフリスクに私は笑いかける。

「さしてと。フリスク、牧場行く?」

「！ うん！」

迷わず頷いたフリスキの頭を撫でてから、牧場へと向かって歩き出した。

65. Waterfall 探索⑬

〔Lily〕

ナプスタ君経営のかたつむり牧場を見に行つて戻つて来たところで、次は左側の川に挟まれている道へ進む。……ちなみにレースは負けたよ。かたつむりが緊張のあまりガチで燃え上がるとは思わなかった、うん。

「……あれ、鳥さんだ」

道の先に居る黄色い鳥を見て不思議そうにフリスクがそう言つて、近付いていく。……おお、案外大きいな。

「やあ、こんにちは」

私も黄色い鳥に近付いて話しかけてみると、くりくりとした黒い目でじつと私を見つめてきた。少し屈んでそつと黄色い鳥を撫でてみると、気持ちいいのか目を閉じてふわふわの羽毛の体を手に擦りつけてきた。……かわいいな。いや、一番可愛いのはうちの妹だけだよ。

そんなことを思いつつ、手を離して黄色い鳥から少し離れる。すると、フリスクが黄色い鳥に話しかけた。

「……………」

フリスクが口をパクパクと動かして、その後首を縦に振ると、黄色い鳥がフリスクが伸ばした手に飛び乗り、腕を登って頭の天辺まで登る。そこで、ああ、対岸に移動させてもらうことにしたのか、と納得した。

パタパタ　パタパタ

フリスクの頭の天辺まで登りきった黄色い鳥は、一生懸命羽を動かして、フリスクを持ち上げて飛ばうとする。

「……………おお」

ふわり、とフリスクの足が地面から少しづつ離れていく。少しづつ離れて、地面から5、6センチ浮いたぐらいで、危なっかしい飛び方で対岸へと飛んでいく。……………こつわ。

ゆっくりと対岸へとフリスクを運ぶ黄色い鳥を水に落ちないかとひやひやしながら見守る。やっと対岸に着いたところで、危なっかしいけどゲーム通り落ちる事はなさそうだと安心して、息をついた。

すぐにまたこつち側に戻って来たフリスクと黄色い鳥を抱きしめるようにして受け止め、ゆっくりと地面に降ろす。

「どうだった？　浮いて対岸に行く気分は」

「うん、気持ち良かったよー」

「そっかあ。……ありがとうね、鳥さん」

ぴい、とフリスクの頭の天辺に乗ったままの黄色い鳥が私の言葉に答えるかのように鳴いた。そして、じっと私を見つめてくる。……もしかして……

「……私も運んでくれようとしてる?」

思い当たった事を黄色い鳥にそう訊くと、こくりと首を縦に動かした。……マジか。

「あー……私重いし、遠慮しとくよ。ありがとうね、運んでくれようとして」

そう言っただけでながら地面に黄色い鳥を降ろしてやり、フリスクから離れる。

「行こうか」

「うんー」

私の言葉にフリスクは頷くと、黄色い鳥に手を振ってから私の先を進んで行く。……

あと行つてない所、彼処かあ

道なりに進んですぐに左に曲がり、ゲームだった時は左上の道を進んで行く。……

次は、確かアンダインの家があったはず……

「あ、お家だ」

坂をあがると、魚の形をした家が佇んでいた。……ああ、うん、やっぱり。

自分の原作知識が仕事をしている事に安堵し、私はドーム状の家をよく観察する。
……大体ゲームで見た通りだけど、結構大きいな。

「誰の家だろ……」

「……………アーンダインの家だよ」

「うおっ!? ……ああ、君かあ」

知ってるけど知らないフリをして眩くと、聞き覚えのある声が横から聞こえた。驚いて横を見ると、見覚えのあるダミーが此方に背を向けて佇んでいた。……そう言えば居たな、コイツ。

「マジか。アーンダインの家なのか?」

「ああ、そうだよ」

「ふーん……………ありがと、教えてくれて」

親切にも答えてくれたマッドダミー君にお礼を言つて、興味津々といった様子で家を調べていたフリスキの肩を叩く。

「この家、アーンダインの家だつてさ」

「え……………」

少し顔を青くして、家から一步後退りするフリスキ。……あー、教えなければ良かったか?

「まあ、来る機会があるかもしれないし、覚えておいて損はないと思うよ?」

「……そうだね」

私の言葉に少し考えてからフリスクは頷き、家をじっと見つめてから視線を逸らした。

「行こう!」

「そうだね。じゃあね、マッドダミー君」

一向に此方を向かないマッドダミー君に手を振って、先を進みだしたフリスクの後を追った。

66. Waterfall 探索⑭

〔Lily〕

セーブエリアでまたもう一度セーブをして、先に進む。……あー、次のエリアも確か分岐だったっけ。

「テミー村って何処にあるんだろうねー」

「さあ……看板にも書いてなかったしね。見つけられたらラッキーだけどさ」

先程見た看板に書いてあったテミー村の話をしながら、道を進んで行くと、道の左端に茶色い箱のような物が見えてきた。

「あ、ボックスだ。お姉ちゃん、荷物整理してく？」

「うーん、そうしようかな。ちよつと重くなってきたし」

そう言つてボックスに近付いて、ふと左を見るとほっかりと穴が空いていた。……あ、そっか。ガーソンさんの店も此処だったっけ。

ボックスの蓋を開き、リュックを降ろして真つ先にチュチュとトウシユーズを綺麗にしまふ。ふと、店の入り口に立っていたフリスクのつけっぱなしだったバンドナと手袋を見て、手袋は外しておくかと思ひ至る。

「フリスク、手袋破くといけないし、しまうから貸して？」

「うん、いいよー」

フリスクから手袋を預り、私が着けていたのと一組にしてボックスにしまう。……あとはどうしようかなあ。回復アイテム：あんま減ってないんだよなあ……

悩みながらアイテムを出したりしまったりして、整理をようやく終わらせて立ち上がり、リュックを背負い直す。

「お待たせ、終わったよ」

「待ってないよー。行こう！」

そう言ってフリスクはお店の中に入っていく。私も中に続いて入った。

「こんにちはー」

「……おお？いらっしやい！いいガラクタを売つとるぞい」

一応声をかけながら店に入ると、私の声に気がついたのか、後ろを向いていた亀のモンスターが此方を向いた。

「……王女……？」

「えっ」

此方を向いた亀のモンスター、ガーソンさんが私を見て目を見開いて固まった。……

『王女』って、まさかCharaちゃんの事か？

「……ああ、すまんの。少し……お前さんが知り合いの子供に似ておつてな……」
「はあ……そうなんですか……」

頭を振つてからまた私を見て、懐かしそうに目を細めるガーソンさん。……Char aちゃんに会つた事があつたのか、この人。長生きしてそうだなあ

「すまん、この年になるとどうも見間違ひが多くなつてのお……ちよつと待つとれ」

そう言つてガラクタの山の中を探し出すガーソンさんを見る。……この人、結構優しいモンスターだつたはず。が『子供』つて言うつて事は、やっぱりChar aちゃんはトリエルさん達に大切にされてたのかな？

そんな事を思いつつ、フリスクと一緒にガラクタの山を見渡す。……多すぎだろ。
「おお、あつたあつた」

あまりの多さに口元が引き吊るのを感じながら、ガラクタの山から何かを持つて戻つて来たガーソンさんを見る。

「これ持つてけ。ちよつとした詫びじゃ」

「……………!? え、これ……」

ガーソンさんに押し付けられるように手渡されたのは、古びたノートと曇つた硝子の黒縁の眼鏡だつた。どう考えても人間用のそれは、六人目の子の物だと確信する。

「い、いいんですか!? これ……商品じゃ……?」

「ワツハツハ！いいんじや！処分に困ってたし、使われないで腐るよりマシだしの」

思わず驚いて聞き返してしまう。すると、ゲームで見た通りの豪快な笑みをガーソンさんは浮かべた。そこで、ああ、この人前王国騎士団団長だったなと思いついた。

「……お前さんら、人間じゃろ？ きつと地上を目指すんじやろうが……」

私達を人間だと見破った上で、ガーソンさんは私達にこう頼み込んだ。

「頼むから、あの子と王……アンダインと、アズゴアを殺さんでくれ」

そう言ったガーソンさんに、私とフリスクは顔を見合わせてから頷いた。

その後、ガーソンさんと他愛もない雑談をしてから店を出て、目の前の道を進んですぐに引き返し、すぐに右に曲がって進んで行く。……えつと、次のエリアは石板があるんだっけな？

「お姉ちゃん、石板があるよ」

「あ、本当だ」

フリスクはそう言って石板へと近付いていく。私も一緒に近付いて石板を読み始める。

『傷つき、倒され、怯えきつた我々は生き残るために人間に降伏した。』

七人の大魔法使いが、魔法の力で我々を地下世界へ封印した。』

アンダインに突き落とされる前に読んだ石板の続きで間違いなさそうだと判断し、エコーフラワーが咲き乱れる中にある次の石板に移る。

『ひとつだけ封印の魔法を解く方法がある。

七人の人間のソウルに匹敵する強大な力で攻撃すれば……結界は壊れるだろう。』

……それが、『七人分の人間のソウルを集める』という事に繋がったのか、と理解した。一応、希望はあったんだと思いつながら川を越えて次の石板を読む。……うっ、せつかく乾き始めてたのに……

『しかし呪われたこの地には入り口も出口もない。そもそも人間がやってくる術が無いのだ。

我々は永遠に地下世界に囚われるのだろう。』

……当時の人は凄く絶望したんだろうな。出口は結界で閉ざされてるし、入り口は人目につかない山の中にしかなかったし。

そんな事を思いながらふと自分の見当違いに気づく。……あれ？じゃあCharaちゃんはニューホームじゃなくてルインズの方に住んだのか？でも図書館で洞窟の奥まで進んだって書いてあったし、丁度移動する時に此処に来たのか？

頭の中が混乱するのを防ぐため一度思考をストップする。……今の私の計画には関

係ないしな。

「……………行こう、お姉ちゃん」

「おう」

じつと石板を見つめてから、フリスクは静かにそう言つて、先を進んでいく。……優
しいこの子は、一体何を感じたんだらうなあ。

67. Waterfall 探索⑮

〔Lily〕

次のエリアは……ああ、光るキノコの道か。テミー村にも繋がってるんだっけ？

「……………？ あれ、道がない……………」

フリスクは困ったように辺りをキョロキョロを見渡し、右側に続いていた草の道に気付いて進んでいく。

「お姉ちゃん、こつちみたい！」

「だね。……………これから先はどういくのかな？」

「うーん……………これかなあ？」

そう言つてフリスクが道の先にあるキノコを叩くと、右手に道が現れる。……………おお、

綺麗だな。

「凄い！ こうやって進んでいくんだね！」

キノコが光るのが面白かったのか、笑つて次のキノコに触りに行くフリスク。そのすぐ後ろから私もついていく。……………ここ、確かテミーともエンカウトするんだっけ？

「わっ！」

「!! フリスク!!」

そんな事を思っていると、前に行くフリスクの驚いたような声が聞こえ、周りが白黒になっていく。すぐに入れ替わってフリスクの前に立つ。

*
S p e c i a l e n e m y T e m m i e a p p e a r s h e r e t o d e f e a t
スベシヤル敵のTemmie appears here to defeat
!!

やっぱ来たか……

そう思いながら後ろ手でフリスクの手を握り、回避する準備をする。……テミーの攻撃は殆ど手を伸ばしてきたり、体を使って攻撃する系だ。ナイフを使ったら確実に傷付けてしまうと判断した結果だ。

そんな事を思っていると、背後からピツという音がした。

* T E M M I E | R A T E D T E M M I O U T T A T E M
可愛い人間をなでるのが大好き

* L o v e s t o p e t c u t e h u m a n s .
だがあなたはアレルギーがある

* B u t y o u , r e a l l e r g i c !

測テミ不能ってなんや。思わずアナウンスにツツコミながら、テミーの動きを注視する。

『 f h s d h j f d s f j s d d s h j f s d 』

「ごめんなんて!？」

一瞬バグったか!？と焦るぐらい意味不明な言葉を並べ立てるテミー。なんて言ったんだよ……

若干動揺しながらこちらに伸ばされてくる腕をフリスクと一緒に避け続け、なんとか回避する。……えつと、見逃す条件は『話す』だったつけ？

*— Temmiy accidentally misspells her own name 《Temmiyは突然彼女自身の名前を間違ってしまった》。

……そう言えば、テミーってボブを除くと全員女の子なんだつけ？

アナウンスを聞いてそう思い出した。……ボブハーレムやん。

そんな事を思っていると、フリスクが私の後ろから横に出て来て、テミーにペコリとお辞儀をした。

*You say hello to Temmie.
あなたは Temmie に こんにちは と挨拶をした。

『ほい!! テミーさんだよ!!!』

ぶるぶると体を震わせながらテミーは律儀にフリスクにそう返答する。

その後なでようとしているのか、テミーはまた腕を伸ばしてくる。出来る限りフリスクを連れて回避しようとしてみるが、今度は速度が速くて避けきれないと判断する。

……ええいままよ!

フリスクの前に出てテミーの腕を受ける。ぽすつ、と伸ばされた手が私の頭に乗った途端、さすさすと優しく手が動かされた。……あれ？

覚悟していた痛みが来ずに、驚いてしまう。……フリスクがアレギーだったただけか？

*Temmiy accidentally misspells her own name.

すーつと腕が元に戻され、アナウンスが流れる。……まあ、なんにせよ、これで終わるよな。

*YOU WON!
あなたは勝利した

*You earned OXP and gold.
と を 得 た

フリスクが『MERCY』を押すと、そんなアナウンスが流れて背景が白黒から切り替わった。

「お姉ちゃん、怪我不い!？」

「無いよ、安心して。行こうか」

「……うん」

私を見上げるフリスクを撫でて、安心させて先に進むよう促しながら、なんとなくテミーに撫でられた事を思い出す。……誰かに撫でてもらうの、久しぶりだったなあ。

フリスクに手を引かれながら先に進む。

「……………あれ？」

最後のキノコまで辿り着き、キノコを叩いた所で道が無い事に気付いたフリスクは、困ったように私を見上げる。

「どうしよう、道が無い……………」

「あ……………あの一番最初のキノコが光ってないから、彼処に一旦戻ってもう一回叩くんじやないかな？」

「！ 成る程！」

私を見上げるフリスクに最初のキノコを指差しながらそう言えば、フリスクは一度キノコを見た後、納得したように頷いて来た道に戻って行く。

「……………？ あれ？」

「うお、どしたよ」

ふと、何かに気付いたのか突然フリスクは道の途中で立ち止まる。ぶつからなかった事に安堵しながら訊けば、何もない道の先を指差した。

「あつち、光ってない？」

「え？ ……あ、本当だ」

フリスクが指差した先を見ると、どう考えても人工的な明かりが漏れだしていた。そ

ここで、そう言えばテミー村に行けるのこの道だったかと思い出す。……どうしよっかなあ

「行ってみようよ!」

「そうだね、行こうか」

目を輝かせて誘う妹の提案を断る訳にもいかず、笑って提案を受け入れた。

「…………おほ…」

道なりに進んでいくと、広い空間に出る。そのまま左を向くと、沢山のテミーが居た。

…………結構居るな。

「…………お姉ちゃん、此所がテミー村だって!」

「此所が? マジか」

看板を読んだフリスクが顔をあげてそう言った。…………まあ、知ってたけどさ。

そんな事を思っていると、フリスクは看板の隣に集まっていたテミー達に話しかけていく。

「ほい! テミーさんだよ!! そしてこっちはともだちの…………テミーさんだよ!!」

「名前一緒やんけ」

思わず口が滑ってツツコミを入れてしまう。…………そういう種族なのか…?

幸いにもテミー達には聞こえなかったのか、そのまま会話が続いていく。

「ほい！テミーさんだよ！！そしてこっちはともだちの……テミーさんだよ！！」

「ほい！テミーさんだよ！！こっちのともだちも忘れないでね！」

「はい。ボブです」

「ブフツ」

小さい体から思っていたよりも低い声が出て思わず吹き出してしまう。……ボブ渋い声してんな……

「初めまして、ボブ。いい声してるね」

「初めまして、人間さん。初対面で声を褒められたのは初めてですよ……」

柔らかい笑顔でボブにそう言われ、対応が紳士だ……！となんか謎の感銘を受けつつ、ボブと別れる。嫌いじゃないよ、その声。

そんな事を思いつつ、光に触れてセーブを行うフリスクを近くの看板を読みながら待ち、終わった所で探索を続ける。

「この中テミーショップだって。行く？」

「行くー」

私がそう訊けばフリスクは即答で頷き、洞窟の中に入っていく。……ここで資金稼ぎ出来るかな？でも学費可哀想だしなあ……

「ほいー！ テミーショップへ……ようこそ!!」

テミーショップに入ると、『テミーショップ』と書かれた段ボールを挟んで向こう側に居る若干灰色がかった髪の特ミーが出迎えてくれる。……光の辺り加減って訳じゃないみたいだな……

そんな事を思いつつ、テミーショップの中を見渡してみる。……へえ、こんなになつてんのか。

「……お姉ちゃん」

「ん？」

「これ、売ってもいい？」

私が辺りを見渡していると、フリスクが前にあげた未使用の絆創膏を取り出しながら、その声をかけてくる。………つて待て。売る気か？

「……いや、いいけど………どうして？」

「テミーさんがね、欲しがってるの。いい？」

「………いいよ」

「本当？　じゃあ売ってくるね」

あ、欲しがられたから売るんだと安堵しながらOKを出すと、フリスクは絆創膏を売った。

「行こう、お姉ちゃん」

「うん……あ、ちよつと待って」

「？」

それ以外には用は無かつたらしく、フリスクは店を出ようとする。それにストップをかけ、私はポケットに手をリュックを前に持って来てお金を出す。

「テミーさん、テミーさん」

「ほい!!」

「手、出して」

「???
???
いいよ!!!」

座っていたテミーに声をかけて手を出してもらい、その上に自分が持っていたお金の大体3分の2を乗つけて握らせる。

「大学行きたいんだよね?これ、学費の足しにして」

そう言うと、テミーは驚いたように目を丸くする。

「え……こんなに……?」

「うん。頑張つてね」

呆然とお金を見つめるテミーの頭を撫でて、私はフリスクと店を出る。

「お金、良かったの?」

「うん。夢があるのは良いことだしね」

「ふーん……」

店から出ると、フリスクがそう訊いてくる。それに私は頷いて、フリスクの頭を撫でておく。……夢があるなんて、本当に素敵だと思うしな。

そんな事を思いつつ、すぐ近くに居たテミーに話しかけるフリスクの後ろに立つ。

「あわわわわわあ!!!にんげん……すごく……カワイイ!!!」

「でつしよー!? 可愛いでしょ、この子」

「ちよつ、お姉ちゃん!」

目をキラキラと輝かせてフリスクを見るテミーに満面の笑みでそう返す。フリスクはリアルエンジェルだ。異論は受け付けないよ? え、パピルス? あの子はリアルスターだから別物。

妹が褒められて誇らしい気持ちになりながら、顔を真っ赤にしたフリスクに手を引かれて卵を見つめるテミーに話しかけに行く。フリスクがテミーに向かって口をパクパクと動かすと、テミーは卵を見ながらフリスクに答えるように喋りだした。

「テミー……たまご見てる!!! たまご……かえる!!! テミー……立派な親になる!!!」

「そつか……孵るといいな」

……それは良いんだけど……この卵、確か茹で卵じゃなかったっけ……

テミーにとって残酷な事実になるであろう事を思い出しながら、卵を観察してみる。……うん、立派な茹で卵ですわ。

私と同じように卵を調べたらしいフリスクが困ったように見つめてくるのを首を横に振って唇に人差し指を当てて『言うな』というメッセージを伝えると、フリスクは直ぐに頷いた。そして何事も無かったかのようにフリスクは次に青と水色の斑模様のあるキノコに話しかけに行く。……あ、コイツ私がゲームだった時一番驚いた奴だ。

「きのこのダンス　きのこのダンス　なにを表すの」

フリスクが話しかけると、キノコのモンスターは降ろしていた腕と体を揺らしながら愉快に歌い出す。そして、次の瞬間、ぱつと笠を押し上げて青い目を見せる。……うわ、ちよつと怖え。

「それは私の菌糸に囚われた、内なる苦痛だ」

先程の愉快的な声ではなく、低い声で普通に話し出すキノコのモンスター。

「除けようと足掻いても。逃げようと足掻いても。悲しいかな、全て虚しく終わる」
「重いわ」

暗い事を言い出したキノコのモンスターに思わずツツコミを入れる。私のツツコミは聞こえなかったらしく、そのまま話は途切れ、フリスクは最後のテミーに話しかけにく。

「…………？」

なんとなく視線を感じ、想像よりでかかったテミーの像の隣辺りを見てみる。すると、穴の中からテミーが此方を見つめていた。……あー、そう言えば居たね、君……

「…………」

「…………」

じつとしばらく見つめ合ってから私の方から目を逸らし、フリスクが話しかけたテミーを見ると、赤い出来物が顔に出来ていた。……良い医者が見つかるといいな。

「…………これで最後かな？」

「そうみたいだね。行こうか」

「うん」

フリスクの手を引いて、テミー村から元の道を進みだした。

68. アンダーイン戦前

〔Lily〕

光る草の道に戻り、最後の光るキノコを叩く。……この道を行くと次のエリアに行くんだっけ。

「おっと、フリスク、足元危ないぞ」

「わっ!？」

出来た道を進んでいると、フリスクがまたチビカビを踏みそうになるのを腕を引き寄せて回避する。……あぶね、戦闘になる所だった。

「……あ、ごめんね、踏みそうになっちゃって」

フリスクが足元に居たチビカビにしゃがんで謝ると、チビカビは大丈夫というようにプルプルと震えてから這っていった。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「気にしないで。行こう」

「うん」

フリスクの腕を離して、また歩き出した。

光る草の道を歩き続けると、道が迷路のようになってい場所に通り着いた。……
ああ、次のエリアに来たのか。

「ランプだ……」

そう言ったフリスクがランプの上のボタンを押すと、ランプは水色の光を放った。それを見ながら、まだ新しい石板の前に立つ。

『ろうそくや魔法がなくなるとも家に導けるよう、モンスター達は移動にクリスタルを使っていた。』

石板を読んでから後ろを振り返って、ぼんやりと点滅を繰り返す紫色のクリスタルを見る。……これか。

そしてだんだん暗くなっていく事に気付き、今度は私がランプのボタンを押す。すると、また辺りが明るくなった。

「……………これを途中で押しながら進んでいくみたいだね」

「そうだね。……あ、そうだ。これが使えるかな？」

辺りを見渡して同じランプが道中にある事でそう察したのか、フリスクがそう言った。それに賛同しながら、私は急いでリュックを降ろして中から回収しておいた懐中電灯を引っ張り出す。

「あ、それ……」

「フリスクが持つて来たやつだよ。回収しといて正解だったね」

フリスクが見ている前でつけたり消したりしてちゃんとつくか確認する。……落ちた時に壊れたかなーと思っただけど、大丈夫そうだ。

「……よし、行くぞフリスク。ちゃんと着いてきてね」

「うん！」

もう一度ランプのボタンを押してから手を繋ぎ、足元を照らしながら道を進む。……

これでモンスターとの戦闘が避けられると良いんだけど……

そんな事を思いながら途中途中でランプを押しながら進んでいく。

「あ、お姉ちゃん、足元」

「え？……うおっ」

フリスクに腕を引かれてそう言われ、足元を見ると、またチビカビが横切ろうとしていた。

「ごめんね」

急いで一歩下がって謝り、チビカビが通り過ぎるのを待つ。……あつぶね。

「ありがとうね、フリスク」

「ううん、大丈夫だよ」

通り過ぎたのを確認し、暗くなる中でまた歩き出す。道を曲がってランプのボタンを押すと同時にまた明るくなった所で早足で進んでいく。

「……これで最後かな？」

最後のランプを押し、壁に沿って進んでいく。……次のエリア、覚悟しないとな。

ランプの明かりがなくなり、真つ暗な中を懐中電灯の心細い光で照らして進んでいく。……リアルホラーゲームとか一瞬思ったのはナイショ。あ、此処から水だ。

「ここから水に入るから気をつけてね」

「うん」

フリスクに注意を呼び掛けてからぎぶんと音を立てて足を水の中に入れる。……

ああ、また気持ち悪い感触が……

ぎぶぎぶと音を立てて進んでいくと、直ぐに陸があった。陸に上がり、また真つ直ぐ進んでいくと、エコーフラワーが一本咲いていた。

「……？ あれ、エコーフラワーだ……」

フリスクと一緒に近付いて、エコーフラワーが録音した言葉を聞こうと耳を澄ませる。

『お前の後ろだ』

「!!」

エコーフラワーから聞き覚えのある女性の声が聞こえ、周りが明るくなつた瞬間、背後から殺気を感じて振り返り、フリスクを守るように後ろに隠す。案の定、其処には見覚えのある鎧騎士が佇んでいた。

「……………やあ、騎士団長さま」

殺気に気圧されそうになるのを堪え、笑みを作る。対して、鎧騎士は私の言葉を聞き流したのかそのまま沈黙を貫いたまま歩みよってくる。……………ひゆう、おつかねえ。

「……………七つ」

「……………は？」

低めの女性の声が兜越しに聞こえた。少し聞きにくいその声にも、此方に対する殺気が籠っていた。

「七つの人間の魂」

また一步、鎧騎士は此方に進む。

「七つの人間の魂の力によって、我らが王……………アズゴア　ドリーマー王は……………神となる」
鎧騎士はそう言いながら、また一步進む。

「その力を以て、アズゴア王は遂に結界を破るだろう。そして地上を人類から奪い返すのだろう……………我々が耐え忍んできた痛みや苦しみを奴らに返してやるのだ」

其処まで言い切ると、鎧騎士は此方を見据えた。

「……分かるか、人間？これはお前達に出来る唯一の贖いなのだ」

「……へえ」

モンスターキッド君が来ない可能性を考えて、ナイフに巻いていたハンカチをポケットの中で取り、ナイフを出した。

「ソウルを渡せ……さもなければその身から引き摺り出してやる」

そう言った鎧騎士は、突撃の体勢を取り、その手に青白く光る槍を出現させる。それを見ながら、私はナイフを構えた。……来るか。

鎧騎士がじりじりと近付いて、此方を串刺しにしようとする。ナイフで受け流す為に構え、世界が白黒に切り替わろうとする、その瞬間。

「アンダイン!!!おいらがスケダチだ!!!」

鎧騎士の槍の切っ先と私の間に、茂みからモンスターキッド君が飛び出して来た。……ナイスエアブレイク、モンスターキッド。

状況をよく分かっているらしいモンスターキッド君は、きよんとした顔で鎧騎士と私達を交互に見つめてから、私達の方に笑顔を向けた。

「おっ!!!やったじゃん!!!アンダインの真ん前だぜ!!!たたかいを見られるトクトウセキだ!!!」

「……お、おう。せやな……」

微妙な顔を浮かべつつ、興奮した様子のモンスターキッド君にそう返す。そこで、ふと、何かに気付いたらしいモンスターキッド君はまた私達と鎧騎士を交互に見比べてから疑問を口にした。

「……あれ。たたかいの相手ってダレ???」

そこまでモンスターキッド君が言うと、鎧騎士が槍を消して彼の頬を掴んで引き摺っていく。

「ちよ、ちよつと！ 母ちゃんには内緒にして、ねっ?」

そこかい。

心の中でモンスターキッド君の言葉にツツコミを入れつつ、鎧騎士が見えなくなるまでその場から動けなかった。

「………行った、かな?」

「………みたいだね。大丈夫? フリスク」

「………はー………怖かった」

私がそう訊けば、ようやく殺気から逃れられて緊張の糸が切れたのか、へたりとその場に座り込むフリスク。

「………お姉ちゃんは?」

「ん？……うん、怖かったかなあ」

「そっか」

これは嘘じゃない。現に心臓まだばつくばくいつてるかな。寿命縮んだかと思っただわ。

落ち着く為に深呼吸を繰り返し、なんとか心拍数を元に戻す。手に持っていたナイフにもう一度ハンカチを巻き直し、ポケットにしまう。

「……フリスク、立てる？」

「……うん、なんとか」

フリスクに手を差し伸べると、手を掴み返される。それを引つ張って立たせ、頭を撫でる。

「……行こうか」

「うん」

がさりと一度茂みを掻き分けてから来た道を引き返してみる。すると、もう一本道があった。

「どうも本当の道はこっちだったっぼいね」

「ねー」

また水に入ったせいで靴が濡れて気持ち悪い感触になりながら、先を進んだ。

道を進んでいくと、蛍のような虫が飛び交い、エコーフラワーが咲き乱れる水路に出た。……うわ、綺麗だな。

ざぶ、という音を立てながら水に入り、真っ直ぐ進んでいく。

「虫だ……こんな所にもいるんだね」

「そうだね」

物珍しげに蛍のように光る虫を見ながら、フリスクはエコーフラワーに近付き、耳を澄ませる。

『……うーん……ぼくの願いを聞いても……笑わないって約束してくれる?』

エコーフラワーが遠い昔に録音した言葉を繰り返す。……オニオンサン遭遇前の所の続きかな?』

『もちろん笑わないって!』

次のエコーフラワーから急かすような声が聞こえた。

ざぶざぶと水路を進み、次のエコーフラワーの前に立つ。

『いつか、ぼくらを閉じ込めている山を登るんだ。いつか空の下に立って、世界中を見て……それがぼくの願い事』

急かすような声に観念したのか、もう一つの声が自分の夢を語り始める。その夢は、

本当に眩しいものだった。

『あははは!!』

『……もう、笑わないって言ったじゃないか!』

次のエコーフラワーからは、本当に可笑しそうな、無邪気な笑い声が聞こえ、不満そうな声が笑い声に続いた。

また進む。

『ごめんね、なんだかおかしくて……ぼくの願いたい事も、同じだから』

そこで会話は終わったらしく、その言葉をエコーフラワーは繰り返す。

「……………仲良しだったんだね」

「そうだね。……………親友だったんじゃないかな?」

「かもね」

全てのエコーフラワーに録音された会話を聞いて、そんな事を眩いたフリスクに同意する。そのままじつとエコーフラワーを見つめるフリスクを追い越し、壁にある古びた石板を読む。……………これで、終わりだったかな?」

『しかし……………こんな予言がある。』

天使……………地上を見た天使が舞い戻る時……………地下世界には誰もいなくなるだろう。』

先程ガーソンさんとも話していた時にも出た天使の話かと石板を読み終えて思う。

……ガーンソンさんもゲームだったとき同じ事言つてたけど、『いなくなるだろう』は、『地上に出れる』という意味にもとれるし、『全員死に絶える』という意味もとれる。この二つの意味のどちらかを実現するのは……

石板を読み始めたフリスクに繋がる糸を見る。何本もの糸が繋がる『先』を見ようと辿つていつても、真つ暗な天井が見えるだけだった。

「……お姉ちゃん、どうしたの？ 早く行こう？」

「ん、そうだね」

石板を読み終えたらしい不思議そうなフリスクの声に意識を引き戻し、視線をフリスクの目と合わせて頷く。すると、フリスクは水から陸に上がつて先を進んでいく。その小さな背中を追いかけた。

道なりに進んでいくと、橋が見えてきた。……ああ、もうすぐだな。

「……あ、お姉ちゃん、ここ気をつけて。壊れそう」

「了解」

先を歩くフリスクが橋の真ん中辺りの一番腐食の進んだ部分を指しながらそう言った。……まあ、湿っぽい所にずっとあればこうなるよな。

そんな事を思いながら橋の終わりまで進んでいくと、

「よっー！」

ふと、後ろから特徴的な呼び声が聞こえた。振り返ってみると、モンスターキッド君が橋の最初辺りに立っていた。フリスクが私の前に出て、手を振った。

「やあ」

「……」

笑いながら挨拶を返す。ゆっくりと、何処か強張った顔でモンスターキッド君は此方に近付いてくる。そして、フリスクから一步分の距離を開けてモンスターキッド君は立ち止まった。

「よっ、本当はここにいちやいけないうってわかってるけど、でも……どうしてもオマエに聞きたいことがあるんだ」

そう言ったモンスターキッド君は気まずそうに、逸らしていた視線をフリスクに合わせる。フリスクはなあに、と訊くかのように小さく首を傾げた。

「……こんなこと、誰かに聞くのははじめてなんだけど……うーん……」

少し間を開けて、深呼吸してからモンスターキッド君は意を決したかのように私達に問いかけた。

「お……オマエらは人間、なんだろう？はは……」

「……うん、そうだよ」

その問いに、私達は頷いた。

「わ！ わかつてたさ！……うん、今知ったんだけどね、つまり……」

一瞬強がつてから、モンスターキッド君は正直にそう白状する。

「アンダーインがおいらに言ったんだ、その、『あの人間から離れる』って……だから、その、うーん……それつてさ、おいらたちが敵とかそういうのになるつてことだよね」

コクリと、モンスターキッド君の言葉にフリスクは頷く。

「それつて、なんかイヤじゃん？ はは……だから、なんか言つてくれない？ オマエらをキライになれることをさ。……頼むよ？」

モンスターキッド君が無理して笑顔を作りながら言つたその言葉に、フリスクは少し間を開けてから首を横に振つた。

「お、おい？ おいらが言えつてか？」

フリスクのその反応にモンスターキッド君は困つたような、悲しそうな顔をした。

「じゃあ言うよ……」

一つ息を吸つて目を閉じてから、モンスターキッド君はフリスクと私に精一杯の遠慮なく嫌う為の言葉を吐き出した。

「お……お……おまえらなんてだいきらいだ」

そう言つた後、恐る恐るモンスターキッド君は目を開けてフリスクを見る。そして、

顔を強張らせた。その表情で、フリスクが悲しそうな顔してたんだらうと察する。

「あ、ああ……おいらつて最低だ。い……家にかえるね」

『友達になれそうだったやつを傷付けてしまった』という罪悪感を顔に滲ませ、逃げるようにモンスターキッド君は走り去ろうとする。そこで、

バキツ

「!!」

「えっ」

先程フリスクが指差した部分に寿命が来たのか、折れて崩れてしまった。突然の事にモンスターキッド君の体は着いて行けず、重力に従って倒れて転がる。

「わっ、つとつとつと!!」

幸いな事に壊れた部分に服の襟のような部分が引っ掛かり、橋の下に落ちずに済む。……でも、それも少しの間だ。すぐに落ちてしまう。

「助けて!! 転んじゃった!!」

フリスクがモンスターキッド君を助けようと走り出そうとした瞬間、橋の向こうから殺気を携えて鎧騎士がやってくる。そして雄叫びをあげた後、此方へとやって来ようとする。

「お姉ちゃん!」

「分かつてるよ!」

そんな事も気にせず、フリスクは私に合図をして、モンスターキッド君の元に駆け出した。私も一瞬遅れて飛び出し、モンスターキッド君を救助する。

「掴んだか!」

モンスターキッド君の服を掴み、フリスクに確認する。フリスクが頷き返したのを確認し、掴んだ手の力を入れ直す。

「せーのでいくぞ、せー………のっ!!!」

二人同時に引つ張りあげ、モンスターキッド君を受け止める。何処にも怪我がないことをぎっと確認し、橋の上にそっと降ろす。

「大丈夫か?」

「……………うん」

「そっか、ならいいんだ」

落ちかけた恐怖からか、ぼーっとしているモンスターキッド君に笑いかけて頭を撫でる。モンスターキッド君にフリスクがそっと抱きついたのを見ながら、二人の前に出る。

「……………」

ただ茫然とした様子で突っ立っている鎧騎士を睨み付け、ポケットのナイフに手を伸

ばす。……此処で戦闘になるか？

そう警戒度を上げた瞬間、モンスターキッド君が私の横をすり抜けて、私の前に出た。
「お…………お…………おい…………オマエ…………」

体と声を震えさせながら、モンスターキッド君は勇敢に、自分の憧れに立ち向かう。
「お…………お…………お、おいらのダチを傷つけるなら…………」

きつ、とモンスターキッド君は顔をあげて鎧騎士を睨み付けた。

「おいらを倒してからだ、ぞつ！」

…………ああ、なんてかっこいいんだろうか。

震えながらもそう言い切った小さな背中を見て、そんな事を思った。…………この子、将来有望だろうなあ。

流石にモンスターキッド君を傷付けられる筈がなく、鎧騎士は少し後退りして、去っていった。

「…………行っちゃった…………」

鎧騎士の背中が完全に見えなくなると、モンスターキッド君がそう呟いた。此方に振り向いたモンスターキッド君に近付いて、また頭を撫でる。

「ふう、カワー一枚つてとこで助かったよ。やっぱテキどうしになるのはダメだな。はは」

「ありがとう、少年。……さっきの君、最っ高に格好良かったよ」

「……………ほんとか？」

「ああ、本当さ。ねえ？」

私を見上げるモンスターキット君に頷き、私の隣に来ていたフリスクに同意を求めると、フリスクはにつこりと笑って首を縦に振った。

「ほらな？……でも、だからといって無茶のし過ぎはダメだぞ。もしまたこんな事になつて君が前に出て、死んだりでもしたら守れる物も守れないからね」

「……………はい」

この発言若干ブーメランだなとか思いながらモンスターキット君にそう言い聞かせる。現にフリスクからの視線が痛い。ブツブツ刺さる。

「まあ、憧れに近付けるように頑張るな」

「……………うん！ ……あつ！なあ、代わりにさ、トモダチになろうぜ！」

「ああ、勿論さ。じゃあ、今から私達は友達だ」

『友達になれる』という事が嬉しかったのか、フリスクが嬉しそうに笑うと、モンスターキット君も何処か照れくさそうな、嬉しそうな笑顔を見せた。先程の罪悪感が滲んだ顔が影も形もない程に明るい顔だった。

「……………おいら、一度家にかえるよ………親が心配してビョウキになつてるかも！」

「うわあ、そうやってたら一大事だ。早く帰りな」

冗談を言ったモンスターキッド君にふざけ返す。その掛け合いを見てくすくすと笑うフリスクの笑顔がとても可愛かった。

「んじゃ、またな！」

「おう、じゃあな」

歩き出してから一度振り返ったモンスターキッド君に手を振り、走り去るのを見届ける。姿が見えなくなったところで手を下ろして、ポケットに突っ込む。

「……格好良かったね、あの子」

「なー。大人になったら絶対にモテるぞあの子」

「………どうしよう、女の子にキヤーキヤー言われてるあの子の図が目に見え……」
「あははは！マジかあ！」

姿が見えなくなった後にフリスクがポツリと呟やいた一言に反応すると、割と迫真めいた顔でフリスクがそんなことを言うものだから思わず笑ってしまう。一頻り笑ってから気を引き締め直し、笑顔を引っ込める。

「さてと………行こうか」

「………そうだね」

ポケットのナイフに触れながら、また前に進み出した。

道を進み続けると、気のせいか段々暖かくなってきた気がした。ホットランドが近いのかと何となく察し、同時に彼女がこの先で待ち受けているのだと理解した。

「……お姉ちゃん、あの山の上……」

「ん？……ああ、居るね」

長かった洞窟を抜けると、フリスクが何かに気付いたらしく、何処かの本で見た地獄の針山のように切り立った山の天辺を指差す。それにつられて上を向くと、つい先程出くわした鎧騎士が遠くを眺めていた。……向きから考えてお城かホットランドか？

何となくフリスクが言わんとしている事を察し、手を繋ぐ。そして大丈夫という意味を込めて笑いかけると、少し複雑そうな顔をし、その後小さく笑い返してくれた。

二人で手を繋いだまま山に近付いていき、少し前で立ち止まって、山の天辺を仰ぎ見る。すると、此方が立ち止まった事に気付いたのか、鎧騎士は背を向けたまま話を始めた。

「……七つ。七つの人間の魂で、アズゴア王は神となる」

鎧騎士はよく通る声で先程言った事を繰り返した。

「六つ。我々がこれまでに刈り取ったソウルの数」

そこまで言って、鎧騎士は此方を見下ろした。

うるせつ。

辺りに彼女の高音量の雄叫びが響き、思わず耳を塞いでしまう。耳がキーンつてなったわキーンつて。

雄叫びが聞こえなくなった所で耳から手を離し、山の天辺を見上げると、兜を取り去り紅い髪を靡かせる眼帯をした女性騎士——アンダインが此方を見下ろしていた。

「貴様らは！我々の夢と希望を阻む存在だ！」

此方を指差しながらアンダインはそう告げる。……へえ。

「アルフィスの歴史書は私に人間の素晴らしさを教えてくれた……：巨大なロボットと可憐な女性騎士の記述によって」

それ漫画です、口からツッコミが滑り出しそうになるのをなんとか耐え、真面目な顔をしておく。

「しかし貴様はなんだ？とんだ臆病者じゃないか！また私から逃げるためにあの子の後ろに隠れて！」

遠くで見え辛いが此方を嘲笑うような笑みを浮かべてアンダインはそう言った。……あれはあの子が勇気を振り絞ってした行動なのに、それは酷くないか？

「それにお前のいい子ぶりっ子を忘れたと思うな！きゃあ！赤の他人に抱きついて世直しするの！ってか！」

いい子ぶりっ子って……そりやないだろ。

心が荒むのを感じながら、抑え込んでそんな事を思うだけにする。……フリスクは私
が傷付くのを我慢して頑張ってくれているのになあ。

「もつと皆のためになる事を教えてやろうか?……貴様らの死だ!!」

また心が荒んでいくのを感じながら、次の言葉を待つ。

「ああそうだ、人間よ!お前らが存在し続けることそれこそが罪だ!!」

……。

「我々と我々の自由の間に立ちはだかるものは貴様らの命ただ一つ!」

二つだけだな。

揚げ足を取るようなツツコミを心の中で入れつつ、また次を待つ。

「今、皆の鼓動が一つになるのを感じる!誰もがずつとこの瞬間を待っていたのだ!」

……ふうん。

もう殆ど感心さえ無くなりながら、次の言葉を待つ。

「だが我らには恐れなどありはしない。皆が心を一つにすれば、負けるはずがないから
な!」

そこで、アンダインは此方に対する殺気を倍増させ、獐猛な笑みを浮かべた。

「さあ、人間よ!今、この場所で、決着をつけようじゃないか。モンスターが決意がど

れ程のものか見せてやる！ 準備が出来たら前へ進め！フフフフ！」

……ようやく話が終わったのかと思いつつ、突然出現した決意の光に驚きつつもセーブを難しい顔で行おうとするフリスクに近付き、後ろから抱き付く。

「わっ……どうしたの、お姉ちゃん」

驚くフリスクの体温を感じながら、私は小声でずっと前から考えていた提案をする。

「……いやね、彼女を殺さずに出し抜く作戦思い付いたのよ。ちよつと耳かして」

「……それ、本当!? いいよ」

アーンダインに聞かれたら不味いと思い、喜んで耳を貸してくれたフリスクに作戦を小さな声で耳打ちする。全て話した辺りで、フリスクはぎよつとしたような顔で私に振り向いた。

「……ねえ、待つてよ、それじゃ、お姉ちゃんが……!」

みるみる内にフリスクの目尻に涙が溜まっていく。それを拭い、私は笑った。

「……大丈夫だよ、此処から出るまで死んでやる気は毛頭ないからさ。必ず生き残るよ。約束だ」

そう言うと、フリスクは顔を歪め、何かを耐えるようにぐつと握り拳を作り、そして力を抜いた。……ごめんよ。

「……………分かった」

「ありがとう。じゃあ、それで行くか」

フリスクが頷いたのを見て、私はリュックを前に持ってきてきてその中にナイフを突っ込み、代わりに残っていた飴を数個引っ張り出す。……あ、これで丁度最後だ。

飴をポケットに入れ、リュックをフリスクに手渡す。

「荷物、よろしくね」

「……………絶対に、来てよ?」

「ああ、分かってるよ」

不安そうに見えるフリスクに笑い返し、改めて覚悟を決めて山の前に立つ。すると、上から声が降ってきた。

「来たな、もう貴様らに……………逃げ道など無いぞ!」

そう言ってアンダインは高く飛び上がり、手に槍を召喚して此方に真っ直ぐに突撃してくる。

「行くぞ!!!」

目の前に槍が迫り、世界が白黒に切り替わろうとするその瞬間、

『……………本当に、解り合うことは出来ないのか?』

何処か苦しそうな顔で、自分自身に問い掛けるアンダインを幻視したような気がした。

69. アンダイン戦

「Lily」

「お姉ちゃんー!」

少し後ろの方から聞こえたフリスクの声にはつととしてその場所から飛び退き、槍を回避する。

ドゴオン

という派手に地面が割れる音を立て、アンダインは地に降り立った。その顔に、先程幻視した苦しそうな顔は何処にもなかった。

「……やあつと同じフィールドに立ってくれたか」

そんな事を言つて、フリスクの前に再び出ながらアンダインに笑顔を作る。

アンダインはそれを無視したのか、黙つて槍を一本召喚し、此方に投げて寄越した。足元に投げ付けられたそれを拾い上げ、軽く振つてみる。……丈夫そうだけど重さは其処まででもないな。やっぱ魔法で出来てるからか？

『構えー!』

アンダインが槍を振つてそう言った瞬間、地面に緑色のサークルが現れる。これが

『グリーンアタック』の効果かと察し、このサークルの中から出れないようになってい
 んだろうかと推測する。

*Undyne Undyneが襲いかかってきた attacks!

流れたアナウンスを聞き流しながらサークルの外に出てみようとする、案の定見え
 ない壁に弾かれ出れなかった。

「……んー、やっぱり出れないか。攻撃がくるかもしれないから出来るだけ私の傍に居
 てね」

「……うん」

振り返りながらそう言えば、フリスクは若干浮かない顔をしながら私の言葉に従い、
 サークルの中に入る。……これでフリスクに攻撃が当たる事はないだろう。

そんな事を思案しつつ、フリスクが『ACT』を押すのを見て槍を構える。

ピッ、という音がした。

*UNDYNE | ATK 50 DEF 20

*The 決 heroine し that て NEVER 諦 give め up. な い ヒ ロ

……ヒーローねえ。

流れたアナウンスにそんな事を思いながら、槍を握り直した。

『いいか、グリーンの間は逃げ回る事は出来ない!』

フェアであろうとしているのかなんなのか、アンダインはグリーンアタックについての説明を始める。

『脅威に真つ向から立ち向かえないなら……貴様は一瞬の内に敗れることだろう!』
ああ、そう。

アンダインの言葉を聞いて攻撃方法に違いはないようだと確信し、アンダインが空中に青白い波紋を召喚して飛ばした槍を払い落とす。……この調子ならいけそうか？

*
Undyne points heroically towards the sky.
アナウンス通り、アンダインはこれがお前の天命だと言わん限りに天を指差す。……私の天命はもうちよつと先だつての。

背後からピツという音がした。

*
You told Undyne you didn't want to fight.
*But nothing happened.

『なかなかやるな！これはどうだ!?!』

まあ、期待はしてなかったけどな。

槍を握り直して左右、そして前から飛来する槍を払い落とし、確実に攻撃をいなして

いく。……これでも手加減されてる方なんだよなあ。私とフリスク誰も殺してねえし。
 * and pounds the ground with her fists.
 拳で地面を砕いて友の友かあ。

派手な音を立てて地面にヒビを入れるアンダインを見ながら、私が知っている限りのアンダインと関わりがある人物を思い出す。まず真つ先にパピルス笑顔が思い浮かび、少し心苦しくなった。

* You told Undyne you didn't want to fight.

* But nothing happened.

アナウンス通り横に出て来たフリスクが懇願するようにアンダインに口を動かした。アンダインはそれを一瞥してから少し視線を逸らす。

『長い間、我々はハッピーエンドを夢見てきた……』

頭を振り、何かを振り払ってからアンダインは語り出す。それと同時にまた飛来する槍を弾き、落としていく。

* Undyne towers threateningly.

槍を構え直しつつ、フリスクを見やる。そして今とついている体勢を見て、どうやらい

つでも走り出せる準備は出来ているらしいと判断し、私はアンダインに向き直って口を開く。

「なあ、弾幕が遅すぎやしないかい？ どういうつもりなんだい？ 私達を殺すんじゃないのか？ それとも……これが君の全力なのかなあ？」

「……………なんだと？」

挑発するようにそう言えば、ギロリとアンダインが睨み付ける。

「わあ、怖い怖い」

内心竦み上がりながら、嘲笑を浮かべてそう言った。すると、アンダインの額に青筋が浮かび、私に向けられる殺意がより色濃くなる。……かかったか？

* You あ な た は U n d y n e に 攻 撃 が 簡 単 す ぎ と 言 っ た

* The 弾 幕 が よ り 速 く な っ た ら し く は ア ナ ウ ン ス が 流 れ た

どうやら私の行動がカウントされたらしく、ターンを進めるアナウンスが流れた。『弾幕が速くなった』という部分でかかったらしいと判断し、内心ほくそ笑む。

『そして今、遂に陽の光に手が届こうとしている！』

そう言つてアンダインは槍を振るい、空中に青白い波紋を出現させて槍を召喚する。飛来する速度が速くなった槍を払い落とし、余裕があるように見せる為に笑顔を作る。

*Undyne bounce は苛立ちながら歩を進めている。 impatiently.

私が全ての槍を払い落とした事に苛ついているのか、アンダインはもう一つ青筋を浮かべながら一歩此方に踏み出した。……うん、かかってきてるな。

「なーんだ、こんなもんかい？ 騎士団長サマの弾幕は想定より遅いんだね？」

*You tell Undyne her attacks are too easy.

*The bullets get faster.

期待外れだと言わんばかりの私の言葉にアンダインはまたもう一つ青筋を浮かべ、槍を振り上げた。

『貴様に奪わせはしない！』

……何を言ってるんだか。

アンダインが槍を振り降ろすと同時に飛んできた槍を全て払い落とし、笑顔を保つ。

*Undyne thinks of her friends and pounds the ground with her fists.

苛立ちと友を想って地面を砕くアンダインを見ながら槍を握り直し、私はまた言葉を紡ぐ。

「……これで全力かい？ はは、簡単すぎるなあ」

『簡単だ』と直接言葉に出すと、またアンダインは青筋を浮かべた。

* You あな tell たは Undyne U n d y n e here に attacks 攻 撃 が are 簡 単 す too る easy と 言 っ た.

* The 弾 幕 が bullets よ り get 不 尽 unfair に な っ た.

『ンガアアア!! 準備運動はここまでだ!!』

どうやら本気で怒らせたらしく、本来まだ流れない筈のアナウンスが流れた。完全に術中に嵌まったと確信し、思わず笑みを溢す。……これで完全に私しか見えなくなった筈だ。

召喚され発射された槍を払い落とし、アンダインが槍を横薙ぎに振った瞬間に足元のサークルが消えたのを見て、フリスクを連れて不意討ち狙いで放たれたのであろう横から飛来した槍を一步下がって避ける。

「おっと、危ない危ない」

からからと笑いながらそう言えば、アンダインから滲み出す殺気が思わず震え出しそうになる物になる。……まあ、そこまで怖くはないけどな。

* 岩 Just に because ス she を can か け て い る.

U n d y n e s u p l e x e s a l a r g e b o u l d e r,

……今だ。

アンダインが岩にスープレックスをかまして岩を砕き、立ち上がろうとした所に飛び込んで振り上げた槍を思いっきり振り降ろす。

「くっ」

此方が攻撃に出るのは予測済みだったようで、アンダインは手に持っていた槍で私の槍を受け止める。

ガキーン

という音が響き、手に槍が固いものとぶつかった感触が伝わってくる。

「どうした？ 不意討ちでもしたのか？」

「んー、まあ不意討ちと言えば不意討ちだね」

ニヤリと私を嘲笑うかのような笑みを浮かべながらアンダインはそう言った。私はそれに笑顔を崩さずに返し、合図を出した。

「走れ!!!」

「なっ?!」

私が一言合図を出した瞬間、鏢ぜり合う私とアンダインの横をすり抜けて、フリスクが走り抜けていく。

「くそっ」

私に集中していた所為で反応が遅れたアンダインは、鏢ぜり合いを強制的に終えてフ

リスクを追おうとする。

「おおっと、させるかよ」

素早くアンダインの前に回り込み、追跡を阻止する為に槍を横に薙ぐ。アンダインはバックステップで避け、私から距離を取った。

「あははは、作戦大成功だ!!」

「作戦だと……!?!」

私が笑いながらそう言えば、アンダインははっとして何かに気付いた。

「まさか、先程の貴様の挑発は全て……!?!」

「ご明察! このタイミングを作り出す為の陽動だよ」

ゲームではホットランドまで行けば彼女を殺さずに戦闘を終える事が出来た。そして、今この世界にいる人間は私とフリスクの二人。なら、彼女から逃げる役は私だけで充分なはずだと考えて、フリスクを先に逃がす事にしたのでこの作戦。私も逃げ切つて百点の囷作戦である。

「……………それにさあ、君にはちよつと私用があつてね」

今、此処に愛しい妹は居ない。私とアンダイン、二人だけだ。

その状況が、私の中に渦巻き、ドロドロと流れる『ナニカ』を増幅させていく。

蓋をしてしまいこんでいた『ナニカ』が、脈動して溢れだしていく。

「……………よくも、私の妹を傷付けてくれようとしやがったな、おい？」

槍を向けられ、恐怖に怯えるあの子の顔が鮮明に思い浮かぶ。

槍を握る手の力が自ずと強くなる。

自然と俯いていた顔をあげ、天井を見上げる。

「……………ごめんなさい、名も知らない少年。私は君の憧れを侮辱する」

先程別れたモンスターキッド君の顔を思い出し、ほんの一瞬、罪悪感が湧いた。

……………それも、直ぐに薄れていった。

だって……
……
……
……
……

「堪えるのはもう、
疲れた」

70. 豹変

〔Undyne〕

「……………よくも、私の妹を傷付けてくれようとしやがったな、おい？」

ギリりと私を睨む目の前の人間。突如変わった口調に驚愕していると、人間が天井を見上げ、何かをボソボソと呟き始める。

——チャンスだ。

瞬時にそう思った私は、攻撃をしようと飛び上がり、人間目掛けて振り上げた槍を思いつき叩きつけようとする。

——その瞬間。

「堪えるのはもう、
疲れた」

気が付けば私は、その人間から距離を取っていた。

まだ其処まで白熱した闘いを繰り広げた訳でもないのに勝手に息が乱れ、心臓が早鐘を打つ。嫌な汗が止めどなく流れていく。本能が警鐘を鳴らし、逃げようとする。

無理矢理逸らしていた目線を上げ、目の前の人間を直視する。

「……………どうした？」

笑顔を浮かべながら、此方を見る。

「今、私に攻撃仕掛けようとして……逃げたのか。ただの人間の私から」

全く光の入らない瞳を愉しそうに細め、喉の奥でクツクツと嗤う人間。その瞳には、下手をすれば直ぐに呑み込まれそうになるようなどろりとした泥のような『ナニカ』が渦巻いていた。

「……………まあ、それはいいや。私の事なんて今はどうでもいい」

次の瞬間、人間から滲み出す『ナニカ』が、隠す事なく溢れだした。

「さつきから聞いてればさあ、勝手なことばかり言いやがって」

絡めとるような『ナニカ』を撒き散らしながら、人間は此方に歩き出す。その動きに

私は反射的に一步後退りしそうになる。それを抑えつけ、私は槍を構えた。

「さつき、初めてちゃんと向き合ったときさあ、お前、『贖い』って言つてたけど、なんなんだよ。なあ。答えろよ」

槍を大量に召喚し、人間に発射する。人間が槍を弾く合間に、私は答えた。『ナニカ』に、答えさせられた。

「貴様ら人間は、私達モンスターの同胞を殺しただろう!!! その罪を糾弾して何が悪い!!!」

私がそう答えれば、人間は小さく頷いた。

「そうだな、確かにその罪は糾弾されるべきものだ。赦されてはならないものだ」

「なら……!!!」

「でも、『言う相手が違う』だろう?」

「……………は?」

思わず、目を見開いてしまう。

……………今、この人間はなんて言った?

そんな事もわからないのか、とそう言つて人間は呆れた様に目を細めた。

「誰かを殺したっていうならお前の言う通りあの子も私も罪を贖うべきだ。でも、なあ。あの子が一体誰を殺した? 私が一体誰を殺した? 『誰も殺してない』だろう

が。お前だつて見ただらう？ あの子が迷いもせず少年を助けたところを」

ガツンと、何かに殴られるような錯覚が起きる。……誰も、殺して、ない？

「だ、だが、戦争に関与した可能性も……」

「ねえよ」

私の反論を、無慈悲に人間は殺し尽くす。

「戦争が何年前に起こつたのか知らないが、人間の寿命なんて精々80年前後だ。此所まで来る途中にあつた石板の風化具合から見ても、戦争が起きてもう100年以上は経つてゐる。『あの子が産まれてる訳ない』だらう？ 全く関係ないじゃないか。」

……それをお前は、あの子に贖えつて？ ハ、とんだ妄言だな？」

嘲笑いながら一歩、また一歩と確実に近付いてくる人間に、何も言えなくなる。

「それに、『いい子ぶりっ子』ってなんだよ。あの子は私とした『言葉の通じる相手とはまず会話をしろ』って約束を守ってくれてるだけだ。それをお前はいい子ぶりっ子だつて？ ハハハッ、『話すことを最初から放棄した』お前に言われたくねえよッ!!」

召喚した槍を全て弾き、突如人間は叫んで走り出す。そしてその勢いのまま槍を振り上げ、私に振り下ろす。

ガキーン

「ぐっ……!!」

私の槍で攻撃を受け止めるが、先程の陽動の攻撃と比べて、遥かに重かった。鏝ぜり合い、そのままの体勢で人間は続ける。

『存在する事が罪』だって？　じゃあお前はお前の大事な存在がそんな理由で見ても無惨に殺されたらどうするんだよ、なあ！」

『大事な存在』という言葉で、私は真つ先に *Alphys* や *Papyrus*、そして *Asgore* を思い出した。そして、それらが塵になつていく様を、思い浮かべてしまった。その瞬間、私は、それが起きでもしたら、絶望に叩き落とされると、確信した。

『皆の鼓動が一つになるのを感じる』だあ!?　ハッ！　お前に立ち向かった少年の勇気も否定する様な事言つたくせに、何言つてんだよ、なあ！」

その言葉に、私は精一杯の反論をする。

「そんな事は一言も言っていない!!!」

「言つただろうが、もう忘れたのか!?」

鏝ぜり合いが解かれ、また人間は槍を振るい、私はそれを受け止める。

『私から逃げるためにあの子の後ろに隠れて』！　お前さつき自分でそう言つたよなあ!?　あの子は逃げようとしたか?!　あの時少年は自分から前に出たんだ!!!　あの子と

友達になりたいただそれだけで、少年はお前に殺されるかもしれない恐怖に立ち向かつた!!!　それをお前は、全否定したんだ!!!　そんな奴が、無責任に『皆の鼓動』なんて言

葉を使うんじゃねえよツツ!!!」

もう一度、槍が振り下ろされる。また重くなつた一撃が、容赦なく私を否定する。

「あの子の死が皆のためになる」!? ふざけんな!!! あの子になんの罪があるっていうんだ!!!
 なんてお前の都合であの子が関係ない罪を贖わされなきやいけないんだよ!!!」

其処で、私は目の前の人間の瞳の中に渦巻いて撒き散らされる『ナニカ』の正体を理解する。

その正体は、【憎悪】。

小さい方の人間に振りかかる理不尽に対して燃やされる、負の感情だった。

「お前らの都合で、あの子の命の価値を、測るんじゃねえ—— ツ!!!」
 「ぐ、あ………ツ!?!」

今までの中で一番重い一撃が振り落とされ、私の槍が、音を立てて砕けた。それを見ながら人間は私から距離を取り、私を軽蔑しきつた瞳で見る。

「……………ほら、どうした?」

先程までの怒号を潜め、人間は愉しそうに笑う。

「今まで私が言った事に対する反論は？」

嗤う。

「お前が今まであの子に対して言った事を、『お前にとって都合のいいこと』じゃないって証明出来るものは？」

ワラウ。

「ないの?」

その笑顔に、私の

「ハハハッ、じゃあ、お前が言っていた事は、ただの独りよがりだったって事でいいんだね?」

私の何かが、

「……………騎士を、しかも纏め役の【团长^{Leader}】を名乗るんなら、『物事を見定める眼』を持ってよ、このヒーロー気取りの偽善者が」

パキン、という音を立てて、ヒビが入ってしまった。

「あ……………ああ……………」

偽善者。

その言葉が私に重くのし掛かり、『人間を捕まえる』と昂っていた頭を急速に冷やしていく。

自分が言っていた事について、認めさせられる。

少し頭を捻れば解るはずだった、ただの稚拙な暴論だったと。

「……………間違っていたのは、私だったのか？」

そんな言葉が、口から流れ出た。

「……………」

沈黙する私の顔を一瞥し、人間は槍を道に放り投げて、私に背を向けて走り出した。

「……………あつ、ま、待て……………!!」

私ははっとして、人間の後を追いかける。

人間によつて気付かされた自分の未熟さに、苛まされながら。

71. 最後の逃走

〔Lily〕

ガシヤリガシヤリと金属が擦れる音を立てながら私を追ってくるアンダインに絶対に追い付かれないように全速力で走る。逃げるんだよオーツ！

「待てっ、人間!!」

嫌に決まってんじゃん。

アンダインに心の中でそう返し、走るのに集中する。私が言える言霊はもうない。此処で捕まったら生き残れる保証はない。そう考えてのことだ。

「……あつっ」

道を駆け抜ける毎に次第に気温が高くなっていくのを感じ、ホットランドに近付いている事を確信する。……もうちょっとの筈。それまで耐えてくれよ、私の足。

また速度をあげ、ラストスパートだと突っ走る。私が加速したのを見てアンダインもスピードをあげたのか、金属が擦れる音の回数が増えた。そのまま振り返らずに走り抜けると、左手に『ようこそ ホットランドへ』というネオンサインが見え始める。此所までくればあと少しだと確信し、ラストスパートだと気合いを入れてもう一度速度を上

げる。洞窟の出口が見え、その光の中に飛び込む。

「……………！ サンズ……………」

ゲーム通り設置されていた小屋の中にいたサンズは居眠りをしていた。それを横目で見て通り過ぎ、橋の上を渡る。

「!! お姉ちゃん!!」

「フリスク！」

橋の向こうにフリスクの姿が見え、駆け抜けた。

「ハアツ、ハアツ……………ふ、フリスクツ、ぶじ……………？」

「うん、無事だけど取り敢えずお姉ちゃん、深呼吸して、深呼吸」

フリスクに抱き付きながら突然走ったせいで早鐘を打つ心臓を落ち着かせる。

二つ深呼吸をして、はっと自分が追われている事を思い出してフリスクから離れ、振り返ってアンダインを見る。

「……………はあつ……………はあ……………」

息を切らせながら、アンダインはふらふらと橋の上を歩いてくる。若干顔の肌の色が褪せている事に気付いて、ゲーム通り、脱水症状が出ていると判断する。

「鎧が……………あ……………熱い……………だが……………諦めるわけには……………」

そう言いながら此方に一步踏み出すアンダイン。また一步と踏み出そうとした瞬間、

我慢の限界が来たのか、ぐらりと体が重力に従って此方に倒れ、ガシャンという派手な音を立ててアンダインは橋の上で倒れてしまった。

後ろにいたフリスクはアンダインに駆け寄り、ペタペタと顔を触る。そして、ぎよつとして私を見る。

「……お姉ちゃん、アンダイン、干からびてる!!」

フリスクは涙目になりながらそう言つて、どうしようと言いながら考え出す。
考え始めたフリスクに私は声をかけた。

「……助けるんだね?」

「……? うん。約束もあるし」

「分かった。私も死なせたくないし、手伝うよ」

一応念を押すように訊けば、フリスクは今更何を言つてるのと言わんばかりに不思議そうな顔をして、迷う事なく頷いた。それを見ながら私が手伝いを申し出れば、フリスクは嬉しそうな顔をする。可愛い。

「そこだと落ちちやうかもしれないから移動させるよ。ちよつと退いて」

「うん!」

フリスクに一旦退いてもらい、熱くなっているであろう鎧の金属の部分を避け、アンダインの脇の下に手を引っ掛ける。そしてずるずると引き摺る様にして橋の上から比

較的安全な地面の上に移動させる。干からびてしまっているからか、金属を纏っている筈なのに、軽かった。

「おし、移動完了。フリスク、スノーデインで私が渡したハンカチ、ある？」

「うん、あるよ」

アーンダインを仰向けにしながらフリスクに訊けば、フリスクは頷いてハンカチを取り出す。

「濡らしちゃうけどいい？ あと、リュックももらうよ」

「もちろん！」

フリスクからハンカチとリュックを受け取り、リュックを開けて中から水入り瓶を取り出す。そして手に水を少し出し、温度を確認する。……うん、冷たい。

水の温度が冷たいことを確認し、地面に正座をしてアーンダインの頭を太股の上に乗せる。要は膝枕である。

ハンカチを一度広げて四つ折りに畳み直し、そこに水入り瓶の中身をかける。空っぽになった瓶を取り出して、私はフリスクに手伝いを頼む。

「ごめん、フリスク。彼処のウォーターサーバーでこの瓶のここまで水入れてきてくれない？ あと、出来ればコップもお願い」

「わかった！」

瓶の八分目位を指しながら頼めば、フリスクは笑顔で私から瓶を受け取ってウオーターサーバーに走っていく。それを

横目に見ながら私はハンカチを軽く絞り、アンダインの顔にペタペタと当てる。

「持ってきたよ！」

「ん、ありがとう」

ちゃんと瓶に水を入れて、コップも持って戻ってきてくれたフリスクにお礼を言い、ハンカチをアンダインの額に乗せて二つを受け取る。瓶からコップに水を注ぎ、並々と水が入ったコップをアンダインの唇に持って行って、口の中にゆっくりと流し込む。

「飲め、飲まんと死ぬぞ」

『死ぬ』という言葉が効いたのか、アンダインは微かに小さく喉を動かし、水を飲み込む。そのままゆっくりと水を全て流し込み、少し様子を見る。

「……………う、あ……………？」

干からびた肌に潤いが戻り始めたたと顔を見ながら思っていると、薄らとアンダインが目を開いた。

「おはよう、気が付いたかな？まだ、水飲むだろう？」

「……………」

まだ熱が冷え切っていないらしく、アンダインは虚ろな目で私をぼーっと見つめる。

それを無視してコップに二杯目を注ぎ、もう一度アンダインの唇に持つていく。すると、アンダインはコップを一瞥して口を付け、右手を動かして添える。手を貸しながら水を飲ませると、見ていたフリスクが安心したように笑顔を作った。

「……………して……………」

まだ若干ぼうつとした顔のまま、アンダインは私に何かを問う。十中八九どうして自分を介抱しているのが気になっているんだろうと見当を付ける。……………まあ、さつきまで追われてた奴が追ってた奴を看病してたら普通は正気を疑うわな。

「……………二つ理由がある。一つ目はこの子が助けたいと言ったから」

コップを地面に置いて額に乗せたハンカチを取り、また水で濡らしてアンダインの顔に当てながら私は答える。

「二つ目はガーソンさんと君を殺さない約束をしたから」

肌の色が良くなってきたことに安心しながら、私は三つ目の理由を答える。

「……………三つ目。君のような誰かの為に戦える優しい人を、亡くすのは惜しいと思ったから」

……………これは本心だ。ゲームだった時もそうだったけど、この人は本当に優しい人だ。そんな良い人の命を奪っていい訳がない。

微笑みながらそう言えば、アンダインは小さく目を見開いた。黙ったアンダインにそ

のまま介抱を続けてハンカチの水分を吸い取らせると、アンダインの肌の色は元の美しい青色へと戻っていた。

「よし、これで大丈夫でしょ」

ハンカチに残った余分な水分を固く絞って出し、アンダインの頭をそつと地面に下ろす。すると、アンダインは静かに立ち上がった。立ち上がる時の動作がしつかりしていたのを見て全快とは行かずとも大丈夫そうだと判断する。

「……………」

何か物言いたげに此方を向くアンダインをじつと見つめ返すと、アンダインは踵を返して去っていった。……………やつと終わったかと安堵し、思わず一つ息を吐いてしまう。

「……………ふう……………つつかれたあ」

「お疲れ様、お姉ちゃん」

「！……………ふふ、ありがとう、フリスク」

正座をして頭に手が届くからか、フリスクが私の頭を撫でてくれる。突然の事に少し驚いてしまうが、すぐに頬が緩んだ。ああ、心が浄化される……………

「でも、ごめん。またアンダインと会わないといけないんだ。逃げてる時にね、パピルスから電話があつて、アンダインと友達になりに行こうって言われたんだ」

「……………そっか」

……そう言えばデートイベントあったな、と思いだし、若干遠い目になる。仕方がないと正座から立ち上がり、ズボンについた汚れを払い、水入り瓶をしまつてリュックを背負い直す。

「それなら行かなくちゃね。パピルスとは何処で待ち合わせしてるの？」

「！ あのね、アンダインの家の前だって！」

「オツケー。じゃ、行こうか」

「うん！」

私の返答に嬉しそうな顔をしたフリスクに行き先を訊けば、そう答えた。それに頷き、二人で手摺がない橋の上を渡り、アンダインの後を追いかけるようにしてウオーターフォールまで歩き出した。

7 2. 突撃隣の騎士団長

〔Lily〕

アンダインと戦った場所を通り抜け、再び洞窟の中に入る。先程まで灼熱と言っていた程に暑かったホットランドに居た所為か、ひんやりとした洞窟の中は本当に涼しかった。……まるで夏の暑さをもう一度体験しているようだったと言っておこう。また行きたくねーな。

「……あれ？箱だ」

若干遠い目をしつつ、洞窟の中を戻っていくと、先程までは無かった箱があった。小さい橋の向こうには見慣れないモンスターが見え、アンダイン戦が終わったから出てきたのかと一人で納得する。

「ケツ！今のモンスター達はパズルの出来なんて気にしてねえぜ！」

箱を調べ終わったらしいフリスクがモンスターに話しかけると、モンスターはそんな事を言い出した。そうなのと言わんばかりにフリスクが首を傾げると、モンスターは話を続ける。

「最近の『パズル』はレーザーや動く岩みてえなやつばかりだ……」

レーザーと聞いて、私はふとホットランドでレーザーの中を掻い潜らなければならない事を思い出す。……うっわ、ますます行きたくねえ。

「ケーツ!! そんなもんに芸術なんてねえ、ただの安物だ! 効率重視だとか考えてる奴の戯言だ! 俺は心の奥深くに響くチャレンジ精神つつうもんを求めてんだよ……」

内心げんなりしつつモンスターが発言を聞いて、芸術家気質なんだなとなんとなくモンスターの性格を考察する。

「おいお前! お前はまだ若い! お前にはまだ希望がある!」

突然ビシツとフリスクを指差し、モンスターはそう言った。フリスクはと言えば、突然そんな事を言われて困惑しているらしく、ぼく? と聞き返すように自分を指差す。

「ゲへへ……! ……この……このブロック押しパズルを解いてみる!!」

フリスクは少し困ったかのように私を見てから、小さく頷いて此方に戻ってくる。そして、先程調べた箱に触れようとした瞬間、

「何……? お前は何をしているんだ! 完全に間違っているぞ!!」

モンスターからそう言われて、フリスクは驚いたようにモンスターを見る。

「ケツ、忘れてくれ! この世代の希望はどうに失っているのさ!」

それはまだ早いんじゃないかな……?」

「いこ、フリスク」

「う、うん……」

モンスターの発言にそう思いながら、私はフリスクの手をひいてさっさと先に進んだ。

先程探索した時に見つけた魚の形をした家の前にまで行く。すると、見覚えのある特徴的な服装と赤いスカーフを巻いたモンスターが家の前に立っている事に気付いた。

「やあ、パピルス。お待ちせしちやってごめんね」

「!!! 人間!!!」

手を上げて声をかければ、パピルスも此方に気付いたらしく、ぱあっという効果音が付きそうなくらいに明るい顔になる。明るいなあと思いつながら近付いていけば、パピルスはガシッと私の肩を掴んだ。

「怪我はないな?!」

「お、おう、大丈夫だから取り敢えず落ち着いてくれ……酔う……」

「ならいいんだぞ!!」

心配からかパピルスにがくがくと肩を掴んで揺らされて酔いそうになり、パピルスにストップをかければ、安心した様に微笑まれて離してくれた……かと思いきや、ぎよつとした顔になる。

「人間、この肩の所の破れた所はどうした……?」
「……あ」

パピルス自身の手で見えなくなっていた槍が掠れて出来た破れを発見され、思わず間抜けな声を出す。忘れてたな此処の傷。

「……怪我、したのか……?」

「ああ、違うよ。ちよつと岩で引つ掛けちゃって破けちゃったんだ。別に怪我した訳じゃないよ?」

「なんだ、そうなのか!!」

心配そうな顔をしたパピルスに慌てて取り繕えば、今度こそ安心したようににつこりと笑った。何とか取り繕えたかと内心ほつとする。

「小さい人間も居るな!アンダーインと遊ぶ準備は出来ているか?」

パピルスの発言に気まずさが半端ないですと心の中で思いながらフリスクを見ると、フリスクは緊張しているような面持ちで頷いた。

「俺様に三人をすごい友達にする考えがあるのだ!」

「へえ……考えてくれたんだ。ありがとう」

「お礼なんていい!お前達は俺様の友達!友達と友達が仲良くなる為に頑張るのは当たり前だからな!」

パピルスの思いがけない言葉に思わず目を丸くする。……………私も『友達』の括りに入れてくれたんだ……………

「……………そっか」

「そうだぞー！」

なんとなく暖かい気持ちになりながら、私は頷いた。

「さて、用意はいいな、人間！」

その言葉に、フリスクは頷いた。それを見て、私もデートイベントが始まったのだと覚悟を決める。

「よし！俺様の後ろに来るんだ！」

「わかった」

パピルスの指示に従い、パピルスの後ろに隠れるようにし、フリスクを前にして一直線に並ぶ。……………さてと、頑張らなきゃな。

「さあ。彼女にこれを渡そう！」

そう言ってパピルスが懐（？）から出したのは、リボンのかかった黄色い骨だった。

「彼女の大好物なのだ！」

……………本当に大好物なのか？ゲームだった時も柵に入ってたけどあれ多分パピルスが持ってきたやつだろうし……………

そんな事をパピルスの発言で思いつつ、成り行きを見守る。
コンコンコン

パピルスがリズムよく歯の形をしたドアを三回ノックする。

「……………あれ？」

が、少ししても、アンダインは出てこなかった。

コンコンコン

もう一度パピルスがノックをし、また少し待つ。それでも、アンダインはドアを開けなかった。……………え、嘘だろ？

「可笑しいな……………居る筈なんだが……………」

「ちよつと待つてみたら？」

「そうだな！」

首を傾げるパピルスに提案し、しばらく待つ。どうしても出てこないのかその間に思案して、考察する。……………あ、もしかして……………

原因を察し、苦い気持ちになっていると、

しゅっ

という何か擦れるような音を立てて、ドアが開いた。

「おお、アンダイン！すぐに開かなかったからどうかしたのかと思ったぞ!!」

「……おお、パピルスか。一対一の特別トレーニングの準備は出来ているか？」
「二エツ？もちろん出来ているが、どうしたんだアンダイン？元気がないな？」

パピルス越しに先程聞いた低めの女性の声が聞こえ、思わず肩を強ばらせる。そして、パピルスの言う通りその声に覇気が見当たらない事に気付き、やっぱり自分のせいかと確信する。

「ああ、少しな……まあ、気にしなくても大丈夫だ」

「そうか？」

気持ち沈んでいく中、進んでいく会話に集中しようと考えを切り換え、話に耳を傾ける。

「そうだ、今日は友達も連れてきたんだぞ！」

そう言って、パピルスは私とフリスクの前から退いた。パピルスが退くと、沈んだ顔のアンダインが、小さく笑顔を作っていた。

「どうも、はじめま……して……」

「………やあ、はじめまして」

そして、次の瞬間、アンダインは驚いたように大きく目を見開いて、固まった。そして、そのまましばらく沈黙が流れる。

「………三人とも。中へ。入ったらどうだ？」

「……………うん、じゃあ、お言葉に甘えて。お邪魔します」

辛うじてといった様子で、アンダインがその言葉を捻り出す。それに乗っかる形で、私達は中に入った。

中に入ると、中は可愛らしい、何処か女の子らしさが滲み出ているような、ゲームだった通りの内装になっていた。

「やあ、アンダイン。俺様の友達が、これをアンダインにつて！」

そう言つてパピルスが取り出したのは先程の骨。それを見てアンダインがマジか？と言いたげな顔でこちらを見たのを、パピルスに気付かれないくらいに小さく首を横に振つて否定しておく。すると、アンダインはだよな……と言わんばかりに小さく一つ息を吐いて、パピルスから骨を受け取つた。

「ああ……ありがとう。じゃあ、あー、他のと一緒にして置くぞ」

そう言つて、アンダインはキッチンの下の引き戸を開け、骨をしまう。その際にちらりと他の骨が見え、やつぱり好物ではなさそうだと確信した。

「……………それじゃ始めてもいいか？」

なんだか気まずそうな顔をしながら、アンダインはそう言つた。それを聞くか否や、パピルスは大声を出す。

「ああしまった！ たつた今思い出したぞ！ 御手洗に行かなければ!!」

……確か、この後はパピルスが出ていっっちゃうんだっけな。

「二人とも楽しんでくれ!!!」

「えっ、ちよっ」

そう思いながら、先の展開を知らないフリをして、私は戸惑ったような声を出す。そう言い終わるか否や、パピルスは派手に窓を突き破り、破片を撒き散らしながらダイナミックに出ていった。……ええ……？知ってはいたけど、いくらなんでもダイナミックすぎない？

「……それで、何故貴様らは此処に来たんだ？」

ふう、と一息吐いてから、アンダインは此方を見やり、そう訊ねる。その目に鋭い光は宿っておらず、ただただ穏やかに凧いでいた。

「……友達なりに来たって言ったら、笑うかい？」

緊張からか、固まってしまっているフリスクの肩に手を置き、そう代弁する。

「……………私と、か？」

信じ難いと言いたげな顔をして、確認するようにアンダインはそう言った。

「うん。そうだよ？」

特に悪びれずにそう言えば、アンダインは苦い顔をする。

「……………お前達を殺しかけた、私とか？」

コクリと、緊張が少し解れたらしいフリスクが頷いた。それを見て、アンダインはふつと鼻で笑った。

「……………私に、そんな気はない」

そう言ったアンダインに、私は内心頭を抱える。……………やっぱ私のせいで落ち込んでるやん……………流石に言い過ぎたもんなあ……………

そんな風に自分の失態を責めていると、フリスクがアンダインに近寄って行って、ペコリと頭を下げる。

「……………違う。謝らなくていい。私にそんな資格はないからだよ」

お前のせいじゃない、と言いながらフリスクの頭を撫でようとして、躊躇してからやめたアンダインを見て、彼女のプライドを大分傷付けてしまったんだと改めて理解する。

「謝らなければならないのは、私だ」

目を伏せながらアンダインはそう言った。

「……………お前が言った通り、私は言う相手を間違っていた。お前達に関係のない罪を擦り付けて、殺そうとしていた。他の騎士よりも平等に、公正にあるべきである騎士団長ともあろう者が、だ。……………いや、『平等』とも、『公正』とも言えない。橋でチビツ子が転んだ時、抵抗させずに迷わず殺そうとしたしな。あれは平等な戦いとは言えない」

はは、とアンダインは自嘲的に笑い、瞳の光を曇らせる。私の言葉が此処まで彼女を悩ませている事に戸惑ってしまい、私は何も言えずに見つめるしかなかった。

「……実はな。罪を擦り付けてお前達を殺そうとしたのも、お前達を『悪』と決め付けておかないと、自分が罪の感触で狂ってしまうと無意識に考えていたからだときき気付いたんだ。その時点でもう、私は……」

違うと否定しなかったが、そう認識させたのは私の言葉の所為だと知っている所為で、何も言えなくなる。ふとフリスクを見れば、フリスクもこんな事態になるとは思っていないかったのか、おろおろとしていた。

「……私は、お前達罪なき者を殺そうとした愚か者だ。赦してくれとは言えないし言わない。だが、この謝罪の言葉は受け取ってくれ。……本当に、すまなかった」

そう言って、アンダインは真剣な顔で真っ直ぐ私を見てから頭を下げた。彼女なりの誠意が籠ったその行動と言葉で、私はどうしたらいいか分からなくなってしまう。

そのまま暫く流れる痛い沈黙の中、私は頭をフル回転させ、そして、たった一つだけ、打開策を思い付いた。その瞬間、

「だああー！」

窓からパピルスが顔を出して、ぎよつとしてしまう。

「俺様は残念だ……俺様はアンダインならアイツらと友達になれると思ってた。けどそ

「パ、パピルス……？」

突如としてそんな事を言うだけ言って去っていったパピルスに動揺したらしく、アンダインは戸惑いを隠せない様子でパピルスを見る。

「……アンダイン」

「……なんだ……っ!？」

アンダインが余所見した隙について、私もアンダインに近付いて、ぎゅう、と、アンダインを抱き締める。

「……………私は、聖人じゃないから。君の謝罪を受け取りはするけど、到底赦したりは出来ない。神サマじゃないから罰することも出来ない。だけど、君とこの関係のままは嫌なんだ」

パピルスにしたように、優しく抱き締める。

「赦せなくても、罰せなくても、妥協は出来るから。君が私達と友達になつてくれるなら、私もこの怒りを取り敢えず心の奥底に沈めるからさ。……だから、資格がないなんて言わないでよ。私そこまで言っていないよ？」

そう言って、私は抱き締める力をもっと強くする。……………私が思い付いた案は、『妥協案の提案』。あんな事を言った手前、生半可な慈悲はアンダインのプライドをもっと傷

付けるだけだと判断して、思い付いた案だ。とはいえども、私は間違った事を言っただけでもないけどな。……最後の偽善者は完全におまいうだけだね。そこは猛省してるけど。

「それにさ、ヒーローっていうのは諦めずに困難に立ち向かっていくものでしょうに。目の前の『私』という困難を乗り越えようともしないっていうのは、どうかと思うけどな? ……ほら、『資格がない』なんて言っただけで、挑戦ぐらいしてみなよ」

ニヤリと笑って、私より少し高い位置にある顔を見上げながらそう言えば、アンダインはポカんと口を開け、啞然とした顔をする。そして、口角を不敵に吊り上げた。

「……………それは、私に対する挑発だな?」

「ああ、勿論だとも」

「……………ならば、受けて立とうじゃないか!!!」

ニツと、漸く私の知っている笑顔でアンダインは笑った。そして、バツと私から離れ、私をビシツと指差した。

「貴様に挑戦を申し込む!!!」

「ほう。どんな?」

「『貴様らと親友となり、貴様を見返す』ことだ!!!」

それ挑戦なの? と一瞬ツツコミを入れたくなったのを抑え、私は笑顔を作る。

「いいとも。やれるものならやってみな」

「……言つたな？」

「ああ」

……やつと元気になった。

これでなんとか原作の流れに持つていけたらどうかと思ひながら、私はニヤリと笑つたアンダインに頷く。

「私のことを大好きにさせてやる!!他の奴のことなど考えられない程にな!!!」

原作通りの言葉が出て来た所で、内心大丈夫そうだと安堵する。

「……で、最初は何するの？」

「……取り敢えず茶でも飲むか？」

「あー、じゃあ、頂こうかな」

「ぼくも!」

空気が明るくなって安心したのか、フリスクも笑つて手を上げる。それを見たアンダインは、紅茶を淹れる為にキッチンに向かった。

73. アンダインとデート

〔Lily〕

「ほらよ、お待ちどうさま」

「あ、運ぶの手伝おうか？」

「いや、大丈夫だ」

席に着いてしばらく待つと、アンダインが紅茶をお茶請けのクツキーと一緒に運んできてくれた。紅茶が魚の形をしたティーカップに注がれると、ふんわりと花の良い香りが辺りに広がった。

「良い匂いだね」

「だろう？なんせあたしのとっておきだからな！」

「マジか」

自慢気に笑いながらアンダインはティーカップソーサーに乗った魚の形のティーカップを目の前に置く。……そう言えば、ゲームでも魚の形のティーカップが置いてあるって書いてあったな。

「あ、すまんが砂糖は自分で頼むぞ。好みが良いかわからんからな」

「オツケー」

ティーカップの取っ手を掴み、一緒に置かれた砂糖の瓶から角砂糖を二つ取り出して入れる。

「はいよ、入れすぎないでね」

「うん！」

フリスクに砂糖の瓶を回してから、スプーンで紅茶をかき混ぜる。砂糖が溶けきったかなと判断した所でスプーンを出し、ソーサーに乗せる。ティーカップを持ち、息を吐いて少し冷ます。そして口をつけ、一口飲んでみる。

「……………おいっし」

「だろう!?!」

紅茶の風味がふんわりと口の中に広がり、思わずそう言ってしまった。その言葉に反応し、アンダインは誇らしそうに笑う。

「……………あちっ!でもおいしい!」

「ねー。……………舌は大丈夫?」

「うん、大丈夫」

フリスクも一口飲んだらしく、隣からそんな声が聞こえた。真ん中辺りに置かれたクッキーに手を伸ばし、一枚取って口に運ぶ。……………うん、紅茶との相性バツチリだな。

「これも美味しいね。相性抜群だ」

「それ、とある人と一緒に作ったんだぞ」

「……………君が!？」

「なんだその意外そうな顔は」

失礼な、と言いながら自分の紅茶に口をつけるアンダインを凝視してしまふ。…………いや、ゲームでの彼女の料理の作り方がね、印象的過ぎてね…………

「……………ん? 『とある人』 って誰?」

「アズゴアだ!」

アンダインの言葉に違和感を覚え、気になった所を突っ込んでみる。すると、アンダインはそう言った。

「え、アズゴアさんって確か、モンスター王様の王様じゃなかったっけ?」

「そうだ。だが、あの人は本当は争いなんて大嫌いな心がでっかいやつなんだ! あたしに稽古をつけてくれたのもアズゴアなんだぞ!!」

「へえ。…………そっか」

また誇らしそうに笑ったアンダインを見ながら、私は胸の中に広がった苦い気持ちを甘い紅茶を飲んで押し流す。その人を何れ傷付けなくちゃいけないんだよなあ。

そんな事を思いながら紅茶を飲んでいると、アンダインがまた口を開いた。

「……………ああ、そうか」

「？」

「お前ら、アズゴアに似てるのか」

「!!!?」
「ゴホッ、ゲホッ」

「お姉ちゃん大丈夫!?!」

笑顔から一転、腑に落ちた顔でアンダインが言った一言に驚き、飲んでいた紅茶で噎せてしまう。背中をフリスクに擦られながら息を整える。

「ゲホッ……………この子はともかくとしても。え、私が？君たちの王様に？」

「とは言っても一部分だけだけだな。なんか既視感があるなど思ったらそういうことか」

「何処が似てるのき……………?」

自分の行動を思い返し、アズゴア王に何処か似ている所があったかと疑問に思い、アンダインに訊いてみる。……………いや、マジでアンダインがそんなこと言ったのか分らないんだけど。どういうこと？フリスクはゲームでも心がでつかいって言われてたし分かるけど……………

「……………お前が水くれたとき、お前、最後笑つたら？」

「え、ああ……………うん」

紅茶を一口飲んでからそう言ったアンダインに頷く。

「その笑顔がな、雰囲気のアズゴアに似てたんだよ。優しい雰囲気がさ」

「ええ……気のせいじゃない……？」

いや、確かに君を殺したくはないとは思ってたけどね……？そんな風に見られてたとは……私、そんなに良い奴じゃないよ。

紅茶を啜りながらそんな事を思う。

事実、私はしたい事をしてるだけだしね。アンダインに言った偽善者については本当にブーメランだし。

「……あ、なあ、そう言えば」

「今度はどしたよ」

「……お前ら、なんで地下に落ちて来たんだ？」

話を変えるように、クツキーに手を伸ばしながらそう言ったアンダイン。そう言われて、私もフリスクが落ちた理由を知らない事に気付く。

「特に小さい人間、お前が分からないんだが。大きい方の人間に大分愛されてるみたいだし、地上で不満とか無さそうなんだが……」

「一応言つとくけど、私はこの子を追ってきたからだよ。……そう言えば、なんで？」

突然自分に話が振られて驚いたのか、フリスクはクツキーを咀嚼しながら目をパチパ

チと瞬かせる。……帰ろうと思えば、道を辿って帰ってこれたはず。それなのに、何でだろう？ やつぱり『Player』の影響か……？

頭の中で色々考えていると、クツキーを飲み込んだフリスクが口を開く。

「うーんとね……『助けて』って声が聞こえた気がしたんだ」

……え？

「帰ろうとした時にね、声が聞こえたような気がしたんだ。そしたら、なんか、ほっとけなくて……」

フリスクの口から出た言葉に、私は啞然とする。……マジかあ。そういう理由だったかあ。

「……そうか。やつぱり、お前は心がでっかいんだな」

理由を聞いてアンダインがそう言うのとフリスクはぶんぶんと首を横に振る。……全力で否定してるのが伝わってくるな。

その様子を見ながら、私は少なくなつた紅茶を飲みきってしまう。……うん、美味しい。

「……ちそうさま。美味しかったよ」

「おお、そうか」

そう言えば、アンダインは嬉しそうに笑った。

「……」

「チビツ子も飲み終わったか？」

なら持つていくぞ、と言いながら立ち上がり、ティーカップを回収してシンクへと向かうアンダイン。その背中と揺れる赤い髪を見ながら、私はこんなにアンダインとのデートがこんなに穏やかに進むなんてなあと思っていた。……もつとカオスになるかと思つてただけだ。

「さてと、じゃあ「次は料理だな!!」……えっ」

お暇しようかな、と言おうとすると、ティーカップを洗い終わったらしいアンダインが振り返つてそう言った。

「パピルスと親しくなったのもそれなんだ!!それに本来ならアイツがレッスンを受けている筈だったんだぞ」

「ああ、確かに」

それもそうだと納得して頷きながら隣のフリスクを見ると、苦い顔をしていた。……ああ、そう言えばフリスクはパピルスとパスタ作りしてくれたんだっけな。その時料理方法見てる筈だし、この顔してもなんら不思議ではないわな。心情を推測するなら『お前かよ……』だろうな。

「という訳で……やるぞ!!」

「ちよつ、まつ」

先の展開が読めて逃げようと足を動かすが、シンクの前から跳躍して此方に飛び掛かるアンダイン現役騎士団長の腕から逃れられる筈もなく、ガシツと強く頭を掴まれる。

「あがあああああ痛い痛い痛い!!!!つてうおおお!!!」

結構強く掴まれて思わず悲鳴を上げると、床が遠退き、一瞬の浮遊感の後、地面に下ろされる。足が床に付く感触に安堵し、この流れはもう無理だと諦めて流れに身を任せる事にする。もういいや。ど　う　に　で　も　な　ー　れ　。

「まずはソース作り!!」

そう言つてアンダインは足を振り上げ、床にヒビが入るんじゃないかってぐらいに思いつき踏み込む。すると、上からトマトやらなんやらが降ってくる。……なんで上からトマトが降ってくるんだよ!?

「この野菜を貴様の宿敵だとみなすんだ!!きあ!!お前の拳で消し炭にしてしまえ!!」

「あの消し炭になったら食べれないんですけど?!!」

「いいからやれ!!」

「ええええ……」

思わずツツコミを入れると、やることを強要される。

困ったように私を見るフリスクにやるしかないという意味を込めて頷けば、もつと

困ったような顔をしながら、トマトを手にとった。それを見ながら、私はトマトを取り敢えず全力で殴る。フリスクも戸惑ったような顔をしながら、トマトを殴り付けた。

「そうだ!! そうだ!!」

私達の行動に気を良くしたのか、アンダインは上機嫌そうに笑った。

「このヘルシーな食材に立ち向かおうとあたしらの心は一つになった! 次はあたしの番だ!!」

そう言つてアンダインは私達の横に立ち、

「ンガアアアア!!」

「うるせつ」

気合いを入れる為にか大声を出しながら、アンダインは大きく腕を振りかぶり、思いつきりトマトを叩き潰した。

「あつと」

勢いよく潰されたせいで飛び散ったトマト汁がフリスクにかからないように引き寄せ、前に出る。すると、顔に思いつきりかかった。……まあ、パーカーにかからなかったからいいか。

「……………」

「……………あー、後でポウルにこそぎ入れよう。だが今は!!」

それでも思わず非難の目で見れば、アンダインは大胆に目を逸らした。そして、そのまま足を振り上げ、また思いっきり踏み込む。床が一瞬揺れ、少しふらついてしまう。

すると、今度はキッチンの上に鍋やらなんやらが落ちてくる。だからなんで上から落ちてくるんだよ。

「……麺を入れるのだ！ンガアアアアアアアアアアア!!」

フリスクが思わずと言ったようにアンダインを見上げると、アンダインは少し慌てたように訂正を入れた。

「ああ、鍋に麺を入れるだけだ」

「その前にお湯沸かさないとじやないの……?」

「さあやれ!!」

「スルー!?!」

故意なのかなんなのか私のツツコミはスルーされ、フリスクはまた戸惑ったような顔をしながら、アンダインの指示通りに豪快にパスタを入れる。ガコン、という音がした。

「いいぞ!!その調子だ!!」

アンダインは上機嫌そうに笑い、フリスクの頭を撫でる。フリスクはきよとんとした顔でアンダインを見上げ、そして嬉しそうに笑った。

「よし！今度はパスタをかき混ぜるんだ！」

「え、待って、お湯は!？」

「一般的には、かき混ぜればかき混ぜる程……美味しくなる！」

「なわけねーだろ!!? バッキバキになるだけだわ!!」

これ私の間違ってるの……? と思いながらツツコミを入れる。私のツツコミもお構い無しに、そのまま料理は続いていく。

「いいか? やつてみせろ！」

アンダインの言葉にノリに乗ったフリスクは笑顔で頷き、フリスクの全力でかき混ぜる。

「もつとかき混ぜろ！」

アンダインがそう言うと、フリスクは頷いてもつと早くかき混ぜる。バキバキとパスタの折れる音がもつと早くなった。

「もつと激しく！」

指示するアンダインの声にも熱が入っていく。

「もつとだ!!!」

パピルスこれやってたの……? と思いながら成り行きをはらはらしながら見届ける。

「ええい、あたしにやらせろ！」

フリスクがやっているのを見て、アンダインもやりたくなかったのか、フリスクを優しく退かす。先が読めた私は、せめてフリスクにパスタが飛ばないように後ろに隠す。

ガンガンガンガンガン!!!

上から槍が飛来し、激しい音を立てて鍋ごとパスタを粉碎していく。そう簡単に変形しないはずの鍋が変形していくのを見て、戦慄した。

「フフフフ！これでいいのだ!!」

「よくねーよ……」

私のツツコミも虚しく、デートが進んでいく。

「よし、これで最後の仕上げだ!」

そう言って、アンダインはビシッとコンロのつまみを指差す。

「火にかける！お前の情熱をコンロにぶつけろ！お前の夢と希望を炎へと昇華させるのだ!」

アンダインの言葉に『熱くなれよオー!!』という言葉思い出し、笑いそうになるのを堪える。

「いいか？手加減するんじゃない!!!」

「そもその話火を着けるのに手加減ってあったか……？つかお湯は？」

「やるんだ!!」

「おい、そろそろ泣くぞ」

「まあスルーされ、デートは進んでいく。フリスクも全力で領き、つまみを『強』の表示にして、そのままにする。」

「!!」

そして、折れてこぼれたパスタに引火したのを見て、嫌な予感がした私は、先の展開を思い出そうとする。なんでこういう事を覚えてないんだ私の頭は！

「もつと熱くー！」

焦りながら思い出そうとしているうちに、火が大きくなっていく。

「もつと熱くだ、畜生ー！」

「またもう一回り火が大きくなったらしく、アンダインが声をあげる。それと同時に嫌な予感が大きくなる。」

「熱くなれ!!!」

「○造かよ!!!」

「ツツコミをいれるついでに見た鍋が完全に火に包まれる光景で、このままだと家が炎上することを思いだし、フリスクとアンダインの腕を取る。」

「待った、やりすぎ——」

「ヤバッ」

鍋が光ったその瞬間、思わず二人の腕を引っ張り、コンロから離れさせた。

ドゴオン

辺りが一瞬白くなり、鍋から派手な音がした。爆発が起きたのだと察し、思わず庇った二人から離れる。

「……あちゃー」

あちこちで炎をあげる部屋を見て、呆然とした顔で一言そう言ったアンダインに、私は思わず怒鳴り付ける。

「呆けてる場合か!!とつとと出るぞ!!」

アンダインとフリスクの背中を押し、扉の前まで移動させ、家から脱出しようとする。幸い機能していたらしい扉の閉開ボタンを押すと、シュツという音を立てて扉が開き、なんとか脱出出来た。

「このアホ!!火傷するところだったわ!!」

「……………(ぎ)、(ぎ)めん……………」

アンダインに怒鳴れば、しゅんとした顔になる。その顔にはつとして言い過ぎたと後悔する。……やっぱ一回ブチギレるとしばらくキレやすくなるな……ホントにやだ。

「まあ、止めなかった私にも非はあるし……仲良くなろうと頑張ってくれて本当にありがとう、アンダイン。でも、そんなに頑張らなくても、私らもう親友だぞ?」

「……そう、なのか?」

私の言葉に、アンダインは目を丸くしながら顔を上げた。

「うん。君が親友になると宣言して、そして私が受けた時からもう私達は親友だ。少なくとも私はそう思ってるんだけどね」

「……本当か?」

「ああ、本当だとも」

アンダインの言葉に肯定の返事をすれば、アンダインはもじもじとする。

「……そっか、そっかあ……」

そして、嬉しそうに、はにかみながら笑った。

74. Waterfall 走破

〔Lily〕

希少な照れ笑いをしながら、暫く『親友』と繰り返して呟いているアンダインに心を癒される。……うん、女の子らしくて大変かわいらしい。ただしベストオブカワイイはフリスクだ。異論は認めない。

一通り脳内でふざけてから現実を見る。そして、今の状況がかなりカオスな事に気付いた。……燃えてる家の前で笑ってるって下手したらサイコパスだつて誤解されるな……

「……で、これからどうするよ。寝泊まりとか出来るところあるか？」

「……あ、あー……しばらくパピルスの家で世話になろうと思う」

「そっか、それなら安心だな」

アンダインも現実に戻ってきたらしく、はつとして顔を引き締め、そう答えた。そして、アンダインは何か気付いたように目を丸くし、考え込むように目を伏せる。

「……人間」

「ん？どした」

暫く沈黙が流れた後、アンダインが真剣な顔で話しかけてくる。それに反応し、首を傾げる。

「お前達は、アズゴアの元へ行くんだらう？」

「うん。そうだよ」

訊かれるだろうと予測していた問いに、私は頷く。すると、アンダインはだよな、と言つて少し目を伏せる。

「……さつきも言つたが、アズゴアは闘いを望まない。だから、彼と話をするんだ。お前達なら、きつと家に帰してくれるように説得出来る筈だ」

「……ああ、分かった」

……ああ、ゲームでも言つていた忠告か。

アンダインが口にした言葉でそう判断する。

「……絶対に、ないとは思ふが。お前達がもしアズゴアを傷付けたら」

「……傷付けたら？」

アンダインの言葉を繰り返し、先を促す。すると、アンダインは顔を上げ、私を指差し、声を高らかに宣言した。

「あたしは人間のソウルを奪い、結界を通り抜けて、貴様らを徹底的に叩きのめしてやる！ ……それが、『親友』というものだらう？ フフフ！」

最後はニツと豪快な笑顔でそう言い切ったアンダインに、私は頷き返す。

「……そうだね。その通りだ」

「だろう？」

「但し、一つだけ理解していて欲しいことがあるんだ」

「……………なんだ」

私はアンダインに、一つだけ先に提示しておく。

「……………今の私、キレやすくなってるんだ。だから、もしチエーンソーとかを理不尽な理由で向けられでもしたら、またブチギレちゃうかも知れないから、それだけは了承しておいてくれると助かるなあ。……………ああ、本当に理不尽な理由だった場合だからね？」

笑顔でそう言えば、アンダインは私のブチギレを思い出したのか、顔を強ばらせた。そしてまた暫く沈黙し、苦々しい顔で頷く。

「……………まあ、その場合はな……………」

「うん。本当に理不尽だった時だけだから」

……………言質は取った。

そんな事は思いながら、私はポケットの中にあるナイフに触れた。

「さてと、話はそれだけかな？ それなら私達はもう行くけど……………」

「ああ、それだけだ。もし何か用があったりしたら、スノーデインに寄ってくれ」

「りょうかい」

それから、とアンダインは続ける。

「もし何か助けがほしけりや、パピルスの方に連絡してくれ。……まあ、お前達ならきつと切り抜けられると思うがな」

「あはは、ありがとう。期待に沿えるよう頑張るわー」

「それじゃあまたな、人間！」

「うん、またね」

フリスクと一緒に手を振り、走っていくアンダインを見送る。……うっわ、はええ。
「……………行っちゃったね」

アンダインの揺れる緋い髪が見えなくなったところで、フリスクが手を下ろしながら
そう言った。そして、満面の笑顔でまた口を開く。

「良い人だったね」

「……………そうだね。あ、パピルスのところに電話してみたら？ 面白い事になってると
思うよ」

「！ うん」

同意しながら提案してみると、フリスクは頷いてポケットから携帯を引っ張り出す。
そして、ボタンを押して自分の耳に押し当てた。

プルルル……

「……」

何回かコールした後、パピルスが出たのか、コール音が止んだ。あんまり聞こえないが電話の向こうでやっぱりカオスな事になってるらしく、少しすると、クスツとフリスクは笑った。

そして暫く話をした後、フリスクは電話を切った。

「どうだった?」

「お姉ちゃんの言う通り、面白い事になってたー」

「そっか」

ゲームだった時とおんなじ会話が展開されたらしく、クスクスと可笑しそうに笑いながらそう言った。

「……さてと、そろそろ行く?」

「うん、そうだね! 行こう!」

私の言葉に笑って頷いたフリスクは、私の前を歩き出す。その後を追って、私も歩き出した。……熱いところ、苦手なんだけどな……

75. Hotland探索①

〔Lily〕

「あつつつつつ!!」

ぼこぼこ橋の直ぐ下で音を立てるマグマの所為か、ホットランドは本当に暑かった。うん、さつきまでのウォーターフォールの涼しさが嘘のようだな!! (錯乱)

「……マグマって、こんな風になってるんだね」

「あんまり身を乗り出さないで、怖いから。……そうだね。私も初めて現物みたよ」

ウォーターサーバーのある場所で身を乗り出して目下のマグマを見つめるフリスクに落ちないかハラハラしながら同意する。……ガチで初めて見たぞ。マグマがあるって事は、大分地下深い所に居るってことになるけど……どこら辺なんだ、ここ。

そんな事を思いながらパーカーを捲ってリュックから水入り瓶を取りだし、中身を補充する。……この暑さだ、絶対に汗が出る。それでアンダーンみたいに脱水症状になりたりでもしたら笑えない。

そんな事を思いながら後ろでデカイ貝のモンスターとフリスクの間で展開される会話を聞き流しつつ、水を大体八分目ぐらいにまで入れる。……うん、これぐらいでいい

かな。

「よし、これで大丈夫。行こう」

「うん」

話を切り上げて待っていてくれたフリスクに声をかけ、水入り瓶をリュックにしまい、その代わりに腕輪を引っ張り出して手首に付け、背負い直す。……あ、重い。

「喉渴いたりしたら直ぐに言うこと、いいね？」

「はい」

「つかお兄さんはいらんの？」

「いらぬから心配すんな」

「そう」

一応貝のモンスターに訊けば、そう返される。いらぬならいいや。

「じゃあ、あの建物目指して進もつか」

「うん」

目の前に見える白い壁の建物を目印に私達はまた歩き出す。……遂に来ちやつたなあ。

「なんだろうねあの建物……」

「うーん……『ラボ』って書いてあるから十中八九研究所だと思うよ?」

「研究所かあ」

『ラボ』という看板が書いてあるのが見えるぐらいにまで近付いてそんな会話をする。……またしても自動翻訳が効いているらしい。

「先どっち行く?」

「うーん……じゃあ、まずこっち!」

「オツケー」

フリスクが選んだ階段の道を下っていく。川の上に見覚えのある青っぽいフードの人物と船が見え、そう言えばここだったかと思ひ出す。

見知らぬ人物に興味を持ったのか、フリスクは階段を駆け降りて、その人物に近付いていく。

「トウフラ。私はリバーマン。それともリバーウーマンだったかな……? まあ大して重要なコトじゃない」

いや重要だろ、と何処か中性的な声で喋ったりリバーパーソンさんに心の中でツツコミを入れる。

「あー、どうも、初めまして。リリーです」

「初めまして。良い名前だね」

「ははは、ありがとうございます。えーっと、リバーパーソンさんって呼べばいいですか？」

「そうだね、そう呼んでくれれば嬉しいかな」

名乗り返せば、リバーパーソンさんはゆっくりと此方を向いて、私の名前を褒めてくれた。それに少し気恥ずかしくなりながらまた返せば、これまた中性的な穏やかな話しか方で返してくれる。……うん、どっちかわかんねえ！

「舟に乗るのが好きなんだ。君たちも一緒にどうだい？」

「……だつてよ。どうする？」

どうやらゲーム通り乗せていってくれるらしく、リバーパーソンさんはそう問いかけてくる。フリスクにどうするか訊いてみると、フリスクは少し考え込むような素振りをして、首を横に振った。その仕草で、私は『Player』は先に進む事を優先したらしいと判断する。

「そうかい、またいつでもおいで」

リバーパーソンさんの言葉にフリスクは頷き、先程来た階段を駆け上っていく。

「ふふ、子供って元気だね」

「そうですね」

「……君も、あまり無茶をしちゃいけないよ？」

何気ない会話をすると、ふと、リバーパーソンさんからそんな言葉を贈られる。

「あー、えつと……善処します」

「約束はしてくれないんだね」

「まあ、そりゃあ……あはは」

思いつきり無茶する予定ですし、とは言えず、私は笑って言葉の先を誤魔化した。

「お姉ちゃーん、早くー!」

「はーい。……それでは、失礼しますね」

「またいつでもおいで」

ゆつたりと穏やかな声でそう言ってくれたリバーパーソンさんに会釈をし、私も階段を昇る。

「お待たせ」

「何かお話してたの?」

「うん、まあね」

そんな事を話しながら、次は道を塞いでいる二人の鎧騎士に話しかける。

「すみませーん、そこ通して貰えませんか?」

「……」

「あー、すまん、無理だ」

「えっ、どうしてです?」

角のある鎧騎士さんには予想通り反応してもらえなかったが、兎の耳のような飾りのある鎧騎士さんには反応してもらえた。自然な感じを装って理由を訊いてみる。

「アンダーン様から、人間に警戒しろって言われててな。ああ、で、オレたち王国騎士がエレベーターを封鎖してるってワケ」

「あー、成る程……人間が最短ルートでお城に乗り込んだらマズイですもんね……」

「そういうこと。ンガア!どっちにしるエレベーターは動いてないが、善処します、アンダーン様!」

「動いてないんですか!?!」

その言葉を聞いて、どうしようと困ったような振りをする。そこで、フリスクが手を引っ張ってきた。

「ん? どうした?」

「電話してみる?」

「……その手があつたな……」

フリスクに手をひかれるままに一度騎士さん達から離れる。そして、フリスクが電話を引っ張り出し、ボタンを押してコーリングするのを見守る。

プルルル……プルルル……プルルル……

何回かコールがなって、切れた。どうやらアンダインが出たらしく、彼女の声が途切れ途切れに聞こえてくる。

「……………」

そして、フリスクは驚いたように目を丸くした後、しよんぼりとした顔をした。……
どうやら無理だった模様。

電話を切り、フリスクは困ったように私を見上げた。

「無理だつて……………なんか、自分が人間を通してやれつて言ったら洗脳されてるつて言っちゃったらしいよ」

「なんとという事をしでかしてくれたのでしよう」

ゲームだった時通りそう断られたらしく、フリスクはそう言った。

「えー……………マジでどうしようか。お城に行けないと不味いんだよなあ」

「……………おい、そこのお二人？」

「はい??」

困った振りを続行すると、さっきの騎士さんが見かねたらしく、話しかけてくる。
……………うん、これを待ってた。

「どうしてもつて言うなら、そのラボから行けるぞー」

「本当ですか!!? ありがとうございます!」

なんということはないぞと言わんばかりに小さく手を振ってくれた鎧騎士さんにお辞儀をし、感謝の意を伝える。

「じゃあ、彼処に行かなきゃだね。行こうか」

「そうだね。……あ、ちよつと待って」

フリスクが決意の光に触れ、セーブを行う。ぼんやりとしか見えないそれが、私にはとても邪魔に感じた。

「終わったよ、行こう」

「……おー」

フリスクに笑みを向けながら、私達はラボに足を踏み入れた。

76. アルフィスとメタトンとの邂逅

〔Lily〕

「おお、涼しい……」

さつきまでクツソ暑い所にいた所為か、光がない暗いラボの中は涼しかった。冷房効いているのかな？

「すみませーん、誰か居ませんかー？」

「……？ あ、お姉ちゃん、あれ……」

「ん？」

声をかけながらラボの中を少し進むと、巨大なテレビがついていた。何かを映し出している事に気付いたらしいフリスクは、テレビに近付いていく。そして、テレビを見てから驚いたような顔で振り返った。

「ぼく達が映ってるよー！」

「はあ?」

思わず驚いて私もテレビに近付いてみる。すると、スクリーンを覗き込む私達の背中が映っていた。

「ええ……マジかよ……何処にカメラがあるんだ……？」

そう言いながら振り向いて天井の方を見てみる。キラリとテレビの光に反射してカメラらしき物のレンズが見え、彼処かと見当をつける。

「ちよ、盗撮やん……」

「え？」

「いや、なんでもない……行こう。暗いから離れないでね」

「うん」

思わずそう呟けば、フリスクに不思議そうな顔をされた。……いや、うん、見られてたのは知ってたけどね……？

「……おーい、誰か居ませんかー？」

テレビから離れ、また呼び掛けながら進むと、シュツという何かが動く音が少し先で聞こえた。

「……ん？」

目を凝らして見ていると、小さめの影が動くのが見え、その瞬間、周りが明るくなつた。

「うおっ、まぶしっ」

「……え？」

突然明るくなった事に目が着いて行けず、思わず目を覆いながら声を出す。すると、相手も此方に気付いたらしく、驚いたような声をあげた。

「うー……あ、どうも」

目を瞬かせて光に慣らしながら手を上げて挨拶すれば、白衣を着た恐竜のような眼鏡をかけたモンスターは、驚いたように目を丸くし、そして頭を抱えた。

「ああ、なんてこと。こんなに早く来るなんて思ってもいなかったわ!」

わたわたという効果音が付きそうなくらいに慌てながら、優しい声で目の前の彼女はそう言う。

「シャワーもまだだし、服も適当だし、部屋も掃除してないし、それから……」

「あの一、ちよつと……挨拶に伝えてくれないとこの左腕が下ろせないんですけど……」
慌てる彼女にそろそろ上げている左腕が辛い事を言えば、はつとして彼女は此方を向いた。

「あ、ご、ごめんね! どうも! 私はアルフィス博士。アズゴア王直属の科学者です!」

「どうも」

自分で『博士』って言っちゃうのね、と思いながら挨拶を返し、左腕を下ろす。チャリ、腕輪の鎖が擦れる音がした。

「で、でも、あー、私はワルモノじゃないですよ!」

慌ててそう付け足す彼女——アルフィスを見ながら私は内心苦笑する。……私、全部知ってるからなんとも言えないんだよなあ。

「実は、あなたたちがルインズを出てから、私は、ええと……」

若干吃りながら話すアルフィスの言葉に耳を傾ける。

「……ずっとあなたたちの冒険を画面越しに観察していたの。あなたたちの戦いも……あなたたちの友情も……全て!」

「……それ盗撮って言うんじゃないや。え、じゃあスノーデインとかにあったカメラとかで見てたってこと?」

思わず小声でツツコミを入れつつ、私はアルフィスに確認する。

「……!! ええ、そうよ!」

「? あー……やっぱりそうなんだ」

一瞬、私を見たアルフィスの顔がぱあつと輝いたような気がして、内心で疑問が生じる。ただ、次の瞬間にはもう微笑むような顔に戻っていたからか、気のせいなのか迷って判断が下せず少し困惑する。……なんだったんだ?

「最初はおなたたちを止めようとしていたんだけど、でも……スクリーンを見ている内に応援したくなったっていうか」

少し照れながらそう言葉を紡ぐアルフィス。

「だ、だから、えー、助けになりたくて！ 私の知識があれば、ホットランドは簡単に抜けられるので！」

「！」

アルフィスのその言葉に、今度は横に居るフリスクがぱあつと顔を輝かせる。かわいい。

「アズゴア王のお城にも案内できるし、大丈夫！」

「おお、それは助かるね」

私が相槌を入れると、アルフィスは一瞬口を閉ざした。

「……………えっと、でも実は、あー、ちよつとだけ問題があつて」

問題？と言わんばかりに、フリスクは首を傾げた。

「随分前に、私はメタトンっていうロボを作ったんですけど」

『ロボ』と聞いて驚いたのか、フリスクは目を丸くした。

「元々のコンセプトは、エンターテイメント用のロボで。…………あの、その、テレビスター

ロボって感じの」

「…………アニメとかでよくあるような？」

「そうそう、そんな感じ！」

確認の為にそう訊き返すと、アルフィスは頷いた。

「で、そのロボをもっと便利にできないかなと思つて。あの、ちよつとした実用的な機能つていうか」

「あー、あると便利だもんね。それで？」

相槌を打ちながら、話の先を促す。

「た、例えば……対……対人戦機能とかそういうアレみたいなの？」

「……………へえ、そっか」

その言葉を聞いて、自分でも驚くほどの低い声が出た。私の雰囲気は急変したのを感じ取ったのか、一瞬、アルフィスが顔を青褪めて固まった。……まあ、アンダインにキレてるのもどうせ見てたんだろうしなあ。そりゃ怖がるわな。

「も、もちろん、あなたたちが来てすぐに、解除しようとしたんですけど！ ……ちよつとした手違いがあつて……」

「ふーん。それで？」

「あー、えつと……」

吃りながら話すアルフィスに、次を急かす。

「……………人間の生き血を求めて暴走する殺人兵器になつちやつた、みたいなの？ エへへ

へ……………ハア」

「そう」

冷たく見えるであろう反応を返しながら、内心でアルフィスに若干の罪悪感と怒りを覚える。……ごめん、君が考えてること全部知ってるんだよなあ。

「でも、まあ、出会わなければ大丈夫なので！」

「それフラグでは……？」

思わずツツコミを入れたその時、小さく、何かが転がってくるような音が耳に聞こえた。

「あれ？」

フリスクもその音に気付いたらしく、キョロキョロと辺りを見渡す。

「……？ 何か聞こえたかしら？」

私達の行動を不思議に思ったらしいアルフィスがそう言った瞬間、

ドオンツ!!!

「うおっ!!」

「わっ!!」

固いものが何かを突き破ろうとしている音が聞こえた。衝撃のあまりに地面が揺れ、

一瞬ふらついてしまう。

「離れないで!!」

「うん!」

フリスクを抱き寄せ、振動に耐える。

ドオンツ!!!

ドオンツ!!!!

だんだんと近付いてくるその音に、お出座しかと覚悟を決める。リュックからナイフを急いで取り出し、もしもの時の為にポケットに突っ込む。

ドオンツ!!!!!!

「オーノー」

アルフェイスが顔を青褪めさせ、音が聞こえた壁を見る。

ドオンツ
!!!!!!

壁が衝撃に耐えられなかったらしく、一際大きな音を立てて倒壊する。フリスクに瓦礫が当たらないように底いながら、もうもうと立ち上る煙の向こうに揺らめく影の動きを見つめる。……来たか。

その次の瞬間、照明が落ちて、暗闇が訪れた。

「オーウ イエス！」

キンキンとした機械つぼい男性の声が聞こえた。

「ようこそ、みなさん……」

次の瞬間、壁をぶち抜いて登場した影にパツとスポットライトが当たり、姿を照らし出す。……そこにいたのは、とても覚えのある箱型のロボットだった。

「本日のクイズショーへ!!!」

電子音の所為で耳が若干痛い、と思いながら、上から降りてきたミラーボールと紙吹雪、そして『ゲームショー』と書かれたネオンサインの看板を見て、顔をしかめる。目がいてえ。

「今回も素晴らしいショーになることでしょう！ さあみなさん、今日の挑戦者に盛大

な拍手を！」

「……あー、えっと、君がメタトンかな？」

何故か聞こえてきた拍手と私達の上から落ちてきた紙吹雪の中、取り敢えず私はマイクでシヨ（？）を始めようとするロボットに確認をする。

「わお！ これは嬉しいサプライズです！ 私のことを知っていただけるとは!!」

「まあ、さつきまでアルフィスに説明されてたしね……」

すると、ロボットは此方を向いて、嬉しいような声で目の前のロボット——メタトンはそう言った。その姿に私の記憶の中の彼と一寸の狂いはなく、やはり彼なのだと思える。

「クイズシヨは、初めてかな？」

「参加した事があるかってこと？」

「そういうこと！」

「……それなら、私達二人ともないよ」

若干困惑していると、メタトンからそんな問いが投げ掛けられる。意味を確認して答えると、メタトンは顔らしき場所を黄色とオレンジに点滅させる。

「心配ご無用！ とつても簡単ですよ！」

いつの間にか横に出てきていたフリスクが、それを聞いて安心したように息を吐い

た。

「ルールは、たったの一つだけ。クイズに正解しないと……」

メタトンが次の言葉を紡ごうとしたその時、『1』と表示されていたパネルが、赤と黄に点滅する。

「アナタたちは死んじやいます!!!」

「……………は?」

メタトンがそう大声で言い放ち、フリスクが顔を青褪めさせて固まったその瞬間、世界が白黒に切り替わった。

77. 生死を賭けたクイズショー

[Lily]

*Metataton が襲いかかって来た
attacks!

白黒に切り替わった世界の中、クイズ番組らしいBGMが耳に届く。スピーカーが何処かにあるのだろうかとうと判断しつつ、ポケットに手を入れて、先程突っ込んだナイフのハシカチの結び目を緩ませておく。

*METATON—ATK 30 DEF 255

*
金 属 体 全 て の 攻 撃 を

His metal body renders him invulnerable to

フリスクは『ACT』を押して調べたらしく、頭の中でそんなアナウンスが流れた。ゲームだった時通り、この時のメタトンは物理攻撃無効状態にあるらしいと判断する。ふとメタトンの隣に佇むアルフィスを見ると、申し訳なさそうな、心配そうな顔をしていた。

「お姉ちゃん……」

「……………取り敢えず、流れに乗っておこう。大丈夫、なんとかなるよ」

不安そうな顔をするフリスクの肩を抱き寄せ、元氣付ける。フリスクはまだ不安が拭えないのか、顔を変えずに小さく頷いた。

「これを使つて答えて下さいね!!!」

メタトンがそう言うと、私達の前に『A』『B』『C』『D』と書かれたカードのような物が四枚置かれる。これを掲げて答えればいいのか、と判断し、それを拾い上げて、『A』と『B』のカードをフリスクに手渡した。

「上げて、つて言ったら頭の上まであげてね。私にもどつちか上げて欲しかったら言つて」

「うん、わかった」

フリスクが頷いたのを見てから前を向くと、上から大きめのスクリーンが降りてきていた。ここに問題が映るんだろうと思ひながら、いつでもナイフを取り出せるようにしておく。

『簡単な問題から始めますよ!!!』

そう言うと、メタトンは何処からか問題が書かれているのであろうカードを取り出した。

『このクイズの賞品はどれ?』

メタトンがカードを読み上げると、スクリーンにゲーム通りの答えが表示される。真

ん中に秒数を示す数字が映り、刻々と数字が減っていく。答えを急かしているんだろうな、と考えながらバレないように目を動かし、アルフィスを見ると、ゲームだった時通り手を答えである『D』の形にしていた。

「D!!」

『D』のカードを頭上に上げる。すると、ピンポーンというクイズ番組でよく聞く正解を告げる音になり、少量の紙吹雪が降ってきた。

『その通り！よくお分かりで！』

メタトンがそう言うのを聞き流し、また顔を動かさずにアルフィスを見ると、此方に向けて親指を立ててサインを出していた。一瞬、アルフィスに対して怒りが首をもたげたが、抑え付ける。

*The quiz show continues.

此方にターンが回ってきたらしく、そんなアナウンスが流れた。取り敢えず『MERCY』を押してターンを進めようとするフリスクの耳に顔を近付け、小声でアドバイスをする。

「フリスク、メタトンの横のアルフィスを見て。なるべく顔は動かさないようにね」

「……？ うん」

フリスクは私の言葉に頷いて、前に向き直り、『MERCY』を押した。ピツという音

がして、ターンが進む。

『それではステキな賞品を差し上げましょう!』

そう言ったメタトンは、またカードを取り出して内容を読み上げた。

『王様のフルネームは?』

「……! お姉ちゃん、『C』あげて!」

「オツケー、Cで!」

アルフェイスが手の形を『C』にしているのを見たフリスクは、私の言ったことの意味を理解したらしく、そう言った。それに従って私は『C』のカードを頭上に掲げる。

『正解! 素晴らしいアンサーだ!』

ピンポーン、と、また正解の音が聞こえ、ターンが進む。

*The quiz show continues.

フリスクが『MERCY』を押し、ターンが回る。

『次は、私のことについてお話ししましょう!』

シヨールを盛り上げるようにメタトンはそう言って、またカードの内容を読み上げた。

『ロボットは何でできている?』

「いや、これは誰?でもわかるだろ。Bで」

『簡単すぎたかな』

????????

そう言いながら『B』のカードをフリスクの頭上にかけてもらうと、また紙吹雪が降ってくる。それを目で追って床に落ちるのを見届ける。あ、勝手に消えた。掃除大変そうだなとか思ったけどそんなことはなかった。

*The quiz show continues.

流れたアナウンスを聞きながら勝手に消えた紙吹雪に目を丸くしていると、ピッとフリスクが『MERCY』を押した音が聞こえた。

『では、また簡単な問題を出しますよ!』

ターンがメタトンに回り、またクイズが出される。

『二台の列車があります。列車Aと列車B、同時に出発して駅Aから駅Bに向かいます。駅Aから駅Bまでは252.5マイル離れています。列車Aは時速124.7マイルで駅Bに進み、列車Bは時速253.5マイルで駅Aに進みます。』

もし午前10:00に開始し、現在10:08なら、列車がすれ違うのは何分後?』
「結構難しめの数学の問題じゃねーか!!」

知ってはいいたが少なくとも簡単ではない問題に思わずツツコミを入れる。解き方知ってねーと解けねえよ……フリスクみたいなお子供になんてもん解かせようとしてんだ。フリスク目が点になってるじゃねーか。

「……Dで」

『素晴らしい！これは驚きました!!』

私が答えると大袈裟に驚いてみせるメタトンに、白々しいなという感想を抱く。

*The quiz show continues.

まだ続くクイズショーにそろそろ飽きてきながら、油断はせずにフリスクが『MER CY』を押すのを見守る。

『油断は禁物ですよ……』

ピツという音がして、ターンがメタトンに回り、またクイズが出題される。

『ビンの中にハエは何匹?』

メタトンがそう読み上げた瞬間、スクリーンに瓶が映し出される。一応目を凝らしてみるが、中に入っているハエの数はとてもじゃないが数えられないほど小さかった。

「お姉ちゃん、『A』!」

「……Aで」

『正解! 今日についてるね!!』

フリスクの指示通り『A』を頭上に上げると、正解を告げる音が響き、ターンが回る。

*The quiz show continues.

アナウンスを聞きながら、あと何問だったかと思い返す。出番が無さげなポケットのナイフに触れながら、ターンが過ぎるのを待つ。

ピツという音がした。

『ここで記憶力テストです』

唐突だな、と思いながらメタトンが問題を出題するのを待つ。

『何のモンスター？』

メタトンが問題を読み上げると、スクリーンにフロギーの顔を半分にしたようなものが映った。それを見て、これは間違うかもしれないと察し、ナイフの柄を掴んでおく。

「……………」

案の定^{Player}フリスクはアルフィスが『D』にしているのに疑問を抱いたのか、戸惑うように私を見上げたり、手元のカードを見たりする。そして、時間が無くなっていくことに焦ったのか、意を決したように、自分の手元にあった『A』のカードを上げた。

ブブツ

『おやおやこれは恥ずかしいですね？』

「!!」

不正解を告げる音が鳴り響き、メタトンがそう言って指を此方に向け、罰ゲームであろう雷を発射しようとする。絶望した顔になって固まったフリスクの前に躍り出てハシカチを取ったナイフを突き出し、避雷針代わりにして万が一にでもフリスクに当たらないようにする。

バチバチツ

「が、あつ……!!」

!!!

ナイフを伝つて電流が流れ、容赦なく体を焼いていく。電流は直ぐに止まるが、体に残つた痺れのあまり、ナイフを床に落としてしまう。からん、という音が響いた。

「……………いつ、て…………」

「お姉ちゃ…………」

「大丈夫だよ、気にすんな。それよりもクイズに集中しなきゃね」

「……………うん」

痺れる体を動かしてナイフを拾い上げ、ポケットの中にしてしまう。今のところ一番痺れる腕を擦る私を心配そうに見るフリスクの目線を感じながら、全身が痺れるってこんな感じなんだな、と内心呑気に思っていた。

*The quiz show continues.

そんなアナウンスが流れて、此方にターンが回ってくる。フリスクは私を心配そうにもう一度見て、そして『MERCY』を押してターンを譲った。

『でもこれはどうかな???』

メタトンにターンが回った瞬間、次の問題が出される。

『幽霊とキスしたい?』

「!?」

「……………そもそもの話幽霊とキスって出来るの……………」

予想していなかった問題に驚いたのか、フリスクが固まった。ちらつとアルフィスを見れば、此方にサインをださず、すげえ顔でメタトンを見ていた。完全に引いとるやんけ。

全部答え一緒なんだから選ぶ意味ねーよなと思いつつながら、私は答えを言う。

「Aで」

『素晴らしい!!その答え最高だね!!!』

選択肢一つしかなかったくせに白々しいな。

そんなことを思いながらひらひらと降ってくる紙吹雪を眺めて、ターンが回るのを待つ。

*The quiz show continues.

またフリスクが『MERCY』を押し、メタトンにターンを譲る。

『ここで簡単な問題です』

そう言つてメタトンはまた問題を読み上げる。

『名前は何文字ある?』

メタトンがそう言うと、スクリーンに『名前：M e t t a t o n』という文字が表示される。ここには翻訳は効かなかったみたいだなとぼんやりと思っていると、名前の最後に『n』が連続して映されていく。

「バグったキーボードかよ……Cで」

『その通り!! 簡単な問題だったね!!!』

ピンポーンという音が聞こえ、ターンが回る。

*The quiz show continues.

これで確か最後だった筈、と思いながら、フリスクがターンを譲るのを見届ける。

『ここで真打ち登場だ!!』

そう言ったメタトンは、問題を読み上げた。

『恋愛シミュレーションゲーム『M e w M e w K i s s y C u t i e』の ミュ
ミューの好きな食べ物は何?』

「……えっ、誰それ」

知らない名前に思わずツツコミを入れれば、シユバツとメタトンの横のアルフェイスが興奮した様子で手を上げた。

『はい! はい! それね! 答えはカタツムリ味アイス!!』

「なんだそのフレーバー」

絶対にゲテモノだろ。

アルフィスの口から出た見知らぬアイスのフレーバーに思わずツツコミが口から滑り落ちた。正直言つてどんな味か想像が出来ないんだが。

そんな風に遠い目になっていると、アルフィスは俗にいうオタク語りを始めた。

『明らかに^{!!}なったのは第四話のエピソードで^{!!!}ミューにやん友達^{!!!}の分まで買つてあげたんだよね^{!!!}でもカタツムリ味が好きなのはミューにやんだけと判明^{!!!}まさにあのシーンは最高^{!!}オブ最高^{!!!}!実はあれは友情の大切さを伝える超重要なメ^{!!}ツ^{!!!}シーズン……で………』

そこまで早口で捲し立てていたアルフィスははつと我に返り、会場がシーンとしてい
る事に気付いた。そして、黙つてアルフィスを見ていたメタトンを、顔を青褪めさせな
がらぎぎぎぎという軋む音がしそうなぐらいにゆっくり見た。

『アルフィス。アルフィス。アルフィス』

メタトンは、クイズショーを邪魔された怒りからか、若干怒りを滲ませた声でアル
フィスに話しかける。

『挑戦者を手伝つてない? 手伝つてるよね?』

先程までのスターの顔をかなぐり捨てたメタトンの言葉に焦つたように首を横に振
るアルフィス。だが、その顔から見て、嘘だということは遠目でもすぐに分かった。

『ああもう!!それならそうとなんで最初に言ってくれないかな』

苛ついた声でメタトンはそう言うと、次の問題のカードを取り出した。『最初』という言葉が引つ掛かり、やっぱり打ち合わせされてたんだなと察した。

『次の問題は……アルフィスなら絶対に解ける問題だからね!!』

わたわたと慌てるアルフィスを一瞥し、メタトンは声高々に問題を読み上げた。

『ドクター・アルフィスがお熱なのは?』

「いや知らねえよ……」

ドストレートな問題に思わずそう口から言葉が滑り落ちつつ、フリスクの傍に寄って相談する。

「えー……どうするよ、これ」

「………なんでアンダインの名前があるんだろう?」

「さあ……? 何にする?」

「うーん………そうだなあ……」

フリスクはしばらく考え込む素振りをした後、ふと私の手の中にあるカードとスクリーンに映る答えを見て、頷いた。

「答え、決まったよ。これにする!」

そう言ったフリスクは『C』のカードを指差した。

「これなら嘘じゃないもんね！」

「うん、まあ、そうだね。Cで!!」

相談を終えて答えを告げれば、メタトンは一瞬固まった。

『……………え、マジで?』

「素が出るぞ、テレビスター」

呆れたようにそう言ったメタトんに若干苛つき、冷たくそう言ってしまう。

『おやおや……………なんて自意識過剰なチョイスなんだい……………?』

「いやだつてさつきまでアルフィスがカメラ越しに私らの事見てたつて言つてたしねえ。嘘にはならないでしょうよ?」

口調をテレビスターのものに戻したメタトんにそう言えば、続きの言葉が紡がれる。

『最高だ!! 完全な誤答ではあるものの、部分点ぐらいはあげたいよね。……………博士が君を監視する姿を見てた身としては』

「……………へえ。傍に居たんだ」

アルフィスの話と食い違う言葉に気付き、思わずそう突っ込む。すると、好きな人を当てられずにすんでほつとしていたアルフィスがまた顔を青くした。

『君達の成功に微笑み。君達の失敗に悲鳴をあげ。いつもいつも、こう囁いていた……………』

そこでメタトンは一旦言葉を切り、声を変えて続きを紡いだ。

『ちがうの！　なんで！　こっちの道が正解なのに！』……これも一つの、愛の形なんじゃあないですか??』

「すげえ一方通行だな」

思わずそう言えば、アルフィスがショックを受けたように固まった。それを見ない振りをして、私はメタトンに集中する。

『まったく。アルフィス博士が手出しなんてしたから……クイズショーもすっかり興ざめです！　このまま続けるなんて出来ません！』

呆れたようにそう言いながら、メタトンはマイクを持って番組を進行する。

『が。しかし!!!　これは言わばお試し版!!』

メタトンがテレビの向こうの観客を盛り上げるようにそう言う。

『次回はよりドラマティックに!!　よりロマンティックに!!　血飛沫増量でお届けします!!!』

「増量しなくていいわ」

血飛沫に関しては特にな。

『またね、ダーリン……!!』

私達にそう言って腕とローラーの部分をしまい、箱型になったメタトンは、ロケットを発射するように垂直に飛んでいった。それを見上げながら、彼が離脱した事により、

戦闘がキャンセルされて世界が白黒から切り替わっていくことに安堵する。……ああ、良かった。守りきれた。

「……あー、いつてえ……」

「お姉ちゃん、大丈夫……?」

「うん、大丈夫」

警戒を解くと、思い出したかのように電流を食らった際の痺れがぶり返してくる。ただ若干痺れる体を動かし、リュックの中身を確認する。……あ、良かった、無事だ。

「……なんで……あんなの出題するはずじゃなかったのに……」

一人で居る事が多かった所為なのか、独り言を言う癖が着いてしまっているらしいアルフィスがそんな事を呟いたのを聞き逃さずに、脳裏に記憶しておく。言質は取ったぞ、と思いつながら、私はメタトンが出てきた壁の穴に近寄り、よく観察する。

「……………」

ゲーム通りというかなんというか、そこには壁を貫いて来たような感じの破壊の跡はなく、メタトンが入るのに丁度良さそうな穴が広がっているだけだった。そこで、やはり二人はグルなんだと察する。

「……………お姉ちゃん、どうしたの?」

「いや、何でもないよ。……………行くか」

「うん」

徐に穴に近寄った私を不思議そうに見上げるフリスクに何でもないと誤魔化し、ラボの先に進もうとする。

「あ、ま、待って！ 待って！」

「ん？」

不意にアルフィスに呼び止められ、振り返る。

「これ、私の電話番号！」

そう言っただけでアルフィスはフリスクにメモを手渡した。そのメモを上から覗き込むと、携帯番号らしきものが書き綴られていた。フリスクはそれに目を通す。

「ええと……できれば……あなたたちの助けになればと思っ……」

ちよつと赤くなつたアルフィスの反応を見ながら、フリスクからメモを借りる。

「うーん、先に登録しちゃうか。携帯貸して」

「うん、はい」

フリスクが携帯を引っ張り出し、私に渡そうとすると、アルフィスが目を丸くする。

「あら……そんな古い電話を何処で手に入れたの!? メールも打てないみたいだわ」

「え？ あー……ちよつとな。どうかそんなに古いんかこれ」

「そうよ！ ちよつと借りてもいいかしら？」

「あー、どうするよ」

フリスクに一応確認して見るとコクリと頷いたので大丈夫なようだ判断してアルフィスに携帯を手渡す。

「ちよつと待ってて!」

アルフィスは携帯を受け取ると、スクリーンの横の乱雑なデスクに駆けていく。そして、チューインという何かの機械音がして、数分もしない内にまた駆けて来た。

「見て、あなたたち向けにアップグレードしたの!」

「うお、すげつ」

先程の若干ボロついていた携帯までとは思えない程に綺麗になって返ってきたキーチェーンのついた携帯を見て、思わず目を見開いてそう言うのと、照れたらしいアルフィスは少し顔を赤くした。

「メールも出来るし、アイテムも出せるし、キーチェーンも……さらに、地下世界で一番人気なSNSにも登録しておいたわ! これで私たちは正式に友達ね! エへへ!」

「おー、ありがとう。助かるよ」

差し出された携帯を受け取り、フリスクに渡す。フリスクも目をキラキラとさせながら携帯を見て、ポケットにしまった。

「エへ……へ……」

そして、痛いほどの沈黙が流れる。話すことが思い付かないのか、アルフィスは挙動不審に目をキョロキョロと動かし、一步後退った。

「ちよつとお風呂に入ってくるね」

そして、空気に耐えられなかったのか、シュツという音を立てて開いた扉の中に逃げ込んだ。

「……………アルフィスって、凄いなだね」

「そうだなー」

アルフィスが去った後にそう一言呟いたフリスクに同意しておく。技術力は凄いなだけだな。

「……………さてと。何処か探索するところは無さそうだし、行く?」

「うん!」

オタクの自分の領域には入ってはいけないだろうと判断し、そうフリスクに訊けば、フリスクも頷いた。それを見て、私はラボの奥へと歩き出した。

78. Hotland探索②

〔Lily〕

アルフィスのラボから出て数歩すると、ピロン、という音が隣のフリスクから聞こえた。

「……なんだ今の音？」

「さあ……？ 携帯かなあ？」

フリスクは首を傾げてから先程改造してもらったばかりの携帯をポケットから引っぱり出す。

「あ、やっぱりそうみたい」

そして携帯見たフリスクは、そのまま携帯を弄り出す。それを横から覗き込むと、何かの画面を見ていた。画面を隅々まで見て、アルフィスが言っていたSNSの画面だと結論付ける。……地上の某青い鳥マークのSNSそっくりやな、これ。

『アンダインの戦いまだ見てないんだったv. v』

アルフィスのページの書き込みを見て、ネットスラングを使いこなしてやがるという感想を抱く。……というか、見てなかったんだ。

「…………あれ、アルフェイスお風呂入ったんじゃないかな？」

「あー、シャワーだけにしたんじゃないかな」

「そっか！」

矛盾に首を傾げたフリスクにフリスクから逃げる為の言い訳だつたと言えるわけもなく、私はそれらしく誤魔化しておく。そのまま携帯を弄りながら歩いていると、またSNSが更新される。

『まあアンダインが負けるわけ無いし後で本人に聞いてみよ、。』

ごめんアルフェイス、思いつきり心叩き折りに行つたわ。アンダイン一回めっちゃ虚ろな目してたぞ。

「お姉ちゃん、ぼく、これ見てていい？」

「うーん……………本当はやめてほしいけど……………いいよ、じゃあ私が手を引いたげる。その代わり、書き込み読み上げてね」

「いいよー！」

アルフェイスの書き込みに思わず遠い目になりながら、更新がされるのを待つて携帯を見続けるフリスクの手を引いて角を曲がる。そして、少し進んだところで、またSNSが更新されたらしく、フリスクが声をあげた。

『人間をご案内すべく拙者も参戦でござる』

それが罠だったりしたら承知しないからな、と思いつながら歩き続けていく。しばらくすると、ベルトコンベアが見えてきた。これに乗っていくらしいと判断し、フリスクに声をかける。

「フリスク、今からベルトコンベア乗るから一旦電話しまいな」

「ん、はい」

返事をして電話をしまったフリスクの手をしつかり握り、手を引いてベルトコンベアに乗る。

「おお……」

勝手に足場が動くという感覚にエスカレーターを思い出し、懐かしさを覚えていると、ふと周りが白黒に切り替わった。……エンカウントか。

* *V u l k i n s t r o l l s i n .*

そのアナウンスに、目の前で陽気に微笑む火山ちゃんつぶつかったらしいということに察し、手を離して回避に専念しようとする。……この子の攻撃、殆ど弾けないからなあ。

そんな事を思っていると、フリスクが『ACT』を押した。

* V U L K I N | A T K 25 D E F 0

*

Mistakenly believe its lava can heal people
 「ヤベエなおい!？」

マグマは人を癒すどころか燃やしますけど!?!とりたいのを抑え、笑顔で近付いてくる火山ちゃんに集中する。

『アッ!・タスケル!・イヤシノマグマ!』

「くんな」

思わず小声でそう言いながら、火山ちゃんの火口のような部分から発射される小さなマグマ弾の雨をフリスクを抱き寄せて避け、被弾しないように立ち回る。

Vulkin parade around the room.

なんとか攻撃を避けきると、ターンが回ってきた事を知らせるアナウンスが流れた。火山ちゃんの方を見ると、アナウンス通りに歩き回っていた。……いや、ここ部屋じゃないけどね。

そんな事を思っていると、『ACT』を押したフリスクが火山ちゃんに近付いて、ぎゅうつと抱き締めた。

*You give Vulkan a hug.

*It warms your heart……

そんなアナウンスが流れた後、フリスクがぱつと勢いよく火山ちゃんから離れた。

*And your whole body!

*Ouch!

*Your DEFENSE dropped!

……まあ、火山に抱き付けばそりやあな……

そんな事を思いながら、走って戻ってきたフリスクを抱き止める。

「おおっと。大丈夫?」

「熱かった……」

「だろうよ」

『キャツ……スゴク……』

茶番を挟みつつ、火山ちやんの火口から出来たにつこりと微笑む雲から発射される電の弾幕を少しづつ動いて避ける。……なんで火口から雲が出来るんだ。

*Vulkin's cheeks glow with a bright heat.

アナウンス通り目をハートの形にしながら頬を染めた火山ちやんを見て、腕の中のフリスクに視線を持っていく。フリスクは『MERCY』に手を伸ばしていた。

*YOU WON!

*You earned XP and 40 gold

戦闘が終わり、周りに色が戻ってくる。怪我を負わなかった事に安堵しながら、ベルトコンベアに身を任せる。

「……………！ お姉ちゃんお姉ちゃん！」

「ん？ どうした？」

「見てて！」

何かを思い付いたらしいフリスクに呼び掛けられ、返答してみると、笑顔でフリスクはベルトコンベアの上を走っていった。……………うおっ、はやっ

「この上で走ると早く走れるよ！」

「おお……………私もやってみようかな」

ベルトコンベアの動力もあるからだろうかと、思いながら、私も走ってみる。ビュン、という風を切る音が聞こえた。はやっ。

ピロン

私がベルトコンベアの上から降りたと同時くらいに、ポケットから音が聞こえた。

「『そろそろ電話しなきゃね！』」

アルフィスのSNSが更新されたらしく、フリスクが携帯を引つ張り出してそう読み上げた。……………アルフィスも見られてるならまだしもまさか読み上げられてると思わないよなあ。

「……進もうか」

「うん！」

また更新待機のために携帯を片手に持ったフリスクの手を引いて、進み始めた。

79. Hotland 探索③

「Lily」

唸るような暑さの中をベルトコンベアに乗ったりなんだりして進んでいくと、光が見えてくる。セーブポイントか、と見当をつけ、真っ直ぐ歩いていく。

「……………フリスク、あれって……………」

「? ……あ」

携帯を見ていたフリスクに声をかけると、光に気付いたらしく私の手を離して近付いていく。そして迷わずに光に触れて、セーブを行った。

「……………終わったよ!」

「そっか、行こうか」

手を引いて進むもうとすると、ピロンという音が聞こえた。……………更新されたのかな?

『電話使うのほんとに嫌いだわ、やりたくない』……………このダブルユーツてなんの為にあるんだろ?」

「ん? ……どれ?」

「これ」

携帯の画面を覗き込めば、確かに『W』が三つ並んでいた。……あー、これは……

「あー、これはね、んー……笑ってる表現みたいなものかな？」

「そうなの？」

「でもあんまりやらない方がいいよ。特定の人にしか伝わらないから、これ」

「そうなんだ……」

ふーん、と言いながらフリスクは携帯をもう一度見てからポケットにしまう。そして、目の前にある何かの機械に近付いた。

「なんだろう、これ……？」

「なんだろうね。対岸に渡る為の装置かな？」

プシュー、とたまに板の間から蒸気が漏れ出す装置を見ながら、そんな会話をする。

……これ、多分ジャンプ台かなんだよね？」

「……ちよつと乗ってみるよ。離れててね」

「うん、分かった」

フリスクに離れてもらい、板の上に両足を揃えて乗ってみる。ぐつ、と私の体重で板が少し沈んだその瞬間、

「うおっ!!？」

「えっ!!？」

蒸気力が作用したのか、勢いよく板が飛び上がり、対岸に向かって吹き飛ばされる。
「ぐっ……」

落下する感覚の中で無事に着地出来るように体勢を整え、なんとか対岸の地面に着地する。

「……あぶねー」

「大丈夫!?!」

「大丈夫ー!」

対岸で心配そうに叫ぶフリスクに手を振り返すと、安心したように一笑した。かわ。

「受け止めてあげるからおいでー」

「……うん」

飛ぶ事に抵抗を覚えたのか、若干渋い顔をしてからフリスクは頷き、恐る恐る板の上に乗った。

バシユンツ

「わあっ!!」

フリスクの体がちゃんと乗った瞬間、装置が作動して吹き飛ばされる。

「わっ………ととっ!! いてっ」

先程私が着地した辺りに丁度落下してきたフリスクを無事に受け止めると、ぶつかっ

た衝撃は受け止め切れず、思わず尻餅をついてしまう。

「フリスク、無事？」

「うん、ぼくは大丈夫」

「ならいいや。立てる？」

「うん」

フリスクに怪我が無いか確認し、立ち上がる。フリスクの腕を引っ張って立たせ、先に進もうとする。

「！」

その瞬間、周りが白黒に切り替わり、また戦闘になった事を察する。

*TTssuunndderrrpllaanneeggetts 行 く 手 を 阻 ん で き た わy!

*Not ワon ザpurpose とor だanything ね!

ツンデレプレンキターー!!

前世で個人的に結構好きだったモンスターが来て、思わず内心でそう叫ぶ。そう言えばエンカウントってここだったな。

フリスクがコマンドを押した時のピツという音がして、ハッと意識を現実に取り戻す。そしていつでも回避が出来るように身構える。……彼女の弾幕は確か落下型のミサイルみたいなやつだった筈。ナイフで弾いたら爆発する可能性がある。

*TSUNDERPLANE—ATK 25 DEF 26

*—Seems mean, but does it secretly like you《イジワルするけど、秘めた気持ちがあるのかも》？

『バカね！　なんであんなの事なんか！』

……………本当にツンデレだ……………

リアルで初めて見たツンデレに内心驚いていると、上空にゲームだった時の弾幕通り彼女が通り、弾幕を落としていく。

「あぶねっ」

フリスクを抱き上げ、地面に着弾した瞬間に爆発する弾幕を冷静に見極めて避ける。……………いくら好きだといっても、態々被弾していくつもりは無いからね。それに今の私の最愛の人はこの子だしね。

*—Tsun der plane gives you a condescending barrel roll《Tsun der planeは気の強いバレルロールを見せつけた》。

弾幕が止んでそうアナウンスが流れた瞬間、アナウンス通りにツンデレプレーンは飛行術を披露した。……………うおっ、すげっ。

そんな風に感心していると、腕の中でピツという音がした。

*—You tell Tsunderplane you like it
 aste in movies and books 《あなたはTsunderplane
 neに本と映画の趣味が良いねと言った》。

『はあ!? ど、どうかしてるわ!』

アナウンスと彼女の反応でナンパしたらしいと察しながら、私は此方に向かつて突っ込んでくる攻撃を避ける。羽が掠り、少し傷を負った。

*Tsunderplane gives you a condescending
 g barrel roll.

照れ隠しからかまた飛行術を披露した彼女を横目に、私は腕の中でまたフリスクが『ACT』を押すのを待つ。ピツという音がして、ターンが進む。

*
 You get close to Tsunderplane. But not too
 『えええ? な、何してるのよ……?』

また弾幕として突っ込んでくる彼女にアナウンス通りに当たらない程度に近づく。それをあと三回繰り返すと、彼女はだんだん顔を真っ赤にしてもじもじとし出す。……終わったか。

*—Tsunderplane "accidentally" bumps you

u with its wing《Tsunderplaneの翼が「偶然」あなたにぶつかった》。

『ACT』を押しして名前が黄色になつていることに気づいたらしいフリスクは、安心したような顔で『MERCY』に手を伸ばした。

*YOUあなたは勝利した WON!

*You earned OXP and 60gold.と OXP and 60gold を得た

恥ずかしさからか逃げるように遠くに飛んでいった彼女を見送りながら、私は戦闘が終わった事に安堵して、フリスクを地面に降ろす。

「お姉ちゃん、さつき、腕……」

「ん？ ……ああ、掠り傷だから別に大したことないよ。大丈夫」

「……………本当？」

地面に降りたフリスクが、私のパーカーの裾を掴んで心配そうに私を見上げる。

「大丈夫だよ、本当に。それよりも早くこんな暑い所通っちゃおうよ。ね？」

「……………うん」

まだ若干納得のいかなそうなフリスクを急かし、探索を再開する。

「さてと……………どっちいく？」

「え？ あー、じゃあ、あっちから行こうよ」

「ん、分かった。……回り道しないといけないみたいだね、これは」

正規ルートから一旦外れた対岸に向かう事に決め、私は左にあった板の上に乗る。バシユンツ、という音を立てながらまた吹き飛ばされ、着地する。……これ、下手したら足首挫きそうだな……

「いいよー、おいでー」

待っていたフリスクに呼び掛けると、フリスクも飛ばされ、此方に向かって飛んでくる。それをまた受け止め、地面に降ろす。

「よっ」

右に曲がり、もう一度板で飛び、着地する。またフリスクに合図を出して飛んできてもらい、受け止める。

「おっとと、怪我はないね？」

「うん」

ぼすつという音を立てながら私の腕の中に収まったフリスクを降ろし、また手を繋ぐ。

「行こうか」

そうして、また歩き始めた。

次は……確か、フライパンが手に入るところだった筈。

真つ直ぐに一本道を進んでいくと、板の矢印の方向が左右に切り替わる装置がある事に気付く。フリスクがその装置に近付いていくのを見ながら、合っていたことに息を吐く。

「……なんだろ、あれ……」

「ん？」

「ほら、あれ」

ふと装置から目を逸らして右を見たフリスクがそう呟き、私に指を差して教えようとする。フリスクの指先を見れば、確かに黒っぽいものが置いてあった。形状から見てフライパンのようだ判断し、ゲーム通りに進んでいる事に安堵する。

「……………フライパン、かな？」

「え、なんであんな所に…………？」

私が黒っぽい物の正体を言えば、フリスクは怪訝そうな顔をする。……うん、ゲームだった時それ私も思った。トリエルさんの所から持ち出したのか？

板の表示が右に切り替わった瞬間に装置に乗り、飛んで対岸に渡る。そして続いて飛んできたフリスクを受け止めて降ろし、置いてあったフライパンを拾う。

「……………うん、若干焦げ付いてるけどやっぱフライパンだわ、これ」

コン、とフライパンを手で叩いてみて、感触を確かめる。……うん、敵を殴るには申し分ない。怖いわ。

「どうする？ 持っていく？」

「うーん……重くない？」

「そんなに重くないから持ち運ぶ分には問題ないよ」

「そっか、じゃあ持っていく」

フリスクに訊けば、一度私に確認してくる。それに大丈夫だと返せば、持っていく事を選んだ。

「……ごめんね、借りるよ」

「？ 何か言った？」

出来るだけ小さい声で六人目の子に謝ると、ベルトコンベアの作動音の中で私の声が聞こえたらしく、進もうとしていたフリスクが振り返った。

「いや、何でもないよ。行こうか」

それを誤魔化し、私はベルトコンベアに乗った。

80. Hotland探索④

〔Lily〕

先程の道にまで戻ってくると、ピロン、という音がフリスクから聞こえる。

「『あーあ番号押すのに五分もかかっちゃった。よし電話！ 遂に電話をかけるよ!!!』」

五分……？

携帯を引つ張り出して投稿を読み上げたフリスクの言葉に、そんなに短かったかと内心で疑問に思いながら、装置に乗り、対岸に飛び移る。携帯をしまつて飛んできたフリスクを受け止めて地面に降ろすと、

プルルルル……プルルルル……

「あ、電話だ。アルフェイスかな？」

「多分ね」

携帯を引つ張り出してフリスクが電話に出ると、

ガチャンツ

「えっ」

出た途端に切れた。

「えつ、あれ……？」

「……………イタズラ電話だったの？」

「いや、そういうわけじゃないと思うけど……………あれ……………？」

電話に出た途端に切られた事に驚いて唾然とするフリスクに訊いてみれば、首を振りながら否定される。

「んー……………間違えて切っちゃったのかなあ……………？」

「さあ……………？ まあ、用があればまたかかってくるだろうし、気にしなくていいんじゃない？」

「そうだねー」

首を傾げるフリスクに一応フォローをしておけば、フリスクは頷いて携帯をしまった。

「行こう」

「……………うっわ」

道の先に見えてきた連なるビームの壁に、思わず声が出る。……………えげつねえな、この配置。

「何あれ……………」

後から来たフリスクの愕然としたような声が聞こえた。それを聞きながら私はビームの壁に近付いて観察する。……ゲームだった時は俯瞰で見てたから分からなかったけど、こんな風に壁になってんのか。下から潜れば行けるかと思ってたけど、ダメそうだな、これ。

プルルルル……プルルルル……

一応考えていた対策が潰れ、どうしようかと悩んでいると、後ろから電話のコール音が鳴った。

「……今度こそアルフィスじゃない？」

「そうかも」

振り返りながらそう言えば、フリスクは領きながら携帯を出し、電話に出る。

「……」

フリスクの声が電話に出た途端に聞こえなくなった事に『Player』に対して若干の怒りを覚えながら、時々領きながら話をするフリスクから目を逸らし、私はあることを思い付いて、リュックの中を漁る。

ガチャン

電話が切れたと同時にくらいに、私はリュックから取り出した、どう処分すべきか悩んでいた自分の切られた髪をマグマに向かって投げ捨てた。

「!? ちょっとお姉ちゃん?!」

私の行動に驚いたらしいフリスクが駆け寄ってきてマグマを覗き込む。ジユツ、という音を立てながら髪はマグマに吞まれ、消えた。

「邪魔だったし棄てた。よく考えたらあれが無かつたらリュックにまた空きが出るしね」

「え、ええ……?」

目を丸くするフリスクにそう返し、ビームの壁の前に立つ。

「まあ私の髪はいいんだよ。それで、アルフィスから何か聞いたの?」

「ええ……えつとね、青色のビームは止まれば痛くなくて、オレンジ色のビームは動いてれば痛くないって!」

「了解。じゃあ先に進もうか」

そう言った瞬間、またフリスクからピロンという音がする。……アルフィスSNS 弄りすぎだろ。

『やったよおお!!』 アンダインが電話で天気の話振ってきた以来の緊張だった……』

それもそれでどうかと思うがな、と思いながら、私は壁の前に立つ。

「じゃあ、まず私を通ってみるよ。フリスクはあとからおいで」

「え……でも……」

「大丈夫だよ、アルフィスの言葉を信じよう」

「……………うん」

心配そうに顔を歪めるフリスクの視線を感じながら、意を決してビームの壁に飛び込んだ。

「……………」

何かが私を通っていくような感覚を覚えながら、ビームの壁を一気に二つ、無事通り抜ける。

「……………うん、大丈夫。おいで、フリスク」

自分の体に傷がない事を確認して安全だと確かめ、フリスクに声をかけると、戸惑ったように壁を一瞬見上げてから、フリスクはダッシュで通り抜ける。

「……………ほんとだ」

私の元までできたフリスクは、何処にも傷がないことに驚いたような顔をした。まだ不思議そうに自分の体をペタペタと触るフリスクからピロン、という音が聞こえ、また通知が来たらしいと察し、携帯を引っ張り出すのを見届ける。

「『あれ？ 地下には天気なんてないのに何で聞いたんだろ？』」

読み上げられた書き込みに、アルフィスも中々鈍いよなあ、と思う。天気を聞くなん

て青春漫画だと好きな子の前でどもった時の常套句みたいなもんなのになあ。……まあ、一種の諦めみたいなのもあるんだろうけど。自分の所業に苦しめられてる証拠だよなあ。

そんな事を思いながら、私は先を目を凝らして見てみる。すると、スイッチがある事に気付き、あれを押せばこのビームを止められると思索した。……ビームの中通らせる必要なかったな。

「フリスク、彼処にスイッチがあるっぽいから行ってくるよ。動かないでね」

「え……うん……」

フリスクに動かないように指示し、青色のビームを少しずつ動いて切り抜ける。

「……………」

……慣れねえな、この感覚。

慣れない感覚に若干気持ち悪さを覚えながら、ビームの壁を止まって走つてを繰り返して切り抜けていく。

青。

オレンジ。

青。

オレンジ。

青。

青。

オレンジ。

「…………ふうっ」

なんとか無事に切り抜け、スイッチを急いで押す。カチリ、という音がしてスイッチが緑色に切り替わり、ビームの壁が消えた。

「よし、おいでー」

フリスクに声をかけてこっちに来てもらい、また先に進んだ。

道を進んでいくと、またフリスクからピロンという音がした。

「『やば進む道教えるの忘れて』……え、T? どうやって読めばいいんだろう、これ」
 「『た』って打とうとしたんじゃない?」

「あー、成る程」

怪訝そうな声をあげたフリスクに振り返らずに返答すれば、納得したような声をあげて、携帯を持ったまま私の隣を歩こうとする。隣に来たぐらいにまたピロンという音が聞こえ、更新されたらしいと察しする。

「『キュートな自撮り晒しタイム』」

「写真上げたの? 見して」

「ん」

フリスクに携帯を見せてもらうと、確かに写真が乗っていた。……………ゴミ箱の。

「……………自撮り……………なのこれは?」

「違うと思う」

「だよな」

思わず顔をしかめてそう言えば、即座にフリスクに否定される。携帯から顔をあげ、フリスクの手を引いて先に進む。

「フリスク、曲がるよ」

そう声をかけ、左に曲がって歩く。

「……………あー、閉じちゃってんな……………」

「え？ あ、本当だ」

ふと足を止めて目の前にある重厚な扉を見て、そんな事を呟くと、フリスクが反応して顔をあげ、同じように扉を見る。

「どう突破するべきか……………」

そのまま矢印が切り替わる装置の一步前ぐらいで悩んでいると、電話がかかってきた。

プルルルル……………プルルルル……………

「アルフェイス？」

「うん」

フリスクに電話の相手を確認して手を離し、電話が終わるのを待つ。比較的直ぐに終わり、二、三分するとフリスクは電話を切り、携帯をしまった。

「なんだって？」

「あのね、あの扉の突破方法教えてくれたよ！」

「マジか。タイミングいいな」

ゲーム通り突破方法を教えてくれたらしく、嬉しそうにフリスクは笑いながらそう言った。それを見て、若干複雑な気持ちになる。……………仕組まれてんだよなあ、これ。

「で、どうしろって?」

「左右のパズルを解くと開くらしいよ。で、最初は右の方がいいって」

「そっか。じゃあ右から行くか?」

「うん!」

湧いてきた気持ちを殺し、フリスクに訊けば、そう返される。それに従い、装置の矢印表示が右になった瞬間に乗り、対岸に飛び移る。続いて飛んできたフリスクも受け止め、先に進む。すると、すぐに塔のようなものが見えてきた。真つ先にモンスターに話しかけに行つたフリスクを横目に、私は装置の中に入る。ゲーム通りのパズルに安堵しながら、私は壁にある貼り紙を見る。

『反対側の船を撃て! 邪魔な箱を動かして任務を遂行しろ』

説明書に目を走らせ、そしてパズルの操作パネルを見る。

「……あー」

解いていいのかなと悩んでいると、誰かが入ってきた音がした。足音からフリスクだと察し、振り返る。

「解けそう?」

「んー……」

フリスクに曖昧に返事をし、パズルを見つめる。

「…………いや、これ多分フリスクも解けると思うからさ、やってみたらどうかかなと思ったんだけど。やる？」

「！ やる！」

「じゃあ、まずこのボタンが……」

私の問いに顔を輝かせて頷いたフリスクに場所を譲り、一応操作方法を覚えておく。静かに私の説明を聞いたフリスクはさっそくボタンを使ってパズルを解いていく。

「ん、んつと……………こうだ！」

ガチャガチャと箱を動かし、『撃つ』と上に書いてあるボタンを押すと、見事箱を壊し、反対側の船を撃ち抜き、パネルに『おめでとう』という文字が浮かび、パズルが解けたことを告げた。

「やった！」

「よくできました」

「えへへえ」

喜ぶフリスクに頭を撫でながら褒めてあげると、さらに嬉しそうに頬を緩ませる。かわい。

「…………さて、行こうか」

「うん！」

手を繋いで、装置から出る。そしてそのまま真っ直ぐ先程の分岐点まで戻り、また装置に乗って今度は逆側に飛び移る。

「…………… あ、道が塞がれてる！」

フリスクを受け止めて地面に降ろすと、フリスクは道の先を見てそう言って走っていく。その声に吊られて私も先を見ると、確かに青いレーザーで道を塞がれていた。

「マジか……………」

そう呟きながらフリスクの後を追うと、レーザーの前でフリスクが立ち止まり、携帯を引っ張り出した。……………あ、電話か。

「……………」

フリスクの隣に立って電話が終わるのを待っていると、ゲーム通りに話が進んだらしく、電話が切れたと同時に目の前のレーザーが突如消えた。

「うおっ」

「おお、本当に消えた！」

思わず二人で驚いてから、先に進む。端にいる女子高生のようなモンスター二人に話しかけに行くフリスクを見ながら、私はまた先に装置の中に入る。そしてまた構造を確かめ、パズルを始める。……………これはフリスクには難しいだろ。

「ん……………それを……………」

「あ、先に始めてる」

「ごめん、先にやってた」

「大丈夫だよ、ぼくもさつきやったし」

話を終えて中に入ってきたフリスクに振り返らずに謝り、パズルに集中する。……えーと、ここをこうして、こうして……

「おし、出来た！」

パネルを操作して端に箱を動かし、直線上にある箱を一つだけにして、容赦なく撃つ。すると、上手いこと反対側の船に当たり、先程と同じように『おめでとう』という文字がパネルに浮かんだ。

「お姉ちゃんすごい!!! これであの扉が開いたね！」

「あはは、ありがとう。そうだね。……進もうか」

装置の中から出て、分岐点まで戻り、今度は重厚な扉の前に飛び移る。フリスクを受け止めて地面に降ろし、隣に立たせると、

ギイイイイ

という音を立てながら、ゆっくりと扉が開いていく。冒険もののゲームで良くあるような開き方に、内心で苦笑しながら、フリスクを見る。

「おー……」

扉を見て、目を輝かせるフリスクに若干癒されながら、私はフリスクの手を繋ぐ。
「行くかうか」

81. デス・クツキングショー

[Lily]

完全に開ききった扉をフリスクの手を引いて通り抜けると、フリスクからピロンという音が聞こえる。

「あ、通知だ」

振り返った私の手を離し、フリスクは携帯を引っ張り出す。そして携帯を弄り、画面上の文字を読み上げていく。

『よし!!! 今からでも説明しよう!!!』

「え、今……?」

読み上げられた書き込みに思わず顔をしかめていると、携帯が着信音を響かせた。

プルルルル……

「……」

フリスクが迷わず電話に出る。それを横目に、私は道の先にある連続して続いている装置と、その先の建物に一抹の不安を抱く。

「お姉ちゃん、電話終わったよ」

案外直ぐに電話が終わったらしいフリスクが近付いてくる。フリスクを見て、私はもう一度先を見る。……んー、怖いな。ここ下手したら落ちるよな……

「…………お姉ちゃん？ 大丈夫？」

「ん？ ああ、ごめん。ちよつとね」

反応が無かった事に不安になったのか、フリスクが私のパーカーの裾を掴んでくる。それを頭を撫でて落ち着かせ、誤魔化す。…………フリスクは主人公だから落ちる事は無いだろうけど、万が一の事もあるしなあ…………

「…………ねえ、フリスク。ここ危ないからさ、二人で一緒に渡つちやおうか」

「え？ いいけど、どうやって？」

少し悩んだ末、フリスクごと此処を渡ってしまえばいいと思いつき、提案する。フリスクは目を丸くしながら私の提案に頷き、首を傾げる。

「それはね、よいしょつと」

「わっ」

そう言いながらフリスクを抱えあげる。フリスクは突然持ち上げられた事に驚いたのか、声をあげる。

「この体勢でいくの…………？」

「うん。こうすればフリスクが怪我する事も無いし。しっかり掴まっててね？」

「……うん」

私の言葉に頷いたフリスクは私の首に手を回し、しっかりとしがみつく。

「それじゃ、行くよー！」

それを見て、私は装置に乗り込む。バシユツ、という音を立てながら吹き飛ばされ、丁度次の装置の上に乗る。するとまた吹き飛ばされ、また次の装置の上に飛ばされる。

「最後っ」

装置の板を強く踏むと、バシユンツ、という音を立ててまた吹き飛ばされ、対岸に飛ばされる。空中で体勢を整えて着地し、しっかりとカラフルな床の上に立つ。……目に悪い配色だな、これ。

「衝撃とか大丈夫だった？ フリスク」

「大丈夫だけど……結構、怖かった」

「そっか……ごめん」

「大丈夫」

フリスクを床に降ろしながら訊いてみれば、拗ねたような顔でそう言われた。直ぐ様謝ると、ゆるゆると首を横に振られる。

「行こう」

「そうだね」

フリスクに促され、先に進む。迸る嫌な予感が当たらないように願いながら、私はフリスクの手を繋いで建物の扉を開き、中に歩を進めた。

「……………うわ、くつら……………」

何も見えない程真つ暗な中を、フリスクの手を離さないようにしつかりと握り締めながら全身の感覚をフル活用注意して進む。少し歩いたところで、フリスクが居るので、ろう右隣から、携帯の着信音が響く。

ブルルル……………

「ごそごそと布と何かが擦れる音がして、ピツという音がする。その音で、フリスクが電話に出たのだと判断する。」

「……………？ ………………」

微かに聞こえるアルフィスの声を耳で拾い、もうそろそろ照明が点くんだろうと推測し、咄嗟に目を閉じる。

ガチャンツ

「……………おおつと」という何かが作動するような音がして、少しづつ目を開ける。

「……………おおつと」

目を開けて周りを見渡すと、見覚えのあるキッチンのセットの中に居る事に気付い

た。

『オーノー』

茫然とする中、電話越しに聞こえたアルフィスの声が部屋に響いた。

「オーウ イエス!!!」

聞き覚えのある電子音が混ざった男性の声が聞こえ、横を見る。そこには、コック帽を被ったメタトンが居た。

「ようこそ、本日のプレミアム・クッキングショーへ!!!」

「……………は？」

キラキラという音がする中でそう言ったメタトンに、私は思わず声を漏らす。

「オーブンを温めてくださいね、今日は特別なレシピをご用意しました!」

「ちよつ、は!?! なんて!?!」

私の抗議の声を無視しながら、メタトンはシンクを挟んで向こう側に居る、カメラを持つている小さいロボットに向かって喋り続ける。

「本日のクッキング・ショーで作るのは……ケーキ!」

「ふざけつ……」

「お姉ちゃん、落ち着いて! ここは流れに乗っておこう?」

番組を進行するメタトンに思わず掴みかかろうとすると、フリスクにパーカーを引つ

張られて制止される。私を見上げるフリスクの目線を無視する訳にもいかず、私は渋々引き下がる。

「……………分かった」

「さあ、かわいいアシスタントが材料を持ってきてくれますよ。アシスタントに盛大な拍手を!!!」

メタトンがそう言った瞬間、番組を盛り上げる為か、メタトンの拍手以外にも拍手のSEが鳴り、紙吹雪が上から降ってくる。……………腹立つなあ。

「必要な材料は砂糖、牛乳、そして卵。さあ取っておいで、スウィートハーツ!」
「誰がスウィートハーツだ。というか、なあ、小麦粉とかは……………」

また若干苛つきながらも、私は後ろの台にある砂糖、牛乳、卵を取りに行く。……………
ケーキなら小麦粉も要るんじゃないの……………? これだとプリンしか出来ないぞ?

「お姉ちゃん、どれか持つよ」

「あー、じゃあ卵持ってきて」

「分かった」

一番軽い卵をフリスクに任せ、私は牛乳パックと砂糖の入った袋を持つ。……………あ、結構重い。フリスクに卵持たせて正解だったな。

ゴトン

「ほら、これでいい？」

カウンターの真ん中に全てを置き、メタトンを見る。

「完璧！ グッジョブ、最高！」

私の声に反応したのか何なのか、メタトンはそう言った。

「ケーキを焼くための材料が全て揃いました！」

「あの、だから小麦粉は……？」

「牛乳……砂糖……卵……」

「聞けよ」

番組の尺が押してるのか、私の疑問を無視してメタトンは続けていく。

「……………おっと！ 待って下さい！ 大切なことを思い出しました!!! 一番大切な材料が抜けています!!」

「やっとかよ……」

わざとらしい身振り手振りで番組を盛り上げようとするメタトンが、何かに気付いたようにそう言った。そして、カウンターの下に手を入れ、ごそごそと探る。

「人間のソウルです
!!!!」

「……………は？」

カウンターのなかから出されたチェーンソーが、電源を入れられてエンジンを起動し、唸りだす。

チュイイイイイイン、という刃物が擦れる音が、私の中で妙に響く。

フリスクの顔が、絶望に染まる。

「……………ふぎ、けんな……………」

ドクン、と心臓が跳ねる。

フリスクが殺される？私の大切なこの子が？フリスクが？

どうして？

けんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 けんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 ざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 なふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 けんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 んなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 ざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 なふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 けんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな
 んなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな

!!!!!!

ふざけるな。

ブチリ、と何かが引きちぎれるような音がした。

8 2 . 零れたモノ

〔M e t t a t o n 〕

ガシヤンツ!!!

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

何故僕が床に倒れて、ダーリンを見上げているのか分からなかった。

確か僕は、A l p h y s からの電話に出て、チェーンソーを止めて、番組を進行しようとした筈だ。

その瞬間、ローラーに何か引掛かって、バランスを崩して、そこにダーリンの足が伸びてきて、体重をかけられて……………

そこで、やっと気付く。ダーリンに踏み倒されたのだと。

そして、その目を見て、僕は凍り付いた。振り払える筈だったのに、振り払えなかった。

「ヒッ」

その目には、どろり、どろりと『ナニカ』が蠢いていた。

真っ暗な、土の色の中の虚の様な瞳孔が、僕を見つめている。その目を、見てしまった。

「……………ねえ。」

口が動き、言葉が紡がれていく。

「……………今、何しようとしたの」

無感動な表情が動き、言葉を紡いでいく。

「ねえ。」

ねっとりとした絡めとられるような殺意を込めながら、疑問を投げ掛けてくる。

「答えてよ」

答えを促すその声に、僕は早鐘を打つS O U R Iを宥め、答える。

「……………その子、を……………殺そうと……………」

「へえ。」

僕の答えを聞いて、ダーリンの声がより一層低くなり、僕に対する明確な殺意が隠される事なくぶつけられる。

「……………どうして？」

背筋が粟立つような殺意に反応してまた早鐘を打つ Soui を何とか落ち着かせようとしている僕に、また質問が投げ掛けられる。

『どうして？』

たった一言のその言葉に、僕はどう答えていいのか分からなかった。

Alphys に頼まれたから？

その計画に賛同して協力すると言ったから？

それとも……………

自分の夢を、叶えるため？

「……………答えられないの?」

ただ一言、感情の消え去った声でダーリンは続ける。

「じゃあ、『理由なんて無かった』んだね?」

「違っ」

「じゃあどうして答えられないの?」

否定しようとした瞬間、その言葉ごと無慈悲に碎かれ、殺される。

「……………茶番に付き合ってやるつもりだったけど、もう無理だ。言いたい事だけ言わせてもらうよ」

『茶番』という言葉を言われ、僕はS o u r が跳ぶのを感じた。

—— 全て、バレている。

このダーリンには、バレている。

僕は、本格的にダーリンに恐怖した。

「貴方には、大切な人は、ものはある？
——いや、あるよね。だって、貴方だって感
情はあるんだろうし」

じゃあ、と彼女は言葉を続ける。

「その大切なもの、壊しに行っていない？」

ゾクリ、とした。

ただただ、真つ暗な光の入らない眼に、見据えられ。

そんなことを、言われたら。

「や、やだ、やだ!!! やめてよ!!!
!!!」

いつの間にか、僕はスターの顔をかなぐり捨てて、そう叫んでいた。

命乞いをするように。

巻き込みたくなかった、大切な従兄弟を殺してほしくないと、嘆願した。

彼はゴーストだから、消える筈は無いのに。どうしてか。

今の人間なら、彼さえも殺せてしまうような気がしたから。

「……どうして？」

そんな僕に、人間は不思議そうに問い掛ける。

「貴方がさつきした事を、ただしているだけじゃないか」

そして、事実を僕に叩き付ける。

「……同じ事をされるかもしれないという事を覚悟して無かったのかい？」

まあ、しないけどさ、と人間は続ける。

「自分が嫌がる事を他人しちやダメって言われなかったの？　は、馬鹿じゃないか、貴方」

そんなの常識だろう、と感情なんてない声と表情で続ける。

「質問を変えるよ。じゃあ、どうしてこんな事をしたの？」

覚悟も無かったくせに、と人間は続けて僕に問う。

その言葉に僕は、何も返せない。

「ねえ」

「それ、は……………」

僕の答えを急かすように、人間はそう言ってくる。

「どうして?」

言葉が濁す僕に、また言葉が投げ掛けられる。

「ねえ」

急かす。

「ねえ」

せかす。

「ねえ」

セカス。

「答えろよ!!!」

遂に、彼女は怒鳴った。その言葉にも籠められた明らかな殺意が、僕のSoulを傷付けていく。

「私のことはもうどうだっていいよ、でもどうしてあの子が殺されかけなきやなんないんだよ、なあ！」

怒鳴るダーリンは、僕にただ投げ掛けてくる。

自分の疑念を、ただ、言葉にして。

「どうしてだよ、どうして、あの子ばかりこんな目に遭わなきやなんないんだよ………」

言葉を紡いでいくと共に、表情も何も変わらなかつたダーリンに、変化があつた。

僕は思わず息を飲んだ。

「……………どうして……………」

ぼたり、と僕のボディに何かが落ちる。

「どうして、あの子ばかりが、殺されかけなきゃならないんだ……………どうして……………」

ぼたり、ぼたりと、また落ちる。

「……………どうして……………」

ダーリンの真つ暗な目から、透明な水滴が溢れて、零れる。それが涙だと気付くのに、そんなに時間はかからなかった。

「……………どう、して……………」

僕のボディを押さえ付けるように置かれていた足が無くなり、ダーリンは僕からふら

つくように一歩下がって、その場にぺたりと座り込む。僕はその隙に何とか立ち上がり、一歩後退る。

「……………どうして、あんな目に……………」

しゃくりあげる訳でも無く、喚く訳でも無く、きつと、涙を流しているのにさえダーリンは気付いていないまま、

「……………なんで……………」

ただ、真つ暗な瞳のまま、涙を流し続ける。

「……………お姉ちゃん」

そんな彼女に、小さいダーリンが近付いた。

「……………ぼくは大丈夫だからさ。行くこう？」

「……………」

ダーリンは近付いてきた小さいダーリンを涙を流したまま見上げ、頷いた。そして、小さいダーリンの手を借りて立ち上がると、ふらふらと歩き出して、二人で僕の横を素通りしていった。

「……………ねえ」

そして、僕に振り返った小さいダーリンは、じつと僕を見据えた。

「……………二度と、お姉ちゃんを泣かせないでね。じゃないと、本気でぼく、怒っちゃうからさ」

その言葉に、僕のS o u r e がまた跳ねる。

「……………あと、これ」

向こうに置いてあつた缶詰めを小さいダーリンは持つてきて、カウンターに置いた。

「材料だったんでしょ？　もう流石にこの空気だし、放送事故だろうけど、持つてきたよ」

それじゃあね、と言つて奥に進んでいったダーリン達を、僕はただ見ていることしか出来なかつた。

83. Hotland探索⑤

〔Lily〕

「…………お姉ちゃん、落ち着いた?」

此方を気遣うフリスクの優しい言葉に辛うじて頷き、私はフリスクに手を引かれたまま歩く。そしてシヨ一のセットから少し離れた所で立ち止まって顔をあげ、振り返ったフリスクに苦笑いをする。

「…………ごめん、フリスク。フリスクの前であんなに怒って。怖かったろ?」

「ううん、大丈夫。気にしないで」

「でも…………」

「あー、もー!」

煮え切らない返事の私に、ぼすつ、とフリスクが抱き付いてくる。それを驚きながら受け止め、私を見上げるフリスクの目を見つめ返す。

「…………確かに怖かったよ? でもね、ぼくはお姉ちゃんが好き。だって、お姉ちゃんが怒るのはいつだってちゃんとした理由があるもん。相手が本当に間違つてるときと、我慢して我慢して我慢して我慢して堪えられなくなったときしか、お姉ちゃんは怒らないもん。お姉

ちゃん自身が間違ってるかもしれないって思ってるときは優しく注意するだけでも」
真つ直ぐ私を見ながらフリスクから言われた言葉に思わず目を剥いてしまう。そんな風に思われてたのか、と思うと同時に、『自分が間違っているかもしれない時は注意するだけ』と言い当てられ、怒る意味を分かってくれているんだ、とも思った。

「ぼく、どんなに怒ってもお姉ちゃんが大好きだよ。だから、そんな不安そうな顔しないでよ」

にっこりと笑うフリスクにそう言われてしまい、私は、フリスクには敵わないな、と思いつつ、フリスクを抱き締め返して頭を撫でる。

「うん、うん……ありがとう、フリスク。元気でたよ」

「！ 良かった！」

嬉しそうに笑ったフリスクはぎゅーっと私を抱き締めると、笑いながら離れていった。そして少し先にある光に進んでいった。その背中を追って、私も進んでいく。

「終わったよ！」

そういつてフリスクは先を行こうとする。その途端、携帯の着信音が鳴った。

「電話か？」

「みたい」

フリスクは携帯を引っ張り出すと、電話に出た。その間に、私は左横を向き、遠くに

見える機械の塊を見る。……あれが、コアか……。あんなのをよく造れたな、博士は。

「お姉ちゃん、終わったよ」

「ん？ なんだって？」

「あのね、彼処にお城に直ぐに行けるエレベーターがあるんだって。だから次に行くのは彼処だね！」

アルフィスに言われたことを言いながら、フリスクはコアを指差す。……やっぱ次は彼処か。

「そっか。じゃあ、行こうか」

「うん」

頷いたフリスクの手を握り、向こうに見えるエレベーターに向かって歩いていく。

もう一度、この子を守りきる決意をそっと抱きながら。

84. Hotland探索⑥

【Lily】

チーン、という音がして、エレベーターの扉が開いた。次のフロアに着いたらしいと判断し、私は涼しいエレベーターの中から出たくはないなと思いながら足を動かし、外に出る。

「うっ、やっぱりあつっ……」

マグマから遠ざかったからか、少し温度が低くなりはしたが、それでも暑い。やだなあ、この暑さ。

暑さにうんざりしながら、小さな炎のモンスターに話しかけにいったフリスクを待つ。小さく挨拶を返して此方に戻ってきたのを確認し、先に進む。

「……？ え、こんなところに雪？」

不思議そうに呟いたフリスクは、先に見える小屋のようなものへと近付いていく。その後を私はついていき、この小屋は確かサンズのホットドッグ屋だったか、と思い出す。

「やあ、サンズ。さっきぶりだね」

「……おお、お前さんか」

鳥形のモンスターに話しかけにいったフリスクを追い越し、カウンターに腕を枕にして顔を伏せていたサンズに話しかければ、眠たそうな顔を上げてよお、と気怠げに手を上げた。

「またバイト？」

「まあ、そんなところだな。ホットドッグ屋なんだ。買っついていかないか？」

「あー……どうしようかな。安くしてくれるっていうならいいけど」

「おいおい、勘弁してくれよ」

「あはは、冗談だよ」

サンズと軽く談笑していると、話し終わったららしいフリスクが近付いてくる。

「よお、ホットドッグ、買っついてくか？」

サンズの言葉に悩む様な仕草をしたフリスクは、暫くそのまま考え込むと、頷く。そしてポケットから代金を引っ張り出し、サンズに手渡した。

「へへっ、毎度あり」

代金を受け取ったサンズは、ほかほかと湯気(?)を上げるホットドッグらしきものを取り出し、ケチャップとマスタードをかけて、フリスクに差し出す。

「ほらよ。アポストロフィードッグだ」

「……………え、ホットドッグじゃなくて？」

サンズの口から聞こえた言葉に思わず聞き返す。

「そう。アポストロフィードッグ。アポストロフィードッグ。ホットドッグの略さ」

……『Player』に解説するためとはいえ、二回も言われると何か気持ち悪いな……

そんな事を思いながら成り行きを見守っていると、サンズの言葉に納得したようにフリスクは頷き、差し出されたホットドッグを受け取る。手を汚さないように紙に包まれた熱々のホットドッグは、本当に美味しそうだった。

「熱々のうちに食べちゃいなよ」

「うんー」

いただきます、と言って、フリスクはホットドッグにかぶりついた。そして目を輝かせ、おいひい、と言って、やっぱり熱かったらしく、はふはふと熱を逃がしながら食べていく。可愛いな。

「おー、いい食べっぷり。……サンズ、君もしかして料理上手かったりする？」

「上手いかどうかは知らんが、まあ、大抵のものは作れるぜ」

「マジかよ……」

ウインクしながらそう言ったサンズに、驚いてしまう。

……でもよくよく考えたらそうだよな。今までパピルスが育った環境に必ずサンズ

はいた筈。弟にご飯を食べさせる為、とかいう理由で修得しても別に可笑しくはないな。私だって料理あんま好きじゃなかったけど、フリスクに美味しいご飯食べて欲しくて頑張つてそこそこ作れるようにはなつたし。

「ところでお前さん」

「ん？」

「大丈夫か？」

「……え、何が？」

唐突に、サンズが私の事を気遣うような発言をした。何故そんな事を訊かれるかわからず、素で聞き返してしまう。

「いや、さつき休憩してるときにクッキングショー見てたんだがよ。出演してた人間、お前さんらだろ？」

「……あー、うん」

そこまでサンズに説明され、彼が何を心配しているのか察する。つまりはメンタルは平気かって言いたいのか、サンズは。

「うん、今のところは大丈夫。一周回って冷静になつたから」

「そうか、ならいいんだが」

サンズにそう返すと、ぐいっとパーカーの裾を引っ張られる。

「ねえ、お姉ちゃん、あーん！」

「えっ」

引つ張られた方を見ると、ホットドッグを半分くらいまで食べたフリスクが私にホットドッグを差し出してくる。

「凄い美味しいよ、これ！ お姉ちゃんも食べて！」

「え、あ、うん……じゃあ、いただきます」

突然のことに戸惑っていると、ずい、とフリスクは背伸びをして私の口にホットドッグを近付けてくる。流石に妹の好意を無駄にするわけにも訳にもいかず、私は差し出されたホットドッグに一口分かぶりつく。

「！」

とても良い焼き加減のソーセージを噛みきると、じゅわ、という音がしそうなぐらいにソーセージの肉汁が溢れ出し、レタスのシャキシャキ感が、マスタードとケチャップ、そしてふわふわのパンにマッチして、確かに凄く美味しかった。……なんだこれ、ガチで旨いな。

「あぐ、ん……もういい、後は食べていいよ。うん、本当に美味しいね、これ」

「でしよー？」

咀嚼してかぶりついた分を飲み込み、感想を述べる。

「これ、本物のソーセージか？」

「いや、『ウオーターソーセージ』さ。ソーセージとはちよつと違うな」

「へー……滅茶苦茶美味しいよ、これ。地上で売ったら大繁盛すると思うよ」

「……………は？」

ふと私が零した言葉に、サンズは目を丸くする。

「……………あ。ごめん、何でもない」

その表情で、私は私にとつても彼にとつてもとんでもない事を言ったことを悟り、直ぐに誤魔化する。とはいっても聡い彼には意味が無かったようで、先程気遣ってくれたときには無かった疑心の籠った目で私を見つめる。その目から私は目を背け、ホットドックを食べきったフリスクを見る。

「……………」

「おお、もう食べきったのか。案外食べるのはやいな、お前さん。紙は俺が処分するか、こつち寄せ」

パクパクと口を動かしながらサンズに何かを言って、フリスクはサンズに丸めた紙を手渡す。

「それじゃ、食べ終わったことだし、私らは行くよ。じゃあね」

「……………おう」

まだ疑心の籠った目で私を見ながらも、サンズは手を振って私達を見送ってくれた。その手に背を向けながら、私は言動にはもうちよつと気を付けないとな、と思った。

「さて、行くこうか」

真つ直ぐに道を歩いていると、ピロンという音が横のフリスクから聞こえる。またSNSが更新されたか……

『彼女とデイナー』……え、彼女？ お人形さんだよね、これ……」

どうやら写真付きだったらしく、携帯を開いたフリスクは怪訝そうな顔をする。確かミューミューのフィギュアが写ってるんだっけ、と思いながら、携帯の画面に釘付けなフリスクの手を引いて進んでいく。またピロン、という音がした。

『ホットな写真を貼る流れ？ じゃあ俺様はクールな友達と』……パピルスSNSやってたんだ……」

フリスクの言葉に、そういえばパピルスもやってたな、と思い出しながら歩いていくと、何かが向こうから跳んできて、急に周りが白黒に切り替わった。

* P y r o p e b o u n d s t o w a r d s y o u !

エンカウントか。

「フリスク、携帯しまつて後ろに居て」

「うん」

そう冷静に判断しながら、私はフリスクに携帯をしまうように指示し、ハンカチを取らずにナイフを取り出す。確か、コイツの弾幕は爆弾を落としてくるやつもあつた筈。ナイフで切り捨てた瞬間に爆発したら不味い、と判断したためだ。

*PYROPE—ATK 29 DEF 14

*—This mischievous monster is never warm enough 《このやんちゃなモンスターは温まりきつたことがない》。

『燃やせ、ベイビー。燃やすんだ！』

何をだよ、と心の中でツツコミを入れながら、予想通り此方に投げ飛ばされてきた爆弾を爆発する前に弾き、遠くへ飛ばす。爆発して起きた爆風を浴びながらも何とか全て弾き、直接の被弾は免れる。

* Pyrope is protected by its winsome smile.

爆風の熱さに少し火傷したらしく、ピリピリと肌が少しだけ痛む。後ろのフリスクを見てみれば、長袖を捲っていないからか、火傷はしてなさそうだった。

フリスクに怪我が無い事に安堵していると、『ACT』を押ししたフリスクは、キョロキョロと周りを見渡してから、何かを見つけて走っていく。そして、見つけた物を迷う

ことなく回した。

*You ^{温度}crank ^{調節}up ^のthe ^{ダイヤ}thermostat ^を回した。

*Pyrope ^rbegins ^はto ^{興奮}get ^しexcited ^た。

そうアナウンスが流れた瞬間、周りの温度が高くなる。

「くそあつっ……い！」

『あついい!! あついい!! もっと! 熱くだ!!』

思わず悪態を吐く私に対し、パイロープは興奮したように叫ぶ。そして、自分の体の燃え盛るロープらしきものをフリスクに向けて伸ばそうとする。

「こっち狙えよ!!」

そう言いながら、フリスクに向かって駆け寄り、ロープがフリスクに当たる前より先にフリスクの前に辿り着き、直ぐ様抱え上げる。

「燃えてる部分の炎、多分オレンジアタックだ! 動いてればダメージ喰らわない筈だから突っ込むよ!」

「うん、分かった!」

フリスクに覚悟を決めてもらい、弾幕の中を突っ込んでいく。体を何かがすり抜けていく気持ち悪い感触に耐え、走り抜けた。

*Pyrope ^pwants ^はmore ^{更に}heat ^{熱を求め}。

「お姉ちゃん、さっきの機械のところまで戻って！」
「オツケー」

熱くなれよオオオオというネタを思い出しながら、『ACT』を押ししたフリスクに指示されたままに、先程の温度調節器の前まで戻る。すると、フリスクは私に抱き抱えられたまま、ダイヤルを思いつきり回した。

* You ^{温度調節器} crank ^{ダイヤル} the ^を thermostat ^{した}.

* It's ^{めっちゃ} super ^{アツ} hot!

* Pyrope ^P looks ^P satis ^{は満足} fied ^{した}.

『あついい!! あついい!!! もつとだ! 熱くだ!!!』

アナウンスが流れた瞬間、また一段と熱くなる。眩暈が起きる程暑い中、フリスクを降ろして前に出て、パイロップから飛んできた爆弾を弾いていく。爆風で更に熱くなる中、耐える。

* The ^{この} room ^の is ^{部屋} sweltering ^し!

やっと弾幕が止み、此方にターンが回ってくる。若干暑さで朦朧としていると、後ろからピツ、という音がした。

* YOU ^{あなたは勝利した} WON!

* You ⁰ earned ^x 4 ⁵ XP ^g and ¹ 45 ^を gold ^得 た.

やっと戦闘が終わったらしく、周りが白黒から切り替わると同時に、温度が大分低くなる。温度調節器をフリスクが回してくれたんだな、と思いながら、腕で汗を拭いた。

「あー、暑かった……」

「大丈夫……？ 水飲んだ方がいいんじゃないかな」

「そうだね、飲もうか」

フリスクの提案に賛同し、リュックを前に持つてきて水入り瓶を引つ張り出す。そして蓋を開けて一口飲み、フリスクに渡す。まだ冷たかった水が、渴いた喉を潤していった。

「んっ、んー……ふは、生き返るねー」

「そうだね」

「ぐくぐくと三口程水を飲み、此方に瓶を渡したフリスクに同意し、瓶をしまう。そしてリュックを背負い直し、一歩歩いた瞬間、またピロンと音がフリスクから聞こえた。

「『ちよ……クールスケルトン95！ ……それ冗談だよね？』」

いや、それお前が言うか……？

と思いながら、また携帯を見出したフリスクの手を引いて歩いていく。また、ピロン、という音がした。

「『ギャグパートは、俺様の屈強な上腕二等筋だけだぜ』……え、パピルスって筋肉あつたっ

け……?」

「それ突っ込んじやいけない」

書き込みを読み上げたフリスクの疑問にそう返し、そのまま私はこう続ける。

「別れ道あるけど……どっち行く?」

「え、うーん……左!」

「オツケー、じゃあ左から行こうか」

少し悩んでからそう言ったフリスクの言葉に従い、私は左に曲がり、そのまま道なりに進んでいった。

85. Hotland 探索⑦

[Lily]

道なりに進んでいくと、ピロンという音がフリスクからする。そして、暫くの沈黙の後、フリスクは小さく声を漏らした。

「えっ」

「ん？ どしたよ」

「いや、さっきナプスタブルークからフレンド申請？ つていうのが来てたから取り敢えず許可出したんだけど……もう撤回されちゃった」

振り向いて訊いてみれば、しゅんとした様子でフリスクはそう答えた。そんな顔も可愛いなあ、と思いつつながら、私はフォローを入れておく。

「あ……彼、恥ずかしがり屋だからさ、すぐに撤回しちゃったんじゃない？」

「そつかあ、なら仕方ないかあ」

まだ若干しよんぼりしながらフリスクは頷いた。

「……あ、ねえ。こっちから申請しとこうよ。そうすれば受けてくれるかも。貸して」

「！ そうだね！」

私の提案にばあっと顔を輝かせたフリスクから携帯を借り、弄る。……お、これか。

「申請、つと。これで大丈夫かな」

「登録してくれるかなー?」

「どうだろうね……」

わくわくしながら私から受け取った携帯をしまうフリスクを横目に、私は落ちていたエプロンを拾う。

「ところでフリスク、こんなものが落ちてたけど拾ってく?」

「え、エプロン? ……リュック、まだ空きある?」

「うん、まだ大丈夫」

「そっか、じゃあ、もし外した時は持つてもらっていい? それまではつけとくから」
「いいよ、任せて」

ごめん、と申し訳なきような顔をしながら謝るフリスクの頭を気にするなという意味を込めて撫でて、エプロンの土汚れを払い落とす。そしてフリスクに手渡し、装着するのを待つ。

「じゃーん、どう?」

「おお、似合う似合う。可愛いよ」

「えへへ……ありがとー」

……ごめん、借りるよ。

心の中で持ち主に謝りながら、エプロンをつけて、私によく見えるようになってくるりと回ったフリスクに正直な感想を言えば、照れたように顔を綻ばせる。激かわ。

「それじゃ、行こうか」

「うん！」

来た道を引き返し、奥に進んでいく。歩を進める毎にゴウンゴウンという何かの機械が作動する音に近付き、次のパズルに近付いているんだなどと察する。

プルルル……プルルル……

「あ、電話だ」

ベルトコンベアと三つのスイッチがしつかり見える所に来たところで、着信音が鳴った。フリスクは携帯を引っ張り出し、電話に出る。

「……………」

電話が繋がり、微かに携帯から聞こえるアルフィスの声を聞きながら、私はパズルをよく観察する。こここのパズル、アルフィスの指示に従うと失敗するから……アルフィスの指示には従わないようにしないと。

「お姉ちゃん」

「ん?」

「あのパズル、ぼくがやっていい?」

電話を終えたフリスクがそう提案する。それを少し考えて、危険は無さそうだし大丈夫かと判断する。フリスクの経験にもなるしね。

「……いいよ。でも、大丈夫? 解き方とか分かる?」

「うん、大丈夫! アルフェイスが解き方教えてくれたから!」

「………そっか」

自信満々に頷いたフリスクの言葉に、私はそれ以上何も言わずに頷く。……大丈夫か? これ。

「あの三つのスイッチを押すと向こうのバリケード………かな? が消えるんだってさ。アルフェイスがスイッチ押すタイミング教えてくれるって」

「そっか」

全然大丈夫じゃないけどな。

フリスクの言葉に内心で苦笑いしながら否定する。

「でも、アルフェイスもミスしちゃうかもしれないから、もし合図が無くても押した方がいいよ」

「うん、そうだね! そうするー」

オブラートに包みながらそう伝えておく。その言葉に、フリスクは頷いた。「じゃあいつてくるね！」

フリスクはそう言うと、ベルトコンベアの前に移動し、一步足を踏み出し、乗る。

「わ、わっ」

ベルトコンベアのスピードが速かったのか、フリスクは一瞬よろけ、そして直ぐに持ち直してパズルを解いていく。

「えいつ」

カチッ

まずは一つ目。

「そりゃー！」

カチッ

二つ目。

「やう……」

プルルル……プルルル……

フリスクが三つ目に手を伸ばした瞬間、着信音が鳴った。

「えっ!？」

着信音に気を取られたフリスクは三つ目のスイッチを押し損ねる。それを見てゲム通りになったなど思いながら私もベルトコンベアの上に乗って走り、三つ目のスイッチを押して切り替える。

「お姉ちゃん、ごめん、ミスしちゃった……」

「あはは、ミスは誰にでもあるよ、気にしない気にしない。これからどうするかが大事なんだから、ね?」

「……………うん」

そのままの勢いで向こう側に渡りきると、フリスクが携帯を耳に当てたまま申し訳なさそうな顔で謝ってくる。それを笑って流し、気にしていないことを伝える。

「……………あ、ねえ、まだアルフィスに電話繋がってる?」

「え？ うん」

「ちよつと貸して」

まだ申し訳なきようなフリスクに電話がまだ繋がっているか確認し、携帯を借り受ける。そしてフリスクに聞こえないようにフリスクから背を向け、携帯を耳に当てた。

「もしもし、アルフィス……だよね？」

『は、はいっ！』

先程ラボで聞いた声が携帯を通して聞こえた。返事の声の調子から、少し怯えているようだと思しながら、私は小声でアルフィスに話しかける。

「……………かつこよくなりたいたい貴方に一つだけアドバイス。さっきは切らないで繋がたままにした方が良かったんじゃない？」

『……………』

「それだけ。代わるね」

アルフィスだけに聞こえるようにアドバイスをすると、電話の向こう側でアルフィスは押し黙ってしまった。どうやら私が芝居だつて分かつてる事に気付いたらしいな、と思いつつ、代わることを告げてフリスクに携帯を渡す。

「ありがと、もういいよ」

「そう？ ………………」

私から携帯を受け取ったフリスクはまた携帯を耳に当て、電話を始める。そして、話は直ぐに纏まったらしく、直ぐに電話を終えた。

「終わったよ、行こう」

「ん、そうだね、行こうか」

フリスクにそう促され、歩を進めた。

86. Hotland探索⑧

〔Lily〕

しゅー、しゅーという蒸気の音が聞こえ、次は結構面倒くさいものだった事を思い出す。あー……どうやれば最短ルートでいけるんだったかな……？

ピロン、という着信音を聞きながら、私はフリスクを追い越し、パズルを眺めて最短ルートを計算する。……ここを、こうして、こうすれば……んー？ ……ああ、こうすればいいか。ゲームだった時はどうやったっけ？

「お姉ちゃん……？」

「ん？ あ、ごめん、何？」

「いや、なんでもないけど、ぼーっとしてたから……」

「そっか。パズルの解き方考えてただけだよ。心配かけてごめんね」

「そうなの……？」

自分の記憶の中のルートと先程考えたルートを比べていると、電話が終わって近付いてきたフリスクが心配そうに私を見上げた。心配することは無いと伝えてフリスクの頭を撫で、安心させる。それでもまだ心配そうに見上げるフリスクから目を逸らし、も

う一度パズルを見る。……うん、これで大丈夫かな？

「……よし、解き方分かったよ、フリスク。もし怪我したら嫌だから抱っこさせて？」
「うん」

私の言葉に頷いたフリスクを抱え上げ、しっかりと首に腕を回してもらおう。

「ちゃんと掴んだ？」

「ん！」

「よし、じゃあ行くよー！」

フリスクが頷いたのを確認し、スイッチを踏んでから装置に乗る。バシユンツ、という音と共に勢い良く飛ばされ、対岸に着地する。

カチツ

着地点にあったスイッチを踏むと、矢印が切り替わる。そのまま左に曲がって装置に乗って飛び、次の地点に進む。

カチツ

前に進み、次の地点に進む。

カチツ

そして一度前の地点に戻ってスイッチを切り替え、そしてまたすぐに戻る。

カチツ

バシユンツ

そしたら右に曲がって装置に乗り、次の地点に進む。

バシユンツ

また右に曲がり、次の地点に進む。

カチツ

スイッチを踏んだらすぐに前に進み、装置に乗って次の地点に進む。

カチツ

着地点のスイッチを踏み、そして左に曲がる。

「終わりっ！」

最後にフリスクに衝撃を与えないように着地し、そつと地面に降ろす。

「……お姉ちゃん、足、大丈夫？」

連続で飛び続けてダメージは無かったのか気になったらしく、フリスクが私の足首辺りを見つめながらそう言った。

「ん？ 大丈夫だよ。ダメージは無かったからさ」

「そう？」

フリスクにそう答えると、フリスクは小さく首を傾げた。

……多分、足にダメージがいかないのは『この世界がゲームだから』っていう補正だ

ろうな、と思いながら、今だけはそのゲーム補正に感謝した。こんなところで怪我するわけにはいかないし。

「行こうか」

まだ心配そうに私の足を見つめるフリスクの手を引きながら進むと、光が見えてきた。その光で次はセーブエリアかと思いい出し、そのまま歩いていく。その途中、ピロン、という音が後ろのフリスクから聞こえた。

『えっ？ みんなミュージーミュージーより2の方がいいって？ それガチで言ってるの』
……えっと、最後にさっきの笑う表現がついてるよ」

携帯を出して書き込みを読み上げたらしく、フリスクがそう言った。わざわざ補足してくれるとかぎゃんかわ。

「そっか、ありがとうフリスク。取り敢えずやっちゃったら？」

「うん」

携帯を片手に持ったまま光に近付いていくフリスクを見ながら、私はリュックを漁り、チーズを取り出す。……あ、良かった、溶けてない。

「これで最後だな」

穴を見かけるたびに切っていったため、もうひと欠片分しかないチーズを、穴の前に

置いて少し距離を取る。暫くすると、チーズの匂いに気が付いたのか、ネズミが穴から顔を出す。そして私とフリスクを交互に見て、頭を下げるような動作をしてからチーズを持つて中に引っ込んでいった。

「あ、溶けてる……」

セーブが終わったらしいフリスクは金庫の中を見てそう言った。……あー、レーザーがチーズを溶かしちゃってるんだっけ。

「どんだけ長い間ここにあったんだろうねこれは……」

「さあ……?」

そんな事を言いつつ、先に進むうとするとまた携帯の着信音が鳴った。

『マジで……はつきり言って2はミュージーミューワールドを』……お姉ちゃん、これ何て読むの?」

「これ?」

不意にフリスクが言葉を切り、そう訊ねてくる。指差したところの画面を見てみると、『冒読』と書いてあった。……あー、まあ確かに読みがわからないよな、この年じゃ。

『ぼうとく』って読むんだよ」

『ぼーとく』? ……どういう意味?」

「え、うーん……なんて言ったらいいか……」

不思議そうなフリスクの質問に少し考え、フリスクにも分かりやすいようにしようとする。……昔興味本位で辞書で調べた時に見たやつでは確か、『尊厳なものや清らかなものを侵し、汚すこと』って意味だったっけ。どう説明しよう……？

私は暫く悩んでから、フリスクにも分かるだろう説明をする。

「……………神様みたいに清らかで綺麗なものを傷付けたりすること、かな？」

「へー……………そうなんだ」

自分の説明を微妙に意味が違うかもしれないなど内心苦笑しながら、この説明で一応納得したらしいフリスクの頭を撫でる。

「まあ、昔に調べた事だし、意味が間違ってるかもしれないからあんまり参考にしない方がいいよ」

「そうなの？　じゃああとで自分で調べてみるね」

「そうしな」

会話をしながらまた進もうとすると、ピロンという音がした。

『私のミュージューミュージュー2レビュー：2はもはや全くキューティーでもキツシーでもない。ゴミ。星ゼロ』……………そんなに酷かったの……………？

酷評に思わずといった様子でフリスクがそう呟いた。

「さあねえ……………そもそもその話、ミュージュー知らんし……………」

「そうだねー」

そう話しながら、今度こそ進み始めた。

87. 恋のお手伝い

〔Lily〕

セーブポイントを通過し、道なりに沿って歩いていく。未だに付きまとう暑さに苛立ちを覚えながら、ただただ進む。

「そのの！ お前たち！ 止まれ！」

「はい？」

道の角を曲がろうとすると、ガシャンガシャンという金属が擦れる音と聞き覚えのある声に呼び止められる。この場に居る人物と言えば私とフリスくらいだし、きつと私達に声をかけているんだろうと判断し、振り返る。案の定、そこには先程見かけたロイヤルガードの二人が居て、此方に向かって走り寄って来ていた。

「あれ、誰かと思つたら先程お会いした方々じゃないですか。どうかなさつたんですか？」

「ああ、やっぱりお前たちか……いや、少しな……」

走ってきた彼らに、取り敢えず自然な様子を装って用件を伺つてみる。すると、兎耳のロイヤルガードさんが言い辛そうに言い淀む。

「……………そう言えば先程、人間を警戒しているという様な内容を仰っていましたか？……まさか、見つかったんですか？」

少し考える素振りをしてからそう言えば、兎耳のロイヤルガードさんは驚いたように少し動きを止めてから、静かに頷いた。

「そう、なんか、ストライプシャツと黄色い一本線の入ったパーカーの人間達が居るといいう匿名の通報があったんだ。今まさにホットランドを徘徊しているのだとか……………なあ、おつかない話だろう？」

「成る程、そうなんですか。確かに恐ろしいですね……………」

そう彼に返ししながら、我ながら白々しいなと心の中で自分に悪態を吐く。『恐ろしい』という割には余りにも平然とし過ぎている所為か、先程から寡黙な方のロイヤルガードさんから向けられている視線が痛い。心無しか殺気すらも込められている気さえする。

匿名の通報者つて結局非道になりきれないロボットの彼なんだろうな、と通報者について大体の見当を付けながら話を続ける。

「まあ、落ち着くんのだ。オレ達が安全なところまで誘導してやるから、な？」

「あはは、じゃあ、お言葉に甘えて」

「……………大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、なんかあつたら私が守るさ」

「……………」

そこまで話して、少し不安そうなフリスクの手を引いて、踵を返して先導する彼らについていく。五歩ほど歩いたところだっただろうか、寡黙な方のロイヤルガードさんがふと足を止めた。

「……………ん？ どうした、相棒？」

そんな彼を不思議に思ったのか、兎耳のロイヤルガードさんが声をかける。そうすると、彼はボソリと何かを呟く。

「その子達のシャツとパーカー？ ……それがどうかしたのか？」

呟かれた言葉を聞き返すように彼はそう言つて、はつと意図を察したように相方と一緒に此方を見る。そしてじーっと私達を見ると、また寡黙な方の彼に向き直った。

「相棒……………お前もオレと……………同じことを考えているのか？」

そう言うと、兎耳の彼は此方に背を向ける。

「クソ。なんて……………恥ずかしいミスなんだ」

そして、明確な敵意を此方に向けながら、彼らは自分達の武器を召喚して私達を見据える。それを見て私はフリスクの前に出て、庇うように立つ。

「こいつらが、オレ達が倒さなくてはいけない敵じゃないか」

「……………はは。簡単に『倒す』なんて言うけど、そんな簡単に倒せると思うなよ？」

そう私が彼らに言った瞬間、周りが白黒に切り替わった。
 *Royal Guard attacks!

白黒になった世界で武器を構える彼らと対峙する。私はナイフを抜かずに、フリスクをすぐに抱えられるように構えておく。後ろでピツという音がした。

*RG 01-ATK 30 DEF 20

*^王騎士団のメンバ^カー
 Polished armor member with shining,

調べるを押したらしく、頭の中にそんなアナウンスが流れる。アナウンスが流れ終わった瞬間に、ロイヤルガード達が攻撃に移ろうとする。

『よし、チームアタック!』『……チームアタック』

息の揃った掛け声と共に、彼らは攻撃を仕掛けてくる。私の背後に素早い動きで寡黙な方の彼が周り込み、それと同時に兎耳の彼が剣を使って攻撃してくる。攻撃される瞬間を見計らってフリスクを抱え上げ、前後から繰り出される攻撃を全神経を研ぎ澄まして横に回避する。

シユンツ

「あぶなっ」

一閃、容赦なく背後から斬りつけてくる寡黙な彼の攻撃を間一髪体を捻り、避ける。

「チッ」

仕留めれなかつた事に苛ついたのか、確かに一つ舌打ちをして、寡黙な彼はそのまま兎耳の彼の隣に立った。

* Sweat₀ の₂ pours₁ from₀ 02's₀ arm₀ or₀.

やはり彼も暑さを感じているらしく、アナウンス通りに鎧から蒸気らしきものが吹き出た。熱と汗を鎧の中に籠らせない仕組みだろうかと思いつながら、その蒸気から目を逸らして集中する。私に抱えられたフリスクが、『ACT』に手を伸ばした。

* RG 02 | ATK 30 DEF 20

* Royal Guard member with stuffy armor.

寡黙な方の彼を調べたのか、そんなアナウンスが流れた。

『「消えて塵になるんだな」的な?』『……………フン』

今度は兎耳の彼が私の背後に周り、前後から斬りつけてくる。

「おらっよっ」

「……………消えろ」

先程の攻撃とは違い、フェイントを仕掛けてくる。それを何とか見極めて避けると、私に攻撃避けられ体勢を崩した寡黙な方にカウンターで鎧に蹴りを一発入れておく。

「やだよ、私が消えるのはまだもう少し先だ」

ガシヤンツ

「ぐっ……!?」

「相棒!!」

鎧を着ているも多少ダメージが入ったらしく、彼はふらつき、後退する。そんな彼を案じた兎耳のロイヤルガードが動揺し声を張り上げ、連携が崩れる。その隙を突いて二人から離れる。……足、ちよつと痛いな。

*02 watches your movement.

先程隙を突かれて蹴られた為か、体勢を立て直しながら私を注視する寡黙な方のロイヤルガード。

「……はは、そう睨むなつて」

「……………ツ」

余裕があるように見せるため笑いながらそう言ってみれば、寡黙な彼から向けられる殺意がさらに膨らむ。それでも、私の心は凪いでいた。……殺意を向けられることに、慣れたくなかったんだけどなあ。

ピツという音が腕の中から聞こえ、フリスクが私の中から出ていく。

「あつ、フリスク!?!」

私の腕の中から離れ、体勢を立て直した寡黙なロイヤルガードに近付いていくフリスク

ク。そして、いつの間にか手に持っていたハンカチで、寡黙な方のロイヤルガードの鎧を拭きだした。

*You clean RG02 armor.

「……ちよつ、えっ!？」

「……なにを、する……!!」

今まで殺しに来てた奴に近付いた上鎧を拭くという端から見れば奇行にしか見えな
い行動に驚いたのか、狼狽えて対応が遅れる彼らを見殺し、フリスクは鎧を拭き続け
ていく。

*Its cooling dirt begins to wash away.

そのアナウンスが流れると同時に、フリスクは満足したのか脱兎の如く此方に逃げ
帰ってきた。

「何してんの!! 危ないこと必要以上しないで!!」

「あはは……」

軽くフリスクに怒りながら、もう一度抱き上げて回避出来るよう構える。

『「貴様は死んでいる、的なの?」』……暑く……なってきた』

「北〇の拳かよ」

我に戻った兎耳のロイヤルガードの言葉で懐かしい名言を思い出しながら、また二人

から繰り出される連携攻撃を回避する。途中、フリスクが近付いてきた寡黙の方のロイヤルガードに隙あらば鎧を拭くというなかなか器用な事をし出したのをスルーしながら、回避に専念する。

「……………暑い」

「……………え、相棒？」

ふと、寡黙なロイヤルガードが攻撃を中断し、立ち止まる。それに気付いた兎耳のロイヤルガードが戸惑ったような声をあげ、立ち止まる。

「……………もう……………耐えられない」

ガシヤン、という音を立てて、彼が持っていた武器が落ちる。

「……………鎧が暑い……………熱すぎる!!!」

そして、寡黙な彼は鎧を思いつきり脱ぎ捨てた。鱗に覆われた鍛えられた上半身が現れ、思わず唾然とした。

「……………これでいい」

「いやよくねえよ?!」

*R_RG O_Gl l o o k s は 何 か 困っ て い る 某 事 だ

いや、ここでアンダーインみたいに倒れられても困るけどさあ……

と思いつながら、取り敢えずツツコミを入れておく。半分聞き流していたアナウンスに

兎耳の彼の方を見ると、確かに狼狽えてオロオロとしていた。

「あ、え、相棒、ちよっ……………」

兎耳のロイヤルガードはチラチラと寡黙な方のロイヤルガードを見ては目を逸らし、目のやり場に困っているような動作をする。

「……………」お姉ちゃん、ごめん、降ろして?」

「え、うん……………」危ないことはしないでね?」

「分かった」

それを見て何かを察したらしいフリスクは『ACT』を押し、私に一言告げてから兎耳の彼のもとへと小走りで近付いていく。そして、兎耳のロイヤルガードの鎧を軽く叩き、彼をしゃがませてから此方には聞こえないように耳打ちをした。

＊

You ^あ _な tell ^た _は RG ^R G ^G Ol ^o to ⁱ be ^に honest ^本 _心 with ^話 _す his ^よ _う feeling ^に _め

そのアナウンスが流れると同時に、フリスクは此方に先程と同じように小走りで帰ってくる。それを受け止め、私はすぐにフリスクを抱え上げた。

『オレ……………オレは……………』

『……………どうした?』

兎耳のロイヤルガードが動揺している事に気付いたのか、寡黙な方のロイヤルガード

は兎耳の彼を案じるような声を出しつつ、私の背後に周る。それを見て、兎耳の彼も攻撃を仕掛けようとする、が……

「お、オレは……」

何分、フリスクに囁かれた言葉が響いているらしく、先程までの攻撃の鋭さは無く、連携が上手く取れていなかった。

『……………な、なあ……………』

攻撃が止み、兎耳のロイヤルガードの隣に寡黙な方のロイヤルガードが立つ。すると、兎耳の彼は意を決したように話を切り出す。

『もう……………もう……………もう我慢出来ないんだ！ このままなんて!!』

唐突に、彼は思いの丈を寡黙な方の彼にぶつけ始めた。

『なあ、02！ オレは……………オレは、お前が好きだ!』

そして、兎耳の彼は寡黙な方のロイヤルガードと向き合い、一世一代の告白をした。

「やっぱり……………」

私の腕の中で、フリスクが確信を持ったような言い方で、そう呟いた。そして、もういいよ、と言って私の腕の中から出て、地面に降りた。

『お前の闘う姿……………お前の喋り方……………お前とするチームアタックも。オレはこうしてお前と並んでシンク口攻撃するのが好きなんだ……………』

今まで彼の中で渦巻いていたのであろう想いが、兎耳の彼の口から溢れ出ていく。

『02……オレは、その、これからもずっとお前とこうしていたい……』

彼のあの甲冑（だと思おう）の下はきつと真っ赤になっているんだろな、と思いがながら、空気を読んで黙っておく。流石に私もそこまでKYじゃない。

『……………』

『……あ……いや……忘れてくれ！ こんな話!! ハハ！』

ただ、黙って立つ寡黙な方のロイヤルガードに、引かれたと思ったのか、ハツとして彼は慌てて顔を逸らし、今の自分が言った言葉を無かった事にしようとする。

『……………01』

慌てる兎耳のロイヤルガードを真っ直ぐ見ながら、寡黙な方の彼も言葉を紡ぎ出す。

『あ、ああ、なんだ相棒？』

一瞬ビクリと肩を大きく震わせてから、兎耳の彼はもう一度寡黙な方のロイヤルガードを見た。

『……………後で一緒に……アイスクリームでも……食いに行かないか？』

「……………それ、って……………」

間を開けながら、それでもはつきりと言われた言葉に驚いたのか、兎耳の彼は驚いたように言葉を溢し、そして、

『ああ、そうしよう!! ハハ!!』
嬉しそうに、頷いた。

*

Ol and O2 are looking at each other happily

「あはは、すつげー幸せそー」

アナウンス通り幸せそうにお互いを見つめ合う二人を見てそんな事を言ってから、私は二人に停戦を持ちかける。

「おい、そこのお二人さーん。大事な人とのデートは早く行った方がいいと思うんで停戦しません?」

「デー……………ッ!?!」

「……………ああ、そうだな」

『デート』とはつきり言われて狼狽える兎耳の彼と、『デート』という言葉を特に否定せず頷いた寡黙な彼を見て、フリスクはにっこり微笑みながら『MERCY』に手を伸ばした。

*YOUは勝利した
*YOU WON!

*You earned OXP and 100gold.

「それじゃあ、お幸せに!」

一応一言そう言つて、私はフリスクの手を引いて、歩いていった彼らに背を向けた。
「……………やっぱり、好きだったんだね」

ふと、ぼつりとフリスクがそんな言葉を漏らした。

「そうだねー。…………多分彼らは男同士なんだろうけど、愛することを咎めたりしちゃダメだからね」

「うん、分かつてるよ。だって、誰かを愛する事は誰にも止められないもん。違う？」
言おうとしていた事をフリスク自身の口か言われて思わず驚いてしまう。

「……………そうだよ。そこに偏見を持つたりしちゃ、いつか誰も何も愛せなくなってしまうからね。それだけは覚えておいてね」

「うん」

そんな事をフリスクに言いながら、前に進んだ。

88. 傍迷惑なニユースキヤスター

【Lily】

途中途中アルフィスのSNSを読み上げてもらいながら、先に進んでいく。

「……………またかよ」

進んだ先にあつたものを見て、そんな一言を吐き出す。一面の壁と両開きのドア。先程私がメタトンにブチギレる前に見た物と同じであると直ぐに気付いた故の言葉だ。

「あー、フリスク、この先多分またメタトンが居ると思うんだ。それで……もしかしたら庇いきれなかつたりする事態が起こるかもしれないから覚悟だけはしておいて」

「うん、分かった」

私の言葉にフリスクが頷いたのを見てから、私はドアノブを回す。ギイ、という音を立てて扉が開く。そのままゆつくりと扉を押して中を覗くと、照明が一つも見当たらない、真つ暗闇が広がっていた。エアコンでも着いているのか、涼しい風が頬を撫で、溶けそうになるほど暑いホットランドで動き回ったせいで熱くなっていた体には丁度良かった。

その中でバトルしなくてはならない事に若干面倒臭ささえも感じながら、フリスクの

手を引いて中に入り込む。そして、数歩歩いたところで、フリスクが居る場所から携帯の着信音が聞こえた。

プルルル……プルルル……

ゴソゴソと布が擦れる音が聞こえ、その後、小さくアルフィスの声が聞こえてくる。そして、明かりが点いたのか、不意にぱつと周りが明るくなった。目前にボールやらなんやらが置いてあるのを見て、そしてそのままそれらが物を模した爆弾である事を思い出した。

『マジで?』

静まり返ったその場所に、棒読みな電話越しのアルフィスの声が響いた。

《オーウ イエエエエス!!!》

先程聞いたばかりの男性の機械のような音声が届く。

《皆さん、こんばんは！ わたくしメタトンがMTTニュースを生放送でお送りします
!!》

だが辺りを見渡して確認しても、空に浮かぶカメラが幾つか見受けられるだけでメタトンの姿は見えず、きつと白い壁の向こうでニュースを実況をしているのだろうと察する。

「ごめんフリスク、ちょっと携帯貸して」

「え？ うん……」

未だ流れるメタトンの声に不安そうに辺りをキョロキョロと見るフリスクから携帯を借り、まだアルフィスと電話が繋がっている事を確認してから話しかける。

「アルフィス！ これまた襲撃だよね？ 肝心のメタトンの姿が見えないんだけど、どうなってるんだい？」

『……あ、あ、えっと、今電話越しに聞こえた『ニュース』って単語にまさかと思つてテレビつけてみたんだけど、貴方達、メタトンがやつてるニュースに映ってるわ……!!』
一瞬怯えたような声を出したアルフィスからの説明を聞き、私はゲーム通りに進んでいるようだと内心安堵する。

《勇敢なりポーターさんたち！ 何かニュースになりそうなモノを見つけてくださいね！ 私たちのワンダフルな十名の視聴者の皆様があなたたちを待っていますよ！》

「は……？」

今まで聞き流していたメタトンの言葉に、電話を耳元に宛がったまま思わずそう言葉を漏らす。

「……アルフィス、一回切るね。テレビはそのまま見ててピンチになったら助けをくれなかな？」

『え、ええ、もちろんよ！』

「そう、頼んだよ。それじゃあね」

電話をしている場合じゃなさそうだと判断し、アルフィスに約束を取り付けてから電話を切る。あー……面倒な事になった……

「アルフィスは何て……？」

「聞いたところ、なんかニュースに映されてるみたいだよ、私ら」

「え……」

携帯を返しながらか言った私の返答に、嘘でしょ、と言わんばかりに目を見開くフリスク。

「巻き込まれた以上は仕方ない。さっさと適当な物を選んで終わらせちゃおうか」

「うん。……ねえ、あれ、なんだろう……？」

私の言葉に頷いたフリスクが指差した先には、大きな薄い桃色の球体が鎮座していた。先程キョロキョロ見渡していた時に見つけたらしいなと考えながら、目測でどういう状態がよく観察する。……まだ起動はしていないらしいな。

「………何だろうね、あれ。此処まで遠いと私にも分からないな」

「そっか………ねえ、ぼくがリポートするもの選んでもいい？」

「ん？ 勿論いいよ」

フリスクからの提案を受け入れると、フリスクはまた辺りを見渡し、近くにあったバ

スケルトボールに目を着けてのか、近付いていく。それに後ろからついていく。

《バスケットボールは爆発だ、ですよね、ダーリン?》

「は?」

聞き覚えのない諺のような言葉を言われて思わず聞き返す。……それを言うなら『芸術は爆発だ』じゃないん?

《残念ですが、このバスケットボールで遊ぶことは出来ません》

私の疑問の言葉を無視したらしく、メタトンは淡々と説明を続けていく。

《それはMTTブランドの衣料用バスケットボール、遊ぶものではなく着付ける為の球体ですよ。美しい球体なくして私のようなセレブな人物になることは不可能なのです》

「いやお前ボディの形が箱だから殆ど角形じゃん。何処に使う要素あんの? 車輪部分?」

「お姉ちゃん、それ言っちゃいけない」

メタトンの発言に思わずそう切り返せば、フリスクからツツコミを受ける。本当に何に使うんだこのボール、と思いつながら、ボールを注視しておく。……あ、パピルスの勝負服のバスケットボールってまさかこれか……? いやあれは普通に服の袖なんじゃ

……うーん……?

「……………これにする?」

「うん。さっさと終わらせちゃおう」

とんでもないことに気付いてしまったかもしれないとどうでもいいことに若干頭を悩ませながらフリスクにそう訊くと、フリスクは頷き、傍にまで来ていたカメラに向き直る。

《ご覧下さい! リポーターたちはなんと…………バスケットボールを見つけました!》

「そりゃ見りゃあわかる」

態々言うことかよ、と言外に含みつつ、カメラを見上げたままそう言った。

《ああ、バスケットボール。楽しみを呼ぶ円。喜びを呼ぶ球。球体は遊びに抜群》

いきなりポエムじみた事を言い出すメタトンの声に、思わず顔をしかめる。

《でもこれで遊んではいけません。これはMTTブランドのファッションボールなのですから》

「……………というかさ、私達がリポートする筈なのにメタトンがやっちゃってない?」

「そうだね」

超空気ですわー、と思いつながら、フリスクからバスケットボールを離すために、パークの袖を捲り直して自分で持つておく。…………あ、おつも。これは完全に爆弾だわ。

《綺麗を保つためには正当な整備と正しい使い方が必要なのです》

まあそりやあそうだわな、と爆弾ボールを抱えながらメタトンの言葉に内心同意し、私は傍にあった穴のような場所を覗き込む。……マグマが若干見えるな。いざという時は此処から落とせば……

《ご覧のように、人間の体温では塗装が溶けてしまいますからね》

「なんで人間の体温で溶ける塗料を使ってるんですかねえ……人間の平均体温大体36度ぐらいじゃなかったか？」

それで溶けるならホットランドに置いといたら不味いんじゃないのか、とメタトンの言葉に心の中でツツコミをして、私は抱え込んだボールを見る。すると、バスケットボールの塗装が所々剥げ、黒く光る表面が顔を覗かせていた。……ああ、やっぱり。

《……ちよつと待った。これはバスケットボールではありません》

どろ、という音がしそうな程に塗料が溶け、段々と黒い部分が顕になる。そして、半分ぐらいまで溶けたところで、火の着いた導火線が顔を出した。

《爆弾です!!!》

「えっ?!」

メタトンの言葉にフリスクが驚いたように私が持つ爆弾を見て、顔を青褪めさせた。

《なんとということでしょう!!! このスポーツレビューは……ショートレビューになつてしまいます! あなたたちが爆発した時点で、終了になりますからね》

声高々に説明を続けるメタトンの声を聞き流しながら腕の中にある爆弾をじつと見つめる。……不自然に思える程導火線が長い。あくまでも此方を此処で殺す気は無いらしいな。

内心そう気付いて安堵しながら、私は冷静に爆弾を下ろし、腕に着いた着色剤を払い落とす。

「うっわ、落ちるかな、これ……」

「お姉ちゃん冷静だね……?」

「こういうのは慌てたりしたら余計混乱するからね。だからフリスクも落ち着いて。大丈夫、切り抜けられるよ、私達なら」

顔を強張らせるフリスクに落ち着くように言えば、分かった、と一言言つて小さく頷いた。

《しかし落ち着いてください! この部屋にある他の物をまだ確認していません!》

声が聞こえた瞬間、白い壁の一部が崩れ落ちて、黄色いネクタイに真っ赤なスーツというド派手な衣装を着たメタトンが飛び出して来た。そしてカメラに視線を向けて彼は喋り出す。その隙に私は彼の背中を注視する。……スイッチは……駄目だな、上手くスーツで隠れて見えない。

「なんと! 此処にある物全てが爆弾のようです!」

「……ハッ、白々しい。全部自分が用意した物のくせに」

あくまでリポーターとしてリポートを続ける彼の言葉に鼻で嗤いながらそう呟く。

「あの犬も爆弾！ あのプレゼントも爆弾！ わたしの台詞でさえも……！」

私の言葉を無視したか聞こえなかったらしいメタトンが言った瞬間天井から台詞をそっくり移したような文字の形をした爆弾が落ちてくる。私は咄嗟にフリスクの前に出て、両腕を顔の前でクロスしながら爆風を受ける。

ボン!!

「うっ、あっつ……」

部屋に入ってから冷え切った空気に肌を曝していた所為か、本来そこまで熱くない筈の熱風が熱かった。熱風が当たった箇所が少しヒリヒリする。……軽い火傷をしたらしいな。

「勇気あるリポーターさんたち……この爆弾を停止出来なければ……」

そこで一旦言葉を切り、メタトンはセットの奥へ飛んでいく。そして彼が先程見つけた球体に近付くと、ピツという音を立てて球体が起動し、側面に付いていた黒い画面のような物に『02:00』という数字が浮かび上がる。

「こちらの巨大な爆弾が二分で爆発して君たちの体は散り散りに！ もう『生』放送なんて出来なくなりますよ！」

上手いこと言ったつもりかよ、と内心毒突きながら、黙ったままメタトンを見続ける。「なんとという恐怖！ なんとという衝撃！ 三十九名の視聴者様が見守ってくれていますよー！」

……今、何て言った？

メタトンの言葉に違和感を覚え、自分が覚えている彼の言葉と照らし合わせ、ぎよつとする。『三十九』？ 何の冗談だ？ 何で視聴者が増えてるんだ……？

「頑張つて、ダーリン!!」

張り上げられた此方を応援する彼の声にはつと我に返り、今は爆弾解除が先だと判断して思考を切り換える。取り敢えず足元にあつたバスケットボール型の爆弾を蹴り飛ばす。有線爆弾じゃないみたいだし、何処かで誰かが爆弾を操作しているんだろうと考えた結果、落とすことが最善だと考えたからだ。これなら電波が届かない範囲にまで離れてしまえば動かなくなる筈。

蹴られた爆弾は吹き飛び、此方に向かってきていたコップ型の爆弾を巻き込み、穴へと落ちていった。……加減せず思いつき蹴ったせいかな、足が少し痛い。

プルプル……………

まるで見計らったかのようなタイミングで、フリスクが握り締めていた携帯の着信音が鳴り響く。フリスクは急いで携帯を弄り、電話に出た。

「……………」

暫く話し込んでいたフリスクが携帯を見ると、携帯が変形し始め、アンテナのような物が伸び、スコープのような物が出てくる。……成る程、これで止めるのか。

「うわ、変形した……で、どうしろって?」

「爆弾をこのスコープの中の範囲内に入れてボタンを押してって!」

「そう、じゃあ私は爆弾を抑え込むから射つのは任せた」

「えっ……………うん、任せて!」

フリスクから力強い言葉を受け取り、私はまず近くにあった犬の爆弾に駆け寄る。周りが白黒になるのを感じながら犬を見据え、タイミングを図る。

**Defuse the dog!*

流れたアナウンスを聞き流しながら動きが一瞬止まったタイミングを逃さず、距離を詰めて地面を抑え込む。突然抑え込まれた犬も当然抵抗し、暴れ始める。なかなか暴れるな、コイツ……!

「フリスク!」

「OK!」

何とか抑え込みながらフリスクに合図を送ると、フリスクは『ACT』を押してから抑え込んだ爆弾に標準を合わせ、ボタンを押す。すると、アンテナの先からエネルギー

弾のようなものが発射され、真つ直ぐ犬の爆弾まで飛来し、撃ち抜いた。エネルギー弾が当たった瞬間、犬は大人しくなり、ぐったりと地面に伏せる。

* Dog 犬を解除した defused!

「次に行くぞ!」

エネルギー弾に驚く暇も惜しく、私は次の爆弾を探す。

「お姉ちゃん、アルフィスが左下はどうかって!」

「左下!?! またあの機械があるところか!?!」

「多分!」

フリスクの言葉に返事をしながら走ってビームの壁がある所まで行く。

「一人で通れるか、フリスク?」

「大丈夫!」

その言葉を信じて私が先に壁を通り抜け、規則的な動きをするゲーム機型の爆弾を押さえ付けようとする。

* Defuse ゲームを止める the game!

無事壁を通り抜けてきたフリスクがゲーム機に近付いた途端にまた流れたアナウンスを聞きながらゲーム機を掴み、力づくで押さえる。

「行くよ!」

『ACT』を押したフリスクがまたエネルギー弾を発射し、ゲーム機を撃ち抜く。撃ち抜いた際の衝撃が伝わり、若干ふらついたのを立て直す。

*Bomb 爆弾を解除した defuse!

「お姉ちゃん大丈夫!?!」

「気にすんな、次に行くぞ!」

案の定心配したフリスクが駆け寄ってくるのを制し、ゴンドラの前にまで進む。本の型をした爆弾があることに気付き、手を伸ばす。

「どりゃあ!!」

左右に動く本型の爆弾を両手で掴んでしっかり抱え込み、ゴンドラの上から走り去る。

*Defuse 台本を止める the script!

「やって!」

ゴンドラの上を走ってきたフリスクに台本が撃てるようにしてから合図すると、フリスクは領いて『ACT』を押し、携帯を構えた。

「壊れろ!」

フリスクの掛け声と共にエネルギー弾が発射され、台本を撃ち抜く。

*Bomb 爆弾を解除した defuse!

「お姉ちゃん、アルフィスが最後の爆弾を真ん中に戻してくれたって！ 行こう！」
「オツケー！」

直ぐ様フリスクの手を引き、橋の上を走る。無事に到達し、フリスクの手を離して目の前のラッピングされたプレゼント型の爆弾の解除に向かう。

*Defuse the present!

「邪魔なんだよっ!!」

此方に捕まらないようにか縦横無尽に飛び回るプレゼントのリボンの部分を掴み、ほどこけてしまわない内に手繰り寄せ、抱き締めるようにして抱え込む。そして此方に携帯を構えるフリスクに向かって、声を張り上げた。

「これで最後だ、やっちゃえ!!」

「いつけえええ!!」

『ACT』を押して標準を合わせたフリスクが、ボタンを押す。またエネルギー弾が発射され、プレゼントボックスを撃ち抜いた。

*Bomb defused!

此方の勝ちだと告げるように、アナウンスが流れる。白黒になっていた周りに色が戻り、全て解除し終わった事を示していた。

「お見事、ダーリン！ 全ての爆弾の解除に成功したね！ まさか爆弾を蹴って穴に落

とすとは思わなかったよ！」

終わったのを見越したらしく、何処からともなくメタトンが現れ、拍手をしながら賛辞の言葉を述べた。

「失敗したら巨大な爆弾が二分で爆発する筈でしたが……もう二分で爆発することはありません！」

メタトンの言葉に安堵したのか、フリスクが一つ息を吐く。

「かわりに二秒で爆発します！」

「はあ!? テメエふざけんな!!」

ヒュツという音を立てて息を飲んで顔を強張らせたフリスクの代わりに、私は抗議の声をあげる。

「さよなら、ダーリン！」

私は咄嗟にぎゅつと固く目を瞑ったフリスクを爆発から庇うように抱き締める。

「……………」

しーん、と静まり返った空気が流れた。やはり爆発は起きなかったようだ、と安堵しながら、私は周りを見渡す。

「……………あら。爆発しないね」

何とも言えない空気の中、驚いたような声でメタトンはそう言った。

プルルル………

そんな中、フリスクが持っていた携帯の着信音が鳴る。フリスクが携帯を操作し、電話に出る。

『そ、それは何故かというと!!!』

スピーカーモードに切り替えたのか、アルフィスの声が携帯から流れ始める。

『あなたが長々と喋っている間に……私が……!!! 直した………つていうか………か………変えたつていうか、あの………』

次の言葉が上手く捻り出せないらしく、そこでアルフィスはどもつてしまう。

「なんてことだ。博士がハッキングして爆弾を止めただなんて」

『そう！ それをやったの！』

そんな醜態を晒したアルフィスを見かねてか、メタトンが助け船とも取れる台詞を吐く。そこにアルフィスは慌てて便乗した。

「まったく！ また失敗だ！ 許すまじ人間！ 許すまじ手伝ったアルフィス博士！」

まるで怒っているような声でメタトンはそう言った。

「しかし見届けてくれた三十八名の視聴者の皆様には感謝します!!!」

あ、一人減った。

カメラに向けて手を振るメタトンを見ながら、そんな事を思う。

「またね、ダーリン！」

そう言つてメタトンは手を振りながら飛び去つていった。

『う、うわあ……私達コテンパンにしてやった、よね？』

「いや、直接的に叩きのめした訳じゃないし、コテンパンにしてやったとは言えないんじゃない？」

『そ、そうだよね！ 言えないよね！』

まだスピーカーモードになつていたらしく、アルフィスの声が私にも聞こえた。そこで言い返してみると、慌ててアルフィスは同意してきた。……………。

『……あ、あの、最初はちよつとアレだったけど……でも私つてだんだん……えーつと、だんだん……』

「……………」

言葉を詰まらせたアルフィスにフリスクは小首を傾げ、パクパクと口を動かす。

『じ、自信をもつて案内できるよになつたかなつて！』

慌ててそう言つたアルフィスの言葉に、フリスクは同意するように頷いた。

『だ、だからあの爆弾ロボについては心配しないで……あ、あなた達を守つてあげるから！』

『守つてあげる』、か……大きく出たなあ。

アルフィスの言葉を聞きながら、そんな事を思う。

『そ、それでもし上手くいったら、私達……』

そこで一旦アルフィスは言葉を切り、黙り込む。

『あー、気にしないで。それじゃあまた！』

またパクパクと口を動かしたフリスクに誤魔化すようにそう言って、アルフィスは電話を切った。

ガチャン……

「あー……助かったあ……」

今度こそほっと息を吐き、フリスクはその場に座り込む。

「お疲れ様。格好よかったよ」

「……えへへ、ありがとー」

しゃがんで目線を合わせ、頭を撫でてやれば、フリスクはふにやりと頬を緩ませる。
ンンン、ぎゃんかわかよ。

「……ここ、まだ涼しいし、少し休憩していこうか。水飲む？」

「うん、飲むー」

休憩を提案すれば、フリスクは頷いた。それを見て私は水を取りだし、蓋を開けてフリスクに渡す。……さて、ここからが本番だ。

どうするべきか、と考えながら、私も地面に座り、天井を眺めた。

89. Hotland 探索⑨

〔Lily〕

暫しの休憩を挟み、充分休んだところでまたコアを目指して歩き出す。部屋を出るとまたマグマの熱気に当てられ、顔をしかめてしまう。

「あつっ……本当に嫌だわこの暑さ……」

「あはは、まあ『ホットランド』っていうぐらいだしね……」

そんな事を話しながら進んでいくと、先程も見たコアが見えてくる。先程よりも近付いたからか、マグマの光に照らされてぼんやりと浮かび上がる影が先程とは比べ物にならないくらい大きく見えた。

プルルル……

右手にコアを見ながら進んでいくと、横に並ぶフリスクのポケットから着信音が響く。フリスクはまた携帯を引っ張り出し、電話に出た。

「……………」

アルフィスの言葉に引っ掛かることがあったのか、フリスクは首を傾げ、その後、緊張したように顔を強張らせた。

「……………」

そして、アルフィスの言葉が嬉しかったのか、少し頬を緩ませて頷き、電話を切った。「……………ねえ、お姉ちゃん。ぼく、そこまで物静か……………?」

そして、フリスクは神妙な顔で私に問いかけてくる。

「ええ? ……いや、そこまででもないと思うよ。強いて言えば普通じゃない?」

「うん……………そうだよねえ……………」

少し考えてから自分の思った事を言えば、フリスクはそれに賛同し、頻りに首を傾げながら携帯をしまった。

「アルフィスに言われたの?」

「うん」

「へえ。まあ、人から見た自分のイメージが自分から見た自分のイメージと食い違っているのはよくあることだし、気にしなくていいんじゃないかな」

「そうだねー」

そう話しながら進み、エレベーターの前まで辿り着く。『開』ボタンを押して扉を開け、二人で乗り込む。そして中に入り込み、次のフロアへのボタンを押そうとする。そこでふと考えが浮かび、フリスクに提案する。

「……………フリスク、一回さ、あのガーソンさんのお店の所にまで戻っていい?」

「え？ ……いいけど、どうしたの？」

「ああ、いやね。ちよつと考えが浮かんでね……」

「ふーん……大丈夫だよ」

私の提案に訝しげに顔を顰めるフリスクに答えれば、了承の返事が返ってくる。それ
にありがとうと返し、直ぐ様ボタンを押す。ドアが閉まり、エレベーターが下降して
いった。

ゲームだった時のようにリバーパーソンさんにガーソンさんの店の前まで送っても
らい、挨拶もそこそこに、私はアイテムボックスに向かう。

「あ、用があつたのはそっち？」

「うん、こつち。いやさ、アイテム補充とかしとこうと思つて」

成る程、と納得がいったように頷いたフリスクを横目に、私はリュックを降ろして中
身を探り、ふと気付く。……あ、もしかして空きがないかこれ……？

「……あ、そう言えば、ボックスみて思い出したんだけどね。なんか携帯から何処かの
ボックスにアイテムを送れるみたいなんだよ？」

「……え、そうなの？」

どうしよう、と考えていた矢先、フリスクが思い出したように携帯を引っ張り出し、少

し弄ってから私に画面を見せてくる。画面には『アイテムボックスA』と書いてあり、その下には幾つかの空欄があった。そう言えばそんな機能があったな、と思い出す。

「あー、じゃあさ、この中に今までの装備とか入れといていい？」

「うん、いいよ」

フリスクが私の横に並び、アイテムボックスからしまっておいた今まで集めた装備を出す。そして携帯を弄り、ポケットにしまった。

「これでちよつと待ってれば……」

そう言い終わると、フリスクはぼーっと天井の方を見上げる。……これ今、装備をアイテムボックスに預けたんだよな。どうやって運ぶんだ……？

疑問に思いつつも黙って待っていると、体感二分ぐらいでブロロロというプロペラの回る音が聞こえてくる。音が聞こえた辺りを見れば、中型ぐらいのラジコンヘリコプターがコンテナを提げて飛んでいた。……え、まさかのヘリ？

「あ、きたきたー！」

フリスクは下降してきたヘリからそのコンテナを外すと、コンテナの中に今までの装備を詰める。そして、コンテナをフックに引っ掛ける。

「これでお願いますー！」

フリスクがそう言うと、コンテナを提げたヘリは何処か遠くへと飛んでいった。こう

やってアイテム預けてたのか……

「……………こんな機能があったんだ……………何処で知ったの、これ」

「ん？ あのね、アルフィスの書き込み見るときにちよつと弄ってたら出てきたの。それでこんなのあるんだなー、便利だなーって思ってた覚えてたんだ！」

満面の笑顔でそう言い切ったフリスクに癒されつつ、私はちよつと自分に不甲斐なさを感じる。…………フリスクから携帯を受け取った時に調べとけば良かったな。

「そつかあ……………凄いや見だったね」

偉いぞ、と言って頭を撫でてやれば、ふにやりと笑うフリスク。

「えへ、お姉ちゃん役を立てて嬉しいよ」

おおつときゃんかわか。

フリスクの可愛さにノックアウトされつつ、私はリュックの中にアイテムを幾つか入れてから背負い直す。

「じゃあ、戻ろうか」

「あち……………」

場所は変わってリバーパーソンさんの船の上、ホットランドに近付くにつれて上がっていく気温に倦怠感を抱き、船の縁に凭れながらそう言うと、クスクスと前のフリスク

とりパーパーソンさんに笑われてしまう。何かを言い返す気力もなく、船にしては速い速度で進む船に揺られる。乗り物酔いとか持つてなくって良かったな、と呑気に思った。

「トウララ……手で話す男に気をつけて……」

「……」

……『手で話す男』ねえ。

ポツリと、背中を向けたまま警告するように呟かれた言葉を留めておく。……博士か、それとも……

そんな風に考えていると、船の速度が下がり、停止する。どうやら着いたらしい。

「ありがとうございます、次、また来ます」

「トウララ、いつでもおいで」

手を振るリパーパーソンさんに手を振り返し、さっさとエレベーターに乗る。フリスクも乗り込んできたところでエレベーターのボタンを押すと、ドアが閉まり、エレベーターが上昇を始めた。

ポーン

という音と共にドアが開き、少しぬるくなった空気が入り込んでくる。

「お、ちよつと気温が下がった」

エレベーターから降り、此処はまだコアの中じやなかったよな、と思いながら、よく周りを見渡す。沢山の機械の中、所々に大小様々な大きさの蜘蛛の巣の影が見え、中ボスの存在である彼女を思い出す。……あー、そっか、彼女が近いのか。

「あ、蜘蛛の巣だ。おつきい」

私に続いて出てきたフリスクも同じように辺りを見回し、そんな感想を一言言つてから先に進みだす。

「フリスクは蜘蛛大丈夫だったよな？」

「うん、怖くないよー。それにルインズで会ったクモさん優しかったから、ここのクモさんは悪いクモさんじゃないと思うし」

「そっか」

知つてはいるけど一応確認として前に行くフリスクに訊いてみれば、そんな返事が返ってくる。そして、自分のリュックの中にあるドーナツの存在を思い出した。……あ、これは勝ったな。

若干フラグめいた事を考えながら、フリスクについていくと、紫色っぽい肌の女の子がいるカウンターと、両膝を床につけ、片手にドーナツらしきものを手に持った人型のモンスターが見える。

「……え、リアルであんな格好してる人……じゃないなモンスター初めてみた……」

思わず衝撃でそんな事を言いつつ、私は女の子が立つカウンターに近付いていったフリスクに続く。

「アフフフ、いらつしやい〜」

「どうも、こんにちは」

女の子は近付いてきた私に気付いたらしく、興味深々といった様子でクロワッサンとドーナツを見つめるフリスクから目を離し、につこりと五つほどある目を細め、ヒトよりも二組ほど多い手の一本を振った。

「見かけない顔ね〜、観光なのかしら〜？」

「あ、はい、そんなものです」

アフフフ、という特徴的な笑い声を整った小さめの唇から零れさせながら彼女が首を傾げると、可愛らしく結ばれた二つ結びが揺れる。……もうここまで詳しく言えばわかると思うが、ホットランド及びコアの中ボスである彼女——『Under tale』の中でも人気のあるキャラクターの一人であるマフェットがそこにいた。因みに前世の私も彼女が大好きだった。つか現物を見ると確かに目とか手とか多いけどそれを差し引いても可愛いんだけど。どうなつとるん？

「……？ どうかしたの〜？ 私の顔に何かついてるかしら〜？」

「あ、いえ……貴女が可愛かったので、つい……」

「アフフフ、ありがとう」

思わず彼女を凝視してしまっていたらしく、マフエ嬢は不思議そうに訊かれてしまう。それにしまったと思いつつ、正直な感想を言えば、彼女にクスクスと笑われながら流される。いやだ、フリスクには及ばないけどめっちゃ可愛い。なんで語尾を伸ばす口調がこんなにも似合うんだ……？

「ねえ、観光ついでにスパイダースイーツはいかが？ 売上は全部クモの為に使われるの」

「あ、ごめんさ……」

私がマフエ嬢からのステマを回避しようとすると、徐にフリスクがくつついてくる。

「わ、と、どうしたよ」

「全部調べ終わったからいいこーよ」

私達が話している間にいつの間にか探索を終えていたらしく、フリスクがそう言つて手を引つ張つてくる。

「ああ、そうだね。……すみませんが、お菓子は遠慮しておきますね」

「あらく、残念……また来てね」

残念そうな顔をするマフエ嬢に会釈し、フリスクの手を引いて次のエリアに移動する。

プルルル……………

次のエリアに移動し、直ぐに周りを見渡してみる。自分の記憶の中の部屋の配置であることに安堵しつつ、床にある装置を見てまた飛ぶのかと若干げんがりしていると、フリスクから携帯の着信音が聞こえる。フリスクは直ぐに携帯を引っ張り出し、電話に出た。

「……………」

『……………』

フリスクが電話に出ると、携帯からアルフィスの声が流れ出してくる。それを見てから、その間、私は左のパズルに行く最短ルートと右のパズルに行く最短ルートを思い出しておく。…………えっと、どう行くんだっけ？

配置を加味して暫く考えていると、パーカーの裾を引っ張られる。

「ん？」

「終わったよ」

振り返れば、電話を終えたフリスクが私を見上げていた。

「何だっつて？」

「北と南にパズルがあるってことと、アンダーネット？っていうので友達になろうって言われたよ」

「え、アンダーネットってさっきからアルフィスの通知が着てたやつ?」

「多分そうじゃないかな」

フリスクの曖昧な肯定で、アンダーネットを先程から通知が着てたSNSと結びつける。

「……あれ、でも通知が着てたってことはもう登録してあるんじゃない?」

「うん、ぼくもそう思ってたね、もう登録してあると思うよって言ったら、急いで切られちゃった……」

まだもうちよつとお喋りしたかったんだけどな、と少ししょんぼりとした様子のフリスクの頭を撫でながら、私は今頃滅茶苦茶焦ってるんだろうなと内心彼女の顔を思い浮かべる。……少し傑作だと思ってしまった私は本当に性格が悪いと思う。やだなあ……

「……おねーちゃん?」

「ん? あ、ごめん、ちよつと考え込んでた。どうした?」

「いや、ボーツとしてたから……そういうことならいいんだけど……」

内心自己嫌悪に陥っていると、私がボーツとしていることに気付いたらしいフリスクに心配そうに顔を覗き込まれる。それを大丈夫だと誤魔化し、私はフリスクを抱え上げる。

「まあとにかく、先に進もうか。どっちがいい？」

「んー、じゃあこつち！」

「オツケー左ね」

しっかりと首に廻された腕を若干くすぐったく思いながら、私は装置に乗った。

90. マフェット戦

〔Lily〕

途中でツンデレプレーンと火山ちゃんに絡まれたりアルフィスから電話が来たりしつつも北のパズルを解き、南のパズルまでやってくる。ベルトコンベアをダッシュで駆け抜け、さっさとパズルを解いてしまう。

ガチャガチャ、と手元の機械を弄り、『撃つ』ボタンを押す。

「これでどうだ……?」

ボタンを押した瞬間発射された弾が対岸の船を撃ち抜き、『おめでとう』という文字が画面に表示される。

「あ、解けた」

「おめでとう! これで先に進めるかな?」

無邪気に笑って祝ってくれたフリスクが首を傾げ、そう言った。

「うん、これで進めると思うよ」

「よし、じゃあいこっか! ほら早く早く!」

急かすフリスクに手を引かれ、ベルトコンベアの上を走り抜ける。先程の分岐点まで

戻ってくる。

「よし、じゃあしつかり掴まってね」

「うん」

フリスクを抱え上げ、注意を促す。そしてしつかりと首に腕が廻された事を確認して、私は装置に乗る。バシユツという音を立てて吹き飛ばされ、対岸に移る。もう慣れしてしまったその行為を繰り返して、固く閉ざされていた扉の前辺りにまでくる。

「とうちゃーく。もう降りても大丈夫だよ」

「ん」

私がフリスクに声をかけると、フリスクは私の腕から降りて、地面に足をつける。そして、大きい扉の前にまで歩いていき、じつとその扉を見上げた。

ゴゴゴゴゴゴ……

大きな音を立てながら仕掛けが作動し、扉が横開きに開いていった。

「行こう！」

そう言つてフリスクは先を歩いていく。その後を追い、私も先に進んだ。

進んでいく毎に増える蜘蛛の巣と強くなる何かの匂いに顔を顰めながらも先を見ると、薄らと光が見えた。

……ああ、セーブポイントだったか。

「あ、あれは……」

フリスクも光が見えたらしく、直ぐに駆け出してセーブポイントに近付いていき、手を伸ばした。フリスクがセーブを行っている間、私は辺りを見渡しておく。……奥の建物……彼処で彼女と戦うんだよな。

「終わったよ」

「ん、分かった。じゃあ行こうか」

隣に立ったフリスクの手を握り、先に進もうとする。ふと、蜘蛛の巣についてとある知識が甦り、フリスクに教えておこうと思いつく。

「……あ、そうだ、フリスク。蜘蛛の巣には二種類の糸があるって知ってる？」

「え？ ……そうなの？」

私がフリスクにそう言ってみれば、フリスクは知らなかったようで驚いたように私を見た。

「うん。蜘蛛の巣はハエとかの餌を獲る為の『くつつく糸』と自分が移動する為の『くつつかない糸』があるんだ。縦の糸がくつつかない糸で、横の糸がくつつく糸なんだよ」
私の豆知識にフリスクはへえ、という感嘆の声を漏らす。

「じゃあもしも大きなクモの巣があったら縦の糸の上を歩けばいいんだね」

「うん。そうなんだけど……何しろ昔調べた事だからさ、間違ってるかもしれないのよね。だから頭の隅にでも置いて」

はい、というフリスクの返事を聞いて、今度こそ建物の中に入る。

「うっ……」

何かの匂い……多分蜘蛛の巣の匂いだとは思うが、建物の中に入ると一層匂いは濃くなり、最早異臭と言ってもいい程に強くなる。嗅ぎ慣れない匂いということも多少あるんだろうけど、ここまで強いとなあ……結構キツイ。

「お姉ちゃん大丈夫……?」

「ん、平気平気。そっちは……大丈夫そうだね」

思わず呻き声を上げた私を心配そうに見上げるフリスクの顔色を見てみると、問題は無いらしく平然としていた。そして私が平気なようだ判断したのか、ほっとしたような顔で歩き出す。その歩幅に合わせるようにして、私も歩く。

「アフフ……なんて言ったか聞いた?」

道にある蜘蛛の巣を踏まないように避けながら歩いていくと、つい先程聞いた特徴的な笑い声が聞こえた。

「……お姉ちゃん」

「ああ、分かっている」

フリスクの小さな声に同じく小声で返答し、警戒を強めながら歩き続ける。ポケットに手をつた込み、ナイフの柄を握っておく。

「シマシマのシャツとパーカーを着た人間がここを通るんですって」

誰かに小声で囁きかけるような可愛らしいその声が、今だけは本当に恐ろしく聞こえる。

「蜘蛛が大嫌いつて聞いたわあ」

囁き声に混じってクスクスと笑う声が響く。そんな不気味な声を聞きながら前に進んでいると、道の先で頑丈そうで巨大な蜘蛛の巣が架かっていることに気付く。

「……奇しくもさつきフリスクが言った事が現実になったね。……縦糸を歩くようにしなさい。絶対に足を踏み外して横糸に乗らないようにね」

「……………うん、分かった」

小声でフリスクにそう言うって手を離して縦に並び、バランスを保ちながらなんとか進んでいく。

「踏み潰すのが大好きって聞いたわあ」

怒りさえ滲んで聞こえるその声が響く。……そうか、彼女にとっては蜘蛛は家族のよなものだものね。そこに付け入られたかあ……

なんとなく同情のような微妙な感情を胸に抱きつつ、進む。

「足を引きちぎるのが趣味だつて聞いたわあ」

そんな声を聞きながら進んで、中腹ぐらいにまでくると、

「それに……」

「うわあっ!!?」

「フリスク!?!」

少し後ろに居たフリスクから声が上がると、慌てて振り返ると、蜘蛛の糸だろるか、動きを封じるように体をぐるぐる巻きにされたフリスクが今にも小さい蜘蛛達によつて連れ去られようとしていた。

「……………ひどく財布の紐が固いつて聞いたわあ」

「やめてやめろやめろフリスクを離せええええええええ!!!」

その光景に恐怖で一瞬息をするのも忘れ、私は直ぐに駆け出して手を伸ばしてフリスクを掴んで抱き寄せ、引っ張り出したハンカチ付きのナイフを振り回して糸を叩き切る。

「大丈夫!?!」

「う、うん……」

この手にフリスクが返つてきたことに安堵しながら、ナイフからハンカチを外してフリスクの体に巻き付いた糸を切っていく。……………うっわ体勢が体勢だからスゲー切り

辛い。慎重にやんなきゃフリスクが傷付くなこれ。

プツン、プツンという音を立てて慎重にフリスクの腕が動くようになるぐらいまで切り終わると、声が聞こえた。

「アフフフフ………」

声が聞こえた右の方を見てみる。すると、先程も会ったマフェ嬢がティーカップやらなんやらを持って笑っていた。

「貴方、自分の『味覚』は私達のお店には合わないと思ってるでしょう?」

そこで一旦言葉を切り、マフェ嬢が特徴的な笑い声を上げる。

「それは間違ってると思うわ。だって、貴方の「味」って……」

上品な笑顔を歪め、にやり、という擬音が似合うような笑顔を彼女は浮かべた。

「お菓子の材料にピツタリだと思ってるもの!」

そこで、彼女の笑い声が流れると同時に、世界が白黒に切り替わった。

*MMuffufffett trapst you!た

きつと『Player』視点では私も大好きだった軽快な音楽が流れてるんだろとうなとマフェ嬢を見据えながら思う。……こっちは命懸けなんですけどね。

「……………フリスク、この体勢と状況じゃ正直な話応戦しきれない。だから私は回避に専念する。その間、フリスクはどうかこの戦闘を早急に終わらせられるように全力で頭

を回して考えて。出来る？」

「え……………」

私の問いかけにフリスクは戸惑ったような声を上げ、そして、少しした後、分かった、と頷いた。

……………本来ならば。フリスクにこんな回りくどいことさせないしさせたくないんだけど、こうなってしまうたら仕方ない。私がフリスクにドーナツを出すように指示してもいいけど、この状況でそんなに確な判断をしたら、どんなにフリスクが私のことを信頼して信用してたとしてもどうして分かったのか不審に思う自信がある。誤魔化せばいいかもしれないけど、それだって誤魔化しきれるか自信がない。……………それに、フリスクにはどんな時にも冷静に頭を回せるようになってほしいからね。私が答えばかりあげてたら、この子は頭を使わなくなってしまう。それだけは回避したい。ヒントはあげるけどね。

ナイフをポケットにしまい、回避出来るように体勢を整えると、ピツ、という音がした。

*MUFFET—ATK 38. 8 DEF 18. 8

* If ^バshe ^ラinvites ^招you ^かto ^れher ^たparlor,
excuse yourself.

取り敢えずまずは彼女のことを調べたのか、そんなアナウンスが流れた。

『そんなに青い顔しないで、カワイコちゃん〜』

アッフフ、と笑いながらそんなことを言い、マフェ嬢はするすると糸を伝って上の方へと昇っていく。そして、丁度私達の上にもでくると、真ん中の両手に持っていたティーポットの口を私達に向けて傾けた。

「う、わ……!?!」

バシヤツ

当然重力に沿ってティーポットの中身だった紫色のお茶（だろうか）がティーポットから流れ出し、私の頭に掛かる。熱くなかったのが幸いだったが、少しだけフリスクとパーカーにも掛かる。

「お姉ちゃん大丈夫!?!」

「うん、大丈夫。それにしても、お茶掛けられるとは……つか何の意味が……!?!」
心配するフリスクに言葉を返そうとして、視線を降ろしてギョツとする。今立っている白色だった蜘蛛の巣が、紫色に変色していた。この白黒の空間に色が付くのはあのパターンしかない。まさかと思つてフリスクのソウルを見てみると、赤色の筈のソウルが、紫色になっていた。

『……貴方には紫がよく似合ってるわ! アッフフフ〜』

「しまった、やられたッ！」

『パールアタック』だ、これ。

*
奇

You, re

na

trapped

in

a

strange

purple

web

!

!

頭の中に流れてきたアナウンスで、完全にパールアタックの術中に嵌まった事を確信する。

……『パールアタック』は、マフェット戦で使われる特殊ギミックだ。ゲームでは紫色の線の上しか歩けなくなっていたが、現実ではあのさっきの紅茶もどきのかかった蜘蛛の巣の上しか歩けなくなる仕様らしい。

「……なんでこんなことするのさ！ 私達が何かしたか!？」

油断した、と内心焦りながら極めて冷静であるように見せるために上から降りてきたマフェットに向かって叫ぶ。その間に目を動かし、周りを伺う。マフェットの後ろ辺りにプラカードが浮かんでいるのを見つけ、内容を注視する。六本の棒が突き出ているのが見え、蜘蛛の絵柄が描いてあるらしいと見当をつけ、次の攻撃を予測する。

「あら、今更白を切るつもりかしら〜？」

私の言葉に反応したマフェットが複数ある目を細めながらそう言葉を返す。

ピツ、という音がした。

* You ^クst ^モtr ^のug ^巢g ^かgl ^らe ^逃to ^れes ^よca ^うpe ^とth ^もe ^がwe ^いb. ^た

*

M ^ムuf ^フfe ^フt ^フco ^フve ^トrs ^ハhe ^口r ^をmo ^おu ^おth ^おan ^テd ^クgi ^クgl ^スes ^とat ^笑yo ^たu.

『どうしてそんなに顔色が悪いの？ もっと自分を誇りに思いなさいなく』

そのマフエツトの言葉が途切れるか否や、何匹もの蜘蛛達が私達目掛けて突進してくる。

「！」

結構なスピードで突っ込んでくる蜘蛛達に踏んだりしてしまつて危害を加えないように注意を払いながら避ける。

ゴツ

「いつて……！」

体勢が少し安定せずふらついたところを狙われ、背後を蜘蛛が掠めていく。

* M ^ムuf ^フfe ^フt ^ハpo ^ハu ^ハrs ^ハyo ^ハu ^ハa ^ハcu ^ハp ^ハof ^ハsp ^ハide ^ハrs.

蜘蛛のスピードが速かつた所為か掠めた場所がじんじんする。それを耐え、フリスクを見ると、目を伏せて一生懸命頭を巡らせていた。そしてターンが此方に回つた事に気付くと、『ACT』に手を伸ばす。

* You struggle to escape the web.
 * Muffet laughs and claps her hands.

「アナウンズ通り部屋に拍手の音と可愛らしい笑い声が響く。滑稽だとしても言いたいのだろうか。少し腹が立つ。

『貴方はおいしいケーキになれるんだもの』

笑いながらそう言ったマフエットに殺意が湧きかけるのを抑え、プラカードを見る。変わらず六本の線が見え、次も同じかと判断する。

「私達蜘蛛を踏み潰したりなんてしてないぞ!!?」　なんでこんな目に合わないといけないんだ!」

「……………なんですつて?」

私の言葉にマフエットが反応して笑顔を引つ込めた瞬間、蜘蛛の弾幕が襲ってくる。なんとかそれを避け、紫色の蜘蛛の巣の中を逃げ回る。

* Muffet tidies up the web around you.
 マフエットが笑顔を消して此方を見たのを好機だと判断し、畳み掛ける。

「何処の誰がそんなやつてもいらないこと言ったのか知らないけどね、私達そんなことしてないから!!　ねえ放してよ!!」

私が訴えかけるように彼女に言えば、彼女は驚いたように目を見開き、考え込むよう

に手を組んだ。その隙に私はプラカードを盗み見て次の攻撃を予測する。

* You struggle to escape the web.

* Muffet is so amused by your antics that she gives you a discount 《Muffetはあまりにあなたのおふざけが愉快なので割引してくれた》!

『放してほしい? 馬鹿なこと考えないで〜』

だが、私の言葉も虚しく、マフェットはそう言うて拒絶する。それを見計らってまた蜘蛛が突撃してくる。なんとか紙一重でそれを避け続け、自分達にターンが回ってくるまで耐える。

* Muffet pours you a cup of spiders.

アナウンズが流れたことで自分達にターンが回ったらしいと判断し、私はまた口を開く。

「本当にやってないんだってば!! どうやったら信じてくれるんだよ!」

「アッフッフ、口先だけだったらなんとだって言えるわ〜」

とにかく信じてもらいたい一心で語りかけるように声を張り上げ、マフェットに請う。それを彼女は冷たく一笑に伏せた。

* You struggle to escape the web.

*Nothing happens.

『貴方のソウルでクモたちみんなが幸せになれるのよ〜』

彼女のその言葉にまた殺意が湧くのをなんとか抑える。……私のソウルを使うならまだしも、フリスクのままでそんなことに使わせてたまるかよ。

苛立ちを覚えながら飛んでくるドーナツと突撃してくる蜘蛛を避け、ターンを待つ。

*Muffet does a synchronized dance with the other spiders 《Muffetは他のクモ達と息のピッタリあつたダンスをしている》。

ここまでのターン数を数え、不味いことに気付く。プラカードを見ると、マフィンのような物が描かれている。……うっわ。不味い。

「フリスク。……これから走り回ることになるからしつかり掴まってね」

「えっ……？ 分かった」

考え込んでいたフリスクは私の言葉に驚いたような顔をして、直ぐ様頷いた。

「……ねえ、もしそんなに自分の身の潔白を主張するなら、証拠を出してみなさいな〜」
ふと、マフエットからそんな言葉が投げ掛けられる。

「証拠？」

「ええ、貴方の必死さは認めて上げるわ。だから証拠をちようだいな？」

一応熱意は認めてくれたらしく、彼女は笑いながらそう言った。

「証拠……………？ そんなもの……………」

ふと、フリスクが彼女の発言に引つ掛かるものがあつたのかまた考え込む。そして考え込んだまま『ACT』を押しした。

*You struggle to escape the web.

*Nothing happened.

『あら、失礼！ 私のペットを紹介するのを忘れていたわ』

「ペット……………？ このタイミングで……………？」

嫌な予感がする、と顔をあげたフリスクが呟いたタイミングで、どすんという重いものが落ちた音が後ろで聞こえた。

『今は朝ご飯の時間よね？ それじゃ二人とも、楽しむのよ』

その瞬間、足場の蜘蛛の巣が唐突に後ろに結構傾く。

「うっわ!？」

「きゃっ」

その場で踏ん張つて転がり落ちるのを何とか回避し、落としにかかつてくる蜘蛛達を避ける。そして、その波が途切れたタイミングで、私はやっと後ろを振り向いた。

「……………げっ」

そこには、カップケーキかマフィンの形をした巨大な蜘蛛が口を開けて私たちを待っていた。名前は忘れてしまったソイツの案外つぶらな目と目が合う。完全にロックオンされたなど確信し、全力で目を逸らす。

「しつかり掴まっててね!？」

「うん!!」

ソイツから逃げる為にフリスクを抱え直し、全力疾走を開始する。ソイツを真ん中にした蟻地獄の罠のような形に変形した蜘蛛の巣の上をぐるぐると回るようにして走っていく。

こういう形の罠から逃げる為にはこの坂を無理矢理登っていくと逆に体力を消費していくか落ちる。それなら遠心力やら何やらを利用して走った方がよい。……まあ、本当は昔こういう遊具で遊んだことがあった知識があるから出来るだけなただけど。

巨大蜘蛛は何時まで経っても落ちて来ない特上私の餌たに痺れを切らしたのか、短めの足を器用に使って飛び上がると、私達目掛けて飛んでくる。加速して潰されるのを避け、そのままソイツと鬼ごっこを開始する。道を阻むように現れる蜘蛛共の間に体を振じ込んで避け、足を動かし続ける。暫くそうして走っていると、不意に坂が元の平坦な足場に戻り、巨大蜘蛛が天井に引っ込んだ。

*Muffett tidies up the web around you.

何か仕掛けて来るのかと天井を睨んでいるとアナウンスが流れ、相手の攻撃が終わって此方にターンが回ってきただけだと安堵する。なんだ、終わっただけか。

溜め息を吐きながらフリスクを見てみると、まだ難しい顔をしていた。その顔のまま、フリスクはまたボタンを押す。

*You struggle to escape the web.

*Nothing happened.

『私たちに貴方のことを警告してくれた方……』

『ACT』で会話を進めると、マフェットは徐に語り出す。……メタトンのことだろうか。

飛んでくるドーナッツの弾幕と突進してくる蜘蛛を避けながら彼を思い浮かべる。余念が無いなあ、アイツも。……謝らなくちゃなあ。

どっ

「っ、ぐ……」

背中に走った鈍い痛みで意識が逸れていた事に気付く。今はこつちに集中しないと。

*Muffett tidies up the web around you.

いけないいけない、しっかりしなきゃ。

背中に走るじんじんとした痛みにも苦笑を漏らし、次の攻撃を回避出来るよう備える。
ピツ、という音がする。

*You struggle to escape the web.

*Nothing happened.

『貴方のソウルに大枚をはたいて下さるそうよ』

……やっぱりソウル狙いか。

知識として彼の目的を一応把握しているからか、彼女の言葉を聞いても然程動揺しなかった。

*Muffett tidies up the web around you.

ピツという音がする。

*You struggle to escape the web.

*Nothing happened.

『素敵な笑顔の方だったわ、しかも……アッフ』

何かを言いかけて、彼女はクスクスと手を口に宛てて笑う。上品なその仕草が今だけは腹が立った。苛立ちを抑え込みつつ飛んでくるクロワッサンとドーナッツを避け、耐える。

* Muffet does a synchronized dance with the other spiders.

くるくるとアナウンズ通り回る彼女を見ながら、次を待つ。ピツという音がする。

* You struggle to escape the web.

* Nothing happened.

『変だったわ、陰に隠れて姿を変えた所を見たのよ……?』

訝しむように、彼女は小首を傾げながら不思議そうな顔をしてそう言った。

メタトンはあの箱の形態じゃなくて人間形態で彼女に会ったのか。まあじやなきや『素敵な笑顔』とか言わないよな。……というか、一人ネタバレしてるモンスターがここにいたぞ、おい。やつぱりちよつと抜けてないか、アイツ。

飛んでくる大量のクロワツサンを避けながらそんな事を思う。……ふと思ったが、食べ物や武器にしたらアカンと思うのは私だけなのだろうか。

* Muffet pours you a cup of spiders.

ふと、彼女の後ろのプラカードを見る。またマフィンの絵柄が描いてある事に気が付き、またかとげんなりする。

* You struggle to escape the web.

* Nothing happened.

アナウンスが流れ、また足場が傾く。転げ落ちないように踏ん張り、直ぐに走れるように体勢を立て直す。

『あら、昼食の時間じゃないかしら？ 私のペットちゃんにも餌をあげないと』

いやまだそこまで経ってないだろと思いつながら、底に突き落としかかってくる蜘蛛共を避け、走り回る。涎を垂らしながら足を伸ばしてくる巨大蜘蛛が煩わしかった。

* Muffet does a synchro nized dance with the other spiders.

巨大蜘蛛が上に引つ込んで足場が元に戻り、アナウンスが流れ、逃げ切った事を知らせる。さあ、次だ。

ピツという音がする。

* You struggle to escape the web.

* Nothing happened.

『あれだけのお金があればクモちゃん達を集めて私達はやり直せるわ』

『やり直す』という言葉に思わず心臓が大きく跳ねる。一瞬過つていった最悪の光景を振り払い、回避に専念する。

* Muffet tidies up the web around you.

ビュンビュンと空気を裂きながら突っ込んでくる蜘蛛共を避け続け、アナウンスが流

れた所で呼吸を整える。……次だ。

* You struggle to escape the web.

* Nothing happened.

『ご存知かしら？ クモちゃん達は何世代もルインズに閉じ込められているの！』

「えっ……？」

「酷い話でしよう？」

同情を誘うように彼女が言った言葉に今度はフリスクが反応する。そして、何かを思いついたように目を見開いた。その様子を確認しながら、飛んでくるドーナッツが当たらないように回避を続ける。……つか、よく何世代も持ったよな。普通の蜘蛛だったら血が濃くなりすぎて子供が出来なくなっちゃうか奇形が生まれちゃうと思うんだけど……一応モンスターに分類されるからなのか？

* Muffet does a synchronized dance with the other spiders.

「お姉ちゃん、リュック!! ぼく降ろしてリュック貸して!!」

ドーナッツの雨が止み、ターンが此方に回った所でフリスクが思い付いたように叫ぶ。

「……………なんか思い付いたの？」

もしやと思つてフリスクに訊いてみれば、フリスクは確信を持ったように頷いた。

「……ルインズで蜘蛛のドーナツ買ったの覚えてる？ あれが使えらと思うんだけど

……どうかな？」

ハツと我に返つて不安そうに声を潜めてそう言つたフリスクに、私は感心する。……流石未来の親善大使。彼女との会話だけで相手を納得させる適切な証拠を出す事が出来るとはね。頭の回転が早いっつたらないわ。この子探偵にもなれるんじゃない？

「……試してみる価値はあると思うよ。だからそんな不安そうな顔しないの」

「でも……」

「間違つてたらそのときはそのとき。何とかするよ」

内心フリスクの将来は明るいなと思ひながらそう言つてフリスクを足場に慎重に降ろし、リュックを渡す。フリスクはリュックを開け、中を漁つてドーナツを取り出した。そして私にしゃがむようジェスチャーを出す。それに従つて少し屈めば、フリスクは私の口元にそれを宛てる。……食へることかな？

* You ate Spider Donut.

* ^{HP} ^{が全回復した} maxed!

『えっ?』

取り敢えずそのまま一口、また一口と食べていくと、そんなアナウンスが聞こえ、背

中と脇腹を掠めたところの痛みが引いていく。そして、困惑しきった彼女の声が耳に入った。……あ、ほんのりリング風味で美味しいわこれ。

『それ、どこでそれを……？ 盗んだのかしら？ あらあらく、クモちゃん達、盗人にはおしおきよ〜』

「……なわけねーだろ!! ルインズでちゃんと買ったんだよ、これは。多分、君の知っている蜘蛛達からだと思う。」

……これなら証拠になるだろう？ 蜘蛛嫌いが蜘蛛からドーナッツを買うかい、普通。近付きさえしれないと思うんだが？」

口に含んでいた最後の一口を咀嚼して飲み込み、彼女に少し怒鳴るようにして言葉を返す。その言葉に驚いたのか、彼女は少し目を見開いて、逸らした。

「……あれは……」

そんな中、何かに気付いたフリスクが声をあげる。フリスクが視線を向けている方向を向ければ、一匹の蜘蛛が紙を持って駆け込んできていた。

『えっ？ ルインズのクモたちから電報ですって？』

「お姉ちゃん電報って何？」

「あー……簡単に言えば手紙のことだったと思うな」

地下に電報とかあるんだ、と思いつながらフリスクに意味を説明し、蜘蛛から慌てて電

報を受け取ったマフェットが内容を読むのを待つ。

『なにになに？ 貴方はあの子達に会って……クモについてスゴク情熱的だったの！』

マフェ嬢の驚いた声を聞きながら、もう大丈夫そうだと判断して、強張っていた身体
の力を抜く。これならもう終わるな。

『あらあら、酷い勘違いだったわ。貴方はクモが嫌いかと思っていたの』

「な訳ないでしょう」

遺憾の意を顔一杯に示す私に対し、フリスクは大丈夫だよというように首をふるふる
と横に振る。

『あの方の言っていたソウルは……きつと他のシマシマシャツの人間なのね』

ごめんなさいそれは勘違いでも何でもなく間違はなく私達です。

内心死んだ目をしながらそう言うておく。ちらつとフリスクを見ると、顔を引き吊ら
せていた。

『お騒がせしちゃってごめんなさいね、アフフ』

「いえ、結果的に分かってもらえて良かったです」

申し訳なさそうに笑う彼女に流石に可哀想になり、私も不満そうに見えただろう表情
を引つ込めて笑顔を見せる。すると、彼女は今度は安心したように笑った。

『お詫びにどうかしら、ここにいつでも戻ってきて……そして無料で……貴方をぐ』

るぐる巻きにしてクモちゃんを遊ばせてあげる！」

「さては貴女実は反省してないな?！」

『アフフフフ、冗談よ』

マフェ嬢の口から出た言葉に思わずツツコミを入れれば、彼女は朗らかに笑った。

『見逃してあげるわね』

* M u f f e t i s s p a r i n g y o u .
は情けをかけてくれている

そのアナウンサーと彼女の宣言を聞き、フリスクは笑顔で『M E R C Y』を押しした。

* Y O U W O N !
あなたは勝利した

* Y o u e a r n e d O X P a n d O g o l d .
と O X P を得た

そんなアナウンサーが流れ、世界が白黒から切り替わる。色が戻ってきた世界に安堵しながら、私はマフェ嬢に向き直る。

「アフフ、楽しかったわ! また会いましょうね、カワイコちゃん!」

これからもご鼻屑にね、という彼女の声を部屋に響かせながら、彼女は薄暗い部屋の奥へと引つ込んでいった。

「……………あー、どつと疲れた……………」

「大丈夫、お姉ちゃん……………」

戦闘が終わって気が抜け、膝に手を付く。戦闘中に走ったからか、足が重い。休憩挟

んだりしているとはいえ、今までずっと歩いたり走ったりしてきたからダメージが溜まってるのかね。ランニングしたりして一応鍛えてはいたけど、やっぱり一般人の自主トレぐらいのレベルじゃあそこまで底上げ出来なかったな……

「どうする？　ちよつと休む？」

「んー……いや、一応ここ人様の家にあたるわけだし、もうちよつと進んでからにするよ」

「そう……？　無理、しないでね」

心配そうに見上げるフリスクの頭をくしゃりと撫で、走った時の風でボサボサになってしまった指通りのいい髪を梳く。そうして整えながら、この子を守れて良かったと内心思う。

「……………」

「……………お姉ちゃん？」

きら、と薄暗い中フリスクに繋がる糸が光を反射して少し光る。何度も邪魔だと思っただそれを、今も疎ましく思った。

急に掌の動きを止めた私を不審に思ったのか、フリスクは私の顔を覗き込む。

「何でもないよ。……………行くうか」

「うん」

進んでいった。
フリスクに何でもないと誤魔化し、小さい手をしっかりと握る。そうして次の部屋へと

91. 虚構だらけのミュージカル

〔Lily〕

薄暗かった部屋を抜けると、照明が点いて少し明るくなった廊下に出る。……あー、そっか、そう言えばここは連続だったな……

「ん、なんだろうあれ……ポスター？」

内心ちよつとげんなりしつつ、ポスターを見つけて歩いていくフリスクの後を追う。

「……うわお」

フリスクの後ろからポスターを見ると、メタトンがスポットライトを浴びているドラマチックなポスターだった。……こんな風になってたのか……

『恋人達を襲う運命の悲劇^{イタズラ}——二人の愛が今試される』というキャッチコピーが書いてあるのに思わず苦笑する。中々客引き出来そうだなと思ってしまった私は可笑しい。

「………ねえお姉ちゃん、ぼく嫌な予感がするんだけど」

「奇遇だねフリスク、私もだよ。開始時間もそろそろだし絶対巻き込まれるだろこれ」

「だよねえ……」

二人で微妙な顔のまま顔を見合わせ、小さく溜め息を吐く。静かな廊下に、はあ、という溜め息の音が響いた。

「まあ、此処に留まっても仕方ないし、行こうか」

「うん」

そう言つてフリスクを連れ、次のエリアに進んでいく。

……次は確かさつき見たミュージカルだった筈。かつたるいなあなどとさらりと自然と思つてしまう私に嫌気が差しながら、私は舞台の上へとあがつていく。

「……………」

舞台に入場しながら辺りを見渡せば、夜景のような背景に、ハリボテの城のセットである事が伺えた。上から降り注ぐ舞台照明の光を受けながら、私はよく城を観察しておく。あ、結構完成度高いなこれ。気合い入ってんなあ。

「ああ、そこにいるのは……」

ズレた感心を抱きながらセットをしげしげと眺めていると、ふと、聞き慣れて……はいない機械音のような男性の裏声が聴こえた。え、待つて、ゲームだった時は分からなかったけど裏声で話してんの？ 今から裏声でミュージカル進行してくの？

気怠さが吹っ飛んで困惑したまま声がした方に顔を向ければ、城のセットのバルコニーから声の主がちらりと姿を覗かせる。

「もしかして……?」

そして、手を胸で組んだ状態で、声の主は姿を現した。

「……私の運命の恋人?」

「ふっ……!?!」

「……!?!」

そこには水色のこれまた品の良い綺麗なドレスを着た状態のメタトンが佇んでいた。まさかの裏声だけで結構腹筋にダメージが入ってたのに追い打ちでダメージが入って笑いそうになるのを堪える。ちらりとフリスクを見れば、マジで?とでも言いたげな顔をしていた。

そんな私達の心情も露知らず、穏やかなBGMが掛かる中、メタトンはドレスの裾を持ち上げてさながら全世界に愛された名作童話のプリンセス・シンデレラのようにしずしずと階段……いや坂を降りてくる。その仕草の洗練された感じを見て、もしかして練習していたのかと思うと同時に、彼の徹底したエンタメ魂に感心する。つか、うん。よく結構急な坂をゆっくり降りてくれたよね。

「……………オーマイラヴ」

そしてメタトンは私達の傍に立つと、うつとりするような動作をしてから、BGMに合わせて唄い出す。さながらオペラのような歌声に驚きつつ、警戒を一応しておく。

「!？」

唐突にミュージカルらしきものが始まった事に面食らったのか、フリスクは目を丸くしてメタトンの行動を見る。

【逃げなさい】

くるくると私達の周りを回るようにしながら演技を行うメタトンに合わせ、私は視線を身体ごと移動させていく。……今まで散々滅茶苦茶にしてきちやつたけど、これは彼の誠意を込めて行つてゐる事でもあるんだから、せめてこれぐらいは協力してあげなきやね。

【王が 許さない】

ここでいう『王』とは、この先で戦わないといけない彼のことかと思ひながら、ミュージカルを見守る。

【別れ 生きましょう ところ 裂けても】

そこで、メタトンは顔の部分を手で覆い、悲しそうな声で唄いあげる。……おお、中々だな。

【地下に 落ちるの】

ふと、私がメタトンから目を逸らして観客席の方を見たところで、花吹雪が降り始める。今更ながら月のセットが見えているし此処は地上だつていう設定なのかと察しな

がら、一番前にあつた観客席と並べられていたカメラからそつと目を逸らした。

【サイテーで　すごく死ぬの】

それは歌詞として台無しだろ、と心の中で突っ込んでおく。……というか、なんだ、『最低で凄く死ぬの』って。文脈可笑しくね？

【かなしー　死ぬからー】

段々と歌詞が雑になつてきたなと思ひながら、邪魔をすることなくメタトンを見守る。

【泣くわー　悲劇だから】

ふと、フリスクの頭にメタトンの手が乗る。そして少し撫でたあと、隣にいた私を見つめてくる。あれ、こんなんあつたっけ。

ゲームだった時はなかつた演出に驚きながら、私は取り敢えず見つめ返しておく。少しすると、BGMが止み、彼はカメラに体を向けて直語り出す。

「悲劇だわ。あなたがダンジョンに行かなきゃいけないなんて」
「んっ……」

待つてマジで裏声でやんの!?

メタトンから聞こえた声に思わず笑いそうになるのを堪え、顔を引き締める。静まれ私の表情筋！　笑つてる場合ちゃうねんぞ！

私は笑いを誤魔化す為にカメラ目線のメタトンの前に移動して片膝を付いて跪き、笑顔を作る。

「……いいえ、姫。あなたがそう言つて涙を流してくれるだけで、私はわたくし勇氣が出るのです」

会場に声が響くようにそう言いながらメタトンの手を取れば、一瞬ピクリと手が跳ねる。唐突に始まった筈のミュージカルに対応して合わせることに驚いたのだろうと見当をつけ、人間形態だったら絶対に驚いた顔をしているのだらうなと思ひながら、私は演技を続ける。

「それに、私が貴女のお父上の嫌試からせ継を何度受けたと思つていますか？ これぐらいならば、貴女の為を思えば、どうつて事はありませんよ」

「あ、ああ……王子……なんて頼もしいのでしよう！」

暫く混乱したようにパネルを赤と黄色に明滅させていたメタトンがハツとしたように私の手を振り払い、離れていく。私も笑顔を浮かべたままフリスクの傍に戻る。

……なんでこんな事したのかという、メタトンの動揺させるための意趣返しだ。散々今までメタトンのターンだったんだし、こつちが好き勝手やつても文句はないだろうと考えたからね。そして、メタトンに理不尽にキレてしまつて番組を台無しにしてしまったお詫びでもある。普通に何も知らずに見れば私の怒りは正統であるように見え

るけど、裏の事情を知ってればメタトンに怒りをぶつけるのはお門違いと言える。まあ、あとでちゃんと謝るけど、許してもらえらるとは思っていないし、少しでも償えれば、と思つた次第だ。

そんな事を思いながら私は然り気無くフリスクの肩を抱いておく。

「じゃあねー！」

そしてメタトンが何処からか取り出したリモコンのボタンを押すと、ガタンという音を立てて、足場が抜ける。一瞬の浮遊感の後、直ぐに重力に引つ張られ、私達は落下を始めた。

「わあああああ?!?!」

叫ぶフリスクを直ぐに抱き締め、着地に備える。暫く落ち続けると、地面が見えてきた。着地する体勢を整え、衝撃に備える。

ぼすっ

「わっ、おっと」

地面に着地した瞬間、想像していたよりずっと柔らかい感触に受け止められ、思わず体勢を崩し、座り込む。驚きながらフリスクをそつと離し、手で下にあるものは何なのかを確かめる。

……布っぽい感触……クッションか、これ。ゲームだった時は地面に直に着地して大

丈夫だったのか不安だったけど、クッションが敷いてあったのか。

「お姉ちゃん大丈夫!？」

「ん、平気だよ。落下地点にクッションが敷いてあつて助かった」

まあこんな所で死なれてもメタトンも困るか、と結論付け、少し震えているフリスクの肩を撫でながら笑顔を返す。そして手を引っ張つて立ち上がらせ、クッションの上から降りる。

「なんてこと! どうしたらいいの!」

クッションから降りるや否や、メタトンが飛んで追い付いてくる。そしてそのまま裏声で話す所為で笑いそうになるのを何とか堪え、見上げておく。

「わたしの愛しのお方がダンジョンにぶち込まれてしまったわ」

「まあ、『ぶち込まれる』なんてお言葉が汚いですわよメタトンさん」

「ぶふっ」

ボソツとメタトンには聞こえないくらいの声のお嬢様言葉で呟くと、フリスクが唐突に吹き出す。どうやらばつちり聞こえてたらしいなと思いつつ、メタトンの言葉を待つ。

「非道い仕掛けのダンジョンの中で、きつとあの方は惨たらしく死んでしまうのね!」

「いや四、五割くらい仕組んだのお前だけどね」

これまた小さい声でツツコミを入れながら、私は周りを見渡す。さつきまでぬるめの温度だったのに急に体感温度が上がった気がする。結構な高度落ちたのかな、これは。

どうしようか、と思いながら額に噴き出した汗を拭い、ベルトコンベアの先に見覚えのあるパネルが敷き詰められた物がある事に気付く。あ、あれって……

「ああ神様！ 見るも恐ろしいカラータイルの迷路だわ！」

「見りゃあわかる」

思わず某奇妙な冒険のレロレロの人みたいな返しをメタトンにしながら、私はどれが最短ルートだったか思い出していく。色が変わる所為で原作通りのルートで行けるか、バタフライエフェクトで全然違うルートになってるか分からないから厄介だけど、参考ぐらいにはなる筈だ。

「どのカラータイルにも意地悪な機能が備わっているのよ」

悲劇の姫君（という設定の）メタ姫が自分だけ安全地帯の空中で解説するって中々シニールだなど思いながら、説明に耳を傾ける。

「例えば、緑のタイルはモンスターと戦闘しなくちゃいけない警報を出して。赤いタイル……あら、すこしお待ちになって。だいぶ前にこのパズルを見たことありません？」

「え？ ……あつ！」

説明を中断して放たれたメタトンの一言に、思い当たる場所を思い出したのか、フリ

スクは目を丸くして声をあげる。

「お姉ちゃん、これ、パピルスの……!!」

「うん、そうだね」

驚いたように私に言うフリスクに頷き、フリスクを直ぐに抱えられるよう少し後ろに下がったおく。

「そうだったわ。それならもうルールはご存知ですよね？」

「ああ、知ってるよ」

「ステキ……説明する手間が省けましたわ！」

さつきまでやっていた王子様の演技を取り去り、素で対応する。流石にもういいだろ。

「……それに、急いだ方がよろしくてよ。もし30秒以内に抜けられなかったら……」

メタトンが言葉を切った瞬間、背後でボシュツという炎が灯る音がした。

「このジェットの炎であなたは真っ黒焦げになってしまおうの!!」

「……文字通りファイヤーフォールってか。ハッ、笑えないね」

後ろを振り返って見れば、先程までは無かった筈の吹き出す炎の壁が出現していた。メタトンの高笑いが響く中、これがじりじりと迫ってくる図を想像し、ゾツとする。

「かわいそうなあなた！ 悲しくって笑いが止まらないわ！」

「やだそれ何てサイコパス？」

こわいわー、と茶化すように付け加え、私はフリスクの手を取る。そろそろ始まる筈だ。

「頑張つて、ダーリン！」

はは、嫌味かよ。

そんな事を思いながら、直ぐ様フリスクを引っ張つて抱えあげ、ベルトコンベアの上を走り出す。

「ごんのっ……」

耳障りなメタトンの歌を聞きながら遅くなるベルトコンベアの上を走り、その間即座にパネルに目を通す。記憶の中にある攻略法と照らし合わせ、差異一つも見当たらない事を確認し、ベルトコンベアが終わった瞬間記憶の中のルートを全速力で辿っていく。

ピンク。黄緑。オレンジ。紫。青。ピンク。青。青。ピンク。黄緑。オレンジ。紫。オレンジ。ピンク。紫。青。青。青。ピンク。オレンジ。ピンク。オレンジ。黄緑。紫。オレンジ。青……

青のパネルに踏み出そうとした瞬間、水面から鋭い牙を光らせたピラニアが顔を出す。すかさず踏み出そうとしていた足を引っ込め、迂回する。

ピンク。ピンク。紫。青。ピンク。オレンジ。紫。青。ピンク。紫。青。黄緑。オ

レンジ。ピンク。ピンク。紫。黄色。

ビリッと微弱な電気が踏み出した足裏から走り、思わず顔を顰めてから直ぐ様踵を返し、ピンクのパネルまで戻る。

青。紫。オレンジ。紫。オレンジ。紫。紫。ピンク。青。黄緑一色。

安全地帯まで来た所で、残り時間などを考えて全力で走る。黄緑のカラータイル地帯を抜け、地面に立つと、パンパカパーン、というファンファーレが響いた。

「おめでどう！ 見事パズルをくぐり抜けたね!!」

パチパチと空中で拍手をするメタトンを一瞬睨みそうになりながら、フリスクの顔を覗き込む。

「急に抱き上げてごめん。さつき電流が流れるパネルにやむを得ず突っ込んだんだけど大丈夫だった？」

「えっ、うん、ぼくはなんともないけど……」

不安そうな顔で私は大丈夫なのかと暗に訊いているフリスクから気付いていないフリをして目を逸らし、メタトンを見上げる。

「ほら、クリアしたんだからとつとこの壁消してよ」

「そうですね！ さあ、お待ちかね、火を消しましょう！」

メタトンが一言そう言ってパチンと指を鳴らせば、背後と目の前にあつた炎の壁が

元々無かったかの様にかき消えた。

「よし！ 火を！ 止めて！」

メタトンが約束通り炎の壁を消した事に安堵したのか、フリスクがほつと息を吐き、くいくいとパーカーを引つ張つて降ろすように催促してくる。それを無視して、私は逆にフリスクを抱える力を強くする。

「……しかしこんなことわざもありますよ？ 『火から逃れてフライパンに飛び込む』。」

「…………『一難去つてまた一難』って言いたいのかい、君は」

というか、それをちゃんと訳するなら『フライパンから逃れて火に飛び込む』だろうに、と思いつながら、暗喩されている日本語的な意味を言えば、フリスクの体が強張る。

「その通りです、ダーリン！」

私の言葉に肯定を返し、メタトンは声高々に告げる。

「たとえ火から逃れられても…………この焼けつくような金属の体に耐えられるかな！」

…………ああ、成る程。攻撃としては火が先だからフライパンと火を入れ換えたのね。

呑気にそんな事を思つてから、今度こそメタトンを睨み付ける。ここでバタフライエフェクトが起こつてガチ戦闘になりにでもしたら洒落にならない。

「さあ覚悟して『プルルル…………』……………」

メタトンの台詞が途中で遮られ、フリスクから携帯の着信音が鳴り響く。咄嗟にフリ

スクは電話に出ると、直ぐに携帯を弄ってボタンを押した。

『見てて!! 私があなたを守る!!』

スピーカーモードにしたらしく、携帯からアルフィスの声流れ出す。

『火炎放射器は、停止したから!!』

場違いな声がある場に響き、暫く何とも言えない沈黙が流れる。

『……………あれ?』

その空気を可笑しく感じたのか、アルフィスが困惑したような声を出した。

「……………人間はパズルを突破したよ。だからもう火は切った。それに今から人間と戦うつもりだったんですけど」

最高に盛り上がる筈だったであろうシーンを邪魔されたからか、メタトンは不機嫌そうな声でアルフィスに言い返す。

『えッ、え??? あ、あのパズルを?』

やはりあのパズルの製作者としても驚く所があったのか、アルフィスは驚きと困惑の混じった声でメタトンに聞き返す。……って言ってもまあ、私はズルしたただけだから、解いたとは言えないんだけどね。

『え、あー……………すごい! 遂にメタトンを追い詰めた!』

気まずい雰囲気はどうにかしようとしたのか、棒読みの台詞でそんな言葉が聞こえて

くる。

「追い詰めたって？ は！ どちらにしても博士は火を止めるだろうと思ってたよ」

何処か小馬鹿にしたような、冷徹な声でメタトンはアルフィスにそう言った。ぐつ、と息が詰まったような声が電話越しに聞こえた。

「……………それで、何をしようとしてたっけ？」

「……………私達とバトルするんじゃないかったの？」

グツダグダになってしまった空気の中、空気が台無しになった所為で当初の目的を見失ったらしいメタトンにツツコミを入れれば、メタトンはぼんと手を叩く。

「オーウ イエス！ 君を処刑するところだったね！」

そう言うと、メタトンは私達の直ぐ傍に着地し、ドレスを脱ぎ捨てて襲いかかって来た。

**M e t t a t o n*が襲いかかってきた
a t t a c k s!

世界が白黒に切り替わったと同時に、戦闘開始を告げるアナウンスが流れる。彼に攻撃が効かない事を知っているフリスクは、ターンを進める為に『M E R C Y』を押しした。

『これで終わりだよダーリン！ お別れの時間だね！』

ターンがメタトンに回り、そうメタトンが言った瞬間、携帯の着信音がまた鳴り響く。

『それが君の電話かい？ 出た方がいいと思うよ！』

メタトンの言葉に甘えてフリスクが電話に出ると、会話が始まる。

『あ、あの！ まずい事態だけど、でも心配しなくてもいいわ!!』

フリスクは気を効かせて私にも聞こえるようにスピーカーモードにしてくれたらしく、携帯からアルフィスの声が聞こえる。

「何か策でもあるのかい、アルフィス」

『さっ最後の機能があなたの携帯にインストールされてるの……!! その黄色いボタンが見える……? この携帯の「[アクト]」メニューに行つてそのボタンを押すのよ!!!』

* Your phone's [ACT] menu is glowing.

アナウンストとアルフィスの声で携帯を見れば、確かに『ACT』と書いてあるボタンが黄色く光っていた。アルフィスの指示に従つてフリスクがボタンを押す。

* You press the yellow button.

* The phone is resonating with Mettaton's pr

……!

『これで終わりだよダーリン！ お別れの時間だね!』

その瞬間、フリスクの真つ赤なソウルがぐるんと上下反転し、モンスターのソウルと同じ形をした黄色のソウルになる。これ、イエローアタックか

『「ゼット」を押して!!』

アルフィスの指示に従い、フリスクが携帯をメタトンに向けてボタンを押した。
バンツ

爆弾解除の際にも見たエネルギー弾が、今度は銃弾のような形になってメタトンに発射される。ギイン、という金属の甲高い音が響く。

『オーウー！ オーウーウ!! やられちゃったー!!』

本当はそこまで効いていないのだろうが、メタトンは弾が当たった場所を手で押さえ、結構なダメージが入ったフリをして、大袈裟にそう言った。

『まさか君がこんなに強いなんて、うんたらかんたら』

口でうんたらかんたらって言ったぞ、おい。

アルフィスの茶番劇に付き合わされてうんざりしてるのか、と思いながら、次の行動を待つ。

『まあいいやー』

それだけ最後にそう言って、メタトンは退散していった。

プルルルル……………

世界に色が戻ってきたと同時に、また携帯の着信音が響く。

『……………!……………』

そっとフリスクを地面に降ろすと、直ぐに電話に出て、話を始める。そして、口をパクパクと動かした。

『……………？ ……………！ ……………』

アルフィスが自虐的な事でも言ったのか、フリスクは驚いたような顔をしてからブンブンと首を横に振った。そしてまた口を動かす。そんなことはない、とでも言ったんだろうか。

『……………、……………？』

アルフィスから話を持ちかけられたのか、フリスクは今度は首を縦に振った。その様子に、アルフィスの秘密に関わる話をされるのかと思ひ至る。

『……………』

じつと、フリスクは電話越しで始まったアルフィスの話——いや、この場合は懺悔も入ってるか。懺悔に耳を傾ける。……私の妹はシスターかなんかか？

若干の苛立ちのような物が湧き出しつつ、話が終わるのを待つ。暫くすると、プチリという音を立てて電話を切った。

「終わったよ」

「ん、結構長話してたけど、どんな話だったの？」

フリスクに笑顔で話を振ってみれば、フリスクは少し口を濁らせ、んー、と言った。

「えーつと、あのね、ちよつと言ひ辛い部分があるから其処は飛ばしちゃうけど……『有り難う』って言われたよ」

「へえ。『有り難う』ねえ」

ふーん、と興味を無くしたように言つておく。……確か、『私に助けさせてくれてありがとう』だったか。自分で仕組んだものなのに皮肉なもんだと前世で思つた所為か、どうにも良く覚えてゐる。

「……電話も終わつたし、これ以上此処に留まつても仕方ないし、行こうか」

「うん、そうだね。行こう」

電話をポケットにしまい込んだフリスクの手を取つて、結構急な階段を上り始めた。

92. Hotland探索⑩

〔Lily〕

フリスクの手を引いて階段を上つていくと、ウォーターフォールで会ったナイスクリムさんと先程出会ったロイヤルガード巡回組が居た。あ、アイス持つてら。デート中だったか？

「あれ、あの人達つてさっきの……」

フリスクも彼らに気付いたらしく、私の手を離して二人の所に駆けていく。

「おお、やあ」

フリスクが話しかけると、二人も気付いたのか、二人で話すのをやめて、兎耳の方向の彼が片手をあげる。フリスクが自分の事を指差して首を傾げると、兎耳の彼はあー、とか、うーん、という苦い声をあげた。

「えーと、俺達、お前を殺すのはまた今度にしたいんだ。て訳で、アンダーン様にはこのこと内緒だぞ、いいな？」

「ああ、うん。見るからにデート中っぽいもんね」

「で、デー……!? か、揶揄うな！」

「あははは、冗談だよ！ 分かった、内緒にしとく」

フリスクの隣に立って茶化してみれば、予想以上に上擦った声でそう言われた。そのままフリスクと話し始めた彼から離れ、私は無口な方の彼の傍に寄る。

「さつきは戦闘中だったとはいえ蹴ったりしてごめん。……お幸せにね」

「……ああ」

そつと耳打ちして彼から離れ、フリスクの肩を叩く。

「これ以上邪魔するのも無粋だし、行こうよ」

「そうだね。………」

「ああ、またな！」

フリスクが手を振りながら口を動かせば、彼らは手を振り返してくれる。それを見てから、今度はナイスクリームさんに話しかける。

「やつほー、さつきぶり。またお店移動したの？」

「やあ！ また会ったね！」

話しかけると、彼はさつきまでとは全く違う爽やかな笑顔で出迎えてくれる。うお、なんでか光が見える。まぶしっ

「嬉しそうだね、アイスが売れたの？」

「そうなんだ!! ビジネスは大成功さ！ そのお二方の男性がアイスを買って占めてく

れたんだ！ みーんな売り切れ！」

「そうなの、良かったね」

嬉しそうに話す彼に思わず笑顔になりながら、私は相槌を打っておく。そして、ふと何かに気付いた彼はハツとして口を抑え、申し訳なきように眉と耳を下げた。可愛いな。

「……ゴメンネ」

「いや、いいよ。全部売り切ったんだろ？ 喜ばしいことじゃん。そうやって君が笑顔でいてくれるなら私は嬉しいよ」

彼が言わんとしている事を汲み取り、言葉を返す。アイスがない事にちよつとしよんぼりした様子のフリスクが背を向けると、慌てて彼はフリスクを引き留める。

「あ、待って！ まだ君にあげたいものがあるんだ！」

「？」

フリスクが振り返ると、彼は指で自分の口角をあげ、にっこりと笑顔を作る。

「ビッグ・スマイル！ なんていい日だ！」

「……そう、良かったね」

最後まで爽やかだな、と思いながら、私は彼に手を振って、脇道に進んだフリスクについていく。

「あ、こいつ、さっきの……」

道を進んでいくと、先程まで居たミュージカルの会場に出る。ここに繋がってたのか、と思いつながら、辺りをざっと見渡してから何もないと判断して来た道を引き返し、逆の道に進む。

「あれ、あの子……」

逆の道を進むと、『R3』と大きく書かれたエレベーターが見えた。フリスクはエレベーターの前辺りに佇む小さい炎の小人君に気付いたのか、近付いていく。それを見ながら、私は脳内マップに此処にエレベーターがある事を書き加え、直ぐに引き返せるようその場に留まってフリスクを待つ。

「な、なに!? 覚えてるのか!? こっちもアツサリ負けるなんてどういふことなんだああああ!」

うるさっ

突如辺りに響いた少年らしい驚いた声に顔を顰め、フリスクは『覚えてる』と彼に返したのかと見当をつける。とかいいつから勝負してたんだよと切実にツッコミたい。

愕然とした顔の彼との会話を切り上げたフリスクが戻ってきたのを見計らい、直ぐに元の道に引き返す。引き返した所で、今度は真っ直ぐに階段に向かい、その階段を上らないでも見えるホテルを見上げる。

にしても現実で見るとかなりデカいな。ざっと見た感じ屋上のフェンスとか見えな
いし、地盤を支える為の支柱としても使われてるのか？

「お姉ちゃん？ どうかした？」

何段か階段を上がった所で私が階段を上がっていないことに気付いたらしいフリス
クが振り返って訊いてくる。何でもないよ、とだけ返し、私も長い階段に若干重い足を
動かして足を掛けた。

結構長かった階段を上り切り、ホテルの前に辿り着く。足を休めることも兼ねて辺り
を見渡せば、何故か道に落ちている紙と、サンズが植え込みの前で立っているのが伺え
た。……もう此処まで来ちゃったのか。早いなあ。

そんな事を思っていると、サンズと目が合う。よう、と片手をあげる彼に私も手を上
げて返しておく。

「やあ、サンズ。こんな所で会うなんてね」

「ああ、ちよつとお前さん達に用があつてな」

「私達に？」

サンズに近付いて話し掛けてみれば、そんな返答が返ってくる。……ああ、そう言え
ば此処でもあつたな、デートイベント。

「お姉ちゃん、こつちお店があるんだって。行ってみない？」
「あ、そうなの？」

そんな事を思っていると、紙を読んだらしいフリスクに手を引つ張られてそう言われる。どうしようかという目線をサンズに送れば、片手で先を促すジエスチャーをされる。先に行つてこいという意味だろうと解釈し、それに甘えて、先に店に行くことになる。

「そうだね、行こうか。ごめんねサンズ、ちよつと待つてて」
「おう」

私の返答に嬉しそうに顔を綻ばさせたフリスクに手を引かれて路地裏に入れば、話し込んでいたワニのモンスターと猫のモンスターがいる事に気付く。

「あのー、すみません。ここの奥に店ってありますか？」

二人に声をかけると、二人は私達を見て目を丸くし、顔を見合わせた。
そして、にーっこりと笑顔を作つて近付いてきた。

……………逃がさないと言わんばかりに同時に腕を掴んで。

「ねえ！ 見ていきなさい！」

「そうよ、隅まで見るのよ！」

ここうして私達は二人に出迎えられた……いや、『出迎えられた』というより『引き摺り

込まれた』の方が正しいな。

内心そう訂正しながら、彼女達に引つ張られるままモノが溢れて山積みになっている最早ゴミ山の前まで連れて来られる。

「あはは………それで、なんか良いものありますか？」

「良いもの？ 勿論あるわよ！」

そう言うのと、猫のモンスターのの方が山の中から引つ張り出した包みを地面に雑に置き、バサバサと地面に広げる。

「此処にあるものぜんぶ買っちゃって！」

「流石にそれは無理があるかなあ……」

仮にも商品なんだから雑に扱うなよ、と思いながら、商品に目を通す。使えそうにないものと思えそうなものに品定めしていく中、きらりと一瞬光に反射した物に目が留まった。

「……………これ…………」

思わず雑多に広げられた物を掻き分け、埋もれたそれを手に取り、眺める。ずっしりとした重さの、銃。そして、冒険家のような茶色のカウボーイハット。フリスクと私を除いて、此処に落ちてきた最後の人間のものだった。

「……………その二つ、気になるの？」

今時見かけない珍しいリボルバー型の薬莖を開けて、中身が空っぽな事を確かめると、フリスクが声をかけてくる。

「……うん、まあね。これ、あからさまにモンスターが持つてるようなモノじゃないし」

「……今まで落ちてきた子のかもってこと？」

「うん」

暫くじつと私の手の中にある銃とハットをじつと見つめたフリスクは、貸して、と一言言いつて私に手を差し出す。その手に銃とハットを置くと、フリスクはまたじつとそれらを見つめてから、ポケットを探り、お金を出すと、彼女達に向けて差し出した。

「えっ、ちよつと」

「ベティー！ 私達お金持ちだわ！」

興奮した様子でフリスクからお金を受け取ったブラッティー（だったつけ）はそのままポケットにお金を突っ込んだ。……ああ、こうなっちゃ、もう返せないな。

「はいー」

「………いいの？」

めでたく私達のものになった銃とハットを私に差し出し、フリスクはにっこり微笑んだ。それに戸惑いながら二つを受け取って訊けば、フリスクはその笑顔のまま頷く。

「うん、それ格好いいし、ほくも欲しかったからね！」

「そっか……有り難う」

私に気を遣ってくれたフリスクの優しさに感謝しながら、頭を撫でておく。すると、フリスクはまた嬉しそうに笑ってから、店長の彼女達と話し出す。

その会話を聞き流しながらリュックを降ろし、銃とハットをリュックの中にしまっておく。ハットが潰れないようにしてしまうのに案外苦戦し、やっとしまつてリュックを背負い直した時には、フリスクは彼女達と話し終わっていた。

「あ、待たせちゃった？ ごめん」

「んーん、大丈夫だよ！ いこう」

首を横に振ったフリスクに手を引かれ、彼女達に見送られながら路地裏から出る。そうして先程のホテル前まで戻ってくると、植え込みに寄り掛かるようにして転た寝しているサンスの前まで移動する。

「サンス」

「ん、ああ……」

「お待たせ。で、どうしたの？」

一声掛けると、サンスは直ぐに目を覚まし、此方を見た。私が無なのか訊ねれば、サンスは自分の用件を話す。

「なあ、コアに行くんだって？」

「そうだけど……」

「その前に俺とディナーなんてどうだ？」

サンズの提案に、私ではなくフリスクが反応し、嬉しそうに頷く。サンズがまたご飯に誘ってくれる程仲良くなれてると思ってるんだろうな、とフリスクの思考に大体の見当をつけながら、私は言葉を濁しておく。

「あー………私は……」

「おっと、そうだ、忘れてた。リリー、お前さんにはちよつと個別で用があるんだ。あまり乗り気じゃないならディナーは来なくてもいいが、待つてくれないか？」

断ろうとした瞬間他でもないサンズの手で然り気無く先手を打たれて逃げ道が無くなる。

………私から『話』を提案する気だったしどっちにしろ逃げる気は無かったが、本当に中々策士だな、コイツ。

「ん、そういうことならいいよ」

「お姉ちゃん、また食べに行かないの？」

驚いたような顔でフリスクがそう訊いてくる。

「あー、お腹が空いてないんだよ、私。だからフリスクだけで行っておいで」

「……………そう？」

ならいいんだけど、と言いなながらフリスクは私から手を離れた。

「いいな、奢ってくれるんだろ」

「は？」

「冗談だ」

サンズの一言に思わず真顔で聞き返せば、直ぐに取り消しの言葉が返ってくる。

「こつちだ。近道を使うぞ」

サンズに連れられて奥の道に入っていったフリスクに手を振り、姿が見えなくなるまで見送る。シュン、という音がして二人の姿がかき消えた後、振っていた手を下ろして私は先程のベティーちゃん達の店に戻る。

「あの一、すみません」

「あれ、さっきの」

どうかしたの、と訊いてくる彼女達に、私は笑顔を作った。

「ちよつと、欲しいものがあるんです」

93. 約束（ノロイ）

【S a n s】

Shortcutを発動させ、次の瞬間にはMTTホテル内部のレストランにつく。予約を取っておいた席にまで人間を案内する。

「ほらよ」

「……有り難う」

Lilyが『妹』と言っていたことからコイツが女だということを察していたのを思い出し、椅子を引いてエスコートしておく。

俺が引いた椅子に少し緊張したような面持ちで人間は座ると、キョロキョロと辺りを見渡す。こういう所あまり来たことがないのか、となんとなく思った。

「こういう所は初めてか？」

「うん……ファミリールレストランとかなら食べに行つたことはあつただけぞ」

「こういうちゃんとした所はない、と言つた人間に、やつぱりかと思う。」

「じゃ、話をしようか」

「……………うん」

顔と顔を突き合わせて、人間と話し始める。

「それで……お前さんの旅路ももうすぐ終わりだな」

「うん、そうだね」

AlphysがもうすぐCOREだって言ってたし、と付け加えながら、人間は頷く。

「心底うちに帰りたいんだろ」

「うん、まあ」

「ああ。その気持ちよく分かるぜ」

何事も無いように頷いた人間に同意の言葉を投げ掛け、俺は次の言葉を投げ掛ける。

「けどな………時には与えられた運命を受け入れるのもいいもんだ」

「なんで？」

直ぐに切り返された返しに、俺は無い目を剥く。

『なんで』。

コイツにだけは言われたくなかった言葉だった。

「……この地下世界には食べ物も、飲み物も、友達も揃ってる………これからお前さんがやろうとしていることは………そんなに価値のあることか？」

コイツに非はないかと思いつつもそれでも鎌首をもたげる憎悪を抑え付けて蓋をし、言葉を続ける。すると人間は、視線を机に落として考えるような素振りをして考え込

む。

少ししてから、自分が言った言葉にハツとした。何を言っているんだ、俺は？

「おっと、今のは忘れてくれ。俺はお前のこと応援してるからさ」

「……そう？ 分かった」

顔をあげて、不思議そうな顔をしながらも、人間は頷く。

「……なあ。一つ話をさせてくれ」

「どうぞ」

特に人間から話すことはないらしく、沈黙が流れたのを切り、俺が話すべきことの話を始め。

「俺は snowdin の森で、見張りの仕事をしてるだろ？」

「うん」

「ただ座って人間を待つんだ。退屈で仕方ない」

「……まあ、だろうね」

人間が落ちてくるのなんて稀だろうし、と人間は俺の言葉に理解を示す。

「ところが幸運にも、森の奥の方に……カギのかかった巨大な扉があった」

話に出てきた『扉』に心当たりがあったのか、ピクリ、人間が体を強張らせる。

「ノックノック・ジョークの練習にピッタリな扉だった」

わけだ」

「あ、練習してたんだ……?」

「まあな。ちなみにその扉を見つけるまでは家でやってたんだが、Papyrusにどやされてな」

「ああ……うん、何となく目に浮かぶよ」

Papyrusから隠れた際の剣幕を思い出したのか、納得したように人間は曖昧な笑顔を浮かべて頷く。

「で、ある日のこと、いつものようにドアをノックした。ドアを叩いてこう言ったのさ。

『トントントン』

脱線した話を戻し、扉の向こうの奥さんに会った日の事を細かく思い出しながら続きを話す。

「すると突然、扉の反対側から……女性の声が聞こえたんだ」

「えっ」

思わずといった様子で目を見開く人間の顔を見ながら、話を続ける。

「『そこにいるのは誰?』……で、俺は当然、こう答える。『ステーキだよ』『どんなステーキ?』『ステーキなコメディアンさ』」

声を変えてなるべく婦人に声が似るようにしながら、彼女が言った言葉を一時一句

間違えずに言う。

「そしたら彼女は大笑いしたのさ。まるでこんな最高のジョークは百年ぶりつて様子で
さ」

……そう。『百年』だ。

あの日の彼女の弾けるような笑い声を思い出しながら、そんな事を思う。

俺が『見た』記憶の中では、確かご婦人——Torielは、Asgore王の元嫁さんだった。Asgoreの統治は人間との戦争が起こつてからずっと続いている。その間にあの優しい奥さんを怒らせるような何かがあつて、袂を別つてTorielは森の奥の古い遺跡に閉じ籠つた。……落ちてくる人間を彼から守るために、だ。

袂を別つまでそこまで時間はかからなかった筈だから、正確に言えば百年とちよつとになるわけだが……だが、それでも、正に『百年』だ。人間が落ちてくるのだから、不定期でいつ落ちてくるのか分からないのに、その間、あの優しいモンスターはずつと独りで、あの扉の奥で待っていた。

「だから俺は扉に通つて、彼女を笑わせ続けたんだ。……彼女は最高の聞き手だったよ」

まだあの時は『見ていなかた』俺は、あんなに大笑いする彼女の孤独を紛らわせる為に通い続けたんだっけな、と当時の自分の心情を思い出す。流石に一番最初に会つた時のような大笑いはしてくれなかったが、声だけでも分かるほど、彼女は楽しそうに

笑ってくれたのをよく覚えてる。

「これを何度も繰り返していたら、今度は彼女がノックして言った……『トントン!』俺は『そこにいるのは誰?』と聞く。『おばさんよ!』」

一生懸命考えてくれたのだらう彼女のジョークを思い出しながら、話す。

「『どのお馬さん?』『まあ、あなたって乗馬もできるのね!!』……わお。言うまでもないが、彼女は最高だったね。こうして何時間もジョークを言い合ったのさ」

彼女のあるジョークがツボに入って笑い転げたこともあったことも思い出す。

「やがて、お別れの時間がやってきた。お休み前の読み聞かせタイムがないと P a p y r u s が怒るからな」

俺の話に聞き入って無言で俺を見つめてくる人間の目線から目を逸らしそうになるのをぐっと堪え、続きを話す。

「彼女はまた来てくれと言った。勿論俺は了承した。だから俺は何度も何度も行った。その繰り返しだ」

ご婦人がジョークをあんなに楽しそうに聞いてくれるのが嬉しかったということもあるからな、と口に出さず呑み込み、話す。

「他愛のないジョークを扉越しに言う。最高だったね」

「……そうだったんだ」

「ああ」

相槌を打った人間に短く返事を返し、俺は一旦口を閉ざす。

「……ある日、彼女がいつもほど笑わないことに気付いた。何があつたのかつて俺は聞いたんだ」

……そして、俺は彼女との約束の話を切り出す。

「そしたら彼女は奇妙なことを言い出した。『もし人間がこの扉を通つてやつてくるこゝとがあつたら……約束してくれないかしら?』」

それまで聞いたことの無かつた、後悔と深い哀しみの感情の籠つた声で、彼女は言つていた。

『面倒を見てあげて、守つてあげて、お願い』……ああ、約束なんて大嫌いなんだよ。そのうえ名前さえ分らない女性となんて。でも……」

まるで『自分では守れないから』と言外に自分を責めるように言われた言葉に、俺は、
「下らないジョークを愛する彼女が……頼んできたら『No』とは言えないだろ?」

——そんなあのモンスターを、コイツは……

この人間はアイツとは違つて分かつている筈なのにまた湧き出てくる憎悪と軽蔑が溢れてくるのを押し留める。

「……俺が何を言おうとしてるか分かるか?」

押し留めながら人間に問いをかけると、人間は申し訳なさそうな顔をして首を横に振る。

「この約束がなかったらどうなつてたと思う？ ……お前……」

——…今頃そこで死んでたぜ

俺が吐き捨てるように言つた本心の一言で、俺達の間には漂う空気が冷たくなつたのを感じる。

「……なあ、ひきつった顔すんなよ、お前さん。これもただの冗談さ。それに……今まで俺もいい感じに手助けしてきただろ？ ちょっと振り返つてみるよ。たつたの一度も死んでないじゃないか」

俺の言葉に顔を強張らせた人間に声をかけると、人間はきよんとしてから、じつと俺を見る。

「手助けの件はちよつと置いておくとして……『冗談さ』って、嘘でしょ、それ」

「……あ？」

そして、良かれと思つて言つたフォローが嘘であることを見抜かれた。

「……うん、だよ。その約束が無かつたら、ぼくとお姉ちゃん、本当に死んでたんだらうね」

その方が納得がいくよ、と目の前の人間は眉をさげながら笑う。

「だっておかしいもん。あの遺跡を出てから今まで会ったモンスターは皆、ぼくとお姉ちゃんのSoulを狙ってた。なのに、君だけはずっと、ぼくらを逃がしてくれた。まるでそうしなきゃいけない理由でもあるみたいにな」

真っ直ぐに俺を見ながらそう言った人間の言葉に、今度は俺が無い筈の目を丸くした。

「……………案外鋭いな、お前さん」

「……………うん、だつて、お姉ちゃんがそうなんだから」

驚嘆の言葉を返すと、悲しそうな顔で人間は微笑んだ。……………どういう意味だ？

「……………お姉ちゃん、ぼくに『何でもない』とか『冗談だよ』つて言つて、誤魔化すことが多いから」

顔に思つていたことが出ていたのか、少し顔を伏せて人間は言葉が続ける。

「……………話は変わるけど、確かに、ぼくは本当に唯の一度も死んでない。それどころか、傷一つないよ。でもそれは、お姉ちゃんが自分が受ける傷どころかぼくが受ける傷さえも全部引き取つてるから。……………ぼくはただ、守られ続けてるだけだよ」

暗い顔をしてそう言い切つた人間に、俺は違和感を覚える。

「……………ちよつと待て。『全部』？」

「うん。全部。ママの攻撃も、Papyrusの攻撃も、Undyneの攻撃も、Met

tatonの攻撃も。全部」

迷わず返答にされた答えに、思わず無い背筋が寒くなる。

Snowdinで問答した時、俺がGaster Blasterを構えていたのに、Lilyは笑顔を崩さないまま見ていた所を見て異常だとは思っていたが、ここまでだったのかと愕然とし、ゾツとする。

「……………なあ、一つ訊いてもいいか」

「なあに」

未だに悲しそうな顔をしながら顔をあげた人間に、俺は自分の話を一旦切り上げて、胸の中でずつと燻っていた事を訊く。訊くならLilyが居ない今だろうと思ったこともあるが、流石にもうコイツらの歪な関係から目が逸らせないと思ったからだ。

「……………お前さん、姉貴が傷付くのが嫌なんだろう？ だったら、何故止めない」

俺の質問に、目の前の人間は顔を歪める。

「……………正直に言つて。俺から見ても、端から見てもお前さん達の姿勢は異常だ。お互いボロボロになって助け合ってるならまだしも、一方だけが凄くボロボロで、もう一方は無傷……………こんなにおかしいことがあるか？

なあ、教えてくれよ。どうしてなんだ？」

俺の言葉に、また人間は顔を伏せる。そして、小さな声で、ボソリと何かを言った。

「……………？ すまん、なんて？」

「……………約束、しちやったから」

俺が思わず聞き返せば、少し声を大きくして、人間は顔を伏せたままそう言った。

「まあ、どちらかと言えばお姉ちゃん、『お願い』なんだけどね……聞く？」

哀しげな顔を崩さず、人間がそう訊いてくる。踏み込むべきか悩んだが、俺は、

「……………頼む」

アイツを知る為に、踏み込むことを選んだ。

「……………ぼくたちね、もうずっと前からお母さんとお父さんがいないんだ」

ぼつり、ぼつりと、その『約束』するまでに至るであろう経緯を、人間は語り出す。

「交通事故で、いなくなっちゃってね。それで、今は孤児院にいるんだ」

……………両親を無くした。

まだ十代かそこらの子供に、背負わせるべきもんじやないだろと思いつながら、ふと気

付く。——コイツらの親戚は、どうしてコイツらを引き取らなかつた？

「……………お父さん達を天国に送り出してくれる時には、沢山の親戚の人達が来たよ」

葬式のことだろうか、と思いつながら、話を聞き続ける。

「親戚の人達は、ぼく達を引き取ろうとしなかつた。当たり前だよ、その人達にだって

家庭があつたりするんだし、あんまり会つたこともない子供を愛せる筈も無いもん。一

部の人はあんまり会ったこともないのにぼく達を慰めて、積極的に引き取ってくれようとした。……でもね、その人達が引き取ろうとしてたのは、ぼく達じゃなかったんだよ」

「……………遺産か」

「うん」

自分達ではなく、他に欲しいものと言ったら思い当たるものがそれしかなく、思わず呟けば、人間は領く。

「まあでも、本当に引き取れなくてごめんって泣きながら謝ってくれた心優しい人も中にはいたんだけどね。

……話を戻すよ。それで、その一部の積極的な人達の間で、言い争いが起きたんだ」

人間の欲深さに思わず軽蔑の念を抱きつつも、話に耳を傾ける。

「ぼく達が割り振られた部屋とは別の部屋で言い争ってたんだけど、ぼくがトイレに行ってきた帰りにそれを聞いちゃってね。『あたしが』、『おれが』って大きな声で言い争ってるのを聞いて、壁を挟んで向こう側にいる人達が『ヒト』に思えないほど怖くて、その場に立ち竦んじやつたんだ」

そしたらね、と人間は話を続ける。

「少ししたらぼくが帰ってくるのが遅いことを心配したお姉ちゃんが探しに来てくれたんだ。……あの時は思わず、お姉ちゃんが助けに来てくれたんだって思っちゃったよ」

……それは、そうだろう。

口には出さず、人間に同情する。

壁越しとはいえ、人間のドス黒い欲望の部分を垣間見て、自分たちが『モノ』扱いしかされてる事を知って、相手が人間に思えなかった程なんだ。そんな場面で自分の一番の愛しい人が来てくれたら……確かに、ヒーローにも見えるだろう。ましてやまだ小さかっただろうに、無理もない。

「それで、ぼくを見つけてくれたお姉ちゃんはぼくを抱き締めて、それから中から聞こえてくる大きな声を聞いて、ドアを睨み付けた。それで、ぼくに部屋に戻るように言っ、ドアの中に入ったんだ」

ドアが開いた時見えたあの人達の顔が忘れられないよ、と付け加え、人間は話を続ける。

「ぼくは言うとおりの部屋に戻って、お姉ちゃんのことを待つてたんだ。ちよつとしたらお姉ちゃんに戻ってきて、改めてぼくを抱き締めて、『怖かったよね、ユビキリしたのをごめんね』って慰めてくれた」

「ユビキリ?」

見知らぬ単語に思わず指を切ったのかと人間の手をまじまじと見てしまう。ざっと見た所、傷は一つも見当たらず、どういう意味だと頭を悩ませる。

「ああ、そつか。知らないんだっけ。えつと……ニホンって国のやり方の約束をしたんだよ」

「成る程」

ユビキリに対する補足をされ、納得する。ニホン式の約束、か……

「その約束は『甘えたいときは甘えて、辛いことがあつたら半分こ。楽しいことは二人で楽しんで2倍にしよう』っていうのだったんだけど、お姉ちゃんはその『辛いこと』にさつきの状況を当て嵌めちゃつたみたいで、声が震えてたんだ」

それで、と人間は話を続ける。

「暫くぼくを抱き締めた後、お姉ちゃんはぼくに言つたんだ。『もう君が絶対に傷付かないように、私が守るよ』って」

その言葉を紡ぎ、人間は俯き気味の顔をまた歪める。

「最初はぼくも反対したよ、駄目だよって。『ぼくを守る』ってことはその分だけお姉ちゃんも傷付くことだって何となく……わかつた、からっ……」

そこで、俺は人間の変化に気付き、ハツと息を飲む。いつの間にやら人間の目には今にも溢れんばかりの涙が溜まっていた。

「でも、でもっ！ 『せめて君が一人で歩けるように、なるまでだから。お姉ちゃんの、一生のお願い』って、泣きそうな顔で言われたら、頷くことしか、出来なくて……!!」

つうつと、遂に溢れてしまった涙が人間の頬を伝って、テーブルクロスの上に落ちる。じわ、と涙を吸った部分の色が濃くなった。

「だから、ぼくはっ、おねーちゃんを止められないんだよ」

でも、と涙を何とかしようと思を擦りながら、人間は続ける。

「でも………こんなに、止められ、ないのが辛いなら！ 堪えるのが、こんなにも辛いなら！ ……あんな約束なんて、したくなかった……ッ!!!」

そう言つて、完全に顔を覆つて泣き出してしまった人間を見ながら、俺も頭を抱える。もしかして P a p y r u s もこんな想いをしているのかとか、妹の方の感性は正常な人間のそれで良かったと思うなか、L i e y に対して『何てことをしているんだお前は』と怒鳴りたい気持ちが湧き上がってくる。

「………これだから約束は嫌いなんだ」

ボソリと、誰に言うでもなく呟く。

……『約束』は一步間違えれば『呪い』だ。下手を打てば相手も自分も雁字搦めにされるような、誰にでも出来てしまう一番簡単な『呪い』。たった今気付いたことだが、それでも、コイツら姉妹を……特に妹の方を見て、『約束』が『呪い』であると気付かせるには充分すぎた。

「……妹泣かせも大概にしろよ」

目の前の人間の堪えるような啜り泣く声が響く中、今この場にはいないLilyyに向かって、怨み言を呟く。

多分アイツは、妹がそう言われたら断れないことを知っててああ言った。妹が約束を破れないほど優しい人間だって知ったうえで、ああ言ったんだ。自分も『兄』という立場にあるからか、そんな考えに辿り着いた。

脳裏に浮かんだアイツの顔が、酷く申し訳なさそうに、悲しそうに、哀しそうに、歪んだ気がした。

94. Lily's judgement 【告白】

【Sans】

目の前の人間が泣き止むまで待ち、しゃくりあげる人間に声をかける。

「……………あー、大丈夫か」

「……………う、ん……………ごめんね、ビックリさせちゃって」

涙をシャツの袖で拭い、泣き腫らして赤くなってしまった目で目の前の人間は歪な笑顔で笑った。

「もう大丈夫だよ」

「……………そうか」

その笑顔のままの人間の言葉に甘え、俺は席を立つ。すると同時に、カップのアイスが運ばれてくる。

「お待たせ致しました、デザートのアイスです」

「そっちのやつだ」

俺が人間の方を指差してそう言えば、人間は驚いた顔をする。

「え……………いいの?」

「ああ、話に付き合わせちまったうえ、嫌な事に踏み込んで泣かせちまったからな。ほんのお詫びさ。それともバナラは嫌いだったか？」

「いや、好きだけでも。別に良かったのに……ありがとう、そういうことなら、いただきます」

コトリという音を立てて目の前に置かれたアイスのスプーンを取り、人間は口に運んだ。

「へッ……まあ、こんなところか」

今度こそ俺は席を立ち、テーブルから離れる。

「気をつけていけよ、お前さん。支えてくれる奴らがいるんだからな」

「………うん、ありがとう、Sans」

ひらりと片手をあげて人間に手を振り、少し歩いた所で、Shortcutを発動させる。

シユンツ

という音を立て、先程のホテル前まで戻ってくる。植え込みの辺りを見ると、Lilyは植え込みの煉瓦の部分に座り、暇そうに足をぶらつかせていた。

「よお」

近付きながら声をかけると、Lilyは顔をあげて俺に手を振る。

「やあ、お帰り。……あれ、妹はまた置いてかれた感じ?」

周りを見て妹の姿が見えないことに疑問を抱いたのか、呑気な顔をして訊ねてくる。「ああ、話に付き合わせちゃまったからな、アイスを奢ったんだ。もう少しすれば戻ってくるだろうよ」

「へえ、そうなんだ。有り難う、態々すまない」

へらつと笑ってそう言ったL i e yに、少し腹が立つ。そのまま傍に行つた俺は、左足の脛を軽く蹴り飛ばす。

「いたつ! ちよ、何?」

「……いや、何でもない」

「なんやねん……」

蹴られ損だわー、と怒る訳でもなく蹴られた箇所を擦り、大袈裟に痛がつて茶化すL i e yにまた苛立ちが鎌首をもたげる。兄弟に対して散々隠し事やら嘘を吐いたりしている俺にコイツに対して憤る資格は無いと分かつてはいるが、そう思わずにはいられなかった。

「……………何でそんな不機嫌なのさ。私、君に何かしたっけ?」

黙りこくつた俺の心情を察したのか、L i e yは身に覚えがないと言わんばかりの様子で困惑した声を出す。

「……いや、本当に何でもないんだ。すまん」

「ならいいけど」

Lilyがまた顔を伏せたことで会話が途切れ、沈黙が流れる。特にお互い話すことは無いからか、話題も出ない。チャリチャリとLilyがポケットから出した古い鍵を弄る音だけがその場に響いた。

ウイン

暫くそのまま互いに無言でいると、ホテルのドアが開いた音がする。

「ごめんお姉ちゃん、お待たせ。ついでにホテルの中を見回ってたら遅くなっちゃった」
案の定やって来たのは先程別れた人間だった。先程まで赤くなつて腫れていた目はすっかり元の色に戻っていた。

「んーん、そこまで待つてないから大丈夫だよ」

手に持つていた鍵をしまい、Lilyは立ち上がつて人間にそう返す。

「それじゃあ、今度は私の番だね。行つてくるよ」

「うん、いつてらつしやい。あ、ホテル側の人が好きで部屋を用意してくれたらいいから、そこにいるね」

「OK」

そこまで二人で会話すると、Lilyは俺に向き直つた。

「さて、じゃあ行こうか、Sans」

「……ああ。こつちだ」

ついてくるLilyを連れ、俺はまたShortcutを発動させた。

「お、何処だここ。こんなところあつたんだ」

Shortcutを発動させた先は、あまり光がない暗い路地裏だった。此処なら誰にも目につかないし、あまり近付こうとはしないだろうと考えたからだ。

「……此処なら早々誰も来ないだろ。さあ、この前の続きを話そうぜ」

「うん、いいよ」

俺の提案にあつさり乗ったLilyは壁に体重を預け、寄り掛かる。

「さて、この間は何処まで話したっけね。……ああ、『糸』とかの話までしたんだっけ。で、ここじゃ人目につくからって理由でその後直ぐ解散したのであつて？」

「ああ、それでいい」

俺が頷くと、Lilyはそう、と一言言った。

「……で、あの時の質問以外にまだなんかある？　あるならまず私の質問に伝えてからにしてほしいんだけど、いい？」

俺に了承を取ってくるLilyに、思わず身構える。何を訊くつもりか、予想がつか

ない。

「構わないぜ」

「そう、ありがと。じゃあ、質問ね」

——君、この世界の何を知ってるんだい？

疑惑の籠った鋭い目付きで俺を見ながら、Lilyはそう言った。その視線と質問の意図を理解し、どつと冷汗が吹き出す。

「……どういふ意味だ」

冷静を装って意味を聞き返せば、Lilyはたまらないといった様子で吹き出した。

「はは、白を切るつもりかい？ ——……君、この世界の行く末Endingを知ってるね？」

確信があるような言い方で、Lilyは俺に訊ねる。

「私に……正確に言えば、私の顔に見覚えがあるんだろう、君は。……そりやあ忘れられるはずもないよね。だって、この顔は君の弟を」

「やめろ」

Lilyの口から語られようとした内容の先を悟り、堪らず俺の口からかなり焦った様子の制止の声が出た。

「…………ごめん、今のは不躰にも程があった。忘れて。

……まあとにかく、君は私の顔に見覚えがあるんだろうね。初めて会った時からそんなに警戒されてちや、何かあるんだろうとは思うよね」

あんなに疑念の籠った眼差しで見られちやあねえ、と肩を竦めながら、Lilyは続ける。

「それに、私は君が私やあの子を怨む理由があるのを知っている。……でもね、それは、ある条件を満たさないと起きない筈で、君は私やあの子を覚えていない筈なんだ。なのに、君は私を警戒したり、あの子を『クソガキ』と呼んだりした。そこで、私はふと思った。——君は、本来知っている筈のないことまで知っているんじゃないかって」

例えば、と目の前の人間は例をあげた。

「……………あの子がこの地下世界全てのモンスターを殺し、文字通り世界が崩壊した時のこととかねえ？」

ドクン、と大きくSoulが跳ね、意図せず体が揺れる。

「……………その反応から察するに、ピンゴかな？」

Lilyはクツクツと喉の奥で少し笑うと、その笑顔を直ぐに引つ込め、俺を見る。その視線から、思わずに逃げそうになる。

一番最初に会った時のことと、あの会話だけでそこまで辿り着けるのかと純粹に彼女

に驚嘆し、それだけ恐ろしかった。……兄弟にも言っていないが、それでも誰かに知って欲しいと思っていた『これ』を暴かれるのがそんなに怖いとは、思わなかった。

「ねえSans。君は、どうしてそれを知ってるの？ ……いや、質問を変えようか。君に何が起こってるの？」

真つ直ぐな強い視線が、俺を射抜く。

「……………私知ってる世界では、そんな事は起こりうる筈もないんだ。でも、君がそれを知っていることは、何か狂ってしまったことになる」

それが堪らなく不安なんだ、とLilyは言う。俺は、ただ黙っていることしか出来なかった。

「……………話してくれ、Sans」

嘆願するような声で、Lilyは言った。

「話してくれるなら、私は、この後知っている限りの全てを話すし、私が企てている計画や『私という存在の正体』についても話そう」

「……………『正体』？」

「そう、正体」

俺に話させる為に用意されたのであろうエサの中にあつた『正体』という言葉が引つ掛かり、思わずに聞き返せば、Lilyは頷く。

「さつきは『あの子の姉だ』なんて言つて誤魔化したけど……君だつて、薄々感付いてるんだらう？ 私【異常】だつてことくらい」

はつきりと、Lilyは自分に対する自虐を言った。……きつと自分を客観的に見た結果なんだろうと見当をつける。

「君は『私』という不穩分子の正体と企みについて知れるし、私は君に起きている異常現象について知れる。正にWin-Winな関係だと思ふんだけど……どうかな」

話す気にはなれないかい？、とそこまで言つて、Lilyは顔を歪めた。

……確かに。確かに、良い交換条件だとは思ふ。だが、ずっと自分で抱え込んできた所為か、本当に話して良いのかという不安と疑念がぐるぐると渦巻いている。その所為で、話さないようにする為に出来る限りのデメリットを弾き出して突き付けようとする思考回路にうんざりする。俺は、こんなに目の前のLilyを信用出来ていなかったのかと、そんなことを自嘲的に思った。

「……話し辛いかい？」

「……ああ」

「あははは、まあ、だろうね。ある日突然急に現れて、しかも会つて一日も経つてない奴に今まで抱え込んできたモノを吐き出すなんて相当無茶なことだ。しかも私は、君の仇とほぼ同じ顔なわけだしねえ」

流石にLilyも自分がかなり無茶な事を言っているのは分かつてはいるのか、そう言った。

「……でもお願い、話して。これを逃したら、私には、もうチャンスはないんだ」

「……………？ それは、どういう……………」

「……………それについては、君が話してくれたら話すよ。さあ、どうするんだい？」

気になることを口走り、目の前の人間は顔を歪めて笑顔を作る。

「……………俺は……………」

人間から視線を外し、冷静を取り戻す為、幾つか思考を巡らせる。こいつなら話して大丈夫か、誰かに言ったりすることはないか、色々な事を総合的に考え、客観的に見て、そして、俺は、結論を出した。

「……………分かった、話そう」

俺が渦巻く感情を抑えてそう言えば、人間は少し目を丸くしてから、につこりと笑顔を作った。

「……………ごめんね、ありがとう」

大分突っ込んでいる事を訊いている自覚はあるらしく、申し訳なさそうに人間は短く謝罪した。

「いや、謝るな。俺が判断した結果なんだからな」

「そう……？ それじゃあ、話してもらおうか」

俺の言葉に首を傾げたLiilyはすぐに首を元の位置に戻し、口を閉ざした。それを見てから、俺はどれから話すべきか順序を立てる。

暫くしてから何とか自分の身に起こっている事をまとめ、口に出す。

「……………ある日からか。俺は、夢を見始めたんだ」

意外な話の切り口に驚いたのか、Liilyはきよとんと目を丸くする。

「夢？」

「ああ、それもいやに現実的で、とびつきり最悪な悪夢だ」

Liilyは内容を反芻するように言葉に出した。それを肯定し、俺は話を続ける。

「自分がそれまで生きてきた記憶も知識も、雪を踏み締める感覚も、兄弟の怒鳴り声や笑う声もちやんと聞こえる、切り裂かれた感触や痛みさえもある、そんな夢だ。だがその夢は……毎回毎回、その夢の地下世界に生きる全てが滅ぶまでの道のりの夢だった」

「……………」

俺の言葉を遮らず、人間は黙っていた。

「地下世界から皆で脱出して夕陽を見たこともある。死んだAsgoreに代わってPapyrusが王様になったこともある。Torrieが女王として君臨したことも

あれば、その玉座をU n d y n eが奪つたこともある。数えきれないほど、そんな夢を見た。だがその全てが初めからやり直しされて、最終的には……俺を含めた皆が死んだ」

そして、何よりも。俺が、辛かったのは……

「……………俺の、弟が。P a p y r u sが、何度も死んだ。殺された。……………他でもない、お前によく似た人間に」

ただじつと俺を見るL i l yに、あのニンゲンの顔が重なって見えた。

「最初は、疲れてるんだと思つたさ。そうであつてほしいと思つていた。……………だが、俺の願いに反して、その夢は、毎晩続いた」

何度も続くその悪夢から逃れようと、幾つもの策を立てたが、駄目だった。足掻いて足掻いて足掻いても、駄目だった。

「今じゃあ、五秒も目を瞑ればその夢を見るぐらいにまでなつた。……………その内、俺は、ふとある事を思い始めた。『今いるこの地下世界こそが夢で、本当は、あの悪夢の世界こそが、俺が本当に存在している世界なんじゃないか』つてな」

「……………そんな訳ないじゃないか、今、確かに君は此処にいるぞ」

「ああ、だよな? ……分かつては、いたんだ。そんな訳がないつて」

L i l yが言う通り、その時はそう思つていた。

だが、何度も続く悪夢に、俺の心と頭は疲弊しきっていた。

「何度も何度も夢が続くうち、どんどんその思い込みは大きくなっていった、目が逸らせなくなつて、抱え切れない程になつた。そして、今や……『こつち』が現実なのか、それとも『あつち』が現実なのか、もう、解らないんだ」

「……………」

俺の心からの言葉が予想外過ぎたのか、目を見開いて、Lilyは絶句する。

「はは、笑えるだろ？ そのおかげで俺は、お前さん達が遺跡から来た時も、『ああ、またか』としか思えなかつたんだ。だが、足跡をよく見たら、今までと違って二つあるじゃないか。それで慌てて追っかけてみたら、Papyrusや皆を殺したあの人間そっくりな顔の大人がもう一人いた。……それがお前だ」

そこで俺は、Lilyを見る。

「正直な話をすれば、お前が見えた時、Torielとの約束とか全部忘れて殺しそうになつたよ。それほど、お前が憎かつた。だが、いざ声をかけてみれば、お前は全くの別人だつた」

「……………」そう、別人だ。

分かつてはいた。コイツが別人だつてことは。

「……………」話は変わるが、この夢を見ていたのは、実は俺だけじゃない。……………お前、F1

owe y っつて黄色い花のモンスター知ってるだろ」

「知ってるけど……まさか」

「ああ、そのまさかだ。Flowe yも、俺と全く同じような夢を見ていた」

肯定した瞬間、Lilyの顔が愕然としたような顔になる。見開かれた目が、嘘だろ
うと言いたげだった。

「最初の接触は向こうからだった。Papyrusが居ない隙を見計らって、アイツは俺に取引を持ちかけた。お互いに不可侵でいようっつてな」

『Howdy』とやけに可愛らしい声で話しかけてきた声を、未だに良く覚えている。

「俺はその取引に応じて、こうして俺達は実質協定を結んだ。……っつてもまあ、そんなにすることは無かったんだがな」

話を戻すが、と俺は話を続ける。

「そんな訳で、俺はこの世界の行く末やお前さん達を知ってたって訳だ。……どうだ？ 笑えるだろう？」

俺の話聞いて暫く愕然としていたLilyは目を伏せ、少し考えてから、ぼつりと
呟く。

「……成る程、胡蝶の夢か」

「……は。」

「君に起こつてゐる現象のことだよ。良く似ているなど思つたのさ」
『胡蝶の夢』。

聞いたことの無い単語で自分の身に起こつてゐる事を片付けられ、ぎよつとする。そんなものがあつたのか、とだけぼんやり思つた。

「ぎつと説明すると、とある男が蝶になる夢を見たんだ。その夢が毎夜続き、やがて男はどちらが現実かわからなくなつたという話さ。……君に起こつてゐる現象とよく似ていると思わないかい？」

「……確かに」

『胡蝶の夢』について説明され、確かに似ていると納得する。

「だがまあ、君に起きてゐる現象の根本は全く違うんだろうね」

「……どういう意味だ」

納得しかけていた頭が、続いた言葉でまた混乱した。

「だつてそうだろう？ 胡蝶の夢はそれでも『夢』の域から出ないが、君の見てゐるそれは『夢』じゃない。……確証はないが、本当に起こつたことだ」

「………は」

今、何て言つた。本当に、起こつた？ 何を言つて、

「ああ、この世界が巻き戻されていたとか、そういうことじゃないから安心して？」

「……………じゃあ、一体何だつて言うんだよ？」

息が詰まりそうになったのが、寸での所で止まる。どういう意味だ、訳が解らない……

「……………その質問には後で答えるとして、私の正体について話そうか。取り敢えずまずは先に、謝罪をさせてくれないかな。……………本当に、ごめん」

「はっ!？」

頭を下げてそう謝罪したLilyに、俺は戸惑う。先程から意味が分からないことだらけで、俺は混乱していた。

「君がその夢に苦しんでいるのは多分、私の所為でもある。だから、ごめん」

その言葉で、混乱していた俺の頭が冷え、冷静になる。

「……………どういう意味だ」

「そのまんまの意味だよ。それは私の所為。……………『私』という存在がいるからこそ起こったバタフライエフェクトだ」

顔をあげたLilyは申し訳なきような顔をして頭を抱えた。

「……………私が『この世界』にいることで何かしら影響はあると思ってたけど、なーんで君たちにその皺寄せがいくかなあ……………」

「何を言ってるんだ、お前さん」

その言い方じゃあ、まるで、

「お前さんがこの世界における異物みたいな言い方じゃあないか」

絞り出した俺の言葉に、Lilyはきよとんとした顔で俺を見ると、

「……………え？ うん。その通りだけど」

ただ肯定した。

「私はこの世界における『異物』だよ、Sans。本来なら、私は『あの子の姉』としては存在してないんだ」

「……………」

何でもないことを言うように、Lilyは言葉を紡いでいく。その言葉に今度は、俺が絶句した。

「……………私はね、Sans」

元々は第三者側の人間だったんだ

続けられた言葉に、ガツンと強く殴られたような、眩暈がするほどの衝撃が走った。

そこから俺は、Lilyの口からとんでもない事実を聞かされた。

コイツの正体が、俺が思いもよらないものであったこと。

そして、コイツが話した、とてつもない計画の事を。

「お前さん………それ、正気で言ってるのか？」

一周回って冷静になった俺は、目の前の人間に問う。人間は、ただ何も言わずに話の途中から浮かべた笑みを深めた。

「もしお前さんがそれを正気で言ってるなら………」

俺はそこで言葉を切り、人間を強く睨む。

「お前さん、狂ってるよ」

「………ああ、知ってるよ、そんなこと」

ただ笑顔で、人間は頷く。

「だって、狂ってなきやこんな計画立てないし。そもそも思い付きもしないし」

あははは、と何が面白いのか、ただにこにここと、人間は笑ったままだった。その笑顔に、俺は猛烈に腹が立った。

気付けば俺は、目の前の人間に掴みかかっていた。浮かんでいた笑顔が崩れ、近付いた顔が驚愕に染まる。

「意味を分かっているんだろうな、お前さんは？ それはあの人間が一番望まないこと

だつて」

掴みかかつて、困惑する人間に俺は激情のままそう問い詰める。それを聞くと、人間は目を丸くし、穏やかな笑顔を浮かべる。

「……………うん、分かつてるよ」

その笑顔のまま人間は頷いた。

「とういかさ、お前にだけは言われたくないよね、それ」

お前だつて散々 P a p y r u s に隠し事とかしてきた癖に、と毒づかれ、言葉に詰まる。その通りだ、本来俺にそういう資格は無い。だが、どうしても、問わずにはいられなかった。

「それは分かつてるさ、今更柵にあげる気もない。だがな、俺は今此処で話す前にあの人間と話した時に見た涙を知つてるんだ。お前さんが苦しませて流させた涙を知つてるんだ。これぐらい問う資格はあるだろう？」

その言葉に、今度こそ人間は顔を歪め、顔を伏せる。

「……………そつか、やっぱり、あの子は苦しんでたんだね。私がした行動で苦しませてたんだね」

でも、と人間は顔をあげ、言葉を続ける。

「今更もう、戻る気なんて私には無いんだよ」

「……………ッ！」

俺を映すその瞳には、強い決意が宿っていた。

「……………チツ」

俺は、その決意がもう折れないレベルの硬さにまで固まっている事に気付き、舌打ちをしてから掴みかかっていた手を離れた。

「……………ありがとね、Sans。あの子のことを思つて私を止めてくれて」

掴まれたパーカーの裾を直しながら、人間は穏やかな笑顔で俺に礼を言う。

「ほんつとに、君たちは優しいなあ」

少し泣きそうな声で、人間は言った。

「……………そんな君にね、『約束』を取り付けたいんだ」

続いて言われた言葉に、俺はぎよつとする。

「……………おい、俺が約束が大嫌いなことは知つてんだろ」

「うん、知ってる」

今しがた約束が呪いだつて気付いたばつかなんだがなと思つてしまった所為で思わず低い声で言い返せば、あつさり頷かれた。

「君がこの約束をしてくれるなら、私もこの計画を必ず成功させると誓うからさ」

「……………なんで俺なんだ？ 俺以外にも、ふさわしい奴はいただろうに」

時間稼ぎ代わりにそう聞き返せば、Lilyは苦い顔になる。

「だって、君以外にこの計画を話したモンスターは一人だけでその人は事情があつて無理だし、他のモンスターにこの計画を話す訳にもいかないし。……それに何より、君と私は似てるからね」

「……………俺と、お前がか？　は、何処が」

人間の言った言葉が皮肉にしか聞こえず、思わず悪態を吐いた。

「えー、おんなじように下の弟がいることとか、案外思考回路が似てる所とか、結構あるよ？」

からからと笑つて、人間は言う。

「……………ねえ、頼むよ。君ぐらいしか、心の底から安心して頼めるモンスターが居ないんだよ」

笑顔を崩して、そう頼む人間。今にも泣き出しそうな顔でそう言われ、思わず嫌になる。

「……………分かったよ」

「！　ありがとう。じゃあ、約束ね……」

渋々頷けば、Lilyは笑った。そして、

『』

「……………」

俺に、安心しきつた笑顔で約束呪いをかけた。

「それから、もう一つ。これは、どっちかと言えば、お願いなんだけど、『私みたいにならないで』」

じつと、俺の目を見て、人間はそう言った。

「……私と君は、本当に良く似てるんだ。一步踏み外せば私みたいに何処までも狂ってしまう程ね。……しかも私は、君が狂ってしまった世界線を知っているから、尚更そう思えるんだ」

ぼつりと、眩くようにそう言った。

「君が人間を食べるようになってしまった世界線も、最愛の弟を手にかけてしまった世界線も……その殺しを、楽しんでしまった世界線も。だから」

——……私みたいに、自分のエゴを押し付けて大切な誰かを傷付けるような奴にならぬでね

そう続けるように言つて笑つた人間の笑顔は、酷く歪だつた。

95. CORE 探索

〔Lily〕

サンズに私が企てていることを全て話し、約束を取り付けた後、サンズのショートカットを使ってホテル前まで戻ってくる。

「ほら、ついたぞ」

「ん、ありがとね、サンズ」

お礼を言うが、そのまま彼は何も言わず、私をじっと見つめる。

「……………何、何か私の顔についてる？」

流石に視線に耐えられなくなって訊けば、サンズは顔を顰め、一步私に近付いた。

「……………え、ほんとに何」

「……………お前さんは。さつき、『私みたいにならないで』と言ったな？」

「……………うん、言ったけど……………それが何さ」

サンズの質問の意図をよく読めないまま取り敢えず肯定しておく。すると、彼はギラツと左の瞳孔に蒼い光を宿らせる。

「言われずともなってやるつもりは毛頭ねえよ、この妹泣かせが」

それだけ一つ吐き捨てて、サンズは目の前から忽然と消えた。妹泣かせなのは私が一番分かってるよと言葉に出さずそう言い返し、私はホテルの前に立つ。

……さて、フリスクはホテルの中だったか。

サンズと話す前に聞いたことを頼りに、ホテルの中に入り込む。エアコンが効いて涼しいと思いつながら、周りを見渡した。……あ、ガチでメタトンの噴水の構造こうなってるんだ……もはや不良品の域にまで行っていないか、あれ。斬新過ぎにも程があるだろ。

そんな事を思いながら噴水の傍を通り抜け、エレベーター前を屯しているモンスター達を横目に、右に曲がる。そうして見えてきた部屋の奥から二番目の部屋のドアの前に立ち、ノックをする。

コンコンコン

「……フリスクー、入るよー」

一言声をかけてからノブに手をかけ、捻る。ガチャリという音を立ててドアが開いた。

「……あ」

部屋の中を覗くと、フリスクは広いベッドに身体を預けて寝転がっていた。疲れきっていたのか、すやすやと寝息を立てて眠っていた。

「……ん、あ、おはよ、お姉ちゃん」

そーつとフリスクを起こさないように部屋に入ろうとすると、フリスクがぱちりと目を覚ます。

「ああ、おはよ、フリスク。よく眠れた？　つて言ってもまあ、ほんのちよつとだけだっただ」

「うん、まあね」

体を起こし、伸びをするフリスクに声をかけてみれば、そんな返答が返ってくる。

「どうする？　もうちよつと休む？」

「ううん、行こう」

「ん、わかった」

フリスクは眠気を払うことも兼ねて首を横に振り、ベッドから降りて立ち上がった。二人で部屋から出て、部屋に鍵をかけておく。

「取り敢えず鍵返してくるね」

そう言つてパタパタと駆けていくフリスクについていき、途中で別れる。コアに繋がっているのだから奥の扉の前で待っていると、少しすると鍵を返したフリスクが駆けってくる。

「お待たせ、行こう」

そう言つてフリスクは、ドアの取っ手に手をかけた。

結構重かった扉を二人で開け、ドアを後ろ手で閉める。前を見てコアの外観を眺め、随分巨大なうえにメカメカしいなという感想を抱いた。……まあ、これで地下世界全土の電力供給してるってらんだからこれぐらい大きくなきゃ足りなくなっちゃうわな。確かマグマの熱をエネルギー源にしてんだっけ。

「……………ん？」

ふと見ると、何かの影が道の向こうに消えていったのが見えた。逆光であまり見えなかったが、十中八九メタトンに声をかけられたモンスター達だろうと見当を付ける。……そういえば思い出したけど、ゲームだったときの影って完全に人形だったのにエンカウントしたモンスター達は少なからず人形には見えないモンスターだったんだよなあ、どうなってるんだろ。

プルルル……

鳴り響く着信音でfrisくは携帯を引っ張りだし、電話に出る。

「……………」

そして一つ首を傾げてから頷き、すぐに電話を切った。

「アルフェイスから？」

「うん、そうなんだけど……お姉ちゃん、さつき誰か居たよね？」

「ああ、居たね」

「だよねえ……」

んー？、と首を傾げるフリスクに荒んだ心が癒されるのを感じながら、私はフリスクに問い掛ける。

「……何か引つ掛かる事があつたの？」

「いやね……アルフィスから聞いた話によれば、コアには誰も居ない筈なんだって」

「……待って。じゃあさっきのつてまさかメタトンが用意した敵の可能性大？」

「うん、多分……」

「マジか、気を付けてかないとじゃん」

然り気無く会話誘導をしてフリスクにも警戒を促し、先に進む。

「うわお」

一本道を歩いて次のエリアに進むと、いかにもSFチックな近未来っぽい内装の部屋についた。これはテンションあがるなあ。

プルプル……

また鳴り響いた電話にフリスクが出て、暫くすると切った。

「あのエレベーターで移動するんだって」

「ふーん……さつきホテルのエレベーターが止まったのを見かけたし嫌な予感しかしな

「いのは私だけ？」

「安心してお姉ちゃん、ぼくもだから。それにぼくに至ってはレストランに居たモンスターからコアを弄くったっていう話を聞いてるから」

「おっと本格的にヤバイ予感しかない」

「コントみたいなやり取りをしつつ、エレベーターの前にまで移動する。エレベーターを呼び出すボタンを押してみても、案の定反応しなかった。」

「「やつぱり……」」

「お約束の展開にお互い苦笑いしか出てこない。フリスクは取り敢えずアルフィスに連絡しようと考えたのか、携帯を取り出してボタンを押し、電話をかける。」

「……………」

「無事アルフィスは電話に出たのか、フリスクは少ししてから電話を切り、笑顔で私に向き直る。」

「迂回決定です、本当にありがとうございます」

「うんそんなことだろうとは思ってたよちくしょうめ」

「右側に行ってって」

「最早メタトンは一発ぐらい殴っても許されるだろこの仕打ちはと思いつながら、私は仕方ないと割り切って歩を進める。……確か、弄られて右側は進めなくなってるんだっけ」

?

そう思いながら右側の道に進むと、ただ真つ暗な闇が口を開けているだけで、何もなかった。

「あー、やつぱりか……」

またまた苦い顔をしたフリスクは握っていた携帯を弄り、また電話をかけた。少しすると電話を切り、振り返る。

「左の道から迂回しようってさ」

「うん、分かった。……というか、やつぱりフリスクが聞いた通り簡単には辿り着けないよう弄くられてるっぽいね。気を引き締めていこう」

「うん」

フリスクの手を引き、引き返してから左の道に進む。すると、フリスクの携帯が鳴り響いた。

プルルル……

直ぐにフリスクは電話に出て、アルフィスの話に相槌を打つ。その間警戒を解かずに待機していると、前からふわふわと魔女の帽子のような物が飛んで来る。それを見た私は、直ぐ様ポケットの中のナイフに手をかけた。

「フリスク、モンスターだ！」

「えっ!？」

フリスクが驚きの声をあげたと同時に、周りが白黒に切り変わる。

*M a d j i c k p o p s o u t o f i t s h a t !

ポンツという音を立ててまるでマジックのように飛び出してきたマジック（であつてよね？）に向けてハンカチをつけたままのナイフを取り出す。

ピツというターンを進める音が響いた。

*M A D J I C K | A T K 29 D E F 24

*

T h i s m a g i c a l m e r c e n a r y o n l y s a y s m a g i c w o r d

『ちちんぷいぷい』

……それって他のモンスターと会話出来るの……？

アナウンスで流れた紹介文の部分を聞き、そんな事を思いながらそのまま此方に飛来する変なボールをナイフで弾き返す。これは確か、そのままその場に十字架型の弾幕が残るような弾幕だった筈だ。

私の予想通り、弾き返した瞬間ボールがあつた場所に十字架が出現し、少ししてからすーっと消えていった。

*M a d j i c k d o e s a m i s t e r i o u s j i g .

少し間が空いた後にピツという音がして、ターンが回る。

* Mad_jick_interrupts_you_by_chatting_to_its_

* Its_gibberish_dizzes_you……

そのアナウンスが流れた瞬間、その場で何度も回った後みたいにくるぐると視点が回り、定まらなくなってくる。……うわ、まずい。

* Your_DEFENSE_drops_by_1.

『アラカザム!!』

それでも1なのか、と思いながら、飛んで来る十字架の弾幕を定まらない視点のまま叩き落としていく。一発対応が遅れ、足を掠めていった。

* You_still_feel_confused.

ぐらぐらと揺れる視界の中で何とかフリスクの姿を捉え、『MERCY』を押すのを見守った。

* YOU_WON!

* You_earned_XP_and_60gold.

戦闘が終わり、周りに色が戻ってきたところで目蓋を閉じたり開いたりして何とか視界を定めようとする。ひっでえ眩暈だな。何時ぶりだこんなに酷いのは。

「お姉ちゃん大丈夫……?」

私が視界を元に戻している内に電話が終わったのか、フリスクが心配そうな顔で訊ねてくる。

「ん、へーき。もう治ったよ」

「……なら、いいんだけど。行ける?」

「うん。先に進もう」

まだ心配そうな顔をするフリスクに手を引かれ、少し覚束ない足取りで次の部屋に進む。

「……………」は

次の部屋に来て設備を見て、何となくレーザーの中を通り抜ける部屋だったかと思いつ出した。それと関連付けてアルフィスの言う順番とは逆のレーザー光線が来るんだとも思い出す。

「お姉ちゃん大丈夫? 起動するけど……いける?」

「平気だってば。もう、心配症だなあフリスクは」

私が部屋について思い出しているうちに電話は終わったらしく、フリスクが携帯片手に話しかけてくる。その心配を頭を撫でて誤魔化し、私は話を振る。

「どんなギミックだった?」

「えっとね、あのボタンを押したら起動して、オレンジ、オレンジ、青の順番でレーザーが来るんだって。その中を通り抜けるんだって」

「成る程、ありがと」

原作通りの展開に安堵して、気を引き締める。……失敗したら大事故だ。絶対に回避しなきゃ。

「……じゃあ、行くよ?」

「うん」

携帯を持ったままボタンに手をかけたフリスクの反対の手を然り気無く繋ぎ、何時でも引つ張れるようにしておく。

「えいつ」

カチツ

という音と共に、目の前のガードが消え、青、青、オレンジのレーザーが迫ってくる。

「えつ」

アルフェイスから聞いていたものとは違う順番だったことに驚いたのか、フリスクが目を見開いて固まった。それを利用して青のレーザー部分だけは止まり、オレンジが来た瞬間手を引いて廊下を走り抜けた。

「……………あつぶね」

取り敢えず咄嗟に対応出来たようにする為にそう眩き、フリスクの方を見た。

「…ねえフリスク、アルフィスはオレンジ、オレンジ、青って言ったんだよね？」

「……………うん、そのはず、なんだけど……………」

困惑しきつた顔でそう言ったフリスクに私は顔を顰め、繋いでいた手を離して、差し出す。

「携帯、アルフィスに繋いで貸して」

「え、うん……………」

私の指示に従ってフリスクは携帯を少し弄ると、差し出してくる。それを受け取り、耳に宛てた。

プルルル……………」

「……………もしもし、アルフィス？」

『え、あ、リリー？』

「そうだよ。……………ねえ、さつきオレンジ、オレンジ、青の順番ってこの子に言ったんだよね？ 全く逆のレーザーが来たんだけど……………」

取り敢えずそう言えば、電話越しでヒュツと息を飲む音が聞こえた。

『そ、そんな。大丈夫？』

「ん、まあね」

『ご……ごめんなさい、私間違った順番を言っちゃったわ。……で、でも、何とかなる、よね？ さ、さあ、気を取り直して先に進みましょう』

「ああ、待って」

そう言つて急いで電話を切ろうとしたアルフィスに待ったをかけ、小声で電話越しに囁いた。

「……………一個だけアドバイス。口裏合わせを頼む相手は見極めた方がいいよ」

ガチャン……………

そう一言一方的に言つて電話を切り、フリスクに携帯を返す。

「ありがと、もう大丈夫」

「なんの話だったの？」

「ん、いや、ちよつとね。さて、行こうか」

フリスクの追求を誤魔化して避け、次のエリアに進む。次はただの分岐だった筈だから安全かな？

プルルル……………

さつき返した携帯から着信音が響き、フリスクがまた電話に出る。

「……………」

アルフィスから電話越しで指示があつたのか、フリスクは真つ直ぐ進もうとして、困

感したような顔でその場に立ち止まってしまった。

「どしたの」

「……何か、アルフィスの指示が全く違うこと言ってる……」

「最初はどっちかって？」

私が訊けば、フリスクは真正面に続く道を指す。

「……………私は別にどっちでもいいよ。フリスクが選びな」

私の一言にますます困惑したような顔をしてからフリスクは考え込み、結局は真正面の道を選んだ。正解を選んだな、と思いながら後をついていく。

「うっわ」

道の先にあつた動き回る大量のレーザーの壁にげんなりする。分かつてはいたけど殺しにきてるなあという感想を抱きつつ、アルフィスと電話をするフリスクを見る。……うーん、やっぱり怖いし抱えあげて一気にいった方がいいよなあ。

「お姉ちゃん、アルフィスがこのレーザー、部屋の電気を落として止めてくれるって。その間に通り抜けよう」

そんな事を考えていると、携帯から少し耳を離れたフリスクからそう提案される。

「ん、いいよ。……でも二人で走るとちよーつと時間かかりそうだから抱えあげていいいい？」

「……分かった」

少し間が空いた後、フリスクは頷いて私の傍にやってくる。フリスクをそつと抱えあげると同時ぐらいに、部屋の電気が落ちて薄暗くなる。

『よし、行つて！』

「いくよ」

アルフィスの指示がスピーカーにされていたのであろう携帯から聞こえ、フリスクに一声かけてから廊下を駆け出す。少しした後、携帯の着信音が鳴り響いた。

『ま、まって！ 止まって！』

フリスクがボタンを押した途端に悲鳴のような声が携帯から流れ、このタイミングかと足を止める。すると切られた筈の部屋の照明が点灯し、レーザーが復活して体を通過する。電源が復旧したのだと明確に分かった。

『で、電源が……自動復帰した。どうしよう……こ、こんなの想定してな……その……』

メタトンとの打ち合わせではこんなことをする予定では無かったのだろう、アルフィスの困惑したような声が電話越しに聞こえる。少しの間悩んだような間が空いてから、またアルフィスの声が流れ出した。

『えつと、また電源を落とします。それで、電源が落ちたら少し進む、復帰したら止まる、落ちたら……つて感じに……け、ケガしないでね』

「了解」

アルフィスの指示に返事を返すと、電話が切れる。その瞬間電源がまた落ち、部屋が暗くなる。今度は注意を払って早足で進む。部屋の照明が点滅して明るくなる瞬間に足を止め、やり過ごす。体を何かが通り抜けていく感覚が消えて照明が落ちた瞬間また歩き出し、これを繰り返して確実に進んでいく。二、三回繰り返した所で道をやつと道を通り抜け、安堵の息を吐く。

「ふうっ……何とかやり過ごせたね。フリスク、怪我はない？」

「うん。……あ、お姉ちゃん、降ろして？」

「はいよ」

プルルル……

フリスクをそつと地面に降ろすと、フリスクは携帯を弄り、アルフィスに電話をかける。多分もう制御しなくて大丈夫だと伝える為だろうと考え、何もせずに見守る。呼び出し音が一つ流れた後、アルフィスに電話が繋がったのか、フリスクの言葉が聞こえなくなった。

「………………。よし、終わったよ。行こう」

少し話すと電話を切り、すぐに先を歩くフリスクの後をついていく。廊下の壁や天井を見ながら、そういえばこのコアって一日でアルフィスの持つてる地図が役に立たなく

なるほど改造されたんだよなと思ひ至る。絶対に突貫工事だった筈なのに地下世界の電源が落ちてないって……え、モンスターの技術力高すぎない？ 最早人間の技術越えてね？

そんな事を考えて愕然としてから前を見ると、またフリスクが携帯を耳に宛てて電話をかけていた。それを追い越して十字路の真ん中辺りに立ち、取り敢えず警戒も兼ねて辺りを見渡ししておく。バタフライエフェクトでモンスターが配置されてたりしたら不味いし。

警戒しながら道の先を見てもモンスターの陰は見えず、取り敢えず安全そうだと判断し、電話を終えて携帯をしまい、セーブポイントの光に手を伸ばすフリスクに声をかける。

「モンスターはいないみたい。……さつきからアルフィスのナビが言い方が悪いけど役に立ってないし、これは完全に改造されたと見てよさそうだね」

「そうだね……ところで思ったんだけどさ、コアが改造されたのって少なくともぼくたちがこの地下世界にきてからだよな？ この技術どうなってるの……？」

「それな」

先程の私と同じ考えに辿り着いて困惑したような顔をするフリスクに全面的に同意しておく。フリスクは首を傾げながら空中に手を彷徨わせ、セーブを行う。

「終わったよ」

「分かった、行こうか。……さて、どっちに進む？」

少ししてからセーブを終えたフリスクが傍にやってくる。その手を引き、選択肢を示した。

96. メタトン戦前

「Lily」

「んー……なんか、こっちは嫌だ。左にする」

『Play^スer』は悩んだ末左を選び、左に曲がった。簡単な方に行つたな、と思ひながら、フリスクの後をついていく。

「……あ、あの氷って……」

ふと前に行くフリスクがベルトコンベアに乗って流れてくる大きな氷を見てそう呟いた。スノーデインで狼のモンスターが投げているのを見かけたのを思い出したんだろうか。

……確か、コアが熱暴走を起こすのを防ぐ冷却材にされてるんだっけ？ で、
Genocide

あのルートだと狼のモンスターが避難した所為で氷が供給されなくなつて、コアが熱に耐えきれなくなつたとかいう設定が無かつたか？

ベルトコンベアから落ちていく氷を横目で見ながらそんな事を考え、右に曲がって通りすぎる。直ぐに分かれ道に差し掛かり、左に曲がる。

『このパズルを解けば、終点は開くだろう』

左に曲がって見つけた電子看板の内容に二人で目を通す。というか電子看板とか発
展してんな。

「終点……?」

「メタトンがいるとこじゃない? ほら、さっきエレベーターで行けなかったでしょ」

「ああ、成る程」

看板を読んで首を傾げたフリスクにそう返せば、納得したように頷く。そして、また
先を歩き始めた。

「あ、これか」

道の先には今までやってきたあの対岸の船を撃つパズルがあった。

「お姉ちゃん、どうする? どっちがやる?」

「んー、私は別にどっちでもいいんだけど。フリスクはやりたい?」

「……うん、やってみたい」

「じゃ、どうぞ」

振り返ったフリスクと相談し、フリスクに譲る。フリスクは画面に向き合い、パズル
を解き始める。

「ん、こっちは……えーつと……?」

カチャカチャとボタンやらを操作してパズルを解こうと四苦八苦するフリスクを眺

めてから、一応辺りの警戒をしておく。こんなところでモンスターと鉢合わせしたらまずい。

「……………これでどうだっ」

警戒しながら暫く待っていると、そんな事を言つてフリスクがボタンを勢い良く押す。二連続で弾が発射され、軌道上にあつた箱とその奥にあつた船を破壊した。画面に『おめでとう』という文字が浮かび、正解を導けたことを示す。

「やったー！」

「よくできました」

「えへへ」

顔を輝かせて喜ぶフリスクの頭を撫でれば、更に嬉しそうに顔を綻ばせる。可愛い。

「さて、これでメタトンのところに行けるようになった筈だ。先を急ごうか」

「うん！」

喜ぶフリスクを急かし、部屋から出る。そして今度は左に曲がり、進んでいく。また分かれ道に突き当たり、今度は真つ直ぐ進んでみる。

「……………？ あれ、箱だ」

突き当たつた部屋にはぽつんと一つだけ箱が設置してあつた。これ以外に特に設置物は無かつたよなと思ひながら部屋を見渡しておく。その間にフリスクは箱を漁り、何

かを取り出した。

「あ、これさっきのお店のバーガーだ」

「え、こんなところに？」

箱の中から引つ張り出したバーガーを見て、思わず顔を顰める。そういえば今思い出したけどあの箱ゴミ箱じゃん。バーガー入れとくにしてももうちよつと入れる箱を選んで欲しかったわ。

「ここに『休憩がてらにおやつはいかが？』って書いてあるし、持ってつてもいい？」

「……いいよ。入れとこうか？」

「お願い」

電子看板を読んで私に了承を取ってくるフリスクに許可を出し、リュックに入れておくことを提案する。頷いてバーガーを差し出したフリスクからバーガーを受け取り、リュックを前に持ってきて入れてまた背負い直す。あ、またちよつと重くなった。

私がリュックを背負い直したのを見たフリスクは来た道を引き返していく。その後を追いつき、また左に曲がる。

「また分かれ道だ……どっち行く？」

いい加減分かれ道だらけでうんざりしたのか、フリスクが若干げんなりした顔でそう訊ねてくる。

「んー……………決める前にこれ読もうよ」

「そうだね」

そんなフリスクに電子看板を指差して提案し、二人で読む。

『北の部屋を乗り越えれば、終点は開くだろう』

電子看板の内容を見て、フリスクは首を傾げた。

「あれ、さつきぼくたちパズル解いたよね？」

不思議そうなフリスクを見て、そういえばさつき最初の十字路のところの看板を読まなかったなと思い出す。……………しゃーない、補足入れとくか。

「そうだね。だからもう終点は開いてると思うよ。ほら、右に行くときつきのセーブポイントに繋がってるみたいだし、多分、あのまま真っ直ぐ来てたらこっちに行く羽目になってたんじゃあないかな？ しかも乗り越えろって書いてあるし……………左の道は十中八九モンスターかさつきのレーザーの壁が待ち受けてるんじゃないかな」

「うわ、さつき左選んで良かった……………」

自分が持っている原作知識をそれっぽい理由を付けて説明すれば、フリスクは少し顔を青くしてそう言った。

「じゃあ、このまま真っ直ぐ進んで大丈夫かな？」

「うん、大丈夫だと思うよ」

フリスクの判断に従い、そのまま真つ直ぐ進む。進む道の左の壁にフリスクは電子看板を見つけたのか、駆け寄っていく。

『東に行け！　そこが終点だ』……うん、こつちが終点でいいみたい」

「やっぱり？」

そんな会話をしてから、左に曲がらず真つ直ぐ行つて次の看板を見る。

『もう戦えない。考えることもできない。しかし、ここを乗り切れば、我が道は開けるだろう』

内容を見て、フリスクはまた首を傾げた。

「どういう意味だろ……」

「……メタトンとの戦いが終われば、お城に行けるつてことじゃないのかな？」

「うーん、やっぱりそうなのかな」

そう会話してからまた真つ直ぐ道を進む。対岸まで伸びる長い橋の上を進み続けていると、ふと、真ん中辺りでフリスクが立ち止まった。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

どうかしたの、という意味を込めて少し首を傾げれば、フリスクは少し顔を伏せた。

「えーつと、その……」

少し言いにくそうに口籠もったフリスクは、少しすると意を決したように顔をあげ、私を真っ直ぐに見る。

「……次のメタトンの戦いからは、ぼくも、ちゃんと戦っていい?」

「……………えっ」

そして、そう提案した。

「今まで散々お姉ちゃんに守られて、頼ってばかりで、自分で戦ってこなかった。……でも、それじゃやっぱりね、駄目だと思うんだ」

だから、とフリスクは硬い決意を滲ませた覚悟を決めた顔で続きを言った。

「お願いお姉ちゃん、ぼくにもちゃんと戦わせて」

そこまで聞いて、私は言葉が出てこずに黙り込んでしまう。

……………サンズと話して、考えたんだろうか。

その考えに辿り着いて、私は内心頭を抱える。でも、そう。そろそろ、守ってばかりじゃあ、駄目なんだよなと思う。

「……………」

「お姉ちゃん……………」

フリスクには傷付いてほしくないという願望とフリスクが自分で決めた意思は尊重したいという思惑が混ざって頭がごちゃついてくる。

「……………分かった」

「！」

暫く考えてから、私はフリスクに頷いた。

このまま守り続けていたら、一人では歩いて行けなくなってしまうかもしれない。何より、フリスクの成長の機会を保護者であり姉である私が潰しちやいけない。そう考えた為だ。

「ただし、一個条件ね」

私が頷いたことにより嬉しそうな顔をしていたフリスクの顔が、引き締まった。

「フリスクに手が届く距離にいて、尚且つフリスクが攻撃によって傷付きそうだったら、私は必ず庇いに行く。それだけは分かってて。……やっぱり、フリスクにはなるべく傷付いてほしくないからさ」

「え……………うん、分かったよ」

条件の内容をフリスクに言えば、フリスクは少し間を開けてから頷いた。……この条件さえつけておけば、守りにいける。

「……………じゃあ、行こうか」

「うん」

二人で横に並び、今度こそ対岸に向かう。少しすると、先程も見たセーブポイントの

光が見えた。

「あ、さっきの……」

そう言つてフリスクは光のもとまで駆けていく。その後を歩いて追つていくと、エレベーターがあるのを見つけた。

「これ、さつき動かなかつたエレベーターがここに繋がつてるのかな？」

「多分そうじゃないかな」

空中で手を彷徨わせるフリスクを横目に、エレベーターのスイッチを押してみる。すると、シュツという音を立てて扉が開いた。

「ああ、やつぱりそうだったみたいだ」

「メタトンが使つたのかな？」

「その可能性も充分有り得るね。使わせない為だとは思うけど」

そんな雑談をしながらフリスクがセーブを終えるのを待つ。ふと入り口に掲げてある紋章を見上げてマジで某竜の冒険の紋章みたいだなという感想を抱いていると、服の袖を引つ張られる。

「終わったよ」

「ん。……多分この先にメタトンがいる。覚悟は、いいね？」

「もつちろんだよ」

二人で目配せをして固く手を繋ぎ、中に足を踏み入れた。

薄暗い部屋の中を進んでいくと、拓けた場所に出る。其処に、メタトンが佇んでいた。

「オーウ、イエス。来たね、ダーリン」

「ああ、当たり前だろう?」

待ちわびた様に言ったメタトンにやりと笑みを浮かべておく。

「遂に僕たちの決着の時が来た。……『壊れた』ロボットを完全停止させる時が」

「……はは、何を言ってるんだ。君、最初から『壊れてなんかない』だろう?」

私がそう言えば、メタトンはピタリと動きを止めた。

「なーんだ、やっぱり分かってたの?」

「そりゃああんなにグダグダな演技を見せられちゃあねえ」

ネタがバレていたのが分かって残念そうなメタトンの言葉にそう返す。

「そうさ……違う!! 不具合? プログラムの改変? 現実的に考えなよ。今までやってたことは全部、ただの壮大なショーにすぎなかったのさ」

ホットランドにいる間に起こった全てのネタばらしをするメタトンは、そう捲し立てる。

「そう、ただの自作自演。アルフィスはきつと君を騙していたんだ」

そうして、メタトンはアルフェイスが一番言われたくなかったであろう真実を私達に明かした。

「アルフェイスは画面に映る君を見ているうちに、君の冒険に執着するようになった。どうしても君の冒険物語の一部になりたかつたんだ」

そして、こんな猿芝居ユウキを始める切っ掛けを、メタトンは話し出す。

「そして、君の冒険に介入することにした」

黙つてメタトンの話を聞き続ける。

「彼女はパズルを再起動させ、エレベーターを止めた。僕に、君を苦しめるように頼んだ。全て、ありもしない危険から君を守るためのもの。全て、君に尊敬してもらうため……偽りの自分を、ね」

……これ、二次創作とかの真髓だよなあ。この冒険に参加したいっていうの。

話を聞いて、何となくそんな事を思う。

別にその思いが悪い訳じゃない。否定はしない。それで誰かが救われて全てがハッピーエンドに向かうのは、別に嫌いじゃないし、悲しいエンドより誰もが幸せなエンドを迎えてほしいと思うのは何てことのない普通の願いだと思う。現に私もその願エいコを叶える為に此処にいる訳だしね。だが、アルフェイスも私も、それが現実に出来てしまつた訳だ。

なんだ、自分もアルフィスのことを言えないじゃあないか、と内心自嘲しておく。

「そして今、彼女は物語のクライマックスを迎えようとしている。今まさに、アルフィスは部屋の外でその時を待っているんだ」

今私達が入ってきた入り口を指差し、メタトンはそう言った。

「そして僕達の『バトル』最中に、彼女が妨害に入る。僕を『停止』させ、君を『救助』して、一件落着。ついに彼女は、君の物語のヒロインになれるって訳さ」

メタトンは計画の全てを話し続ける。

「君は彼女を尊敬し、彼女も君に『行かないで』とすら言うかもしれない。……いやでも、その可能性は低いかな。大きいダーリンがわかってたみたいだしね」

はは、と弱々しく笑って、メタトンはそう言った。

「僕はもうこんな予定調和の三文芝居はうんざりなんだ」

メタトンの性格を考慮すればそうだろうな、と内心納得する。彼はエンターテイメントに関しては完璧主義者と言っても過言ではない。芝居の為とはいえ自ら女装したりすることから、それは何となく察することが出来る。地下世界のスターとしてのプライドもきつとあるのだろうし、気持ちはわかる。

「それに僕はこれっぽっちも人間を傷付けたいとは思っていない。僕の願いは誰かを楽しませることだけ。……観客には最高のショーをお届けしないと、当然だろう？」

ぼつりと、メタトンは自分の内心を吐露する。その声音に、自分の中の後悔が、ずんと質量を持つて大きくなって重くなる。その後悔を、今から今度こそは自分の意思で襲ってくるコイツと戦うんだと思い直して振り払い、真っ直ぐメタトンを見る。

「そして最高のショーとは何か……」

そこで、メタトンの声が弱々しいものからスターとしてのプライドを纏ったはつきりとしたものに変わっていく。そろそろ来るか、と察知させない程度に身構える。

「どんでん返しは無しだ」

スターとしての凜とした声でメタトンがそう言った瞬間、入ってきた入り口がしまった。

「ね、ねえ!!! な、な、何が起こってるの?! ド、ド、ドアが勝手にしまっちゃったんだけど!!」

ドンドンとしまった入り口を叩く音に混じって、メタトンが言う通り待機していたのである。アルフィスの声が聞こえた。

「申し訳ありません、皆様! 番組の予定は変更されました!!! 代わりに最高に盛り上がるファイナールをお届けいたします!!!」

何処からか取り出したマイクを持って、突如点いたスポットライトに照らされたメタトンがそう声高々に宣言した。その瞬間足元が赤くぼんやりと光り始める。そして、地

面が揺れ、上昇を始めた。

「う、わっ」

「きやつ」

突然体に掛かった重力に体勢を崩し、膝をつく。そう言えば此処はエレベーターだったなと思いい出した。

「本物のドラマ!! 本物のアクション!! 本物の血飛沫!! 私たちがお届けする新番組……『アタック・オブ・ザ・キラードボット』!!」

その声が響いた瞬間、周りが白黒に切り替わった。

* *Met t a t o n a t a c k s!*

戦闘を開始するアナウンスが流れる。フリスクは重力（というかGか）がかかってろくに動けない私を見てから、取り敢えず『ACT』を押した。

* *Met t a t o n | A T K 30 D E F 255*

* *S e r i o u s l y,*

h i s m e t a l b o d y i s i n v u l n e r a b l e!

『調べる』を押したのか、そんなアナウンスが流れる中何とか体勢を立て直して立ち上がる。

『そう、コアに細工したのは僕だ! 君を殺すために刺客を雇ったのも僕! だけど、ど

れも短絡的な計画だった』

自分がやった事を声高々に述べてから、メタトンはつまらなそうな声でそう締め括る。

『100倍いい方法があるんだ、分かるかな?』

「……ハッ、分かりたくもないね」

此方に問いかけるメタトンに悪態を吐き返す。すると、メタトンはやれやれというように肩を大袈裟に竦めた後、台詞を続ける。

『僕自ら君を殺す!!!』

大きな声が響き、メタトンは何もせず此方にターンを回した。

**Metataton*だ。

メタトンの意図が分からなかったらしいフリスクは、『ACT』をしても解決しないと判断したのか、『MERCY』を押し、ターンをメタトンに返す。

『聞いてダーリン。僕はずっと君の戦いを見てきた』

唐突にメタトンは私たちに語りかける。

『君は弱すぎる。このまま進んでもアズゴアが君のソウルを奪うだろう』

「……………で?」

メタトンの回りくどい言い方に思わず苛立ち、次を促す。

『そして君のソウルを手に入れたアズゴア王は人間を殲滅する』

メタトンがそう言った瞬間孤児院の皆の顔が浮かんだ。その優しい幻想を今は振り払って、上から降ってきた箱を避けていく。フリスクを見ると、器用に携帯を使って箱を破壊していた。今のところは大丈夫そうかと判断し、メタトンを見据える。

*Met t a t o n.

フリスクがまた『M E R C Y』を押し、ターンを回した。

『けれどもし僕が君のソウルを手にしたなら、人類の滅亡を止められる！ 僕なら人類を破壊から救うことが出来る！』

「はっ、抜かせ!! 私達が帰れなきや意味ねーんだよ!」

フリスクよりも近くに居たからか、私に向かって駒のように回転する箱を持ったメタトンの腕が振り回される。超スピードで動くエレベーターの重力に引つ張られながらも何とかブンブン振り回される腕をフリスクから遠ざかるように誘導しながら避けていく。

*M e t t a t o n.

『M E R C Y』を押し。ターンが回った。

『君のソウルの力でこの結界を通り抜け……ずっと夢見てたスターになるんだ!!』

そう自分の夢を語るメタトンに、今のお前はスターじゃないのかよと言いそうにな

る。喉まで出かかったそれを抑え、余計な事は今は言うべきではないと判断する。

『何百、何千……いや！ 何百万もの人間が僕を見てくれる！』

それはどうかなあ、とメタトンの言い分に内心反論する。

メタトンの夢はエンターテイナー魂が籠って格好いいものだとは思うけれど、現実的な話をすれば得体の知れないロボットが突然スター業界に殴り込みしてきて受け入れられるのかも分からないし、第一、人間のソウルを奪った時点で殺人を犯していることになる。人間のスターでさえ大スキャンダルになるのに、ロボットが受け入れられることでも思っているのだろうか。客観的に見ても見積もりが甘いな、と思う。

まだ振り回される腕を避けていくと、唐突にメタトンが至近距離で爆弾らしきものを投げ付けてくる。ぎよつとして避けようとしても間に合わないかと思ったその瞬間、エネルギー弾が飛んできて爆弾を狙い撃った。爆風を避けてから弾が飛んできた方向を見ると、フリスクが携帯を此方に向けて構えていた。フリスクに笑顔を向けてから、またメタトンに向き直る。

*Met t a t o n.

フリスクがまた『M E R C Y』を押し、ターンを回す。

『目映い煌めき！ 華々しい世界を僕は遂に手にいれる！ 多少の人間が死ななきやいけないからってそれがどうかしたかい？ ショービジネスとはそういうものさ！』

「……そんな風に考えてる時点で無理に決まってるだろ」

「な……!?!」

そうボソツと呟く。するとこの距離だからかやはりメタトンにも聞こえていたように、さつきとは段違いの早さで拳が振るわれる。それを取り出したナイフで受け流し、避け続けていく。

プルルルル………

そんな中、フリスクの携帯の着信音が鳴り響いた。

「……………」

フリスクが直ぐ様電話に出て、私に目配せしてくる。十中八九時間を稼いでくれということだろうと見当をつけたその目配せを受け、私はメタトンに向き直り、笑顔を作る。『『シヨービジネス』? ははは、ばっかじゃねーの。自分の所為で人間が死ぬのがそんな風に考えてる時点でもうスターになる資格は無いんだよ、君』

私がフリスクが電話していることに気付かれないようにそう挑発すれば、メタトンは動きをピタリと止める。

「……………何だって」

「おいおい、当たり前だろう? 現実的に考えろよ、君達モンスターで言えば、人間殺しはモンスター殺しと一緒になんだけ? そんなのが分からないほどガキじゃないよなあ、

君

夢を否定され、怒気を孕んだ声で聞き返してくるメタトンに、完全に私に気がいくように更に煽る。

「只でさえ人間は『同族殺し』ということに敏感なんだ。絶対に許されない罪として考えている。裁判もあるし、刑務所もあるが、刑務所から出た後に後ろ指を指されるようになるなんてざらにある。

……そんな中、人間を殺して奪ったソウルを持った君が現れたとしよう。どうなるかは想像がつかだろうに。それとも目を逸らしているだけかい？ あははは、考えがあつまいなあ」

ニヤリと笑みを浮かべ、煽る。すると、メタトンから向けられる殺意が色濃くなつて向けられる。かかった、と思うと同時に、フリスクが携帯を耳から離れた。

* Seem s like a good time to turn Mettaton ar
そのアナウンスが脳内を流れ、私は口角を吊り上げた。『ACT』を押ししたフリスクが真つ直ぐメタトンを見据え、パクパクと口を動かす。

* You tell Mettaton that there's a mirror behind

『え？ 鏡だつて？』

フリスクの作戦に引つ掛かったメタトンはビタリと動きを止め、後ろを見せないようにしながらフリスクに向き直る。

『グランドファイナールに向けて身だしなみを整えないとね！』

そう言つてメタトンは、くるりと後ろに振り返る。ゲームだつた時通り、メタトンの背後には、大きいスイッチが見えた。

『うーん……見当たらないな……何処にあるんだろう……？』

そう言つてキョロキョロと鏡を探すメタトンにフリスクはすかさず近付き、スイッチを切り換えた。

カチツ

という音が、しんと水を打つたように静かになつた空間に響いた。

『ねえ。』

ビタツと動きを停止したメタトンが、冷たい声を出す。

『僕のスイッチに。触つたね？』

メタトンはそれだけ発言すると、此方を向いて頭を抱える。顔代わりのパネルが白黒に点滅し出し、次第に点滅のスピードを早めていく。そして、次の瞬間、目の前が光で真っ白になった。

「うわっ……?!」

「!!」

咄嗟に目を腕で覆い、何とか目が瞑れるのを防ぐ。そんな中、

Oh……:yes

という、メタトンの声が響いた。

ガコン、という音を立てて、動いていたエレベーターが止まる。光が収まってから覆っていた腕を退け、フリスクに駆け寄って安否を確認する。

「大丈夫!」

「ぼくは平気! それよりも……」

フリスクが目線を動かした先を、私も続いて見る。すると、そこには、演出であろう土煙の向こうに、スポットライトに照らされる人型の陰が見えた。

『おやおや。僕のスイッチに触れたのならそれを意味するのはただひとつ。よほど僕の新しい体の初公演が見たかったんだね。』

カツカツとヒールを床につけて鳴る音に混じり、先程とは変わらない、メタトンの電子音のような声がある。

『全く、無礼だなあ……でも幸い、僕も長い間これを披露するときを待ちわびていたんだ』

人間であるならばグラマラスな方にカテゴリーされるであろう体が、動作を確認するように艶めかしく動かされる。

『だから……お礼に素敵なご褒美をあげるよ』

そう言つて、ヒールの音を響かせながら、姿を変えたメタトンが近付いてくる。

『君の人生の最後の瞬間を……』

そして、次の瞬間、パツと辺りが明るくなり、その姿を余すことなく晒した。

『最高に美しく飾つてあげよう!!!』

白黒の世界で、メタトン——メタトンEXがそう声高々に宣言し、改めて戦闘が開始された。

その瞬間、

『……あれ……僕は、誰に楽しんでもらいたかつたんだっけ……う?』

目的を見失い、夢の行き着く先を見失ってしまった彼の悲しみに打ち拉がれる姿を幻視した。

97. メタトンEX戦

〔Lily〕

*Metatona EX. make his premiere!

アナウンスにハツとして目を瞬かせると、先程の今にも泣き出しそうな顔をしたメタトンは直ぐに消えていった。今までのボスモンスター全員に起きているこの現象も転生特典か何かなのだろうかと考えながら、一応辺りを見渡しておく。白黒ではあるが、天井や大きな丸型に切り抜かれた床に幾つもあるスポットライト、シヨーらしい（あんま行つたことないから偏見だとは思うけど）BGMを垂れ流す大きめのスピーカーが端に設置されていたりするのを見て、ここはどうやらステージの上らしいという事を理解する。そして、撮影用であるだろうドローンが浮かぶ空中に表示された大きなグラフと『視聴率』と書かれた文字を見て、こんな風になつていたのかと思つた。

……とか思つたけどBGM若干メタトン（EXの方）のテーマの『Death by Glamour』に似てんな。まさかこんな所でもう二度と聞くことは無いだろうなと思つてた前世で聴いた曲のアレンジ（？）が聞けるとは思わなかつた。いや今は頗る煩いうえで邪魔でしかないんだけどさ。

そんな事を思いながら見渡すのを辞めてまたメタトンに向き直ると、彼は決めポーズか何なのか、ゲームだった時も見た謎のポーズを繰り返していた。ゲームだった時もだったけど見てるとちよつと腹が立つ。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

ふと、フリスクが話しかけてくる。顔を見てみれば、フリスクは不安そうな顔をしていた。

「…………メタトン、殺しちゃうの？」

フリスクはたった一言そう言っ、私の服の袖を掴んだ。

「…………フリスクがどうしたいかによる」

私が一言簡潔にそう言えば、フリスクは目を伏せ、少ししてから、顔を上げて私を真っ直ぐ見据えた。

「やだ、殺したくない。この地下には、あの人が多分必要だと思うから。あと、出来れば友達になりたい」

「ん、わかったよ。その代わりに、フリスクはフリスクに出来る精一杯をしてね」

「！ うん」

フリスクの意思を確認し、私は改めてメタトンを見る。さて、これで『殺す』という

選択肢は無くなった。どうするかな。

* METTATON EX-ATK 47 DEF 47

*

His weak point is his heat-shaped core.

『ライト！ カメラ！ アクシオン！』

フリスクが『ACT』を押ししたことによつてアナウンスが流れ、思わずメタトンの下腹部辺りにある白いハートを見る。ダメージが通るつて事は……一応ソウルつてことになるのか？ あれでもメタトンは元々ゴースト一族だったから攻撃無効の筈じゃ、あ、でも確かあ ^{Genocide} のルートじゃマッドダミー君が怒りのあまりダミー人形と同化して肉体を得たんだつて。じゃあ今のメタトンは機械と同化してるとして考えて、あれがやつぱりソウル、もしくははその代用品つてことでもいいのか。

「僕の美しさに見惚れてるのかいダーリン、なら遠慮無く殺しちゃうよ!」

そう考えているとメタトンは一言そう言つて長い脚を動かして私達に近付き、連続キックを叩き込んでくる。二人で左右に避け、私にヘイトが向かうことを狙つて横からナイフを当てないように少し振る。するとメタトンはすかさず私の方を向き、脚で私のナイフを持つ右腕を狙つてくる。その脚の追撃を素早く腕を引いて後ろに避け、メタトんと距離を取つてフリスクの傍に戻る。

「ハッ、見惚れる？ なわけねーだろ、自意識過剰も大概にしろよ。私が見惚れるのは今のところその子ただ一人だつての」

そして鼻で嗤い、私は笑みを浮かべた。

*Met t a t o n.

メタトンの攻撃が終わり、私達にターンが回る。フリスクがキョロキョロと周りを見て、そして少し考えてから、私の服の裾を引っ張った。

「何？」

「……………ちよつと考えたんだけど。あそこに視聴率つて、あるじゃない？」

そう言つて、フリスクは空中に浮かぶグラフを指し示す。

「うん、そうだね。それで？」

「……………あの視聴率が一杯になれば、メタトンが満足して、和解できるようになるんじゃないかなつて、思ったんだけど……………どう？」

フリスクから話された案に少し驚く。『Player』がいるとはいえ、もうそこまで迫り着いたんだなと思ひながら、私は少し考えるような素振りをする。

「……………そうだね。メタトンにはスターとしての誇りがあるようだし、それを利用しない手は無い。もしかしたら、和解できるかも。でも、本当にそれでいいんだね？」

「うん」

間髪入れずに頷かれ、私はほっとした。良かった、殺すとか言い出さなくて。

「……分かった。フリスクの意思を尊重する。やれるだけやってみよう」

「！ うん！」

作戦会議を終え、フリスクが『ACT』を押し、メタトンを見据えてキリツとした顔をする。そして、それはドラマチックなポーズを取った。

*You あなたは posed は dramatically に ポーズを took を取った.

*The 観客 audience は nod いて.

メタトンはフリスクの突然の行動に一瞬面食らったのか目を丸くして止まったが、少ししてからメタトンが笑い出した。

「ははは！ いいねダーリン、君ってば最高だよ！」

そして、ニヤリとメタトンは笑みを深めた。

『ドラマ！ ロマンズ！ 血飛沫！』

「血飛沫はいらんわ」

メタトンにそう返し、私はメタトンが呼び寄せたらしい小型メタトンにナイフを構える。すると、フリスクが私の前に出た。

「!? フリスク、なにして」

ぎよっとした私の前に立ったフリスクは迫ってくる小型メタトンと共に飛んでくる

爆弾をエネルギー弾で狙い撃ち、爆発させて諸とも吹き飛ばす。爆発で壊れた小型の残骸が爆風に乗って頬を切ったが、私は構わずフリスクを見た。

「……へへ、やっとお姉ちゃんを守れた。やった」

何してんだと叱ってやろうとした言葉が、誇らしげな笑顔で振り返ったフリスクのその一言で勢いを無くして吐き出せなくなる。喉まで出かかって行きどころの無くなった言葉を飲み込んでから、私はフリスクの頭を撫でる。

「……色々言いたいことはあるけど、ありがとね、助かった」

「ううん、どういたしまして！」

そんな会話をしてから、またメタトンを見据える。

* Metaton.

視聴者を楽しませる為か、何度もポーズを取るのを繰り返すメタトンを見てから、フリスクは『ACT』を押し、ビシッと指差した。

*

You say you aren't going to get his at ALL.
あな は 全 て の 攻 撃 を 避 け る と 言 い 切 っ た

「全部回避してみせるって？ 大胆だね、ダーリン！」

メタトンに向けて大見得を切ったフリスクに、メタトンは笑顔でそう言った。

「……はははっ、よく言った。それじゃあ私は、お前にこの子に傷一つつけさせないこ

とを此処に誓つてやるよ！」

今度は私がフリスクの前に立ち、そう宣言する。

「……いいのかい、そんな大見得切つて」

一瞬目を丸くしたメタトンがそう言った。

「大見得？ はは、違うさ。今までやってきたことを繰り返すだけだつつの」

*—Ratings gradually increase during Mettaton's turn《Mettatonのターン中でも視聴率が徐々に上がるようになった》。

そう言い切つた途端、後ろからバシンと結構強めに叩かれる。

「いつてー！」

叩かれた方を見れば、フリスクが滅茶苦茶不満そうな顔をしていた。ごめんて。

『僕というアイドルを皆が求めてる！』

そう言つてメタトンはまた蹴りを繰り返して出る。ナイフと手を駆使して受け流している、不意に腕が振られて箱を叩きつけられそうになる。咄嗟に左手で庇おうとした瞬間、フリスクが少し横に擦れ、箱を狙い、撃つた。飛び出したエネルギー弾は見事箱を破壊する。それを見てメタトンは苛立った様に顔を歪めてからまた蹴り技に切り換え、脚を振るつた。腹に向かって出された脚を横に流してから掴んで抱えて固定し、

メタトンが反撃を行う前に離してバランスが崩れた所を腹のソウルの形をした部分に向かつて踵で思いつき蹴りを入れた。

ゴツ

「うっ」

硬い物を踏みつけた感覚を足裏に覚える。流石に簡単にダメージを通させてはくれないかと思いつながら、蹴りの勢いでよろめきながら距離を取ったメタトンの腹を見る。傷は一つも見当たらず、やはり硬い硝子——防弾硝子辺りの特殊な何かに守られているらしいと推測する。

「……ははっ、やってくれるじゃないか」

新品のボディを足蹴にされたことに腹が立ったのか、苛立ったような声でメタトンはそう言うって私を真っ直ぐ睨み付ける。怖じ気付いてしまわないよう、その目線に笑顔を返した。

*Metaton.

ターンが此方に回った瞬間、フリスクが『ACT』を押して、ターンを進める。そして、私よりも一歩前に出て、ドローンの一体に向かつて指を突き付けた。何をするつもりなのか察した私は、すぐにフリスクを庇えるように構えておく。

*You turned and scoff at the audience.

*—They're rooting for your destruction

this turn 《このターンの間観客はあなたが倒されることを期待している》

!

『カメラに向かって笑って!』

そう言いながらフリスクに向かって腕を振り回すメタトンとフリスクの間に割り込み、ナイフをブラフで振る。ナイフにメタトンが反応した隙を縫ってフリスクがまたエネルギー弾を発射し、腕と後ろに構えていたミニメタトン達を撃ち落とす。傷付けば視聴率が下がったのに勿体無いことしたなど思いながら、フリスクをいつでも庇いに行けるように構え続けておく。

*Smell like Metton.
M e l l t a t t o n の匂いがする。

流れたアナウンスに思わずどんだよと心の中で突っ込みつつ、嗅いでみる。華やかな香りの中に、何となく油の匂いが混ざった匂いがした。あんまりいい香りではない。ピツという音がして、ターンが回った。

*You posed dramatically.

*The audience nods.

またフリスクがアナウンスに合わせてポーズを取る。昔まだ父さん達が生きてた時に友達からダンスを習っていたからか、結構決まっている。

『おっと、ここで抜き打ちテストの時間だ！ キーボードを用意してくれるかな……』

「キーボードオ？ 無いぞそんなもん」

『今回のお題はエッセイ！』

「聞けよ」

そう言った瞬間、フリスクの目の前にまたミニメタトンが現れ、手の中にキーボードを落としていった。あ、支給するんだと思いながら、フリスクが戸惑いながらタイプピングするのを見つめる。何処に繋がってんだと思っていると、空中に文字が浮かび上がってくる。ぎよつとして見ていると、文字は変換される前にぐちゃぐちゃに白色で塗り潰されて見えなくなった。『Player』が関わっているからか、と考え、ただ待つておく。

『……………え？』

メタトンが口を開いた瞬間、その声がザーツという大音量の雑音で掻き消された。その大きさに思わず耳を押さえてしまう。その次にはメタトンは喋り終わると、その雑音はすつと収まった。

……………『Player』に関わる事は悉く規制されると踏んではいたけど、まさか、キャラクター、それもボスにあたるキャラクターの台詞にも規制がかかるとは。

予想していなかった事態が訪れ、一瞬焦る。

確かこのタイピングは『Player』が打ち込んだ内容によってメタトンの台詞が変わる。それが『Player』に関係すると『判断された』のか。……

一体だれに？

「お姉ちゃん?」

* Mettatton is saving your essay for future use.
 「ん、ああ……………何でもない」

近付いてきていたフリスクの声がけとアナウンスにハツとする。いけない、またか。頭を振り、思考を切り換える。取り敢えずアナウンスにどんな場面で使うんだよ、と思しながら、私の挙動不審をきよとした顔で見っていたメタトンを見る。

「すまない、少し眠くてね。ブーツとしちやったよ。さて、ショーを続けようか」

ヘイトを集めるために暗に『このショーがつまらない』という意味の皮肉を込めなが

らナイフの切っ先をメタトンに向ける。皮肉に気付いたらしいメタトンは一瞬顔を怒りに染め、そして視聴者を気にしてポーズを取り続けていく。

ピツという音がして、ターンが回った。

*You posed dramatically.

また前に出てポーズを取ったフリスクの決めポーズは、父さん達がまだ死ぬ前に友達からダンスをちよこちよこ習っていたからか、中々様になつていた。それに習い、私もポーズを取っておこうと思ひ付く。取り敢えずリユックから先程入手したテロガンハットを出して被り、くいっと鏢をもつて学帽のように下げ、ポケットに片手を突っ込んでから、ビシッとメタトンに対して指を突き付けた。

「テメーは、俺が裁く！」

「お姉ちゃん!？」

学帽つて時点でまあわかる人なら分かるであろうポーズを取る。一応事前に漫画を読んでいたフリスクが誰のポーズなのか察したのか、目を見開いて信じられないようなものを見る目線を寄越した。うん、此処でするポーズじゃないのは分かっているんだ。でもやりたかつたしここらでそろそろふざけとかないとまたキレそうになるんだ。許せ。というかテロガンハットならあれだな、某銃は剣より（以下略）とナンバーワンよりナンバーツーで有名なメギヤンの人にすれば良かったかな。まあいつか。

*The audience nods.

『君のエッセイは本当に心が籠っていたね。それじゃあ僕のハートも見てもらおうか』
「は？」

何を言っているんだコイツは、と思いながらポーズを解除しメタトンを見てみると、腹の部分が開き、中からハート型のソウルが飛び出してくる。そして辺りに電撃を撒き散らし始めた。

「！ フリスク！」

「オツケー！」

回避してからfrisスクに一言声を掛けると、察してくれたのかfrisスクは携帯を構え、ハートに向かって弾を打ち出していく。

「あれに弾を当てたら電撃が来るみたい、気を付けて！」

「わかった！」

frisスクからの忠告を受け取ってから、妨害しようとしてくるミニメタトン達を相手取る。電撃の中近付いてきたところをナイフの柄を当てて落とし、それを繰り返す。

「うっ、ぐ」

そんな中、気が緩んでいたのか、ハートから出された電撃を回避していた際、最後のミニメタトンに気付かず、ハート型の弾幕が腕を掠る。それに気を取られて足を止めた

内に、電撃の追撃を喰らってしまった。体に痺れが残る中最後のミニメタトンを落とし、グシャツという音を立てて潰れた。潰せるのが分かったのはいいけど、いちいち潰してたら切りがないとぼんやり思った。

*Met taton.

「お姉ちゃん！」

電撃が当たると見るのを見たららしいフリスクが心配そうな声をあげる。

「大丈夫。すまん、気を取られちゃった」

あはは、と軽く笑って誤魔化し、メタトンを見据える。メタトンはダンスを披露し、ひらひらとステージの上を移動していた。

ピツという音がして、ターンが回る。

*You say you aren't going to get his at ALL.

*Ratings gradually increase during Met taton's turn.

一歩前に出たフリスクがまたメタトンに指を突き付けて宣言すると、そうアナウンスが流れた。

『まだまだ、ウオーミングアップだよ！』

そうメタトンが言った瞬間、ミニメタトン達がまた現れる。フリスクが弾を撃ち、それでも撃ち漏らしてこつちに來たものを私が叩き落としていく。

*Met t a t o n.

ターンが回り、此方のターンになる。フリスクが『ACT』を押し、ターンを回す。

*Y o u p o s e d d r a m a t i c a l l y.

*T h e a u d i e n c e n o d s.

またポーズを取ったフリスクを横目に、メタトンを見据える。

『それじゃあダンスフロアでの君を見せてもらおう！』

は？ と思った瞬間、天井からミラーボールのようなものが降りてくる。そのミラーボールに反射した光が、青色だった。

「！」

私とフリスクを回転させたミラーボールが青い光で照らす。この世界における『青』は止まっていけないといけない法則を当て嵌め、動きを止める。二つ三つ青い光をやり過ぐすと、今度は白い光が迫ってくる。

「まず、」

「えいつ！」

『まずい』と言おうとした瞬間、フリスクが何を思ったのかミラーボールをエネルギー弾で撃った。弾がミラーボールに直撃すると、青と白の光の順番が反転した。『Play er』が正解を選んだことに驚きながら、取り敢えずやり過ぎしていく。

「ナイス！」

「へへ」

一言簡潔にそう言葉を交わして、メタトンの動向を探る。

*M e t t a t o n .

ふと、空中の視聴率を見る。表示された数字は五千を少し越えたぐらいを指していた。メタトンを『M E R C Y』する為に必要な数字は攻撃で手足欠損で一万、五体満足で一万二千だった筈。『P l a y e r』がどう行動するかにもよるが……どっちを選ぶだろうか？

フリスクが『A C T』を押して、ターンが進む。

*Y o u p o s e d d r a m a t i c a l l y .

*T h e a u d i e n c e n o d s .

『このペースについてこれるかな!?!』

またポーズを取ったフリスクがまた回転しだしたミラーボールを見定め、エネルギー弾を撃った。先程よりもずっと早いミラーボールの速度の中を落ち着いて撃っていく

姿に、私も若干安堵を覚えた。度胸もあつた方がいいものね。

*Metaton.

ターンが回り、またメタトンがダンスをし始める。フリスクが『ACT』を押し、ターンを進めた。

*You posed dramatically.

*The audience nods.

『ライト！ カメラ！ 爆弾！』

メタトンがそう言った瞬間箱に縄で縛り付けられた爆弾が上から降り注ぎ始める。それを見たフリスクが携帯を構え、弾を撃ち出していく。爆弾に弾が当たった瞬間、少し間を置いてからビームのような物が一直線に此方に飛んできた。ぎよつとしながら左右に別れて回避し、フリスクはそのまま冷静に爆弾処理を続けていく。やだ、うちの妹ってば鋼メンタル。

*Metaton.

ターンが回る。フリスクがポーズを取ってターンを回す。

『盛り上がってきたね！』

メタトンの言葉にちらつと視聴率に視線をやると、六千を越えていた。早いなと思いつつながら、落下速度を速めた爆弾を冷静に解除していくフリスクを見守る。何も出来ない

のが歯痒い。

「ほら、僕の事を忘れちゃダメだよ！」

「！」

爆弾を粗方処理し終わったタイミングでフリスクに攻撃を仕掛けようとしたメタトんに一気に近付いてナイフを持った右腕を横薙ぎに大きく振るう。

「そう来るだろうと思ってたよ、大きいダーリン！」

「なっ」

一歩下がって攻撃を回避したメタトンの角が上がった口から溢れた言葉に『まずい』と感じた時には、横っ腹に激しい痛みが走り、そのまま横っ飛びに吹き飛ばされる。

「が、はっ……ぐぐ」

「お姉ちゃん！」

少しの浮遊感の後床に叩き付けられ、上手く息が吸えず、呼吸が乱れる。明滅する視界で頭を振って、何とか体勢を立て直して立ち上がる。ズキズキと痛みを訴える横腹と片足を軸にして立っているメタトンの体勢から見て、蹴られたらしいと察する。

「さつきからダーリンに攻撃すれば、必ず自分にヘイトが行く様に動くんだもん。僕がそれぐらい気付かないと思った？」

にっこりと、愉悦を含んだ笑顔でメタトンが笑う。

「つまりは、ダーリンを人質に取ってしまえば、君は下手に動けないってことだよな？」
「きゃっ」

「!!!」

私を気遣ってか此方に来ようとしたフリスクの目の前に、メタトンは畳んでいたもう片方の脚を振り下ろす。その場で尻餅をついて回避したフリスクにメタトンは向き直り、手ヲ伸ばそうトスる。

「ひっ」

「!!! さわんなああああ!!!」

力一杯床を蹴って全速力でメタトンに近付き、ナイフの柄を横腹に叩き込む。そのままの勢いでメタトンの高いヒールを狙った足払いを入れ、重心が横に擦れた所で思いつきり全身の体重を掛けたタツクルでメタトンを薙ぎ倒す。

「いっ……」

その隙にフリスクの手を握って立ち上がらせ、メタトンから距離を取る。

「……………あははッ、『手負いの獣は恐ろしい』って言うのは本当みたいだね。普通突っ込んでくるかい、この状況で」

ガタガタという機械音を立てながらメタトンは立ち上がり、私を睨みながらそう言った。蹴られた片腹と自分よりも硬い物を蹴った負担で痛む足に力を入れ、私はメタトン

に笑い返しておく。

「ははは、『窮鼠猫を囓む』って言う諺もあるからなあ」

*Met t a t o n.

私がそう言えば、メタトンは苛立った様に一回地面を強く踏み、ターンを回してダンスを再開した。

「大丈夫……?」

「ん、今はまだへーき。それよりもとっとと終わらせちやおう、こんなショー」

「……………うん」

蹴られた横腹を見て、フリスクが泣きそうな顔で見上げてくる。その頭を撫で、私はフリスクの手を『ACT』に誘導する。

*You posed dramatically.

*The audience nods.

『労働基準法は守らないとね、休憩の時間だよ!』

「労基とかあんの……………」

ポーズを取ったフリスクに待ったをかけ、メタトンはそう言った。無きやまずいよなと思つた所で、ふと自分は会っていないモンスターを思い出す。そう言えばバーガーパ
ンツってあだ名のモンスターが働いてたよな…………? いや、これ以上はやめておこう、

うん。

*Metaton.

暫しの休憩タイムを挟んだメタトンは、ショーが盛り上がっていくに連れて、ダンスのスピードとキレを上げていく。機械の体って結構重い筈なのに良くあんな動きが出るなど酷くなってきた横腹辺りの痛みに耐えながら思う。これももしかして骨逝ったか？ え、治るのか、これ……

*You posed dramatically.

*The audience nods.

『僕たちの関係、冷めきつちゃったね、ダーリン……』

「……ああ？」

突然妙な事を言い出したメタトンに、思いつきり低い声をあげておく。

『もう一度、「心の触れ合い」をしないかい？』

「……！ お姉ちゃん、下がって！ これはぼくの番だ！」

フリスクがそう言っただけで前が出るや否や、メタトンの腹の部分が開き、盾代わりである箱に囲まれたソウルが飛び出してきた。それを見た瞬間フリスクは携帯を構え、先程とは比べ物にならないほどの速撃ちでソウルの盾を剥がし、ダメージを与えていく。抵抗するように放たれた電撃を痛みが走る体を動かして出来る限り最小限の動きで避け

ていく。それを繰り返していくうちに、ソウルがメタトンの体に引つ込もうとする。その時だった。

バチバチバチツ

音を立てて、メタトンの肩——正確に言うならば、腕の付け根部分から火花が上がった。

「!？」

驚いてメタトンを注視していると、

ガシャンツ

という音を響かせながら、メタトンの両腕がステージに落ちた。

「……………えっ?？」

そこまで、余裕そうにしていた顔が、突如として落ちた腕を見て歪む。その顔は、動揺と恐怖が混ざったような、そんな顔をしていた。

*M e t t a t o n .

十中八九『動揺』はあの体の脆さと落ちた腕に対して、そして『恐怖』は……………自らが死んでしまうかもしれないという本能的な拒絶からだろうか。そんな事を考えながら、視聴率を見る。表示された数字は、七千ちよつと。腕が削れたから……………あと、凡そ三千。いけるか……………?」

* You posed dramatically.

* The audience nods.

フリスクがポーズを取るのを横目で見てから、私はメタトンを注視する。

『う……腕が？ ……こんな魅力的な脚があるのに、腕なんて必要ないさ！』

今更恐怖感が出てきたのか、メタトンの声が少し震えていた。ゴーストだった時は無縁だった死の感覚が近付いてきているのが、恐ろしいんだろうなと思いつつ、腕が無い所為で上手くバランスが取れずによるよると立ち上がるメタトンの目を見る。さらに右目にかかっていた前髪が揺れ、右目が見えた。

『それでも勝つのは僕さ！』

「いや、私達さ」

腕を失ってもなお、その機械の眼には、希望があった。また降り注ぐ爆弾を解除しようとして携帯を構えたフリスクが、何かに気付いたように目を見開き、慌ててエネルギー弾の照準を巻き付いている箱の方に移す。そのまま箱を撃ち続けていると、突如としてフリスクが撃たずに床に落ちた爆弾が浮かび上がる。そして先程降ってきた軌道を再現して天井に戻っていく。その攻撃を見て、メタトン戦であった巻き戻し攻撃かとやつと気付いた。

「！」

フリスクが避けきれなかった箱をナイフを突き立てて壊し、そのまま踏み潰す。箱風情がフリスクに触んな。

*M e t t a t o n .

ターンが回つても、やはりバランスが取れないのか、少しよろめきながらもメタトンは視聴者を喜ばせる為にダンスを続ける。その姿は、逆に痛々しかった。

*Y o u p o s e d d r a m a t i c a l l y .

*T h e a u d i e n c e n o d s .

『おいで……い』

そうメタトンが言った瞬間、またあの攻撃が始まる。フリスクは箱だけを狙い撃ち、この後安全に避けられるようにしていく。フリスク、エイム力ヤバいな。

フリスクの力によって安全に爆弾を避け続け、今度はダメージを受けずにやり過ぎた。

*M e t t a t o n .

ターンが此方に回り、メタトンがまたダンスを始める。ふらふらとしながら踊る姿は、今にも倒れてしまいそうな危うさがあった。

*Y o u p o s e d d r a m a t i c a l l y .

*T h e a u d i e n c e n o d s .

『ショーは……続けないとね!』

フリスクがターンを進めると、メタトンはそう言った。次に、また爆弾と箱が降ってくる。フリスクに射撃を任せ、私は右腕でナイフを振るい、近付くまで来た箱をぶっ壊していく。

*M e t t a t o n .

視聴率を見る。表示された数字は、八千五百とちよつと。あと、少し。

*Y o u p o s e d d r a m a t i c a l l y .

*T h e a u d i e n c e n o d s .

『ド……ドラマ! ア……アクション!』

先程よりも揺れる体で、それでも意思は消さないまま、メタトンはショーを続ける。フリスクが撃った箱の残骸がステージに降り注ぐ中、立ち続けるメタトンを見て、ふと思う。

もしかしてコイツは、今『此処』^{ステージ}に、『スターとしてのプライド』だけで立っているのかと。

*M e t t a t o n .

私のただの考察だが、彼の性格を考えるに、そうなのではないだろうか。

何となく、彼に対する思いが変わる。

……やつぱり、凄いな。この地下世界のモンスター達は。プライドや夢——『想い』だけで、ここまで戦えるのか。

*You posed dramatically.

*The audience nods.

『リ……ライト…… カ……カメラ……』

戦い始めた時とは全く異なる弱々しい声で、メタトンは続ける。そして、切れたように、チツ、と舌打ちをして、私達を睨みつけた。

『もう充分だろー！ 君は本当に人類の破滅を望んでいるのか!? ……それともそんなに自分に自信があるのかい?』

前言撤回。私も人のこと言えないけどコイツ身勝手すぎる。

やれやれと言うように肩を竦めてやれば、それと同時にまた箱に巻き付けられた爆弾が降ってくる。また重りが追加されたのか、かなりの速さで落ちてくるそれを、フリスクは難なく撃ち抜く。またビームが発生したが、それさえもひよいひよいと避けていく。私も体を動かし、何とか避け続ける。

*Metaton.

ターンが回る。視聴率は九千百。

*You posed dramatically.

*The audience nods.

『ははッ、感動的だね!』

「いや、バカじゃないのかお前。滅亡を望むって、そんな訳ないじゃん。私やこの子の家族同然な人達だっているんだ、そんな物は望んでないよ」

内心呆れながら、我ながらばっさりと、メタトンの言葉にそう返した。

「なら、どうして抵抗するんだ!!」

「は? 生きていたいからに決まってるじゃん。何言ってるの?」

至極当然な事を述べれば、メタトンは押し黙る。

「とうかかね。友達でもない『他人』であるお前に、どうして命をくれてやらなきやいけないのさ。そんな都合のいい話は無いぜ」

「……………うるさい!!!」

そう言い切ってやれば、メタトンは激昂し、私に対する憎悪を露にし、睨み付ける。恨まれる謂れは無いんだけどなあ。

『そうさ、ダーリン! 生き残るのは僕か君か、どちらか一人だけ!』

そんなことは無いと思うけど。

などと思っていると、メタトンは言葉を続ける。

『……だけど君だってもう勝負の行方は分かっているだろう?』

「ああ、勿論だ」

だって、こつちには『Pl^カay^ミer^サマ』が居るんだから。

私は痛みが走る体を動かし、ナイフを構える。

『しっかり目に焼き付けておくんだけ、人類のスターの実力を!!』

カメラ越しに見ているモンスター達に語りかけるように、メタトンは大声でそう言った。すると、メタトンの腹部から、爆弾付きのソウルが飛び出してきた。

「!!」

「おっと。君の相手は私だ」

携帯を構えたフリスクに向かって脚を振り上げて突っ込もうとしたメタトンの前に立つ。……いや、違うか。目の前にいるコイツはただのボディーだ。目に覇気がない。

「フリスク、そつちは任せた! 私はコイツ何とかする!」

「オツケーお姉ちゃん! 任せて!」

フリスクの返答を聞いてから、私は改めてボディーの方に向き直った。

……一つだけ仮説を建てると。メタトンは元々ゴーストだ。だが今私の目の前に居るボディーに乗り移って、元々ソウルだけだった存在としての形からソウル本来の形——まあ、ハートに形が固定された筈だ。まあ暴論ではあるけど、これが適用されたなら、

メタトンの本体は今フリスクが対峙しているソウルがメタトンの本体ってことになる。それでもコイツが動いてるってことは……遠隔操作が効くのか、それとも自動操縦機能が盛り込まれてんのか……どちらにせよ腹立つこと限りないな。

そう仮説を建てながら、私はボディーに向かって笑顔を作った。

「ほらかかってこいよ、この木偶人形」

「……………」

私の挑発にも応じず、無言で連続蹴りを繰り返してくるメタトンボディーに一抹の不気味さを感じながら、蹴りを当たらないようにいなし、受け流していく。

「絶対に……は、通してやらない」

「……………」

そう言っつて、睨み合うこと、少しの間。

ヒュッ

私の横を何かが通り抜ける。そしてそれは、メタトンのボディーの腹部に、すつぽり収まった。

バチバチバチッ!!!

その瞬間、激しい音を立てて、メタトンの体の足の付け根から、火花が上がった。そして、

ガシヤンツ!!!!

メタトンの脚が、取れた。

………!!! 『M視E聴R率C率Y』条件!!!

ばつと、私は焦りながら空中に表示されているグラフと、『視聴率』の数字を見る。

その数字は、

寸での所で、
一万を越えていた。

98. 氣付いたモノ

〔Met t a t o n〕

ガシャンツ、という音を立てて、僕の新しい体が床に叩き付けられる。大方、両腕に続いて両足も取れてしまったからだろうと思ひながら、ステージの真ん中で、ぼんやりと天井を見つめる。コツコツ、と此方に向かつてくる足音を聞きながら表示されている視聴率を見て、僕の心は驚愕で満たされた。

「Oh、この視聴率を見てよ！ こんな高記録は初めてだ!!」

興奮のまま、僕がそう言えば、近付いてきていた大きいダーリンと小さいダーリンも天井を見上げる。大きいダーリンは直ぐに視線を僕に戻し、横腹を庇いつつ、僕の傍に座つて僕の顔を覗き込んだ。ああ、きつと殺されてしまふらうな、と覚悟して目を閉じる。

最後にもう一度だけ、遠目からでもいいから彼に会いたかつたと後悔しながら、ダーリンが持っていたナイフが振り下ろされるのを待つ。尤も、もう声さえも忘れてしまった僕が、彼に会う資格なんて無いのだから、当然と言えば当然の終わりなんだろうな、と暗い視界の中でぼんやりと思う。

それにしても、ナイフが何時まで経っても僕の体を貫く感覚がせず、不信感が湧いてくる。

「……………何してんの。番組の主役が番組の途中で寝るんじゃない」

少し間があつてから、ナイフが空を切る音の代わりに呆れたような声が聞こえ、からん、という何かが落ちる音が響く。うっすらと目を開けようとすると、不意に重い体が起こされる感覚を覚えた。驚いて目を開けると、呆れた顔の大きいダーリンが結構近い距離で見えた。

「……………僕を、殺さないのかい？」

少し混乱しながら、僕はナイフを床に落としてまで僕を抱き起こしたダーリンに訊ねる。

A i p h y s に協力していたとはいえ、最終的には自分の意思で僕はダーリンに殺されても可笑しくない事をしたのに。四肢を無くして逃げ場の無い今が、絶好のチャンスなの筈なのに、どうして。

幾ら優秀な機械の頭で考えても、ダーリンのしていることの意味が分からなかった。

「……………うん。この子が、そう望んだからね。私も自分の手を汚すつもりは毛頭無かったです」

僕の疑問に、大きいダーリンは同じ様に傍に座った小さいダーリンを見て、ただただ

淡々とそう答えた。

「そんな事より、ほら。番組、進行しろよ」

お前の番組だろう、と話を交える様にダーリンに急かさず、僕はハツとする。そうだが、今はまだショーの途中だ。スターが倒れてちや、意味がない。

「ほん……新記録は記念して視聴者に電話で参加してもらおう！」

ステージ裏で待機していてくれるスタッフ達にも、視聴者にも聞こえるように、僕は声を張り上げる。

「たった一人の幸運な視聴者だけが僕とお話できるよ……僕が地下世界から永遠にいなくなる前にね！」

「お前、まだ諦めてなかったのか……」

「さあ、誰が一番に電話をくれるかな！」

さらに呆れた様な声を出すダーリンを無視して、僕は胸の部分に内蔵されたスピーカーから流れるコール音に耳を澄ませます。

プルルルル……

沈黙の中でコール音が流れ、ぷつりと切れた。繋がったらしいと判断した僕は、繋がった視聴者に語りかける。

「やあ、出演おめでとう！ 僕たちの最終回、楽しんでくれたかな？」

『僕たち』と言った所で一括りにするなどでも言いたげな顔になった大きいダーリンからちよつと目線を逸らしつつ、スピーカー越しに繋がっている視聴者の返答を待つ。沈黙がまた流れ、これじゃあ放送事故だなあと暢気に思っていると、

『……………あつ……………』

間が開きながら、やつと視聴者から返答が返ってきた。ふと、漏れ出るような小さな声に、僕は泣きたくなるほどの懐かしさを覚えた。そして、その声がやつと誰の声なのかを理解して、愕然とする。

ああ、待つて。嘘でしょ。なんで。

『やあ……………Metaton……………』

スピーカーから流れてきた、特徴的な声は。僕が、『Metaton』になる決意を抱く切つ掛けになった、大切な彼の声だった。

『ぼく、君の番組が本当に大好きだったよ……………』

記憶にある中の声と全く変わらない、自信無さげな、おどおどとした喋り方で、スピーカー越しの彼が、ショーの感想を静かに告げていく。

『ぼくの人生はとても退屈なものだったんだ……………でも……………テレビに映る君の姿を見てると……………まるで自分のことみたいにワクワクしてきて……………』

吃りながら、彼は続ける。

嬉しかった。僕の晴れ姿を一番傍で見ているほしかった彼に、そう言ってもらえて。

『うまく言えないけど、えつと……これが最終回なんだよね……?』

そこで、スピーカー越しに、少し鼻を吸るような音が聞こえた。

『ぼく、寂しいよ……Metaton……』

先程まで喜びに満ちていた心が、彼の震える声で、きつと、泣いている彼の声で、悲しみと寂しさに満たされていく。ああ、お願いだよ、僕の為に泣かないでよ。そんなことされたら、僕まで泣きそうになってきちゃったじゃないか。

『……ああ……こんなに長話するつもりじゃなかったのに……ああ……』

ハツとして、彼が話や電話を切り上げようとする時の癖を聞いて思いだし、慌てて僕は彼を引き留めようと声をあげる。

「ま、待って！ 切らないで、Bl……」

ぶつツ、と、僕の『まだ話したい』という想いは彼には伝わらず、スピーカーから流れる声は、もう聞こえなくなった。

「……………」

僕の心を、寂しさと虚しさが満たしていく。

「……………Metaton……」

そんな僕の心情を察したのか、大きいダーリンが僕に声をかけ、小さいダーリンが僕の頭を小さい手で撫でてくれた。合成繊維で出来た僕の髪を、柔らかくて暖かい物が優しく触れては離れる。その優しさにまた昔の彼を思い出して泣きそうになり、僕は頭を振って、シヨールを続けようと思いつく。

……シヨールは、例えばどんな状況でも、続けなくちゃ。

「じゃあ、もうひとり繋いでみよう!!」

泣きそうな気持ちを振り払って、僕は声を張り上げる。すると、またスピーカーからコール音がして、声が流れる。

『Metton、あなたの番組は私たちをハッピーにしてくれたわ!!』

先程の彼の電話を皮切りに、色々な声が僕のスピーカーから流れてくる。

『Metton、君がいなくなったらどの番組を見ればいいか分からないよ』

『Metton、私のMetton型の心にMetton型の穴が開いたみたいだわ』

『Metton!』

『Metton!』

『Metton!』

次々に流れてくる声に虚無感で一杯だった僕の心は、また暖かいもので満たされてい

く。

「ああ……………僕は……………」

その暖かさに思わず、『M e t t a t o n』僕になる前の口癖が溢れる。

「わかったよ……………」

そして、気付いた。

僕が本当に欲しくて堪らなかつたモノは、夢ずっと前からもう、僕の手の中にあつたんだ、と。

「みんな……………本当にありがとう」

捻り出した声が震える。もし僕が機械の体じゃなかつたら、泣き虫な彼みたいに泣きじゃくっていたかもしれないな。

「ダーリン」

「……………何さ」

顔を上げて、黙って重い体を支え続けてくれていた大きいダーリンと、小さいダーリンを見る。今度は視線を逸らさず、しっかりと。

「どうやら……………僕はもう少しここにいた方がいいのかもしれないね」

そして、僕を支えてくれている視聴者みんの声を聞いて、決意した事を切り出した。

「人間の世界には大勢のスターやアイドルがいる。でもモンスターたちには……………僕しか

いないんだ。僕がいなくなったら……地下世界は輝きを失ってしまう。決して癒されることのない傷を残してしまおうんだ」

「……………そうだろうね」

僕の想いを茶化したり否定したりせず、ダーリンは相槌を打ってくれる。

「だから……………僕の華々しいデビューは延期した方が良さそうだ」

黙って、ダーリンは僕をじっと見つめる。

「それに、君はその強さを十分に証明して見せた。おそらく……………ASGORE王に勝つことも出来るだろう。君なら人類を守ることが出来るはずだ」

そこでやつと、大きいダーリンの顔がきよとんと驚いたような顔になる。まだ少し幼い子供のようなその顔が見れたことが、少し嬉しかった。

「は、は……………」

そこまで言ったところで、急に体の重さが増し、眠たくなってくる。電源切れが近いのか、と何となく察した。

「いずれにしても、それが一番いい……………正直に言うと、この形態のエネルギーの消費は……………ひどく効率が悪くてね。もう直ぐにバッテリーが切れてしまおうだろう、そして……………ああ……………」

そこで、小さいダーリンの顔が心配そうな顔になる。バッテリーが切れてしまうこと

が死に繋がると勘違いしたらしいと僕は見当付けて、僕は小さいダーリンに微笑みかける。

「僕は大丈夫だよ。頑張つてね、ダーリン。そして……ごめん、大きいダーリン。僕の体を、カメラに向けてくれるかい」

「……ああ、いいよ」

僕は、大きいダーリンの力を借りてカメラに向かって、笑いかけた。

「みんな……ありがとう。君たちは最高の観客だったよ！」

僕がそう言うと、ショーの終わりを告げるBGMが流れて紙吹雪が舞い、エレベーターが降下を始める。今度こそ、ファイナーレだ。

「ねえ、大きいダーリン……」

「ん？」

降下する中、僕は最後大きいダーリンを見る。今にも途切れそうな意識の中、僕はダーリンに向かって、言葉を紡いだ。

「ごめん、なさい……僕は、絶対に許されないことを……」

「……いいや、私の方こそごめんなさい、理不尽に切れてしまつて」

「謝らないでよ、もう……僕の立つ瀬がないじゃないか……」

傷付けたのに謝られると、こんなにあきまらずいんだなと思いつつながら、僕は最後の力を振

り絞って、大きいダーリンに話しかけた。

「……………ねえ、もし……………今度、出会えたら……………その時は……………」

『僕の友達になってよ』

そう伝えようとした瞬間、ぶつりと、テレビの電源を切るように、僕の意識は暗転した。

99. CORE閉幕

〔Alphys〕

ガタガタと、急いで持ってきたキーボードを叩く。口裏合わせを頼んでいたMettonによって閉じられてしまった扉は固く閉ざされ、うんともすんとも動かない。制御システムにハッキングをかけて、どうにか開けようとキーボードを叩き続ける。

「……………あ」

ふと、打つ手が止まる。

此処を開ければ、きつと、あの人間達が居る。多分Mettonによって、自分の計画はもうバラされていると思う。きつと、全ての元凶である善人ぶっていた私のことをもうあの子達は嫌っている。だったら、もういつそのことこのまま会わずに逃げしまえば……………

ガコン、と中から何かが嵌まるような音が聞こえた。その音にハツとし、頭を振る。また『逃げてしまおう』と考えちゃった、と安易な思考に走る自分に対する嫌気が増していく中、震える手で最後の工程をクリアし、扉を開いた。

「な、なんとか解除出来た！ さ、三人とも……………！！」

薄暗いエレベーターの中を見て、絶句する。中では、散乱する機械の四肢と、その四肢の持ち主である Mettaton が大きい方の人に俗に言う膝枕をされていた。私に気付いたのか、小さい人と大きい人は一斉に此方を見る。ただ疲れたような気怠そうな視線が刺さり、思わず体が震えが走る。だけど、今は。

「そんな。Mettaton! Mettaton、大丈夫?」

固く閉じた目を醒まささない Mettaton に駆け寄る。ああ、嫌だ、私の所為で、また、また誰かが

何をするか察したららしい大きい人からそつと Mettaton の体を受け取り、バッテリーを入れるハッチや部品の損傷具合を見る。そしてバッテリーが空になっているのを見て、安堵した。

「……………良かった、ただのバッテリー切れみたい。Mettaton、もしあなたが死んだりしたら、私は……………私は……………」

ふと、小さい人が心配そうな顔で近付いてくる。Mettaton の容態が心配なんだろうかと思い、私は視線を合わせないようにしながら説明を始めた。

「あ、あのね、え、えつと、だ、大丈夫、それでしょ?」

説明しようとする、声が震える。いつも以上に言葉が詰まって、何を言えればいいのか分からなくなる。

「ただのロボットだから、もし壊れてしまっても……あ、新しく作ればいいだけなので」
「ん、そう。なら良かった」

そう言えば、大きい人に発言を拾われてそう返される。その中性的な声に、また自分の体が凍る。

「ただのバッテリー切れなんだろう？　壊れているわけではないなら安心したよ。……

まあ、尤も、」

君が言っていることは大体嘘なんだろうけど。

言われた一言に、どっと嫌な汗が噴き出て、体の体温がさつと引いていく。

気付かれている？ いやそんな訳がない、でももしかしたら気付かれているかもしれない。私の罪が、私の秘密が、この人には。計画にも感付いていたみたいだし、ああ、怖い、怖い、こわい、こわい。この人が、怖い。

大きい人に計画が早々にバレていたという事実が、私の心を揺らがせて、恐怖で支配していく。

「じゃなきや、『死んだりしたら』、なんて言葉は出て来ないもんな」

クスクスと、小さく笑いながら大きな人は私の耳許で囁いた。その笑い声にさえ、私の背筋は泡立つ。

「まあ、それはどうでもいいんだ。私にはもう関係無いし」

よいしょ、という声をかけて、ふらりと大きな人は立ち上がる。

「……………」

そして、私を軽蔑するように、Mettonを抱える私を見下ろした。あの古い遺跡の前や道中に仕掛けておいた監視カメラに向かつてふざけていた時の目線とは全く違う冷たい目線に、心が重たくなる。

嫌われてしまった、と確信した。

「……………先に進まないんです？」

その視線に堪えきれず、目線から逃げるように俯いた私の口は早口で先を急かす言葉を吐いていた。

「……………行こうか」

「うん」

そんな私の気持ちを汲み取ったのか、大きな人は小さい人に声をかけて、先に進んでいく。顔をあげて、去っていく背中を見る。私もよろよろと立ち上がり、重い脚を引き摺ってついていく。

「……………めんないね！ さ、先に進みましょう！」

私が声をかけると、小さい人がちらりと此方を見る。大きい人は……振り返ることもせず、何も言わずに、少しふらふらとした足取りで進んでいく。小さい人が慌ててその

後を着いていく。

「……………」

会話が一つも無い中、COREの作動音と足音だけが響く。

「そ、そのじゃあ今からASGOREに会いに行くのね？」

沈黙。

「その、あなたは……………やらないといけないことが……………」

言葉が、続かない。

「け……………結構わくわくしちゃうよねそれって、ね？」

また、沈黙。

「だって、本当に、やっと……………あなたはとうとう家に帰れるんだもの！」

沈黙。

小さい人は、ただ悲しそうに顔を歪めて私を見て、その後ろを着いていく。

ああ、ああ、私は、また……………

沈黙が流れる中、二人は、ASGORE王の城に繋がっているエレベーターの前に辿り着く。ハツとして、私は慌てて乗り込もうとする二人を呼び止める。

「ま……………待って!!」

二人は立ち止まり、私を見る。呼び止めたはいいものの、此処から何を話そうか考え

ていなかった私の頭は真っ白になった。

「その、つまり、ええと……………だから……………」

計画の台詞はもう意味がない。どうしよう、どうしよう、どうしよう……………

「私は、ただつまり……………その……………」

自分が二人にしたことに対する言い訳を募ろうとする自分の口と思考が嫌になる。

二人の目線から目を逸らしながら、私は考え続ける。

どうしよう？ 何て言おう？ どうすれば、どうすれば……………

「さようならを言いたくて、あと……………」

違う、そうじゃない。私が言いたい言葉はそれじゃない。

自分が言った言葉を即座に否定しながら、必死に考える。

「……………」

長い沈黙が、その場に流れる。

「……………それだけなら、もう行かせてもらおうけど」

「ち、違うの！ 少しだけ、本当に少しだけ待ってちょうだい！」

先を急ごうとする大きい人に叫び返し、私は覚悟を決める。

「……………これ以上隠してはられない」

意を決して、私は、二人に背を向けながら話し出す。本来、こんな話は目を見ながら

するべきなんだろうけど……私には、もうそんな資格はない。

「その……私はあなたに嘘を吐いていたの」

「……HotlandやCOREで起きた事が全て自作自演だったってこと？」

「それも、そうだし……もう一つ」

大きい人の声を肯定し、私は隠していた事を伝える。

「一つの人間のソウルだけじゃ、結界をくぐるのに不十分なんです」

「………はあ？」

低い声が、後ろから聞こえた。その怒りさえ孕んで聞こえるその声に、思わず心臓が跳ねた。

「必要なのは一つの人間のソウルと……一つのモンスターのソウル」

「えっ……」

小さい人の愕然としたような声が、その場に響いた。そこで私は、覚悟を決めて振り返り、二人を見る。

「………もしあなたが家に帰りたいのなら……あなたは彼のソウルを奪い取らないといけない。あなたは彼を、ASGOREを殺さないといけない」

この先の花が咲き乱れる玉座の間で優しく笑っている彼が、物言わぬ灰になってしま
う光景を想像し、ぞっとする。

「…………ちよつと待った。それは一人一つモンスターソウルを持っていないといけないのかい」

大きい人が、そう訊ねてきた。気付いて欲しく無かったことに気付いてしまった。

「…………ええ、そうよ。だから」

もし、この人達がASGOREを殺して、ソウルを手に入れたとしても。

「もしも、ソウルを手に入れたとしても、貴方達二人のどちらかは、きつと地上には戻れない」

「…………そんな」

残酷な事実を突き付けられて、絶望の滲んだ声が、聞こえた。その声に、私は耳を塞ぎたくなってしまう。

「…………そう、忠告有り難う」

事実確認を終えた大きい人は、そう言つて頷いた。

「そうだ。ねえ、Alphys」

「…………何、かしら」

何かを思い出したように、大きい人は声をかけてくる。聞き返せば、その人はポケットを緩慢な動きで漁り、何かを此方に向かって投げた。

「わっ」

放物線を描いて、何かが私の手の中に収まった。咄嗟に包み込んだ手を開くと、ハートがあしらわれている、少し錆び付いた古い鍵だった。その鍵に、私は見覚えを覚える。「これって……………」

確か、そう。Met tatonがまだHappstablookだった時の……

「それ、多分Met tatonのだろ？」

確証は無いけど、と付け足しながら、大きい人はそう言った。

「MTTホテルの裏道の、BrattyとCattyつてモンスター達の店にあつたんだ。Met tatonのサインをもらつてくるつて約束して、やっと譲つてもらえたんだ。Met tatonに届けておいてくれないかな。『その鍵を預かつていてくれた二人にサインを渡しておいて』つて」

知り合いのモンスターの名前が出て、ぎよつとする。あの結構がめつい二人に対して交渉したの、と思わず驚いた。

「……………あと、それから」

すつと、大きな人は、私の目を見る。その真つ直ぐな目に絡め取られ、視線を逸らすことが出来なくなつてしまう。

「Alphys。……………私達はね、こんな皆を巻き込むような事をしなくても、たつた一言『友達になつてほしい』つて言つてくれれば、君の友達になつたよ……………？」

その一言に、私の体は凍り付いた。そんな私をじつと見てから、大きい人は小さい人の手を引いて、エレベーターに乗り込んでいった。

その場には、ただ、道をまた間違えてしまった私だけが取り残された。

〔Lily〕

城を目指して上昇していくエレベーターの中を沈黙が支配している。沈痛な表情で押し黙ってしまったフリスクを横目に、私は床に座り込んでリュックから取り出したナイスクリームを食べ進めていく。美味しい。

食べ進める毎に引いていく体の痛みを毎度のことながら不思議に思いつつ、最後の一口を食べきる。

「……………お姉ちゃん」

私がアイスを食べ終わったのを見計らって、フリスクが話しかけてくる。

「なあに」

十中八九フリスクとの約束を破ったことかきつきアルフィスが言ったことの話だろうなど見当付けて、私は応じる。

「……………どうしようっ」

そして、途方に暮れたように、そう言った。アルフィスの話らしいなど予想を変え、無

言を貫く。

「今まで、モンスターを皆殺さなかったことを後悔はしていないけど……………」

ぼつりと、弱々しい声で、フリスクは続ける。

「どうしよう、どうしよう……………このままじゃ、二人でかえれないよお……………」

そして、遂にぼろぼろと泣き出して、私に縋り付いてくる。

「やだ、やだやだ、もう嫌だよ、置いてかれるのは、独りになるのはやだよ……………」

「……………フリスク」

まずい、とフリスクを抱き締め返しながら思う。

「こんなことなら、ここに来るんじゃないかった」

「フリスク」

「やだ、やだ、やだ……………」

「フリスク」

『どちらかが出られない』という話のショックが大きすぎたのか、フリスクのトラウマを刺激してしまったらしい。何度呼び掛けても、フリスクはボロボロと涙を溢し続けて、譫言の様に『やだ』と拒絶する言葉を繰り返して縋り付いてくるだけだった。

「フリスク」

そっとフリスクを抱き締めて、背中を撫でる。

……私は、このルートの先を知っている。ゲームだった時はフラウイー戦の後、フリスクはモンスターのソウルを持っていないのに結界を通り抜けていた。だから多分、きっとどうにかなると思う。だから、アルフィスの話を聞いても別に何とも思わなかった。でも、フリスクは何も知らない。ただの優しい十歳の子供だ。そんな子供に、あの話は四年前のまだ癒えない傷を抉るナイフでしかない。

「独りにしないで、おいていかないでよ、お姉ちゃん……」

「……フリスク」

ぎゅうつと縋るフリスクに、私は、優しい声と口調を心掛けて話しかける。

「大丈夫。私は、君を置いていたりしないよ」

………我ながら嘘臭い言葉だな、と思う。ただでさえ、私は狂った計画を建ててる訳だしね。

エレベーターが到着して扉が開いても、暫く私達は抱き合っていた。

100. 地下で起こった物語

【Lily】

暫く泣いて、冷静を取り戻せたらしいフリスクが、ゆるゆると顔をあげる。

「……………ひつく、ごめんなさい……………」

「ん、いいよ。落ち着いた？」

「……………うん」

頭を撫でて、目尻や頬を伝う涙をそっと拭ってやる。拭っている間、泣き止んだばかりでまだ潤んでいる瞳が私を見上げていた。やっぱりこの子に泣き顔は似合わないなと思いつつ、跡が残らないように丁寧に拭いた。

「これでよし」

「……………ありがとう」

「どういたしまして」

拭い終わると、フリスクは私から離れ、ぼーっと虚空を見つめる。そして、少ししてから力無く立ち上がった。

「……………行こう」

「もう、大丈夫?」

「……………うん」

大丈夫じゃないなこれは。

姉としての勘と短い問答でそう予想する。泣き止んで直ぐとはいえ、嫌に目が据わっている。このままアズゴアの所に連れてって大丈夫か……………?

一抹の不安を覚えながら、私も立ち上がり、フリスクの手を繋いでエレベーターを降りた。

「……………おお」

降りた先で視界に飛び込んでくるのは、一面の灰色。寂しささえ感じるほど色がない世界が広がっていた。

「色が、ないね」

「そうだね。……………此処、本当に城か?」

ウオーターフォールで遠目から見た城は、此処まで悲しげな雰囲気か漂うような感じじゃなくて、本当に厳かで美しい城だった。それが近くで見ると、こんな感じだったのか。……………まるで、喪に服しているみたいだと何となく思ってしまう。

「……………あ、あの光だ」

私がそんな事を考えている内に、フリスクが道の先にいつもの光を見つける。フリス

クと一緒にそのまま光に近付いて、フリスクがセーブを終えるのを待つ。

………此処はゲームじゃなくて現実だし、今までBGMとか全く無かったけど、それがここだと逆に寂しい雰囲気 연출しているなど、しんと静まり返っている中思
う。

「お待たせ。終わったよ、行こう」

「ん、分かった」

フリスクに声をかけられ、意識を現実に戻す。そして、続いている先へと歩き出す。フリスクの手を引いて先を進み、道の先に少し顔を出して、道に誰も居ないことを確かめる。静まり返っていた先程の道とは違い、ざわざわと喧騒のような物が遠くから聞こえる。取り敢えず大丈夫そうだと判断して、フリスクを連れて道に出る。

「……エレベーター?」

道の端にあったエレベーターに興味を示したらしく、私の手を離して近寄っていく。そして直ぐに戻ってきた。

「どうだったよ」

「使われてた」

「まあ、だよな」

戻ってきて直ぐに私の手をまた握りながら、フリスクはそう言った。左手に広がる街

の風景を眺め、彼処に沢山のモンスターが住んでいるんだろうなと思いながら、足を進める。コツコツと、足音が響いた。

「……………ここにモンスターが住んでるんだね」

「みたいだね」

曲がり角を曲がり、建物の合間を進んでいく。その道の先にある門を潜り抜けると、見覚えのある家に着いた。

「……………ホーム……………?」

目を見開いたフリスクが、一言そう呟いた。

「……………いや、此処はニューホームじゃないかな。ほら、スノーデインの図書館の本に書いてあったでしょ?」

「ああ、そっか」

納得したように頷いたフリスクは、手を離して枯れ葉の上を突っ切って目の前にあったセーブポイントに近付いていく。その間、先にニューホームに近付いてざっと外観を見ておく。……………見れば見るほど本当に最初のホームにそっくりだな。

「終わったよ」

「ん、じゃあ、お邪魔しようか」

セーブを終えて追いついてきたフリスクの手を繋ぎ、中に入り込む。警戒しながら入

ると、優しい花の香りが鼻を擽った。……………キンポウゲか。

中を見渡すと、やはりホームと構造が一緒で、何となく懐かしさを感じた。ただ、彼処と比べるとしんと静まり返っていて、全体的に灰色が主体となつている所為もあるのか生活感はあるが、何処か寂しげな印象を覚えた。

「……………ママの所とは全然雰囲気が違うね」

「そうだね」

フリスクもホームと雰囲気が違うと感じたらしく、ぽつりとそう言った。その言葉に同調し、取り敢えず私は目の前の地下に続く階段に立ち入らないようにしている鎖に張り付いている紙を読む。

『やあ！ 私は庭にいます。何か伝えたいことがあれば、お越し下さい。鍵はキッチンと廊下にあります』

「……………王様は庭に居るつてよ。それとこの錠前の鍵はキッチンと廊下にあるつてさ」
「何処の庭だろう……………」

「さあ……………」

紙から手を離し、花瓶を調べに行ったフリスクを待つ。直ぐに戻つてきてホームだとリビングだった部屋の方に進んでいくフリスクに続いて、部屋に入る。

「……………」

中は、ホームと同じくリビングになっていた。ただ、ホームとは違って、テーブルを囲む椅子の数が四つになっていた。本棚を調べに行ったフリスクを追い越して、火が灯っていない暖炉の傍にある読書椅子（だろうか）を見る。ざっと見た感じだとホームでトリエルさんが使っていた物と色以外にそこまで大きさは変わらない。だが、埃が積もっているのを見て、使われていないらしいと見当をつける。

「わっ!!」

「!!」

キッチンに行こうとしたらしいフリスクの驚いた声と周りが白黒になった事に気付いてに振り向くと、二匹のフロギーがフリスクの前に佇んでいた。

「どうしてコイツらがここに……!!」

フリスクとフロギー達の間立つ。一応『MERCY』してあるから襲ってこないと思うけど、取り敢えずいつでもナイフを取り出せるように警戒しながら、ただ攻撃もせず、ただ佇んでいるフロギーを注視しておく。

『……昔々、ルインズに一人の人間が落ちてきました』

『ケガをした人間は助けを呼びました』

「は……? え、おい!」

それだけ言うと、二匹はそそくさと立ち去ってしまう。周りに色が戻ってくる中、

去っていった二匹を見送る。

「……………何だったんだ……………」

「分からないけど……………昔話……………だよね？ 多分……………」

……………ああ、ゲームでのあのシーンか。

フリスクと顔を見合わせて首を傾げ、やっと何がしたかったのかを思い至る。

「……………取り敢えず、鍵取ってこないと」

「そうね」

キッチンに誰も居ないか見てから足を踏み入れる。迷い無く冷蔵庫を開けて物色するフリスクを横目に、台所の上に置いてある金色の鍵を手取る。細かい細工がしてあるそれは、これだけでお宝と言えそうなほど綺麗だった。

「フリスク、鍵見つけたからキーチェーンに付けといて」

「ん、分かった」

冷蔵庫を閉めてメモに目を通していたフリスクに声をかけ、鍵を手渡す。鍵を受け取ったフリスクは取り出した携帯のキーチェーンに鍵を取り付け、手に持った。

「さて、次は廊下だっけ？」

「うん」

部屋から出る前にちらりとゴミ箱の中を見ると、何か書いてある紙が丸められて幾

つも入っていた。確かバタースコッチシナモンパイのレシピだったかと思い出し、何とも言えない気持ちになる。……………王様は、やっぱりまだあの子達の死を受け入れられていないのか。

「お姉ちゃん？」

「……………ん、何でもない。行こうか」

頭を振ってさっさと進んでしまおうと思い直し、フリスクを先頭にリビングに戻る。そして、部屋から出ようとしたところで、また周りが白黒に切り替わった。

「またか!？」

前を見ると、二匹のナキムシ(だったっけ)がふわふわと飛んでいた。

『アズリエル王子が、人間の声に気付きました』

『彼は人間を城に連れて戻りました』

それだけ言って、また彼らはふわふわと飛んでいってしまふ。

「何がしたいんだ……………?」

「分かんない……………」

ゲームだった時も分からなかったこの行動の意味を考えながら、とにかく廊下へ戻る。

本当に何がしたいんだろう、モンスター達は。Tobyさんの意思だつて言うならそ

れでおしまいだけど……それだけじゃない気が、何となくする。

そのまま廊下を突っ切り、ホームだと部屋があつた方へ進む。廊下もぎつと見た感じホームと同じようになっていた。其処らじゆうに飾つてある金の花が、たつた一つのアクセントだった。

ガチャリ

取り敢えず最初の部屋に入ることにしたらしいフリスクがドアノブを回し、部屋に入る。鍵のかかつていないその部屋はあつさりと開き、中に入ることが出来た。

「……………」

中は灰色だけの家具の数々があり、あまり生活感を感じられない部屋にだった。そして、その中で目につくのは……………二つの、プレゼントボックス。

「なんだろうこれ」

色が統一されすぎて殺風景な部屋にあるプレゼントボックスにフリスクも興味を持たったのか、ドアから近い方の箱に近付いて、しゅるりとリボンを解く。その間に私はドアから遠い方の箱に近付き、さつとりボンを解いた。リボンを畳んでから箱を開けると、中には、鞆に収まつたナイフが一振り。

……………ああ、漸く見つけた。

心の底からそう思つて、鞆からナイフを取り出してみる。使いふるされているがちや

んと錆びないように磨いである刃が、光に反射して煌めいた。

「お姉ちゃん、そつちは……………ナイフ?」

後ろから、驚いたような声が聞こえる。本体を鞘にしまい、振り向く。振り向いた先にいたフリスクの手の中には鈍い金色に輝くハート型のペンダントトップのペンダントが握られていた。

「そつちはペンダントだったんだね」

「うん……………しかもこれ、開けるみたい。開けていいかな?」

「いいんじゃない?」

爪を引っ掻け、フリスクがロケットになっっているハートを開ける。中には、小さい山羊のモンスター、そして、照れたように笑っている、人間が写っている写真が嵌め込まれていた。片面には、『ずっと友達だよ』と彫られている。

その写真の中にいる人間の顔に、私は見覚えがあった。

「えっ?」

フリスクも驚きを隠せない様子で目を見開く。そして、私と写真を見比べて、困惑したような顔をした。

「……………この子、お姉ちゃんそっくりだ」

「……………そうだね」

幸せそうに笑っている家族の写真の中にいる人間を見て、私は確信する。——この子が、Charaだ。

じゃあ、この隣の子がアズリエルか。

「持っていていても、大丈夫かな、これ」

「いいんじゃない？ 判断はフリスクに任せよう」

二本目のナイフをポケットに入れ、悩むフリスクの判断を待つ。悩んだようにロケットをじっと見たフリスクは、暫くしてから、意を決したように首にペンダントを下げた。

「つけてくのね？」

「……うん」

「分かった、大事にしなよ？」

「うん」

フリスクが頷くと同時に、かかったペンダントが揺れる。ざっと部屋の中を見渡し、洋服棚らしきものの上にある写真立てを見つめる。近付いて手に取ってみると、中にある写真には、幸せそうな家族が写っていた。山羊のモンスターの家族の中に、一人だけ人間が混ざっている。でも、それでもこの笑顔を見れば誰だって『家族写真』だと言うだろう。それぐらい、この写真の中の人々とモンスター達は幸せそうに笑っている。

写真立てを元に戻し、部屋をもう一度見てから廊下に出る。私が出てからも少し物色

していたフリスクも直ぐに部屋から出て、私の先を進む。キンポウゲの植え込みを通り過ぎ、『リフォーム中』という板がかかった扉の前を通りすぎようとした所で、また周りが白黒に変わる。今度は、フリスクの足元にチビカビが三匹並んでいた。

『やがて、アズリエルと人間は兄弟のようになりました』

『王と女王も人間を本当の子供のように扱いました』

『地下世界には希望が溢れたのです』

子供に語るような口調で、チビカビ達は話して、去っていく。………というか、喋れたんかアイツら。

そんな下らないことを思いながら、フリスクが廊下にある小さな机の上にあった鍵をキーチェーンに取り付けるのを見る。そしてそのまま、フリスクは奥の部屋に入った。私も続いて中に入ると、そこはやつと生活感が感じられるような部屋になっていた。

「……………は……………」

真つ先に机の上の開いたままの分厚い本——多分アズゴアの日記だろうそれにフリスクはほんの少しの間目を通し、すぐに部屋の奥へ進んでいく。フリスクが部屋を見ている間に、今度は私がその日記を見る。

最近の日記を見ると、今日はこんなことがあった、あんなことがあったという内容に、全て『素敵な1日だった!』という一文が添えてある日記が続いていた。そこからパラ

パラとページを捲つて遡つていくと、丁度トリエルさんの日記と同じぐらいの所で、七人目の人間のことが書いてあった。人間の身体を槍で貫いた感覚が忘れられないと先程のまでの字と比べて荒い筆跡で書かれている。そこまで読んで、気付いた。ゲームでは書かれなかった今までの人間達の死因が、書いてあるんじゃないかと。

また遡ってみると、今度は六人目の事が書いてある。やはりそうらしいと思いつながら、読み進めていく。

自ら命を差し出した人間を引き裂いた時の鼻につく生臭い鉄の臭いが何時までも鼻に残っている感覚がして消えないと書いてある。字が、震えている。

遡る。五人目。

遺体を抱えた時の身体の冷たさにあの子が死んだ時の記憶を鮮明に思い出してしまったとある。字が震えて、紙が少しよれている。涙の跡だろうか、思い至った。

遡る。四人目。

自分がしている事は間違っていると行って、最後まで真つ直ぐ自分を見ていた強い瞳が恐ろしいと書いてあった。

遡る。三人目。

自分の奥さんを悲しませるなど叫んで飛び込んできた人間を貫いた感覚が手に残つて離れないとある。また、紙がよれている。

遡る。二人目。

傷付いて傷付いて、それでもまだ諦めない意思を持って立ち向かってきた、あの子と同年代くらいの間人を殺した。私が自分の手で殺した。私が、私が。槍で刺した時顔や身体にかかってしまった赤い水の臭いが刻み込まれて離れない。何度洗っても洗っても、まだあの赤い水で全身が汚れている気がする。気持ち悪い。食べたものを全て吐ききつてもまだ気持ち悪い。気持ち悪い。これを繰り返さないといけないのか。ああ、嫌だ。これならいつそのこと……

その先は、塗りつぶされてしまつてぐちゃぐちゃになつて読めなかつた。

ページを、捲つていく。遂に、運命の日のページに辿り着いた。どうせなら時系列に沿つていこうと、私はページをまた捲る。それらしきページを見つけて、そこから読み始める。

『○日

あの子が、死んだ。死んでしまった。王国じゅうの医者呼び寄せて、手を尽くしても、救えなかつた。最後の願い事さえ叶えられずに死んでしまった。心が空っぽになつてしまったような感覚が消えてくれない。トリがあの子の遺体に寄り添つて、大泣きしている。ごめんなさいと泣き叫んでいる。こんな中、私まで泣いている訳にはいかない。アズの父として、トリの夫として、王として。しっかりとしなければ。

明日から葬儀を執り行う為に準備をしよう。

追記：アズがあの子とお揃いのペンダントを握って、意を決したような顔をしていた。死を乗り越える決意をしてくれたのだろうか』

次のページに移る。

『※日』

息子が、死んだ。私の手がもう少しで届く所で、目の前で死んでしまった。最後に「ごめんなさい」と言つて、死んでしまった。まだ残つていたあの子のソウルを使つて、あの子の最後の願いを叶えに、アズは外へと出たらしい。沢山の傷があの子の消えていく身体にあつた。外の人間達に付けられたものだろう。

トリが部屋から出てこない。ドアに耳をつけて聞くと、啜り泣く声が聞こえる。私達は、二人も最愛の息子達を亡くしてしまった。地下世界は、アズとあの子が死んだことによつて絶望で満たされている。このままではいけない。このままでは、あの子達が好きだったこの地下が壊れてしまう。王として、決断を迫られているのを感じる。どうすれば』

次のページを開く。そこには、選択を迫られた王の、独白が書いてあつた。

『今日、王として、地下世界の民に「ここに落ちてくる人間は全て殺す」と宣言した。私の頭では、こうして皆の憎悪の行く先を地上に出て人間達を皆殺しにするという目標に

摩り替えることしか思い浮かばなかった。トりに考え直してほしいと縋られている。だが、こうするしか方法が無い。これしか、私には出来ない。

だから、ここにもし私が全ての民に嫌われてしまっても決意が折れないように、私自身の見解を記す。

私は、これからずっと先、モンスター達の王として、人間を殺し続けると誓おう。天国にいる息子達に顔向けが出来なくなろうとも、ずっと、王としてこの玉座に居続けよう。それが、私が唯一王として出来ることなのだから。

この苦しみを、終わらせなければ』

そこで読んでいられなくなって、日記を元のページに戻した。……人のこと言えないけど、なんて決意を抱いてやがんだ、この人は。

「…………お姉ちゃん?」

部屋の探索を粗方終えたららしいフリスクが、私を見上げてくる。その頭をそつと撫で、何でもないと言わせた。

「部屋の探索は終わった?」

「うん」

「そう、じゃあ行くのか」

「……………うん」

フリスクを急かして部屋から出て、部屋の突き当たりにある鏡の前に立つ。そこには、ホームで見たよりもボロボロのパーカーを着た私と、傷一つ見当たらないフリスクが立っていた。

「……………何があろうと、それでも私のままだ」

「!?!」

アナウンスを振った一言を眩くと、ぱつとフリスクが此方を見た。そして、小さい声で、そうだね、と同意してくれた。そのまま徐に鏡から離れ、廊下を引き返す。そして玄関の階段の錠前の前に来る。フリスクが無言で鍵を錠前に合わせ、捻る。カチリ、という音を立てて錠前が外れる。外れた鎖を隅に寄せ、階段の前に立つ。ふと、壁にかけてあるカレンダーを見て、日付に丸がついていることに気付いた。……………この丸は、何の意味があるんだろう。

そう考えてから、階段を降りずに待っているフリスクの横に立つ。

「……………行こう」

「ああ」

二人で手を繋ぎ、階段を降り始めた。

階段をゆっくり降りると、あまり光のない廊下に出る。ゆっくりとした足取りで進む

と、前から誰かが現れ、周りが白黒に変わる。

『そして……ある日のこと……』

『人間は重い病気にかかってしまいました』

それだけ言って、また去っていく。また進むと、またモンスターが現れ、周りが白黒に変わる。

『病気になった人間はひとつだけ頼み事をしました』

『故郷の村から花畑を見たい』

『けれど私達にはどうすることもできませんでした』

またそれだけ言って、去っていく。暗い廊下を進み続けると、またモンスターが現れる。

『そして次の日』

『そして次の日』

『……………』

『人間は死んでしまいました』

言いくさそうに押し黙ってしまったモンスターの片方の言葉を代弁するようにもう一方のモンスターがそう告げ、また去っていく。フリスクが息を飲む音が聞こえた。暗い廊下を進む。またモンスターが現れる。

『アズリエルはあまりの悲しみに我を忘れ、人間のソウルを吸収してしまいました』
『そして凄まじい力が彼の姿を変えたのです』

多少事実と離れている話をして、モンスターは去っていく。曲がり角を曲がろうとした所でモンスターが現れ、また周りが白黒に変わる。

『人間のソウルを得たアズリエルは、結界を通り抜けました』

『人間の遺体を抱えて夕焼けの空へ』

『人間の故郷の村へ』

それだけを告げ、また去っていく。曲がり角を曲がり、またその先の曲がり角を曲がった所で、またモンスターと出会う。

『アズリエルは村の中心に辿り着きました』

『そこには、金の花々のベッドがありました』

『彼は人間をそこに横たえました』

去っていったモンスターを追うように、先に進む。また城下町が見える廊下に出た所で、またモンスターが現れる。

『突然、叫び声が響きました』

『村人たちは人間の遺体を抱き締めるアズリエルの姿を見て』

『彼が子供を殺したのだと思ったのです』

またモンスターが去り、足を止めずに先に進む。またモンスターが現れる。

『人間たちは持てる力全てで彼を傷付けました』

『彼は何度も何度も殴られました』

『アズリエルは人々を皆殺しにする力を持っていました』

モンスターが去っていく。また道を進んでいくと、モンスターが現れる。

『けれど……』

『アズリエルはやり返しませんでした』

『人間の遺体を抱き締めて……』

『笑って、立ち去ったのです』

モンスターが去っていく。また進むと、違うモンスターが現れる。

『傷付いたアズリエルはよろめきながら地下世界へ戻り』

『城に着くと崩れ落ちてしまいました』

『彼の身体は塵と化し、庭園に散ったのです』

モンスターが去っていく。また進むと、またモンスターが現れる。

『王国は絶望に包まれました』

『王と女王は一夜でふたりの子供を失ったのです』

『人間は私達から二度も大事な物を奪っていききました』

モンスターが去っていく。また進むと、またモンスターが現れる。

『王はこの苦しみをもう終わらせようと決心しました』

『ここに落ちてきた人間は全て殺さなければ』

『十分なソウルが揃えば、結界を破ることができる』

モンスターが去っていく。そしてまた進むと、モンスターが現れる。

『今はもう先のことじゃない』

『アズゴア王が自由にしてくれる』

『アズゴア王が希望をくれる』

『アズゴア王が救ってくれる』

そう言って去ったモンスター達に、一瞬虫酸が走る。アズゴア王に頼りすぎだと、一言言つてやりたいのを飲み込み、先に進む。またモンスターが現れた。

『きみも、笑えよ』

『ワクワクするでしょ？』

『幸せでしょ？』

「……そんなわけねーじゃん」

去ったモンスターに向かって一言そう吐き捨て、先を進む。またモンスターが現れた。

『君も自由になれるんだ』

最後にそうフロギーが締めくくって、話が終わる。廊下の突き当たりまでやってきたことに気付き、無言のままフリスクの手を離して道の先にあるエレベーターを取り敢えず調べる。しゅつという音を立てて扉が開いて、動くのを確認してから分かれ道で待っているフリスクの所に戻る。

「ごめん、お待たせ。あのエレベーター動いたから、また戻るようなことがあればあれを使つて戻れるとおもうよ」

「ん、分かった。ありがとう」

そう短く会話して、また手を繋ぐ。そして、曲がり角を曲がった道に、踏み入れる。

「……………」

暗い道の先を見ると、先程までの何処か暗い光ではなく、見覚えのある暖かい光がそこに満ちているのが分かった。その光に誘われるように道を抜けると、暖かみのあるオレンジの光と、セーブポイントが見えた。取り敢えずはセーブポイントに近寄り、フリスクがセーブを終えるのを待つ。その間、私は部屋を見ようと道の先に目をやった。そこに、影がひとつ。

「……………サンズ」

窓から差し込むオレンジの光——夕陽に照らされながら目を瞑つて佇む彼を見

て、漸くここまで辿り着けたと思う。
審判の間に、辿り着いた。

101. 審判

〔Lily〕

フリスクがセーブを終え、パーカーの裾を引つ張る。二人で顔を見合わせてからまた手を繋ぎ直し、夕陽が差し込む中を進んでいく。

コツ コツ コツ コツ

静かな空間に、ゆったりとした足音だけが響く。

コツ……

その足音も、サンズと話せる距離に來たことで止まる。

「……………」

しんと静まり返った空間の中、眩しい夏の終わりの夕陽に照らされる。

ゆつくりと、頭蓋では眼にあたる部分を閉じたまま、サンズ……いや、審判者が顔をあげる。

カーン……カーン……

何処からか、鐘の音が鳴り響く。

——審判が、始まろうとしていた。

「……………とうとうここまで来たな」

審判者が重く、そう口を開いた。

「お前の旅の終わりはもう目の前にきている」

「……………そうだね」

審判者の言葉に、頷く。

「もうじき、お前は王と出会う。それと同時に……………お前はこの世界の未来を決定するだろう」

そして、と審判者は言葉が続ける。

「これから。お前は審判を受ける」

遂に、か。

運命の瞬間が近付いてきていることを再確認し、心臓が跳ねる。

「お前のしてきた全ての行いの審判を受ける」

……………今までフリスクは、誰も殺さずここまでやって来た。だからきつと、大丈夫。そう自分に言い聞かせて、心臓を宥める。

「お前が稼いできたすべての『EXP』の審判を受ける」

そこで、フリスクが不思議そうに少し首を傾げる。今更ながら、『EXP』が何か気になっただけらしい。

『EXP』とは何か？ とある略語だ。

EXPは『execution points』という意味。お前が他者に与えた痛みを数値化したものだ」

審判者の答えに、フリスクは信じられないといった様子で目を見開く。

「お前が誰かを殺せば、お前のEXPは増す。お前が十分にEXPを得たとき、お前のLOVEは増す。……LOVEもまた、ある略語だ」

そして、審判者の口から、『LOVE』の本当の意味が語られる。

「LOVEは——『Level Of Violence』という意味。他者を傷つける能力を計測したものだ」

そこでフリスクは、絶句して顔をさっと青くする。

「お前が殺せば殺すほど、お前はより簡単にお前自身を遠ざけられるようになる。お前がお前を遠ざけるほど、お前はより傷つきにくくなる。お前はより簡単にお前自身に他者を傷つけさせる事ができるようになる」

「……つまりは心を喪って、本当の『怪物』になるってことか」

「ああ、そうだ」

私が入聞き返せば、審判者は頷く。沈黙が流れ、ドクドクと、心臓が早鐘を打つ。

「……だがお前は。お前さんは決してLOVEを得なかった」

暫くの沈黙の後、審判者は——サンズは、眼を開けてそう静かに告げた。

「もちろん、だからってお前が完璧に純粋無垢だってわけじゃない。ただ、ある程度の優しさを心にとどめ続けただけの事さ」

少し茶化して、サンズは言葉が続ける。

「お前さんはどんな苦難に見舞われた時も……正しいことを成そうとした。誰も傷付けようとしなかった。逃げ出す時でさえ、お前さんは笑顔を忘れなかった」

静かに、フリスクとサンズの言葉を待つ。

「——お前さんは『LOVE』を得ずに、『愛』を得たんだ」

真つ直ぐ此方を見て言い渡されたその判決に、すつと心が軽くなる。

——……ああ。よかった。やっと、その言葉が彼から聴けた。

思わずその場に崩れ落ちそうになるのをぐつと堪える。

《フリスクは、罰を下されなかった》。

その事実だけで泣きそうになってしまう。それだけ、これ以上無く嬉しかった。「何の話かわかつてるか？ わからないかもな」

へへへ、と小さくサンズは笑う。

「……………さてと」

すつと、サンズがまた真っ直ぐ私達を見る。

「お前さんはお前さんの旅の最大の試練に直面しようとしている。ここでの行動が……全世界の運命を決定するだろう」

その言葉に、フリスクは小さく息を飲む。

「お前さんが戦いを拒めば……アズゴアはお前さんのソウルを奪い、人類を滅ぼすだろうな」

「……………だろうね」

サンズの言葉に頷く。

「だがもしお前さんがアズゴアを殺して家に帰れば……モンスターは地下に囚われたまままだ」

……………頷く。

「どうするっ？」

試すように、サンズはそう言った。

「……………ま、俺がお前さんなら、とつくに匙を投げてたぜ」

だろうな、と口に出さずにサンズに同意しておく。

今回の場合は約束で縛っているけど、この狂っていると行って良いほど優しい道を買

き通さないとならないというのなら……例えセーブやロードの力を持つていたとしてもきつと彼は私のように狂っていただろう。彼は、普通の心を持つ、普通のモンスターなのだから。

「でも諦めてたらこんなところまで辿り着いちゃいないだろう？」

「そうだね」

何しろ、この子の中には……

「ああ。お前さんの胸には『決意』ってもんがある」

そこで、フリスクがぎゅつと胸にかかったロケットペンダントを握る。

「諦めない限り……お前さんが自分の心に正直に生きる限り……正しい事ができるって信じてるぜ」

『信じてる』。

その言葉が彼の口からするりと出て、驚いてしまう。ゲーム通りとはいえ、人間不信である彼からその言葉が聴けるなんて、と、彼がフリスクを信じてくれたことに対して、驚きと喜びを感じずにはいられなかった。

「……………さあ。皆お前に期待してるんだ」

頑張れよ。

そうやって彼はちらりと私に目線を寄越す。私が笑い返すと、彼は一瞬目付きを鋭く

してから、目を逸らした。そして瞼を閉じて開いた次の瞬間、彼の姿はもうとつくに無くなっていた。辺りには、変わらず暖かい光が満ちている。

「……………行っちゃったね」

「そうだね」

フリスクがぼつりと溢した言葉に、頷く。

「行こうか。此処にはもう、何も無いみたいだからね」

「……………うん」

頷いたフリスクの手をしっかりと繋ぎ、夕陽の中を進んでいく。

—— 審判は此処に下された。

フリスクは無罪、罰は下されず、愛を得たと告げられた。

あとは………私自身の、計画だけ。

守りきらなきや。

それが私の、誰にも譲れない『決意』なのだから。

102. 弔い

〔Lily〕

夕陽の照らす廊下を抜け、また灰色の中を進む。曲がり角を右に曲がると、壁にある石板を見つけ、読む。

『玉座の間』

……とうとうここまで来たのか、と思う。この部屋の入り口を潜れば、会いたいけど逢いたくないあの王様が居るのか……

「……あれ、あつちに道があるよ」

フリスクの言葉に我に返り、フリスクが不思議そうに見る先を見る。セーブポイントの先に、曲がり角があるのが見えた。……ああ、そうだ。あれもやらなくちゃ。

「先にあつちに行つてみる？」

「うん、そうしよう」

フリスクが私の問いかけに頷いたのを見て、二人で先に道の奥を探索しに行く。さつと素早く部屋の入り口とセーブポイントを通り過ぎ、道の奥の曲がり角を曲がる。少し歩いていくと、下に降りる階段が見えた。

「階段？ 何処に繋がってるんだろう……？」

フリスクの疑問を聞き流しながら、結構長い階段を降りていく。

暫く階段を降りていくと、やっと床に足を着けた。そのまま横を向くと、そこに並んでいたのは……七つの、黒い箱。

「……えっ？」

フリスクが思わずといった様子で声を溢す。

「これ、って」

私の手を握っている手に、力が入る。震えている手を、出来るだけ優しく握る。……震えるのも仕方ない。目の前にあるこの箱たちは、父さんと母さんが入って焼かれた棺桶だったんだから。

「……棺桶、だよね？」

「……そうだね。多分、今まで落ちてきた子達が此処にいるんじゃないかな」

「……そっか」

カタカタと小刻みに震えるフリスクの手を離し、向き直って目を合わせる。

「……ねえ、フリスク。今まで拾ってきた服とか武器、ヘリで出せる？」

「……？ うん……」

「……持ち主に返してあげたいんだけど、駄目かな」

トラウマを抉って追い討ちをかけてしまうかなと危惧しながら、出来る限り優しく声をかける。

「父さんと母さんを見送った時も、身に付けたものを一緒に送ったでしょ？ 勿論、フリスクは中を見ないようにここに居ていいからさ。ヘリを呼んでくれるだけでいいんだ」
ダメかな、と問いかけると、フリスクは私から目を逸らし、考えるような素振りをする。

「……ゲームだった時では、前の子達の武器は『Player』によつては売られてしまったりしていた。でも、ここは現実だ。少なくとも、子供達はフリスクと同じ年代の年代の筈。そんな子達の装備が地下世界に散らばったままというのは……同じ年代の妹を持つ姉として、人間として、嫌だった。弔ってあげることが出来ないけど、せめて、持ち主に返してあげたかった。

「……お願い」

小さく、そう言ってみる。フリスクは少し青い顔のまま考え込み、暫くしてから顔をあげ、私を見た。

「いいよ。でも、ぼくだけここに居るのは何か違う気がするから、ぼくにも手伝わせて」
「……いいの？」

「うん。……………これぐらいは、しなくちゃ」

小さく微笑んでフリスクはそう言うのと、携帯を取り出して弄り出す。その姿を見て、やっぱりフリスクは強いな、と思う。

少しすると、ウォーターフォールでアイテムを預けた時のように箱を持った小型ヘリが飛んで来る。ヘリから箱を取り、預けていたアイテムを全て取り出してまた箱を返し、見送ってからアイテムを抱えようとする。すると、横からフリスクがそのアイテム達を奪っていった。

「ぼくが持つよ。お姉ちゃんは蓋開けたりして?」

「……………うん、ありがと」

一つ目の棺桶を見る。名前が彫られている部分を見ると、そこには『Chara』と彫られていた。それを少し眺めてから、通り過ぎる。

「? お姉ちゃん、この棺桶はいいの?」

私の行動を不審に思ったのか、フリスクが首を傾げる。……………しまった。

「……………あー、いやさ、そこ、多分誰もいないと思うからさ」

「? 何で?」

慌てて取り繕えば、フリスクは不思議そうな顔をする。

「……………さっきのモンスターの話によれば、そこに入る筈だった一人目の子って、アズリエ

ルっていうモンスターに地上に送り返されてたじゃない？ だから、多分空っぽなのか
なってる」

「……成る程」

慌ててそう言った私の言葉に納得したらしいフリスクは頷くと、ちらりと最初の棺を
見てから、私の傍にやってくる。

「じゃあ、このペンダントを返す相手はいないんだね」

「……残念なことに、ね」

「そっか……」

首に下がるペンダントを見て、フリスクは残念そうな顔をする。返してあげたかった
んだろうか、と思いつつ、取り敢えず二つ目の棺桶の前に立つ。

「それじゃあ、返していいから」

「うん」

フリスクに声をかけて、返品を始める。オレンジのハートが描かれている棺桶の蓋を
あまり音を立てないようにしながらずらすと、中に横たわる小さな身体が見えた。

「……………」

死体を見て、フリスクが息を飲む音がする。そつと頭を撫でてから、死体を少し観察
する。

身長は、大体フリスクと同じくらいだろうか。腐乱臭が開けた時しなかったのに、肉がついているのが見える。魔法でもかけてあるんだだろうか。

失礼します、と小さく声をかけて、この子ものだったグローブとバンドナの土埃を払ってからそっと入れ、蓋を締める。

次に、黄色のハートが描かれている棺桶の蓋をずらす。少し大きめの人間の遺体が見えた。また、腐乱臭はしない。やはり魔法がかかっているらしい。

また失礼しますと声をかけて、先程使わせてもらったカウボーイハットとリボルバーをハンカチで銃身を磨いてからそっと入れて、締める。

次に緑色のハートの描かれている棺桶の蓋をずらす。……どうも、来た順ではなくソウルの色順でこの棺達は並べられているらしい。またフリスクと同じぐらいの身長の身体が見えた。

失礼しますと声をかけて、エプロンの土埃を払い、フライパンの底の汚れを少し叩いて落とし、そっと入れて、締める。

次は、水色のハートが描かれている棺桶の蓋をずらす。フリスクより少し小さいくらいの身体が見えた。綺麗な長い髪も一緒に見えた。

失礼しますと声をかけ、リボンを蝶結びにして、玩具のナイフをハンカチで念入りに拭いてからそっと入れて、締める。

次は、青色のハートが描かれている棺桶の蓋をずらす。フリスクと同じくらいの身体が見えた。足が、傷だらけでぼろぼろだ。きつと、バレリーナ志望だったのだろうに。

失礼しますと声をかけて、汚れてしまったバレエシューズの汚れを出来るだけ払って、チュチュを少し畳んでそっと入れて、締める。

最後に、紫色のハートが描かれている棺桶の蓋をずらす。フリスクよりまた少し大きいくらいの身体が見えた。固く握られた片手には、古びてはいるが尖ったペンが見えた。

失礼しますと声をかけて、ノートと曇ってしまった眼鏡のレンズを拭いて、そっと入れて、締める。

「……………これで、よし。手伝わせてごめんね、フリスク」
「ううん」

ゆるゆると、少し青い顔でフリスクは首を横に振った。やはり手伝わせない方が良かったのだろうか、と思いつつながら、棺桶から離れ、階段の方に戻る。

「……………」
「お姉ちゃん？」

何となく、振り返る。私が足を止めたことに気付いたらしく、フリスクも振り返った。

「……………ちよつと、待ってて」

「え？ うん、分かった」

フリスクに待つててもらうように頼み、棺桶達にまた近付いて、膝をつく。そして、手を組んで、私の独り言を呟く。

「……………勝手にあなた達の持ち物を借りてしまつて、ごめんなさい。使わせてくれて、本当にありがとう。私は神父でも牧師でもお坊さんでもシスターでも尼さんでも、ましてや神の声を聴ける聖女でも、遣わせられた天使でも、まあ兎に角清らかな存在じゃないから、あなた達をちゃんと弔つてあげることが出来ない。あなた達に持ち物を返すことと、あなた達の死後の安寧を祈ることぐらいしか出来ません。その祈りも、ただの私の自己満足。エゴにまみれた身勝手極まりない祈りです。誰も聞き届けてはくれないでしょう。それでも、祈らせてください。」

どうか、あなた達が安らかに休むことが出来ますように。次の生では、道半ばで命を落とすことがありますように。どうか、どうか……ありふれた幸せで満たされたもので、ありますように」

私の内の彼らに対する感謝をありつたけ籠めて、祈る。こんな私の自己満足にまみれた祈りなんて、きつと誰も聞き届けてはくれないだろうと分かつてはいる。でも、それでも、彼らの安寧を祈りたかった。

「……………お休みなさい」

最後にそう呟いて、立ち上がる。我ながら祈るなんてらしくないことをしたな、なんて思いながら、フリスクの所に戻る。

「お待たせ、行こうか」

「……………うん」

フリスクが頷いてから、じつと私を見上げてくる。

「……………どうかした？」

「ううん。……………お姉ちゃんの祈りは、身勝手なんかじゃないよ。きつと神様に届くよ」

「……………ふふ、ありがとう」

にっこり笑ってそう言ってくれたフリスクの優しさに心を癒されながら、階段を上つて、来た道に戻る。そして、遂に、玉座の間の前にまで戻ってくる。

「あ、待って」

フリスクが光の前で立ち止まり、いつも通りセーブを行う。きつと一度しか出番がないまま終わるであろうそれを見ながら、フリスクがセーブを終えるのを待つ。

「……………終わったよ」

「ん」

セーブを終え、二人で部屋の入り口の前に立つ。フリスクと目を合わせ、お互いの手をしっかりと握る。

「……行こう」

「うん」

そして、部屋に足を踏み入れた。

103. 対面

〔Lily〕

部屋に入ると、ふんわりと花のいい香りが鼻を擦る。小鳥の囀る声が聞こえ、所々日が射す金色の花畑の中に、大きな影が此方に背を向けて佇んでいた。

「ダン デイク ダン……」

サク サク サク

聞こえる鼻歌とサーツという小雨が降るような音を聞きながら黙って芝生の上を少し歩くと、芝生を踏み締める音が聞こえたのか、鼻歌がやむ。

「うん？ 誰か来たのかな？ ちよつと待ってくれ、もうすぐで花の水やりが終わるからね」

低く優しい男性の声が、此方に投げ掛けられる。少ししてから小雨が振るような音が止んで、水やりが終わったらしいことが分かった。

「……………よし、出来たぞー！」

そう言つて、彼はゆっくりと振り向いた。青紫色のマントがふわりと翻り、彼の顔が見えた。

「やあ！ 話を聞こう……………え？」

優しい笑顔が浮かんでいた山羊に似た顔が、驚愕一色に染まる。私とフリスクを見て固まってしまった彼を、不躰であることは分かっているが観察する。

私よりずっと大きい体格に、それに見合った大きな角。金色の髪と髭。体に纏われている金色の鎧、王であることの象徴である金色の冠が頭頂部に乗っている。どんな顔をしていても、『この人が王様だ』と分かる貫禄が見てとれる。

「……………こんにちは。そして初めまして、地下世界の王様」

ただ此方を凝視する地下世界の王様——アズゴアに、出来るだけ礼儀正しくお辞儀をする。

「……………Chara…………？」

そして信じられないといった様子で私に対して呟かれた一言に、思わず苦い笑みが浮かぶ。皆私とCharaちゃんが混ざりすぎじゃないか、と思っていると、唐突に体に衝撃が走る。

「いっ……………!!？」

「お姉ちゃん!!？」

目の前が金色で覆われ、フリスクの姿が見えなくなる。鼻を擽る花の香りが強くなり、腰に暖かいものが回され、足が地面に着かなくなる。パサリ、と何かが花の上に落

ちたような音が小さく聞こえた。

「ああ、ああ……………!!! Chara!! 戻ってきてくれたのか、私の愛しの家族!!」
「!?」

頭上で声がして、やっと抱き締められていることに気付く。腰に回っている腕であるう暖かい物に力が入り、頬と鎧がくつつく。

間違われるだろうとは思っていたが、まさか抱き締められるとは思っていなかった私は、思わず固まってしまふ。

「すまない、すまない!! 私、私は、君が重い病気にかかっていることに気付かず、君を殺してしまった!!! 救えなかった!!! どうかこんな不甲斐ない父親を」

「ちよ、ちよつと、何を言ってるんですか!? 私の名前はリリーです!! そのChara aって子じやありません!」

「……………え?」

彼の懺悔するような後悔の聲が耳に聞こえ、ハツと我に返り、言葉を遮る。すると、驚いたような声が聞こえ、腕の力が緩む。その隙にくっついていた顔を上げて彼の顔を見ると、目が潤んでいて、今にも泣き出してしまいそうだった。

「……………どうですか、私は本当にそのChara aって子ですか」

「……………ああ、本当だ。君は、Chara aではない……………」

残念そうな、泣き出しそうな顔をして、アズゴア王は私を地面にそつと下ろして離し、ゆつくりと玉座の前まで戻る。

「……あの子達は、もう居ないんだ」

「!!」

回された腕が離れる間際、絶望を滲ませた声で小さく呟かれた言葉が耳に届いた。

「すまないね、突然こんなことをして……驚いただろう？」

「……いいえ、気にしないで下さい」

先程までいた場所辺りまで下がり、申し訳なさそうに力無く笑った彼に、首を緩く横に振る。

「ああ。……『お茶でもいかが』と言えたらどんなにいいことか」

目を逸らしながら、アズゴアはゲーム通りの台詞を言い始める。

「でも……君は分かっているのだろう」

何処か悲しそうな、寂しそうな笑顔を浮かべて、アズゴアは私から見て左の方に歩を進める。

「……清々しい日だとは思わないかい？ 鳥達は歌い、花は咲きほこっている……最

高のキャッチボール日和だ」

「……そうですね」

サアツと、そこで風が通り抜ける。金色の花が風に揺れ、花の香りが一層濃くなった。

「……………何をしなくちやいけないか、もう分かっているよね……」

「ええ」

アズゴアの言葉に頷けば、より一層、彼は悲しそうな顔をする。やはり彼は、私とC haraちゃんを重ねてみているのだろうか。

「準備が出来たら、隣の部屋に来なさい」

「……………はい」

それだけを告げて、彼は奥の部屋へとゆっくり進んでいく。彼の姿が奥に完全に消えるや否や、フリスクがパーカーの裾を掴んでくる。

「大丈夫？ お姉ちゃん」

「うん、大丈夫。抱き締められただけだからね」

「そう……………」

心配そうに見上げるフリスクの頭を撫でて、大丈夫だと伝える。安心したような顔をしたフリスクはパーカーの裾を手放し、私の手を握る。

「……………」

二人で花畑の中の玉座の傍を通り過ぎ、部屋の入り口前までくる。またセーブポイントを見つけたフリスクが私を引っ張って、近付いた。そしてセーブを行い始め、私はそ

の場で待つ。

「終わったよ」

セーブを終えたフリスクがそう声をかけてくる。

「分かった。それじゃあ」

「あ、待って」

そこでフリスクが、私のパーカーの袖を掴む。

「……………」

フリスクは、袖を強く掴んだまま、私から目を逸らして考えるような素振りをする。

一体何だろうと思いつながらフリスクを見ていると、フリスクは真剣な顔をして私を見上

げ、口を開こうとして、閉ざした。

「……………何でもない」

「? そう」

若干違和感を覚えながらも、フリスクの手を繋いで部屋に、足を踏み入れた。

部屋に入ると、光のあたる広場のような所になっているらしいと気付く。アズゴアは

その広場の右側辺りで待っていた。

「緊張しているね……………この感じは……………歯医者さんに行く時みたいだと思えばいい」

膠着状態のこの空気を和ませる為か、アズゴアが口を開く。何の言葉も返せずにいる

と、アズゴアはさっさと進んでいってしまった。それを見てから、私はフリスクの手を離して、光の中に立って上を見上げてみる。

「……………あ」

見上げた穴から、まだ青みがかかって完全ではないオレンジ色と流れていく白色が見えた。空だ、と少し遅れてから気付く。

……………ここは、バリアの目の前だ。そんな所で憧れの地上の空が見えて……………歯痒くは無かったのだろうか？

そんなことを思いながら、待つてくれているらしいフリスクの所まで戻り、手を握り直す。そしてアズゴアが進んでいった道を辿り、突き当たりの所で彼が佇んでいる所までくる。

「……………準備はいいかい？ 出来ていないなら、大丈夫だよ。私も出来ていないんだ」

その一言に、フリスクの手を握っていない方の手に力が入る。思わず痛くなる程に握り締めているうちに、彼は重たそうな足取りで部屋へと入っていく。

「……………一応、もう一回セーブしときな、フリスク」

「……………うん」

私の提案に乗ったフリスクは、指示通りセーブを行う。

「終わったよ。……………ねえ、お姉ちゃん」

「ん?」

少しするとセーブを終え、フリスクが話しかけてくる。だが、フリスクはそれから目を逸らして何も言わず考えるような素振りをする。その様子をどうしたのだろうと思いつながら暫く眺めていると、意を決したようにフリスクは顔をあげ、真剣な顔で私を見上げる。

「ナイフ、どつちか片方、ぼくに貸して」

「……………えっ」

一瞬、言われたことが理解出来なかった。

……………ナイフ武器を? 貸せって?

「……………どうしてか、理由だけ聞いていい?」

「うん。……………今までぼくは、ずっとお姉ちゃんに守られてきた。傷付かないように、誰も傷付けないように。メタトンの所でも、結局は守られちゃった。……………でも」

じつと、フリスクは理解が追い付いていない私を見上げる。

「王様との戦いは、本当に命の奪い合いだと思うんだ。王様はぼくたちのソウルを狙って、本気で殺しにくる。ぼくたちも、ここから出る為に彼を殺してしまうかもしれない。本当の殺し合いだ。でもお姉ちゃんは、ぼくを守って、あの人をぼく自身の力で傷付けさせてはくれないつもりでしょう? 分かっているんだよ?」

言葉に、詰まる。

私がフリスクの『FIGHT』を請け負おうとしていたのが、バレている。

「あのね、お姉ちゃん。今までずっと甘えてきたぼくだけど……ぼくはお姉ちゃんに、誰かを傷付ける自分かすべきことまでさせるつもりはないよ」

「……………でも」

「『辛いことがあつたら半分こ』って言ったのはお姉ちゃんでしょ?」

何とか考え直させようと口を開こうとした瞬間、あの時の約束を出されてまた何も言えなくなる。それでもどうにか言葉を探していると、フリスクが悲しそうな顔をする。

「……………ねえ、お姉ちゃん。お願いだから、お姉ちゃんだけで、ぼくの分の罪まで背負おうとしないでよ。ぼくの罪はぼく自身で抱えさせてよ。……………それぐらいの覚悟は、とつくに出来てるんだよ……………?」

……………参ったな

懇願するようにフリスクにそう言われて、思わずそう思う。ここまでくると、フリスクは絶対引いてはくれない。変なところで頑固なんだからなあ、もう……。優しすぎるのも大概だな。

はあ、と思わず一つ溜め息を溢す。そして、フリスクの目をじつと見つめ返した。

「本当にいいの?」

「うん」

「自分で背負っていける？」

「勿論」

「後悔しないね？」

「絶対に」

フリスクの意志が揺るがない固いものであることを再確認する。じつと私を見上げてくるフリスクに対して、思っていたよりもずっとこの子は大人なのだなと思いがら、私は、

「……………分かった」

仕方なく頷いた。

「！」

「……………こつちでいい？」

ポケットを漁り、先程手に入れたばかりの園芸用ナイフを差し出す。フリスクは真面目な顔でナイフを受け取り、しげしげと眺める。

……………本当は、フリスクの手を誰かを傷付けることで汚させたくは無かったんだけど。フリスクがそう望んで進むのなら……………私は何も言えない。手を出しちやいけない。フリスクにアズゴアを殺させる気はないけれどね。

「お姉ちゃん、ごめんなさい。ありがとう」

「……ううん。フリスクがそう決めたから、私はその意思を尊重しただけだよ」

ナイフをしっかりと握り締めたフリスクの謝罪と感謝に、私の中の色々な気持ちが混ぜこぜになって気持ち悪くなる。……それでも、フリスクには笑顔に見えるだろう表情を作った。

「……今度こそ、やり残したことはないね？」

「うん」

「よし、それじゃあ……行こうか」

お互いの手をしっかりと握り直し、部屋の奥へとゆっくり進んでいく。取り敢えず自分の中の気持ちを『絶対に誰にもフリスクを殺させない』という結論で一本に纏める。結局は、そこに行き着くから。

最後の部屋に、足を、踏み入れた。

「……なんだ……？ どうなってるんだ、これ……？」

入った中の異質さに、思わずそんな声が出る。そこには、灰色と白が入り交じって絶えず動いているような、ずっと、手が届かないほど遠くに出口があるような錯覚に陥るような空間が広がっていた。今潜ってきた入り口を見ると、その部分だけ切り抜かれた

ように長方形の穴が開いていた。訳の分からない空間に来たことに若干寒気がしつつ、少し歩いた所にいるアズゴアへと近付く。

「これが結界だ。我々を地下へ捕らえている結界だよ」

静かに、アズゴアは口を開く。これが、とアズゴアの説明を聞いて納得する。

「……………もし……………」

アズゴアが言いにくそうに言葉を溢す。

「万が一何かやり残した事があるのなら……………君がしなくてはならない事をしてきなさい」

……………この言葉は、彼なりの慈悲なのだろうか。それとも……………

そんなきつと答えは出ない思考が過る。回りそうになったその思考を切り上げ、フリスクと顔を見合わせる。そして、何も言わずにお互いの手を強く握り返し、頷き合う。

もう、このルートでやり残したことはない。

「……………いいえ。やり残した事は、ありません」

きつぱりと、背を向け続ける彼を見据えて告げる。

「……………分かった……………」

重々しく、私の言葉を聞いて、彼が頷いたのが見えた。

「遂に、この時がきたんだね」

そして、彼はゆつくりと、名残惜しそうに振り向いた。

「準備はいいかい？」

アズゴアがそう言うのと、するりと、地面から七つの容器が現れる。一つを除いて全ての容器の中に、色とりどりのハート型のモノが入っている。——ソウルだ、と気付くのに然程時間は掛からなかった。

その瞬間、世界が、白黒に反転する。

* (A ^不 ^思 ^議 ^な ^光 ^が ^部 ^屋 ^を ^満 ^た ^す)
strange light fills the room.

いつもよりも厳かなアナウンスが、流れ始める。フリスクと繋いでいる手をもう一度握り締めてから離し、私はナイフを取り出し、フリスクは鞆に手をかける。

* ^黄 ^昏 ^の ^光 ^が ^結 ^界 ^の ^向 ^こ ^う ^か ^ら ^照 ^ら ^さ ^れ ^て ^い ^る)
Twilight is shining through the barrier.

ナイフに巻き付かせていたハンカチを取り、ポケットに突っ込む。フリスクは鞆をゆつくりと外し、ベルトの部分に取り付ける。

* ^あ ^な ^た ^の ^旅 ^は ^つ ^い ^に ^終 ^わ ^る ^よ ^う ^だ)
It seems your journey is finally over.

戦闘に邪魔なりユツクを放り投げ、フリスクと一緒にナイフを構える。

* (You, re filled with

決意を抱いた) DETERMINATION)

『人間よ………』

最後に、アズゴアが語りかけてくる。

『君に会えて本当に良かった』

—— さようなら

別れの言葉を彼が告げた瞬間、彼のマントの下が赤く光る。

『!! フリスク、来るぞ!!』

「うん!」

ビュッ

という風を切る音が響き、先程まで握られていなかった筈の赤い三ツ又の槍が彼の左

手に出現する。そして、此方に向かってそれを構え、勢い良くそれがフリスクに突き出される。

「避けるッ!!!」

フリスクが咄嗟に左に飛び退き、槍の直撃は避ける。

——だが。

バリントン

硝子が碎けるような、そんな音を立てて、『MERCY』が槍で碎け散った。

——もう、後戻りは出来ない。

地面に落ちたそれと、顔を伏せながら槍を構えたアズゴアを見て、そう肌で感じる。自分が死んでしまうかもしれないことを覚悟し直し、ナイフを構えた、その時だった。

不意に、アズゴアの姿がぶれる。

『……………ああ、どうか、誰も私を赦さないでくれ……………』

そう涙ながらに懇願する、総てを背負おうとした悲しき王の姿が見えた気がした。

104. アズゴア王戦

[Lily]

*ASGORE ASGOREが襲いかかってきた attack!

戦闘が始まり、その場に今までのボス戦とは全く違う空気が流れる。肌を突き刺すような、酷く張り詰めた空気だ。ナイフを握る手に、力が入る。もう今更戻りはしない。だが、今目の前で血のように紅い槍を構える王と、話し合える道は無かったのだろうか。と考えられずにはいられない。

………いいや、やめよう。

この世界はきつと台本ゲーム通りに進んでいく。このルートでは、これ以外に道はない。だったら、私に出来ることは？

「全力で、倒す……!!」

彼への容赦の一切総てを消し、彼を見据える。ピッと、いう音がした。

*ASGORE | ATK 80 DEF 80

まずフリスクは彼を調べたらしく、彼の攻撃力と防御力が頭の中を掠めていく。硬いな、攻撃が通るだろうか懸念していると、彼の手がゆらりと持ち上がり、連続する火

の玉が飛来する。それぞれ逆方向に飛び退き、フリスクが回避に専念するなか、私は向かう火の玉の中を突っ込み、走る。自分に向かつてくる火の玉をナイフを素早く振って掻き消しながらアズゴアの懐に潜り込み、ナイフを振りかぶった。

ギイン

大きく振りかぶったナイフは槍の柄で防がれ、大きな音が響く。ブン、と槍が振られ、ナイフを押しきられた勢いで後退し、その場で立ち止まる。

流石に、ゲームとは違ってそう簡単には傷付けさせてくれないよなあ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

アナウンズが、流れない。それさえも今は大事なことでないと断じて切り捨て、次に備える。ちらりと見たフリスクが『ACT』に手を伸ばしているのを見て、やはりかと思いつつ、じりじりとフリスクと少し距離を詰め、庇いにいけるようにしておく。きつとフリスクは傷付けることを決意している、それでも何とか出来ないか考えるだろうとは分かっていた。自分が致命傷を受ける決意もきつと抱いているんだろが、それは私が嫌だ。だから、アズゴアの首を獲りに行くと同時に、フリスクが致命傷を負ったりしないように守らないと。

*
*

You quietly tell ASGORE you don't want to f

フリスクは一步前に出て、口を動かすと、そうアナウンスが流れた。それに対するアズゴアの反応を見ると、カタカタと、彼の持つ槍が震えている。

*His hands tremble for a moment.

アナウンスも、私が見たことを伝えてくる。やはり彼は本心では殺したくないのだろうかと思う。そんなことを思っていると、槍が彼の両手から消え、空になった両手から連続する炎が鎖のようになって蛇行しながら此方に向かつて飛んでくる。フリスクはトリエルさんの時も見た攻撃であることを思い出したのだろう、炎の鎖が蛇行する中で生じる隙間に身を滑り込ませる。私も同じように身を滑り込ませながら少しずつ彼に近付き、鎖が一瞬途切れた所で一気に加速してナイフで下から切り上げる。

ガキイン

現すならそんな音だろう音を立てて、瞬時に現れて握られた槍にまたナイフを防がれる。切り上げた腕を振り下ろして槍を持つ手の部分を狙う。それも読まれていたように、また防がれる。それでも横に一線を引くように思いつきナイフを振り、そのまま膠着状態になる。

*………

この至近距離になっても未だに目を合わせようとしないアズゴアの顔を下から覗き見る。目が合ったその顔は、哀しそうに、苦しそうに歪んでいた。

*

You tell ASGORÉ that you don't want to fight
 そんな中、アナウンスが響く。フリスクが言ったのであろうと思ひながら、私は目を
 合わせたまま、アズゴアに話しかける。

「……ねえ、本当に、これ以外に道は無かつたんですか？ もっと他に、お互いに手を取
 り合つていけるような選択肢は無かつたんですか……？」

「……………!!!」

*His breath gets funny for a moment.
 彼の息遣いが少し滑稽な瞬間。

アズゴアの顔が一層苦しそうに歪み、先程まで少しも乱れていなかった息遣いが、
 はっ、はっ、と小さく途切れるようになる。震える手で持つ槍にも震動が伝わり、ナイ
 フの刃に当たつてカチカチと音を立てる。迷いを振り払うように力を込めて振られた
 槍に腕ごとナイフを弾かれる。距離を少し取ると、彼の口の端から何か漏れでる。白
 黒の世界である所為でそれが何か分からず一瞬判断が鈍り、次の瞬間に吐き出された火
 の玉を避ける為に体を捻るものの、パークーを少し掠めていく。燃え移つたそれを素早
 く叩いて消し、追撃として両手から発射される炎の雨をナイフで掻き消しながら脱出す
 る。また吐き出される火の玉を避け、炎の雨を避けを繰り返す。

*……………

攻撃が止んでターンが回った所で、フリスクを見る。服装などに特に焼けたりした痕はなく、無事避けられているらしいと判断する。それだけを確認し、また前を見据える。

*You firmly tell ASGORE to STOP fighting.
ng《あなたはASGOREに闘いを止めるようはつきり伝えた》。

ピツという音が後ろから聞こえ、アナウンスが流れる。その瞬間、この距離からでも見える目を見開き、彼は体を身動きさせず。

*Recollection flashes in his eyes……

そのアナウンスのあと、また彼は、悲痛そうに顔を歪めた。ぎり、という歯軋りをする音が小さく耳に届く。

*ASGORE's ATTACK dropped!

*ASGORE's DEFENSE dropped!

アナウンスが、彼が弱体化したことを告げる。やはりモンスターの心情によつてパラメーターは変動するのか、と思ひながら、そのまま彼を見据え続ける。

不意に、彼の目が交互に青色に光った。

「!! フリスク、その場を動くな!!!」

何の攻撃か悟つてそう叫ぶや否や、彼の持っていた槍が見覚えのある青色に変色する。そして、素早く二回、槍が横風ぎに振られる。直ぐに動きを止めた私の体を、透過

した槍がすり抜けていく。槍が振られた際に生じた風の風圧でよろけそうになるのを堪え、その場に立ち続ける。槍の猛攻が止まった瞬間に走り、ブラフとして右足を前に出してナイフを横に振る。予想通り防がれた体勢から右足を軸に一回転し、勢いをつけて左足を手に叩き込む。

ゴツツ

という硬いものに踵が当たった感触がする。狙いが逸れて腕を覆っている籠手に当たったらしい。掴まらないように素早く後退し、出方を探る。

*………

ターンが回る。庇いにいける暇がないと危惧しながらフリスクを見ると、先程までと変わらない。攻撃は受けなかったらしいと思えば安堵しながら、また彼を見る。

* Seems to be talking with you, don't do any more good.

そうアナウンスが流れた瞬間、また彼が握っていた槍が消え、彼の両手が空になる。その両手に白色の火が宿り、そのまま横にスライドされる。両手から放たれる横一線に並ぶ火の玉の間を潜り抜け、凌ぐ。炎を掠めた頬がちりちりと痛んだ。

*………

ターンが回る。いつの間にか横に並んでいたフリスクを見ると、先程の『ACT』のアナウンスでもう話すことは彼には通じないと悟ったのか、じつと苦しそうな顔でナイ

フを見つめていた。そして、少ししてから、覚悟を決めたように顔をあげ、私を見る。

「…………お姉ちゃん。お願いがあるんだけど」

「どうしたの」

真剣な声音のフリスクに聞き返すと、フリスクは、

「……………ぼくが、攻撃出来るように、隙を作ってほしい」

私にそう頼んできた。

「……………いいの?」

「うん。…………殺すつもりは、ないけどね」

フリスクの顔を見つめると、そのまま覚悟を決めた眼差しが返ってくる。その眼差しに迷いが無い事を確認して、私は頷いた。

「いーよ、やったげる」

「!…………ごめん」

「謝らないの。こうなることは分かってたしね、仕方ないよ」

短く会話をし、二人でナイフを顔を伏せたままのアズゴアに向かって構える。まさかフリスクにナイフを構えさせる日が来るとは思っていなかったなと思う。その考えを直ぐに打ち払い、目の前の敵に集中する。

「ごくぞ」

一言そう声をかけて、アズゴアとの距離を詰め、飛び上がった首狙いでナイフを振るう。後ろに下がって避けられたそこから着地して立ち上がった勢いで下から切り上げのようにナイフを振る。また避けられる。

「……………ぐツ!？」

私の攻撃を避けた筈のアズゴアから苦しそうな声が溢れる。見ると、私が正面から突っ込んでいる内に懐に潜り込んだらしいフリスクが、彼の手を切り裂いていた。それを見てから追撃として思いっきり鎧を押し出して距離を置けるように蹴る。ふと、彼の頭上を見ると黄緑色のバーが表示され、それが少し減った。成る程、これがHPか。

「お姉ちゃん!」

「!」

フリスクの叫ぶ声に我に返り、アズゴアが召喚したらしい幾重にも重なる炎の輪に囲まれていることに気付く。此方を丸焼きにしようと円が縮んでいく炎の輪の中を通り抜けて、また彼に近付いていく。

*……………

ターンが回った瞬間また斬り込み、今度は左手を素早く振り抜いて、アズゴアの顎にアツパーを入れる。間一髪避けられたところで、一步踏み込んで全体重をかけてタックルをする。彼が少しよろめいたところで、フリスクが前に出て、一線。

赤い軌道が、見えた。

ギインツ

「……………えっ」

硬い金属で出来ている筈の鎧に、本来ただのナイフならつけることが出来ない筈の有り得ない傷が入った。思わず一つ驚いたような声を上げてから、迫ってくる炎の大旋風を見てはつとして避ける。邪魔だ。

*……………

ターンが回った途端、フリスクが『FIGHT』を押し、苦しそうな顔のままナイフを構えて突っ込んでいく。

「あああああ!!!」

そう雄叫びをあげて、フリスクがアズゴアの槍を潜り抜け、ナイフを振るった。表示されたバーがまた削れるのを見てから、私も追撃として横から蹴りを入れる。その瞬間、彼の瞳が青、オレンジ、オレンジと瞬き、槍が青色に変色する。

「まっず……………!!」

まるで涙を流すように瞬いた瞳の色に変色する槍に追い付けず、確かに質量のあるものが体に当たり、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「あぐっ……………」

ズキン、と色々な箇所が地面に叩きつけられた時の分と、槍で横風ぎに吹っ飛ばされた分の痛みを訴える。横風ぎにされたときの痛みが横腹から直に伝わってくる中、痛みを堪えて這いずる。

「げほ、がはっ……………」

ズキリ、ズキリと槍が当たったであろう箇所から、体全体に嫌な痛みが走る。呼吸をすることがままならない。メタトンに蹴られた際にもそこ辺りを蹴られたことを思い出し、今度こそ骨が折れたのかと見当をつける。…………あの槍による攻撃は即死に繋がるもの。生きているだけ奇跡だと考え、歯を食い縛る。

*……………

「お姉ちゃんツ!!」

「私は大丈夫だから攻撃に集中しろ!!」

槍を凌ぎきって叫んだフリスクにそう叫び返し、体を起こして立ち上がる。何とか離さずに握っておけたナイフを握り直し、構える。

私を見ていたフリスクは顔を歪め、ナイフをアズゴアに向けて『FIGHT』を押し、また突っ込んでいく。突き出された槍を最低限体を捻って避け、ナイフを振るった。赤い軌道がまた見える。攻撃がヒットし、彼の上に表示されたバーがまた削れていく。

「やあッ!!」

体を動かし、攻撃を行う。フリスクに集中していたらしい彼に突っ込み、ナイフを振るう。大振りな動作をしたからかズキリと体が痛みを訴え、軌道が逸れてしまった。彼のマントを切り裂くことしか出来なかった。その後、彼の手に豪炎が集中する。掌大の塊に炎が固まったと思うと、次の瞬間には目の前に炎の壁が迫ってきていた。横に飛び退いて転がって避けて、何とか凌ぐ。

*………

転がった先に、リュックがあることに気付く。腕を伸ばして手繰り寄せ、中にあるものを引っ張り出し、がつつく。甘いとだけしか感じられない。それでもアイテムとしての効力を発揮したらしく、体中を走る痛みがすっと引き、楽になる。急いで立ち上がり、ナイフを構えてまたアズゴアに向かっていく。しかしフリスクのターンはもう終わっていたようで、先程より傷が増えた彼が召喚したらしい炎の輪がまた周りに展開される。先程よりも速度を上げて小さくなってくる輪の中を潜り抜け、時々下がったりしながらも着実に距離を詰める。

*………

攻撃が止んだのを見計らって勢いを殺さず飛び込み、アズゴアの手にはナイフを突き刺して、貫く。ぐちゃり、という肉を刺す感覚がナイフを経由して手に直に伝わり、気分が悪くなる。素早くナイフを引き抜いて下がると同時にフリスクが前に出て、私が刺し

た手とは逆の手を切った。

「……………ッ」

ぐつと、痛みを堪える音が彼の口から聞こえる。その音に、心が揺らぐ。

—— どうしても、彼を傷付けなくてはいけないのか。本当に、どうしても？

彼の瞳が光を放ち、槍がオレンジに変色するのを見て心に浮かんた迷いを振り払い、回避する。色に応じた動きをすれば、痛々しい彼の手で振られた槍は体をすり抜けていった。

*……………

強く地面を踏み込み、飛び上がる。ナイフを二回、首狙いで振り抜く。槍で防がれ、攻撃が通らない。その隙にフリスクが下から潜り込み、ナイフを切り上げるようにして下から上にナイフを振るった。バーが表示され、削れていく。……………あと、半分ぐらい。

ボウツという炎が空気を焼く音を耳にし、フリスクの腕を掴んで素早く下がる。フリスクが居た場所を起点に炎が巻き上がる。あと一瞬遅かったら不味いことになっていたら確信しながら、フリスクの腕を掴んだまま炎の間を駆け抜けていく。

*……………

「ありがとう」

フリスクの小さな声に頷き返し、また先制攻撃を行う。ナイフを振るい、また槍で防

がれた所を体を捻り、蹴りを先程貫いた手に当てる。決るように足の先で蹴れば、嫌な感触がした。

「——ッ!!」

また叫び出したいのを堪えるような声、耳に届く。その声を知ってか知らずか、フリスクがナイフを振るった。赤い軌道が走り、バーが削れる。

彼の口の端から炎が漏れ出るのを確認し、後退すると同時に炎が連続で吐き出される。間隔の中に滑り込んで横に避ければ彼の手から炎の雨が発射される。また間隔の中に滑り込んで避けを繰り返し、凌ぐ。

*……………

炎の弾幕が止んだタイミングを見計らい、今度はフリスクが突撃する。苦しそうな顔のまま振るわれたナイフが、赤い軌道を描きながら彼を切り裂く。バーが削れる。……………あと、半分。

幾重もの炎の輪が展開され、焼き殺さんと狭まってくる。炎の間を見つけて潜り抜け、次の攻撃を直ぐに行えるよう距離を詰めておく。

*……………

今度は蹴りで先制攻撃を行う。後ろに受け流された勢いで振り返ってナイフを振るう。マントを切り裂き、鎧に少し傷がついたのが見えた。そこにフリスクが飛び込み、

ナイフを振るう。バーが表示され、削れていく。……………半分を、切った。

アズゴアの前にいるフリスクに、槍が振られる。彼が素早く一振りすることに変色していく槍を、フリスクは被弾することなく冷静に回避していく。

*……………

アズゴアの近くにいたフリスクが先に攻撃を行ったのか、アズゴアの体が揺らぎ、表示されたバーが削れる。後ろから攻撃を加えようとすれば、察知されたのか避けられる。それでも振り返ってナイフを振るうと、また距離を取られた。その距離のまま彼は左手を突き出し、炎を掌に集中させる。そうして集まった炎をスライドさせ、横並びの炎の壁を出現させる。此方に向かって飛んでくる炎を誘導して避け、凌ぎきる。

*……………

炎が消えたと同時にアズゴアに飛び掛かる。ナイフを振るうと、腕にヒットする。その彼の視線が此方に向いた瞬間を見計らって、フリスクがナイフを突き刺した。バーが表示され、削れていく。……………あと、三分の一。

また炎の輪が展開される。段違いの速さで迫ってくる輪の綻びに転がり込み、滑り込んで避けていく。炎がじり、と肌を掠めて焼く。火傷特有の痛みを感じながら、それでもアズゴアとの付かず離れずの距離を保つ。

*……………

低い体勢を取って突っ込み、下から切り上げ、勢いを殺さず踏み込んで横に一線する。そして追撃に蹴りを入れ、隙を作る。攻撃に気取られたアズゴアを、フリスクが赤い軌道で切り裂いた。バーが表示され、削れていく。後ろによるめいた彼は、それでも炎を召喚して巻き上げ、此方に向かわせる。炎の弾幕の間を縫い、駆け抜けていく。

*……………

ナイフを振るうと槍で防がれる。防がれる瞬間に踏み出される足に足払いをかけ、彼が体勢を崩したところで、ナイフで彼を切る。ギイン、という嫌な音が響き、鎧が傷付いた。モンスターの心によってパラメーターが変動する影響からか、鎧が酷く脆くなっているらしい。そう考えていると、フリスクがナイフを振るう。バーが表示され、削れていく。……………あと、少し。

彼の瞳が輝き、槍が変色する。オレンジ、オレンジ、青、青の順で振られる槍に、それぞれ色の動きをする。ビュツという音を立てながら、風を切る程速く振られた槍が体を通り抜ける。

*……………

近付いていたフリスクがナイフを振るうと、攻撃がヒットしたらしくバーが表示され、削れていく。先程よりもダメージ量が増えていることに気付き、また心が揺らぐ。その揺らぎを振り払い、突っ込んでナイフを彼に突き刺した。ギツ、という音を立てて、

鎧にナイフが貫通した。嘘だろ、と思つてみると、ボボボツという炎が灯る音を耳にし、ナイフを突き刺したまま離脱する。後退すると同時に周りに炎の輪が展開され、迫ってくる。間を縫い、駆け抜けていく。熱い、とだけしか思えなくなってきた。

*……………

フリスクを見ると、服が所々焦げ、穴が開いているところさえあるのが見えた。

この猛攻撃だ、避けられなくても可笑しくはない。

不思議と、フリスクが傷つけられているのに頭は冷静だった。フリスクが決意してやつてのことなのだという思いがあつたからだろうか。それとも……

その考えも今は捨て、先程刺したままのナイフを取りに懐に潜り込む。突き出された槍を避け、ナイフを手取る。もう一度体の体重を掛けてナイフを押し込み、中の肉を抉るように横に回転させると、ぐりゅ、という気持ち悪い音が聞こえた。

「……………ッッ」

また、堪える音が聞こえた。だが、隙も出来た。ナイフを引き抜き、後退した途端に彼が刺された箇所を抑えた瞬間を縫ってフリスクが攻撃を行った。ヒットした途端にバーが表示され、削れていく。また、攻撃量が増えている。そんな事思っていると、ボツという音を聞く。反射的にフリスクを引き寄せ、距離を取った彼が巻き起こした炎の中を駆け抜け、突き進む。

*……………

二人揃って突っ込み、彼を切りつける。鎧が傷付き、バーが削れていく。……………あと、一撃。

それを確認した途端に彼の瞳が輝き、槍がオレンジに変色する。オレンジ、青、青、オレンジの順で振られる槍を凌ぎ、彼との距離を保ち続ける。

*……………

「あああああああッ!!!」

叫び声をあげて、フリスクがナイフを振るった。赤い軌道が走り、バーが、総て削れた。

「……………ぐっ……………」

それと同時に、ついに耐えきれなくなったのか、彼が槍を落とし、がくりと膝をついた。彼の手を滑り落ちて地面に落ちた槍が、シューツという音を立てて、空気に溶けていく。

『おお……………やはり、こうなるのだな』

結果は分かっていたと、言外にそう伝えるような言い方で、アズゴア王はそう言った。

『……………息子が死んだ後の日々を思い出すよ』

絞り出すように、アズゴアはそう言葉を続ける。

『地下世界の全てが絶望で満ちていた。我らの未来はまたしても人間達に奪われたのだ』

あちこちに傷を作り、痛々しい姿のまままで彼は言う。

『怒りに任せ、私は宣戦布告した。……ここに来た人間は、全て殺すようにと』

彼の言葉を遮らず、話を聞き続ける。

『私が人間の魂を使つて神のようになり……この厳しい牢獄から自由になる為に』

ふと、目の前のフリスクに罪を告白するように言葉を紡ぐ彼の顔に対して強烈な違和感を抱く。よく観察して、先程まで戦っていたとは思えない程に何処か穏やかなものであることに気付き、一層違和感が大きくなる。

『そして人類を滅ぼし……モンスターに地上を支配させようとしたのだ』

そこでふうっと、彼は大きく息を吐く。

『間もなく、民達に希望が戻った。しかし妻は、私の行動に失望したのだ。妻はここを離れ、二度と戻らなかつた』

彼の口から『妻』という言葉聞いて、トリエルさんの顔が脳裏に浮かぶ。その顔を掻き消し、穏やかな顔のままのアズゴアに対し、警戒しながらゆっくり近付く。

『………本当は………力など欲しくない』

彼は、自分の本心を吐き出す。

『誰も傷付けたくはない』

自分がこの後、死ぬのだと思ってしまっているから。

『私はただ、民に希望を持って欲しかった……』

そこで、彼は俯いた。フリスクの横に並び、彼を警戒し続ける。

『………だが………私はもう疲れた』

悲しそうな、今にも泣き出しそうな声で、アズゴアは続ける。

『今はただ、妻に会いたい』

私達を見上げる顔は、永い間背負ってきた『モンスターの王』としての仮面を捨てた、

『一匹のモンスター』としての顔だった。

『今はただ、私の子に会いたい』

その顔には、涙が伝っていた。

『頼む……若者よ……』

涙を頬に伝わせたまま、彼は懇願する。

『長い戦いはもう終わりだ』

そこまで聞いて、その顔を見て、何故違和感を感じたのか、何故穏やかな顔でいられたのか、理解する。

『君には力がある……』

彼は、

『私のソウルを手に、この呪われた地を去るといい』

——死にたがっているのか。

画面越しでは解らなかつた彼の心情を完全に理解すると同時に、フリスクの前に選択肢が現れる。そして、彼は少し顔を伏せ、ボソリと何かを呟いた。それを、拾ってしまう。

「——……ああ、これでやっと、あの子達に会いに逝ける」

一瞬、彼が何を言っているのか判らなかつた。

そして、理解したと同時に、私の思考は怒り一色に染まりきつた。

「……………ふざけるなよ」

「……………お姉ちゃん?」

フリスクの声が聞こえた気がする。今はそれもどうでもいい。

彼に近付き、私は

「ぐっ!?!」

ぼろぼろのマントの襟をナイフを持っている手で掴み上げ、驚く彼の頬を狙って手を振り上げた。

105. 罪の重さ

〔Assore〕

パンツ

酷く乾いた音が、近くで響く。視界が横に擦れ、遅れて先程まで感じていた切り裂かれる痛みや肉が抉られる痛みとは全く違う、じんと染みるような痛みが頬から伝わった。視線の端に映る振り下ろされた手を見て、頬を打たれたのだと気付いた。

「……………ふざけるなよ、お前」

酷く冷たい、低い声が聞こえた方に顔を向ければ、私を掴み上げて此方を見るあの子に良く似た人間が視界いっぱい映る。自分を見下ろすその瞳は、酷く冷たかった。

「私の妹に、なんてことさせようとしてんの？」

その強い口調と声に、見下ろされていることも有るのか思わず気圧される。どうやら目の前の人間には、先程思わず口に出してしまった想いを聞かれてしまったらしい。

「……………すまない。だが、これで君たちは…………」

「あのなあ」

言葉が続けようとすると、遮られる。

「他人の妹にお前自身の罪を擦り付けて逃げようとしてんじゃねえよ」

冷たい声が、私の心を射抜く。

……『逃げようとしている』という言葉に、何の言葉も返せなかった

「お前、今まで何人殺した？ 六人だよな、最初の子を入れないで考えろ」と

酷くはつきり『殺した』と明言され、ズキリと心が痛む。私に心を痛める資格なんて、ないとは分かっているが。

「そうしなければならなかったとはいえ……お前は重罪を背負った。そんなのは、とうに理解は出来てるんだよな？」

「……ああ、勿論だ」

「そうだよな、じゃあなんでもうちの妹に自分を殺すよう促した？」

問い質す一言に返す言葉が出てこない。何を言おうとしてもどうしても詰まり、どうやったって返せない。

呆れたように、人間の目が細められる。

「お前は自分が犯した罪の重さを分かかってない」

その言葉に、心底驚き、心外だと思う。

「そんな訳……」

「あるんだよ」

言葉を重ねようとした途端、有無を言わせない声音で封殺される。

「分かつてるなら、そもそもさつき Тайミング で自分を殺すように促したりしない。自分の罪を誰かに背負わせようとなんてしない」

冷たい、底冷えしてしまいそうな程冷たい瞳が、私を見据える。

「……………別にね、『罪から逃げるな』とは言わないよ。そんなのお前の勝手だし、知ったことじゃない。心底どうでもいい」

だけどな、とより一層視線をきつくし、人間は続ける。

「お前と同じ重罪を、誰かに、特にあの子に背負わせようとするじゃねえ。それは罪を背負う者として、絶対にしちやならないことだ」

冷たく、人間は言う。

「……………お前は気が遠くなる程その罪を抱え続けてきたんだろう。それならお前は『罪を背負うことの過酷さ』を知ってる筈だろうが」

そう言われて、今までの日々が思い浮かぶ。

「それをお前は、たった十年しか生きていないガキに背負わせる気か? ……あの子は優しいから、お前が望めば震える手でお前にナイフを振るってお前を解放してくれるだろうよ。だがな、それは同時に『お前を殺した』という紛れもない罪を抱えさせることになるってことだ。名実共に、あの子はモンスターを殺した人間となる。あの子には

ずつとお前を殺した事実が付いて回る。死ぬまで罪を背負わされるんだ。……これがどういう意味か、お前はよく知ってる筈だよな」

しかも、と言葉は続く。

「お前は人間を殺している。六人もだ。あの子がお前を殺してソウルを手に入れて外に帰ったでしょう。それを知った世間はあの子を讃えるかもしれないな、『よくやった』、『お前は悪くない、正しいことをしたんだ』って。だが、お前はさつき自分の本心を話した。そしてお前の周りのモンスター達がどれだけお前を大事に想っているのか、あの子は知っている。お前の性格や優しさを、あの子は正確に理解している。あの子は苦しむだろうなあ、自分が犯してしまった罪と周りの評価との擦れに。それはお前だって味わってきたんだろう？ 自分が救えなかった最愛の子と同じぐらいの子供を殺した自責の念と、『正しいことをしたんだ』、『殺してくれてありがとう』と笑顔でお前の功績を讃えてくるお前の気持ちを知らない民草共。その二重苦を、お前は知ってて背負わせようとしたのかよ。なあ」

思わず、目を見開く。まるで見たことがあるように言われたその言葉は、酷く重くのし掛かった。一言も、返せる言葉が見当たらない。『お前に何が解る』、という苦し紛れの叫び声さえ、出てこなかった。

「……………逃げるなどは言わないって言った手前、言うつもりはないよ。でもな、これだ

けは言わせろ。自分が犯した罪の重さに潰されるくらいなら、最初から背負うなよ。一時の感情に任せて宣言したことを、結局後悔して死にたくなる程責任を感じるくらいなら、最初から『王として』なんて綺麗な言葉を使うなよ。一つソウルを手に入れた時点で外に出られた筈なのに、出ずに待っていただけの臆病者のくせに、覚悟を決めずに動くからこうなつて後悔する羽目になるんだから」

冷たく突き放す言葉が、胸に刺さる。

「長くなつたけど、結論として言いたいことは……お前の身勝手極まりない懇願なんて誰が受け取つてやるかよ。そんなことしても、結局は罪を背負わされるだけだ。妹の手は汚させないし、私もお前を殺してやらない。お前を罪から解放なんてしてやらない。死にたいなら、勝手に一人で死ねばいい。そんなことするくらいなら、この地下世界に永住した方がマシだ」

人間はそう私に吐き捨て、乱暴にマントを掴んでいた手を離し、一歩後ろに下がった。

「…………お姉ちゃん、言い過ぎじゃない…………？」

「これぐらい言わないと理解しないんだもの、このもふうさ王」

Charaにそっくりな人の剣幕に唾然としていた小さい子は、そう苦言を呈する。そして、ナイフを腰に下げた鞆にしまい、私に近付いて、目線を合わせてくれる。

「…………でも、お姉ちゃんが言いたいことも分かるよ。ぼくだって、お姉ちゃんに手を汚

してほしくないもん」

だから、と小さい子供は小さく笑みを浮かべる。

「さつきまで散々あなたを傷付けておいて、言えることではないのはわかっているんだ。でも、言わせて下さい。ぼくにあなたを殺す気は一切ありません。このナイフは、あなたに振るいません。あなたを自由にしてあげることができません。でも、それでも罰がほしいなら、こう言います。

『罪を償う為にこれからは生きて下さい』」

——…罪を、償う為に

すとなと、目の前の彼女の言葉が胸に収まる。

「……………今そこに居るお姉ちゃんが『誰かの命を奪ったら、その奪った命の残りを必ず生きないといけない』って、昔に教えてくれたんです。お姉ちゃんは命の重さを教える為に言ってくれたらしいんですけど……ずっと昔に言われた筈なのに、よく頭に残っているんです。今のあなたも、きつとそれに当てはまるとおもいます。あなたは六人分の残りの命を生きなくちゃいけないと、ぼくはおもいます。だから、生きて、どんなことがあっても生きて下さい。抱えた分を生ききるまで、死ぬことは絶対に赦しません。それがぼくがあなたに示す罰です」

彼女の慈悲が、まだ覚えてたのであろう辿々しい敬語で告げられる。

私は、勝者であるこの子に死生なせてもからえなさかつた。

それを、ゆつくりと理解する。

「……………私が君を傷付けようとしてもなお……………ここに留まり、耐え忍ぶことを選ぶのか……………地上で幸せになることよりも？」

「はい。ぼくは、大好きなお姉ちゃんが傍にいてくれればそれで充分ですから」

「……………フン」

何とか声に出した言葉に、目の前の彼女はにっこりと笑って頷き、一步下がって見守っていたあの子にそっくりな人間は当然だと言わんばかりに鼻を鳴らす。

私よりもずっと強い心と覚悟を持った彼女達を、眩しく思った。

「……………人間よ……………約束しよう……………」

その彼女達の慈悲に報いなければならない。

そう思った私は、約束を口にする。

「君がここに居る間……………妻と私で、出来る限り面倒を見よう」

私の言葉が意外だったのか、彼女達は目を見開いた。

「居間に座って、お話をしよう……………バタースコッチパイを食べながら……………」

そこで区切ろうとした筈の自分自身の口から、そんな言葉が滑り出る。その言葉に、四人で暮らしていたあの日々を思い出した。

——……………ああ、そうか。私は、ずっと……………

「そう、私達はまるで……………まるで、家族のように……………」

ずっと、あの日々に帰りたいたいと、焦がれていたのか。

そう気付いた瞬間、白い種のような魔法が現れる。

「なっ……!?!」

あつという間に種は私達三人を取り囲み、逃げ場を失った。そして、風を切る音を立てて、魔法が発射される。

——咄嗟に体が、動いた。

二人に手を伸ばして引き込み、覆い被さるようにして抱き締める。

「え」

ザシユツ

私の体を質量を持った何かが、幾つも通り抜けていった。

「が、はっ……」

「そんな、え、どうして」

体が揺らぐ。

視界がずれていく。

全身の感覚が消えていく。

もう、なにも、わからない

——
おとうさん

こえが きこえて

ああ あのこが てを

106. 訣別

〔Lily〕

——目を、覚ます。

目を開いた感覚と、開いた視界の真つ暗な闇の中で見えた己のナイフを握る手を見えるから、きつとそうなのだろう。体を動かし、起き上がる。感覚は、ある。次に、何処だ此処は、と思考が動く。辺りを見渡しても、あるのは闇ばかり。傍に大事なフリスクが目を閉じているだけで、あとは黒一色で全て塗り潰されていた。どうしてこんな所に自分はいるのだろうかと不審に思い、前後の記憶を思い出そうとする。

そこで、思い出した。

金色の花弁を持ったモンスターの、下卑た囁い声を。

「ツツ!!!」

意識がはつきりと、明瞭になる。

私達を庇って攻撃を受け、塵になっていく彼を呼ぶ資格もないのに「お父さん」だなんて呼んで、あと少しで彼のソウルに手が届く所で割られてしまった光景を、思い出してしまった。

……私は、守れなかったのか。死なせたくなかったあの優しい王様を。あんな啖呵を切っておいて？

ぎりっ、という音が口の中で響き、無意識に歯軋りしていた事を知る。

分かっていてた筈だ、この世界は台本通りゲームに進んでいくんだって。それでも、私には糸が見えるから何とか出来るって、何処か慢心してた……!!!

「くそっ」

だん、とあるのかさえ分からない地面に拳を叩き付ける。

「……………うう、ん」

叩きつけた時の振動が伝わったのか、フリスクが呻き声をあげた。

「！ フリスク！」

慌てて顔を覗き込めば、フリスクはうつすらと瞼を開けた。

「……………お姉ちゃ、ん……………」

「大丈夫？ 痛いところは？」

「……………ない、大丈夫……………」

ゆっくり瞼を開け、ゆるゆるとフリスクは起き上がる。そして、先程の私と同じように辺りを見渡した。

「……………は……………王様は？」

「分からない…………でも、ソウルが割られてたし、多分きつと…………」
「…………そっか、だよね」

王様の安否を答えると、フリスクの顔が悲しそうに翳る。また守られちゃった、と小さく、本当に小さくフリスクは呟く。だがそれもすぐに消え、フリスクは顔をあげた。
「まず、ここを出ないと。どこか、出口は……………」

そう言つて、フリスクはもう一度辺りを見渡す。そして、ある一点の方向を向いて、ピタリと動きを止めた。

「あ、あれつて…………」

フリスクの目線の方向に顔を向けると、うつすらと光が見える。

…………あれは、決意の光か？　じゃあ、やっぱりここは…………

「取り敢えず、行つてみようよ。何か手がかりになるかもしれないし」

「……………そうだね。此処でじつとしてても仕方ないしね」

フリスクの言葉に賛同し、先に立ち上がる。フリスクに手を差し伸べ、迷うことなく掴んでくれたフリスクを立ち上がらせる。そして、先程見つけた光を道標に進んでいく。

……………だが。もし私の予想が正しければ、あの光は…………

これから起きるであろう展開に警戒しつつ、直ぐにでも前に出て庇えるようにフリ

クの隣を歩く。暫く歩くと、遠くにあつた光は手を伸ばせば届く距離にまで近付いた。いつも嫌悪しか感じないその光が、今はより一層憎かった。

「やっぱりこれだったんだ……」

フリスクが、手を伸ばす。光に触れるとフリスクは空中に目線を向け、何かを操作しようとする。その瞬間だった。

ガンッ

何かがぶつかったような音が響き、目の前の空間に赤い亀裂が入る。突如起こった現象に思わずぎよっとして、亀裂を凝視する。

ガンッ

「フリスク、一旦引くぞ!!」

大きな音を立てて広がっていく亀裂に本能的に危険を感じ、咄嗟にフリスクを抱え、後退する。

ガンッ

また、赤い亀裂が大きくなる。そして、

バキンッ

一際大きな音を立てて、空間が割れた。

そこに現れたのは、

「……………フラウイー……………ッ!!!」

私が今世界で二番目に誰よりも憎くてたまらない相手の巨大な面だった。

【やあー！】

急遽もう一度距離を取り、フリスクを背中に隠す。ザーツと砂嵐が走り、その砂嵐が晴れた後にフラウイーはまるで悪戯が成功した子供のようになつた。

【ぼくだよ、フラウイーだよ。お花のフラウイーちゃん！】

聞いていて腹が立つ甲高い声が、大音量で響く。

【ああ、Chara、ようやく会えたのにそんな顔しないでよ、もう……………】

私が憎む資格なんてないのは分かっているが、それでも目の前のコイツを睨まずにはいられなかった。憎悪にまみれてぐちゃぐちゃになっているであろう私を見て、フラウイーはまるで誰よりも愛しい人を見つめるようなとろりと溶けるような熱を孕んだ視線を超越す。その視線さえ、今は鬱陶しくて、気持ち悪くてたまらない。

【……………ああ、そうそう。後ろで隠れてるきみには感謝しないとね】

どうでもいいことを思い出したような素振りを見せ、フラウイーは何の感情も籠っていない目でフリスクを見る。

【あのバカな老いぼれをホントにやつつけちやつだから。きみがいなきや、ぼくはあいつに勝つてこなかったんだよねえ】

そこでフラウイーは、自分の顔をアズゴアそっくりの顔に変形させる。

【だけど、きみが手伝ってくれたおかげであいつ……】

……—死んじやった。

「……………てめえツ……………!!!」

いけしやあしやあと言葉を並べるそいつに向けて怒りに任せて咄嗟に言おうとした『自分の親だろうが』という言葉を何とか飲み込む。ここで今言う言葉ではないと無理矢理自分を納得させ、一層フラウイーを睨むだけにしておく。

【そして人間どものソウルは今や僕の手の中さ！ あーツはツはツは!!!】

本当に可笑しそうに彼を嘲る、愉悦を孕んだ嗤い声が空間に木霊する。ぎり、とまた口の中で音がした。

【ねえねえ】

また砂嵐が走り、フラウイーが語りかけてくる。

【ぼくは長い間ずうーつとからっぽだったんだ】

ねつとりと、此方を絡め込んでしまおうとする悪意をたつぷりと込めて、フラウイーは語る。

【ソウルをまた取り込めてすっごくいい気分なんだよ。うーん、ソウルがうねるのを感じるなあ……】

そこでフラウイーは、憐れむように此方を、フリスクを見た。

【あつごめん、君を仲間はずれにしちゃってるかな?】

「……………てめえの仲間になんぞ死んでもなりたくねえよ」

【え? ああ! Charaのことじゃないよ、Charaの後ろに隠れてるちーつばけな人間に言ってるんだよ? Charaはぼくの親友だもん、そもそも格が違うよ】

私の拒絶をどういう風に解釈したのか、フラウイーはにつこりと無邪気に笑って語りかけてくる。その笑顔に思わず虫酸が走った。

【まあでも、ちょうどいいや。ぼく手元のソウルはまだ六つしかないんだ】
見下したように、私からフリスクに視線を移してフラウイーは言う。

【あともういつこ手に入れられれば……………ぼくはこの世界の神様になる!】
可愛らしい顔から凶悪な顔に、フラウイーの顔が変貌する。

【その暁には、この新しい力を使って……】

そこで砂嵐が走り、フラウイーの顔はトリエルさんのような顔になっていた。

【モンスターに。】

次に、口と目を真一文字に引き結んだ人間のような顔に。

【人間に。】

そして、何のモンスターなのかも判別できないほどぐちゃぐちゃに混ざり込んだ顔になる。

【みーんなに。】

ざっと、砂嵐が走る。砂嵐が止むと、そこには狂ったように笑う、恐ろしい笑顔をフラウイーは浮かべていた。

【この世界の真実つてやつを教えてあげるんだ】

「……………Kill^{殺す} or^か be^{殺さ} Kill^{れる}ed、だったか？」

【そう！ 流石Character！ この世界の女神様になるんだから、これぐらいやつぱり解るよね！】

耳障りな無邪気な肯定と一緒に耳に入ってきた言葉を、一瞬遅れて理解する。コイツは、今なんて…………？

「……………は？ お前、何言つて…………」

私の言葉に、フラウイーは驚いたように目を丸くする。

【え？ だつてそうでしょ？ Characterはぼくの親友だもん、この世界の女神様にならないとおかしいじゃないか！】

きよんとしたような顔で、たださも当たり前のことを話すようにフラウイーは言っ

た。

【そして、ぼくとずっと、ずうーつと一緒にこの世界を支配するんだよ！　ねえ、Charr a！　良い考えでしょ!?!】

にっこりと、笑顔を浮かべ、フラウイーはそう訊ねてくる。その背中が泡立つ程狂気染みた笑顔に絶句し、何も言えなかった。

【おっと、どうせ前のセーブデータに逃げればいって思ってるでしょ?】

ザーツと砂嵐がまた走り、フラウイーはフリスクにそう語る。にやり、と顔が歪められた。

【お気の毒ですがきみのセーブデータは消えちゃいました!】

嘲笑うように、おちよくるようにフラウイーは言った。

【でもご安心ください。昔ながらのお友達のフラウイーちゃんが……代わりにデータを留意してあります!】

パツと打って変わって満面の笑みを見せるフラウイーに一層警戒を強める。その瞬間、フラウイーの顔が凶悪な顔に歪んだ。

【オマエの死に様をセーブするためのね】

脅すように、フラウイーは声を低くする。

【オマエを八つ裂きにするほどの姿を拜ませてあげるよ……何度でも、何度でも、なんど

でも……」

隠すことなく叩き付けられる悪意に、どす黒い何かが鎌首を擡げる。その時だった。フリスクが、私の前に出た。そして、フラウイーに向かつて、指を指し示す。

「……は？ オマエなんか本気でぼくを止められるとも思ってたの？」

その言葉に、フリスクは頷き、腰のナイフを抜き放った。

「へへへ……」

呆れたようにフラウイーは目を伏せ、そして、軽蔑するような眼差しでフリスクを見た。

「きみは実にバカだなあ」

そこで、フラウイーは嘲笑うように嗤い始める。そして、また砂嵐が走った。

次の瞬間、莫大な殺気が叩き付けられた。

私達——フリスクを嘲笑う嗤い声が、闇に響く。

奪われてしまったソウル達が、闇に浮かんで、消えた。

口にするのも厭われる、悍しい巨大な何かが近付いてくる気配がする。

突如として空間に、白い四角の顔面が現れる。

道化のようににやりとした口元

棒のような目が横に裂け、赤と緑の眼球がぎよろりと此方を見下ろす。

そして、ソイツは姿を現した。

目玉を持つ訳の分からない人肌色の造形。

太い鳶のような腕と、その先の紅い鉤爪。

何処かに繋がっているらしい駆動機関が、垣間見えた。

花卉のような形をするパイプの上に、顔の部分であるブラウン管テレビが乗っ

た。

その思わず戦慄するような邪悪な姿を、私はよく知っている。

——ゲームだった時に、『オメガフラウイー』、正式名称は『フォトシヨツ
プフラウイー』と呼ばれていた、悪夢の象徴。

あはははははははははは
!!!!!!

あーッはッはッはッはッはッはッ
!!!!!!

まるで狂ったような、嘲りを隠さない嗤い声が、響いた。

【どうだい、Chara! バカな人間どものソウルを取り込んだ、この世界の神様の姿
はー!】

まるで無邪気な子供が親に褒めてもらいたい一心で見せびらかすように、フラウイー
はその姿で私に笑いかける。

【本当はもっと格好いい姿があるんだけど、仕方ないから我慢してもらおうしかないんだ。

ごめんね？ でもね、Charaはもつともつと素敵な女神様にしてあげる！」

頬に手を当てるように、フラウイーはテレビに腕の先を宛て、うつとりとしたような顔で私を見つめる。

【どんな姿がいいかなあ、女神様つて綺麗な存在だし、白一色の服装がいいかなあ。ああ、でもやつぱりいつもの柄が一番Charaに似合ってるんだよなあ。金色のお花の冠をつけて、ぼくとお揃いのものもつけて……。ああああ、想像しただけでたまらないよ!!】

そこでハツとしたようにフラウイーは私を見る。

【ああ、ごめん、Chara！ ちゃんときみの要望は聞いてあげるからね！ ねえ、どんな姿がいい？ ぼくとしては、やつぱりきみのその柄のドレスか何かがいいと思うんだけど】

にこにここと、此方に笑いかけてくるフラウイーに、私は何も返さない。

【あ、そうだ！ お城も用意しなくちゃ！ ぼくらの大切なお城！ 二人でいつぱい遊べるお城！ バカな人間どもがぼくらを崇め奉る象徴を建てなきゃ！ ね、そうでしょ？】

何も、返さない。

【それでぼくらがそこから全世界を支配するんだ!! ねえ、凄いでしょ、Chara！

誰もぼくたちを否定しない、誰もきみを傷付けない理想の世界がぼくたちの手で作れるんだ!! 神様にさえなれば、その理想の世界が手には入るんだよ!!!」

だから、とフラウイーは言葉を続け、此方に歪な手を差し伸べた。

「そんな人間の傍にいないで、ぼくの傍に来てよ、Chara。……ぼくたち、親友だろう？」

につこりと、Charaが自分の手を取ってくれろと信じてやまない満面の笑みを浮かべた顔で、フラウイーはそう言った。ちらりとフリスクを見ると、フリスクも不安そうな目で此方を見ていた。

目線をフリスクからフラウイーに戻し、目を閉じて一つ深呼吸をする。そして、フラウイーを見据え、差し伸べられた手に手を伸ばす。フラウイーの顔が嬉しそうに歪んだ、その瞬間。

「バカはお前だよ、
このクソ花」

バシンツ

差し伸べられた手を思いつきり引つ叩いて、私は目の前のクソ花バケモノに『否』を突きつけた。

「……………え？ な、何、してるの？ Chara」

私の言葉と行動に、信じられないようにフラウイーは目を見開く。

「私はその『Chara』じゃない、『リリー』だつて言つただろうが。私を神様に誘うのはお間違いだ。それにもしも私がその『Chara』つて子だつたとしても、私はお前の手を取りはしないよ。私の願いは、私が望む理想の世界は、そんなじゃあないんでね」

「そ、そんな……………!! じゃ、じゃあ、どんな世界だつていうのさ!!」

目に見えて酷く取り乱す様を見ながら、私は不安そうな顔から驚いたような顔になつたフリスクの横に並び、自分の願いを告げる。

「私の理想の世界は、『この子が「幸せだ」つて笑っている世界』……………お前が言つた理想郷なんて、私の願いに掠りもしてないんだよ」

「お姉ちゃん……………!!」

フリスクの不安を打ち消すように、頭を撫でながらそう突き付けると、バケモノは信じられないというようにテレビの頭を横に振る。

頭を抑えて発狂しだし、そして自己完結してギラギラとした目で此方を見るバケモノを尻目に、私はフリスクに呼び掛ける。

「フリスク!! ここまでできたらいつに一切の容赦は無しだ、全力でぶっ飛ばすぞ!!!」
私の呼び掛けに、フリスクは。

「……………うん!!」

決意に満ちた顔で頷いて、同じようにナイフをバケモノに向けた。

……………戦闘、開始だ。

107. フォトシヨツプフラウイー戦

〔Lily〕

FILE I SAVED.

ギリリと色違いの目玉でバケモノがフリスクを睨み付けると、人肌色の造形の目から白い光のような散弾弾幕が展開される。横つ飛びに飛んで避け、攻撃の合間を縫って避ける。それが止むと、今度は先に人間の手がついた茨の蔦が此方に向かつて伸ばされる。かなりの速度で迫ってくるそれを回避しながらナイフで切り落とし、捕まらないように立ち回る。

……………今のバケモノはフリスクに完全に狙いを定めてる。フリスクから離れないようにしないと殺されてしまう……!!

腕から生えてきた火炎放射機が火を吹く中、フリスクとの距離を詰め、いつでも庇いにいけるようにする。

本当は私自身がナイフを脳天にぶっ刺したかったが仕方無い。この世界の主人公はフリスク。主な攻撃はフリスクに任せて、私は追撃と庇うのに専念しよう。

〔潰す潰す潰す潰す潰す潰す潰す〕

バケモノが歪な手を振り上げ、フリスクを叩き潰そうとする。バックステップで後ろに飛び退いたフリスクが『FIGHT』を押し、ナイフで振り下ろされた手に切りかかった。赤い軌道が走り、鳶の腕に傷がつく。それを見てから、同じく手にナイフを振るう。ナイフが植物の手に食い込み、うっすらと傷をつけた。本来の植物の柔さなら、もっと切れてもいいぐらいの力を込めたにも関わらず、こんなにうっすらとしかつかない。やはり人間のソウルを取り込んだことによるステータス上昇が起きているらしいと思に至る。

攻撃が終わると同時に白い種が周りに展開される。移動する毎に周りを取り囲んで飛んでくるそれをいくつか弾き、回避していく。回避し損ねた種が一つ、腕を抉っていく。痛みで叫んでしまわないように歯を食い縛り、回避を続ける。次の瞬間にはまた此方を貫く、もしくは捕らえようとする目的の鳶が有り得ないスピードで向かってくる。フリスクを狙って飛んできていると判断し、咄嗟に前を走るフリスクを抱き寄せ、一点に集まった所を叩つ切る。

……有り得ないぐらいのスピードだ。これもステータス上昇の賜物だろうな。

そう考えながら次々に飛来する鳶を切り捨て、止んだ一瞬を狙ってフリスクを離し、今度は手を握って走り抜ける。視界の端に、火炎放射機が出てくるのが映ったからだ。

私達が離れると一瞬遅れて、火炎放射機が火を吹いた。両側から吐き出される炎に焼

かれないように絶妙な位置を割り出して避難し、それを保って出来るだけ最低限の動きで避ける。

【どうしてソイツを庇うのどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして】

嫌でも耳に届く譫言を無視し、火炎放射機を避け続ける。じゅっ、と炎が掠めていく音がした。

ヴイーツ ヴイーツ ヴイーツ

避け続けていると、大きな音が鳴り響いた。警報の音のようなそれにハツとして顔をあげると、バケモノの顔の部分であるテレビの周りのパイプが水色に光り、不気味な色を発していた。そして、テレビの画面が切り替わり、『危険』と書かれた文字の下に水色のハートが描かれた画面になっていた。

—— 忍耐のソウル

「なんか来るぞ、気を付けろ!!!」

「うん!!」

描かれたハートの意味に気付いてフリスクに忠告すると同時にテレビの画面に砂嵐が走り、テレビ以外全て闇に包まれる。次に瞬きして目を開けた時は、何処か見覚えのある巨大なナイフの大群が目の前にあった。

「チッ」

くると不規則に回転しながら迫ってくるナイフの合間に滑り込み、避けていく。
「!! お姉ちゃん、あれ!!」

ナイフの大群の中でフリスクが何かに気付いたらしく、声を張り上げる。フリスクが一瞬指を指した先を見ると、見慣れた橙色が目についた。

「あれ、『ACT』だ!! あれに触れさえすれば、何とかなるかもしれない!! だから、もうちよつと耐えて!!」

それだけを捲し立てると、フリスクは『ACT』を指してナイフの中を進んでいく。それをきつと辿り着けると信じて見送り、自分はナイフを避けるのに専念する。何故此処に奪われた筈の選択肢があるのかとか、色々言いたいことはあるがそれを全て飲み込み、ただひたすら耐える。

*You あな called た for は help 助.....

不意に、聞き慣れたアナウンスが流れる。進んでいったフリスクを見ると、ナイフが掠めたらしく服や肌が少し切れているながら、何か大きく口を動かしていた。その口が閉ざされた瞬間、周りのナイフがガタガタと震え出す。

「.....!!!」

どうなるかは分かってはいても、警戒をしておく。すると、突如として目の前が一瞬

白く包まれ、次の瞬間にはナイフの大群が安らぎを感じるような緑色の、大きな絆創膏に置き換わっていた。

「わっ」

それは引き寄せられるようにフリスク、そして私へと向かってくる。緑色の弾幕は攻撃ではなく癒しの弾幕だと分かっているため、そのまま立ち続けていると、向かってくる絆創膏が体を包み込んで消えて、暖かいものが体を包んでいく。絆創膏の名残の緑色の光が舞う度、腕の痛みとじくじくした火傷の痛みが引いていった。フリスクを見ると、フリスクの周りにも緑色の光が舞っていた。テレビには——オレンジ色のハートが見えた。

それを確認した次の瞬間、またテレビに砂嵐が走った。その途端またテレビ以外が全て闇に包まれる。次にはあのバケモノの姿が目映った。先程光っていたパイプが、色を失って駆動を停止していることに気付く。

「!!」

緩んでいた警戒を張り直して周りを見回すと、バケモノの左腕部分からハエトリグサが生えてくるのを視界の隅に捉える。ブンブンという鬱陶しい羽音も耳に捉え、音の聞こえた方に振り返る。飛んでくるハエの大群を見た。背後のハエトリグサ目掛けて飛んでくるハエどもをフリスクに当たらないようナイフで切り捨てていく。ハエどもを

切り捨てる度、ナイフがハエの体液で濡れる。それも今はどうでもいい。

ゴツ

「……………がつ」

一瞬の隙を点かれて、腹にハエが突っ込んできた。痛い。

……………どうでもいい。

腹に突っ込んできたハエを手で掴んで投げ飛ばし、他のハエに叩き付ける。その場に踏み留まってナイフを振り続け、ハエを切り続ける。邪魔だ。

ハエの大群が消えたのを見て、また索敵を行う。ヒューツ、という何かが落下するよ
うな音を聞き、咄嗟に上を見る。ない筈の光を反射する黒いものが落ちてきているの
を見て、叫ぶ。

「避けるオ!!!」

その声を聞くや否や、フリスクが遠ざかった気配がした。私もその場から走り、落下
してくるミサイルの爆撃の雨の中を掻い潜る。地面にミサイルが落ちる毎に巻き起こ
る爆発の光でフリスクが見えなくなる。どうか死なないようにと祈り、回避し続ける。
熱いとは感じられない。

ミサイルの雨が止んだのを見計らってまた周囲に目を走らせると、少し遠くの位置に
フリスクとバケモノの腕の付け根辺りがボコボコと盛り上がっていつているのに気付

縫って離脱する。

「フリスクあんなに飛べたっけ!」

「ううん、なんか出来ちゃった……」

回避していく中フリスクに問えば、フリスクは困惑したようにそう返してくる。『P layer』とフリスク自身の意志が合致したことによるステータス上昇だろうかと見当をつけながら、走り抜ける。

「……まあ、今はいい。先にこつち何とかするぞ」

ハエの大群が消えたのを見計らってフリスクを降ろし、構えておく。すると、先程よりも量が多くなつた手がついた鳶が此方に向かつて伸ばされてきた。勢いをつけてまゝとめて切り捨て、やり過ぎす。

ヴェーッ ヴェーッ ヴェーッ

また、警報が鳴り響いた。バケモノを見ると、パイプがオレンジ色に光り、テレビの画面にオレンジ色のハートが描かれていた。

—— 勇気のソウル

砂嵐が走り、全て闇に包まれる。次に目を開いた瞬間には、大量の手袋が不規則に向かつてくるのが見えた。

此方を捕らえようと迫ってくる手袋と手袋の合間を抜け、避けていく。

「！」

周りを見渡していたフリスクが一点を見つめ、走っていく。それを見てから、まだ迫る手袋を避け続ける。

*You called for help……

フリスクは『ACT』に辿り着くことが出来たらしく、アナウンスが流れる。すると手袋達の動きがピタリと止まった。そしてまた一瞬、白い光が走る。眩しさで目を閉じ、次に開いた時には、手袋は白から緑色に変わり、親指を立てたサインになっていた。それに触れていくと、体が暖かいものに包まれ、優しい光が舞う。痛みが引いていった。テレビを見ると、画面の中に青いハートが浮かんでいた。それを見ると同時に、また砂嵐が走る。全てが闇に包まれ、またバケモノが姿を現した。

「……………は？　なんでお前傷が癒えてんだよオ!!？」

先程つけた筈の傷が見当たらないのに気付いたのか、バケモノがヒステリックに叫ぶ。そして癩に触ったのか、罵を私達に向かって伸ばしてきた。

FILE2 SAVED.

それを今までと同じように切り捨てていると、

【邪魔……】

ぼそりと呟かれた瞬間だった。

FILE2 LOADED.

バケモノがヒステリックに叫ぶ。

そして癩に触ったのか、鳶を私達に向かつて伸ばしてきた。

「えっ!？」

フリスクが何故か驚いたように動きを止めてしまう。咄嗟にフリスクと鳶の間に体を滑り込ませ、ナイフを振るってもう一度切り捨てる。

「大丈夫か？」

「う、うん！ ねえ、今の、って……」

振り返って問えば、戸惑ったようにフリスクが目線を彷徨わせる。

そこで、違和感を覚えた。

何故、『もう一度』なんて私は思ったのだろうか？

「お姉ちゃん!!」

FILE2 SAVED.

フリスクの呼び掛けにハッと我に返り、迫ってくる鳶を切り捨て続け、攻撃が切り替わる瞬間を狙って離脱する。

FILE2 LOADED.

何故、『もう一度』なんて私は思ったのだろうか？

「!!? また……!!」

フリスクが驚愕する声にハツとして、思考を引き上げ迫ってくる蔦を切り捨てる。目の前の蔦を切り捨てたのは、これで三回目だ。

「……は？」

そこで、気付いた。

自分がとんでもなく矛盾した思考をしていることに。

「……………!!!」

その瞬間、何が起こっているのかを理解する。

あのバケモノによってセーブとロードが行われている。

FILE 2 SAVED.

ゾクリ、と、背筋が凍った。

巻き戻されていることに、気付けなかった。

これが、巻き戻される側の恐怖感なのか。

……………どうでもいい。

その恐怖感も振り払い、今は目の前の元凶に集中する。

人肌色の造形の目の部分から放たれる白い光線の中を駆け抜けていく。

FILE 2 SAVED.

尋常じゃない速さで伸びてくる鳶を切り捨てながら、空間の中を駆け回る。

ヴィーツ ヴィーツ ヴィーツ

テレビの画面が青いハートを映し出し、警報の音が鳴り響く。足を止め、テレビを見上げる。

—— 誠実のソウル

砂嵐が走り、テレビ以外の全てが闇に包まれた。次に目を開いた時には、星のレールが横に真っ直ぐ並んでいた。進む以外に避ける道はないようだ、と思っていると、持ち主の居ないバレーエシューズらしきものが、此方を踏み潰そうと奥から軽やかにステップを踏みながらやってくる。

「突っ込むぞ、いけるか!？」

「勿論！」

フリスクに声をかけ、横に並んで同時に走り抜けていく。タイミングを見計らって進み続け、避ける。

「あつた！」

暫く走り続けていると、『ACT』がバレエシューズに混ざってやってきた。目の前にそれが降りてきたところでフリスクはそれを叩き、口を大きく動かした。

*You called for help……

フリスクが口を閉ざすや否や、アナウンスが流れる。それでも未だに迫ってくるバレエシューズを掻い潜っていくと、突然ガタガタと揺れ出し、バレエシューズがふわりと浮き上がった。

「あ……！」

フラッシュが走り、瞬きをする。次に目を開けた時には、横を囲っていた星のレールが緑色の音符に変化して規則正しく一列に並び、ふわふわと漂っていた。その星に手を伸ばして触れると、また体が暖かいものに包まれていく。視線を移した先のテレビ画面には、紫色のハートが浮かんでいた。

ザーツ

砂嵐が走り、全て闇に包まれる。次の瞬間には、またバケモノがいる空間に戻ってき

ていた。

白い種の弾幕が周りに展開される。弾幕の隙間に滑り込み、フリスクに迫ってきていたものを弾き飛ばす。それが止むと、次にはまたあの毬藻が召喚された。近くにいたフリスクを抱えあげ、逃げ回る。

「……」

現れた『FIGHT』を押し、フリスクは跳んでいこうとする毬藻の毛を引っ掴み、毬藻が向かう先にいたバケモノへと勢いをつけ突っ込んでいく。

「フリスクッ?!」

フリスクの敵の攻撃を利用したアタックに一瞬ぎよつとし、此方を捕まえようと伸びてくる歪な手を一度切りつけ、フリスクが落ちてくるであろう場所へと向かう。赤い軌道が走り、バーが表示され、また少しだけ削れていく。攻撃を終えて落ちてくるフリスクに向けて、そのまま空中で撃ち殺そうとする指先にデイジーみたいな花がついた指鉄砲の弾丸が発射される。それに気付いたフリスクは落下しながらも体を動かし、弾丸の中腹部を蹴ったりして弾幕の雨をすり抜けていく。

「はっ。」

狭すぎる筈の弾丸同士の合間を抜けていくフリスクの有り得ない動きに思わず一瞬足が止まった。直ぐに我に返り、無事弾幕を切り抜けて着地したフリスクに駆け寄る。

「大丈夫か!？」

「うん、これくらいなら平気」

にっつと笑って見せたフリスクの体を見ると、流石に全て避けきるのは無理があつたのか、服を切つて血が少し流れていた。命に関わるような傷はないと判断し、フリスクを貫こうとする蔦どもを切り捨て、受け流していく。蔦が消えると人肌色の造形の目が怪しく光り、光線を発射する。フリスクの手を引いて光線の中を通り抜け、避けていく。

ヴィーツ ヴィーツ ヴィーツ

四回目の警報の音が鳴り響いた。テレビ画面を見れば、紫色のハートが描かれている。

——不屈のソウル

砂嵐が画面に走り、テレビ以外が闇に包まれた。次の瞬間には、宙に浮かぶテレビと、巨大なノートらしきものが私達を取り囲んでいる空間にいた。

一斉に開かれたノートのパラパラと捲れていくページから、色々な言葉が飛んでくる。それに当たらないように避けながら、余裕があれば読んでみる。

『破滅』『破壊』『閉塞』『残酷』『恐怖』『悲哀』『狼狽』『没落』『墮落』『悪夢』『殺人者』『絶命』『憎悪』そして、『殺戮』、『絶望』。

全て後ろ向きな、恐ろしいまでに暗い言霊。特に『殺戮』と『絶望』が、私にとって

は恐ろしかった。

「見つけた!」

ぱらり、ととある一冊のノートが捲れた瞬間、見慣れたオレンジがするりと出てきた。フリスクが駆け出し、それに触れる。

*You called for help…

アナウンスが流れてもなお流れる言霊の中を逃げ回っていると、文字がガタガタと震え出す。フラッシュが一瞬走り、次には緑色の文字へと変化していた。

『幸運』『創造』『自由』『平穩』『庇護』『幸福』『安堵』『成功』『親切』『吉夢』『空想家』『生命』『愛情』そして、『慈悲』、『希望』。

先程の後ろ向きな言葉とは真反対な、前向きな言霊達。その言霊が体に染み渡ると、緑色の光が舞い、暖かいものが体を包む。テレビの画面を見れば、緑色のハートが浮かんでいた。

ザーツ

砂嵐が走り、バケモノのいる空間に戻ってくる。

FILE 2 SAVED.

それを理解した瞬間、また人肌色の造形の目が光り、白い光線が此方に向かって飛んでくる。フリスクの手を引いて光線の合間を縫って、避ける。

光線が止んだ次にはまた鳶が伸びてくる。避けながらも避けきれないものを切り捨てていく。

FILE 2 LOADED.

フリスクの手を引いて光線の合間を縫って、避ける。目の前に突然軌道を変えた光線が迫り、急停止してなんとか避ける。こんな攻撃じゃなかったはずだ、という知らない筈の攻撃を知っているという矛盾した思考が巡り、またロードが行われたのだと気付く。

FILE 2 SAVED.

目の前に迫る鳶を切りつけ、避けていく。

FILE 2 LOADED.

目の前に迫る蔦を切りつけ、避けていく。

何故か唐突に増えた蔦が切りきれずに巻き付いてくる。

「なっ……ぐう!!」

そのままぐるぐると私に巻き付き、ギリ、と強く締め上げてくる。蔦の棘がパーカーを通り抜けて肉に突き刺さり、体のあちこちが悲鳴をあげる。

「ええいつ!!」

ふわりとそのまま体が浮き上がりそうになった所で、フリスクがナイフで蔦をぶち切ってくれた。

「ありがとう!」

「どーいたしまして!!」

短くそう言つて、地面に足をつけて突き刺さっている蔦を無理矢理引き剥がし、ナイフを構え直す。血が流れるが、どうでもいい。

【邪魔だ退け邪魔をするな殺す殺す殺す殺す殺す殺す】

発狂するバケモノの目から白い光線が放出される。

FILE 2 SAVVED.

散弾型ではなくある程度此方を狙って飛んでくるその合間の安置を見つけ出し、滑り込む。

FILE 2 SAVED.

光線が止むと、鳶が伸びてくる。切り捨てて、切り捨てて、切り捨てて進む。

FILE 2 SAVED.

いい加減、全てが邪魔になってくる。腕を動かして切り捨てる。

FILE 2 LOADED.

いい加減、全てが邪魔になってくる。腕を動かして切り捨てる。

「……………」

違和感を感じ、後ろに振り返って瞬時にナイフを下から切り捌く。案の定、鳶が伸び

てきていた。

………違和感を感じたし、この攻撃を仕掛けてくるってことは、また……

「チッ」

苛立ちで思わず舌打ちをもらす。

………こんなにも、巻き戻されるのが怖いなんて、虚しくなるなんて思わなかった。サズは、独りでこれに耐えていたのか……？

ヴィーツ ヴィーツ ヴィーツ

五回目の警報の音が空間に鳴り響き、ハツとしてテレビを見上げる。画面には緑色のハートが描かれていた。パイプの一部が、緑色に光っている。

——親切のソウル

砂嵐がテレビ画面に走り、テレビ以外全て闇に包まれ、また別の空間に移動させられる。

ジュー ジュー

何かが焼ける音を耳にし、聞こえた上の方を見る。上を見ると、巨大なフライパンが料理をするように揺れている。そのフライパンが大きく揺らぎ出すと、フライパンから火が零れ落ちてきた。落ちてくる火を被弾しないように避け続けていく。

ふらりと、足元が揺らぐ。

「!!」

何とかその場に倒れないように踏み留まり、火を掠めながらもその場が離脱する。血が足りないのだろうか。それでも暫く掻い潜り続けていくと、オレンジ色のものが降ってきた。

「！ あった!!」

フリスクが走り、叩き壊すんじゃないかってぐらいに『ACT』を強く叩いた。

* You called for help……

アナウンスが流れる。それでも暫く火を避け続けていると、フラッシュが走った。思わず瞑った目を開けて上を見ると、緑色の何かが無尽蔵に降ってきていた。

「……おお……」

それが体に当たる度、また暖かいものが体を駆け巡り、優しい光が舞う。体に抜けていた力が戻り、貧血によって朦朧とし出していた意識がはつきりとした明瞭なものになる。先程開いた穴が塞がっていく感覚を覚えながら、テレビを見上げる。黄色のハートが、画面に浮かんでいた。

ザーツ

見上げた画面に砂嵐が走り、またバケモノのいる空間に戻ってきた。素早く周りを索敵し、警戒する。パイプの色が、五本色を失い、停止していることに気付く。

——…あと、ひとつだ。

握り締めたナイフに力を入れ直し、バケモノを睨み付ける。

【どうしてCharaはどうしてぼくを選んでくれないのどうしてどうしてどうしてどうしてどうして!!!】

火炎放射機がまた腕から生えるのを見て、走り出そうとしたフリスクを引き寄せ、安直を見つけて移動する。じゅわり、と炎が掠めたらしく何処かが焼けた音がした。火炎放射機が引つ込むと、次はまたあの白い種の弾幕が展開される。回避し、弾き飛ばし、モノによっては切り捨てる。

次に、あの毬藻が出てくる。フリスク狙いでやってくるそいつらを切りつけ、軌道を逸らす。フリスクがその中の一匹に掴まり、飛んでいく。

【殺してやる殺してやる殺してやる】

毬藻に振り払われてもそのまま着地した腕の上をフリスクは疾走する。『F I G H T』を押し、捕らえようと向かってくる鳶を切り捨てながら進み、上へと伸びる太い鳶の棘を掴んでぶら下がる。通常であれば足が竦む程の高さまで来たところで棘を離して鳶を蹴り、バケモノの頭に向かって飛び降りていく。

「やああああ!!!」

ナイフが振られ、赤い軌道が人肌色の造形部分に走ったのが見えた。バーが表示さ

れ、削れる。それを見てから私も捕らえようと迫ってくる蔦どもを切り捨て、体勢を整え、一気に走り出す。落ちてきたフリスクを何とか捕まえ、ハエが飛んでくる中を駆け抜け、散弾型の光線に切り替わってもなお駆け抜け続ける。

ヴィーツ ヴィーツ ヴィーツ

六回目の、警報の音がなる。テレビ画面に黄色いハートが描かれ、最後のパイプが黄色に光った。

——正義のソウル

ザーツ

砂嵐が走り、また全てが闇に包まれる。次の瞬間には、目の前に巨大なリボルバーが此方に銃口を向けていた。

「避けて!!」

「分かった!!」

タアンツ、という発砲音が空間に連続して響く。此方に狙いを定めて撃ち出される巨大な銃弾を二手に別れて避け、立ち回る。あの大きさの銃弾に掠りでもしたら腕がそのまま回転で引き千切られる。それだけは絶対に避けたい。

絶対に当たらないよう細心の注意を払って避け続けていると、フリスクを狙った銃口から『ACT』が飛び出した。これ幸いと言わんばかりに、フリスクは『ACT』をぶつ

叩いた。

*You called for help……

銃口から飛び出し続ける銃弾を避け続けていると、不意に、銃弾の雨が止んだ。フラッシュが走り、次に目を開けて向き合ったときには、銃弾の代わりに四ツ葉のクロバーが銃口から飛び出してきた。

「わつと!!」

あつちこつち手当たり次第にクロバーを撃ち出す銃を見てから水色のハートを映し出したテレビ画面を見て、私は、一つだけ安堵の息を吐いた。

——… ……これで、最後だ。あとは、あのバケモノ自身だけ……

すると、そこでテレビの画面に砂嵐が走り、黄色いハートがまた表示される。そこから重なっていったらしいハートが輪を作り、テレビの中で回る。そして、ゆつくりと此方に近付いてきた。

「……え、あ」

テレビの画面をすり抜け、うつすらと淡く光るハート——ソウル達は、私達のところまで降りてくると、周りで円を描き、回り続ける。そして、それぞれのソウルから、淡い緑色のものが送られてくる。それをただじっとして受け入れると、体が暖かいもので満たされ、力がみなぎってくる。

……— 祈ってくれて、ありがとう

優しい光が舞う中、そんな声が聞こえた。ハツとしてソウル達を見ると、それぞれのところに微笑んでいる人影が見えた。

……— ぼく達にまかせて

でもそれも一瞬で、ソウル達は出来るだけ回復を与えると、この暗闇の中の何処かへと去っていつてしまった。

ザーツ

耳障りな砂嵐の音が響き、先程の空間に戻ってきた。目の前のバケモノは、未だにそこにいた。

*Flow_Fey_Is_w DEFE_yNSE_防 dro_がpp_にed_下 to_がo_たo!

敵のステータス減少を告げるアナウンスが流れ、バケモノが弱体化したことを知る。フリスクと瞬時に視線を合わせあう。

「あのバケモノの鉄壁はソウル達によつて取っ払われたらしい、チャンスだ!! 畳み掛けるぞ、覚悟はいいな!?!」

「—— 勿論!?!」

「そうか——」

ナイフを握り直し、バケモノを睨み付ける。

錯乱状態に陥ってフリスクに完全に狙いを定めたバケモノは、白い光線を撒き散らしながらフリスクに向かって腕を振り下ろした。フリスクはバックステップで後ろに飛び退き、振り下ろされた腕に連続して攻撃を行う。赤い軌道が幾つも走り、バーが削れていく。

そのままフリスクは腕の上を駆け上がり、そんなフリスクを潰そうと伸ばされるもう一方の腕を滅多切りにしながら進み、上へと伸びる大きな蔦の上を疾走する。

フリスクを援護するように、何処からか緑色の光がフリスクを包む。

「おっと、懲りない、なあ!!」

意識を目の前の巻き付こうと迫ってくる蔦に移し、切り捨て、一本だけ掴む。蔦の棘が手に刺さるのも今はどうでもいいと切り捨て、それを引っ張ってバケモノ本体から引き離し、鞭代わりにする。

「ぜいやあッ!!」

バケモノに近付きながら蔦を滅茶苦茶に振り回し、全体攻撃を行う。フリスクによって傷つけられた歪な腕を削り、裂いていく。バケモノの顔が歪み始める。

【やめてChara痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ痛いよ】

「……………そうかよ。お前が誰かに与えてきた痛みよりはずっとマシだと思いがな?」

自分の体を駆け回るフリスクを振り払おうと、バケモノは体を素早く動かしたり、フ

リスクが乗っている部位を狙って攻撃を行う。それを全てアクロバティックな動きで避け、フリスクは攻撃を続ける。

赤い軌道が走る。バーが削れていく。気付けば、あともう半分を切っていた。

【邪魔をするなあああああああああああ!!!!】

錯乱するバケモノに近付き、鳶をバケモノの腕に巻き付け、引っ張って食い込ませる。思いつきり引っ張ると、ブチブチと何かが引き千切れる感覚が伝わってきた。気持ち悪い感覚を切り捨て、鳶を巻き付けた腕がフリスクに向かって振られるタイミングでそれをきつく握り締め、ターザンロープの要領で空中に浮かぶ。

「!」

そして振り子の要領を使い、大きく反動をつけ、バケモノに近付いた所で鳶を切って顔面に向かって突っ込む。

「でえりやああああああ!!!!」

ぎよつとしたような顔を映し出すデカイ画面にナイフの柄を叩きつけると、バリントツ

硝子が割れるような音を立てて、画面に柄が貫通し、亀裂が走った。

【アアアアアアアアアアアアアア!!!!】

叫び声をあげるバケモノを無視し、ナイフを引き抜いて素早く落下をする。

人肌色の造形の目から白い光線が放たれる。その中を駆け抜け、フリスクは攻撃を行う。赤い軌道が走り、バーが削れていく。……………あと、少しだ。

ロープを離し、フリスクを撃ち抜こうとする白い種を弾き飛ばす傍ら着地する。振り返ったフリスクの背中に手を当て、

「……………——トドメを、さしていい」

そつと、耳に囁いた。

「……………うん!!!」

私の言葉にフリスクは決意に満ちた目で頷き、駆け出した。

ミサイルが降り注ぐ。上がる火柱と本体を避け、飛び上がる。

ハエの大群が飛んでいく。切り捨て、バケモノに攻撃を与える。

指鉄砲の嵐が起きる。弾を足場にし、回転を加えて切りつける。

毬藻のような生き物が飛び出す。掴んで乗って、突っ込んでいく。

鳶が伸びる。ロープ代わりにして、振り子の勢いで先程私がつけた画面の亀裂を蹴

ザンツ

ナイフが、振り下ろされる。
バーが、全て、削られきった。

F I L E I L O A D E D .

………戦闘、開始だ。

無傷のバケモノに向けてナイフを構える。そのバケモノの顔が、嘲笑うような顔になっているのに気が付き、言い様のない違和感を覚えた。

………何かが違う。違う、そんな筈がない。最初からこうだった。じゃあ、一体何が……

「………そんな……嘘でしょ……？」

れていかれる。

【見ててね、Chara。きみの枷から、解き放つてあげる！】

至近距離でバケモノはにつこりと笑い、

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

FILE3 SAVED.

何をするのか察知した私の無様な懇願も聞かず、

ゴウツ

一瞬で、フリスクを焼き払った。

「……………あ、あ」

肉の焦げたような臭いが、充滿する。

FILE 3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

何をするのか察知した私の無様な懇願も聞かず、

ザシユツ

薦で、フリスクを貫いた。

「……………あ、あ」

びちゃ、と赤い飛沫がまって、物言わぬ人形になってしまう

FILE 3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ハツとする。

この台詞を叫ぶのは、三回目だ。

ゴウツ

フリスクが焼かれる。

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

……………この台詞を叫ぶのは、四回目だ？

ザシユツ

鳶が貫いた。

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ゴウツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ザシユツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!
」

ゴウツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!
」

ザシユツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!
」

ゴウツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ザシユツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ゴウツ

FILE3 LOADED.

「やめ、やめて、たのむ、やめてくれ
!!!!!!」

ザシユツ

ザ
シ
ユ
ツ

F
I
L
E
3

L
O
A
D
E
D.

ゴ
ウ
ツ

F
I
L
E
3

L
O
A
D
E
D.

ゴ
ウ
ツ

F
I
L
E
3

L
O
A
D
E
D.

ザ
シ
ユ
ツ

F
I
L
E
3

L
O
A
D
E
D.

ゴ
ウ
ツ

F
I
L
E
3

L
O
A
D
E
D.

FILE 3 LOADED.

ザシュツ

FILE 3 LOADED.

ゴウツ

FILE 3 LOADED.

ザシュツ

FILE 3 LOADED.

ゴウツ

FILE 3 LOADED.

ザシュツ

蔦で貫かれたフリスクが、蔦が消えると同時に赤いものを貫かれた箇所から噴き出しながらその場に崩れ落ちる。

赤い何かが、傷付いた妹を中心に広がっていく。

「……………あ、あ」

あかいものがなにかをりかいした

あれは

ち 血だ

「フリスク、フリスク、フリスクウウウウウ」

【ああ、ちよつと、暴れないでよChara!!!!!!】

落ちちやうよ!?!】

からだに巻き付いている何かをぶちぎろうと、あばれる。

はやく、はやくいかなきや

じやなきや、フリスクが

フリスクが

しんで

「う、ぐ、うう……………」

フリスクが、身動きする。ナイフをにぎって、たちあがろうとする。

「フリスクツ!!!」

「……………何、オマエ。まだ立ち上がる気なの？」

バケモノが呆れたような顔で、言う。

【仕方ないなあ、このぼくが現実を教えてあげるよ】

FILE5 SAVE.

その瞬間、ぼろぼろフリスクを、白い種が囲む。

【オマエは本当にぼくのことを……倒せるとでも思ったのかい!】

嘲笑うように、バケモノは言う。

【ぼくはこの世界の神様だ。……で、オマエは？ ただのちっぽけな人間だろ?】

バケモノを睨み付ける。 蔦から逃れようと、もがく。

【オマエには絶望しかない。 絶望と孤独……そう、その通り!!!】

バケモノのテレビの画面に砂嵐が走り、見覚えのある顔を映し出す。

【オマエの無価値なオトモダチは……オマエを救えやしない】

その発言を聞いて、バケモノに殺意が湧く。

「てめえ……………!!! フリスクの旅路を否定するな……………!!!」

【……………Chara、ちよつと黙つててよ】

「が、ぐつ」

煩わしそうにそう言われ、巻き付く蔦の力が一層きつくなる。体が締め付けられ、悲鳴をあげる。

【助けを呼んでみればいいさ!! この真つ暗闇に向かつて!!】

バケモノは嘲るように言う。

【『ママーツ! パパーツ!』『誰か助けて!』つて!!! 来てくれると願うといいさ!!】

嘲笑う声が響く中、フリスクの目の前に『ACT』が出現する。

ポロポロに傷付いた腕を、やつとの想いでフリスクは伸ばし、触れる。

* You あ な た は は 助 け を 呼 ん だ だ
called for help.

パタリと、腕が地面に落ちる。空気が、しんと静まり返った。

「……………しかし誰も来なかった」

にんまりと嗤い、バケモノが静寂を裂いて言う。

「わあ！ 残念でした！」

バケモノはフリスクの行動を無意味だと嘲笑い続ける。

「だーれも……………オマエの死に様を見てくれないだなんて!!」
「!!!」
「!!!」

次に、何が起きるかを察す。

白い種が、ゆつくりと動けないフリスクに向かっていく。

しゆうつ

フリスクに向かっていた種が、フリスクの体に溶けて一体化する。

みるみる、フリスクの傷が癒えていく。

【……………は？ どうやって……………？】

本来なら有り得ない現象を目の当たりにし、バケモノは啞然として言葉を漏らした。

【まあいいや、どうせまた……………】

LOAD FAILED.

バケモノが何処からか遠くを見る。その顔が驚愕に染まっていく。

【な……………力が使えない!?!】

ヒュンツ

バケモノが狼狽え始める中、何かが空を切る。

ブツツ

「……………え」

【なっ……………!!?!】

気付けば、体に巻き付いていた鳶が、バラバラに切られていた。

ぼすっ

自由になったことよって落下していた体が、誰かに受け止められた。

顔を上げれば、黄色い人影の顔が見えた。

カウボーイハットを被ったその人影に、見覚えがあつた。

「……………きみは、正義の……………」

私が思わずそう呟けば、その幻影がにっこりと微笑んだ気がした。

【何だ!!!? い、一体何が、】

そのまま正義の人影に抱えられ、戸惑った表情で立ち上がったフリスクの傍にまで運ばれ、降ろされる。

「お姉ちゃん!!!」

「フリスク!!! ああ、よかった……………」

お互いに強く抱き締め合う。人肌の暖かい温度が服越しに伝わってくる。その事実が、心を安堵させていく。

———
良かった

誰かの声が響き、ハツとして正義の人影の方を見る。その人影は、微笑んでいるような気がした。

———
あとは、ぼくたちが

その声が響いた瞬間、黄色の人影は消え、その代わりにバケモノの周りに見覚えのあるハート達が現れた。

「ソウル…………? 何してんだよ!!!?」

自分が完全に従わせた筈のソウル達が現れたことにバケモノは驚愕し、怯えたような顔になる。

【ま、まさか、お前ら、今までみたいに………!!!?】

これから起きることを察したらしいバケモノが、そう叫んだ瞬間だった。

ソウルが、バケモノを囲んで回りだす。

【そんな!!!!!!
!!!!!! いやだ!!!!!!】

バケモノが、今度こそ本当に苦しみ出す。

【こんなの有り得ない!!!!!!
!!!!!! ぼくに服従した筈なのに!!!!!!】

現実を否定しようとする絶叫が、闇に響く。

【やめろ!!! やめろよ!!!】

バケモノの体が、光を放ち始める。

その眩しさに、咄嗟にフリスクを抱き締めて自分の体で隠し、目を瞑った。

【やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!】

バケモノの絶叫が響く。

そして、全てが真っ白な光に包まれた。

109. 判決

〔Lily〕

瞼越しでも眼前を白くする程強かった光が段々と収まり、目が痛くなるほどの光が消えてなくなったのを見計らって、目をそつと開ける。

「……………お姉ちゃん……………もう、大丈夫かな……………？」

「……………うん、大丈夫そう。離すよ？」

「うん」

声をかけてからフリスクをそつと離し、お互いにお互いの姿を確認する。フリスクの状態は、服が血塗れのボロボロになっているだけで、傷痕一つ見当たらなかった。ソウル達がフリスクの傷を癒してくれたおかげだろう。フリスクが死んでしまうかもしれないなかった窮地を救ってくれた彼らに、感謝の念を抱く。

「……………無事で、良かった……………」

「お姉ちゃんこそ、無事でよかったよ」

お互いの無事を喜びあい、笑顔を交わす。

「……………ここは、どこだろう？」

「さあ……………」

周りをそのまま見ると、いつも通りの黒の世界が広がっていた。

……………その中に、たった一体、白色が混じっている。

「!!」

ソウル達によつてぼろぼろになるほど傷付いて、俯いているソイツが誰かを理解し、ハツとしてナイフを握り、構える。

「あんのクソ花……………!!」 生きてやがった……………!!」

脳裏に焼き付いているフリスクの血塗れで倒れ伏せる光景が思い浮かび、ゴウツと目の前の敵に対する憎悪が鎌首を擡げ、目を覚ます。

——— 殺す。

ギツタギタに、切り刻んでやる。

どうしても目の前にいるモンスターに向かう憎悪と怒りが止まらず、それしか考えられなくなる。

ナイフを痛くなるほど握り締め、立ち上がる。

「——待って」

そんな私を、止める声の一つ。

「……………フリスク」

目の前のモンスターを殺そうとする私の手を強く握り、フリスクは緩く頭を横に振った。

「駄目だよ、お姉ちゃん。今此処でお姉ちゃんがフラウイーを殺したら、フラウイーが言った通りになっちゃうよ。ぼく、お姉ちゃんがそうなるのはやだ」

「……………でも」

「ダメ」

『Kill^{殺す} or^か be^{殺さ} Kill^れed^る』。

目の前のモンスターの持論であるその言葉が、脳裏を過らなかつた訳じゃない。

それでも、『殺したい』という意欲が上回っていた。

「駄目だよ」

フリスクの決意の籠った目が、私を射抜く。

その瞳に見つめられると、私の中の殺意が萎んでいく。

「……………フリスクには、ほんつと敵わないなあ」

ふう、と一つ息を吐く。

そう言われるのに弱いのをわかってて言ってるな、この子は。

「……………うん、分かったよ。殺さない」

ナイフを下ろし、フリスクに笑いかけ、頷いた。フリスクも私の返答に満足したのか、少し微笑んだ。

「……………アイツをどうするかは、フリスクが決めなさい。貴女には、その権利があるんだからね」

「うん、わかった。……………とは言っても、ぼく自身の答えはもう決まってるけどね」

そう言ってフリスクは、私を追い越してフラウイーに近付いていく。

「これ持っててよ」

私の手に先程まで握っていたナイフを預けて。

フラウイーの前まで行くと、フリスクの前に二つの選択肢が現れた。

『FIGHT』と、『MERCY』。

相反する選択肢が、提示される。

目の前のモンスター罪人にどんな判決を下すのか。

私は本来部外者だった人間として、特等席傍聴で妹裁判官の判決を見ていた。

「……………」

少しの沈黙のあと、フリスクの手が、動く。

彼女が、選んだのは。

ピッ

『……………』

……………『MERCY』、だった。

『……何見てんだよ?』

先程のフリスクよりも満身創痍な体で、フラウイーは首を擡げ、此方を見る。

『ぼくが反省したとでも思うわけ? ハッ……まさか』

最後は鼻で笑い、フラウイーは再び顔を伏せる。

ピッ

『MERCY』が押される。

『ぼくを見逃したって何も変わらない。終わらせたいならとつとぼくを殺せよ』

伏せられた顔が、何時まで経っても自分を殺さないフリスクを見る。

ピッ

『MERCY』が押される。

『ぼくを生かしておいたら……また戻ってくるよ』

此方を伺うように見ていた顔が歪む。ゆっくりと体を動かし、フラウイーはフリスクを見た。

ピッ

『MERCY』が押される。

『君を殺しに。』

ピッ

『MERCY』が押される。

『皆を殺しに。』

凄むように、フラウイーの顔がまた凶悪に歪んだ。

ピッ

『MERCY』が押される。

『きみの大切な人を皆殺しにね。』

顔をより一層凶悪に歪めたフラウイーの口から出た言葉に最悪の光景を思い浮かべてしまったのか、フリスクの動きが一瞬止まる。

ピッ

——…それでも、フリスクは。

『……………』

『MERCY』を、選び続ける。

ピッ

『MERCY』が、変わらず押される。

『……………?』

それを見る度、フラウイーの顔に困惑が滲んでいく。

ピッ

『MERCY』が、押される。

『……………なんでだよ?』

意味が分からないと言うように、フラウイーは言う。

ピッ

『MERCY』が、押される。

『……………どうしてそんなに……………優しくするのさ?』

困惑で一杯だった顔が、与え続けられるフリスクの『MERCY』に泣きそうに歪む。

「……………ぼくは、ただただ、ただ本当に君が羨ましくて、妬ましくて、それで、きみを……………
何回も、傷付けたんだよ?」

ゲームには無かった彼の本心が、フリスクに向かって吐き出される。

「……………それをきみは、『赦す』って、いうの……………?」

怖々と、フラウイーはフリスクに問う。

……………此処からでは、フリスクの表情は分からないけど。

それでも確かにフリスクは、フラウイーの問いを肯定する為に、首を縦に振った。

「……………そんな……………そんなわけない!!!!!!」

フリスクの返事が信じられなかったのか、フラウイーは叫ぶ。

「ぼくは何回もきみを殺した!!! ビームで焼いて、蔦で貫いた!!! きみは、ぼくが本ツ当に憎くないの!!?」

フラウイーの糾弾に、やはり殺されまくっていたのかと思う。

殺意は、湧かない。

だって、殺されまくっていた本人が、その問いに首を横に振ったから。

「……………そんなわけないよ。焼かれたのも、貫かれたのも、凄く苦しかったし、痛かったよ」

「なら、なら、どうして!!? どうして、ぼくを『赦す』なんて発想が出来るの!!?」

フラウイーに向けられた筈の言葉が、何故か私にも聞こえた。

本来聞こえない筈のその言葉に、驚きながらも私は耳を澄ませる。

「……………お姉ちゃんには、さつき言ったけどね。ここで君を殺したら、君が言っていた通りになっちゃう。それに、ぼくにはお姉ちゃんの一生のお願いがある。ずっと昔、お姉ちゃんに、『誰も殺してほしくない』って願われてるんだ。勿論、ぼくもお姉ちゃんにそう願ってる。凄く我が儘な願いだっていうのは分かっているんだけどね、それでも、ぼく

はお姉ちゃんが誰かを殺そうとしているなら止めるし、お姉ちゃんだつてきつとぼくが誰かを殺そうとしたなら止めてくれるって、分かっているから。

ぼくはお姉ちゃんとぼくの願いを叶える為に、君を殺さない。君が言っていた通りには、なつてあげない」

はつきりと、フリスクは拙い言葉でそうフラウイーに告げる。

——……………四年前のあの日。父さん達の葬式の、あの日。

あの美しい満月が出ていた夜に交わした、お互いの身勝手な願い事。

本来の普通の子供なら忘れてしまっているだろうそれを、まだ覚えていてくれたことが嬉しかった。

「……………そんな……………」

フリスクの返答に、フラウイーは愕然として、目を見開く。そして、ハッと気付いた

ように私を見る。

「そ、そうだ!! Chara!! この人間に入れ込んでる君なら、きつと君なら、ぼくを殺すよね!!」

そうやって縋るように私を見るフラウイーに、私は一つ息を吐く。そして、ゆつくりとフリスクの隣に並んだ。

そして、手に持っていた二つのナイフをゆるゆると持ち上げ、

「あ、あはははは、やっぱり——」

——…パツと、手を離す。

ナイフは重力に従って手からすると滑り落ち、からん、という音を二つ、静かなこの空間に響かせた。

「え……………」

再びフラウイーは目を見開いて、ナイフを見てから私を見上げた。

「あのなら、フラウイー」

しゃがんで、フラウイーと目線を合わせ、私は言う。

「……………確かにね、君のことは憎いよ。憎くてたまらないさ。原型を留めることが出来ないくらいズツタズタに引き裂いて、殺してやりたい。でも、それを本当に行うかはこの子自身が決めるものだ。だって、君に殺されたのはこの子だ。ただ見ていただけしかできなかった私じゃない。その子が『君を赦すこと』を選んだんだ、それだったら私はその判決に従うさ。」

そして、理由はもう一つ。さつきこの子が言っていたけど、私達にはお互いに『願い』をかけられてるんだ。正真正銘この子が私のことを『愛している』からこそ思う、優しくて重い願い事をね。私はこの願いを信条としているし、この子にも、同等のものを背負ってもらっている。

それがある限り、私は君を殺さない。絶対にね」

フラウイーにそう言い切つて、私は立ち上がり、先程の傍聴席にまでゆつくり後退る。
勿論、ナイフは床に落としたそのままです。

ピッ

『MERCY』が、押される。

『……………わかんない。』

どう足掻いても、判決は覆されることは無い。

フラウイーはそれをやっと理解したらしく、一言ぽつりとそう呟いた。

ピッ

『MERCY』が、押される。

『わけわかない!!』

私とフリスクの判決を、どうしても理解できないらしいフラウリースソウルレスは、泣き出しそうな顔になる。

ピッ

——最後の『MERCY』が、押された。

『……………ぜんぜん……………わかないよ……………』

歪めた顔から涙を一粒溢し、フラウリースはそう言い捨てて、地面へと潜ってしまった。

*Flower F l o w e r y は 逃 げ 出 し た .
ran a w a y .

そんなアナウンスが流れると同時に、周りの世界に色が戻ってきた。

「……………終わった…………？」

「みたいだね」

周りを見渡してそう呟くフリスクの言葉を肯定し、私も辺りを見渡す。部屋の隅つこに、黒い草臥れたリュックがあるのに気付き、それを回収しに行く。

リュックを開けて、中身を確認する。すると、この地下世界で買った品々が入っていた。これは自分のだと確信し、リュックの底を軽く払って背負い直す。

「あ、リュック、あつたんだ」

「うん、部屋の隅つこに転がってた」

その場で一点を見てぼーっと立ち尽くしていたフリスクに近付いて、そんな受け答えをする。

「……………それで、出口は…………」

「あそこ」

フリスクが先程見ていた一点の方を指差し、それに習って視線を動かす。目の前を見ると、ルインズで見たような出口の向こうから、暖かい黄昏の光が差し込んでいた。

「……………今なら多分、二人とも出られると思うよ」

ぼつりと、フリスクが突拍子もないことを呟く。

「……………え？ どうして？」

フリスクの口から確信の無い言葉が飛び出し、思わずそう聞き返す。

「わかんない。でもそんな気がする」

「……………そつか。まあ、残らなくてすむならいいんだけどね」

うっかり口を滑らせてそう言うと、フリスクから悲しそうな目線が送られてくる。

「やっぱり残る気だったの？」

「うん、だってフリスクには太陽の下で生きててほしかったし」

「……………それだったら、ぼくだってそうだよ。お姉ちゃんには太陽の下で笑っててほし

い」

二人で顔を見合わせる。そして、同時に少し吹き出した。

「なあんだ、結局思うことは一緒だったのか」

「そうだね」

そこで会話が途切れ、沈黙が流れる。

少しして、お互いにお互いの手を伸ばし、強く握り合う。

「……………かえろうか。地上に」

「……………うん」

歩幅を合わせ、一歩一歩を踏み締めながら出口へと向かう。

「……………ああ、待って」

「ん？」

不意に、フリスクが足を止め、振り返った。そして暫く闇を見つめ、呟く。

「……………最後の最後に守ってくれてありがとう、王様。あなたのことは、忘れないよ」
悲しそうな声で詠げられた別れが、私の心に染み込んで脈動する。

——最後のあのとき、安らかな顔で死んでいったあの優しい王様は、この先きつと忘れられないのだろうか

そんな思いが、頭を過っていく。

「……………行こう」

「うん」

今度こそ、出口へと向かう。

一歩、また一歩と、着実に。

「さようなら」

別れを一言簡潔に告げて、私達は、

太陽の光の差す地上へと、踏み出した。

Neutral Ending: Epilogue

……とある夏の終わり。

『登ってはいけない』と人々の間で言われ続けているEbott山(エボット山)の山頂に、美しく紅く輝く夕焼けに照らされて佇む人影が、二つ。

夕陽に照らされるその人影は、その服装を見れば、一見大怪我を背負った少年たちの様にさえ見える。

だが、不思議なことに、彼女達自身に傷はない。

……片方には、包帯と無数の傷痕が垣間見えるが。

「本当に出られちゃったよ。弾かれるかと思ったのに」

誰に言うでもなく、大きい人影が夕陽を眩しそうに見ながら呟く。

「そうだね。本当に良かった」

その言葉に、同じく夕陽を見ながら心の底から安堵したような声で、小さい人影は返す。そのまま暫く、彼女達は黙って夕陽を眺める。

片方は計画を抱え。

片方は次は必ず、皆でこの夕陽をもう一度見る決意を胸に。

「……………帰ろうか。帰ったら院長からの説教だからね、覚悟しときなよ？ 私は今回庇ってあげないからね？」

「うわ……………うん、反省します」

少ししてから、彼女達はじゃれあい、助け合いながら、その山を下山していく。

それぞれの思いを、重く引き摺って。

キイ

美しい満月の輝く深夜だった。

窓から差し込む幻想的な満月の光で満たされている部屋の扉を開けて、黒い髪の少女が入る。

ここは、この一見少年にも見える少女の部屋。

パタン、と静かに扉が閉じられ、扉についている鍵がかけられる。

彼女は慣れた動作で部屋の隅の机の前に移動し、音を立てないように備え付けの椅子を動かす、机下の空間に潜り込む。そして、脆くなっていた壁の一部を利用して作った秘密の空間の入口を塞ぐ壁を剥がし、中の虚の中に入れておいたモノを取り出す。

這い出てきた彼女の手に握られるそれが、月明かりに照らされて光を反射する。

それは、一年半前、彼女と、その妹が冒険した際にとある女性から譲り受けた携帯だった。

彼女は机に寄り掛かり、慣れた手付きでそれを操作する。

その手が、ピタリ、と止まった。

「……………『留守番電話 一件』……………」

彼女が覗き込む画面には、そう通知が表示されていた。

彼女の顔が、歓喜に、そして少し泣き出しそうに歪む。

その表示がされるのを、彼女は待っていた。

ツ……………ツ……………

震える手で、彼女はその留守電を再生し、耳に宛がう。

ツ……………プツツ

そして、月明かりが雲で隠された闇の中で、留守電が再生され始める。

『……………よお』

「……………やあ」

聞き慣れた声が、彼女の耳に届く。

『誰かいるか……………？ まあ……………ちよつと言いたいことがあつてな。お前さんは雪だるまを本当に喜ばせたんだな』

その言葉で、彼女の脳裏に喋る雪だるまが思い浮かぶ。そして、その雪だるまから、一部をもらったことも。確か、その破片は、今は彼女の妹が持っている筈だ。

『……それと言いたいことは他にもあるんだ』

寧ろそつちが本題だろう、と彼女は心の中で思う。そして、その内容に、耳を澄ませた。

『……………それで……………久しぶりだな』

「うん、そうだね。何にせよ、一年半ぶりなもの」

出られなかったけれど、と彼女は言外に付け足す。

『こつちの近況報告をすると、女王が戻ってきたんだ。んで、今はこの地下世界を治めて
いる』

しんと、静まり返った闇の中、留守番電話の声だけが彼女の耳に入る。

『そして新たにある方針を立てた……ここに落ちてきた人間は敵としてではなく……友達として接しなさい、つてな』

『女王』として返り咲いた女性の性格を思い出し、あの人らしい、と彼女は思う。

『何にせよ、多分それが一番なんだろうな』

首だけを動かし、彼女は小さく同意する。

『王が集めたソウルは……どうやらどつかにいつちまったようだ。で、あー、あの計画は当分の間は実行できなくなったわけだ』

彼女は自然に還つたのだらうなと見当をつける。そして、彼の言う『当分』とは、気が遠くなるほどの年月なのだろうと、何となく察する。

『だがどれだけ皆が王の事でひどく心を痛めても……』

そこで、声の調子が、少しだけ変わる。

『……そしてどれだけ俺達の自由への道が険しいものであろうとも……』

何処か諦感してしまったような声で、声は言う。

『女王は俺達が希望を手放さないように最善を尽くしている』

そこで、声は言い淀む。

『で、その、まあ……』

少ししてから、声が続く。

『……こつちだつて諦めない、だから……お前さんも諦めるなよ、いいな？ どれだけ時間がかかるか解ったもんじゃないが……いつかはここから出てみせるのさ』

「…………君に言われると、ちょっとあれだな。『おまゆう』感があるな」

ぼつりと、彼女は返答しない声に対してそう溢した。

『SANS!!! 誰と話してるんだ???』

不意に、彼女の耳に、また懐かしい声が届いた。

『いや、誰ともだ』

いや誤魔化し方雑だな、と始まった電話越しの彼らのコントに、彼女は口には出さずに突っ込む。

『なに?!? ダレトモ!! そのダレトモってやつと俺様も話していいか???』

電話越しで行われる会話に彼女は耳を傾け続ける。

『ああ、好きナだけ話シナ』

その言葉の直後、携帯の受け渡しをしているのか、少し間が開く。

『あれ、待てよ??? この番号は俺様も覚えてるぞ!!』

嬉しそうな声が、彼女の耳に大音量で響く。

『よく聞け、人間！ 俺様、グレートなPAPYRUS様は今……王国騎士団の団長なのだ！』

「……………うん、知ってるよ」

彼女は、大音量の音量に嫌な顔せず声の主に返す。

『俺様が夢見てきたことそのものだ……違うのは、戦わずにお花に水やりをするだけだつて事だナ。そういう非常にビミョーな変化はある』

自分が思い描いていた騎士団長像と違ったらしく、声がほんの少しだけ落胆したものになる。

『そして、俺様たちはALPHYS博士の手伝いもしてるんだ!』

彼女は何も言わず、耳を傾ける。

『彼女は俺様たちがここから出る方法を探してくれている。UNDYNEも手伝ってるんだぞ! けど、正直、UNDYNEの手伝い方っていうのは……なんていうかな……爆発が付き物というか』

それ逆に邪魔してないだろうか、と彼女は思う。

『けどまあ、ALPHYSもUNDYNEが居ると楽しそうだけだな』

「はは、恋のパワーって凄いなあ」

思わず、彼女の口からそう溢れ出た。

『ああつと?!』

そこで、ゴツという鈍い音が電話越しに伝わる。

『おい！ 今何してるんだ、ヒヨツ子!? ンガアアアア!!』

そして間もないうちに、ゴリゴリという音とともに、豪快な女性らしい声が聞こえる。

『電話をグリグリするのはやめてください』

先程喋っていた声が、敬語で女性の声に懇願する。彼女の脳裏に簡単にその様子が思
い浮かんだ。

『おい、どっちが上司か忘れたのかあ!?!』

『俺様。』

『……………あつ……………そうか、そうだな!』

先程の声と一瞬本気で忘れていたらしい女性の声で行われるコントにくすりと笑い、彼女は耳を傾ける。

『あたしは王国騎士団の団長を辞めたんだ』

「うん、だよね」

本来ならば目が溢れ落ちるぐらい驚くであろう出来事を、彼女は頷き一つで受け流す。

『まあ実はな、あたし達はもうこれ以上戦うことはないだろうから……王国騎士団はすっかり解散したんだ。今では、ああ、団員は一人しかいない』

電話越しの話に、耳を傾け続ける。

『でも彼はモノスゲー有能なんだぞ』

『ああ!! そうだな!!! こっちに来い!!!』

『スケルトンをつつきまわすのはやめてください』

電話越しの彼らのじゃれあいが出る。彼女はそれを、懐かしく感じていた。

『とにかく、あたしは今A i p h y sの研究所の助手として働いている……この掃き溜めから抜け出す方法を必ず見つけるんだ!!』

声の主らしい決意に満ちた一言を聞いて、彼女はまた笑う。

『それとな、あたしは女王が新しく作った学校の体育の教師になったんだ。ベンチプレスで子供七人を持ち上げられるんだぞ!?　すごいだろ?』

「凄いを通り越してやばいな」

そこで、ふっと会話が途切れる。

『……………なあ。ASGORE王に起こった事については、残念だったな』

声の調子が落ち、静かな声で言われたその言葉に、彼女の肩がピクリと跳ねた。

『お前はただお前のやるべき事をしたただけだ。お前の所為じゃない、絶対に……』

此方を元気付けようとする声、湿っていく。そして、遂にぐず、という鼻を吸る音が彼女の耳に聞こえた。

『……ああ、ちくしょう。あの方が居なくなつて寂しいんだ』

電話越しの声が、震えている。もう一度、鼻を吸る音が聞こえる。

『……ええいしつかりしろ、Undyne! くよくよするな!』

パシン、と軽く何かを叩く音が電話越しに響く。きつと声の主が、己の頬を叩いたの
だろう。

『えっと、後はAlphysがどうしてるかだな』

「うん」

変わっていく話題に彼女は頷く。

『まあ、あいつは今まで通りだ。前より少しこもりがちになった気もするがな。すごく気がかりなことがあるみたいなんだが……だけどあいつなら乗り越えられる！ あたしがあいつの傍で支えてやるんだ!!』

「……………どうかな。案外人って変われないよ？ まあ、でも君が傍にいるなら、彼女も……………」

電話越しの声に、彼女はそう返した。

『それが友達つてもんだらう?』

「……………うん、それもそうだね」

電話越しに告げられたその一言に、彼女は頷く。

『……………なあ。今お前が何処に居るかは知らんが……………ここよりマシな場所だといいな』

不意に言われたその言葉に、彼女は目を見開いた。

『お前がそこへ行く為に払った代償は大きい……………』

彼女は、耳を澄ませる。

『だから、どこにいても……………お前は幸せになろうとしなくちゃいけないんだ、いな!? あたしたちの為に!』

『……………はは、ありがとう。心配しなくても、そのつもりだよ』

電話越しに、彼女は少し笑って返す。

『苦しんだ甲斐があったと分かれば気も晴れるというものだ』

そこで、声の調子が上がる。

『あたし達がついてる！ みんなそうだ！ 女王だって！』

会話がぶつと、唐突に途切れる。

『おーい!! ちょっと待ってろ!!』

そこで、声が少し遠くなる。

『TORIEL! TORIEL! ちょっと電話で……う!』

優しい女性の声のようなものがもつと遠くから彼女の耳に聞こえた。

『……………おや、今は手が回せないってさ』

少し残念そうに声の主は言う。

『でももし彼女が誰と話してるか知ったら……』

『電話を握ったまま数時間は離さないだろうな』

弟の方の言葉を、兄の方が引き継ぐ。

『俺様達の「慈悲」で彼女の長電話から「救った」のだな!!』

ガタガタと、何かが擦れるような音がする。

『だがいつでも電話しろよ、いいな!? 彼女も喜ぶぞ!!』

豪快な女性の声が、そう言った。が。

『あ、しくった。こいつの電池もうすぐ切れちゃうぜ』

電話越しに言われたその言葉に、賑やかなブーイングが飛んだのが聞こえる。

『んじゃ、名残はつきないけどよ、でも……』

一瞬言葉が区切られ、続けられる。

『また会おうぜ、いいな、ダチ公？』

『今はさよならだ！』

『じゃあな、ガキンちよ！』

——…ガチャン……

それぞれの別れの言葉を最後に、留守番電話は途切れる。

名残惜しそうに彼女は携帯を耳から離し、少しの間見つめる。
そして、もう一つの留守番電話の再生を始め、耳に宛がった。

ツ……ツ……ツ……プツツ

『……あー、よお。さつきぶりだな』

暫くして、先程も聞いた声が再生される。

『今どっちが出てるのは分からないが……もし、今電話に出ているお前さんがチビツ子なら、lilyに代わってくれ。ちよつと、大事なメッセージがあるんだ。今から一分待つ。その間に代わってくれ』

宣言通り、そのまま暫くの間沈黙が続く。

そして、きっかり一分後、その声はまた口を開いた。

『代わったな？ それじゃあ、改めて……よお、Lily』

「やあ、Sans」

伝言越しの共犯者に、彼女は返事を返す。

『お前が言っていた通り、「電話をかけなくちゃいけない」っていう思いに従って、電話をかけたぞ。結局かけるのに一年半もかかっちゃまったが……これで、トリガーはもう引いたんだよな?』

伝言の問いには答えず、彼女はただ黙っている。

『……計画では、ここから先俺に出来ることは無くて、あとは、お前が全部上手くやるっていう話だったな』

呟かれたその言葉に、彼女は何も返さない。

『……正直な話、俺はまだその計画がいまいち信用できねえよ』

共犯者は少し間を開け、彼女にそう告げる。

『無謀すぎる。そしてあまりにも都合的過ぎる。そんなに上手く、事がいくはずがない。そんな計画、危なすぎても実行出来るもんじゃねえよ。』

……本来ならば、な』

だが、と共犯者は言葉を続ける。

『この世界が続いていくには、俺達モンスターが本当に太陽の下で生きていくためには、お前が妹を守るためには、その狂ってるとしか言えないその計画以外に、方法は無いんだろうな』

そこで、また沈黙が流れた。

『……なあ、Lily。本当に、その計画しか最善策は無かったのか……?』

そして、彼女に問いかける言葉が、流れた。

『……これはお前は知らないと思うから教えとくがな。お前が与えた影響は、結構凄まじいもんだぜ?』

そこで、一瞬言葉が区切られる。

『まず Toriel は今までのタイムラインじゃ沈みがちな女王だったのが、「いつかまた会えるわ」って言ってせっせと仕事に励んでる。

Papyrus はパスタが食べられるもんをたまにだが出すようになった。その「たまに」はお前に Papyrus が怪我させた時に妹の方と作ったときのことを思い出して作ってる。その時の顔が、どんだけ寂しそうな顔してるのか分かるか？

次に、Undyne だ。アイツは猪突猛進だったのが、一度立ち止まって「本当にこれが正しいのか」を考えるようになった。お前に凄い剣幕で怒鳴られたのが忘れられねえんだってよ。

その次に Alphys。アイツは Toriel とは逆にもっとこもりがちになって、沈みがちになった。お前の言葉が、胸の罪悪感をもっと助長させてるみたいだぜ？

Metaton もだ。お前に返された鍵を使って、従兄弟や Shyren と和解して、今じゃ音楽番組まで持つてるんだ。

……どうだ、ざっとあげただけで、お前の言葉で従来のタイムラインから変わったやつがこんなにいるんだぞ』

勿論俺だってそうだと、伝言は続ける。

『一番変わったのは、お前の妹だ。』

俺が見てきたタイムラインでは、『Frisk』はお前の妹みたいに、一見子供っぽくて、大人っぽいような人間じゃなかった。高々十歳の子供じゃ有り得ない程、大人に近すぎる。……こんなに差が生まれているのは、それは一概に、お前の影響を近くで受け続けているからだろうと、俺は思うぜ』

だから、と伝言が言葉が続けようとした瞬間に、

プツッ

彼女は、伝言を切ってしまう。

「……………やれやれ、何を言っているんだか」

そして、暗闇の中で彼女は顔を歪める。

「これ以外に策が無いのかって……あるにはあるけど、それは最悪過ぎる方法だからこの道をひた走ってるのに」

誰に言うでもなく、彼女は闇に言う。

『これ以外に道はないのか』。ああ、『無い』とも。少なくとも、私の頭ではこれしか浮かばなかった。とつくにそれを私は理解してるのに、何で今更引き留めようとしてんだろうなあ、S a n s は。……まあ、十中八九、同じ上の立場にいる人として私を憐れに思ったからだろうけどさ」

そこで、長い間かかっていた雲が切れ、月明かりが再び部屋に差し込んだ。

「………そんな憐れみなんて、されちゃいけないし、いらぬのに」

月明かりに照らされて、彼女の顔が、浮かび上がる。

その顔は、

「——もうとつくに、私の持ちうる全てを使ってあの子を守り抜く決意は、固まっているのにね」

誰よりも美しく、

「——そして、何より」

そして誰よりも、狂気に満ちた、

「……——あの子が笑って未来を生きていくためなら、私自身はどうなってもいいのにね」

笑顔だった。

「——まあ、それはいいや。今朝のFriskが何か挙動不審だったし、きつ

ともうすぐ世界は巻き戻るんだろう。あの発言は無かったことになるんだろうから、聞かなかったことにしよう」

クスクスと、机に寄りかかったまま、彼女は笑って瞼を閉じる。

「……………」

何かを呟いて、彼女は口を閉ざした。

辺りに静寂が満ちる。

部屋に掛けてある時計は、二十三時五十九分を指している。

その時計の秒針が進む音に、耳を澄ます。

カチ　カチ　カチ　カチ　カチ　カチ……………

そして。

カ
チ
ン

その長針が『十二』にぴったり重なったとき。

彼女の意識は、
ブツリと途切れた。

True Pacifist route

1. Re : s t a r t

〔Lily〕

——瞬きした瞼を、開ける。

そして、開いた視界に、先程からずっといる懐かしい世界を見る。

「……………あ……………」

次の瞬間に抱いたのは、強烈な違和感。

何故か、先程まで自分がいたのはここじゃない、という矛盾した思考が駆け巡る。

何故私はこの風景を懐かしいと感じているんだ……………？

頭を振って拭いきれない違和感を振り払い、これから向かう目の前の部屋を見る。

そこでも、強烈な違和感を感じる。

「……………？」

この先にはこれから行く筈なのに、この先に進んだことがある気がする。

これからアズゴア王と戦う筈なのに、もうその戦いの結果を知っているような気がする。

彼のことをゲームだった時の知識以外に知らない筈なのに、彼が死にたがっているのを、何故か知っている。

そして、何より。

——死に逝く王様の安らかな死に顔を、私は知っている気がする。

「……………え、なんで？」

そんな筈がない、と直ぐ様思考を打ち消そうとしても、どうしても強烈な違和感はある。えてはくれない。

混乱しながら取り敢えずフリスクのを見ると、セーブポイントをじつと見つめていたフリスクが顔をあげた。

「……………本当に、戻ってこれた」

ぽつりと、フリスクがそう呟く。静かな空間の中で呟かれた言葉が、私の中で木霊する。

『戻ってこれた』。

今、フリスクは。私の妹は、本当に、そう言ったのか？

信じられないその言葉を理解し、この一瞬の内に一体何が起きたのかを理解した途端にどくと心臓が跳ねる。

まさか、まさか。でも、それならこの既視感の説明もつく。

自分の持ちうる全ての知識で私が辿り着いた結論は、たった一つ。

『巻き戻された』。

「？ お姉ちゃん、どうしたの？ ぼくのことをじつと見て……」

「ん？ ……ああ、いや、何でもないよ」

フリスクは自分を凝視する私に向かって首を傾げる。うん、かわいい。

そこまで辿り着いて、私は逆に安堵していた。

巻き戻された、つてことは、だ。一週目の私は心配だったフォトシヨップフラウイーを無事に……いや私のことだし、フラウイーも狂ってるから無事ではすまなかつたんだろうけど、まあ乗り越えることが出来たんだろう。彼との戦いではセーブとロードが奪われてるから、セーブデータは使えない筈だからね。アズゴア王と戦って死んでフリスクが巻き戻した可能性もあるけど、私が王様の死に顔を見た気がすることから考えてその可能性は低い。まあとにかく、全てを乗り越えて、私はフリスクをニューtralエンドまで連れていくことが出来たはず。そして、このセーブポイントの光の前まで戻ってきたつてことは、これから進むのは、トゥルーパシフイストルート……つまりハッピーエンドルートの可能性がかなり高い。あGenocideのルートに進むならリセットされて記憶が残らないかもしれないし、そもそもリセットされたら戻ってくる所がルインズのあの花畑か、私の場合はエボット山の山中の筈だしね。

そんな思考を回していると、フリスクがちよいちよいとパーカーの裾を引っ張つてくる。

「お姉ちゃん、あのね」

「ん、どうしたの？」

「フラウイーに会ったんだけどさ、それでアルフィスのラボに行けって言われたんだけど………行っていい？」

上目遣いで訊ねてくるフリスクに、思わず私は目を見開いた。

「……………いいけどさ、フリスク、何時フラウイーに会ったの……………」

そう聞き返せば、フリスクはきよとした顔をする。

……………フラウイーがフリスクの前には姿を現すことは無かったはずじゃなかったのか？ それとも、バタフライエフェクトで……………いやでも私が目を開けるのにそこまで時間はかからなかったから、会うほどの時間は無いはず。寝ていた訳でもないし、一体どうやって……………？

私がそう思っていると、フリスクは目を伏せて考え始める。

「……………あれ？」

そして暫くしてから顔をあげ、戸惑いを浮かべた顔で私を見る。

「……………ぼく、いつフラウイーに会ったんだっけ」

困惑した顔を見て、ふと思う。もしかして、フリスクが会ったわけじゃないのか、と。ゲームだったとき、フラウイー戦の後にフラウイーを『MERCY』して見逃せば、エンディングの後にフラウイーは『Player』に『何故自分を見逃したのか』という疑問をぶつけ、『アルフィスのラボに行け』という指示をするシーンが見れた。だが、それはあくまでも『Player』に向けるヒントであって、『フリスク』自身に向けたものじゃない。なのに、フリスクの知識としてそれがあつて……………フリスクと

『Player』の繋がりが強くなっているのか、でも糸が太くなったりした様子は無いし、それとも……………」

「……………まあ、いいよ。あのフラウイーにアドバイスされるとかちよつと所じやなく癪だけど、フリスクが行きたいって言うなら従うさ。でも、その前に」

止まらなさそうな思考を一旦切り上げ、私は先程の部屋に足を一步踏み入れる。

此方に背を向けたまま、紫色のマントを纏った彼が佇んでいる。

何故か泣きそうになる中、声をかける。

「すみません、王様。ちよつと用事を思い出したので済ましてきます」

「……………そうか。なら、行ってきなさい。私はいつでも待っているからね」

「!……………はい」

たつた、一言。

それでも返された優しい声が、心にじんと広がっていく。

———良かった。彼が、生きている

その事実が、何故か泣きそうになるほど嬉しかった。

こう思うつてことは、きつと一週目の私は、台本通り^{ゲーム}に彼を死なせてしまったことを少なからずとも後悔していたんだろうな、と見当をつける。

視界が霞んでいくのに気付कि、慌てて袖で拭う。これ以上居たらマジで泣きそうので、急いで部屋から出る。

「お待たせ。話してきたよ」

「ありがとう……………」

戻つてフリスクに伝えると、お礼の後に首を傾げられる。

「……………お姉ちゃん、泣きそうになったの？　なんかあつた？」

そして一発で泣きそうになったことを見抜かれ、思わず苦笑する。

「……………王様があの部屋で立っているのを見たら、なんか……………嬉しすぎて、涙が出てきちゃつて……………何でだろうね」

何も知らない体でそうフリスクに告げれば、その顔が一瞬悲しそうに歪む。大方、フリスクは私が後悔していたのを知っていたんだろうなと思いつながら、未だに浮かんでくる涙を拭い、今度こそ泣き止む。

「……………まあ、それは置いとくとして。ラボに行くんだつて？」

「うん」

話題の方向転換を図ると、フリスクはそれに頷く。

「うーん、私さつきアルフィスに結構きついこと言ったり威圧かけたりしちやっただけど……合わせる顔がないな」

「あはは……」

フォローのしようのない私の一言に、フリスクは苦笑いを返した。

「……………まあ、私の事情は置いといて。じゃあ、ホットランドに戻ろうか。えーと、どのルートが最短だ？」

「うーん、取り敢えず廊下の前のエレベーターで戻って、そこからコアに行くエレベーターに乗ってホテルのところで降りて、ホテルの近くに確かエレベーターあったよね？ それに乗ってラボに行くのが最短じゃない？」

「あー、やっぱりそれが最短かあ……」

ラボに行く最短経路をフリスクと話し合いながら、手を繋いで歩き出す。

………ここからが、正念場だ。

一週目の私がちゃんと予定通りニュートラルエンドにまでフリスクを連れていったんだ。二週目の私は、ハッピーエンドにまで、必ずフリスクを連れていかなくちや。

画面越しで見えていたあの夕焼けを、必ずフリスクに見せなくちや。

私は、胸に、決意を抱いた。

2. 手紙 (ラブレター)

[Lily]

フリスクと他愛もない話をしながらコアまで戻ってくる。そして、コアからホテルに繋がる廊下の半ばに差し掛かった時、

プルルル……プルルル……

フリスクが持つ携帯の着信音が廊下に響く。その着信音にさえ、懐かしさを覚えた。

「え、えっと、何処だっけ……」

「ごそごそとポケットを探り、フリスクは携帯を取り出して電話に出た。

「……………」

電話に出た瞬間、フリスクの声が一切聞こえなくなる。慣れていた筈のその現象に、どきりと心臓が跳ねる。……………一週目に地下を出て、結構な日数が経っていたらしい。地下世界で付けた『有り得ない現象』に対する耐性が無くなってるな。

「……………」

暫くしてフリスクは電話を切り、携帯をしまって、困った顔で私を見る。

「どうしよう、お姉ちゃん。アンダーに頼まれごとされちゃったんだけど……先に行

くべきかなあ？」

……ああ、やっぱりその電話だったのね。此処でその電話といえ、それしかないし。

フリスクが言っているのが今後に関わってくる大事なイベントだと察し、少し考える。

「……………私の意見を言えば、ラボに行くのは後でいいんじゃないかなとは思うよ。アンダインは私達を待つてるんでしょ？ それに比べて、アルフィスは別に私達を待つてるわけじゃない。勝手に私達が押し掛けるだけだし。だったら、待つててくれる方を優先した方がいいとは思うな。……………まあ、フリスクに任せるよ」

「そっか……………」

私の言葉を聞いて、フリスクは少し考え込むような素振りを見せる。そして、少ししてから顔をあげて、頷く。

「うん、決めた。アンダインの方に先に行く」

「ん、オッケー。じゃあ、ホットランドに着いたらラボじゃなくてそのままリバーパースンさんの所に行くのでいいね？」

「うん、それでいい」

予定を擦り合わせ直し、二人で確認し合う。

「ああ、楽しみだなあ」

妙に浮き足だっているフリスクを見ながら、アンダインやパピルスに会えるのが嬉しいのだろうかと思当をつける。

「さて、じゃあ待たせるのもなんだし、急ごうか」

「うん！」

フリスクを促して手を繋ぎ、スノーデインへ向かって走り出した。

「ありがとうございました、リバーパーソンさん」

「トウララ。またいつでもおいで」

「はい」

ホットランドを經由し、リバーパーソンさんに送ってもらってスノーデインに辿り着く。途中、ラボの前を通った時フリスクがじっとラボを見つめていたりしたが、それは割愛する。

フリスクは岸についた途端にリバーパーソンさんの船から飛び出し、走っていく。

「ちよ、ちよつとフリスク!？」

「トウララ、子供は元気なくらいが丁度いい」

「まあ、そうですけど……ともかく、ありがとうございました！」

ちやんと頭を下げてから慌ててフリスクの後を追う。季節外れなざくざくという雪を踏み締める感覚と冬特有の寒さが酷く懐かしい。そんな思いに駆られながら、とにかくフリスクを追う。

道の先を行くフリスクが角を曲がる。私も角を曲がった所で、叫び声が上がった。

「ニエツ?!」

「ンガアアア!!」

懐かしさを覚える声にハツとして顔をあげると、少し先で、フリスクが木造の家の前で立っている背の高い骸骨——パピルスと、青い肌に紅い髪の魚人の女性——アンダインに飛び付いているのが見えた。

「な、なんだ、どうした人間!?! 俺様達に会えなかったのがそんなに寂しかったのか!!」
驚き、戸惑う二人に、フリスクはぎゆうと抱き付く。まあ無理もない。別れてそこまですてない友人が唐突に抱き付いてきたら、驚きもするわな。私だってそうだし。

そこで、私も追い付いた。

「ちよつ、と……………急に、走るな……………」

ゼエゼエと突然走った影響で膝に手をつけて肩で息をしながら、フリスクに注意をする。すると、ハツとしたようにフリスクは二人から離れ、慌てて私に駆け寄る。

「大丈夫か?」

「おい、私から逃げていた時のガッツはどうした」

ざくざくという音ともに、不意に、懐かしさを感じる声がかからかかってくる。ハツとして顔をあげると、パピルスとアンダインが心配そうな顔で私を見ていた。

「……………うん、大丈夫……………」

その顔を見て、思わず笑みが溢れた。

「そうか!! 怪我はしてないな!？」

につこりと笑って続けられたパピルスの一言に、浮かんだ笑みが引つ込んだ。

……………うーん! 何とも言い辛い! メタトンに蹴られたってバカ正直に言う訳にもいかなしいなあ……………」

「あー、うん。ダイジョウブ」

「そうか!」

メタトンに蹴られた際の横腹の痛みを思いだし、思わず手を宛てて擦る。棒読みになりながらも頷くと、パピルスはその笑顔を保ったまま、満足そうに頷いた。アンダインは本当は良くないことを察したのか、苦い顔をする。

「……………まあ、それは置いとくとして。それで? 頼みごとって何さ」

口を開こうとしたアンダインから追及を受ける前に本題を訊ねて話題を逸らす。露骨に話題を逸らされたからか、アンダインは一瞬眉を吊り上げたが、直ぐに諦めたよう

に眉を下げ、深く溜息を吐く。……いやごめんて。そんな深く溜息吐かなくてもええやん。

「あー、それで、少し頼まれてくれないか」

「何を？」

無言で首を縦に振るフリスクと一緒に頷くと、途端にアンダインが居心地悪そうにし出す。そして、先程から何故か背中に隠していた左手を、シュバツという音を立てそうならいに勢いよく差し出した。

「えーと、……この手紙を届けてくれ」

その手には、水色のシンプルな手紙が乗っていた。

「へえ、手紙か。誰に届けばいいの？」

「宛先はアルフィス博士だ」

手紙を受け取り、引っくり返してみたりして、よく観察する。何処を見ても名前が見たたらず、ゲーム通り手紙に名前は書いていないらしいと思う。

一生懸命書いたのに名前を忘れるとか……やっぱちよつと抜けてるな、アンダイン

……

……この手紙は、アルフィスに会って、今後のルートを進める為に重要な物だ。これに名前が書いてなかったからこそ、彼女を連れ出せるのだが……少しだけ、指摘した

方がいいのかと、迷う。

私を手紙を見て悩んでいる間に、背伸びして手紙を見ていたフリスクがアンダインに
向き直り、パクパクと口を動かす。

「ハア!? どうして自分で渡さないのか……?」

「そうだよ、自分で行けよ」

そう指摘すると、アンダインは徐々に顔を赤らめ、もじもじとします。ちよ、現実で
見るとなおのこと可愛いな。フリスクには敵わないけど。

「……………えーと。そ、その……………そ、それは個人的な話だが……………あたしたちは友達だし
……………その……………」

「なんだどうした可愛いな。おらはよ言え」

「ちよ、可愛いってなんだ!! 茶化すな!! え、えと、その……………し、正直に言う……………」
ニヤニヤしながら悪ノリして揶揄うように言えば、青い実が熟れて赤くなるように赤
くなり、人差し指を突き合わせ始める。案外いじりがいあるな。

そして、ハツとしたような顔をしてから顔を上げて、笑った。

「ホットランドはクツツツ熱い!! 自分で行きたくないんだよな!!!」

「それだけじゃないでしょ?」

「……………あと、文章が今一しっくり来なくて何度も書き直しちゃうし……………」

「で？」

「……………恥ずかしいから、デス……………」

間髪入れずに突っ込んでみると、再び顔を赤くして俯いてしまう。ゲームの台詞は誤魔化しだったらしい。乙女だな。

「……………と、とにかく、そういう訳で頼んだ」

「……………」

フリスクは頷き、任せろと言うように自分の胸を叩いた。

「ありがとなー！ お前はサイコーの友達だ!!」

「……………ねえアンダイン、ちよつとこっちに」

「？」

喜ぶアンダインを手招きして、パピルスとフリスクから少し離れた所で、内緒話をするよう問う。

「ちなみにこれもしかしてラブレターだったりする？」

「……………!!! おつま、なんで……………!」

「ああ、マジなのね……………」

彼女はそれを聞くと、驚いた顔で私を見る。その反応にやっぱりか、と思いつつ、取り敢えず話を続ける。

「いや、さつきからどーも恋する乙女みたいな反応してるからさ……もしかして、と思つてね。まあ所謂女の勘つてやつ?」

「……………マジかよ……………」

「残念ながらマジだよ……………」

顔を隠して頂垂れるアンダインに肩を回しながら頷く。

「……………まあ、他ならぬ『親友』の頼みだし、やったげるよ」

「……………! 本当か!?!」

「勿論」

そう言うと、アンダインは顔をあげ、ぱつと輝かせる。

「花も恥じらう恋する乙女・アンダインちゃんのキューピッドになつたげようじゃないか」

「……………!!! ば、ばかにするな!!」

「いってて!! 馬鹿にはしてないよ」

にやつと笑つてそう言えば、また彼女は顔を真っ赤にして此方を睨み、バシツと背中を叩いてくる。はは、ぜんぜん怖くないしあの死闘みたいな攻撃じゃないから痛くねえ。

「……………心の底から、その恋が上手くいくように応援してるんだよ。頑張つて渡してくる

から、アンダインも頑張つて」

「…………… あ、ありがとう」

最後はニヤケ顔から元に戻して真剣に言えば、アンダインは目を丸くしてから、ほにやつと笑う。うん、彼女にはやつぱり笑顔がイチバン。

……………その想いを、私は知つてて利用するんだけどね。

「ねえ、何の話してるの……………」

「ん？ ああ、何でもないよ。気にしないで」

湧き出してきた自己嫌悪が、何を話してるのか気になつたらしく、近付いてきたフリスクの声で一旦奥に引つ込む。

「それじゃ、この手紙はお預かりさせていただきます」

「な、なんだよ、急に……………まあ、よろしく頼む。捨てたりしたら容赦しないからな。あ、あと中身絶対読むなよ！」

「えー、そう言われるとなおのこと内容が気になるんだけど。開けちゃおっかな……………ごめんごめん冗談だから。冗談だから無言で拳構えないで」

手紙を開けるフリをした途端にすつと突然真顔になつて拳を構えたアンダインから危機感を感じて一步距離を取ると、にっこり豪快な笑顔を見せる。

「冗談だ」

「君の拳は洒落にならんよ。いや揶揄った私が悪いけどさ。……じゃ、行こうか」
「うん」

そろそろ茶番とアンダインいじりを自重し、苦笑いしているフリスクに声をかける。

「それじゃあまたね二人とも！」

「おう！」

「またな人間！」

二人にフリスクと一緒に手を振り、一旦別れてリバーパーソンさんの所にまで戻る。……さて、デートでバタフライエフェクトが出てないといいんだけど。

またリバーパーソンさんに送ってもらい、手紙を持ってホットランドにまで戻ってくる。因みに犬の船だった。そこまでの時間離れてないのに犬の船になってたのが謎過ぎる。いつの間に変えたん……？

まあそんなことを思いながら、またお礼を言って階段を上がり、ラボの前に立つ。

「……………引き受けたはいいいけど……………」

ラボをじつと見て、フリスクは私を見た。

「どうしよう。ポストとか見当たらないんだけど……………」

「それな」

ポストが見当たらないことに気付いたフリスクが、困ったように言った。私はどうすればいいか知ってるけどね。

取り敢えず、といった様子で、徐にフリスクは扉の前に進んでいく。そして、コンコンコン、とノックした。

「……………どう?」

「……………返事は、ないなあ。居ない筈ないんだけど…………」

そのまま、フリスクはペタペタと扉を調べ出す。

「……………何してるの?」

「いや、隙間でもないかな、って。そうすれば、この手紙を入れられるんだけど…………」

そう言ってフリスクが屈み、扉の下を探る。

「……………あ、あつたよ!」

「ん、マジ?」

嬉しそうにフリスクが振り返り、私を見る。歩いて同じように屈んで扉の下を見ると、確かに僅かながら隙間があつた。手紙を宛がって見ると、抜き差し出来るぐらいにはあるらしいと分かつた。…………まあ、ここで無かつたらゲーム的に詰んでたけどね。

「……………入りそうだね」

「そうだね。入れてみるか」

「うん」

フリスクに手紙を渡すと、すつ、とアンダインの手紙を中に滑り込ませる。そして、ノックをした。それを見て、ドアに耳を宛てて、中の様子を伺う。

すると、ゆつくりとした足音が聞こえてきた。

「…………どう？」

「近付いてきてる。…………静かにね」

唇に人差し指を当て、静かにするように指示すると、神妙な顔でフリスクは頷き、同じように耳を宛てた。

「…………ど、どう、どうしよう、また手紙かな…………？」

ぶつぶつと呟く、懐かしくてちよつとだけ聞きたくなかった声がする。…………アルフィスの声だ。

「開けたくないなあ…………そ、そのまま返そっかな…………？」

ずつと一人でいたからだろう、思考を独り言として呟く癖が着いているらしい。思考がそのまま口に出されている。

「……………………いや…………いつまでもこんなこと出来ないわ。この手紙は読もう」

意を決したような声がする。そして、紙が擦れる音が微かに聞こえる。そして遅れて、ガリガリという音が聞こえ、開けようとしていることを察する。

「……………な、なんか、封がき、きつくない、コレ？　ちよつと待つて……」

足音が遠く離れていく。そして少ししてから、ガチャガチャという音を立てて、また足音が近付いてきた。何か機材を持ってきたらしい。

カチ　チュイイイイン

何かが削れる音が扉越しに少し聞こえ、そして、少ししてからカサカサという音が聞こえる。

「……………え、これ、つて……」

驚いたような声が聞こえ、そして、此方に近付いてくる音がする。

「あ、来る。離れよう」

「うん」

急いで立ち上がり、扉から離れる。一步離れた瞬間、扉が開き、小柄の黄色い恐竜のような女性が、水色の紙——多分便箋だろう、を胸に大事そうに抱えておらずと出てきた

「あの、ねえ、これ、冗談のつもりなら、これ……………」

アルフィスが手紙とフリスクを見比べながら聞こうとすると、冗談ではないよ、というように、フリスクは首を横に振った。因みに私とは目さえ合わせてくれない。無視つらい。

「……嘘でしょ？」

それを見て、アルフィスは驚いたように目を見開いた。

「この手紙あなたが書いたの？」

その言葉を聞いて、フリスクはピシリと固まり、目を見開く。

「名前が書いてないから、一体、誰のものなのか……嘘でしょ。どうしょ」

アンダインの小さなミスからとんでもない食い違いが起きていることに気付いたのか、フリスクが困ったように私を見る。うん、私も流れとしてはどうしてこうなるのか理由が全くわからないから安心してくれ。

そしてアルフィスは、顔を少し赤らめた。

「すっごくかわいい……」

「……は？」

アルフィスが言った言葉が一瞬理解できず、ゲーム通りの台詞とはいえ聞き返してしまおう。

「そ、それに全然知らなかったわ、あなたがこんな風にその、文章を書くなんて！」

ぎゅつと手紙を大事に抱え、アルフィスは続ける。

「びつくりした、だって……あんなに酷いことしたのに……」

アルフィスの顔に、影が差す。

「……私、本当は許されるべきじゃないの。ましてや、その、こんな言葉で？　それも、こんなに情熱的に」

影の差した顔が、戸惑う顔に変わる。慌てて誤解を解こうとしたフリスクの動きが少し面白い。いや面白がってる場合じゃないわ。ゲーム通りに進むとしても誤解は解こうとしかないと。

「えーつと、アルフィス？　それ、私達のじゃなくてだな」

「よし、わかった！　やってみる！」

弁明をしようとした瞬間、タイミングが悪かったらしく、アルフィスの声が被った。あ、こりや駄目だ。もう修正できない。

「お詫びにはこれくらいしなくちゃね！」

一旦フリスクと顔を見合わせ、そうよ、と言って自分を納得させようとするアルフィスを見る。私の視線を受けて、やっとアルフィスが私を見てくれる。

「お詫び？」

「え、ええ！　二人でデートしましょ！」

「!?」

今度こそフリスクは大きく目を見開いた。

「……あ、でもどうしましょ、三人じゃデートできないわ」

「……ああ、それならご心配なく。私はエスコートマンだから。直接デートはしないよ」
「ちよつとお姉ちゃん!」

「そ、そうなの? それじゃあ、始めましょうか」

DATE START……………?

デートを早々に放棄する言葉をアルフィスに向けて言えば、アルフィスが怯えながらも納得したようにそう言った。瞬間、周りが白黒に切り替わり、聞き覚えのあるアナウンスが流れた。フリスクはこの現象を見て、これはもう駄目だと悟ったのか、バタバタと忙しなく動かししていた手をぶらりと下げる。

「……どうしようお姉ちゃん。食い違いが起きてるよ」

「……………私もそれは思った。でも、うん。何とかなるよ」

「ええ……………」

雑談しながらデートが始まるのを待つ。そこで、アルフィスが居ないことに気付く。

「あれ、主役が居ない」

何処かにいるのかと思って周りを見渡しても、アルフィスが居ない。

『あうう、ごめん! ちよつと私まだ着替えてる途中で!』

「……………ああ、着替えてるのね」

不意に、研究所の方からアルフィスの声がする。着替えてるのかと納得し、待つ。

少しすると、研究所の方から、黒い生地に白い水玉の柄のワンピース、いやドレスを着てきたアルフィスが急ぎ足でやってくる。

『ど、どうかしら？ 私の友達がこのドレスを選ぶの手伝ってくれたの』

「おう、よく似合ってると思うよ」

私の言葉に続き、デートをする覚悟を決めたくらしくフリスクが頷く。すると、アルフィスは嬉しそうに破顔する。

『彼女って本当にいいセンスを持ってて……』

物語を知っている私は、その彼女が手紙の本来の主であることを察する。ほんつと見てもどかしいなあこの子達。

自分が何を話そうとしたのか気付いたらしいアルフィスは慌てて私達を見る。

『えーと、まあいいわ！ さあデートを始めましよ！』

「じゃあ……」

DATE STAR……

『ちよ、ちよつと、ままま待って!!』

今度こそデートが始まろうとした瞬間、他でもないアルフィスによつてストップがかけられる。

『ま、まだ、デートを始める準備が出来てなかったわ!!』

「ありや」

DATE……STOP?

戸惑い気味のアナウンスを聞きながら、アルフィスを見ておく。私の視線を受けたからか、ピクリと体が跳ねた気がする。ほんと嫌われてるな。

『うーん、まず始める前に好感度をあげるアイテムをあなたに使わないと!』

「アイテム?」

『これで私達のデートの成功率を向上させることが出来るわ!』

おお、『成功率』とかリケジヨっぽいこと言うなあ。流石科学者。……なんて思ったっけ。

一番最初に『Undertale』をやったときの感想を思わず思い出した。

『いいかな……?』

「いいよ」

おずおずと聞いてくるアルフィスに、フリスクが頷く。私も指で丸を作り、了承しておく。

『まあとにかく、な、なにも心配しないで! 準備はしてあるわ! わっわたし、こういうデートのために素敵なプレゼントを用意してあるの!』

「おお」

そう言つて、アルフィスはドレスのポケット辺りを探り出す。まあ、きつと、その用意している本来の相手は私達じゃないんだらうけど。

そして、何かを引つ張り出した。

『ま、まずこれ、これが……金属鎧用の研磨剤！』

ポケットから取り出したのは、瓶……だらうか。とにかく、容器に入った何か。

『……あー、多分あなたには使えないアイテムね』

「せやな」

鎧なんか着てないしね私ら。

デートで私達を年上としてエスコートしようとしているのだらう、慌てるアルフィスを見ながら同意しておく。

『でつでも!! 人間でも使える鱗用の防水クリームも持ち歩いてるわ! あなたの、そう、鱗の……』

「アルフィス、君テンパってるな? 一旦落ち着け、私達に鱗はない」

ゲーム通りとは知ってはいても、此方のニーズに合わないアイテムを出してくるアルフィスに落ち着けと言つてしまう。

『うう、じゃあ、これはどうかな……』

クリームをしまい、またアルフィスはごそごとポケットを漁る。

『この魔法の槍、修理キット、これは私が……え、えーと……』

どう考えても私達向けではなくどつかの騎士団長向けのアイテムばかり出してくるアルフィスに、思わず苦笑いを浮かべる。

『……ね、ねえ、アイテムについては無かったことにしてちょうだい!』

「オッケー私達は何も見えてない、いいね」

慌てるアルフィスの言葉を聞いて、フリスクにそう言うと、フリスクは首を何回も縦に振った。

『さあとにかくデートを始めましょう!』

DATE!! START!!

三度目の正直と言わんばかりに、やっとデートの開幕がアナウンスされる。

『いえーい!!! レッツ、ウ、デート!』

「どんどんばふばふー」

アルフィスの無理矢理あげているであろうテンションに乗っかり、拍手をしながらそう言った。

……そして、そのまま沈黙が流れる。

『……………』

「……………」

「……………」

「……いや気まっずいな!？」

『……………あー……………あなたって……………アニメ……………好きなの……………?』

気まずい雰囲気を破ったのは意外にも、そしてゲーム通りアルフィスで、此方に質問を投げ掛けてくる。その質問に、フリスクは少ししてから頷く。

『や、やったあ! 私もよ!!』

「私も好きだぞ。スノーデインの一番最初のカメラに向かってやったやつもアニメ……………というか漫画のネタだし」

「そ、そうなの!? 是非知りたいわ……………! あれ、とても面白かったのよ……………!!」

「お、マジか」

やはりオタクの同士という点ではアルフィスと根本的には同じなのか、妙に親近感を感じる。いや私オタクとはいってもライトな方だったらしいけど。腐ってはなかったけど。ちなみにソースは今世の友人。

そして、それだけで会話がつきてしまったのか、また沈黙が流れる。

『……………ね、ねえ! どっかに!! お出かけしましょ!!』

「そうだね、そうしようか」

またも沈黙を破ったのはアルフィスで、その提案に直ぐに乗る。……………いやあ、お互い

気の乗らないデートだとこんなに気まずいんだね！ 初めて知ったよ!!

『でも何処に行けばデートとして良いのかしら……?』

「さあね……私達地下世界のことあんまり知らないし」

「それもそうよね……」

私達から目を逸らし、アルフィスは少し考える素振りをする。

『……………分かったわ!!』

「お、なんかいいと思いい付いた？」

「ええ!!」

閃いたらしいアルフィスに訊ねると、彼女は少し戸惑ってから、言う。

『さあ、ゴミ捨て場に行きましょう!!』

「……………マジか」

ゲーム通りか、というのとまた靴が濡れるなあ、と擦れた感想を抱きながら、勇み足で前に行くアルフィスの後を、フリスクと顔を見合わせてから追った。

3. アルフィスとデート

〔Lily〕

三人で無言のままウォーターフォールの道を歩いてくる。ひんやりとした涼しさが体を優しく冷やすが、それより冷えているこの気まずい空気は精神をガリガリと削っていく。仕方無いよね話題がないんだもの。アニメの話をする訳にもいかないし。

「……………」

「……………」

「……………」

どちらとも無言を貫き、気まずい沈黙の中、黙々と歩き続ける。……というか、これリバーパーソンさんに送ってもらった方が早かったんじゃないかな。

暫くすると、道の端にアイテムボックスが見え、やつと着くらしいと察する。

「……………もうそろそろか?」

「そ、そそうよ!」

え、『粗相』?

首を縦に振りながら言われたアルフィスの一言に、揚げ足を取るような思考が一旦

過った。おう茶化するな私の思考回路。これ以上アルフィスと亀裂いれてどうする。

そんなことを思いながら、足を進め続ける。見覚えのある風景の中を進み、やつとゴミ捨て場にまでやってきた。

『着いたわ!』

そう言つて水の中に足を突っ込んで進むアルフィスの後を、フリスクと並んで着いていく。そして、アルフィスは一番奥の、私達が落ちてきた花畑にあがった。

『いつもアンダインとはここで一緒に過ごしているわ……一緒に色々な素敵なものを探しているの。えへへ、彼女つて本当に……』

「……なんでアンダインが出てくるの?」

同じように花畑の上にあがり、振り返つてゲーム通りの言葉を言うアルフィスに思わずそう返す。すると、彼女はピシリと止まって首を振る。焦つてるな。

「い、いえ、何でもないわ!」

「ん、そう。なら……」

『あつ……』

その瞬間、アルフィスが私達を通り越した一点を見て止まった。

『えっ嘘。そこに彼女がいるじゃない』

「ん? マジで?」

アルフィスの隣に並んで視線の先を見ると、確かに背の高い人影がある。ゲーム通りに進む展開に、取り敢えず乗っておく。

『あなたとデートしている所を見られたら私どうしたらいいの!』

「いやそんな私達が間男みたいな言い方しなくても。何か理由があるの?」

ツツコミを入れてから白々しくも何も知らないようにアルフィスに訊いてみる。同じように並んでいたフリスクも首を傾げた。

『「どうして」……? だって、えっと……その……』

アルフィスが言葉に詰まって俯いたところで、ザブザブという音が微かに聞こえる。その音にアルフィスも気付いたのか、顔を上げた。

『うそ、やだ、ここに彼女が近付いてきているわ!』

「うん、見りゃわかる。……見つかつたら不味いなら取り敢えず隠れるなり何なりすればいいんじゃない?」

「そ、そうね!」

取り敢えず慌てるアルフィスに隠れるように促すと、彼女は一層慌てながらゴミ山に突っ込み、そこら辺にあったゴミ箱の裏に隠れる。

『おーい! 来たぞー!!』

「よう。アンダイン」

アルフィスがゴミ箱に隠れるや否や、アンダインが結構な速さで手を振りながら近付いてくる。近付いてくる毎にアンダインの服装の違いに気付き、目を丸くする。

「……………おりよ。ビシツと決めてるね。格好いいよ」

「え？ そ、そうか？」

同じ場所に立ったアンダインを見ると、いつものひつつめている髪型を崩し、眼帯をしている左目を隠すように髪が垂れている。服も白っぽいのを下に着て、革ジャンを羽織っている。首には、スカーフだろうか。それを巻いている。ピツチリとしたズボンに、ロングブーツ。かつこよくもありながら男っぽすぎず、アンダインによく似合う格好だった。

かなり違いがある服装を素直に褒めれば、照れたように笑顔を見せる。

「で、どしたよ」

「ああ、そうだ……………」

逸らしてしまった話題を戻す為にアンダインに訊けば、彼女は私達を見ながら本題を話す。

『あたし、あー、気付いたんだが、お前があの手紙を渡すのは……………悪いアイデアだったかもしれない』

「おい、頼んどいてその言いぐさはないだろ」

「う、それについてはすまん……………」

アンダインの言い分に思わず顔を顰めれば、アンダインは素直に謝った。

『だから今あたしがここに来たんだ!! 手紙を返してくれ!!』

バツと此方に手を出したアンダインがそう言えば、フリスクは首を横に振った。すると、驚いたように目を見開いた。

『なにい!? もう持つてないって!』

「うん」

二人揃って首を縦に振ると、アンダインは頭を抱えて彼女特有の叫び声をあげた。

『ンガアアア!! じゃあ彼女をここらで見かけたのか!』

その問いに、フリスクは見える位置にあるゴミ箱の裏から垣間見える震える白色を見て、少し間を開けてから首を横に振った。

『見てないのか??』

目を丸くするアンダインに、こくりとフリスクは頷く。

『でも家にはいなかったぞ…………』

「あ、行ったの?」

どうやら入れ違いになっていたらしい。でも道中で会わなかったけど、どうやって入れ違いに…………ああ、アンダインは泳いでいったのか?

『一体どこに行つたんだ?!』

そう言つて、アンダインは走つていった。その影が遠くなって見えなくなった所で、ゴミ箱の裏に声をかける。

「……………おい、もう行つたみたいだぞ」

その言葉に反応してか、ピクリとゴミ箱からはみ出ている尻尾が動く。そして、すすすつとアルフィスが出てきた。

『うそでしょ…………』

ザパザパと音を立ててまた此方に来たアルフィスは、申し訳なさそうな顔をする。

『え…………えーと、もう分かつてると思うけど、ね? 私…………えーと…………』

そして、言いにくそうに口籠もり、少ししてから、意を決したように口を開く。

『私本当に彼女のことを好きなの。つまり、他の誰よりも断トツで好きってこと!』

「やっぱりか」

フリスクが目を見開いて驚く傍ら、知っていた私は頷いておく。そして、フリスクが一步前に出て、口を動かした。

『ごめんなさい……………ほ、ほんの、思いつきだったのよ…………』

十中八九『どうしてデートしてくれたのか』とでも聞いたのだろう、アルフィスの顔が一層申し訳なさそうに歪んだ。

『あ、あなたと何て言うか、楽しく。その……デ、デートのフリをすれば？ 慰めてあげられるとか？』

正直に白状し過ぎてあんまり言わない方がいいであろう言葉を口走るアルフィスに、苦笑いを浮かべておく。

『……うーん、なんかそう言うで一層駄目だと思ってきた……』

大分混乱しているのか、文法がおかしくなっている。大丈夫か、落ち着け。

『ご、ごめんなさい、またしくじっちゃった……』

「気にすんな。要らないことを口走るなんて私もあるから」

落ち込むアルフィスにフォローを入れておく。私もたまに本音がポロつと溢れるからな。

『アンダインこそ私が……本当にデートしたい相手なの……』

「うん、さっきのデートアイテム思いつきりアンダイン向けだったしね」

「そ、それは言わないでちょうだい……」

思わず本音を言つて、アルフィスを俯かせてしまう。やっべ。

「それで？」

『ええと……でも、その……彼女と私じゃ釣り合わないし』

……まあ確かに、体格差はあるけどね。

思わず言いかけた言葉を寸前で飲み込む。ここで言ったらなおのこと空気が悪くなる。

私が言わないようにしていると、アルフィスがハツとして慌てたように私達を見る。

『だからって別に、えーと、あなたがダメってわけじゃないの！ その、でも、アンダインは……』

話しているうちにアンダインと一緒に居るときのことを思い出したのか、顔が少し緩む。

『自信に満ち溢れていて……強いし……そして面白いし……でも、私にはそんなもの無い。全部偽物なの』

最後は、何かを思い出したのか、酷く自虐的な口調になる。

『私は王国直属科学よ、でも……ずっとずっと人を傷つけてばかり』

癖なのだろうか、先程からたまにしている右手を右頬に宛てながら、アルフィスは影の差す顔で言う。

『彼女に沢山の嘘を言ったわ、だから彼女の知ってる私は……彼女の考えている私は実際の私よりずっと優秀な人』

……それは、人間も一緒だと思うけどなあ。

アルフィスの言葉を聞いて、そう思う。

人間だつて自分を実際よりずっと偉く見せようと見栄を張るし、誰しもが通る道だと思ふけどな、それに関して。……彼女の抱える罪には、何とも言えないけど。

『もし私が彼女とこれ以上親しくなつたら……彼女はきつと……本当の私を知ることになるわ』

「……それは、嫌なんだな？ でも、彼女との関係は続けていたいんだな？」

私が訊くと、アルフィスは頷く。

『……ねえ、私はどうしたらいいの？』

自分の思いに板挟みにされて途方に暮れてしまったアルフィスが、フリスクに問う。真剣な顔で話を聞いていたフリスクは、考えるような素振りをする。

……ここでも『Player』に選択肢が提示される。『真実を言う』か、『嘘を吐き続ける』か。どちらかを選ぶことになる。『Player』はどちらを選ぶのだろうか？

そして、少ししてから、アルフィスに向かって口を開く。それを見てか、アルフィスは驚いたように目を見開いた。

『真実を……？』

フリスクの口から出た言葉を反芻するように、アルフィスは言う。……『Player』は『真実を言う』方を選んでほしい。

少し安堵しながら成り行きを見守っていると、アルフィスは両手を頬に宛て、慌て出

す。

『でも、でも真実を伝えたら私、彼女に嫌われちゃうわ』

それはどうかな、とただ一人結果を知っている私は思う。

『そ、それより今の方が良くない？ 二人とも幸せになれる嘘と……揃って不幸せになる真実とどっちがいいの？』

ゲーム通りのその様子を見て、少しもどかしくなる。

『誰だつて「自分に素直に」つて言うけど。……私は「自分」つていうのがあんまり好きじゃないの。だから気に入ってもらえるように振る舞えばいいかなつて。えへへへへへ……』

それだけ言つて、誤魔化すように笑うアルフィスに、本当に彼女は『人間』に近い思考回路をしているのだと思う。『他人に気に入ってもらえるように振る舞う』なんて考えるのは、人間ぐらいだ。

……人間臭いなあ、本当に。これだから彼女は嫌いになれない。

アルフィスを見ながらそんなことを思っていると、暫く黙っていたアルフィスは、沈んだ顔で首を緩く横に振る。

『……いや、あなたが正しいわ』

沈鬱な顔になったアルフィスは、本音を言い始める。

『いつも怖いのも……もし、皆が真実を知ったらって』
皆きつと悲しむわ、とアルフィスは続ける。

『だって私は……………』

そこで、アルフィスはぐつと唇（だろうか）を噛み、俯き気味の顔を上げた。

『でもど、どうやってアンダインに伝えたらいいの？ し……真実を……』

頬に両手を宛て、アルフィスは私達を見て言う。

『わ、私そんな自信ないわ……きつと滅茶苦茶になっちゃう！ どうやって準備すればいいの!?!』

『アンダインに真実を話す』という方向に考え始めてくれたアルフィスを見て、フリスクは少し嬉しそうに笑って自分を指差し、口を動かす。

ちなみにここにも選択肢はあるが、『はい』か『Yes』かみたいな選択肢なので割愛する。

『口……ルールプレイ？ ……なんかそれってちよつと楽しそう!』

顔を綻ばせたアルフィスにフリスクは満足そうに頷く。

『オツケー、じゃあどつちがアンダインの役をする?』

アルフィスの問いに、フリスクは再び自分を指差した。ここでは自分がアンダインをやるか、アルフィスがアンダインをやるかの選択肢があるんだが、『Player』は自

分がアンダインをやる方を選んだらしい。

『まあ。そうよね。当然だわ。えへへ』

「……いつから自分がアンダイン役だと錯覚していた……？」

「お姉ちゃんやめて」

「ハイ」

少しでもアルフィスがアンダインをやるうとしていた事に気付き、思わず思った事を口走る。すると、フリスクに結構強い言葉を返される。はい、自重します。

『エヘン』

一つ咳払いをしてから、アルフィスは一つ息を吸って、緊張した面持ちで此方に向き直る。

……なんかあれだな、告白予行練習に付き合わされてる状況だな、これ。面白い。

『や、やあ、アンダイン……きよ、今日の調子はどうか？』

いつも通り少しもるアルフィスの言葉に、フリスクは頷きながら口を動かす。

『は！ は！ あー良かった!!』

安心したように息を吐き出し、安堵する様子を見せるアルフィス。私達が次の行動を待っていると、少ししてから、アルフィスは言葉を続けた。

『えっと、そ、それで、あなたに伝えたい、いや、話したいことがいくつかあるの』

どうした、というように、フリスクは首を傾げる。

『あー、ねえその……私……私……私……わ、私ずっとあなたに真実をつつ伝えてなかった……』

「……んー、そこは目を逸らさない方がいいと思うよ」

「そ、そう……？」

……確か、そろそろ来る頃合いだったか。

アンダインが来るであろうタイミングを思い出しながら、頬に手を宛て目を泳がせる彼女にそうアドバイスしておく。

『ね……ねえほら、私……私……あーもう、全部忘れて!!』

途中でアルフィスは言い淀み、そして自棄になったらしく、アルフィスはカッと目を見開いた。

『アンダイン!!! 私……私の気持ちをあなたに伝えたい! 聞いて!』
大きな声でそう言うアルフィスに、フリスクは頷く。

『あなたはとても勇敢で、そ、そして強くて……あと、すごい……わ、私のオタクな話にもい、いつもみ、耳を傾けてくれて聞いてくれる……』

……某テニスプレーヤーの『頑張れ頑張れ(以下略)』のコピペでも言おうかと思っただけ、この分なら必要なさそうだな。

アルフィスの勢いある予行練習にそう思いながら、道の奥へと目をやる。案外近いところに、先程見た人影が見えた。あ、もうそろそろだ。

『あ、あなたはいつも私の、こ、ことを特別な気持ちに、させてくれる……た、た、例えば私の邪魔をする人はなぎ倒すって言ってくれたり……』

奥から一直線に此方に向かってくる人影を見ながら、状況判断をしておく。えっと、次は思いが爆発して叫ぶんだっけ。

『アンダイン!!! 私はまだこれ以上我慢出来ないわ!!! あなたのことが愛しくてたまらないのよ!!!』

うわ、うるさっ。

予想以上に勢いのある叫びに、思わず耳を塞ぐ。人影の輪郭がはつきりし、そして、先程褒めた服装がはつきり判別出来た。ザパザパという水の音がする。

『抱き締めて、アンダイン!! 抱き締めてほしいの!!』

『おいアルフィス、後ろ後ろ』

「え?」

そう言った瞬間、告白対象であるアンダインが結構なスピードでやってきた。………フラグ回収乙です。

『……今なんて言ったんだ?』

信じられないような顔でアルフィスを見るアンダインの言葉に、体を固まらせていたアルフィスが、はつと我に返って慌て出す。

『あ……アンダイン！ いや……その……ただ……』

『なあ、おい、ちよつと待つてくれ！』

後退りしながら言い訳しようとするアルフィスに、アンダインは待ったをかける。

『今日の服すごいかわいいな！ 何か特別なことでも？』

『あ、えつと……その……』

アンダインの問いにアルフィスが口籠もり、私達を見てくる。おい、こっちみんな。

それを見たアンダインは、目を見開いていく。

『……ちよつと待てよ。お前ら三人で……デートしてたのか？』

『いや、してないよ。見てただけ』

『お姉ちゃんツ!!?』

フリスクを見捨てたともデートしてないと否定しているように聞こえる言葉を言うと、案の定あわあわしていたフリスクが食らい付いた。

『ううう、そうよ！ いやちがう、その、違うの!』

アルフィスの答えに一瞬アンダインが鬼の形相になり、そして否定された瞬間困惑が混ざった変な顔になる。百面相だ、おもしろ。

『つまりその、私達はそうじゃなくて……だからその、あなたのことを想ってロマンチックな予行練習をしていたの!』

『なんだと???』

「だから言ったじゃん、してないよって」

「あ、そっちの意味だったの……?」

状況が全く分かっていないアンダインが驚いたように目を剥く。そこに乗って先程の言葉の意味を断定すれば、フリスクから安心したような声が聞こえた。悪ふざけし過ぎたな。ごめんな。

『そうじゃなくて!!! そうじゃなくて……アンダイン……その……あなたに嘘を吐いた!』

ちよ、おいアルフィス。下手に否定しないでくれ。また鬼の形相がこっちに向けられたんだけど。

アルフィスが口籠もって俯いた途端に鬼の形相がまた向けられ、全力で首を横に振っておく。誤解やねん。

そして、アルフィスは決意したように顔をあげ、真っ直ぐアンダインを見た。お、来るか?

『なにっ??? 何の話だ???』

アルフィスの言葉に虚を突かれたらしいアンダインが聞き返す。

『それは……その……何もかも!』

アルフィスは一瞬言い淀んだが、ちゃんと言葉を続ける。一步アンダインに近付き、声を張り上げる。

『海藻は科学的に重要だ……みたいなこと言ったけど、本当は私……アイスの材料にしてるだけなの!』

アルフィスの告白に面食らったらしいアンダインは目を見開く。

それもお構い無しに、アルフィスはまた一步近付く。

『それと私がいつも読んでる人間の歴史書……あれ全部ただのダツサイ漫画!』

アンダインが目を溢れそうな程見開いて何が何だか分からない様子でこつちを見る。こつち見んな笑うから。

また一步近付く。

『あとあの歴史映画……あれは……あれは、あの、アニメなの! 現実じゃないのよ!』
それでもだんだんアルフィスが本当に自分の嘘の真実を話しているのだとだけは理解出来たらしく、アンダインは真剣な顔で至近距離にまできたアルフィスを見た。

『あそれと前仕事が忙しいって電話した時はね……私……パジャマ姿でフローズンヨーグルト食べてただけ! 前に』

『アルフィス』

自棄になって己の嘘を捲し上げるアルフィスに、アンダインは静かに声をかける。

『私……あなたに認めてもらいたかっただけなの！ 頭が良くて格好いいって思ってたほしかっただけなの。おたくっぽい負け組じゃ……ないって』

『アルフィス』

自分で言っていて情けなくなってきたのだろう、涙がアルフィスの小さな目に浮かび、声が揺らぐ。そんなアルフィスの頭をアンダインは、私がよくフリスクにやるように、少し屈んで目を合わせようとしながら撫でる。あのがに股はこうなっていたのかと感動的なシーンには似つかわしくない思考が過った。

『アンダイン……私……あなたのこと本当に凄いつて、思うから……』

『アルフィス』

ぐすぐすと涙混じりにそう伝えるアルフィスを、アンダインは優しく抱き締め、そつと背中を擦る。

『よしよし。よしよしよしよし』

そして次の瞬間。

彼女はそのままアルフィスを持ち上げ、

「えっ」

驚くアルフィスを、突然出てきたバスケットゴールに向かってスリーポイントシュートの要領で、投げた。

もう一度言う。

スリーポイントシュートの要領で投げた。

投げられたアルフィスはバスケットゴールを通り、その下にあつた自分が隠れるのに使った蓋がしまっていた筈のゴミ箱にインした。

「……………ボール（アルフィス）を相手の（突然現れたバスケット）ゴール（とゴミ箱）にシューシューッ！ 超☆エキサイティング……」

「ブツ……」

ゲーム通りの展開に思わずネタを小声で呟けば、隣で聞こえたらしいフリスクが吹き

出して蹴った。え、そんなに笑う？

『アルフィス！』

何故か蓋がまたしまり、アルフィスが中に閉じ込められる。そのアルフィス入りのゴミ箱にアンダインは語りかける。

『あたしも……お前をすごいと、思ってる気がする。だが気付いてほしいんだ……』

じつと、ヒーローに相応なキリツとした顔でアンダインはゴミ箱を見つめて中のアルフィスに語りかける。

『お前が今言ったことのほとんどあたしにはどうでもいい。お前が子供のアニメを見てようが歴史書を読んでようが知ったことではない』

そこで、ニヤリと、アンダインは不敵に笑ってみせる。

『あたしにしちやあ、その手の物はゼーんぶおたくつぽいガラクタだ！』

おう漫画とかアニメをバカにすんなよ。心に響く名言とかあるしネタって結構汎用性高いんだからな。

『あたしが好きなのはお前の情熱だ！ 分析的思考だ!! 対象が何であろうと！ お前はそれに情熱を注ぐ!! 100パーセント!! 全力で!!』

思わず否を唱えかけたが、アンダインのターンであることを考慮し黙る。自分が惚れているのは科学者特有の分析思考だと、アンダインは声高々に叫ぶ。

『……だから、あたしに嘘を吐かなくてもいいんだ。もう誰にも嘘を吐かなくてもいいようにしてやりたいんだ』

そこで、アンダインはアルフィスに提案する。

『アルフィス……お前が自分のことを好きになる手伝いをしたい！　どんな訓練が必要かあたしにはわかるからな！』

アンダインがそう言うと、ガタガタとゴミ箱が震え、足と尻尾が生える。それにぎよつとしていると、ゴミ箱の蓋が少し開き、目が見えた。いやまて、どうやってその足と尻尾の穴を開けた。出てきた方が早いでしょうに。

『アンダイン……あなた……あ、あなたが特訓してくれるの……？！』

そのシニールな格好のまま、アルフィスはうっとりとした声で言う。

『ププツ、え？　あたしが？』

アルフィスの問いに、アンダインはまさか、というように首を振る。

その瞬間。

すすすすつ、と、

ゴミ山の間から奇っ怪なバトルボデイを着たパピルスが出てきた。

『いや、パピルスの奴にやらせるさ』

「……………君何時からそこにいたん……………」

私の困惑を余所に、パピルスはゴミ山の中から文字通り飛び出してきた。そして、体を保って見事に着地する。スベック変な所で高すぎい。

『さあ骨震いするぞ!!! 100週ジョギングしながら、自分の良さを声高々に叫ぶんだ!!!』

『いいか? 今からタイムを計るからな!』

『あ、アンダイン……………』

「聞けよ脳筋ども。つか死ぬだろ突然それやったら」

三人の世界に入ってしまったらしく、私の言葉は無視される。急な運動は控えた方がいいと思うんですけど。

『私、がんばる……………!!!』

「正気かアルフィス、戻ってこい」

「よし! それじゃ始めるぞ!!」

二人の熱気に当てられたのか、アルフィスがゲーム通りにそう言った。一応ツツコミ

を入れつつ、様子を伺う。

ゲーム通りゴミ箱に入ったまま、パピルスに急かされて走っていった。そして、二人の影が見えなくなったところで、突如アンダインの様子が急変する。

『嘘だろおおおお!!!』

「うわうるさつ」

アンダインの叫び声に思わず耳を塞ぐ。

『冗談だよな、そうだよな!!』

アンダインは此方に走りより、私の肩を強く掴んでガクガクと揺らしてくる。

『あのアニメ……あのコミック……あれはまだ本当、だよな!? アニメは現実だよな?!?!』

「痛い痛い痛い痛い!! 揺らすな、離せ!!」

「あ、すまん」

ギリギリとかなりの力で肩を掴んで揺らしてくるアンダインにストップをかけ、離してもらおう。

「で、どうなんだ?!?」

縋るように私達を見てくるアンダインに、二人して顔を合わせる。どうしよう、と目線で伝えてくるフリスクに、構わん、やれ。という意味を込めて頷き、促すジェスチャーする。フリスクはそれを見てジト目で私を見てから溜め息を吐き、アンダインに向き直

り、首を横に振った。

『嘘だ………嘘だッ!! 心が砕けていくのを感じるッ!!』

「………非常に残念なことですが………アニメは………現実ではありません………」

膝から崩れ落ちて項垂れるアンダインに追い討ちを入れておく。

………まあ、『二次元だった筈の世界』にいる私が言えたことじゃないけどね。というかこんなことでハートブレイクすんなや。

『………いや、あたしは生き抜ける………強くあらねば。アルフィスの為に』

シヨックを乗り越えたのか、アンダインは沈鬱な面持ちで立ち上がる。格好いい筈なのに笑いしか浮かんでこない。

『ありがとう、人間。真実を教えてくれて。頑張つてこの世界を生きていくさ………』

「ぐ、い、いえいえ………がんば、ふっ」

そのままの顔でお礼を言われ、吹き出しそうになる。何とか堪える。ギャグ補正つてやばい。

『またあとでな!』

「おう、じゃな………」

そう言つてアンダインは二人を追いかけていく。その背中が見えなくなると、周りに色が戻ってきた。

「……………なんか振り回されるだけ振り回されたな」

「主にぼくがね」

「ごめんて」

フリスクに声をかけると、棘のある言い方で返される。

「……………いいよ、別に。気にしてないもーん」

「ごめんってば!」

明らかに不機嫌そうなぶすくれた表情で道に戻っていくフリスクの後を追う。やべえ、やり過ぎた。

フリスクに謝りながらゴミ捨て場の中を進んでいく。すると、出口の坂に差し掛かった所で、

プルルル……………プルルル……………

携帯の着信音が鳴った。

「?」 一体誰から……………」

立ち止まったフリスクが、携帯を取り出して電話に出る。それを見て、私の顔が引き締まるのを感じた。

「……………」

携帯を耳に宛て、フリスクは電話を聞く。そして、少し目を丸くした。少しするとフ

リスクは電話を切り、しまう。

「……誰から？」

「パピルス。なんか、研究所に行った方がいって」

「……………そう」

……………遂にか。

Ending
終わりへと着実に進み出している事を再確認し、気を引き締める。

「……………助言通り、研究所に行くの？」

「うん、そうだね。そうする」

「……………そっか。じゃあ、行こうか」

頷いたフリスクの手を繋いで引き、陸へとあがる。

「……………お姉ちゃん……………」

手を引かれているフリスクから、疑問を抱いたような声が聞こえたが、聞こえないフリをした。

4. 『知る権利』

【Lily】

行きのように無言で道を辿り、ホットランドまで戻ってくる。そのまま進み、研究所の前にまできた。

「…………お姉ちゃん、さっきからどうしたの？ 怖い顔してる……」

思わず立ち止まって研究所を見ていると、フリスクにそう言われた。

「…………え、そう？」

「うん」

「ありや」

引いていた手を離し、顔に手を宛てる。鏡がないから自分が今どんな顔をしているのかが分からない。だが、確かに怖いと言われるだけの顔をしているんだろうなどは分かる。フリスクの前でするつもりは無かったんだけどな。

「…………ごめん、なんかちよつと嫌な予感がしてね。顔が険しくなっちゃってた」

「そうなの？」

苦しい嘘をフリスクに言えば、フリスクは気遣うように私を見上げる。十中八九、そ

れだけではないと気付いてはいるんだろうけど。ごめん、これだけは言えない。

「うん。それより、無理矢理引つ張つちやっつてごめんね。痛くなかった？」

「ううん、大丈夫。そこまで無理矢理じゃなかったから」

話を逸らし、屈んで目を合わせながら引つ張つてしまった手を擦りながら言うと、緩慢な動きでフリスクは首を横に振った。

「そっか、ならいいんだけど。……………それじゃあ、入るか」

「うん」

今度は出来るだけ優しく手を繋ぎ直し、二人で進んでいく。扉の前に立つと、先程——メタトンと戦う前と同じく、自動ドアが横に開いた。

「……………アルフィス？ 入るぞー」

「お邪魔しまーす……………」

此処に居ないとはわかっているが、一応声をかけておく。私に倣つてか、フリスクも声をかける。だが返事は無く、しんと静まり返った研究所は、明かりが灯つていても少し不気味だった。

「前に行かなかつた上の所に居るのかな…………？」

「どうだろう。取り敢えず入るか」

そのまま入り込むと、アルフィスが『シャワーを浴びてくる』と言って駆け込んだ部

屋の前に、一枚の紙が落ちていることに気付く。

「紙？」

「というか、手紙みたいだけど……」

二人でそれに近付き、フリスクがそれを拾い上げる。それを見ながら、ぽつかりと口を開けている部屋のドアの中をちらつと見てみる。遠くに、ホットランドで乗れるエレベーターの様な内装が見えた。

……あれが、真研究所に繋がる……

それを確認してから、拾った手紙を、フリスクが読んでいる横から覗き見る。走り書きなのかそれともやはり勇気を振り絞って書いたからか、少し字が汚い。

『やあ。ずっと助けてきてくれてありがとう。皆……そしてあなたもいつも私を助けてくれる。』

だけど……これって本当に言いづらいんだけど……あなた達には、とてもじゃないけど私の問題は解決できないわ。

私のもっともつといい自分になりたい。これ以上恐れることなんてしたくない。そしてあの事についても、私は自分の過ちと見つめ合わなきやいけない。

私は今からそれに決着をつけます。

全てをはっきりさせたい。

これは他でもない私の問題。

だけでも直接私から伝える機会がなかったら……そしてあなたが「すべての真相」を知りたいなら。この手紙の北にあるドアの中に入ってください。

あなたには真相を知る権利があると思うから」

全てを読みきつたらしいフリスクは顔を上げ、困惑した表情を見せる。

「……ねえお姉ちゃん、これ、い、遺書じゃないよね……？」

「違うと思うよフリスク。不穏な気持ちになったのは分かったから落ち着け」

「だ、だよね……」

そしてアルフィスを心配するあまりか、手紙を握り締めたままとんでもないことを言い出したフリスクの頭を撫でる。

「……この『北にあるドア』って、あの開いてるドアでいいんだよね……？ でも、彼

処って確か、シャワールームだったんじゃない？」

落ちて着いたらしく、少ししてからフリスクはドアを見ながらそう言った。

「……中で道が別れてるのか、それかそれも嘘だったんじゃない」

「そっか……」

私の素っ気ないであろう答えに、フリスクは少し悲しそうな顔をする。

「……それで、どうするよ。入る？」

話を本題に戻した私の問いに、フリスクは考えるような素振りを見せ、そして、頷いた。

「入る。『知る権利がある』って言うなら、それを知っておくべきだと思うから」

「……そう。分かった」

フリスクの真面目な顔を見て、私も覚悟を決め直す。

……いよいよ研究所だ。ゲーム通りに進むとはいえ、何が起こるかは分からない。もしかしたらバタフライエフェクトで私の知らないことが起きるかもしれない。守りきらなければ。

「……それじゃあ、行こうか」

「……うん」

多少緊張しながら、フリスクと顔を見合わせ、頷き合う。そして、この中へと足を踏み入れる。

中は暗くてよく見えないが、真っ直ぐ進んだ先が明るくなっていて、先程見えたエレベーターの柄が見える。

「……エレベーター？」

先を進むフリスクが不思議そうに呟き、駆けていく。そして、エレベーターの中に乗り込み、キョロキョロと中を見渡した。

「お姉ちゃん、これ、エレベーターみたい」

「ああ、やつぱりそうなのか」

フリスクにそう言われながら遅れて中に乗り込んで見渡すと、確かにエレベーターだった。……中のボタンが開閉以外に下降と上昇しかないのが少し気になる。普通は階層表示みたいなのがある筈なのだ。

「しめていい?」

「ああ、どうぞ」

訊ねてきたフリスクにオツケーを返すと、フリスクは閉じるボタンを押し、下降ボタンを押した。

ガタン

音を少し立てて、エレベーターがゆっくりと下降を始める。そして、降り始めて少ししたところで、

ビーツ ビーツ

「う、わ……!?!」

突如としてエレベーター内に警報が響き、点いていた光が白から非常用なのだろう赤色に切り変わる。

《警告!・警告!・動力低下!・巻き上げ機停止!・高度低下!》

「なっ!? フリスク!!」

「きゃっ」

そしてエレベーターのスピーカー部分から流れ出す警告に、咄嗟にfrisスクを抱き締めて床に伏せた。特に衝撃は来ず、突如としてブツリと光が全て消え、視界が真っ暗闇に閉ざされる。

シュツ

暫くそのままの体勢でいると、不意にエレベーターの扉が開き、薄い光が入ってくる。

「……………もう大丈夫そうだ。離すぞ」

「うん。……………ありがとう」

「いやいや」

frisスクを抱き起こして立ち上がり、その光を頼りにエレベーター内を見してみる。先程光っていた筈の機能ボタンに触れてみるが、何も起こらない。

「……………ダメだ、反応しない。電力が切れてるみたいだ」

「電力低下って、さっきの警報言ってたもんね…………」

立ち上がったfrisスクにそう告げると、冷静な一言が返ってくる。……………案外冷静だ

な。

「動かすにはブレーカーとかこの電力を賄ってる装置を見つけ出して、それで電源を入れ直さないとかな、これは」

「そうだよね……でも……」

そこで、フリスクがエレベーターの外を覗く。

「……………結構、不気味……」

そう言つて戻つてきたフリスクに続いてエレベーターの外に顔を出すと、非常用か、それとももとからこういう明かりなのか、薄暗い光が外を照らし出している。中途半端な明るさが、確かに不気味な感じを演出していた。

「……………確かに、ちよつと怖いけど。でもここで立ち止まつてたつて仕方無いじゃない？ここにアルフィスが居て、電源を入れてくれるとも限らないし。下手したらここに閉じ込められたままだよ？それに、……真実を、知りたかつたんじゃないの？逆にチャンスだと思っただけだね」

「……………そう、だね」

敵は見当たらないことを確認してから戻り、やはり少し怖いからか、あまり乗り気でない様子で顔を伏せるフリスクの頭を撫で、言う。すると、フリスクは少ししてから頷いた。

「そうだよね、ぼくは真実を知りに来たんだ。こんなところで立ち止まってちやダメだよね」

そして自分の意思を口に出し、顔を上げる。その目には、もう恐怖は宿っていないかった。

「……………もう、大丈夫？」

「うん。もう平気。行こう」

そう言って頷いたフリスクは私の手を取り、この優しい地下世界の陰へと足を踏み入れた。

5. TrueLaboratory探索①

〔Lily〕

エレベーターから降りると、埃っぽい臭いが鼻につく。あまり清掃が行き届いていないらしいと見当をつけ、もう一度周りを見渡す。敵の影はない。とは言っても、此処の敵は特殊過ぎるから気は抜けないけど。

「……………暗いね……………」

「そうだね。……………そうだ、懐中電灯使うか」

懐中電灯の存在を思い出し、リュックを降ろして漁る。暫くしてから硬い感触を掴み、引つ張り上げると、懐中電灯が出てきた。見た感じ壊れているところは見当たらない。

「あつたあつた」

取り出した懐中電灯を壁に向けてボタンを押し、点けたり消したりを繰り返す。

「電池切れとかはなさそうだ。……………行ける?」

「うん」

頷いたフリスクの手を離さないようにしっかりと握って足下を照らし、警戒を最大限に

引き上げながら、前を進んでいく。敵——アマルガメイツに襲われても直ぐに対処出来るようにだ。

——アマルガメイツは、この研究所だけに現れるモンスターだ。確か英語表記は『Amalgamates』。『混ぜ合わせる、合併させる』みたいな意味合いだった筈。特徴として、体を変形させる事が出来る。正体は死にかけのモンスター達に抽出した決意を注入した結果、溶けて混ざり合ってしまった所謂複合モンスター。『溶けた』、という点から考えると、流動体に近いのだろう。変形する事が出来るのはそのためだと思われる。ただし形がしっかりすると混ざる前の元のモンスターの特徴が混ざったような形になる為、形を整える際には何らかの法則性、または優先順位があるのだろうと私は思う。彼らに物理攻撃は効かず、エンカウトした場合は『ACT』で正しい選択肢を選んで『MERCY』するしかない。

自分が知っている情報を整理しながら薄暗い廊下を進んでいると、
ピッ

「?」

唐突に、横で明かりが点いた。それに驚いたのか、フリスクは素早い動きで横を見て、安堵したような顔をする。

「……………なんだ、機械か……………」

「大丈夫？」

「うん、この機械が反応しただけだったみたい」

「機械？」

ほっと息を吐いたフリスクの横に立ち、光っている壁のパネルを見る。

「……………『報告書1』……………」

電子パネルには、ゲーム通りの見出しが書いてあった。

「ほうこくしよ……………報告書って読むの？」

「うん。報告書って言うのは、誰かに実験の結果を伝える為のもののこと。……………ここでやってた研究のだと思うよ」

「……………アルフィスの言う『過ち』のことかな」

「多分」

フリスクの問いに頷くと、フリスクの顔が少し怯えた表情が引き締まる。

「……………読む？」

「うん。ぼくは真実を知りに来たんだから」

一応訊ねると、フリスクは真剣な顔で頷き、パネルの前に立った。私もフリスクの後ろからパネルを覗き込む。

『報告書1』

これが……王が私に望んだこと。皆を自由にする力。

ソウルの力を解放して見せなければ。』

……報告書……というよりも日記に近い内容を見て、これは博士の記述と考えられていたんだったか、と思う。そう言えばどうなのか聞き忘れたな。聞けば良かった

自分のミスにうつかりしてたなと思いつながら、次のパネルの前に立つ。すると、私達に反応してまたパネルが光り、内容を提示する。

『報告書2』

結界はソウルの力で封印されている……

残念ながら、この力を人工的に構成することは不可能だ。

ソウルの力は生命体からのみ抽出することが出来る。

故に、この力を得る為には、モンスターに宿っている……ソウルを利用しなければならぬ。』

「……これ……モンスターの体やソウルを使って実験しようとしてたつてこと……？」

報告書を読んだフリスクがそう呟く。

「……内容から察するに、そういうことらしいね」

「そんな……」

「……………この実験が正しいのかは分からないけど、でもそれでもこの報告書の人は解明しようと思死だっただんだと思う」

「……………そうだね」

重い空気を感じながら、次のパネルに進む。

『報告書3』

しかし生きているモンスターからソウルを抽出するには大きな力が必要だ……

現実的な手段とは言えない、何よりソウルの宿主の肉体は直ぐに崩壊してしまうだろう。

そして、残留し易い人間のソウルと異なり……ほとんどのモンスターのソウルは死を迎えると直ちに消滅してしまう。

モンスターのソウルを留めることができれば……』

「……………人間のソウルって、残留しやすいんだ」

「……………あー、身体と魂の結び付きの強さがモンスターより強かったりするんじゃないかな」

「そういうことかな……」

呟くフリスクに、そう返す。私もそういうオカルト系は詳しくないからよくは分からないけどね。

次のパネルの前に進む。ピツという作動音と共に提示された内容に、フリスクは目を丸くした。

「え……『報告書5』……？ 4は？」

「さあ……？ 取り敢えず読んでみよう」

『報告書5』

遂にやった。

設計図を元に、人間のソウルから「それ」の抽出に成功した。

これこそが、死後も残留する人間のソウルの力の源に違いない。

生きようとする意思……運命に抗おうとする心。

この力を、〈決意〉と呼ぼう。』

一瞬、最後の部分が黄色く光った気がした。目を瞬くと、その文字は他の文字と変わらない文字色になっていた。

「運命に、抗おうとする心……？」

フリスクが、それを読んで首を傾げる。

「この地下世界に於ける『決意』の定義は、そうらしいね」

「……ぼく達に見えてるあの光は何だろう？ あれに触ると、何となく覚悟が決まる

んだけど……それも、『決意する』って言うよね？ あれも、『決意』なのかな……」

「……………どうだろうね」

あの『光』について気付き始めたフリスクに、誤魔化しておく。

……………あれは、決意の光なんて生易しいモノなんかじゃないと、私は思うけどね。

「……………まあ、いいや。あとは見えないけど、奥に行けばあるかな？」

「多分あるんじゃないかな」

「そっか」

それだけ会話して、また道なりに進んでいく。角を曲がると、少し広い部屋に出る。光で部屋を照らしながらざっと索敵を行い、何も居ないことを確認してから部屋に入る。

「……………よし、何もいない」

「………は……………？ あ、セーブ……………」

不意に、フリスクの手が離れた。そう言えばこの部屋にはセーブがあったことを思い出し、振り返って一応確認する。振り返った先には光に触れるフリスクがいて、大丈夫そうだと思いついて足下を照らしていると、何か落ちていっているのに気付く。落ちていたそれを拾い上げて読んでみる。

『エレベーター……………止まった……………中央のドアに……………』

結構古い物なのか、文字が所々掠れている。ゲームでもこのメモ落ちてたな、と思い

ながら、メモを元の位置に戻し、フリスクの方を見ると、セーブを終えたのかももう既に移動し、機械の前に立っていた。

「……………これ、自販機かな。何か色々並んでるんだけど」

「多分そうだと思うけどね。買ってみる？」

「うん」

頷いたフリスクはポケットを探り、取り出したコインを穴に入れる。すると、ガタン、という音がして、少ししてからパサリという何かが落ちる音がする。フリスクが取り出し口の所を手を突っ込んで中の物を取り出すと、見覚えのある袋を出てきた。

「……………え、クリस्प？」

「いや、ポペトチस्पスだって」

「紛らわしいな」

思わずツツコミを入れてから、パネルの前に立つ。ピツという音を立てて内容が表示される。

「『電力室』だって。ここにすればエレベーターが動かせるようになるみたいだね」

「(ハハ)が？」

私の言葉にフリスクは扉を見上げる。

「……………開かないみたいだけど」

「そうだね。どうかして入る手段を見つけないと」

そう言うと、フリスクは私を通り越して奥の方へと行ってしまおう。そして、少しして帰って来た。

「あつちも開いてなかったよ」

「ありや、それじゃこつちの道に行くしかないな。……行けるか?」

「うん」

手を握ってきたフリスクの手をしっかりと握り返し、先を照らしながらまた進んでいく。途中の廊下で、また先程のパネルを見つける。

「あ、パネルだ」

「またあつたの?」

「うん」

二人でパネルの前に立ち、表示された内容に目を通す。

『報告書6

アズゴア王は国民に「崩れ落ちてしまった」モンスターたちの提供を呼びかけた。彼らの遺体は今日到着した。

まだ昏睡状態ではあるのだが……すぐにも塵と化してしまうだろう。

しかしその前に彼らに〈決意〉の力を注入すればどうなるのだろうか?

もしも彼らのソウルがその死後も留まることができたなら……

解放の日は我々が思っているよりずっと早くにやってくることだろう。」

「……………さっきの人体実験の話、マジだったみたいだね」

「……………」

黙って画面を見つめるフリスクの手を引き、前に進む。少しだけ、やり方が賢いなど思ってしまった。これならば成功すれば希望ができるし、失敗してもそのまま塵に還るだけだから、何も失う必要がない。……………本当に、塵になるだけだったなら、だけど。

少し歩くと、部屋が見えてきた。中を隈無く照らし、何もいないことを確かめてから入る。流し台が奥に見え、更に警戒を強める。

「パネルあったよ。……………大丈夫？　読める？」

「……………読む」

人体実験が行われていたことにショックを受けたのか、少しばかり顔が青いフリスクに声をかける。私の問いに、フリスクは確かに頷く。

「……………分かった、無理しないでね。気分が悪くなったら中断すること」

「うん」

フリスクにそう約束させてから、二人でパネルの前に立ち、読む。

『報告書9』

あまりうまくいっていない。

遺体はどれも塵にならず、ソウルの回収が出来ない。

家族には葬儀の為に塵は返すと伝えてある。

皆は何が起こっているのかと訝しみ始めているようだ。

どうしよう?』

「……………あれ……………」

報告書の続きを読んで、フリスクが首を傾げる。

「どうしたよ。またナンバーが飛んでることが気になった?」

「いや、それもそうだけど……………」

パネルをじつと見て、フリスクはまた首を傾げる。

「……………これ、本当にさっきの報告書の人を書いたのかな……………?　なんか、違うような気が

するんだけど……………文最初の所が小文字になってるし」

「あ、ああ、そうだね。……………じゃあ、ここで研究の第一任者が変わったのかも」

「そうかも……………」

……………そう言われても、私には全部日本語に見えてるんだけどね。

首を傾げるフリスクに内心苦笑しておく。

「じゃあ、アルフィスが研究を始める前に、誰か前の人がいたのかな」

「多分ね」

「……………そっか……………」

フリスクはパネルから目線を下にしてからまた前を向いた。

「もう行く?」

「うん」

パネルの前から離れ、部屋の探索を続ける。

「これ、変なベッドだね」

「……………そうだね。あんまり近寄らない方がいいぞ」

「へ? うん……………」

手術台を見て興味を示して立ち止まったフリスクの手を固く握り、そう言うておく。

彼処には確実にモンスターが万が一でも抵抗出来ないように縛り付けられていたのだらうと私は思う。フリスクにそれを悟らせたらまた正気が削れていくだらう。フリスクに発狂して欲しくないからな。

「……………あとは流し台と、次の部屋だな。先にどっち行く?」

「……………次の部屋から回ってみようよ」

「オツケー」

……………先にそっちを選んだか。

フリスクの選択に従い、先に部屋の方に入ってみる。中はそこまでの広さは無く、何かのスイッチがあった。

「何だろうこれ……起動してないみたいだけど」

「さあね。何かの制御版じゃない？」

「うーん、みたい。……スロットがあるけどここに何か嵌めるのかな」

繋いでいた私の手をほどき、フリスクはスイッチに近寄った。その隙にまた落ちていたメモを拾い、読む。

『流し……落……た』

「え？……お姉ちゃん、何それ」

「分かんない。何かのメモっぽいんだけど、何にせよ掠れてるからなあ」

「貸して」

「いいよ」

読めるところの内容を読み上げると、フリスクが振り返って近付いてくる。伸びてきた手にメモを渡して読めるようにメモを照らすと、フリスクは少し考え出す。

「うーん……落とした？ 流しは流し台のこと？ さつき見かけたけど、彼処に何か落

としたってことかな？」

「そうじゃないかな」

私が考えるフリスクに頷くと、フリスクはまた首を傾げる。

「何を落としたんだろ……………」

「……………調べる？」

「……………うん、一応」

私がフリスクに問えば、フリスクは頷く。

「そう。じゃあ戻ろうか」

「うん」

メモをそつと床に戻したフリスクの手を握り、また照らしながら先程の部屋に戻る。そして右に曲がって、三つの流し台の前に立つ。

「あー、どれだろ……………」

「……………取り敢えず全部流してみるか。排水溝は詰まってないみたいだし」

「あ、ちよつと！」

悩み出すフリスクの手を離し、フリスクが近付かないうちにさっさと蛇口を捻つていく。

一つ目。

普通に水が流れる。

二つ目。

普通に水が流れる。

そして、三つ目の流しの蛇口を捻ると。

どろり。

白い、質量を持った、水ではない何かの流れ出てくる。

「……………ひっ」

後ろで見ていたらしいフリスクから、恐ろしいモノを見てしまったときの小さな悲鳴があがる。

その間にも、蛇口から白いどろどろは流れ続け、そのうち、流し台から溢れる程出てきた。

そして、その白いものが。

段々と顔をつくつて。

にこりと、わらう。

——くすくす、くすくす

——ねえ

い

っ

し

よ

に

あ

そ

ぼ

う

？

「……………ッ
!!!!」

笑いかけられた瞬間、そう語りかけられているような幻覚が見え、言い様の無い恐怖が背筋を這う。

ひゅっ、と口から息だけが零れ出る。

ソイツから、目を離せなくなる。

そして、その瞬間。

白いものが肥大化した。

「お姉ちゃんッ!!!」

フリスクの声ではっと我に返り、私を呑み込もうと崩れ落ちてくるソイツらから飛び退き、事なきを得る。

世界が、白黒に切り替わった。

6. Amalgamates : 

〔Lily〕

*Memoryhead が近付いてきた draw near!

ギリギリの所で取り込まれるのを回避し、着地する。

「……………なに、あれ……………」

「わかんね、取り敢えず何とかしないと……………」

びちやりという音を立てながら流し台から流れ出て、白いどろどろは三つに分裂する。そして、頭だけの様な形を形作る。頭、そして流し台から出てくるという事を加味して考えると、コイツらは間違いない。メモリーヘッドだ。

……………メモリーヘッドは、この研究所で一番最初にエンカウントすることになるアマルガマイツだ。三体に分裂し、襲ってくる。メモリーは記憶、ヘッドは頭を意味しているということから考えると、脳では記憶を保存する器官に当たる海馬などのことを指しているのだろうか。そう言えば、コイツらは研究所に集められたモンスターの嫌な記憶の集合体、というような解説を前世で見た気がする。嫌な記憶を保持している頭だからメモリーヘッドというのか……………？

……いや、一旦やめよう。答えが見つからなさそうだ。

「取り敢えず今まで通り『ACT』でもしてみたら」

「う、うん……」

思考を切り上げて、選択を促すと、フリスクは怖々と『ACT』に触れる。

*No^{デー} data^タ avail^解able^{析不}能.

ゲーム通りのアナウンスが流れ、彼方にターンが回る。

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■』

複数人の声が混ざりあつたような訳の分からない叫びをあげながら、ソイツらはずりずりりと此方に近寄ってくる。攻撃を仕掛けてくると悟り、フリスクの所まで下がって、抱えあげる。その瞬間、びちゃりとソイツらは床に潰れ、幾つもの塊に別れて足下まで這ってくる。

—— ふふ ふふふふ ふふ

「!？」

聞こえる筈のない笑い声が聞こえた気がして思わず動揺するが、それも一旦切り捨て笑っているような顔で肥大化するソイツらの間を縫い、避ける。狭い部屋の中に響くび

ちやり、びちやりという音が耳にこびりつきそうだ。

*But nobody came.

「……………モンスター……………なんだ、よね？」

「……………それに、該当するんだらうね」

「でもつ、なんか、おかしいよ……………まるで……………」

——体の形が、無いみたい

相手のターンが終わり、また三体になったどろどろのソイツらを見て、フリスクはそう言った。

『体の形が無い』とは、中々的を射たことを言う。

……………フリスクの言う通り、コイツらアマルガメイツには体のはつきりした形、つまり輪郭が定まっていない。先程の考察の通り流動体に近い体ということもあるだろうが、一度崩れてしまった上に混ざりあってしまった体だ、本来ある筈のないパーツが入り込んで体を保つのが上手くないかなんだろう。こういうのはバズルと理論は殆ど同じだからな。メモリーヘッドに関しては知らんけど。

恐怖感からか、少し震えているフリスクの手が『ACT』に伸びる。ピツという音がした。

*AT—25 DF—25

『状態』をフリスクは選んだらしく、アナウンスが流れた。

「」

また意味の解らない言葉を吐き散らしながら、メモリーヘッドどもは分裂し、襲ってくる。出来るだけ最低限の動きで避け、取り込まれないように立ち回る。

*But nobody came.

暫くしてターンが回り、此方に戻ってくる。

「どうしよう、どうすれば……」

そう言いながら、フリスクは考え込み、少ししてから何かに気付いたようにポケットに手を宛てる。

「……？ どうした？」

「…………お姉ちゃん、何か聞こえない……？」

「え？」

フリスクの言葉に耳を澄ますと、

ふふふふふ

「!!？」

また、笑い声が聞こえた。

「やっぱり……！」

何か確信を得た様子でフリスクは『ACT』を押し、ポケットを漁る。そして、携帯を取り出した。

* You ^あ ^な ^た ^は ^携 ^帯 ^電 ^話 ^を ^取 ^り ^出 ^し ^た .
* You t a k e o u t y o u r C E L L P H O N E .

* You ^レ ^シ ^ー ^バ ^ー ^を ^通 ^し ^て ^何 ^か ^が ^聞 ^こ ^え ^る .
You c a n h e a r v o i c e t h r o u g h t h e r e c e i v e r
……！

フリスクが携帯を取り出した途端、先程から聞こえていた笑い声が鮮明なものになる。……：……：そうか、先程聞こえる筈のない笑い声って、『ACT』の選択肢でもある電話から聞こえてたのか……！

『『イツシヨに遊ボウヨ』』

「ひっ」

その声が聞こえた途端、一纏まりになっていたソイツらがバラけ、また笑顔を浮かべながら襲ってくる。携帯から聞こえる筈のない子供のような声が聞こえたことに怯えたフリスクが、声をあげる。私がここで悲鳴を上げてはいけないと強く思い、フリスクを抱える力をより一層強くして、メモリーヘッドの攻撃の中を縫っていく。その瞬間、

だった。

べちや

足に何かが

まわりつく 感触がする。

足をみれば、白いものが

—— ふふふ

笑顔を浮かべたソイツに戦慄が走り、足を振って振り払おうとする。

だが、ソイツは、より一層、私に巻き付いた

その瞬間。

咄嗟に足についたソイツらを壁に擦り付けて落とし、直ぐ様離脱する。

* But nobody came.

攻撃終わりだったらしく、アナウンスが流れ、メモリーヘッドどもはまた一纏まりになっっていく。

「ん、お姉ちゃん、お姉ちゃんッ!!」

そこで、フリスクに呼び掛けられているのに気付く。

「……………なあに?」

呼び掛けているフリスクの顔が泣きそうに潤んでいることに気付き、なるべく優しく返事をする。

「大丈夫!? 他の塊が寄ってきてるって言うてるのに、呼びかけても返事しなかったから、凄く心配だったんだよ!!」

どうやらずつと声をかけていてくれたらしいフリスクが泣きそうにそう言った。

「……………大丈夫。ちよつと予想外の攻撃受けて固まっちゃってたんだ。ごめん」

「攻撃……………? やっぱりあれ、攻撃だったの!?!」

「うん」

驚くフリスクに頷き、改めて目の前のメモリーヘッドどもを見据える。

「アイツらに纏わり付かれた途端、変なのが流れ込んできた。だからアイツらに触れちゃ、駄目だよ。いいね」

「……………うん、分かった」

涙を拭って頷くフリスクの頭を撫で、フリスクの選択を待つ。フリスクは『ACT』に触れ、そして目を丸くした。

「……………メモリー、ヘッド。それが、君たちの名前なんだね」

『イツシヨニ遊ボウヨ』

『イツシヨニナロウヨ』

『タノシイヨ』

フリスクが『ACT』の選択肢で表示された名前を呟くが、肝心のソイツらは、フリスクの言葉には答えない。

「……………ごめんね。やだよ」

そう言ってフリスクは、『ACT』を押した。

『アツソウカア』

『あのイーハトーヴオの透き通った風』

『ホントニ一緒ニナルノ』

それでも襲ってくるソイツらから、兎に角逃げ回る。このターンさえ逃げ切れれば、戦闘が終わる。逃げ切らなければ。

どろり　どろり　どろ

「……………ッ」

取り込もうと、一緒になろうと近寄ってくるソイツらの間を縫って、狭い中を走り抜ける。

また、あの断末魔を聞きたくない。

逃れられない『死』から逃れようとする、あの悲鳴を、聞きたくない。

その想いが、私の足を突き動かす動力源の一端を担う。

*Seems like it doesn't care anymore.

暫く避けていると、やっと、待ち望んでいたアナウンスが流れた。

フリスクが、『MERCY』に手を伸ばす。ピツという音を立てて、『MERCY』が押された。

*YOUあなたは勝利した WON!

*Youと earned得 OXPを and得 gold.

アナウンズが流れ、メモリーヘッド達は興味を無くしたように、また一纏まりに纏まって、何処かに消えていく。

その瞬間、世界が白黒から切り替わった。

「……………」

「……………お姉ちゃん、もう、降ろしてもらって大丈夫だよ」

暫く動けずに、その場に立ち尽くしていた。すると、フリスクに優しく声をかけられる。

「……………おう、ごめん」

フリスクを降ろし、歩こうとした途端、

「わ、わっ!?!」

「……………あれ」

体が、崩れ落ちた。

フリスクが咄嗟に支えてくれて、倒れずにすむ。

「……………ごめん、フリスク」

「…………大丈夫だけど、お姉ちゃん…………大丈夫?」

座り込んだまま謝罪すると、フリスクに顔を覗き込まれ、不思議に思う。

「……………何が？」

思わず聞き返せば、フリスクは目を丸くした。

「気付いてないの？ 震えてるよ……………？」

フリスクの言葉に、今度は私が目を丸くする。

……………震えてる？ 私？

まさかと思って手を見れば、確かにカタカタと小刻みに揺れていた。

「……………よっぽど、怖かったんだね」

……………怖い？

怖い、怖い、恐い……………

フリスクの言葉が、頭の中で反芻される。

……そうか。怖かったのか。

そして、震えの原因を理解した。

「……そう、だね。怖かった」

あの白いものが纏わり付いた時、流れ込んできた断末魔と助けを求める声。

『死』から逃れようとするあの声で、『死への恐怖感』を思い出してしまった。

体が動かなくなつて、感覚が消えて。

《自分》が『自分』ではなくなつていくあの恐怖を、思い出してしまった。

「……大丈夫、大丈夫。もう、こわくないよ」

それを見ていたフリスクが、正面から私を抱き締めて、落ち着かせるように背中を撫でてくれた。

その暖かさが、今は、酷く心苦しい。

「……………ごめん、ごめんね……………」

フリスクの腰に手を回し、抱き締める。

……………何よりも。私は、『彼方側の人間』だった時に。

フリスクに、こんな下手すれば人格が掻き消えてしまいそうな恐怖感を何度も味わわせてしまっていたことを、後悔していた。

「……………ごめんなさい……………」

向き合って整理を付けていたつもりでいた後悔と、思い出した恐怖が混ぜこぜになっ

て、立てなくなってしまう。

「……………ごめんなさい、暫く、こうさせて……………」

「……………うん、いいよ」

そして、今回も、私はフリスクの優しさに甘えてしまうのだ。

7. True Laboratory 探索② *

〔Lily〕

暫くフリスクと抱き合ってから、こんなことしてる場合じゃないと自分を奮い立たせる。収まってきた震えを止め、這い上がる恐怖と重い後悔を今は関係ないと振り払う。

「……………ありがとうとフリスク、もう大丈夫だよ」

「ん、そう……………？」

「うん、本当にもう大丈夫」

フリスクの体をそつと離し、立ち上がる。心配そうに私を見上げるフリスクに手を差し伸べ、手を掴んでくれた彼女を立ち上がらせる。

「ごめんね、取り乱しちゃった」

「ううん、いいんだよ。お姉ちゃん無理し過ぎるから、頼ってくれて嬉しかった」

「あはは……………」

小さく笑ってそう言ってくれたフリスクに苦笑いを返しながら、先程の現象について考察する。

……………さっきのはメモリーヘッドの持つ嫌な記憶が流し込まれた事によって起きた

現象なのだろう。本来『嫌な記憶』というものが先程の戦闘で登場するのは『ACT』でアイテム欄を調べた時だ。その際にメモリーヘッド達に『自身の一部』を忍ばされたみたいアナウンスが流れた筈。そしてその後アイテム欄の一番最後に『嫌な記憶』というものが追加される。ゲームだった際に使う分にはHPが1減るかHPが3以下だった場合は回復するだけであまり影響は無かったと思う。そして彼らの攻撃はそこまでダメージは無かったと思つたが、先程の現象から察するに現実ではそうではなかつたらしい。現実でのこの現象は、メモリーヘッドが持つていた『嫌な記憶』に強制的に頭に流し込むようなもの。また連鎖的に自身の『嫌な記憶』を思い出させるといふ攻撃も含んでいる可能性もある。しかし、これはメモリーヘッドに限つての攻撃である可能性は高い。彼らは確か嫌な記憶の塊だった筈だ、だからこそこんな攻撃が出来るのだろう。他のアマルガメイツ達は混ざりあつてできたモンスターだ。彼らに嫌な記憶が無いとは言い切れないが、メモリーヘッド達のように他人に影響を及ぼす程の力はないだろう。だが、用心はするようにしなくては。フリスクがあんな攻撃を受けたりしたら本当に人格が消し飛んでしまう。あれは私だから人格が消し飛ばずにすんだんだ。それだけは、阻止しなきゃ。

「お姉ちゃん、これ、さっきの流し台にあつただけど……」

「ん？ ……………鍵？」

私が先程の戦鬪の考察を重ねていると、流し台を調べてきたらしいフリスクがパーカーの裾を引つ張つて、私に何かを見せてくれる。フリスクが回収してくれた落としてしまった懐中電灯に照らされて鈍く光る赤い金属製の鍵を少しの間眺めて、ピンとくる。

「……これ、さっきの装置の鍵じゃない？　ほら、メモに書いてあったけど流しになんか落としたみたいだったし」

「ぼくもそう思う」

そう言つてフリスクは握つていた携帯のキーチェーンに鍵を取り付ける。

「あの装置に嵌めてくるから、ちよつと待つてて」

「了解」

短くそう会話をして、フリスクは懐中電灯で足元を照らしながら部屋へと入つていく。暫くぼーつとフリスクが入つていった部屋の入り口を眺めていると、フリスクが戻つてくる。

「ただいま、やつぱりそうだったよ」

「おかえり、やつぱりか。じゃあ彼処に落ちてたメモはヒントかな」

「みたいだね。………何であんな所にあるんだろ………？」

さあね、と答える代わりに首を少し傾げてから、フリスクが持っている懐中電灯に手

を伸ばし、取る。

「あ、ちよつと」

「私が持つよ」

私の手から懐中電灯を取り返そうと手を伸ばすフリスクにそう言えば、フリスクは此方を氣遣うような顔になる。

「……………そう？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。任せて」

「……………じゃあ、お願い」

どうやら先程の件を氣にしているらしいフリスクに頷き、手を繋ぐ。

「……………それじゃあ、行くところも見当たらないし、一回さっきの部屋に戻りますか。何か変わってるかもしれないし」

「そうだね。あ、戻ったらセーブしてもいいかな」

「どうぞ」

そんなことを喋ってから懐中電灯で足元を照らしながら戻っていく。途中の廊下を経由して動力室前に戻ってくると、フリスクは宣言通り決意の光に真っ先に駆け寄った。

「……………あ、点いてる」

その間に辺りに変わった所がないか見ていると、動力室の扉の左上側に赤い光がぼんやりと灯っていた。電源が供給されて、ロックが解除されたのだろう。

……そう言えば、このロックの仕組みってどうなってるんだろう。動力室の主電源が落ちた時の予備電源があちこちにある装置なのだろうか。よく解らない仕掛けだな、不便じゃないのか？ いやまあ、ゲームを面白くするための仕掛けと言われてしまえばおしまいなんだけど。

「お姉ちゃん、終わったよ。……そこ、開く？」

「……いや、開かないみたいだ。他になんか変わったところは……」

セーブを終えて戻ってきたフリスクの問いに答える為に扉を軽く押ししたりしてみるのが、びくともしない。知ってた。

探すフリをしながら奥の先程フリスクが見てくれた扉を見てみると、そちらにも上の部分に赤い光がぼんやりと灯っていた。

「あ、あった。あっちの扉にもランプが灯ってるよ」

「え、本当？」

二人で扉の前に近付いていくと、固く閉ざされていた筈の扉がシュツという音を立てて横に開く。

「あ、開いた。……どうやらさっきの装置と同じ色のランプが点いてる所がまた動き

出してるらしいね。ってことは、動力室を開けるにはあと三つあの装置を見つけて動かさないといけないわけだ」

「そうみたいだね……………」

フリスクが自分の行動に違和感を持たないようにそう言えば、フリスクは少し不安そうな顔で頷いた。

「……………また、さつきみたいな事が起こらなければいいんだけど」

おっとフリスク、それはフラグだぞ。

フリスクに癒されてふざける余裕が出てきたのか、反射的にネタっぽいことを思いつつ、苦笑を浮かべておく。

「まあ、もし起きたらまた『MERCY』すればいい話さ。そうでしょ?」

「……………そうだね。ぼくのやることは変わらないね」

私の言葉に頷いたフリスクに頷き返し、手をもう一度握り直す。

「じゃあ、行くか」

「うん」

手を繋ぎ、扉の中を進んでいく。中は廊下になっていて、角を右に曲がると、またパネルが見えた。

「あ、パネル発見。読むでしょ?」

「勿論」

二人でパネルの前に立ち、内容に目を通す。報告書のナンバーはまた飛んで、12番だった。

『報告書12』

何も起こらない。どうすればいいんだろう。

とにかく片っ端から〈決意〉を注入してみよう。

うまくいけばいいのだけれど。』

「……………片っ端からって、もうちよつと考えてから行動しないと不味いと思うんだけど……………」

書き手はアルフィスであろう報告書の内容に、思わずそう呟く。フリスクは何も言わず、じつとパネルを見つめていた。

次のパネルに進み、目を通す。

『報告書13』

遺体の一人が目を開いた。』

「……………目を、開いたって……………生き返ったってこと……………!?!」

たった一行、そう書かれたパネルを読んだフリスクが目を見開き、信じられないように呟く。

……私達は父さんと母さんを失っている。死んでしまったらもう二度と目覚めはしないと分かっている。だからこそ、報告書の内容が信じられないのだろう。

「どうして……!?!? 〈決意〉に、そんな力が……!?!?」

本来の自然法則では有り得ない『甦り』という現象に対し、フリスクは動揺を隠せないようだった。

「……………まだわからないよ? ただ目を開いただけかもしれないし」

「あ……………そう、だね」

動揺するフリスクの頭を撫で、落ち着いたところでまた手を繋ぐ。

「さて、行こうか」

「え……………うん」

改めて足元を照らしながら進むと、沢山のベッドが並んでいる部屋に着く。

「ここは……………ベッドルーム?」

「みたいだね」

懐中電灯で辺りを一応索敵し、警戒しながら入ると、フリスクがそう呟いた。個人的には、此処は研究員の仮眠室か……それとも、運び込まれた遺体の安置所だったのではと睨んでいるが、黙っておこう。これ以上フリスクを怖がらせてはいけない。

「あれ、一個だけベッドが空いている」

「ん？ ……ああ、そうだね」

部屋の中に入ると、一つだけ不自然にベッドのシートが整えられているのに気付いたのか、フリスクが声をあげた。

「調べる？」

「……………うーん、後でいい」

「そう」

そのまま辺りを照らしながら壁際を伝い、時計のかかっている壁の所まで移動する。明かりに照らされて、パネルがあるのが見えた。埃を被っている人工植物の横にかかっている時計を見ると、針は動いていなかった。電池切れだろうか。

その横のパネルの前に立つと、ピツという音を立てながら内容が表示される。

『報告書14』……………さっきの続きみたいだね」

「そうだね」

報告書のナンバーを読み上げたフリスクに頷き、内容に目を通す。

『報告書14

崩れ落ちた被験者全員が……………目を覚ました。

全員が歩き回って何事も無かったかのように会話している。

彼らは死んだのではなかったのか……………？』

「……………やっぱり、生き返ったんだ……………」

報告書の内容に目を見開き、フリスクはそう言った。

何故。

その横顔には、そうありありと書かれていた。

「……………多分だけど。前の報告書に、決意の力つてき、『生きようとする意思』つて書いてあつたじゃない」

「……………？ そうだね。それがどうかしたの？」

突然私が話し出した話が理解できなかつたのか、フリスクは不思議そうな顔で私を見る。

「此処に運ばれてきたモンスターつてき、『崩れ落ちてしまった』とは書いてあつたけど、『死んでしまった』つて訳ではなかつたんじゃない？ この地下世界のモンスター達つて、死んだら塵になるみたいだし。それに昏睡状態……………えーつと、深い眠りについて、目を覚まささない状態だつたつて書いてあつたしね」

「絵本の眠り姫みたいに？」

「うん……………うん!!? うん、まあ、そういうこと」

『昏睡』という言葉を聞いて顔を顰めたフリスクに対して簡単な言葉に言い換える。すると、予想斜め上の喩えが返ってきて一瞬間喰らうが、自己解釈の説明を続ける。

「その状態のモンスターってさ、『生きようとする意思』が段々と少なくなっていくって思うんだ。それで、その意思が完全に無くなっちゃうと、塵になってしまう。でも、まだ完全に無くなってしまいう前の状態の時に『生きようとする意思』の塊である〈決意〉を体の中に入れたから、生き返ることが出来たんじゃないかな」

「……………成る程」

私の自己解釈を含んだ説明に、フリスクは頷き、改めてパネルを見て、そしてパネルに触れる。

「……………もし、だけど」

「ん？」

ぼつりと、フリスクが言葉を紡ぐ。

「……………もし、もしも、ぼくたちがお父さんとお母さんの事故現場に居て。それで、直ぐにぼくの〈決意〉をあげることが出来たら。……………お父さん達は、まだ生きてたのかなあ……………」

フリスクが縋るように私を見て言った言葉に、思わず目を見開く。……………それ、は

「……………多分、無理だったんじゃないかな」

私は、フリスクの言葉を、否定した。

「……………そっか。そうだよね」

その言葉に、フリスクは少し悲しそうな、落胆したような顔をして、顔を伏せる。

「……………父さん達の事故は、言ってしまったえば、よくあるような、それこそテンプレート通りの事故だった。車の運転手は父さん達を轢いて逃げ、未だに捕まっていない。轢かれてしまった父さん達の方は……………私達姉妹に面会させてもらえないほど、酷い状態だったらしい。きつと、良くて四肢がもげたり、あらぬ方向に曲がつていたりしたんだろう。最悪の場合は……………挽き肉だ。もしソウルがその場に留まっていたとしても、体がそんな状態のまま『決意』を流し込んだりしても、きつともう、父さん達は動かない。生きて、笑いかけてはくれない。」

「……………ごめん、変なこと言っちゃった」

「ううん、私も一緒のこと考えてたから、気にしなくていいんだよ。……………きて、先にこの部屋の探索を終わらせちゃおう」

「……………うん」

申し訳なきように謝るフリスクに笑いかけ、話を探索することに逸らす。そのまま話を完全に逸らしきれないかと話題を探して横を向くと、薄い光が目に入った。

「あ、セーブあった。行ってきたら？」

「うん」

セーブするように促すと、フリスクは私の手を離し、光へと駆け寄っていく。フリスク

クがセーブを行っている間に、部屋のベッドを調べておく。確か、この部屋のベッドの一つに鍵があつた筈。何処だつたかな……

一列ずつ光をベッドに当て、何処かのベッドが盛り上がっていないかを調べていると、二段目の手前のベッドが少し乱れていることに気付く。光を当てると、ほんの少しだけ盛り上がっている。そう言えばこのベッドだつたつげと思ひ出し、かかっているシーツを捲つた。

「終わったよ……つて、何してるの？」

「……いや、このベッドに何かあるみたいで……」

セーブを終えて近付いてきたフリスクの質問に言葉を返し、中腹辺りまでシーツを捲ると、鈍く光を反射する黄色い鍵が出てきた。

「あ、やつぱりあつた。鍵発見」

「えっ!? 本当だ、すごい……!」

それを手にとつてフリスクに見せると、心底驚いたような顔をする。

「またキーチェーンに取り付けておいてくれるかな。多分またどつかの装置に使うでしよ」

「ああ、そうだね。分かつた」

フリスクに鍵を手渡すと、快くフリスクは携帯を取り出して、付属のキーチェーンに

黄色の鍵を取り付けてくれた。

「……………さてと、あと探索するところはないかな？」

懐中電灯で辺りを適当に照らしながらそう呟くと、

「あ、待って」

フリスクから待ったがかかった。

「……………やつぱりあのベッド、ちよつとだけ寝てみてもいい？」

恐る恐るといった様子で、フリスクがそう提案してくる。『Player』は寝ることを選んだのか、と内心苦笑する。

「……………いいけど、私も一緒に寝させてね？」

「… 勿論！」

また恐怖体験せにやならんのか、と一瞬苦い思いが過るが、ベッドで現れるやつは無害どころか優しいやつだったことを思い出し、大人しくフリスクに手を引かれて先程のベッドの前まで行く。途中、部屋の隅にドッグフードの皿を見る。埃を被っていないそれは、つい最近まで使われているように感じた。

「……………あ、結構寝心地いいよこれ」

「そうなの？ ちよつと詰めて」

「うん」

既に靴を脱いでベッドに寝転がるフリスクに続き、私も靴を脱いでベッドに寝転がり、フリスクと向かい合う。ベッド特有の布の柔らかい感覚が全身を包んでいき、ほっと安心するような気持ちになる。その瞬間だった。

ふうつ、と、背後が突然寒くなる。

「……!!!」

咄嗟に目を閉じてフリスクを抱き締め、何も見えないように自分の体で目隠しをする。

うしろに、なにか いる。

突如現れた気配に、頭の中で警鐘が鳴る。

静かな部屋に、息遣いが、みつつ。

私と

フリスクと

そして………

うしろのだれかさん。

息遣いが、近付いてくる。

.....

顔を、覗き込まれている気がする。

フリスクも気配に気付いたのか、抱き締めている体が震え出す。

誰なのか確かめたくても、体が固まってしまつて動かない。

.....

なにかが、近付いてくる。

少しずつ

すこしずつ

スコシズツ。

そして、その気配は下に動き、

ばさり、と私達の上に何か薄い、布のようなものがかかる。
そう、例えるなら………シーツの、ような。

——
おやすみなさい

ひんやりと冷たい何かに、ぼんぼん、と頭を撫でられる。

その優しい手付きで、昔母さんが寝かし付けてくれた時のことを思い出した。

何故か、思い出してしまった。

「……………かあ、さん」

ぴたりと、頭を撫でる何かが止まる。

自分が何を口走っているのか理解し、しまった、と後悔していると、直ぐにその何かはまた動き出し、撫でてくれる。

本来ならば、ここでこんなに長く撫でてはもらえない筈なのに。

困惑しながらもそれを甘んじて受けていると、一頻り撫でて、不意にその気配は消え

てしまった。

フリスクを離してからばつ、と勢い良く飛び起きて辺りを見渡しても、誰も居ない。

ただただ、静かな薄暗い寝室以外に、もう何も無かった。

「……………今の、って……………」

フリスクはゆっくりと体を起こし、辺りを見渡す。

「……………多分、こここのモンスターだと思うよ」

「……………優しかったね。お母さんみたいな撫で方だった」

「そうだね」

撫でられたのであろう自分の頭を擦りながら、フリスクはそう言った。その言葉に、同意しておく。

「……………降りよっか」

「うん」

寝る気も起きない為、靴を履き、ベッドから降りる。フリスクが降りるのを待ちながら、先程の撫でられた感覚を思い出す。

……無害なのは、知っていたけど。フリスクの言うとおり、本当に、母さんみたいな撫で方だった。

もう声も思い出せない、大好きだった母さんの笑顔が、ぼんやりと脳裏に浮かんで、消えた。

8. True Laboratory 探索③

【Lily】

昔の名残を思い出しながら、消しておいた懐中電灯を点け直す。

「……………」

先程より若干光が弱まっているような気がして、何回か点けたり消したりを繰り返す。結果、やっぱり少し弱まっていることを確信する。電池が切れかかっているらしい、と気付いた。

「お姉ちゃん何してるの？」

「いや、どうも光がさつきより弱まっている気がしてさ。電池が切れかかってんのかな」
「えっ」

私の行動に疑問を抱いたらしいフリスクに訊ねられ、そう返す。

「一応予備は一個だけ持ってきてあるけど、もしかしたら途中で急に切れるかもしれないからそれは覚悟しといて」

「う、うん……………」

一応フリスクにもそれを伝え、覚悟だけはしておいてもらう。

「……………まあ、それはおいといて。二つ道があるけど、どっち行く?」

光が消えるのを不安に思ったのか、少し怯えた様子のフリスクに対して、言わなきや良かったかなと思いつつ話を交わす。そして、私の手を握って、もう片方の手で選んだ方を指差した。

「分かった、そっちね」

フリスクが指差したその方向を見て、またホラー体験しなきゃかと内心若干げんなりする。その方向は、ゲームで真上から見た際の右の部屋に進む道だったからだ。

進まないとはッピーエンディングに行けないのだから仕方無いと割り切り、フリスクの手を握り返して進んでいく。

中に踏み入れると、場違いな花の匂いが鼻を擽る。壁に嵌め込まれた鏡と、その中に映る暗い金色が目飛び込んでくる。索敵を行い、中の構造は細長くなっているらしいと判断する。部屋の横幅はそこまで狭くはないが、先程まで広い部屋に居たからか、何処か狭く感じる。

「……………あれ、この花って…………?」

まだ出てこないよな、と警戒しながら辺りを照らしながら少しずつ進んでいると、横の机の上にはずらりと並ぶ金の花の植木鉢に気付いたのか、フリスクが声をあげた。

「お姉ちゃん、この花、王様の所で見たよね?」

「ああ、そうだね。あとはルインズとゴミ捨て場の所でも見かけたよね」
「何でこんなところに……?」

不思議そうに呟いて花を見つめるフリスクを見てから手を離し、壁にかかっているパネルの前に立つ。ピツという音を立てて内容が表示され、その内容に目を通す。

『報告書7』

時がくれば、モンスターのソウルを納めておく為の器が必要になる。

どう足掻いても、モンスターは他のモンスターのソウルを吸収することは出来ないのだ。

人間が人間のソウルを吸収することが出来ないのと同じように……

それならば……人間でもモンスターでもない何かを利用するのはどうだろうか?』
全身が映る程大きい鏡を通り越し、次のパネルに移る。

『報告書10』

器の実験は失敗に終わった。

予測データと比較して何が異なっているのか分からない。

一体どうして。

とにかく難問ばかりだ。

まとわりついて、先に進めない……』

そこまで読んでからフリスクの方に顔を向け、声をかける。

「フリスクー、その花がある理由が分かったぞ。此処でしてた研究の実験台にされてたみたい」

「えっ……!?!」

観察していたのか結構花の近くにいたフリスクが、私の言葉を聞いて俊敏な動きで花から距離を取る。そのまま警戒してじっと花を見つめるフリスクを余所に、私もちらりと花を見る。アルフィスに世話をされているのだろうその花々は、静かに咲き誇っている。

……もし、この研究がまた成功していたらこの地下世界には喋る花が二匹以上も居たのかと思うと、ゾツとした。

「多分そこには何もいないと思うよ。先に行こう」

「……………そうだね」

私が声をかけると、フリスクはちらちらと振り返って花を見て警戒しながらも此方にやってくる。警戒するのはそっちじゃないんだよな、と思いつながら追い付いてきたフリスクの手を握り、先を歩く。左横の壁に、鏡が連続して嵌め込まれている事に気付き、警戒を最高レベルにまで引き上げる。

「鏡だ………何でこんな、に」

五つ並んでいる鏡を通り抜けようとすると、不意に、鏡を眺めながら進んでいたフリスクの言葉が途切れる。

足が止まったのか、繋いでいた手が離れてしまった。

嫌な予感がして、振り返る。

「フリスク？」

「……………お、ねえ、ちゃん」

顔を青くして、鏡を見つめるフリスクが、鏡の中を指差す。

その先を見てみれば、

かがみのなかでしろい

どろりとした

ものが

蠢いている

ぎよつとして振り返れば、

めが あった。

白のなかに

黒くておおきい

つきみたいにまんまるな

めが、ひとつ。

それが、わたしを、

じいっと、のぞきこんでいた。

!!!
「!!!」

そして肥大化した白いモノを見て這い上がる恐怖感に咄嗟にフリスクを抱き寄せてその場から脱する。

世界が、白黒に切り替わった。

9. Amalgamates : ■■■■■■■■

〔Lily〕

*，

天井から垂れ下がっていたそいつが床にびちやりという音を立てて落ち、そしてまた体を作り上げる。

「……………なに、あれ……………」

腕の中で、体を強張らせ、そして目の前の何かを見つめたまま、フリスクが言う。

「……………あの子もモンスター、だよね……………」

「ああ、多分、ね」

視線の先のその姿は、酷く、『歪』だった。

一番最初に違和感を覚えるのは、その首と目玉、そして頭だろう。

その首は、まるで骨と皮だけのように細く、異様に長い。

先程目が合った目玉は、ただ、真ん中に一つだけ。

ぐらぐらと揺れる頭は、細くて長い首には、些か大きすぎる。

そんな不安定で今にも崩れてしまいそうな細い体躯は、何とか『鳥類』と分かるような形をしている。

自分の知識の中のモンスターと照らし合わせ、そして、確信する。

こいつは、リツパーバードだ。

「取り敢えず、調べてみなきゃ……………」

フリスクの震える手が『ACT』に伸びる。手に持っていた懐中電灯を邪魔だと思つて足元に落とし、足で後ろに蹴つて転がす。そうして自由になった両手で抱き寄せたフ

リスクの

体を背中と膝裏で支え、抱え上げる。

その瞬間、



「が、ぐっ!？」

突如、頭の中に複数の人が同時に喋っているようなノイズが流れる。あまりにも突然すぎる現象に咄嗟に頭を抱えて蹲りそうになるのを堪え、リッパードを見据え続ける。

『■■■■■■■■■■』

リッパードが首をぐらぐらと揺らめかせながら複数の声を混ぜ合わせたような声で何かを言うと、そのモンスターの頭部の周りに、

ひらり。

フリスクを抱く腕に力を少し込め、出来るだけ優しい声をかける。フリスクは私を不安そうな目で見上げ、口籠もる。

「大丈夫、どうにかなるよ。今までだってなんとかなってきたじゃん」

フリスクにとつては不確か過ぎる言葉だろうが、少しでも気休めになればいいと考え、そう言葉を掛ける。

……………ここを切り抜ける為には正解である混ざったモンスターの『MERCY』条件を行えばいいと言つてしまえばいい。でも、そう判断するだけの情報が圧倒的に足りない。私は何も知らない体で此処に居るのだから、何故それに辿り着けたのか、不審に思われる。私は知らないフリをして、元氣付けて、回避することしかできない。それが、とても歯痒い。

「……………うん、そうだね」

そんな考えが頭を過つていくなか、フリスクの青褪めていた顔が少しだけ良くなる。気休めにはなつたらしい。

「間違えちゃうかもしれないけど、いい?」

「ああ、もちろん」

私がフリスクに頷けば、フリスクも頷き返して『ACT』に触れた。そしてリップパーバードを見据え、口を開く。

途端に謎のポーリングを取ったフリスクをすぐにまた抱き上げられるようになるべく近くにいたように立ち回る。

*You あな did た some は thing 何か mysterious 神秘的.

*I, recognize it has more to learn from this world 《, は世界には知らないことがまだ沢山あると悟った》.

正解を選んだフリスクの行動を見て、何か言葉を発し、リッパードは首を振る。
その瞬間、

ぼろり

首が、落ちた。

!!!

そのまま此方に真っ直ぐ飛んで来る首に攻撃だと気づき、直ぐ様フリスクを抱え上げる。ぼこぼこ音を立てて頭が再生する度に首が落ちる異様すぎる光景に、背筋が泡立つ。

『■■■■!』

鋭い嘴を大きく開けて噛み付こうとしてくる無数の一つ目の生首を何とか横に避け続ける。大きく開けられた嘴に、歯が生えているのが垣間見えた。人間の歯にそっくりな本来の鳥類ならあり得ない歯に、ぞつとする。

＊、

十数個くらいの生首を避けると、ようやく攻撃が止んだ。ターンが回ったのを確認し、フリスクは『ACT』を押し、行動に移る。私に抱えられたままフリスクは服の裾で手を拭い、リツパーバードに良く見えるように突き出す。

＊You wash your hands.

＊Nothing happened.

「ごめんッ」

「気にすんな!」

『■■■■■■■■』

フリスクの手を凝視して首を傾げるリツパーバードにまた蝶が集り始め、極め付けにアナウンズが流れたことにより攻撃されると悟ったらしいフリスクが顔を歪めてそう言った。その謝罪に短く言葉を返し、また此方に飛来する蝶の群れを避ける。

＊、

蝶の群れを避け続け、全ての蝶がまた消えて『ACT』が表示された途端、フリスク

き合い、そして教会でカミサマに祈るように、跪く。
 * You kneel and pray for safety.

すると、それを見たリッパードは、目を真ん丸に、それこそ溢れ落ちそうな程見開いた。

「……………ああ、そうか」「そうだ」「ゲコツ…………」

そして、ふつと目を瞬き、何かに気付いたように、ぽつりとそう呟いた。

* Reaper birds remember something.

『やつと分かってくれた』『勇氣…………』『ゲコツゲコツ』

被つて聞こえていた複数の声が、はつきり明確に別れた声で聞こえる。ほうつと突っ立っているリッパードにまた蝶が群がり、ひらひらと此方に飛んで来る。またフリスクを抱えて回避を続ける中、心無しか、先程よりは飛来するスピードが遅く感じられた。

* Reaper Bird seems placated.

やつとアナウンスらしいアナウンスが流れ、『ACT』に手を伸ばしたフリスクが、名前が黄色くなっていることに気付いたのか、安心したようにほうつと息を吐く。そして、『MERCY』に手を伸ばした。

* YOU WON!

あなたは勝利した

*You^o earned^o OXP^o and^d gold^た.

そのアナウンスが流れると同時に、リッパードは飛び上がる。そして天井に貼付くと、そのまま見えなくなってしまった。

世界に色が戻ってきた。

「……………ふうっ」

フリスクを地面に降ろすと、漸く戦闘が終わったという安堵からか、息が溢れた。ふうっ、と汗が一粒首を伝っていく感覚も同時に覚える。

「お姉ちゃん、大丈夫だった？ また怖くなったりしてない？」

その様子をまた恐怖しているんじゃないかとも捉えたのか、フリスクは私を見上げ、氣遣う言葉をかけてくれる。

「うん、大丈夫だよフリスク。今度は攻撃当たらなかったからね」

「そう？ なら、いいんだけど」

その心配に対して当たり障りのない言葉を返し、頭を撫でる。そうすれば、本当に大丈夫らしいと判断したのか、フリスクの顔が少し緩んだ。

「……………さて、彼らはもういつてしまったようだし、探索を続けようよ。まだこの先に部屋が一つあるみたいなんだ」

「え？ あ、本当だ」

少しの間フリスクの頭を撫でて、後ろを指差しながらそう話を切り出す。部屋の存在に気付いていなかったらしいフリスクは私の指し示す方向を見て納得したような声を出した。

「そうだね、行こう」

フリスクは私の先程の言葉に頷くと、私を通り越して先程壁に向かって蹴った懐中電灯を拾い上げ、落とした拍子に消えたらしい明かりをつける為にボタンを押す。すると、先程よりも弱くなつたらしい弱々しい光が灯った。

「……………本当に切れちゃいそうだね」

その光を見て苦笑いを浮かべ、フリスクは私の手を少し強く握る。やはり怖いらしい。

そんなフリスクに手を引かれて部屋に入ると、中は先程見かけた電源装置が鎮座していた。

「あ、これってさつきのこと……ということとは」

フリスクもその事に気付いたらしく、懐中電灯で照らしながら辺りをキョロキョロと見渡した。そして部屋の入り口付近に落ちている小さい紙を見つけると、私の手を離してそれに近付いて拾い上げる。

「……………『冷……………い』……………? 冷たい、かな」

メモを照らしながら眩やかれたフリスクの言葉に、冷蔵庫の事だろうと思いつ出す。

「多分そうだろうね。冷たい、冷たいねえ……あるのかな、冷たい場所」

「あると思うけど……」

何も分かっていないような反応をすれば、フリスクはまた苦笑を浮かべた。

「とにかく、冷たい場所にこの鍵はあるらしいから、見つけたら戻ってこようよ」

「そうだね。さつき見つけた黄色の鍵の場所も探さないとなあ」

何処にあつたつけなと思いつけながら、フリスクの手をもう一度繋いで、部屋から出た。

10. True Laboratory 探索④

*

〔Lily〕

先程のベッドルームにまで戻ってきて、右に曲がってセーブポイントを通り越して、また奥に進む。部屋から戻ってくる合間にフリスクから返してもらった懐中電灯で先を照らし、警戒し続ける。

「お、パネルあったよ」

「本当？」

道の先で曲がり角から何かが出てきやしないか警戒しながら索敵をすると、左側にパネルを見つけた。辺りに何もいないことを確認してからパネルに近付くと、ピツという音を立てて内容が表示される。

『報告書15』

この研究は行き止まりにぶつかってしまつたようだ……

しかし、少なくともハッピーエンドにはなつたのだろうか……？

私はソウルと器をアズゴア王に送り届けた。

そして被験者の家族を呼び寄せ、被験者は皆生きていると伝えた。

明日には皆、家族の元に帰ることができるよ……』

「……………皆、帰ることが出来たんだ」

その内容を読んで、フリスクはそう呟いた。

「みたいだね。でも多分……」

「言わなくてもいいよ。……多分、これだけでは終わらなかったんだろうね」

私がその言葉を返そうとすると、フリスクは私の言葉を遮った。

「じゃなきゃ、アルフィスは最初から『真実を言う』だなんて言わないもん」

『これだけでは終わらない、終わるはずがない』

そう察していたらしいフリスクは、目を見開く私に決意に満ちた表情でそう言った。

「ああ、嫌な予感がするなあ」

「……………当たらないと良いけどね」

フリスクに対して白々しい言葉を投げ掛け、次のパネルの前に進む。

内容は、短かった。

『報告書16』

そんな まさか いけない』

「……………これだけみたいだ」

酷く短い、心無しか緊迫感を滲ませるその内容を見て、ゲーム通りの緊急事態が起

こつたらしいと察する。

「……………やつぱり、研究で何か起きたみたいだね」

フリスクも何か起きたと察したらしく、悲しそうな顔でパネルを見つめる。

「だね。今までの報告書の内容から考えると、十中八九甦ったモンスター達に何かが起こったんだろうね」

「お姉ちゃんもそう思う……………」

「うん」

フリスクの言葉に頷くと、だよね、とフリスクは一言言つて顔を伏せた。

「……………ねえ、お姉ちゃん。ぼく、いま、一番嫌な想像しちやつたかもしれないんだけど」

「……………」

暫くそのまま顔を伏せていたフリスクが、突然顔を上げ、不安そうな目を私に向ける。嫌な予感がした。

「……………今まで出会つたこのモンスターって……………〈決意〉の研究の為に連れて来られたモンスターがどうにかなつちやつた姿だつたりしないよね……………」

フリスクの口からその言葉が飛び出て、体が硬直する。

……………賢い子供の勘とは、本当に恐ろしいモノだ。まさか、真実の大部分に気

付いてしまうなんて。

該当する内容の報告書を見るまでは知ってほしくなかった事実に勘づいてしまったフリスクは、不安そうな顔で此方を見ている。

「……………そうかもね」

その言葉に、私は白々しい返答しか返せなかった。

「ところでどうする、どっち行く？ このまま奥に進むか、ちよつと戻ってあつちいくかなんだけど」

「！……………ん……………そうだなあ」

話を強引に逸らし、ゲームだった時の右の道に進むか左の道に進むかを問うと、フリスクは目を見開いてから、悩んだ様子を見せる。そして、左側を見た。

「先に奥に行きたいな」

「分かった、じゃあ行こうか」

パネルの前から離れ、先に進んでいく。少しすると、右側の壁に部屋の入口がぼつかりと口を開けていた。そう言えばここにも鍵があるんだったかと思ひ出し、ちよつとげんなりする。

「あ、部屋……………お姉ちゃん、先にこつち進もうよ」

「……………うん、いいよ」

確かここ私が一番ビビった所じゃなかったっけと思いながら、フリスクの提案に頷き、フリスクを先頭に部屋の中に踏み込む。

「……………え」

部屋の中は一本道になっていた。

その突き当たりに、照らされるくすんだ桃色の布が見えた。

その布に細長い影が一つ落ちている。

ゆらゆら、ゆらゆらと、緩慢な動きで揺らめいている。

「ひっ」

『布越しに何か居る』という事実を理解したらしいフリスクが、小さく悲鳴を上げた。布越しに見える影が本来危険なモノではないと知っている筈の私も、自然と身構えていた。

「お、お姉ちゃん、彼処に、なんか……！」

「ああ、居るな。……どうする、私が調べてこようか？」

怯えて抱き付いてくるフリスクの背中を撫で、落ち着かせながら一応問う。流石にこんなに怯えているフリスクに取りに行かせる訳にもいかない。

……そういえば、ここはフリスクが歩くのが遅くなる場所だった筈。それは『フリスク』が怖いと感じているからだとかいう考察がどつかにあつたな。

「……………いや、ぼくがいく」

暫くの沈黙の後、フリスクは小さな声でそう言った。

「……………本当に？ 怖いなら私が……」

「ぼくがいきたいの。ううん、ぼくが行かなくちゃ。そこまでお姉ちゃんにやってもらうつもりはないよ」

『Player』の意志に影響されているからか、それとも本当に自分自身を奮い立たせたのか少々判断しにくいが、フリスクはそう言っただけで私から離れ、震える足で恐る恐る布へと近付いていく。

コッ

コッ

コッ

コッ

「はっ、はっ、はっ……………」

一歩一歩、進めば進む程、フリスクの吐息が早くなっていく。

コッ

コッ

コッ

コッ

コッ

コッ

コッ
ン

やはり怖いのか、ガタガタと震えながらもフリスクは布へと手を伸ばし、そして。

シヤツ

勢い良く、一気に横にスライドさせた。

そこには。

何も、居なかった。

「……………あ、れ？」

襲われる、と身構えていたらしいフリスクが、顔を上げてよく見ても、何かがいる様子は無かった。その様子に、安堵する。何も無くて、良かった。

「……………？」

体の震えを止め、フリスクは何かを小さく呟いて首を傾げた。そして、ふと風呂の中を見て、そして中に手を突っ込んだ。そして、振り返って帰ってくる。

「大丈夫だった？　なんかあったの？」

「鍵があつたよ！」

何事もなく帰つて来たフリスクに問うと、フリスクは握っていた手を開いて、鍵を見せてくれる。それを懐中電灯で照らすと、鈍く緑色に光を反射した。

「ほんとは、鍵だ。緑色……は見掛けてないな。無くして使えないといけないからキーチェーンに引つ掛けときな」

「そうする」

フリスクは私の言葉に頷き、携帯を取り出して付属のチェーンに鍵を取り付ける。黄色の鍵と擦れ、チャリ、という音が小さく鳴る。

「それじゃあ戻ろうか」

「うん」

戻ってきたフリスクの手を引いて部屋から出る。右に曲がり、足元を照らしながら奥を目指す。何も無い静かな廊下を進むと、開けた空間に出た。

「………なんだ、あれ」

目に飛び込んで来たのは、大きな装置、のようなモノ。

「………装置、かな………？」

「多分」

後ろのフリスクにもそれは見えていたらしく、短いやり取りをして、懐中電灯で照らしながらよくそれを観察する。山羊の頭蓋にも似た形のそれは、よく見れば埃が積もっている。かなり長い間使われていないことが容易に分かった。

そこで、

ぷっん

「あつ」

「えつ」

何の前触れもなく、唐突に懐中電灯の光が消えた。

「おいおい、嘘だろ……………ここで電池切れとか勘弁してくれよ本当に」

「そ、そんな……………電池、もう一つ、あるんだよね？」

「……………ある筈だけど、ちよつと待って」

その場にリュックを下ろし、中を漁る。確かポーチの中に一個忍ばせておいたと思っただんだが……………

中からポーチを探り当てて、中を見る。

「……………お、あつたあつた」

暗くて見辛い中言った通り一本電池を見つけ、取り出して懐中電灯の電池入れを開けて交換する。蓋を閉めると、光が灯った。

「あー……また古いやつだったみたいだ、ごめん」

「いや、点くだけマシだよ、大丈夫」

どうやら古い電池を持ってきてしまったらしく、少し心許ない光が懐中電灯から出ている。新品かちゃんと確認してくれば良かったと後悔しつつ、ポーチをしまつてリュックを背負う。

「よし、電池問題は解決したし、そこにセーブポイントがあるからセーブしてくるよ」

「ん、分かつ……!!?」

そう言って、道のど真ん中にある私にもいやにはつきりと見えるセーブポイントに向かって駆け出した。フリスクをそのまま見送りそうになって、ぎよつとして後を追って走る。

だってそのセーブポイントは、

「フリスク、待て、そのセーブポイントはッ」

「へ?」

私の声掛けも一瞬遅く、フリスクはセーブポイントに触れてしまう。

その瞬間。

——本物のセーブポイントであればただその場に静止しているだけの光が、ぐるりと、回った。

いや、『振り返った』と言った方が、きっと正しいのだろう。

「……………え」

驚くフリスクに向かって、その光は、

にこりと 笑みを作った。

本来、見える筈のない笑顔に、ぞつと背筋が泡立った。

その瞬間、光を模していたそれは肥大化し、ヒトガタのような形を取る。

恐怖で動けないのか動かなくなったフリスクに駆け寄って掴み、その場を離脱しようとした瞬間、世界が白黒に切り替わった。

11. Amalgamates : ■■■■■■■■■■ *

〔Lily〕

*Smell^甘like^レ sweet^の lemon^匂s.^が

フリスクを此方に引き寄せて部屋の端に向かつて懐中電灯を投げた途端そのアナウンスが流れ、それに続くように従来のリモンの匂いよりもあの独特な酸っぱい感じが抜けた匂いが辺りに充満する。どちらかと言うならばそこいらで売ってる安いレモンキャンデーの匂いに近い。あまり自然な匂いではない。

目の前に対峙するアマルガメイツから発せられているらしいその匂いは、あまり長い間嗅いでいると頭が麻痺しそうなくらいに、甘くて蠱惑的だった。

「フリスク大丈夫か!？」

目の前に現れたアマルガメイツに対して警戒しながら、小刻みに震えるフリスクに問う。青い顔をしながらもフリスクは頷いた為、そこまでショックがデカかった訳じゃないみたいだと判断する。

「……でもか……!!」

思わず悪態をつきながら、此方に攻撃を加えずにぼんやりと佇んでいるアマルガメイ

ツを観察する。顔にあたるであろう部分にはチビカビの面影があるが、突如として閉ざされていたらしい目が開かれ、此方に視線を寄越し、大きな口をぱつくりと開いた。

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

「誰……………」

想像していたよりも高く美しいソプラノ声を聞き流しつつ、胴体らしい部分を観察する。溶けかかっているが、筋肉質な腕がついたその形を、私は見たことがあった。

「……………」

そう、それは、一緒に歌を歌った、彼女の下にいたモンスターにそっくりで。そう言え、彼女の一目胴体に見える部分は本当は別のモンスターなんだつけというこも次いでに思い出しながら、確信する。

このアマルガメイツは、レモンブレットだ。

「……………取り敢えず、どうにかしないと……………」

『Player』の意思を受けたのか、フリスクが震える手で『ACT』に手を伸ばし、触れる。

「……………レモン、ブレット……………」

その際、名前が表示されていたのを見たのか、フリスクが名前を呼んだ。

その時、微かにレモンブレットが反応したのを、警戒していた私は気付いた。

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

「違ウ……………」

美しくも悲痛な声を響かせ、レモンブレットは首を横に激しく振る。その反応に、思わず心臓がどくりと跳ねる。当たり前だ、彼らには彼らの名前があつた筈なのだから、本当ならそつちを呼ばれたいに決まつてる。

そんな言い様のないもどかしさを感じていると、ピツと音がなる。

*You あな called た for は help を 呼 ん だ.

*But し nobody 誰 came も 来 な か っ た.

フリスクが何かを叫ぶように口を動かしても、辺りはシーンと静まっているだけで何も起こらなかった。

そんな中、

『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』

『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』

『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』
 『私ノ特別ナ地獄ヘヨウコソ』

何人もの声が重なったような言葉が、レモンブレットの口から飛び出た。そして、突如として彼女（だろうか）の体が崩れ落ちた。

ヤバい、と警鐘を鳴らす本能に従ってフリスクを抱え上げ、その場から一步飛び退いて緊急離脱する。その瞬間、そこに巨大な顔が現れ、大口を開けた。

がちんっ

何も無かった為空を切った顎が、また此方に向かってくる。最小限の動きをしていて

フリスクが何かを歌うような仕草をすると、その途端、またレモンブレッドが反応を見せる。二つの切れ長の目を驚いたように見開き、体がブルブルと震え始める。

* Lemon Bread's body shakes…

そして、

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

『私と一緒にイテ……』

その大きな口から、美しくも悲痛に歪んだソプラノ声を響かせた。

その声に、聞き覚えがあるような気がした。

ハツと我に返り、迫ってきたレモンブレッツドの噛みつき攻撃を避ける。飛ぶタイミングを見極め、避け続ける。それを三回も繰り返せば、攻撃が止んだ。

*

You 脈打つ肉塊の melody ロデー of が pulsating 聞こ flesh.

アナウンスに思わず耳を濟ませば、確かにどくん、どくんという音が微かに聞こえた。……だからなんだ、と思いながら、フリスクの選択を待つ。

フリスクは『ACT』を押しした。

* You あな screamed は絶叫した out.

私の腕の中で、フリスクはまるで叫ぶように口を大きく開ける。

* But し nobody か came 誰も来なかった.

だが、この研究所において、それは悪手だった。

『シカシ誰も来ナカッタ』

『シカシ誰も来ナカッタ』

『シカシ誰も来ナカッタ』

『シカシ誰も来ナカッタ』

『シカシ誰も来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

『シカシ誰モ来ナカッタ』

まるでアナウンスを聞いていたかのようにレモンブレードがアナウンスを繰り返した瞬間、彼女の目が青とオレンジに輝き始める。何の攻撃が来るのか察し、足を動かすと先程までいた場所に青とオレンジに明滅する弾幕が飛んできた。続けて飛んでくるそれを避けて避けて避ける。

*Smells like sweet lemons.

弾幕が止んで此方にターンが回ると、フリスクは直ぐに『ACT』に触れる。そして、私を見上げた。

「お姉ちゃん、一回降ろして」

「ん、分かった」

言われる通りなるべく近くにフリスクを降ろす。すると、フリスクはレモンブレード

に向かつて力瘤を作る仕草を試してみせた。

* You あな flexed は腕に your こぶ arms を作った.

それを見てか、レモンブレットも腕らしきモノを緩慢な動作で擡げ、プルプルと震わせる。

* Lemon Bread's muscle は筋肉を shake わせた ……

そのアナウンスが流れた瞬間を狙って、またフリスクを抱えあげる。

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

『ミンナソウ言ウノ』

今の行動が彼女と混ざっているモンスタアの琴線に触れたのか、そんな言葉がレモンブレッドの口から溢れる。それとは関係ないとばかりに大口を開けて肉薄してくる彼女から距離を取って逃げ続ける。

*Smells like sweet lemons.

きつかり三回、それだけ回避すると、フリスクはまた姿を現した『ACT』に手を伸ばす。

*You let Lemon Bread be.

*Lemon Bread seems to remember something.

フリスクは正しい選択肢を全て選びきいたらしく、そうアナウンスが流れる。そして、そのアナウンスが流れた途端動きをピタリと止めたレモンブレッドが、落ちそうなほど大きい頭を傾ける。

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

「……………アレ？」

そして、目を瞬く。

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

『……………前二モコンナ事アツタヨウナ』

次の瞬間、目から一粒だけ涙が溢れ、床に落ちた。その涙の意味は、あまり良くは分からない。

そのまま両目から飛んでくる青とオレンジの弾幕を避ける。これで最後、だけど気を抜かないように。

*Could this be goodbye!?

弾幕が止むと、そんなアナウンスが流れた。終わったんだと確信すると同時くらいに、一度『ACT』を押して名前が黄色になっているのに気が付いたらしいフリスクが『MERCY』に手を伸ばしはじめるのを、慌てて止める。

「あつ、ちよつと待ってフリスク！」

「!? どうしたの、お姉ちゃん」

突然ストップをかけられたのに驚いたのか、目を真ん丸に開きながらフリスクが訊ねてくる。

「……………ちよつと彼女とお話したいんだ。ここで見逃がしたら多分、もう会えないかも

しれないから」

だめかな、と言いながらフリスクに訊くと、フリスクは少し間を開けてから頷いた。

「……………そっか、分かった」

「ごめんね」

「ううん、いいんだよ」

頷いてくれたフリスクをそつと地面に降ろし、漂う強い人工的なレモンの匂いの中で彼女に向き直る。

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「ドウシテ思イ出セナイノ？」

「……あのー！」

頭を抱えて踞るようになっていた彼女に一步踏み出して声をかけると、体に合わない小さな瞳が此方を捉えた。その目に思わず心臓が跳ねるが、そのまま言葉をかける。

「……………シャイレーンちゃんの、ご家族の方ですよね」

確固とした確信を持つて、そう彼女に訊ねる。『シャイレーンちゃん』の部分をかなり強調して言葉にすると、ピクリ、と彼女は反応した。

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……………」

「シャイ、レーン……?」

「シャイ、レーン……?」

「シャイ、レーン……?」

そして、私の言葉を反芻する。その表情は、何となく動揺しているような気がした。

「……………私達はシャイレーンちゃんの……………ともだち、です」

一瞬、フリスクはともかく私まで『友達』と言っていいのか戸惑ってしまうが、何とかその四文字を口にす。

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達?」

「……………シャイレーンノ、友達？」

「……………シャイレーンノ、友達？」

「は？」

私が頷けば、彼女は沈黙した。

……………何故、私がレモンブレッドをシャイレーンのお姉さんだと知っているかというと、ゲームだった時にメタトンの家にこの世界では本人に返してしまった鍵を使つて入ると、日記を見ることが出来る。それを読み進めていくと、そのうち『シャイレーンのお姉さんが崩れ落ちてしまった』という記述に辿り着く。そして、ここにいるのは崩れ落ちてしまったモンスター達が混ざりあつた姿。シャイレーンに一番姿が似通つているのが彼女一人だけだからだ。彼女と話しているのは、個人的に彼女には興味があつたからだ。同じ妹を持つ姉として、興味が湧いた。この世界で一番、話をしてみたかったモンスターでもある。

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………シャイレーンハ、元気ダツタ？」

「……………はい。歌手を目指して、芸能界に飛び込んでいきましたよ。きっと彼女は、世界を魅了するトップシンガーになれると思います」

長い沈黙の後、シャイレーンちゃんのことを思い出したのか、それとも覚えていたのかは分からないが、彼女の口から近況を訊ねる言葉が飛び出た。その言葉に頷いて、真実を伝える。

「……………そう……………」

その言葉に満足したのか、彼女は……………シャイレーンのお姉さんは、満足げに頷き、

「ああ、よかった。あのこはゆめを、かなえられるのね」

にっこりと、きつとこの世の誰よりも美しい笑みを作ったような気がした。

「……………フリスク、もういいよ」

「……うん」

背後のフリスクに声をかけると、ピツという音が微かに聞こえた。

*YOU WON!
あなたは勝利した

*You earned OXP and Ogold.
と OXP を得た

戦闘終了を告げるアナウンスが流れて世界に色が戻ってくるると同時に、シャイレーンのお姉さんは床に溶け落ちるようになって去っていった。

「……………行っちゃったね」

「そうだね」

後ろにいたフリスクが横に並ぶ。ちらつと見て怪我一つないその姿に安堵する。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

「ん？」

ふと、フリスクが甘えるように抱き付きながら問いかけてくる。

「何で、さっきのモンスターがシャイレーンちゃんの家族のモンスターだって分かったの？」

そこが不思議だったらしく、フリスクはそういった。

「んー、判断材料……えっと、気付けるポイントは結構あったよ。輪郭が似てたし、声なんかすごいそっくりだったし。あとは………そうだな、お姉ちゃんの勘かな」

「えー、何それ……」

本当は前世知識で知ってたからだけど、それらしく理由をつけて、誤魔化しておく。

「まあ、それはともかく、どうする？ 行ける場所、二つあるみたいだけど」

話を強引に逸らし、フリスクにそう訊ねる。

「……………んー、そうだなあ、先にそっちの部屋が見たいな」

私の言葉に考えるような仕草をしたフリスクは、ゲームだった時はビデオテープが安直されている部屋に繋がる入り口を指差した。

「オツケー、そっちね。それじゃあ懐中電灯回収して行こうか」

「うん」

部屋の端に投げた懐中電灯を回収し、その時にふと、シャイレーンちゃんのお姉さんが去っていった方を見てみる。懐中電灯の光が当てられていないそちらは、ただ闇が広がっているだけだった。

……彼女と話せて良かった。最悪言葉が通じない可能性があったから、これは嬉しいな。

「お姉ちゃん？」

「ん、ああ、ごめん。進もうか」

懐中電灯のスイッチを入れ、ぼんやりと灯った光で先を照らしながらまた探索を続行

する。

……ここまですれば、あと少しだ。

12. True Laboratory 探索⑤

[Lily]

部屋の入り口を潜り、一番最初に目についたのは大きなテレビの画面。

「……………テレビ？ どうしてこんなところに……………」

かなり大きめのテレビを見て、フリスクは首を傾げる。研究所に何故あるのか、不思議なのだろう。

「多分だけど、気分転換に使ってたんじゃないかな。ほら、一つのことだけやってたら気が滅入っちゃうでしょ？」

「あー、そっか……………」

私が言ったこじつけの理由に納得したらしいフリスクは頷くと、テレビ台のガラスの扉を開け、中を探り始める。フリスクの背中越しに、テープレコーダーらしきものと、その横に積まれているビデオテープが見えた。ざっと、五つぐらいだろうか。

「……………？ これ……………ビデオテープだ」

フリスクはそう言って一番上のビデオテープを手取る。表面ある埃を払い、じつとビデオテープを見るフリスクを横目に、パネルへと近付く。

『報告書4』

ソウルに関する情報を何か得られればと思ひ人間の調査を続けてきた。

そして王城で……奇妙なテープを見つけた。

アズゴア王はこれを見ていないんじゃないだろうか……

それに見ない方がいい。』

きつと博士が著者なのだろうその報告書を読んで、フリスクが手に持つビデオテープがゲーム通りのモノであることを察する。

「……………おーいフリスク、こっちに報告書あったぞ」

「え、本当?」

声をかけると、フリスクはビデオテープから顔を上げて此方を見る。手招きすると、持っていたビデオテープを置いて此方にやってきた。立っていた場所をフリスクに譲り、そのままテレビの横にある棚を見てみる。HDやDVDが主流となった地上じやあまり見なくなったビデオテープが所狭しと並んでいる。孤児院には、院長が友人から譲り受けたらしいテープレコーダーがあつて、よくフリスクの同年代の子やそれより小さい子達がビデオテープの取り合いをしていたことを思い出しながらそれを観察していくと、所々タイトルを書ける部分に記載されている話数が欠けていたり、何故か見るからにベタついているものが所々有るのを無視し、ベタついていないものを一つ手にとつ

て見てみると、大分古い型のものようだが、まだまだ使えそうだと分かった。内容は……書かれている題名からして、どうやらアニメの部類らしい。一見全てアルフィスの持ち物のようにも思えるが、どうやらそれだけではないみたいだ。ここにいた研究員の趣味だろうか。……まさか、これを見てアルフィスはオタクの道に……？

まあそれはそれとして
閑話休題。

手に取ったビデオテープを元の位置に戻し、部屋の反対側へと歩いていく。すると、目当てのスロットがあつた。色は、黄色。

「お姉ちゃん、何して……あ、スロットだ」

報告書を読み終わつたらしいフリスクが後ろから声をかけてくる。その次に奥にあるスロットに気付いたのか、私を追い越して駆け寄つていった。その後ろについていく。

「えーつと……これは、黄色かな……？」

そして、ポケットにしまっていた携帯を取り出し、キーチェーンを弄り出す。手元を懐中電灯で照らしてやりながら待つと、少ししてからキーチェーンから黄色の鍵を取外し、穴に差し込んだ。

カチッ

という音が鳴って、鍵がぴつたりと嵌まり、機械が作動を始める。

「よし、これであと二つかな？」

「そうだね、あとはさっき見つけた青と、緑かな」

フリスクの言葉に頷き、この研究所探索も終わりに近付いていることを改めて認識する。ここが終われば……あとは、ラスボスだけだ。

「……………お姉ちゃん？」

「ん？ どうした？」

不意にフリスクに声をかけられ、フリスクを見る。するとフリスクは目を瞬いて首を傾げる。そして、直ぐに首を元の位置に戻した。

「……………ううん、気の所為だったみたい。何でもない」

「なんだよう、それ。気になるじゃんか」

そう言つてテレビの前に戻つていったフリスクの行動を不思議に感じながら、テレビの方に向き直る。

「まあ、いいや。話は変わるけど、さっきの報告書の内容読んだよね？ 何かアズゴア王

に見せちゃいけない内容のテープがあるのかなんとか」

「みたいだね……………この積んであるやつかな？」

「多分そうだろうね。他のはアニメ系ばかりだし」

……………そう言えば、このビデオテープは何故此処に積んであつたんだろう……………？ 入り

きらなかったから置いていたのか……？

そんな事を思いつつ、フリスクがビデオテープを手に取るのを眺める。

「……………見てみても、怒られないかな？」

ビデオテープを片手に訊いてくるフリスクに、不審に思われないように少し間を開けてから、言葉を返す。

「いいんじゃない、見たつて。私達はここに真実を知りに来たんだし、そのビデオテープだつてその内に入るでしょ」

「……………そっか、そうだね」

私の言葉に納得したようにフリスクは頷くと、持っていたビデオテープを一瞬見て、そしてまた私の方を見た。

「どれから見る？」

「あー……順番があるなら順番通り見た方がいいんじゃないかな」

「それもそうだね。ええつと、一番、一番……」

どうやら順番関係なく積まれていたらしいビデオテープを一つ一つ確認し、目当ての一番のテープを手に取ると、横にあつたテープレコーダーにセットした。そして、テレビの電源をつけて、再生ボタンを押した。それを見て、今は不要だと判断して懐中電灯の電源を切る。

真つ暗な画面は、何も映し出さない。

「……………あれ？ おかしいな」

何も映さないテレビを不思議に思ったのか、フリスクがまたテレビに手を伸ばそうとする。その手を掴み、元の位置に戻した。

「えっ、お姉ちゃ……………」

「しーっ、静かに」

困惑するフリスクの唇に人差し指を押し付け、口を閉ざさせる。そして、流れてくる音に耳を濟ませた。

『ねえ。ゴリー、起きてちょうだい』

流れてきたのは、布が擦れるような音と、聞き覚えのある優しい声。その声に思わず、体が一瞬跳ねた。少しまだ声が若々しいが、これは……………間違いなく、トリエルさんの声だ。

『んー？ やあ君、どうしたんだい？』

その次に流れてきたのは、寝惚けたような男性の声。此方も少しまだ若いが、アズゴア王の声だ。

『……………えっ、それにどうしてそのビデオカメラを持っているんだい？』

シチュエーションとしては、ベッドで眠っていたアズゴア王がカメラを持っているト

リエルさんに起こされたところなのだろう。『ゴリー』という愛称をトリエルさんが使っているところから察するに、まだ恋人関係……または夫婦だったときの、平穩で、幸せな日常の一コマ。

『しーっ！ あなたがどんな反応をするか撮りたいのよ』

楽しそうなトリエルさんの声に対して、あまり事態を飲み込めていないのか、アズゴア王からの言葉はない。

『愛しのゴリー。私の好きな野菜はなんでしょう？』

『……うーん……ニンジン、だよね？』

まだ眠たいのか、眠たげな声でアズゴア王はトリエルさんの問い掛けに答えた。

『ぎーんねん！ 私の好きな野菜は……エダ「ママ」よ』

少し間を開けて、トリエルさんは彼女にとっては本当に面白いのであろうギャグを言った。

『……分かったかしら???』

しん、と静まり返った中、トリエルさんがくすくすと笑いながらそう言った。

『…………ベッドに戻りなさい、ハニー』

それに対して、アズゴア王はトリエルさんに優しくそう言った。その声には若干、呆れを含んでいるような気もする。

『いやよ!! まだあるんだから! へへへ』

それでもトリエルさんはまだ言い足りないようで、楽しそうな声で続ける。

『じゃあ、もし私が犬だったら、どんな種類の犬になるでしょう?』

『……………うーん……………分からないなあ。何の犬になるんだい?』

もう諦めてトリエルさんに付き合うことにしたのか、アズゴア王はそう返した。

『それはね……………ドーベルママンよ!』

そのギャグに続いて、吹き出すような音が聞こえた。

『ははは! 君はその子を授かって本当に嬉しいんだね』

……………ああ、そうか。先程から妙にママネタを挟むなと思ったら、もう、この時に

はトリエルさんのお腹には、アズリエル君が居たんだっけ。

ぼんやりと、もう顔も思い出せない母さんと父さんが、フリスクを授かったと知った時のことを思い出す。普段の倍以上、喜んでたっけなあ。フリスクが産まれた時も、そうだったっけ。疲れきった顔をした母さんと、産まれたばかりのフリスクを抱えて泣きそうなお父さんが居たこと、そして、フリスクを守ろうと誓った記憶が甦った。

『なあ、もし君がそうやってジョークを言い続けてたら……………』

アズゴア王の声で物思いから引き戻される。ビデオに集中しなくては。

『いつか君は有名な……………ママンザイ師になれるかもしれないな』

そのギャグに、今度はトリエルさんが言葉を失った。

『……………ええと、もう寝るわね』

『おい！ そりやないよ、トリ！ 今のは面白かったろ！』

トリエルさんが聞かなかったことにして寝ようとする、すかさずアズゴア王が不服そうにそう言った。

『ウフフ、分かっているわ。からかっただけよ』

そこで、小さなリップ音が響いた。

『おやすみなさい、あなた』

『……………おやすみ、ハニー』

……………ゴソゴソと、音がした。

『あらあなた、暗くてビデオに写らなかったかもしれないわ…………』

そこで、ぷつん、という音とともにビデオは止まる。

『……………お姉ちゃん、今のって…………ママと、王様だよね…………？』

視聴を終えて少し間を開けてから、フリスクがそう尋ねてくる。

「そうだろうね。まだ、夫婦だったときの」

「やっぱり？ ……あれ？」

フリスクに肯定を返すと、フリスクは首を傾げる。

「これの何処が『見ない方がいい』ビデオなんだろう……？　これは王様も知ってるみただけど……」

「……………」　取り敢えず、他の四つも見てみようよ」

「うん……………」

最もな疑問を抱くフリスクに対し、あと四つのビデオを見ることを促す。フリスクは頷き、一番のビデオをレコーダーから取り出して、次のテープを差し込み、再生ボタンを押した。

『……………オツケー、Chara、準備はいい？』

「あれ、この声……………」

再生されたビデオから流れ出した声には、私もフリスクも聞き覚えがあった。真つ暗な画面を見つめる。

『気味のわるーい顔をしてごらん！』

子供らしい、高い声が響く。すると、少し間が開いた。

『ワー……ッ!!　へへへ!』

カメラを向けているであろう人物——Charaちゃんがした気味のわるーい顔に驚いたのか、そんな声が聞こえた。

『あー！　待って！　レンズキャップつけたままだ……………』

そこで、内容は聞き取れないが、もう一つの声が入った。その声には酷く聞き覚えがあった。

『え!? 今の顔、もうやらないの……?』

先程の言葉を反芻するように、子供の声がそう言った。その言葉に対して、また先程の声が入る。

『おい、からかうなよ! あはは!』

じゃれあうようなそんな笑い声を最後に、ぶつんと、ビデオが終わる。

「……………お姉ちゃん、今の声って……………」

「落ち着いて、フリスク。…………次のを、見てみよう」

「…………うん」

動揺するフリスクを押し留め、先を促す。フリスクも一旦落ち着いてくれたらしく、テープの入れ換えを行ってくれる。二番目のテープを取り出し、三番目のテープを差し込み、再生した。

『……………やあ、Chara! カメラに向かって笑って!』

また先程の子供の声が流れ出した。少し間が開く。

『はは、今度は君が引つ掛かったね! キャップをわざと…………つけっぱなしにしてたんだ! 君は今なーんの意味もなく笑ってるってことさ! へへへ!』

そこで、また声が入る。

『え？ ああ、うん、覚えてるよ。ぼくたちがパパにバタースコッチパイを作ろうとした時でしょ？』

その声に応えて、子供の声はそう言った。

『バターをカップ数杯分つてレシピには書いてあつたけど……間違えてバターカップの花を入れちゃった』

「ー」

そこで、思わず手に力が入った。

そんな私などお構い無しに、ビデオは進んでいく。

『そう！ お花を食べた。パパはとっても具合が悪くなつたよね！』

一瞬入った声に、子供の声はそう答えた。

『気まづかつたなあ。ママをホントに怒らせちゃった。笑い飛ばしちゃえばよかったよ、君みたいに……』

昔を懐かしむように、鳥の囀りの中で子供の声は言う。

『えっと、それよりさ、それ持って何処に行くの？』

今度は子供の声が、もう一つの声に問う。すると、もう一つの声がまた聞こえた。

『えっ？ カメラを切つてだつて……？ いいよ』

その声を最後に、ぷつんと、ビデオが終わる。

今度は何も言わず、フリスクはすぐにテープを入れ換えた。三番目を取り出し、四番目のテープを差し込み、再生する。

『……………やめたほうがいいよ、Chara』

再生が始まると、また子供の声の流れ出した。その声は、ぐすぐすと鼻を嚙るような音が混じっている。泣きそうになっていると、直ぐに察しがついた。次には、その子供の声を馬鹿にしたような声が入る。その声は、所々掠れていて、酷く辛そうだった。

『な……………なんだって？　そそ、そんなことないもん……………』

そこで、深呼吸するように息を吸って、吐き出すような音が微かに聞こえた。

『……………おつきい子は泣かない。うん、君の言うとおりさ』

そこで、疑うような声が入る。

『そんな！　君を疑うもんか、Chara……………！　絶対にさ！』

また声が入り、話は続く。

『う……………うん！　ぼくたち強くなろう！』

そして、次に、その声は。

『皆を解放するんだ』

決意に満ちた言葉を吐いた。

『お花を取ってくるね』

その声を最後に、ぷつんと、ビデオが終わる。

フリスクが、最後のテープに取り、入れ換える。四番目を取り出し、最後のテープを差し込み、再生ボタンを、押した。

『……………Chara……………聞こえるの……………？ 目を覚ましてちょうだい……………』

震える女性の声が、再生が始まった途端に流れた。その声は、先程の子供の声よりずっと泣きそうだ。

『Chara！ 決意を抱きつづけるんだ！』

焦燥しきった、男性の声が続けて聞こえる。

『諦めるな……………君は人間とモンスターの未来なんだ……………』

継るような声が、胸に突き刺さる。その声から、家族を想う深い愛情を感じた。

『……………ねえ……………Chara……………お願い……………起きてよ……………』

少し間が開いて、泣きそうな子供の声が聞こえた。

『こんな計画もう嫌だ。ぼくは……………ぼくは……………』

言葉が出ないのか、沈黙が流れる。

『…………………………ううん……………言ったんだ。君を疑ったりしないって』

そこで、ゴソゴソという音がした。

『…………六つ、だよな？ 六つだけ取ってくればいい…………』
少し声が遠くなったが、子供の声は、はっきりと聞こえる。

『ぼくらで一緒にやるんだよね？』

最後に流れたその声は、酷く、此方が聞いていられない程に、辛そうだった。
ぷつんと、ビデオが終わる。これで、全てのビデオを見終わった。

「……………今の、って」

フリスクが、テレビを凝視しながら呟く。

「……………今まで聞いてきた話の、真実…………？」

「……………だろうな」

呆然と、そう呟くフリスクに頷くと、フリスクはその場に崩れ落ちて、緩慢な動作で私を見た。

「…………Chara、って、多分、このロケットのお姉ちゃんそっくりな子だよな？」

「多分ね」

「自らが辿り着いた事実を確認するように、フリスクは言葉を紡ぐ。肯定する。」

「……………バターカップの花、あの、金のお花には、毒があったってことだよね？」

「……………本で読んだ知識だけ。バターカップの花って、日本の名前ではキンポウゲっていう花なんだ。その花には……………かなり強い、毒がある」

軽い説明を入れながら、肯定する。

「……………自殺だった、ってこと……………!!?」

最後のその言葉に、頷く。

「……………こりや確かに、アズゴア王とかトリエルさんには見せない方がいいだろうね」

その言葉を付け加えて。

「……………どうして……………? そんなこと、ママもパパも、アズリエル、王子もきつと望んでなかったのに……………!」

遂に、涙まで流しはじめてしまったフリスクの頭を撫でる。

「……………きつとだけけれど。それがCharaって子の決意だったんじゃないかな。だから、そんな風に言わないであげて。その言い方は、『君がやったことは無意味だった』って言ってるようなもんだから」

そうフリスクに伝えれば、フリスクは涙を溢す目を大きく見開き、あ、と小さく呟く。

……Charaちゃんがどんな性格かまだ良くわからないけれど、今フリスクが流した涙は、ただの侮辱だと、何故か私は思った。

「……そう、だね。そう言っちゃ、ダメだね」

フリスクは涙を拭い、そう言った。

「……取り敢えず、この事実は私達の胸の中にとまるところ。いいね？」

「……うん」

「よし」

頷いてくれたフリスクに手を差し出し、握ってくれた所で引張って立ち上がらせる。そして持っていた懐中電灯の光を再度つけて、握ってくれた手をそのまま握り返す。

「……さて、他の場所に行こうか」

「……うん」

頷いたフリスクの手を引き、部屋から出て、先に進む。山羊の頭蓋骨の前を通り抜け、レモンブレッドが居て通れなかった反対側へとやってくる。

「あ、パネルだ。読む？」

「うん」

フリスクを連れ立ってパネルの前に立つと、

『決意抽出装置：非稼働』

という表示が現れる。

……これ、非稼働ってだけで動かせない訳じゃないってことだよな？ うわ、こわ。

「なんだ、これだけか。行こう」

フリスクの手を引いて先に進もうと、パネルの前から離れて奥に続く入り口から一歩踏み出した瞬間、

「うわっ!？」

「えっ!？」

一瞬で真っ白な霧に視界を奪われる。これはまずいと即座に判断して、瞬時に体を引っ込める。

懐中電灯で暗い中を照らすと、少し先で光が消えてしまうほど濃い霧のようなものが部屋を充満していることに気付く。

「お姉ちゃん大丈夫!？ なんかあった!？」

「うん、何ともないよ。ただ、この部屋の中凄い濃い霧がかかってるみたいでさ、中が調べられないな、これじゃ」

心配するフリスクに対して言葉を返し、見てみなよ、と付け足して、懐中電灯で照らしながら中が見えるように退くと、フリスクも中を覗き込んだ。

「……………うわ、本当だ。これじゃ進めないね……………」

「でしよう？ こっちは一旦諦めて反対側に進むしかないと思うんだけど」

「そうだね、そうしようか」

そう二人で結論付け、来た道を引き返し始めた。

反対側の部屋までやってくると、そこにも先程の部屋ほどではないが霧がかかっていた。

「うわ、ここでもか……………」

「でも、何も調べられない程じゃないよ。取り敢えずパネルあるし、調べちゃおうよ」

「……………うん、そうだね」

直ぐ横にあるパネルを指差しながら言うフリスクに頷いてから、ちらつと部屋の天井辺りを見る。霧に混じって、無数の白い何かが浮いているのに気付く。やっぱりか、と思しながら、パネルに視線を移した。

『報告書ー』

メタトンは今や成功を納めて、もう私には話しかけてくれない。

……………ただ「いつ体を完成させてくれるのか」と尋ねてくるだけ。

もし彼の体を完成させてしまったら、もう私は必要とされないのではないか……………

そうなったら、もう永遠に友達でいられなくなってしまふ。

……言うまでもなく、彼の体を完成させようとする度に、ただただ冷や汗が溢れる……」

「……………これ、アルフィスの…………？」

遅れてパネルを読み始めた私より先に読み終わったらしいフリスクがそう呟いた。

「そうだろうね。アルフィスがメタトンを作ったらしいって話も聞いたし」

「だよね…………」

「……………まあ、こんな隠し事してたんだし、いつ見捨てられるのか、離れていってしまうのかと思うと、気が気じゃなかっただろうね」

最後にそう言えば、フリスクは顔を歪めた。

「……………辛かった、のかな。やっぱり」

「……………そりゃそうだろうね。まあ、それも過去の話だ。これからどうするかはアルフィスとメタトン次第だし、頼られたとき以外あんまり口は出さないようにね」

「うん、分かってるよ」

フリスクに一応忠告をして、そのままパネルの前から離れる。霧が立ち込める中、全て換気扇らしきものになっている壁の前の狭い道を進んでいく。

「換気扇かな、これ」

ど
ち
や
っ

音に表すなら、そんな音だろうか。

私の後ろから、質量のあるモノが落ちてきた音が聞こえた。

「ひいつ」

壁側にいるフリスクが、怯えた顔で後退り、壁に背中をつけた。

その視線は、私の背後に向いている。

ずるずる　ずるずる、ずるずる

後ろから、何かが引き摺られるような、そんな音がする。

獣特有の臭いが　音ともに近付いてくる。

後ろを、振り返った。

そこには、酷く形が不安定な、巨大な白いモノがいた。

私よりもずっと大きいそれが
本来ある筈のパーツが全てないのつぺりとした顔で、
私の瞳を覗き込んでいた

「ウオオオオオオン……………」

獣の臭いと、犬か狼かその辺りの遠吠えらしきものが、五感を支配していく。

足が、動かない。

「お姉ちゃん！」

後ろから聞こえるフリスクの声を合図に、世界が白黒に切り替わった。

13. Amalgamates : ■■■■■■ *

〔Lily〕

*It's the Amalgamate.^{A m m a t e}

世界が白黒に切り替わった途端、そうアノウンスが流れた。目の前で私を見つめる——いいや、顔に該当する部分が見当たらない為に見つめているのかも分からないが、アマルガメイツは別段何をするでもなく、じつと、ただただじつと、私の顔を見つめたまま、動かなかつた。対する私も、目の前のアマルガメイツをただじつと見つめる。

「お姉ちゃん！ 下がって！」

暫くソイツと見つめ合っていると、背後のフリスクから声が飛んでくる。ハツと我に返つて、アマルガメイツを刺激しないように一歩づつゆっくりと後退りした。

「……………ウオン」

じつと見つめていた私が動いたからか、小さく、アマルガメイツが鳴いた。その犬や狼辺りの鳴き声と、アマルガメイツの身体全体を観察して、犬のような形の身体をしていることから推測し、確信する。

コイツは、エンドジェニイだ。

「……何だろう、あの子……犬……？」

「多分ね」

フリスクの傍まで下がり、直ぐに抱えられる位置に立つ。エンドジェニイを見据えたまま短いやり取りをすると、フリスクは『ACT』に手を伸ばす。

* A M A L G A M A T E S

It's unclear how many dogs this counts as.

ピツという音を立てて、アナウンスが流れた。それが流れ終わると同時に、エンドジェニイが震え出す。

ぐばあ

音にするなら、これがいだろう。のつぺらぼうだった顔が變形して、大きな一つの穴を開ける。攻撃開始の合図であると悟り、直ぐ様フリスクを抱えあげ、回避体勢を取った途端、

ビュッ

ふわりと浮かび上がったエンドジェニイの顔の穴から無数の棘が飛んでくる。

「うわッ」

中々鋭利な先端のソレを、前後左右に移動して何とか避けていく。数本身体を掠め、服や肌を薄く切っていく。

*Amalgamate is watching you intently.

浮かんでいたエンドジェニーが攻撃を止めて床に降りると同時に、アナウンスが流れる。アナウンス通り、エンドジェニーは此方をじっと見つめていた。

「…………お姉ちゃん、一回降ろして」

お互いに相手を見据え、緊迫した空気が流れる中、フリスクが言葉を発した。

「……………いいの？」

「うん。降ろして」

「……………分かった」

私の問いかけに、何とかできる自信があるらしいフリスクは力強く頷いた。それを見て、私はフリスクの指示に従ってそっと床に降ろす。直ぐに抱えられるように気を付けながらもフリスクから手を離すと、フリスクはエンドジェニーに向き直って、『ACT』に手を伸ばす。

「……………相手が犬のモンスターなら…………」

*You call the Amalgamate.

一言そう呟いてから、フリスクは『ACT』を押し、口元に手を当て、エンドジェニーに声が届くようにする。そしてアナウンスが流れると、フリスクの呼び声に反応したのか、エンドジェニーは耳の部分をピクリと動かし、穴から何かを垂らしながらこちらに

向かって飛んできた。

* flecking a strange liquid from an orifice.
開口部から奇妙な液体を散らしながら

かなりの勢いで飛んでくるそれを、フリスクの腕を引つ張つて無理矢理しやがませて避ける。エンドジエニイは私達の上を通り過ぎて後ろの壁に激突し、べしやりと潰れる。その瞬間を見計らつてフリスクを抱えあげて距離を取り、フリスクに飛び付いてこようとするエンドジエニイを避け続ける。

* Looking for affection.
ホバリングが近づいてくる。

突如エンドジエニイの突進攻撃が止み、此方にターンが回つたことを示すアナウンスが流れる。それを見計らつてフリスクを降ろすと、フリスクは直ぐ様『ACT』を押し、エンドジエニイに向かつて『此方に来い』というジエスチャーをした。それに誘われるままに、エンドジエニイはフリスクの前までふわふわと浮かんだままやって来た。

* You pet the Amalgamate.
あなたはAmalgamateをなでた。

そのままフリスクの前に着地し、その巨体を沈めて座り込んだエンドジエニイの頭を、フリスクはその場に座り込んで撫で始めた。

「……………今までの犬のモンスターみたいにすれば、終わるかな？」

撫でながらそういったフリスクの言葉を咀嚼し、どうやら『Player』はここに来るまでに戦ったレッサードッグやグレートードッグなどの犬系のモンスターとの戦いを参考にして行動しているらしい、と見当付ける。

* It そ れ は 小 刻 み に 症 撃 し て て convulses rapidly……

* そ し て 大 人 し く な っ た then calm down.

「クウン……」

アナウンス通りカタカタと震えていたエンドジエニは、不意に大人しくなり、フリスクの太腿に頭を預け、すりすり頭を擦り付けた。

* It 少 し の 間 あ な た の 膝 の 上 で 静 か に 休 憩 し た rest quietly on your lap for a moment

……

* Z z z z z ……

軀をかいて眠るエンドジエニの頭を、フリスクは撫で続ける。暫くそのままフリスクが撫で続けていると、突然、エンドジエニは飛び上がった。

* 突 然 Suddenly,

! It そ れ は 飛 び 上 が り 烈 し く 壁 を 這 い ず り 回 shoot away and crawl wildly on the wall

「バウー」

そしてそのまま空中に浮かび上がり、また棘のようなものを飛ばしてくる。直ぐにフリスクを引き寄せ抱えあげ、棘を避ける。

ドスツ

一本、左の二の腕に刺さり、痛みが走る。

無視して避け続ける。

*
A

Amalga mate is striking the wall with its cl

此方にターンが回り、まだ『ACT』する気であろうフリスクを降ろすと、真つ青な顔で私の腕に刺さる棘をみた。

「大丈夫!？」

「え? うん、大丈夫だよ」

心配しているらしいフリスクから見えないように背を向けて棘を引っ付かんで抜き、床に投げ捨てる。思ったよりかなり深く刺さっていたらしく、肌に親指の腹くらいサイズの穴が開いてしまった。どろ、と遅れて血が流れ始める。

「あー………案外深いなこれ」

鉄臭いような、生臭いような血の匂いが鼻をつく中、袖を捲り上げて包帯をきつく巻

き直して止血を行う。どうか処置を終えて振り向き、心配そうな顔をするフリスクに向かつて笑う。

「もう大丈夫だよ、進めて」

「……………本当に？」

「うん」

疑うような目線で傷を見るフリスクに頷くと、フリスクは傷を睨んでいたが、暫くするとエンドジェニイに向き直って『ACT』を押しした。そして、アズゴア王戦で使うと言われて渡しておいたナイフを取り出した。

*

You ^あ ^な ^た ^は ^部 ^屋 ^の ^罫 ^へ ^持 ^っ ^て ^い ^た ^武 ^器 ^を ^投

ナイフを取り出して何をするのだろう、とフリスクを見ていると、フリスクは大きく振りかぶってそのナイフを投げる。放物線を描いて部屋の入り口辺りに落下していくそれをエンドジェニイは追い、落下したナイフを穴——いや、口って言った方が正しいか。それで啞えた。

* The ^A ^m ^a ^l ^g ^a ^m ^a ^t ^e ^は ^そ ^れ ^を ^取 ^っ ^て ^あ ^な ^た ^に ^返 ^し ^て ^き ^た

……

* Proudly?

のしのと巨体を揺らして歩いてきたエンドジエニは、フリスクの足元にナイフを落とした。からん、という音が響く。

* You repeat this process a few times.

フリスクは戻ってきたナイフを拾い上げて、また投げた。それを、エンドジエニはまたそれを取りに行く。それを三、四回程繰り返し返すと、エンドジエニの動きが鈍くなってくる。

* Now Amalgamate is very tired……

ナイフを啜えて戻ってきたエンドジエニは、ナイフを床に置くと、そのままフリスクにしなだれかかる。

* amorphous body on you…… It leans its dripping,

フリスクは慌てて寄りかかってきたエンドジエニを抱き止め、その場に座り込んだ。エンドジエニは口から何かを滴らせながら、フリスクに甘えている。本来ならば彼からの攻撃がある筈だが、それが起こる様子がない。それでも何時でもエンドジエニからフリスクを引き剥がせるように警戒しながら、私も恐る恐る手を伸ばしてみる。

*

Amalgamate is は愛情たっぷり to に affect し ionately.

いつの間にか彼のターンは過ぎたのか、アナウンスが流れた。

* You あなた pet は the Amalgamate を な で た.

フリスクは直ぐ様『ACT』を押し、寄りかかっているエンドジエニを撫でる。それに続いて、私もエンドジエニを撫でてみる。

「……………わふ」

私の手が触れた途端にエンドジエニが身体を身動きさせて反応し、それに反応して手を引っ込めてしまう。それでももう一度触れてみると、エンドジエニは大人しくしていてくれた。

……………触った感触は、私が知っている犬のそれではなかった。毛は生えておらず、つるりとしている。伝わってくる温度は、ひんやりとしている。多分これは、一度死んだような状態になっているからだろう。全ての生き物は、死ぬと徐々に体温を失い、やがて冷たくなる。崩落したモンスター達はその状態から無理矢理復活したようなものだから、体温がないんだろう。

そんな事を考えながら触れた手を動かして、エンドジエニを出来るだけ優しく撫でてみる。

* It そ starts れ to は generate ス a テ stage 1 I

H a p p i n e s s F r o t h .
幸福のあぶくを発生し始めた。

フリスクと一緒にエンドジェニイを撫で続けていると、アナウンスが流れ、アナウンス通りにエンドジェニイは口から泡を発生させる。泡が弾けた飛沫がフリスクに少しかかるが、別段何らかの影響はないらしい。泡を発生させながらも、エンドジェニイはただ大人しく撫でられている。途中からガタガタと震え始めるが、それさえ除けば、エンドジェニイは攻撃もせずにフリスクの腕の中で本当に大人しくしていた。

* A m a l g a m a t e , s c o n v u l s i o n s i n t e n s i f y .
は激しく痙攣している。

そのまま彼のターンは過ぎ去つたらしく、アナウンスが流れた。フリスクは『ACT』を押し、ビクビクと身体を震わせるエンドジェニイを、そのまま撫で続けた。

* Y o u p e t d e c i s i v e l y .
あなたは完璧に撫で尽くした。

暫くフリスクがエンドジェニイを撫で続けていると、エンドジェニイは次第にその震えを小さくし、やがて震えなくなつた。ただ、フリスクに撫でられるのを本当に嬉しそうに甘んじて受けている。ふと、エンドジェニイの足の方を見てみると、安心しきつたような顔をした犬達の形が見えた。

*

T h e A m a l g a m a t e s e e m s t o b e s a t i s f i e d b y a l l
はとうべやら完全に満足した。
 「わふ、わふわふ、わおん」

ぐりぐりと、フリスクに甘えるように頭を擦り付けるエンドジェニイを、フリスクは少し微笑んで撫でてやる。

少しすると、エンドジェニイは立ち上がってフリスクから離れ、少し離れた場所で一声、

『わん！』

と吠えた。

*E n d o g e n y i s c o n t e n t e d .

アナウンスが流れ、彼が満足したことを伝える。

「……………エンドジェニイ、っていうんだね、君」

『ACT』を押ししたフリスクが満足させたことよって表示された名前を読み上げる。

そして、エンドジェニイの名前が黄色くなっていることを確認したのか、向かって微笑

みながら、『MERCY』を押しした。

*Y O U W O N !

*Y o u e a r n e d O X P a n d o g o l d .

そのアナウンスが流れると同時に、エンドジェニイはふわりと浮かび上がって、何処かへと飛び去って行ってしまふ。その後ろ姿を見送ると、世界に色が戻ってきた。

「……………ふう、終わったかあ」

戦闘が終わった安堵に思わず一息つくくと、左腕がずきりと痛んだ。見れば、先程刺されて開いた穴からであろう出血が包帯から滲み、パーカーを汚していた。止血が完全に出来ていなかったらしいなど、何処か他人事のようにそう思った。

「あちゃー、血が出てきたなあ」

「お姉ちゃん、大丈夫!?!」

「おう、大丈夫大丈夫。まあ一応回復はしておくけどさ」

私を気遣うようにフリスクは顔を歪めながらそう言った。それに笑って返ししながら、傷を眺めてみて、これは放っておいたら失血による貧血で行動に支障が出そうだと判断し、リュックを降ろして中を漁る。そしてキツシユを取り出して、口に含んで咀嚼する。あ、美味しい。

そうやって口に運んでは咀嚼して飲み込む作業を繰り返し、食べ終わる頃には左腕の痛みはもう引いていた。

「ん、ごちそうさまでした」

誰に言うでもなくそう言って、リュックを背負い直して私が食べ終わるのを待っていたフリスクに向き直る。

「お待たせ、もう大丈夫だよ」

「本当に？ 痛くない？」

「うん、この通りさ」

心配そうな顔をするフリスクに対して左腕をぐるぐると回して本当にもう何ともない事を伝えてみせると、フリスクはほっと一息を吐いて安堵したような顔になる。

「良かった……お姉ちゃんが怪我するなんて久しぶりだったから、ドキドキしちゃったよ」

………は？

いや、ああ……

「………そっか」

その顔のまま続けられたフリスクの発言に、一瞬動揺する。

………そうだった。本人は何も言わないけど、フリスクは一周目の後の記憶があるんだよな。

すっかり失念していたそれを再認識し、頭に留めておく。

「………さてと、換気扇も回ったし、これで向こうの部屋の霧も晴れただろうから行こうよ」

「そうだね、行こう」

話を逸らし、本題の研究所探索の方に戻す。そしていつの間にか手の中に懐中電灯が無いことに気付いて慌てて視線を部屋全体に向けると、部屋の隅に転がっているのを見

つけて駆け寄って拾い上げ、消えていた光を点ける。薄ぼんやりとだが灯った光にまだ使えそうだと安堵しつつ、フリスクの元に戻る。

「さて、行くかうか」

「うん」

どちらからともなくまた手を繋ぎ、来た道を引き返し始める。

……あと、もう少し。

14. True Laboratory 探索⑥

〔Lily〕

決意抽出機の前を通り、引き返してきた私達は濃霧が漂っている筈の部屋にやってきた。懐中電灯で照らして警戒しながら中を見てみると、先程作動させた換気扇がちゃんと働いているらしく、先程の濃霧は消え去り、部屋の中がちゃんと見えた。

「お、霧が消えてる。調べられそうだよ」

「ほんと？　じゃあ、早速調べよう」

「そうだね」

フリスクと短くやりとりをして、部屋の中に足を踏み入れる。すると、

「……………？　なんか、寒い……………？」

何故か、体感的に温度が一度か二度くらい下がったような気がした。

……………ここにいる、アマルガメイツの影響だろうか。

「あ、お姉ちゃん、報告書あったよ」

「……………お？　本当だ。読む？」

「うん」

私の眩きが聞こえなかったのか、フリスクは私の発言に特に反応せずに直ぐ横にあるパネルを指差してそう言った。直ぐにフリスクの話に合わせて会話を続け、二人でパネルの前に立つ。ピツという音がして、内容が表示された。

『報告書19』

遺族からいつになったら皆を返してくれるのかという電話が鳴り続けている。

彼らに何と伝えればいいんだろう？

もう電話に出たくない。』

「……………やっぱり、何かが起きて、皆が此処から帰れなくなっちゃったんだね」

私が内容を読み終わると同時に、フリスクはそう眩いた。

「みたいだな。……………フリスクの言ってた通り、今まで出会ってきたこのモンスターは、研究の為に集められてきたモンスター達と考えた方がいいのかもね」

「……………」

私はその眩きにそう返せば、フリスクは沈鬱そうな顔をして押し黙る。そして不意にパネルから目を逸らし、先を進み始める。それを後から追いかけていく。

ガチャツ

直ぐ横にあった冷蔵庫が気になったのか、フリスクは取っ手に手をかけて開き、中を覗き込む。

「なんかあった？」

「……………ううん、何にもないや」

その中身がどうなっているかは知っているが、一応聞いておく。中に何も無い事を確かめたらしいフリスクは冷蔵庫の扉を閉め、立ち去ろうとした所で不意に目を見開き、もう一度中を覗き込んだ。

「……………何してるの？」

「……………いやさ、青色の装置の部屋のメモに『冷たい』って書いてあったから、もしかしたら冷蔵庫の中にあるんじゃないかなって思つて。ほら、冷蔵庫の中つて冷たいし」

「ああ、成る程」

思わずフリスクに問いかければ、中を熱心に覗いていたフリスクは、残念そうな顔をして冷蔵庫の扉をきちんと閉めながらそう言った。その主張に納得したように頷いてから、次の冷蔵庫の前に立ち、取っ手に手をかける。

ガチャツ

という音を立てて開いた扉の中をしゃがんで覗くと、そこには何も見当たらなかった。

「そつちはどう？」

「……………(´▽´)にも何もなさそうだ」

「そっかー……」

後ろから尋ねてくるフリスクに言葉を返し、扉を閉めて立ち上がる。

ガタタタン!!

「!!?」

その瞬間、左隣の冷蔵庫が派手に揺れた。思わず二人して後退り、お互いの顔を見合わせる。

「……………え、今、あの冷蔵庫……動いた…………?」

視線を冷蔵庫へ動かし、警戒してその場を動かず冷蔵庫を見据える。動揺するフリスクを背中に隠し、警戒しながらじりじりと冷蔵庫に近付いてみる。そして取っ手に手をかけて扉を開いてみると……………そこには何も居なかった。

「……………何にもいないよ」

「え、嘘…………? じゃあ、何で震えたのこれ…………」

「さあ…………?」

その冷蔵庫に対する警戒は解き、肩の力を抜いて開けた扉を閉める。そして、二つ隣の冷蔵庫に擬態するモノに対する警戒を引き上げた。

「……………うーん、冷蔵庫には無いのかなあ。三つ見たけど、何にもないし……………でも他に何も無いしなあ……………」

「……………まあ、取り敢えずパネルを見てみようよ」

「そうだね」

首を傾げるフリスクにパネルを指差して言えば、フリスクは頷いてパネルの前に立つ。その後ろから表示された内容を覗き込んだ。

『報告書20』

今日アズゴア王が五つのメツセージを残していった。

四つは皆が怒っているという話

そして一つは私に良く似たかわいいティーカップを見つけたという話

ありがとう、アズゴア王』

「……………慕われてるね、王様」

「そうだね」

ぼつりと呟かれたフリスクの呟きに同意する。

……………そう言えば、一番最初のメタトンのクイズショーで、アルフィスの好きなモンスタ―は誰だっという問題に、『アズゴア王』っという選択肢があったっけ。で、それを選ぶと『アンダイン』って答えた時のアルフィスの反応と同じ反応が返ってくるんじゃないな

かったっけ。それはアンダインと同じくらいアルフィスが彼に惹かれていたからだっ
てどつかで見かけたことがある気がする。まあ、そりゃ確かに研究で取り返しの付かな
い失敗して塞ぎ込んで鬱になりかけているところに優しくされたら、誰だってコロツと
いくわな。ただでさえアズゴア王は優しすぎる人柄——いやモンスター柄か？ まあ、
そんなモンスターな訳だし。私だってそうだし。いや、アルフィスの心が読める訳じゃ
ないから本当のところは知らんけど。

アルフィスがアズゴア王が好きな理由に自己解釈を交えて何となく納得しつつ、探索
に戻る。

「あ、またパネルあったよ」

「本当だ」

冷蔵庫を挟んで次の壁に、またパネルを発見する。何も言わずに二人でパネルの前に
立ち、内容を読む。

『報告書21』

毎日、四六時中、ゴミ捨て場で過ごしている。

今となつてはこれだけが私の全て』

「……………これが一番最近のやつかな」

「多分そうだろうね」

フリスクの言葉に頷き返し、パネルから離れる。次の冷蔵庫に手をかけたフリスクを追い越して、最後の冷蔵庫の前に立つ。

「……………」

隈無く、目の前で静かに佇む冷蔵庫を観察する。暫くじつと見つめていると、一見他の冷蔵庫と何処も変わらないように見えて、他の冷蔵庫には上にうつすらと埃が積もっているのに対し、これだけ少しも無い事に気付いた。これだと確信し、取っ手に手を伸ばし、触れる。その瞬間、

ひやっ

「……………?!」

触れた取っ手の部分が、触れていられないほどに酷く冷たくなっているのに驚いて思わず手を引つ込めてしまう。警戒しながらもう一度触れると、取っ手に普通に触れられるぐらいになっていった。手をかけてゆつくりと扉を開いて中を覗いてみると、そこには何も見当たらなかつた。

まあそりやそうだよな、と納得しながら扉をそつと閉める。

「お姉ちゃん、そっちには何かあった？」

「いや、何もなかったよ。そっちは？」

「何かの薬品みたいなのが入ってたけど、それだけで何も無かったよ」

「そっか」

冷蔵庫を調べ終わったらしいフリスクが此方にやってきて、訊ねてくる。それに首を横に振りながら言葉を返して会話を重ねる。

「うーん、やっぱりここじゃないのかなあ……次の部屋にあるといいんだけど」

「……………そうだね」

何が起きるか知っている私は、先に進もうとするフリスクと冷蔵庫の間に立って少しでもフリスクから遠ざける。

その、次の瞬間だった。

突如、部屋の空気が肌を刺す冷たさになる。

それはさながら、真冬のような、冷たさだった。

「えっ……!!? 寒い……!!?」

暖かいとまでは言わないまでも、それでも常温ほどの温度だった筈の部屋の温度が突
然として真冬のような寒さになった事にフリスクも何かが起こっていることを察した

のか、目を見開いた。

「お姉ちゃん、これ……!!」

「ああ、多分そうだろうよ……ッ」

気をつけろ、と言葉を続けようとした途端に、

ぞつ、と、背中が泡立つほどの冷気が横から流れてきた。

!!!

バツと、瞬時に流れてきた方を向く。

中身が空っぽな冷蔵庫があるだけの筈のそちらを向くと、

四角い形をしていた白いモノが、崩れ落ちて形を変えていくのを目撃した。

「……………ッ!!」

後ろで、息を飲むような音が聞こえる。

咄嗟にフリスクを庇い、目の前で形を変えていく白いモノを見据える。

そして、その瞬間、

にっこりと、ない筈の顔で 微笑まれたような

「来るぞ!!」

私がフリスクに叫んだ途端、世界が白黒に切り替わった。

15. Amalgamates :

〔Lily〕

*It's so cold.

戦闘が始まると、肌を刺すような冷たさの温度がより一層低くなる。身体が体温を保つ為に震えだし、視界がブレ出す。このままではまずいな、と思いながら目の前のアマルガメイツを見る。

「……………スノー、ウイ……………」

誰かの愛称だろうか、掠れ掠れに彼女はそう言った。此処には居ない誰かを求めるその声に、少しどきりとする。

「……………あ、れ……………？ あのモンスター……………何処かで……………？」

そんな中、後ろのフリスクから声が聞こえてきた。

「……………あのモンスターを知ってるの？ フリスク」

「うん……………というか、多分家族のモンスターじゃないかな？ お姉ちゃんがサンズと話してるときにあのモンスターにそっくりなモンスターに会って、友達になったんだよ」
フリスクに聞き返すと、そう返答が返ってきた。その言葉を聞いて、体が固まる。

「嘘ッ……………?! 大丈夫だったの!？」

「う、うん、幸い怪我はしてないよ」

「……………そう、なら、いいんだけど」

一気に冷静さを失った頭が、私の取り乱した様子に驚いたらしいフリスクの口から出した言葉で何とか落ち着きを取り戻す。

……………危ない。何をしているんだ私は、今ここで冷静さを失ったらダメだろうに。

「それで、そのモンスターにそっくりだって言いたいよね？」

「うん。もしかしたらさっきのレモンブレッドみたいに、家族のモンスターかもなって思ったんだけど……………」

話を戻し、フリスクに問う。フリスクは頷いて肯定を返し、私の横に出て来てじつと目の前のアマルガメイツを見る。それに吊られ、私もアマルガメイツを見て、良く観察する。

……………崩れかかっているけど、大体はフリスクがエンカウントしたらしいスノードレークの形を型どっている。そして先程譫言のように呟かれた『スノーウイ』という単語で、確信する。

コイツは、スノードレークのお母さんだ。

「……………取り敢えず様子をみよう。フリスク、お願い」

「うん」

フリスクは私の言葉に頷き、『ACT』を押す。ピツという音が聞こえる。

*AMALGAMATE | ATK 12 DEF 5

*Seems 形 like 失 it's っ losing あ its う self. だ

『ス、ノー……………ウイ……………』

アナウンスが彼女の様子を説明すると同時に、また謔言のように彼女は言葉を呟く。彼女の周りで空気中の水分が凍って三日月のような形の氷を一つ作って、飛ばされる。思わずフリスクを抱き寄せたが、その氷は私達には飛んで来ずに的外れなところに飛んでいった。そう言えば彼女の攻撃はその場から動かなくてもそもそも自分達に飛んで来ないということを出す。

*It's so cold.

結局その一つだけで攻撃は終了し、ターンが此方に回る。

「……………あのモンスター、ここであつたどのモンスターより形が不定形だね……………」

フリスクが顔を辛そうに歪めながら、そう言った。

「そうだね。多分、〈決意〉が関係してるんだらうけど……………注入された決意が強すぎたのか、それとも多かつたのか、それとも……………」

——生きる意味を、無くしかけているのか。

最後の言葉だけは流石に言えずに飲み込み、不自然ではあるがそこで言葉を切る。それでもフリスクは続けようとした言葉を察してしまったのか、辛そうな顔をしながら『ACT』を押しした。そして、ただただじつと、その場で彼女から目を逸らさずに見ていた。

* You laugh, and keep laughing.

* It's so funny, you can't stop.

* Tears run down your face.

アナウンスが流れたが、フリスクはそんなことはしなかつた。ただ、見つめているだけ。

* …… what?

* You didn't do that?

『ス、ノー……ウイ……』

アナウンスが驚いたような声をあげると共に、また彼女の口から我が子を求める声が零れ出る。三日月型の氷が形成されるが、また的外れな方向に飛んでいく。

* It's so cold.

そろそろ、この寒さにも体が慣れてきた。

人の順応能力も馬鹿に出来ないなど思いながら、フリスクが『ACT』を押しして、彼

女を見つめているのを見る。

* You said something like……

* // You look horrible. //

* // Why are you even alive? //

アナウンスが流れる。だが、フリスクはそんな言葉は一言も発さず口も動かさず、辛
 そうな顔で見ているだけ。

* ……: what?

* You didn't say that?

『ス、ノー………ウイ………』

崩れ落ちかけながらも、彼女は言葉を溢す。あんな体になつてまでも、愛しい我が子
 のことは覚えているのかと、何となく思った。どうしてか、母さんのぼやけた輪郭が浮
 かんで、消えた。

三日月型の氷がまた形成され、何処かへと飛んでいく。

* It's so cold.

氷が飛んでいって少しすると、此方にターンが回る。

「お姉ちゃん」

「ん？」

『ACT』に手を伸ばしながら、フリスクは私に声をかけてくる。

「今からちよつと下らないジョーク言うけど……いい？」

「……………なんか思い付いたのね」

「うん。……友達になったあの子が言ってたジョークを、聞かせてあげたいなって。多分、あのモンスタールが言ってるスノーウィって、友達のことだと思うから」

だめかな、と寒さで青くなつた唇でフリスクは言葉を紡ぐ。震えながら頼んでくるフリスクのお願いを断る訳にもいかなないし特に反対する理由もないと判断した私がフリスクにどうぞと促すジェスチャーを返すと、フリスクは少し微笑み、彼女と向き合つて『ACT』を押す。

*—You told a bad pun about snow 《あなたは雪にちなんだ下らないジョークをかました》。

パクパクと動いたフリスクの口から出たのであろう言葉に反応したのか、彼女の顔が薄く笑つたように歪み、今にも崩れ落ちそうな体が微かに震える。

*Her ^彼 ^女 ^の ^感 ^情 ^が ^揺 ^れ ^動 ^き ^始 ^め ^た .
expression starts shift .

『ハハ……………おぼえ……………わ……………』

フリスクが言つたジョークは、彼女が昔聞いたことのあるものだったらしく、掠れた笑い声が彼女の口から溢れる。三日月型の氷が形成されるが、射出されることなくその

場に留まってただくるくる回って、消散した。

*It's so cold.

氷が消え去ると同時に、此方にターンが回る。フリスクは直ぐに『ACT』を押し、彼女に語りかける。

*You told a bad pun about snow.

フリスクがさらに彼女にジョークを言い続けると、微かにまた彼女の体が震えた。

*Her expression 彼女 の 感情 は さ ら に 揺 れ た 。 change more.

『ハハ……あり……がとう……』

フリスクがジョークを言い続けるのが優しさからくる行動だと悟ったのか、彼女は微笑むように顔を歪めながら、礼を言った。

三日月型の氷が形成されて、飛んでいく。

*It's so cold.

「あつ、フリスク、ちよつと待って！」

「え？ どうかしたの、お姉ちゃん」

『ACT』に手を伸ばして行動しようとしたフリスクを、慌てて止める。ここでもう一回ジョークを言ったら彼女は去ってしまうことを思い出したからだ。

「……………ちよつと、あのモンスターに渡したいものがあるんだ。時間をくれない？」

「? いいけど……渡すものなんてあった……?」

私の言葉に首を傾げるフリスクに、私は急いで懐中電灯を置いてリュックを降ろして、外のポケットから写真を取り出す。

「あ、その写真って……ギフトロットの顔についてたやつだよね? まだ持ってたの?」

「うん、何か持つとかなないといけない気がしてさ。まさかここで使うことになるなんて思わなかったけど」

嘘です、最初からここで使う予定でした。

フリスクに嘘を交えて言いながら、リュックを背負い直す。

「……多分だけど、ここに写ってるモンスターって、フリスクがさっき言ってた友達だよね? で、こっちが多分あのモンスターだよね? 形も似てるし。……家族なら、返してあげた方がいいかなって」

「! 成る程! それなら返してあげなきゃね!」

写真の中で笑う家族を指差しながら言う私の言葉に納得したのか、フリスクは目を輝かせて頷いた。フリスクは『ACT』に伸ばしていた手を降ろし、私がさっきフリスクに向かったジェスチャーをして、彼女の傍に行くことを促す。どうやら待っていてくれるらしいと見当づけて、私は彼女に早足で近付いた。

「……………あの」

彼女に近付く毎に周りの気温が下がっていくのを感じながら、彼女に話しかける。すると、彼女は崩れ落ちそうな顔を此方に向けてくれた。どうやら声は聞こえているらしい。

「この写真のこのモンスター、貴女ですよね」

三匹（と数えればいいんだろうか）ほどのモンスターが映る写真の中の一番美しい鳥のモンスターを指差しながら問うと、彼女の目にあたる部分が、見開かれたような気がした。

「……………そう……………よ……………」

「……………やっぱり、そうですか」

掠れた女性の声の返答が返ってきて驚きつつも、話を続ける。

「……………どこ……………で、それを……………」

掠れ掠れに、彼女は問うてくる。真実を伝えるべきか悩んで、私はこう答えた。

「……………とあるモンスターが持っていたものを、譲ってもらったといいますか、何というか……………」

真実を暈しながら伝え、話を戻す。

「……………とにかく、これは貴女が持っているべきものだと思うので、お返しします。どうか

受け取ってください」

そう言って、溶けかかっている彼女の羽の部分を取る。触った瞬間凍るのではないかと思わんばかりの冷気が手に伝わってじんじんとした痛みを訴えるが、無視してそのまま写真をもっと乗せて、握らせる。

「……………ああ、ああ……………ス、ノーウェイ……………あなた……………」

そろそろ本当に無視できないくらい痛くなってきた手を離して一步距離をおくと、彼女は、スノードレークのお母さんは、写真を愛しそうに眺め、大事そうに抱え込んだ。

「……………フリスク、お待たせ。もういいよ」

それを見届けてからフリスクの横に戻り、『ACT』を促す。すると、フリスクはただ私を、見つめた。

「……………どうしたよ」

「……………うん、ぼくのお姉ちゃんはやっぱ優しいなあって思っただけ」

フリスクの視線に耐えきれなくなってしまうと訊けば、フリスクは小さく微笑んでそう言った。その言葉に思わず目を見開くが、直ぐに苦笑する。

……………私が優しいだなんて、有り得ないのに。

「……………さあほら、そんなこと言っていないでやっちゃいな」

「うん」

内心自嘲しながらフリスクに行動を促すと、フリスクは直ぐに『ACT』を押しした。

* You told a bad pun about snow.
彼女は完全に大人しくなつた。

フリスクが行動を起こすと、アナウンスが流れる。スノードレーク君のお母さんを見ると、本当の所はどうなのかは分からないが、アナウンス通り彼女は落ち着きを取り戻したようだった。

「……………一人、とも……………」

ふと、耳を澄まさないで聞こえないくらいの声が、彼女の口から聞こえた。

「……………あり、がと……………う……………」

そう言つて、彼女は微笑んだような気がした。

ゲームだった時にはなかった言葉に、思わず目を見開く。

そして、私は、

「……………どういたしましたして、フリスクの友達のお母さん」

一応、彼女に言葉を返した。

*YOU あなたは勝利した WON!

*You と earned を OXP 得 and た Ogold.

そのまま戦闘は終了し、彼女は何処かへと移動し出す。部屋に立ち込める冷気を引き連れて去っていく彼女の背中を見送り、見えなくなると同時に、世界に色が戻ってきた。「……………はあ、終わったか」

戦闘が終わった安堵からか、思わず溜め息を一つ吐く。

「お姉ちゃん、お疲れ様。さっきあのモンスターに触ってたけど大丈夫……………じゃないよねこれ!? つめたい!!?」

「え? ああ……………」

此方に近付いてきたフリスクに触れていた手を思いつきり握られる。そのまま見えた私の手は、酷く赤くなっていた。フリスクの手の温度がじんわりと伝わってきて、感覚が戻ってくる。

「私の手よりフリスクだよ。唇真っ青だけど大丈夫なの?」

「いや、ぼくはもう暖かくなってきたから大丈夫だけど……………これ、大丈夫……………? 凍っちゃってないよね?」

「ああ、うん、感覚はあるから大丈夫だよ」

心配そうに私の手を眺め、両手で包んだり、暖かい息を吹き掛けたり、擦ったりして暖めてくれようとするフリスクの頭を、これが本当の『手当て』か、なんて思いながらもう一方の手で撫でる。

……………万が一凍傷になっても、アイテムあるから大丈夫っちゃあ大丈夫なんだよなあ。壊死したら不味かったけど、細胞が一瞬で壊死するレベルの温度じゃなかったっほいし、触ってるのはほんの一瞬だけだったし。

「……………うん、大分感覚戻って暖まってきたよ。もう大丈夫」

「本当？ 本当に大丈夫？」

「うん、本当に」

暫くフリスクに暖めてもらうと、大分感覚が戻ってきた。その事をフリスクに伝えると、フリスクは心配そうに私を見上げてくる。それに笑顔を心掛けて頷くと、フリスクは最後に完全に暖まるようにか、ぎゅーっと手を握り締めてくれた。そして、そっと手を離れた。その手を握ったり開いたりしてみる。感覚に、違和感はない。それでも一言言及するなら、いつもよりちよつと冷たいかなと思うぐらいだ。

「……………うん、もう大丈夫だよ。フリスクが暖めてくれたから、大分早く治った。ありがとう、フリスク」

「どういたしまして。お姉ちゃんの手が凍っちゃうなんてやだもん」

暖めてくれたフリスクにお礼を言い、もう一度頭を撫でる。少しの間撫でてから頭から手を離し、スノードレック君のお母さんが居た場所に目を向ける。

「……………あ、フリスク、青い鍵あつたよ」

「え？」

「ほら、彼処」

床に置いておいた懐中電灯の光をつけ直して、鍵のある場所を照らす。青い鍵は、その光を反射して鈍く青色に光っていた。

「あ、本当だ……………これで最後、かな？」

「そうだと思うよ。黄色い鍵と赤い鍵はもうセットしてあるし、あとの二つは嵌めるだけ」

鍵に駆け寄って拾い上げ、携帯を取り出してキーチェーンに取り付けながら訊いてきたフリスクに頷く。

「……………そっか。じゃあ、ここももう終わりだね」

「……………そうだね」

鍵を取り付け終わったフリスクが携帯をしまつてそう言った。その言葉も肯定する。

……………そうだ。あとは鍵を嵌めて、主電源を入れれば、ここにはもう戻つてこれな

い。正真正銘の、最後だ。

「……………お姉ちゃん？ どうしたの？」

不意に、フリスクが私に声をかけてくる。

「ん？ ああ、ごめん、ちよつと感慨深くて。まさか、地下でこんな大冒険をするとは思わなかったからさあ」

「ふふふ、確かにそうだね」

そう言つて誤魔化すと、フリスクは柔らかく微笑んでくれた。

その笑顔に、胸が暖かくなる。

「……………さてと、行こうか。鍵を嵌めて、次に進まなくちやね」

「そうだね！ 行こう、お姉ちゃん！」

差し出されたフリスクの手を繋ぎ、しっかりと握り返す。そして、次の部屋へと足を踏み入れた。

あと少しだ。

………あと、
少し。

16. True (真実)

【Lily】

部屋の中に入ると、狭い小部屋の中にぼつんと、装置があるのが見えた。フリスクを追い越してスロットの色を確認すると、鈍く光る緑色が見えた。

「お、あつたあつた。フリスク、緑色みたいだよ」

「ほんと？　じゃあ、嵌めちやおつか」

後ろのフリスクに声をかけると、持っていたメモを床に置き、フリスクは此方にやってくる。そして携帯を取り出してキーチェーンに取り付けられている緑色の鍵を外して、穴に嵌め込んだ。カチ、という音を立てて鍵は穴に嵌まり、作動し始めた。

「これでよし、あとはさつき青の装置だね」

「そうだね。さつきと行こうか」

そう言いながら操作を終えたフリスクと部屋を出ようとした、その瞬間、

ふっと、懐中電灯の光が消える。

「……………えつ、嘘でしょ」

目の前で起きた現象が信じられなかった私は、思わずボタンを連続して押して、点け

直そうと試みる。が、現実は無情で、カチカチと虚しい音を立てるだけで、懐中電灯の光が灯ることはなかった。

「えー……………マジかよ、そんなに残量無かったのかさっきの電池」

「……………つかなくなっちゃった？」

「うん、もうダメみたい」

心許ない光だったとはいえ、確かに明るかった光が消えてしまったからか、フリスクが不安そうに腕にしがみついてくる。その頭を撫で、出来るだけ優しい声を心掛けて声をかける。

「……………大丈夫だよ、多分もうここには驚かしてくるモンスターはいないさ。まあ、居たとしても私が何とかするからさ、進もうよ。ね？」

「……………うん」

「よし、いい子だ。じゃあ、行こうか」

頷いてくれたフリスクの片手をしっかりと握り、腕に引っ付かせたまま薄暗い研究所の中を進んでいく。なるべく足元に気を配り、無いとは思いますがそれでもバタフライエフェクトが起こって襲ってくるモンスターがいる場合を考えて直ぐに対応出来るように周囲への警戒は怠らずに、フリスクの歩みに合わせてゆっくり進む。それでも確実に進んでいき、セーブポイントの光の前までやってきた。

「あ、セーブ……」

暗闇の中でも尚明るく光るその決意に、フリスクは私から離れて近寄っていく。セーブを行おうらしいな、と判断し、その場で待機する。

「……………お待たせ、行こう」

「ああ」

少しすると、空中で手を彷徨わせていたフリスクが光の前から戻ってきた。そして、また先程と同じように私の手を繋ぎ、腕にしがみつく。可愛いなあと思いつつ、また歩幅を合わせて歩き、花の部屋へと足を踏み入れる。また、花の匂いが鼻を擦った。

「……………」

歩きながら、植木鉢に一本一本植わっている無数の金の花々を見る。

……………これで、あの子は……………

頭に浮かびかかった考えを振り払い、先を進むと、直ぐに青い装置があつた部屋に辿り着いた。

「……………ここであつと、待っててね」

「うん、分かったよ」

フリスクはまた腕から離れ、装置へと歩んでいく。部屋の入り口でフリスクが鍵を外そうとして鳴る小さい金属音を聞きながら、フリスクが鍵を装置に嵌めるのを待つ。

カチ

という音が小さく響いて耳に届き、装置が作動したのだと悟った。

「終わったよ」

「お疲れ様。じゃあ、これであの部屋に入れるね」

「そうだね。……戻ろっか」

戻ってきたフリスクと手を繋ぎながら短く会話をし、また歩き始める。無言で道を進むその時間が、私には酷く短く感じられた。

「あ、光ってる」

「ほんとだ、開くかな」

「多分ね」

大きな扉があった部屋まで戻ってくると、最初は赤いランプしか光っていないかった扉のランプが、四つは全て点灯していた。その状態の扉に近付くと、先程まで全く動く気配も無かったのが嘘のように、シュツという音を立てて、横に開いた。その先は、ぼつかりと闇が口を開けていた。

「……………開いたな。さ、行こうか」

「……………うん」

フリスクと短くやり取りをして、中に入る。

「……………？ あれ、ここって、エレベーター……………？」

薄暗い廊下を進んでいくと、不意に明るい部屋に出る。どうやらこの部屋だけは非常灯が作動しているらしく、いやに明るかった。自分の目が暗いところに慣れていた所為もあるんだろう。その部屋を見渡したフリスクが、不思議そうにそう呟く。

「みたいだね。動かないみたいだけど」

「だよね」

壁にあったスイッチを押してみても、カチカチという音が鳴るだけで何の反応もない。

「まあ、帰りはこのエレベーターに乗っていけば帰れると思うよ」

「そっか。……………ねえ、行こうよ」

私の言葉に頷くと、フリスクはしがみついている腕を引っ張り、先を急かしてくる。

「そうだね、行こうか」

先を急ぐフリスクに頷き、また順路に従って一本道を進む。エレベーターを出て少しすると、また廊下に出た。

「あ、パネルだ」

「え？ ………………ああ、そうだね」

薄暗い中で目敏く壁にパネルがあることに気付いたらしいフリスクの声に吊られて

壁を見ると、ぼんやりとだが黒く四角い何かが浮かび上がる。思っていたよりかなり見辛い。本当に電池がちやんと新しいやつか確認してくるべきだった。

「……………あれ、表示されないね」

いつもは一步離れた距離でも反応するパネルが作動しないことに驚いたのか、フリスクがそう声を溢した。

「あー……………多分、この廊下の電源は主電源が担ってるんじゃないかな?」

「ああ、成る程。だからかあ」

私が首を傾げるフリスクに自分の解釈を伝えてみれば、フリスクは納得したように頷く。

「じゃあ、きつと彼処のパネルも見れないね」

「そうだね」

奥にあるのであろうパネルを指差しながら言うフリスクの言葉に頷き、パネルに近づいて、触れる。触れた指を動かせば、指に埃がついた。

……………これが、この研究所最後のパネルか。

「……………お姉ちゃん?」

「あ、ごめん。行こうか」

私の突然の行動を疑問に思ったらしいフリスクの不思議そうな声で我に返る。何を

してんだか、と自分に呆れながら、足を進め、廊下を進んでいく。そして、廊下の最奥で口を開けていた部屋の中に、入り込んだ。

「……………あれかな？」

「だろうね」

部屋に入ると、そこそこ広い空間に出る。色々なパイプやら機械やらがある中で、奥に鎮座する一番大きい機械を見る。……あれが、ここでの最後のギミックだ。

足を動かし、電源装置へと近付いていく。数歩動かせば、すぐにその装置の前へとやってこれた。

「これを、押せば……………」

私の腕に絡ませていた腕をほどき、フリスクは私より先に装置の前に立つ。そして、ボタンを押すために手をゆらりと動かした。

ガチン

何かが作動する、音がした。

それと同時に、

ずるずる、
ずるずる

どちやり。

質量のある何かが、落ちて、引き摺られる音がした。

「!!」

瞬時に振り返れば、暗闇の中で蠢きながら此方へと近付いてくる、白いモノが見えた。

ずりずり　ずり、ずり　ずる　ずるずる

不規則な速度で近付いてくるそれを、直ぐにアマルガメイツであると判断する。

「ひっ……っ！」

後ろで、アマルガメイツが此方に近付いてくることに気が付いたらしいフリスクが、怯えた声を出した。

フリスクを背中に隠し、出来るだけ近付いてくるアマルガメイツと距離を取ろうとするが、後ろに逃げ道は無い事を思い出し、思わず舌打ちをする。

——
ねえ

おなかすいたよ

ごはん ごはん

ねえ　　ねえ

何故か、ねだられているような声が聞こえた。とても幻聴とは思えないそれは、目の前のアマルガメイツから発せられていると気付く。

「……………私は餌じゃねーぞ」

そう返しながら、アマルガメイツを睨み付ける。

——おなかすいた　おなかすいた

それでも、ソイツらは亡者のようにゆらゆらと揺らめきながらただ空腹を訴えてくる。

「お姉ちゃん……………ッ」

震える手で、フリスクは私の手を掴んでくる。

繋がった手をちらりと見て、そして目の前に迫ってきたアマルガメイツを見て、私は覚悟を決め直す。

そして、此処で一度も使わなかったポケットのナイフに、手を伸ばした。

「ちよつと！
待って!!!
」

不意に、大きな声が響く。

突如響いたその声に、反射的に体が跳ねる。

ピタリとアマルガメイツの動きが止まり、後ろを振り返った。

それに乗じて、先を見ると、そこには……………

【Alphys】

「……………Alphys?」

走ってきたうえに、慣れない大声を出したからか、喉が少し痛い。私の先程の大声に驚いて目を見開き、私を見る大きい方の人。その目線から逃げ出したくなるのを堪え、私は彼女達を襲おうとしていたAmalgamatesに駆け出し、近寄る。

「いま君たちにご飯持ってくるから、ね!」

早口で彼らにそう言えば、彼らは機嫌を良くしたのか、笑顔を浮かべて彼女達から離れていった。

「……………」

「……………」

「……………」

彼らが去ると、安全になったのを察したのか、小さい方が大きい方の人の背中から出てくる。

気まずい沈黙がその場に流れた。

……………つて、これじゃダメじゃない！

そう自分を叱咤して、私は顔を上げて警戒を解いた彼女達を見る。

「……………ごめんなさいね。あの子達時間通りにご飯を食べられないとおねだりが激しいの。きつと、あなたたちの持つてるポテチに反応しちゃったのね、ええと……………」

「……………いや、助かったよA l p h y s。もう少し君が来るのが遅かったら、私達どうなってたか……………ありがとう」

私が何とかそれだけ言うと、大きい方の人は浮かべていた無表情を崩して、小さく微笑んだ。その笑顔に、無性に嬉しくなった。

間に合つて良かったと、心の底から思えた。

「い、いいのよ！ 何も大したことはしてないわ！」

「ええ、そうかな？ 普通はあんなきついこと言われた相手なんて助けないと思うけどね」

そう言つて、大きい方の人は、はは、と笑う。

「……………とにかく！ 電源が落ちちゃったから、私はそれを戻しに来たんです！」

その顔が見たくなって、私は話を本題に無理矢理逸らした。

「でもどうやらあなたが先に来てくれたみたいですね」

逸らしそうになる視線をどうにか逸らさないように、彼女達を見つめて、話を続ける。

「多分、あなたにはすぐく面倒をかけてしまったかも……………」

「うん、結構大変だった」

大きい方の人は、私の言葉に迷わず頷いた。

「やつぱり、そうですね……………で、でもあなたが助けに来てくれてとても嬉しいわ！」

「……………そう」

一瞬、またいつものように落ち込んでしまいそうになる。それを振り払つて私が声を

大きくして話を続ければ、二人は目を丸くして私を見る。

「……………それで、私達は真実を知りにきたんだけど、話してくれるんだよね？」

その言葉に、思わず体が跳ねる。

「……………ええ、話すわ」

「……………そう、じゃあ、お願い」

覚悟を決めて頷いた私を見て、そのまま黙り込んだ二人に、私は自分の思いを打ち明ける。

「ここまで真実を知りに、追いかけてきてくれた人達に。」

「言った通り、私は怖かった……………もう戻れないかもしれない……………あ、でも、それは全然あの子達の所為じゃないんです！」

私が必要な声でそう言えば、彼女達はじっと私を見て口を噤む。

「どうやら、私の話を聞いてくれるらしい。」

「勝手だけれど、そう判断して、私は自分の思いを言葉にする。」

「私が心配していたのは、自分が恐ろしさのあまり……………真実を言えなかったり……………ここから逃げ出したり、あるいは……………卑怯なことをしちやうかもって」

私は言葉を続けようとする。

でも、そこで一瞬、私は自分が言おうとしている事を本当に彼女達に伝えていいのか、

戸惑ってしまおう。

これ以上嫌われてしまわないか。

これ以上離れていってしまわないか。

そんな思いばかりが、頭を過る。

「……………ああ……………私……………」

……………けど。

「ちゃんとあなたに打ち明けなきゃ」

他でもないこの人達に、『真実を話す』と、覚悟を決めたんだ。

そう思い直して、言葉を続ける。

「……………多分ご存知の通り、王様はソウルの本質を研究するように私に尋ねたの」

ソウルが痛いほど跳ねる。

震える唇で、何とか言葉を捻り出す。

「研究の中で私は、〈決意〉と呼ばれるエネルギーを抽出した」

癖で逸らしてしまった視線を、もう一度上げて、しっかりと彼女達を見る。

「それを瀕死のモンスターに注入し、死後もソウルを存続させようとした。……………でも、実験は失敗した」

そこまで言って、自分の脳裏に浮かぶのは、あの日のこと。

「見ての通り、モンスターの身体は人間と違ってとつても不安定……」

自分が犯してしまった、罪。

「純度の高い〈決意〉は、物理的問題を引き起こして」

集めたモンスター達が、苦悶の表情を浮かべて、どろどろに溶けて行って、

「彼らの身体はみるみる溶け始め、元の形を保てなくなってしまった。あっという間に、全ての被験者が一斉に溶け合って……」

そして、

「この有様よ」

自分でも思ったより、冷たい声が出て驚く。
やっぱりまだ、自分をあんまり好きになれていないみたいね。

「皆を見て、私思ったの……………」

昔の自分が取った行動に、今でも腹が立つ。

私は罪から目を背けて、

「こんなこと皆の家族に言えないって」

糾弾されることから、逃げようと、したんだから。

「誰にも言えない」

でも、それでも、その時はそれしか私には無かったのと、誰に言うでもない言い訳を
考えてしまう自分に呆れてしまう。

「誰が何と私に尋ねてこようとも」

自分が、嫌になる。

「私はあまりにも恐ろしくて仕事の手が付かなくなった、そう……私がしてきたことは、全て取り返しをつかない失敗ばかりだったんです」

——……でも。

「……………でも」

それでも。

「たった今、私はさっぱり心を入れ替えたわ」

そんな嫌な自分を変えたいから。

「皆に私がしてきたこと全てを話そうと思っっているの」

少しでも、『自分』を好きになりたいから。

「……………簡単なことではないでしょうね。正直になつて……………自分を信じるのは……………」

分かりきったことを口に出して、思わず目を床に落としてしまう。

……………実際、今でもやっぱ怖い。

今まで散々無視してきた遺族のモンスターに、なんて言われるのか。そして、今の私は、『王室直属科学者』という立場にいるからこそ成り立っているものなのに、その科学者が、とんでもない失敗を、罪を抱えていることが皆に知られたら、皆に何て言われてしまうのか。そればかりが頭の中を支配して、動けなくなってしまう。

「今までよりずっと足掻かなきゃいけない」

ただでさえ、今もあんまり自分が信じられないんだもの。

「それに台無しにしてしまうこともあるでしょう」

……でも、そんな私を、

「でもね、心の中には、私の背中を後押ししてくれる友達がいるから……」

助けてくれる、友人達がいる。

「だから一人でいるよりずっと楽に立ち直れる筈だって、分かってるの」

だから、

「ありがとう」

色んな意味を込めて、私は二人に頭を下げる。

こんな所まで来てくれてありがとう。
真実を知りに来てくれてありがとう。

そして、『私』に踏み出す勇気をくれて、ありがとう。

そこで、ずるずるといふ音が聞こえる。頭を上げて周りを見ると、そこには彼らがい
た。

……どうやら、待たせ過ぎちゃったみたいね。

「……さあ、行きましょう、みんな。もう皆の家に、帰る時間ですよ」

そう彼らに言つて、私はその場から歩き出す。

「……………ねえ、Alphys」

そこで、後ろから中性的な声が聞こえた。
どくりと、ソウルが跳ねる。

「……………なに、かしら」

呼び掛けに応えて、足を止めて振り返る。見れば、大きい方が人が、私をじつと見つめていた。

「……………『他人』に許されたからといって、『自分』に赦される訳じゃないんだよ」

ぼつりと、大きい方の人は、言う。

「犯してしまった罪からは、絶対に逃げられないんだ。抱いてしまった罪悪感、自分の心の中に深く深く根を下ろして、もう二度と消えてはくれない。いつまでもいつまでも追いかけてくる。もう君は知ってると思うけどね、それは、とても辛いんだよ」

「……………何を、言ってる……………」

まるで自分がそうであるように、大きい方の人は言う。

「……………だから」

そこで、大きい方の人は、にっこりと笑った。

画面越しに見ていた、私には一生向けられないと思っていた、その笑顔を浮かべた。

「いつか君が、その罪を乗り越えて、受け入れて生きていけるようになるのを、祈ってるよ」

その一言が、胸に染み渡る。

じわりと広がったその言葉に、思わず泣きそうになる。

「……………ねえ！」

視界がぼやけてくるのを瞬きして誤魔化して、私は彼女に声をかける。

「私、あなたたちに酷いことを言って、騙すようなことをたくさんしてしまったわ」
勇気を出して、私は彼女に言いたかったことを言う。

「だから、きつと嫌われてると思うし、資格なんてないとは思うの。……でも！」
これが、『私』を好きになる為の一步になると思ったから。

「きつと、ずっと先になってしまいかもしれないわ、けど………！」

私の本心を、言う。

「私が自分を好きになれたら、その時は……友達になって、くれないかしら……？」
尻すぼみになってしまったが、私が彼女達を見つけた時からずっと抱いていた願いを、ちゃんと言い切った。

もし、彼女達がこの申し出を断ったとしても、別に構わない。でも、言つてはおきたかった。

ちらりと、彼女達を伺い見る。

少し驚いたような顔をしていた彼女達は、お互いの顔を見合わせると、少し笑つて、私を見る。

「ああ、もちろん」

そして、優しい笑顔で、頷いてくれた。

17. 旅路を省みて

〔Lily〕

「……………ありがとう……………」

そう言って、アルフィスは一粒涙を溢し、今度こそ私達に背を向けて、彼らと歩いていった。その背中をぼんやりと見送り、彼女達の背中が見えなくなって少しすると、フリスクが口を開いた。

「……………行っちゃったね」

「そうだね」

ぼつりと、作動し始めた機械が出す音の中で眩かれたその言葉に、肯定を返す。

「ぼくもそろそろ行く？」

「……………そうだね、行こうか」

フリスクの提案に頷き、ポケットのナイフに伸ばしていた手を降ろし、離れていたフリスクの手を握る。

「あ、そういえばさ、さっきの廊下のパネル、読めるようになってるかな」

不意に思い出したように、フリスクの口から何気無く言われたその言葉に、足を踏み

出そうとした身体が思わず跳ねる。

「あー………多分、見れると思うよ」

「だよね。読んでいっていい?」

身体が跳ねたのをフリスクから誤魔化すように言葉を捻り出せば、フリスクはそう言った。

「もちろん」

その言葉に頷き、もう一度歩き出す。部屋から出て先程の廊下にまで戻ると、一番近場のパネルの前に立つ。電力が通ったからか、先程うんともすんとも言わなかったパネルは、ピツ、という音を立てて作動し、内容を表示する。

その内容を、覗き込んだ。

『報告書』

被験体を決めた。

驚かせてみたいから、アズゴア王にはまだ話していないけど……

王の庭園の中心に、素晴らしい実験台があるのだ。

一番目の金の花、他のどの花にも先んじて育った花だ。

この花は外界からやってきた。

女王が城を捨てて去る直前に現れたのだ。

もし……………」

本来ソウルを持たないものが、生きる意志を得たら、何が起こるだろうか？」

「……………えっ……………？」

報告書を読み終わつたらしいフリスクが、愕然とした様子で声を溢す。

「お姉ちゃん、これ、あの青色の装置に繋がる廊下にあつた花達以外にも、〈決意〉を注ぎ込んだ花があつた、つてこと……………？」

そして、困惑した顔で、私に尋ねてくる。

「……………多分、そうだろうね」

フリスクのその言葉に、私は肯定を返す。ゲーム通りである事に安堵すればいいのか、分からなかつた。

「取り敢えず、次のパネルを見てみようよ。何か分かるかもよ？」

「そうだね……………」

フリスクの手を引き、次のパネルの前に立つ。最後のパネルの前に立つと、ピツという音を立てて、内容が表示された。

その報告書の内容は、たった一言。

『報告書18』

花が行方不明になった。』

それだけだった。

「……行方不明って、花が持つてかれちゃったってこと……?」

「多分違うと思うよ。それはこの報告書を書いたモンスターも思い付いただろうし、直ぐに探したんじゃない? それでも見つからなかったってことだと思うよ」

首を傾げるフリスクにそう言葉を返すと、フリスクは考え込むように腕を組む。そしてその場で暫くそのままじっとしていると、突如目を見開いて勢いよく私を見た。

「………ねえ、お姉ちゃん。確か、王様の子のアズリエルって子は、お庭で死んじゃって塵になって、お庭にその塵はばらまかれたんだよね?」

「らしいね」

そして私に確かめるように、ゆっくりと言葉を投げ掛けてくる。

その言葉を、肯定する。

「それで、ここに集められたモンスター達って、灰になっちゃいそうなモンスター達が集められたんだよね。それで、〈決意〉を入れられて、生き返って、それであんなことになっちゃったんだよね」

「………うん」

続けられた言葉を、肯定をする。

「………ねえ、お姉ちゃん。もし、花に入れられた〈決意〉に反応してアズリエル君

の塵が花と混ざったら……」

——身体は溶けないで、生き返れるかな？

自分で言っていることが信じられないような顔で、フリスクは言う。その問いに、
「……………じゃなきゃ、『行方不明』なんて事態にはならないだろうね」

遠回しに、肯定を返した。私のその言葉に、フリスクは溢れ落ちそうな程目を見開いた。

……………どうやらフリスクは、私と同じ結論に至ったらしい。

あの花のモンスター……………フラウイーの正体は、本当は誰なのか。

そしてどうやって、彼は生き返ったのか。

理由は簡単だ、彼もまたアマルガメイツ化したモンスターだったというだけ。ただし、ここに集められたモンスターとは違って、彼は完全に死んでソウルを無くし、塵となくなってしまった後で、混ざった対象は無機物だったという条件下で造られた、特殊なアマルガメイツだった訳だけだ。

「そんな……………まさか、本当に……………」

気付いてしまった事実のショックが大きいのか、フリスクは困惑したような顔と声で

言う。

「……………フリスクが思ってることは、多分ほぼ事実に近いだろうよ。それで、間違いないと思う」

それでも、私は肯定した。

「……………そんな……………」

やはり信じられないのか、フリスクは顔を伏せてしまった。

「……………ビデオではあんなに明るかったアズリエル君が、あんな風になっちゃうなんて……………」

……………まあやっぱり、信じられないよな。

フリスクの気持ちは、分からなくもなかった。

私も初めて知った時は、本当にびっくりした。信じられなかった。普通の子供だった彼が、あんなになってしまふなんてね。……………あれが、ソウルを失って、感情という大切なものを無くしてしまつて狂つてしまった生き物の末路だと思つと、ぞつとする。

「……………まあ、ここでうだうだ言つても仕方ないよ。もしそんなに気になるなら、今度彼に会つた時直接聞けばいい話じゃないか。とにかく今は、ここを出て、先に進もうよ。ね?」

「……………そう、だね」

私が出る限り優しい声で提案すると、フリスクは顔を上げて、私の手を握ってくれ
る。どうやら先に進んでくれるらしい。

「ん、それじゃあ行こうか」

フリスクの手を引いて、廊下を戻っていく。廊下の先のエレベーターの前までやって
きて、それに乗り込む。すると、

ブルルル……………

不意に、後ろのフリスクから、音が聞こえる。

電話がかかってきたことを告げるその音は、研究所のしんと静まり返った闇の中に、
大きく響いた。

「……………こんなところで、電話？」

「誰からだろう……………？」

二人揃って、首を傾げる。まあ、私のは、ブラフだけでも。未だ鳴り続ける携帯を引っ張り出したフリスクは、相手が表示されているのであろう画面を見る。

「……………『非通知』……………」

電話帳に登録されていない『誰かさん』からかかってきている事を表す文字を読み上げ、フリスクは顔を顰める。そして、恐る恐るボタンを操作し、耳に宛てた。

「……………」

もしもし、とでも言ったのか、フリスクの口がパクパクと動く。

そして、電話口から、知らない声が流れ出した。

『Chara……………そこにいるかい?』

「!!」

フリスクの顔が驚愕に染まる。フリスクは勢いよく携帯を耳から離し、画面を見る。

『本当に久しぶりだねえ……』

そこで、私は違和感を覚えた。

『でも君はよくやってくれたよ』

どうして、フリスクは携帯をスピーカーモードにしていないのに、

声が、私にも聞こえるのだろうか。

「!! フリスク、切れ!!!」

起きていることの異常性に気付いて、思わず、私はフリスクに叫ぶ。だが、フリスクは石にでもなつてしまったように、画面を見つめて動かない。

『君のおかげで、何もかもが上手くいったよ』

そんな中でも声は続ける。

『Chara……それじゃあまた』

そして、その言葉を最後に、ぷつと電話は切れてしまった。

それと同時に、入ってきたエレベーターの扉が閉まり、突然上昇を始める。

「きやつ?!」

「伏せろっ!」

エレベーターが発進したことによって生じた重力が、重く身体にのし掛かる。当然突

然かかったそれに対処出来る筈もなく、フリスクの身体は床に倒れ込んだ。そこを抱き寄せて地面に伏せ、着いた時の衝撃に備えた。

ガコンツ

大きな音を立てて、エレベーターが停止する。それと同時に、かかっていた圧が消え、ふつと身体が軽くなった。

シユツ

という音が、耳に届く。伏せていた顔を上げて、扉の方を見ると、固く閉ざされていた扉は開き、光が差し込んでいた。

「……………フリスク、着いたみたいだよ」

腕の中に閉じ込めていたフリスクに声をかけ、そつと回っていた腕を離す。フリスクは身動きして起き上がり、先程の私のように扉の方を見た。

「……………ハハ、つて……………」

そしてふらりと立ち上がると、扉の方へと歩いていく。それに続いて、私も外へと出る。外には見覚えのある灰色の殺風景な景色が広がっていた。

「……………お城……………だよね」

「だな。どうやらエレベーターはここに繋がってたらしいね」

フリスクと一緒にぼんやり廊下を眺め、ふと、振り返る。

「……………!?!」

そして、思わず息を飲んだ。

先程乗ってきたばかりのエレベーターの扉がまた固く閉ざされ、まるで初めからそうであったように蔦に覆われていたからだ。

「フリスク、後ろ見ろ」

「えっ? ……………えっ、なんで?!」

未だぼんやりとしていたフリスクに声をかけ、後ろを見させる。フリスクは振り返った先で蔦で覆われてしまったそれを見て、私と同じく目を見開いた。そしてその蔦に駆け寄ると、蔦を退かそうと考えたのか、無数に枝分かれする蔦の一本を掴み、引っ張る。

「……………ダメだ、びくともしないよ、これ」

暫くそのまま剥がそうと試みたフリスクは、やがてどうにもならない事に気付いたらしく、手を離して戻ってくる。

「さっきの知らない人からの電話といい、この蔦といい、本当になんなのもう……………」

「まあまあ」

ちよつと怒った様子で頬を膨らませるフリスクを宥め、私も蔦を観察してみる。

……本当に先程まで使えた筈の入り口が、最初からそうだったようにこんなに成長した蔦に覆われている。葉はかなり元気なようだし、蔦の太さもナイフで切りきれるか怪しいぐらいに太い。明らかに異常な育ち方だ。何らかの魔法が働いているのか……？

……駄目だ、これ以上考えたら多分進めない。

「……………とにかく、もう戻れないみたいだね」

「そうだね。……………もう、先に進むしかないんだね」

目の前の蔦に関する考察を放棄して、フリスクに声をかける。フリスクは、私の言葉に頷き、先程の顔を消して覚悟を決めたように真剣な顔になる。

「あとは正真正銘、王様だけだ」

フリスクが、ぼつりとそう呟く。その決意の滲む声に、私の心臓が跳ね、意識が引き締められていく。

「……………その王様を待たせちゃいけないし、そろそろ行こうか」

「うん、行こう」

私の言葉に頷いたフリスクの手を握り、また先を進み出す。先程使ったものとは別のエレベーターに乗り、夕焼けの光が差し込む廊下の前までやってくる。

「……………」

黙って、暖かい橙色の光で満たされている廊下を進んでいく。

心臓が、歓喜でドクドクと跳ねる。

やつとここまで来れた。

この旅も、私の計画也大詰めだ。

ふと立ち止まって、夕陽を取り込む硝子張りの窓を見る。窓に施された天使を象った装飾を見て、次にフリスクを見る。

「……………どうしたの?」

一連の私の行動を不可解に思ったらしく、フリスクは首を傾げ、尋ねてくる。

「……………いや、フリスクは今日も天使だなあつて思つてさ」

「えっ。ちよつと、どうしたの、急に…………」

思つた事を誤魔化さず言えば、フリスクは目を見開いて頬を少し赤くした。

「あはは、ごめん、ちよつと思っただけだから気にしないで」

「も、もう……」

この後に及んで何を言っているんだ、と言いたげなジト目でこちらを見上げるフリスクの頭を撫でて、言う。

「……………やり残したことは、無いね？」

確認の意味を込めて、フリスクに問う。まあ、あつたとしても、戻れはしないけど。私の問いに、フリスクは目を見開き、そして考え込むように顔を伏せた。夕陽の影になつて、顔が見えなくなる。

「勿論だよ。……………お姉ちゃんこそ、やり残したこととかない？」

暫くして、フリスクは顔を上げて頷く。そして、私に同じ質問を返してきた。

「私？ 私は……………」

その問いを受けて、私は目を閉じる。思い出すのは、ここまでの旅路。

トリエルさんと家族のように話すことが出来た。

パピルスと友達になれた。

アンダインと親友になれた。

メタトンと和解できた。

アルフィスと友達になる約束をした。

サンズとは……………最後まで友達には、なれなかったけど。

沢山後悔した。沢山間違った。

でも——……………

「やり残したことは、もう何にもないよ」

私は目を開き、此方をじっと見上げるフリスクに、笑顔でそう言った。

「……………そっか。ならもう大丈夫だね」

「ああ。フリスクこそ、覚悟はいいね？」

「もちろんだよ」

二人で頷き合い、笑い合う。

「……………さあ、行こう。全てを終わらせに」

「うん！」

夕陽が差し込み、鳥の歌声が聞こえる中、お互いの手を握り合い、横に並んで進む。

最後の闘いに、赴いた。

モンスター達を封じる結界の前にまで戻ってきて、セーブをしてから足を踏み入れる。

「おや……………随分早かったね？」

私達が戻ってきたのを察したのか、私達が何か言う前に、アズゴア王は振り返らずに背中越しにそう言った。

「満足したかい？」

その問いかけに、フリスクと顔を見合わせる。そして、何も言わずにお互いの手を強く握り返し、頷き合う。

全て、もうやりきった。

これで、正真正銘の最後だ。

「……………はい。やり残した事は、もうありません」

その問いかけに、フリスクは深く頷き、私はきつぱりと、背を向け続ける彼を見据えて告げる。

「……………分かった……………」

重々しく、私の言葉を聞いて、彼が頷いたのが見えた。

「遂に、この時がきたんだね」

そして、彼はゆつくりと、名残惜しそうに振り向いた。

「準備はいいかい？」

アズゴアがそう言うと、するりと、地面から七つの容器が現れる。一つを除いて全ての容器の中に、色とりどりのハート型のモノが入っている。——ソウルだ、と気付くのに然程時間は掛からなかった。

——世界が、色を失った白黒の、モノクロの世界に切り替わる。

この地下世界で最後の闘いが、始まった。

18. 前哨戦

〔Lily〕

* (A ^不 ^思 ^議 ^な ^光 ^部 ^屋 ^を ^満 ^た ^す strange light fills the room.)

いつもよりも厳かなアナウンスが、流れ始める。フリスクと繋いでいる手をもう一度握り締めてから離し、私は必要はないと分かってはいるが、何も知らないフリをしてナイフを取り出し、この先何が起こるか知らないフリスクは、辛そうな顔で鞘に手をかける。

* 黄昏の光が結界の向こうから照らす。

(Twilight is shining through the barrier.)

ナイフに巻き付かせていたハンカチを取り、ポケットに突っ込む。フリスクは鞘をゆっくりと外し、ベルトの部分に取り付ける。

きっとフリスクは、どうしてまた彼と闘わなくてはいけないのか、このままではまた彼は殺されてしまうのではないのか、そう頭の中で考えているんだろう。

私だって本当は、フリスクにはナイフを持たせたくなんてなかった。

*
(It ^あ seems ^な of ^た your ^の journey ^旅 is ^は finally ^っ over ^い.)
*

……それでも、闘わなくては。

私が望むあの夕陽を、絶対に見るために。

戦闘に邪魔なリユツクを放り投げ、フリスクと一緒にナイフを構える。

*
(You ^あ are ^な filled ^た with ^は chest ^胸.)

D決E意TをE抱RいMたIたNたAいTいIいOいNた・
)

『人間よ………』

最後に、重々しく、辛そうな声で、アズゴアが語りかけてくる。

『君に会えて本当に良かった』

—— さようなら

そうやって彼が、顔を俯かせた。

その時だった。

ポポッ

目の前に、空気を燃やす音を立てて、色を無くした炎の塊が現れたのは。

「……………え？」

突然のことに、フリスクの口から戸惑いの言葉が溢れる。

そして私は、台本通り彼女が来てくれたことに、そつと胸を撫で下ろした。

突如現れた炎に驚いたのは、フリスクだけじゃなかった。

「……………どうしてこれが、」

対峙するアズゴア王にもこの炎には見覚えがあったらしく、辛そうに歪められていた顔の目を見開き、炎を見つめる。

そのアズゴア王に、炎は勢いよく飛んでいった。

「ぐうっ!？」

完全に油断していたらしいアズゴア王は、炎に吹っ飛ばされていく。

フリスクは唾然と、私は安堵しながら、アズゴア王を見てみると、

『何て恐ろしい魔物なんでしょう。罪の無い子供を、傷付けるなんて……』

——酷く、懐かしい、優しい声が耳に届いた。

それと同時に、炎を出してアズゴア王を攻撃した張本人である彼女が、姿を見せる。

『ああ、怖がらないでいいのよ。私よ、トリエルよ。あなたの味方で保護者だわ』

そして、彼女は——トリエルさんは、私達に向かって優しい笑みを浮かべた。

「……トリエル、さん」

気付けば、アズゴア王を睨み付けながら登場した彼女の名前を、口に出していた。

「ええ、そうよ。……まあ、また見ない内にボロボロになって！ 大丈夫？ どこも痛くない？ 誰がこんなことをしたの？ 直ぐに謝らせるわ」

「あ、えっと、これは、その……」

につこりと笑って頷いてくれた彼女は、私がルインズを出た時よりもずっとパーカーが破れたりしていることからボロボロであると判断したらしく、傷を見咎めて、顔を心配そうに歪めて駆け寄ってくる。その無償に与えられる優しさに、『フリスクを庇って受けた傷で私の勲章なんで大丈夫です』とは流石に言えず、肩を抱き寄せられて、暖かいモノに包まれたままだ撫でられるのを受けるしかなかった。

駆け寄ってきたトリエルさんの腰にフリスクは抱き付き、ぎゅうつと抱き締める。

「あなた、は……怪我はないわね？ ……もしかしてこの傷達は、私の時と同じようにあなたを庇って受けたのね？」

フリスクに抱き付かれたことよって私を離し、フリスクと視線を合わせて抱擁を返す。そしてトリエルさんはざっとフリスクの身体を見て、確信を持った声でフリスクに優しく訊く。それに、フリスクは安心したのか、涙を目尻に浮かべて力強く頷いた。それを見た瞬間、トリエルさんが怖い笑顔を携えて此方を向いた。たまらず私は視線を逸らした。

「駄目じゃない、リリー。この子を不安にさせちゃ。それに、女の子なんだから、身体は大切にしなくちゃ」

「……………はい。ごめんなさい」

目線を逸らしてしまっているで顔は見えないが、きつと怖い笑顔で言われたぐうの音も出ない正論で諭され、何も言えなかった。

「……………」

目線を恐る恐る戻すと、目尻に浮かべた涙を拭い、フリスクはトリエルさんを見て首

を傾げて口を動かす。それを見たトリエルさんが、また優しく微笑んだ。

「戦いを止めるために、あなたを追いかけてきたのよ」

「どうやらフリスクはトリエルさんに『どうしてここにいるのか』とでも聞いたらしく、トリエルさんはそう答えた。」

『最初はね、あなたをひとりで行かせようとしたんだけど……でもどうしてもあなたのことが気がかりで。きつと一筋縄ではいかない冒険になるでしょう？ ……そしたら、あなたが恐ろしい選択を迫られてしまうと思うと。この世界から出るために、あなたが誰かの命を奪うしかなくなると思うと。あなたがアズゴアを倒さなくてはならなくなると考えたの』

そう言って、トリエルさんはフリスクを慈しむように頭を撫でる。

『でもね……分かったの……そんなことあつてはならないって』

フリスクを撫でながら、トリエルさんは言葉を続ける。

『ここから抜け出すのに誰かが犠牲になる必要なんてないんだわ。私は今までそれを防ぐ為に守ってきたんじゃないの？ そう、だから、私はこの戦いを止めに来たのよ。あの恐ろしいアズゴアでも……等しく慈悲を、受けるべきだから』

そう言って、トリエルさんはフリスクに微笑みかける。私はその光景から目を逸らし、話題に上がったアズゴア王の方を見た。そう言っている割りには随分派手に飛ばされていったが、大丈夫だったのだろうか。

そう思いながらアズゴア王の方を見ると、やはり結構ダメージがあったらしく、よろよろと立ち上がっていた。そして、顔を上げて、トリエルさんを見る。

『トリ……戻ってきてくれたんだね……！』

心の底から嬉しそうな声で、破顔しながらアズゴア王はトリエルさんに言った。トリエルさんはその声を聞くとピタリと動きを止め、フリスクを離して私達を庇うように前に立った。

『「トリ」と呼ばないでちょうだい、ドリーマー!』

そして、厳しい声でアズゴア王に返した。その声に、アズゴア王の顔が悲しそうに歪む。

『あなたは手のかかる子供と同じよ。あなたが本当に皆を自由にしたいと願っていたなら……ひとつソウルを手に入れた後に結界を通り抜けて……六つのソウルを得て戻れば、皆を自由にすることも出来たかもしれない』

冷たい声で現実を突き付けるトリエルさんの言葉を聞いて、アズゴア王はしゅんと項垂れる。

『あなたはそうせず、皆を絶望の淵に立たせ続けたわ……なぜなら、二度と人間が来ないことを祈り続けていた方が楽だったからよ』

厳しくそう言ったトリエルさんの言葉に、まあ確かにとは思いますが、少し思うところが

あった。

「…………正直に言えば、私は一週目で彼がフリスクに遠回しに『殺してくれ』と言っていたあの台詞を言われていたらキレていた自信がある。いや、十中八九一週目ではキレたんだろう。視界の端のフリスクが一瞬反応したし。だからこそこのルートでは責任を負って生きることを選んだ彼の行動は正当に評価するべきだと思う。」

「…………いや……………」

長い沈黙の後、アズゴア王は口を開いた。

『トリ…………その通りだよ…………私は恐ろしい魔物だ…………』

そして、アズゴア王は、苦しそうな顔でトリエルさんが言ったことを肯定した。

『……………………それでも、また友達からやり直させてくれないかな?』

それでもトリエルさんとやはり一緒に居たいのか、アズゴア王は控えめな笑みを浮か

べてトリエルさんにそう言った。

『……………』

そのアズゴア王を見て、はあ、と、トリエルさんは呆れたように溜め息を吐く。

『ダメよ、アズゴア』

そして結構キツパリとその申し出を断った。アズゴア王は膝を着いた。玉砕したな、南無。

『ンガアアアアア!!』

そこへ、また聞き覚えのある声……………いや、雄叫びが聞こえてきた。徐々に近付いてくるその声に振り返ると、また見覚えのあるモンスターがやってきていた。

『アズゴア！ 人間!! お互い争うことはない!!』

そこに居たのは、私の親友になった彼女——アンダインだった。

「アンダイン……」

思わず声が溢れる。台本通りとはいえ、彼女が来てくれたことが嬉しかった。

『誰でも友達同士になれるんだ、なんならあたしが……!! あたしが……』

必死にこれから起きようとしていた戦いを止めようとして駆け付けてくれた彼女は振り返ってアンダインを見ていたトリエルさんに気付いたらしく、私の後ろを見て言葉の勢いを落として、ぼかんとした顔をする。

『こんにちは。私はトリエルよ。この子のお友達かしら？ 初めました』

そんな自分を見る視線に應えてか、トリエルさんは先程までアズゴア王に向けていた厳しい声とは真逆の優しい声で、アンダインに向かって自己紹介をした。

『うん、ああ……う？』

あまり状況を良く理解していないのか、アンダインは曖昧な笑みを作り、そして少し悩んだ後に、

『よろしくな！』

流石に挨拶は返さないといけないと考えたらしく、美しい豪快な笑顔を浮かべてトリエルさんにそう返して、アズゴア王の傍に近付いた。

『アズゴア王、あれは元カノか何かか？』

大真面目な顔付きで、かつドストレートにアズゴア王に彼女は尋ねる。思わず吹き出しそうになるのを堪え、彼女を見続ける。その問いに、彼は微妙な顔をした。

『えーと。とにかく頑張れ、お前さん』

完全に飛び込んで来た際の勢いを無くしたアンダインがそう言うのと、

『ね、ねえ!』

また、聞き覚えのある声が後ろから聞こえる。今度は私が振り返るより先に、彼女の方が先に私に近付いてきた。

『お互い傷付け合うのはやめましょう!!』

やってきた怖がりな彼女——アルフィスは、私の前に立って、両腕を広げて声を張り上げる。よく見ればその身体は少し震えている。やはり少し怖いのだろう。

「アルフィス……」

またしても、彼女の名前が口から溢れる。

……どうやら私は、こうやって皆が駆け付けてくれるのが嬉しいらしい。

『……………』

しんと静まり返った空気にアルフェイスが顔を上げると、アルフェイスをじつと見ていたトリエルさんの視線とぶつかる。

『あらー。あなたもお友達なのね？ 私はトリエル。こんにちは！』

トリエルさんを見て固まったアルフェイスの心情など露知らず、トリエルさんは笑顔で浮かべて、まるで近所の子に挨拶するようにそう言った。

『えっ、は、は、はい！』

その優しい笑顔に若干気圧されたのか、吃りながらもアルフェイスは頷いた。そして、訳がわからないのか首を傾げた。まあ、自分が敬愛してる人物とそっくりな人物が突如現れたらビビるわな。

「アルフィス！ お前も来てくれたのか！」

「！ あ、アンダイン！ あなたも来てたのね！」

嬉しそうな声で、アンダインは駆け付けたアルフィスの名を呼ぶ。その声で奥にいるアンダインに気が付いたらしいアルフィスは、彼女の傍へと駆けていった。

『よし！ 今すぐ闘いを止めるんだ！』

熱っぽく見つめ合い始めた二人を余所に、また聞き覚えのある声が聞こえた。

『抗おうものなら……！！ それなら！！ 俺様と闘おう！！』

振り返った先には、本来ならば赤いスカーフを靡かせて、真剣な顔で此方を見つめる彼——パピルスがいた。

「パピルス……」

気付けばまた、現れた人物の名前を呼んでいた。私の声が聞こえたらしいパピルスが、此方を向く。

「ニエーヘツヘツへ!! もう大丈夫だぞ人間!! お前は誰も傷付けなくていいのだ!!!」

彼特有の笑い声をあげて、彼はそう言った。その言葉に、心臓が跳ねた。

『アンダインも手伝ってくれ!!!』

そこまでパピルスが言うと、

『こんにちは!』

『あつ! こんにちは、国王陛下!』

トリエルさんが、彼に向かって挨拶をした。その挨拶を受けて、すぐにパピルスは挨拶を返した。どうやらトリエルさんとアズゴア王の区別はついていないらしいが。

『ちよつと！ なあ、人間……』

パピルスは此方に近付くと、トリエルさんには聞こえないようにか、フリスクを自分の方に手招きし、やってきた所でこつそり耳打ちした。それでもパピルスは従来声が大きいからか、普通に此方にも内容が聞こえる。そんな事に気付いてはいないらしいパピルスは、トリエルさんをチラチラみながら、困惑したような顔でフリスクに尋ねる。

『アズゴアは髭を剃ったのか……？ そのうえ……クローンを作ったのか……???'
「グフツ」

にこにここと微笑む彼女をどうしてもアズゴア王とは別のモンスターであると判断出来なかつたらしく、斜め上の質問をフリスクに投げ掛けた。やめてくれい、思わず吹き出しちゃったじゃないか。

『ようお前達……何かあったか？』
「うわっ!？」

そんな所へ、ひよつこりと、また聞き覚えのある声が聞こえた。……私の後ろから。思わず驚いて後ろを振り向くと、彼——サンズがいつものニヤニヤとした笑顔を携えて立っていた。コイツ絶対ショートカット使っただろ、と思いつつ、私は彼を見る。

「サン、ズ……」

一瞬彼の名前を呼んでいいのか戸惑うが、それでも言うのと、呼ばれた本人であるサンズは、気安そうな雰囲気の手を上げて、そしてじいっと鋭い瞳で私を見た。

「……………よう。久しぶりだな」

「……………うん、久しぶり」

お互いに他の誰にも気付かれない別の意味合いを含んだ挨拶を短く交わす。これでもいいんだな、と言いたげな彼の視線に、他の誰にも気付かれないように小さく、本当に小さく頷いてみせた。ナイスタイミングだよ、サンズ。

『この声は……!!』

現れたサンズの声に反応して、トリエルさんが私の横に並んでくる。フリスクの傍に寄つて場所を譲ると、トリエルさんは私が居た場所に立つて、サンズを見る。

『こんにちは。多分、私達……知り合いなのよね？』

恐る恐る、といった様子で、トリエルさんはサンズにそう言った。トリエルさんの言葉に、サンズは目を丸く見開く。そして少し眉を潜めながら此方を見たので、誰にも気付かれないように首を横に降つておいた。それを読み取つたサンズは、だよな、と言わんばかりに顔を伏せて、笑い声の一つ溢すと、トリエルさんに改めて向き直る。

『ああ、そーいや……俺もこの声には聞き覚えがあるな』

トリエルさんの発言によってビシリという音が聞こえそうなくらいに凍つた空気を物ともせず、サンズはそう言った。

『私はトリエル。これからよろしくね』

『……………名前はサンズ。まあ、そうだな、同じく』

トリエルさんとサンズが言葉を交わす中、アズゴア王の方を見てみる。すると、また泣き出して膝を着いていた。そんな彼をアンダインやアルフィスが慌てて慰めようとしている光景が広がっていた。やだ、テラシユール。

『あらー！ 待つて、それなら……………！』

サンズの自己紹介を聞いて、何かを思い出したらしいトリエルさんは、パピルスの方に向き直った。

『あなたが兄弟の、パピルスなのね！ 御機嫌よう、パピルス！ あなたに会えてとつても嬉しいわ！ よく兄弟があなたについて聞かせてくれたのよ』

そして嬉しそうに、パピルスに笑いかけた。

突然王様のクローンである（と思っている）トリエルさんから自分の名前が出て困惑したのか、パピルスは目を少し丸くし、そしてその次に照れたように目を少し伏せる。

『なんと……アズゴアのクローンさんが俺様を知っているだど!!!』

「あー、パピルス、トリエルさんはアズゴア王のクローンじゃ」

『今日は人生最高の日だ!!!』

「聞けよ」

流石にクローン扱いは失礼だろうと思ってパピルスの認識を訂正しようとする、どうやらテンションがハイになっているらしく私の言葉は無視された。つら。

『ねえ、パピルス……スケルトンのお家はどんな屋根でしょう?』

そんなパピルスに、トリエルさんが一つ問いかける。

『うぬぬぬ……耐雪タイルのことか???』

パピルスはトリエルさんの問いに対し、腕を組んで首を捻りながら、そう答えた。そんなもん使ってたね。

『いいえ、違うわ！ スケルトンのお家の屋根は……………』

そこでトリエルさんは言葉を切り、悪戯っぽく、楽しそうに笑う。

『骨材がスケスケなのよ!!!』

トリエルさんのその言葉を聞いて、パピルスは目を丸くし、頭を抱える。

『しまった!!! 今日には人生最悪の日だ!!!』

そして、先程とは真逆の言葉を叫んだ。

『よしよし、アズゴア王！ もう大丈夫だって！ 他にも女は「大漁」にいるんだからさ

……………』

一方アズゴア王の方では、アンダインとアルフィスがまだ傷付いた彼のことを慰めて

いた。苦笑いしながら、今度はそちらを見る。

『そ、そうですよ、アズゴア様!! アンダインが言うなら間違いないわ!』

アンダインを見習ってか、アルフィスもアズゴア王に言葉をかけ続ける。その甲斐あつてか、アズゴア王の目から涙は止まっていた。

『あ、あなたなんて女の子は入れ食いなんだから、あー……………あ、あの毛玉モンスターのことは諦めて、ええと……………可愛い魚系女子でも釣りにいったら……………?』

一瞬、アルフィスの口からサンズ達と楽しそうに話し込むトリエルさんに対して、かなり聞き捨てならない暴言が吐かれた気がしたが、彼女も彼女なりに頑張つて励ましているのだと思ひ直してスルーする。そして、自分の好みである女性像をアズゴア王に提示し、口を噤む。

『……………アツ、比喩です』

そしてきよとんと驚いた顔で自分を見つめるアンダインの視線に自分が何を口走ったのか察したらしいアルフィスは、誤魔化すようにそう付け加えた。その女性像が誰なのか察しがついたらしいアンダインがニヤニヤと笑った。

『分かつてる。うまい喩えだと思うぞ』

ニヤニヤとしたままアンダインがそう言うのと、

『まったくもう！』

突如、機械音のような声が聞こえた。入り口の方を振り返ると、ぶすつとした顔の彼——メタトンが顔を覗かせていた。

『さっさと熱いキスを交わしてくれない!? 観客がロマンチックな展開に飢えて死にそうなんだけど!!!』

皆が啞然と彼を見る中、彼は焦れたいのかアルフィスとアンダインに向かってダメ

出しをする。

『おい、黙ってろ!!』

逸早く我に返ったアンダインの一喝が飛ぶと、メタトンは肩を竦めながら黙った。

『まったく、なんて凶々しいやつなんだ!』

そう言いながらも、どうせ冗談だろうと思っっているらしいアンダインは笑った。

『だろう、アルフィス!?!』

そしてアルフィスに対して同意を求めたが……肝心のアルフィスは、考え込むように黙りこくったままだった。

『……………あれ、アルフィス?!』

同意してくれるだろうと思っていたアルフィスから返答が無くて不安になったのか、アンダインはもう一度アルフィスに声をかけた。

『……………いや。彼は正しいわ。キスしましょう』

その呼び掛けに、アルフィスは唐突な爆弾発言で返す。アンダインはそれを聞いて、まるで凍りついたように固まった。その場の空気も固まった。

『……………』

アルフィスが言ったことが理解できないのか、アンダインはそのままフリーズする。

『はい??? は??? 何だって??? そうしたいなら??? それなら???』

そして、覚悟を決めたのか、にっこりと笑顔を浮かべた。

『手加減は無用だからな!!!』

「えっ、ちよつと」

顔を近付いていくアンダインとアルフィスを見て、突然の展開についていけず慌てているフリをしてから啞然としているフリスクを見て、目を塞ぐ。

「わっ、お姉ちゃん、見えないよ!？」

「見るな」

突然目の前が真っ暗になったことに驚いたのか、フリスクが声をあげ、私の手を剥がしにかかる。それを無視して目を覆い続け、アルフィスとアンダインの顔が近付いているのをガン見する。そして、唇が触れようとしたその瞬間、

『ま、待って！ 人間の前なのに！』

フリスクの教育上よろしくないと判断したらしいトリエルさんが慌てて間に割って入った。

『ああ、そうだった！ ごめんなさい、頭に血が昇っていたわ』

トリエルさんが間に入ったことによつて頭が冷えたのか、二人は照れたように距離を取る。そして、アルフィスが照れながらそう言った。

『うふふふ』

そこで、トリエルさんは笑つて、此方に向き直る。それに倣つて、駆け付けてくれた彼らも、一列に並んで此方を見た。

『我が子よ、もうしばらくここに留まらないといけないようね』
「……………みたいですね」

優しく微笑んで言うトリエルさんに、私はナイフを握った手の力を再び入れ直しながら、笑顔を返す。

『でもこんなに素敵なお友達に囲まれているのなら……………きつと……………ここでも幸せに暮ら

せると思うわ』

「……そうですね。素敵なお母さんも居ますし」

「！……まあ……ふふふ」

冗談を交えてトリエルさんにそう返せば、彼女は目を細めた。

……まあ、その笑顔も、すぐに消えてしまうのだけれど。

『ね、ねえ、そういえば』

——ほら、来た。

『パピルス……あなたが皆をここに呼び寄せたの、よね？ その、彼女の、ええと、他の皆を。で、その……もし、私が先にここに来ていたら……どうやって皆を呼んで回るつもりだったの？』

きっと誰もが気になっていたであろう疑問を、アルフェイスが代わりに口に出し、パピルスに問いかける。

『ああ、それなら……………』

それに対し、パピルスは何事もないように、こう言った。

『小さいお花が助けてくれたぞ』

パピルスがそう言うや否や、私の中の警戒が最大レベルに引き上げられる。

『小さい……………花ですって?』

震えた声でアルフィスがそう繰り返した瞬間だった。

ヒュッ

何かが、空を切る音がする。

「!!」

「なんだ!!?」

闘いに身を投じていたモノの勘か、逸早く何かを察知したらしいアンダインとアズゴア王が、行動に移そうとした瞬間、

ビュッ

「ぐあっ………!!?」

「ああっ!!?」

皆の身体を、先に手をつけた太い蔓が縛り上げた。

「!! ああの蔓………っ」

その蔓を、私とフリスクは知っている。

私は知識として。

フリスクは実際に見たものとして。

その事から、皆を縛り上げている犯人が誰なのか、直ぐに分かった。

そして、その犯人が、地中から顔を出す。

『バーカ。オマエたちがよろしくやってる間に……人間のソウルをいただきちゃったもんね!』

此方を嘲笑いながら、ソイツは言う。

『そして今、そのパワーだけじゃない……オマエのお友達のソウルも、ぼくのものとなるのさー!』

「——やっぱりお前か、フラウイー……!!」

そして、私は、ソイツを——フラウイーを、睨み付けた。

「やあ、Chara！ 久しぶりだね、一年半ぶりかい？」

私の視線を物ともせず、フラウイーは私に笑いかけた。フラウイーの言った『一年半』というのは、多分、一週目の私達が地上に出て一年半、ということなのだろう。

「……………なんの話だ、私達が会ったのはルインズだけだろうが」

私が何も知らないフリをしてそうフラウイーに返すと、フラウイーは目を丸くした。

「冗談でしょ？ 君、まさか本当に記憶が無いの…………？」

「だから何の話だよ!! そんな事より、皆を離せ!!」

これ以上突かれたらボロが出る。

そう判断して話を変えれば、フラウイーは顔が無表情にした。

「は？ 駄目に決まってるじゃん。何でぼくからCharaを奪うコイツらを生かしかないといけないの？」

——— そう言い切るフラウイーの目は、何処までも暗い、闇のようだった。

『へへへ……一番面白いのは何か分かるかい？』

ぞつとするような無機質な無表情を消し、フラウイーは呆然とするフリスクに語りかける。

『全部オマエのせいだってことさ』

そして、フリスクに、フリスクの心に、

『皆にオマエを愛させたせいなんだよ』

妄言を、埋め込む。

『皆の話に耳を貸して……応援したり……心配したり……』

まるで本当にフリスクが悪いかのように、

『そうもしなければ、コイツらはここには来なかつただろうからね』

呪詛を、張り付けていく。

『そして今、こいつらと人間のソウルを手に入れて……ぼくは本当の姿になるのさ』

そこでフラウイーは、私に向かって笑いかける。

「見ててね、Chara! 一年半前には見せれなかつたぼくの本当に格好いい姿を見せてあげる!」

「………見たくもねーよ、そんなもん」

「もう、冷たいなあ」

突き放しても、フラウイーは恍惚な表情で笑うばかりで、意味は無かった。私がそれでもフラウイーを睨み付けていると、フリスクが一步、前に出る。

『はあ？ 今更どうしてこんなことをするかだつて？』

フラウイーはフリスクに向き直り、呆れたように溜め息を吐く。

『まだ分かんないの？ これはただの「ゲーム」だ』

そして呆れたように、フリスクに言う。

『もし君が満足のいく結果を残して地下を去ったら、それは君の「勝ち」になる。もし「勝て」ば、君はもうぼくとゲームを「プレイ」しようとは思わないだろう』

当たり前だと肯定するように、フリスクはフラウイーの言葉に頷いた。

『それならどうすればいいか?』

そこで、フラウイーは凶悪な笑みを見せた。

『このゲームを永遠に終わらせなきゃいいのさ』

そして、答えをフリスクに告げた。

『きみの目の前に、勝利をぶら下げておいて……掴もうとする瞬間にそれをパツと取り上げちゃう。何度も、何度も、何度もね……』

何がおかしいのか、クスクスと笑いながらフラウイーは言う。

『……………ねえ』

不意に、笑うのをやめて、フラウイーはフリスクに話を持ちかける。

『もしぼくを倒せるとでもいうなら、「ハッピーエンド」をくれてやるよ。きみのお友達も返してあげる。結果も破ってあげる』

そこで、フラウイーはチラッと、私を見た。

「そして……………Charaにももう、今後一切関わらないであげる」
「なっ……………!?!」

ゲーム
台本には無かった筈の条件が追加され、目を見開く。

『それで皆満足でしょ？ でもそんなこと絶対起こらない』

ニヤニヤと、笑いながらフラウイーは言う。

『お前には……………！ 何が何でもここに居てもらおうからね！』

フラウイーがそう言った瞬間、突如、足が急に強く引つ張られ、身体が倒れた。

「しまっ……!?!」

足を見ると、白い色を無くした蔓が足に絡んでいる。咄嗟に受け身を取ろうとするが、身体が続いて生えてきた蔓に絡め取られる。

「ぐっ………」

「お姉ちゃんツ!!」

そのままギチギチという音を立てる程強い力で縛られ、その場に動けないように縫い付けられる。フリスクが此方に手を伸ばそうとして、

「Charaに触らないでよ」

「!! フリスク、避けて!!」

フラウイーのその一言と共に、背後から伸びた蔓に身体を縛られた。

「へへへ……やあつと、君を捕まえた」

恍惚な表情で私を見るフラウイーに一睨みを返し、何とか抜け出してフリスクを助けた。だそうと抵抗する。

「ごんの……ッ」

そんな私のことなど露知らず、フラウイーは私と距離を置いて縛り付けたフリスクに向き直った。

「そう、オマエにはここに居てもらわなくちゃね」

そして、先程の言葉を繰り返す。それと同時に、フリスクの周りに、白い種のような弾幕が展開された。

『たとえ、1000000回殺してもね!!!
!! や、やめ、やめて、やめてえ!!!
!!!』

「いやあああああああああ
!!!!???

わたしは、ただその光景をみて

さげびごえをあげることしか できない

「やめてええええええええええ
!!!!!!」

さげんで、ていこうしているあいだにも、

ふりすくは

しんで

「……………が、は……………」

攻撃が、一瞬止まった。

フリスクは力無く項垂れた。

「隕九※纏ヲ纏ユ、C h a r a !! 莉雁コヲ纏雍◎纏ウ纏、綱? 纏、解放纏励※纏ゆ? 纏 !!」

笑顔を浮かべた綱輔△纏ヲ纏」綱シが言っていることが理解できない

いや

いやだ

ふりすく

まだ あなたに

つぐないきれて いないのに——……………

——
その、
時だった。

「
いやあああああああ
!!!!!!
」

ボボボツ

空気の燃える、音がする。

その音で、我に返った。

フリスクの周りを見ると、白い炎がフリスクを守るように囲んでいた。

その炎が、フラウイーの種の弾幕を跳ね退けた。

『えっ?』

フラウイーの、困惑した声がする。

『恐れないで、我が子よ………』

ハツとして、声がした方を見る。

縛られながらも尚、フリスクを守る為に炎を縛られている腕から起こした彼女を、トリエルさんを見る。

『どんな事が起こっても……私たちはいつでもあなたのことを守るから!』

安心させる為か、そう言っただけでトリエルさんは微笑んだ。

その言葉に、

その笑顔に、

すつと、押し潰されそうだった心が軽くなる。

「ははは!! なに、根拠もない言葉を信じるわけ!!? バツカじゃないの、オマエ!!」

その言葉を、フラウイーは否定する。

「そんなことできるわけない!!!」

そう言つて、フラウイーはまたフリスクに攻撃を仕掛ける。

それを、現れた大きな骨と、槍が防いだ。

『そうだぞ、人間！ お前なら勝てる!!』

骨を出現させて、フリスクを守ったパピルスが、言葉を紡ぐ。

『俺様はお前を信じる、だから……お前もお前を信じる!!』

私が言われた訳じゃないのに、心強いその言葉は、胸の中に、すつと広がっていく。

『なあ！ 人間！ あたしを越えた貴様ならば、何だつて出来る筈だろ！』

次に、槍でフリスクを守ったアンダインが、フリスクに言葉をかける。

『くよくよすんな！ あたしたちがどこまでもついていくぞ!!』

いつだって背中を押ししてくれるその励ましが、心に届く。

『ん？ お前、コイツをまだ倒してないのか？』

サンズが、少し小馬鹿にした様子で声をかけてくる。

『おいおい、こんなやつがお前に敵うはずないぜ』

心の底から『お前なら勝てる』と、信じてくれている言葉が聞こえる。

「……………う」

ピクリと、フリスクが反応する。

「！ コイツ、まだ………!!」

フリスクに止めを刺そうと、弾幕が飛ぶ。

その弾幕も、素早い雷と炎の壁によって防がれた。

『科学的には、この状況であなたが勝つのは不可能だけど……』

電気を駆使し、弾幕を跳ね返したアルフィスが笑う。

『で、でも……絶対に、あなたなら出来るってわかるの!!』

『この人なら勝てる』と告げる自分の本心を叫ぶ声が聞こえる。

『人間よ、人間とモンスターの未来の為に……!』

炎の壁で弾幕を燃やし尽くしたアズゴア王は願う。

『決意を抱き続けるんだ!!』

その希^{ねがい}いが、心に反響する。

「今更、何を……!!!」

フラウイーの顔が腹立たしげに歪んだ、その瞬間だった。

『ラ ラ ラ ラ!』

『私タチモ一緒ヨ!』

『やっちやおうぜ!』

『貴女なら勝てるわ!』

『お前ならできるぜ!』

『ゲコ』

たくさんのモンスターが、私達の傍へとやってきた。

——ともだちの、こえがする。

涙が、溢れそうだった。

そんな中、

「!!!」

フリスクが、ゆっくりと顔を上げた。

先程までの、あとは死を待っただけだった、彼女はいない。

大切な友達の存在に背中を押され、フリスクは『生きる意志決意』を取り戻した。

『うううう………そんな!』

フリスクの味方であるモンスター達全員に睨まれ、フラウイーは怖じ気付いたようにフリスクから離れた。

『そんなバカな!! こんなことあり得ない……!!』

動揺するフラウイーは、顔を伏せて、声を震わせる。

『オマエ………オマエらが………!』

そこまでバカだったなんてな』

パツと顔を上げたフラウイーの顔は、凶悪に歪んでいた。

『オマエらのソウル全部ぼくのものだ!!!』

フラウイーがそう啜うと、辺りが眩しく光り始める。

そして、

そこで、私の意識は途切れた。

次に目覚めたのは、真っ暗な闇の中。

ぼんやりとする頭を無理矢理覚醒させ、身体を起こす。

「!! フリスク!!!」

遅れて自分が今何をしているのかを思い出して、隣で眠っていたfrisスクを揺らして起こす。

「frisスク! 起きて、frisスク!!!」

中々目を覚まさないfrisスクに、嫌な予感が過る。まさかこの子は、とまで考えて、慌ててそれを振り払う。

「……………う、うーん…………」

かなり激しく揺らすと、やっとフリスクは目を開けた。

「……お姉ちゃん……お姉ちゃんッ!?」

「わっ」

そして寝惚け眼で私を見たかと思うと、勢い良く起き上がった。

「お姉ちゃん、無事!?!」

「うん、私は大丈夫だけど……フリスクは?」

「ぼくも大丈夫。ああ、よかった、無事で」

「そっちこそ」

安否を確認しあい、二人で抱き締めあう。そして少しして回していた腕を離し、辺りを見渡す。

「ここは何処だろう……」

「……多分、フラウイーが作り上げた空間だと思おうよ」
「え、嘘でしょ?」

思わずそう呟けば、フリスクから返答が返ってきた。そうか、この子は一週目で一回フラウイーと戦ってるから知ってるのか。

「……とにかく、皆を探そうよ。何処かにいる筈だし」
「そうだね」

急かすフリスクに同意して、取り敢えず立ち上がると、

ぼんやりと、白い影が目の前に形成されていく。

「!?!」

突如現れた影に、警戒を跳ね上げる。それはだんだんと輪郭を現していき、やがて、私
が知っている形になった。

山羊の頭部を持った人形のそれは、闇を見渡すと、手を握って開いて、そして、笑った。

『ぼくはもう。花でいることに疲れたんだ』

そう一言、目の前のモンスターは闇に眩いて、此方に振り返る。

そして、閉じていた目をゆっくりと開けて、真っ直ぐ此方を見た。

『やあ！ Chara、そこにいるの？』

そう言って微笑みかけてくるその顔は、トリエルさんとアズゴア王にそっくりだった。

『ぼくだよ、君の一番の友達——』

閃光が、走る。

【^アA^ズ^リS^{リエ}^ルR^ドI^{リー}E^{マー}L^さ!!】

闇に、まだ幼さが抜けきれていない声が響く。

閃光が消えた先には、

【神】となった彼——アズリエルがいた。

——最後の闘いが、始まった。

19. アズリエル・ドリーマー戦

〔Lily〕

*It's the end.

終幕の時だ

暗闇の中、最後の闘いの幕開けを告げるアナウンスが流れる。

【あはははははははっ!!!】

それに続いて、闇の中に笑い声が響く。笑い声の主は、目の前で愉悅に顔を歪めた、カミサマ。

【どうだい、Chara!!! これが僕の本当の姿さ!! 格好いいだろう!?!】

人間のソウル、そして地下世界全てのソウルを取り込み、カミサマとなったアズリエ

ルは、私に向かって笑いかける。

【今の僕はこの世界を思うままにできる神様だ！ 今までみたいに、誰かに邪魔されたりなんかしない、本当の神様だ!! そんなちっぽけな人間なんか、一捻りなんだよ!】

アズリエルは、そうフリスクを嗤う。

【あは、あはははは、ははははははは!!!!】

狂ったように笑うアズリエルを尻目に、私は、呆然とした様子でアズリエルを見るフリスクの手を握る。

「フリスク」

強目に手を握って声をかければ、フリスクはゆっくりと此方を向いた。

「……………どうしよう、お姉ちゃん」

そして、絶望に顔を歪めて、今にも泣き出しそうな顔で言葉を紡ぐ。

「皆のソウルがアズリエルに、どうしよう、どうしようどうしよう……」

「フリスク」

取り乱して脅えるフリスクの目を見て、私は声をかける。

「大丈夫。皆はまだ、死んじやったわけじゃないよ」

そうフリスクに伝えれば、脅えた瞳が大きく揺らいだ。

「アイツはただ、皆のソウルを一時的に取り込んだだけだよ。一発ぶん殴るかどうかすれば、きっと皆は帰ってくるさ」

「……………どうして、そんな事が分かるの」

私がフリスクに向かって微笑みかければ、フリスクは疑惑に満ちた瞳で此方を見る。

「だってアイツ自身が『ハッピーエンド』を挿んだら皆を地上に出してやるみたいなこと
言ってたし——……あとはお姉ちゃんの、勘」

それに対して、私は笑顔でそう言ってる。

「それに、あなたの胸には、皆を救える、奇跡を起こせる力があるじゃないか」

フリスクの心臓の辺りに指を置いてそう続ければ、フリスクはハツとしたように目を
見開いた。

「……………私はいつだってフリスクを信じてるよ。あとはあなた自身の決意だけ。……………
さあ、フリスク」

私がそう問いながら手を強く握る。

「……………皆を、助けに行こう」

驚愕の顔で私を見ていたフリスクは、顔を引き締め、私の手を強く握り返した。

「……………うん、勿論だよ!!」

そう言つて見開かれたフリスクの瞳は、決意に満ちて、輝いていた。

未だ笑い続けるアズリエルに向かって向き直り、声を張り上げる。

「アズリエル!! 皆を返せ!!」

私がそう言えば、アズリエルは狂つたような笑いをピタリと止め、此方を見る。

「……………なあに、Chara。君、そっちにつくの？」

至極面倒くさそうに、アズリエルはそう言った。

【まあ、いいけどね。言ったじゃん、ソイツが見事『ハッピーエンド』を掴み取れたら、地下世界を解放してあげるって】

一つ溜め息を吐いて、神様ぶったアズリエルは続ける。

【まあ、そんなこと有り得ないけどね!!】

そしてまた笑い出すアズリエルから目を逸らして、私達はお互いの顔を見て、頷き合う。

お互いの手をもう一度握り返してから、手を離す。

——……きつと今のフリスクなら、私が傍にいらなくても、正しい選択をしてくれる。

そう信じていることが出来たから。

「フリスク!! あなたに向かう攻撃は出来る限り私が請け負ってやる!! 傷のことは気にすんな、こんなところで死んでやる気は絶対がない! 必ず生き延びてみせる!! だから、あなたはあなたの好きに動け!!」

意識を失っても尚握っていたナイフの柄を握り直し、私はフリスクに向かって叫んだ。

フリスクは私を見て——頷いた。

「分かった!!」

そう言って、フリスクはいつも使ってきた『ACT』を叩く。ピツという音が耳に届いた。

*ASRIEL DREAMER ∞ ATK ∞ DEF

*—Legendary being made of every SOUL in the underground 《地下世界全てのソウルを取り込んだ究極的存在》。

目の前の唸りながら頭を抱えているアズリエルを分析したアナウンスが流れてくる。それと同時に、アズリエルが顔を上げた。

「なに、それでも抵抗する気なの？ いいよ、ちよつと遊んであげる!!」

アズリエルが手を掲げると、その手に炎が集まり、塊を形作っていく。その手が振り下ろされると、その塊から炎が波を描きながら放出された。ゴウツ、という音を立てて迫りくるそれを横に飛んで避けて、離れながらも攻撃を繰り返すアズリエルを睨み、炎を避け続ける。

*^{「本} The ^当 true ^の final ^最 battle ^後 had ^の begun ^戦 .

攻撃が止み、ターンが回った合図が流れる。

空間が、虹色に輝き始める。

——…：壊れ行く世界の終末の景色とは、こんな風景のことをいうのだろうか。

そんなことを思いながら、私はナイフを構えた。

* You ^あ ^な ^た ^は ^希 ^望 ^を ^胸 ^に ^抱 ^い ^た ^た ……

! You ^こ ^の ^タ ^ー ^ン ^に ^受 ^け ^る ^ダ ^メ ^ー ^ジ ^が ^減 ^少 ^し !

フリスクがターンを回し、アズリエルにターンが回る。アズリエルがキラキラと輝く両手を振り上げると、何かが迫ってくるような感覚を覚える。ある筈もない空を見上げると、空から星が落ちてきていた。

「!!! マジかよ!!!」

「お姉ちゃん、走ってッ!!」
「わかってる!!」

降り注ぐ星の中を、駆け抜けていく。落ちては弾ける星の欠片を避け、ナイフで弾き返す。最後に一等大きい星が落ちてくるのを見て、フリスクを抱えて緊急離脱した。星の欠片が身体を掠めていくのを無視し、無理矢理離脱した。

* *A s s r i e l* は「S H O C K E R “S H O C K E R” をチャージしている」.

星が止み、フリスクを降ろすと、フリスクは直ぐに『ACT』を押してターンを回す。

* You あな t h i n k たは a b o u t ど w h y う y o u ' r e し h e r e て n o w 今 こ こ に い る の か を 考 え た

* You can feel the empty space in your inventory get smaller and smaller 《持ち物の空きがどんどん小さくなっていくのを感じる》!

【あのさ……】

フリスクが胸に決意を抱き続け、立ち続けているとアズリエルがフリスクに語りかける。

【僕はもうこの世界を壊すことなんてどうでもいいんだ】

やれやれと言わんばかりに首を振りながらアズリエルはそう言うと、また両手を掲げる。その両手にバチバチと閃光が走っているのが見え、まずいと判断してフリスクを抱え上げる。

その瞬間、アズリエルが手を振り下ろした。

ズドドドン

という音が幾つもして、先程までフリスクがいた場所や他の場所に、虹色の雷の柱が落ちた。あれに撃たれたらまずい、と判断して、尚も落ちてくる雷の中をフリスクを抱

えて走る。

*Assemble calls on "CHAIOS" S.A.B.E.R."

太い雷の中を潜り抜けると、ターンが回った。

*You kept holding on.
*Damage reduced!

急いでフリスクを降ろすと、フリスクは『ACT』を叩き割らん勢いで叩き、ターンを回す。

【君を倒してタイムラインを完全に支配したら……すべてをリセットしたいだけなのさ】

ターンがアズリエルに回ると、アズリエルはそうフリスクに語りかけて、両手に呼び寄せた二振りの剣を携え、此方に斬りかかってくる。

「フリスク、ナイフ貸して!!」

「! うん!」

咄嗟にフリスクに叫ぶと、何をするのか察してくれたのか、直ぐにナイフを差し出してくれた。それを受け取り、私も両手にナイフを握って前に出る。振り下ろされた剣を受け止めると、金属が擦れる音とともにデカイ衝撃が直接伝わってきた。それでも何とか受け流し、直撃を回避する。

* A s s r i e l は「S H O C K E R “S H O C K E R”をチャージしている。」

激しい剣劇が止むと、此方にターンが回る。フリスクが『ACT』に手を伸ばし、叩いた。

* Y o u 希 望 を 抱 き 続 け た o n .
 * D A M A G E r e d u c e d !

アナウンスが頭に響く。ナイフを片方ポケットに突っ込み、フリスクの手を握る。

「君が歩んできた時間も……みんなが刻んだ記憶も。ゼロになるまで巻き戻すんだ！」

アズリエルが口を開き、笑う。そして雷を纏った手を振り上げると同時にフリスクを抱え上げて、神罰だと言わんばかりに落ちる雷の柱の中を走り抜け、突き進む。

* *A s s r i e l* は「S T A R B L A Z I N G」をチャージしている。
* *A s r i e l r e a d i e s* “S T A R B L A Z I N G”.

雷が止むタイミングを見計らってフリスクを降ろす。フリスクは『ACT』を叩き、アズリエルを見据えた。

* *Y o u k e p t h o l d i n g* on.
* *D A M A G E r e d u c e d*!

「そうしたら僕らは全てを始めからやり直せる」

アズリエルはそう続けて、キラキラと光る手を振り上げる。振り下ろされると同時に、また星が降り注いだ。

フリスクと同時に走り出して、星が降り注ぐ中を潜り抜ける。飛んでくる欠片をまた両手に持ったナイフで叩き落とし、避けて、壊す。

* A s s r i e l は「C H A O S B U S T E R」を準備している。
 * A s s r i e l r e a d i e s “C H A O S B U S T E R”.

星が止むと同時に、フリスクは表示された『ACT』を叩いた。

* Y o u k e p t h o l d i n g o n .
 * D A M A G E r e d u c e d !

【この役割に一番適した人物が分かるだろうか？ 君がやるってこと】

私達が自分に勝てる筈がないと侮っているのか、アズリエルはベラベラと喋る。そして何処からともなくデカイ銃のような物を造りだして此方にその銃口を向ける。フリスクを抱えあげ、その銃口から放射状に発射される弾の雨の中を突き進む。何発かが身

体を掠めていく。知ったことか。

ガチャツ

という音がして、銃口が縦に割れ、中に装填されていた光が太い光線となって此方を撃ち抜こうとする。迫りくるそれを走り抜けて、回避する。

* *A s s r i e l* は *CALLSON* "CHAEOS" を呼んでいる

中が空になって光線が消え、アズリエルがそれを投げ捨てた途端、ターンが回った。フリスクは私の腕の中から飛び降りて、『ITEM』を叩いた。

「お姉ちゃん!! お姉ちゃんの夢を思い続けて!!」

そして何かに気付いたのか、私に振り返ると、そう叫んだ。

……………私の、夢?

そう言われて、反射的に思い浮かぶのは、目の前の彼女の笑顔。

私の夢は——……

* 夢は現実へと変貌した決意
 * Your HP was maxed out.
 * The dream became true.
 * TERMINATION,

言われるまま自分自身が此処にいる理由をしつかりと脳裏に思い描けば、身体中が暖かい何かに包まれていく。みるみるうちに傷で生じた痛みが消え、身体に活力が溢れてきた。そして、フリスクが『ITEM』でこの戦いだけで使えるアイテム、『最後の夢』を使ったのだと遅れて察した。

【そして君は僕に破れる】

誰かに背中を押されているような、不思議な感覚を覚えていると、アズリエルの声が

響く。持ち直して斬りかかってくる彼の剣を弾き、受け流す。

「……………ッ、邪魔しないでよ、Chara!!」

フリスクを攻撃しようとする度に立ち塞がる私に苛立ったのか、剣を振り下ろしながらアズリエルが叫ぶ。

「ハッ、やなことだ!!」

その剣を受け止めて拮抗し、そう言い返してやれば、アズリエルは顔を歪めてもう一度剣を振り上げ、両方の剣を振り下ろす。振り下ろされると同時に光の粒子となって迫ってくるそれを、飛び退いて避けた。

*Asriel readies "CHEATERS" を準備している。

ターンが回ると、フリスクは直ぐに『ACT』を叩いた。

* You ^希 kept ^を holding ^抱 on. ^統
 * D A M A G E ^ダ reduced ^減! ^少

【やり直すたびに】

またアズリエルの手に、銃のような物が現れる。発射される弾を避け、フリスクに当たりそうなものを叩き落とす。銃口が割けて光線がフリスクに向かって飛ぶが、フリスクはそれを難なく回避した。

* A s s r i e l ^A is ^は s h o c k e r ^S " s h o c k e r ^B b r e a k e r ^R ^{を準備している}.

虹色の光線が消えると、フリスクにターンが回る。『ACT』を押し、彼女は進む。

* You ^希 kept ^を holding ^抱 on. ^統
 * D A M A G E ^ダ reduced ^減! ^少

【何度でもね!!】

希望を抱いて立ち続けるフリスクを見据えて、アズリエルは雷を纏った両手を振り上げる。流石にこれはまずいと判断して、フリスクを後ろから抱えあげ、先程と軌道の変わった落雷の中を走る。ゲームだった時とは違い、危険を知らせるマークもない中、走っていく。

*AAsrrielは「STARBLAZING」を準備をしている。
readies “STARBLAZING”.

「ありがとう!!」

ターンが回る。フリスクは礼を言いながら私の腕の中から飛び降り、ターンを回す。

*Youkeptholdingon.
*DAMAGEreduced!
ダメジンが減少した

「君が「ハッピーエンド」を求めるのだから」

そうアズリエルが未だ立つフリスクに続けると、アズリエルはまたキラキラと光る手を振り上げる。すると、また空から星が降り始めた。降り頻る星々の中を駆け抜けて、欠片を弾き、回避する。

* A s s r i e l e i は「C H A O S S A B E R」を呼んでいる。

ターンが、フリスクに回る。フリスクは『ACT』を叩いて、アズリエルを見据え続ける。

* T h e 夢 は 現 実 に
d r e a m c a m e t r u e !
* Y o u r H P が 全 回 復 し た
w a s m a x e d o u t .

アナウンスに遅れて自分の夢を強く願えば、ぼんやりと笑顔のフリスクが目の前に浮かび上がり、私の手を握る。そこを起点に暖かいものが身体中を伝わり、駆け抜けていく。

【君が「友達を大切に想う」のだから】

フリスクの幻影が消えると、アズリエルが口を開いてそう言った。そして、フリスクを狙って、また斬りかかってくる。フリスクとアズリエルの間に身体を挟み込み、受け流した。

* A s s r i e l は C H A O S B U S T E R を 準 備 し て い る .
 * A s s r i e l は C H A O S B U S T E R を 準 備 し て い る .

私が入ったことによって幾分かやはり加減されているのであろう剣劇を切り抜けると、アズリエルは剣を消して高く飛び上がる。それと同時にターンが回り、フリスクはターンを進める。

* Y o u 希 望 を 抱 き 続 け た .
 * Y o u 希 望 を 抱 き 続 け た .
 * D A M A G E が 減 少 し た .
 * D A M A G E が 減 少 し た .

【君が「決して諦めない」のだから】

未だ立ち続け、自分を見据え続けるフリスクに対してそう続けて、アズリエルはまた

銃を取り出して銃口を構える。フリスクに向かって放射状に発射される弾を弾き、走って回避する。太い光線が飛来するが、二手に飛び退いて事なきを得た。

*Asriel charges "SHOCKER BREAKER".
A s r i e l は「S H O C K E R」" S H O C K E R B R E A K E R" を準備している。

光線が消え、ターンが回る。フリスクは凜とした顔で、『ACT』を叩いた。

*You kept holding on.
希 望 を 抱 き 続 け た。

*DAMAGE reduced!
ダメージが減少した。

「……………君、まだ死んでないの?」

先程まで行われていた『死闘』で死ぬだろうと思っていたらしいアズリエルは、掠り傷はあれど未だに立ち続けているフリスクを見て、顔を歪める。

「でもまあ、最高だろ?」

それでもまだ悔っているのか、フリスクを見下したまま、笑顔で続ける。

【君の「決意」が。君をここまで導いた力が……君を破滅させていくのさ!!】

「……………それはどうか」

笑うアズリエルに対して小さく言い返し、続けて落ちてくる雷を、フリスクを抱えて避ける。落ちる毎に空間を揺らす雷の中を突き進み、駆けていく。

* A A s r r i e l は 「 H Y P E R 」 を 準 備 し て い る 。
A s r r i e l r e a d i e s 「 H Y P E R 」 を 準 備 し て い る 。
G O N E R 」 を 準 備 し て い る 。
H Y P E R 」 を 準 備 し て い る 。
G O N E R 」 を 準 備 し て い る 。

落雷が止むと、そうアナウンスが流れた。此処までは何とか切り抜けられたか、と安堵する。

「……………ねえ、Chara」

そんな中、不意にアズリエルが私に向かって声をかけてくる。

「提案があるんだ。もしCharaが今すぐ僕と一緒に来てくれるなら……僕はソイツから手を引くよ。ソイツの友達も返してやっていい。君のソウルを借りれば、僕はこの姿のままでもいられるからね」

目線だけアズリエルに投げ掛けてやれば、アズリエルは笑いながら提案してくる。

「今の僕ならソイツ一人が幸せに生きていける世界を創ることなんて容易いし、君を今度こそ幸せに出来る自信があるんだ。良い条件でしょ？」

そう言いながら、アズリエルは私にすうっと近寄ってきた。

「だから、ねえ。お願い。今度こそ僕の手を取ってよ。この世界を、僕達の手で……造り直そうよ」

そう言つて、彼は、歪んだ笑顔で笑いながらトリエルさんそっくりの手を差し出した。

「——アズリエル」

その手を一瞥して、私はアズリエルの名前を呼んで、笑いかける。

「！なあに、Chara？ 僕を選んでくれるんだね！」

私のその顔を見てか、目の前のアズリエルの顔が、嬉しそうに、満足そうに歪んで、笑みを深めた。

「お姉ちゃん……………!?!」

フリスクから、動揺する声がある。

——……………確かに、良すぎる条件だ。私一人がここでアズリエルの手をとれば、フリスクはきつと幸せに生きていけるのだろう。父さんと母さんは死なずにすむだろう。

でもね、大丈夫だよ、フリスク。

「——誰が、お前の手なんか取るか」

私が、今のコイツの手なんて取る筈ないから。

「……………え？」

あの子そっくりなこの顔が浮かべた笑顔のままに否定されたのが信じられなかったのか、アズリエルは目を丸くする。

「——……………そんな、な、そんな、嘘だ、なんで!!？」

遅れて私の言葉をようやく理解したのか、そう叫んだ。

「ぼくは神様なんだよ、Chara!!？」

信じられないと言わんばかりに吼えるアズリエルを、私はじつと見る。

【そんなぼくを、本当の神様になったぼくの手を取ってくれない……？
………】

「あるんだよ、この勘違い野郎」

取り乱すアズリエルに向かって、私はそう言った。

「ルインズでも言った筈だぞ、私は『Chara』じゃないって」

浮かべた笑顔を引っ込めて、私はアズリエルに向かって言ってみる。

「なのにお前は私をずっと『Chara』だと勘違いして、私が命を賭けてでも『守りたいもの』に手を出した。」

——………そんな奴の手なんか、取ってやるもんか。そんなの、断固としてお断りだ」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
!!!!!!

そして、絶叫する。

【そんな筈がない、そんな訳がない!!! 君は『Chara』だ、ぼくの一番の親友で家族だ!!!】

何も聞きたくないと周りを拒絶するように頭を抱え、カミサマは顔を伏せる。

【じゃなきやそんな顔で笑うもんか、そんな目でぼくを見るもんか、そんな服で走り回るもんか!!!】

カミサマは自分に言い聞かせるように、自分にとって都合の良いことを並べ立てる。

不意に、カミサマが顔を上げた。

反転した瞳が、私を映す。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして………】

狂気を滲ませた瞳で此方を見ながら、狂ったように『どうして』とカミサマは言い続ける。

【……………———どうして、ぼくに……………君を救わせてくれないの……………？】

最後に、ぼつりと、そう呟いた声が聞こえた。

此方を見ていた瞳の狂気は消え、強い悲しみに染まっている。

それを無理矢理無視して、私は隣のフリスクの手を握る。

「最後にもう一回言っつてやる。———そんなの御断りだ!!」

私がそう叫んでフリスクを見れば、フリスクは安堵したように笑い、手を握り返してくれた。

【あああああああああああああああああああああああああああああああああ
だ握つてくれないなら、力尽くで分からせるまでだ!!!】
もういい!!! 君がぼくの手をま

激昂したカミサマは頭を掻き筆り、ガラガラと強い狂気に汚染された目で私達を射抜きながら叫んだ。

【さあ、遊びの時間は終わりだ!!】

そうカミサマが告げると、カミサマを起点にして空間が闇に呑み込まれていく。全てを闇が支配すると、目の前に巨大な山羊の頭部のようなものが現れる。

【■■■■■■■■■■———ツ!!!】

現れたそれが雄叫びを轟かせると、空間が立っていられない程大きく揺れる。

「お姉ちゃん!!」

その叫びを残して、全てが光に呑み込まれた。

20. SAVE the World

[Frisk]

ゴツ、と、鈍い音が聞こえた。

「お姉ちゃん!!」

その音がした目の前の状況を見てたまらず、ぼくの口から悲鳴のような言葉が飛び出した。さっきの攻撃で飛んできた瓦礫からお姉ちゃんがぼくを助けて当たって、倒れてしまった。

「お姉ちゃん!! しっかりして、お姉ちゃん!!」

声をかけるけど、お姉ちゃんは目を覚まさず、まるで眠ってしまったように動かなかった。

【だから言ったじゃないか、Chara！ 僕の忠告に背くからこうなるんだ!!!】

目の前で、Asrielが笑っている。

【……で、君はこれを食らっても、僕の邪魔をするのかい……？】

笑うのを止めたAsrielが、面倒臭そうにぼくを見た。

【ふーん……君は本当に特別みたいだね】

馬鹿にするようにそう言って、Asrielは肩を竦める。

【でも調子に乗るなよ。今まで僕は、真の力の一部も使っていないんだからね！】

その言葉に、思わず身体が固くなった。嘘でしょ、と言いたくなった。

——でも。

倒れてしまったお姉ちゃんを見る。

——………それでも、戦わなくちゃ。

お姉ちゃんを守るために。

皆を取り戻すために。

皆で地上に——出るために。

ぼくが——ここで折れる訳にはいかない。

ぼくは、立ち上がる。

ニヤニヤと笑うAsrielを見て、心を奮い立たせた。

そして、ぼくは。

ぼくの大切なものを守るために、決意を抱いた。

「絶対に屈してやるもんか!!」

そうAsriellに言えば、Asriellは笑うのを止めた。

【……………ふーん。君、それでも倒れないんだ。Charaが倒れば自然と君も屈すると思つてたのに】

そして目を閉じて、何かを考えるように間を開けた後、目を開いた。

【それなら……………君の決意が何処まで耐えられるか見せてみる!!!】

その言葉を吐き捨てると、Asriellの身体が光り出す。咄嗟に目を閉じて、次に

目を開けると。

真つ暗な空間に、虹色の翼を広げた大きな存在が立ち塞がっていた。

その姿はまるで、天使様のようだった。

【さあ、その決意で僕を倒してみせろ、人間!!】

*A^AS^SR^RI^IE^EL^L b^Lo^Lc^Lk^Ls^L t^Lh^Le^L w^La^Ly^L!

Asrielがぼくを見下ろし、叫ぶ。

ぼくが表示された四つの選択肢の『ACT』を選んで動こうとすると。

「……………!!? なんて?!」

身体が、まるで石になってしまったように動けなくなっていました。

*Can, t move your body.

【ほら、どうしたの!!? 僕に何かしてみせろよ!!!】

Asrielの声が響く。何とか動かせる目だけを動かして見れば、Asrielはニヤニヤと笑っていた。

——Asrielに、動きを止められている。

直ぐにそう気付いた。

——それでも、ぼくは。

【……………何、その目。気に食わないなあ】

目線だけでもAsrielを睨み、決意を抱き続ける。それを見てか、Asriel

は腹立たしそうにぼくに向かって吐き捨てた。

【まあいいや。君さえ殺せば、Charaは僕のものだ】

Asrielは自分に納得させるようにそう言うのと、またニヤリと笑った。

【Ura h a h a h a……僕の本当の力を見る!!!】

Asrielが手袋を嵌めたような手を振り上げると同時に、その手から流れ星が出て、ぼくに向かって飛んでくる。動かせるようになった身体を使って、ぼくは避ける。流れ星はぼくだけを狙って、飛んでくるはず。そう思っただけお姉ちゃんから離れて避けようとする。

——でも。やっぱりそう簡単にはいかなくて。

ゴッ

「あ、ぐ………」

ぼくの身体に、流れ星が当たる。

パキリ、と何か大切なものが、割れた音が響いた。ぼくのソウルが、割れた音だ。

身体が衝撃で、投げ出される。

痛みが走る。

視界が、閉ざされていく。

『F r i s k』

——脳裏に、大切な人の笑顔が浮かぶ。

——こんなところで死んでたまるか。

そ^Bん^uな^tのⁱ御^t断^rり^eだ^d!!

身体を無理矢理動かす。

まだ、動ける。ぼくはこんなところで死ねない。

お姉ちゃんを、皆を守るって、決意したんだから!!!

*ASRIEL block the way!

【……君、まだ立ち上がるの……?】

ぼくを見て、Asrielが唾然とした様子でぼくを見る。

【でも、それも直に終わる】

それでも直ぐに、ニヤリと笑った。

【感じるよ……君が死ぬ度に、またこの世界を手放していくのを。君が死ぬ度に、また少し友達に忘れられていくのを】

Asrielは、ぼくを指を差して笑う。

【君はここで死ぬのさ、誰も君を覚えていない世界で……】

その指が振り上げられて、先からまた星が飛んでくる。容赦なくぼくを殺しに飛んでくるそれを避けて、避けて、避け続けた。

【U r a h a h a h a…… どうした、君の決意はそんなものなのかい!!?】

Asrielの笑い声が響く、その時だった。

「……………Fri、sk……………」

聞き覚えのある声がぼくの耳に届いたのは。

【Lily】

目を覚ましたのは、真つ暗な闇の中。

「……………あ……………」

ぼんやりと歪む視界を何度か瞬いて開け、投げ出されているナイフを持つ右手を見る。どうやら自分は倒れていたらしい。身体を起こそうと、動かそうとする。

その瞬間、叫びだしたくなる程の激痛が身体に走った。

「づっっ」

何とか歯を食い縛り、叫び出すのを耐える。

………痛みでぼやけていた頭がはつきりとした。こんな痛みを負うのは、あの攻撃しかない。痛みで記憶が吹っ飛んだのか、記憶が無いがどうやらあの攻撃を諸に食らったらしい。左手に持っていた筈の私がゴミ捨て場で拾ったナイフがない。どっかに吹っ飛んだか。

そんな中

キラキラと、光る何かが視界を過る。

星が降ったと、直感的に思った。

反射的に顔を上げる。その動きと共に痛みが全身を駆け抜けるが、どうしても良かった。

顔を上げた先には、見覚えのある小さな背中と、歪み切った天使の姿。

【あははははは!! どうしたの、君の決意はそんなものなの!!?】

虹色に輝く大きな翼を揺らし、大きな両手から星を降らせながら、文字通り『死の天使』となった彼はフリスクに嗤う。

私の目の前に立つ小さな背中——フリスクはそんな言葉を聞いても尚、ボロボロになったまま、その場に立ち続けていた。

——まだ戦い続けている

そう理解するのに時間はいらなかった。

「……………ふり、すく……………」

痛みを耐えて、

私は妹の名前を呼ぶ。

「！ お姉ちゃん!!」

我ながら酷く掠れた声で言ったそれは、どうやらフリスクには届いたらしい。フリスクは流星をその身に受けながらも、此方に振り返ろうとして——……何かに制限されたように、ビタリと動きを止めた。

「……………ッ」

*The 世界がwhole 終わりをworld を迎えようis とending して.

どうやらフリスクはターンが回る毎にカミサマによって動きを止められているらしく、悔しそうに顔を歪めて目線だけ此方に向けた。

【ああ、Chara！ 起きたんだね！】

カミサマが、歪な姿で笑う。その笑顔に腹が立ちながらも、何とか身体を動かして、立ちとうとする。

そこで、気付いた。

先程まで痛みを伴いはするが動いていた身体が、ピクリとも動かない。

声も、出てこない。

私も動きを封じられたのだと、直ぐに分かった。

【ああ、ごめんね、Chara！ コイツを殺したら直ぐに治してあげるから、そこで見ててね!!】

それでも目線だけ動かしてカミサマを睨めば、何を勘違いしたのか的外れな言葉が返ってきた。

*C a n , t m o v e y o u r b o d y .

私がカミサマに対する言い様の無い怒りを募らせる傍ら、フリスクは動きを封じられても尚まだ抵抗を続け、カミサマに向き直る。

【まだ、持ちこたえているのかい……？】

カミサマはそれに気付くと、私から目線を動かして面倒臭そうにフリスクを見る。

【まあいいさ。君だつてもう少しで全て忘れるんだ。来世でも精々そうやって足掻き続けろ！】

カミサマがそう嗤いながら言うと、両手を振り上げフリスクに向かって星を飛ばす。その星を、フリスクは何発か華奢な身体に受けながらも、避けて、立ち続けている。

悲鳴が口について出て来そうで、無理矢理押し留められる。

*The whole world is ending.

十数発程星が流れると、ターンがフリスクへと回った。フリスクは『ACT』を押し、抵抗を続ける。

*C a n , t m o v e y o u r b o d y .

【アハハハハハ……まだ!?!】

その抵抗を、カミサマは無駄だと嘲笑う。

【ほら……君の決意がどんなに役立つか見せてみるよ!!】

カミサマは手を振り上げ、フリスクにさらに攻撃を加えていく。小さな背中が、また傷付いていく。

目を逸らしたくても逸らせない。

——……とても、歯痒い。

自分の手で守りたいものの一つも守れないのが、歯痒くてたまらない。

*The whole world is ending.

星の雨が降り止むと、フリスクは膝をついていたが、よろよろと立ち上がって、震える手で『ACT』に手を伸ばした。

*Can't move your body.

*Nothing happened.

だがそれを無意味だと断じるように、アナウンスが流れる。

とうとう身体の限界がきてしまったのか、フリスクはまた膝をついてしまう。

*You struggle……

それでもフリスクは、目の前に表示される『ACT』に触れ、もがき続けた。

*Nothing happened.

でも、何も起こらない。

その姿が見ていられなくて、何かを叫ぼうと口を動かそうとして、動かない。

【アハハハハハ!! さっきまでの威勢はどうした、人間!!? もう終わりかい!!?】

そんなフリスクを嘲笑って、カミサマは高笑いを空間に響かせる。

今すぐフリスクに駆け寄って、抱き締めてあげたかった。

背中を支えて、あげたかった。

そう願っても、無力な私は——何もできない。

「……………おねーちゃん」

不意に、フリスクが私のことを呼んだ。

「大丈夫、だからね」

私の心を見透かしたように、振り向かずに言葉を続ける。

「いままで、散々…………お姉ちゃんに守られてきたんだ。今度は、ぼくが……………お姉ちゃんを守るよ」

「!!!」

掠れた声で言葉にされたそれは、酷く痛々しくて

誰よりも強い決意が滲んでいた。

* You tried to reach SAVE file

『ACT』が使えないならば、と考えたのか、フリスクは真つ暗な闇に手を伸ばそうとする。

* Nothing happened.

だが、やはり何も起こらない。

* You tried again to reach your SAVE file.
* Nothing happened.

それでもフリスクは手を伸ばし続けて……限界がきてしまったのか、伸ばされた腕がぶらりと下がる。

* Seems SAVING the game

really is impossible.

【やっと諦めたの?】

沈黙したフリスクを見て、カミサマは目を細めた。

【はははは、やっぱり〈決意〉なんて、とんでもない役立たずじゃないか】

カミサマはそう言うと、私を見る。

【でも……これで、今度こそ、僕は、君を……】

嬉しそうに頬を染め、何かを呟きながら、カミサマは此方に手を伸ばしてくる。

………ここで、終わりか

当たり前だよなあ、ゲーム通りだなんていくはずなかったんだ。

目線の先のフリスクを見て、目を閉じる。

——守れなくてごめん、フリスク……

*……

*
B
u
t
……
……

アナウンスが続いて、
我に返った。

この、アナウンスは。

*
M
a
y
b
e
,
w
i
t
h
w
h
a
t
l
i
t
t
l
e
p
o
w
e
r
y
o
u
h
a
v
e

……

絶望しかけていた心に、希望が灯る。

—— そうだ。こんな所で、私が絶望してどうする。

まだ、フリスクは……

* You ^他 の can ^何 か SAVE ^を s o m e t h i n g ^出 e l s e . ^来 る .

諦めずに、足掻いて足掻いて足掻いてるじゃないか。

—— あの子の姉である私が、先に諦めちゃダメだろうが!!

自分にそう叱咤すると同時に、突如として、瞼を閉じていても伝わるほどの光が溢れ

てきた。

【なっ……………!?!】

カミサマの驚くような声が響く。きつと、フリスクが奇跡を起こしたんだろう。――
―例えば、『ACT』を別のコマンドに変えるとか。

手を動かしてみる。

カミサマが動揺して封じられたのが解けたのか、動く。同時にビリビリと身体が裂け
そうな程の痛みが走るが、知ったことか。そんなの後でいくらでも痛がればいい。今
は、今だけは。

「……………っ、あっ……………」

足を動かす。

手を動かす。

身体を起こす。

悲鳴をあげる身体を無視して、立ち上がる。

「え、Chara、嘘でしょ……?!」

ぐらつく視界をしかと開けば、フリスクの前を塞ぐカミサマの驚愕の表情が目に入る。どうせこの傷で何故立てるのか不思議でたまらないだろう。そんなの今はどうでもいい。

足を動かして、フリスクの元へと歩き出す。フリスクの決意が造り出した、美しい光を伴って七色に輝くコマンド——『SAVE』に向かって。

「! お姉ちゃん!」

私が近付いていることに気が付いたらしいフリスクは、真っ直ぐに狼狽えるカミサマを射抜いていた視線を私に向ける。その視線に笑顔を浮かべ、応えてみせる。

「ははは、すげーな、フリスク……遂にそんなもんで創っちゃったかあ」
「お姉ちゃん!! 休んでてよ!!」

私を見て、フリスクは顔を歪めてそう言った。

確かに、本来なら私はもう引っ込んでいるべきなんだろう。

でも。

「いやだよ。フリスクが闘ってるのに、逃げてたまるか」

意地を張ってそう言って、フリスクの横に並び立つ。

口から滑り出す言葉のままに、私はフリスクに言う。

「だって、言ったじゃない。『つらいときは二人で半分こ』って」

私があの日約束を告げれば、フリスクは目を見開いた。

「私達は、あの日からずっと支え合ってきたじゃないか。だから……一生のお願いだから、あなたを支えさせて。あなただけに、最後まで闘わせたくないよ」

私が滅茶苦茶な言葉でフリスクに想いを伝えれば、フリスクは目を閉じて、そして――

「ああ、もう。分かったよ」

溜め息を一つ吐いて、

「――二人で、皆を助けに行こう」

笑顔で、頷いてくれた。

「ああ、勿論」

お互いに相手の差し出した手を握って、握り返す。固くその手を繋いで、私達はカミサマに向き直った。

【どうして、あり得ない、なんで!?!】

狼狽えるカミサマを前に、私達は輝いている『SAVE』に向かって手を伸ばし、触れる。

and *
 手 を 伸 あ な た は A S R I E L S ウ ル に
 called You reach the outside of your friends.

そしてそのまま手を動かして、カミサマの中心部にあるソウルに向かって手を伸ばす。

They *
 ど こ か に い る ん だ ら う
 re in there, somewhere, aren't they

?

問いかけるアナウンスに対する、返事はない。

*……

それでも手を伸ばし続ける。

手を伸ばす。

手を伸ばす。

手を伸ばす。

——
どくん

不意に、心臓が大きく跳ねるような感覚が、届いた。

*
 何^{How}か^{That}が^{With}共ⁱⁿ鳴^{the}息^{depth}の^sソ^{of}ウ^{ASRIEL},
 s^何o^かm^がe^共t^鳴h^息i^のn^ソg^の s^鳴r^息e^のs^のo^ソn^のa^ソt^のi^ソn^のg^の……!
 A^ルS^のR^奥I^深E^くL^で,
 S^くO^でU^でL^で,

私達の『SAVE』に伝えて、キラリと、カミサマのソウルが閃光を発した。

思わず目を閉じて、次に目を開けると、

*
 T^Lh^oe^s L^so^t S^so^ul^l a^がp^現p^れe^たa^たr^ed[.]

顔を霧で覆われた、長い髪を一つに結わえた彼女がそこに佇んでいた。

迷わず、フリスクはその人に向かって『ACT』を押し、駆けていく。手を引っ張られながら、遅れないようについていく。

*
 Y^あo^なu^た t^はa^はp^Lp^ed^s t^th^e L^so^ut^l S^をo^うl^と l^とi^つg^つh^つt^いl^たy[.]

とん、と軽く、フリスクは拳を彼女の身体に当てる。

それを受けて、彼女の身体が少し跳ねた。

*
 Sあoなmたeのth戦ingい a方bにo彼u女tはh覚eえ wがayあ yるoるuる fはiはgはhはtは iはsは fはaはmあiあlあiあiあ

『人間は皆死ぬのだ!』

彼女は頭を振って距離を取ると、背後に槍を出現させる。それと同時に足下にサークルと槍が出現した。現れた槍を引っ掴み、飛んでくる槍をはね除ける。

*
 Tあhなeた Lのoなsたtた Sのoなuたlた sがtそaこnにd付sんtでhいeるrるeる.

攻撃が止むと、フリスクはまた行動に出た。

You^あ asked^な the^た Lost^は Soul^し to^o teach^s you^t how^s to^o ^{*}

フリスクが彼女に向かって口を動かすと、彼女はまた反応した。

but^無 she^性 kind^に of^教 wants^え to^た teach^い you^よ how^う ^{*}
 She^{彼女} doesn't^は know^{理由} why^は,
 ……

『貴様らが我らの本当の敵』

それでも彼女は攻撃を続け、槍を飛ばす。はね除け、払う。

*The Lost Soul stands there.

攻撃が止む。フリスクは、また行動に出る。

* You あなたは gave Lost よst く soul を sitting の big を smile 思ing いing 出ing しing
 like と you び gave きst り the の e が
 remember 笑 she 顔 likes 見 to do.

にぱつと、フリスクはいつもの彼女のような豪快な笑顔を作った。
 それと同時に、彼女の顔を覆っていた靄が消えていく！

* the 記 memories 憶 are が flooding 溢 back! れ か え つ て き た
 Suddenly, 突然

『まあ、人間にもいいやつはいるんだろうな！』
 記憶を取り戻した彼女——アンダインは此方に駆け寄ってきて、どんと肩を叩いた。

何かを、託されたような気がした。

*
f a i n t l y r e s o n a t i n g w i t h i n A S R I E L .
かすか に 鳴 響 の を 感 じ
 Y o u r f e e l s o m e t h i n g
A R I E L の か ら 何 か が

笑顔のアンダインが消えると同時に、またカミサマが現れた。

とくん、とくんという感覚が、何処からか伝わってくる。

「一体、何が起こって……!?!」

動揺するカミサマを尻目に、私達はまた『SAVE』に手を伸ばした。

*W i t h i n t h e d e p t h s o f A S R I E L , s S O U L , s o m e
 e t h i n g s r e s o n a t i n g . . . !

そしてまた、閃光が走る。

*The Lost Soul appeared.

次に現れたのは、黒地に白の水玉模様のワンピースを着た彼女だった。

フリスクは『ACT』を叩き、踞る彼女に向かって口を動かす。

*
 that you'll continue to support her.
 彼女をあなたが続けるためにサポートする。

それを聞いて、彼女はピクリと反応する。

*
 said that is something about the way you
 彼女が覚えている家族のその言の仕方。

『私のことが、憎いでしょう……？』

彼女は靄で覆われた顔で此方を見て、そう呟く。そして、箱型の機械を飛ばし、拒絶

するように此方を攻撃する。それを、フリスクは彼女に改造してもらった携帯で撃ち落とすとした。

*The Lost Souls stand there.

機械を全て撃ち落とすと、フリスクは携帯を使って、何処かに電話をかけた。

*You called the Lost Soul on the phone……

少し遅れて目の前の彼女から携帯の着信音が鳴り響く。

*She starts to sweat.

そして震える手で腰辺りにあったらしいポケットから携帯を取り出して、それをじつと見つめる。

*She doesn't know why,

but this all seems very familiar……

『嘘をつき続けなきや……』

携帯から目を逸らし、彼女は爆弾を飛ばしてきた。それを、フリスクは撃ち落とした。

*The Lost Soul stands there.

全てを撃ち落として、フリスクはまた彼女に行動を起こした。

*What her favorite cartoon is. You ask the Lost Soul

フリスクが口を動かすと、だんだんと彼女の顔の靄が晴れていく！

*Suddenly, the memories are flooding back!

『ううん、違うわ！ 好きでいてくれる人がいる！ そして、私もあなたが好き！』

靄が晴れると同時に走り出して此方にやってきた彼女——アルフィスは私達の手を握って、そう叫んだ。

また何かを、託された気がする。

*
鳴 r e s o n a t i n g 響 Y o u A f e e l S R s o m e E L の 中 か
り く の を 感 じ る ら 何 か
w i t h i n A S R I E L . s l i g h t l y

にっこりと微笑んだアルフィスが消えると、未だ狼狽えるカミサマの前に戻ってきた

【僕の中から、力が消えていく……!?】

勢い良く、カミサマは私を見た。

「……そうか、Chara、君がソイツを……!!」

そして怒りを顕にするカミサマを無視し『SAVE』を押す。

*Within the depths of ASRIEL, s
SOUL, s
om
e things resonating……!

また、閃光。

*The Lost Souls appear^た.

その次に現れたのは、靄で顔を覆われた大小二人のスケルトンのモンスター。

片方は骨を構えて、片方は項垂れるように顔を伏せて。

そんな彼らに向かって、フリスクは口を開いた。

*—You told the Lost Soul a bad pun about skeleton《あなたはLost Soulたちにスケルトンをかけた駄洒落を言った》。

フリスクの口から紡がれたであろう言葉に、二人はそれぞれの反応する。

*He seems to hate it……

*but the other Lost Soul seems to like it.

一方は地団駄を踏み、一方は顔を上げて少し笑った。

『人間を捕らえなくては!』

『もう諦めろよ。俺はそうしたさ』

それでも二人は拒絶するようにそう言って、此方に骨を呼び出して攻撃してくる。それを、右手のナイフを奮って弾き飛ばした。

*The Lost Souls stand there

ぼんやりとそこに佇む彼らに、フリスクは行動を起こした。

* You ask the Lost Soul for help with a puzzle

フリスクは背の高い方の彼に話しかけたのか、背の高い方の彼が少し反応する。

* but he really wants to help you. He doesn't know why,

『そうすれば皆が、』

『努力しても何も報われないんだぞ?』

攻撃をしてくる彼らの攻撃を、弾き、受け流す。

*The Lost Souls stands there.

攻撃が止むと、フリスクはまた行動に出た。

*—You asked the Lost Soul to cook something for you《あなたはLost Soulに何か料理をしてくれるよう頼んだ》。

フリスクの言葉に応じるように、彼らはピクリと反応する。

*
The Lost Soul is trying to hide its joy
……

『もう二度と会えないんだ』

だが、もう一人の彼の方は、絶望してしまったように顔を伏せてしまった。そのまま拒絶するように攻撃をしてくる。その骨を、弾く。

*The Lost Souls stands there.

全ての骨を弾くと、フリスクはまた行動に出た。

*You told the Lost Soul a bad pun about skeletons.

*Suddenly, the memories are flooding back!

フリスクが今度は小さい方の彼に向かって精一杯口を動かすと、彼らにかかっていた靄が晴れていく！

『いや！ 待て!! お前は友達だ!!! 捕らえるなんて絶対できん!!!』

『いや。ちびっ子のことには信じてるぜ』

そう強く言い切った彼ら——。パピルスとサンズは私達に向かって笑った。

何かを——想いを託された気がする。

ふと、サンズにじつと見られていることに気付く。

それに対して笑い返せば、サンズは呆れたように肩を竦めた。

*
鳴 r e s o n a t i n g 響 A Y o u s R e e l E s o m e 中 t h i n g 何 s t r o n g l y
り く の を 感 じ ら か が 強 く

彼らが消えると、カミサマの前に戻ってきた。

【また、力が抜けていく……!!!】

カミサマが、激昂する。

【最後までそつちにつく気なんだね!! ならもう知ったことか!!】

怒りを含んだ叫びが、空間に響く。

【ソイツごと消えちゃえばいい!!】

その叫びを無視して、『SAVE』に触れる。

*Within the depths of ASRIEL's SOUL, something resonating……!

閃光が走った。

*The Lost Souls appeared.

最後に現れたのは、顔を霧で覆われた白い毛に全身を包まれたモンスター達。

現れた彼女達に向かって、フリスクは直ぐに行動を起こした。

*—You tell the Lost Soul that you have
to go if you're going to free everyone
《あなたはLost Soulに皆を自由にするには行かなければならないと伝え
た》。

フリスクが口を動かすと、彼女がピクリと反応する。

*Something is stirring with her……

『これはあなた自身の為なのよ』

『私の行いを許してくれ……』

それでも彼女は頭を振って、そう言う。彼の方は、ただ赦しを乞うように項垂れる。そんな彼らの手の先から、炎が溢れて飛んでくる。身体に鞭打って、フリスクを抱え上

げて回避する。

*The Lost Souls stands there.

炎が止むと、フリスクは私の腕から飛び降りてまた行動に移した。

*You refuse to fight the Lost Soul.

彼女達に向かってフリスクが首を横に振ると、彼女達の身体が跳ねた。

*
Something about this is so familiar to her
……

『もう誰もここから出ないように』

『これが私の義務なんだ』

それでも彼らは攻撃を行ってくる。囲い込むような炎の輪の綻びの部分にフリスク共々滑り込む。

*The Lost Souls stands there.

その攻撃が止むと、フリスクは彼女に向かって駆け出した。

*and^ま tell^た her^会 that^え you^あ’re^な going^は to^る see^る her^と a
*Some^えthing^は about^る this^は is^る so^る familiar^る
to^え her^る……

そしてその勢いそのまま彼女に飛び付き、ぎゅうつと抱き付いた。

『……』

その頭を撫でようとした手から、炎が溢れ出す。急いで彼女から離れたフリスクは、

その炎を回避し、事無きを得た。

*The Lost Souls stands there.

攻撃が止むと、フリスクは今度は彼の前に立った。

*You hug the Lost Soul.

そして、彼女と同じように、抱き付いた。

その瞬間、彼女達にかかっていた靄が晴れていく！

*Suddenly, the memories are flooding back!

『あなたの運命はあなた次第よ！』

『君は私達の未来だ！』

靄が消えた彼女達——トリエルさんとアズゴア王はそう言って、私達を強く抱き締めた。

想いを、託された。

*—You feel your friends, SOULs resonating within ASRIEL《ASRIELの中から友達のソウルが鳴り響くを感じる》！

彼女達が消えると、カミサマの前に戻ってくる。

皆の想いを胸に、私達は『SAVE』に手を伸ばした。

*
 a s y o u r f r i e n d s r e m e m b e r e d y o u . . .
 友 人 達 は あ な た を 思 い 出 し た よ う だ
 S t r a n g e l y ,
 不思議なことに

*

Somet様々hing else began resonating共 within鳴 the
 stソウronger and stウルronger.

カミサマの中に居た皆が私達を思い出してくれたからか、身体が暖かいもので満たされていく。

*—It seems that there's still one last person that needs to be saved 《救わなければならぬ誰かがまだ残っているようだ》。

今まで感じたことの無かったその感覚を感じていると、不意に、アナウンスがそう続く。

*But who……? でも誰だろう？

アナウンスと同時に、フリスクは考え込み始める。

*……

そして、フリスクは顔をあげ、前を見た。

*Sudden^ふly, you^と realize^{あなた} is^は real^{気が}izing^{付いた}.

「……………ねえ、お姉ちゃん」

不意に、フリスクが私を見る。

「ぼくさ、今すっごい馬鹿な事考えてるんだけど……………着いてきてくれるよね」

決意で輝く強い瞳が、私を射抜く。これから何をするつもりなのか察し、本気でやり遂げる気なのだと考えて、

——笑みを返す。

「ああ、勿論。どこまでもついていくよ、フリスク」

そう応えれば、フリスクは、この世界で一番美しく微笑んだ。

「ありがとう」

そして、私達は繋いだ手をまた強く握り締め、私はフリスクを支えて、フリスクは、目の前のカミサマに向けて、手を差し伸べた。

*You reach out and call their name.
あなたは手を差し伸べてその名前を呼んだ。

「アズリエル！」

凜とした声が、空間に響き渡った。

「えっ？ 何をしてるの……!？」

その瞬間、脳裏に何かが過っていく。

目を閉じてそれに集中する。

穴に人間が落ちてきたこと。

そこに通りかかった白い毛に包まれた気弱そうな子供が、落ちてきた人間を助けたこと。

その人間を『家族』として受け入れて優しく笑う、一つの家族のこと。

次々と切り替わるそれを見て、これはカミサマの記憶だ、と直ぐに察した。

*You feel your friends, SOULs resonating within ASRIEL!

目を再び開けば、目の前のカミサマは困惑していた。

それを無視して、『SAVE』を押す。

【な……何をしたの……？】

戸惑うように顔を歪めるカミサマは、脈動する自身のソウルに手を当てる。

【何だよこの気持ち……？ 僕に何が起こってる？】

そして顔を歪めて、拒絶するように頭を振った。

【嫌だ！ 嫌だ！ 僕には誰もいららないんだ!!】

そう叫ぶカミサマの手から、流星群が降り注ぐ。今までの比じゃない量の中を、フリスクと一緒に避けていく。

*……………

攻撃が止むと同時にまた『SAVE』を押した。

そして、カミサマに向かって、一歩づつ、近付いていく。

【やめろ！ 僕から離れろ！ 聞いているのか!?!】

そんな私達を拒絶し、カミサマは叫んだ。

【八つ裂きにしてやる!】

その声と同時に、また星が降った。

だが、その星は、私達に一つも当たることにはなかった。

*
.....
*
.....

『SAVE』を、押す。また、進む。

【……………Chara……………なんで僕がこんなことをしてるかわかる……………？ どうして君をここに留めているのか……………？】

そんな私達に向かって、カミサマは語りかけてくる。

*……………

『SAVE』を押す。

【それは……………君が特別だからさ、Chara】

カミサマは、悲しそうに顔を歪める。

【君しかいないんだ、僕をわかってくれるのは。君しかいないんだ、遊び甲斐のある相手は】

カミサマの手から、炎がこぼれる。それは当たらずに、ただ落ちていく。

*……

『SAVE』。

【……………それだけじゃない。僕は……………僕は……………】

カミサマは泣きそうな顔で、此方を見る。

【僕にとって君が大切だからなんだよ、Chara！ 誰よりも君のことが大切だからさー！】

*……

『SAVE』。

【まだ終わらせたくないんだ。まだ君にいらなくなってほしくないんだ】

カミサマの目から、涙が一粒落ちる。

【まだ君みたいな誰かにもう一度さよならを言いたくないんだ……】

*……

『SAVE』。

【だからお願い……もうやめて……】

ぼろぼろと涙を溢し、震える声でカミサマは言う。

【いいから僕に勝たせてよ!!】

そして私達に向かって、極光を打ち出した。

成す術もなく、呑み込まれる。

身体が、意識が、全て消し飛ばされそうになる。

——それでも

【やめて!!】

光の中で立ち続けるフリスクの背を支え、歯を食い縛る。

全身の感覚が、消えていく。

【もうやめてよ!!】

尚も太くなる光を耐える

耐える

耐える

耐える

——不意に、光が消えた。

*
……

最後に残った『SAVE』に、触れる。

【Chara……】

カミサマの——アズリエルの悲しそうに歪む顔から、絶えず涙が落ちていく。

*……

『SAVE』。

【すごく寂しいよ、Chara……】

*……

『SAVE』。

【すごく怖いよ、Chara……】

*……

『SAVE』。

【Chara、僕は……】

*……

——『SAVE』。

【ぼくは………】

ただ、
君を……救いたかった
ただけなんだ……

託された願いと、最後の交流

〔Lily〕

アズリエルから発される光が消えると、そこに居たのは、フリスクと同じくらい、白い毛に全身を覆われた小さな子供だった。

「……………えぐ、うう……………」

鼻を齧り、ぼろぼろと涙を溢す子供——アズリエルを何も言わずじつと見つめてみると、次第に彼は涙を拭って、顔を上げた。

『……………ぼくは泣いてばかりだったよね、Chara?』

アズリエルは悲しげな顔でそう言って、はは、と空笑いをした。

「……」

そんなアズリエルに向かって、フリスクは口を動かした。

『……………分かってる。君は本当はC h a r aじゃないよね……………?』

そして怯えたような眼差しで此方を伺うアズリエルに向かって、首を縦に振ってやる。

「そう最初から言ってるでしょうに」

私がそう肯定すれば、アズリエルはやっぱり、と言いながら目を伏せた。

『C h a r aはずっと前にいってしまったから』

そう言っつて、アズリエルは口を閉ざす。

『……………ねえ……………君の名前は……………？』

ふと、顔を上げたアズリエルがそう尋ねてくる。

私達は顔を見合わせ、そして、またアズリエルに向き直って、私からやつと出来た自己紹介を始める。

「私の名前はリリー。名字はないよ。で、この子が私の妹の——」

「……………」

私の自己紹介に続いて、フリスクが口を動かす。それをアズリエルはじつと見て、

『「フリスク」？』

と繰り返した。

それを聞いて、フリスクは満足そうな顔で大きく頷いた。

『とても……………良い名前だね』

アズリエルが少し微笑みながらそう言えば、フリスクは少しはにかんだ。

『……………フリスク……………こんな気持ちになるのは久しぶりだよ……………』

そう言って、アズリエルは自分の手を見た。

『お花だったとき、ぼくにはソウルがなかった。皆を愛する力を無くしてしまったんだ』

そして、ぼつりぼつりと、『フラワー』だった時のことを語り出す。

『だけどぼくの中にいる皆の力で、ぼく自身の思いやる心を取り戻せた、それに……………他のモンスター皆の優しい心を感じ取ることが出来たんだ』

フリスクの首にかかっているものと同じロケットを握り締め、アズリエルは言う。

『皆が皆を本当に大切に想っているのを感じる。そして……君のこともね、フリスク』

そこで、アズリエルは顔を上げて微笑んだ。

『……口では言い表せられないほど皆が君のことを想ってくれているんだ』

ロケットから手を離し、アズリエルは指を数えるように曲げながら、名を挙げていく。

『パピルスに……サンズ……アンダイン……アルフィス……そしてトリエル』

アズリエルは最後に、まだまだたくさん、と付け加える。

『モンスターは不思議だね。皆が君のことをほとんど知らなくても……皆が心から君を愛しているみたいだ。ははは』

空笑いをして、アズリエルはそう締め括る。そして、苦しそうに顔を歪めた。

『……………フリスク……………君が……………ぼくのことを許せないのは分かってる。ぼくのが嫌なのはわかってる。ぼくはとてもおかしなことや恐ろしいことをしてしまったんだもの』

辛そうな目で、アズリエルはフリスクを見る。

『君を傷つけて。皆を傷つけてしまった。友達も、家族も、関係のないモンスターも……ぼくがしてしまったことに言い訳なんてできないよ』

そして、アズリエルは今度は私を見て、頭を下げる。

「……………ごめんなさい、Charaのそっくりさん。ぼくは本当はずっと君がCharaじゃないって気が付いてたのに、Charaとして扱って、君を沢山傷付けた」

ゲームになかった台詞と動作に驚きながらも、私はアズリエルの口から出る言葉を聞く。

「君が、あまりにもCharaにそっくりで……Charaが、生まれ変わって戻ってきてくれたんじゃないかって、思ってしまった。そう思ったら……色んな思いが混ざり混ざりちやつて、もう、止まれなくなつて」

口を挟まず、最後までアズリエルの話を聞く。

「でも、どんな理由があつても、赦されるべきじゃないのは分かつてるんだ。それでも……本当に、ごめんなさい」

そう言つて締め括つたアズリエルに対して、私は口を開く。

「良く分かつてるじゃないか、アズリエル」

私が言葉を返すと、アズリエルはビクツと身体を震わせた。

「君がやったのは私個人としてはあまりに赦しがたい事だ。正直、思い出すだけで腹が

立つよ」

「ちよつと、お姉ちゃん」

「いいから」

窘めようとするフリスクを遮り、頭を下げ続けるアズリエルに向かつて続ける。

「二つ聞かせて。——それは、自分の『罪』であるという自覚は、本当にあるのかい？」

私がそう問いかければ、アズリエルは顔を上げて、頷いた。

「うん」

「セーブとロードを使って、皆を殺して回ったりしたのも？」

「勿論」

私が続けて問いかければ、アズリエルはしかと頷いた。

……—うん、これなら……

「そう。それなら——私は二つだけ、貴方に罰を与えましょう」

『罰』という言葉聞いてか、アズリエルの身体がまた跳ねた。

「貴方はこれからどんな時もあるその罪を忘れないこと。どんなにその罪が重くても背負っていくこと。それが守れるなら、私は赦せはしないけど——妥協はしましょう」

私はアズリエルにそう言って、口を閉じる。

「……はははは」

私の話の内容に目を丸くしていたアズリエルは、少ししてから笑い声を溢した。

「——うん、分かった。ぼくは、この罪をずっと背負っていくよ」

そして、憑き物が落ちたような顔で、しっかり頷いた。

「……………フリスクは、どうなの？」

最後にフリスクに話を振れば、フリスクは少し考え込むような仕草をして、そして、

『……………え、ええ？ ……………フリスク、よしてよ……………』

アズリエルに向かって、笑って首を横に振った。

それを聞いて、アズリエルは目を丸くし、今にも泣きそうな顔になる。

『君は……………またぼくを泣かせるんだね』

そして、また目を伏せた。

『……それに、もし君がぼくを許してくれるとしても……皆のソウルをぼくの中に留めてはられない。』

——せめて、返してあげなくちゃ』

でも、と、そこでアズリエルは顔を上げ、強い意志が籠った目で、此方を見た。

『——やらなきやいけないことがあるんだ』

人間でいう心臓がある部分に手を当てて、アズリエルは言う。

『今、皆の心が一つになるのを感じるんだ』

何かを感じるように、アズリエルは目を閉じ、続ける。

『皆が同じ望みに心を滾らせている』

決意の滲むそれを聞いて、私はアズリエルがこれから何をするのかを察し、口を挟ま

ないように黙る。

『皆の力が……皆の決意が……モンスター達について……——自由をもたらす時がきたんだ』

……——不意に。

アズリエルがそう言い終わると、彼はふわりと浮き上がった。

薄く光を纏いながら空へと浮かぶ彼の中から、色とりどりのハートが飛び出してくる。

水色。

橙色。

青色。

紫色。

緑色。

黄色。

今まで落ちてきた人間の、ソウル達。

それが、アズリエルの周りに浮かび上がった。

「この地下世界を——解放する!!」

アズリエルがそう叫んだ、その瞬間、

アズリエルの中から無数の白い物が飛び出した。

それは、光を纏って闇の中を駆け抜けていく。

流れ星のように翔んでいくそれを目を凝らして良く見ると、

すべて、モンスター達のソウルだった。

「

その光景に、思わず言葉を無くして、魅入っていた。

——……………やがて、

ビシリ

何かに、罅が入る音がする。

そして、

「……………これでもう、モンスターと地上を阻む結界は無くなったよ。皆が皆、地上に出られるようになった」

そう、アズリエルは微笑む。

その笑顔は——今すぐ消えてしまふんじゃないかと錯覚するほど、酷く、儚かった。

『……………もう、行かなきゃ』

不意に、アズリエルは顔を伏せる。

『皆のソウルの力がないと……………ぼくはこの姿でいつづけられないんだ』

悲しそうな、寂しそうな声で、言葉が紡がれる。

『ぼくはもうすぐ……………お花フラワーに戻ってしまふ。

——ぼくは「アズリエルぼく」で、いられなくなる』

それを聞いて、隣のフリスクから息を飲む音がした。

『ぼくはまた、誰かを愛することが出来なくなってしまう』

そこで、アズリエルは哀しそうに微笑む。

『だから……フリスク。君はぼくのことを忘れた方がいいんだ、わかるね？』

その笑顔のまま、フリスクに向かって続ける。

『君を大切に想ってくれる仲間と一緒にいてくれればそれでいいんだ』

そんな彼を、フリスクは。

「……………わっ……………!?!」

駆け寄って、抱き締めた。

「……………なんで……………きみは、もう……………」

フリスクの突然の行動に驚いて目を丸くしていたアズリエルの目が、徐々に潤んで、目尻に透明なものを溜めていく。

ちらりと、フリスクが此方を見て、手招きをした。

そのジエスチャーが意味することに従って、私もアズリエルに近付いて、

「えっ」

膝について、フリスクごと抱き締めてやる。

いつもフリスクにやってやるように、片手はフリスクに回し、もう一方の片手で頭を撫でて、慈しんでやる。

「……………よく、頑張ったな、アズリエル」

「!!」

そう小さく言って伝えれば、アズリエルが息を飲んだ音がした。

続いて、鼻を吸る、音がする。

肩に、冷たいものが落ちて、染みってくる。

『は……………は……………』

震える声で、アズリエルは笑う。

表情は見えないが、きつと——……彼は、泣いているのだろう。

『……………離れたくないよお……………』

鼻を吸りながら、アズリエルは私達に手を回して、ぎゅうつと抱き付いてきた。

その頭を、そつと、出来るだけ優しく撫でる。

「……………でも、だめだよね……………」

そう小さく呟いて、アズリエルは……………自ら、手を離して、私達から離れていく。

そして、目尻に浮かんだ涙をごしごしと擦って拭い、涙でぐちゃぐちゃになった顔で

——笑った。

『フリスク……………君は、今から凄いことをするんだから、いい?』

その笑顔のまま、アズリエルはフリスクに優しく語りかける。

そして――…

『何も心配しないで。――みんなが、君の傍にいてくれるから』

フリスクに向かって、祝福の言葉を送った。

「……………リリー」

その次に、アズリエルは真っ直ぐな瞳で、私を見る。

「どうか……………幸せになってね」

その言葉に、その笑顔に――……………私は、

「……………勿論だよ」

そう返すことしか、出来なかった。

『……………さあ、もう時間切れだ』

時間が来てしまったことを悟ったのか、アズリエルは此方に背を向ける。

『……………さようなら』

そのまま、私達に背中越しに別れの言葉を告げると、彼は歩き出す。

『……………それと、フリスク』

ふと、少し歩いた所で、彼は振り向いた。

『……………パパとママのこと、よろしく、ね?』

そして、フリスクに向かって——最後の言葉を遺した。

その言葉に対して、フリスクは、

「……………——もちろん、ぼくに任せて」

力強く、頷いた。

「……………良かった……………」

それを見て、アズリエルは安心したように笑い——……………輝きだした光の中へと、
去っていった。

【F r i s k】

「……………F r i s k……………」

誰かの、声がする。

ぼくの名前を、確かに呼ぶ声がする。

「これは全部、ただの悪い夢……………」

揺さぶられるような、感覚がする。

「お願い、起きて……………!!」

……— わかった、いま、起きるから —

まだ眠たい目をゆつくりと開けると、目に入ってきたのは……

「……— 皆………？」

Torie ママ。

Asgore パパ。

Papyrus。

Sans。

Undyne。

Alphys。

ぼくを囲む、大切な友達。

「まあ！ 気がついたのね！ 本当に良かったわ！」

ぼくの顔を覗き込んだママが、安心したようにそう言った。

「……………うーん……………」

ぼくの隣にいたお姉ちゃんが、うつすらと目を開く。

そして、ぼくと皆を見て、もう一度瞬きをしてから、目をしっかりと見開いた。

「おはよう、Lily。少しお寝坊しちやっただわね？」

「——はは、みたいです。おはようございます、Torielさん」

ウインクして笑うママに、お姉ちゃんは小さく笑って、身体を起こして、伸びをした。ぼくも続いて身体を起こして周りを見渡し、ママと同じように安心したように笑う皆を見る。

「と、とつても心配したのよ……！　ずっと目を覚まさないみたいで!!」

Alphysが、眼鏡越しの目に涙を浮かべてそう言うと、Undyneが大きく頷いた。

「ああ！　これ以上寝てたら、あたしがパニックるところだったぞ！　次に昼寝をすればちゃんとあたし達に言うんだぞ、いいな?」

「うわ、それはすまない」

Undyneの言葉に思わずぼくが驚いていると、お姉ちゃんは少し申し訳なさそうに笑う。

「ああ、Papyrusが赤ん坊みたいに泣きじゃくってたからな」

「えっ、本当に？」

「なんだと!! 泣いてねーし!!! 泣かねーし!!!」

そこにSansがさかさ茶々を入れて、お姉ちゃんが反応すると、PapyrusはSansに向かって怒ったように言い返した。

「俺様はただ……ちよつと何かが目に入っただけだ」

「入ったって、何がだ？」

「涙だ!!!」

Sansの追求にPapyrusが自棄になって叫び、目の穴から涙をぼろぼろと溢

す。

「まあ、まあ」

兄弟喧嘩みたいなのをする二人を、パパが優しく止める。

「Frisk達が無事で何よりじゃないか」

ぼくと戦ったときとは違う、優しい笑顔で笑いながら、パパはそう言った。

「さあ、Frisk。お茶でも如何かな？　きっと気分が良くなるよ」

「あらあら………まずはそつとしておいてあげたらどうかしら？　きっとこの子は凄く疲れてるでしょうから。一体何故かは、よく分からないけれど」

その笑顔のまま、パパはぼくにお茶を勧めてくる。

そんなパパを、ママが少し笑いながら止めた。

——……………良かった、皆々、ここにいる。

そう安心して、飲みたい、と返事をしようとして——……………

ふと、気がついた。

「……………あれ、ぼく、皆に名前名乗ったつけ……………」

「ん？ ……………あ、そういえば、Friskって名乗ったか？」

「いや、名乗ってない気がするんだけど」

皆が当たり前のようにぼくの名前を呼ぶから気付くのが遅くなっちゃったけど、ぼくがぼくの名前を一度も皆に名乗っていないのに知っていることに気がついて、不思議に思った。お姉ちゃんもその事に気付いたのか、ぼくに尋ねてくる。ぼくは首を横に振っ

た。

「それなんだけれど、Frisk……私達は何が起きたかよく覚えてないの」
顔を見合わせるぼくたちに向かって、ママが話しかけてくれた。

「一輪の花があつて……それから、目の前が真っ白になったの。でももう結界は無くなつたわ」

不思議そうに、ママは話す。

「そして、何故か……あなたの名前を、皆が覚えていたの」

何故なのかしら、と続けるママに、ぼくは思わず笑顔になった。

——……きつと、Asrielが、皆にぼくの名前を教えてくれたんだ

そう思ったから。

「とにかく、あなたの準備ができたら、私達と地上に戻りましょう。東の扉の向こうに、地上があるみたいなの」

優しく笑って、ママはそう言う。

東の扉と聞いて、一回目にお姉ちゃんと一緒に地上に出たときのあの扉のことだと、すぐに分かった。

「でも、その前に………ひよつとしたらあなたは散歩に行きたいかもしれないわね？」

ふと、ママがそう言ってくれた。

「あなたの素晴らしいお友達皆があなたのお別れの言葉を聞いてくれるわ。好きにしていいのよ。私達はここであなたを待っているから」

「……………だつてよ、どうする、Frisk」

静かに聞いていたお姉ちゃんが、そう言つて立ち上がる。そして、ぼくに、いつも通り手を差し出した。

「別に私はどつちでもいいよ。特にどうしたいとかはないから、Friskの好きなようにすればいい。何処へだつてついていくからね。……………さあ、どうする？」

お姉ちゃんは優しく笑つて、そう訊いてきた。ぼくは少し考えて……………

「……………ちよつとだけ、ここに居る皆とお話したいな」

そういいながら、お姉ちゃんの手を握つた。

「ん、分かつた」

お姉ちゃんは頷くと、ぼくの手を引っ張つて立たせてくれる。そして、背中汚れを

少し払ってくれた。

「ありがとう」

お姉ちゃんにありがとうと言ってから、ぼくはまずパパに話しかける。

「こんにちは、パパ」

「やあ、Frisk」

パパは、ぼくの言葉に答えてくれて……すぐに、哀しそうな顔をした。

「……きみからソウルを奪おうとしてすまなかったね。本当に申し訳ないよ。それでも友達になれるといいんだが」

「いいんだよ、パパ。ううん、此方こそ友だちになってくれると嬉しいな！」

ぼくがパパにそう言うと、パパは目を真ん丸にした。

「……………あれ。ぼくなんか変なこと言った？」

思わずぼくがそう聞けば、後ろのお姉ちゃんから声が飛んでくる。

「……………Frisk。あなたは何時からAsgore王のことを友達のプロセス飛ばしてパパと認めたの？」

「……………あ」

その言葉で、ぼくが心の中で呼んでいた呼び方で呼んでしまったからだとすぐに気付いた。

「まあ、そんな心配しなくていいとおもうぞ、Asgore王。みんな一度はFriskを殺そうとしたことがあるみたいだし」

「その度に私が文字通り命懸けで守ってきたんですけどね」

「うぐつ、……………すまん」

「はは、まあ、結局Friskが納得してるんで別にいいけど？」

パパをフォローしようとしたUndyneが、笑顔のお姉ちゃんに冷たく切り返されていた。お姉ちゃん、実は根に持つタイプだからなあ……………暫くネタにされるなあ、これは。

「なるほど……………そうか！ それなら、すまなくなかったね、Frisk」

「Asgore王！ そういうことを言ったんじゃない！ 中途半端なこと言ったあたしが悪かったからLilyに謝れ、今すぐ謝れ！ じゃないと今Lilyが握った拳が飛ぶぞ!!」

「Asgore王、そんなに私の慈悲（物理）が受けたいのかい？」

「ごめんなさい」

Undyneの言葉を聞いて納得したように頷いた。パパを見て、お姉ちゃんが急に真顔になって拳を握る。それを見た。パパはすぐにお姉ちゃんに向かって頭を下げた。

その光景に思わず笑いながら、ぼくは次にAlphysに話しかける。

「やあ、Alphys」

「こ、こんにちは、Frisk!」

ぼくが声をかけると、Alphysはちよつときこちない笑顔で笑ってくれた。

「ねえ……F、Frisk」

「どうしたの?」

Alphysにはぼくに用事があったみたいで、ぼくが話題を振るより先にぼくに手招きをしてきた。それに応えて傍に寄れば、Alphysは顔を寄せて、周りに聞こえないように小声で話しかけてくる。

「あの、ちよつと聞きたくて。あ………あなたはAsgore様とToriel様が、その……？ えと、いつかは元の関係に戻れると思うかしら？」

Alphysはどうやらパパとママのこれからが心配みたいで、そう尋ねてきた。

「……………うーん……………」

パパとママがどうやってお別れしたのか知ってるぼくは、少し悩んだ。

ふと、お姉ちゃんが昔、「本当に嫌いな人とは誰もお話ししようとしななんだよ」と言っていたのを思い出す。それからパパとママが普通にとはいかないまでもちゃんと話しているのを思い出して、

「……………もちろん、大丈夫だと思うよ」

そうAlphysに返した。

「え、ええ!! そうね、そう私も願ってるわ。彼らがどれだけ魅力的な時間を過ごしていたか考えてみて。さっそく私のナンバーワンのカップになりつつあるわ。TorriとGorey……………私の……………私の上司とその奥様だったお方。……………あ、そう考えるとなんか急に冷めてきた」

「くくくっ」

興奮して小声で話すのを止めたAlphysの声はお姉ちゃんにも聞こえたみたいで、Alphysが真剣な顔でそう言い切ると、堪らないといったように吹き出した。

「わ、笑わないでちょうだい、Lily……………」

「ははは、ごめんごめん」

顔を真っ赤にしたAlphysに、お姉ちゃんは笑いながら謝った。

「あ、そういうえばMetttatonは？」

「え、ああ、彼なら会いたいモンスターが居るって言って行っちゃったわ」

「……………ふーん。そう」

二人が話し込んでいるのを見ると、Undyneが近付いてきた。

「なあ、Alphys……………みんな解放されたんだしこれからどうする？ どこまでも世界を探検できるぞ」

「そ、そりやあもちろん家から出かけて、それから……………えつと……………」

Alphysに声をかけたUndyneに、さっきお姉ちゃんにからかわれた時とは違う意味で顔を少し赤くしながら、AlphysはUndyneに答えようとする。

「いや、正直に言わなきゃ!! 私、家から出ないで負け組みたいにアニメを見る!」

「その意気だ! 皆!! 祝おう!! 負け組であることを!!」

「ふ、あはははっ」

Papyrusとの特訓を思い出したからか、Alphysは正直にそう言った。そこにPapyrusが変なフォローを入れたからか、お姉ちゃんがまた吹き出した。

「へっ。Papyrusの言うとおりだな」

意外なことに、Papyrusのその言い分に、Undyneが同意した。それにびつくりしていると、Undyneはぼくに手を伸ばし、わしゃわしゃと頭を撫でてくれる。

「Friskに負けたのは産まれてこのかた最高の巡り合わせだ」

「わ、わっ………そうなの？」

「ああ」

ぼくの頭を撫でながら、Undyneはニツと笑った。

「だから嬉しいんだ、あたしたちが………ん？ どうした、Asgore王？」

Undyneがぼくに向かって言葉が続けようとして、顔を上げてぼくの後ろの方を見た。ぼくもそっちの方を見ると、パパが困ったような顔をしていた。

「その……アニメとは……何だい？」

それを聞いて、Alphysがパパを見てあんぐりと口を開いた。

「嘘でしょ？」

そう小さく呟いて、Alphysはぼくに目配せしてくる。

「Frisk。お願い。Asgore様にアニメを説明するのを手伝って」

「ここよ」

Alphysに頷きながらそう返すと、Alphysはパパに説明を始めた。

「え、えつとですね、漫画みたいなものです、けれど……」

「銃を持って戦ったりするんだよ！」

孤児院で見たアニメを思い出して、パパに教えてあげる。かつこよかったなあ、あのアニメ。謎解きとかもあって面白かったなあ。

「それは漫画みたいなものだけど……でも銃を持つてるって？ おやおや！ カッコよさそうだ！ どこにあるんだい？ 私はどこでアニメを見られるんだろう」

「お、お待ち下さいね……私の携帯に幾つか入っていたと思いますので」

アニメに興味を持ってくれたらしいパパにアニメを見せるため、Alphysが携帯を取り出して操作する。

「さあ、ご覧下さいー！」

少しすると、Alphysが携帯の画面をパパに見せる。それをパパとUndyneとお姉ちゃんと一緒に覗き込む。

『ああ、愛しているよ、Jane……』

『私もあなたを愛しているわ、Williy！』

抱き締め合う、二人のロボットのアニメだった。

場面が進んで、二人の顔が近づくのを見た途端、目の前が急に真っ暗になる。

「わっ」

「ちよつとA l p h y s。 見せるアニメが違うと思うよ」

「えっ、そんな筈は……」

上から降ってきた声で、お姉ちゃんに目を覆われていることに気付いた。A l p h y sの驚く声が続いて聞こえた。

「……………あ、あー……………えつと……………これは……………間違えました……………その、お気になさらず」

そして次に、焦ったようなAlphysの声でした。

「んん。二体のロボットが……」

「……………キスを？」

アニメを見たパパとUndyneの、不思議そうな声がする。

手が退けられて、見えるようになった。

「ほほう！ 科学技術というのは本当にすごいんだね！」

「エへへへ……………はい！ その通りです！」

「……………性癖露見……………」

「言わないでちょうだい!!!」

感心したような声をあげるパパに頷いた Alphys に、お姉ちゃんがボソツと何かを言った。Alphys にとってそれはトドメだったみたいで、また顔を真っ赤にして顔を覆ってしまった。

お姉ちゃんは何を言ったんだろう、と思いながら、今度はパパを見つめて何か言いたげにしている Papyrus に話しかけた。

「Papyrus、どうしたの？　パパに何か言いたいの？」

「ああ、ちよつとな」

ぼくが尋ねると、Papyrus は頷いて、パパに向かって話しかけた。

「あの、ASGORE 様……俺様を王国騎士団の一員にしてはいかがでしょう？」

「それなんだがね、Papyrus、戦いはもう終わったから……我々にはもう王国騎士団はいらないかもしれないんだ」

「なにいつ!？」

優しくそう言った。パパの言葉に、Papyrusは目を見開いた。

「ならば人間はなんのために旅をしたのです!? あんなに長い道のりを辿ったというのに……俺様はまだ王国騎士団に入れないのですか!？」

そう言って、Papyrusはがっくりと肩を落とした。

「まったく、これぞ起こりうる最悪の結末に違いない」

「……………まあ、そう気を落とすなよ」

言葉が見つからなかったのか、お姉ちゃんは苦笑いしながらPapyrusの肩を叩き、そう言った。

それを見てから、ぼくは先程からママとジョークを言い合っているSansに話しかける。

「こんにちは、Sans、Toriel」

「よお、frisik。そのおかしな顔はどうした？」

「いや、まだジョーク言い合ってるんだなあって思ってる」

「まだストックはあるぜ？」

「いくつあるんだよ」

ウインクをしながらそう言ったSansに、お姉ちゃんが突っ込んだ。それを見てクスクスと笑っていたママが、何かを思い出したように手を叩く。

「Sans、Frisikが私を口説いた時のこともう話したかしら……？　それで私を

『ママ』と呼びたがってたことを」

「ちよつと待つてFrisk、口説いたことに関しては私初耳だぞ」

「あれ、話してなかった？」

「聞いてない」

話に上ったママを口説こうとした話を聞いて、驚いた顔をしたお姉ちゃんに、話し忘れていたことに気付いた。

「ほら、お姉ちゃんさ、待つてる間に寝ちやつたじゃない？ その間に電話かけてみたんだ。それでちよつとふざけて……」

「おいおい」

「すごいな、FRISK……俺様達二人にも新たな一面が見えてきたぞ」

「何してんのさ……」

ぼくがそう説明すると、Sansはちよつと笑つて、Papyrusとお姉ちゃんは呆れたような顔をする。

「なあ、tori。他にも何か恥ずかしい話はないのか？」

ニヤニヤと笑いながら、Sansがママに向かって尋ねる。

「ええ、もちろんあるわ！ けれども今のが一番びつくりした話だと思うわ。私を口説きたい人がいるだなんて信じがたい話だもの」

「すみませんうちの妹が……」

「あたたっ」

困ったように笑うママに頭を下げるお姉ちゃんに、ペし、と軽く頭を叩かれる。ごめんさい。

「……………えへへ……………えへへへ……………あは！ あはは！ は！！ は！！」

ママの話を聞いていたらしいAlphysが、後ろで笑う。

「もう、Toriel様つてば、何もご存知ないんですから」

「……………気を落とすなよ、Asgore王」

Alphysの笑い声で顔を上げたお姉ちゃんが後ろを振り返って、苦笑しながらそう言った。……………あ、そっか、パパはママのこと……………

この話をあんまりパパの前でしちゃいけないと思って、慌ててぼくは次の話題を探す。

「あ、そう言えばマ………：Toriel、携帯ありがとう、凄く役に立ったよ」

「あら、Frisk。そうだったの？ なら良かったわ」

そう言えばぼくが今持つている携帯は元々ママがくれたものだったことを思い出して、ずつと言えていなかったお礼を言う。一瞬ママと呼び掛けて、慌てて言い直せば、気付いたららしいSansにニヤニヤとされた。

「そういえば、Alphysが私の電話をグレードアップしてくれたの」

「あ、そうなの？」

それを知らんぷりして、ママの話を聞く。

「『メール』機能をとても楽しんでるわ」

「あれ、もしかしてついてなかったんですか？」

「そうなのよ。直ぐに相手に届くお手紙だなんて、本当に凄いわね」

お姉ちゃんにそう返しながら、ママは携帯を取り出して操作しようとする。

「Sans、これを『チェックアウト』ね」

「おいおい、torii………これはひでえな」

そう言いながらママがSansに携帯の画面を見せると、

「女王様が戻って来たなんて信じられん……それに彼女がこんなに大ママケだったなんて!!!」

「こらPapyrus、失礼だぞ」

Papyrusがちよっと怒ったようにそう言って、お姉ちゃんが苦笑いしながらそ

れを止める。

「あなたとSansは1メートルも離れてないのに！ 何故メールを打っているんです!!!」

「心配ないわ、Papyrus。ちゃんと理由があつてメールしているのよ」

そんなPapyrusに向かって、ママはにっこり笑った。

「どんな理由です」

「ん。それは俺達が大マヌケだからさ」

ぶすつとした顔でママにそう聞き返したPapyrusに、Sansが笑いながら答える。

「Sans、そんなことを言わないでちょうだい。あなたはマヌケなんかじゃないわ」

Sansに向かって、ママがそう言った。だんだん、その顔が笑顔になる。

「それどころか愚の『骨』頂よ！」

.....。

「はっはっは、なんと！ 女王様が洒落を言うよりも一層面白くない！」

ママがSansのことを大きな声でばかにしたことには驚いていると、Papyrusからそんな言葉が飛んできて、スケルトンをかけたジョークだと遅れて気付いた。そういえばママ、Sansと仲良しだったしなあ、と思った。

「じゃあ何でお前は笑ってるんだ？」

「これは憐れみの笑いだ!!」

「……………うーん、敢えて言うなら65点？」

「あら、意外と高得点ね」

また兄弟喧嘩をする二人を横に、お姉ちゃんが苦笑いしながらそう言った。ママはそれに満足そうに笑った。

……………さて。一通り、話しかけ終わったかな。

「……………Frisk。行くか？」

そう思ったぼくの心を見透かしたように、お姉ちゃんはぼくにそう言った。

「……………うん、そうだね。そろそろ行くかうか」

それに向かって、ぼくは頷き返す。

「ん、分かった。……………それじゃあ、行こう」

——……………地上へ。

お姉ちゃんがその言葉を言うと、話し声が止んで、しんとした空気が漂った。

「……………そうね、行きましょうか」

ママが頷いてくれたのを最初に、皆が頷いてくれる。

「F r i s k、君たちが先導してくれるかな？ 君たち二人には、その権利があるからね」

パパが、そうぼくたちに言ってくれた。

「うん、分かった。……………じゃあ、皆。ついてきて」

その言葉に頷いて、ぼくたちが先頭に立つ。

そして、お姉ちゃんと一緒に、歩き出した。

「……………ああ、Frisk、ちよつといい？」

ふと、パパと戦おうとした部屋の中を進んでいると、お姉ちゃんが声をかけてきた。

「今Friskがしてるそのロケット……………もらっちゃ、だめかな？」

「へ？」

そして、今ぼくがしているハートのロケットのネックレスを指差して、そう訊いてきた。

「……………旅の思い出に取っておきたいんだ。お願い、この通り」

思わずびっくりしてお姉ちゃんを見れば、お姉ちゃんはそう言って、ぼくに向かって頭を下げた。

それに対して、ぼくは。

「……………うん、いいよ」

頷いて、あげた。

「……………本当に、いいの？」

ぼくの答えに驚いたらしいお姉ちゃんは、顔をあげて、真ん丸な目でぼくを見た。

「うん。だって、お姉ちゃんが何かを欲しがると珍らしいもん。それだけ、これが欲しいんでしょ？」

「……………まあ、そうだけど……………」

ぼくがそう言えば、お姉ちゃんは頷いた。

ずっとぼくを甘やかして、守ってくれるお姉ちゃんが何かを欲しがってるんだ、たまにはぼくが、お姉ちゃんを甘やかしてあげたい。

それに、一回地上に出た時、孤児院に帰ってからお姉ちゃんに携帯が欲しいって言われたからあげたし。

「Torrieも王様も、いいよね」

後ろで、ぼくたちのやり取りを見ていたであろうパパとママに訊く。

パパとママは少し困ったような顔をして、そして……

「……………いいわよ。きつと、誰かが大事に持っていてくれた方が、あの子も喜ぶわ」

「ああ、そうだね。大事にしてあげてくれ」

にっこりと笑って、許してくれた。

「だって。はい、お姉ちゃん。大事にしてね」

二人の了承をもらって、ぼくはネックレスを外して、お姉ちゃんに差し出す。

「……………うん。ありがとう。大事にするよ」

お姉ちゃんは嬉しそうな顔で頷いて、ネックレスを受け取って、ポケットにしまった。

「……………私の我が儘で止めちゃってごめんね。今度こそ、行こうか」

「うん！」

優しく笑ったお姉ちゃんの手を繋いで、ぼくたちはまた歩き出す。

……
——
そして。

優しい光が差し込む外へ、踏み出した。

True Pacifist Ending

【Frisk】

「……………わ……………」

地下から出て、一番最初に飛び込んできたのは、

とてもきれいな、夕焼けだった。

「おやまあ……………」

右横に並んだママが、夕焼けを眺めて、声をあげる。

「美しいだろう、みんな？」

パパが、皆にそう言つて笑う。

「うわあ……て、テレビで見るより綺麗。ずっと綺麗！ 思い描いていたのよりもずっと！」

沈んでいく太陽を見て、Alphysが興奮したようにそう言つた。

「Frisk、こんな世界で生きてるのか!? 太陽の光が最高だ……それに空気もうまい！ 本当に生きている心地がする！」

Alphysよりも大袈裟に、辺りをキョロキョロと見ながらUndyneがそう言つた。

「なあSANS……あの大きなボールはなんだ？」

『太陽』が何か分かつていないらしいPapyrusが、太陽を指差してSansに訊く。

「あれは『お日様』って呼ぶんだぜ、兄弟」

「あれがお日様!? イヤッハー!!! やっとお日様に会えるなんて!!!」

Sansが肩をすくめてPapyrusに返すと、Papyrusは皆と同じように興奮して、叫んだ。

「ずっとここで眺めていられる気がする……」

「ええ、とても綺麗だと思うわ?」

パパの呟きにママがそう返すのを聞きながら、ぼくはこっそり、夕焼けの光を受けて立つ皆を見る。

——よかった。今度は、皆でこの夕焼けをみれた。

そんな嬉しい気持ちで一杯になる。

もう一回、夕焼けを見る。

きらきら、きらきらと輝いている夕陽は、毎日見てるはずなのに。

今日の夕焼けは、今まで見た夕焼けの中でも世界で一番きれいな、かけがえのない宝物のような気がした。

ふと、お姉ちゃんが何も言っていないことに気付いた。

「お姉ちゃん、夕焼け——……………」

そこで、ぼくの言葉は止まってしまった。

なぜなら。

「お姉ちゃんが夕陽を眺めて、ぼろぼろと涙をこぼして、泣いていたから。」

「お姉ちゃん何で泣いてるの!!?」

「……………えっ?」

一回地上に出た時とは違う行動に、びつくりしたぼくが思わずお姉ちゃんに叫ぶと、お姉ちゃんもびつくりしたような顔をする。

「あ、れ……………わたし……………ないて……………」

お姉ちゃんは泣いているのに自分で気付いていなかったみたいで、やっと自分が泣いていることに気付いて、涙をふく。

「どうしたんだ、Liily……………どっかいたいのか?」

Papyrusが心配そうに、お姉ちゃんに訊く。

「……………いや、違う、ちがうんだよ、Papyrus……………」

お姉ちゃんは、それに涙をふきながら首を横に振った。

「何でかき、私、この夕焼けをずっと見たかった気がするんだ……………それが見れて、ほんとうにうれしいんだよ……………」

お姉ちゃんは涙をふいて、心の底から嬉しそうに笑った。

そこで、ぼくは思い出す。

一回地上に出た後、お姉ちゃんは、

『あの夕焼けを皆に見せてあげたかったなあ』

と、悲しそうな顔で言っていたことを。

ぼくとは違って、一回目の記憶の無いお姉ちゃんだけど、そう思っていたのは覚えていたみたいだった。

「そうなのか……なら仕方ないな!!」

「お前も案外泣き虫だよなあ」

「うっさいやい!」

Papyrusは安心したように笑って、Undyneはさっきのお返しとばかりにお姉ちゃんをからかった。それを受けて、お姉ちゃんはまた笑った。

その笑顔が見れて、ぼくは本当に嬉しかった。

「皆、太陽を楽しむのもいいけれど、この先のことも考えなくてはね」

そんな皆で笑っている中、ママがそう言った。

「ああ、そうか」

その言葉に、パパは頷いて、笑った。

「皆………今ここから輝かしい未来が幕を開ける。人間とモンスターとの平和の時代が」

パパのその言葉に、皆が頷いた。

「F r i s k ……君に一つ頼みたいことがある」

「うん、なあに？」

嬉しい気持ちのまま。パパの言葉に返事をすれば、パパはぼくに向かって、こう言った。

「どうか人間界で我々の親善大使になってくれないか？」

「……………しんぜん、たいし…………？」

それは、お願いだった。

しんぜんたいしってなんだろう、と考えていると、

「あ……………親善大使っていうのはね、誰かと誰かの間に入って、その人達が仲良くなれるように架け橋になる人のことだよ。Asgorge王が言っているのは、モンスターと人間が仲良くなるために、架け橋になってほしいってことだね」

お姉ちゃんが、素敵な意味を教えてくれた。

「そうなの!？」

「うん。……………どうするかは、Friskが決めなさい」

お姉ちゃんはそう言ったけど、ぼくの中でその意味を聞いたときからもう、答えは決まっている。

「やる！ ぼく、親善大使になるよ！」

——……………そんな素敵なお仕事、引き受けない訳がないじゃん！

「おお！ FRISKは最高の大使になるぞ！ そして、このグレートなPAPYRU S様が……………最高のマスコットになるのだ！」

「本当!?!」

「ああ、勿論だ!!」

そう言うと、Papyrusが大きな声でそう言ってくれた。

Papyrusが支えてくれるなら百人力だ、と思った。

「今からいい第一印象を与えてくる！」

「あつ、ちよつと！」

そう言うが早いか、Papyrusは猛スピードで走って行ってしまった。

止めようとした時には、もうあの赤いスカーフが遠くなっていた。足早いなあ、Papyrus。

「……………んーじゃ。あいつが面倒を起こさないよう誰かが見張ってなきやな」

「うん、そうしてあげて」

「おう」

Papyrusに続いて、Sansが少し笑って言った。

「あばよ、みんな」

「またね！」

ぼくがSansに手を振ると、Sansはぼくに手を振り返して、Papyrusが走っていった方向とは逆方向に歩いていった。………また近道を使うのかな？

「………つたく、何もかもあたしが引き受けるってか？」

「そういうつもりじゃなかったんだけどね………お願いしていい？」

「………まあ、仕方ないな！　引き受けてやるか！」

溜め息を一つ吐いたUndyneにそう言えば、いつものようにUndyneは笑った。

「Papyrus、待て!!!」

そして、Papyrusを追いかけて、走っていつてしまう。

「あつ、Undyne!! 待ってよ!!」

それを追いかけて、Alphysも走っていつてしまった。追い付けるといいけど……

「……………おつと。……………あの、何かした方がいいかな?」

皆が行ってしまったて手持ちぶさたになった。パパがそうぼくらに尋ねると、ママがパパを睨んだ。

「じゃあ、おいとましないと！」

「ははは……あとでね、パパ」

慌てて走っていくパパに手を振って、見送る。

その背中が見えなくなると、

「みんな、随分と積極的に発っていくのね」

「いや、最後のAsgore王のは……いえなんでもないです」

お姉ちゃんがママの言葉に突っ込もうとして、ママになつこりと笑いかけられて口を閉じた。

「ふふふっ」

それがおかしくて、つい、笑ってしまおう。

「……はははっ」

ぼくにつられたように、お姉ちゃんもちよつと笑った。

「……………Frisk……………」

「ん？ なあに？」

ふと、夕焼けを眺めていたママが、ぼくに話しかけてくる。

「あなたはこの世界からやってきたのでしょうか……？」

「うん、そうだよ」

ぼくが頷けば、ママは少し悲しそうな顔をする。

「だから、きつと帰るところがあるのよね？　あなたはこれからどうするのかしら？」

「……………へ？」

ママにそう言われて、ぼくは首を傾げる。

……………ぼくは、どうしよう。

皆と一緒に帰ることだけを考えてて、ぼくがこれからどうするかを全く考えてなかったことに気づいてしまった。

少し考えてみる。

——……………皆が待つてるだろうし、心配してるだろうから、孤児院に帰らなきゃいけないよね。……………でも……………

ママを見る。

……ぼくは、まだママと一緒にいたいなあ……

「…………お姉ちゃん…………」

どうするべきか分からなくなって、お姉ちゃんに助けを求める。

「…………それは自分で決めるべきだよ、F r i s k。でも、そうだね…………一つアドバイスするのなら、選んで絶対後悔しない方を選ぶこと」

お姉ちゃんはどうするべきかは教えずに、ぼくにアドバイスをくれた。

ぼくが選んで、絶対に後悔しない方。

…………それなら…………

「……………ママと、一緒にいたいな」

ぼくはそう言つて、ママの手を握つた。

「えっ？」

ママは驚いたようにぼくを見て、そして、優しく笑つてくれた。

「F r i s k ……あなたは本当におかしな子だわ」

「えー、そうかなあ」

「そうよ。先にそう言つていたなら、今までのことは何も起こらなかつたのよ」

……………確かに、そうだ。

ママに言われて、そう気づく。

R u i n sでずっとママと一緒に居たいと思っていたら、ぼくはお姉ちゃんと一緒に地下世界を探検したり、ここでこの夕焼けを見れなかったんだ。

「……………まあ、じつくり考えて気が変わってくれたのならとても嬉しいわ。えへへ」

ママはぼくの手を握り返して、ぼくを真っ直ぐ見て、笑ってくれる。

「それじゃあ……………本当にあなたが行く宛がないのなら……………出来る限りのお世話をして、あなたを大切にしてあげるわ。それでいい？ もちろん、L i l yもね」

「！ 本当に!? 本当にぼくたちのママになってくれるの!？」

「ええ、もちろんよ」

嬉しくてぼくがそう聞き返せば、ママはその笑顔のまま頷いてくれる。

「やっつったあつ!! じゃあ、これからよろしくね、ママ!」

「ええ。Frisk。……さあ、いらつしやい」

ぼくが嬉しさのあまりママに抱き付けば、ママは優しく抱き締め返してくれた。院長とは違うあつたかさが、ぼくを包んだ。

「じゃあ、じゃあ!!! まずぼくたちの住んでる孤児院に言つて、皆を紹介しなきや!!! それから、それから……」

「あら、育ててくれていた人がいたのね? それは大変! なら、早く行かなくちやね」

「うん!!」

ママとそう笑いあつて、手を繋いで、歩き出す。

これで、やっと、ハッピーエンドだ——……

1770 True Pacifist Ending

「……………ああ、ちよつと待つて」

それに。

待つたが、かけられた。

それまで全く話さなかつたお姉ちゃんの声に振り向くと、お姉ちゃんはそこから一歩も動いていなかつた。

「——ちよつと、行かなきゃいけない場所があつたのを思い出しちやつたや。だから、帰つててくれないかな」

にっこりと、お姉ちゃんは笑いながらそう言った。

「えっ………そうなの？」

「うん」

……………一回目には、無かった出来事だ。

そう思いながらぼくが聞き返すと、お姉ちゃんは頷いた。

「なら、ぼくも一緒に……………」

「ううん、私ひとりでいかなきゃいけないんだ。だからF r i s kには、先に帰ってほしいんだけど……………ダメ？」

ぼくが一緒に行こうかと提案しようとすると、いつものように笑いながら、お姉ちゃんは首を横に振って、首を傾げた。

「……………」

「……………Frisk? わっ」

そのいつも通りの笑顔に、さっきまでのふわふわした気持ちが消えていって、代わりに、胸騒ぎがする。

どくどくと、ソウルが跳ねる。

——…嫌な予感が、どうしてか、消えない。

「……………Frisk、痛いよ」

困ったようなお姉ちゃんの声に、我に返る。

いつの間にかぼくは、ママから離れて、お姉ちゃんの手を握って、力を込めていたら

しい。

——……………でも、

「……………」

ぼくは、今繋いでいるこの手を、離せなかった。

今、ここで離したら、

「Frisk?」

——この笑顔にもう、手が届かなくなってしまうようで。

「……………やだ」

そう思ったら、もう止められなかった。

「やだ……やだ、やだ。お姉ちゃんも、一緒にかえろう」

ぼくの思いが、勝手にぼくの口から出ていく。

「そんな場所、後でいけばいいじゃん。待つてる人がいるなら、後で謝ればいいじゃん」

「Frisk……?」

お姉ちゃんの困ったような声に、ぼくはやっぱり悪い子だと自分で思った。

「ぼくは今、皆と一緒にかえりたいんだ」

ぼくの我が儘で、いっつもお姉ちゃんを困らせて。

「ぼくは今、お姉ちゃんと一緒にかえりたいんだ」

いつもいつも、

「ほくほ、ほくほ………」

辛そうな、悲しそうな顔を、させてばかりで。

「……………お姉ちゃん……………ほくといっしょに、かえろう……………」

目の前が霧に覆われたみたいで、良く見えない。

ほっぺに、熱いものが流れているのを感じる。

泣いているんだと、直ぐに分かった。

何で泣いてるのかは、わかんない。

Asrielに傷つけられたときは、あんなに痛くても、涙なんて出なかったのに。

……—涙が止まらなかった。

「……………Frisk」

そんなぼくを、お姉ちゃんは。

ぼくと同じくらいの高さにまでしゃがんでくれて。

ぼくの涙を、優しくふいて……………

「……………だめよ」

ぼくの言葉を、受け入れてくれなかった。

「ダメだよ、Frisk。ダメなんだよ」

お姉ちゃんに涙をふかれたから、お姉ちゃんがそう言って首を横に振るのが、よく見えてしまった。

「今、いけないといけないんだ。じゃないと、私は……きつと一生、後悔することになる」
夕焼けのオレンジの光に照らされたお姉ちゃんは、優しい笑顔のまま、ぼくにそう言う。

「だから、お願い——……いかせてちょうだい」

じつとぼくを見るその笑顔に、さつきまでよく動いていたぼくの口は、言いたかったことを言わなくなってしまった。

「……………じゃあ……………」

動かなくなってしまった口を精一杯動かして、ぼくはお姉ちゃんに言う。

「……………ぜっ…ったい、帰ってきてくれるって、約束してくれる？」

そう言うと、お姉ちゃんは、困ったような顔をした。

「……………それ、は……………」

「じゃなきや、やだ。行かせてあげない」

更にそう言うと、お姉ちゃんはもっと困ったような顔をする。

……………きつと、我が儘だなあって、思ってるんだろうな。

それでも、ぼくはお姉ちゃんの手を握り続けていたいから、我が儘を押し通す。

「……………分かったよ、Frisk」

そのままずっとお姉ちゃんを見て手を繋いでいると、お姉ちゃんは困ったような顔を

やめて、優しく笑ってくれる。

「約束する。私は、絶対Friskのいるところに帰るよ」

「……………本当に？」

「ああ、勿論」

ぼくが聞き返せば、お姉ちゃんは頷いてくれた。

「でも、一つだけ、私もFriskに約束させて？」

「……………なあに？」

笑うお姉ちゃんに、ぼくは聞き返す。

「今後ろにいるTorielさんの手を握ったら、そこからもう、振り向かないでね。絶

対に、だ。……………約束できる？」

「……………うん、それなら……………」

首を傾げるお姉ちゃんに、ぼくは、頷く。

何でそんなことを約束させるんだろう、と思っただけど、聞けなかった。

「ありがとう」

それを見て、お姉ちゃんは笑ってくれた。

「……………じゃあ、指切りしよ」

ぼくが右手の小指を差し出せば、お姉ちゃんは笑って、

「うん、いいよ」

ぼくの小指に、自分の小指を絡めてくれた。

「ゆーびきーりげーんまん、うーそつーいたらはーりせんぼんのーます、ゆびきった」

夕焼けの中、お姉ちゃんの歌が響く。

歌い終わると一緒に、指がぼくの指から離れていった。

「これでよし」

そう言うと、お姉ちゃんはぼくから離れて立ち上がった。

「それじゃあ、先に帰っててね、F r i s k」

「……………うん」

笑うお姉ちゃんに、ぼくは頷く。

「……………約束だよ、お姉ちゃん」

でも、念を押して、お姉ちゃんにそう言った。

「……………おう。約束だ」

お姉ちゃんは、頷いてくれた。

「……………それじゃ、お願いします、Torie1さん」

そして、ぼくの後ろにいるママに向かって笑った。

「ええ、分かったわ。なるべくはやく、帰ってくるのよ」

「……………はい」

ママの言葉を聞いて、お姉ちゃんは頷いた。

「それじゃあ——……またね、お姉ちゃん」

そう言って、ぼくはお姉ちゃんの手を、離れた。

暖かった体温が、消えた。

振り返って、ぼくは待っていてくれたママの右手を握る。

「お待たせ、いこう」

「ええ」

そして、歩き出す。

——…お姉ちゃんは、まだそこにいるんだろうか。

振り向きたいけど、振り向けない。

約束、してしまったから。

破ってしまったら——…ぼくはうそつきに、なってしまうから。

我慢して、ママと一緒に歩く。

「さあ、さあ、さあ……」

ブツン

ふと、突然耳元で、知らない声が聞こえた。

驚いて振り返っても、そこには誰も居なかった。

——……………それなのに、何故か。

「……………?」

さつきまで言えていたはずの言葉が出てこない。

「……………あれ……………?」

さつきまで、そこに誰かがいて。

その人の名前を、知っていた筈なのに。

出てこない。

「……………？ どうしたの、Frisk。何か、忘れ物かしら？」

急に振り返ったぼくを不思議に思ったらしいママが、ぼくに尋ねてくる。

「……………ううん、何でもない。行こう！」

首を振って笑って、ぼくはママと歩き出す。

それでも、なぜか。

——…ぼくの心に大きな穴が空いて、空っぽになってしまったような感が、ずっと残っていた。

After The 『GAME』

子守唄

〔Asriel〕

目を開けると、目の前に金色の花畑が広がっていた。

懐かしい、金色の花の匂いが鼻を擽る。

まだある足を動かして、ぼくはその花畑の中に立つ。

遠い天井に空いた穴から、オレンジ色の太陽の光が差し込んで、とても綺麗だった。

——…：…ついさっき別れたFriskとLilyには悪いけど、ぼくにはまだちよつとだけ時間があった。

その時間を、ぼくは『ぼく』^{Asriel}でいられる最後の瞬間までここで過ごしたいと思ってい

たから。

金色の花畑をベッドにして、寝転がる。

ぼくたちが死んでからママがずっと世話をしてくれてくれたこの花を押し潰すのにちよつとだけ抵抗があつたけど、それも本当にちよつとだけ。

……やっぱりぼくは、またソウルレスになつてしまふんだなど、改めて思った。

仰向けになつて、光の差し込む天井をぼんやりと見上げる。

——……ふと、昔、親友とこうして寝転がつて笑いあつたことを思い出す。

大分寂れてしまった記憶だけど、親友の笑顔をよく覚えている。

その笑顔に、涙はない。

「ふあ………」

長い間そうやってぼんやりしていたからか、眠たくなってくる。

重くなってくる体を動かして、ぼくは自分の手を見た。

……パパとママにそっくりな、白い毛で覆われた手。

嘗ての、ぼくの手だ。

——この手も、直にもう見ることはなくなるんだろかな

そう思うと、少しだけ辛かった。

少しだけ握ったり開いたりしてから、腕を降ろす。

そのまままたぼんやりと穴を眺めて、ふと、FriskとLilyは、無事に皆を地上に連れていってくれただろうかと気になった。

……それを確認しようとは、思わないけれど。

だってぼくには、この時間軸の F r i s k はきつと皆を地上に連れていつてくれるという確信があるから。

それに、他の時間軸では居なかつたお姉ちゃんもいることだし。

次の時間軸では……どうなるかは、わからないけれど。

もしかしたら……中途半端に皆を殺すのかもしれない。

もしかしたら……また皆を地上に導いてくれるのかもしれない。

もしかしたら……皆を、この世界を壊してしまうのかもしれない。

でも、出来ることなら、また皆が地上に出ていけるハッピーエンドがいいな、と願う。

そうすれば、

——……………ぼくの親友も、泣くことはきつとないだろうから。

「……………散々皆を殺して回ったぼくが今更何を考えてるんだろう。そんな資格、もうないのに」

はは、と口から自嘲的な笑みが零れた。

……………どンドン、眠くなってくる。

ちらつと、Ruinsに繋がる入り口を見る。

Friskの姿は、ない。

記憶^{今まで}では、Friskが来ることもあつたけれど……………この時間軸のFriskはぼく

がここに居ることに気づかなかったみたいだ。

……気づかなくって、良かったけれど。

だんだん閉ざされていく瞼の力を抜いて、瞼を閉じる。完全に闇に覆われて、意識がぼやけてくる。

うな
——…次に目を覚ました時は、ぼくはもうきつと『^Aぼく』_sじゃないんだろ

そんな予感がする。

ぼくの『ぼく』としての輪郭が、分からなくなってくる。

そんな感覚の中、ぼくは、昔を思い出していた。

さつきまで見上げていた穴から、人間が落ちてきたこと。

その人間と一緒に暮らし始めたこと。

人間と友達になったこと。

友達と、この地下を走り回ったこと。

いつしかぼくらは親友になっていたこと。

いつか地下を出て、世界中を探検するんだって、約束したこと。

——…二人で…家族皆で、笑いあったこと。

どれだけ霞んでしまっても、頑張つて思い返せば、楽しい思い出はたくさんあった。

……でも。

それ以上に、ぼくの記憶に焼き付いているのは。

——…いつしか見た、あのユメ。

………それだけが、心残りだ。

ああ、F r i s k。そして、L i l y。

ほんとうに、出来ることならば。

神様になれなかったぼくの代わりに、

ぼくの親友を——C h a r a・D r e e m u r rを、

どうか、すくってほしい。

かなわない願いを思つて、一粒熱いものがぼくの目から流れたと感じた瞬間に。

……意識が、輪郭を保てなくなつた。

ぼくじしんが誰なのか、わからなくなる。

……つぎもどうか、みんながわらっている、せかいに……

「……………
こら、
何勝手に諦めてんだ」

どく
ん

……l a ……l a ……l a ……l a ……

不意に、優しい音が届いた。

ゆったりとしたリズムで紡がれる、聞いたことがないもの。

……子守唄、かな。ママがぼくたちに歌ってくれたような唄とは、随分と違うような気がするけど。

頭の後ろに何か柔らかいものがある感じがする。

あまり感じたことのない感触に、目を開ける。

ぼんやりとした視界に映るのは、少し薄暗くなってしまった光と……

「……………——C h a r a……………？」

二度と会える筈の無い、ぼくの親友の顔。

ぼくの親友はぼくが起きたのに気付いたらしく、唄が止んだ。

二つの瞳が、ぼくに向けられる。

……………どうやら、ぼくの親友が、先程の唄を歌っていたみたいだった。

——……………これは、夢だ。

そう、直感的にそう思っていた。

こんなに都合よく、C h a r aがぼくの傍にいるわけ——……………

「……………つたく、君は何回私をあの子と間違う気だい？」

「……………え？」

呆れたような声が、目の前のC h a r aから溢れる。

それに驚いて目を見開けば、ぼやけていた輪郭が定まって、そこにいる人物がぼくの親友ではないことにやっと気付いた。

「……………L i l y？」

「H o w d y、A s r i e l。さつきぶりだね」

ぼくの親友と同じ顔をした人——L i l yが、微笑んだ顔でそう言って頷いた。

ぼくの頭の中が、一気に動揺と混乱で満たされる。

それでも咄嗟に、身体を起こして、離れる。

がさがさと、ぼくが後ずさると共に、花がつぶれる音がする。

Lilyの体勢から見るに、どうやらぼくは膝枕をされていたらしい。

「あのさあ、君何回私と自分の親友を間違えたら気が済むのさ」

ぼくをしつかりその茶色の目に映したまま、微笑んだままで不満そうにLilyは言う。

「(い)めん………」

一瞬混乱より申し訳なさが勝り、ぼくは潔く頭を下げた。

「あれ、なんだっけ？ 『僕だけを愛してよ』だっけ？ ねえ」

「わあああああ!!! 本当にごめんってばああああ!!!」

その顔のままRuinsでの出来事を掘り返されて、思わず恥ずかしすぎて叫ぶ。微笑みが意地悪な笑顔にしか見えなかった。

——…いや、そんなことよりも。

「……………どうして、君がここに…?!」

混乱極まるぼくの口から、辛うじてその言葉がLilyに向かって投げ掛けられる。

「君はFriskと、皆と一緒に地上に出たんじゃなかったの…?!」

——…まさか、地上に出られなかったんじゃ…

最悪の予想が頭を過り、尚深まる混乱のまま言葉を続けるぼくに対して、Lilyは微笑んだ顔を崩さない。

「まあまあ、取り敢えず落ち着きなよ」

「落ち着いてられないよ!!?」

「わああ、こわいこわい」

それどころか、取り乱すぼくを宥めてくる。そんなLilyに向かって、思わず叫び返してしまった。Lilyはそんなぼくの心情も知らんぷりして、微笑んでおどけてい
るだけだった。

「いや、別に本当にどうってことはないんだよ？ Frisk達は無事に地上に出たさ。君が懸念しているだろうことは何もない。ただ私が君に用事があって戻ってきただけだよ」

「……………ああ、なんだ……………」

まるでぼくの心配を見透かすように、Lilyは微笑みながらそう言った。その言葉

に、ぼくはほっと胸を撫で下ろす。バクバクと音を立てていた鼓動が静かになった。

そんなぼくの目の前で、Lilyはよいしょ、と言いながら体をぼくに向けて、座り直す。それを見て、ぼくも慌てて座り直した。

「さて、用事があるって言っても、流石に急に本題に入るのはちよつとあれだし、その前に一つお喋りでもしようか」

「そんなことしてる暇あるならさっさと帰りなよ……ママ達心配すると思うんだけど」

ぼくがそんなことを言い出したLilyにそう言えば、Lilyは首を横に振った。

「ああ、それなら気にしなくて大丈夫だから」

「何が大丈夫なの………それに戻ってきたって、皆待つてるんじゃないの？」

ぼくは微笑むLilyにそう尋ねる。

「いや、帰っててくれって言うてあるからね」

「ああ、そうなんだ……」

ぼくの質問に、Lilyはそう答えた。その答えに、きちんと了承は取ったうえでここに来ているらしいと安堵する。

「それよりもさ、一個質問していいかな。Asriel」

「……………その名前で呼ばないでよ。ぼくはもうAsrielじゃない、ただのお花なんだから。で、何？」

Lilyが口にしたぼくの嘗ての名前に、少しだけ悲しくなった。その気持ちを振り払って、ぼくはLilyに聞き返す。

「いやさ、なんであんなに君の親友……ええつと、Charaくん、いやCharaちゃん？ だっけ。その子に固執してたのかなって思っつて。考えても分かんなかったから

「や」

なんで？ と首を傾げて尋ねてくる Lily に、今彼女自身の口から出た Chara が重なって見えた。

「……………それは……………」

その質問に、思わず口籠もる。何て答えたらいいのか、ぼくには分からなかったから。

その理由を話したら、目の前で微笑む彼女に本当に失望されそうだった、というのもある。

それに……………ただでさえぼくは、その思い込みで目の前の彼女を傷付けたわけだし。

「……………あ、もしかして私すごい答え辛いこと訊いた？ なら……………」

「いや、話すよ」

言葉が続かなくなってしまったぼくに遠慮したのか、Lilyは『言わなくていい』と言おうとする。それを遮って、ぼくはそう言った。

「ぼくは勘違いで散々君を傷付けたんだ、それくらいちゃんと言わなくちゃね」

でも、やっぱりはじめくらいはつけなくちゃ、ね？

「……………そっかー。じゃあ、お願い」

ぼくの言葉からぼくのことを汲み取ってくれたのか、Lilyは頷いて、口を閉じた。ぼくの話をちゃんと聞いてくれるらしい。

じゃあ……………何から話そう。

……………ああ、そうだ。

「……………まず、前置きしておくけど。かなりまともじゃない理由なんだ。本当にね。それでも、いい？」

「もちろん」

ぼくがそう前置きすると、Lilyは頷いてくれる。それを見て、少しだけ安堵した。

「……………ある日、ぼくは夢を見たんだ」

「夢？」

「うん。何時だったかは、忘れちゃったんだけど」

ぼくが話を始めると、Lilyは首を傾げて不思議そうにする。それに補足をしながら頷いて、話を進める。

「これはもしかしたら、Sansに聞いたかもしれないけどね。何かを話に行ったのは

大体見てたから分かってるし。……………いやに現実的な、悪夢さ」

「……………成る程。君にも降りかかっていたっていうのは、本当だったのか」

「うん」

納得したようにLilyは頷いて、話に理解を示してくれる。

「でも、ぼくは……………その悪夢だけじゃ終わらなかった」

「……………それで？」

ぼくの言葉を聞いて、Lilyは話の続きを話すように促してくる。

「夢の最後に……………ぼくの意識は、必ずと言っていいほど真っ暗な場所に飛ぶんだ」

目を閉じて、あのユメの続きを思い浮かべる。

「そこは言葉にするならどんな闇よりも真つ暗な場所だね。そこに……………ぼくの親友の Chara が、立っていてね」

「……………へえ」

話を進める内に、あの暗闇の中にいる黄緑色と黄色に彩られた背中が浮かんできた。

「ぼくとは違うすべすべの人間の手には、ナイフが握られていて……………その周りは、塵と、ママやパパ、モンスター皆の持ち物が壊れて散らばってたんだ」

その周りを責めるように囲む、無数の塵の山。

その中に散らばる、皆の持ち物。

破れたママの服、青と白の骨、折れた水色の槍、壊れた機械、そして……………いつかパパが昔、ヒーローごっこをした時に一度だけ見せてくれた、赤い三又の槍。

「そんな中で背を向けて佇む親友が………一番最初は、酷く怖かったのを覚えているよ」

目を開いて、現実に戻ってくる。ぼくを見つめるCharaそっくりなLilyの視線を、逸らさないで見つめ返す。

「そして、Charaが膝から崩れ落ちて………振り返った時。………その両目から涙をぼろぼろとこぼしているのを見て、そこで、毎回目が覚めるんだ」

ぼくを見つめるLilyが、別人だと分かってもやっぱり重なってしまふ。

幻だと分かっているけど、その微笑む顔の目尻に、涙さえ浮かんでいるように見える。

「それが、夢の筈なのにどうしても忘れられなくて、ほんとう現実なんかじゃないかと思っていたら………頭から離れなくなっちゃって」

それが、ぼくが道を踏み外した瞬間だった。

『Charaを助きたい』、『救いたい』って……思っちゃったんだよ」

「……………」

Lilyは何も言わず、ぼくの話聞いていてくれる。

「夢の中で足掻いたよ、足掻こうとしたよ。……でも、ぼくは無力で、終ぞCharaが救われることはなかったんだ」

そう。ぼくは、救えなかった。

救えなかった。

——…暗闇で一人で苦しむ親友を、たったの一度も助けられなかった。

「そして遂には……その夢と現実が分からなくなっていくた」

その暗闇から——連れ出せなかった。

「そんな事が繰り返されるうちに、ぼくは壊れていつて、Charaに依存して、執着した」

我ながら、本当にバカだと思う。

『親友のヒーローになりたい』と思っていた筈なのに、

『Charaが泣いているのは皆がCharaの傍にいたせいだ。Charaを救うために、皆を殺そう。それで皆のソウルをぼくが有効利用して、神様になればCharaを救える』だなんて、思ってしまった」

そんなことは、あり得ないのに。

「ユメ記憶の中のぼくは、一瞬とはいえ神様になったんだ。それなら同じ状況……お花になつたぼくだつてなれるはずだなんて考えて……失敗したんだ……」

言っていて、情けなくなってくる。

「何度も何度も皆を皆殺しにしたのに、どうしても神様になれなかった。どんなにL O V Eを高めても、ぼくは神様になれなかった」

少なくともそれで救われると考えていたぼくが、愚かしくてたまらない。

「ぼくは直ぐに気付いたよ、『今のぼくじゃ神様になれないんだ』ってね。そしたら何もかもどうでもよくなっちゃって……あとは、ぼんやりユメ記憶を見ながら、この地下で過ごしてた」

——…そんな時だった。

「その矢先に……Charaそっくりな君が、現れた」

Lilyを見て、ぼくは酷く申し訳ない気持ちになる。

「最初は『Charaな訳がない』って否定したさ。でも、振り返って目が合ったとき、ぼくは君を『Charaだ』って思ってしまった。それからは……君の知る通りだよ」
そう言い切って、ぼくは口を閉じ、目をLilyから逸らす。酷く重い、沈黙が流れた。

意を決して、ぼくは、Lilyに頭を下げる。

「……………ごめんなさい、Lily。ぼくの狂気で、ぼくはRiskを傷付けて、君自身を傷付けた。……………本当に、ごめんなさい」

「いや、謝らなくていいよ。妥協するってさつき言ったでしょ？」

「いや、でも…………」

「いいから」

震える声のぼくの言葉を、Lilyはぼっそり切り捨てる。思わず食い下がれば、そう静止された。

「成る程ねえ………そういう事情だったか。ふーん……」

ぼくが頭を上げると、Lilyは微笑んだまま腕を組み、頷いている。

「ありがとう、話してくれて。納得がいったよ」

「ううん、いいんだ。ぼくも話せて良かった」

顔を上げて、Lilyがそう言つて笑う。

その笑顔に、若干違和感を覚えた。

「…………じゃあ、今度はぼくね。用事ってなに？　ぼくに何の用？」

違和感を振り払って、今度はぼくがLilyに本題を質問する。許可は取つてあるとはいへ、流石に長くこの場にLilyを留めておく訳にもいかないし…………

これ以上話したりしたら、ぼくが彼女から離れなくなる。そう判断したからだ。

「ああ、お喋りは終わり？　んー……………いや、私の用事……………つか『やるべきこと』はもう終わったんだけどね。私が想定してたよりかなりあっさり」

「…………はっ」

ぼくが尋ねると、Lilyは微笑んだままそう答える。意味が分からなくて、一瞬ぼくは呆けてしまった。

「……………さっきの話が用事だったの？」

少し考えてそう訊けば、Lilyは首を横に振る。

「いやいや、まあ、それもあるけど、本当の私の用事は終わったよ」

そう言つて笑うLilyに、感じた違和感が強くなる。

「じゃあ……なに？」

どうにも、嫌な予感がする。何か、大切なことに気付いていないような……

「……………気付いてないの？ 自分の体がどうなってるのか」

ふと、Lilyがそう言った。

「ぼくの体……？」

「ああ、本当に気づいてないんだね。無意識って怖いなあ。……………自分の手を見てみな
よ」

ぼくがそう聞き返せば、少し呆れたような声で Lily は言つて、笑いながらぼくを指差す。Lily が一体何を言っているのか、わからなかつた。

「手？ いや、そんなもの、今のぼくには……………」

お花になつたぼくにそんなものがある筈がない。
そう否定しようとして、言葉が止まつた。

何故なら、腕が動いた感覚がしたから。

ばつと、腕を見る。

そこには、白い毛に覆われた手がある腕があつた。

手を握って、開く。

ぼくの目に映る手も、同じ動きをした。

——……………この腕は、ぼくの腕だ。

そう気付いた。

「……………なん、で…………？」

目の前の状況が理解できず、遅れてやってきた混乱に飲み込まれる。混乱のまま顔を体を触る。掌が受ける感触から体の輪郭を想像して、愕然とする。

「なんで、なんで、どうして」

そして、次の瞬間、Lilyに向かって叫んでいた。

「なんでぼくは——Asrielの体のままなの!!? どうしてお花じゃないの!!?」

L i l y はそんなぼくを見て、ただ微笑むばかり。

「……君の心臓に、手を当ててご覧よ」

続けて、L i l y はぼくが失った筈のものがある場所に指先を向けた。言われるまま、ぼくはそこに触る。

ど
く
ん

ど
く
ん

ど
く
ん

ど
く
ん

ど
く
ん

ど
く
ん

……どくん

!!!??
「

音がする。

本来ならもう聞こえない筈の、音がする。

「………うそだろ?」

そんな筈がない。ある筈がない。

体が、震える。

いやな汗が、伝う。

震える指で、ぼくはそれを取り出そうとする。

……ずるり。

何かが、ぼくの中から引きずり出されてきた。

ふわりとぼくの掌に浮かんだそれを、愕然としたまま見つめる。

「……………嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!？」

そして、目の前にそれが存在していることを否定しようとして、叫ぶ。

なんで。

どうして。

あり得ない。

その三文字が頭を支配していく。

「なんで、なんでなんで、ぼくにソウルがあるんだよ!!?」

空間に、ぼくの叫びが木霊する。

そんな叫びを聞き流すように、ぼくの手の中に浮かんだまるで水晶のように透明なソウルが、ふるりと揺れた。

……いや、透明というには少し語弊がある。

だって、そのソウルの端から、だんだん白い色が侵食していつているのだから。

「ああ、良かった。ちゃんと機能してる」

ふと、目の前の彼女が言葉を溢す。

顔を上げれば、Lilyは変わらず、笑顔を浮かべていた。

「いやあ、最後の一仕事をしようと思つてきてみたら、想定と違つて既に花化が始まつてるんだもの。手遅れかと思つたよ」

とんでもなくて、尚且つ意味不明な事を言い連ねる笑顔を見て、ぼくはやつと違和感の正体にやつと気付いた。

「まあ、気絶してたから、『君を説得する』つていう関門が楽に攻略できて私は大助かりだったんだけどさ」

その笑顔は、端的に言つてしまえば——……ひどく、薄っぺらいのだ。

「本当に良かった」

言い換えるなら……『中身がない』、とでも言うべきなんだろう。

まるで、表面上に張り付けただけのような……

「……………ッ!!!」

そこで、嫌な想像をしてしまった。

そうとしか考えられない、彼女の狂った行動を。

「……………なにを、したの」

その想像を打ち消したくて、ぼくはLilyに問う。

「一体、何を……ぼくに、何をしたの!!?」

問いただそうとする。

そんなぼくを見ても、その笑顔は崩れない。

「……そんなこともわからないの？ いや、分かかって認めたくないのか。そんなこととしても逆に打ちのめされるだけだと思うけどね」

それどころか、ぼくの心を読んだようにそう言つて、笑みを深めた。

「まあいいや。君が知りたいって言うなら、言つてあげるよ。なに、簡単な話だ」

そして彼女は、答えを口にした。

「『君に私のソウルを譲った』つていう、それだけの話だよ」

——…一瞬、その言葉が受け入れられなかった。

頭が受け付けなかった、つて言った方が、きっと正しいんだろう。

につこりと、微笑みながらLilyは言う。ぼくはただ絶句することしか出来なかった。

目の前が、真つ暗になっていく感覚がする。

「……………なんで、こんな事を……………？」

何とか、それだけを口から絞り出す。

「え？　なんでつて、勿論君を救うためだけけど？」

その問いに対して、あつけらかんと、Lilyは言う。

空っぽの笑顔のまま、Lilyはそう言い切った。

「因みにどうやって君にソウルを譲ったかって言うかねー、そもそもの話、そのソウルは急造品だったのさ」

「……………急造、品？」

「そ、急造品」

ぼくが聞き返せば、Lilyは頷いた。

「『私』はね、この世界に本来なら居ない筈の存在なのさ。いや、Friskの家族の姉とかならもしかしたら居たのかもしんないけど、まあそこは置いとくとして、とにかく『私』自身は『この世界』に不法侵入してきた異分子な訳だ。……………そんな存在に、世界から普通のソウルが与えられると思う？」

そこで一旦言葉切って、Lilyは笑う。

「そりや当然、普通はソウルが与えられる筈がない。だって私はそもそも生まれる筈の無い存在だからね。でもそこに存在はある。その矛盾を埋めるために私に与えられたのが、そのソウルだったんだ」

ぼくの手の上に浮かぶソウルを指差して、Lilyはそう言った。

「でもさっき言った通りそれは急造品だ。普通のソウルとは異なつて、私の身体との繋がりが酷く薄かったんだ。私が出そうと思えば出せるくらいにはね」

あとは簡単だよ、とLilyは話を続ける。

「前々から君がソウルを持つてさえいれば『Asriel』でいられるんじゃないかと考えていた私は、それに従つて自分のソウルを君に埋め込んで譲つたつて訳さ。結果は成功、ソウルは君に馴染み始めている。やっぱり元々存在している存在が持っている方がいいんだろうね」

L i l yはそこで、からからと笑った。

ぼくは、ただ呆然としてL i l yを見ていることしか出来なかった。

「……………なんで」

ぼくの口から、言葉が溢れる。

「なんで、なんでなんでなんで!!!」

そして、次の瞬間には、L i l yに掴みかかっていた。

「なんで、こんな事をしたんだ!!」

ただ笑うL i l yに、ぼくは叫ぶ。

「分かっているの!?!? ソウルを譲ったってことはF l o w e yだったぼくと同じソウルレ

スになるってことなんだよ!!?

どうしても、ここで彼女を糾弾しておかなくてはいけない気がして。

「Friskと同じことで笑い合えなくなるんだよ!!? 同じことで悲しんだりすることも出来なくなるんだよ!!? 君は、Friskの傍に居られなくなるんだよ!!? それを本当に分かってるの!!?」

「分かってるよ」

そんなぼくに、Lilyは頷いた。

「そんなこととつくの昔に覚悟済みだよ。じやなきや、こんなこと絶対しないさ」

「……………!!!」

もう一度、Lilyは深く頷く。

何もかも失って空っぽになってしまった筈の彼女の瞳に見つめられ、ぼくは何も言えなくなつて……目を逸らして、掴んでいた手を、離してしまった。

「……………ああ、そろそろ時間みたいだ」

不意に、ぼくの耳にそんな言葉が響く。ぼくが視線をL i i yに戻すと、驚愕の光景が目に見え込んだ。

「——L i i y、手が……!?!」

彼女が見つめる指先が、どんどん薄くなって、消えていつてしまっている。

「あー、『代償』が執行されたただだよ、気にしないで」

「『代償』……? 何を言って、」

へらへらと笑うLilyの顔を見て、気付く。

Lilyが消えていく毎に、自分の記憶の中の彼女が、消えていくことに。

「……………?!?
!!!? 記憶が……………?!」

「ああ、そつちも始まったかあ」

それが起きることも見越していたのか、彼女はまた空っぽな笑顔で笑う。

「良かった、ちゃんと機能してくれて」

そんな言葉を彼女が溢すのを聞く中、ふと気付く。

もしかして——…………ソウルが白くなっていく毎に、消えていつている？

取り出したソウルを見れば、話の最中にも侵食は進んでいたらしく、白色がソウルの

半分を覆っていた。

——……………なら、これを彼女に戻せば……………？

「ああ、言っておくけど、私にソウルを返そうとしても無駄だよ。もうそれは既に君の物だからね」

まるでぼくの考えている事を見透かしたように、彼女はそう言った。凶星を当てられ、どくり、とソウルが跳ねる。

「私を生かそうとしてるなら諦めな。それを受け取った時点で、私が消えることは確定してたんだ」

——……………そんな。

ぼくの思いを否定して、消えていく彼女に、ぼくは何も出来ない？

また、目の前が真っ暗になる感覚がする。

何度も味わってきた絶望感も、今この瞬間味わったこれよりも軽い気がした。

「……………なんで……………?」

絶望に突き落とされたぼくの口から、言葉が溢れる。

「……………こんなぼくが『A s r i e lぼく』として生きるより、君がF r i s kの家族として生きた方が、良かったのに……………!!」

ぼくがそう言葉を吐き捨てると同時に、ぼくの頬に暖かいもの流れた。

……………涙、だ。

そんなぼくを見た、名前も思い出せないまま消えていく彼女は、少し目を見開いて、そして、伽藍な笑顔を浮かべる。

「…………ごめんねAsriel、私のエゴの為に犠牲いになってくれ」

その言葉を最後に、その人は消え去った。

……………

……………? 『その人』……………?

何なを考かんがえていいるんだんだらぼくは?

「……………? あれ、何なにでなぼく泣ないているんだらろ？」

いつの間にか流れていた涙を拭って、ぼくは手の中に浮かぶソウルを見つめる。

……あれ、いつの間にソウルなんて出したんだっけな……？

出すようなことあつたっけ、と内心首を傾げながら、ぼくは立ち上がる。

はやく皆のところに、帰らなくちや。皆心配してるよね。

無理言つてRuinsまで来るんじゃないかなー、と若干後悔しながら、ぼくは花畑を後にする。

地上に出たらどんなことが待ってるんだろう、と言ひ様のないわくわくに心を踊らせて。

花畑に、何かが落ちたのにも気付かないまま。

……カサリ……

望まれなかつた救済

〔Chara〕

ぼうっと、360度に広がる暗い空間を見つめる。

その中で唯一周りにあるのは、自分で築いた塵の山。

——そう、私自身が自分で築いた。

それを見ながら、私はぼんやりと考える。

これから自分はどうなるのだろう、と。

……………先程、ぼくがサポートしていた女の子——Friskとの繋がりが突然切れた。

こんな世界の中で私が『世界』を感じられる唯一無二の存在だったFriskとの繋がりが突然切れて、そりゃあ当然混乱した。

なんで、どうして。

Friskの気配が一切消えてしまつて、感じられなくなつた。

——まあ、それと同時に『Partner』の存在があまり感じられなくなつて、万々歳ではあるけれど。

多分、今までは存在していなかつたFriskの姉だという彼女——確か、名前はLilyだったかな。彼女が何かをしたんだろう。前から変なモノを彼女から感じていたし……

……それはいいとして。

これから本当にどうしようかと、また思考が回りだす。

Friskが皆で地上に出たから、『私』はちよつとした手助けしかしなかった。それは喜ばしいことだ。『虐殺者』としての私の活躍は、無かつたってことなんだから。だが………そこから、先は？

膝を抱えて、目を閉じる。真つ暗闇に視界を閉ざされる。………なんて意味の無い行動なんだろう。今の私みたいだ。

………本来なら『Partner』が選ぶ筈だった私が復活するルートは、Friskと『Partner』、そして私の繋がりが断たれた事によって行けなくなってしまう。それはいいんだ。でも、それは私の生きる意味が無くなってしまったことと同義だった。だって、そうだろう。私は『虐殺者』として復活することが決まっていたから生きていた………とは言いがたいけど、こんな中途半端な存在になつても世界に留められていたんだから。何か生き甲斐を探せつつ、こんな場所じゃ、出来ることは精々皆の遺体を弔い続けることぐらいしか出来ない。そもそもその話、今私が此処にいること事態おかしいのに………生きる意味を無くしたわたしは、どうすればいいのだろう。

目を閉ざしたまま、現実逃避にぼんやりとFriskを通して見た世界を思い出す。

……本当にあの子はいいい子なんだろう、あの子越しに見る世界は、私が見た時よりずっと世界が明るく見えた。その中で見る皆の笑顔が、眩しくて堪らなかった。

——だからこそ、羨ましい。

『虐殺者』として定義付けられている私には絶対に出来ない世界の見方が、羨ましい。

皆と柵無く笑えるのが、羨ましい。

羨ましくて、堪らない。

——……殺してしまいたいぐらいに。

……でも、私はそれを妬んで、ここまで落としてしまおうとは思わない。

だって、

【シネ】

【死ね】

【しね】

【早く死ね】

【死んでしまえ】

【死になさい】

【死ねよ】

【死んじやえ】

【死ね】

【シネヨ】

【しんじやえ】

【死んでくれ】

【存在ごと消えてしまえ】

——…こんなモノを、まだ十歳にしかなくてないあんな子に、聞かせる訳には
いかないから。

耳を塞いで、踞る。

それでも、私の存在を否定するその声は私の頭の中で響き続ける。

誰かが周りにいる気配がする。

きっと目を開ければ、私が殺して塵にした彼ら彼女らがそこにいて、私を^{罪人}囲んで見ているんだろう。

何時からか見え始めて聞こえ始めたこの現象の正体はさっぱり分からないが、きっとこれは私に対する罰なんだろう。

モンスターを殺して、世界を壊した、私の。

そんな場所に、あの子は落とせない。落としたくない。

こんな闇を知ってしまったら、きっとあの眩しい太陽みたいな笑顔が曇ってしまう。それはいやだ。

だから、私の相棒を、こんな所に落とせない。

私の唯一無二の光を、汚したりだなんてしたくない。

罰を受けるのは、私だけで充分だ。

もう、私は充分泣いたんだから、あとは償いをしないと。

F r i s k を、相棒を守るために。

「——なにしてるの、こんな所で」

不意に、私の周りにいた気配が消えて、声が聞こえなくなる。

そして、聞き覚えのあるような、声が聞こえた。

「おーい、寝てるのー？」

それに気付いて思わず固まっていると、肩に何かに触れる感覚がする。ぎよつとして後退れば、その感覚は消えていった。

「あ、なんだ、起きてるじゃん」

だが、その声だけは消えてくれなかった。本来ここにいるべきではない、その声だけは。

恐る恐る、顔を上げる。

そこには、先程まで Frisk の傍にいた筈の—— Lily が、立っていた。

「はっ……………？　なんで、君がここに……………」

理解が出来なくて、思わずそう声を溢す。すると Lily は、私が遠い昔に鏡を覗き込んだ時の顔で、微笑んだ。

「あ、やっぱり私のことは知ってるのね。じゃあやっぱりアナウンスしてくれてたのは君か」

アナウンス、と言われてたなんのことも一瞬理解が遅れたが、Frisk に向けてモンスター達の解説をしてやったことを思い出し、それかと結び付ける。

……………だが、一つ疑問が浮かんだ。

「……………何で、君にも解説が聞こえてるんだ……………？」

私はFrisk——そしてそれを見ている『Partner』にしか解説をしていない筈。それが何故、Lilyにも……？

「……………まあ、それは今はいいじゃん。取り敢えず自己紹介しないとね」

Lilyはそう言つて誤魔化すと、私との距離を詰めてしやがみ、右手を差し出してきた。

「Gre^ごeti^きng^げs^ん。初めまして、私はLily。君は……………ええつと、Chara、で良いんだよね」

差し出しされた右手を見つめていると、自分の名前を久方ぶりに呼ばれて驚く。

「AsrielやAsgore王とか色んなモンスターに間違われたからどんな顔なのかと思つたら、マジで鏡写しみたいにそっくりなんだね。この世には三人そっくりさんがいるとか昔聞いたけど、それがマジだったとはなあ」

まあそのそっくりさんが年下とは思わなかったけど、と、そう締め括って Lily は手を差し出したまま笑う。どうやら、私と自分の顔を照らし合わせて、私が Chara であると判断したらしい。

そこには納得したが、右手を握るかどうか悩んでいると、強引に右手を取られて握手させられた。

その手は、酷く冷たい。

——私と同じ、死^ッんでしま^ッった人^ス間の体温だ。

「!!!」

それに気付いて、直ぐ様手を離す。

「ありや、握手すんのそんなに嫌だった？」

笑いながら首を捻るLilyを睨み、私は口を開く。

「……………何でこんな所にいるんだ。どうやって来たかは知らないがお前は此処にいるべき人間じゃない。手遅れになる前にとっと元の世界に帰れ」

出来るだけ冷たい声を意識して、私はそう言い切った。そんな私に対し、Lilyは首を元の位置に戻して笑い続ける。

「うーん、そんな事言われてもなあ……………私は君に用があつて此処に来たわけだし。それを達成するまではなあ」

あはは、とソウルレス特有の上っ面の笑みを顔に貼り付けたまま、Lilyは笑い続ける。

「……………何の用で此処まで落ちてきたんだい？ 言つてさつさと帰りな」

「うわあ、歓迎されてないなあ、私」

早く帰ってほしいと願って語気を強める私に、Lilyはへらへらと笑いながらポケットを漁る。

「……………お、あつたあつた」

そして、ポケットから包装に包まれた何かを出す。その包装に、見覚えがあつた。

「はい、お近づきの印にこれでもどうぞ」

「……………それ、つて」

思わず、目を見開く。それは、私がまだ生きていた時に食べた、チョコレートだったから。

「本当は二個既に回収して持ってたんだけどねー、そのリュックがどつかに消えちゃったもんだからさ。Homeから新しくもらってきたんだ。好きなんですよ、これ」

食べなよ、と言いながら差し出してくるチョコレート思わず引つたくるようにも
らつて、見つめる。

——…温かい日々を、思い出した。

急いで包装を破くと、懐かしい匂いが鼻を擽る。中から出てきたチョコレートにかぶ
り付けば、まったりとした甘さが広がった。

——もう、二度と食べられることなんてないと思っていたのに。

あの日食べたチョコレートと変わらない味に、懐かしくなる。

………親友と、夜にママに内緒で食べたことを思い出して、視界がぼやけてきた。

「そんな泣きながら一心不乱に食べなくても……ゆっくり食べな、誰も邪魔しないから」

構わずチョコレートにかぶり付いていると、Lilyが頭を撫でてくる。その手付きに、ママやパパが撫でてくれた時のことを思い出してしまった。

——…私にはもう、あのモンスター達を『ママ』、『パパ』と呼ぶ資格はないのに、まだあの温もりを自分が求めていることに気付いて、自分が嫌になる。

それでも言われた通り、食べる速度を落としてゆっくり食べる。最後の一欠片まで食べきって、口の中に残る甘さを惜しみながら、私は口を拭いてLilyに向き直る。

「どうだったよ、久しぶりに食べるチョコレートは」

食べ終わるまで待っていてくれたLilyは、空っぽな笑顔で笑う。

「……………変わらない味だった。それだけだけど」

「ふうん、そう」

私の返答にLilyはその笑顔のまま頷く。

「それじゃあ一息つけたことだし、本題に入りましょうかね」

彼女はそう言つて、私を見つめる。

「まず、Chara……ええつと、女の子か男の子か分かんないから一応呼び捨てさせてもらうけど、許してね？ 君は、何時までこんな所で踞つてるつもりだい？」

「……………は？ どういうことだ？」

挑発とも取れる言葉が突然投げ掛けられ、思わず聞き返す。

「どういうことも何も、言葉の通りだよ。こんな所に何時まで居るつもりなのさ、君は」

「何時まで、つて……」

意味が分からない質問が変わらず投げられて、混乱する。そして少し質問の意味を吟味して、私は言葉を返す。

「……さあね。『何時までも』じゃないか？」

「何故？」

「なぜ……」

直ぐ様笑顔のまま『何故』と切り返されて、一瞬言葉に詰まる。

「……今の私には、もう何もないからね。君が何かした所為で、君の妹のFriskとの繋がりが切れて、私が復活することは無くなった。それは、私と『Partner』とも繋がりが切れたことになる」

そこでふと、目の前の人物は『Partner』の存在を知らないことを思い出した。

「ああ、君は知らないだろうけど、この世界の外には『Partner』という第三者が居てね。ソイツが君の妹を操ってたんだ。まあ、とにかく、ソイツとの繋がりも切れて、晴れてFriskと私は解放された訳だけど……でも、私が犯した罪は消えない」

私はそこまで言つて、Lilyに分かりやすいよう、立ち上がつて少し距離を取り、周りにある塵の山の方を両腕を広げて指す。

「ここにある塵の山の数だけ、私は罪を重ねてきた。その結果、本来のルートなら存在しない筈の私の意識がここにある。これはとんでもない異質なバグだ。それでも私の存在は世界には気付かれてないときた。つまり、私は誰かに消されることもない。……だから、私はきつと何時までもここに居るんだと推測するが、どうだ？ 満足か？」

そこまで言い切つて目の前で笑い続けるLilyに聞き返す。すると彼女は少し首を捻り、

「………うーん、若干言つてることが滅茶苦茶だけど………成る程、確かにそうかもね」

と言って、でも、と立ち上がりながら続ける。

「本当にそれでいいの？」

首を捻り、彼女は変わらない笑顔のままですう尋ねてきた。

……何を言っているんだろうか、この人は。

「……当たり前だろ。これ以外どうしようもないんだから」

何も分かっていない彼女に、そう答える。

至極当然な事を言わせないでほしい。もうどうにもならないのを再確認させられてしまうから。

「そう。じゃあ……」

——私が君を此処から連れ出せると言ったら、君は乗る？

「……………は」

笑う彼女の口から滑り出た言葉に、思わず身が凍った。

なんの冗談だ。そう返したかったけど、言葉が出てこない。

「……………そう言えば、私の用事を言っていなかったね」

私が混乱して固まっていると、彼女は続けて口を開く。

「私はね、Chara。君を此処から連れ出しに来たんだ」

「……………何を、言ってる……………？」

今度こそ本当に目の前で笑う人間の言っている意味が理解出来ず、問い返す。すると

Lilyは、空っぽな笑顔をさらに深めた。

「先程君が言った通り、私がちよつとした事をして、あの子が持っていた君と、その、『Partner』だっけ？ との繋がりを叩き切った。私が戻そうと思わない限り、二度とそれが元に戻ることはないだろうよ。そもそもその話、ここに來れたのもそれを辿ってきたからだし。まあ、別の協力者の力もあつただけだね。」

その応用で、君とこの關係を切つてしまえば、君は晴れてこの牢獄みたいな場所から脱出出来る、つていう寸法さ」

どう？、と首を傾げるLilyの言葉が、理解できない。

『いっから出られる？』

何の悪い冗談だ。

そんなこと、出来る筈無い。

——…それでも、少しだけ期待している自分がある。

彼女が言っていることが本当なら、F r i s kと私との繋がりを切つたんだ、もしかしたら、もしかしたら………本当に………？

そう思っている、自分がある。

………でも、私には………

「あ、君に限って無いとは思うけど『自分は此処で罪を償い続けなくちゃ』とか思っているなら、それ冤罪だから気にしなくていいからね？」

まるで私の思考を読んだような言葉に、思わず目を見開く。

その言葉の中に混ざる、信じられない言葉を私は聞き逃さなかった。

「……………冤罪？」

「うん、冤罪」

言われた言葉が信じられなくて聞き返せば、Lilyは頷いた。

「それ、元々君の罪じゃないよ」

啞然とする私の心情を余所に、彼女は続けて口を開く。

「君、さつき塵の山がどうか言ったけど、そんなもの此処に無いよ。少なくとも私の視界に見える範囲にそんなものはない。君が見ている『塵の山』は存在しない」

彼女は無遠慮に、私の周りにある塵罪の山を否定する。

「じゃあ今この目の前にあるのは!!? 私が殺したモンスター達の声は、一体なんだ!!?」

「君の中に残ってるかもしれない良心の阿責、もしくは思い込みからくる幻聴ないし幻覚じゃない？ 人間なんて思い込みで死ぬるぐらいだし、それぐらいわからないと思うよ」

堪らず叫べば、Liilyは平然とした様子でそう返した。

「……………そんな……………」

私の持つ此処に残る理由全てを叩き切られ、最後にはそんな言葉しか出てこなかった。

……………全て、冤罪？

じゃあ、私は一体今まで何のためにここに……………？

冤罪だって言うなら、これは、一体だれの……………？

「……………さてと、君が生きるここから出ない理由は全部無くなった？」

と言つて、Lilyは私との開いた距離を詰める。

「君がこんな場所に留まる利益なんて一つもない。それどころか、有りもしない罪を被らされて、ただ悔やむことしか出来ない。不利益だらけだ。No more 百害 hassle あつて than も it is 理 worth な this し。利益不利益に置き換えても、『ここを出す』ことの方が懸命な判断だと思ふけどな？」

それに、とLilyは言葉を続ける。

「まあ、私が今言うのと今一説得力が無いけど……………君がどんな生を歩んできたかは知らないけど、今度こそは楽しめると思うよ。君が泣くほど殺してしまったのを悔やむレベルで愛している皆も居るし、何より、私の妹がいる。きつと前に見た時よりずっと世界が明るく見えると思うよ」

だから、と言葉を続けて、Lilyは右手を差し出した。

「……………ここから出ようよ、Charaちゃん。地上はきつと、楽しいよ」

じいつと、優しげに細められた土色の空っぽな目が、私を見つめている。

その瞳に映る私は、酷く間抜けな顔をしている。

それが見たくなくて、私は顔を伏せた。

……………本当に。

本当に私は……………

「……………本当に、私は……………出ているの……………？」

気付けば、疑念が私の口から出ていた。

「本当に、この罪を……………背負わなくていいの……………？」

言っではいけないとずっと封印して、押し殺していた私の願望が、口から滑り出る。

視界が、ぼやけていく。

「……………『私』^{咎人}は……………『ぼく』^{人間}でいていいの……………う？」

そんな蚊の鳴くような声で呟かれたそれを、目の前の彼女は聞き取って。

「勿論だよ、Chara。君は、『LOVE』の傀儡である必要は無い」

力強く、頷いてくれた。

それを聞いて、何とか保っていた何かが、決壊した。

ぼろぼろと、頬を何かが溢れていく。

「……………こら、泣かないの。それはこんな所で流す涙じゃないでしょー」

「……………う、るさいっ……………」

空っぽな笑顔のままのLiilyに何かの正体を突き付けられ、更に涙が出てくる。

……………最後に涙を流したのなんて、何時だっけ。

遠い昔に泣いたつきり、渴いてしまったと思っていた涙が、停まってくれない。

……………それほど、ぼくは嬉しいらしい。

そんなぼくを見かねてか、Liilyは差し出した手を伸ばしてぼくの手を引き、強く抱き締めてくれる。ぼくの服より少しだけ大人しめな黄緑色に視界が覆われて、何も見

えなくなる。

——……………誰かに抱き締められる感触なんて、もう忘れてしまっていたから、
酷く嬉しかった。

「ごめんね」

ブツン

「……………えっ」

不意に、何かが切れる音がする。

それと同時に、身体が酷く重くなる。

回された腕が消え、緑色が、遠ざかっていく。

それに従って、私の身体は倒れ付した。

「……………な、にが……………」

倒れた時の衝撃を受ける。

声にするのもやつとな状態であることを察し、突然の出来事に対応できず混乱している。

「……………良かった、上手くいった」

そんな声が、上から降ってきた。

重い頭を動かすと、何か紐のようなものを掴んでいるような手をしてぼくを見ている Lily と目が合う。

その右手には……………ぼくが本来使う筈だった、ナイフが握られていた。

「何をされたのか分からないって顔だね、Charaちゃん。まあ、そりゃあそうだよ
ね。こんな急展開についてこれる方が異常だもん」

Lilyはそう言うと、左手に持つ何かを右腕に巻き付けて結ぶ動作をした。

「これでこっちはよし。あとは……………」

プツン

Lilyは今度は自分の小指にナイフの刃を沿わせる。それと同時に何か切れた
ような音がする。Lilyは直ぐ様何かを掴むような動作をすると、右手のナイフをし
まってしやがみ、ぼくの左手を掴んだ。

ひどく、嫌な予感がした。

「動かないでね」

そう言いながら、彼女は手早くぼくの左手の小指に何かを巻き付けて結び付けるような動作をする。

「これでよし、もう動いていいよ………つて、今身体が動かないか」

何かしらの作業を終えたLiilyは頬杖をつきながら、空っぽな笑顔で笑う。

「……………何を、した……………」

何故だか沸き上がるあの罪が這い上つてくる感覚に似た嫌な予感をそのまま口にして聞けば、彼女は一層笑みを深めた。

「ん？ 何をしたつて、君を此処から出して生かす儀式だけど？」

そして、酷くあつげらかんと、彼女は答える。

「それとも儀式の内容が聞きたいの？ あんまり聞かない方がいいと思うけどなあ、多分いい子な君にはシヨックがデカいと思うよ」

「……………いいから、はなせ……………！」

「えー……………まあ、いいか。二度と会うことはないんだし」

言うのを渋る彼女を睨めば、どうでもよくなったのか彼女は口を開く。

「取り敢えず前提条件を説明すると、君もご存知の通り、私は本来居ない存在だからね。ソウルが他の人間とは違って急造品で、私に馴染まなかったしここに来るためには要らないしで君の親友にあげてきたんだ。だから君の親友はFloweyじゃなくてAsrielのままだよ」

それは出たら分かるか、と言いながら笑う彼女の言葉が理解できなくて、絶句する。

……………どういう、ことだ。

彼女は、目の前のコイツは、自分が異質な存在だつて分かつてたような口振りじゃないか。

「話を戻すと、それでもソウルつていう『この世界の存在』である証が与えられているから、私の『存在』は世界に認知されてるわけね。で、世界から存在が消えるつてなると、すなわち私があつちの世界で死ぬことなんだけど、私は此処に来るためにちよつと裏道使つたから、その存在は世界に消された訳じゃないんだよ。で、今私がいた所には一人分の空きがある訳なのよね。

——……………それを世界が、見過ごすと思う？ 見過ごすわけないよね」

「何を言つて……………」

訳の分からない理論を並べ立てる彼女の言葉の真意が、理解したく無くても理解できてしまいそうな気がする。

「ただでさえこの世界は壊れかけてるのに、その穴を放つておいたら更に加速してしまう。それを防ぐために世界がすることはたった一つだけ。一番良く似た代わりを連れてきて、その穴を埋めること……と、私は推測した」

ようは成り代わりだよ、と、彼女は続ける。

「……………ねえ、Charaちゃん。ここまで言えばわかるでしょ？」

にっこりと笑いながら、彼女は問いかけてくる。

既に答えに辿り着いているぼくは、耳を塞いでしまおうと咄嗟に手を動かそうとしたが、動かなかつた。

「私と顔が似ている代わりは、この世界でたった一人だけ。」

——あなた一人だけなんだよ、Charaちゃん」

……………絶望を、叩きつけられたような気がした。

目の前が、真つ暗になる感覚がする。

「それをするには、世界にあなたがここに居るのを知らしめる必要があった。で、その為に私はちよつと裏技を使って、ここに居るあなたとあの子の……………F r i s kとの繋がりを結んだ。これであなたとあの子は、晴れて血の繋がった家族だよ」

良かったね、なんて嘯く彼女の笑顔を、殴りたくなる。

何故、そんなことをしたんだと、叫びたくても叫べない。

「ああ、そろそろこうやって話すのも終わりかな？ ほら、足の感覚が無いだろう？ 消えていつているしね。きつと元の世界に強制送還させられるからだろうけど」

不意に彼女が視線を逸らして、ぼくの足の方を見る。そんな筈がない、と否定しようとして足を動かそうとしても……………少しも、動かなかつた。

「ああ、そうそう。さつき抱き締めた時に切ったんだけど、君のLOVEとか全部私が持つていくから、気にしないでね」

思い出したように言う彼女の口から出た更なる絶望に、思わず彼女を見る。

そして、固まる。

先程まで土色だったはずの目が、

ちのようなあかいろに、なっているのだから。

反論は許さないと言わんばかりのその瞳に映るぼくは、酷く脅えたような、人間らしい顔をしている。

だが、それ以上にぼくの中では、『何故この選択肢を選んでしまったんだ』という後悔が波紋のように広がって、それだけで思考が埋め尽くされていく。

この選択肢を選びさえしなければ良かったのに。何故、選んでしまったの？

……もう、手の感覚すらない。

「……………なん、で……………こんなことを……………」

それでも口を動かして、ぼくは最後の抵抗で彼女に問いかける。

Friskを通して見た、あの世界が何故あんなにも美しく見えたのかを思い出して、問う。

「……………おまえこそが……………いきたほうが、よかったのに……………」

——Friskは。私の相棒は……………彼女の存在があつたからこそ、あんな世界を美しいと感じていられたのに。

明るい世界のままで、生きていけていたのに。

それを聞くと、彼女は目を丸くした。

「あはは、君、親友と同じようなこと言ってるよ」

そして笑って、ひらひらと右手を振る。

「……………いいや、私なんかより、君が生きた方がよっぽどいいんだよ」

ああ、そうだ、と彼女は続けてポケットに手をつ突っ込み、金色のハートのペンダントを取り出した。

それは、私が生きていた時にもっていた筈のもので。

「これ、返すよ。君のдаро？ ナイフはいらないだろうからもらってくけど」

手慣れた手付きでそれをぼくの首にかけ、嵌めた。

そして、その右手を頭に乗せて、撫でてくる。

「突然のことだし一杯言いたいことはあるんだろうけど……ごめんね、悪いけど私のエゴの犠牲になってくれ」

その撫でられているという感覚さえ、不鮮明になってくる。

「……………君はもう充分、苦しんだ。君はもう生きていいんだ」

ぼつりと、声が耳に届く。

「君のGold^富も、HP^力も、EXP^罪も、LOVE^愛も……私が全部、持っていくから」

だから、という空っぽで優しい声が、闇に閉ざされていく視界の中で聞こえる。

「どうか、どうかあの子の……Friskの傍にいてあげてね。ずっとFriskの傍にいてくれた、相棒さん」

その声を最後に、ぼくの意識は途切れて、消えた。

*She is filled with DETERMINATION.

[Gaster]

——…ここか。

私はいつも自分がいるより深淵に潜り、辺りを見渡す。

死の気配が、色濃く辺りに漂っている。

目を凝らして隈無く探せば、遠くに探していた人物の影を見つけた。

その人物の傍に近付くと、不意に人物は振り返って、その瞳に私を写した。

——その瞳を見て、ゾツとするような悪寒が走る。

土色だった筈のその人物の目は、まるで硝子を代わりに嵌め込んだような、生気を感じさせない無機質な、赤色の瞳になっていた。

「……………ああ、なんだ、博士か。誰かと思ったよ」

その人物が瞬きを一つすると、赤色は跡形もなく消え、見知った土色の瞳へと変わった。

「……………その様子を見るに、計画は上手くいったようだね」

「あ、やっぱり分かる？ A s r i e l にはソウルを渡して延命したし、C h a r a ちゃんには F r i s k の姉として成り代わってもらったよ」

私がそう問えば、彼女は一見本当に笑っているような空虚な笑みを浮かべた。

それを見て、本当に彼女は……………『人間』という存在であることを、捨ててしまった

のだと悟った。

「これで、本当に良かったんだね？」

「うん、勿論だよ博士」

私が尋ねれば、Lilyはそう言つて笑つて、頷いた。そして、不意に私に向き直ると、口を開く

「協力してくれてありがとうね、博士。博士が協力してくれなかったら、多分私ここまで辿り着けなかったよ」

「そうだろうね。君はまだただの人間だったし、そもそもこの話此処へ来る方法さえ見つけられていなかった。

……まあ、だからと言つて、まさか私のFollowerになつてまで私に此処まで飛ばさせるとは思わなかったがね」

「あははは」

私が皮肉を込めて言えば、彼女は空笑いを返してくる。

「いやあ、本当は契約の『代償』を使えば来れたのも事実なんだけど、協力取り付けた時は覚えてなかったから……使えるものは使つとかないと思つて。本当にごめんなさい、博士」

笑顔を浮かべたまま、Lilyはそう告げる。その言葉に、引つ掛かりを覚えた。

「……………その契約の代償の話だが」

「ん？」

「あまりにも理不尽過ぎはしないかな？」

私がそう問えば、目の前の彼女は目を丸くし、きよとんとした、年相応の顔をした。

「君に埋め込んだ私の欠片を通して君の記憶を少し拝見させてもらったが……第三者である私から言わせてもらえば、あまりに利益と不利益の吊り合いが取れていないように感じた。明らかに君が被る不利益……君の言う『代償』が大きすぎると、私は思うが」
私がそこまで言えば、Lilyはまた笑った。

「うわー、プライバシーの侵害されたー。訴訟ものだよこれ」

「……………そこについては謝ろう。だが、私は真面目な話を……………」

「分かってるよ」

ふざけてけらけらと笑う彼女を窘めようとすると、その彼女本人に止められた。

「そうだね、客観的に見れば、私があ の存在と交わした契約の代償は大きいのかもね」

彼女はそう言つて、自分の指を折つて、契約とその代償を口にする。

「一つ、全ての言語を理解できるようになる代わりに、人の心理が理解できにくくなること。」

二つ、次元を移動する能力を手に入れる代わりに、世界から消滅する際、存在は無かつたことになり、全ての人々から忘れられ、私に關する記憶が書き換えられること。ただし、存在を明け渡した場合は、その人物の立ち位置に入れ代わることになる。

三つ……運命を断ち切る異能を手に入れる代わりに、全ての『Undertale』及びそれに準ずるAlternate Universe^世から奪うまで、この旅路を終えることはないこと。この三つだっけ」

握つた指を開いて、Lilyは腕を降ろす。

「でもまあ、私が契約を交わした時には、そうするしか選択肢が無かつたからね」

「……………どういふことだい？」

そう聞き返せば、彼女はにこりと笑って首を傾げ、此方を見つめる。

「ねえ、博士。Many a little makes a mickle 知ってる？」

「勿論知っているが、それが？」

私が彼女の問い掛けに頷くと、彼女は満足そうに頷く。

「丁度いいや、一緒にあの時思い出せなかったこの世界の真実も教えてあげるよ。」

——この世界はね、言ってしまうえば寄せ集めの世界なんだ」

次の瞬間に彼女の口から滑り落ちたその言葉に、思わず目を見開く。

「ほう。………それで？」

驚きよりも先に好奇心が勝り、私が彼女に話を促すと、彼女はからからと笑った。

「流石研究者、これくらいじゃそこまで驚かないかあ。」

まず、この世界には貴方もご存知の通り『Player』という神様みたいな存在が居て、それがあの子を操っているんだ。最初に話したけど、私も元々はそっち側の人間だったんだよ」

少し俯いて説明をする彼女から出てきた『Player』という言葉に、いつも壁を隔てて此方を見ているあの存在のことかと思当をつける。

「で、その次元ではこの世界は『Undertale』といパソコンのゲームになっていて、私が死ぬ少し前ぐらいには、日本語版が出たり、色んな二次創作ゲームが出るくらい人気だったんだ」

「ほう、それはそれは」

『ゲームだった』という言葉聞いて、少ないが衝撃を覚えたが相槌を打つだけに留めて

おく。

「そのゲームでは、一度起きてしまったことはあの子が使っていた決意を使って何度やり直そうとも、完全なやり直し……世界の全てを白紙に戻してやり直すことが出来ない仕様になっていてね。そこがまた更に人気を呼んだんだけど……」

そこで、不意に彼女は言葉を切った。

「……でも、そのパソコンの『Undertale』では、とあるデータをいじることによって本来弄れないモノを弄って、世界を全て完全に白紙にしてしまうことが出来たんだ。まあ、所謂裏技、チートだね」

そこで一旦言葉を切り、彼女は私と再度目を合わす。

「さて、ここで問題です。データとして消された『世界』は、一体どうなるのでしょうか？」
「……完全に消えてしまうのではないのか？」

「残念、ちよつと違います」

私が少し考えて答えると、彼女は首を横に振る。

「正解はね、消えるには消えるけど、『残骸』が出るんだよ」

「『残骸』？」

「うん、『残骸』」

私が聞き返せば、彼女は頷く。

「だって、『Player』から見れば0と1で組まれたただのデータかもしれないけど、一度はその『世界』^{舞台}は作り上げられて、本当に存在したんだ。普通に生きている人が居て、モンスター達がいたんだよ？ そんな本当にあつた世界を、たかがデータ一つで完全に壊しきることなんて出来る筈無いだろ？」

「……………成る程。それで？」

かなり支離滅裂だが筋は通っている逆接論を少し遅れて理解し、先を促す。

「では第二問です。その『残骸』は、どうなると思う？」

「さて、わからないな」

私がそう答えれば、彼女は笑みを深めた。

「正解は、元通りになろうとするんだ。言葉通り、一つの世界にね」

でも、と彼女は言葉を続ける。

「それには明らかにパーツが足りなさすぎる。『残骸』とは言っても、一つの世界から出る残骸の数はほんの少しだけ。あとはまたデータとして組み直されるからね。……………でも、その次元には沢山の『Player』が存在した」

そこで、私は彼女の言葉を引き継ぐ。

「その沢山の『Player』の中の一部がそのチートを使って出た際の『残骸』が共鳴し、混ざりあつて、一つの世界になつた………とということかな？」

「うん、まあそんな感じ」

「………？ 違うのかい？」

煮え切らない返事に尋ねれば、彼女は説明の続きをする。

「それだけじゃないんだよ。共鳴しあつて混ざり合うまでは合つてるんだ。でもね、それだけじゃ『残骸』は『世界』にはなり得ないんだよ。だって、それを受け止める《器》がないもの」

そう言うと彼女は、手で皿を作る。

「『残骸』は何処まで行っても『残骸』だ。『中身』になることはあっても『器』になることは無い。外郭というか、『世界』を形作る部分は『Player』のデータに全て持つていかれているからね」

だから、と言葉を続けて、彼女は言う。

「その沢山の残骸は世界になれないまま次元の間を彷徨って……創られてすぐの、まだ『中身』の無い『器』……新しく『Undertale』を始めようとした『Player』のデータに、入り込んだ」

言い終わると彼女は肩を竦めた。

「簡単な話だよ。無いのなら、創れないのなら奪えばいい。それを実行して、残骸は器を満たし、『世界』になった。——それが、この世界さ」

とんとん、と、彼女は足で空間を叩く。

「ついでに言う、器を満たすつてことは、まだ造られて間もない貴方達にも、その残骸が入り込むつてことだ。その結果が……博士やSans、AsrielにCharacterちゃんの記憶や夢だろうね。貴方達はゲームでもかなり特殊な立ち位置に居たし、比較的思出しやすかつたんでしょよ」

「成る程。……それがどうして君の契約の代償に繋がるんだい？」

私がそう尋ねると、Lilyは良い質問だね、と笑う。

「博士、あなたなら多分分かるでしょ？ どんな『器』にも、許容上限があるつてこと」

彼女は笑った。

「あの世界には何千人もの『Player』が居た。その一部がチートを使つてたと言つても、出た残骸の量は、多過ぎたんだ。——一つの器から、零れ落ちてしまうぐらいいにはね」

彼女は、手の皿を割り、腕を降ろす。

「二つ思い出して欲しいのは、壊された世界にも人やモンスターの営みがあったつてこと。つまり、その残骸の中には、世界の破滅に巻き込まれたモンスターや人間も混ざつてたつて事なんだ。そういう訳で、残骸の中には勿論、微細ながらソウルの欠片や、決意が含まれていたんだ」

笑いながら説明を続ける彼女の言葉を、私は遮らずに聞き続ける。

「その零れ落ちた残骸は混ざりあつて、一つの意味を作り出した。後は消え行くだけだった自分を、何とか押し止めたんだよ。——それが、私の契約主。人間とモンスターが混ざり合つた、Amalgamate^{歪な神様}だった」

「……………Amalgamateの神格化、か……………」

「その通りです」

頷くLilyに、そんな事が出来る筈無いと言いたくなつたが……だが、筋は通つている。

「……で、その神様はこの世界との繋がりが酷く強くてね。この世界の異常やら何やらを、遠い場所……この闇の中でずっと見てたんだよ。貴方と同じくね」

——そこに、私が堕ちてきた。

そう言葉を続けて、彼女は笑う。

「どうかかして世界を救いたかつた神様は、消えかけている私を引っ張り上げて、私に無償で力を授けて、この世界を救ってもらおうとしたんだ。……でも、そうする為には、力が足りなかつたんだ」

「そこであの契約と繋がるのか」

私がそう言えば、彼女は頷く。

「ただでさえ自分を保つのに力を使っているのに、そんな事をすれば、今度こそ自分が消えてしまう。泣きながら謝られたよ。——でも、私はそれを受け入れた」

「……………何故だ？」

思わず、私は彼女に尋ねていた。

……………それは、『世界を救うために生け贄になってくれ』と言われているのと同義だった筈だ。それを何故受け入れたのか、研究者としても、私個人としても、理解しがたいものだったからだろう。

「さあ？」

「さあ？　って……………」

そう思った私が彼女に問えば、彼女は首を捻り、酷く軽い返事を返す。

「Asrielにソウルを渡す前には、分かってたような気がするんだけどね。どうせ感情にでも突き動かされたんじゃない？」

そして、他人事のように彼女はそう言った。

「……………まあ、でも、私は結果的には契約を結んで良かったと思ってるよ。命を投げ出してでも守りたいと思える人に、出逢えたからね」

不意に彼女は、まるで心の底から喜んでいるような笑みを浮かべ、そう言った。その笑顔が、まだ人間らしい温もりを残したものであることに気付いてしまう。

……………心が、痛かった。

「……………つてというのが私と世界の設定ね」

————不意に続けられた言葉に、思わず衝撃を受けた。

「……………君、まさか気付いて……………？」

ただ楽しむように此方を見つめる彼女の言葉を信じられずに問うと、彼女は笑つて、
頷く。

「うん、そうだよ博士」

そして彼女は、此方に向かって歩き出す。

「Fact is stranger than fictionなんて言葉で騙されて、『私を見ている人間』に気付かないほど、私の頭は都合が良くないんだ」

コツリ、コツリと、彼女の足音が響く。

「気付いていたよ、自分が誰かに創られた『Character』であることぐらい。気付いていたよ、私が生きた時間が、創られたものでしかないことぐらい。気付いていたよ、この世

界がA l t e r n a t e U n i v e r s eであることぐらい、とつくの昔にね」

彼女はそう言いながらそこまで開いていなかった私との距離を詰めて、私を見上げた。

「だからこそ私は計画や私に決意が見える訳とかこの世界の真実とか何やらを気取られないように、考えないようにしたり、他にも荒唐無稽な事を考えて隠してきたんだから」
そして、私の顔に手を伸ばして、触れる。

「私に決意が見えて、コマンドに少し介入出来たりしたのは、実験で切った糸を私に巻き付けていたから。結果、私も『Player』の傀儡として少しでも介入出来た。他人のしたいことが自分の意思として刷り込まれた感覚は、凄く怖かったなあ」

蠱惑的にも感じられる手付きのその手の温度は、酷く冷たい。

「……………さて」

不意にその手に、顔を逸らせないように固定される。

そして、彼女は目を閉じて——

「ねえ、どうせ見てるんだろう、P l a y e r ども」

狂気の瞳を、見開いた。

「いや、こんな手の込んだ神様転生なんて芸当出来るのは二次小説ぐらいだから、Rea derか。まあ、どっちでもいいけれど」

身体中に悪寒が走る。

少しも、身体が動かさなくなる。

それでも、私は目の前の極彩色から目を逸らせなかった。

「お前らが私の事をどう思ってるかなんて知らないけど、私は正直に言えばお前らの事なんてどうでもいい」

目の前の彼女は、無感動な、平坦な声で、私の瞳を通して『誰力』に語りかける。

「お前らは口を揃えて言うんだらうね。『そんなの身勝手だ』、『どうしてこんな目に合わなくちゃいけないんだ』って。でもね、そんなこと知ったことじゃない。だってこれは私の身勝手なエゴだもの」

人間の血潮よりもずっと紅い、その瞳で、『誰力』を見ている。

「虐殺をしたか、皆を地上に導いたかなんてどっちだっていい。そこにあの子がいるなら、私は全ての繋がり絶ち切るだけ」

だから、と彼女は最後に言葉を続け、嗤う。

*『止めろ』と言われても止まる気はないから、覚悟しておいてね？ Ⅱ

———そこまで言い切ると、彼女は目を閉じて、私の顔から手を離し、距離を取った。

そして目を開くと、あの悍しくも美しい赤は消え去り、土色の瞳がそこにあつた。

「……………ごめんなさい、博士。暴走しちゃった」

そして彼女は、私に向かって頭を下げる。それを見て、やっと私は身体中を支配して

いた金縛りから解放された。

「……………いや……………気にすることはないよ、Lily。君にとってこれは、必要なことだったんだらう?」

「うん、まあね」

私が何とか言葉を口にする、彼女は悪びれもせずに頷いた。

「……………さて、そろそろ時間みたいだ」

そう呟いた彼女が足元を見る。それに吊られて私も彼女の足元を見ると、彼女の足先が、ゆつくりと輪郭が薄くなり、消えていつているのに気付いた。

——別れの時だ、と直ぐに悟った。

「何か他に聞きたいこととかあったりしない? 答えられる限りは答えるよ」

そんな最中でも、彼女は笑って、私に問い掛けてくる。

……………それならば。

「一つだけ、いいかい？」

「ん？ どうぞどうぞ」

私がそう尋ねると、Lilyは笑って促してくる。

「……………君は、何故、そこまでしてまでFriskを守りたいんだい？」

その問いを口にした途端、彼女の目が丸くなった。

「君がFriskに向けていた愛は……………はつきり言つて異常すぎる。そこまでの理由が、君にはきつとあるんだろうが……………私には分からなくてね。教えてくれないかい

「？」

私がそう言うのと、彼女は少し目を瞬いて、嘔き出した。

「ふ、ははは、ああ、そうだね。そう言えば、貴方には言っていなかったけ」

そして——……語り出す。

「……………私が『Player』であったことは、もう知ってるよね」

「ああ。それが？」

私が聞き返せば、彼女は説明を続ける。

「ゲームだった時のこの世界の行く末は、大まかに分けて三つあってね。一週目やとある一定のモンスターを殺したりすることによって発生する『Neutral』、全てのモンスターを殺さないことによって発生する『True Pacifist』、そして全て

のモンスターを皆殺しにする、『Genocide』。そのルート全てを、私はこなしたんだ。……こなしてしまっただよ」

そこで、彼女は顔を伏せる。

「前に説明した通り、この世界の本来の主人公はあの子だ。だから、『Player』が選んだ選択は、全てあの子がやったことになるんだ。……私は、あの子の手を、一度汚させてしまっただよ」

彼女は片手で顔を覆い、自嘲的に嗤う。

「それだけじゃない、私はただでさえゲームが下手だったから、何度もあの子を死なせてしまっただよ。」

……そんな私が、あの子の『姉』である資格なんて、無かったんだ」

「……………成る程。それで？」

私が先を促し、話は続く。

「……………それに気付いた最初は、これから罪滅ぼしとして目一杯愛してあげればいいと思つて、何とか胸に残る罪悪感とかを抑えつけようとしたよ。でも……………」

彼女はもう片方の手で、人間でいう心臓がある辺りに手を起き、服をぐしゃりと皺がよるほど握る。

「……………あの子の体温に触れる度、無垢な笑顔に触れる度、その想いは大きくなつていつて……………あの子から思わず目を背けて、逃げ出してしまいたくなるほどに肥大化したんだ。——そんな時だった」

彼女は顔を上げて、此方を見る。

「ある日、あの子とお飯事をしてたんだよ。子供の遊びによくある、お医者さんごっこさ。その時はあの子が医者役で、私が患者役で遊んでたんだ」

その視線から逸らさず、話を聞き続ける。

「遊んでいるときに、不意にあの子が、玩具の聴診器で心臓の所を探り出してね。何をしてるのか訊いてみたんだ。そしたら、あの子は……『おねえちゃん、心臓の病気にかかってるみたいだから、治してあげる』って言ったんだ」

その言葉を聞いて、私は目を見開いた。

「子供の勘って恐ろしいね。気づいてたんだよ、あの子は。私があの子に対して罪悪感を抱いてることを。それに遅れて気付いた時は、見透かされてるみたいで思わずゾツとしたよ」

ははは、と、彼女は空笑いを溢す。

「慌てて私はそんなことはないよって否定しようとしたんだけど、あの子は本質を見抜いてたらしくて、絶対に治すんだって言って聞かなかつた。そして、ちっちゃい手で、私の手を握って、こう言ったんだよ。」

『お姉ちゃん、大丈夫だよ。Friskは、どんなお姉ちゃんでも、お姉ちゃんが大好きだよ』って。

……………それに、私は……………自分の中にある罪を全部赦されたような気がして、
SAVEされて
救われてしまったんだ」

それで、と、彼女は話を続ける。

「ならば、私も……………どんなあの子も愛して、この命に代えてでも守りきろうと、自分に誓ったんだ」

そう言って、彼女は既に腰まで消えた自分の身体を見る。

「これが、私の全てだよ。……………酷く、歪でしょう？」

そう呟いて、彼女は顔を上げた。

「……………まあ、これも所詮は創られた記憶で、この想いも偽物なのかもしれないけど……………私にとっては、代えようのない『本物』だったんだ。否定はしないでくれると嬉しいな」

彼女はそう言って、にっこりと笑う。

その笑顔が、酷く眩しい。

「……………それじゃあ、もう答えたし、後は大人しく消えるとしますかね」

彼女はそう言って、自分の消え始めた手を見る。

「短い人生だったけど、楽しかったなあ」

「……………待ってくれ」

自身が生きてきた想い出を振り返ろうとする彼女に、私は待ったをかけた。

「ん？ どうしたの、博士。まだ聞きたいことでもあるの？ それなら早く言った方がいいよ」

Lilyは私に視線を向け、促してくる。それに甘えて、私は口を開いた。

「先程F r i s kに『必ず帰る』と約束していたが……本当に帰れるのかい？」

「ああ、それか」

私がそう問うと、彼女は納得したように頷いた。

「……………正直言つて、その可能性は薄いよ。ソウルを渡すだけならまだしも、存在も明け渡しちやつたからねえ。それこそ奇跡でも起きなきや無理だと思うよ。あ、でもC h a r aちゃんがあの子の姉になるわけだし……そもそも記憶が書き換えられるしノーカ
ンか」

「そうかい。……………では、言い残したりすることは無いのかい？」

「……………え？」

彼女の返事を聞いた私が質問を続けければ、予想外だったのか、笑っていた彼女の目が丸くなる。

「……………いや、いやいや、私が言っているわけじゃないでしょ、そんな綺麗で重いもの」

そして、ほんの少しの諦めを声に滲ませて、そう言った。

「ただでさえ私は皆に忘れられた存在だし、そもそも一度は『あの子の為に』とか言つて地下世界の皆を皆殺しにしようとした姉失格な奴だし……………そんな奴が、今更……………」

「その言い方をするってことは、あるにはあるんだね？」

否定の言葉を並べ立てる彼女に私が問うと、彼女は口を閉ざす。どうやら凶星らしい。

「ならば、私が背負ってあげるから、言っていきなさい」

私がそう彼女に言くと、彼女は目を見開いた。

「Lily。……君は少し、大人に甘えなさすぎだ。自分一人ですすぎだ。少しは大人に甘えていなさい」

私らしくない言葉が、口から滑り落ちていく。

……これは、私のエゴだ。彼女を憐れに思ってしまった、私の。彼女のことだから、それを知ればきつとはね除けようとするだろうが……だが、それでも言わずにはいられなかった。

彼女は戸惑うように目を揺らし、顔を伏せる。

——そして。

「……………言つても、いいの?」

ぼつり、と。

彼女は小さな声で私に問う。

「『心残り』だなんて重いものを背負わせてしまつても、いいの?」

まるで怒られるのを恐れる子供のように、此方の機嫌を窺いながら、彼女は私を見て、言う。

「ああ、勿論だ」

……………応えてくれた彼女を不安にさせないように、私は頷く。

「それも私も私は既に死んだ存在だ。ほら……」
 Dead men tell no tales、と云うだろうか？」

「……………うわー、随分と笑えないブラックジョークだなあ」

私がそう冗談めかして言えば、彼女はきよとんとした顔をして、クスリと笑ってそう言った。

そして。

「……………それじゃあ、お言葉に甘えて、言わせてもらおうね」

先程まで浮かべていた空虚な笑みの仮面を捨てて、彼女は笑う。

「本当は、あの子に直接伝えたかったんだけど」

心を無くして、消え行く間も尚、彼女は笑う。

「ありがとう、Frisk。こんなエゴイストでしかない私を、愛してくれて」

その笑顔は——この瞬間だけは、世界の誰よりも美しく、優しい笑顔で。

「どうかあなたの未来が、明るい光に満ち溢れたものでありますように——」

たった一つ、そんな願いを残して。

………彼女は一人………闇へと、消えていった。

BAD END Epilogues
Epilogue of Toriel

〔Toriel〕

「……………——むかしむかし、地上にはモンスターと人間達が住んでいました」

私の声が、しんと静まり返った空間に響く。

私を、じつと見つめる無邪気な視線が沢山。

私の話に聞き入って、静かにしていてくれている。

「……………さて、今日はここまでね」

一通り今日読み聞かせる分を読みきって、自分のノートを閉じる。

「えー!？」

「まだもうちよつと聞きたいー!」

「ふふふ、ありがとう。でも、ごめんなさいね。まだ続きが出来ていないのよ。また書くから、楽しみにしておいてくれないかしら？」

それを聞いた視線の主——人間の子供達は無垢な瞳でそうせがんで、怖じ気づかずに抱き付けてくる。こんなに小さい子供達に受け入れられていることが嬉しくて、思わず笑みが溢れた。

「こら、Torielさんを困らせるんじゃないやありません」

せがむ子供達を宥めようとその頭を撫でていると、そこへ、この孤児院の院長がやってきた。

「それに、そろそろお休みの時間ですよ。Torieeさんがまたお話を書いてくれたら時間を設けますから、ベッドに戻りなさい」

「ちえー………」

「はーい」

「約束ねー？」

院長が彼ら彼女らにそう言えば、彼らは渋々といった様子で私から離れていった。

「Torieeせんせい、お休みなさい」

「また明日ー」

「ええ、また明日」

各々手を振って去っていく彼女達に手を振り返して、彼らの姿が見えなくなるまで見つめる。扉が閉まって彼らの姿が見えなくなると、部屋に残っていた院長が、此方を向いた。

「……………子供達に大人気ね、Toriel先生？」

につこりと、皺が沢山寄った笑顔で、院長は優しくそう言った。

「やめて下さい、院長。私はまだ『先生』と呼ばれる資格はないですよ」

その言葉を、私は首を横に振って否定する。

「それでも、様になっていたわ」

その言葉を否定すれば、そんな言葉が返ってくる。

「やはり、私よりもずっと長い間『母親』として生きていたからでしょうねえ。『先生』と

しては確かに私の方が先輩だけでも、『母親』としては貴女よりずっと後輩だもの。見習わなくっちゃ」

「そんな、私は……………」

そこまで大層なこととはしていない、と慌てて院長に返そうとして、それに、と院長に話を無理矢理進められる。

「……………あの人見知りな F r i s k と C h a r a が懐いて、貴方達を庇うぐらいだもの。いい先生になるのも道理よね」

「……………」

その言葉で、私は押し黙ってしまった。

「……………」

「ママー！」

「母さん」

どう返そうか迷って押し黙っていると、不意に、私を母として呼ぶ三つの声が聞こえた。その声に扉の方を見ると、私の愛しの子供達が此方を伺っていた。

「あら、三人とも、まだ起きてたの？」

そう声をかければ、二人と一匹のモンスターは私の方へと一斉にやってくる。

「Friskの親善大使としてのお仕事の手伝いしててね。それでこんな時間になっちゃったんだ」

「本当にごめん……」

私の実の息子——Asrielがそう言うと、Friskは申し訳なさそうな顔を

した。

「………もつと前々からちゃんと言つてればこんなギリギリにならずに済んだだろうに」

「うつ、カエスコトバモゴザイマセン………」

ボソツとCharaの追い打ちが入り、Friskは一層申し訳なさそうに顔を歪め、項垂れる。それを見ていたAsrielは、苦笑いを浮かべた。

「あははは、Charaは相変わらずだなあ……『前』と全く変わらないよ」

「うっさい」

Asrielの言葉に、Charaは冷たく突き返した。その会話にずっと昔の日常を思い出して、懐かしくなる。

——地上に出るから直ぐに、私達はまず、人間達と話すために議院へと赴き、話し合いを行おうとした。一番最初はとてつもなく警戒していた人間達だったけれど、Friskが此方側について一生懸命話をしようとする姿に心を打たれたのか、持っていた黒い機械を降ろしてくれたわ。

その後直ぐにこの国の政治を行っている人間が出てきて、話をさせてくれたの。そこで、私達モンスターも地上で暮らしたいことや、色々な話をして、ちゃんとした契約なんかは後日結ぶことになった。

その後だった。

——一度別れたCharaが、死んでしまった筈のAsrielを連れて、孤児院に帰ってきたのは。

とつくの昔に失ってしまった愛しの二人が、揃って私達の前に現れた時の驚愕、そして、思わず涙が溢れてしまう程の喜びは、CharaがFriskの双子の姉として生まれ変わって地下世界にやってきた時の倍以上だった。

どうして、と涙で前が見えない視界で彼女達を抱き締めながら聞いた説明によれば、結界が破られたのは時々目の前に現れる花のモンスター——Floweyとして生きていたAsrielの助力があつたからだということ、その際にAsrielとしての姿を取り戻したということ、そして——……Floweyになろうとしていた所を、Charaに説得MERCYされて、二人で一人の存在として、生きていくことにしたこと。そんな事を、聞いた。

信じられないような説明だったけど、きっと奇跡が起きたんだと、思ったわ。

「……………あ、そうそう。ママ、明日、パパが帰ってくるって」

不意に、Asrielが思い出したようにそう言い出して、ふわふわとしていた気持ちの水が掛けられたように引き締まった。

「……………」

「……………あれ、もしかしてぼく不味いこと言った？」

「大分ね」

「……ねえ。もしかして、ママとパパまだ仲直りしてないの?」

「いや、出来るわけないだろ……」

「それもそうだね」

沈黙が落ちた部屋の中で、子供達の囁き声が響く。院長も苦笑いを浮かべていた。

「……まあ、それは、ともかく。ママ、明日の会議が終わったら、私とCharaはちよつとよりたい所があるから行ってくるね」

「あら、そうなの? あまり帰りが遅くならないようにね」

「はい」

気まずい空気をどうにかする為に話題を逸らしたFriskに言葉を返せば、Friskは返事をして、Charaは頷いた。

「それじゃあぼくたち寝るね。おやすみなさい、ママ！」

「お休みなさい」

「……………お休み」

「ええ、お休みなさい。ゆっくり休んでね」

一通りの話は終わったのか、慌ただしく子供達は自分の部屋へと帰っていく。その背中を手を振りながら見えなくなるまで見送って、手を降ろす。

「……………さて、私もそろそろ休ませてもらいますね」

椅子から立ち上がりながらそう言えば、傍にいた院長はまた笑う。

「分かったわ。寝坊してしまったりしたら大変なものね。何せ明日は……………——モンスターが正式に地上で生活出来る条約と、人間とモンスターの平和条約を、成立させる

「会合だものね」

「……………ええ」

私が頷けば、院長は嬉しそうに一層笑みを深める。

「沢山の国の首相や総理、皇族の方々がいらっしゃって、モンスターと人間とを繋ぐ架け橋にFriskとCharaがなる」

頬に手を当て、院長は続ける。

「この二年間、二人は世界を飛び回って、色んな人を説得して、頑張り続けてきた。モンスターに対する強い偏見や迫害を取り除いて、友好を示し続けてきた。それが……………明日、やつと報われる。貴女達モンスターは、晴れて地上の一員になる。貴女達の悲願は、やつと叶う。これ程嬉しい事はないわ」

クスクスと笑う院長の笑みに、つられて私も笑みを溢した。

「……………そう言えば、明日は貴女達が地下から出てきた日でもある。凄い偶然だけれど、もしかしたら、運命なのかもね」

院長が笑いながらそう言つて、そう言えばそうだった事を思い出す。

『運命』、という言葉が、確かに当てはまるような気がした。

「……………でも、少し複雑ね。そうしたら、貴女は此処から出ていってしまうのでしょうか？」

ふと、院長の顔が悲しそうなものになる。

「此処に住むのは人間との条約を結べるまで、と貴女達は言っていたものね。寂しくなるわ……………」

「……………院長……………」

ここまで私達モンスターに心を砕いてくれる院長の優しさが、酷く心に染み渡る。気が付けば、私は院長の皺の寄った手を取っていた。

「院長。条約が無事結ばれて、生活が落ち着いたら、必ず、会いにきますわ。だから、そんなお顔をなさらないで下さいな」

「あら、本当？ それは嬉しいわね」

嬉しそうに破顔した院長は、でも、と話を続ける。

「貴女、確か先生になりたいという夢があるって言っていたでしょう？ それを叶えてからにしてちょうだいね。それまでは、ちゃんと生きているわ」

そう言うてにつこりと微笑む院長の優しい言葉が、ひどく暖かい。

「……………はい、必ず」

その言葉に、笑顔で頷く。すると、不意に院長は壁にかかっている時計を見た。

「……………あら、やだ。長話ししちゃったわね。ごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。そうやって自分の事のように喜んで貰えて嬉しいですわ」

はっと気がついたような顔をして、院長は申し訳なさそうに謝る。

「それじゃあ、私も部屋に戻るわね。会合の成功を祈ってるわ。お休みなさい」

「ええ、お休みなさい」

そう言つて、院長は部屋から出ていった。部屋がしんと静かになつたを見計らつて、私も椅子を片付けて、部屋の電気を消し、部屋に戻る。

キイイイ——

軋むドアを開き、宛がわれた部屋に備え付けられた机の上にノートを起き、直ぐにベッド——人間サイズだからちよつぷり狭い——に横たわり、目を閉じる。

——明日の会合は、必ず成功させなくちゃ。

そんな決意を胸に抱きながら、意識を暗がりへと落とした。

次の日。

私が微かに抱いていた『失敗するかもしれない』という懸念は結局杞憂に終わり、無事条約は結ばれ、モンスター達は地上で生活できるようになった。きつと、相手の人々がモンスターに対して偏見が少ないことと、FriskとCharaがいたことが幸いしたんでしょね。

この二年間やってきたことが全て報われて、本当に嬉しかった。

会合を終えて、外に出た途端、

「……………いやあつたああああ!!!」

F r i s k が、飛び上がりながらそう叫ぶ。

それを受けて、外で F r i s k と C h a r a を待つていたカメラのフラッシュが焚かれる。

……………そう言えば、この二年で、F r i s k も C h a r a も、酷く有名人になったわね。今じゃ溢れる程沢山の人に囲まれるようになって、カメラが沢山向けられるようになったもの。世界の皆に二人の主張が通つたのも、きつと、彼らが居たからね。

「やった、やったよママ、C h a r a ! 私達、やつと皆を地上に返せるよ!!」

「ちよつと F r i s k 、叫びすぎ! カメラが滅茶苦茶集まつてるよ! ……………まあ、嬉しいのは、分かるけどつ、て、わっ」

そんな事を思いつつ、眩しいフラッシュの中、喜びの余り勢い良く抱き付いてくる Frisk と、嬉しそうに顔を綻ばせる Chara の二人とも抱き締め、腕の中に閉じ込める。

「ええ、ええ、そうね。どれもこれも、貴女達二人のお蔭よ、我が子達。貴女達が頑張ってくれたから、ここまで来れたの。ありがとう、ありがとうね」

周りの目もカメラも気にせず、私の中のありったけの感謝を込めて、二人に告げる。すると二人は、ゆつくりと私に腕を回し、抱き締め返してくれた。

「ううん、違うよ、ママ。皆が一緒に頑張ってくれたから、此処まで来れたんだ。私達だけの頑張りじゃ、ないよ」

「……………Friskの言うとおりだよ。これは、母さん達が諦めずに頑張ってきたからこそその結果だ。だから、どうか母さんも胸を張って」

「まあ………!」

二人の暖かい言葉に、涙が溢れそうになる。二人を一層強く抱き締めれば、光の雨が強くなった。

『~~~~~! ~~~~~!』

『~~~~~! ~~~~~!』

『! ~~~~~!』

周りの人間達が、何か言っているのが聞こえる。でも、ざわざわと騒がしい民衆の聲に掻き消されて、良く聞こえなかった。

——この条約の締結を喜ぶものであれば、いいな。

「——それじゃあママ、私達ちよつと買い物していくから、先に帰ってて」

「ええ、分かったわ。気を付けて行くのよ？」

「はい。行こう、Chara」

「ん」

二人から離れると、二人は街へと走り出していく。それを見送って、周りの人々に頭を下げてから、私は待たせてあったタクシーに乗り込んだ。

「お待たせしてごめんなさい。出していただけるかしら？」

「承知しました」

タクシートの運転手さんに声をかければ、車はゆっくりと走り出し、進んでいく。

「窓、開けてもらっていいかしら」

「分かりました」

何となく窓を開けて風を浴びたくなつて、運転手さんの許可を貰つてから、窓を開けてもらう。夏の熱が残る温い風が、体毛を撫でていく。

「……………嬉しそうですね、会合、成功に終わったんですか？」

不意に、運転手さんがそう声をかけてくる。顔に出ていたのかしら、と思ひながら、会話に応じる。

「ええ、そうなのよ。あの子達の努力が報われて、本当に嬉しいわ。これでモンスター達は地上を、何の後ろめたいこともなく歩けるのよ。……………ねえ、運転手さん。もし、貴方のタクシーにモンスターが乗つても、驚かないでくださいね？」

「ふふ、今そのモンスターを乗せているのに、どうして驚くことがあるんですか」

「あら、それもそうね！」

そんな風に和やかな雑談をしていると。

——不意に、嗅いだことのある匂いが鼻につく。

「……………あら？」

この匂いは、確か……………

「ごめんなさい、車を止めてもらえるかしら？」

「え？ はい」

車を止めてもらって、その匂いの元を知ろうと辺りを見渡す。すると、一件の花屋の軒先に、匂いの元——美しい豪華な大輪のユリが、花を咲かせていた。

「……………重ね重ねごめんなさい、ちよつとあの花屋に寄りたいたいんだけど……………いいかしら。追加料金は必ず払うわ」

「構いませんよ」

「ごめんなさい……………」

急にしてしまったことを謝って、私はタクシーを降りる。そして、匂いに誘われるようにユリに近付く。

「……………あ、あなたは……………Torrie!？」

じつとその花を見ていると、ふと、声がかかった。その声に顔を上げれば、エプロンをした見知った顔が一つ、此方を見つめていた。

「あら、こんにちは！ 貴方、此処で働いていたのね？」

「ええ、まあ」

その顔が孤児院で出会った顔であることを思い出して、直ぐに挨拶をすれば、頷いてみせる。そして、私のことをじっと見つめる。

「……………何かしら？ 私に何かついてるかしら？」

「……………いえ、今日はいつもと違った服装だな、と思つて。何か用事の帰りですか？」

どうやら私が着ている紋章入りの服が珍しかったらしく、そう尋ねてきた。

「ええ、会合に行つてきたの。……………成功に、終わったわ」

「!! それ、本当ですか!?! おめでとうございます!」

「ふふ、ありがとう」

思わず笑いながらにそう言えば、事情を知っている彼女は直ぐに何の用事なのかを察して、そう言ってくれた。FriskとCharaが孤児院で誤解を余すことなく全て解いてくれたこともあって、彼女達年上の子達も影ながらも応援し続けていてくれた。皆に連絡しなくちゃ、と意気込む彼女に、思わず笑みを溢した。

「……………ところで、先程ユリを見てらっしやいましたけど、買っついていかれるおつもりで？」

雑談も程々に切り上げて、彼女はユリの話に変える。

「ああ、そうなのよ。何故だか気になってしまっ……」

それに乗って、私はもう一度ユリを見る。

……………
———何が、込み上げてくるような感覚がする。

「二、三本程まとめて花束にしていけますか？　今セールやってるので、お安くします
「よ」

「あら、本当に？　ならそうしようかしら。三本、いただける？」

「畏まりました」

私がお願いすると、彼女はユリを三本、手早くまとめて花束を作り始める。お財布を取り出し、お金を確認しているうちに、既に出上がったそれと、お金を交換する。

「……………ちようどですね、お釣りはありません。お買い上げ、ありがとうございます」

私から手渡されたお金を確認して、レジの中に入れた彼女はふわりと笑った。

『……………ありがとうございます』

その笑顔に、誰かの照れたような笑顔が重なって見えた。

「……………え……………」

目を瞬くうちに、その笑顔は消えて、ただ彼女の目を丸くしたような顔がそこにあった。

「どうかされました？」

きよんとした顔で首を傾げる彼女の顔を、じっと見つめる。

……………何故、全く知らない誰かの笑顔が重なって見えたのかしら……………？

「あの、Torrie!？」

戸惑うような声に、ハッと我に返って首を横に振る。

「いえ、何でもないわ。それじゃあ、ありがとうね」

「そうですか……？　またのご来店、お待ちしております」

花束を抱えて店を出て、帰路につく。

……早く、帰らなくちゃね。この花が萎れちゃうわ。

そう思い直して、タクシーに早足で乗り込む。

「お待たせしました、出していただけるかしら」

「はい」

タクシーを出してもらって、帰り道を進んでいく。途中、運転手さんが話し掛けてきたけれど……何故か上の空で、先程のように上手く話すことが出来なかった。

そんな内にタクシーは孤児院に続く坂の前で、止まる。

「着きましたよ」

「……………ええ、ありがとう。料金よ」

運転手さんにお金を手渡し、ぼんやりとしながら孤児院に向かって歩いて、歩いて歩いて——……………ふと、ソウルが早鐘を打っていることに気付いた。

「……………?」

私はそこまで早く歩いていたかしら、と不思議に思つて立ち止まる。

……………——いいえ、これは、違う。

これは、そう、早く歩いていたからじゃなくて……

どちらかと言えば……………

———
焦燥感……………？

『さよならじゃないよ、お母さん。……またいつか、です』

不意に、また声が聞こえたような気がした。

その声に後ろを振り返っても、そこには誰も居ない。

「……………なん、だったのかしら……………」

腕の中で香るユリの匂いに若干酔いながら、呟く。

ドクドクと、ソウルは拍動を打ち続けている。

何かを訴えるように、ずっと。

取り憑いて消えないこの焦燥感は、一体何なのかしら。

さつきの声が、笑顔が、引き金になっている……というのまで、何となく分かるのだけれど。

私は一体、何に焦燥感を覚えて――

「……………Tori?」

不意に、坂の上から声が聞こえた。

ハツとしてそちらを見れば、知っている顔が私を見ている。そして、自分が昔の愛称で呼ばれたことに遅れて気付いて、嫌悪感が湧いてきた。

「……………Asgore。『Tori』と呼ばないで頂戴と何回言ったら分かるの」

私が嫌悪を隠さず目の前のシャツを着たモンスターにそう言えば、慌てた様子で Asgore は目線を彷徨わせる。

「あつ、そうだったね、ごめん……………」

そしてしゅんと悄気返る Asgore の言葉を聞き流して、私は言葉を続ける。

「……………そっちはどうかしら。ちゃんと、結べたの？」

「も、勿論さ！ 今は院長に預けているけど、ちゃんと同意書を交わしてきたよ！」

私の言葉を聞いて、Asgore は首を縦に大きく振った。

……………実は、会合は二つ、同じ建物で行われていたの。ひとつは、私と Chara が担当した法整備に関する条約。そしてもう一つは、Frisk と Asgore が担当した、平和条約。……………子供を殺しておいて、何が平和よ、と思ってしまう私がいるけれど、押さえ付ける。そうやって糾弾するのは、殺された子供達の親が、もうしているのだから。私がする資格は、ない。

「まあ、知っていたけどね。じゃなくちゃ、Friskがあんなに喜んだりしないもの。……それで、何も用が無いのなら、先に行くなり何なりしてほしいのだけれど」

「あ、えっと、君がもうそろそろ帰るだろうって院長に聞いたから、出迎えに来ただけど……………」

私の言葉に反応して、Asgoreはしどろもどろになりながら説明する。

……………そう。このモンスターも、FriskとChara、そしてAsrielの保護者を名乗り上げ、モンスターの王として人間との和平を結ぶ傍ら、孤児院のスタッフとして働いている。

『親善大使二人との近くにいた方が都合がいい』とか何とか理屈を捏ねていたけど、結局はAsrielやChara、そしてFriskと一緒に居たいからだろうと私は思っている。

「……………」とところで、Tori。それ……………」

ふと、宛てなく彷徨っていた Asgore の目線が私の腕の中に注がれる。

「……………それはユリ、かい？ 地上にも、やはりユリはあるんだね」

どうやら私が抱えているユリが気になったらしく、Asgore はそう言った。

そして、ユリをじっと見つめて、

「……………え？ 『ユリ』……………？」

何を思ったのか首を傾げ、ぶつぶつと呟く。

「……………孤児院に飾ろうと思ったのよ。何か悪い？」

「いや！ いやいや！ そんなことは……………！ とてもいいと思うよ！」

その様子に若干苛立って、つつけんどんな様子で聞けば、Asgoreは慌てて首を横に振った。

「……………ただ……………ちよつと……………思うところがあつて」

じいつと、ユリを見ながら、Asgoreはまた首を傾げる。

「———なんだか、ここう、何か引つかかるものがあるというか……………忘れてはいけない『何か』が、あつたような気がするんだ」

「……………え？ 貴方も……………？」

その言葉を聞いて、私は思わず聞き返してしまった。

『何かを忘れている』ような、引つ掛かり。先程の焦燥感にピッタリと当てはまるその言葉が、すくと胸に落ちる。

それと同時に、Asgoreもその思いを抱いている事を理解して、驚いた。

「『貴方も?』」つて、Toriel……、君もそう思っていたのかい?」

私の言葉を聞くと、Asgoreは驚いたように、金色の両目を丸くした。

「……………ええ、まあね。貴方と同じというのは、少し癩だけれど」

「そ、そんな……………」

傷付いたような顔をして顔を伏せ、押し黙るAsgoreの事を少し見て、私はまた口を開く。

「……………ねえ。一つ、聞きたいんだけど」

「! な、なんだい?」

私が声をかければ、Asgoreはまた私を見て、精一杯笑って見せる。

「さつき、貴方は『何かを忘れている』って言ったけれど……それなら、私達は一体、『何』を忘れているのかしら」

「……………それは……………」

私が独り言のような問いを口に出すと、Asgoreは目を見開き、口籠もる。そして、地面に目線をやり、彷徨わせる。何かを考える時の癖ね。

「……………分らない」

暫く考えていたAsgoreは、頬に手を当て、ガリ、と掻いた。

「……………分らない。きつと、花を買ってきてくれと言われたとか、そういうものではない、大切なモノの筈なんだが……………駄目だ、どうしても分らない」

「……………そうよね。やっぱり、分からないわよね。私だってそうなもの」

苦しそうに答える Asgore の答えを聞いて、私はただ、やっぱりか、とだけ思った。

「きつと、私達のどちらも根本的に忘れてしまっているから、思い出せないんでしょうね。こればかりは、どうしようもないわ」

そう言った言葉は、未だに頬に手を当てる Asgore に言ったものなのか、それとも未だに違和感を訴える自分を納得させる為の言葉なのか、私には分からなかった。

「……………ねえ、出迎えに来てくれたんでしょ？　なら、この花束、持って頂戴な」

話を変える為に、少し声を大きくして Asgore に言えば、Asgore は勢い良く顔を上げて、此方を見つめて目を丸くした後、嬉しそうに顔を破顔させて、

「ああ、勿論さー！」

大きく頷いて、此方に近寄ってくる。にこにこ笑うAsgoreに花束を手渡し、さつきと孤児院に向かって歩き出す。

「あ、そうだ。CharaとFrisk、帰ってくるのがちよつと遅くなるつて。さつき連絡があつたよ」

「そう。あまり遅くならなければいいんだけど」

久々にする他愛ない会話に応じながら、緩やかな坂を登っていく。

——声はもう、聞こえない。

腕の中のユリだけが、ただ静かに芳香を放っている。

Epilogue of Asgore

[Asgore]

「……………ふう……………」

先程淹れた紅茶の入ったティーポットと、お気に入りのマグカップをテーブルに置いて椅子に腰掛けると同時に、疲れがどつと襲ってきて、思わず溜め息を吐いてしまった。そのままテーブルに突っ伏すと、眠気が襲ってくる。

うとうとしながら、ぼんやりと、花瓶に飾られて咲き誇るユリの鼻を擦る匂いを堪能する。

二週間程前にToriが買ってきたその花は、Toriの手入れが行き届いているからか、まだ花を開いている。

ぱさり

「……………あ」

そんな事を思った矢先、一つだけ枯れてしまっていたユリの花卉が、一枚落ちた。体を起こしてテーブルの上に落ちた茶色がかったそれをそとつまみ上げて、何となしに眺めて見る。

あんなにも美しい白い大輪の花を咲かせていたのに。

少し、残念に思った。

「パパ？」

そんな事を考えていると、ふと、扉の開く音ともに、聞き慣れた声がある。その声に顔を上げ、声が聞こえた方を見れば、私の新しい娘である *F r i s k* がそこにいた。

「やあ、Frisk。仕事の調子はどうだい？」

「うーん、まずまずつてところかな。パパは頼まれてた庭仕事終わったの？」

「ああ、久しぶりだったから自信が無かったけど、上手い具合に仕上がったよ。後で見てください」

「いいよー」

私との雑談に応じながら、少し疲れた様子のFriskは私と向かいの席に座る。

「でもその前に、ちょっと休憩するね」

「その休憩に、淹れたての紅茶とクッキーはいかがかな？」

「わあ、もらおうかな」

疲れを癒すのにちよつとしたお茶会でも開こうか、と思つてF r i s kに問えば、F r i s kは顔を綻ばせ、頷いた。

「ちよつと待つてね」

席から立ち上がり、マグカップを取りにキッチンに入る。孤児院の備品の中でもF r i s kが良く使っているマグカップと、T o r iを驚かせようと内緒で焼いたクッキーの余りを皿に移し、手にして戻る。F r i s kとお茶出来ることに喜びながら戻ると、疲れからか、先程の私のようにF r i s kは机に突つ伏していた。

「お疲れだね。また書類仕事だったのかい？」

「……………うん、また会議で使う資料なんだ」

「そっか……………」

持つてきたクッキーをF r i s kの前に置き、手元にあつた未使用のマグカップの隣

にF r i s kの分を置いて、紅茶を注ぐ。ふわりと、嗅ぎ慣れたいい匂いが広がった。

「お待たせ。お茶会にしようか」

マグカップと角砂糖の入った小鉢をF r i s kの前に置くと、F r i s kはゆつくりとした動きで体を起こし、マグカップを手にした。

「……………いい匂いだね」

「だろう？ 地下に居たときに作った紅茶なんだ」

中で湯気をあげる熱々の紅茶を見ながら、F r i s kが薄く笑う。それに嬉しくなりながら、私は手にした角砂糖をマグカップに落として、スプーンで混ぜた。そのままスプーンを角砂糖を三つほど入れたF r i s kに手渡し、紅茶を飲む。

「……………ふう。うん、美味しい」

私が一口飲んで息を吐けば、続けてFris kも紅茶を飲んだ。

「……………うん、やっぱり美味しいね」

「だろう？」

緩く笑ったFris kの言葉に頷いて、また一口飲んでから、違和感に気付く。

「ん？ 『やっぱり』？ Fris k、この紅茶、飲んだことあるのかい？」

違和感を感じた部分を口にすれば、Fris kはゆっくりと頷く。

「うん。地下から皆と帰る前に、Undyneの家でね。言ってなかったっけ」

Fris kの口から出たその言葉を聞いて、そう言えばUndyneと戦って、その後仲直りに行った時に、お茶をご馳走になったと言っていたのをぼんやりと思い出す。

「……………ごめん。クッキングの方の衝撃が強すぎて、すっかり忘れてたよ」

「あー……………あれは、うん。確かに衝撃的だったしね、忘れるのも仕方ないよ」

素直に Frisk に謝ると、Frisk は当時の事を思い出したのか、苦笑いを浮かべた。その苦笑いを飲み込んでしまうように、Frisk はクッキーに手を伸ばし、一つ口に放り込み、咀嚼した。ぽりぽり、という乾いた音を耳にしながら、私も一つ手にとつて、食べてみる。食べ慣れた味が口に広がった。

「……………」

「……………」

ふと、会話が途切れて、沈黙が流れる。嫌な沈黙では無く、ゆつたりとした穏やかな時間が流れていくような、そんな沈黙。

……………地下世界で、あの玉座に独りで座っていた時を思い出した。

「……………一つ、夢が叶ったよ」

「え？」

私が独り言を溢すと、紅茶を飲んでいたF r i s kが首を傾げた。

「……………ほら、さ。私は、モンスター達の王だったから。人間達とは、敵対関係にあつて
……………殺し合わなくちゃ、いけなかつたじゃないか」

「……………そう、だね」

不思議そうに私を見つめていたF r i s kは、最後の言葉を聞いて、顔を歪めた。
マグカップに目を落とし、残り少なくなった紅茶に映る自分の顔を見る。

……………その顔は、酷く歪だ。

「……………六人。そんな数ものの子供達を殺しておいて、私がこんな事を願うのは筋違いだというのは分かってはいるけど……………私は、『人間とモンスターがいつの日かこんな風にお茶をゆつくりと飲めるようになったなら』と、願っていたんだ」

「そうだったんだ」

「ああ」

話を始めてしまった私に嫌な顔をせず、F r i s k はマグカップを置いて、話を聞いてくれる。

「……………きつと、こんな日は来る筈が無いと思っていたから、本当に嬉しいよ」

F r i s k が静かに話を聞いてくれることもあつてか、話さず自分の中で留めておくうと思つていたものが、口からぼろぼろとこぼれていく。

「でも……………同時に、それを素直に喜べない自分があるんだ」

「それは、どうして？」

口から滑る言葉に反応して、Friskが優しく問いかけてくる。此処まで話して置いてなんだが、流石にFriskにこんな話をしていいのか悩んでしまつて口を閉ざせば、

「……………私に遠慮してるなら、大丈夫だよ。少しぐらい背負うものが増えたつて、私は潰れたりしないからさ」

その悩みを見抜いたように、Friskはそう言った。

……………そこまで娘に言わせておいて、話さないわけにもいかない、と腹を括る。温くなったマグカップを置いて、私はずっと抱えていた想いを口にする。

「……………私が、『人殺し』だからだよ」

沈黙の中に、私の言葉が重く響いた。

——ばさりと、ユリの花卉が落ちる。

「私はね、Frisk。本当は……分らないんだ」

ぼそりと、私は自分の想いを言った。

「私は『モンスターの王』として……今までに『六人』もの子供を殺してきた。前のCharaも……私が、親としての監督不行き届きで殺してしまったようなもの。それを含めれば『七人』だ。

……ねえ、Frisk。そんな人殺しの罪を抱えた私が、人間界に……此処に居ても、いいのかなあ？」

私の言葉を、Friskは何も言わずにじつと耳を傾けてくれる。

「……………人間界では、私は本来糾弾されて、断罪されるべき大戦犯だ。私の首は、もう

とつくにギロチンにかけられている筈だったんだ。事実、この数年の間に何度も私は『罪人だ』、『犯罪者だ』と言われ続けてきたし、その所為で何度も会議が頓挫しかけた。それでも……君達親善大使は、私を見捨てず、生かし続けた。そのこと自体は、感謝してるんだ。でもね……」

——私は、死んでしまいたい

私の声が、静かな空間にじわりと広がっていく。

——もう一枚、ユリの花弁が落ちた。

「そう考えているようなモンスターが、此処に居ていい訳がないだろう？」

「……………」

驚きからか、沈黙したF r i s kの顔が見られなくなつて、机に目線を移す。

「私は、本当はとんでもない臆病者でね。目の前の事から直ぐに目を逸らして逃げ出してしまおうような、そんなモンスターなんだ。今回も、そうだった。私はモンスター達に『人間』という種族そのものを仇として摩り替えて、モンスター達に地下世界で暮らすことを強要させ……自分自身は、『誰も殺したくないからこうするしかない』と現実逃避をして、『もう誰もこの地下に落ちて来ないでくれ』と、身勝手に祈っていることしかなかった」

……でも、結局は。

「そんな祈りは届かず、二人目の人間はやってきた」

——目を、閉じる。

「Ruinsから出て、少し辺り……Snowdinの入り口辺りかな。凍えていた人間を当時の王国騎士団のメンバーが捕らえて、私の前まで連れてきたんだ」

思い浮かぶのは、玉座の間に恐ろしい顔をして抵抗する子供を無理矢理連れてきたモ

ンスター達。

「驚いた私はどうすればいいのか、最初どうしたらいいのか分からなかった。分からない振りをして、また逃げようとした。でも、民達に宣言した手前、そんな事が赦されないのは分かっていた。民達の人間への憎悪は、私が造り上げたものだというのは、理解していたしね。どうにかしようと考えた、どうにかならないかと祈った」

……………そして、最後に思い浮かぶのは。

「……………結局、私は半ば狂乱して…………死にたくないと何度も叫んで抵抗するその子を、槍で貫いて、殺した」

……………『恐ろしいバケモノ』に、殺されようとしている子供の力才。

「気が付いた時には、私の槍の先端は真っ赤になって……………その子の身体は、血で濡れていた。生臭い血の臭いが、思っていたよりずっと早く広がっていったよ」

目を開いて、組んでいた手を広げる。

「それを民達に告げた時、民達が歓喜に沸いていたんだけどね……そんな声なんて、聞こえなかった」

白い毛に包まれたそれが、真つ赤に染まっているような気がする。

「槍を抜いて抱え上げた体の重さは……死んでしまったCharaを抱え上げた時と同じ重さだったよ。でも、Charaの冷たい身体を抱えた時よりも、中途半端に温かくて……Charaみたいに病気で死んでしまった訳ではなくて、自分の手で殺してしまった事を嫌でも突き付けてきたよ」

あの時の情景は、表情は、臭いは、感覚は、今でもはつきり思い出せる。

「その後、自らソウルを出したりしたらしいんだけど、その時の記憶が曖昧なんだ。……頭の中では、殺した時の感覚が、ずっと残っていてね。それ以外の事が、上手く入ってこなかったんだ」

……そう言えば、全てを終えて自分の部屋に戻った時に、Gersonが何かを言っていたような気がする。その内容も、表情も、私は思い出せない。

「部屋に入って、日課の日記にその事を書き連ねて……やつと、それが全てどうしようもない『現実』だと受け入れられたんだ。そこでようやく、私は自分が本当に『罪人』なっってしまったんだと気付いた」

それを上書きするように、酷い震えや、感覚が重くのし掛かって、消えてくれない。

「遅れて、今までないほどにソウルが跳ねて、身体が震えていることに気付いたよ。自分がどうしようもない事も、ね。その後一週間は食事も喉を通らなくて、無理矢理詰め込んで、味がしなかった。

……それでも、まだ私は『逃げることを止められなかった』

今思えば、今まで逃げて選択をしてこなかったツケだったんだろう。それが、最悪の選択しか自分に残してくれなかった。

……………それからさえも、私は逃げた。

『人殺し』になる決意を、抱いていた筈なのに。

「T o r r i が言っていた通り、手に入れたソウルを持ってバリアを通り抜けて地上に出れば良かったんだ。それなのに、私はこれ以上誰かの命を奪いたくない、罪を重ねたくない……自分の我が儘を押し通そうとした。民達には『また人間が落ちてくる。そのソウルを奪って七つ集めれば、人間が齒向かうことの出来ない神の力を手に入れられる』なんてそれらしい言い訳を重ねて、地上には行かなかった。全てを殺す決意をしておいて、また人間が落ちてこない事を祈った。

……………その結果、私はまた民達を絶望の淵に立たせ、罪を重ねていった」

次々に思い浮かぶ、最後まで抵抗しようとしたり、諦めてしまったようだったり、何かを覚悟したように安らかだったたりした、六つの顔。

「そんな事を繰り返して、やっとあの日君たちがやってきて……地下世界は解放された」

私の我が儘で閉じ込めていた皆をやつと地上に出すことが出来たのは喜ばしいことだし、別に後悔はない。

……だが。

「それと同時に私の王^{わたし}としての責務は終わつて、最後には重ねてきた人殺しの罪だけがそこに残つた」

再び組んでいた手に、力が入る。

「……君のお蔭で罪は断罪されることなく、こうして息をして生きていられる。だけど、それが私にはどうしても耐えられない苦痛なんだ」

背中に重くのし掛かる罪は、何度やり直したいと願つても消えてくれない。

「眠る度に殺してしまつた子供達が見えるんだ。蔑んだ瞳で此方を見ていて、『死んでしまえ』と責め立ててる声が聞こえる。子供達の傷から流れる生臭い血の臭いがする。

この孤児院の子供達と触れ合った日なんか、特にはつきりとね」

きつと、殺人者である私に幸せになる権利はないと、彼ら彼女らは伝えたいんだろう。そんな事、分かっているのに。

私は顔を上げて、Friskの溢れ落ちんばかりに見開かれた目を見る。

「告白すると、この数年間、私はほぼ惰性で生きてきたようなものなんだ。まだ少しだけ残っていた王としての責務を果たして、その後は、この孤児院のスタッフとして、ただ仕事をこなしてきただけなんだ。

……ずつと、『死にたい』と願ったままで」

娘でありながら命の恩人でもある彼女にこんな事を思っていたということに申し訳なくなつて、また目線を逸らし、机に目を向ける。

「……ねえ、Frisk。やっぱり私は、此処に居ていいモンスターじゃないよ。今すぐにでも、首を落として塵になるべきなんだ」

口に出して、改めて自分は救いようのない罪人であることを認識する。

「こんな私は、生きている意味がない。それだけじゃない。私はもう、これ以上生きていたくない。一噌のこと死んでしまいたい」

だから、と私は、ずっと心の中で渦巻いていた言葉を口にする。

「……………どうか、今すぐ私を殺してはくれないか」

ひゅつ、と息を飲む音が聞こえた。

——それと同時に、また、ぱさり、という音がした。

「絞首や斬首……この世の中には色々な殺し方がある。その中のどんな殺し方でも構わない、惨たらしく、見せしめになるように私を殺してくれ」

それこそが。

「私の総ての過ちの、償いになるだろうから」

——その直後。

パンツ

乾いた音が、耳元で響いた。

ズキ、と。遅れて頬が痛む。

鋭い痛みではない、じんと染み込んでくるような、そんな痛みが。

「……………え？」

一瞬、何が起こったのか分からず、机から身を乗り出して近くなったFriskの顔を意味も無く眺めてしまう。

——ユリの花卉が落ちるのが、視界の端で見えた。

「……………なんてことを、言うの」

Friskは私のシャツの襟を掴んで、私を睨み付ける。

「『生きていたくないから殺して欲しい』…………？」

Friskの土色の瞳は、今まで見たことがないほどに憤怒に染まっていた。

「ふざけないでよ」

——『ふざけるなよ、お前』

……………その瞳に、見覚えがあるよう気がした。

「貴方が今までどんな気持ちでその罪を背負ってきたのかはちゃんとは分からないけど、それは、そのやり方は、違うでしょう。私を怒らせたいの?」

「え、いや、そんなつもりじゃ……」

はつとして Frisk の問いに思わず首を横に振れば、Frisk は腹立たしそうに一呼吸置いて言葉を続ける。

「……確かにね。罪には罰が必要だとは思うよ。その考えは間違っていないと思うよ。でもね、『命をもって償う』っていうのは、罰としては軽すぎる。そんなの、罪を償うとは言わない。ただ罪から逃げようとしてるだけで、罰なんかじゃない」

Frisk は一言一言力強く、私に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

『逃げようとしている』という言葉にドキリとソウルが跳ねて、真つ直ぐに此方を射抜く瞳から目を逸らしたくなる。

「ねえ、王様。貴方は罪から逃げたいの? それとも罪を償いたいなの?」

もう一度、Friskは私に問いかけてくる。

その問いに、私は言葉を返せない。

Friskはただじつと私の瞳を覗き込んで、私の返答を待つ。

「答えて」

Friskは先程の憤怒の表情を消し、ただ答えを急かしてくる。

「……………私、は」

私は……………一体、どうしたいのか。

Friskに問い掛けられて、もう一度自分はどうしたいのかを考える。

……………死んでしまいたい、殺して欲しいという思いは変わらない。それ以外、無いんじゃないのだろうか。

「……分からない。分からないよ……」

考えた末、私はFriskにそう返答する。

「Frisk……『死ぬ』ことが罰にならないのなら、私は、もう」

「だったら！」

「どうしようもないよ、と言葉を続けようとした途端、紛れもないFriskに遮られる。」

「だったら、私が罰をあげるよ、王様」

「えっ……?」

突如として告げられたFriskの言葉に、ぎよつとする。そんな私に配慮なんてせ

ず、F r i s kはまた口を開いた。

「罪を償う為にこれからは生きて、王様」

——一瞬、F r i s kが何を言ったのか、理解が出来なかった。

……罪を、償う為に『生きる』？ どういうことだ？

「……………意味が分からないの？ なら教えてあげる。これは受け売りだけどね、人もモンスターも、誰かの命を奪ったら、その奪った命の残りを必ず生きないといけないの。今の貴方も、それにピッタリ当てはまる。だから、貴方は六人分の残りの命を生きなくちゃいけないと、私は思うよ」

じつと私の瞳を見つめたまま、F r i s kは言う。

その言葉に、聞き覚えがあるような気がするのは何故だろう？

「だから、ねえ、王様。どうか生きて。どんなことがあっても生きて。抱えた命の分を生

ききるまで、死ぬことは絶対に赦さない。それが、私が貴方に示す罰です」
MERCY

彼女の口から、私に対する判決が下される。

これ以上に無い重い罰が、言い渡された。

——私^は、この子に死^生な^かせ^され^れて^しな^かつ^たのだと、直ぐに理解した。

Friskはそこで一度口を閉ざし、掴んでいた手を離して、席にすくと座り直した。そして退けてあったマグカップを掴み、一気に中身を飲み干した。

「……………私が思ったことは以上。どうするかは。パパ次第だよ。まあ、まだ死ぬって言う気なら、ママやCharaやAsに言い付けて家族会議も辞さないけど……………どうする？」

そして中身を空にしてマグカップを置くと、続けてそう言った。言いたいことは言い切ったのか、私を見つめて答えをただじつとを待つ。

此方を見つめるその瞳から、目を逸らしたくなる。

——…………でも。

「……………私は。わたし、は……………」

此処まで娘にお膳立てさせておいて、逃げるのは……………嫌だ！

「……………私は、罪を償いたい」

少し間を開けて、たった一言、その言葉が自然と口から溢れ出た。

「だから……………君のその罰を、甘んじて受け入れよう」

続けて、その返答が口から出る。

「今まで流されて、逃げてきた私が……やつと世界と向き合うことを選んだ瞬間だった。」

その返答を聞いたFriskは、ただにつこりと笑って、満足そうに頷いた。そしてマグカップを掴んで、紅茶を飲もうと少し傾けて、ピタリと止まった。

「……………ああ、そつか。さつき飲んじやつたんだ」

「淹れ直してくるよ。少し待っててくれるかい？」

空のマグカップを残念そうに見つめるFriskにそう申し出ると、Friskは顔を上げる。

「……………いいの？」

「ああ、勿論。少し待っててね」

「うん」

嬉しそうに顔を綻ばせて頷くFrisk。その表情を見てから、私は冷めてしまったティーポットを持ち上げ、席を立つ。

「あ、待つてる間テレビ見てもいいかな。Metatonが出てる番組が始まるらしいの」

「おや、そうなのかい？ 勿論構わないよ」

Friskの口から出た名前に、以前Alphys博士が造ったロボットの事かと思ひ至る。此方を伺うFriskにOKを出して、キッチンに向かう。

ピッ

《……まあ、というようなことがあったんですよ！》

先程やかに沸かしておいたお湯の余りに水を足し、火にかけたところでテレビから聞き覚えのあるキンキンした声が聞こえる。

「あちゃー、始まつちやつてたか」

録画しておけば良かった、と小さく溢す F r i s k の声とテレビから流れる音声聞きながらお茶の準備を続ける。

《そんな事が……こうやって聞くと、やはり F r i s k 親善大使と C h a r a 親善大使は凄いですね》

《そうなんです、凄いですよ、私達のダーリン達は！》

テレビの向こうの声が、いつもより明るく聞こえる気がする。逃げないと決めたからだろうか……？

《あ、そうそう。ダーリン達の事で思い出したんですけどね……》

ピーツ、とやかんの先から勢い良く吹き出す湯気に、お湯が沸いたことを察して火を止める。そして、一度ティーポットにお湯を注ぎ、一回しして暖める。

《……私、地下でダーリン達と戦ったあとに、実は言いたかった言葉があつたんです》

《おお、それはどんなお言葉で?》

一度お湯を捨て、茶葉を茶漉しに入れてお湯を注ぐ。

《『私の友達になつてほしい』……そう言うつもりで口を開こうとしたら、さっき言った通り電源切れになっちゃいました。改めて後でちゃんと菓子折持つて謝罪したうえでもう一度言いましたよ。……まあ、結局Charaさんにはフラれちゃいましたけど》

ははは、とテレビ越しに笑い声が起こる。

ティーポットを蒸らしながら戻る。

「はい、淹れてきたよ。ちよつと蒸らすから、もうちよつと待つててね」

「はーい」

Friskの前にティーポットを置き、一緒にテレビを眺める。

《………それで、そこで少し、不思議な事があつて》

《不思議なこと、ですか》

人間の司会者と、Metatonと………確か、NapstablookとShyrenだったか。そのモンスター達を代表して、Metatonが答えているらしい。そう言えば確かにMetatonがやってきたことがあつた事を思い出す。子供達に遊んでくれとせがまれていたっけ。

《私は………しつかり、ダーリン達『二人』に、本当に確かに、『友達になつてよ』つて言つた筈なんですよ。

——でも、何でか、もう一人……そう言わなきゃいけない誰かが居たような気がして……》

「……えっ」

突如として告げられた彼の言葉に驚いたのか、Friskが小さく言葉を溢した。私もその発言に違和感を覚え、思わずテレビの中で首を捻る彼を見つめる。

——私の娘は、『二人』だけのはずだ。なのに、彼は何を言っているのだろうか。

いや、気のせいだとは思わんですけどね、と間を開けてから続けるテレビの中の彼から目を逸らして、私はティーポットの蓋を開ける。ふわりと、優しい匂いが鼻を擽る。

『おとうさん』

「……………えっ」

ふと、知らない声私を呼んだような気がして顔を上げる。

「ん？ パパ、どうしたの？」

視線の先に当然居たFriskが、驚いたように目を丸くし、首を傾げて此方を見る。その姿が、一瞬誰かと重なって見えた。

「……………パパ？」

「……………あ。いや、何でもないよ」

Friskが怪訝そうな声を出すと同時に、その誰かは直ぐに思い出せなくなった。

……………きつと、気のせいだ。

そう思い直して、私はもう一度ティーポットの中を覗き込む。……………あと、もう少しだろうか。

「F r i s k。もし死ななかつたらこうしようと、ずっと考えていたことがあるんだ」

「うん？」

蓋を閉めて、私は時間潰しにF r i s kに話を切り出す。

「……………学校を、作ろうと思うんだ」

テレビから視線を移し、此方を見てくれたF r i s kにそう言うのと、F r i s kは目を丸くした。

「人間は勿論、モンスターの子供達と一緒に学べる学校を。人間の先生を雇って、それ以外にもモンスターの先生も雇って、勿論T o r iも誘って、ね。……………どうかな」

私がそうF r i s kに尋ねる声は、酷く不安そうだった。

「……………うん、そうだね」

目を丸くしていたFriskは、にっこりと微笑んでゆつくりと頷き、

「とても素敵な、償お返しいだと思うよ」

そう、言ってくれた。

「……………うーん、そうになると色々な手続きとかしなくちやなあ」

「あつ！ そ、そうか、すまない……………」

「んー？ いいんだよ、苦でも何でもないからさ」

考えるような仕草をして呟かれた一言に、今でさえ疲れているFriskに親善大使としての仕事を増やしてしまうことに気付いた。慌てて私が謝ると、Friskは微笑んだまま首を緩く横に振った。

「Charaにも打診して……：……パパにはまた色んな方面で矢面に立つてもらうことになるかもしれないけど、大丈夫？」

そのままぶつぶつと呟きながら考えていたFriskが、不意に私にそう訊ねてくる。

………そんなの、決まっている。

「ああ、覚悟は出来ているよ」

Friskに、私はしっかりと頷き返す。

——嘗てない糾弾や罵倒が、私を待っているかもしれない。

何度も、心が折れてしまうような事があるかもしれない。

それでも。

私はどんな糾弾も何もかも受け入れて生きていくと決めたんだ。そんなもの、言われるまでもない。

……そう思っていたのが伝わったんだろう、F r i s kはそっか、と満足そうに頷いた。

「……………まあ、その話は今は置いておいて。まずは……………お茶にしようか」

「うん。お願いしていい?」

そろそろお茶がすっかり蒸れた頃だろうとあたりをつけ、F r i s kにそう提案すると、F r i s kは笑顔でマグカップを差し出してきた。そのマグカップを借り、中に紅茶を注ぐ。それを渡してから、自分のマグカップの中に残っていた紅茶を飲みきる。冷めたお茶は、渋くなってしまっていた。

「う、渋い……」

「あはは、冷めちゃったお茶って結構渋いよね」

Friskの相槌を受けながら、私も自分の分のお茶を入れて、角砂糖を放り込む。そして先に紅茶を混ぜ終わったFriskからスプーンを借りて、砂糖を溶かして、スプーンを置く。

「……………それじゃあ、新しく生きる道を見つけた王様を祝って、乾杯！」

「ふふ、大袈裟だなあ。乾杯」

悪戯っぽく微笑んでそう言ってマグカップを掲げた彼女に倣い、自分のマグカップをそつと掲げ、一口飲む。

「……………美味しい」

自然と頬が緩むのを感じながら、そう口にした。

—— 幸せだ、と感じた。

その途端。

—— ぼさ、と。

最後のユリの花卉が、落ちるのが見えた。

Epilogue of Mettaton

[Mettaton]

……キチチチ、カチン

……『僕』の意識が浮上する。どうやら、朝になったらしい。充電を終えた機械のボディから伸ばした腕の先の四本指の手を軽く握ったり開いたりして、動作確認を行う。それから腕を伸ばし、背中についていた充電プラグを引き抜き、防水カバーを閉じ、滑車のついた一本足を伸ばして台の上から降りる。そして直ぐに備え付けてある姿見の前に立つ。

「……よっし、僕ってば今日も美しい！ 格好よくて可愛い！ 全世界から愛されるスーパースター！」

数回姿見の前でポーズを取ったり、色々な角度から完璧なボディを眺めて、そんな言

葉が自然と口代わりのスピーカーから出た。人間形態ではないこの時では表情らしい表情はパネルでしか示すことしか出来ないが、人間形態だったら誇らしげな顔になっているんだろう。もしこの言葉を王女のダーリンに聞かれたりしたらまた『ナルシスト』と言われるだろうが……Alphysが拘りに拘って造ってくれたこのボディを誇らずにはいられないのだ。こう言うくらいは許してほしい。

ふと、冷静になって時計を見る。時計の針が出掛ける時間を指し示していた。

行かなくては。

僕はルンルン気分で部屋から出る。

「あ………お、おはよう、Mettaton!」

「おはよう、Alphys! 今日も良い日だね!」

部屋を出て直ぐに、手元のタブレットを弄っていたAlphysが顔を上げ、吃りながらも挨拶をしてくる。挨拶を返し、僕はAlphysの横に並び立つ。

「え、えーと、今日の予定の確認をするわね。今日は……」

それと同時に今日の予定を読み上げ始めたAlphysの声を聞く。

……実は、Alphysには僕のボディの整備士兼マネージャーをしてもらっている。僕も交渉術を心得てはいたりするが、やはりAlphysの方が場数を踏んでいる為、頼った方がいいと判断した為だ。やはり研究者ということもあつてか、仕事上のビジネスに関しては慣れているのか、そういう場では彼女は吃つたりしない。

「……………そして、最後に、親善大使Friskとの特別コラボレーション番組の撮影よ」

「！」

つらつらと言い重ねられてきた最後に、僕が今日一番楽しみな予定が上げられた。

……—僕のメモリーが異常を起こしていなければ、確か一年前。突如として拠点である研究所にかかってきた一本の電話。

電話の相手は紛れもないダーリンで、出来る限り近日中に話し合いの場を設けられないかというものだった。急いで予定を確認して、空いている日を見つけた僕は、地上で有名なテレビ局の一室に呼び出された。雑談もそこそこに、売れ始めた大型人気スターに親善大使として持ちかけられた話は、人間とモンスターの和平に関する特別番組を組むから、それに出演してくれないだろうかというもの。王女のダーリンが思い付いたマスメディアを利用する手として、僕が抜擢されたらしい。

僕に話を持ちかけられた時点で、もうある程度ダーリン側で話は纏まっていて、後は僕が一言『はい』か『いいえ』を言うだけでどうなるかが決まる状況だった。

何度も何度も『お願いします』とまた少し背が伸びたダーリンと企画担当者に頭を下げられた僕は少し悩んで…………——愛しいダーリンにそこまでお膳立てさせられておいて、『いいえ』という僕じゃない、ということを伝えた。

後はトントン拍子で話が進み、今日に番組撮影日が決まった、という訳だ。

「撮影は午後だけど……………どうか、他の仕事も手を抜かないでね」

心配そうにAlphysが告げた言葉に、ちよつとムツとする。

「ちよつと、この僕がそんな事をする訳ないでしょ」

「わ、分かつてるわ！ でも、一応……ね？」

僕が不満を隠さずそう言えば、Alphysは慌ててそう取り繕う。ごめん、と小さく言葉を溢して押し黙ってしまったAlphysとの間に、変な沈黙が流れた。

「……………まあ、お陰で気持ち引き締まったよ。ありがとう」

「えっ、い、いや、そんな、お礼を言われることでも……」

内心で一言余計なんだよな、と思いつつもそう言えば、Alphysは目を丸くした後、首を取れんばかりに横に降った。

「兎に角、今日もよろしくね、マネージャー！」

「あ、う、うん！ よろしく、Mettaton！」

無理矢理話題を切り上げて、僕はいつも通りマネージャーにそう言つて、気分を切り替える。

……………さあ、今日も『^{Mettaton}私』を世界に知らしめよう。

朝、昼、そして午後にある一つの仕事をこなし、気付けば午後。

「よし皆、今日も撮影お疲れ様！」

「お疲れ様、Mettaton」

撮影を終えて舞台を降り、関係者の人間全てに挨拶をする。それからようやく外に出

てから、私のビジネスパートナーでもありかけがえない友人のShyrenを労る。

そして……

「お疲れ様、Blooky。今日も良い演奏だったよ、ありがとう」

「ああ………そつちこそお疲れ様、Happy。本当に、かつこよかったよ………」

もう一人のビジネスパートナーであり……大切な従兄弟であるBlookyも、労る。

………まだ、地上を出て直ぐの頃。ダーリン達と戦って充電切れになった僕は、充電を終えて目が覚めて直ぐに、Alphysに一つ、物を手渡された。

見間違う筈もないそれは、『Met^僕taton』が『Happ^僕stablook』を捨てた時に一緒に捨てた筈の、Happ^僕stablookの家の鍵。

何故これをAlphysが持っているのか問い質したいのを後にして、僕はまず、『彼に会いたい』という思いに従って行動した。そうしなければ、いけなかった。

自分の家の前で佇んでいた彼と、最初はなんて話せばいいのか、分からなかった。……でも、どうしても僕は、彼と話して、また昔みたいに、笑いあいたかった。

何とか口から捻り出したぎこちない挨拶から会話を始めて……あとは、この通りだ。

「ああ、そうだ……この後、Friskと撮影なんですよ……？　急いだ方が良いんじゃない……？」

少しBlookyと話していると、不意におずおずと、Blookyがそう僕に言った。内蔵されている時計機能を起動してみれば、確かにFriskとの約束の時間が迫っていた。

「それもそうだね！」

Blookyの言葉に頷き、私は手足を閉まって飛行形態を取る。

このボディが精密機械である以上、重量がとんでもない私は、公共機関やタクシーが使えない為、長距離の移動は飛んで行くしかないからだ。

「それじゃあ二人とも、行ってくるよ！」

二人に別れを告げ、私は空に向かって飛び立つ。機械のボディはぐんぐん上昇し、ある程度の高度まで上昇すると、自動ナビゲーション機能を起動して予め登録しておいた座標——約束のスタジオにまで飛ぶ。途中飛行機と擦れ違い、驚いた顔で此方を見ていた人間達に向かってファンサービスをたっぷり送っておく。その後は何事も無く、約束のスタジオに着いた。

スタジオの前に降り立ち、背中スイッチを切り替える。ボン、という音と派手な煙を立てて人間形態に変身し、私の自慢の美しい二本足を動かして入り口で待機していたスタッフに案内してもらう。かつかつ、と響く床に当たるヒールの軽やかな音が心地好かった。

途中擦れ違う人々に挨拶を交わし、出演者の楽屋に挨拶に周り、スターとして欠かせない処世術をこなしていく。

そして、最後にスタジオの前に立ち、深呼吸してから、足を踏み入れる。

「皆さん、おはようございますーす！」

押し開きのドアを潜り抜ければ、此方に当然の如くほぼ全ての視線が私に集まる。その視線の主達に笑顔で挨拶しながら、私は目当ての人物を探す。

「! ダーリンー!」

ふと、話し込んでいる様子の人垣の中に探していた背中を見つめる。私が直ぐに声を掛ければ、その声が届いたのか、ダーリンは振り向き、私を見た。

一瞬、違和感を覚えた。

「やあ、Mettaton。どうしたの、声掛けてきたと思ったら立ち止まって」

「え? あ、いや……何でもない。久しぶり、だね」

その違和感が理解できず、思わず動かしていた足を止めてしまうと、笑顔を浮かべていた筈のダーリンの顔が怪訝そうな物になる。それを曖昧に誤魔化し、手を振りながら彼女に近付くと、違和感は尚更強くなった。

「うん、久しぶり。Metaton、凄い人気になったね」

そう言つて、ダーリンは笑顔を浮かべる。

その笑顔を見て、漸く私はダーリンの違和感の正体に気付く。

「……まあ、僕だからね！ 地上でも人気になることは分かってたよ」

話を続けながら、僕はAlphysに取り付けて貰った右目のスーパークメラを密かに起動し、ダーリンの身体や様子を良くスキャンする。

「あはは、変わってないみたいで安心したよ」

「変わる？ この僕が？ そんな事しないよー！ 僕は僕であつてこそなんだからね
！」

高性能なこのカメラのお陰で、直ぐにスキャンは終了し、僕の中の知識に基づいてそれを考察した結果、ダーリンは……疲労している事が判明した。

ファンデーションで隠してはいるけど、目元に隈がある。髪の毛の艶も無くなっているし、肌の調子もあまり良くない。何より、全体的に少し痩せてしまっている。総合的に考えて……あまり睡眠が取れていないのかな？ ……ダーリンの事だから、もう一人のダーリンの仕事もしてそうだし……かなり、無理をしてる？

「……………ところでダーリン。話は変わるんだけど……ちよつといい？」

「ん？ なあに？」

スキャン中続けていた世間話を切り上げて、僕はダーリンを手招きする。警戒する事無く近付いてきたダーリンを連れて少し皆から離れ、ダーリンの肩を抱いて耳に顔を寄せ、声の音量を小さくして、内緒話をするようにダーリンに訊ねてみる。

「……………ねえ、Frisk。大丈夫？」

「えっ」

僕の口から出た言葉に驚いたのか、素直に耳を貸したダーリンの口から、そんな言葉が溢れた。

「僕の見間違いじゃなければ、ちよつと痩せたよね？ 無理とか、してないよね？」

僕が続けてそう問えば、ダーリンは更に目を丸くし、そして……

「……………うん、大丈夫。無理なんて、してないよ」

『笑顔』を、浮かべた。

誰よりも明るくて、それでいて……誰も、その笑顔の裏に気付かせないような笑顔を。

僕が『私』の時に良く使っている笑顔だったし、何より———何処かで良く見たことのある笑顔だったから、直ぐに分かった。

「……………へえ、そう。ならいいんだけどね」

ダーリンはあまり自分が疲れている事を周りに知られたくないらしいと察し、僕は直ぐに引き下がり、肩を抱いていた手を離れた。

「……………あーあ、折角なら王女のダーリンにも会いたかったなあ。元気にしてる？」

「え、Chara？」

『スキャンダルだ』とか言われないようにダーリンから一歩分離れ、テレビには滅多に出ない王女のダーリンの話題を振れば、ダーリンの目が泳ぐ。

「……………あれ、もしかしてそこまで元気じゃないの？」

その反応に思わずそう問えば、ダーリンは少し迷うように目線を彷徨わせ、小さく頷いた。

「うん。……実の事を言うのと、最近、あんまり元気ないんだ」

そして、ぼつりと、言葉を溢す。

「何か思い詰めてるみたいで、何だか返事は上の空な時があるし、ふらつと何処かに出掛けたら帰ってくるのは遅いし……どうしたんだろうと思つて訊いてみても、答えてくれないし……仕事はきちんとしてくれるから、尚更心配でね。昔から秘密主義な所はあったけど、何だか最近のCharaは、目を離れたら直ぐにどっかに行っちゃいな感じがする」

そこまで言い切ると、ダーリンは、ママの言う通り思春期なのかな、と溜め息混じりにそう締めくくった。

「ふーん……あのダーリンが、ね」

その話を聞きながら、私は王女のダーリンは思春期ではないような気がした。

……あのダーリンが思春期になるわけないというかなり勝手な決めつけと、本当に何となく思ったただけだから、根拠はないけどね。

「…………じゃあ、王女のダーリンを元気づける為にも、今日の撮影頑張らなくちゃね！
という訳で、今日はよろしくね、ダーリンッ！」

手を差し出し、最後にウインクをつけながらそう言えば、ダーリンは目を丸くしてから、笑って頷いた。

「うん、そうだね。よろしく、M e t t a t o n」

そして差し出した僕の手を握り、僕を含めた地下モンスター皆が大好きな、あの決意に満ちた笑顔を見せた。やはりダーリンにはこの笑顔の方が似合うな、と思いながら、僕はダーリンの手をひいて、スタッフ達のもとに戻ろうとする。

「…………あ、そうだ。この際だから言っちゃおう」

ふと、ずっとタイミングを逃して言えなかったことを言ってしまったおもうと思ひ立ち、立ち止まって、ダーリンに振り返った。

「あの闘いが終わったあと、Alphasに僕の家の鍵を返してくれてありがとうね。
……………お陰で僕は、またBlookyとやり直す事が出来たよ」

にっこりと、笑ってそう言えば。

「……………え？」

ダーリンは、目を丸くした。

「……………はあ……………疲れたあ」

三時間にもなる撮影を終え、ダーリンとの別れを惜しみながらも別れ、野暮用を済ませてから地下へと戻ってくる。スターとしての仮面を脱ぎ、切り替えていたスイッチを

戻す。ボン、という音を立てて、身体が箱形へとまた変わっていく。地下で僕が負けた戦いから改良されて、人間形態でも電力を抑えられるようにはなったけど……やつぱりキツイ。

……だけど、今はそれもどうだっていい。

僕は研究所への道を急ぎ足で辿る。やつと研究所に戻ってくると、明かりは着いておらず、Alphysがまだ帰宅していない事が直ぐに分かった。

少しイライラしながら、Alphysの帰宅を待つ。……やはり、こうしてどうしても急いで訊きたいことがある時には、別のルートで帰宅すると、訊きたいことが直ぐに聞けないのが腹立たしい。それでも僕より先に彼女は帰らせたはずだし、そこまで遅くはならないだろうけど。

研究所の明かりをつけ、逸る気持ちを抑えつけて、Alphysを待つ。少しすると、研究所の扉が作動し、待ちわびた彼女の姿が見えた。

「おかえりなさい、そしてお疲れ様、Mettaton。今日もあなた、輝いてたわ」

やつと帰宅してきたAlphysが、まず微笑んで労いの言葉をかけてくれる。その笑顔に、正直何度励まされてきたか。いつもなら一言二言僕も言葉を返すのだが、今は

その笑顔に返している余裕さえなかった。

「僕が輝いてるのは当然だとして。ねえ、Alphys。訊きたいことがあるんだけど」

「? なに、かしら……?」

その労いに対する返事もそこそこに、僕は振り返って、Alphysに掌の物を見せる。

「このことなんだけど」

「……………? それ、あなたの鍵よね? それがどうかしたのかしら」

僕が指に引つ搔けた物——ハートのモチーフが可愛い、僕の家の鍵を見て、Alphysは目を丸くし、首を傾げた。

「……………この鍵さあ、誰から返してもらったんだっけ」

僕はこれが自分の物であることを肯定し、撮影中にずうっと気になって仕方がなかった質問を彼女にした。

「えっ、あれ？ 私、前にFriskだって言わなかったかしら……？ それがどうかしたの？」

僕の質問に、Alphysは此方へと進んでいた足を止め、手を頬に当てながらそう答えた。

「うん、確かに言われたんだけどね。」

——それ、本当にダーリンだったの？」

僕は言われた事を肯定し、肯定した上で、質問を重ねる。

「……………えーと……………それは、どういうことかしら」

僕の質問を聞き、Alphysは質問の意図が掴めなかったのか、怪訝そうな顔をしてそう尋ね返してくる。

「そのままの意味だよ、返してくれたのは本当にダーリンだったのかって話」

「……………Friskのはず、だけれど……………もしかして、違ったの？」

僕が意味を説明すると、少しAlphysは考えてから、顔を青くしてそう言った。

「うん、違った。そんな事した覚えがない、つてさ」

「え、や、やだ……………ま、まさか私、王女様と彼女を間違えちゃった…………？」

どうしよう、と顔を真っ青にして呟くAlphysに、僕は

「それも違うよ」

否定の言葉を返す。

「……………えっ?」

その言葉を聞いたAlphysは、更に目を丸くし、僕を見る。

「……………Mettaton、あなた今、『違う』って言ったの?」

「うん」

そして信じられないと言わんばかりの顔で、僕に確認をしてくる。肯定を返し、鍵を指で回しながら見る。

「僕も、じゃあ王女のダーリンの方かなって思っ、王女のダーリンに確認の電話しにいったんだよ。スタジオから帰る前に『野暮用があるから先帰って』って言ったのはそういうことね。……………そうしたら、」

私はそんな事をした覚えはない

「……………って、言われちゃったんだよね」

僕が言葉を紡ぐ毎に、Alphysの顔がみるみる内に驚愕で染まっていく。

「……………えっ、いや、そんな筈がないわ！　だって、私は彼女が私に鍵を投げて寄越したのを、ちゃんと覚えているもの！」

そして、信じられないのか、首を横に振りながら、そう少し声を大きくしてそう言った。

「……………Alphysの記憶だと、そうなってるんだよね？　僕もそう聞いたからそう言ったんだけど、王女様は『そもそも私は鍵なんて持ってなかった』って言うんだ」

「……………そ、そんな……………嘘よ、きつと彼女が照れてるだけだわ！」

「うん、正直僕も嘘だと思いたいよ。うっかり二人を間違えたとかならまだしも、Alphysがそんなつまらない嘘を吐く筈が無いのにそんな答えが返ってきたんだから。でもさ、電話越しのダーリンは、嘘を吐いてるような動揺の仕方じゃなくて、本当に知らないような、初めて聞いたような様子だったんだ」

愕然とした様子のAlphysに、心の底からの同意を送る。

……………今だって、信じられない。

電話越しに聞こえた、本気で知らないと訴える声が告げた言葉が。

Alphysも研究者という職業柄な為に記憶力はとても良い方だし、ダーリン達だって、まだ子供だったとはいえ記憶が薄れることはあるだろうけど、忘れることはない筈だ。例え忘れていたとしても、『ああ、あれか』と彼女なら直ぐに思い出す筈。

——
なのに。

どうして、記憶が食い違うなんて事が起きている？

「……………こんなの、可笑しいよね？ だから、Alphys。失礼を承知でもう一回聞かせて。」

僕に鍵を返してくれたのは、本当に『ダーリン達』？ それとも——別の、『誰か』だったの？」

目の前で顔を真っ青にして固まっていたAlphysが、僕に視線を寄越す。

そうして口を何を言うでも無くぱくぱくと動かし、何とか言葉を紡ごうとする。

……………衝撃が大きいのか、その口から言葉らしい意味を持つ言葉は出て来ない。

暫くの間待つてみたが、Alphysの口から何かが語られることは無かった。「あだとか「う」だとか、そんな単語にすらならない音を発して、彼女は俯いて口を閉ざしてしまおう。

「……………ねえ、Alphys。お願いだよ、答えてよ」

何時もの僕なら、彼女が話すか、『話したくない』と言うまで待つのだが、自分が思うより余程焦っているのか、自然とそんな言葉がスピーカーから溢れた。

「君が答えてくれないと、僕は……………『お礼を言うべき人』が誰だか、永遠に分からないままなんだ」

続けて、自分でも信じられない程弱々しい言葉がAlphysに向けられる。その言葉聞いてか、Alphysはぎよつとしたような顔で、僕を見た。

「この鍵を返してくれたから、僕はBiologyと従兄弟でいられるんだ。二度と、彼とは従兄弟としての道を歩めないと諦めていた僕に切欠を与えて、『彼と別れたくない』つ

て嘆く僕の中で燻つてたH a p p y s t a b l e を救ってくれた……僕にとって、とんでもない大恩人なんだよ。

……それなのに、その人にお礼の一言も言えないだなんて、絶対に嫌だ……！」

ぎゃり、と。

金属同士が擦れる、嫌な音が僕の固く結んだ手から聞こえる。

いつの間にか、鍵を握り潰してしまいそうな位握り締めていたらしい。

「鍵を返してくれたのが彼女達じゃないのなら、僕は一体、誰に『ありがとう』って伝えればいいんだよ……！」

A l p h y s が、何か言いたげに口を動かそうとして、閉ざすを繰り返しているのが分かる。

「ああ……あの時言いそびれたあの言葉だってそうだ。本当は、僕はずっと前から王女のダーリンに言いたかったんだと思っていた。だけど違った。呼び出して会った瞬間に解ったよ、『僕が友達になってほしいのはこのダーリンじゃない』って！」

「Mettaton、あなた、何を言っているの……？」

気が付けば、自分の中に閉じ込めておこうと思っていた想いが飛び出ていた。

そう。

僕は、ダーリンに友達になってほしかった。

でも、僕があの時、本当に友達になってほしかったのは。

「——あの子じゃない。絶対に違う、違うんだよ……」

僕のこの身体のメモリーは、彼女だったと完璧に記録してある。なんなら、映像記録

だつてある。

—— だけど。

僕自身は、『違う』と否定していた。

記録されたそれを、信じられなかった。

「僕がほんの一瞬だけ垣間見たあの人はあんなに幼い子供じゃない、あんなに高い声じゃない、あんなに小さくない！ 全部全部、何もかもが違う!!」

気付けば、叫びだしていた。

僕が感じていた全てを。

「僕が唯一誰よりも憧れて、誰よりも友達になりたいって焦がれて、誰よりも一心に愛し

合える存在がいるのを妬んだあの人は、あの子じゃない!!!」

誰に何と言われても認めない。絶対に認めてやるものか。

あの子はあの人じゃない。

僕達敵対するモンスターに冷たくしておきながら、僕達を赦したあの人じゃない。

どんなに辛くても痛くても、無理矢理笑顔を作って立ち向かってきたあの人じゃない。
い。

——涙を流してまで大事な存在が傷付くのを恐れたあの人じゃない。

そうじゃなきや、

——『どうして、あの子ばかりが、殺されかけなきやならないんだ』

この貼り付いて消えてくれない声は、一体誰のものなんだ!?

「……………ねえ、教えてよ、Alphys。僕とは違って、カメラでダーリン達の旅路をずっと見ていた君なら、分かるでしょ…………？」

一度、感情の全部をしまい込んで、僕は再度Alphysに尋ねる。

「ダーリン達の選択に喜んで、叫んで、傍で支えた君なら、答えられるでしょ…………!?

僕と命懸けで闘って、何度も傷付いてでもダーリンを守ろうとしたあのヒトが誰だったのか、分かるでしょ!?

答えられる筈でしょ、ねえ!?

Alphysとの距離を詰め、縋りつく。

「お願いだから答えてよ!! 答えてくれれば、僕も『きつと気の所為だ、僕の勘違いだった』って笑って忘れられる筈だからさあ!!」

僕がもし人間だったのなら、きつと今頃泣き出している。

それぐらい、僕の感情は今暴走していた。

「あの子があの人じゃないなら、僕は一体誰に謝ればいいのか!? 『何度も傷付けてごめん』って、言いたかったのに!! 何度も何度も許してもらえるまで、謝りたかったのに!! その後に『友達になってよ』って続ける筈の言葉を、誰に言えればいいの!? どうしようもないくらい話したいことがいっぱいあるのに、誰にそれを話せばいいのか!? それにきつと鍵を返してくれたのはあの人なのに、お礼さえ言えないだなんて……!! 可笑しいじゃないか!!!」

色んな感情がごちゃごちゃと混ざり合って、自分でも何が言いたいのかが解らなくなってくる。

僕が友達になってほしかったのは誰か。

僕が嫉妬したのは誰か。

抱いていたものをただ言葉に当て嵌めて口に出しているだけの喚きを、僕は続ける。

それでも、ずっと微かに抱いて、消えかけていたこれを吐き出してしまわなければ……もう二度と、あの人の存在を、感じられなくなってしまうような気がしたから。

口に出す。吐き出して、この想いを無かった事に出来ないように、記録する。

一字一句、自分の本当の感情を忘れてしまわないように。

「……………頼むよ、Alphys……………」

一頻りどうしようも無かった全てを吐き出して、僕はもう一度Alphysに懇願し、聞き出そうとする。

「……………僕を、救ってくれたのは……………いったい、だれ？」

逃げられないように彼女の片手を両手で包み込み、握る。

信じられないものを見るような目で僕を見ていたAlphysは、手を握られたことで逃げられないことを悟ったのか、顔に冷や汗らしきものを浮かべて思案する素振りを見せる。

「……………違う、って……………そんな筈が無いわよ。だって、あの人は……………私の嘘を見透かして、その上で行動していた、あの人は……………」

ぼつぼつと、冷や汗をかきながらAlphysは、僕の我ながら支離滅裂な言葉を否定しようと、口を動かす。

「……………あ、れ。」

その口が、不意に止まった。

「……………いや、そんな、嘘よ、そんな筈が無いわよ……………」

何かを否定しようと、首を横に緩く振る。

「だって、あの人は……………私と、Undyneの恋を助けてくれたのよ。そうよ……………あの、人は……………」

そして。

最後には。

ただただ茫然とした様子で、たった一言。

「……………『誰』、だったかしら」

そう、呟いた。

そんな呟きを聞く僕の耳には。

—— 『いいえ、姫。あなたがそう言って涙を流してくれるだけで、私は勇気が出るのです』

たった一度だけの共演の時にかけられた、あの台詞が聞こえたような気がした。

Epilogue of Alphys

【Alphys】

「——Alphys、Alphys！」

「へっ!？」

自分の名前を呼ばれる声に、ハッと我に返る。声がした隣を見ると、皆のヒーローであり、私の恋人であるUndyneが此方を見ていた。

「次はどれを見るんだ!？」

「え……………次……………?」

彼女の言葉に思わずそう返すと、Undyneは小首を傾げた。

「え？ だってもう終わったしな」

「えっ」

テレビの方を見れば、先程まで見ていたアニメ映画のスタッフロールが流れている。どうやら、私がぼうつとしている間に終わってしまったみたいだった。

「いやー、Alphysの言つてたとおり、本当に泣ける映画だったな！ 特に、あの最後に主人公の飼い犬が……………」

感情豊かな彼女はやっぱりこれを見て泣いてしまったのか、少し目元を赤くしながら、それでもいつものように笑顔で映画の感想を話し出す。所々共感できる所に「わかる」と返したりしていると、ふと、Undyneがこう言った。

「……………FriskとCharaもくれれば良かったのになあ」

ぼつり、と、何気無く咳かれたこの場には居ない我らが親善大使の名前に、思わず肩が跳ねた。

………実を言えば、今日は本来、地上にあるU n d y n eの家に集まって四人でぐだぐだとお菓子を食べたり、映画をみたりしようと約束していた日だった。だけど、突然二人に親善大使としての仕事が入ってしまった、と今朝電話があつて、U n d y n eと二人つきりになってしまった。どうしても抜けられない大事な仕事らしく、ごめん、と何回も謝るF r i s kの、電話越しの疲労感が滲む声はとても申し訳なさそうだった。

「そうね……。でも、二人が親善大使として私達モンスターと人間を繋いでいてくれたからこそ、私達はこんな風に人間の映画を見たり、働いたりできるんだから、我が儘は言えないわよ」

一度傍にあつたりモコンでテレビの電源を落として、U n d y n eと会話する。

「そうなんだけどなー……。あいつら、ちよつとぐらい休んだつていいんじゃないのか？
私はあれはどう見ても働き過ぎだと思ふんだが。なんだっけ、あの、わー……。わー
………」

「………ワーカーホリック仕事中毒？」

「ああ、それぞれ」

単語を思い出せず、言葉に詰まったUndyneに、話の流れからしてこれかな、と思つた単語を投げ掛ける。どうやら口に出したそれで合つていたらしく、彼女は勢い良く頷いた。

「それになつてゐるような気がするんだよなー。Charaも勿論だが、特にFriskの方が。何か……こう……：……：上手く言葉にできないんだが、自分を追い詰め過ぎとか……いや違うな、仕事に逃げてるというか……：……：」

うーん、と自分が言いたいことに相当する上手い言葉が見付からないのか、首を捻つて考え込むUndyneを他所に、私は自己嫌悪で彼女から視線を逸らし、床を見る。

——『会えなくて良かった』と思っっているだなんて、純粹に二人を案じる彼女に
言える訳が無かった。

……いや、厳密に言えば私も会いたいし、二人を労ったり、お菓子を食べてゴロゴロ
しながらアニメを見たかった。

でも、それ以上に……二月前のMetatonとの話が、私の中に残り続けて消え
てくれなかった。

結局あの後、私はMetatonの問いには答えられずに、黙り込んでしまった。
付き合いの長いMetatonは私が一旦黙ってしまったらもう切っ掛けがない限
り答えられない事を分かっている。少しした後、『もういいよ』と言って手を離して話を
切り上げ、眠りについてしまった。

それ以来、もうその話自体していなかったかのように話していないのに……どうして
も、私の中に残っていた。

「……………」
「Alphys」

ふと、優しい声に現実引き戻される。ハツとして顔を上げ、Undyneの方を見ようとした時、いつの間にか握り締めていた手に、水掻きのついた美しい青い手が優しく乗せられた。

「えっ……!? ど、どうしたのUndyne……?」

触れあうひんやりとした体温に思わず声が裏返った。その手の持ち主であるUndyneの方を見れば、真剣な瞳で此方を射抜かれ、どきんとソウルが跳ねる。

「どうしたの、じゃないだろう。……また、何か考え込んでるな」

疑問系ではなく確信を持った言い方で、Undyneはすつと目を細め、そう言った。

「えっ、あ……」

思わずその目から目を逸らしてしまうと、はあ、という息を吐く音がする。そして、

「わっ、ひゃっ!？」

突然手が引かれ、つられて体が倒れる。ぽす、という音ともに、体が少し低い温度に包まれる。背中に回されたものと、魚のような匂いが鼻を擦って、そこでやっと、Undyneに抱き締められているのだと気が付いた。

「え、えっえっ!?! 何を……」

抱き締められているのを自覚した瞬間、顔に熱が集まっていく。慌ててどうしようかと思考を巡らせていると、背中に回っていたひんやりとしたものが、頭に乗った。そのままそれが、スライドするように動く。……つまりは、彼女は私を撫で始めた。

「あ、ああああ、Undyne!？」

「Alphys」

キヤパオーバーしかかっている頭の上から、彼女の低い声が降ってくる。

「……………なあ、Alphys……………話してくれないのか……………？」

その声が、何処か悲し気な色を含んでいるのに気がついて、ずき、とソウルが痛んだ。

「あたし、そんなに頼りないかな……………？」

「！ い、いいえ！ そんなことはないわ！」

思ってもいない事を言い出したUndyneの言葉を、咄嗟に否定する。

「じゃあ、なんでなんだ？」

「……………そ、それは……………」

続けて追求してくるUndyneの言葉に、思わず吃つてしまう。

「……………だ、だって……………話したら、きつと……………幻滅しちゃうわ」

私が何とかそう言うと、はあ、とまた空気を吐き出す音がした。

「あのなあ、Alphys。あたし達は恋人なんだぞ？　あたしはな、例えどんなA I P h y sでも好きだし……………あ、愛してるんだぞ」

『愛してる』

耳を刺激したその言葉に、また顔が熱くなるのを感じた。

「……………だからさ、Alphys……………お願いだから話してくれ。もう二度と……………お前に何かを抱え込んでほしくないんだ」

その言葉に、Undyneに自分の罪を打ち明けた時の事を思い出した。

そんな事を隠してたのかって驚かれて、それでも好きでいてくれると約束してくれた、あの日。

——信じて、いいんだろうか。

本当に、嫌いにならないでいてくれるのか。

私の中に未だに渦巻くその考えを……まず、口に出してみることにする。

あの日、Papyrusに言われた『不安はまず素直に口にする』ということを、実行してみる。

「……本当に……本当に、嫌いにならない？」

「ああ、勿論だ」

どうすべきか分からなかった両腕をUndyneの背中に回し、抱き付いてそう問

うと、Undyneは迷わず即答してくれた。

その返答一つで安心してしまう私は、とんでもなくチヨロいんだと思う。

「……………あのね、Undyne……………私、悩んでいることがあるの……………」

息を一つ吸って、私はUndyneに心の内を口にする。

「うん、どうしたんだ、Alphys?」

Undyneは私のペースに合わせて急かさずに、抱き締めたまま優しくそう聞き返してくれる。

「私ね……………今、FriskとCharaの二人に会いたくないの」

「それはまた、どうしてだ?」

正直な気持ちを言うと、Undyneは直ぐに聞き返してくる。

一瞬、今更ながら言うのを戸惑ったけど……それでも話すべきだと思い直して、続きを口にする。

「ええつとまず……Undyne、あなたは……今まで生活してきて、違和感を感じたことはない……？」

「は。……違和感……？」

「ええ」

私の話の切り口が予想外だったのか、Undyneの声が訝しげな色を含む。

「違和感って、例えばどんなだ？」

「例えば……そうね、自分の記憶が、何処か矛盾しているとか……誰かの記憶と食い違ってる、とか……」

「……………ええと、つまり……………どういふ事を言いたいんだ？」

「顔を見上げると、先程の話からどこがどう繋がるのか図りかねたのか、困惑した様子のUndyneがそう聞き返した。」

「あのねUndyne、まず前提として、Metatonとこんな事があつたの」

———そこから私は、二ヶ月前にあつたMetatonとの会話の詳細を話した。

Metatonと親善大使二人の間で、有り得る筈の無い記憶の食い違いが起こつていたこと。

そして……………忘れてしまっている『誰か』が居るかもしれないこと。

全部全部、白状した。

話していく毎に、Undyneの青い皮膚の顔が少しずつ、蒼白くなっていった。

「……………おい、それってつまり……………私達の記憶がどっか可笑しくなってるかもしれない、ってことか?」

「……………そういうことに、なるのかしらね」

話しているうちに、Undyneと目線が合わなくなってしまった。

「それでね、Undyne……………ここからが本題なんだけどね。私が二人に会いたくないのは……………怖い、からなのよ」

「……………怖い?」

投げ掛けられた言葉に、私は頷いた。

「研究者としては、その事象に興味がない……こともない、けどね……私、Alpha sというモンスターとしては……恐くて、しようがないの。」

だ、だって、その『誰か』がいない記憶こそが、貴女や二人、皆との大切な親愛の証だった。ついでだからぶつちやけちやうけど、今私が此処で生きて居られる、揺るぎない希望だったのよ。それなのに……それが間違っているかもしれない、なんて……」

私の心情を聞くUndyneからの返答はない。

過去に縋りついて、生きていく糧にしていた私を、軽蔑しているのかもしれない。

そう思うと、顔が上げられなかった。

「今だってその人の事が、思い出せないのに……でも確かにね、Metatonのあの感情のままに叫んでいた支離滅裂な言葉で、記憶の中の何かがぐらついてきているの。何処からか湧き出てきたどうしようもない違和感が、泥のようについてしまって、いくら拭いても落ちないのよ……」

Met t a t o n が眠りについてしまった後、私は一生懸命記憶を思い出して、思い出して思い出して、その日の日記につけた出来事と照らし合わせて、何度も間違いがな
いか確認した。

矛盾点なんて、一つも無かった。

——
なのに。

何故か。

あの日、C h a r a 様にかけていただいた言葉と共に聞いた筈の音が、笑顔が。

思い、出せなかった。

「それに気付いた瞬間、アニメでよくある展開だ、なんて、最初は現実逃避して……そんな不明瞭な違和感何時しか消えてくれると考えないようにしていたけれど……消えてくれなんてしなかった。それどころか、意識しすぎて自分の記憶と気持ち矛盾して、

頭がこんがらがって、更におかしくなりそうなの……っ」

最後は、こんな事をぐだぐだと考えている自分が情けなくて、涙が出て来てしまう。

「……………Charaだけ、か？ Friskは？ 何ともないのか？」

やっと反応を返してくれたUndyneに、私は頷いた。

「ええ……………Friskは、何ともないの。どんな顔だったか、どんな調子だったか、直ぐに思い出せるの。Chara様だけ、Chara様だけのよ……。霧に塗り潰されて、見えないの。そこに居るのは間違はなくChara様のはずなのに、霞んじやつて見えないの……声も、どんな調子で話していたのか分からないの……」

なのに、当たり前のように私の宝物記
憶はそう示している。

そんな矛盾を突き付けられて、私は……………どうすることも出来なかった。

「でも、こんなことを皆に話そうものなら、確証もないから悪戯に皆を混乱させるだけでどうにも出来ないし……………もし初代王国直属研究者のあのモンスターがいたら、話は別だったかも知れど……………どうしようも、無くて……………」

狼狽えて、どうするべきなのかも分からなくて。

ただそこにある記憶と『違う』と叫び出したくなる矛盾した気持ちは大きくなるばかりで。

本当に、頭が可笑しくなりそうだった。

「……………この状態のまま、もし、二人と顔を合わせでもしたら。それこそ本当に、どうにかなってしまうような気がするの。感情のまま叫んで、あの二人を傷付けてしまうような気がするの……………私が今まで信じてきた、二人の後押しでUndyneと結ばれて、罪から目を逸らさず向き合ったという私の記憶が、決意が全て播らいで、消えてしまうような気がするの……………」

だから…………『二人に会いたくない』、だなんて思ってしまうの。

結局私は、あの日からずっと変わってないのよ……!」

………そうだ。

私は、変わってない。

——『「他人」に許されたからといって、「自分」に赦される訳じゃないんだ
『よ』

脳裏に浮かんだその言葉に、思わずその通りだと言いたくなる。

結局私は、『自分』を好きになれそうには無いから。

逃げてしまうのをやめられない。

知らず知らずの内に、溜まっていた涙が零れ落ちて止まらなかつた。

「……………Alphys。Alphys。……顔を、上げてくれないか」

沈黙が流れる中、Undyneの冷たい手が私の涙を拭い、上からそんな言葉が聞こえる。言葉の通り上を向いて、

「……………そつか……………お前らも、だったのか」

「……………え……………?」

Undyneがそう言つて安堵したような顔をしたのに、驚いてしまった。

「……………取り敢えず、今の話を聞いてあたしが言いたいことは三つある。一つ、過去を希望にして生きていくのは別に恥ずかしいことじゃないと思うぞ。それどころか、そんなに大切にしてもらえてあたしは嬉しい。二つ、お前は変わつてない、なんて言つたがそんなことはない。あれ以来お前は確実に明るく、自分の気持ちに正直になった。以前

なら、きつとこの話も話してなんてくれなかっただろうしな」

「え、そ、それは……確かに………」

「だろ?」

前置きしてから告げられた言葉に、確かに以前の私だったらそもそもこの話をしていなかったかもしれない可能性を否定しきれず、思わず頷いてしまう。それにUndyneは微笑み、顔を近付けてきた。私の額に彼女の額をこっふん、と宛てられ、至近距離で黄色の瞳と見つめ合うことになる。

「三つ目。……実はなAlphys。私にも、その矛盾があるんだよ」

「えつ、Undyneにも!?!」

「ああ。とは言ってもつい最近気付いたんだけどな」

その状態のまま口にされた言葉に、至近距離で見つめ合っていることによる羞恥より先に驚愕が来た。驚いている間に、Undyneはまた私の背中に手を回した。

「……………私さ、Charaに怒鳴られた事があるって話は、前にしたよな」

「えっ？ ええ、聞いたわ」

突然の質問に驚いたけれど、肯定する。確か……………そう、何時しかこんな風に二人でデートした時。内緒話をするように、小声で教えてくれた。

「驚いたわ、いつも冷静沈着なChara様が怒鳴ったって聞いて」

「……………そこなんだよ」

「へ？」

そこ、とはどういうことだろう。一瞬話が繋がらず、間拔けな思考が過った。

「違和感を感じるのがそこ、つてこと？」

「そうだ」

私なりに考えて辿り着いた予想を訊くと、肯定が返ってきた。

「正直、あたしはCharaがあの場合で怒鳴るような人間には思えないんだよ」

ぼつり、と。

Undyneは彼女が感じていたのだろう『違和感』を話し出す。

「ソウルを王子に半分渡しちまった、つてこともあるかもしれないが、あいつは……………なんか、こう……………」

上手い言葉が見つからないのか、Undyneはあー、とか、うー、と唸る。

「何というか、な………確証は無いんだが。お前が感じているものと同じく、記憶の中のあいつとは、決定的に何かが違う気がするんだ」

だから、と彼女はまた私と目を合わせて、私の大好きな笑顔を浮かべる。

「怖がらなくていいんだぞ！ あたしだってかなり気味悪く感じてるし怖いんだ、その反応が当たり前だ!!」

背中に回っていた腕がまた頭に乗る。今度は先程の優しい撫で方ではなく、豪快に掻き回すような、わしゃわしゃという擬音が似合う撫で方で、撫でてくれる。

「わっ、ちよつと、Undyne、でも……」

「NGAAAAA!!! あーもう焦れたいな!!!」

「わひやつ!?!」

それでも私が意見を述べようとすると、Undyneは口癖を吐き、抱き付いた体勢から一転、私の肩を強く掴み、私の目を真っ直ぐ見る。

「この際だから言わせてもらおうけどな、前から思ってたけどお前ちよつと良いヤツであろうとし過ぎだな!! どんなモンスターや人間だつて悪いところなんてあつても当然なんだし、今は会いたくないなつて思う時ぐらい誰にだつてあるんだから、ちよつとそう考えただけでそんなに落ち込むな!! そんな所も好きだが、ただでさえ事情が事情なんだし、そんなに自分を追い詰めるんじゃない!! いいな!？」

「は、はいいつ!!」

Undyneの言葉の勢いに圧されて、思わず反射で返事をしてしまう。その返事に満足したのか、Undyneは笑む。

「よつし、じゃあ一旦この湿っぽい話は後に回そう!! 今はせつかく二人きりのデートなんだ、楽しいことをしよう!! ダメか!？」

「だ、ダメじゃないです!!」

がくがくと体を揺さぶられながらも何とかUndyneの言葉を否定すると、彼女はより一層笑みを深め、私の肩から手を離れた。

「それじゃあAlphys、見たいものを選べ!!」

私有家から持ってきた積んである厳選ビデオ達を指し、Undyneは私にそう言つて、背中をばん、と強く押した。叩かれた勢いで座っていたソファーから転げ落ち、ビデオの山の前まで転がる。勢いで肺に入っていた空気が抜け、一瞬呼吸が乱れた。

「げほっ、えほっ、あいたたたた……う、うーん、どれがいいかしら」

——それでも、彼女なりに私を慰めて、元気付けようとしてくれているのだと思うと、この痛みさえ嬉しかった。

嬉しさと幸福にニヤけそうになるのを堪え、私はビデオの中から見たいものを選び出す。

……………そうだ、これにしよう。魚人のモンスターであるUndyneも、これを気に入る筈。

「ああ、これなんかがいいんじゃないかしら」

そのビデオを手に取り、レコーダーにセットする。そしてUndyneの隣に座って、リモコンでテレビの電源をつけ、再生ボタンを押した。

「……………う、わあ……………」

本編が流れ出した瞬間、Undyneの目はテレビに釘付けになっていた。

——優しい音楽とともにテレビに移るのは、美しく、青く澄んだ海の中。

以前 Frisk が、見たいと言っていた作品だった。

魚人である Undyne は舞台の美しい海に思うところがあるようで、画面をじいつと、息を飲んで見つめている。

キラキラと黄色い瞳を宝石のように輝かせながらアニメを見る Undyne の可愛さに、思わず悶えそうになるのを堪える。

「……………ねえ、Undyne。今度、休みが取れたら……………近場でいいから、海に行きましようよ」

「えっ!？」

そして、気付けば、そんな事を口走っていた。

「これはCGだからこそその美しさだから、本物の海はこれより綺麗じゃないかもしれないわいけど……………でも、貴女と一緒にならきつと何をしてても楽しいわ」

だめかしら、と勢い良く此方を向いた彼女に訊けば、Undyneは目をぱちくりと瞬いてから、にっと笑い、がばつと抱き付いてくる。

「わあっ」

「ダメなんかじゃない、いいに決まってるだろ！ 絶対、絶対に海に行こうな！ 約束だからな!!」

「……………ふふふ、ええ、約束よ」

嬉しさのあまりか念押ししてくるUndyneの紅い髪が揺れるのを見ながら、私も抱き締め返して、頷く。

そんな事をしている内に、気付けば、私の中で溜まっていた淀みのようなものが、すっかり消え失せてしまっていた。

—— やっぱり、Undyneは私の一番のヒーローね。

ありがとう、
Undyne。
私、
また貴女に救われちゃったわ。

——『いつか君が、その罪を乗り越えて、受け入れて生きていけるようになるのを、祈ってるよ』

……誰かの安心したような笑顔が、一瞬だけ、鮮明に脳裏を駆けていったような気がした。

E p i l o g u e o f U n d y n e

〔U n d y n e〕

カチ、カチ、カチ

静かな部屋の壁にかかっている魚を象った時計の針が、着実に進んでいく。そろそろか、と思つて、あたしは中身を飲み終えたカップ片手に部屋から出て、リビングのシンクでそれを洗う。長いこと使っている愛用のカップを綺麗に洗い、水気を拭いて戸棚にしまった。

トントントン

丁度戸棚の扉を閉めたその瞬間、元気なノックが聞こえた。来たか、と思つて玄関に向かい、ドアを開けてやる。

「UNDYNE! 来たぞ!」

「おお、良く来たなPapyrus!」

縦にドアが開けば、いつも通りに時間ピッタリに来たスケルトン兄弟の弟の方——
——Papyrusが、手提げを持ってそこに居た。

「まあ、上がれよ」

中に入るよう促し、Papyrusを招き入れる。ドアを閉めてロックを掛けたことを確認してからPapyrusに向き直る。

「なあ、UNDYNE! 今日は何を作るんだ!? 『当日まで秘密だ』って言われて俺様、
楽しみで楽しみで仕方なかったんだ!」

地下世界に居たときから続けている、今日の訪問の目的である料理教室のメニューを、わくわくした表情（と言っても骨だが）をしながら訊いてくるPapyrusに、あたしは笑って言う。

「今日はだな、Papyrus…………『カルボナーラ』という料理を作る!!」

『『カルボナーラ』!!? 前にFriskが食べたいって言ってたスパゲッティか!?!』

あたしが言った『『カルボナーラ』』という単語に反応して、Papyrusはそう言った。何時だったかPapyrusとの話した時、親善大使とマスコットとして仕事をしている時にFriskがぼつりと溢したという話を聞いて、これしかないと思ったからだ。

「そうだ!! これを今日中に必ず習得し、Frisk、CharaそしてDreemurr一家とのお食事を開こうとあたしは考えてる。最近、あいつら働きすぎだからならAsgore達を誘えば流石に断らないだろ!」

今日の料理教室の第一目標である『『カルボナーラ』をマスターすること』、そして第二目標の『『お食事会』』の話をすれば、Papyrusは目を輝かせた。

「お食事会!? オーホー!! そりゃあいい!!! ならば完全にマスターしなくてはな!」

こいつなら確実に便乗してくれるだろうなと思っていた通り、Papyrusは笑い、あたしの計画を肯定してた。そしてこの話を聞いて、どうやら俄然やる気になったようだった。

「それじゃあさつそく調理に取り掛かる!! いいな!」

「分かったぞ!!!」

Papyrusが大きく頷いて、エプロンなどの準備を始めたのを見てから、あたしは冷蔵庫を開けた。

「……………ほら、Papyrus。味見してみろ」

「分かったぞ」

ネットから拾ってきたレシピを試作し、あーだこーだ言いながら根気よく試行錯誤を重ねること数回。くつくつと煮えるところとろとしたソースをスプーンで一掬いし、Papyrusに渡して味見させる。スプーンを受け取ったPapyrusは、胡椒の粒が浮かぶ淡い黄色のソースが乗ったスプーンを口に運んだ。そしてそれをぱくりと啜えること少し。

「どうだ?」

「……………美味しい!!!」

味の加減を訊いてみれば、Papyrusは頬に手を当て、目（無いけど）を輝かせながらそう叫んだ。

「これなら二人もほっぺたが落ちちやうと思うぞ!!」

「そうか!! なら、これで決定だな!」

そして、漸くあいつらに食べさせる美味しいカルボナーラが出来上がった。

元のレシピからどれをどれだけ増減したかを正確にメモし、当日もちゃんとしたものを作るようにしておく。

あとは当日のサラダなどのサイドメニューも考えたり、使つてぼこぼこになつてしまった調理器具なんかを片付けたりキッチンをキレイにしたりして、一度休憩を挟む。

「ふー! これでもう料理はばっちりだな!!」

「そうだな」

Papyrusにお茶とお茶請けとしてクッキーを出してやり、自分も席に着いて、熱い内にお茶を一口含む。熱いものが喉を通り過ぎていった。

「クッキー、美味しいな!」

「そうか、なら良かった」

ニコニコと笑いながら美味しそうに食べる Papyrus を見ながら、あたしも一つクッキーを食べる。歯で噛み砕けば、甘い味が口に広がった。

……………そう言えば、あの日も二人にクッキーを出したっけ。

「……………」

不意にそんなことを考えてしまったからだろうか、気を逸らして考えないようにしていた、先日の Alphys との会話を思い出した。

あたしの頭の中ではどうにもあの話が二人と関連付けられてしまったようで、あの二人のことを考えるとそれに引き摺られるようにして思い出してしまうようだ。

……………思い出の中では、Frisk と Chara が仲良く並んで座って、あたしと Asgore が作ったクッキーを頬張ったり、お茶を飲んだりしながら、あたしに視線を向けている。

Friskはまあいい、だが……——あの日のCharaの顔が、どうしても
思い出せないままにいる。

そんなこと、今まで無かったのに。

この間Alphysにも言った通り、酷く不気味だった。

しかも、思い出せないのはそれだけで、他の日にあつたCharaは、普通に思い出
せる。

それが尚更、恐ろしかった。

Alphysの前では何て事ないように振る舞ったけど……本当は、『気付かなきゃ
良かった』なんてらしくも無いことをずっと考えている。

ちらり、と夢中になってクツキーを頬張るPapyrusを見る。

……でも、こんな事、あたしが言うのも何だがバカ正直な Papyrus には話せないし……もしかしたら、ソウルを半分渡してしまったことも関係しているのかもしれない。

そんな現実逃避を何時までも続けて、どうしようもないままにいる。

「……………ニエ？　UNDYNE？　紅茶飲まないのか？　冷めちゃうぞ？」

不意に、クツキーを食べる手を止めて、Papyrus に声をかけられる。それにハッと我に返った。

「あ、ああ、それでいいんだ。流石に熱すぎたからな、ちよっとお茶が冷めるのを待ってたんだ」

「なんだ、そうだったのか！」

咄嗟に言った言い訳に納得したらしいPapyrusは大きく頷いて、またクッキーを一つ食べ、咀嚼し、飲み込むような動作をした。

「それにしても、久しぶりだな！ CHARAに俺様特製のスパゲッティを振る舞うのは！」

「ん？ そうなのか？」

話題提供のつもりか、そんな事を言ったPapyrusに思わず聞き返せば、Papyrusはきよとんとした顔をする。

「ニエ？ 俺様、UNDYNEにその話してなかったか？」

「初耳だぞ」

「あー、そうだったかー……………」

初耳である事を素直に言えば、Papyrusは頬を掻いて、前に振る舞った時の事を話し出した。

「ほら、FRISKとCHARAが落ちてきて、俺様達が地下から解放されたあの日に、俺様も二人と戦ったのは知ってるよな？」

「ああ、勿論だが」

私のテリトリーでもあったWaterfallの一つ前のSnowdinで、あたしに弟子入りらしきものをしてからロイヤルガードの真似事をしていたPapyrusに、『人間を見掛けたら捕まえて連れてこい、そしたら正式に採用してやる』と言ったのを覚えている。

……………流石に『殺してソウルを奪ってこい』、とは言えなかった。

だがそれを律儀に守って巡回していたPapyrusが、あの日人間がやってきたと言って報告してきた。どうしようどうしようと嬉しそうに騒ぐPapyrusにあた

しは捕まえて連れてこいという命令を再度下し、Waterfallで報告を待っていた。暫くしてやってきたPapyrusは、酷くビクビクしていた。いつも自信满满的なPapyrusがそんな風になっているのを見て、驚いた。

話を聞いてみれば、取り逃がしたという話が出て来て、『やっぱりか』と思ったのと同じ時に、酷く苛立ったのを覚えている。

「……………その時、俺様、CHARAを傷付けちゃったんだ」

お茶を一口飲み、Papyrusは悲しそうな顔をしてそう言った。まあ、戦えば傷が出来るのは当たり前だ。

「……………それで?」

あたしも一口お茶を飲み、やっぱりお茶は熱い方が良いな、冷ますと渋くなると思いつながら先を促す。

「……………FRISKを俺様の攻撃から庇ったCHARAは、その場で血を流しながら倒

れちやつて。それで、慌てて俺様はCHARRAを家に運び込んで、手当てしたんだ」

そんなことしてたのか、と内心目を見開く。

もし当時のあたしがそれを見たらどうなっていたことやら、という思考が過った。

「……FRISKと一緒にCHARRAに包帯を巻いて、ベッドに寝かせて……暫く、CHARRAは目を覚まさなくて。その暫くの間に、俺様はFRISKと仲直りして、友達になったんだ。それで、FRISKの案で、CHARRAに仲直りのスパゲッティを作ろうってことになって……」

「スパゲッティを作った、と?」

「ああ! FRISKと一緒に、な!」

当時の事を思い出して何か思うことがあつたらしいPapyrusの顔が、時折暗くなる。これは一悶着あつたな、と思いながら、最後の言葉を引き継げば、Papyrusは大きく頷いた。

「それだな、スパゲッティが完成したぐらいでF R I S Kが様子を見に行つて、戻つてきて俺様にC H A R A Aが起きてるつて伝えてから、道に置いてきちやつた忘れ物を取りに行つてくる、つて言つて出てつちやつたんだ」

別にそこから先の話をして欲しいと言つた訳でもないのに、仲直りの話をしたいらしいP a p y r u sは、饒舌に話を続けていく。

「この間に仲直りしに行こう、つて思つて、スパゲッティを盛り付けて、部屋の前にまで立つたのは良かったんだけどな……顔を合わせていいのか、怖かった」

……まあ、こいつならそうなるよな。

話を聞いて、当然の結果だよな、と何となく思う。

只でさえP a p y r u sは誰に対しても優しくすぎる。直ぐに言われたことを信じるし、誰かを信頼する。良いところでもあるが、弱点でもある。今のところあたしや兄貴のS a n sが防いでいるが、いつか悪い奴に引つ掛かりそうで怖い。

——そんなこいつが、あたしに命令されていたとはいえ、自分の意思で誰かを傷付

けたりしたら当然、罪悪感で一杯になってしまおうだろう。

「ずーっと、許してくれないだろうなって考えながらスパゲッティを持って部屋に入って……CHARRAは俺様が思ってたよりずっとあっさり俺様を許してくれて、その上、スパゲッティを『美味しい』って言ってくれたんだ」

「は……？」

まだあたしの教え方が若干間違ってたあの頃のPapyrusのスパゲッティを、『美味しい』……あの割かし物事をはっきり言うCharaが、か？

……いや、まだソウルが完全だった時だから、そんな事があってもおかしくはない、か。

また違和感が鎌首を持ち上げそうになり、無理矢理理由をこじつけて、押さえ付ける。

「それつきりCHARRAにスパゲッティを作ってくなくてな……いつかまた作りたいなって思ってたんだ!!」

「……………そうか。なら良かった、な」

ニコニコと笑いながら、話をそう締め括ったPapyrusに……………あたしは上手く笑っていられただろうか。

「……………。……………？ あ、あれ」

「？ おい、どうしたPapyrus？」

自分の顔の表情筋の素直さを自覚した上で大丈夫だったのだろうかと思っていると、突如、Papyrusの様子がおかしくなる。

「……………なあ、UNDYNE、CHARAの身長って、今何れぐらいだったっけ？」

「身長？ なんなんだ、突然」

そして突然そんな事を言い出して、思わず驚いて聞き返してしまう。

「いや……………何だかな？ 気のせいかもしれないんだがな？ CHARRAの身長、あの日に近付いてるような気がして……………」

「……………は？」

……………一瞬、Papyrusが言ってることが上手く理解できなかつた。

「……………いやいやいやいや、逆だろ？ 近付いてるってなんだよ？ 遠退いてるだろ、どう見ても」

何を言ってるんだこいつは、と思いながら、そう言えば、

「だよな？ あれ……………？ 何で、そんな事考えたんだ俺様……………」

自分でも自分が言ってることのおかしさに気付いているのか、首を傾げながらPap

y r u s は言う。

「でも……………何か、そんな気がしてな……………？ いやでも、抱き締めてもらった時、C H A R A の身長はもつと……………あれ……………」

頻りに首を傾げながら、P a p y r u s は歯切れの悪い言葉を並べていく。ぶつぶつと呟く言葉の中にちよつと聞き捨てならない言葉が聞こえたような気もしたが、目の前で何かを訝しむP a p y r u s が少し気味悪かった。

……………そこで、P a p y r u s に起きていることが何なのか気付く。

「……………おい、P a p y r u s。お前、まさか……………」

———違和感を覚えてるのか？

「……………抱き締めてもらったのか!？」

続けようとした言葉を、咄嗟に言い換える。

この先を言ったら、『違和感』があることを肯定してしまうような気がして。

言いたくなかった。

「二エツ？」

「どういうわけでそうなったんだ？」

強引に話題を逸らすと、P a p y r u s はああ、と呟いた。

「仲直りのハグだ!! C H A R A がどうしようって気持ちで一杯になっちゃって泣いちゃった俺様を慰めてくれてな、仲直りしようって言って抱き締めてくれたんだ! ああ
の時は俺様にお姉ちゃんが出来たみたいだったぞ!」

「へえ」

ニエヘへ、と幸せそうに笑ってから自分が『泣いちやった』と言ったことに気付いたのか、慌てて言い訳を話し出すPapyrusの言葉を聞き流し、あたしはまた一口お茶を飲み、立ち上がる。

「……………まあ、ともかく！ 今日はこちらまでだ。当日失敗したりしたらヤバいから何回か練習しとくように！ いいな!？」

「ああ、了解だ！」

「よし！ これがレシピだ。では、解散！」

「ありがとうございます！」

そしてPapyrusにレシピを押し付け、お開きであることを宣言すると、レシピを受け取ったPapyrusは荷物を持って、玄関のドアから出ていった。

「……………はあ」

それを見送ってドアを閉めたあと、あたしはもう一度椅子に座って、テーブルに頬をつける。手探りで傍にあるカップを引き寄せ、冷めて渋くなつた中身を一気に飲み干し、机に叩き付けた。叩き付けた時に出た、だん、という音と共に、ばき、という音がしたのは気のせいだと思いたい。

……………しん、と。先程まで騒がしかったリビングが、酷く静かだ。

外で鳴く鳥の声が聞こえるほどには。

こゝも静かだと、物思いに耽ってしまいそうになる。

ぐるりと家の中を意味もなく見渡してみる。

二年前。まだPapyrusの家に居候していて、そろそろ家を建て直さなきゃなどと考えてたあたしに、Friskが『あの日燃えてしまった家を建て直すついでに、地上に住まないか』と提案してきた。地上にモンスターの家を建設したいと言ってくれる会社と契約が出来て、その一号になって欲しいんだ、と言っていた。

あたしは二つ返事でその誘いに乗っかり、燃えてしまったあの家を無理言つて再現してもらつた。そこに、引越してきたわけだ。

引越してきた時の周りの人間達の奇異の目は忘れられないが、近場の子供達と仲良

くなってから、それも緩和した……と思う。

……でも。

この家に居ると、またあの違和感が出てきてしまう。

あたしは目線だけで、テーブルの向こう側を見る。

あたしの家が燃えたあの日。向こう側に座っていたのは、CharaとFriskだ。その筈なんだ。

なのに何故、あたしは……自分が信じられないんだろう。Alphysの言うとおり、頭がおかしくなりそうだった。

……違和感を感じた切っ掛けは、Alphysとデートする数日前に、二人と一緒に映画鑑賞会をするから来ないか、と誘ってくれたからだった。

Alphysがまだ自分のことを好きになれてなかったあの日、Hotlandの道中で、AlphysはFriskにあの美少女アニメを見ようという話をしていたらしい。それが転じて、映画鑑賞会になったんだとか。勿論あたしはOKして、詳しい予定を聞いて電話を切った。

そこまでは良かった。

何となくあの日の事が懐かしくなって、どんなことがあったのか思い返していたら、ふと、引っ掛かったことがあった。

あたしの親友でもあるCharaは、こんなに感情的な奴だっただろうか、と。

別に、Friskみたいに長い間付き合ってきたわけじゃない。だが……あたしが考えるあいつなら、あの場面でなら挑発して、囮に徹するならまだしも、感情に従ってあたしに怒鳴るような真似はしない。怒るなら、あたしの家に来た時が一番最適な場面だったはずなんだ。

……なのに、あたしの記憶では、確かにあいつが怒鳴ってる。憎悪に濡れた目で、あたしを見てる。そこで、『おかしいな』って思った瞬間……

——記憶の中のCharaが、一気に霞んでいった。

言われた言葉は覚えてるのに、どんな調子だったか、どんな顔だったか、どんな背格好だったか。それがどんどん曖昧になって……思い出せなくなっちゃった。

まるで、そこに最初から『Chara』なんて居なかったみたい。

……………なら。

あの日、

——
『ツ!!!』

——『お前らの都合で、あの子の命の価値を、測るんじやねえ』——

あたしに思いの丈をぶつけて、真正面から立ち向かってきたのは。

あたし自身の行動を一度立ち止まって考えるようにする切っ掛けをくれたのは。

……——あたしを親友と認めてくれたのは、誰だったんだ？

あの言葉があったからこそ、あたしは何をするにしてもまずちゃんと考えたりするようになったのに。

ネットとか本とかでちゃんと料理のやり方を知って、Papyrusにもつと美味しい料理を作らせられるようになったのに。

何故、思い出せない。

分からない。

あの日のCharaだけが霞んでいく。

それと同時に——……………期待していた『何か』を、裏切られたような気がしてならない。

例えるなら、ずっと楽しみにしていた約束を無かった事にされたような、そんな気持ち
ちが胸の中を占めている。

誰にもぶつけようのない苛立ちだけが募って、Charaを嫌いになってしまっ
だつた。

どうしてだ？

……………どうして、みんなを、あたしを裏切つた？

いや、それ以前に。

何故、これを未然に防げなかった？

………まだあの日のうちに、こうなるのを防げたんじゃないのか？

だって、あの日確かに、そいつはそこに居た筈なんだ。

あたしと言葉を交わして、槍を交えて、冗談を言い合つて。………『親友』になつた筈なんだ。

防げた、筈だったんじゃない？

そんな空虚な考えが、後悔が。あたしの頭の中を占めている。

「………あああ、くそつ………ヒーロー失格じゃないか………」

思わず誰にもそんな言葉を吐くぐらいには、哀しくて、虚しくて、悔しかった。

——ふと、瞼が落ちかける。

最近こんな事ばかり考える所為か、あまり眠れていない。前までは無かったことだから、今、体が休息を欲しているのが良く分かった。

……もう、考えるのはやめだ、止め。今は、この睡魔に身を任せよう。

あたしにはもう、どうしようもないんだから。

そしてそのまま、あたしは目を閉じる。

からさ』

『君のような誰かの為に戦える優しい人を、亡くすのは惜しいと思った

意識が途切れる、その刹那。

灼熱の中で、あたしに水を飲ませてくれたあいつの声が、聞こえたような気がした。

E p i l o g u e o f P a p y r u s

〔P a p y r u s〕

くつくつ、くつくつ。

地下に住んでいた頃からの俺様愛用のフライパンの中で、最近俺様のレパートリーに入ったソースが煮えている。その隣では、ぼこぼこ音を立てるお湯が入った鍋の中で、パスタの麺が楽しそうに踊っている。茹で時間からしてもうそろそろかと思つて一本掬つて味見してみると、

「なんて美味しいんだ!! 流石はマスターシェフ P A P Y R U S だな!!」

プチプチとした食感——『アルデンテ』、というのだ——に感動しつつ、俺様はお湯をシンクに捨て、パスタを笊に上げる。水をしっかり切ってからボールに移し、皿を二枚用意する。そこに茹でたてのパスタを盛り、ソースを火から下ろして、お

たまで掬ってかける。その次に、その上から胡椒をまぶした。そうして完成したパスタ——カルボナーラは、最高の出来だった。

「出来たぞ!!」

「おつ、旨そうな良い匂いだな」

出来立てほやほやのそれを、椅子に座つてテーブルに突つ伏しているSANSの前に持つていく。つい先程シャワーを浴びてきたばかりで首にかかっているタオルの先がテーブルに乗っている。それを退けてからSANSの前にカルボナーラを置いて、自分の席の前にも置き、顔を上げたSANSにフォークを手渡して席に着く。

「いただきます」

「いただきます!!」

すっかり言う習慣がついたその言葉を食べる前に言つて、カルボナーラを熱々のうち

に食べる。フオークでパスタを絡め取って口に運ぶと、濃厚なソースの味が広がった。

「んんー!! やっぱり流石俺様だな!! ほっぺたが落ちちやう程美味しいぞ!!」

「ああ、そうだな兄弟。まあ、俺達に落ちるほっぺたないけどな。スケルトンだし」

「FRISKやCHARAが食べたらの話だ!!」

パスタを頬張りながら茶化してくるSANSに言い返しておく。全く、SANSは『ものの喩え』ってものを知らんのか!?

「heh, heh……まあそれは横に置いとくとして。本当に美味しいぜ、papyrus。また上達したんじゃないか？」

「……! そうだろうそうだろう!! 俺様の努力の賜物だな!!」

最初からそう言えばいいものの、SANSは茶化して笑った後にそう言った。褒めら

れたことに思わず嬉しくなった。

「これなら確かに *frisk* や *chara* が食べたなら頬が落ちるだろうな」

「何言ってるんだ *SANS*……？ 頬は落ちないぞ？」

「*heh*、そうだな」

さつき俺様が言った『ほつぺたが落ちる』と言いたかったらしい *SANS* の言葉を訂正すると、俺様が言いたいことが分かったのか *SANS* は頷いた。

「……………本当に、成長したな」

「ん？ 常に努力しているのだから当然だ！」

パスタを食べ進めながら、*SANS* はしみじみとそんな事を言った。変な *SANS* だな！

「papyrus、食べないと冷めるぜ？」

「ハツ……!! そうだった!! 俺様パスタ食べてたんだった!!」

SANSに指摘されて慌ててカルボナーラを食べてしまう。少し冷めてしまったそれは、変わらず美味しかった。

「……これなら、明日も失敗しないな」

「ああ、そうだな」

独り言で言ったつもりの言葉に、SANSは頷いた。

……明日。UNDYNE主催のお食事会が開かれる。親善大使としての仕事が入ってしまう前にか約束できたその日を、俺様はずっと楽しみにしていた。

その為に、俺様はUNDYNEに言われた通りに、何回もカルボナーラを練習した。その度にSANSに味見してもらって、誰にだって美味しいって言ってもらえるようなカルボナーラを作り上げた。

一番大変だったのはFRISKとCHARRAの説得だった。王様や女王様、王子様は快く領いてくれたのに、事あるごとに仕事を優先しようとする二人の頑固さに骨を折ったな！でも俺様がどうしてもパスタを食べてほしいんだって一生懸命お願いしたら首を縦に振ってくれたぞ！つまり、俺様がお願いしなきゃこのお食事は開かれなかったのだ!! ニエツヘツヘツへ、凄いだろぅ!?

「……………とここでpapyrus、ちよいと疑問なんだがな」

「ニエ? どうしたんだ?」

残り少なくなった皿のカルボナーラを絡めとりながら、SANSが俺様に尋ねてくる。

「なんでカルボナーラなんだ？　いつも兄弟が作るパスタじゃ駄目だったのか？」

「それはだな、SANS！　前にFRISKが食べたって仕事に言ったからだ！」

「へえ………そうなのか」

何を訊くのかと思えば、そんなことか。何故お食事会で出す料理が俺様が一番得意なトマトたっぷりソースのパスタではなくカルボナーラなのか？　SANSは気になったらしい。

そう言えば、SANSにはこの話はしてなかったっけ？

「前に俺様がマスコットとして二人の仕事と一緒に行った時にな、その街に俺様ぴったりの洒落なカフェがあったんだ！　その時は時間がなくてそこには寄らなかつただけだな、お店の外に出てたボードに『今日のメニュー　カルボナーラ』って書いてあったんだ！　それを見たFRISKが、『久しぶりに食べたいな』って言ったんだ!!」

いつかした会話を思い出しながら俺様がそう言うのと、SANSは納得したように頷いた。

「『久しぶりに』ってことは、最近は何も食べてなかったのか?」

「そうらしいな! FRIISKが言うには、CHARRAが何回か作ってくれたことがあるそうだが……ほら、最近の仕事が忙しい所為であんまりそういうものが食べられなかったから……それで食べたいって言ったんだそうだ」

「……………へえ、あのcharaがな」

FRIISKが話していたことをそのまま話すと、SANSも驚いたのか瞳孔を丸くする。

「俺様も聞いたときは驚いたぞ! 昔はCHARRAが良くご飯を作ってたなんてな! 昔からCHARRAは器用だったのだな!」

「昔から？ ……ワオ、そりや凄い」

だから、FRISKに『美味しい』って言ってもらう為には、俺様は当時のCHARAの作るカルボナーラに負けない、いやそれ以上に美味しいカルボナーラを作る必要があった。まあ？ この一流マスターシェフのPAPYRUS様が作るパスタが？ 負けることは万が一にもないと思うがな！

「……………ふうん。まあ、ともかく。ごちそうさん、美味しかったぜ」

「ニエツ、ああ！ オソマツサマデシタ、だ！」

話しているうちに食べ終わったらしいSANSが席を立ち、空になった皿とフォークを持ってキッチンに向かう。その背を見送ってから俺様もカルボナーラをさつさと食べて、皿を片付けてしまう。

「皿、そこに置いといたぜ」

「ああー！」

すれ違ったSANSの言葉に頷く。全く、皿洗いのひとつでもしてもらいたいもんだ！
……まあ、俺様にしか届かないシンクにしちゃった俺様が悪いんだけどね。

皿を台所に置いて、まず先に使った調理器具の片付けから始める。洗剤をつけたスポンジで頑固な汚れどもを落としていると、ふと騒がしい声が聞こえてくる。きつとSANSがリビングにあるテレビをつけたんだろうな、と思いながら、ちゃっちゃと片付けてしまう。

地下にある家をまるごと移したようなこの地上の家で過ごす日常は、地下に居たときと殆ど変わらない。精々、ご近所付き合いするモンスターが人間になって、窓から太陽さんの光が入るようになったくらいだな！

洗い物を終えて、拭いて、あつた所にしまっていく。それらを片付け終えて、俺様もシャワーを浴びに行く。リビングを通ると、やっぱりSANSがテレビをソファーに

座って見ていた。それを横目で見ながら通り過ぎ、シャワールームに入った。

「お、兄弟、ちょうどいい所に。ほら、見ろよ」

「二エ？」

シャワーを浴びてさっぱりした俺様が部屋に戻ろうとすると、それに気付いたSANSが俺様に手招きし、テレビを指差す。一体何の番組を見ているのだろうとテレビを見ると、俺様の自慢の友達の間が二人、画面に映っていた。

「！ FRISK！ CHARA！」

「生放送だつてよ」

足早に移動してSANSの隣に座ってテレビを見る。FRISKはにこにこしながら

らりポーターの質問に答え、CHARAは顔を逸らしながらその補足を入れている。

「……………？ あれ……………？」

それを見て、俺様は少し、違和感を覚えた。

『それでは、明日からこの家を拠点に親善大使を続けていくんですか？』

『はい、そのつもりです』

『……………この家にはもう一つ意味があるんですよ』

『えっ、そうなんですか？』

白い壁に赤い屋根の家の前で、CHARAの補足にFRISKがはきはきとした口調で答え、笑顔で頷いた。

『はい。実はこの家にはモンスター代表であるDreemur一家と同居することになっていきます。これは例え種族が違って家族に、友人になれることをアピールするためです』

そこでテレビの中のFRISKは少し悲しそうな顔をする。

『……………最近、皆さんからお手紙をいただきます。モンスターは危険ではないのか、友人になんてなれるわけがない、といった内容の手紙を。でもそれはきつと、私達人間が彼らモンスターに勝手に抱いている偏見なのです。私達は同じ言葉を話しているのです。それならば……………私達は言葉を通して、友達になることが、絆を結ぶことが、出来るはず……………いえ、出来るんです。その証明の為でもあります』

そう力説するFRISKの目には、俺様達が友達になったあの日から変わらない、強い決意が輝いていた。

『成る程……………そういう意味があつたんですね。Frisk大使、Chara大使、私、二人をずっと応援してますから！』

『ありがとうございます』

『とういわけで、Frisk大使とChara大使の新しい家からお伝えしました！
それでは、現場からは以上です！ スタジオにカメラをお返しします！』

『ありがとうございます』

最後にFRISKとCHARAがこっちを見て、小さく手を振った。それを最後に、画面がこの時間帯に良く見るニュースのスタジオに切り替わってしまった。

「あつ……………いなくなっちゃったな」

「ああ」

……………折角、会えたのにな。

少しだけ、ほんの少しだけ寂しくなってしまったが、明日ちゃんと顔を合わせられる

のだから我慢することにする。

「……………なあ、SANS」

「なんだ」

そして、俺様がちよつと感じた事をSANSに訊いてみる。

ひよつとしたら、もしかしたら、SANSも……………同じ事を思ってるかもしれない、と思っただから。

「FRISKとCHARA……………なんか、前より……………疲れたような顔してなかったか？
俺様の気の所為かな?？」

俺様がそう言うと、SANSはテレビを消しながら、俺様を見る。

「……………やっぱりpapyrusもそう思うか?？」

「!・ S A N S もか!? やっぱ俺様の気の所為じゃないんだな……………」

俺様の思った通り、S A N S も同じ事を考えていた!

「多分……………というか絶対働きすぎだと思っぜ。唯でさえ忙しいのに最近立て込んでたからな」

「だよな……………」

電話で約束を取り付けた時はそんな事は感じなかったのに、こうしてちゃんと顔を見ると、本当に疲れているのが分かった。

……………俺様も最近マスクットとして王様の方についていくことが多かったからな、ちゃんと F R I S K と C H A R A と顔を合わせるのには明日だと思っっていたが……………こうして、テレビで顔を見ることになるとは思わなかった。

こんなに疲れた顔をしているのも、だ。前にあつた時は……………ここまで、疲れたような顔をしてなかった。

「……………ちやんと休むんだぞって、言えば良かったかな」

「……………」

ちよつぱり悲しい気持ちになると、こん、と俺様の頭に何かが置かれる。そのままそれは俺様の頭の上を横に行ったり来たりして、SANSに撫でられているのだと気が付いた。

「……………Papyrus。そんなに二人が心配ならな、明日、お前さんが癒してやればいいんじゃないか？」

「にえ……………？ 俺様が……………？」

「おう」

俺様の頭を撫でながらそう言ったSANSの提案を思わず聞き返してしまった。

「一口に『癒す』っていつでも、そんなに難しいことじゃなくていい。特別なことをする必要はないんだ。お食事会の後にでもさ、ちよつと二人を引き留めてココアでも出してやって、ソファーに座ってゆっくり話し合ったり、お疲れ様って労ってやつたり………あとはそうだな、今俺がpapyrusにやってるみたいに優しく頭を撫でてやればいい」

「………そんなのでいいのか？」

「おう。結局はな、あんなに二人が疲れてるのは心の休憩が足りないからなんだ。些細なことと思うかもしれないけどな、頭を撫でてやるだけでもちよつとは違うもんだぜ？」

「そうなのか」

SANSの説得力のある話に納得する。

つまりは、今のFRISKとCHARAには『心の休憩』が足りていないから、それを取らせればいいのだな！

「…………よし！ そうとなれば、お食事会の後のプランを考えなければな！ 俺様が二人を癒してあげるのだ！ なんていったって、俺様は二人の友達なのだからな！」

「おう、その調子だぜ、兄弟」

そうと決まれば、早速プランを考えなければ！

「じゃ、俺様プラン考えるからもう部屋に行くな！」

「おう、了解。読み聞かせはどうする？」

「その時は呼ぶから部屋にいてくれ！」

「ok」

俺様にそう言ったSANSの言葉にそう返し、俺様は部屋へと駆け込み、机に向き直

る。そしてまだ使っていないノートを引っ張り出して、ペンを取った。ノックを押して芯を出して、さっきSANSに言われたことをノートに書いておく。

……いや、駄目だ。これだけじゃ、多分足りない、よな………？

そう考えて、パソコンの電源を入れてサインインし、ネットで調べ方を色々変えて探してみる。探して始めて暫くして、とある記事を見つけた。

「…………『ハグでストレス解消』…………？」

マウスを動かしてそれを開いてみると、ハグによってストレスが解消したり、心が安らいだりすることがある、という文を見つけた。

……………そういえば、あの日。俺様もCHARAに抱き締めて貰ったっけ。

ふと、そんな事を思い出す。

—— 『仲直りの、ハグをしよう』

あの日、俺様がどうすればいいのか分からなくて泣いてしまった時、CHARRAはそう言つて優しく抱き締めてくれた。

『仲直りできない方が辛い』つて言つて、俺様の背中を撫でてくれた。

俺様の本当の『お姉ちゃん』みたいなその優しさが、嬉しかった。

俺様とは違う柔らかい感触が、とっても暖かった。

死んでいなかった。

殺してしまわなくて、本当に、本当に良かった、と心底安心した。

俺様とFRISKに友達なつて欲しかった優しいあの人を、喪わずに済んで良かった。

じゃなければ、きっと俺様は悲しみや罪悪感で立てなくなつてしまつたらどうから。

「……………ハグ、か！ いいな！」

ノートに『ハグをする』と追加して、明日のプランを書いて、頭でシミュレートする。まず、免許証も取れたし、俺様にぴったりな格好いい真っ赤なスポーツカーも買えたから、それで二人を迎えに行こう。それでドライブしながらUNDYNEの家に来ていて、パスタを作って……………そして、また、

—— 『うん、美味しいよ』

そう言つて、笑つてもらわなければ。

最近沈みがちで笑わなくなったCHARAのあの笑顔がもう一回見たくて、この一ヶ月間俺様は頑張ったんだからな！

……………でも、最近、思うことがあるのだ。

俺様達モンスターと違って、人間の身長は直ぐに伸びていく。それはFRISKとCHARAも同じだ。

それが何故か……あの日に近付いていっていると最近感じるのだ。

そんな事はない、筈だ。

そしてもう一つ……マスコットとして仕事をしている最中、休憩を取って二人と話すことがある。すると、時折CHARAが笑うことがある。

その笑顔を見ると、どうしても思うことがある。

——…『こんな笑い方だったか?』、と。

あの日のCHARAと同じ笑い方のはずなのに、どうしてもそう思ってしまう。

違和感を感じてしまう。

……きつと、二人が疲れてるからだからだよな！

明日こそは、またあの日みたいに笑ってもらうからな！

「覚悟しろ！ CHARA！ FRISK！ 俺様が一杯癒してやるからな!!」

「おい Papyrus、そろそろ寝なくて大丈夫か？」

「あつ、そうだな！」

俺様が気合いをいれていると、SANSがドアをノックして、俺様の好きな『もふもふうさちゃんといないないばあ』を片手に入ってくる。そんなに時間が経っていたかと時計を見ると、既に9時を過ぎていた。

これは大変だ!! 今すぐ寝なければお寝坊さんになってしまう!!

「SANS！ 読み聞かせてくれ！」

「ok、兄弟。じゃ、ベッドに入ってくれ」

俺様が計画を書いたノートを閉じてベッドに潜り込むと、SANSはドアを閉めて、さつきまで俺様が座っていた椅子をベッドの傍に持ってきて座る。

「それじゃ、昨日の続きからな。ええと、何ページだったか……」

SANSが本を開き、読み聞かせを始める。いつも通りのSANSの声を聞きながら、俺様は目を閉じた。

迫りくる明日が、良い日になるよう祈った。

Epilogue of Sans

[Sans]

ふつ、と。自然に目が覚めた。

薄暗い部屋にカーテンを閉めた窓の隙間から朝日が差し込んでいるのを見て、もう夜が明けたのだと認識し、申し訳程度に被っていたシーツを退け、マットレスに横たえていた身体を起こす。

壁にかけておいた時計を見て、ほぼいつも通りの時間に起きたんだなと思いながら、一つ伸びをする。近くに用意しておいた黒いパーカーを手繰り寄せて羽織る。そのまま乱雑に脱いであつた靴を突っ掛け、寝惚けた頭を軽く振って眠気を払い、立ち上がって部屋から出る。

のそのそと階段を降り、テーブルについて今日はマスコットとしての仕事があつて先

に出掛けて行った P a p y r u s が用意しておいてくれたパスタを食べる。それを食べたなら、皿を魔法を使ってシンクに置いて、自分自身に魔法をかけて浮き上がって洗って、しまう。くあ、と抜けきらなかった眠気が欠伸になって出ていった。

「……………さて」

テレビで目的の情報を見てから、家の外に出る。鍵を閉め、S h o r t c u t を発動する。一瞬のうちに、景色が切り替わり、目的の場所……………より一本外れた、誰もいない薄暗い路地裏に着いていた。

誰も今の瞬間を目撃していないことを確認してから、素知らぬ顔で目的の大通りに出る。溢れる人間達から未だに向けられる好奇の目線を無視して、辺りを見渡すと、俺よりも少し先に、目的の人物達の背中が見えた。—— F r i s k と C h a r a だ。その隣に、俺の弟の P a p y r u s の姿もある。

三人はいつも通りの服装で、楽しそうに話しながら街の中を抜けていく。周りの人間達は今やすつかり有名人になった三人の姿を見ると、驚いたような顔をしてからさつと道を開ける。中には一言挨拶していく奴もいて、F r i s k と P a p y r u s は律儀に挨拶を返し、C h a r a は面倒なのか挨拶は返さずにひらりと手を振った。

先に進んでいくFrisk達の背後を、周りに目を光らせながら数メートル離れて進んでいく。Frisk達を見送る人間達の姿を確認し、不届きものは居ないか、注意深く観察する。

……………見つけた。

建物と建物の間の闇から、黒っぽい服装の人間が通りを見ていた。悪意に満ちたその視線を辿ると、Friskの元へと辿り着く。ソイツが移動を開始したのと同時に、俺もソイツの背後を取るように移動する。ソイツが三人をつけはじめると、Charaが俯き気味だった顔をあげ、Friskと話すフリをして、ちらりと後ろを伺い出す。元々そういう視線に敏感なあいつのことだ、つけてきている奴が居ることに気が付いたんだろう。徐にFriskとPapyrusの腕を取ると、早足で曲がり角を曲がった。それを見て、慌ててソイツは三人を追おうとする。チャンスだ。

「おい、ちょっと来い」

フードを目深に被ってそいつの目の前にShortcutし、目を見開いたソイツの

腕を掴んで適当な路地裏に Shortcut する。そして呆気に取られるソイツをブルーアタックでコンクリートの壁に叩き付け、青い骨で動けないように手足を縫い付ける。人間の張り付け一丁出来上がり、だな。

「下手に動かない方が良い。その青い骨は動くとき実体を持つんだ。下手したらお前さんの身体に風穴が空くぜ？」

「ひっ……!! な、何だ、お前……!!?」

さっきまで Risk 達に向けていた悪意に満ちた視線は何処へやら、ソイツは恐怖に染まった目で俺を見る。答えてやる義理はないと判断してその質問は黙殺し、ソイツの服を探る。案の定、直ぐにナイフが見つかった。その穴に指を引っ搔けて、回しながらソイツに向き直る。

「……なあ、聞きたいんだが。お前さん、こんな物騒なもんで何するつもりだったんだ？」

「そ、そんなもん知らねえ……………!!! だ、誰かに入れられたんだ!!」

くるくると回すと同時に差し込む光に反射して鈍い銀色を放つこの光にビビったのか、俺がソイツに質問すると、ソイツは顔を真っ青にしてそう言った。

……………この反応からして、こいつは人を殺したこともない人間なんだろう。精々チンピラがいいところか。

「へえ……………どうも俺にはお前さんが前にいる親善大使様をつけてるように見えたんだがなあ?」

回していたナイフを握り、全体を良く観察してみる。……………一般的に売られている果物ナイフだな。まだ真新しい。買って間もないのだろう。

「こんな物騒なもんまで持ち歩いて……………まさか、お前、親善大使様を殺す気でもあったのか? それでこんな目にあってるのか。h e h h e h h e h、ざまあないな。まあ、俺に見つかったのが運の尽きだな」

そう言つて嘲笑いながらナイフの切っ先をソイツに向ける。

「……………さて。人間には確か、心臓なんていう赤い血潮を全身に巡らせる臓器があるんだつたか。俺達モンスターにはそんなもんじゃないからな、どんな仕組みになつてるか。ずうつと気になつてたんだ。このナイフもメス代わりにしちや申し分ないだろ。麻酔がないからちつと痛いだろうが、実験台になつてくれるよな？」

そういうも通りに言つて首に当ててやると、裏路地でナイフの刃を向けられて、殺人予告にも聞こえるそれを呟やいているという状況で嫌な想像をしたか、ソイツの顔色がみるみるうちに白くなつて、額から冷や汗が流れていく。

「ひつ、い、いやだ、やめてくれ、やめてくれ、死にたくない……………!!!」

「ん？　なんだお前、死ぬ覚悟も無かつたのか？　へえ、随分軟弱な殺人未遂犯だな？

……………まあ、殺しはしないから安心しなさんな。その代わり、幾つか質問をさせてもらうぜ。

……………ただし答えなかつたり、嘘を吐いたりしたら、その度にお前に深い深い傷をつ

けてやる。跡が残るくらいいな。俺は嘘が大嫌いだね、直ぐに見抜けるんだ。だから嘘はつかない方が良いでせ？」

俺がそう言えば、ソイツは首を千切れんばかりに縦に振った。

コンコンコン、と目の前の家の扉を三回ノックをすると、少しの間の後に中から解錠する音が聞こえた。

ガチャ

という音を立てて、目の前の扉が開く。開いた隙間から、ひよっこりと白い毛で包まれた顔が覗き、俺を見た。ソイツは俺の顔を見ると、苦々しげな顔をする。

「……………やあ、Sans」

「よお、久しぶりだな、坊主」

それでも礼儀は弁えて挨拶はしたソイツ……Asrielに、俺は左手をあげた。そして後ろを伺って、いつもならずすぐ後ろにいる筈のTorielの姿が無いことに疑問を抱く。

「なんだ、今日はtorielは留守か？」

「パパと一緒に偉い人と会議だって。ぼくは留守番。……取り敢えず、あがつてよ。お茶でも出すから」

「おう、邪魔するぜ」

迎え入れるように開かれた扉の間に身を滑らせ、後ろ手で扉を閉める。

「いっち」

A s r i e l に手招きされるまま、部屋に入る。部屋に入ると、ごく普通の家庭にあるようなリビングが広がっていた。

「座つててよ。確かここに……」

五つ席がある大きなテーブルを指差すと、A s r i e l はキッチンの棚を漁り出した。

「あ、これ。P a p y r u s から。遅くなったけど、引つ越し祝いだつてよ」

「え？ ああ、ありがとう」

「ここに置いとくぜ」

朝、慌てて車に飛び乗って出ていったP a p y r u s から渡されて持ってきていた紙袋——中身は無難に菓子だ——を隣の椅子に置く。そのまま少しすると、紅茶の良い匂いが漂ってくる。キッチンから出てきたA s r i e l は、可愛らしいティーポットを両

手で抱えてやってきた。それをテーブルに置くと、次にトレイにティーカップを二つと白い容器を乗せてやってくる。ソーサーに乗せられたカップを俺の前とその真向かいの席に置き、容器をその真ん中に置いて、二つのカップに紅茶を注ぐと、Asrielは席についた。

「ありがとよ」

礼を言い、容器を手繰り寄せて、中に入っていた角砂糖を二つ紅茶に落とす。そうして真ん中に容器を戻すと、今度はAsrielがその中から三つ角砂糖を取って紅茶に入れた。ソーサーについていたティースプーンで中身を二、三回かき混ぜて出し、紅茶を一口飲む。出された紅茶は、何時だったかは忘れてしまったがAsgore王に出してもらった時の紅茶と同じ味がした。

「この家の住み心地はどうだ？」

俺がカップをソーサーに置いて、家を見渡してそう言えば、Asrielも紅茶を一口啜ってから口を開く。

「うん、かなりいいよ。まるで地下で三人で暮らしてた頃に戻ったみたいだ。……まあ、相変わらずママは。パパのこと毛嫌いしてるけど」

「そんな状態で良く同居してくれたよな……」

「そこはまあ、ほら、ぼくたちがね。結構骨が折れたよ」

「それは笑うところか？」

「……まさか。言葉のあやだよ」

そんな風に雑談していると、不意に沈黙が訪れる。暫くお互いにカップの紅茶を意味もなく飲んでいると、Asrielの方から沈黙が破られた。

「……ねえ、君でしょ」

「ん？ 何がだ？」

話の脈絡も無いままそう言われ、何の事を指しているのか分からず聞き返すと、Asrielは溜め息を吐いた。

「今朝の新聞に載ってたよ、『またもや傷だらけでボロボロの男が警察に出頭してきた』って」

「……………ああ、その事か」

「否定しないんだ……………」

Asrielは紅茶を一口啜り、此方を見る。

「最早怪事件扱いになってるよ？ 明らかに誰かに傷つけられたって分かる出で立ちでやってきて、『自分は親善大使及びモンスターに害をなそうとしたので牢獄に容れて下さい』って延々と繰り返して、何があったのか聞き出そうとすると錯乱して『牢屋の中

しか安全な場所はない』って言い出して……まあ、下手したらモンスター達との外交問題になるから願いたい通り牢屋にぶちこんでるらしいけど。ある番組じゃあ犯人は一体誰なのか、モンスターと親善大使を守ろうとするヒーローなんじゃないのか、なんて言われてるよ」

「ヒーロー………ねえ」

こんな俺が『ヒーロー』なんてな。笑えない冗談だ。

「………正体はこんな怠け骨な訳だけどき。ちよつと、やり過ぎなんじゃない?」

「………そうか?」

紅茶を啜りながらそういえば、Asrielは咎めるような目付きをする。

「うん。……延々とあの日を繰り返して、やっと皆が皆救われて未来を歩きだした所を邪魔されたくないの分かるけどさ、少し傷をつけすぎじゃない?」

「…………お前さんがそれを言うか」

『ぼく』だから言うんだよ」

元々残酷なソウルレスだったこいつにそんな事を言われる筋合いはねえだろ、と思いいり返すと、そんな返事が返ってきた。

「…………まあ、ぼくは家族みんなに迷惑が掛からなければ別にどうでもいいけどね」

すつ、と。そう吐き捨てたA s r i e lの目が、感情を感じさせない、酷く冷たいものとなる。

心の底から『どうでもいい』と思っている、そんな目にだ。

「そういうわけで、絶対に失敗しないでね」

「言われなくてもそのつもりだ。…………ちそうさん。茶、上手かったぜ」

「どーも」

念押ししてくるAsrielに頷いて返し、残っていた紅茶を一気に飲み干して廊下に行き、Shortcutを発動する。直ぐに視界が切り替わり、あつという間に俺の家の玄関に着いた。

「あつ、SANS！ おかえりなさい！ 王様は元気だったか？」

そのまま歩を進めると、朝から出掛けていた筈のPapyrusがキッチンからひよっこりと顔を出して出迎えてくれる。

「……すまん、今日はasriel王子にしか会わなかった」

「そつか……元気だったか？」

「おう」

一瞬居たのかと驚いたが、いつものことだと思ひ直し会話を続ける。

「papyrus、お前、用事はもう終わったのか？」

「いや、これからもう一回出るぞ！　ちよつと汚れると嫌なものがあつたから置きにきたのだ！」

何故居るのか訊いてみると、どうやら用事の途中で立ち寄つただけらしく、そんな返事が返つてきた。

「へえ。何を置きに来たんだ？」

「これだ！」

何を置きに来たのか訊いてみると、Papyrusは写真を取り出して見せる。そこにはPapyrusとUndyne、今しがた会つたAsrielを含むDreamu

r一家が映っていた。

「へえ、良い写真じゃないか。この間のお食事会の時にでも撮ったのか？」

「そうだ！」

確かに汚れたらまずいな、と内心で納得する。ただでさえこういう思い出を大切に
するPapyrusのことだし、余計にな。

「……………なあ、これ、アルバムに挟んでおこうか？ そろそろ行かないと時間まずい
だろ」

「ハッ！ そうだな、頼む！」

もう少し眺めていたくて、適当な事を口にすれば、マジで時間が迫っていたらしく、P
apyrusは俺に写真を手渡して慌てて玄関へと走っていく。背後から派手に扉が
開く音といつてきますという大きな声が聞こえ、その後、車の立ち去る音が聞こえた。

取り敢えず魔法を使って鍵を閉め直し、写真片手に部屋へと戻る。そうして靴を脱いでマットの上に横になり枕に頭を預け、ぼんやりと写真を眺めた。

「……………大きくなったもんだ」

ぼつりと呟いた、俺の独り言が空気に溶けていく。

そんな事を思わず呟いてしまう程には、写真に映るF r i s kとC h a r aは、あの日よりずっと大きくなっていった。

写真を踏んだりしてしまわないように、魔法で操作して柵の上に置いて、目を閉じる。

……………あの日から、もう数年が立つ。

俺を蝕んでいたあの悪夢はピタリと収まり、今まで思い返した中では見たことは無い。タイムラインはまるで元々そうであったように、何事もなかったように動き出して、時計の針を進めていく。俺の身長よりも小さかった筈の二人はすくすくと育ち、俺が見上げる側になってしまった。まずかった筈のP a p y r u sの料理の腕は予想よ

りずっと速く上達していく。

この何気無く過ぎていく日々が、ただの幸福な夢ではない、紛れもない現実なのだ
と確信するのに……一年の時間を要した。

その時、やっと俺達はあの閉じた世界から抜け出せたのだと歓喜した。

……それと同時に。

『あいつ』は本当に総てを持っていったのかと、他人事のように思った。

我ながら薄情なもんだなと自嘲する。あの日に捕らわれる前の俺だったら、まだもう
少し思うところがあるだろうに。

あの日、この何てことない日常を誰よりも望んであいつ。

あいつは確か……

『きつと、私がやろうとしていることは間違ってるんだと思うよ』

自分の正体、そしてそれを利用した計画を洗いざらい吐いたあいつは、そう言った。

『Player達にとつては、とんでもないことだろうね。ただのゲームの登場人物、いやそれどころか、二次創作でのキャラクターでしかない私が、Player達から楽しみを奪おうとしてるんだから』

しかもこんな杜撰な計画で、と、あいつは付け加えた。

『原作者に見つかりでもしたら、怒られる所じゃすまないだろうね。だって、エンディングを変えようとしてるんだから。もしかしたら、私がこうやって喋ったり生きていた痕跡さえ消されるかもしれない。コアなファンには、何て事をするんだって非難されるかもしれない』

涙ながらもなく、怒りを籠めながらもなく、ただ何事もないように、淡々と語る

あいつの独白とも取れる話を、俺はただ聞いていた。

『…………でも、私は…………』

あの時感情らしいものが宿つたと記憶しているのは、たった一瞬だけだった。

『喻えどんなに貶されても、それこそ地獄の業火に焼かれて身体が灰になつても、あの子の未来が欲しいんだ』

それまで伏せていた顔を上げて語るあいつに、宿つていたそれは、

『友達と美味しいものを食べ歩いて、馬鹿みたいな下らない話で笑いあつて、一緒に泣いて、素敵な恋をして』

俺達モンスターにはきつと出来ない、

『Friskに…………《Undertaleというゲームの主人公》として、じゃなくて、

《ただの一人の人間》として……生きてほしいんだよ』

誰よりも強い、決意が宿っていた。

その目的の為なら何でもしてしまうような、そんな決意が。

あいつがその決意のまま行動した結果が……この日々だ。

……俺じゃあ到底真似できない。ソウルどころか存在丸ごと全て捧げる事なんて、全て諦めてしまった俺にはきつと無理だ。

そんな俺に、あいつは……厄介な呪いを一つ、かけていった。

——『あの子を守って、Sans。寂しくないように、支えてあげて。あの子が一人でも立って歩けるようになるまででいいから、ね?』

「……………何が、『ね?』だ。とんでもない呪いをかけていきやがって……………」

くそが、という悪態は寸での所で飲み込んだ。

……昨日脅したチンピラも、それまでの奴等も、何処まで探つても、『精神性に問題がある』と判断された履歴なんかが見つかるだけで、何処かの大企業と繋がっていたりなんてことは無かった。それは、あいつの言うハッピーエンドを壊させない為の『修正力』というものが働いているからなんだろう。

全部、あいつが消える前に言っていたことだ。正直、気味が悪くて仕方がない。

だが、俺は……ずっと、約束を守っている。

逃げ出したくて仕方がないのに、ずっと。

……それはきつと、これは、相応の罰だという意識があるからだ。

全てを聞いていながら、止められる立場であった筈の俺が、あいつがそもそも身を捧

げるつもりであることを利用して見殺しにして、渴望していたこのぬるま湯のような日々を生きることへの。

あいつがいたらきつと、きよんとしながら『何でお前がそこまで気に病むんだ』とでも言いそうだな、と思いながら、目を開ける。

……………もう、こうなれば自棄だ。

身体を起こしてポケットを探り、あの日から手放せずにいる携帯を取り出す。それを弄り、とある連絡先に電話をかけた。

プルルル……………プルルル……………

聞き慣れた呼び出し音が部屋に響く。暫く待つてみたが繋がらず、電話に出れない状況なのだなど察する。留守電を入れるのもなんだと思ひ、通話終了ボタンを押した。暫くすれば折り返しが来るだろうと思ひ、携帯を閉じてもう一度寝転がって目を閉じる。そのまま眠気に身を任せてうとうとと微睡んでいると、

ピリリリ……………ピリリリ……………

携帯の着信音が鳴った。

飛び起きて携帯を引つ掴み、着信相手の名前も良く見ずに電話に出る。

『……………あ、Sans?』

「おう、そうだぜ」

繋がった電話の先から、先程連絡を入れた人物……………Friskの声が聞こえた。

『どうしたの? 着信がきてたけど……………何かあった? 相談に乗ろうか?』

時計を見てどうも二時間ほど眠っていたらしいと確認していると、此方を気遣う声が聞こえてきて、思わず肩を竦める。

「いや、別に何か悩みがあるわけじゃなくてな、ただ単にちよつと話がしたくてな。今時間大丈夫か？」

『うん、大丈夫。さつき仕事終わったところだから。それで、なあに？』

Frisk側の時間の都合は問題ないらしく、直ぐにそう返ってきた。

「……………いやな？ 最近 Papyrus や Toriel がお前さんと Chara が休憩を取らなすぎて心配だつて言うんでね。あまり心配をかけないでやってくれないか、と」

『うぐ、耳が痛いな…………』

自分から電話をかけておいてなんだがまず何を話すべきか迷ったあげく、いきなり本題に入るのもなんだと思い、Papyrusの話題を口にする、そう言葉が返ってくる。

「小言になるけどな、お前さんの仕事はただでさえお前さん本人が大事なんだからな？ お前さん自身が倒れちまったりしたら、元も子もないんじゃないのか？」

『うーん……：……仰る通りなんけども、本音を言うと、何か、これが皆の為になるんだ、つて思うと、何か休憩できないというか、やめられなくてね……：皆の所為にしたいわけじゃないんだけど』

俺が少し語気を強めて言えば、申し訳なさそうに、そして疲れを滲ませた声で F r i s k はそう白状した。

「……お前さんが頑張ってくれてるのは分かるが、それで心配かけてどうするんだ」

『本当にその通りでございます……』

はは、と誤魔化すような空笑いが電話越しに聞こえた。

「それじゃあ、そんな休憩ベタなお前さんにアドバイスだ。休憩時間の間だけは音楽で

も聴いたらどうだ？ クラシックやジャズなんかのお前さんの好きな音楽とか、最近興味を持った曲を聴けば良い。優しい曲調の曲なら尚良いな。休憩時間の間は、耳を済ませて、それだけに集中しろ。そうすれば、少しは身体も心も休まると思うぜ」

『……………流石Sans。物知りだね。ありがとう、実践してみる』

「そうしろ。charaにも言っとけよ」

此方が真剣にアドバイスしていることを悟ったのか、Friskは真面目な声音でそう言った。

……………ここでふと、ジョークを思い付いた。

「そうだ、スケルトンの骨を叩くとどんな音が鳴るか知ってるか？」

『え？ うーん……………知らない。なんて鳴るの？』

「『ボーン』って鳴るのさ……………骨だけに」

『ふっ……！ あははは……！』

俺が割かし無理矢理振じ込んだジョークがお気に召したらしく、電話越しのFriskは笑いだした。笑いのツボにこのジョークが入りでもしたのか、暫くの間Friskは笑い続けた。

『ふふふ……あー、笑った。今の、Papyrusが聞いたら怒るだろうね』

「ああ、だろうな」

笑った余韻を引き摺りながら、Friskは俺にそう言った。それに適当に相槌を返し、Friskの状態を分析する。

……休憩できない、ということとはワーカホリックになつて可能性がかなり高い、それどころかマジでそうなりつつある。でも此方の休憩のアドバイスを素直に聞いたりする辺り、まだFriskは良い方みたいだな。問題はCharaか……

そこまで分析して、俺は内心溜め息を吐いた。そして、先程まであいつの言葉を思い

出していた所為か、あいつへの苛立ちが募る。

ああ、腹が立つ。

お前を止めなかった俺に言われる筋合いは無いかもしれないが、腹が立って仕方がない。

………そこまで思っ、ふと冷静になる。

何を言ってるんだ、俺は。何も出来なかった癖に、何もしなかった癖に、あいつに意見する資格なんて、俺にはないだろ。

『S a n s s ? 』

不意に、電話越しの声で現実を引き戻される。

『どうかした?』

「ああ、悪い。次に何を話そうか悩んでな」

湧き出してきた黒い感情を溢れてこないよう蓋をして、俺はFriskとの通話に戻る。

『大丈夫？ 私よりもSansの方が無理してない……？』

「いや、んな事はしてないぜ？」

……まさか、Friskに逆に心配されるとは。思っても居なかった。

「……………ああ、そうだ。なあ、Frisk」

これ以上話しているとボロが出そうだ、と感じ、幾つか挟もうと考えていた会話をカットし、俺は訊きたかったことを口にする。

『んー？』

「…………お前さん、今、幸せか…………？」

俺がそれを口にしたその瞬間。

ひゅっ、と。

息を飲む音が微かに電話越しに聞こえた。

『…………いきなり、どうしたの？』

当たり前だが、突然の質問に困惑したような声が返ってくる。

「いや、お前さんが地上にモンスター達を解放して暫く経つだろ？ お前さんの心境は一体どんなものかなと思ってるな。まあ、何か意味があるわけじゃないんだが……………実際の所、どうなんだ？」

……ずっと、俺が訊きたかったこと。

それは、本当に Frisk が幸せなのか、ということだった。

あの日、あいつを Frisk が失ったことは俺しか知らないが。

その穴に気付いている Frisk は、本当に幸せなのか……約束した俺は、知っておくべきだと思い至った。

本当はもっと前に訊いておくべきだったんだろうが、『幸せじゃない』なんて返事が返ってきたりしたらと考えると、とても言い出せなかった。

だって俺は、Frisk の家族を、見殺しにしたのだから。

「お前さんは、幸せなのか？」

その問いに、Frisk は。

『……………うん、勿論だよ』

そう、答えた。

それじゃあお休み、という声を最後に、プツンという音を立てて通話が切れた。ツー、という音が、通話が切れたのを告げる。

「……………ああ、そうかよ」

俺はマットレスから立ち上がって、先程棚に置いた写真を、もう一度手に取った。

その写真には、微笑むFriskが映っている。

先程のFriskは、俺が安心する答えを、模範解答のような答えを寄越した。

……………だが。

「本当に幸せな奴は、こんな風には笑ったりしないんじゃないのか」

その笑顔は、ただ顔に貼り付けただけの、薄っぺらい笑顔だった。

——…なあ、名前も思い出せない誰かさんよ。

お前が思い描いた未来は、身を捧げてまで望んだ未来はこんなものだったのか？

お前の命に変えてでも守りたかった大切な妹が、自分の青春を投げ棄ててワーカホリックになりかけるような未来だったのか？

お前は何でも見透かしてたように話してたが、一つ、大事なところで思い違いをしてたんだぜ？

お前は『自分の存在は全て置き換わる』って言ってたが、ソウルに刻まれた存在を、しかも長年一緒にいた誰かを、契約の代償なんかで本当に置き換えられるとも思ってたのか

?

……皆、誰かが居なくなってることに、その存在の穴に、気付いてるぞ。

その混乱が広まったりしないから『修正力』とやらが働いているかもしれないがな、皆、気付いてるんだぜ？

……その違和感を埋めるために、F r i s kとC h a r aはこんなになっちまってるんだぞ……？

お前はこれが……本当に、『ハッピーエンド』だって、言うのかよ……？

「……h e h h e h。居ない奴に言ったって、仕方がないか」

地上に出てから新たに部屋に設置した本棚に挟まっていたアルバムに写真を挟み、本を閉じた。

Epilogue of Asriel

[Asriel]

ぼんやりと、ソファに寄りかかってテレビを見る。こういう日のぼくの課題である情報収集も終えたそれは、ただ喧しく雑音を垂れ流すスピーカーでしかなかった。

「……………つまんない」

飽きてきたテレビを消し、欠伸をする。長い間見ていて目が疲れたのを感じ、一つ伸びをして、午後の光の射し込む窓越しに庭を覗く。花壇に植えられた金色の花が、大輪の花を咲かせて風で揺れていた。

……………ズキン

何故休日でもないのにこんなにだらけられているかというと、今日はぼくがこの家の

留守を任されているからだ。

こうなった切っ掛けは、F r i s kとC h a r aが親善大使に成り立ての頃。孤児院にまだ住んでいた時に、F r i s k達が居ない間に空き巣が入るといふ事件があつたから。その時たまたま仕事を先に終えたぼくが孤児院に居て、何も盗まれずにソイツを取つ捕まえる事が出来た。後から聞けば、ソイツはF r i s k達が使う書類を盗もうとしていたらしい。十中八九外交相手が自分が有利な立場に立とうとして放つたものだろう。そんなこととしてまで有利に立ちたいなんてバカな人間だな、と思つたのを覚えている。

それに危機感を覚えた僕らは、今後そんな事がまた起きてしまわないように、誰か一人は仕事を休むか自宅で仕事をするかして家にいる事を皆で話し合つて決めた。で、今日はたまたまぼくが休みを取れて家にいる、というわけだ。

ソファから降りて、クッションを持っていつて、それを敷いて窓際に座る。換気も兼ねて庭を一望できる大きな窓を開ける。爽やかな風が、花と同じようにぼくの頬を撫でていった。

パパによつて金色の花を中心にガーデンングされた庭の花々は、青空の下でさんさんと降り注ぐ陽光を浴びて、咲き誇っている。

……金色の、花。

庭で咲き誇るそれらは、ぼくら家族にとつては、たくさんの思い入れのある花だった。今も飲んでいる紅茶の花。

昔から育てていた花。

パパに作ったパイに、間違えて入れてしまった花。

Charaがその毒で自殺を図った花。

死んでしまったぼくの、仮初めの器になった花。

ママに聞いてみたら、ぼくがなっていた花と昔パパに食べさせてしまった花の種類は違うらしいけど、同じ金色だったことは変わらない。この金色の花には決して良い想い出ばかりがあるわけじゃないけど、ぼくは嫌えずにいる。結局、ぼくはこうして五体満足で生きているわけだしね。

……でも、もし、ぼくが花から戻っていなかったら、こんな風には考えられなかったかもしれない。

あの日、この世に二度目の生を受けたCharaが、あの日のユメに囚われ続け、嫉妬や狂気で暴走したぼくに手を差し伸べてくれなかったら。

『もう一度一緒に生きよう』って、傷付いてぼろぼろになってまで言ってくれなかったら。

こうは、ならなかったかもしれない。

皆が住んでいる家で、呑気にテレビを見る事なんて出来なかったかもしれない。

……そう思うと、本当に奇跡が重なった上でこの日常はあるんだと再確認する。きつと、どの要素が欠けても、ぼくもCharaも揃った家族五人で生きることなんて出来なかった筈だから。自分のソウルを半分に叩き割ってまでぼくを生かそうとしたCharaには頭が上がらない。そのお蔭で、ぼくは今日も生きているんだから。

……………ズキン

あの日、Charaの決意にぼくが救われた日。

ぼくはその後は夢の通りに皆のソウルを使ってバリアを破り、地下世界と地上を隔てていた壁を取り払った。そして、バリアの消えた出口の前で、FriskとCharaに引き連れられたモンスター達と顔を合わせた。

……………そこには勿論、パパとママも居た。

その時のパパとママの顔は忘れられない。ぼくを見ると同時に信じられないものを見るように目を見開いて、ぼろぼろと涙を流し始めた。そして、二人で、ぼくの事を抱き締めてくれた。

それまでのタイムラインで、お花だった『Flower僕』がぼくがAsrielだつてことを告げたときの顔より、良く覚えている。それは何よりも、元の自分の身体で、『お帰りなさい』と涙を流す二人の気持ちが分かることが出来たからだと思う。

花を眺めながら昔を思い返していると、不意に、びゅうつ、と一層強い風が吹いた。そ

れと同時に金色の花弁が風に浚われて、空へと舞い上がった。今ので結構散ってしまったんじゃないかな。出来ればもう少し長く楽しんでいたかったけど、仕方がないなと諦める。また来年、楽しめると良いけど。

そろそろ換気もいいでしょと思ひ、窓を閉めて、クツシヨンを枕代わりにして窓辺に寝そべる。体に当たる日の光が、ぼかぼかで気持ち良かった。

ついこの前までは、眠るのが怖かったのに。今じゃ何ともないんだな、と微睡みながらぼんやりと思う。

……もしかしたら、まだあの日にぼくらは縛られているんじゃないか。

目を覚ましたら、またあの日に戻っているんじゃないか。

白い毛に覆われたこの身体が——……感情を感じられないお花に、なっているんじゃないか。

Charaが地下に帰ってくるまでの長い間、あの夢に囚われ続けた所為かもしれないけど、ふとした時にそんな思考が過つてどうしようも無くて、眠れなかった。

今じゃそんな事は起こらないって確信しているけど、そうやって安心出来るまで、ぼくは殆ど一人で眠れなかった。不安になってCharaに相談してみたら、事情が事情

だからか、Charaも昔みたいにバカにしたりせずに、黙って一緒にベッドで眠ってくれた。

……………ズキン

肝心の夢と言えば、あの日以降、ぴたりと見ることは無くなった。これはどうやらSansもそうらしい。

何度も見た所為でソウルに焼き付いてしまったそれが突然消えたことに気味悪く感じるけど、それと同時に安堵している。

だって。

ぼくはもう二度と、Charaが泣いている所を見ないですむのだから。

この手が届かないことを、この声が聞こえないことを、嘆かなくてすむのだから。

何も出来ない虚無感と、親友を救えない絶望感を味わわないですむのだから。

……あれを除けば、だけど。

そう思えば、その気味悪さだってどうってことはなかった。そんなこと、些細なことだった。

……この幸せを奪われるぐらいなら、ぼくは……

ズキン

……暗い思考を巡らせていた所為か、気分まで暗くなってくる。寝返りを一つして、窓に背を向ける。

少し、寝よう。眠れば少しは、気分が明るくなるはずだ。

目を閉じた。

コンコンコンッ

家の中に響いた小気味の良い音で飛び起きた。今のは、来客を知らせるノックだ。壁にかかっている時計と窓から射し込むきつくなった西日で、数時間寝ていたことを察する。それを見てから慌てて起き上がり、玄関に向かう。届かない身長を補うために台を使つて覗き穴から来客が誰か伺うと、下の方に影があつた。その造形が明らかに人間では無いことを確認して、鍵を開けて、扉を開ける。

「Woshuaじゃないか」

「ども、王子様」

そこにいたのは、モンスター綺麗好きなモンスターであるWoshuaだった。最近Friskの紹介で大手清掃業社に一族総出で雇われたって聞いたけど、何の用だろう？

「どうかしたの？ Friskに相談にでも？ 取り次ぐけど」

「いえ、今日はFriskじゃなくて……あの、Charaはいます？」

「え？ 今仕事でいないけど……何か用事？ なんなら言付けておくけど……」

どうやらぼくやFriskではなく、Charaに用事があったらしい。Friskに用があるならまだしも、Charaに用事があるなんて珍しい。友達を除けば、たまにGersonが尋ねてくるぐらいなのに。

「なんだ、居ないのか……じゃあ、これ、代わりに届けてください」

「分かったよ」

小さな手足を使って器用に渡されたのは、細長い白い箱。

「『見つけるのが遅くなってごめん』って言うておいてください。それじゃ、失礼します」

「あ、うん。またね、お仕事頑張って」

何が入っているのだろう、と思っていると、そう言つてW o s h u aは帰つていった。その背中が見えなくなるまで見送つて、扉を閉めて鍵をかける。そうしてぼくの手元には、白い箱だけが残される。

リボンや包装紙が一切ない、すぐに開けられるようになっていた白い箱。細長い割には厚みがあり、何が入っているのか想像がつかなかった。『見つけるのが遅くなつてごめん』つて言つてたし、何か昔に失くしたものとみただけど……

……ちよつとぐらい覗いても、怒られないかな？

結局、中身が気になつてしまったぼくは、その蓋を取つてしまう。

「……えっ」

そして中身を見て、驚いてしまった。

……………ズキン

「……………カッター、ナイフ……………」

そこには、持ち手に『No. 2』と星のマークが薄く書いてあるカッターナイフが、静かに鎮座していた。

「ただいまー!!」

「……………ただいま」

夜。パパもママも帰ってきて、夕食の匂いが鼻を擽り始めた頃に、そっくりな声が玄関から聞こえた。直ぐにリビングにやってきた二人を視線を向けて出迎える。

「二人とも、お帰りなさい！ 夕飯、出来てるわよ」

「わあ、ちょうど良いタイミングで帰ってこれたなあ」

姿を表したFriskとCharaに、ママが真つ先に声をかける。それにFriskは笑顔で返し、Charaは手を洗いに行ってしまった。

「お帰り！ 今日早く帰ったね？」

「うん、今日は早く仕事が終わったんだ」

「へえ、良かったね！ 今日はゆっくり寝られるんじゃない？」

「そうだね」

Friskに言葉を投げ掛ける。少し会話をしていると、そこに手を洗い終えたらしいCharaが帰って来た。

「Frisk、手、洗ってきなよ」

「あ、うん！」

洗面所を指しながらそう言ったCharaの言葉に従い、Friskはパタパタと駆けていく。少ししてFriskが帰って来るか来ないか、パパがリビングへとやってきた。

「お帰り、Frisk、Chara。良い匂いだね」

「ただいま、パパ！ そうだねー、楽しみ！」

「……ただいま」

二人ともパパに返事を返し、ママの手伝いをし始める。二人の手伝いもあつてか、テーブルの上には直ぐに料理が並んだ。

「あ、そうだChara。Woshuaから届け物があるんだけど」

「? W o s h u a から?」

「うん。ちよつといい?」

Charaがお皿をテーブルに置いたのを見計らって、手招きして廊下に連れていく。そのまま階段を使って二階に上がって、部屋の電気をつけて、自分の机の上に置いておいた白い箱を差し出す。

「これなんだけど、『見つけるのが遅くなってごめん』って言ってたよ」

「……………僕、W o s h u a になんか見つけてもらうよう頼んだっけ……………」

部屋までついてきたCharaは怪訝そうな顔をしながら箱を受け取り、中身を確かめる為にその蓋を取った。そして、その中身を見て目を剥いた。

「これ、は……………」

「……やっぱりこれ、Charaがあの日持っていたやつ、だよな？」

その所々錆びてしまったカッターナイフに、ぼくらは覚えがあつた。一番よく覚えているのは持ち出したChara本人だろう。ぼくはどちらかと言えば、それを振つているのを見ていただけだし。

このカッターナイフは、元々孤児院にあつたものだ……と、孤児院に居るときに聞いた。失くしたと、勝手にEbott山に登つて怒られたCharaが罰が悪そうに言つて、院長に更に雷を落とされたのを覚えている。あの時の剣幕は怖かつた。パパに毒入りパイを食べさせちやつた時のママの怒り方にそっくりだつた。まあ、その顔をしていたのは、Ebott山に登つてしまったことを怒つていた時だつたけど。

それが数年経つた今更見つかるなんて、驚きだ。

「やつと見つかつたんだし、返しに行けば？ 今度Chara休みでしょ？ Woshuがそこまで錆も取り除いてくれたみたいだし、あとは刃さえ変えれば、また使えるでしょ」

じつと、カッターナイフを見つめるCharaに、そう提案する。

……返事が、無い。

「……………Chara?」

あまりに長い沈黙に、思わずぼくがCharaに呼び掛けると、Charaはゆるゆると首を横に振った。

「……………ちがう」

「へっ?」

そして、ぼつりと眩かれた言葉に思わず聞き返す。

「……………ぼくは……………わたしは、カッターナイフなんて……………」

「……Chara……?」

酷く緩慢な動きで、Charaはカッターナイフを手取る。そして、震える手で少々錆びてしまった刃を押し上げて出した。それをそのまま、部屋の光に翳す。反射した鈍い銀色が、時折煌めいた。

「ねえ、どうしたの? 大丈夫……?」

………なんだか様子が可笑しい。

そう思ったぼくがとんと、肩に手を置いて軽く揺すってみると、はっとしたようにCharaはこつちを見た。

「え、あ、ごめん………今度の休みの時、返しに行くよ」

「いや、いいけど……大丈夫? 何か、様子が変だったけど……」

「………平気。ちよつと、今更返ってきたのかつて、驚いただけだ」

「ふうん……………」

Charaは僕の言葉に、はは、と力なく笑って見せ、またカッターナイフを見つめた。

……………ズキン

その様子に、ソウルが痛んだ。

「……………話は、変わるんだけどさ。もうすぐCharaとFriskの誕生日だよね」
「えっ？ ……ああ、うん。そうだったな」

咄嗟に話題を振り、部屋の空気を変える。カッターナイフをぼんやりと見つめていた

Charaは、突然変わった話題に驚きながらも頷いてくれた。

「今年も、二人の誕生日パーティーやるからね。これは本当は言っちゃいけないんだけど、今年のケーキはCharaも大好きなチョコレート味のやつをスポンジから手作りしようって話になってるんだ。パパとママと、ぼくで。絶対に美味しく作れるよう頑張るからさ、楽しみにしててね？」

「……………うん。ありがとう、As。楽しみにしてる」

始めはきよとんとしていたCharaだったけど、ケーキの件を話し始めた辺りから目が輝いた。そして、照れくさそうに、はにかんだ。

「取り敢えずこれ部屋に置いてくる。先に下行ってて」

「うん、分かったよ」

そう言って、カッターナイフ片手にCharaは部屋から出ていった。その背中を見

送って、ぼくも部屋から出た。

……良かった、あんな顔じゃなくなった。

先程別れたCharaのあの苦しそうな、今にも泣き出しそうな顔でカッターナイフを見つめる様子を思い浮かべて、ぼくは安堵する。

何故、Charaがあんな顔をしたのかは分からない。咄嗟に別の話題を振って、生日の話をしてしまった。ケーキのネタバレしちゃったのはちよつとやり過ぎたけど、その結果Charaが笑ってくれたなら、別にいい。

……だつて。

Charaが笑ってくれないと。

……ズキン

ズキン、ズキン

……ぼくの半分しかないソウルが、疼いて、痛くて、仕方ないから。あの顔のままだと、ぼくが苦しかったから。

折角気付かないように蓋をしているこれが、出て来てしまうから。

ふとした時にやってくるこれは、虚無感と絶望感を伴ってやってくる。

—— 『ごめんね A s r i e l、私のエゴの為にいきってくれ』

そんな、聞いたこともないはずの言葉も一緒に。

皆忙しくて、相談できずに引き摺ってきたこれは、年々その苦しみを増していく。

……まるで何の苦しみもなく、のうのうと生きているぼくを責めるように。

呪いにもかかったんだらうか、と最初は思ったけど、多分、それは違う。

今のところ、これは一度なってしまったらどうしようもない。

最悪な時は涙さえ出てくる始末だ。本当に、これは何を訴えているんだか。

でも、そんな時、Charaが笑ってさえくれれば、ぼくはこれを気の所為にしてしまえるから。

だから、笑っていてほしい。

皆の為にも、ぼくの、為にも。

ズキン

ズキン

……疼きは、まだ止まらない。今回は長いな、一緒にご飯を食べてくれれば治まるはず、なんて考えながら、ぼくは重い足を引き摺って階段を降りた。

Epilogue of Chara

[Chara]

父さんも母さんも寝静まった深夜。僕は家にいる全員が寝たのを見計らって、洗面所の前に立つ。

すると、出してなるものかと意地ですつと抑えていたものが、限界を迎えた。

「げほっ、げほっ……おえっ」

どろりとした酸味の強いものが喉の奥から口を通って溢れ出ていく。

べしやり、という音を立てて洗面台に落ちたそれを見て、また吐いた。それを何回か繰り返す。

……これで最後だろうか。

内容を全て吐き出して透明になったそれを見て、そう判断する。まだ戻したばかりであることも含めて、気持ちが悪い。戻した際に胃酸が喉を焼いたのだろう、ヒリヒリと痛かった。蛇口を捻って水を流し、自然と流れていかずに洗面所に残しまった吐瀉物を綺麗に洗い流す。こんな夜中に起き出して、食事を吐いていることを誰にも悟られないように。

これ以上胃酸に焼かれると喉が哽れるのは経験済みだ。哽れるとまずいからうがいなどで使うコップで水を飲む。二、三回飲んで、ピリピリとした感覚が消えたところでコップを置き、蛇口を閉めた。

「……………美味しかったのに」

また、戻してしまった。その事実には少しだけ申し訳なくなる。

……今日は、僕とF r i s kの誕生日だった。毎年家族と一部の友達だけで行われる誕生日パーティーが、今日はあった。皆が持ち寄ってくれた美味しいお菓子や食べ物がテーブルに並んで、事前にA sから聞いていた手作りのチョコレートケーキを囲んだ。

それは……僕、Chara・Dreamurに関してのこと。

何の因果か、あの真つ暗な空間から抜け出して二度目の生を受けた僕は、八人目の人間——Friskの双子の姉として生きてきた。

Frisk越しに居る筈の『Partner』の存在を感じ取れなくなったことや、そもそも本来死んだ筈の僕が本来関わることの出来ない筈のFriskの姉として生きていることに、最初は混乱した。でも、何年か生きているうちに、これはどうしようもない現実なのだと思えざるを得なかった。諦めた、というのが正しいのかもしれないが。

そして、僕という異分子を加えたままあの日へと時間は進んで、僕は全く変わってしまつた物語を歩む羽目になった。

僕が帰つて来たことに父さんも母さんも泣き崩れるわ、まだソウルレスの花だったAsには執着されるわ、どうしてかあの忌々しいグルートの記憶のあるクソ骨……Sansには無駄に警戒されるわ、挙げ句Asが大暴走するわで、嬉しいこともあつたけど、それと同じくらい大変だった。でも、その結果、皆が皆、笑っている未来を掴み取れた。『Partner』からすれば、何回も繰り返したゲームのルートでしかなかつた筈の未来を、変えてしまつた。

僕らの、決意で。

ちよつと人数が増えた状態で見たあの日の夕焼けは、ひどく、綺麗だったのを覚えている。

……………その記憶に、僕は違和感を覚えている。

……………三、四年か前だったか。Metatonから電話がかかってきたことがあった。丁度その時はアイツも軌道に乗って話題のスターとして忙しかった筈なのに、態々プライベート用の番号でかけてきたのを珍しく思ったのを覚えている。いざ電話を取ってみれば、不可思議な質問をされた。『自分に家の鍵を返したか』という趣旨の質問を。

そんな事に覚えが無かった僕は、そのまま『知らない』と言葉を返した。すると、電話越しのMetatonは『可笑しい』と言いだしたのだ。

……………『記憶と矛盾している』、とさえ。

それを聞いていた当時は早急に仕上げなくちゃいけない書類があり、小声でぶつぶつと何かを呟き出した電話越しの電子音が煩わしかった為に直ぐに電話を切ってしまったが、仕事を終えて一段落して、ふとその言葉を思い出して……………気付いてしまった。

Met t a t o n は元はゴーストといえど、今の身体はあのA l p h y s 特性のハイスペックマシンボディだ。あの身体に、ロボットならついていることが前提の記憶装置を組み込んでいないなんて事はない筈だ。凝り性なA l p h y s のことだから、記憶できないなんていうエラーが起きにくい高性能なものをつけている筈。

……そんな機能がついている筈のMet t a t o n の記憶と、僕自身の記憶が、『矛盾』している？

……おかしい。

おかしい。

おかしい。

何故、『矛盾』している』なんてことが起きた？

そこまで想像して、背筋が寒くなった。

事の重大さによろやつと気付いた僕は、慌てて記憶を探る。でも、どれだけ探っても『Metatonに家の鍵を返した』なんて記憶はなく、自分の記憶だけがはつきりと浮かび上がってくるばかり。

いくら年月が経ったとはいえ、あの日のことを忘れることなんてできる筈がない。だってあの日は、僕らがゲームという運命から解放された日でもあるんだから。忘れるわけがなかった。

そこまで、思い返して……あることに、気付いた。

あまりにも、今までがはつきりと思い出せ過ぎることに。

さつきとは矛盾するけど、人の記憶なんてあやふやなものだ。印象に残って脳に刻み付けられたもの以外、案外忘れてしまう。なのに、僕の記憶はずっと色褪せずにそこにある。

その時誰が何と言ったのか、一字一句違えずに言えてしまう。

死んでしまったら声から忘れていく筈の今世の母さんと父さんの声も顔も、思い出せてしまう。

まるで、絶対に間違える事のないように、用意されたような……——

そう思った瞬間、今まで違和感を覚えなかった筈のそれらが、急に信じられなくなつた。

これが、本当に正しいものなのか分からなくなつた。

正しく僕の記憶なのだと、絶対の自信を持てなかつた。

冷静になつて考えれば、Undyneや母さんとの会話で、何回か矛盾が生じたことがあつた。

それまではただの記憶違いだと流していたけれど、それが起きるのは、どちらかの記憶が間違っていたからだとしたら……？

正しいのは、どっちだ……？

そんな思いも助長して、僕はいつしか思考のループに嵌まってしまった。

何回も巡っていくうちに、言い様のない得も知れない感情だけがぶくぶくと大きくなっていく。

そして……ある日の晩。

夢を見た。

真つ暗な闇の中に、誰かが佇んでいる夢を。

自分は地面らしきところに倒れていて、身体も動かせず、最初は黒い汚れたスニーカーしか見えなかった。

そして、不意に身体が動くようになる。

そのチャンスを逃さずに、その人の顔を見ようと頭をあげると。

……そこには、笑う僕の顔があった。

そこで、飛び起きた。

身体中汗にまみれて、心臓が痛いくらいドクドクと早鐘を打っていた。落ち着かない心臓を何とか宥めながら、頭を冷やす目的も含めてシャワーを浴びた。皆が起きてくる前にさっさと浴びて、また起こされるまで眠ろうとした。

でも、眠ろうとする度、先程の夢の人物の笑顔が過って仕方がない。

大人になった僕、というのではないだろう。僕の髪は茶色に近い色だし、あの人物の髪の色は黒色だった。じゃあ、あの人は一体誰だ？

結局その後は眠れず、現実逃避気味にあの人物について考えていた。

いつしか聞いたドツペルゲンガー……ではないだろう。見たら死ぬって聞くし、そもそも僕自身ではなさそうだった。じゃああれは顔が似ているだけの別人ということだろうか。そんな知り合いは Risk 以外にはいない筈なのに、何故……？ 記憶のことでいつぱいいっぱいなのに、これ以上負担を増やさないでくれ……

そこでふと、まさか、あれが今このタイミングで現れたのはこの記憶と関係があるんじゃないか、という考えに行きつく。でも、先程も言った通り Risk 以外に顔が似ている人なんていない筈。

………忘れていたり、しなければ。

その言葉が浮かんだ瞬間、ドクンと心臓が跳び跳ねた。

明瞭な記憶なのに、忘れていることがある……？ おかしいだろう？ 忘れているなら、何故あれの事だけがピンポイントに抜け落ちているんだ？ それじゃまるで、隠そうとしているようじゃないか。

いや、もし本当に『隠そう』としているなら？

僕にあれの存在を隠して、なんの意味がある？

—— 『君はもう充分、苦しんだ。君はもう生きていいんだ』

不意に一瞬、ズキンと、酷く強い頭痛して、そんな言葉が頭に浮かんだ。

………いや、この感覚は、《思い出した》というのが正しいのだろう。

でも、僕はこんな言葉を聞いたことなんてない。そんなこと、記憶にはない。

……聞いたこともない筈の言葉を、思い出した？

しかも、こんな、以前まで罪に囚われ続けた僕の苦しみを理解したような、それでいて尚且つ生きていいと肯定する言葉を？

—— 『君のLOVEとか全部私が持つていくから、気にしないでね』

また一瞬、頭痛がして、そんな言葉も続けて思い出す。

そしてぼんやりと、考える。

…… 『持つていく』 って、なんだ。

僕が…… ゲームだった時に私が稼いだ、Level Of Violenceを、持つていく……？

『気にしないで』って、なんだ。

自分がLOVEを持っていくから、もうそのLOVEに囚われずに生きろってことなのか？

……………じゃあ。

今、僕がいるこの居場所は。

あいつに、用意されたもの……………？

それだけならば、どんなにいいプレゼントだったか。ゲームから逃れたくて仕方がなかった僕には、喉から手が出る程欲しかったものだから、無償でくれるというなら直ぐに手を伸ばす程欲しかった。

でも、きっとそうじゃない。

ただの僕の代わりなら、僕も何の気兼ねも無しに生きていけた。

そうじゃなかった。

記憶に違和感があるところが幾つもあること。M e t t a t o n や周りの友人達との食い違いがあること。

例えば、まだF r i s k が小さい頃にカルボナーラやハンバーグを振る舞った記憶がある。けど、いくら二度目の人生と言えど僕は双子の姉だ。そんな小さい子供に、火を使った料理がスムーズに出来るか………？

そんな訳がないだろう。

……じゃあ。

これは。

一体、誰の記憶だ………？

そこで、一つだけその疑問に対する完全な答えが浮かんでしまった。
気付きたくなかった最悪の答えに、頭が勝手に行き着いてしまった。

——まさか。まさか、まさかまさか。

この記憶は、元々アイツのものだったんじゃないのか。

それならば。

……………この居場所は、元々アイツの……

それに気が付いてしまった瞬間、僕は発狂した。

寝ていた皆を叩き起こしてしまふほど暴れて、叫んだ。

こんなことに気が付きたくなんてなかった。

僕が生きてきた総てが否定されてしまった。

『自分はその人の代役で、此処に居る筈のない偽者なのだ』と、証明されてしまった。

……………Friskの本当の家族になるはずだった人の立場を奪って、僕本来の役目を押し付けてしまった。

モンスターを全て殺した残酷な罪人に、してしまった。

それに対する罪悪感がストレスになっていたり、かもしれないなら、この症状にも納得がいく。だから、僕は医者に進められた通院を蹴った。

少しでも、あの人への贖罪になると思ったから。

今考えれば不思議でたまらない。何故、気付けなかったのか。

ただの奇跡なんかで、僕が救われることなんてないじゃないか。そんなこと、わかってた筈だろう。またこの世に産まれてこれた喜びで、頭が麻痺してたのか？

僕は決して救われない死者だ。それを無理矢理蘇生するなら、相応の代償があるに決まってるのに。

……生きることを望んじゃ、いけなかったのに。

洗面台から顔を上げて、備え付けてある鏡に自分の顔を映す。

鏡に映る顔に直接目線を合わせられない。顔が似ているからか、笑うあの人の顔がどうしても重なってしまって、涙が出て来てしまう。

そんな口に出せない罪悪感が、涙になって流れていく。

まだゲームだったあの日に、あの忌々しい皆殺しの道を歩んだ果てに、Sansと相対した時に背に感じたものよりずっと重い罪の念に押し潰されて、足が使い物にならなくて、立てなくなってしまう。

……ああ、それにしても、酷い顔だ。此処のところ眠れていなかったから、また隈が濃くなっている。食事もゼリーで済ませてしまったり今みたいに吐いてしまう所為か、随分痩せてしまった。

こんな顔じゃ、あの人の代わりにはなれないのに。

………やつと自分が居場所を奪った事に気付いて、泣いて、悔やんで、悔やんで悔やんで悔やんで………

それから、僕は、あの人の代わりとして生きることにした。

あの人が僕の代わりをするというのなら、僕もあの人の代わりをしなければ、釣り合
わない。

それぐらいしか、あの人への贖罪が思い浮かばない。

その次の日から、僕は何事も無かったように振る舞い始めた。

皆を救った天使として、親善大使の仕事をした。あの人は大人だったみたいだし、沢
山仕事をこなすだろうと思って仕事を増やした。

Friskの姉として、Friskを支えた。沢山相談に乗った。時には仕事も無理
矢理奪って休ませたりした。その分は僕がやった。

病気になったときなんかは本当にヤバイと感じたときだけ病院にいった。薬を飲ん
で、あとは何ともないように、病気になっただけに見せた。

きっとそれが、あの人ならきっとやるだろうと思って。

……正直、辛い。

生きることとはこんなにも苦しいことだったのか。こんなにも辛いことだったのか。

こんな筈じゃ、なかったのに。

……一層のこと、死んでしまえたら……

手に持っていた、カッターナイフを持ち上げる。

……この間Asから届けられたこれは、あの人が失くしたものなんだろう。ゲーム風に言うならば、差し詰め『九人目の人間の遺品』、といったところだろう。手放しがたくて、結局返しそびれてしまった。

他でもない、あの人の、あの人が遺こした品。そう思ってしまったから。

記憶では、Friskを庇った時に咄嗟に投げ捨ててしまったんだっただか。あの橋の下はゴミ捨て場になっていた筈だし、あのゴミの山から探すのは骨が折れたはずだ。綺麗にはなっているが、きつと長い間水に浸かっていたんだろう、錆があちこち見え、備品の確認用に割り振ったナンバーは消えかけてしまっている。辛うじて『No. 2』と読めるぐらいだ。

刃を、押し出す。カチカチ、という音を立てて、段々刃が出てくる。

この部分は取り替えてくれたのか、真新しい刃が納まっていた。

傍にある窓の外から入り込む外灯の光が、翳したカッターナイフに反射して煌めいた。

……これなら、死ぬるだろうか。

これを使うならば、あの人は死ぬことを赦してくれるだろうか。

カッターナイフを逆手に持ち、左腕の袖を捲る。

そうして現れた傷一つない手首に、目をやる。

……このカッターナイフで、この手首を切れば、きつと勢いよく血が吹き出るだろう。生憎と、痛みには慣れていてからどんなに深く抉つても呻き声だけで済む。

誰にも気付かれずに、僕は出血多量で死ぬ。

——……あの人に、死を以て罪を償える。

右手に持った、カッターナイフを頭の上に持つていく。なるべく深く深く刺さるように、高く、腕を伸ばして。

今度こそ、今度こそは。

死にたい。

—— 『君のGold^富も、HP^力も、EXP^罪も、LOVE^愛も……私が全部、持って
いくから』

こえが、する。

優しくて、空っぽな声が。

——『だから……どうか、どうかあの子の……Friskの傍にいてあげてね。ずっとFriskの傍にいてくれた、相棒さん』

「……………う、ぐっ……………」

……………知らないはずの、言葉がまた、フラッシュバックする。

自分の手首を切ろうとしたカッターナイフの刃は、寸前で止まった。

……………まただ。また、この言葉に邪魔された。

こうして自分を害そうとする度に、この言葉が呪いのように張り付いて、僕の手を絡め取って邪魔をする。

死んで償おうとする僕を、邪魔する。

僕に『生きる』と、言外に伝えてくる。

力が抜けた右手から、カッターナイフが滑り落ちて、カランという音を立てた。

……きつと、幻聴だつてことは分かつてる。あの人の声なんて、思い出せないから。本当は死にたくないと思望んでいる自分が聞かせるものだつて、分かつてる。

だけど、もし。

これが、あの人が見せる幻なのだとしたら。

そんなのを見せる前に、質問に答えてほしかった。

鏡をもう一度見て、笑みを作る。

夢の中の彼女は、こんな笑い方だっただろうか。そう思いながら、笑顔を作って、問いかける。

「僕は……一体、誰として生きればいい？」

ぽつりと、僕の口からそんな疑問が溢れ落ちた。

「きつと、この人生は、貴方からもらったものなんだろう。でも、僕はもう、どうやって生きてらいいのかわからないよ」

これがもし、ただのゲームだったなら。全て『Partner』の所為にして、お前は最低だなんて言えたのに。

紛れもない現実だから、どうしようもない。

「貴方は気にするなって言ったけど、そんなの無理だよ。苦しくて、仕方がないよ……」

でも、明日をまた生きるために、僕はこの儀式に近いものを行わなければ。

自分で作り出した虚像に、問いかけなければ。

色を失くしてしまった灰色の明日を、歩いていけないから。

「ねえ………僕は、誰として生きていけばいいの……？」

光の反射で作りに出されただけの虚像は、当然何も応えずに僕の顔を映し出している。

空っぽな笑みのまま、此方を見つめ返している。

似せる為に細められたその目から、涙が一粒、頬を伝って落ちた。

E p i l o g u e o f F r i s k 前

〔F r i s k〕

……いつから、だっただろう。

幸せで一杯だった筈の心に、ぽっかりと、穴が空いてしまったのは。

『穴が空いてしまった』と気付いてしまったのは、いつかの朝、目を覚まして、窓から太陽の光が射し込む部屋を見渡した時。

——…：…寂しい、と感じた。

一緒のベッドで寝ていた筈のCharaがいるのに、何を考えているのだろうかと思っただ。けど、一度自覚したそれは、どうしても消えてくれなかった。

何が原因で寂しいと感じるのか、原因を探って何度も記憶を思い返してみた。でも、

記憶では誰かが欠けるようなことは無いし、寂しいと感じることなんてない筈だった。それなのに何でか、よく分からない感情に後ろ髪を引っ張られてしまって、それに気取られてしまう。

初めは小さかった筈のそれは、日に日に大きくなっていくばかり。何をしたって小さくなってくれることはなくて、皆が傍に居て、笑いあえる幸せな日々の筈なのに、空いてしまったその穴から総て零れ落ちてしまう。

ぼくの心が、空っぽになっていく。

皆と一緒に何をしたって、『嬉しい』『楽しい』と感じられなくなっていく。

……それは、嫌だった。

その為に、穴を埋めようとした。思い浮かんだことを全て試してみた。

皆と沢山話すようにした。

……駄目だった。

皆と一緒に居る時間を増やしてみた。

……駄目だった。

もっと沢山の人と話すようにしてみた。

……駄目だった。

ぼくが思い付くもの全て、駄目だった。

そうして悩んで悩んで悩んだ末、ぼくは一番最低で最悪な案に辿り着いた。

……RESETしてしまおう、と。

つまりは、あの日に戻って、この穴の原因を探ることを思い付いた。多分この時のぼ

くは、この穴について考え込むあまり、おかしくなつてたんだと思う。ここまで生きてきた日々が失くなつてしまふけど、こうやってやり直すのは二回目なんだし、また元に戻せるだろう、なんてそんな自分勝手な気持ちで、世界をもう一度やり直そうとした。

………だけど、それは結局失敗に終わった。

何故か、出来なかつたんだ。一度あの日をやり直した時は出来たのに。

あの日をやり直す方法は分かつていた。ただ、ぼくが強く『やり直したい』つて願えばいい。そうすれば、ぼくの前に二つ選択肢が出てくる。そのどちらかを選べば、ぼくはあの日に戻れる。

これを知つたのは、一度目に後悔を残したまま地下世界を去つて、半年ぐらい経つたとき。Charaの『あの日の夕日を皆で見たかつた』つて言葉が、そのときのぼくの心に突き刺さつて抜けていなかつた。Charaはただでさえあの地下世界に深い思い入れがあるから、皆とあんな形でお別れするのはぼくよりもずっと辛かつたんだろうと思う。

そう考えた時、ぼくは……『やり直したい』つて、月に強く願つた。そうしたら、二つの選択肢が現れた。『LOAD』と、『RESET』の二つが。

最初は動揺した。どうしてこんなものが、つて。まるでゲームの選択肢みたいじゃないかって。

……でも、もし本当にゲームみたいにやり直せるなら？

あの日、ぼくは道端や扉の前とかにあった『光』で、セーブみたいな事をした。そのセーブしたところから、やり直せるとしたら……？

皆を幸せに出来る未来を目指せるんじゃないか？

最初は、何を考えているんだって踏みとどまった。そんなこと出来るはずないし、皆が生きてきた時間を否定する気なのか、つて自分に言い聞かせて。でも、日に日に暗くなつていくCharaの姿を見るのが凄く辛かった。痛々しくて、見ていられなかった。

結局ぼくは一年間悩んだ末、『LOAD』することを選んだ。ぼくの目にしか映らないそれを、割つてしまいたいそうならに強く叩いた。そうしたら、次の瞬間、ぼくは……あの日最後にセーブをした、王様と戦う前に戻つてきていた。

そこからは、Charaの手を引つ張つて、地下世界を駆けずり回つて、皆と一緒に地上に出て……ここまでできた。

そんな奇跡を起こしたそれが、現れなかった。

いくら強く願っても、念じても、二度と、暗闇の中でぼんやりと光っていたそれは、現れなかった。

シヨックだった。散々悩んだ末に見つけた頼みの綱でもあったそれが、使えなかったんだから。諦めずに何度も何度も願っても、出てこなかった。

まさかと思つて、休みの日に地下に行つて、ぼくに見えていた光を見に行つてみた。そうしたら案の定、あの日見えた筈の光は元々無かつたように消えてしまつていた。お城から Ruins で最初に見つけたところまで見に行つたけど、一つも見つからなかつた。

まるで、ぼくにはもう、それを使う資格はないとも言われたようだった。

奇跡の力さえ失くして、とうとうこの胸に空いた穴をどうしたらいいか分からなくなつたばかりは、親善大使の仕事に没頭することにした。何かに熱中していれば、その間だけはその穴の事を忘れられることに気付いたからだ。本当は趣味なんかを作れば良かったんだらうけど、そんなのを作っている暇は無かつたし、親善大使としての仕事がか

山程あつたから、ちょうどいいや、と思った。

我ながら最低だと思う。心の穴を埋めるために、皆を口実に行っているんだから。でも、こうでもしないと、何時かこの穴に呑み込まれてしまいそうだった。

そうしているうちに、仕事を続けて休憩時間や睡眠時間を削ってしまふようになって、あんまり疲れが取れなくなってしまった。皆に心配される始末だ。そうやって心配されると、『皆を利用して』という罪悪感で一杯になって、それを誤魔化す為にまた仕事に熱中してしまうようになった。

悪循環だ、と我ながら思う。でも、休憩を取ると、あの穴の空っぽになっていく感覚が襲ってきて、立てなくなってしまうから、こうするしかないのだ。

せめて、この穴の原因さえ分かれば。

何度もそう思っても、どうしようもない。

不意に目が覚める。寝過ぎか寝不足か、重たい身体を動かして起き上がる。ぼんやり

と物があまりない静かな部屋を見渡し、時計を見て、その針が指す時間を見て一瞬寝過ぎたかと思ふ。そこで、そう言えば今日は私は休みだったな、と思ひ出す。

いらぬ焦りで眠気が覚めてしまい、二度寝する気にもなれずにベッドから出た。一応用意しておいた私服に着替え、一階に下りると、誰も居ないリビングのテーブルに簡単な朝食が用意してあつた。添えてあつた置き手紙の『良く噛んで食べてね』という内容をさらつと読んで、トーストを口に放り込む。少し冷めてしまつていたが、朝食は美味しかった。

食べ終わつた皿を洗つて拭いて、片付けてしまう。その後は部屋に戻つた。空気の入れ換えをしようとする部屋の窓を開けて、椅子に腰かけて机に向かう。仕事の邪魔にならないように整頓されたその机の上に、持ち帰つてあつた書類を引き出しから出して広げる。

……休みの日はどうしても暇になつてしまふし、一人になつてしまふことが多い。だから、家でもやれるような簡単な書類を前日に持ち帰つてきてやることにしている。そうすれば、あの穴を思い出さずに済むから。

ペンを持つて、いつものように書類を進める。ここはこうしなくては、あれはあつなくては、と考えながら進めていくうちに、不意に、ぷつん、と、集中の糸が切れてしまった。

いつもならその場合は気合いを入れ直すけど、今日は何でだか上手く気合いが入らず、机に突つ伏してしまふ。きつといつもより寝過ぎてしまったのが駄目だったんだろう。どうにも気持ち切り替わらなかった。

でも、このままだとまたあの感情がやってきてしまう。どうしたものか、と考えながら、備え付けの引き出しを開け閉めする。そして一番最後の段を開けた所で、その手が止まった。

「……………あ」

そのまま、その段に入れてあった白い箱に釘付けになる。赤いリボンが掛けられたそれは、長い間放置してあった所為で埃を被つて灰色がかっていた。ついこの間誕生日を迎えて、色々貰ったからか、妙にそれが気になった。

この箱は、まだ私達が孤児院にいた頃に Chara に貰ったもの……………だった筈。

懐かしくなつて箱を取り出して、ゴミ箱を手繰り寄せて埃を落とす。掛かっていたリボンを解いて、蓋を開けた。大事にしまわれていたそれが、久しぶりに陽の目を浴びた。

きらりと、並べられた水色、橙色、紫色、赤色、青色、緑色、黄色が、それぞれ太陽の光に反射した。

当時の私は、こんなに綺麗で素敵な物を貰ってしまったのが凄く嬉しくて、使うのが凄く勿体無くて、どうしようか迷って、結局こうして大事にしまっておくことにした。確か、何時かこれが似合う素敵な人になれた日に着けようってことにしたんだっけ。結局、こんな隅っこに追い込まれて、忘れてしまっていたけど。

……私も、これを贈ってくれたCharaも、もうすぐ大人になる。あとほんの二、三年ぐらいで。その時、私はこれが似合う『大人』になっているんだらうか。成れている未来が想像できない。これじゃあ、ずっと着けられないままだ。

どうせ着けられないのなら、と思つて、左腕にその腕輪を着ける。小さい頃はまだブカブカで直ぐに取れてしまったそれは、私の手首に違和感なくはまった。Charaは私が成長してから着けることを見越していたんだらうか、ちようどいい、ピッタリなサイズだった。

着けた腕輪を、窓から指す光に翳す。そのままそれを眺める。

……やっぱり、いくら私達が似てるからといって、私にはまだあの人みたいには似合わない——

眺めながら、そんな事を思つて、はたと気付く。

……—あの人って、だれ？

「うっ」

ズキン、と、思わず頭を抱える程強烈な頭痛がした。

……誰って、Charaでしょ。何を考えてるんだ、私は。

そういえば、最近Charaがこれをつけている所を見たところがない。お揃いの腕輪を、彼女も持っている筈なのに。どんな時も、それこそあの日も着けていたのに。何処へやってしまったのだろうか？

どうしても腕輪の行方が気になった私は、時計を見る。今の時間なら電話しても大丈夫だろうか、と思つて、サイドテーブルに置いておいた携帯を手に取り、Charaに電話をかける。数回の呼び出し音の後に、プツツと電話が繋がった。

『…………おそようFrisk。どうかした？』

「あ、おはよう、Chara。今大丈夫？」

『平気だけど』

電話越しに、Charaの声が聞こえた。一応時間の有無を訊ねてから、本題に入る。

「あのね、今、前の誕生日にCharaがくれた腕輪を引つ張り出してきて着けてるんだけど……Charaもお揃いのやつ、持ってたよね？ それって今何処にあるの？」

『えっ、腕輪？』

「うん」

突然電話をかけてきたかと思えばそんな話で驚いたんだろう、困惑した声が聞こえた。そして、少しの沈黙が流れる。

『……………何処にやつちやつたかな』

「えっ」

そして、その沈黙の後のCharaの返事に、今度は私が驚く番だった。

『覚えてない………つていうか、何処にやつちやつたか記憶にない。お揃いのやつをあげて、あの日も着けてたのは覚えてるんだけど……その後、何処にやつちやつたか分かんない。でも部屋で見かけた記憶がないから、最悪失くしたかも』

「そんな………」

あんなに大事にしていたのに、Charaはそう言い切った。本人からのまさかの返答に、愕然とする。

『………話はそれだけ?』

「え、あ、うん………」

『そう。ならもう切るけど』

「うん、いいよ。休憩、ちゃんと取ってね」

『Friskにだけは言われたくないよそれ』

最後に軽口の応酬をして、電話を切る。耳に当てていた携帯を下ろして、ぼんやりと考える。

『記憶にない』って、『失くした』って、何でそんな平然として言っちゃえるんだろう。あんなに大事にしていたのに。つけてない日がないくらいつけていたのに。割りと整頓されたCharaの部屋で見かけてないってことは、本当に失くしちゃったのだろう。しかも、あの日から見てないみたいな事言ってたけど……もしかして、地下世界の何処かに転がってるの？

そう考えると、何だか嫌な気分になる。私はこんなに大事にしていたのに、まさか杜撰な扱いを受けていたのがそんなにショックだったのか、と自分の事なのに思う。

……——探しに、行かないと。

そんな考えが、自然と頭に浮かんだ。

幸い此処からEbott山まで、そこまで距離があるわけじゃない。どつちかと言えば頑張れば歩いていけるぐらいの距離だ。それにまだ日の入りまで時間は充分あるし、たまには身体も動かさないと鈍ってしまう。運動にはちようどいい。

誰に言い訳するでもないのにそう考えながら、さつさと必要最低限の用意をする。出掛けてくるといふメモを残して、家を出る。そうして、まだ暑さが残る空気の中を歩きだした。

Epilogue of Frisk 後

かなりキツイ山道を何とか登って、あの日皆と夕日を見たところまでやってきた。その直ぐ傍にある地下への入り口に立つ。ぽっかりと口を開いているそこを覗いて、そういえばあの日もこんな夏の終わりだったことを思い出して懐かしい気持ちになりながら、久しぶりに足を踏み入れる。中は、そろそろ秋がやってくるとはいえ夏なのにひんやりとしていた。

此処まで来るのに、あの日ママに手を引かれて通った道を通ってきた。道の端まで探してみたけど、腕輪は見つからなかった。なら、後はこの地下世界にしかないはず。

……これで見つからなかったら、すっぱり諦めよう。

そう思いながら、腕輪を探し始める。

まず、New Homeの中を探した。バリアがあつた部屋も、地下に残つた少数のモンスター達によつて未だに金色の花が咲き誇る玉座の間も、今はもう家族の元へ返された子供達の遺体の入つた棺があつた部屋も、陽光の差し込む廊下も、そしてあの日より家具が少なくなった家の中まで。そこに繋がる道の端々も、隈無く。

見つからない。

おかしいな、と思いながら立ち上がり、ジーンスについた汚れを払う。失くしたならここにあるだろうと思っていたのに。でも、ここは何回か出入りしているし、あるならその時見つけれられた筈だから、此処にはないのかもしれない。

……もう少し、遡って探してみよう。

次に、COREからHotlandを探した。入り組んだCOREの中も、Mettonが建てたホテルの中も、番組に巻き込まれた時に使ったセットの中までは流石に探せなかったけど、出来る限りのところまで探した。

見つからない。途中でCOREの制御を担っているモンスター達と会って、見ていなか訊いてみたけど、知らないと言われてしまった。此処を通るときには着けてたと思うんだけど……仕方ない、次だ。

今度は、Waterfallを探した。燃え尽きてしまったUndyneの家があった所も、研究所の中も、UndyneとAlphysが結ばれたゴミ捨て場も、Und

yneに追い掛けられた橋も、所々にある茂みの中も、願いの間も、探した。

……見つからなかった。

途中、Shyrenとあの日研究所で会った彼女のお姉さんの発声練習を訊いた。優しい歌声が響いて、久々に心が揺さぶられた。終わった後に二人に訊いてみたけど、また知らないと言われてしまった。手伝おうかと尋ねられたけど、断った。折角のお姉さんとの時間なんだ、邪魔しちや悪い。そう言えば、お姉さんと会うのはなんだかんだあの日以来だった。あの時は、Charaが進んで話し掛けていったのにちよつと驚いた。変わりが無いようで良かったと言うべきだったんだろうか。

ないだろうな、と思いつながらもSnowdinも探した。Papyrusと戦ったあの道も、住むモンスターが少なくなつた街も、Papyrusが用意したパズルの端も、未だに雪が積もる道も、隅々まで。

案の定、見つからなかった。街でAmalgamatesと住むモンスター達に話しかけてみたけど、見ていないようだった。此方でも手伝いの申し出があつたけど、断つた。

ふと、地上にも建てられているS a n s とP a p y r u s の家を見上げる。ここでは、P a p y r u s と戦った後に倒れちやつたC h a r a を一人で介抱したんだっけ。とんでもない方法で料理を作ろうとするP a p y r u s を止めるのが大変だった。その後無事に仲直りできて、本当に良かったな。

「見つからないなあ……」

溜め息と一緒にそんな言葉を呟きながら、空いている石の扉を見上げた。

……腕輪を探して、とうとうR u i n s まで戻ってきてしまった。

きつと此処にはないと思う。けど、もしかしたらあるかもしれないし……

少し悩んだ末、取り敢えず探してみることにした。無かつたら無いで、諦めよう。見つからないのなら仕方ないし……

R u i n s に入り、ママと戦った部屋を見渡して、懐かしい気持ちになる。此処でママと戦った時は、本当に怖かった。怖い顔をしていたママもそうだけど、何よりも、私を庇って、ママの攻撃でC h a r a が傷付いていくのが。戦った後、火傷だらけのC h a r a にママのパイを押し付けたのが懐かしい。

そんな風に懐かしみながら、H o m e までやってきた。此方も家具が少なくなつて、

多少埃が溜まってしまっているが、あの日に感じたほつとする暖かさはまだ残っていた。

Homeの中を歩き回って、腕輪を探す。台所もリビングにもない。あの日泊めてもらった部屋も探したけど、ない。無いとは思いつながらママの部屋も見る。家具の無い空っぽな部屋は、探すまでもなく、腕輪は見つからなかった。

此処にもないのか、と不安になる。もしかしたら本当に何処かにいつてしまったのかも知れない。一体何処に……

そこでふと、どうしてこんなに腕輪に固執しているんだろう、と思った。

自分のものでもないのに、どうしても見つけないといけない気がするのは何でだろう。まるで、昔お母さんの形見のネックレスを失くしてしまった時みたいな焦燥感がある。あの時は絶対見つけなくちゃ、って思ってたけど、それと似たような気持ちがある。誰かの形見つて訳じゃないのに、どうしてこんなに……？

『Frisk』

「えっ？ いっ……」

また、頭痛がした。

……今、誰かに名前を呼ばれた……？ いや、此処には私以外には誰も居ない。そんなことは絶対にならない。でも、何だか聞いたことのある声があったような……

もう一度呼ばれるだろうかと思つて暫く耳を済ましてみても、声は聞こえない。空耳か何かだったんだろう、と思いつながら、Homeを出て、腕輪探しを続行する。結局何でこんなに腕輪に固執しているのかは分からないまま、もやもやしながら腕輪を探す。腕輪が見つかれば分かるだろう、と無理矢理自分を納得させて、あつちこつちに動き回る。

枯れた木の落ち葉の山の中にはなかった。

あの日玩具のナイフを拾った所にはなかった。

茸のような形のスイッチを押して進む廊下にはなかった。

リボンを拾った廊下にもなかった。

Froggit達がいた部屋にもなかった。

Napstablookと友達になった部屋にも無かった。

蜘蛛達からドーナツを買った部屋にも無かった。

チーズが置いてあった部屋にも無かった。

喋る岩がいた部屋にも無かった。

下の落ち葉が地図になっていた部屋にも無かった。

岩を押して進む部屋にも無かった。

落とし穴になっていた部屋にも無かった。

落ち葉の山が所々ある部屋にも無かった。

モンスターキャンディーが置いてあつた部屋にも無かつた。

長い長い廊下にも無かつた。

見つからないまま、ママに手を引かれて進んだ針山の迷路まで戻つてきた。今でも鋭く聳え立つ針山の中を、この間来たときはどうやって進んだのか思い出しながら慎重に進む。何とか抜けた所で、ほつと息を吐いた。

……………そう言えば、Ruinsを出てからは、専らCharaと手を繋いでいた気がする。私が寂しくないように、怖がらないように配慮してくれたんだらうか。私の手を握る大きな手に、酷く安心していたことを思い出した。

「……………え？」

……………大きな手……………？

『Frisk』

ズキン

「うっ、ぐ……………」

自分が何を考えているのか驚いて足を止めた途端に、また頭痛がした。さつきから時々頭痛がする。風邪を引いている訳でもないのに、崩れ落ちそうになる程の痛みが襲ってくる。

……『大きな』って……何を考えているの、私は。あの日のCharaの手は私と同じぐらいだったでしょう。何で大きな手なんて思ったの？

何とか頭痛に耐えながら、歩みを進める。

ぼつんと継ぎ接ぎのマネキンが立っている部屋にも無かった。

やけにスイッチに印が付けられている部屋にも無かった。

ママに最初にパズルについて教わった部屋にも無かった。

一番最初に、あの『光』を見つけた部屋にも無かった。

「()にもない、か」

結局此処まで探したのに、何処にも腕輪は見つからなかった。あるとしたら、此処までだろうって予想が大きく外れてしまった。本当に何処かに行ってしまったのか……？

そう考えていると、不意に風に頬を撫でられる。風が吹いてきた方を見ると、私が一番最初にママに助けてもらった部屋の方からだった。そう言えば何時か『光』を探しに来たときは、あつちには行かなかつたなと思ひ出す。別にその時この先に用事は無かつたし、何より焦っていたから、見ずに引き返しちやつたんだっけ。

……………もしかして、この先に……………？

いや、そんなわけではないでしょ、と自分の考えを否定する。『あの日も着けてた』って言うってたのに、なんで私達が落ちてきた部屋にあるって考えたんだ。

でも、あと探してないのはあっちの部屋だけだし……もしあつたらどうするのか。そんな二つの考えがせめぎあつて、結局、一応見に行くことにした。もしあつたら、嫌だつたから。

一つ部屋を通り抜けて、一番最初に落ちてきた部屋にまで進む。すると、入つた途端に花の良い香りが鼻を擽つた。嗅いだことのある、優しい匂いだ。

その匂いに吊られるようにして、光の差し込む花畑の前に立つ。まだ日はそれなりに高いところにあるらしく、私が落ちた穴から差し込む光は、花畑全面を照らしていた。蔦に覆われた古ぼけた柱が、神聖な雰囲気醸し出していた。

しやがみこんで、花畑の中を無いとは思いつつ花を掻き分けて腕輪を探す。まるで四つ葉のクローバーを探しているみたいだと思ひながら、花を傷付けないようにしつつ一心不乱に手を動かしていると、

ちやり

「あ」

左手に、明らかに植物とは違う感触があつた。

その感触を頼りに左手を動かし、当たった物を掴む。そうして、持ち上げた。

「……………あつた……………」

左手に掴んだのは、私が探していたもの。七色のハートが光る、腕輪だった。長い間土の上にあつたからか、金属の部分が少し鈍い色になつていた。

漸く見つけたそれを、両手で持つて光に翳す。ああ、やつと見つけた。これこそ、あの人があの日着けていた腕輪だ。

込み上げる達成感からそれを眺めていると、ずきり、と心が何でか痛んだ。

「えっ」

ずきずきと痛みを発する心に困惑する。気の所為だろう、と腕輪から目を逸らした所で、ある疑問に行き着く。

……………どうしてこんな所にあるのだろう、という、至極真つ当な疑問に。

だって、可笑しい。Charaは『着けていた』って言っているのに、私の記憶の中でもちゃんと着けているのに、どうしてこんな所に？ あの日は落ちてきた時だけしか

来てないし、それ以来だつて入った事はなかった。なのに、何で……？

この疑問に対して浮かぶ答えは少ししかない。『Charaが以前此処に来た事を忘れてる』か、『嘘を吐いている』か。嘘を吐いている、つて事はCharaに限つてないと思うし、可能性は低いけど……忘れてる、つてこともないと思う。なら……

何で、これは此処にあるの？

長い間、誰も失くしたことに気付かずに此処に落ちていたの？

これじゃ……あの日此処にCharaが来ていたようじゃないか。

でも、あの日Charaは、私と一緒にママに手を引かれて山を降りたはず。此処に用なんて無かった筈なのに、何でこの花畑に？

沸き上がる矛盾に、急に怖くなる。どうすればいいのか分からなくなる。立ち去つてしまえばいいんだろうが、足が竦んで動けない。

もう一度手の中の腕輪を見て、自分の手首に嵌まるそれと見比べる。

……間違いなく、私とお揃いの腕輪だ。だって、あの人があの日まで毎日着けていたんだから、見間違えう筈がない。

よく見ると、アジャスターの部分が壊れている。これを見る限り、着けていたけど、壊れているのに気付かないまま此処に来て、それで落としてしまったんだろうか。あの日に拾った、他の子供達の遺品のようだ、とぼんやりと思う。

——……もし本当に誰かの遺品なのだとしたら？

ズキン

「あ、いつ」

ズキン

また頭痛がして、その場に座り込んでしまふ。

さつきから頭痛が酷くなっている。気の所為じゃなければ、私の考えを邪魔するように頭痛がするような気がする。そんな事はないとは思うが、さつきからそうとしか思えないタイミングで頭痛がする。

まるで私に、これ以上考えさせないようにする為に。

もしそうなら、この頭痛は何を阻もうとしているの？

私に何を気付かせないようにしているの……？

まさか……私の、穴について……？

ズキンと、一層頭痛が強くなる。どうやら正解みたいだ。私に『考えるな』と訴えてくる頭痛に耐え、思考を回す。

長年蓋をしてきたそれに、こんな形で向き合うことになるなんて。

そう、頭の片隅で自嘲した。

穴が空いたことなんて、今まで経験したことが無かったからどうすればいいのかわからなくて、見ないように蓋をしていたのに。

……………いや。

まで。

私は本当に、この穴を知らないの？

痛む頭を回し、よく思い出す。そんな事はない、ある筈だ。私は、知っている筈だ

……………！

そこで、小さい時に、真っ黒な服を着てある式に参列した事を思い出す。

そうだ、この穴は…………お母さんとお父さんを亡くした時にも、あった……………！

この穴は……『大事な誰かを喪った喪失感』だ。

長い間目を逸らしていた穴の正体に、その時やつと気付けた。

どうして今まで分からなかったんだらう。あの時だつて悲しくて苦しい思いをしたのに、何で思い出せなかった……？

暫く、当時の事を思い出しながら考える。

色々な事があつたから、いつの間にか忘れてしまつていたんだらうか。いや、そんな筈がない。それなら今頃私の穴は埋まつている。あの時は確かに忙しかつたけど、今ほどじゃないし。なら何故……？

そこまで考えて、ふと見覚えのある人影が過る。

……もしかして、Charaが傍に居てくれたから……？ いつも私の傍に居てくれたから、穴が自然と塞がったの……？ いやでも、それじゃ今穴が空いているのは何で？ そもそも皆傍に居てくれるのに、何で『喪失感』なんて私は感じているの？

頭痛も相俟つて、だんだん頭が混乱してきた。それでも無理矢理頭を回し続けて、とある考えに行き着く。

私は、『誰か』を忘れていて、その『誰か』が居ないことが、悲しくて寂しいの……？

そんなわけない、と即座に否定する。私は誰も忘れてなんかいない。皆私の傍に居るのに、何でそんな事を思った!?

思考がぐちゃぐちゃになって、泣きそうになる。でも、この胸の『喪失感』について説明が出来るてしまう。妙に納得できてしまう。

それならさつき、『大きな手』と考えたのは、その『誰か』だったからなの？ C h a r a じゃなくて、誰か別の人が、あの日私の手を引いてくれたの……？

違う、あの日私の手を引いてくれたのは C h a r a だと否定して、あの日の記憶の中の C h a r a を良く思い出そうとする。

なのに、

「……………嘘、でしょ」

あの日の C h a r a が、突然思い出せなくなった。

それだけじゃない。あの日まで生きてきた中でのC h a r aの姿まで、霞んでしまった。

そこに居たのが本当にC h a r aだったか、分からなくなってしまった。

その事実を信じたくなくて、酷くなってきた頭痛の中で一生懸命思い出そうとする。ただ一度そう認識してしまったからか、そこに居た誰かの輪郭がぼやけて、思い出せない。

生きてきた全てを、否定されたような気がして、眩暈がする。

………なんで。

何で、思い出せないの。

これじゃあまるで、本当に今まで傍に居たのは、別の人みたいじゃないか。

それじゃあ、

ずっと私の傍に居てくれたのは、

私の手を引いてくれたのは、

私の名前を呼び続けてくれたのは、

支えてくれたのは、

私の……ぼくの、姉だったのは……

………一体、誰……？

.....
さあ、
思い出すんだ

『F r i s k』

………不意に、
声がした。

「……………あ
」

誰よりも優しく、ぼくの名前を呼ぶ声が。

——その声を、ぼくは知っている。

「ああ、あ……………」

脳裏に、誰かの姿が浮かぶ。

——その姿を、ぼくは……………知っている。

「あああああ……………」

その人は、誰よりも優しい、ぼくの見知った微笑みを浮かべて、

『愛しているよ、
Frisk』

そう、
告げた。

何回も言ってくれた、その言葉を。

「ああああああああああああああああああ………!!!」

思い出してしまった。

何時だって、一緒に居てくれた人を。

何時だって、ぼくの手を引いてくれた人を。

何時だって、優しい声でぼくの名前を呼んでくれた人を。

何度もぼくを庇って、ぼろぼろになってまで、あの日、ぼくを守り続けてくれた人。

ぼくの憧れた、優しくて、誰よりも素敵な——……

「おねえ、ちゃん………ツ!!!」

霞む視界の中で、手の中の腕輪を痛いほど握り締めて、あの人を呼ぶ。

そうだ、思い出した。あの人こそ、私の、ぼくの大事な家族だったじゃないか。

なのに何で、あの子の事を何年も忘れていたのか。

なんで、あの子が居ないことに気付かなかったのか。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんっ………!!!」

何度呼んだって、返ってくる声はない。

『なあに?』と、優しく笑ってくれる、あの子は、此処にはいない。

………なら、あの人は、

一体、何処に………

——…そうだ、あの日、最後に『さよなら』と聞こえた。

それが………もし、空耳じゃないとするなら

きつと、あの人は………——

もう、どこにもいない？

さみしい。

サミシイ。

悲しい。

哀しい。

かなしい。

カナシイ。

苦しい。

くるしい

クルシイ………

そう何度思ったって、あの人はいない。

何時だって、まるで童話の魔法使いのようにぼくの苦しみや悲しみを消してくれたあの人は、どこにも。

「……………何処に、いつちやったの……………!!」

気付けば、嗚咽と一緒に、口に出ていた。

「さみしいよ……………ねえ、なんで、おいていつちやったの……………う？」

かなしいよ……………まだ、あなたといたかったのに、

くるしいよ……………なみだがでて、いきがくるしくて、しかたないよ……………

もっと、あなたと、みたいものがあつたのに、

あなたに、みせたいものがあつたのに、

いっぱい、はなしたいことがあつたのに、

もつと、もつ、と、あなたにいつしよにいたかつたのに、」

どうして。

なんで。

どこにいったの。

かえつてきてよ。

約束したのに。

おまんじゅうつくってくれるって言ったじゃん

『必ず帰るよ』って、言ったじゃん

なのに、何で、

かえってきて、くれないの。

……………うそつき。

うそつき、うそつき、うそつき……………!!

「お姉ちゃんの、うそつきい……………!!!
う、あああああああああああああ
あああああつ
!!!!!!」

声が嘎れる程叫ぶ。

あの人に伸ばした手は、もう届かない。

もう、あの声は聞こえない。

あの背中は、もうどこにもない。

この世界の、どこにも。

あの人は、いない。

あのえがおは、もうどこにもない。

それを認識すればするほど、涙が止まらない。ばきり、と、ぼくの中の制御装置が、壊れてしまったような気がした。

あなたがいたから、今まで頑張ってこれたのに。

あなたが支えてくれたから、あの日、ぼくは皆をたすけられたのに。

いやだ、いやだいやだいやだいやだ。

いやだ。

こんなお別れ、いやだ。

あなたをわすれたくない。

あなたの声を、わすれたくない。

またあなたに、だきしめてほしい。

あたまをなでてほしい。

てをひいてほしい。

まだ、あなた、に……『あいしてる』っていつてなかったのに。

こんなことになるなら、いっておけばよかった。

はずかしがらずに、『ぼくも愛してるよ』、って、言えばよかったのに。後悔しても、もう、遅い。

消えない後悔だけが募っていく。

もう二度と、あのひとにこの手が届くことはない。

二度と、わらいかけてもらうことない。

名前をよんでくれることはない。

てをつなぐことは、ない。

あのひとのあたたかさも、こえも、もう、おもいだせない。

おかあさんとおとうさんのように、わからなくなつて、きえてしまう。

「あ、あ……………」

……………——ねえ、おねえちゃん

おいていかないで

ひとりにならないで

おねえちゃんがいないきや、ぼくひとりじや、なんにもできないんだよ

おねがいだから、かえってきてよ……

……—そんな願いも、届かない。

あの人の背中には、もう……届かない。

だれもない花畑に、ぼくの泣き叫ぶ声だけが、何時までも木霊していた。

A f t e r T h e B A D E N D I N G

その決意の果ては

「う、ううう……ひぐ、う……おねえ、ちゃん……」

誰も居ない花畑に、噉り泣く声が響く。赤く腫れた両目から未だに零れ落ちる涙を、金色の花が受け止めている。

泣いて、泣いて、泣いて……駄々を捏ねる子供のように何度も泣き喚いて、泣く体力すらも使い果たして、それでもF r i s kは手の中の腕輪を握り締め、愛していた姉を呼ぶ。

二度と手が届かなくなってしまうことを否定したくて、呼び掛ける。

その人が返事を返してくれる事を願って、何度も、何度も。

だが、何度も彼女を呼ぼうとも……当然、返事はない。それに気付く度、また打ち

のめされ、絶望する。

……………せめて、あの力さえあれば

そんな思考が、F r i s kの頭を過る。

確かに、あの日モンスタ―達を『S A V E』した力さえあれば、彼女を『S A V E』できたのかもしれない。だが……………彼女はその力を、決意を、無理矢理自分のモノにして、奪ってしまってしまった。その力を奪われたF r i s kは、あの日の彼女が願った通りの、ただの、普通の人間。そんな奇跡を、起こせる筈もない。

皮肉な話だ。彼女の『普通の人であってほしい』という姉として当然の願いが、願われた側を苦しめることになるとは。

……………だがこれは、きつと当然の結果だったのだろう。

……………地下世界に、彼女が落ちてきたあの日。初め、彼女はF r i s kをハッピーエンドに導いた後は、自分が持つ力を使ってF r i s kから決意の力を奪い、

自身が『RESET』を行使して地下世界の全てのモンスターを殺し、自分が神になる算段を立てていた。そうして自分の偽物のソウルを満たし、モンスターの王である Asgore を殺し、七つのソウルを奪って……その力を以て文字通り世界を作り替える覚悟もしていた。

愛しい妹を守りたいという、ただ、それだけで。

あの日彼女が闇に溶ける前に協力者に言った言葉は、そういう意味だ。

だが、彼女はそんな事をすればその妹自身はどんな顔をするのか、分かっていた。なかった。

『やめて』と泣きながら縋りつくだろうという事を、解っていないかった。

此処だけの話、彼女は他人の心を仕草などから予測することではか理解出来ずにいた。それ故に、自分が愛されていることを知ってはいても実感できていなかったのだ。

Undyne の攻撃によって橋から落ち、その際の衝撃で契約の記憶を取り戻し、自

分が旅の終わりには居なくなることを悟っても、一種の刷り込みのようなもので、記憶が塗り替えられれば忘れるだろうとしか考えられなかった。

それが、彼女の失敗。この結末を導いた最大の誤算だった。

F r i s kにとって、彼女は『自慢の姉だ』と胸を張って言える憧れの存在だった。死んだ両親の代わりにいつでも傍に居て、時に怒り、背中を押し、支え、自分に惜しみ無い愛情を注いでくれた、かけがえのない存在。

彼女の温もりも心からの優しさも、その誰よりも強いソウルに深く刻み込まれていた。

選択によっては世界を変えかねないそのソウルに刻まれたそれが、『上位かみの存在さま』の介入だけで、埋められる筈がなかった。

ようは、認識の齟齬によって訪れた当然の破滅だった訳だ。

どちらかがその齟齬に気付いてさえいれば、きっとこんな結末にはならなかっただろう。

………全ては後の祭りだが。

「おねえちゃん、おねえちゃん………」

謔言のように、Friskは呼び掛けを繰り返す。

振り返って笑顔を向けてくれる彼女は、もうこの世界にはいない。

………これで、Friskは肉親を三人喪ったことになる。そのショックの大きさは計り知れない。そしてこのショックによるFriskへの影響も。

今までのFriskの精神状態は、明確に言つて良いとは呼べないものだった。誰も喪つていない筈なのに感じる喪失感から逃げる為に親善大使の仕事にこなし続け、自分を追い込んでいった。言い表すならば、『子供が無理矢理大人になろうとしている』よう

な状態だった。一人称が『私』になっていたのは、その表れだろう。

そんな無理矢理命を繋いでいるようなボロボロな状態で、大事な誰かを喪うなどという大きいショックを受ければどうなるかなど、想像に難くない。

誰かを喪う、というのは、時として人格さえ壊してしまうのだから。

絶望に心を苛まれたこの少女は、きつともう、誰にも心を許さないだろう。

最悪、少女を心の底から案じる友人達にすら心を開くことももう失くなってしまいかもしれない。

誰かを愛せば、喪うときに哀しくて、悲しくて、辛いものだから。

その相手を深く愛していればいるほど、その別れが急なものであればあるほど、それらは深く鋭利になって、心を抉っていく。

それを一度どころか二度思い知った少女は、心を閉ざしてしまうだろう。

そうしなければ、ショックで抉れてしまった心が守れないから。

誰かから注がれる愛に怯え、誰かを愛することに怯え……だが、モンスターと人間を繋ぐ親善大使として、笑顔を振り撒いていなくてはいなければならぬから、笑う。

愛のない、空っぽな笑みで。

『誰かからの愛』が、トラウマとして刻まれることになるなど、彼女は望んではいなかった筈だったのに。

………これこそが、完全な、完璧と言える程の「BAD END」。

『これが最善だ』と信じきってしまった独り善がりの一方的な愛が招いた破滅。

幸せを願う祈りが誰にも気付かれずに狂い、止められなかった滅び。

破綻した愛の果て。

それこそが、この物語の終焉……………

絶望に目を閉じ、耳を塞ぎ、蹲って現実を拒む少女は気付かない。

他に誰も居ない筈なのに、自分に影がかかったことに。

「……………Frisk……………?」

……………塞いだ耳を突いた優しい声に、少女は耳を疑った。

何故ならば、その声は。

もう二度と、聞こえない筈だったから。

先程、そう気付いたものだから。

だが、そんな筈はない、と少女は自嘲する。きつと現実を受け入れたくない自分が聞かせる幻聴だろう、と断じ、耳を塞ぎ続ける。

こんな優しい幻聴が聞こえるならば聞いていたい、浸っていたい。そんな思いが、尚一層そうさせる。

だが、それは、簡単に打ち碎かれることになる。

するり、と。

伏せてしまった未だに涙が伝う頬を、何か暖かいものが撫でる。

「泣いてる、の……………？」

風などではなく、明らかに質量を持ったものが。

「は

う。明らかに意思を持って自分の涙を拭いたそれに、思わず仰け反って、顔を上げてしま

そうして、少女は漸く、そこに誰がいるのかを、認識した。

「ええ……………嘘でしょ、これ、本当に戻されちゃったの…………？」

困惑からか、そんな意味不明なことを呟いて頬を搔くその人物を、少女は……………目を
見開いて、見つめることしか出来ない。

「というか、何で此処に……………しかもFriskまでいるし……………何なのもう」

というよりも、その人物を認識したときに溢れた感情に、身体が着いていかなかった
……………と言った方がいいのだろう。

驚愕。

困惑。

悲哀。

憤怒。

それらを優に上回る……『歓喜』。

一度に一齐にそんな感情達が沸き上がり、氾濫し、どんな反応を取ればいいのか、身体が判断できなかつた。

ただ、出来たのは。

泣いて泣いて、泣いて……………泣き疲れて、掠れてしまったその声で。

困ったような顔で辺りを見渡す目の前の人物を、呼ぶことぐらいだった。

「……………おねえちゃん……………」

何とかそういう言葉にされた文字を聞いて、その人物は、少女の目を真っ直ぐに見る。

大地の色を模したような茶色の瞳に、酷い顔をした自分が映っている。

それを認識するのが速かったか、それとも、その人物が、誰よりも大好きだった笑みを浮かべたのが先だったか。

少女は、覚えていない。

「ただいま、
F r i s k
」

何故ならば。

そんな事よりも、その笑顔がまた目の前から消えてしまわないように、世界一優しい檻の中に閉じ込めておく必要があったからだ。

……—これが、この物語の本当の結末。

歪んだ愛の終着点。

きつとこれは、誰もが一度は目にした在り来たりなE n d i n gなのだろう。

だが、このE n d i n gこそが、この物語の中で唯一の【H A P P Y E N D】。

この世界の誰もが望んだ幸せな終焉。

……変えようのない、輝かしい、優しい未来は——
金色の花が咲き乱れる花畑の中で抱き合う姉妹が、互いに強く望んでいた——

今此処から、漸く——スタートを切るのだろう。

Fin.

Epilogue of Lily 『START』

あとがき・解説

ここまでのご愛読、本当にありがとうございます。行方不明者Xです。

Under tale 沼に見事にぼちゃんし、色々な小説やAUを巡っているうちに『F r i s kの家族主人公って見かけないな?』というふとした思いつきから始まり、『無いなら書けばいいじゃない』という身内からの天啓(?)があつて始まったこの小説ですが、皆様の暖かいご声援もあつて無事完走することが出来ました。途中、何度も更新が遅れる事もありましたが、それでも見捨てずに約二年もの間着いてきて下さった事、心から感謝いたします。

余談ですが、シリアスをぶち壊してシリアルに変えていくような小説にするつもりが、いつの間にかドがつくシリアス小説になっていたのは今でも困惑しています。何故こうなつたし。プロット外れすぎだろ。

そしてこんなにL i l yが狂人になる筈じゃなかったんですが。ただただF r i s kをどろどろに甘やかすようなお姉さまにするつもりだったんですが……どうしてあなつた。

兎も角も、見切り発車で始まった小説に沢山の感想を寄せて下さり有難うございま

た。何度そのお言葉に救われたことか。

いつの間にかお気に入り人数は千四百人越え、UAも一万八千弱、果てには沢山の評価や推薦、畏れ多くも支援絵をいただいでしまったりランキング入りまでさせていただくという連載開始当時は考えてもいなかったことが起こり、幸せでいっぱいでした。

こんなにもこの小説を、そしてLiilyを愛して下さり、有難うございました。執筆最中に感想欄にて彼女の争奪戦が起こるなんて本当に予想外でした。

それでは此処からは所々のキャラクター設定などについて解説させていただきます。解釈違いが起きる可能性が御座いますので、読みたくない、という方はここでブラウザバックをお願い致します。

・Liily

本作品主人公。ハッピーエンドの人柱。ある種のヤンデレ。

魂ごと消されるところだったのをカミサマに救われ、契約することによつてFriskの姉として転生した転生者。

Friskを心の底から家族として愛し、愛するあまりにPlayerとしてやらかした事に対する罪悪感やら何やらの感情で狂った人。愛する誰かの為なら嬉々として

命を投げ出す。それをその人が望んでいないとしても。

人からの愛を察することは出来ても実感を持ってずに傷つけるある意味でのクズ。Friskを救いたいと考えているうちに得た狂気思考で自分も『キャラクター』であることに自分で気付いたヤベー奴。

カミサマと契約した記憶が無かったのは『始まるまでは本当に純粋にFriskの姉でいてほしい』というカミサマの配慮である、という裏設定。前世の死因は刺殺。

書く時に気を付けていたりしたのは、同じく下の兄弟を持つSansとは正反対でありながら近い存在であるよう心掛けたこと。そして誰よりも人間らしくすることと狂人と解りにくい狂人にすること。

ちなみに他の世界でもやらかしているので、多分色んな人から恨まれてる。

・カミサマ

作中で語られた通り、消されたデータの残骸から産まれた神様。Amalgamat esが神格化したもの。

とあるAUとネタ被りしている事が感想の指摘で判明した。もうちよつと調べておくべきだったと反省しています。

・Flowey/Asriel

要らない設定が付与されたことで面倒なことになったキャラクターその1。キー

パーソンその1でもある。

ただでさえ拗らせてるのに死んだ筈の兄弟に会ったらどんな反応をするだろうかとか考えた結果がこれ。

多分ヤンデレ化したのはGルートFlowyを見ていたら始まりの方は何を思ったのかヤンデレっぽいなどと思ってしまい、そのイメージがついてしまった故だと思われる。夢の影響もあり、SAN値0の状態。Lily及びCharaに執着した。

・Toriei

皆のママン。出来る限り原作に寄せようと頑張ったモンスター。プロットでは『LilyとCharaを重ねてしまっている節があるが、結局はちゃんとLily自身を見てくださいるように書く』というメモ書きがあった。

今までの子供達に対する思いが綴られた日記の描写を入れたのは、彼女ならきつと彼らの事を気に掛けているだろうと考えたため。

・Sans

要らない設定が付与されたことで面倒なことになったキャラクターその2。

夢(今までの記憶)で悩まされ、原作よりも大分疲弊し、SAN値がヤバいことになっていた。あと一回世界が繰り返し返されていたら不味いことになるレベル。Lilyの狂人発言によって冷静になった。

Lilyの狂気に巻き込まれた所為で全て終わった後により一層苦しむ羽目になった。本作で二番目に不憫なキャラクターだと思われる。

キーパーソンその2。Lilyの対極として活躍してもらった。プロットではギャグを言いまくるお兄さんになってもらう予定だった。あれ……？

・ P a p y r u s

天使。大好きだけど書く上で一番苦労したキャラクター。何処まで優しくするべきか分からなかった。言っちゃえばキャラが掴めて無かった。

ちよつとおバカだけど本質を見抜いているようなキャラクターに仕上げたかったモンスター。

Lilyの中でF r i s kに次ぐ癒しになってほしかった。本当にLilyのことを友達だと思っているし、また傷付けてしまった事を悔やんでいる。その為、ちよつと過保護になった。プロットでは、原作通りの優しいモンスターになってもらう予定だった。

・ U n d y n e

皆大好き寿司ネキ。Lilyにガチ切れされた。鬼のような形相がちよつとトラウマになった。

槍が折れたのはLilyの言い分もあるが、その前にF r i s kがM o n s t e r

Kidを助けたことが大きい。個人的な解釈で、幾ら子供相手とはいえ、Undyneは一度対峙した相手は逃がさなそうないメージがある。それでも逃げられたのは、彼女にFriskを殺すことへの迷いがあったからなのでは？ ということ。彼女だって感情はある筈だし、と考え、結果、そうして迷ってる所をぐっさり刺されて決意が折れ、それと同時に槍が折れた。感想であつた『捌かれた』は本当に笑つた。センス良すぎでは？

プロットでは、Lilyをライバルと認める予定だつた。

・Alphys

色んな闇を背負つてる王国直属科学者。サポートしてる最中アドバイスしてくるLilyが色々見透かされてるみたいで怖かつた。いつバラされるかドキドキしてた。

嫌われていると思つていたLilyの矛盾した行動に一番狼狽えていたと思われる。

小さな身体で一身に罪を背負い続けてきた凄惨なモンスター。個人的に尊敬している。

プロットでは、Lilyと何でも言えるオタク仲間になつてもらふ予定だつた。

・Metttaton/Happstablook

地下世界の大スター。ガチ切れされたモンスターその2。

原作ではどうか知らないが、本作では自分を見てもらいたかつたのはどうしてなのか見失つてしまつていた設定になつた。

Lilyに嫉妬していた理由は、自分は従兄弟と仲違いしてしまったのに対し、二人は本当に仲良くしていた為。自分だってそうしたかったのに狡い、というもの。

憧れていた理由は自分の描く人間の理想像に近かったから。

プロットでは、原作寄りの彼にするつもりだった。

・Asgore

哀しくも優しいモンスターの王様。ガチ切れされたモンスターその3。

Lilyを見た瞬間にCharaの面影を見てつい抱き締めてしまった。

Asrielを除けば一番昔に執着しているのはこの人。日記にはあの日の後悔が2ページぐらいに渡って綴られていると思う。

個人的には日記に『素敵な一日だった』と書かれているのは、子供が落ちてきた日を除いて、だと思う。人間が落ちてこないことへの安堵が現れているのかな、と解釈している。

Torielと同じく子供達の事を後悔しているんだろうと思い、日記の描写を挟んだ。

原作ではどうか分からないが、言葉の節々から『死にたがっているのでは?』と考察した。

プロットでもぶん殴られる予定だった。不憫粹。

・Chara

サブヒロイン。ファーストヒューマン。

残骸を注ぎ込まれた結果、謂れない罪に苦しむことになった。本当はいい子説を採用している。人間を恨んではいるものの、その意識は大分薄くなっている。Riskは運命共同体だと思っている。

何処かで『CharaはRiskとずっと一緒にいた』という話を見かけたので、それもそうだと感銘を受けた結果、Lilyが去り際に『ずっと一緒にいてくれた』のセリフに繋がった。

Lilyが関わったことによつて事実上救われたが、精神的には絶望に叩き落とされもした。

プロットでは、Lilyに全部託す予定だった

・Gaster

前代王国直属科学者。キャラクター設定が少ないので書くのに苦労した。本作では骨兄弟の親説を採用している。実験で時空の狭間にすつ飛ばされてしまったモンスター。Followerは実験で巻き込まれた元同僚だと思う。

Lilyの協力者。残骸の記憶を完全に思い出していて、Playerの存在も知覚済み。

Lilyに協力したのは未だに解っていない部分の探求の為もあったけど、記憶の中の息子とダブって見えたから。その為、Lilyに最後に父親のような言葉をかけてもらった。

だが、Lilyが居なくなつた結果を見て、こんなエンディング認められるか、と考えていた。Friskが思い出し掛けているところに『思い出してくれ』と揺さぶりをかけたのもこの人。

プロットでは出番無しの予定だった

・Frisk

本作メインヒロイン。決意の子。

本作の一番の被害者。姉が出来たことによつて救われもしたけど、結果として一番泣く羽目に。

Lilyは家族として愛している。親代わりでもある。目一杯愛されていることも知っているし、前々にしていた約束もあつて、自分を庇つて傷付いていくLilyを止められなかった。本音は泣きついてでも止めたかった。

Lilyに一番振り回されて、傷付いて、最終的には愛がトラウマになりかけた。

Friskのメンタルについて質問が来ていたのでここで答えますが、原作のFriskがどんなメンタルなのか明言されていないので分かりません……が、この作品のF

r i s kは、普通の人間の子供のメンタルと比べれば強いくらいを想定しています。小さなことなら傷付きませんが、それでもやっぱり大きいショックには心も動きます。ちよつと大人びた子供、というところですかね。

天使だけど、流石に今回の件は許せないと思うので落ち着いた頃に助走つけて殴つたと思う。

プロットでは、ニコニコいつも楽しそうに笑つててもらう予定だった

・前日譚で登場したモブについて

少年：実はアレンとこっさり名付けていた子。もし後日談を書くことになったら彼のこと掘り下げるかもしれない。

少女：F r i s kのクラスの子。名前はジェシカ

アレン君の記憶について質問があつたので答えますが、彼もまた記憶を弄られています。なので、本を貰つたのは別の友達に擦り変わっています。その友達に尋ねたら『俺じゃないよ』って言われて混乱するパターンでしょうね。

・記憶の改竄について

元々あつた記憶の『ここにはL i i yがいた』という記憶を『ここにはC h a r aがいた』または『ここには別の人がいた』という記憶に無理矢理塗り替えてしまうようなもの。脱色の月島さんの能力が一番近いかもしれない。でも如何せん力が弱いために

そこまで強くかけられなかった。

思い出した瞬間に違和感を感じていたモンスターや人間は多分膝から崩れ落ちてい
ると思う。

・Chara・Asrielのソウルについて

後日談で語ってもらった通り、ソウルを半分づつ持っている。心が半分しかないた
め、心無い言動をしてしまうこともある。後日談のAsrielが若干病んでるのはそ
の所為。

取り敢えず、こんなものでしょうか。もしまだ腑に落ちない所がございましたら、お
手数ですがご連絡下さい。

長くなりましたが、最後までお付き合いいただき、有難うございました。

最後にアンケートがございますので、宜しければご参加お願い致します。

※5／28追記 アンケートの締め切りは6／15とさせていただきます。

後日談

姉妹喧嘩 上

「……………さて、と。そろそろ始めるか。Lily、これから質問するが、嘘を吐かず全
て正直に答えろ。いいな？」

「はい」

「……………」

その日、親善大使の家にはそれまで嘗てない程重たい空気が流れていた。

親善大使の理解者達とも呼べるモンスター達も勢揃いで、それぞれソファに座った
り、仁王立ちして腕を組んでいたりしながら、床に正座する一人の少女を睨み、見つめ
ている。

誰が何から話そうか分からず押し黙り、そうして生まれた空気の中で空気も読めず

笑っているのは、睨み付けられている張本人。つい最近まで姿を消していた、親善大使姉妹の实の姉であるLiilyと呼ばれた少女だけだった。

「……………おい」

「ん？ なぁに、Chararaちゃん」

そんな空気を破り、まず一番最初に声を上げたのは、彼女の实の妹……………ということになるであろう少女、Chararaだった。ぽつりと呟かれたその呼び掛けに応え、LiilyはChararaを見る。

「何で笑ってる？ 一応これから尋問が始まるんだが……………」

「え、ああ。久々に私の知る皆の顔が見れたらどうしても顔が緩んじやつてねー」

「いや、空気が読めないにも程があるだろ。何だその理由。ふざけんな」

顔を顰めているCharaの質問にふざけているように聞こえる返事を返したLilyに、スケルトン兄弟の兄の方であるSansが冷たくそう言った。

「ふざけてないよ? 正直な感想。もう二度とこの世界の皆には会えないと思ってたからね」

からからと笑う彼女から放たれたその言葉に、空気がより一層重くなった。

つい、一昨日の話。帰って来た彼女は泣きじやくる妹を宥めながらEbott山を下った。そして、Frisksの案内で今の家にやってきた彼女は、Frisksが帰って来たと考えて玄関まで出迎えにきたToriel達と出会ったことによってもみくちやにされた。Frisksが思い出したと同時にLilyの存在を思い出し、パニックに陥り、無力さを感じていた彼らの前に姿を現せば、こうなることは想像に難くないだろう。そこからAlphysらに連絡が行き、直ぐ様Frisksの家に連絡があつたモンスター達が集結したのは言うまでもない。

そうして散々揉みくちやにされた後、こうして火照りが冷めた本日、Lilyに対する尋問が行われている訳である。ちなみに配置は万が一でもLilyが逃げ出すこと

があれば即座に確保出来るようにしてある。いや、彼女に逃げ出す意思はないが。

「……………なあ、Lily。お前は何処に行ってたんだ」

再び落ちた沈黙を、高く結った紅い髪と青い肌が特徴の女性、Undyneが口を開いて破る。

この質問はこの場に居る彼等が一番聞きたかった質問でもあった。

ここ数年、彼女の存在は自分達の記憶の中から無かったことになっていた。その間、彼女は一体何処にいて、何をしていたのか。それが、一番気になる所だった。

「ん？ えつとね、異世界」

「……………はっ？ イセカイ？」

「うん。此処と同じで違う世界だったり、皆の性格が真逆になってたり、色んな世界に行ってたよ。その度に死ななきゃいけないのがちよつと堪えたけどね。もう何千回死んで産まれたのか数えらんないよ。あ、そうそう、その世界によって皆の性格が違って

ね、知ってはいたけど吃驚したよね。知らないフリをするのがどれだけ大変だったか」

地球上の何処と答えるわけでもなく、予想斜め上の答えに驚くUndyneを他所に、Lilyは何でも無いように話す。『何千回も死んだ』という言葉に絶句する皆を余所目に話すその様子に、訳を知っているSansは本当なのだろうということを感じ、そして、不気味さを覚えた。

余りにも、空気が読めなさすぎる。

自分の知っている限りのLilyは、頭が回る方の人間の筈だ。この空気を察することぐらい、出来るはず。なのに何故、こんなにあっけらかんとしているのか。

度重なる転生で、辛うじて残ってた精神が擦りきれたか？

「というか、Lily、話し方変わったわね……？　もう少し丁寧な話し方じゃなかったかしら……？」

「うん？ こつちが素だよ？」

「そ、そう……」

空気を変えようと自分が感じた素朴な疑問を小柄な黄色い恐竜のモンスター、A i p h y s が追求すると、たった一言でそう返された。

「それにしてもさ、皆本当に地下世界から解放されたようで何よりだよ」

よいしょ、と言いながら正座を崩して、フローリングにL i i y は胡座で座り込み、そう言った。

「どう？ 地上は。日光アレルギーのモンスターとかいかなかった？ それよりも、楽しい？ 見たことがないものとか一杯あるだろうし、飽きたりしないんじゃない？ F r i s k や C h a r a が大きくなってることから察するに数年経ってるみたいだけど、皆疲れたりしてない？」

誰がどう話そうか迷って、何も言えなくなっている重苦しい雰囲気の中、Lilyはペラペラと喋りだした。

「あ、そうだPapyrus。結局世界に何か国あるのかとか分かった？　そういうば料理はあれからどうなったの？」

「……………」

「無視？　対応がしよっぱいなー」

在りし日の会話を思い出し、LilyはPapyrusに話を振るが、話を振られた骨兄弟の弟の方、Papyrusはというと、肩をビクリと跳ねさせて黙り込んでしまう。普段は温厚であり、友達に話しかけられたら無視をするなんて事は絶対に無い筈のPapyrusに無視されたことも気にせず、Lilyは部屋を見渡し、ドアに寄り掛かっている彼に話し出す。

「Asriel、自分の本当の身体で地上を歩く気分はどう？　Floweyの時じゃ

絶対に出来ないことだったでしょ？ あ、そうだ、Charaちゃんとは仲良くしてる？ 昔も今も親友だったんだし、兄弟みたいな関係なのかな？」

「……………そんなの、今はどうでもいいだろ」

「え、どうでも良くないよ。自分が助けた誰かのその後を聞きたいのは当然じゃん」

白いふわふわの毛が生えた皮膚の眉を寄せ、呼び掛けられた山羊のようなモンスタ―、Asrielはそう返したが、Lilyの『何を言っているのか』と言いたげなその言葉に更に眉の皺が増えた。そのまま睨み付けるように黙った彼に、また無視か、と一言呟いて、

「……………というかさ。皆なんでそんなに暗い雰囲気なの。正直こつちが聞きたいぐらいなんだけど。特に泣きそうなTorielさんとかAsgore王の視線が痛いっつらないんだけど」

と、大柄な割には小心者で優しい山羊のモンスタ―、Asgoreと、普段はニコニ

コと笑っている山羊のモンスター、Torielの方を見ながら言った。
その言葉に、黙っていた箱形ロボット、Metatatonが声を上げた。

「ねえ。自分が何てこと言ってるのか分かってるのかい、Lily」

「? 何が?」

「……………駄目だね、これ」

自分の問いかけに不思議そうに首を傾げるLilyを見て、はあ、と溜め息を一つ吐き、Metatatonは腹立たしそうに手を自身のパネル部分の上辺りに手を置く。そして、自分の背面にあるスイッチを切り替えた。

ぼん

という音を立て、小さな煙と共にMetatatonの身体が作り変わる。人間形態になった彼は、つかつかとLilyの傍に歩み寄り、人差し指を突き付けた。

「いい、ダーリン？ 僕たちがこんなになってるのはね、正真正銘、君の所為なんだよ？」

「……………え、何言ってるの？」

Met t a t o nの主張にきよんととしていたL i l yは、少し間を空けてそう言った。

「やっぱり分かってないのか…………」

「…………成る程、どうもさつきから空気の読めない発言ばかりすると思ったら、そういうことか」

「え、何その反応。私そんなに空気読めてない発言はしてないつもりなんだけど。酷くない？」

呆れたように溜め息を吐いたMet t a t o nと、漸く違和感に納得がいったS a n

sは頷いた。その反応を見て、Lilyは心外だと言わんばかりに不満を溢した。そんなLilyに向かって、SansはLilyに向かって口を開く。

「お前、俺達にしたことに対して何の感情も持っていないんじゃないか？」

「? うん、そうだけど」

Sansの問い掛けに対し、Lilyは何でもないように笑顔で頷いた。

「というかSans、まさかだけど私が皆の記憶から消えてた事を言ってる？」

会話しながらも頭を回していたらしく、LilyはSansが言いたい事を汲み取り、聞き返した。

「そうだ」

「えっ、尚更何で? 何でそこで感じない感じるって話になるの? 皆私の事今日まで

忘れてたんだし、別に関係なくない？」

Sansが頷けば、何故そんな事を聞くのか、理解していない彼女はそう言った。そんな彼女の胸ぐらを、Charaの女性にしては痩せた手が掴んだ。

「……………ふざけんなお前。お前のその身勝手に、どんだけFriskや皆が苦しんだと……………!!」

「待て、chara。気持ちは分かるが、今のそいつはまだ居ない間の俺達を知らんみたいだ。どうするかはその後でもいいだろ」

「……………何、何かあったの？」

Charaが顔を歪めて詰め寄るのを窘めるSansを見、そこまでして漸く話の擦れに気付いたのか、Lilyは胸ぐらを掴まれたまま首を傾げた。その様子を見て、Sansの言う通り何も知らないらしいと察したCharaは、舌打ちを一つして渋々胸ぐらから手を離して距離を取った。

「Lily、お前はどうかやら知らないみたいだがな、俺達にはお前との記憶が微かにあったんだ。……いや、正確に言えば、記憶は擦り変わってたんだが、違和感があった」

「えっ、本当に？」

「こればかりは本当に知らなかったのか、LilyはSansの説明に対してそう聞き返した。」

「ああ、そうだ。本当にそこに居たのはCharaだったのか、それを一度疑ったら記憶の中のCharaの顔がどんどん思い出せなくなっていくた」

「ええ……可笑しいな、ちゃんと消したって言ってたのに……」

続くSansの説明に、何でだ、と首を傾げていたLilyはふと顔をあげる。

「それで、この話がどうして『何も感じてない』と繋がるの？」

「……………さつき、Charaが『皆がどれだけ苦しんだ』って言っただろ？ その中途半端な記憶改竄のお陰で、俺達はこの世界に居もしなかったお前の影に囚われたんだ」

「あゝ。」

Sansから告げられたその説明に、Lilyは理解出来ないとばかりに怪訝そうな顔をする。それを見て、Sansはまた溜め息を吐いた。

「昔の事を振り返って他人との話で食い違う、矛盾する気がする……誰も失っていないのに、誰かを失ったという喪失感がある。それがどれだけ怖いことか、お前は知らないだろう。」

全員の記憶が戻った後、此処に集まったんだがな。そのとき、皆自分が記憶を失っている間どう感じていたのか話したが、壮絶だったぜ？

Torielはお前を忘れていた自分が許せないと泣いていた。王は死ぬのは赦されないことを何故忘れていたのかと言っていた。Metatonはお前に礼と謝罪

を告げたかったと後悔してた。Alphysは気が狂いそうになった。Undyneはお前を助けられなかったと無力感に苛まれた。Papyrusはお前の笑顔をCharaに求めるようになった。Charaはそれを切っ掛けにお前に助けられたことに気付いて、錯乱して病気になってやがった。そして、お前の最愛の妹のFriskは、お前を失った喪失感を誤魔化すためにワーカホリックになって、後は知つての通りだ」

Sansは一昨日集まった際に誰からともなく心に燻るそれらの感情を吐き出し知つたそれを告げ、Lilyを見る。

「……お前が望んだ未来はこんなものだったのか？ 違うだろ？ 少なくともお前が望んだ未来は、Friskが明るく笑っている世界だった筈だろ？
……こんな現状を知つても尚、お前は何も感じないのか？」

一縷の望みをかけて、SansはLilyにそう問いかける。まだLilyがそこまで狂っていないことを祈つて。

自分の言いたいことが、察せられる彼女であることを祈つて。

「……………なんで、そうなるの?」

だが、Sansの想像を遙かに越えて、彼女は狂いきっていた。

LilyはSansの言いたいことが理解出来ずに不思議そうに首を傾げ、言葉が続ける。

「何でたかが私一人居ないだけで皆そんな事になるの? そんなもの、気にしなければ良かったのに」

皆が愕然とする中、いけしゃあしゃあと、Lilyはそう言つてのけた。

「……………『そんなもの』、だつて……………?」

それに真つ先に反応したのは、言わずものがないCharaだった。

CharaはまたLilyに掴みかかり、至近距離で憎悪を込めて睨み付ける。

「ふざけるなお前!!! 地上に出たから今までどんだけFriskが苦しんだと思ってるんだよ!!! 休めつて言っても皆の為だって言っても休まないし、無理矢理休ませることではか休憩取つてくれないぐらい追い詰められてたんだぞ!!! 他でもないお前の所為で!!! それをお前、『そんなもの』!!! ふざけるな!!! 僕の事はまだ自業自得だから仕方無いにしても、何で血の繋がった実の姉のお前がそんな事を言えるんだよ!!! ふざけるな、ふざけるなよ!!!」

鬼のような形相で詰め寄るCharaの剣幕は凄まじいものだが、それさえも意味が分からないのかLilyの顔はきよんとしている。

「Chara、落ち着きなさい」

「でもっ、父さん……!!!」

「そんなに責め立てていたら通じる話も通じないだろう?」

一方は激情に顔を歪め一方は何とも無さげな顔をしている異様な光景を諷めたのは、

意外なことに、今まで悲痛な顔で静観していたAsgoreだった。

Asgoreは大きな白い毛に覆われた手でCharaの掴み上げる手をそつと包み込んで悲しそうに微笑み、離すように促す。それを見て、仕方なくCharaはその手を離れた。それに満足そうに頷くと、AsgoreはLilyに向き直る。

「Lily。少し思ったんだが、もしかして君は、皆の中では自分の存在がそこまで大切ではないと思っっているのかな？」

「はい」

「そうか……それは、どうしてだい？」

Asgoreの質問に対してLilyは即答を返す。それを聞いてAsgoreが更に質問を重ねると、Lilyは少し考えてから口を開く。

「だって、私なんてただの部外者^{エキストラ}で、身代わりで、元ですけど貴方達に憎まれる絶対悪^{Player}ですもん。そもそも、貴方達に本気で大切にされたりする筈がないじゃないですか」

何を言っているんだ、と言いたげな顔で、Asgoreの目を見てLilyはそう言った。Lilyを見るAsgoreの顔が、悲しそうに歪む。そんな風に見つめられる理由が、Lilyには分からなかった。

LilyがAsgoreの感情を計り倦ねている中、AsgoreはまさかLilyがこんな悲しい考え方をしているとは思っておらず、どうしてこんな考え方をするようになってしまったのか、と、とても悲しく感じていた。

「……………じゃあ、君は、もし私を含めた皆やFriskが『愛している』と言ったら、どう感じるのかな？」

「えっ？ 突然それを聞きます？ ……そうですね、『嬉しい』とは感じますが、『きつと本気ではないだろう』とも感じますね」

子供を持つ親としての心で『この考え方は放っておいてはいけない』と感じたAsgoreは、この目の前の哀れな子供が何故こんな考え方をし出したのか探るべきだと考え、Lilyに問いを重ねる。突然脈絡のない質問をされたLilyは一瞬怪訝そうな

顔をしたが、直ぐにそう答えた。

「それは、何故かな？」

「いや、さつきも言ったじゃないですか。私はただの部外者だからです」

「……………何処のどの部分を見て、そんな考えに至ったのかな？」

どうにもLiilyが自分の事を部外者だと考えていることが引つ掛かったAsgo
reは、そう尋ね返す。そうするとLiilyは、

「全部ですよ。私がこの世界で生きてきた人生全部を総合してそう判断したんです。
だって、私は本来居ない存在ですから。いや、もしかしたら何処かのタイムラインでは
『Friskの姉』という存在は居たのかもしれませんが……特に居たって関係は無い
ですよ」

ただ平然と、そう答えてみせた。

「……………何を言っているんだい、君は。あの日、君が居なければ、私達は救われなかったんだよ?」

一瞬、何て事を言っているんだと絶句したAsgoreだったが、気を持ち直してそうLilyに語る。それでも、Lilyは無慈悲に首を横に振った。

「いいえ、居ても居なくても、RiskはEbott山に登って、貴方達モンスターを地下世界から解放したでしょう。そこは絶対に変わりませんし。そういう『運命』ですから」

「……………じゃあ、僕達は? 僕達はどう説明するのさ?」

Lilyの答えに口を挟んだのは、Lilyを睨み付けていたAsrielだった。

「僕とCharaは本来、この世界でこんな風に存在できたりはしなかった。僕はFloweyになっていた筈だし、Charaは死んだままの筈だった。それは僕もCha

raも分かっている。君はさつきから『自分が居なくてもどうにでもなった』みたいな口振りで話してるけど、それは何なの？ 矛盾しない？」

Asrielのその理屈に、Lilyは一瞬押し黙る。そして、少し間を開けてから口を開いた。

「それは例外だよ、Asriel君。あの時は君達を救うには絶好のタイミングだったけど、本来の世界ではそんな事は起きなかったから、私があの時Riskの代わりに君達を助けなくちゃいけなかっただけで、多分Riskがやろうと思えば何とかなっただけだよ」

「は……………？ 何だよ、その理屈……………」

屁理屈と言えるそんな意味不明な理屈を淡々と述べるLilyに、Asrielは思わずゾツとした。

何故、そんな考え方が出来るのか、理解できなかった。

「…………いや、それじゃあ理由にならないぞ、Lily」

Lilyが語った理屈に、今度はCharaが異を唱える。

「Sansから聞いたがな、お前、僕とRiskのPlayerを繋ぐ《決意》を奪つて、自分のモノにしたんだろう？ それでこの世界の主導権を奪つて、Playerに二度と干渉できないようにした。だがな、それは悪いがRiskや僕には絶対に出来ない事だ。そう定められてるからな。それはどう説明する？」

「…………それも、例外だよ。それは本当にどうしようも無かったから、私がCharaちゃんとRiskの身代わりになることでどうにかするしかなかった」

Charaの理屈にまた一瞬押し黙ったLilyは、そう言い返して、でも、と続ける。

「それだって私が愛される理由にはならないよ。だって、いつか捧げられる事が産まれた時から決まってる生け贄が愛されるなんて事、ある？ 同情は貰いはするだろうけど

も、そんな事は有り得ないでしょ？」

「……………意味が、分からない……………お前、自分が何言ってるのか、分かってるのか？」

「? うん」

何故自分を生け贄など考えているのか、などと言いたいことはあつたが、CharaはLilyの言う理屈が理解出来ずにいた。

どんな考え方をすれば、そんな考えに行き着くのか。どうしてそんなに狂った考え方をしているのか、理解出来なかった。

「じゃあ、あの日Riskの傷を全部背負うような真似をしたのは何故なんだい……………」

「え? ああ、あれは普通に自分の自己満足です。何でRiskが仲良くしたいだけなのに傷を負わなきゃいけないのか理解できなかったの。それに、私一人が傷を負って、それを『気にしていない』と言えばRiskは私の事なんて気にしないでい

てくれるだろう、皆と友達になれるだろうと考えてました」

また問いを投げ掛けてきた Asgore に、Lily はそう返した。その平然とした態度に、Asgore の思考回路に嫌な思考が掠める。

「……………じゃあ、君は。私達のごとは、愛している？」

「えっ、何でそんな当たり前の事を聞くんです？ 愛してなかったらそんな事はしませ
んよ」

またもや即答で、Lily は Asgore の問いに答えた。ただ、何でもないように、平然と。Asgore は、今度こそ言葉を失った。Lily と自分達との擦れが、ここまで大きなものだったとやっと気付いて。

……………これこそ、彼女が認識できない周りとの致命的な擦れ。

彼女の狂った愛の真髓。

自分が与えるものは『真実の愛だ』と信じているくせに、愛する人から受けるものは『本心からのものではない』と断じる、一方通行な、もはや人間不信にも近いもの。

『愛されている自覚』はあっても、『愛されている実感がない』という、とんでもない擦れだった。

「……………じゃあ、あなたは、」

「ん？」

そこで、今まで黙って悲痛な面持ちでLilyを見つめていたTorielが口を開く。

「あのまま私達が思い出さなかったら、私達を置いて、何処に行くつもりだったの？」

「えっ、そのまま死ぬつもりでしたけど」

Torielの震える声で紡がれたその問いに、Lilyは何ともないように、『死ぬつもりだった』と告げた。そして、その続きを、笑って紡ぐ。

「いや、だって、Friskの大切なものは全て守ったんだもの。用済みの部外者はもういないでしょ」

優しい笑顔で、ただ、当たり前のような事を口にするような口調で紡がれたその発言に、今度こそ空間が凍りつき、皆が絶句した。

『大切なものは全て守った』。

『用済みの部外者はいない』。

その言葉から嫌でも察することができるのは、彼女が言う『Friskの大切なもの』の中には、彼女自身が含まれていないということ。

彼女の中で、彼女自身の存在が、どれだけ低いのか思い知らされる台詞だった。

皆が凍り付き、沈黙が流れる。しんと静まり返ったその空気を打ち破ったのは、

「えっ、うわっ」

Asgoreの気の抜けた声の後の、

バチンツ

一つの、濁いた音だった。

「……………え？ 何してんの、Frisk」

その音と同時に左頬に走った衝撃を受け、その衝撃で咄嗟に右手を床についたLilyは、今まで黙っていたのに突然距離を詰めてきて手を振り下ろした少女……………Friskに向かって、きよんとしなからそう言った。

先程の音は、A s g o r e を強引に後ろに押し退けた F r i s k が、L i l y に平手打ちした音だったのだ。

「……………るな」

「えっ」

顔を伏せたまま、何かを呟く。思わず L i l y が聞き返すと、F r i s k は顔を上げてキツと彼女を睨み付け、胸ぐらを掴み上げた。

「ふざけるな!!!」

そうして、L i l y に向かって大声で叫んだ。

姉妹喧嘩 下

Lilyは突如として目の前で発された大声で耳鳴りがしたが、手で耳を塞ぐ隙も、いきなりどうしたのかと問い返す暇もLilyに与えず、Frisckは捲し立てる。

「さつきから黙って聞いてれば、何なの!!! 私は部外者だ、だからいらないんだなんて屁理屈こじつけて、そればかりじゃん!!!」

「え、いや、事実だし……」

「そんな訳ないでしょ!!! 何言ってるの!!!」

Frisckが普段滅多に見せることのない激怒の感情をぶつけられ、戸惑い、動揺して吃つて声が小さくなるLilyに、畳み掛けるようにFrisckは叫ぶ。

「君は何にも分かってない!!! ぼくの気持ちのこれっぽっちも分かってない!!! ぼくの

大切なものは全て守っただ!!? ふぎけないで!!! そんな事を言うなら、何でぼくの一番大切な君を守ってくれないの!!!?」

Friskのその言葉を聞いて、Lilyの目が見開かれる。

「……………私が、大事? そんなこと……………」

まさか、そんな筈はない。何かの間違いだ。

そんな困惑の感情がありありと読み取れる顔でFriskの発言を否定しようとするLilyの言葉を遮って、Friskは叫ぶ。

「知らないとは言わせないよ!! ぼく、ずっと君に『大好きだ』って言ってきたでしょ!? それを今更否定するつもりなの!?!」

「それは……………」

噛み付かんばかりの勢いで捲し立てるFriskに、Lilyの硬く閉ざされていた

心が漸く揺れた。

「じゃあ何!? ぼくが日頃から『大好きだ』って言ったのは嘘だって思ってたわけ!!!」

「……うん」

「はあ?!? 信じられない!!!」

F r i s k の勢いに押され、思わず L i l y が素直に頷くと、F r i s k の怒りは更にヒートアップしていく。

「いい!? あの日までぼくの血の繋がった家族はこの世でたった一人、君だけだったの!!! 分かる!? お父さんとお母さんが生きてても、死んでしまった後でも、変わらさずに愛情を注いでくれてたのは君だけだったの!!! 君が居たからぼくはあんな親戚に会った後でも孤児院生活でも歪んでしまわなかったし皆に優しく正しくあろうと考えられたの!!! 君がいなかったらとつくにぼくは歪んじゃった!!! とてもじゃないけど皆と仲良くなるうだなんて考えられる余裕のある子供にはなれなかったの!!! 君が

お父さんとお母さんが居なくなった穴を埋めてくれたの!!! 全部とは言わないよ、確かに友達に埋められた部分もあったからね!? でも、大部分は君の優しい笑顔に、『愛してる』って言葉に支えられてたの!!!

それを君の勝手な都合で取り上げられて、居なくなれたぼくの気持ち分かる!!!? 分からないでしょ!!!?

心から溢れる怒りの感情に顔を歪ませ、思いの丈を叫ぶF r i s kの両目から、ぼろぼろ、ぼたぼたと、大粒の涙が溢れ始める。

目の前で目を白黒させる分ならず屋な姉に対する憎悪、悔しさ、悲しみ、苦しみ。

先程までの話で湧き出してきた……いや、きつと昔から姉に感じていて、『仕方ない』と蓋をして我慢していた感情達が先程の話を聞いて感じた強い怒りで爆発し、緋い交ぜになって、涙になって溢れ落ちていた。

「寂しかったんだよ、苦しかったの!!! 君のいない世界は寂しくて寂しくて仕方がなかったの!!! 居なくなった事に気付いた時なんて絶望していつそのこと死んじゃおう

かなんて考えてたの!!!!

それは、《ぼくが心から君を愛しているから》だって、何で分かってくれないの!!!!

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、Friskはそう叫ぶ。そうして叫び疲れて崩れ落ちて、過呼吸気味に息をしながら、目を見開く姉に縋り付く。

「お願いだから、分かってよ………こんなにも、愛してるんだから………」

そのまま、Friskは泣きじやくりながらLilyに抱き付く。

独りで抱え込んで、結果盛大な勘違いをして、誰にもその勘違いを気付かせず、それ故に正されないまま狂ってしまった馬鹿な姉に、少しでも自分の愛が届くように。

しんと静まり返った家で響く啜り泣く声中、Friskに想いをぶちまけられたLilyは、茫然としたままその抱擁を受けるしかなかった。

長い間、何なら世界を越えて何度でもFriskの傍で生きてきた彼女には、Friskが嘘を言っていないことなど、直ぐに分かってしまったから。Friskの真摯な

想いを、受け取るしかなかった。

それでも、彼女の心は理由を付けてその愛の言葉を拒もうと思いを回している。だが、先程のFriskの言葉が胸に響き、その思考を乱していく。

そんな繰り返しを行っているLilyの元へ、黙っていたPapyrusが立ち上がって、静かに近寄っていく。そのままLilyの横に座り込むと、ぎゅうとFriskごとLilyを長い骨の腕で抱き締める。その抱擁からも、Lilyは逃げられずに受け入れるしかなかった。

「……………なあ、LILY。俺様だって、そうだぞ？　俺様は、FRISKにも負けないくらいLILYが大好きだ!!　友達としてだが愛しているぞ!!　LILYだって俺様の事が大好きなんだろう!!　とても嬉しいぞ!!」

「……………Papyrus……………」

この場の雰囲気似つかわしくない笑顔で、PapyrusはLilyに話しかけ

る。だが、自身の体に伝わる振動で、その体が震えているのにLilyは直ぐに気が付いた。

……自分が怖いのだろうか。なら、離れていた方がいいのに。近付かない方がいいのに、何故彼は私を抱き締めているのだろうか。

LilyがPapyrusの行動の意図を図りかねていると、ぼろり、とPapyrusの目玉の無い眼孔から雫が零れた。

「それなのに……なんで、そんな悲しい事を言っただけで離れていこうとするんだ……？」
皆を突き放して独りぼっちになって、居なくなろうとするんだ……？」

気丈に振る舞おう、泣かないでいようと笑っていたPapyrusは、元々の彼の性格上堪えきれなかったのか途中から涙を眼孔に浮かべ、震える声でLilyに懇願する。

地下世界に居た間では見抜けなかった、目の前の悲しい考え方をする友人に。

「お願いだから、そんなことを言つて離れていかないでくれなやか……？ お前が俺様や皆を信じられなくても、俺様にとつては、お前は大事な友達なんだぞ……大事な友達が居なくなるのは、ぐすつ、すごく、さみしいんだぞ……っ!!」

眼孔からぼろぼろと涙を流し、PapyrusはLilyの肩に頭を埋めて嗚咽を漏らす。

彼は先程の話を聞いて、彼女は『独りぼっち』なのだど、何となく気付いていた。どれだけ周りに人が居ても、周りの人の愛を信じられない彼女は、心の中ではずっと孤独なままだったのだと。

それがどれ程辛かったのかは彼には分からないが、それでもそれに気付いてしまえば止められなかった。

あの日己を抱き締めて許してくれたこの優しい人間は、本当は心の中でずっと独りだったことが悲しかった。気付いてあげられなかったのが、苦しかった。

あの日、また明日も会えるとLilyの手を離してしまった。そのまま彼女は、消え

行く運命だったというのに。

気付いてあげたかった。そうすれば、目の前のこの人が、こんな考えをすることはなかったかもしれないのに。

現実的に考えて一日で会って直ぐの相手の事を理解するなど無理があるが、彼の中の『何年も大事な友達を忘れていた』という大きな自責の念がそれを助長する。

いつもは明るい彼のその涙を見て、哀願を聞いて、Lilyの感情が戸惑いで揺らぐ。

何故、FriskもPapyrusも、こんな事をしているのだろう。何故、私なぞに『愛している』などと。

Friskは兎も角も、Papyrusはあの日出会っただけの筈なのに。

……私を、本当に愛しているから、こんな事を……？

いや、そんな奇跡は、あるわけが……

「ダーリン。僕も、君を愛してるよ」

困惑する Lily に追い打ちを掛けるように、それまで一步引いた所から黙って成り行きを見守っていた Mettaton も近付いていき、まるで物語の中の王子のように Lily の傍に跪く。だらりと下がっていた左手を取って、流れるような仕草で手の甲にキスを一つ落とし、そのまま手袋に包まれた両手で握り込んだ。

「僕はあの日君を傷付けたし、仲直りもしていないから、こんな事を言う資格はないんだけどね。でも、僕だって、君を一人の人間として愛しているし、尊敬しているし、大事なんだ。だからお願い、そんな風に言わないで？」

笑みを浮かべる Mettaton の記憶装置の中に映るのは、あの日の幾度と無く傷付いても立ち上がる人間の姿。操作された記憶ではなく、真性のもの。

それまでの旅路でボロボロになっているのに、それでも尚自分に挑んで、小さな命を

守るために立ち塞がって。

きつとこの機械の身体から放たれた蹴りは痛かっただろうに、よろめきながらも笑みを浮かべて、何ともないように振る舞って、挑発して。

——そこまでして守りたい大切なものがある彼女が、彼は羨ましくて、妬ましくて……
——それより何よりも、美しかった。

ずっと憧れていた人間そのものの生き様を見せつけられたと感じたMettattonは、それ故に彼女に憧れていた。

まさかその人が、自分を殺し過ぎて逆に自己中心的な思考をしていたとは思わなかったが……Friskの言葉で揺らいでいる今なら、彼女を『人間』に引き戻せる筈。

そう考えて、彼も本心をぶつける。

「Mettattonまで……何言って……」

につこりと笑ってみせる Mettaton の顔を呆然と見つめる Lily の視界の端に、黄色が映る。

「わっ、私も、貴女を愛してるわ！」

Mettaton の機械の手に握り込まれている Lily の手の指先を隠すように、上からそつと両手で包む Alphys が泣き笑いしながら言う。

「貴女の事は、正直に言えば途中まで怖かったけれど……それだって、Frisk を愛しているからこそそのことだし、本当は誰にだってとても優しいことを、私も知ってるもの。デートにだって付き合ってくれたし、私の過ちを知っても幸せを祈ってくれた。そんな素敵な貴女を、どうでもいいだなんて思えるわけないじゃない！」

「Alphys……」

確かにあの日自分は救われたのだ、と Alphys は揺れる Lily の目を見つめながら思う。

打算的で自己中心的で、自分の罪を認めることは出来ても背負うことが出来なかった自分を救えたのは、確かに彼女がいたからこそだと、Alphysは考えている。

他の世界の自分はどうか知らないが、あの日、自分の罪を知っても尚、彼女が幸せを願ってくれたから。友達になってくれると約束してくれたから、自分は罪を背負う決意を抱けた。

そう確信しているからこそ、Alphysは自信を持つてそう言い切れるのだ。

アニメの主人公のような台詞を言い慣れていないのか、照れたようにはにかむAlphysを見つめるLilyの視界の端に、紅いものが揺れた。

「……………おい、Lily。あんな、あたしだって、お前が大事だぞ」

そんな声が聞こえた次の瞬間、がしりとひんやりとした物がLilyの左肩を掴む。そちらに視線を動かすと、中腰になったUndyneがニツと笑って右手を沿えてい

た。

「忘れてると思うから言っておくが、あの日あたしとお前は親友になつたんだからな？ それを今更嘘だったとは言わせないぞ？ 流石に一番好きなのはA l p h y sだが、あたしはお前も大好きだ！ お前も、あたしが大好きだろう!? 何せ、親友なのだからな！ フフフ！

あ、後で親友を悲しませた罰はたつたつぶり受けてもらうからな！ 覚悟しろよ！！」

「……Undyne……」

動揺を見せる目の前の親友の肩を、Undyneは少し力を入れて掴む。もう二度と、この愛を恐れる人間の存在を手放してしまわないように。

Undyneは、自分が彼女を忘れていた事を許せずにした。

親友になりたいと思つたのは、確かに自分だったはずなのに。

この人間の口から出た言葉に心を動かされた筈だったのに。

そうして後悔して、彼女に触れられずにいた。

だがその後悔を怒りに塗り替える程、彼女の無責任な言葉に腹が立った。

自分を親友だと言った癖に、その親友に何にも、別れの一言さえも言わずに消えた彼女に、Undyneは怒っていた。

自分から親友だと言ったのに、屁理屈を言つてまで自分はいらんだと言い切る彼女の主張の矛盾が腹立たしかった。

だから、Undyneは後ろめたく感じる自分を押し退けてLilyの肩を掴んだ。

その矛盾を完膚なきまでに殺すために。怯えるこの人間の心をヒーローとして、『親友』として救うために。

大好きだと、告げた。

Lilyが歯を見せて豪快に笑うUndyneの笑顔を見ると、不意に、頭が軽く押さえ付けられ、さらにさらりと動かされる。撫でられている、と気付くのにそう時間はいらなかった。

「私もあなたを愛しているわ、Lily」

上から降ってくる声は、優しく、慈愛に満ちたTorrieのものだった。

「聞いて頂戴。あなたがあの日『さよならじゃない』って言ってくれたのは、この世界に心底絶望していた私の心の支えだったわ。あの日のRiskみたいな小さな子供じゃ出来なかったことよ。あなたがそう言ってくれたから、私は安心してあなた達をRuinsから送り出すことが出来たの。これは、あなただから出来たことなのよ。何より、あの日あなたが私の事を『お母さん』と呼んでくれた時から、私はあなたの事を本当の娘のように想っているのよ。」

だから、お願い。私から大事な娘を取り上げないで。何度も味わったあの辛さを、もう二度と味わいたくはないの」

首だけ回して振り返ったLiilyの頭を撫でながら、Torrieは優しく告げる。自分を絶望から救ってくれたのは貴女なのだ。

あの日、Friskの硬い決意に負けて、目を逸らす事しか出来なかった自分に、火傷だらけの彼女は笑って、『お母さん』と、呼んでくれた。

守るためとはいえ、彼女を傷付けたはずなのに。痛かった筈なのに。それでも尚、『ありがとう』と笑いかけてくれた。

『またいつか』と、言ってくれた。

それが、また喪うのかと考えていたTorrieにとってどれだけ救いになったか。例え目の前の愛する娘が何と言おうと、自分はその言葉に確かに救われたのだ。

だから、告げる。勘違いも甚だしいその思い込みを正すために。

『愛している』と。

「Toriel、さん……」

LilyがされるがままTorielに撫でられていると、不意に右頬にすりと固い何かが添えられる。

「おい、Lily」

「いつ……!?!」

そのまま頬をそれにぐいと抓られ、行きなりの事で反応できず引つ張られるままそちらを向けば、Papyrus越しに手を伸ばしてきているSansがいつもの読めない表情で笑っていた。

「お前さんな、こんなに愛してくれているのに否定するとか、どんな思考回路してるんだ？　そこは間違っちゃ駄目だと思うぜ。」

お前さんは、本当に皆に愛されてるんだ。勿論、俺だつてな」

パチリと器用に片眼でウインクをLilyに送りながらSansはそう言った。

Sansにとって、Lilyという存在は、恐ろしくて恐ろしくて仕方がない存在だった。

『夢』という形ではあるが、本来の世界線の彼には有り得ない、他のルートの記憶がある分、彼女の顔も然り、服装然り、自分の弟を含めた全てを殺したあの人間と呼ぶべきなのかも分からない存在とダブって見えてしまっていた。

一方的に過剰とも言える警戒心を抱いて、何時その手に握られた武器が弟の首へ伸びるのか、それが怖くて仕方なかった。

出会い頭に、約束を破ってこの場で殺してしまいたいと考えるほどには。

だが、結局その武器は誰にも振るわれず、誰も傷付けず、それどころか家族を守るためにその身を傷付けて、血を流した。

彼女が計画をSansに告げて、狂っていると思うと同時に、やっと彼は彼女は家族

を守りたいだけだと気付けた。

彼が、自分の弟を守りたいと思うのと同じ感情だった。

そうして言った通りに、彼女がその身を犠牲にして世界を守って、地上に出て一年の月日が経って、漸く現実を見て、振り返って。

……段々と寡れていく、Friskの姿を見て。

聡い彼は、気付いてしまった。

Friskがああなっているのは、Lilyが居ないからだ。

それに気づいてしまえば、もうどうしようもなかった。『自分は彼女を見殺しにした』という罪悪感が、彼を蝕んでいった。

そもそも彼だって、性根は善のモンスターだ。度重なる強いストレスで歪んではいても、良心はある。疲れはて、苦しむ友人の姿を見て、心を痛めるぐらいの感情は当然あ

る。

それに加え、彼はいくらLilyが狂っているとはいえ、その感情の根源にある家族愛を知っていた。共感できてしまった。そして、彼女がただの優しい人間であることを、分かっていった。

手を取り合える存在だと、理解していた。

そんな彼女一人を犠牲にして、それを知った上で生きていくことは……彼には、酷すぎた。

詰まる所、結局は彼もLilyを愛していたのだ。

「……Sans……?」

漸く理解できた自分の本心を乗せて、SansはLilyの頬を撫でる。Lilyがその行動にいよいよ混乱してきていると、ぐい、とパーカーの右腕の袖を引かれる。今度は何だと正面を向けば、Asrielが顔を伏せながら、震える白い手で袖を掴んで

いた。

「……………ぼくは、ずっと……………違和感さえ感じず、君を忘れてしまっていたから……………本来なら何も言えないけど」

ぼつりと、そう一言前置きして、Asrielは顔を上げて、きつとLilyを強く睨んだ。

「もう二度と、こんな事はしないで。ぼくがFriskを、皆を傷付けた事を責めたくせに、自分が皆を傷付けて責められないなんて思い上がらないで。」

……………無理矢理ソウルを渡されて、消えていく君を見ることしか出来なかったぼくの気持ちにもなつてよ……………!!!」

その目には、透明な水が浮かんでいて。次いで、その水がAsrielの頬を伝っていく。

あの日の彼女は、自分の所為で亡くなった親友の生まれ変わりだとAsrielは信

じて疑っていないかった。

それが間違いだと気が付いた時には、自分は飛んでもない過ちを犯してしまったあとだった。

Friskさえ居なければ自分の所に戻ってきてくれるはずだと思い込んで、彼女の大切なものを壊そうとして、彼女を深く傷付けた。

絶対に嫌われた、許されなくても仕方がないと考えていた自分にも、彼女は手を差し伸べて、『妥協する』と言って、抱き締めてくれた。

……それなのに。

そう言ったことも、罪を背負い続けるという約束も無かったことにされて。

目の前で笑顔で消えていく彼女のことさえ忘れさせられて。

自分がどうしてこの姿で生きていられるのか思い出したとき、どれだけ絶望したこと

か。

あんな感情を二度と味わったたまるものかと、AsrielはLilyに涙ながらに訴える。

今度こそは、この存在をこの世界に繋ぎ止めるために。

「Asriel……」

再び顔を伏せて涙を流すAsrielの顔を見つめていると、視界に自分とそっくりな顔が入ってくる。

「Lily」

名前を呼ばれてそちらに目を向ければ、睨み付けるCharaの視線とがち合った。

「………僕は正直、お前なんて大嫌いだ。望んでいない救済を施され、お前の人生を押し付けられて………自業自得なのは分かっているけど、僕が、どんな思いをしたか………」

その一言にLilyの顔が少し申し訳なさそうに歪んだのをCharaは見逃さなかった。先程まで反省している様子なんて一切見せなかったLilyの心が、Fris kの言葉で揺れている証拠だとCharaは感じた。

皆の中でも、Sansを除けば彼女の事を一番思い出していたのはCharaだった。Metatonの一言で記憶の齟齬に気付いて、そこから持ち前の洞察力と思考で、自分の記憶がまかやしであることに気が付いてしまった。

そして、自分の役割を本来其処に居るべきではない彼女に擦り付けて、自分はこのうと生きていることが許せなかった。

どうして気が付けなかったのかと後悔した。

居場所を奪ってしまったという罪悪感に苛まれた。

だから、彼女の居なかった数年間、Charaはずっと、彼女の代わりであろうとし

ていた。

記憶の中の自分^{彼女}を演じ、貫こうとした。

だが、そんな事は無理だった。何をするにも彼女への罪悪感が呪いのように付いて回った。結局はその罪悪感に押し潰されて、彼女の代わりにも成れず、自分さえも見失ってしまった。

死にたいとさえ考えた彼女のその苦しみは、計り知れない。

「……………だから、お前は絶対許さない」

「……………うん」

そう言ってCharaは、頷いたLiilyの前に座り込んで、パーカーの裾を掴んだ。そうして真っ直ぐLiilyの目を見つめ、言う。

「お前にはそれ相応の対価を要求する。僕を愛しているって言うなら、誠意を見せろ。償ってみせろ。」

「……………分かったな、おねえ、ちゃん」

「……………えっ」

まさかChararaからそんな呼び名が出てくるとは思わなかったLilyは、ぎよつと目を見開いた。そしてそのまま裾を握り込んだChararaを混乱しながら見ていると、Asgoreが優しく微笑んで声をかけてくる。

「……………Lily。君は、こんなに愛されているんだよ。勿論、私だって君を愛している。他の世界がどうかは知らないけどね、これだけは言える」

混乱するLilyに畳み掛けるように、Asgoreは告げる。Lilyを愛するモンスターとして。

自分で『落ちてきた人間を殺す』と言った癖に、自分の『殺したくない』という我が

儘である日まで皆を地下に留め続け、楽な道へと逃げた自分を奮い起たせ、どちらかが殺すか、殺されるしか道はないと考えていた自分をバリアごと打ち砕いてくれたのは、紛れもない彼女だった。

「Asriellから聞いたよ。私は違う未来で一度、君と戦つて負けたりしたいじゃないか。まあ、その後Asriellに殺されてしまったらしいけど……」

Asgoreが紡ぐ言葉に、Lilyは目を丸くした。Asriellがまさか、本人に自分の罪を告白しているとは思わなかった。

Asgoreも始めは驚いた。ある日突然、自分は貴方を殺したことがあるなどと息子が言い出したのだから。だが、Asriellの話には何処か現実味があり、尚且つ彼の嫌われることを恐れる顔が、それを真実だとAsgoreを信じ込ませた。その表情は、何時しか自分が毒入りバタースコッチパイを食べた時に、彼がしていた顔だったから。

その時は、『話してくれて有難う』『それでも君を愛している』と言い聞かせてその場を収めたが、昨日、記憶を思い出して改めて告げられたのは、殺す前にLilyが自分の頬を打ったということ。

「そこで私は、要約してしまえば『死にたい』という意味合いのことを言つて説教されてしまったと聞いているよ。『死ぬことは許さない』、とね。

……君は知らないと思うが。私はね、学校を建てたんだ。その相談をFriskにしたんだけど、その話をする前にFriskに同じ話をして、同じ様に頬を打たれたんだ。そうして……全く同じ話をして、『死ぬことは許さない』と言われたんだよ。

Friskがその話の前に、なんて前置きしたか解るかい？ 『これは受け売りだけ』、つて言つたんだよ。君を忘れていないはずのFriskが、そう言つたんだ。君を本当に……それこそ心から慕つていなかったら、無意識にでもそんな言葉は出てこないと思うなあ」

その時AsgoreはAsrielの説明を聞いて納得がいった。数年前、Friskに頬を打たれた時感じた既視感、確かに現実にあつたことだったからなんだと。

Friskがあのお話したのは、姉の言葉を心に刻んでいたからなのだ。

「もう、分かるだろう？ 君無しでは、この未来が無かつたことぐらい。君が居たこと

で、どれだけの事が変わったことぐらい。

君が居なければ、この未来は絶対になかったんだ。君は部外者なんかじゃない、何かの礎になるための生け贄なんかじゃない、誰かに怨まれ憎まれる絶対悪なんかじゃない。私達の、大切な家族で、友達で、親友なんだよ」

Asgoreの心を込めた一言が、揺らいでいたLilyの心を完全に穿った。

Friskの言葉から順に紡がれた愛の言葉が、Lilyの消えてしまった筈の心に入り込んで、染み込んでいく。

Lilyが笑顔で振り払おうとした愛が、漸くLilyの心に届いた。

「……………そつ、か……………そうか……………」

そうして、ぽつりと。

「私は、こんなにも愛されていたのか」

彼女は憑き物が落ちたような表情でそう呟くと、片目からぼろりと一粒涙を溢した。

……そもそもその話。あんなにも彼女が意固地になっていたのは、『皆からの愛を理解してしまえば、きつと別れが辛くなるだろう』という思いからだ。本当は、『実感できない』のではなく、『分かっている意図的に無視していた』の方が正しい。それがいつの間にか当たり前になって、捻り曲がって、彼女を愛が理解できない狂った存在へと作り変えていた。

その認識が今、塗り替えられていく。他にもない、彼女が愛する人達によって。

だが、こうしてLilyが話を大人しく聞いていたのは、全ての負債から解放された今だからこそそのこと。これももし、まだ彼女が自らに課した贖罪の最中であつたならば、彼女は『そんな筈がない』と頑として譲らなかつただろう。

それに、全てが変わつた訳ではない。長い間歪んでいた彼女の心は幾ら言葉を尽くした所でそう簡単には変えられない。それが当たり前になってしまっているからだ。当

たり前の事を正すのは難しい。正そうとするならば、長い月日が必要だろう。いや、ひよつとすると、一生治らないかもしれない。

……………だが。決して、F r i s k達の言葉が無意味だった訳ではない。

未だに歪な所は在れど、L i l yの心を、人間らしい感情を、取り戻したのだから。寧ろこれは、大きな前進と言えるだろう。

「……………それなら、私……………あの子達に凄く酷いことしちゃったんだなあ」

ポツリと、L i l yはそう呟く。

何万回という生を繰り返し、その度に命を投げ捨てる行為をしていた彼女の記憶の中には、何人もの愛する弟妹がいる。

……………もし、彼らも自分を愛してくれているとするならば。自分は彼らの愛を裏切ったことになる。

彼らを愛する故に失う事を極端に恐れていたL i l yだからこそ、そう気付くことが

出来た。間違いが正された事によって漸く彼らの愛に気付き、その子達に対する罪悪感が首を擡げた。

「……………ごめんなさい、皆。私が間違ってた。皆はずっと、私を愛してくれていたのに、私は……………」

「……………やだ。絶対に、ゆるさないもん」

Lilyが口にした謝罪に応えたのは、Riskだった。大分口調も感情も落ち着いてきたRiskは姉をぎゅうと抱き締め、顔を上げて目線を合わせた。

「許さないから……………もう二度と、勝手に居なくならないでね、お姉ちゃん」

「!……………うん、約束するよ、Risk」

先程は『君』で統一されていた呼び方が、懐かしいものに変わる。それに気付いたLilyは、やはりまだ私を愛してくれているのだと感じ、嬉しくなりながら、約束した。

「私はもう、何処にも行かない。皆の傍に居るよ」

Lilyが漸く見せた優しい笑みに、Friskも皆も満足そうに頷いた。

そうして、Friskは目元に溜まった涙を拭い、太陽も凌ぐような明るい笑顔で、言う。

「おかえりなさい。お姉ちゃん」

「……………ただいま。Frisk、皆」

その言葉に、Lilyは、心からの笑みを見せた。

その後タイミングを見計らったように皆にもみくちやにされ、笑う彼女達を見て、部屋隅の隅の影が揺らぐ。

……………——ああ、良かった。これでこそ、漸く……………

ふと、Lilyはそんな言葉が聞こえた気がした。そうしてそれが誰の言葉なのか気付き、此処に来ていた事に驚きつつも、ふっと笑う。

……………そこに居たんだ、Gaster博士。なんなら、挨拶の一つでもしていけば良かったのに。

自らの協力者にまで愛されていることに気付いたLilyは、内心で礼を告げる。自身の中に埋め込まれた彼の欠片を通して、この言葉が通じることを信じて。

ありがとう、博士。心残りなんて背負わせてしまつてごめんなさい。この通り帰つてきたよ。もう、大丈夫だよ、と。

「お姉ちゃん、何処みてるの?」

「ん？ ああ、ごめん。幸せだなんて考えてた」

目敏くLilyが誰も居ない虚空を見つめている事に気付いたFriskが首を傾げると、Lilyは誤魔化しも兼ねてそう返した。これは紛れもない事実だ。

……………こうして、漸くこの日を以て。

この姉妹の、そして友人達の絆が、何時壊れてしまうか分からないような脆く儂いものではなく、確固たる相思相愛のものとなったのだった。

これからの彼女たちの日々は、ゲームなどにはない、この家族と友人達による、かけがえない日^{Epilogue}常。

誰にも邪魔されることのない、何時しかLilyが望み、焦がれ、尊んだ平穏な日々。

それを、今度こそ。誰も欠けることなく、歩んでいくのだろう

対話

某日某所、とある住宅にて。

リビングのダイニングテーブルに並ぶカップとティーポット、それからクツキーの乗った皿と角砂糖の入ったポットを挟み、LilyとSansは向かいあっていた。

あの日のような険悪な雰囲気など一切ない、友人とまったりと過ごすにはもってこいの穏やかな空気が、其処には流れていた。

「それで、調子はどうなんだ？」

「ん、上々ってところかなー」

先程来たばかりのSansにお茶受けと一緒に紅茶を出し、自身のカップに注がれた分を一口飲んで、Lilyは答える。そうしてぐるりと部屋を見渡し、ぼそりと呟く。

「まさか私も此処に居候することになるとは考えてなかったな—」

「……………まあ、俺は何となくそうなる気はしてたが」

「えっ、マジで？」

自分の答えに目を丸くするLilyyを見ながら、Sansは出された紅茶を啜る。Friskのプロデュースによって、地上でも売られるようになった金の花の紅茶は、何時も通りいい匂いがした。

Lilyyの認識を正した後、冷静になった頭で彼女が考えたのは、『これからどうするのか』という問題だった。

今の彼女には戸籍はあれど——これはLilyyの存在がどうなっているのか役所に確認したときに判明した——仕事もなく、住居もない。それまではリビングのソファを借りたりしていたLilyyだったが、これから生きていくにはどうするか考えていなかった為、そんな問題に突き当たった。

そこでToriel達から提案されたのは、『この家で住まないか』というものだった

た。その提案はLilyにとって魅力的ではあったが、そこまで世話になるのも気が引けた彼女はそこに『仕事を見つけて生活が出来るようになったら出ていく』という条件を足そうとし、一ヶ月ぐらいの間に仕事を見つけ、出ていくつもりで話を進めようとした。が、そこへFriskとCharaが、『自分たちから離れていくつもりか』と言い出し、説得された直後ということもあり、根負けしたLilyは結局はこの家に住むこととなったのだった。

「そーいや、結局何処の部屋を使うことになったんだ？　なんか揉めてたよな」

ふと、SansはLilyが何処の部屋で寝泊まりするかFriskやTorielが話していたのを思い出した。それを訪ねてみると、

「あー……それは結局ね、物置だった部屋を使わせてもらうことになったよ」

一口紅茶を飲み、Lilyはそう言った。

「へえ。じゃあ、掃除とか大変だったろ」

「うん、凄く。昨日まで埃と戦ってた。君じゃないけど、骨が折れたよ」

「おつ、此処は笑うところか？」

けらけらと穏やかに二人で笑い合っているうちに、Sansに向けてLilyの視線が、すつと細められる。

「……………それで、今日は一体何の用？　なんか用があつてきたんでしょ？」

紅茶を一口飲み、Lilyはカップを置いてそうSansに尋ねた。

目の前に座る骸骨は、Lily以外の住人が出払っているタイミングで何の用も無しに訪ねてくるような性格ではない。それをLilyはとつくのとうに、そして良く知っている。このタイミングで訪ねてきたのも、偶然ではないだろう。きつと見計らつていた筈だ。……いや、自分の考えすぎで、彼が本当にただ友人として訪ねて来ただけならば、歓迎を持つてもてなすつもりではあるが。

SansはLilyの平然とした態度を見て、笑う。やはり自分の考えはお見通しの

ようだ、と内心で無い舌を巻く。

「heh、heh………やつぱりアンタ、俺の事を良く解ってるよな」

「そりゃ何万回と相手してりゃね」

どうやらLilyの思惑は的中したらしく、Sansはカップを置きながらそう言った。それに対し、Lilyは平然とした態度を崩さずに言葉を返した。そして、視線でSansに話すように促す。

「……………アンタ、本当に生きてるんだよな？」

その視線を受け、そう切り出したSansのその疑惑の視線を、Lilyは逸らさず受け止める。Lilyが無言を貫き、その行動が話の続きを促している行為であり、話を遮る気はないようだ判断したSansは、問いを続けていく。

「アンタは一度ソウルをAsriel王子に、存在をCharaに譲って死んでる。こ

れは紛れもない事実だ。そうじゃなきゃ、あの二人は現実には存在しない。それなのにア
ンタは此処にいる。形だけはおもしろくないが、人間として。これは本来有り得ないこと
だ。人間も俺達モンスターと一緒に、ソウルを失えば死ぬ。そりゃ身体は残るが……ソ
ウルを失ってしまえば二度と動かない。動くはずがない」

そこでS a n sの視線に、少しばかりの恐怖が混ざる。

自分の思考では説明できない、理解できない事象に対する恐怖が。

「……………なあ、あんた、どうやって生きてるんだ……？　そもそも、本当に生きてるのか
…………？　またこの世界から、居なくなったりしないよな…………？」

その問いを投げ掛けると、L i l yは俯いた。

S a n sが今日やってきたのは、この問いの答えをL i l yに何としても答えてもら
わなくてはならなかったからだ。

L i l yへの尋問が終わった後、S a n sは不意に、L i l yが本当にこの世界に存
在しているのか、ということに思い至ってしまった。

目の前に居る人間は、本来の自然法則なら有り得ない甦りを果たしている。どうい

奇跡が起きたのかは知らないが、まるで元からこの世界の住人だったように普通の人間として振る舞っている。

……だが。もし、その奇跡に、彼女のソウルが伴っていないとするならば……？
まだ、彼女がソウルレスだったとしたら？

——……もしかすると、また、居なくなったりするんじゃないだろうか？

Sans自身、自分の考えすぎなのは分かっている。だが、一度そんな考えが浮かんでしまえば、彼は不安で仕方がなかった。

だから、この不安を『考えすぎだ』とLilyに否定してほしかった。笑い飛ばしてほしかったのだ。

「……………」

だが、顔を上げたLilyは、困ったような顔をしていた。その顔を見て、Sansは嫌な予感がした。

まさか、本当に自分の考えが当たっていたのか。そんな不安がSansの中に募る。

そんなことも露知らず、Lilyは少し間を開け、口を開いた。

「……………取り敢えず、出来る限り答えさせてもらうけど。まず最初の質問には……………あんまり、的確な答えは出せないなあ。私自身、ちよつと良く分かってないんだよね……………」

「……………分かって、ない……………」

恐れていた答えとは違う、どつち付かずに曖昧な答えに思わずSansがLilyの言葉を鸚鵡返しをすると、Lilyは肩を竦め、苦笑を浮かべた。そのままLilyは片手を本来心臓のある部分の上に置く。

「私のこの身体は、Charaに存在を渡した時に闇に葬られた。無かったことにされた。……………その筈、だったんだ。それは私が良く分かってるんだよ。なのにどういう訳か、私は此処にいる。私が契約していた、あの神様によってね」

その言葉で、Sansはあの日計画を説明された際にAmalgamatesが人間のソウルを取り込んだような存在、と話していた神の事かと思ひ出す。正直に言えば、

Sansはそもそもそんな存在が居る事が信じられなかった。理論上は確かにそんな存在がいる可能性は無くはない。だが、可能性は限りなく、本当に限り無く薄い。そんな存在がLiilyと繋がっていることが、未だに信じられずにいる。

「……この世界に戻される前に、私はあの神様と会っているんだけど。彼らは、契約を遂行した報酬として、この世界に『私』の席を用意した、って言ってたよ。それに伴ってこの身体をサルベージして、元から此処に居たように上書きした。本当に神の所業だよ。」

「……………だけど、私が生きてるって言っているのかは、分からない」

Liilyの胸に置かれた手が、服を握り込んでぐしゃりと皺を作る。

「分かっているとと思うけど、私がここに居るのは、自然の法則に逆らった、有り得ない事象だ。死んだ筈の心臓も動いてるし、ソウルと一緒に失くなった筈の感情も言葉一つで動く。だから多分……心も、あるんだと思う。まあ、奇跡と言っても過言じゃないだろうね」

そこで、Lilyは一度口を噤む。

彼女自身、自分の身体や存在について何とも思わない訳ではない。Sansの考えには当然行き着いた。

「奇跡って、過程とか原理とか全部すつ飛ばして結論だけ持つてくるようなものだからさ。私にもこの身体がどういう仕組みで動いてるのか、分からないんだ。もしかしたら、私は人間じゃないのかもしれないね。私だって、自分はどうなっているのか、気にならない訳じゃないよ？」

「……………でもさあ」

「……………だが、それ以上に。」

ふと、Lilyはパーカーから手を離し、Sansの目を真っ直ぐ見た。そうして、微笑む。

「正直私が人間だろうが、人間じゃなかろうがどうでもいいんだよね。だって、私はもう

一度皆の傍に居ることを許されたんだもの」

——そう。

彼女にとっては、今こうして、家族と一緒に話したり、友人と一緒にお茶会をするこのの方が、大事だった。

「まあ、そういう訳で、その質問には残念だけど答えられないよ。だって、分からないし、そもそも興味が無いからね」

「……………heh。そうかよ」

笑いながら『どうでもいい』と切り捨てたLilyに、Sansは目を丸くした。そうして、そういうえばLilyはこんな性格だったな、と思い出す。

——ウダウダと悩んでいた自分がバカらしくなってきたな。

これ以上なく幸せそうに笑うLilyの顔を見て、Sansはそう思う。本人が気にしていないのに気にしすぎているなんて、疲れるだけだ。

そう心の中で呟き、少し冷めてしまった紅茶を飲み干した。

「ああ、でもね、二つ目の質問にはちゃんと答えられるよ。私は本当にもう何処にもいかないよ。これは嘘じゃない」

「……………本当だろうか？」

二つ目の問いの答えはあまりにすんなりと答えられてしまった為、思わず疑ってしまふ。Sansのその反応に、Lilyは心外だと言いたげに目を剥いた。

「本当だってば！ 信じてよ、もう……信用ないのは分かってるけどさあ」

「ああ、そうだな。ユビキリでもしてくれないと信じられないな？」

苦笑するLilyの言葉に続けて、Sansが白い骨の手の小指を差し出し、ニヤリ

と笑いながらそう言うと、Lilyの目が丸くなる。

「……………え、しろって？」

「おう。本当なんだろう？ 出来ないって訳じゃないよな？」

「出来ない訳じゃないけど……………」

漸く見られたLilyの困惑した顔に、してやったりだと思いつつ、Sansは小指をずいっと差し出す。

「ほら、してくれよ」

Sansのその行動に更に困惑しながら、Lilyは口を開いた。

「……………約束は、嫌いなんじゃなかったの？」

そう。先程からLilyがこんなにも困惑している理由は、それだった。Lilyの知るSansは、大の約束嫌いだった筈なのだ。

その為か、『Undertale』の作中でも、彼自身から約束を結ぶような事は全くない。全て、相手方から持ち掛けられたものだった。

それを聞いたSansは、ああそれか、と前置きして言う。

「確かに約束は嫌いだよ。今も昔もな。だけど……俺だってな、お前が居なくなるのは嫌なんだよ。お前の友人として、な」

SansがLilyの目を見て、本心から思っていた事を言えば、Lilyの目が驚愕で見開かれる。そして、少し恥ずかしそうに頬を掻いた。

ついこの間自分に向けられる愛の知覚が正された彼女には、心に刺さるものがあった。

自分の約束が嫌いだという思いに反してまで、約束を持ちかけてくれている。

その事実にもめられた確かな友愛に対して、『嬉しい』と思うと同時に、『恥ずかしい』

という感情が湧いてくる。

『愛されていない』と思うことで心に愛をはね除ける壁を張っていた彼女は、本物の愛に慣れていないのだ。

「……そういう、ことなら……」

Lilyは恥ずかしそうにしながら、おずおずと自分の小指を差し出されたSansの小指に絡める。そして、いつもRiskにやっていたように小さく歌い出す。

「ゆーびきーりげーんまん、うーそつーいたーらはーりせんぼんのーます、ゆびきった」

歌を歌い終わると、Lilyは直ぐに指を離して手を引っ込めた。頭を掻きながらSansに向き直る。

「………これで、信じてもらえる?」

「おお」

小指を見て、満足そうにニンマリと笑いながら頷くS a n sを見て、L i l yも紅茶を飲み干した。話を交えようと辺りを見渡してS a n sのカップも空な事に気付くと、ティーポットの中を覗き、まだお茶があるか確認する。二人分はありそうだと目測で測ると、S a n sにティーポットを少し掲げながら尋ねた。

「ええっと。紅茶のお代わりはいる？」

「貰う」

「了解、カップこつちに頂戴」

L i l yの思惑を何となく察しつつ、S a n sはL i l yに言われるままカップを差し出した。

いつの間にか張り詰めていた空気が緩み、また、穏やかな空気が流れる。

「……………というか、割りと歌が物騒だな」

「そうだねー。指を切るとか超怖い。ちなみに二番まであるらしいよ」

「マジか」

差し出されたカップを手繰り寄せ、注ぐために立ち上がる。まだ暖かい紅茶をカップに注ぎながら、何気無い会話を重ねていく。自分のカップにも紅茶を注ぎ、Sansにカップを返して、椅子に座り直す。

「……………あ。そっぴやお前さん、仕事とかどうするつもりなんだ？」

ふと、Sansは気になっていた事を尋ねてみる。紅茶に角砂糖を二つ落としてかき混ぜていたLilyは、手を止めてそれに答えた。

「ああ、それね。今朝も話してたんだけど、FriskとCharaの強い希望で身辺警護とかどうかな、って話になってるんだ」

「へえ？ それはまた大役じゃないか」

紅茶を混ぜていたスプーンを出し、ソーサーに置いて、Lilyは紅茶を一口飲む。そして、Sansに話を続ける。

「何万回も繰り返してきたからナイフの扱いとかには慣れてるし……それにどうも、二人は私を傍に置いておきたいっぽくてね」

「ああ……………」

身辺警護を親善大使二人が推す理由に納得しつつ、Sansも紅茶に角砂糖を入れて混ぜ、紅茶を啜る。

「……………ねえ、Sans」

「ん？」

ピチチ、と風の吹き込む窓から聞こえる鳥の声を聞きながら、Lilyは笑う。

「これからも、友達としてよろしくね」

改まって何を言うのかと思いきや、そんな言葉がLilyの口から出て、一瞬Sanは面食らう。だが直ぐに、

「おう、こちらこそ」

ニヤリと、何時もの笑みで笑い返してやったのだった。